バカとのんきと召喚獣

糖分摂取魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとのんきと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ３２１１Ｔ

【作者名】
糖分摂取魔

【あらすじ】
この小説は井上堅二先生原作『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。
とある事情でもう一度二年生になってしまった学生――月野造。
悩んだってしょうがない。のんびり楽しく生きていこう。
持ち前ののんきさと天然?で個性豊かな原作メンバーと共に、さあ楽しめ学園ライフ！

1時間目　再スタートの春～祭りの朝は4時起き～（前書き）

はじめまして、小説初心者です。原作と違ってくるところが多々あると思いますが、どうかよろしくお願いします。

1時間目　再スタートの春～祭りの朝は4時起き～

自分がこの文月学園に入学してから三度目の春が訪れました。
校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っています。
見なれた通学路と言ってもやっぱり目を奪われますよ。

「これはお弁当を持ってお花見したいですね♪まぁ、まだまだ花粉が怖いですけど」

とりあえず少々早めに学園に着いた自分は桜の花が舞う姿を眺めつつ、
玄関前でひとりポツンと立っています。いやはや、まさか校舎が開いていないとは。
・・・何故でしょう、ちょっと寂しいです。

「あいかわらず早いな、月野」

しばし玄関前でそんなことを考えていると力強い声に呼びかけられます。そこには浅黒な肌と鍛え抜かれた肉体を持つスポーツマン然とした男性が立っています。

「おはよう。というか、学校が開いていないような時間に来るのもどうかと思うぞ。いくらなんでも部活動をやっている奴でもこんな時間にはいないだろうに」

苦笑いを浮かべながら挨拶をくれたのは西村先生。生徒たちに生活指導の鬼、『鉄人』と渾名が付けられているみたいです。由来は先生の趣味であるトライアスロンらしいですが、真冬でも半袖でいるあたりも理由のようです。

自分は渾名をつけられるくらい生徒に親しまれているのではないかと思うのですがね。まぁ本人は嫌がってますが・・・

「おはようございます、西村せんせ。すみません、興奮してか気づいたら来てました」

あっ、ちなみに只今の時刻ＡＭ５；００　まだ薄暗いですね。でも仕方ないです。祭りの前日とかいつもより早く起きることってよくありますよね。ないですか？

「謝らなくてもいいが、せめて俺が来る時間くらいに登校してきてくれ。いくらなんでも早すぎるだろう」

「いやいや、実際楽しみだったので。それに今朝は学園長に呼ばれてますし、やっぱり遅刻できませんよ」

「・・・・・月野が呼ばれたのは授業前だったはずだがな」

おりょ？何故だか西村先生の顔がやや引きつってますね、疲れているのでしょうか。新学期早々大変そうですね。

「ですから授業前に来ましたよ？あとどの道暇ですから学園長が来

るまでせんせの手伝いでもなんでもやっておきます」
「お前は真面目なのか天然なのかわからんな。・・・だがどこぞのバカに爪の垢を煎じて飲ませるべきか」

玄関の鍵を開けながら西村先生はなにやらブツブツ言っています。やはり疲れているみたいですね。ここはお世話になっている分、何かしら手伝えたらいいのですが。

「あのな月野。自主的に手伝ってくれるは助かっているが、少しは自分自身のことも考えてくれ。あの事件さえなければお前は「ストップです。せんせ」・・・・・・」

暗い顔をしている西村先生。シリアスな空気は嫌いですし、ここは釘を刺しておきますか。

「ありがとうございます、せんせ。でもソレはソレです。今日にしたって朝暇だったから自分は来ただけで強制されてる訳でもありません。寧ろ随分優遇されてますよ」
実際暇なんですよね。やることないですし。

「・・・・・・」
補習の鬼と呼ばれ生徒に恐れられている西村先生ですが、やっぱり根はしっかりして優しい先生です。あの事は先生に直接関係しているわけではないのに、ずっと気にしてくれているんですよね。流石学園内で最も信頼できる先生です。

「今回のことは星の廻り合わせが悪かっただけです。せんせが気に病むのは・・・わかりますけど、自分は楽しみなんですよ♪なんだかんだで去年は余り試召戦争に参加できなかったですし。しかも今年の自分のクラスは面白そうなことが起きそうですから、ね」

なんせあの試召戦争ができるんです。でなければ折角文月学園に通ってる意味がないですよね？

「・・・・・そうか。だがもし悩み事があれば俺のところ《補習室》へ来い。茶ぐらいなら出してやる。では月野、これを受け取れ」

やっと笑ってくれた先生はそう言いながら『月野　造』と書かれた封筒を取り出して差し出してきました。これには文月学園のクラス分けの結果が書かれているんですよね。

クラスは振り分け試験の成績順にＡからＦに分けられ、優秀な生徒はより良い施設のクラスを、そして芳しくなかった生徒は設備に不備のあるクラスを得るといった文月学園らしい制度があるわけです。良くも悪くも試験校ですし、面白い制度には変わりありませんね。

これ去年も頂きましたけど、手渡しでもらえるのは中々ドキドキしますね。

たとえ中身がわかっていても……

「月野、これからお前が所属されるクラスは――――――

『月野　造。上記の者を文月学園指定≪特別観察処分者≫として認定し学年を一つ下げる。
なお二年振り分け試験を行っていないため上記の者はＦクラスに所属させる。』

２－Ｆクラス《バカの巣窟》だ」

これが自分の再スタートの春。楽しい学園生活になればうれしいですね。
・・・・・先生それにしてもバカの巣窟って、何気に酷くないですか？バカっていう方がｂ（ｒｙ

1時間目　再スタートの春～祭りの朝は4時起き～（後書き）

無駄な描写とか多くてすみません。あとバカテスなのに明久がまだ出ません。なるべくしっかりまとめられるようにがんばります
よろしければまた次もお会いできるとうれしいです

2時間目　凶器は段ボール箱～ジェ○ガ～（前書き）

2話目です。微妙に長くなりそう
前回間違ってサブタイトルを二回書いてました・・・難しいですね
とりあえず、第2話始まります

2時間目　凶器は段ボール箱～ジェ〇ガ～

封筒を頂いた後ただ学園長を待つのも暇ですし、西村先生の手伝いをやることになりました。と言っても一生徒が出来る手伝いなんて荷物運びぐらいですけどね。とりあえず今日は補充試験用のテスト用紙の入った段ボール箱運びぐらいでいいそうなのでとっとと終わらせちゃいましょう。

「よいしょっと。紙も嵩張ると重いですね。2箱が限界ですよ」

一応ある程度は鍛えてるつもりですが意外と重いですね。まあ普通高校生ならこれくらいでしょうかね。さて西村先生は・・・・・・

「すまんな、俺一人でも十分だが如何せん量が多い。正直助かる」

両肩に段ボール箱を6箱づつ抱えたまま、先生はさわやかにおっしゃいます。

ごめんなさい先生、嘗めてました。大嘗めでしたよ。自分ももう少し鍛えるべきでしょうか。

というか貴方は本当に人間なのでしょうか?と若干失礼なことを思いながら補習室へ運んでいきます。

地味にバランスとるのも難しそうなのによくもまあできますね。

「とっ、ところでせんせ。学園長は何時ごろいらっしゃいますか？」

ふと時間が気になって先生に尋ねます。流石に手伝いしていて遅れました、なんて笑えませんからね。

「あぁ。おそらく6時前には一度学園長室に立ち寄るだろうな。書類整理が終わり次第すぐでもに研究室に籠るだろうが」

ふむ。学園長は開発で忙しいと聞きますしなるべく手間をかけないようにしたいです。自分としても研究室には立ち寄りたくありません。ええ、立ち寄りたくありませんとも。

できれば学園長は学園長として接したいです。あの方は研究になると童心に帰る傾向がありますから。

「それではもう一回運んでから一度切り上げましょう。後半分くらいでしたよね」

「そうだな。あと一人くらいいれば月野にも負担がかからなかっただろうが・・・吉井でも呼ぶべきだったか？」

はて、ヨシイ？そういえば去年自分の前に1年の生徒が観察処分者になった子がそういう名前でしたっけ？たしか文月学園初の観察処分者らしいですね。おめでとうヨシイ君。これから負担が減りますよ。なんせここにもう一人観察処分者がいるのですから

「あ、そういえばせんせ。自分も観察処分者になったんですよね？それなら召喚獣でこの段ボール箱運んだりできるのでは？」

ふとそんなことを思いつきました。召喚獣を使わない観察処分者なんてらしくないですよね。

「そうだな、だがお前は多少ブランクがあるだろう？それに２年の振り分け試験を受けてない。おそらく召喚できないはずだ」

「あ～やっぱりそうですよね。でもブランクはともかく点数が１０点くらいあれば荷物くらい運べるでしょう？」

「？　それぐらいならな。・・・・・なるほど今ここで補充テストを受ける気か」

流石先生。それぐらいの浅知恵はお見通しですか。

ここで少し文月学園の華、試験召喚獣と試召戦争について触れましょう。少々長いのでご勘弁を。

文月学園は科学とオカルトと偶然によって開発された『試験召喚システム』を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる今日に新風を巻き起こしました。

試験召喚獣はそのシステムにより生まれた召喚者をデフォルメした姿の分身で全長は８０ｃｍ程です。ちんまりしていてなかなか愛らしいですが、戦わせることが目的のため、たとえ１桁の点数でもゴリラ並みのパワーを持つとまで言われています。おお怖い怖い。ま

あ、通常の召喚獣は召喚獣だけにしか触れることができませんけどね。

観察処分者と先生方の召喚獣は物理干渉能力を持っていて、物を運べたりできます。ただし物理干渉能力を持つ召喚獣は、召喚獣に与えられたダメージに対するフィードバックがあってこれには荷物運びによる疲労なども含まれるそうです。

召喚獣はテストの点数に比例した強さを持っていて、召喚獣による「設備の異なる教室状況」を改善するためのクラス間抗争のことを「試験召喚戦争」（通称「試召戦争」）と言います。

試験召喚獣は教師の展開する半径１０メートル程度（個人差あり）の召喚フィールドの中でのみ存在できます。
ちなみに通常の先生が自身の担当科目のフィールドを展開するのに対して西村先生は学年主任の高橋先生同様に、いかなる科目のフィールドの展開が可能といったチート？キャラなんですよね。

「長くなりましたがこれが大体のシステムです。詳しく知りたい方は原作をお読みください。試召戦争のルールについてはのちのち誰かが説明してくれますよ、きっとね」
「・・・・・誰に向かって喋っているんだ？」

言わぬが花です♪

「ということで採点お願いします、せんせ」
「そしてお前は何時の間に補充試験を受けた！？」

言わぬがｈ（ｒｙ

「ハァ・・・・・こちらも手伝ってもらっている身だから文句は言えんがな（どこからテスト用紙を持ってきたんだ？）」

またブツブツと先生は何か言いながら採点してくれます。やっぱり疲れているのですね。今度甘いものでも持って行きましょう。疲れ取れますよ。

さてあっという間に採点終了ですか。あいかわらず早いですね。たった１枚しか受けられませんでしたから早いのは当たり前ですか？早速召喚しましょう。

「行きます、試獣召喚っ！（サモン）」

≪Ｆクラス　月野造　現代国語　９５点　≫

喚び声に応えて自分の足元に幾何学的な魔方陣が現れます。　西村先生の立ち会いのもとにシステムが起動した証です。　姿を見せた召喚獣は自分をそのままデフォルメした見た目です。召喚獣の頭上に点数が浮かび、そして自分の自慢の武器がこの・・・・・あれ武器は？

「あらら？せんせ、武器がありませんし制服のままですよ？」

「おそらく調整中だろう。確か新学期になってシステムをアップデートすると学園長が言っていたからな。・・・召喚してなにか違

和感はないか？」

ん～違和感ですか？ちょっと視界が揺らぎますが、これはまぁいつも通りですし・・・

「いえ特には。とりあえず荷物持たせてみますね。よっと！？」

すっ、凄い！こんなに軽々持ってます。先生並みに持てますよ？これならすぐ終わらせることができますね。

「さぁ、早く終わらせて学園長室に行きましょう！せんせ」

「・・・・・あ～月野。俺も最近あまり召喚獣を出してないから上手くは言えんが、何かを掴む持ち上げるの作業は力加減が難しいはずだぞ。はしゃぎすぎるなよ」

「たしかに手袋をしたまま卵を割る作業している感覚ですね。ですが流石に召喚獣の扱いは3年目ですからある程度は大丈夫ですよ。」

中々にコツが要りますが面白いです。

「（ボソッ）それに調子に乗ると吉井のようになる」

何気に酷い言われようですね。それにしても先ほどからヨシイ君の名前がちょこちょこ出てきますね。同じ観察処分者同士仲良くしたいです。

一応細心の注意を払って運びましょう。それにしても多少のフィードバックはありますが、いやはや自身で持つより断然楽ですね。

「これを補習室に入れたら終わりですか?」
「そうだ。ご苦労、まさか朝のうちに全て運び終えることが出来るとは思わなかったぞ。助かった」
「いえいえ、先生こそお疲れ様です。ではこれ置いたら学園長室に行きま　ガッ「あっ」しょう?」

ほっとしているところに事件（?）は起きました。
人が油断するのは物事の終わりの方だとどこかの偉い人は言いましたが、それ確かに合っていましたよ。

某ジェ○ガのごとく段ボールの塔は崩れ、自分と自分の召喚獣は時が止まったかのようにボケっと見つめるしかありませんでした。

「いぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁ!?」

早朝のニワトリもびっくりの叫び声とともに自分とその分身は埋もれて逝きました。全身がかつてないほどの痛みを訴えます。

もう少し先生が埋もれた自分と召喚獣を引きずり出してくれるのが遅かったら段ボール箱がトラウマになるところでした。フィードバックっていたいね・・・てか段ボール箱で死ぬかと思いましたよ。
死因：段ボール箱って泣けますね。

観察処分者は日々この痛みに耐えてたのですね。ヨシイ君に心の中で敬礼しましょう。

？？「くしゅん！・・・むにゃむにゃ。同情するな・・・ら朝食・・・をく・・・れ」

朝食はあげませんよ？てかなに電波受信してるのですか？

2時間目　凶器は段ボール箱～ジェ〇ガ～（後書き）

余白の開け方とか会話の運びとか、勉強不足ですみません
読みにくかったり、こうした方がいいなどアドバイスがあれば泣いて喜びます
それと読んでくれている方、本当にありがとうございます

3時間目　悪いことは結構続く～月野菌＝のん菌？～

恐怖の段ボール箱を片づけて、なんとか学園長室に辿り着きました。
只今の時刻ＡＭ５：５５　時間的にはちょうどいいとは思いますが学園長いらしてるんですかね？扉をノックしてみましょ（ゴンッ）

「う〝・・・・・・」
「月野！？」

あぅ、目の前がチカチカします？いきなり開かれた扉のおかげで今度は星が見えました。
フィードバックの痛みが回復しきれていない状態でこのコンボは辛いです・・・・
何でしょう、今日は呪われているのですかね？

「おや？早いじゃないかジャリガキ。それに西村先生も。朝からご苦労なこった」
「学園長はとりあえず月野の心配をしてやってください」
「ん～なんだいこんなところで横になって。２日間寝てないアタシへの当てつけかい？」

扉の前にはこの文月学園の長である、藤堂カヲル学園長が立っています。

長い白髪と少々言葉遣いが荒々しいことが特徴です。
試験召喚システム開発の中心人物で自分からみても研究一筋でやってきただけはあり、教育者にしてはかなり規格外な方です。

てかまた徹夜で研究ですか。やっぱり研究者は学園長の天職なんですね。
後寝てないことに関しては八つ当たりしないでください。

「い〝ぇ、おかげでいろんな意味で目が覚めました・・・」
「月野、一度保健室で見てもらった方がよくないか?」
西村先生が心配そうに聞いてきます。ここは大丈夫であるとアピールした方がいいですね。

「あはは!へーきですよ。それになんか怪我するとテンションあがりませんか!?」
「・・・・・やはり病院に行かせるべきか（脳の）」

さりげない西村先生の棘のある冗談を華麗にスルーして、とりあえず学園長室に入ることにしましょう。別に泣いてませんよ?おでこが痛いだけです。くすん

それにしても学園長を研究室に行かせる前に捕まえることが出来てよかったです。寝不足状態の学園長が研究室に籠ればまず話をさせてもらえませんからね。集中し過ぎて。
この痛みは学園長を引きとめる対価だと思えば安いもんですよね？・・・・・いたい

「そんで？何の用さね？アタシは忙しいんだよ」

スパッと学園長が無慈悲な一言を付きつけます。
あれぇ？学園長が自分を呼んだんでは！？一瞬思わず素で反応しました。

「あれぇ？学園長が自分を呼んだんでは！？」
というか思わず声に出してしまいました。恐るべし、学園長。

「冗談だよ。特別観察処分者用の召喚獣についての説明だったね」

・・・・・冗談ですか。忙しいなら冗談言わなきゃいいのでは？
西村先生が何か言いたげですが多分自分と同じことを考えているのでしょう。

学園長、寝不足でテンションがハイになってるのでしょうか？
あえて自分達はつっこみませんがね。つっこみませんよ？

「まずその前に一言、すまなかったね。今回のお前さんの待遇には不満があるだろうが、これが精一杯の処置だった。せめて2年最低クラスへの編入は取り消して、今からでも振り分け試験を受けることも可能ちゃ可能だが・・・・・・」

むぅまたそれですか。西村先生も学園長も心配し過ぎですよ。ちらりと先生を見ると少し笑っています。先ほど先生が話していたそのまんまの会話ですからね。

「はいはい。さっきも西村せんせに言いましたが、後悔なんてしてませんよ?毎日楽しくのんびり過ごすことが自分の生き方ですし」
「だと思ったよ。たく、ならどうしてまた好き好んでFクラスなんぞ行きたいのさね?」
「これはこれでアリなんです。どうせAクラスに行ったところで試召戦争の機会はほとんどないと去年学習しましたし」

お菓子食べ放題は割と魅力的でしたがね。

「まったく理解しかねるよ。お前さんの考えには」
「これればかりは譲れませんよ。自分らしくていいでしょう?」
「よく自己分析ができてるじゃないか」

学園長はハァっとため息をつき、西村先生は笑っています。まったくこの会話も何度目でしょうかね?

「もういいさね、好きにしな。それでアンタがいいならもう何も言わないよ」
「いやだから最初から自分の好きにやってるんですって」
「・・・・・学園長、もう本題に入りましょう。月野菌に毒されますよ」
「そうさね、ナントカにつける薬はないようだし。アタシ等までナントカにはなりたくないからね」

ひどっ!?これ誉められてるのか貶されてるのかよくわかりませんね?貶されてるのでしょうけど。
西村先生も学園長も時々自分の扱いが酷いですね、慣れましたが・・・

3時間目　悪いことは結構続く～月野菌＝のん菌?～（後書き）

未だに明久たちと合流できてません・・・
手さぐり状態で書いてますが小説を書くって難しいですね。
多分後、2，3話は明久にすら会えません。はよなんとかしたいです
読んでくれた方、ありがとうございます

4時間目　リアル幽体離脱？～ひょーい～

学園長との一通りの押し問答の後、ようやく本題に入りました。

「とりあえず特別観察処分者って言っても召喚獣の基本は観察処分者の設定と同じさ。
物理干渉にフィードバック設定、これは変わりない。何なら一度召喚してみるといい」
「あっ、それならちょうど先ほど召喚しましたよ。西村先生立ち会いで」

そうそう、フィードバックのおまけつきでしたけどね☆

「なら話が早いさね。・・・・ところで身体に何か異変や影響があったかい？」
「わかりません！」

わからないときは正直に答えましょう。ないと言えばありませんし、あると言えばあるような？
多分いつも通りでしたよね？物理干渉以外・・・・・・

「・・・・・お前さん、何か異変があってもいつも通りで済ましてないかい？大方また意識が遠のいたりしたんだろう？隠しても無駄だよ」

おお、よくわかりますね。召喚中はボーっとするんですよ。白昼夢を見ている感じです。

「というより普通、召喚獣の召喚ってそういう風になるんじゃないですか？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

ありゃ、また空気が重いです？どしてでせうか？

「月野、何度も言うがそれはお前だけだ。例え観察処分者の召喚獣でもそのような事例はない」

「ひょっとすると命に関わるかもしれないってのに、まったくこのガキは・・・・」

「いいか、月野。お前はただでさえ能天気で抜けている上に危なっかしいんだ。少しは気を引きしめて行動しろ！」

「呑気というか危機管理能力が完全に欠如しているんだろうさね。そんなことじゃ、アンタいつカモられてもおかしくないよ？」

この二人も随分容赦ないですね。てか、途中から話すり替わってもはや罵倒してませんか？

「とにかくだ。多少はお前も危機感を持ってくれ。何かあればすぐに相談しろ」

「未だにその原因と原理がわからない以上、本来であればお前さんに召喚してもらいたくないんだがね。だが例の件もあることだし、

今はなるべく多くのデータが欲しいのさ」

苦虫を噛み潰したような顔で二人は自分を見てます。生徒を実験のサンプルに使うのが苛立たしいのでしょうね。これは負のスパイラルに陥る前に話を進めましょうか。

「んで結局、特別観察処分者の召喚獣と他の召喚獣の違いってなんでしょうか?意識の有無に関係するみたいですが」
「ああ、違いを簡単に言えば操作法さ。根本的な召喚獣の操作が大きく違ってくる。動かすんじゃない、アンタが動くんだよ」

つまり・・・どういうことだってばよ!?

「つまりアンタの意識を召喚獣に一時的に移すってことさ」
「な、なんだってー（棒）」
「・・・・・ジャリガキ、アタシをおちょくってるだろう?」

失礼ですね、話が飛躍しすぎて呆れているだけです。おちょくってはいませんよ。

「というよりそんなこと可能なのですか?これ科学的に出来るようには思えませんよ?」
「はっ!アタシを嘗めんじゃないよ。まっ、確かに召喚獣はオカルト的な部分もあるがこれを使いこなせなきゃそもそもシステムとし

て成り立たないだろう？」
「・・・・・研究者がオカルトを認めている時点でどうかと思いますがね」

西村先生が的確なツッコミを入れてくれます。実際召喚獣が存在する時点でアレですがね。

「感覚的には幽体離脱する感覚に近いのかねぇ？もしくは憑依かい？」
自分は幽霊か何かですか・・・・
それにしてもまた学園長も思いきりましたね。
意識が混濁するならいっそ片方に移してしまえなんて、本当に極端ですね。
それとリアル幽体離脱ですか。生きているうちにそんな体験ができるとは・・・・

ですがおかしいですね？別に先ほどは魂が抜けたりはしてませんよね？

「学園長、先ほど召喚してもなんともなりませんでしたよ？」
「ん？そりゃ今から設定を変更するからさ。まさかこんなに早く来るとは思わなんだ。とりあえず放課後にまた来てもらうよ。詳しい説明もそん時さ」

ああ、なるほど。さっきちょうど設定に行くところだったのですね。

全くタイミングがいいのやら悪いのやら。

「さてと、もう行きな。アタシは設定を変更しに行かなきゃならないんだ。
後今日は出来れば放課後まで召喚は控えな。システムが混乱するのも面倒だしね」
「もしも試召戦争とかで召喚したらどうなりますか？」
「一応いつも通りの召喚獣が出てくるだろうが、お前さんの意識が朦朧としたままじゃロクに勝負にならんだろうさ。まあ新学期早々試召戦争なんて起きないとは思うがね」

確かにそうですが、今年はどうだかわかりませんよ？

「身体に異常があればすぐアタシか西村先生のところへ行きな。黙ってるんじゃないよ？
・・・・・それじゃあ西村先生、後は任せたよ」
「わかりました学園長、失礼しました。・・・・・それじゃ行くぞ月野」
「はいです。では学園長また放課後に、失礼しました」

只今の時刻ＡＭ６：４０
ふぅ、これで朝の用事は終わりですか。なんだか少し気が抜けました。
先生も学園長も心配性ですからね。逆に気疲れしちゃいますよ。本当にありがたいんですけどね♪

「せんせはこれからどうするんですか？」
「とりあえず荷物運びも終わったからな。職員会議の後、振り分け試験の結果を生徒たちに渡すだけだ」

あ～、そいえばそうですね。もうそろそろ他の先生も職員室にいらっしゃる頃でしょう。
先生もまた忙しくなるんでしょうね。その仕事、自分も手伝いましょう。
ＨＲまでかなり時間がありますから暇も潰せて、先生も楽出来て一石二鳥です♪

「てな訳で、封筒ください。３年生の分は自分が渡せますよ？２年生はまだ覚えてませんがなんとかなるでしょうし」
「・・・・・またか（俺に仕事をさせない気か？）とりあえず職員会議が終わるまでお前は休め」

5時間目　旧友の別れと級友の出会い～春なのにトコナツ～

どうしてこうなった！？

おかしいですよ?どういうことですか?
自分はね、ただ単に職員会議が終わるまで職員室の前で先生を待っているつもりだったんですよ?
・・・・・・それなのに!?

「造くんは私が担任がいいですよね?ね?一緒に英語をみっちり勉強できますよ?」
えっと・・・

「いいえ。ここは去年の担任であり、学年主任の私の方が造くんも安心できるでしょう」
あのぅ・・・

「・・・・・・若いっていいですよね」
ひぃぃ!?悪寒がっ

「誰か!?ヘルプです、ＳＯＳです、救助を要求します!」

いきなり取り囲まれたと思ったら新学期早々これですか。もうヤダこの先生方ｏｒｚ

てか貴女方は教師ですよ?わかってるでしょう?大体担任を一生徒が選べる訳ないじゃないですか!?

まぁ、高橋学年主任も遠藤先生も船越先生も自分のことを助けてくれる信頼できる良い先生方なのです。
――――本来自分は職員室に近づくだけでも嫌悪感を示されることもありますからね。
実際職員室にいらっしゃるごく一部の先生からはまるでいないように振舞われてますし。

「「「造くん、聞いていますか!?」」」
ですが、これはもう別の意味で心配になってきます。去年よりひどくなってませんか?これ。

「あ~先生方。そろそろ職員会議を始めたいのですが?」
「月野、とりあえずこれを持って玄関前に行っておけ。悪いがわかる範囲でいいから渡してやってくれ。　すぐに終わらせて俺たちも配るからな」

見かねた西村先生と保健体育の大島先生が助け船を出してくれました。
おお地獄に仏とはこの事ですね。お二人ともありがとうですっ

「「待って下さい！まだ話は終わってませんよ？」」
勘弁してください。そしてホントに怖いんですって！

「やれやれ全く、どうしてこう年上ばかりに好かれるのですかね？」
西村先生と大島先生が押さえてくれたので今日はもう大丈夫でしょうかね。
これ体質なんでしょうか？別に嫌なわけではないですし、人の好意は素直に受け取らないと罰があたりますから喜ぶべきでしょうがね。

只今の時刻ＡＭ７：００
さて、そろそろ準備しますかね。
３年生は一人一人の顔と名前はわかるのですが、流石に２年生は誰が誰かわかりません。
まっ、手当たりしだい声をかければ済む話ですかね♪

どの道２年生は今後お世話になりますし？顔と名前を覚えることもできますから。
でわでわ・・・・・・

「おはようございます！振り分け試験の結果を配っています。名前を教えてくださいな」

ふぅ、結構配りましたね。あの後すぐに先生方が戻って来て分担して配ってるおかげで割とスムーズに配れました。（ちなみにあの三人は大島先生が引きとめて下さったようです。後でお礼に行きましょう）

それにしても流石文月学園。配っているのは2・3年だけですがそれだけでも多いこと多いこと。
3年生の中には旧友もいて声をかけていただきました。皆さん懐かしいです。

ただちょっと嘗めてました、2年生の子大体半分くらいしか顔と名前覚えられなかったじゃないですか。愚痴っても仕方ないですし、おいおい覚えることにしますかね。

封筒は残りわずかですね、とっとと自分のノルマを達成しましょう。
さぁあいさつあいさつ♪

「おはようございます「「よう、元Aクラス」」・・・ます？」
おや？この声、この坊主頭にこのモヒカン頭。ものすごく懐かしいコンビですね。

「おはようです、ツネ・ナツ。お久しぶりの方が合ってますかね？」
「おぅ、なんだ。てっきり退学になったのかと思ってたぜｗｗｗ」
「おいおいそう言ってやるな夏川。バカはバカなりに頑張っている

みてぇだしなｗｗｗ」

うんうん、あいかわらずの暴言ですね。ここまで言われるといっそすがすがしいんですよ。この二人は去年一緒だった常村と夏川。（通称常夏コンビ）今年も相変わらず仲がいいんですね。なんだか懐かしくなってきました。はぁ、しみじみします。

「おっと忘れるところでした。、はいツネ・ナツ。これが振り分け試験の結果です」

「ハッ、んなもん別にいらねぇよ」

「そうそう、見なくても結果はわかるぜ」

見なくてもわかる？それは凄いですね。

ツネ・ナツはしばらく見ないうちに未来予知の力に目覚めたのでしょうか？

「そうそう、ところでお前は何処のクラスだ？」

「いくら留年しても流石に上位のクラスだろうな？」

「あぁ、２－Ｆですよ。」

ニコニコ笑いながら二人とも聞いてきます。気にかけてくれてるんですかね？

「「ハァ？Ｆクラスぅ～ｗｗｗｗｗｗ」」

「はい、Ｆクラスです」

クラスの名前を聞いただけで大笑いし始めました。
はて？時々ですがこの二人の笑いのツボがわかりませんね。

二人が笑っていると西村先生がやってきました。

「お前等ッ！もうＨＲの時刻だ。早く教室に入れ！」
「ッと、ヤベぇな西村だ。行こうぜ常村」
「ああそうだな、じゃあなＦクラス」

お～早い早い。二人ともあっという間に行っちゃいましたね。もう少し喋れたらよかったのですが、時間じゃ仕方ないですかね。

「あの二人も変わらんな。月野、気にするなよ？」
「はい？何がですか？」
「・・・・・いや、何でもない（こいつは本当にわかってないのか？）」
またもやため息出てますよ？それじゃ幸せが逃げますよ、先生。

それにしてももうＨＲの時間ですか・・・ほとんどの先生と生徒が校舎の中に入って行きます。残っているのは自分と西村先生だけですね。

「月野、お前もそろそろ教室へ行きなさい。残りは俺がやっておく」
ちなみにまだ手元に二枚封筒が残っています。

「せんせ。この時間に来ないってことはやっぱり病欠ですかね？」
流石にそろそろ自分も行かないといけませんからね。病欠であれば
切り上げて行きますか。

「そうだな。どれ、残った封筒を見せてくれ・・・・・なるほどな」
封筒を渡すと一枚を懐にしまいました。

「？　どうして1枚だけ残したんで「吉井、遅刻だぞ」すか・・・？」
あのぅ先生、人の台詞被せないでください。

釈然としないまま先生が声をかけた方向を見ると、見た目は爽やかで優しそうでどこか抜けている？感じの男子学生が立っていました。

何故でしょう、彼が放つオーラからそこはかとなくバ・・・な印象が・・・いえ人のことを悪く言ってはいけませんね

そうこれが、学園代表の観察処分者（バカ）同士の出会いでした。

5時間目　旧友の別れと級友の出会い～春なのにトコナツ～（後書き）

常夏コンビは主人公の元クラスメイトってことにしました
主人公は年上に好かれる体質だそうです。誰得？
読んでいただいたかた、ありがとうございます
次回からようやく原作に沿える形になると思います

６時間目　バカはバカを呼ぶ～真打は遅刻してやってくる～（前書き）

やっと明久が出せました。

バカテスのノリが表現できているかわかりませんが、６話目です

6時間目　バカはバカを呼ぶ～真打は遅刻してやってくる～

月野Ｓｉｄｅ

それにしても彼、あまり慌てた様子も見られませんし何か用事でもあって遅れたのでしょうかね？

「あ、鉄じ――じゃなくて、西村先生。おはようございます」
彼が軽く頭を下げて挨拶をします。凄いですね、本人の前で渾名で呼びかける生徒さんがいるとは。

「今、鉄人って言わなかったか？」
「ははっ、気のせいですよ」
「ん、そうか？」
気のせいで済まそうとするあたり、なかなかの大物ですね。西村先生も気づいていらっしゃるようですし・・・

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうが」
「あ、すいません。えーっと―今日も肌が黒いですね」
あはは♪冗談で場を和ませるなんて面白い方ですね。

「・・・・・お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要な

のか？」
「そっちでしたか。すいません」
あら？素の反応でしたか。これは予想の斜め上です。

「まったくお前と言うヤツは・・・・・いくら罰を与えても全然懲りないな」
ため息交じりに先生が呟いてます。朝から本当にため息が多いですね。

「せんせ、朝からため息多いですよ。疲れているんじゃないんですか？」
「そうですよ鉄人。それにそう言われるとまるで僕が遅刻の常習犯みたいじゃないですか？」
「お前たち、一体誰のせいだと思ってるんだ。それに吉井、今完全に鉄人と言っただろう。西村先生と呼べ」
「しまった！これが孔明の罠かっ！？」
「あはは、いいじゃないですかせんせ。渾名で呼ばれるのはそれだけ慕われてる証拠ですよ？」
「そっ、そうですよ！ちょっとしたおちゃめなジョークですよ鉄村先生」
混ざってますよ。冗談なのか本気なのか分からないあたり、本当に面白い人ですね。

「・・・・・まあいい、ほら、受け取れ」
先生は手に持っていた封筒を彼に渡します。とうとうツッコミ放棄ですか？

「あっ、どーもです」
「・・・吉井、今だから言うが俺は今まで、『吉井はもしかしたらバカなんじゃあないか』と疑っていたんだ」
本人の前でそれ言うんですか？先生渾名で呼ばれたこと絶対根に持ってますね。

「それは大きな間違いですね。そんなことでは渾名に『節穴』なんてつけられちゃいますよ？」
彼も笑顔で封筒を開けるながらすごいことを返します。その発想はありませんでしたよ。

「だが喜べ吉井、お前への疑いは無くなった」
ようやく開いたのか、彼が封筒に入った紙を確認すると同時に先生は仰いました。

『吉井明久・・・・・・Ｆクラス』

「お前はやはりバカだ」

彼が打ちひしがれている間少し彼のこと聞いてみますか。

「面白い方ですね？せんせ。是非友達になりたい所です」
「おかしいの間違いかもしれんぞ。お前にはあまりこいつの影響を

受けて欲しくないのだがな。まあだがこれからお前は嫌でもこいつと付き合っていくことになるだろう」

「？　どしてですか」

「いいか、こいつの名前は吉井明久。お前と同じ・・・・・・」

ヨシイアキヒサ？あれ？もしかして・・・・・・

「観察処分者だ」

明久Ｓｉｄｅ

うぅ、おかしいな？よくてＣクラス、悪くてＤクラスだと思っていたのに・・・

やっぱりあの問題は『憲法』じゃなくて『漢方』だったか

それにしても、さっきから鉄人の横にいる女の子誰かな？

鉄人と随分仲良さそうに話してるけど、怖くはないのだろうか？

背丈は中学生くらいだし・・・・・・ハッ？まさか鉄人の！？

「鉄人！あんたまさか結婚してたのか！？」

「・・・・・一体どんな状況からそんな発想ができるんだ？お前は」

てっきり鉄人の子かと。まぁ、鉄人が結婚しているわけないか。そもそも全然似てないし。

「じゃあその女の子は誰なんですか？中学生がこんなところにいるなんて変じゃないですか？」
「「・・・・・・・・・・・・・」」
「えっなに？この反応！？まさか誘拐してきｔ（ゴンッ）痛いっ！殴ることないじゃないですか！？」

「バカタレ、誰がそんなことするか。・・・・・月野、生徒証明書を見せてやれ」
「あはは・・・わかりました。でもあまり殴らないであげてください。はい吉井くんどうぞです」
キミの優しさが心に染みるよ・・・さてなになに？

≪生徒証明書≫
下記のものは、本校の生徒であることを証明する。
氏名　月野　造　（１７歳）男

「嘘だッ！！！」
「鬱だ・・・」
なんだこれ！？年上？どう見ても中学生にしか見えないよ？下手すると小学生にも見えるのに！飛び級してきたって言ってくれた方がまだ信じられるよ！！

それに男？この子が！？何を間違ったらこうなるの！？
何一つ信じられない！もう何も信じない！！今日はエイプリルフールだっけ！？

混乱している僕に若干落ち込みながら手を差し伸べてその男の娘は言った。

「えっと、月野　造です。留年して２－Ｆクラスに所属することになりました。
ついでに言うと観察処分者です♪これからよろしくお願いしますね、吉井くん」

マジですか・・・・・・？

6時間目　バカはバカを呼ぶ～真打は遅刻してやってくる～（後書き）

ここからやっと原作メンバーと原作ストーリーに沿えることができそうです

しかし無駄に長いし、Dクラス戦までで10話くらいまでいくかも・・・

駄文ですが、読んでくださっている方ありがとうございます

バカテスト集その？＋主人公紹介（前書き）

何か足りないなと思っていたら、バカテストと主人公を紹介することを完全に忘れていました・・・

すみません、遅くなりましたが主人公設定です

バカテスト集その?+主人公紹介

1問目　化学）
問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つあげなさい』

姫路瑞希の答え
『問題点・・・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為、危険であるという点。
合金の例・・・・・・ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんはひっかかりませんでしたね

土屋康太の答え
『問題点・・・・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント
そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても

月野造の答え
『問題点・・・・・・空気中で加熱すると炎と強い光を発して燃焼するから
合金の例・・・・・・そもそもマグネシウムでは鍋は作れません』

教師のコメント
・・・・・・まあそうですね。

2問目　国語）
問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意な事でも失敗してしまう事』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希・月野造の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ち

る』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（２）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

島田美波の答え
『（２）ふんだんにけったり』

教師のコメント
あなたもですか・・・・・・

３問目　英語）
問　以下の文を訳しなさい
［Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ

grandmother had used regularly.」

姫路瑞希の答え
［これは私の祖母が愛用したいた本棚です］

教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え
［これは　　］

教師のコメント
訳せたのはｔｈｉｓだけですか。

吉井明久の答え
［☆●◆▽「♪※×　　］

教師のコメント
できれば地球上の言語で。

月野造の答え
［これ　は　それ　本しぇるふ　あの　私の　お祖母ちゃん　持っていた　使った　れぐらりぃ］

遠藤先生のコメント

どうやらまだ造くんは英語が苦手のようですね。大丈夫です、今日の放課後はみっちり私と一緒に一対一（ワンツーマン）で補習をしましょうね♪

月野造の返答

・・・・・どうして自分だけ？

主人公設定

名前：月野造　つきの　つくる
年齢：１７歳　誕生日：８月１３日
性別：男
身長：１４８ｃｍ（自己申告）
体重：４２ｋｇ
性格：のんき　やや天然
趣味：お茶を飲むこと、昼寝、お菓子作り
特技：特になし、あえて言うと人の顔と名前を（瞬時に）覚えること掃除
好きなもの：友人、先生、甘いもの、努力
苦手なもの：わんこ・にゃんこ、機械、辛いもの
座右の銘：【ケセラセラ　なるようになるさ】
外見：童顔で未だに中学生、最悪小学生と間違われる。中性的なルックス。男性にしては長い黒髪

備考

一応本編の主人公。一人称は自分。マイペースでどこか抜けてるよ

うで抜けてない天然。自身はツッコミ役だと思っているが、無自覚にボケる。本来なら３－Ａに所属される予定だったが、とある理由により２－Ｆクラスに編入されたうえ特別観察処分者に認定されてしまう。本人は特には気にしていないらしい。

友人や先生のいる学園生活が大好きで自分の友人達や学園を守るためならなんでもする。

精神構造は割と単純。恋愛感情はよくわかっていない。ただし独特の考え方を持っているとのこと。

趣味は何故か年寄りっぽい。お菓子作りは趣味というより生きがい。人の顔と名前を覚えることはなんとなくできる。掃除はやっていると落ち着くらしい。

本人曰く甘いものさえあればどこでも生きていけるし辛いものは食べ物じゃないとのこと。わんこ・にゃんこは嫌いではないが、外を歩くと集団で追いかけられじゃれつかれるため苦手。未だに携帯を使いこなせない機械オンチ。

小学生と間違われることが悩みの種。男性だが一瞬どちらかわからなくなるくらいのルックス。長い髪は単純に切るのが面倒だから。何故か年上に好かれる。

本人は嫌がっているが、実家はそれなりに名のある財閥の一人息子。ただし嫌がって家を留守にすることが多々ある。両親も放任主義の為、親子共々好き勝手やってるらしい。

得意教科は現代国語　不得意教科は英語
一応Ａクラスの実力は持っているためかいくつかの教科は腕輪持ち。
ただし英語に関しては何となく理解できてないらしく死ぬほど足を引っ張っている様子。

召喚獣

武器：箒　服装：魔法使いっぽい服装、帽子もあるよ♪

武器の箒は結構丈夫。普通に鈍器として使います。
残念ながら明久の木刀よりも攻撃力はありません。学園最弱？

代わりに風を操れ、他の召喚獣をフィールド外に飛ばせたりと地味ながら頑張ります。
実体化している時は本当に風を起こせます。

腕輪の能力は飛行能力。自身を含めた最大三体の召喚獣を乗せることが可能。

特別観察処分者になってから、その自慢の箒で掃除しているらしい。
本人曰く「狭いところが掃除できるようになり、風を使えば掃き掃除が楽に終わる」とのこと。

バカテスト集その？＋主人公紹介（後書き）

結構適当に設定しました。矛盾点が多々出てくるかもしれませんが、大目に見ていただければ嬉しいです。

バカテストは三問くらいをまとめて書きたいと思います。

7時間目　Aクラスと Fクラス～秀才たちとバカたち？～

「・・・・・何だろう、このばかデカい教室は」
「Aクラスの教室ですよ。相変わらず無駄に広いんですよね」

あれから（何故か）混乱し、どこか壊れた風の吉井くんを西村先生がチョップで治して改めて二人でFクラスへ向かっています。吉井くんは話してみるとまた面白い人です。

ちょうど三階に差し掛かり目の前にAクラスが現れると、吉井くんは唖然としています。
確かに凄い教室です。なんせ通常の五倍はあろうかという広さを持つ教室ですからね。

『皆さん、進級おめでとうございます・・・・　私はこの2年A組の担任、高橋洋子です・・・・よろしくお願いします・・・・』

あらら。ずいぶん暗い自己紹介ですね。ちょっと足を止めて大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表のような教師・高橋先生がいらっしゃいました。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプ

ラズマディスプレイに担任教師の名前が表示されました。すごい贅沢ですね、こんなもの入れるなら他の教室の設備をマシにすればいいのでは？

「ねえ、月野君。あの先生、気のせいか暗くない？」
「気にしないでいいですよ。理由は大体想像がつきますし・・・」

『まずは設備の確認をします・・・ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？ちなみに私は造くんが足りないと思います・・・』

「ねえ、月野君。あの先生、気のせいか君を呼んでない？」
「気にしないでいいですよ。大体いつものことですし・・・」

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があって、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料があってエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになってます。
天井は総ガラス製でありながらスイッチひとつで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれています。

『参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給いたします・・・　他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく、何でも申し出てください・・・私は造くんを要求しますね。では、始めにクラス代表を紹介します。

霧島翔子さん。前にきてください』
『・・・・・・はい』
それにしてもクラスの生徒たちのスルー力半端ないですね。誰一人ツッコミませんよ。
いや、単に唖然としているだけでしょうか？

『・・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします』

あれが、霧島翔子さんですか。さきほどちらっと見ましたが物静かな雰囲気で穢れを近づけない神々しさを放ってます。　それに黒髪を肩まで伸ばしているので、まるで日本人形のようですね

皆さんの視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げてます。む？その目はクラスメイト全員ではなく、よく見ると同性の級友たちにのみ向けられています。これまたどうしてでしょうかね？

『・・・・・・ちなみに私は雄二を要求します』
？何か聞こえた気がしましたが気のせいでしょうか？

『Ａクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように』

やっと吹っ切れたのか、いつもの凛々しい高橋先生に戻ったようです。いつもがこうならもっと人気が出ると思いますのに・・・

おや、こうしてはいられませんね。　自分もクラスへと向かいますか

「吉井くん、そろそろ行きましょう？」

「あ、うん。そだね。・・・・・・・・お菓子」

お腹空いているのでしょうか？でしたら休み時間にクッキーでも差し上げますよ。

二年Ｆ組と書かれたプレートのある教室につく吉井くんは少しだけ戸を開けるのを躊躇っています。少し顔が強張っているところを見ると、緊張しているのでしょうね。

流石に新学期早々いじめなどは無いと思いますが、ここは自分が前線にでますかね？

「吉井くん、先に行きますね」

「あっ、うん行こうか」

ガラッ

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫やろ・・・・・・う？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

あ、あれぇ？入った瞬間罵倒されましたよ？先生酷くないですか？

・・・・・・よく見ると生徒さんでしたが。てかこの人も先ほど会った方ですね。

「すっ、すまん！俺はつい明久が来たとばかり・・・・・」

「総員ッ！奴を　締め上げろおおぉぉぉ」

「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおお」」」」

凄いです、吉井くんの一言でクラスメイトたちが一つになりました。

上履きに文房具、ちゃぶ台が彼目掛けて飛んでいきます。ですがこれは酷い光景ですね。

「あの、皆さん！大丈夫ですよ？冗談なんですから！暴力は極力避けましょうね」

「「「「了解です！」」」」

ふむ、引き際も見事です。このクラスも中々面白そうですね。

さて、彼は大丈夫でしょうか？

「あのぅ、大丈夫ですか坂本くん？」

「あ〝ぁ、助かったぜ。すまんかったな・・・ん？俺の名前知ってるのか？」

「嫌ですね、朝会いましたよね？自分は月野といいます。よろしくです」

「よろしく、月野。そういえば鉄人の横にいたな、ちっこいのが」

ちっこいって・・・・・・確かに皆さんよりアレですがｏｒｚ

「やれやれ全く、雄二は何やってるのさ」
何食わぬ顔で会話に参加してます吉井くん。坂本くん怒ってますよ?

「明久・・・・テメェ覚えておけよ?先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた。何せ俺がここの最高成績保持者だからな」
「あぁ、つまり坂本くんがこのクラスの代表なんですね?」
つまり試召戦争において坂本くんが大将なんですね。彼がどう動くかで今後の学園生活がどう面白くなるかが左右されるでしょう。頑張ってくださいね!

「すみません、ちょっと通してもらえますか?それとＨＲを始めますので席についてください」
おや、先生がいらしたようですね。なるほど福原先生ですか。ちょっと冴えない風体の結構ベテランな先生です。

とりあえず立っているのもなんですし、吉井くんと二人で空いているスペースに座りました。

「今日からＦクラスの担任をさせていただく福原慎です。これから一年間よろしくお願いします。Ｆクラスはあまり備品がないので必要なものがあれば極力自分で調達して下さい」
ぶっちゃけましたね・・・去年のＦクラスも設備の不備は変えられなかったらしいです。

改めて教室を見回すと流石に少し酷いです。ここは後で少しだけ学園長の力を借りますかね？

「えーそれでは、廊下側の人から自己紹介をして下さい」

先生の言葉を皮切りに、生徒さんたちの自己紹介が始まりました。

8時間目　自己紹介と結婚宣言～ダーリンの反対語って？～（前書き）

こんな学校に行ってみたい反面、自分が行けば確実に精神崩壊を起こしそうですね

8話目です。今回ちょっと短いですかね？

8時間目　自己紹介と結婚宣言～ダーリンの反対語って？～

「まずは廊下側の人からお願いします」
福原先生の言葉を合図に、一人の生徒が立ち上がります。さて顔と名前を覚えましょう。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

おお。さっそく知っている子がいました。実際に見るのは初めてですが、確か去年演劇部期待の新人さんで稀代の美少女・性別を越えた存在とまで言われている・・・・・ってツネ（常村）がやけに興奮気味に言ってるのを聞いたことがあります。なんでもツネはあの子にホの字だとか？

・・・男性なのに美少女扱いなんて辛いですよね。あの子とは気が合いそうです。

「と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」
こちらこそよろしくです。

「・・・・・・土屋康太」

人のことは言えませんが、ずいぶん小柄で無口な方ですね。Fクラスにしてはおとなしめな方です。
それにしても先ほどから木下くんと自分の写真を撮っていますが写真が趣味なのでしょうかね？
自分なんかとってもおもしろくなさそうですが。

それにしてもあんなに素早く撮ってちゃんと写るものなのでしょか？
後で聞いてみますかね？

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です」

あらら。男性ばかりと思っていましたが、女性もいらっしゃるんですね。しかも帰国子女とは中々に珍しいです。日本語は海外から見ると難しい言語なのにとてもきれいに喋れてますね。きっと努力なさってきたのでしょう。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

一旦区切り、吉井くんをちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です☆」

・・・冗談が上手いですね。それとも彼女なりのアプローチでしょうか？

「あれ面白い冗談ですねよね、吉井くん？」
「・・・・・ソウダネ」
顔が引きつっていますよ？本当に、このクラスはいちいち良いリアクションが見れます。

彼女、吉井くんにニコニコ手を振っているところを見ると割と仲良さそうですね。
ピンポイントな趣味は彼女なりの表現の仕方でしょうね、きっと。

「それにしても、知り合いだらけだなぁ。雄二に秀吉にムッツリーニに島田さんか・・・・ってまんま去年のクラスメイトじゃん！」
1人でノリツッコミしている吉井くん。見てて飽きない人です。

「あはは、それを言うなら自分は誰も知り合いがいませんよ？吉井くん。自分は結構不安です」
「月野君は大丈夫！秀吉と一緒に僕が守ってあげるからね！」
はい？そんな話でしたっけ？

「それはともかく、皆さんどんな方なのか教えていただけますか？わかる範囲でいいので」
「いいけど・・・・・月野君は関わっちゃ危ない奴らもいるから気をつけてね！？」
一体どんな友人関係を持っているのでしょうね？

「いやいや大げさですよ?それに自分なら大丈夫でしょうし」
「う～ん、じゃあまず危なくない人からね。秀吉でしょ・・・・・・」

しばらく吉井くんの友人たちについて聞いていると、もう自分たちの番らへんに来ました。

「おっと、そろそろ吉井くんの番ですよ?どんな自己紹介にするのですか?」
「うん。こういうことは出だしが肝心だからね、気さくで明るい好青年をアピールするよ」

と、彼の番になり彼は軽くコホンと咳ばらいをして、

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」
「「「「ダァアーーリィーン!!」」」」

男らしい野太い声の大合唱が、Fクラスの教室に響き渡りました。
流石です、統率力があるにもほどがあります。ノリよ過ぎですよ。

「・・・・・失礼、忘れてください。とにかく、よろしくお願いします」
「吉井くん、掴みはバッチリです!」

すごく嫌そうな顔で席に着いた吉井くん。真っ青な顔ですよ？
これは重症ですかね。ちょちフォローしときましょう。

「どうしよう吐きそうだよ、月野君・・・・」
「大丈夫ですよ、フォローします♪」

さて自分の番ですね。がんばりますか。

「月野造です。では自分のことは気軽に『ハニー』って呼んでくださいね♪」
「「「「結婚してくれえええええええええええ」」」」

何・・・だと・・・？
おかしい。返事がおかしい。ここは笑ってさっきの吉井くんのように『ハニー』と返されるハズですよね？これはどうやら自分が女性であると勘違いされているのでしょう。
とりあえずちゃんと言っておかねば。

「ちなみに自分は男ですよ」
「「「「それでもいい！！！」」」」
「そうですか・・・すみません、忘れてください。よろしくです・・・」

即答されました。何故か吉井くんよりダメージ大きいです。
これはもうクラス全体が凄すぎる人で形成されているのでしょうね。

大体クラスの半数の自己紹介が終わりましたしたね。知らない人は吉井くんにでも聞いておけばいいでしょう。ここまで濃い方々と一緒では自分のキャラが霞みそうです・・・ううぅ

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん……」
「えっ？」

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れました。

8時間目　自己紹介と結婚宣言～ダーリンの反対語って？～（後書き）

今回も、よくわからない内容になってた気がしますｏｒｚ

更新スピードがどれくらいがいいのかわかりません
出来たものからドンドン出していいのでしょうかね？

とりあえず読んでいただいてありがとうです。

9時間目　さよなら教卓～吉井くんは人気者～

遅れて入ってきた女子生徒。その姿に、全員意外を通り越したかのように驚いた声を上げます。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

自己紹介を終えて、彼女は小柄な体を縮み込ませました。そういえば、西村先生が持って行った封筒の最後の一枚が確か彼女の名前でしたね。

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

傍から見ればずいぶん失礼な質問ですね？そんなに珍しいのですか？

「吉井くん？彼女がここにいることはおかしいことなのですか？」

「えっ？・・・・ああ。姫路さんね、本当はＡクラス入り間違いない成績なんだ」

吉井くんが言うには、なんでも彼女は振り分け試験中高熱で倒れてしまい途中退室してしまったらしいです。本来なら学年次席になれる程の実力を持っているそうです。
ですが文月学園のシステム上途中退室は０点扱いされてしまうのでＦクラス行きが決まってしまったそうです。

せめて再試験をと吉井くんは申し立てたようですが、その案は通らなかった様ですね。
それにしても、

「・・・優しいですね、吉井くんは」
自分のことではないのに一生懸命になったり、悔しがってくれる人はすごく素敵だと思います。姫路さんもそんな人がいるなら幸せでしょうね。

「き、緊張しましたぁ・・・」
おや、噂をすればちょうど近くに姫路さんがやってきました。吉井くんも心配そうですね。

「あのさ、姫「姫路」じ・・・さん」」
あら、間が悪かったですね。坂本くんと被さりました。

「は、はいっ。何ですか?えーっと・・・」
「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」
「あ、姫路です。よろしくお願いします。」
深々と頭を下げて挨拶をしています。礼儀正しい人ですね。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか?」
「あっ、それは僕も気になる」
すかさず吉井くんが口を挟みます。心配なんですね。

「は、はいっ。　何ですか?　え、吉井君!?」
む?何でしょう、この反応?そこで驚くと吉井くんが気の毒になります。

「姫路、明久がブサイクですまん」
坂本くん、ひょっとして先程の仕返しでしょうか?吉井くんはパッと見は好青年ですし、不細工ではないと思いますよ?

「そ、そんな!目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ・・・・・・」

ほら、姫路さんもそう言ってますし吉井くんも落ち込まないでくださ
い。

「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

「え？それは誰「そ、それってだれですかっ！？」・・・」

吉井くんは人気者ですね。それにしても姫路さん、そこまで必死にならなくてもいいのでは？

「確か、久保・・・・・」

吉井くんと姫路さん、それにいつの間にか来ていた島田さんが固唾を飲んで聞き入っています。何故に？

「・・・・利光だったかな」

「「・・・・・・・・・・・・・・ホッ」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

なして二人がホッとして、一人は泣くことになっているのでしょう？

「どして吉井くんは泣いてるんですか？」

「もうお婿に行けない・・・」
？では嫁に行くのでしょうか？

「安心しろ、半分冗談だ」
「えっ？残りの「もう体は大丈夫なのか姫路？」半分は？」
「あ、はい。もうすっかり平気です」
「ねぇ雄二！残りの半分は！？後、遮らないで！」

にぎやかで楽しいですね♪流石にそろそろ怒られそうですが・・・

「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」
と先生がが教卓を軽く叩いて警告を発すると。

バキィッ　バラバラバラ・・・・・・

教卓はゴミ屑と化しました。ここまで行くと一種の感動を覚えます。

「えー・・・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに先生が教室を出て、しばらくすると何故か吉井くんと

坂本くんも教室を出ました。
少々気にはなりますが、ここは少し他のメンバーと会話しますかね。

「あの、月野造って言います。よろしくお願いしますね」

姫路さん、島田さん、木下くん、土屋くんと会話していると先生が戻ってきました。
よかった、古くてもちゃんと教卓です。これが『無いので段ボール箱で』なんて笑えないですからね。

いやぁ、それにしても吉井くんを話題にここまで盛り上がるとは。
彼はムードメイカーの役割をはたしているようですね。

途中までやっていた自己紹介の続きも終わりかけの頃、二人は戻ってきました。
おやおや、二人ともずいぶん良い表情ですね。

「吉井くん、何かありましたか？」
「ん？そうだね。多分雄二の話を聞いていればわかるよ」

何でしょう？ですが彼らの表情をみると、こっちまでワクワクしてきます。

これはなんだか、面白そうなことが起きる予感です。

壇上に上がった坂本くんは軽い自己紹介の後、教室の不備・Ａクラスとの落差などをクラスの皆さんに訴えかけ一言、

「Ｆクラスは、Ａクラスに≪試験召喚戦争≫を仕掛けようと思う」

そう高らかに宣言しました。

１０時間目　これがＦクラスだ～原作Ｆメンバー＋α～（前書き）

原作とは違い、ちょっと変更しているところが多々あります。まあたいして大きな違いはないと思いますが・・・・・・

１０話目です。少しずつですが読んでくださってる方が増えてうれしいです
では今回もよろしくお願いします。

１０時間目　これがＦクラスだ～原作Ｆメンバー＋α～

坂本くんのＡクラスへの宣戦布告。それはやはり現実味の乏しい提案のようでした。

『勝てるわけがない』
『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
『姫路さんが居たら何もいらない』

確かに無謀と言えば無謀な提案ですね。テストの点数が勝敗を分ける試召戦争において、成績のいいＡクラスと成績の悪いＦクラスがまともにぶつかっても結果は見えています。皆さんが試召戦争に消極的なのも仕方ない話ですね。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」
これは大きく出ましたね。圧倒的な戦力を知りながらこう宣言するとは・・・

『何を馬鹿な事を！』
『できるわけがないだろう』
『なんの根拠があってそんな事を』

ん～皆さんかなり否定的ですね。ここは士気を下げたくありませんし、フォローしますか？

「皆さん、まずは代表である坂本くんの意見を聞いてみませんか？実力差を知りながらあえてAクラスを狙うくらいですから、何か策があるんでしょうし」

「「「「了解ハニー！！！」」」」

「おーけー。でもハニーは止めましょう。てかはよ忘れてください」

それにしても切り替え早っ！？まぁこれで坂本くんも話しやすくなったでしょうか？

「もちろん策ならあるさ。それにこのクラスには試験召喚戦争に勝つことのできる要素がそろっている。それを今から説明してやる」

クラスが更にざわつきます。さてここからどう引っ張ってくるのでしょう？

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

土屋くんが呼ばれたようです。必死になって顔と手を左右に振り何

やら否定のポーズをとっていますね。
姫路さんがスカートのすそを抑えて遠ざかると、彼は顔についた畳の後を隠しながら壇上へ歩き出します。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性職者（ムッツリーニ）だ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

『ムッツリーニだと・・・・・・・？』
『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・・・・・？』
『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしてるぞ・・・・・・』
『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ・・・・・・』

はて、そんなに有名なのでしょうか？横にいる姫路さんも「？？？」と頭に疑問詞を浮かべてるみたいです。自分は初めて聞きましたよ？

「吉井くん、そんなに有名なんですか？土屋くんは」
「私も知りたいです、吉井君」
「二人とも。わからないならそれでいいんだよ。奴は要するにムッツリスケベってことだから」
さらにわからなくなりましたよ。変な吉井くんですね。

「姫路の事は説明する必要もないだろう。皆だってその力は良く知ってるはずだ」
「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待してる」

でしょうね。試召戦争となったら一番活躍するのは姫路さんだと思います。おそらくFクラス最強の戦力ですね。

『そうだ。俺たちには姫路さんが居るんだった』
『彼女ならAクラスにも引けはとらない』
『ああ。彼女さえいなければ何もいらないな』

何故か先程から妙な声援?が聞こえますね。それと吉井くん?どうしてカッターを取り出してキョロキョロしているのですか?

「木下秀吉だっている」
「ん?ワシか?」
木下くんですか。まぁ学力は未知数ですが、演劇部のホープだったり双子のお姉さんのことで有名みたいです。

『おお・・・・・・!』
『ああ。あいつは確か、木下優子の・・・』
話題性のある人物が呼ばれ士気がさらに高まります。

「島田もだ。日本語を使わない数学の成績はBクラス以上だ」
「えぇ!?ウチも?」
謙遜してますが島田さん、アナタ日本語をペラペラ喋られるだけで

も相当頭がいいですよね。読み書きさえできれば即戦力になるでしょうし。

『それは凄いな・・・・・・』
『なんだ、意外な伏兵か？』
『ぺったんこ最高！』グシャ

何かまた聞こえた気がしましたが、すぐ止みましたし気のせいでしょう。そして島田さんの両手に付いた赤いものはトマトケチャップか何かでしょう。

「当然俺も全力を尽くす」
代表こと坂本くんですね。見た感じ相当頭が切れるみたいです。加えて現在進行形で魅せてくれる巧みな話術と個性派だらけのFクラスをまとめ上げているカリスマ性は見事と言っていいでしょう。

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』
『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』
『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

良い雰囲気です。これはもう一声でクラスを掌握できますよ！坂本くん。

「それに、吉井明久だっている」

・・・・・・シン――――

あれ？なんですこの空気？

１０時間目　これがFクラスだ～原作Fメンバー＋α～（後書き）

原作では美波は紹介されていませんが、実力的に紹介されてもおかしくないのではないかと思って付け足しました。

別に作者が好きなキャラってわけじゃないんだからね！実際瑞希もいいキャラですし。明久に誰をくっつけるかはまだ今のところわかりませんが・・・・・・

土日に書きだめして少しずつ連載してますが、一気に出してもいいのでしょうかね？怒られないかな？

また早めに更新したいと思います。読んでくれてありがとうです。

１１時間目　Ｆクラスの結束～ちゃん付けした人出てきなさい～（前書き）

一日に何度も投稿してすみません。話がつながってましたから（汗）

１１話です。原作と流れが少し違ってきてますのでご注意を

１１時間目　Ｆクラスの結束～ちゃん付けした人出てきなさい～

空気が重いです・・・・・坂本くん？折角高まった士気が下がっちゃいましたよ？

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』
『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――――って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

そうですか？木下くんたちの話では良い意味でも悪い意味でも有名な生徒だと聞きましたがね？
実際行動力は人一倍ありそうですし・・・・

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書は《観察処分者》だ」
あらら言っちゃいましたか。坂本くんひょっとして吉井くんをオチ扱いにする気ですか？

『・・・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』
クラスメイトからそんな言葉が聞こえます。ひどいですね。同じ観察処分者の立場ですし、（先程まともに出来なかった）自己紹介を兼ねて吉井くんをフォローしましょうね。

「あのぅ、皆さん。ちなみに自分も観察処分者の一人ですよ？」
『えっ！？』
『さっきのロリっ娘じゃないか！？』
『結婚してくれ』
冗談にしてもプロポーズはやめてくださいね。自分を何だと思っているんでしょうか？

「改めて自己紹介です。学年を落され観察処分者となった月野造です。
こんな容姿ですがこれでも皆さんより一つ年上です。釘をさしておきますがお・と・こです！」

『『『『・・・・・・・・・・』』』』

『『『『年上の男の娘！？』』』』
『つまりあれか！合法なんだな』
『なんだと！？俺にもチャンスが！？』
『やべぇ興奮してきた！！』

その発想はなかった!?そしてそんな発想はいらなかった!!
しかも驚くところそこですか?学年が落とされたことは誰もツッコミませんし・・・・
おまけに男の子のイントネーション違いませんか?もうなんていうか、彼らには降参です。

一応、先に木下くんたちには一通り説明してますから、彼らは苦笑いしてますね。
学年を下げられたことを気にしないでくれて、優しい方たちです。

さて、続けましょう。

「自分は確かにバカですが、観察処分者を甘く見ていると怖いですよ」
「あの、それってどういうものなんですか?」

姫路さんが小首を傾げてるいます。まあ姫路さんは実質学年次席らしいですし、彼女には馴染みない単語ですかね。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」
「そうなんですか?それは凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたからそんな事が出来るなら便利ですよね」

姫路さんの目がキラキラと輝き、羨望と尊敬のこもった視線を吉井くんに向けます。
ふふっ♪吉井くん照れてますね。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

謙遜しなくてもいいでしょうに。下手すると生徒の中で最も召喚獣の扱いが上手いのではと西村先生が呟いていたのを聞いたことがあります。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴がが一人いるってことだよな、月野ちゃんはともかく』

『そうだな、月野ちゃんには戦わせられないな』

誰ですか?ちゃん付けしたのは。

・・・自分も怒る時は怒りますよ?

「いえ、それが逆に試召戦争では大いに活躍できるんですよ?」

「えっ!?」

マテそこ。吉井くんが驚いてどうするんですか?

「フィードバックがある分、召喚獣を使役しやすくなるんです。自分も一度動かしてみましたが、以前は出来なかった繊細な動きも可能になりました」

せっかくですし、もう少し持ちあげましょう。吉井くんの顔真っ赤ですが面白いので放置です。

「おそらく、吉井くんは学園一召喚獣の扱いが上手いはずです。この試召戦争では召喚獣の扱いが勝利への鍵となります。自分も観察処分者ですので彼のバックアップくらいは可能ですし。
・・・どうです皆さん？これは勝てると思いませんか？」

『『『『おおおおおお！！！！』』』』

『なんだかやれそうだよな！？』
『ああ、いけるぞ！』
『月野ちゃん！いいぞ！』

反応は上々です、上手くいきましたね。後は坂本くんに締めていただきましょう。

「代表？こんな感じでどうでしょうか♪」
「フッ、上出来だ。全くやってくれな？明久をオチにするつもりが更に士気を高めやがって」
あっ、やっぱりそのつもりでしたか。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはＤクラスを征服してみようと思う」
坂本くんの目がギラギラ輝いています。彼自身も燃えていますね。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆をとれ！出陣の準備だ！」

『『『『おおーーっ！！』』』』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！」

『『『『うおおーーっ！！』』』』

「おー♪」

「お、おー…」

おや？姫路さんも雰囲気に呑まれてか、掛け声をあげています。意外とノリがいいのでしょうかね。

１１時間目　Ｆクラスの結束～ちゃん付けした人出てきなさい～（後書き）

自分的には明久はもっと評価されていい人物なんだと思います

明久をオチに使うのはなんか申し訳ないと思って、だいぶ変えましたが大丈夫でしょうかね？

読んでいただいた方、ありがとうございます。

12時間目　吉井くん→アキさん～つぶらな瞳にご用心?～（前書き）

主人公のネーミングセンスは壊滅的です
ま、作者も同レベルのネーミングセンスですが

いつの間にか12話まで来てました……長いですね。とりあえず、
今日もどうぞです。

１２時間目　吉井くん→アキさん～つぶらな瞳にご用心？～

月野Ｓｉｄｅ

盛り上がってきましたね。まさか新学期早速、試召戦争が出来るとは。
このクラスの行動力には正直舌を巻きます。指揮官がいいからでしょうか？

「さて、明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」
「・・・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」
「大丈夫だ。やつがお前に危害を加える事はない。騙されたと思って行ってみろ」
「本当に？」
「もちろんだ。俺を誰だと思ってる」

ふむ。坂本くんがそこまで言うなら大丈夫でしょうか？ですが吉井くん一人ではきついでしょうね。

「坂本くんもそう言ってますし、ここは自分も吉井くんと一緒に行きますよ？」
「あっいいの？」
「却下だ」
えー？何でですか？早いですよ？

「出来れば月野がFクラスにいることは隠しておきたいからな。ある意味姫路より、な」
「このナリですし、大体のクラスにばれていると思いますよ？」
ふん！別に悔しくないですよ？くすん
「それに理由は後で言いますが、どの道今日は試召戦争自体に参加できません。
ですからせめて裏方の仕事くらいはさせてください」
「だがな・・・・・」
「吉井くんの連れってことで行けば、問題ないでしょう？」
「いや、それは・・・・・」
「何でしたら、自分ひとりでも行きますよ？」
「・・・・・・・・明久、ちょっと来い」
あれ？坂本くんたちが何やら相談していますね？何ですか？

明久Ｓｉｄｅ

結構月野君も頑固だなぁ。あの雄二相手に随分食いついてくるし。
そこもまたかわいらｓ・・・・・ゲフンゲフン
いけない、いけない。秀吉と一緒で月野君は男なんだぞ！しっかりしろ僕っ！

それにしても雄二の奴、月野君が行くことにえらく反対してるな？
何か理由でもあるのかな。

「明久、ちょっと来い」
と月野君と話していた雄二が僕を呼びだした。何だろう？

「どしたの雄二？さっきから」
「明久、お前にさらに重要な使命を与える。これはお前にしかできないことだ」

ゴクリ
重要な使命だって？フッ、ようやく雄二も僕を認めたようだね？

「雄二、それは？」
「あぁ、月野の護衛を頼みたい。お前は大丈夫だがあいつはあの容姿で特に目立つ。
Dクラスへの宣戦布告の使者として行けば、おそらく拉致られて酷い目に遭うだろう」

なんだって!?そんなうらやm・・・・・けしからんこと、お父さんは許しません!

「そんなことさせないよ!この身を楯に変えても月野君は僕が守ってみせる!」
「その意気だ、明久。このことは月野に悟られないようにな。では

頼んだぞ」
「まかせてよ、雄二！・・・・・・さあ月野君。共に行こう！！」
「？　はい。よろしくです？」

そうだね。こんな可愛い子が酷い目に遭うのなんて、誰も望んでないんだ！
例えこの身が犠牲になろうと守り抜こう！

「・・・・・どうしてでしょう。黒いモヤモヤとした気持ちが湧いてきました」
「・・・・・・奇遇ね瑞希。ウチもよ」

何故か体が震える。ははっ！そうかこれが武者震いってやつか！

月野Ｓｉｄｅ

坂本くんの言う通りスムーズに宣戦布告は済みました。
Ｄクラスの担任が遠藤先生だったのには少々焦りましたが、ちょうど休み時間でいらっしゃらなかったようなので助かりました。

それにしても吉井くんがDクラスに入ったときと出たときの格好が幾分変わっています。
と言うより怪我してますね。いつの間に？

「大丈夫ですか？吉井くん。保健室行きますか？」
「平気、平気。これは男の勲章さ」

？そうですか。男の勲章ってかっこいいですね。
自分はかっこよさが足りないと、常日頃から言われますのでかっこよくなりたいです。

「そういえば吉井くん？どうして試召戦争を始めようと思ったのですか？」
「うぇ？どっ、どうしてそう思うの？」
反応を見るに、試召戦争のきっかけは吉井くんみたいですね。

「先ほどご自身がおっしゃっていましたよね？『雄二の話を聞いていればわかるって』」
「あ・・・」
「それに吉井くんが坂本くんを連れ出してましたし、やっぱりきっかけは吉井くんかなと」
「そうだよね、えっとFクラスはひどい設備だか「嘘ですね」ら？」
目が泳いでますよ？吉井くん嘘がつけないタイプの人間ですね。

「どうしても話したくないならいいですが、気になって今日は一睡

もできなくなるかもしれません。
優しい吉井くんは教えてくれますよね？」
「ちょっと！？何気に僕追い込まれてる？」
「教えてくれないのですか？」
「くっ、そんなつぶらな瞳でおねだりしないで！？これが娘の言うことを何でも聞いてしまう全国のお父さんの気持ちか！？」

どんな例えですか？それ。娘じゃなくて息子でしょうに。

「・・・・・うーん。恥ずかしいから誰にも言わないでくれる？」
「それはもちろん。指切りしてもいいですよ」
「・・・・・姫路さんと島田さんの為、かな？」

む？二人の為ですか。どういうことでしょう。

「姫路さんは体弱いしあの教室にいるのだって辛いはずなんだ。いくら体調管理ができなかったとはいえいきなりFクラス入りなんて理不尽でしょ？」
そうですね、本来であれば再テストなど処置がいろいろあるでしょうし。

「島田さんだって、一年前日本にやってきてたばかりなんだよ？日本語を話すことすらも大変だったのにここまで頑張ってあのレベルまでいったんだ。数学の成績を見ても彼女も本来なら上位クラス入りしてもいいのに」
いっ、一年であんなにペラペラに話せるのですか。そりゃまた凄い

「僕は勉強しなかったからFクラスにいても文句は言えないよ?でも彼女たちは違うよね?努力が認められないことは僕は何よりも嫌いなんだ」

・・・・・この人は、なんて。なんて優しいんでしょうね。

「って、ちょっと恥ずかしいこと話たね。忘れていいよ?それとは別に雄二は雄二で目的があったらしいし。それで、かな?」

「・・・・・そうですか。吉井くんのことアキさんって呼んでいいですか?自分も造って呼んでくれてかまいませんし」

「はへ?なんで?」

「なんでもいいじゃないですか?早く行きましょう、アキさん♪」

ありがとうございます、アキさん。なんか自分も救われた気分ですよ。

「おっ、戻ってきたな?ふむ、思ったより傷は浅いようだな、明久よ」

「雄二、僕はやったよ。守り切れたんだ・・・・・」

二人とも何を言っているのでしょう?それに若干坂本くん笑っていますが・・・?

「「吉井君（吉井）大丈夫ですか？（大丈夫？）」」
姫路さんと島田さんが心配そうにアキさんに駆け寄ります。二人とも優しいですね。

「あ、うん。大丈夫、二人ともありがとう。ほとんどかすり傷だよ」
「そうですか、ところで吉井君・・・？」
「アンタ、月野に変なことしてないでしょうね・・・？」

おかしいですね、二人の背後に黒いモノが見えた気がしました。
自分もやはり流石に寝不足でしょうか？
あぁいけませんね、これじゃあ学園長を寝不足だなんて言えないじゃないですか。

「それじゃあ、今からミーティングを行うぞ。明久・月野も来い」

どこかに移動するんですか？とりあえず着いていきましょう。
メンバーは先程坂本くんに呼ばれた方々ですね。このメンバーが我がFクラスの主戦力でしょうね。

12時間目　吉井くん↓アキさん～つぶらな瞳にご用心?～（後書き）

明久↓アキさんとかベッタベタな渾名ですね。昔から作者もネーミングセンスが終わっているといわれています……

妙な敬語を使っていますが主人公の造はこれが基本です
敬語の方が喋りやすいからだそうです。間違った使い方してますが……

とりあえず、12話でした。次またお会いしましょう。ありがとうございました

１３時間目　水と塩と砂糖～今日のお昼の献立　ｂｙアキさん～（前書き）

またまた美波関係で原作と変更している部分があります
美波ももっと素直になればいいと思いますし

気がつくと１３話目です。だらだら書いていると長くなりますね・・・・・

それではよろしくお願いします

１３時間目　水と塩と砂糖～今日のお昼の献立　ｂｙアキさん～

坂本くんの後を着いていくと屋上に辿り着きましたね。
雲ひとつない空から眩しい光が差し込んでいます。春風がとても気持ち良いです。

「明久・月野、宣戦布告はしてきたんだろう？」
「一応今日の午後から開戦って告げてきたけど」
「驚いていましたよ。新学期早々試召戦争をするのか！？って」

全員腰をかけながら、自分たちの話に耳を傾けます。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」
「そうじゃの。明久よ、お主今日くらいはまともなものを食べるのじゃぞ」
「？　木下くん、どういうことですか？」
「うーん秀吉。そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど？」
「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

そういえば朝、Ａクラスのお菓子を羨ましそうに眺めていましたね。
ひょっとしてダイエット中でしょうか？

「いや。一応食べてるよ？」
「・・・・・・・・・・・・水と塩と砂糖は食べてるとは言わない」
「飲む舐める、が表現としては正解じゃろうな」

・・・流石に戦慄しました。もしかしてアキさんのお家は苦労なさっているのでしょうか?確かにここ文月学園は試験校ですし学費も安いです。まさかそれで・・・?

「月野安心しろ、こいつは仕送りのほとんどをゲームや漫画に使い込んでいるだけだ」
と坂本くんが言います。あれ?心配して損しちゃいましたか?
ですが食費まで娯楽に使い込むなんて・・・アキさんの将来が心配です。

「そうでした、アキさんは甘いもの大丈夫ですか?」
「へっ?うん・・・好き嫌いはないよ」
それは素晴らしいですね。自分は好き嫌いが激しいですから・・・

「それでしたらこのクッキーを差し上げますよ。手作りですから味は保証しませんがね」
「いいの!?ここのとこ塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ!」
ホントにどんな生活してるんですか?倒れたりしないでくださいよ?

「涙が出てきそうです。アキさん、よければ自分のお弁当も差し上げますよ・・・・」
「いっ・・・・いや、造に悪いよ・・・・ね。流石にそ・・・・れは・・・・ッ」
そんなに未練たっぷりに見るぐらいなら差し上げますよ。

「このバカ、厚かましいにもほどがあるな」
「月野よ?それではお主が食べられなくなるではないか?」
「・・・・・・・・・・・・自業自得」
「くっ、否定できない・・・」
「いいですよ?変な時間にご飯をいただきましたから、お腹空いてませんし。
それに今日はがんばってもらわないといけませんから?」

ギラリッ
っ!?て、なんです?この人を刺すような視線は?

「(あんなに仲良さそうに・・・月野君羨ましいです!)」
「(それにいつの間にか造・アキさんって呼び合ってるし!)」

「「・・・・・・」」
あの、なんで姫路さんと島田さん睨んでるんです?何かしましたかね、自分?

「あのっ!吉井君、良かったら私がお弁当作ってきましょうか!?」
「そうね、これじゃあ月野に負担が行くばかりだし、ウチも作ってこようかしら!?」
「ゑ!?」

視線の謎はともかく、アキさん大人気ですね。アキさん優しいんですから、当然と言えば当然ですか。

「ほーう？よかったな明久？女子二人からの手作り弁当だぞ」
「まったく羨ましい限りじゃな」
「・・・・・・・・・・・妬ましいっ」

三人から冷やかされ？て、女子二人はあたふたしてます。

「そ、そうだ。どうせならアンタたちの分も作ろうかしら？」
「その、嫌でなければ皆さんにも・・・・」

あらら、何だか話し大きくなってますね？そうですね、皆さんが作るのでしたら自分も何か作るべきですかね？

「なら自分はデザー「「月野（君）はダメ（です）！！」」トでも作りません・・・・・はい」

はい早速ダメだし出ました～♪凹みませんよ、勝つまでは・・・・

「（月野君には負けられません！）」
「（月野には負けられないわ！）」

「俺達にも？いいのか？お前ら明久のために作りたいんじゃないのか？」
「「坂本（君）！！」」
「おー怖い怖い」
「それは楽しみじゃのう」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」

「そーですね（棒）」

なんですか？この仕打ちは・・・・

カミサマ？何か悪いことを自分はしたのでしょうか？

「わかりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね」

「楽しみにしてなさい。あっと驚かせてやるわ！」

「姫路さんも島田さんも優しいね」

「そ、そんな・・・・」

「べ、べつに・・・・」

「今だから言うけど、僕初めて会う前から君たちのこと好き――――――」

「おっと明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「――――――にしたいと思ってました」

はぁ、好きにするですか？そうですね自分も好きにすればいいんですよ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ

！？

あれっ？自分は何を？気づけば女子二人は真っ赤になってモジモジしてるし、アキさんは変にあわてています。坂本くん・木下くん・土屋くんの三人はニヤニヤしてるし・・・・
何なのですかね？

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
「・・・・・・・・・・・・セクハラ、よくない」
「明久はたまに、俺の想像を超えた人間になる時があるな」
「だって・・・・・・お弁当が・・・・・・」

？　本当にどうしたのでしょうか？意識が飛んでる間に何が？

「話がかなりそれたな。さて、試召戦争の話に戻ろう」
ようやく本題に入りましたね

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」
「そういえば、確かにそうですね」
「まぁな。当然考えがあってのことだ」

坂本くんは策士ですね。それにしても随分と練った作戦ですね。試

召戦争を仕掛けた本当の理由とやらを近いうち教えてもらいましょうか。

「どんな考えですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずＥクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでも無い相手だからな。」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「ああ。だがそれも振り分け試験の結果を見ただけだ。けど実際のところ違う。明久、この面子をよく見てみな？」

「・・・・・・ん～と。美少女３人と美幼女１人とバカ１人にムッツリ１人かな？」

どうやったらそんな回答が出来るのですかね？問題の趣旨ずれまくりですよ？

「・・・・・要するにだ」

ツッコミもなしですか！？

「姫路に問題がない以上、正面からやり合ってもＥクラスには勝てる。Ａクラスが目標である以上はＥクラスなんかと戦っても、何も得るものなく無駄に時間と労力を裂くことになるだけだ」

「それじゃ最初からＡを狙わないでどうしてよ？Ｄクラスに挑む意味ってあるのかしら？」

「もちろんある。初戦だし派手にやって景気づけにしておきたい。加えてＤクラス戦はＡクラス打倒に必要なプロセスだからな」

よく考えてますね。正直これから攻めるクラスの方々が不憫です。

「あ、あの！」
不意に姫路さんがが大きな声をあげました。
「ん？　なんだ姫路」
「坂本君たちは、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」
「ああ、それか。実ははさっき、姫路たちのためにって明久に相談されて「それはそうと！」」
坂本くんの言葉を遮るように、アキさんは大きな声を出しますが聞こえちゃったみたいですよ？
いいのでしょうか？

「さっきの話、Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」
「負けるわけがないさ」
吉井くんの心配を笑い飛ばす坂本くん。

「お前らが俺に協力してくれれば、必ず勝てる」
そして高らかに勝利宣言。

「いいか、おまえら。ウチのクラスは・・・・・・最強だ」
最後に根拠のない、ですが強い力の籠った言葉で皆さんを紡ぎます。

「いいわね・・・・・・面白そうじゃない！」
「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「・・・・・・・・・・・・（グッ）」
「が、頑張りますっ」

いいですこれ！これですよ！このドキドキする感覚。これを待って

いたんです。
さぁ存分に青春を謳歌しましょう。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

こうしてＦクラスＶＳＤクラスの戦いの火ぶたは切って落とされたのです。

１３時間目　水と塩と砂糖～今日のお昼の献立　ｂｙアキさん～（後書き）

次回いよいよＤクラス戦開始・・・・・・のハズですが、主人公はまだまだ戦えません。一応Ｄクラス戦で一戦くらいはするとは思いますが

早めに更新できたらいいと思います。読んでくださりありがとうです

１４時間目　坂本くん→ゆーさん～敵は職員室に在り～（前書き）

もはやどこに進んでいるのか作者にもよくわかりません

適当に書き終わったら投稿してますが長かったり短かったりと落ち着きのない文章でごめんなさい

とりあえず１４話行きます。よろしくです

１４時間目　坂本くん→ゆーさん～敵は職員室に在り～

あーうー暇ですね・・・・開戦の後は、坂本くんの指令で姫路さんと一緒に補充試験を受けつつ本陣待機させられています。確かに今日は召喚するなと学園長に言われましたが、折角の試召戦争に出られないとは・・・・とほほ

それにしても随分頑張って解いてますね、姫路さん。気を張りすぎないように言っておきましょうか。

「姫路さん体調は大丈夫ですか？根を詰め過ぎると後々バテちゃいますよ？」

「あっ、はい。平気です。皆さん一生懸命やってくださってますから私も頑張らないと！」

「いい意気込みですね♪でも無理しては駄目ですよ？アキさんも心配するでしょうし・・・」

アキさん優しいですからね。

「よっ、吉井君も心配してくれるでしょうか？」

「？　当り前じゃないですか。振り分け試験の時の事とか、えらいな気の掛けようでしたよ？」

「そっ、そうですか（ポッ）」

何やらトリップしてますが、本当に平気なのですか？本人が平気と言うなら一応信じますが・・・・？

「それにしても月野君は羨ましいです」
「はい？どうしてそんな話になるのですか？」
あれ？いきなりですね？何が羨ましいのでしょう？

「名前で呼び合っているからです、私小学生の時から吉井君のこと知っているんですよ？昔は名前で呼び合ったりもしていましたが今ではこんな感じで・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・あれ？ひょっとして姫路さんはアキさんのことを！？
すみません！恋愛のことは疎いんです自分！？気づいてなくてごめんなさい！

「心配してくれるのは裏を返せば腫れものを扱っているってことですよね？私はそんな関係より互いに支え合える関係の方がうれしいんです」
「だから例えば今の自分とアキさんの距離感が羨ましい・・・・、ですか？」
「はい・・・贅沢なんだと思いますけどね？ただ今のままじゃダメな気がするんです」

なるほど、確かに出会って一日で仲良くなれば羨ましがられるのもわかります。
アキさんが姫路さんを大事に思っているのと同じくらい、姫路さんもアキさんの力になりたいのでしょうね。

「ひょっとして、さっきからそれでそんなに頑張っているのですか？」

「あはは、私にはこれくらいしかできませんからね」

「・・・・・アキさんは幸せ者ですね？こんなにも想ってくれる方が近くにいて」

「つ、月野君！？恥ずかしいことを真顔で言わないで下さいよ／／／／／」

・・・・・ひどいです、真剣に言ったのに。自分は傷つきました。

「まあいろいろ応援しますよ、頑張ってくださいね？さて今は戦争中ですしそっちに集中しましょうね。

あとテストは自分のペースでやりましょう？適度に休憩も挟んでね」

「はいっ！月野君もありがとうございますね」

いえいえですよ。恋する乙女は強しですか？

いいもの見れましたし自分も気持ちを入れ替えて頑張りますか。

「あの、坂本くん？自分は本当に前線に出なくていいのでしょうか？」

補充試験を一通り受け休憩を挟みつつ、坂本くんに尋ねます。一応気になっていましたからね

「必要ない。お前と姫路は云わばこのクラスの最終兵器だからな。ギリギリまで隠し通しておきたい」

すみませんが、自分がFクラスにいることはばれてますよ？

「確かに月野は自分でDクラスに顔を出しちまったが、お前の実力や正体は恐らく誰にも知られていないだろう？相手もまさかお前が姫路同様にAクラスの上位成績者並みの実力があることは掴んでいないだろうしな」

・・・言いましたっけ？自分が元Aクラスだって。

「すまんが試召戦争で勝つためだ。お前のことはムッツリーニに調べさせた。・・・・・何故お前ほどの実力者が留年し、観察処分者になったかまではわからなかったがな。隠したかったなら謝る」

「あっ、いえ。隠す気はありませんでしたし、後々説明するつもりでしたよ？

・・・・・ですが観察処分者の件は、すみませんが今はまだ説明できないんです」

「かまわんさ。こっちも勝手に調べたんだ、悪かったな」

それにしてもよく調べられましたね、土屋くん？割と秘密にされているらしいですのに。

ですが、ここまで徹底いているのには何か理由があったりするのでしょうか？

ちょうどいい機会です、気になることは全部聞いておきましょうか。

「一つ聞いてもいいですか?坂本くんはどうして試召戦争を起こそうとしたんですか?どうにも坂本くんは教室の設備に目的があるようには見えないのですが?」

「ん?そうか?まぁ明久に頼まれたのもあるが・・・・」

そう言って一呼吸入れてから、目に強い闘志を宿し、

「俺はな、世の中学力が全てじゃないと証明したいんだ」

「学力が全てではない・・・・ですか」

「ああ・・・・理由になってないか?」

・・・・・いいえ。言葉にしなくてもその目を見れば理由なんてどうでもいいです。

何かを成し遂げようとする、強い目です。

「かっこいいです・・・・・・ん~、ゆーさん!」

「は?何だいきなり?」

「坂本くんのこと、これからゆーさんって呼びます。自分も造って呼んでくださいね」

「いきなり何かと思えば、お前は本当に変わったやつだな?まあいい、造!協力してくれるな?」

「いえっさ!とことん付き合いましょう!」

またしばらくテストを受けています。途中途中で外から『戦死者は、補習!』と西村先生の声が聞こえますね。いつも思うのですが先生が何気に一番大変なのではないでしょうか?

すると須川くんがなにやら慌てて本陣にやってきました。

「坂本!吉井からの伝言だ!」
「なんだ?脱走ならしばくと言っておけ。主にチョキでな」
「先生たちに偽情報を流してくれ、と。数学の船越先生を遠ざけたいらしい」

うぅ、船越先生ですか。いろいろ庇っていただいたりしているのですが、何か自分を見る目がヤバイ方です。ダメですね、なんか朝の三人を思い出して寒気を感じます。

って、何故にこちらを見ているのです、ゆーさん?そんなに不気味な笑顔で何を考えているのですか?

「任せろ、須川。これを校内放送で流すんだ」
「? こんな内容で上手くいくのか?」
「ああ、俺を信じろ。間違いなく三人は釣れる」
「わかった、必ず成功させよう」

何やら嫌な予感がするのですが・・・・・?信じていいのですよね、ゆーさん?

《ピンポンパンポーン》

おや校内放送ですか？何故今頃？

「お！来たな」

「ゆーさん・・・？」

《高橋先生、遠藤先生、船越先生》

この声は須川くん！？そしてよりにもよってピンポイントにこの三人ですか？

わーい、やーなよかんー

《月野造君が校内で迷子になっています》

なんで！？自分三年間通ってまだ迷子なのですか？

《泣きじゃくっているようなので大至急保護してやってください》

どんな放送ですか！わざわざ校内放送って公開処刑ってレベルではありませんよ！？

いやいや、流石にそんなんで釣れるわけ・・・・

『『『月野くん、今行きますねっ！！！』』』

釣れた！？初めてなのに釣れちゃった！？

何にも聞こえませんでしたよ。聞きたくありませんでした。

「ゆーさん！？自分を売ったのですか？」

「いやいや、協力してくれるんだろ？造。それより逃げなくてもいいのか？」

くっ！？確かにそう言いましたが、こんな搦め手を使ってくるなんて！？

そんな情報まで持っていたとは、土屋くんを嘗めてましたね。ゆーさんは後で覚えておきなさい。

「とっ、とりあえずしばらく姿を隠します。放課後までには指定された場所に行っておきますね」

「おーがんばりな。地獄の鬼ごっこを」

「ゆーさん！」

これゆーさん、絶対楽しんでますよね？本当に泣きじゃくりたくなってきましたよ？

とりあえず先ほどから感じる３つのドス黒いオーラからどうにか逃げなくては・・・・・

１４時間目　坂本くん→ゆーさん～敵は職員室に在り～（後書き）

一応１４話が終わりました。次でＤクラス戦は終結すると思います
（終わるとイイナ・・・）

一度も主人公が召喚獣を出していませんが次回は出せると思います

ちなみにここの主人公の造は恋愛感情をよく理解してません。今回の件でようやく姫路さんの明久への気持ちを把握したくらいです

ややこしい設定でごめんなさい。また次回お会いできたらうれしいです
ではでは

１５時間目　Ｄクラス決着の時～フラグは折るもの～

何とか撒きましたかね・・・？酷い目に遭いました。あそこまで鬼気迫る鬼ごっこもそうそうないでしょう。戻ったらゆーさんにお仕置きです。３時間正座で説教させます。

っと、気づけばちょうどＤクラスと我らがＦクラスの戦場まで来てましたか。
少し隠れて様子を見ましょう。なるべく見つかるなと言われていますしね。
よく見るとアキさんの部隊がやってますね。戦況は・・・あまりよくありませんね。

アキさん一人が召喚獣の扱いに慣れている分、他の方はまだまだ動きに無駄が多いです。
加えて点数の差と数の上でかなりの苦戦を強いられています。

『くぅ、また増援してきてるぞ！？』
『田中と柴崎がやられたっ！もう持たねぇ！』
『吉井部隊長、どうしますか？』

これはまずいですね。アキさんもだいぶ疲れてきてますし、残った部隊では補充試験なしでは守りきれないでしょう。援軍は見えると

ころまで来てますが押し切られるのも時間の問題でしょう。どうしますかアキさん？

『・・・・・みんな、補充試験を受けに行って』
『部隊長！？ですが押し切られてしまいますよ？』
『大丈夫、本隊と合流するまで僕が何とかする。みんなは勝利のために行ってほしい』
『吉井部隊長ッ』
『なんてかっこいい死亡フラグなんだ・・・・・・』
『隊長の死を無駄にはしません！』

確かにそこには覚悟を決めた漢の姿がありました。
しかし、やられること前提ですか？アキさんも苦笑いしてますよ？

『まぁ、いいけどね・・・・・・頼んだよ！』
『『はい！』』

アキさん一人残して部隊は下がっていきます。
Dクラスは後5人、アキさんでも流石に突破は難しいでしょうね。

『Fクラスのくせにやるわね。バカの吉井を囮にするなんて』
『ああ、だが所詮はバカだ。補充される前に潰すぞ！』
『君たち、人をバカにしすぎじゃない！？バカっていう方がバカなんだぞ、このバカっ！』

アキさん？貴方もバカって言ってますよ？ですが、これはどうしたものでしょうか？
ここでもしアキくんが戦死すると後々影響が出かねません。アキさんがいるいないで戦意も大きく違ってきます。何より5対1では何かこう、もやもやします・・・・・・

「・・・・・・」
そうですね、のんびり楽しくやるのが最大の自分の目的です。楽しくないのはいけません。
さっきの死亡フラグとやらは自分が吹き飛ばしてやりましょうか！

「あっちの本隊に合流されるのもまずいしそろそろやるか」
「さあ、覚悟はいいな吉井。地獄の補習室へ逝きな！」
「クッ、限界か！？」
「させません！Fクラス月野造、召喚します！試獣召喚（サモン）！」
「造！？何でここに？」

おわっ！？め、目眩がします。そいや、召喚は控えろって言われてましたね。まあ仕方ありませんが、これは予想以上です。ですが召喚獣はちゃんと現れましたね。よかったよかった。

自分のデフォルメされた分身と共に、今朝は見せなかった装備と服装です。ふむ、設定の変更自体は終わっているみたいですね。
見た目は魔法使いを思わせる黒っぽい服装です。てかまんま魔法使

いですね。定番の帽子をかぶってますし。
そして戦うための自慢の武器、それに皆さん驚いていますね。何てったって・・・・・・

「「「「ほ、ほうき!?」」」」

「造、どうしてここにいるのか知らないけど、何それ?」
「アキさん、これ知らないんですか?学園の庭から神社の境内まで、どこでも使えるこの武器の存在を」
「いや、わかるから!武器じゃないでしょ?というかやっぱりそれが造の武器なの!?」
「はいです。正真正銘、これが自分の武器ですよ?」
「あっ、わかった仕込み刀とかでしょ?」
「いいえ?そんなもの付いてたら危ないじゃありませんか?」
「ただの箒!?僕の木刀の方が強く見えるよ!?」

皆さん唖然としてますね。まぁ最初に見たときは自分も流石に驚きましたが・・・・

「・・・やっぱり、Fクラスはよね?」
「そうだな。吉井にしろこの子にしろやっぱり雑魚だ」
「そういえばその子だっけ?迷子になってる小学生は?」
待って!?小学生は流石に言い過ぎですよね!あなた方は自分をどんなふうに見ているのですか?

「ですが、見た目に惑わされると痛い目に遭いますよ・・・・・」
「「「「なっ!?」」」」

≪Ｆクラス　月野造　化学　３０４点　≫

ようやく出てきた点数に皆さん驚いてますね。むう、本当なら化学はもう少し点は上のハズですがゆーさんのおかげで途中までしか出来なかったじゃありませんか・・・・

「何だあの点数!?」
「あんな奴いるなんて聞いてないぞ!?」
そりゃ言ってませんからね。それじゃ、行きますか？

「アキさん!フィールドを一掃します。それから一人ずつ確実に討ち落としましょう」
「えっ、どうやって？」
「見ててください、どりゃあああああああああああ」

掛け声とともに、一体ずつＤクラスの召喚獣をフィールド外に吹き飛ばします。
なんで掛け声かけるのかって？ノリですそんなもの。

そう、自分のこの箒は攻撃力はほぼ無に等しい代わりに、風を操る能力が付属されてあります。一振りで大体3~5点消費しますが、他の召喚獣をフィールド外に飛ばせたりとなかなかにズル・・・・ゲフンゲフン、面白い能力です。

召喚獣は召喚フィールド外に飛ばされれば一度消えてしまいます。

再度召喚する前に一体になった召喚獣をアキさんに討ってもらう寸法です。せこいですって？作戦ですよ？

Dクラスの生徒さんが慌てている隙に大体をアキさんが仕留めてくれました。
上手いっ！やっぱり強いですね♪

「「「「そんなっ！？」」」」
「戦死者は、補習！」

おおう、西村先生お早いですね。お疲れさまです。

「ぐっじょぶです、アキさん」
「ＧＪ！造もね。まさかそんな使い方があるとはね・・・・・・」
「強さは見かけに寄らないってことですね」
「あはは！造のことだね」

ハイタッチしながらアキさんと一息入れます。
てか自分のことってどういう意味ですか？もうツッコミませんよ？
さてとりあえず本隊と合流して体制を整えますか。

「月野、お前も来い！」
「ふぇい！？何でですか？自分戦死してませんよ？」
「大人しく補習を受けろ！お前は召喚しただけで戦死扱いだ！」

なにその超理論。清々しすぎる！？

「嫌です！理不尽ですよ！？試召戦争中じゃないですかっ！！せんせ許して下さいぃ」
「いいから来るんだ！暴れるんじゃない」
「あ〝う、アキさん、後は任せましたあぁぁぁぁ！ゆーさんのフォローはアキさんがやってくださいね！！勝って下さいね皆さあああああああん！！！」

突然のハプニングにポカンとしているアキさんをよそに、拉致られる自分。
これだけ伝えれば何とかなりますかね？よろしくです。

はてさてここは補習室。戦死者たちが試召戦争終了まで補習を受けるところです。

「いやはや、まさか拉致られるとは。せんせ、ひどいですよぅ」
「お前は今日は召喚するなと言われただろうが。当然の報いだ、勝敗が決まるまでここで大人しく待ってろ！」
「ううぅ、了解です。というかせんせ？これ以上自分に召喚させないために自分を連れてきたんですよね？」
「後はお前の体調がどうか気になったからな。保健室に放り込んでもよかったんだが？」
「ここが一番いいです！」
「・・・・・・だろうな」

養護の日高先生に保健室のコンボはまずいです。一度本気で閉じ込められかけて以来ホントにトラウマになりかけたんですよ!?後一瞬気づくのに遅れたらヤラれる所でした・・・

西村先生は怒ったような心配そうないろいろ混ざった顔でこっちを見ています。

・・・・・やっぱり多少は反省した方がいいのでしょうか?

「お前はまったく・・・本当に異常はないな?なければ待っていろ、今茶を入れる」

「? 自分は補習を受けなくていいのでしょうか?」

「お前は本来戦死者ではないだろう?朝から気張っていた分、ここで少し休憩しろ」

そういってポットのお湯を急須に入れてます。

本当に甘いですね、先生。もっと厳しくしてもいいでしょうに・・・

・・・

入れていただいたお茶をゆっくり飲みながら、心と体を休ませます。

落ち着く・・・お茶はいいですね、ホッとします。

「それでどうだ?Dクラス戦は」

「さぁどうでしょうね?ですがもうそろそろ決まると思いますよ・・・」

「随分落ち着いているな?何か秘策でもあるのか?」

いえいえ、そんな大した物ではありません。単純に・・・・・・

『Dクラス代表、平賀源二。姫路瑞希が討ちとったぞ！』

『『『『うぉぉーーっ！！！！』』』』

「単純に信じていただけです、かね？」

こうしてFクラス　VS　Dクラスの試召戦争はFクラスの勝利で幕を閉じました。

１５時間目　Ｄクラス決着の時～フラグは折るもの～（後書き）

Ｄクラス戦決着です。それにしても書いてて戦闘描写がいかに難しいかよくわかりました

ちょっとだけ明久が強くなり過ぎな気もしましたが、いいよね！原作主人公だもの

このペースだとなかなか思うように進みませんね・・・・・・

長ったらしい文ですみません

とりあえず今回はここまでで。ありがとうございました

１６時間目　月野造の身体を生贄に～俺、召喚～（前書き）

今回はいつも以上に設定が（作者にも）訳のわからない状態になっています
ややこしくてごめんなさい・・・・・・

１６話です。Ｄクラス戦後の放課後からスタートしますね。

ではよろしくお願いします

１６時間目　月野造の身体を生贄に～俺、召喚～

《夕日が綺麗ですね～》

毎日見るであろう夕日も、今日はやけに大きく見えます。きっと試召戦争において勝利した喜びが夕日をこんなにも大きく見せているのでしょうね？

《そう思いますよね？学園長？西村せんせ？》

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・・・創ったアタシが言うのもなんだが、こんなことってあるもんだね」

「・・・・・・月野、俺はお前に何と言えばいいのかわからない」

まだ放心してるんでしょうか？西村先生はともかく、コレを創った学園長はそろそろ復活してくれませんと話が進みませんね・・・・・・

本人より寧ろ先生方が混乱してどうするのですか？全く

学園長と西村先生が凝視する先、つまり自分こと月野造は身体から解き放たれて新たな月野造（召喚獣ｖｅｒ）に進化（退化？）していました。

こうなるちょこっと前

Dクラスとの試召戦争の後、すぐに学園長室に呼び出されたのでDクラスとの戦後対談が聞けませんでした。まぁ、明日の朝どなたかに聞けばいいでしょうかね。
折角の勝利の感動を分かち合えなかったのは残念ですが、まぁ次がありますよね？

そんなわけで朝同様学園長室に西村先生と二人でやってきました。
扉を開けるときは慎重に開けましょう。朝の二の舞は踏みませんよ？人は常に進化するのです！

「安全確認ヨシ！学園長、失礼します」
「失礼します、月野を連れてきました」

おや？何故か召喚フィールドが張られています。
・・・・・？何だか今までになく視界が真っ白に・・・・・・・

ポンッ！

「月野っ！？どうし・・・・・・・・・・・・っ？」

と何か音がしたかな?と思うと、視点がやけに低くなっているじゃないですか?
あれれ?西村先生、また随分大きいですね。西村先生はスケールが大きいのですよ?

「ふむ、成功さね。・・・・・本当にできるとはね。物理法則に喧嘩売っているのかい?」
「学園長!?月野が、それに月野の身体がありません!?」
「落ち着きな先生。こいつの身体は一時的に消されているだけだよ」
「学園長、それでは安心できませんよ!」
「西村先生、アンタでもそんなに取り乱すことあんだね」

確かに。貴重なシーンですね?こんなの見たこともありませんよ。
ですが学園長も結構驚いてますよね?いつもより幾分早口ですよ?

《せんせ、深呼吸ですよ。話を続けませんと・・・・・》

とりあえずこのままでは一向に話が進みません。
深呼吸でもしてもらって、落ち着いてもらいましょう。
てか、声高っ!?自分の声じゃない感じですね

「月野、お前は平気なのか?」
《あ~一応びっくりしましたよ?ですがよくわかりませんが、何と

かなるでしょうし？》
「アンタ、大概呑気だね・・・・・・」
「・・・・・まったく、俺は俺の中の常識が音を立てて崩れていったぞ」
そうですか？そうでなければやっていけませんよ？

何とか復活した学園長の話を聞くに、自分が召喚獣として召喚した（された？）瞬間、月野造と言う身体は召喚獣が存在する世界に、月野造の召喚獣は月野造の存在する世界にそれぞれ交換されるとのことです。その交換の媒体となるのが召喚フィールドだとか？

正直難しい話は全然わかりませんでしたが、聞き流しましょう。長くなりますからね。

「それでどうだい？召喚獣になった気分は？」
《まぁ、凄いです。自分の体とほとんど同じ感覚ですね》

視点が更に低くなったのは、怒りを覚えますがね☆
いつもよりさらに見上げなくてはなりませんから、首が痛いです。

「もちろんさね、人間の五感すべて存在する」

無駄に凝ってますね?試召戦争には関係ない気もします。
てかものも食べられるんですか!?何それお得!?

「アンタの体力はテストの点で決まる。っていっても別に持ち点が0になったって死にゃしないから安心しな」
「それ当たり前ですよ!何言ってるんですか学園長!?」
「そう怒鳴らないでくれ西村先生、冗談さ。ま、もちろんフィードバックはあるがね」

ふむ、結局そうなる以外は普通の観察処分者ってことですかね?
なるほど、結構面白そうですね

《それで?元に戻るにはやっぱり召喚フィールドを離れるか、持ち点が0になった時ですか?》
「そうさね、後は基本的に他の召喚獣と一緒だね。後試召戦争のルールがお前さんだけ例外となる部分が出てくる」

なんでも戦闘時自分が召喚フィールドにいる間、相手が自分を指定していなければフィールドを離れても敵前逃亡にならないとか。召喚フィールドがある限り、自分が元の身体に戻れないためらしいです。
もちろん勝負を申しこまれている場合は戦闘に参加しなくてはいけないそうです。
これ、意外と使えるルールかも・・・・・?

「最後になるが、召喚フィールドが張られていれば問答無用でアン

タは召喚獣に成る。
せいぜい何かの拍子に召喚獣にならないように気をつけな」
だからいきなり召喚獣に成ったんですね。先に言ってくださいとは言いません。学園長ですからね。

「んじゃ召喚フィールドを戻すよ？いいかい？」
《お願いしますね、自分も一度は戻っておかないと不安ですし》

キュウゥゥン　　ボンッ！

フィールドを学園長が戻した瞬間に今度は視点が戻りました。うん、自分の身体ですね♪
問題ないようですし、ホッとしました。

「意識ははっきりしてるようだね？何か違和感はないかい？」
「強いて言えば、いつもより身長がちょっと足りない気がします（キリッ）」
「脳の方に欠陥があるようだね。もういいから病院に行きな」
「やはり朝のうちに行かせるべきだったか・・・・・・」

くぅ、二人とも冗談ってわからないんですか！？
もういいですよ、相手にしてくれなくても・・・・・・くすん

「ま、とにかく何かあり次第、随時連絡します。ありがとうございました」
「あいよ。一週間に一回はどんな感じか報告に来な。んじゃとっとお行き」
「月野、今日は疲れただろうからまっすぐ帰りなさい。明日は少なくとも普通どおりの時間に来ることだ。手伝いは俺の指示がない限りやらせんぞ」

あらら?ばれてました?西村先生も結構頑固ですね。

「では失礼しました。さようならです先生方」

ふぅ、これで今日も終わりですか。あっという間でしたね。
これからもっと面白くなるのでしょうね♪　さてまずは、目指せ打倒Aクラス!ですかね～

「・・・・・あのガキには悪い事しちまってるね。アタシは自分が腹立たしいよ」
「ですが学園長。嘆く前に、我々は月野に道を示さなければならない立場であることをお忘れなく」
「んなこたわかってるよ。そんくらい、ね。いろいろ面倒みてやってくれ、西村先生」
「当たり前です。大事な生徒ですから」

次の朝、ゆーさんに戦後対談がどうなったのかをあらかた聞きました。
何でもある条件を満たせば、Dクラスの教室は交換しないということで話がついたようです。

どの道目標はあくまでAクラスですからね。ゆーさんも二重三重に策を練っている様子です。
期待してますよ?代表さん?

「それで次はBクラスと戦争を行う。とりあえずそんなところか」
「把握しました。作戦はお任せしますね。今回からは召喚出来ますし、ガンガン命令してください?」
「おっ?大丈夫なのか?そういや昨日放課後鉄人に呼び出されてたな。それ関係か?」
「はい。実は自分、召喚獣になってました」
「・・・・・お前はネバーランドの住人だったのか?」

むぅ。嘘じゃないのですが?ま、普通はそんな反応ですよね。

「はっ、そういえば!ゆーさんにお仕置きを・・・・・」
「造、お前は大事なことを見逃しているぞ?」

大事なこと?ゆーさんの3時間正座説教コース以外にありましたか?

「今日の午前中のテストの監督なんだが、まぁ黒板を見てみろ」
「黒板？・・・・・・なん・・・だと・・・？」

一時間目　数学：船越先生
二時間目　現社：高橋先生
三時間目　英語Ｒ：遠藤先生
四時間目　現国：※寺井先生不在の為、代理養護の日高先生

詰んだっ？何この四面楚歌！？狙い澄ましていますよね！？なんで日高先生も！？
これはあれですか？昨日の放送が原因じゃないことを祈りますよ！？

「ゆーさん！覚えてなさいっ！？」
「一時間目が始める前には戻ってこいよ、造」

とりあえず、今大事なことは廊下を疾駆して言い訳を考えることですかね・・・・・・

１６時間目　月野造の身体を生贄に～俺、召喚～（後書き）

はい、１６話でした。このままのペースだとＡクラス戦までには３０話くらいまで行きそうで怖い・・・

前回書き忘れていましたが、養護の教師がオリキャラ?みたく出ています
一応また後の方で説明すると思いますが、ちょこちょこ話に出てくると思います

何気に重要かも?どんなキャラにするか具体的に決めてませんが・・・

とりあえず、今回もありがとうございました

１７時間目　地獄の食材～歩く劇物錬成師～（前書き）

毎度のことなのですが前書き考えたりサブタイ考えるのメンドクサイ・・・・・・・

とりあえずは１７話目、地獄のお弁当編です（違）

17時間目　地獄の食材～歩く劇物錬成師～

「うあー・・・・・・・づかれだ！」
「右に同じー」

何とか迫りくる先生方を説得し、午前のテスト、四教科分も終了しました。
ま、自分的にはテストより先生方を説得する事の方が疲れましたが・・・・・・

「うむ。疲れたのう」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」
「胃もたれしませんか、それ？午後に支障がないようにしてくださいね」
「ホントだよ雄二。てなわけで僕に分けてくれてもいいよね？」

よくもまぁ、入りますね。考えただけで胸やけしそうですよ？
それとアキさん、また昼抜きですか？

「残念だが明久、これくらい余裕だ。造、お前はもっと食べないと大きくならんぞー」
「雄二のケチ！それに造はこのままが一番可愛いんじゃないか？」
「二人ともいい根性してますね・・・？いつか追い抜いてやります

から覚悟なさい？」

この二人ときたら言いたい放題ですね。学園長といいレベルですよ全く。

「あ、あの。皆さん・・・・」

「お昼のことなんだけどね・・・・」

おや？女子二人が何やら言いたげですね？どしたんですか？

「うん？あ、姫路さんと美波も一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと・・・・・お、お昼なんですけどね」

「ウチらその、昨日の約束の・・・・・」

「昨日の約束・・・・？なんだっけ？」

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はいっ。そうです！」

「迷惑じゃなかったら・・・・・どうかなアキ？」

そうでした、そうでした。アキさんよかったじゃないですか？

「迷惑なもんか！ね、みんな！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「今日はお弁当持ってきていないので助かります」

「そうですか？良かったぁ～」

「瑞希と分担して作ったのよ？感謝しなさいよ？」

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」

「そうだね」

教室はちょっと食べるのには適していませんからね。
無理でしょうが一度学園長に環境改善を訴えてみますかね？

「それでは先に行っててください。ちょっと飲み物を買ってきます」
「まて造、俺も行く。昨日頑張ってくれた例も兼ねて全員に奢りだ」
「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？瑞希は悪いけど用意してて」
「わかりました。美波ちゃんよろしくお願いします」

いい具合に分かれましたね。人数的にちょうどいいでしょう。

「悪いな。それじゃ行くぞ造、島田」
「はいです」
「おっけー」
「明久！きちんと俺達の分を取っておけよ」
「大丈夫だってば。あんまり遅いとわからないけどね」
「そう遅くならないはずだ。じゃ、行ってくる」

さて、一階の売店に行きましょう。お弁当がなくならないうちにね？

「ところで島田さん？いつの間にやらアキさんと名前で呼び合ってますね？」
「っ！？何のこと！？

「惚けるな島田。さっきお前と明久が呼び合ってただろうが？」
「そういえばそうだったわね・・・・・・」
「突然じゃないですか？きっかけでもありましたか？言えないならもう聞きませんが」
「ま、無理に聞きたいわけじゃないしな」
「うぅ、だって！・・・・・・負けられないもの」
？　何にですかね？

「ウチはね？瑞希とライバルなの。でもウチは瑞希みたいに女の子らしさがないし・・・勉強もスタイルも瑞希に負けているもの。だからせめて、気持ちの面だけでも勝ちたいの！」

かなり強めに宣言されました
・・・・・えっとこれはアキさんのことが大切だって意味なんです・・・よね？恋愛感情は難しくてわかりませんが島田さんもその、アキさんのことが好きなんですか？

「なんて、随分女々しい理由よね？ウチらしくないかな・・・」
「そうですか？いいじゃないですか。素直に気持ちを言えることは」
ですがそれは、アキさんに言ってあげて下さいね？

「アキさんからしてみれば、島田さんのこともえらく大事にしてると思いますよ？」
「・・・・・・なっ！？」
「あのバカ、姫路とお前のために試召戦争を提案したからな。島田の努力が認められていないのはおかしいとよ」

「／／／／／／」

おお、赤い赤い。

「ま、明久は超鈍感だからな。島田はとりあえずもう少し素直になりな」

「気遣いどうも・・・・・・それと月野！」

「はい？」

「ウチが名前を呼ぶようになったのはある意味アンタのおかげよ」

「？？？」

「アンタと木下にも負けないわよ？女の子としてね！！」

「両方男です！ギャグですよね？この空気を終わらせるギャグですよね？」

折角の空気が台無しですよ！？ま、いいですがね？

さて、だいぶ時間経ちましたし早く屋上に行きますか？

もう食べている頃でしょうしね。

「アキさん？ここはどこでしょう？」

「地獄の一丁目じゃないかな・・・・・・」

いいえ？本来ここは平和な文月学園の屋上だったはずです。広がる青空が心なしか自分を落ち着かせてくれる憩いの場ですよね？

「木下くん?これから何が始まるのでしょう?」
「ワシらの処刑じゃろうか・・・・・・」

いいえ?今は楽しいお昼ご飯の時間だったはずです。誰もが待ち望む昼時ですよね?

「皆さん、遠慮なさらずどんどん食べてくださいね♪」
「「「・・・・・・・・・・・・」」」

純粋に怖いです。姫路さんのいつもの笑顔が何よりも怖いです。

屋上へ行くと土屋くんが天に召されていました。
アキさんと木下くんはガタガタと震えながら縮こまっています。

それを華麗にスルーした島田さんとゆーさんがお弁当をほんの少しつまんだだけであら不思議!!
島田さんは悲鳴を上げて気を失い、ゆーさんは白目を剥いて泡を吹いて倒れてしまいました!?

「(どうしてこんなことに?姫路さんの持っているアレは何ですか?)」
「(多分姫路さんの手作り弁当が原因・・・・僕と秀吉は美波の作ったものを食べてセーフだったし)」
「(雄二と島田の反応を見るにアレは本物じゃ・・・・食べる決意が揺らいだわい)」

「（美波だけでも逃がしたかったのにっ！何てことだ）」

そんなバカな？一体どうすれば弁当一つでこんなこと出来るのですか！？

ゆーさんは卵焼き一個。島田さんに至っては黒豆の余り一粒をつまんだだけですよ？

「あの・・・？皆さん、食べないんですか？デザートもありますよ？」

やめて！そんな目で自分らを見ないで！？

・・・・これは覚悟を決めるしかないですかね

おっとその前に、

「姫路さん？申し訳ありません、ちょっと体調が優れないので養護の日高先生を呼んでもらえませんか？月野が『何も言わずに全員を助けてくれたらいつかお礼をします』って言っていたと言えば分ると思います」

保険をかけておきましょうね。これで日高先生には捕まりますが・・・

「だっ、大丈夫ですか！？すぐ呼んできますね」

「えぇ、少し姫路さんのお弁当をいただいたら横になっておきます。頼みましたよ？」

これで、姫路さんは気に病む必要がありませんね。

「造、僕も逝くよ。生きてたらまた会おう」

「お主らっ！？ならワシも！！」

「ダメだ!秀吉はここであったことを後世に伝えるんだ・・・頼んだよ」
「では、逝きますか。木下くんあとはまかせました・・・」

せーの、パクッ　モグッ　ジュッ　・・・・・・・・・
あっ、こりゃヤバいわ・・・

駆け付けた日高先生曰く、皆が死屍累々で魂が抜け出かけていたそうです。
特に自分とアキさんは本当に三途の川まで逝きかけていたとのこと。
弁当こわい・・・・

17時間目　地獄の食材～歩く劇物錬成師～（後書き）

話の都合上、美波にも食べさせることになりました。美波好きな人ゴメンね☆

てか、あそこまで美波が積極的になればツンデレのツンないよ！デレだけだよ！？
ツンデレスキーな方すみませんでした

18時間目　怖いもの～我を忘れた高橋先生～

「そういえば、坂本、次の目標だけど」
「ん？試召戦争のか？」
「うん」

何とか現世へと戻ってこれた自分たちは、木下くんが涙ぐみながら用意してくれたお茶をすすりながら今後の作戦を立てています。お茶は良いです。やっぱり生き返りますね・・・・・・

「相手はBクラスなの？」
「ああ。そうだ」
「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」
「正直に言おう。どんな作戦でも、ウチの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

おや？ゆーさんの性格上、降伏宣言は言わないと思っていましたが。まぁ、確かに今のAクラスがどんなかはわかりませんが上位成績者が相手では、多少の奇襲などではまるで話にならないでしょうね。

しかも試召戦争はクラスの代表を討ち取らなければ勝利したことになりません。代表はクラスの最高成績者がなるため、その代表を討ち取ることが非常に難しいんですよ。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」
「いいや、そんなことはない。Aクラスを必ずやる」

「雄二、さっきといってることが違うじゃないか」
「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」
一騎打ちですか・・・大丈夫でしょうか？
「とりあえず一騎打ちに関してはまたＡクラス戦の時に話を聞くとして、どうやるんですか？」
「Ｂクラスをやったら、設備の入れ替えない代わりにＡクラスに攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらＦクラスだが、Ａクラスに負けるだけならＣクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」
「ふんふん。それで？」
「それをネタにＡクラスと交渉する。『Ｂクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」
「なるほどね！」
結構腹黒いですね。ですが嫌いじゃありませんよ？
「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Ａクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争のほうが確実であるのは確かじゃからな。それに――」
「それに？」
「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路とおそらく月野がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」
自分は頭数に入れなくていいですよ？ですが確かに気になりますね。できれば早めに現在のＡクラスの成績データが分かればいいのです

が・・・・・・

「その辺に関しては考えがある。だから心配するな。とにかく今はBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」
「そうですね。今はBクラス戦に集中しましょう」

Bクラス戦はDクラス戦よりハードになるでしょうからね。気を引き締めませんと

「でだ、明久。それと造」
「ん？なにさ？」
「宣戦布告でしょうか？」
「おう、今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」
「わかりました、アキさん？いいですか？」
「ん、りょーかい」
「・・・・・明久、お前が素直に俺の言うことを聞くなんてどうかしたのか？」

ゆーさんの中のアキさんはどんな人なんでしょうね。

「だって誰かが行かないと終わんないし、なにより造がやる気満々だもん」
「・・・・・また頼むぞ」
「わかってるって」

二人して何話してるんですか？よくわかりませんね。
ま、いつものことでしょうか。

その日は何事もなく宣戦布告は終わりました。
（アキさんは例のごとく何故かボロボロですが？）

さて、今日も午前中がテストで、ようやく全教科終わりです。
お昼ごはん（姫路さんのお弁当じゃないですよ？）を食べた後ゆーさんが皆さんの前に立っています。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立ったゆーさんが机に手を置いて皆の方を向いています。
様になってますね。Dクラスを落したことにより、クラス内での株も上昇してますし。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『『『『おおーっ！』』』』

一向に下がらないモチベーション。これは恐らく他のクラスにはないFクラスの最高の武器でしょう。

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『『『『おおーっ！』』』』

「そこで、前線部隊は姫路・月野に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

『『『『うおおーっ！』』』』

姫路さんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしています。

なんせ、校内二位の強さを誇る姫路さんです。廊下はまず制圧できるでしょう。

自分は召喚獣として戦うデビュー戦ですから、きっちりやりますよ！

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響きＢクラス戦開始です。

「よし、いって来い！目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！』』』

今回の作戦の鍵となるのは勢いです。とにかく全力でＢクラスへと向かう廊下を目指します。

「姫路さん、自分とアキさんが先に行って部隊の指揮と戦闘を行っています。後から全部やっちゃってください」

「は、はいっ！お願いします」
「行くよっ、造」

とりあえず、姫路さんが来るまで暴れましょう。
アキさんもフォローしてくれるらしいですし、頼もしいですね。

「いたぞ、Ｂクラスだ！」
「高橋先生を連れて居るぞ！」

あう、高橋先生ですか・・・まっ、まあ試召戦争中ですし何も問題ありませんよね？
・・・・・果てしなく不安ですが

≪Ｂクラス　野中長男　総合　１９４３点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　近藤吉宗　総合　７６４点≫

やはり力の差はありますね。覚悟していかないとやられますよ？

≪Ｂクラス　金田一祐子　数学　１５９点≫　≪Ｂクラス　里井真由子　物理　１５２点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　武藤啓太　数学　６９点≫　≪Ｆクラス　君島博　物理　７７点≫

あらら、これは思っていた以上に甘くはないですね。
第一陣はことごとくやられていくようです。自分が突破口を開きましょう！

「援護します！おりゃあああああああああ」
「造！？何その叫び声？」

叫んだ意味はありません。とりあえず高橋先生が形成している総合フィールドに足を踏み入れます。

ポンッ

《さあ、Ｆクラス月野造があなたたちをやっつけますよ！かかってきなさい》

「「「「「えっ？」」」」」

《ですから、Ｆクラス月野造が総合教科で勝負します！》

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

反応がありませんね、普通はこんなもんですか？アキさんたちまで驚いてますし。

「・・・・・造うううううううううううううう！？」
アキさん、ナイス反応。

「「「「造ちゃんが召喚獣に！？」」」」
はい、そこのＦクラス男子共。ちゃん付けしないでください。

「何あの子！人間じゃないの？」

「見た目通り魔女なの！？」
「召喚獣がしゃべったぞ？」
「キャアアアアアシャベッタアアアアアアアア」
Ｂクラスの皆さん人間ですよ？自分。後それを言うなら魔女じゃなくて魔法使いです。

皆さん大変混乱していますね。いいですよ、それならそれで。今のうちにやっつけますから。

《切り裂かれなさい！風の刃によってね！》
厨二っぽいですか？いいじゃないですか、言ってみたかっただけですし

自分のこの箒、点数を3～5点使って風を起こせることは以前話しましたが、３０点近く使えば立派な飛び道具になります。思いつかなかったので風の刃ってよんでますが。
相変わらず、接近戦はほとんどダメージは与えられませんがね。

≪Ｆクラス　月野造　総合　３６０１点≫
ＶＳ
≪Ｂクラス　３人　総合（平均）２０１４点≫

ザンッ！

「「「あっ！？」」」

とりあえず放心している三人撃破！そろそろ皆さん正気に戻って戦ってくださいよ？

《皆さん、今です！敵を討ちとりましょ「造くうううううん！？」
うぎゃあああああ？》

苦しっ・・・この声・・・は、

《高橋せん・・・せぃ、苦しいです離して？》

「嫌です、もう二度と離しません！」

いや、死んじゃう・・・・・自分はぬいぐるみではありませんよ！？
それにどうして召喚獣となった自分より力が強いのですか！解けません！？

とりあえず他の先生方が自分を解放してくださり、試召戦争は再開しました。
高橋先生は西村先生が戦死者と一緒に連れて行きましたとさ。

こわいこわい・・・・

18時間目　怖いもの～我を忘れた高橋先生～（後書き）

やっとこさ18話終了。地味に長くなっていてすみません。

読んでくださっている方々、本当にありがとうございます
昨日今さら知ったのですが、これって携帯からでも見れるんですね・・・

携帯で読んでいらっしゃる方は多分読みにくいですよね、もう少し読みやすいような努力をしてみたいと思います

次回くらいでようやく原作一巻の折り返し地点くらいになるはずです（多分）
長々とすみませんね。ありがとうございました

１９時間目　木下くん→ヒデさん～アキさん爆発しろ☆～（前書き）

今回もちょこっと原作と違ったとこがあります

１９話ですか・・・まだまだ先が思いやられます・・・

とりあえずどうぞ

19時間目　木下くん→ヒデさん～アキさん爆発しろ☆～

あれからやってきた姫路さん（もちろん自分の姿には驚いていましたが）の活躍で、さらにFクラスの士気が上がり、相手の前衛交代も時間の問題になってきました。

「明久、それに月野よ。ここは姫路たちにまかせて、ワシらは教室に戻るぞ」
「ん？なんで？」
「まだ補給は必要ありませんよ？」

戦況を眺めていた自分とアキさんのところに、木下くんがやってきます。まさか本陣で何かあったのでしょうか？

「Bクラスの代表じゃが・・・・・・あの、根本らしい」
「ネモト？どなたですか？」
「もしかして、卑怯で名が通っているあの根本恭二？」
「うむ」

二人の話を聞くに、どうやら相当評判が悪いようです。用心に越したことはありませんね。

「雄二に何かあるとは思えんが、念のためじゃ」
「わかったよ。行こう秀吉、造！」

「これは・・・・・・」
「酷いね。これじゃ補給がままならない」
「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」
穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴムがそこにはありました。

「悲しいです、こんなことまでやるなんて」
「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」
ゆーさんたちも戻ってきましたね。

「ゆーさん！無事でしたか！ところで一体どこへ？」
「協定を結びたいという申し出があってな。調印のために、教室を空にしていた」
「協定じゃと？」
「ああ。四時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するってな」
「それ、承諾したの？」
「そうだ」
なるほど、確かに姫路さんは爆発力はある分、持久戦になれば彼女

の体力的に辛くなります。

「だけど変じゃない？単純に嫌がらせをするためだけに協定なんて普通結ぶ？」

「そうじゃの、相手は根本じゃ。あやつはそんな甘い男ではない」

木下くんたちにここまで言わせるなんて、よっぽど嫌われていますね？まぁ、ゆーさんがそのことを考えずに協定を結ぶとは思えませんが、油断ならないですね。

「お前らは戻れ。俺はシャープや消しゴムの手配をしておく」

「了解です。何か裏がありそうですし、ゆーさんも気をつけて」

「うん、油断ならないみたいだからね。頼むよ雄二！」

さて本隊に戻った自分たちですが、またまたトラブル発生のようです。

「美波が人質！？」

「ああ、相手は後二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

・・・・・どこまでやるのですかＢクラス。流石に怒りますよ？

どうやら島田さん及びその召喚獣がつかまっている模様。

Fクラスとしては貴重な女子を守りたいらしく、迂闊に動けないようです。

聞くに、島田さんはアキさんが怪我をしたという偽情報を掴ませられたらしく、アキさんは結構頭に血が上っているようです。これは黙っちゃいられませんね。

倒すべき召喚獣は二体。廊下側を背に島田さんを人質に取っています。

あの背後をとることができれば何とかなりそうですね。

「どうしよう・・・奇襲をかけて美波を助けられたらいいんだけど」

「じゃが一歩でも近づけば島田はやられてしまうじゃろ？」

「奇襲ですか・・・そうですね。要はあの二人の気を引きつつ二体の召喚獣を倒せばいいんですよね？」

「何じゃできるのか？月野よ？」

「少々無茶ではありますが・・・・・・アキさん手伝ってください。木下くんもお願いします」

Bクラスの方が手段を選ばないなら、自分たちだって手段を選びませんよ？

覚悟してくださいね☆

「お主ら！それでも上位クラスの人間のやることか？」

「秀吉の言うとおりだ！卑怯だぞBクラスっ」

「男なら正々堂々勝負しろ！！」

Fクラスの面々がBクラスの二人に抗議しています。

「これも作戦の内なんだよ」
「この召喚獣に止めを刺せば、こいつは補習室送りにされるぞ？」
「くっ、アンタたち！ウチはいいからさっさとこの二人を倒して！攻めきれずに終わったらＡクラスどころじゃなくなるわよ！？」
「うるさい！黙ってろ！」
どうでもいいですがなんか一昔前の映画を見ている感じですね。こういう悪役いますよね～

「どう足掻こうが、お前らは近づくことは《出来ますがね？》できな・・・？」
「えっ？どこから声が！？」

パリィィィィイン

そんな音に次いで、二体の召喚獣が一枚のガラスを割り侵入してきます。

「「何っ！？」」

「くらえっ！」
《せいっ！》

あっという間に二体を片づけ島田さんを解放します。相手も疲労してましたから箒で倒せちゃいました♪
なんとか上手くいきましたね・・・・・？

作戦はいたって単純。木下君たちがあの二人の注意を引きつけている間に窓の外から空を飛んでアキさんの召喚獣と二人（二体？）であの二人の背後の窓を割り、意表をついたところでそのまま召喚獣を叩く寸法です。単純ですが、窓を割るアキさんの召喚獣と自分の飛行能力持ちの能力がなければできない離れ業です。

飛行能力は腕輪の力ですが、たまたま張られていたのが現国で窓の外までフィールドが展開されててよかったですよ。それにしても空を飛ぶのは面白い感覚でした。貴重な体験ですね。

さて島田さんは大丈夫でしょうか？

「アキいいいいいぃぃぃっ！助けてくれてありがとうっ！」

「み、みなみ！？」

ワオ、おもいっきり抱きついてますね・・・・自分たちのこと忘れてませんか島田さん？

「ウチ、ホントは補習室なんて行きたくなかったの！ありがとアキ！！」

「そ、そう？あの、怪我とかしてない？窓ガラス割っちゃったし・・・」

「平気よ！ホントありがとう！」

別にいいですが、一応自分も救出劇に参加したのですがね？何でし

ょう、この疎外感・・・・・
木下くんも自分も置いてきぼりですよ？

「・・・木下くん、先に行きましょうか。そろそろ協定通りだと休戦でしょうし」
「・・・うむ、馬に蹴られたくないしの。お主も大変じゃったな」
「・・・いいえ、ありがとうございます。木下くんのことこれからヒデさんって呼んでいいですか？」
「・・・うむ、月野のこともこれから造と呼ぶぞ。改めてよろしくな、造」
「・・・こちらこそ、よろしくです。ヒデさん」

何故か疎外感から、木下くん、いえヒデさんとの友情が深まりました。
あ～そこの男女？ちゃんと戻ってきてくださいね？現実に。
この扱いの差はひどいです・・・・・

四時を過ぎて協定どおり今日は休戦となりました。今とりあえずヒデさんと教室に戻ってきています。
アキさんですか？・・・・・まだ戻ってきてませんね。おそらく現実からも

「ゆーさん、戦況は？」
「一応計画通り教室前に攻め込んだ」
「ほう、順調にいっておるようじゃの」

「だが、こちらの被害も少なくはないがな」

確かに廊下戦は圧勝のようにも見えますが全戦力を投入した結果であり、全体の被害は良い状態とは言えませんね。

そうこうしているうちに、アキさんと島田さんが帰ってきました。

あらら、真っ赤ですね二人とも。

姫路さん？頬をふくらかして怒らないでください、多分逆効果ですよ？

「・・・・・・・・・・・・（トントン）」

「ん？　ムッツリーニ。何か変わった事があったか？」

気づけば土屋くんも戻ってきてます。彼は今回戦闘には参加せず情報収集およびＢクラスの動きを探っているとのことです。彼は情報に長け、文月学園の裏事情にも精通してるとかなんとか？

・・・・・凄い人ですね。

「Ｃクラスが、試召戦争の準備を？」

「・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

「漁夫の利を狙うつもりか？いやらしい連中だぜ」

「ですが、戦争ですからね。こんなことも多々あるでしょう？」

「まあな。Ｃクラスと協定でも結ぶか。Ｄクラス使って攻め込ませるぞなんて言えば大丈夫だろう」

ですね。自分たちが勝つと思ってないでしょうからＣクラスと協定を結ぶのは容易そうです。

「秀吉、お前は残っておいてくれ」
「ん？なぜじゃ？」
「保険は掛けておきたい。Ｂクラスがまた教室に来るかもしれんし、後々お前の力を借りることになるかもしれない」
「よくわからんが了解じゃ。Ｃクラスとの協定をまかせたぞい」

さて、上手くいくといいのですが・・・・・・

１９時間目　木下くん→ヒデさん～アキさん爆発しろ☆～（後書き）

今回も変更しまくりました。大丈夫だよね・・・・・・？

てかオリジナル設定ですが、わかりにくくてすみません
これでもわかりやすいように変更しまくったのですが・・・

話変わりますが、よくよく考えると明久って勝ち組ですよね？
ちょっとだけ女難ですが。羨ましくないですよ？くすん

てかこれで一巻の半分くらいですよね。もっと圧縮すべきかも・・・

長々すみません。また次回・・・の前に、多分次はバカテストを入れます
１９話でした。皆さん読んでくれてありがとうございます

バカテスト集その？（前書き）

はい、今回は予告通りバカテスト集です
作者はギャグのセンスはいまいちなので期待しないでください

ではバカテスト集その？　よろしくお願いします

バカテスト集その？

４問目　数学）
問　以下の問いに答えなさい

『（１）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を見たし、かつ第一象限に存在するＸの値を一つ答えなさい。
（２）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）を等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい。
？ｓｉｎＡ＋ｃｏｎＢ　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ
？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ』

姫路瑞希の答え
『（１）Ｘ＝π／６
（２）？　』

教師のコメント
そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え
『（１）Ｘ＝およそ３』

教師のコメント
およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
『（2）およそ？』

教師のコメント
先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

月野造の答え
『（1）X＝π／6
（2）？　』

船越先生のコメント
正解です。では今日の放課後補習しましょう。

月野造の返答
合ってますよね？正解ですよね！？補習いらないじゃないですか！！？

５問目　物理）
問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（　）である』

姫路瑞希・月野造の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

木下秀吉の答え
『道』

教師のコメント
詩人のようですね。

６問目　化学）
問　以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え
『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント
少し簡単すぎましたかね。

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント
君は科学を舐めていませんか。

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

月野造の答え
『ｂｅｎｚｅｎｅ』

教師のコメント

誰が英名を書けと言いましたか？しかもちゃんと綴りが合っているのが腹立たしいです。

7問目　英語）

問　以下の問いに答えなさい。

『ｇｏｏｄ及びｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ｇｏｏｄ－ｂｅｔｔｅｒ－ｂｅｓｔ
ｂａｄ－ｗｏｒｓｅ－ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『ｇｏｏｄ－ｇｏｏｄｅｒ－ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾にｅｒやｅｓｔをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『ｂａｄ　－　ｂｕｓｔｔｅｒ　－　ｂｕｓｔ』

教師のコメント
『悪い』　『乳製品』　『おっぱい』

月野造の答え
『ｇｏｏｄ　－　ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ　－　ｖｅｒｙ　ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ
ｂａｄ　－　ｖｅｒｙ　ｂａｄ　－　ｖｅｒｙ　ｖｅｒｙ　ｂａｄ』

遠藤先生のコメント
私はとっても嬉しいです。造くんが夜まで私と一緒に補習を受けてくれるなんて♪

月野造の返答
補習は確定ですか！？夜までってどんだけ自分ダメな子なんですか！？

バカテスト集その？（後書き）

毎回明久たちはこちらが考える一歩も二歩も上の解答をしてきますね
ある意味本当に天才かも・・・・・・

あっそうだ、バカテスト集だけじゃあれなので、今日中には２０話
を更新したいと思います

読んでくれた方、ありがとうございます

２０時間目　見た目は小学生～某探偵さんではありませんが～（前書き）

連投ですみません。２０話です
読んでくださってくれる方が増えてきて感謝感激です

２０時間目　見た目は小学生～某探偵さんではありませんが～

教室にヒデさんと数人を残してＣクラスへとやってきました。

「Ｆクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は居るか？」

「私だけど、何か用かしら？」

扉をあけると同時に、名乗りを上げたゆーさんに応えたのは、１人の女子生徒です。

・・・・・？あれ、ここＣクラスですよね？何か違和感が

「ああ、Ｆクラス代表とし「（ゆーさん！大変です！）」て？」

まずいですね。やっと違和感の正体に気付きました。

「（造？）あ、ちょち待ってくれ。（何かあったのか？）」

「（Ｃクラスの方々に混ざって、Ｂクラスの生徒さんが五、六人います）」

「（・・・・・わかった、助かったぜ）」

「何なの？代表として何か用？こそこそ何を言ってる訳？」

「すまんすまん、待たせたな。俺たち今挨拶に来てるんだ」

「・・・・・挨拶？」

「すみません、Ｃクラス代表さん。本当なら初日に挨拶するべきだったんですが、うちの代表が初日から試召戦争を始めちゃって♪」

「失念していたぜ、なんせ試召戦争のことしか頭になかったからな。

今後ともよろしく、Cクラス代表？」
「・・・・・ありがとう。小山友香です、よろしくね」

Bクラスの皆さんが慌てていますね。大方協定違反を盾にゆーさんを討とうとしていたのでしょう。ギリギリで気づいて本当によかったです。
まさかCクラスがBクラスに協力しているなんて・・・・・油断も隙もありませんね。

「それじゃあ、俺たちもう行くな？これから他のクラスにも回らんといけないし」
「（チッ）ええ、じゃあねFクラス」
「ではでは、失礼しました。行きましょう、皆さん？」

何がどうなっているのかわからないアキさんたちが、余計なことを言う前に一旦教室に戻り作戦を立て直しましょう。危ない危ない。

「失敗ね？どうやら気が付いていたみたいよ？これからどうするの恭二？」
「ふん、まあいい。どの道Fクラスの姫路は明日は動けない。俺の作戦は完璧だ」
「そ、まあ頑張りなさいな？」

「・・・・・・・・・・・根本と小山は恋人関係」
「そうだったのか、助かったぜ造。お前よく気がついたな、Cクラスに
Bクラスが混じっているって」
「一応、一度見た人の顔と名前は忘れません。唯一の特技なんです♪」

やれやれ、まさかこんなことに役に立つとは・・・・・・

「なるほどね。にしてもこれからどうするのさ?雄二?」
「ああ、こうなればCクラスもうちの敵だ。Bクラスに勝ったとしてもCクラスとの連戦となる」
「流石にきつくない?今のウチらの戦力じゃ?」
「そうじゃな・・・・・・」
「心配するな。向こうが手段を選ばないなら、こっちにだって考えはある」
「考えですか?」
「ああ。明日の朝実行する。目には目を、だ」

すっごく悪い顔してますね。こりゃB・Cクラスの皆さんご愁傷様です。
ゆーさん殴られたら、3倍にして返す人みたいですし・・・・・・

「ところで造?話が変わって悪いが、お前一体何者なんだ?」
「そうだった!造さっき、召喚獣になったよね!?」

おっと説明してませんでした。皆さん興味深々で尋ねてきますね。
ちょっと恥ずかしいですねこれ。

「ん～、ちょっとした体質？なんですよ。召喚フィールドがある限り召喚獣になってしまうだけです」
「マテ。体質で済ますな」
「それえらく大変なことだと思うよ？」

皆さん、苦笑いしてます。慣れるとどうってことないんですがね？

「自分も原因はわかりません。ま、何とかなるでしょう？」
「「「「「・・・・・・（どんな神経しているんだろう）」」」」」

あの皆さん？何やら失礼なこと考えてませんか？
まあ今日はその辺で解散になりました。明日は見てなさいＢ、Ｃクラス！

さぁ、暇になりました。大人しく帰るのは嫌ですし、もうしばらく学園に残りますか？
いや、外をうろうろするのもいいでしょうかね？

「さて、今日はどうしましょう」
「何じゃ造。今日は先生に呼び出されてはおらぬのか？」
「はいです。呼び出されるときは大抵召喚獣がらみですからね。ま、今日は適当にブラブラしてから帰りますよ？ヒデさんは・・・・・・なるほど演劇ですね？」

「うむ、それじゃあ造。また明日じゃ！」
「ええ、部活頑張ってくださいね！」

しばらく校内をうろうろしましたが、これと言って何かあるわけでもないですか・・・
先生方も職員会議でいませんし、仕方ないです。今日は街に繰り出しましょうか。
そんなことを考えながらＡクラスの前を通っていると・・・・・・

ガラッ

「あれ！？ヒデさ・・・・・・ん？」
「ん？何かアタシに用？誰かしらあなた？」

ひ、ヒデさんにそっくり！？な方がＡクラスから出てきました。
そう言えば双子のお姉さんがいらっしゃると聞いてます。彼女がですかね？

「すみません、木下優子さんですよね？ヒデさ・・・いえ、木下くんのお姉さんの。自分は月野造って言います。弟さんと同じクラスで仲良くしてもらっています」
「ふーん、ええそうよ。アタシは木下優子。よろしくね」
「よろしくです。よく似てましたから驚きましたよ。すみません」
「いいわよ、よく言われるし。・・・・・それにしても月野君だ

っけ？あなたが噂の？」

噂？何でしょう。こんな時の噂は悪い噂であると、相場は決まっています。

「あのぅ、どんな噂ですか？どう考えても嫌な予感しかしませんよ？」

「うちの担任を落したショタっ子」

「泣いていいですよね！落してませんし、一応自分は2年の皆さんより年上ですよ！？」

「あー、見た目がソレだと説得力がね・・・・・・」

「うなーっ！！」

ひどいです、気にしてますのに！凹み度が１００くらい上がりました。ｏｒｚ

「確かに可愛いわね（うふふ。あなた面白い子ね）」

「・・・・・あの、本音と建前が逆になっていません？」

「あらごめんなさい。それで？Ａクラスに何か用かしら？高橋先生なら職員会議中よ？」

「いえ、ただ少し暇を持て余していただけです」

「なるほどね、それでうろうろしていたらここに辿り着いたってことかしら？」

「流石ですね。参りました」

かなり頭の回転が早い方です。喋りやすくて助かります。

「それで？どうするの？帰るつもりかしら？」
「あ、はい。街に繰り出すつもりではありますが・・・・・」
「そ？帰りは気をつけなさいよね？お姉さんが家まで送ってあげようか？」
「だから年上ですって！本当にもう！」
「冗談よ、半分は。楽しかったわ。またね月野君」
「残りの半分は気になりますが、こちらこそ楽しかったです。でわでわ」

そう言って今度こそ帰りました。
明るい方ですね。自分もあんなお姉さんが欲しかったです。ヒデさんがちょっぴり羨ましいですよ。

・・・・・あれ？お姉さん？何か違うような？

翌日　只今の時刻ＡＭ８：３０

「昨日言っていた作戦を実行する」
「作戦ですか？ひょっとしてＣクラスの？」
「ああ、そして秀吉にコイツを着てもらう」

Ｂクラスとの戦争再開にはまだ早い時間ですね。
教壇に立ち、そう宣言したゆーさんはは文月学園の女子制服を取り出しました。
・・・・・ん？何かスルー出来ないものが？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
「秀吉には木下優子として、Ａクラスの使者を装ってもらう」
「なるほど、彼女に化けてＣクラスに圧力をかけるんだね？」
「ああ。と言う訳で秀吉、用意してくれ」
「う、うむ……」

ゆーさんから制服を受け取り、その場で着替え始めるヒデさん。
って、ダメでしょヒデさん！少しは着替えることにためらってください！

ほら、皆さんもあっけにとられて・・・・・？あれ唖然としているというより、目が釘付けになってませんか？土屋くんは残像が出来るくらいのスピードで写真を撮ってますし。

ちなみにアキさんは現在、姫路さん島田さんペアに目隠しされています。
寧ろ目隠しがいるのは女子二人のような気もしますがね・・・・・・

「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？」
「さあな？」
「ヒデさん、いいんですか？木下さん怒りませんか？」
「これもＦクラスの為じゃ。別に普段の鬱憤を晴らしたいわけではないぞ？」

はい？何のことでしょう？気になりますのでゆーさん＆アキさんに

付いていって、ヒデさんを監視しますか？とりあえず離れたところで様子を見ます。

ヒデさんは深呼吸をし、表情を引き締めてCクラスの扉を開くと、

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

と言いました。・・・・・あれぇ？木下さんあんなこと言うのでしょうか？
自分の知っている木下さんじゃありませんよ？

２０時間目　見た目は小学生～某探偵さんではありませんが～（後書き）

２０話でした。ここで優子さん登場です。
性格違うって?多分あれも地です

優子さんって腐女子で有名ですが確かショタコ・・・ゲフンゲフン
年下には優しいですよね？（リンネ君はアレでしたが）

キャラがどんどん壊れている気がしますが、もうなりふり構わず行きます

てなわけで、また次回お会いできたらうれしいです。ありがとうございました

２１時間目　バカを怒らすな～奴らに常識は通用しない～（前書き）

２１話ですね。何度も言いましたがもう少し話数を減らせたらなと思う反面、どうしても削りきれずにずるずる引っ張ってきてます。

とりあえずは一巻が終わったら一度考えときますね。

では２１話、スタートです

２１時間目　バカを怒らすな～奴らに常識は通用しない～

Ｃクラスに押し入り、ヒデさん（木下優子さんｖｅｒ）がとんでもないことを言い始めました。

『な、なによアンタ！』
『話しかけないで！　豚臭いわ！！』

「あの、自分の知っている木下さんとは違う気が・・・・・・？」
「だよね、さっきからツッコミどころが多すぎてツッコメないけど」
「流石秀吉だな」

あんなこと言われてすっごく怒ってますよ小山さん。

『アンタ、Ａクラスの木下ね？　ちょっと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ！　何の用よ！』
『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』
『なっ！　言うに欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？』

Ｆクラス＝豚小屋ですか？泣いてもいいですよね？

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

最上級の罵倒でCクラスを挑発するヒデさん。本当にどうなっても知りませんよ？

『ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！』

そう言い残し、靴音を立てながらヒデさんはCクラスの教室を出て来ました。

「これで良かったかのう？」
「ああ、ご苦労さん秀吉」
「「・・・・・・」」

どうしてでしょうか？ヒデさんはすっきりしてますが、何故か死相が見えます。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！　Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスから小山さんのヒステリックな声が響き渡ります。割と単純ですか？

「さて、俺たちはBクラス戦の準備を始めるぞ」
「わかったのじゃ！」
「「・・・・・・おー」」

今はそんなことを考えている暇はありませんね。ヒデさんの後のことは後でなんとかするとして、
さぁ、Ｂクラスを討ち取りましょう！

そして迎えた、Ｂクラス戦再開。

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！！」

ヒデさんの指示が飛ぶＢクラス教室攻略戦です。
ゆーさんの指示は、『教室内に敵を閉じ込めろ』ですが、ここでまた異変が起きました。

本来はヒデさんより先に指揮を執る筈の姫路さんが、一向に指示しません。
どうしましたか？それが大きく響かないといいのですが・・・・・・

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！　補給も念入りに行え！」

始まってからゆーさんの指示通り数時間、事は順調に進んでましたが文系の教科に変更されてから徐々に押し戻されています。何でもＢクラスの人たちは文系が多いらしいですからね。
ここは姫路さんに頼るしかないはずなんですが・・・・・・

「あ、そ、そのっ・・・・・・！」

今にも泣きそうな顔でオロオロしている姫路さん。
・・・・・・仕方ありません。

「アキさん！」
「応よっ！造」

古典の召喚フィールドに飛び出し連携でまた押し返します。ついでにアキさんが立会人の竹中先生に何やら耳元で呟くと、竹中先生はどこかへ行ってしまいました。

凄いですね、アキさん。いろんな意味で。さあここは何とか立て直したい所です。
しかし、姫路さん・・・・・・？

「姫路さん、どうかしたの？」
「あきらかに今日は変ですよ？」
「そ、その、なんでもないですっ」

姫路さんはアキさんと同じく嘘をつくことができない人です。一体何があったのですか？
アキさんも必死に聞きますが頑なに話そうとしませんし・・・・・・・

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」
「数学教師はどうした！」
「Ｂクラス内に拉致された模様！」

まずいですね、これ以上文系の教科が増えれば持ちませんよ!?

「わっ、私が行きます」

姫路さんが戦線に参加しようとして、

「あ・・・・・・」

またです。何かに気づくと俯いて動けなくなりました。

彼女の視線の先には・・・・・・

あれは資料で見た根本くんですか?何かを姫路さんに見せていますね?

「(アキさん、あれ根本くんでは?)」

「(えっ?・・・・・・っ!?アイツ!!!)」

アキさんも気が付いたようです。よくわかりませんがあれは姫路さん関係のものですかね。

「・・・・・なるほどね。そういうことか」

「・・・アキさん、あれが何なのか聞きません。

ですが、少なくとも彼はやってはならない禁忌に触れたようですね」

根本くんでしたっけ?自分もやる時はやるんです。

特別観察処分者になったくらいの問題児を貴方は怒らせちゃいましたね?

「造ごめん、あのね・・・・・・」
「言わなくていいです。状況は察しました。行きましょうかね？」
「ありがとう、って造も行くの！？」
「すみません、個人的に今すぐにでもあの人をやっつけたくなりました」
「まったく・・・・・・頼むね」
「もちです」

アキさん一人でもやれそうですが、ここは自分も助太刀しましょう。

「姫路さん」
「は、はい・・・・・・？」
「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」
「・・・・・・はい」
「では自分たちはこれから用がありますのでこれで」
「あ・・・・・・！」

何か言いたげな姫路さんを残し、二人で駆け出します。
これは本当に大事な用事ですから早く済ませましょう。

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「本当ですね、面白すぎて笑えません。それでアキさん？どうするんですか？」

思わずそんな言葉を口にこぼすアキさん。それに続いて

「あの野郎、ブチ殺す」

やってしまいますか？今回ばかりは協力しますよ

「雄二っ！」

「うん？　明久に造か。脱走じゃあるまいな？罰を与えるぞ？」

「話があるんだ」

「・・・・・・とりあえず聞こうか」

戦線から戻ってきた自分たちを見て不思議そうにしているゆーさん。

ここはきちんと説明しましょう。

「個人的に根本くんがすごく腹が立ちます。この戦争で勝利したら彼を自分たちが自由に料理してもいいですか？」

「・・・・・・具体的には？」

「真っ裸と女装どっちがいいですかね？アキさん？」

「前者は女子に悪いし、どっちかと言えば後者じゃない？」

「・・・・・・造がそんなことを言うとは思わなかったぞ！？」

あはは、自分も怒る時は怒るのですよ？

友人を傷つける人には自分だって外道になります。

「ま、それくらいいいか。根本だしな」
「それともう1つ、雄二には理由は言えないけど姫路さんを前線から外してもらえない？」
「理由は言えんか？それはどうしてもか？」
「うん」

アキさんの真剣な顔に、ゆーさんは考え込んでいます。
確かにここで姫路さんが抜ければ、相当痛いです。それこそ根本くんの思う壺でしょう。
ですが、今回は！

「お願いします、ゆーさん！」
「頼むっ、雄二！」
「・・・・・条件がある」
「何でしょう？」
「明久、造、姫路の担う予定だった役割をお前らが果たせ。どうやってもいい。必ず成功させろ」
「もちろん！絶対に成功させる！」

ゆーさんにとって大きな決断でしょうが、よく認めてくださいました。

「良い返事だ。お前らはタイミングを見計らい根本に攻撃をしかけろ」
「皆のフォローは？」
「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ。失敗は許されない」

「かなり難しいですね」
「ああ、言っとくが島田を助けた時のように窓からの侵入は今回は出来ないぞ。フィールドが今回狭いせいで外まで張られていない」
むぅ、それは厳しすぎます。さてどうしますか？
ゆーさんはスッと立ち上がり教室を出ます。

「どこに行くんですか？」
「Dクラスだ。例の指示を出してくる」

Dクラスの教室・・・・・・何かないでしょうか。突破口は

「そうだ、明久。お前はお前だけの秀でた部分がある。俺はだから信頼しているんだ」
「雄二？僕だけの・・・・？」
「うまくやれよ？すまんが造、明久のフォローを頼んだ」

・・・・・どういう意味でしょうか？
ですが、アキさんは何か思いついたようですね。

「アキさん、何か思いつきました？」
「うん！これならなんとかなる」
「そうですか、では自分はアキさんの邪魔にならないよう、Bクラスの他の連中を潰します」
「頼んだ！僕はDクラスに行ってくる。障害があるなら壊せばいいんだ！」

さて、アキさんはどうやるのでしょうかね。ゆーさんだけじゃなくて自分も頼りにしてますからね？

２１時間目　バカを怒らすな～奴らに常識は通用しない～（後書き）

お疲れ様です、２１話でした。読んでくれる方が増えてきて、嬉しい限りです

話変わってなんですが、更新時間が適当ですみません。
自分は書き終えたらすぐにでも投稿したいのですが、パソコン使える時間が限られているので（親に黙ってこっそり投稿してますし）
たまに変な時間に投稿するかもです。

自分用のＰＣ持てたらな～

次回Ｂクラス戦決着?だと思います。読んでいただいた方ありがとうございました

22時間目　学園破壊者アキさん～放課後説教タイム～（前書き）

22話です。お気に入りに入れてくださる方が増えて本当にうれしいです。

そういえば、誤字脱字が確認できた所を直していってます
極力それがないようにしたいのですが、寝ぼけていたりして所々見つかりますね

ではでは、Bクラス戦ラストです。よろしくお願いします

22時間目　学園破壊者アキさん～放課後説教タイム～

「ただいま！ヒデさん。遅くなりましたっ！」
「おお、造よ！待ちくたびれておったぞ」

Bクラスの教室前に再び戻りました。ヒデさんたちはすでに満身創痍のようです。
召喚フィールドは現代国語ですか。文系のBクラスには感謝しないといけませんね？

「皆さん、月野造が戻ってきました！お待たせです！」

「「「おかえりいいいいいいいいいいいい」」」

「全員フィールドから離れてください！全力で行きますから撤き沿いをくらいますよ？」

「「「総員退避っ！！！！」」」

現国フィールドに入り敵を見ます。七人程度ですか、これならやれますね。

≪Fクラス　月野造　現代国語　４７２点　≫

「ちょっと!?何あの点数?」
「化けものか!?」
「姫路さんといい、なんでFクラスに?」

《参ります、吹き飛べえええええええええええ》

自分を中心に一気に風を起こして七人全員の召喚獣を吹き消します。
さながら台風ですかね?これ使うと１００点ぐらい消費しますが知ったことではありませんよ

「こいつ、見かけによらず強いぞ!?」
「だが怯むな!今ので随分点は減った!取り囲んで潰せ!」

「「「月野ちゃんを護れえええええええええ」」」

再び混戦になりました。なりふり構ってられません。点数全て消費しても勝ちますよ!
ゆーさんも途中から合流し、総力戦となっています。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」

この声は根本くんですね。姫路さんを悲しませたこと、アキさんを

怒らせたこと。絶対に許しませんよ。

ドンッ！ドンッ！

「どうした？　軟弱なBクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」

「はァ？　ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

ドドンッ！ドカッ！ドンッドォン！

「そうか？頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「姫路さんは貴方相手では役不足ですからね？自分で十分なんですよ」

「けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんに噂の小学生さんよぉ」

誰が小学生ですか！後、負け犬？本当に誰が負け犬になるのか楽しみですよ。

音がどんどん大きくなってきました・・・・・そろそろ時間ですかね？

「・・・・・さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「心当たりあるんじゃないですか？相当貴方嫌われてますし」

「だな。人望のないお前に対しての嫌がらせだろう」

「けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「体勢を立て直しましょう！　下がりますよ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

今に見てなさい。もう油断して部隊を前にやった貴方に勝機はありません。

頼みましたよ、アキさん？

「だぁぁあぁぁあっっしゃあああああああ！！！」

ドゴォっ！！！！

「ンなっ！？」

盛大な音を立ててアキさんがＤクラスの壁をブチ破り、侵入してきます。これは流石の根本くんも予想出来てませんでしたね？

現在Ｂクラスの戦力の大半は、ゆーさん率いるＦクラス本隊を追って、教室から出払っています。代表の根本くんの防備が薄く意表を突いた今が絶好のチャンスです。

「くたばれ、根本恭二ィーー！」

アキさんが根本くんに向かいます。ですが流石は腐ってもＢクラスの代表、近衛部隊でアキさんを止めます。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

ええ、残念です。本当はアキさんに決めてもらいたかったのですがね。
ですが、本命はアキさんではなく・・・・・・・
ダンっ！　ダンっ！

Ｄクラスが室外機を破壊してくれたおかげでエアコンが停止しし、涼を求める為に開け放たれたＢクラスの窓。

そこから２人の人影が飛び込み、逃げようとした根本くんに立ちはだかるは土屋くんと保健体育の大島先生。
そう、驚くことに屋上からロープを伝って侵入してきた土屋くんたちです。
大島先生はともかく、土屋くんの行動力には舌を巻きますね。

「・・・・・・・・・・・・Ｆクラス、土屋康太」
「き、キサマ・・・・・・・・・！」
「・・・・・・・・・・・・Ｂクラス根本恭二に
「ムッツリィニィーーッ！」

≪Ｆクラス　土屋康太　保健体育　４４１点≫
ＶＳ
≪Ｂクラス　根本恭二　保健体育　２０３点≫

そんな悲鳴がＢクラスに木霊し、土屋くんの召喚獣が根本君の召喚獣を一撃で切り捨て、ここにＢクラス戦を終結させました。

おめでとうございます、根本くん。今日から立派な負け犬さんですよ？

「明久、随分と思い切った行動に出たのう」
「うぅ・・・・・・。痛いよう、痛いよう・・・・・・」

あれからフィードバックで痛がっているアキさんを手当てしながらBクラスにいつものメンバーが集合しました。

「全く、全てのダメージが返ってくるわけではないとはいえ、コンクリートの壁を壊すとは恐れ入りましたよ」
「なんとも・・・・・・お主らしい作戦じゃったな」
「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」
「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる、すばらしい作戦じゃな」
「・・・・・遠まわしに馬鹿って言ってない？」
「ま、そこまでは思ってませんが。骨に異常がないようでよかったです。無理し過ぎると不安にさせちゃいますよ？誰かさんたちにね？」

何やら不服そうですが、アキさんはよくやってくれました。

「ま、それが明久の強みだからな」

ゆーさんがバンバンと肩を叩きながらアキさんに言います。
それ結局馬鹿が強みってことになりますよ？

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」
「・・・・・・・」

おやおや床に座り込んでいる根本くん。さっきまでの威勢はどうしましたかね？

「本来なら設備を受け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんなゆーさんの言葉に周りの連中がざわつき始めます。無理もないですね。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達も目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」
「うむ。確かに」
「ここまでは通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

この言葉にクラスの皆さんは納得したようです。ゆーさんの性格を理解し始めたみたいですね？

「・・・・・・条件はなんだ」

力なく根本くんが問います。あれだけの大口を叩いたんですから、当然でしょうか？

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

厳しい一言ですが、アキさんたちに聞く分にはそれくらいの人物のようですね。

本人もそれは認めているようです。

「そこで、お前らＢクラスに特別チャンスだ」

さてそろそろ出番でしょうか？

「Ａクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・・・それだけでいいのか？」

いえいえ♪すみませんが貴方はやりすぎたんです。痛い目を見てまらいましょう。

「ああ。Ｂクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら

見逃そう」

ジャン！っと文月学園、公式制服が出されました。女子のね♪流石の根本くんも青ざめていますね

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・・・！」

『Ｂクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

どうやら仲間は誰もいないようです。自分のクラスでしょうに・・・・

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう？」

一瞬で根本くんを裏切って腹部に拳を打ち込んだＢクラスの生徒さん。ゆーさんも流石に引いてますね・・・・・・

「では、着付けに移るとするか。明久・造。まかせたぞ」

「了解っ」

「イエッサ」

それにしても難しいですね、着替えさせるのは。

自分が着替えさせられることはあっても他人を着替えさせることなんてありませんし・・・・・・

「うーん・・・・・。これ、どうするんだろう？」
「何気に難しいですよね。あらら？どこを通すんでしょうこれ？」
「私がやってあげるよ」

困っているとＢクラスの女子が自分たちに話しかけてくれました。

「そう？悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」
「すみませんね。嫌でしょうに・・・・・・」
「可愛くするのは無理。土台が腐ってるから♪それと僕？キミも着てみる？結構似合いそうよ？」

酷い言われようです。後、全力でお断りです。何が悲しくて着ないといけないんですか？

「じゃ、よろしく。ゴメン雄二、後のことはまかせたよ」
「では自分も。これで失礼します」

正直見るにたえない光景ですし、脳がインプットする前に立ち去りましょう。

22時間目　学園破壊者アキさん～放課後説教タイム～（後書き）

22話でした。いやはや明久はよくやりますね

もし学校でこんなことになれば・・・う～ん、考えたくありませんですが青春ってことで許してもらえ・・・ませんよね？ハイ

あともう少しで試召戦争編は終わりそうです。できれば今週中に清涼祭編に行きたいとは思います（一応下書きは二巻の終りの方まで書き終えましたし）

PCさえ確保出来たら、すぐに投稿しますね

まだまだ長いですが、どうかよろしくお願いします。ありがとうございました

23時間目　アキさんはモテモテ～気まずい放課後編～

アキさんが根本くんの制服を持って教室を出ます。折角ですので途中まで付いて行きましょう。

「ありましたか？封筒？」
「ん～ちょっと待って・・・・・あったあった！」
「よかったですね。姫路さんも喜ぶでしょうね」

アキさんは本当に優しい人です。自分のことより一生懸命になれる人は多くはありませんよ？アキさんは貴重な人です。

「では、行ってください。早くね。・・・・・後邪魔でしょうし根本くんの制服は持っていきますよ？」
「いいの？でもそんなもの、どうするの？危ないよ」

制服が危ないのでしょうか？初めて聞きましたね、そんなこと。

「西村先生のところへ行って渡してきます。『廊下に脱ぎ散らかしてあったので、不気味に思って預かってきました』何て言えばいいでしょう」
「ナイス、造！んじゃ行ってくるね」

上手くいくといいですね。では自分は補習室に行って西村先生にコレ渡してきましょう。

「忘れ物～わっすれもの～♪」

西村先生に制服を預けた後、（ここの生徒には常識は無いのかってぼやいていました）

ノートを置きっぱなしにしていたことに気づいて教室に戻っています。

もう流石にアキさんも姫路さんの鞄の中に例の封筒を入れて帰った頃でしょう。

おそらく誰も残ってはいませんよね？

「たっだいまー！我が家より落ち着くFクラ・・・・・す？」

「えっ！？造っ！？」

「月野君！？」

あれれ～？おかしいぞぉ？

教室にはアキさんと姫路さんがまだ残っていました。それだけならいいんです。

ですが、ですがよ？何と姫路さんがアキさんに抱きついてるではありませんか・・・・

「「「・・・・・・・・・・・・・」」」

きっ、気まずいっ！これはあれですか？父親と母親がキスをしているところをちょうど目撃してしまった子供の気持ちでしょうか！？

「あのっ！すんません！？自分は誰にも言いませんから！」
「造！いやこれは・・・・」
「っ、月野君！違うんです、その・・・・」
「いいんです！みなまで言わなくても。さっさと帰ります！気にしないでください！」
「「だから違うって（ですって）！！」」

まだ何か言っている二人を置いて退散しました。あ～びっくりしました。
若いですねー青春でしょうかね。今見たことは胸の内に閉まっておいた方がいいですね。
そう言えば何気にアキさん？貴方、島田さんとも抱き合ってましたよね

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』
『いいからキリキリ歩け』
『さ、坂本に吉井に小学生め！よくも俺にこんなことを・・・・・・』
『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』
『き、聞いてないぞ！』

何か雑音が入りましたが、今日は先ほどのことで頭が一杯で何も聞こえませんよ？

点数補充のテストを終えた二日後、残りはＡクラス戦のみとなり自分たちははもうじき変わるであろうＦクラスで最後の作戦の説明を受けています。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」

「ゆーさん・・・・・・こちらこそゆーさんのお陰でここまで来れましたよ！」

「そうだな、ここまで来た以上絶対にＡクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねぇんだーっ！』

最後の勝負を前にしてクラスの皆さんの心が一つになります。

「皆ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どういうことだ?』
『誰と誰が一騎打ちするんだ?』
『それで本当に勝てるのか?』

「やるのは当然、俺と翔子だ」

ま、代表同士がやるのは当然でしょうね。

「だけど雄二、いくらなんでも今の雄二じゃ無理じゃない?戦力差は歴然としてるよ?」
「まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

まともにやれば・・・ですか?

「だがそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう?まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

圧倒的な実力がありながら、ここまでのし上がってきましもんね。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

ゆーさんの一言一言に皆さんの目が輝き、期待に満ち溢れてきています。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『『『おおぉーーーっ!』』』

「さて、具体的なやり方だが・・・・・・一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」
「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」
「日本史だ」

あれ？ゆーさん日本史得意でしたっけ？

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」
「待って雄二。同点だったら、きっと延長戦だよ？そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」
「確かに明久の言う通りじゃ」

うみゅ？何でしょう。この百点取れて当り前な空気は？

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」
「？？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」
「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」
「そんなに凄い人なら、なおさらどうやって攻めるのですか？」
「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」
「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

さて、ゆーさんの秘策は何でしょうね

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題がでれば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」
「？ある問題とはなんじゃ？」
「その問題は――――『大化の改新』」
「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」
「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問だ」
「単純というと――――何年に起きた、とかかのう？」
「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

？どうしてそんなにピンポイントに指摘できるのでしょう？

「大化の改新が起きたのは、６４５年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」
「どうして比較がアキさんなのですか・・・・・・？」

あれ？アキさん怒っていませんね。珍しいです。目をそらしてますね。
わからなかったとか？まぁ間違いは誰にでもありますよ。

「だが翔子は確実に間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばって寸法だ」
「・・・・・？ねえ坂本、さっきから気になってたんだけど」
「あの、私もです。坂本君」
「ん？なんだ島田に姫路」
「霧島さんとは、その・・・・・仲が良いんですか？」
「アンタさっきから、霧島さんのこと『翔子』って呼んでない？」

そういえばそうですね。ゆーさん女友達でも名字で呼んでますし・・・・

「ああ。アイツとは幼なじみだ」
「総員、狙えぇっ！」
「なっ！？なぜ須川の号令で全員が急に上履きを構える！？」
「黙れ、男の敵！信頼を裏切りおって。Ａクラスの前にキサマを殺す！」
「俺が一体何をしたと！？」
「遺言はそれだけか？・・・・・待て靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ」
「了解です会長！」

凄いですね、何が彼らをそこまで駆り立てるのでしょうか？
さっきまでの信頼はどこに行ってしまったのやら・・・・・・

「む？明久よ。お主があれに参加しとらんなど珍しいではないか？」
「あはは。だって僕が直接殺らなくても、みんなが殺ってくれるからね。高みの見物でもしておくよ」
「さりげなく酷いんですね、アキさん」

時々ですが、アキさんとゆーさんの関係は何なのかわからなくなります。

「ふむ、確かにお主は抱きついてくれる女友達がおるからのう？」
「うぇい！？秀吉何で姫路さんのこと知ってるの！？まさか造がバラした！？」
「は？ワシは島田のことを言ったつもりじゃが・・・・・・のう造？何か隠しておるな？」
「アキさん・・・・・自分でバラしてどうするんですか？」

姫路さん・島田さんは真っ赤になって自爆し、それにより二人に抱きつかれたことが判明したアキさんはゆーさんと仲良く逃走することになりました。

「Aクラス戦のことはいいのでしょうか？」
「ま、そのうち戻ってくるじゃろう？」

その後ヒデさんと自分でFクラスをまとめて、とりあえずは落ち着かせました。
これからAクラス戦なのですが、若干不安ですよ・・・・・・

23時間目　アキさんはモテモテ～気まずい放課後編～（後書き）

２３話でした。また原作と違うところがありますね

ここでは一応?明久はまだＦＦＦ団に加盟していません

今後どうなるかわかりませんがね

明日が過ぎればまた三、四話くらい投稿できると思います

更新速度ってどれくらいがベスト何でしょう?よくわからないので適当なんですが

それではまた次回。Ａクラス交渉のところから始まると思います

読んでくれた方、ありがとうございました

２４時間目　交渉人ゆーさん～罰ゲームって危険な感じ～（前書き）

やっとＡクラスが見えてみました。もうちょっとで原作一巻の終わりの方になると思います。

長いな～気づけば書いているので、止まらないんですよね（汗）

とりあえず、２４話です。よろしくお願いします

２４時間目　交渉人ゆーさん～罰ゲームって危険な感じ～

「一騎打ち？」
「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告です。今回は代表であるゆーさんに、アキさん、姫路さん、島田さん、ヒデさん、土屋くんのＦクラスの首脳陣でＡクラスに乗り込んでいます。
今回は最大級の山場でしょうし、聞いておいたほうがいいと言うゆーさんの指令です。

「うーん、何が狙いなの？」

現在ゆーさんと交渉しているのは木下優子さん。ヒデさんと双子のお姉さんでこの前たまたまお会いしました。随分似ていますがやはりどこか弟のヒデさんとは違いますね

ヒデさんの方は物腰が優しそうな感じでほんわりします。
木下さんの方はしゃんとして凛々しい感じでかっこいいです。

「もちろん俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」

まあ、木下さんが訝しむのも無理はない話ですね。学年最高クラスの成績の霧島さんが学年最低クラスのゆーさんに負けるなんて普通考えられないことですし。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」
「賢明だな」
さてさて、ここからどう崩します？

「ところで、Ｃクラスとの試召戦争はどうだった？」
「時間は取られたけど、それだけだったわよ？何の問題もなし」
「Ｂクラスとやりあう気はあるか？」
「Ｂクラスって・・・・・・、昨日来ていたあの・・・・・・」
・・・・・木下さん嫌そうな顔ですね。
確かにまさか女装して宣戦布告する方がこの世にいるとは普通思えませんし。

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」
「でも、Ｂクラスはｆクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」
「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規則的にはなんの問題もない。・・・・・・Ｂクラスだけじゃなくて、Ｄクラスもな」
ここにきてＢ・Ｄクラスをダシにするとは・・・・・・
本当にゆーさんを敵に回したくありませんね。ある意味根本くん以上です。

「・・・・・それって脅迫？」
「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」
「うーん・・・・・わかったわよ。何を企んでいるかは知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」
「え？本当？」
あら？やけにあっさり受け入れてくれましたね？
「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・・・・」
ごめんなさい、木下さん。それにＡクラスの皆さん。そこまでひどいモノとは思わなかったので・・・・・いつか何かしらお詫びの品を持ってきます。
「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうなら受けてもいいよ」
「う・・・・・」
そう来ましたか。なかなか隙がありませんね。Ａクラスは嘗めてかかると痛い目に遭いそうです。
「姉上。随分と警戒しておるの？」
「なるほどね。ウチらが瑞希を出してくる可能性を警戒してるんで

しょ？」
「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし。それに・・・」
？　こっちを見てますが自分は頭数に入れられても困りますよ？

「安心してくれ、ウチからは俺が出る。姫路と造は出さねえよ」
「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。コレは競争じゃなくて戦争だからね」
「・・・・・そうか。それならその条件を呑んでもいい」
大丈夫ですか？ゆーさん。戦力的に厳しいと思いますが？

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」
「え？うーん・・・・・・」
やはりここは慎重になりますよね。この決断でＡクラス全体の運命が左右されますし。
Ｂクラスとは違い、このＡクラスの皆さんは自分たちの実力には自信があるけど、それに慢心しない方々みたいです。
Ａクラス戦はやはり攻略が難しいみたいですね・・・・・・

「・・・・・受けてもいい」
「「「「「ぅわっ！？」」」」」
「・・・・・雄二の提案を受けてもいい」

突然現れた学年主席の、霧島翔子さん。ゆーさん以外は全員驚いてます。
気配がまったくありませんでしたよ？何か武道でもやっていらっしゃるのでしょうか？

「あれ？代表。いいの？」
「・・・・・その代わり、条件がある」
「条件だと？」
「・・・・・うん」

霧島さんはゆーさんを見た後、姫路さん、島田さん（何故か自分とヒデさん）を見て、そしてまたゆーさんを見て言葉を発します。

「・・・・・負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

罰ゲームみたいですね。それにしても自分まで見られたってことは何かされるのでしょうか？
ま、初対面なハズですし何かあるわけでもなさそうですかね？

てかやけに土屋くんがあわただしく動いていますね？
キャノン砲みたいな？カメラを持って霧島さんを写しています。
鼻血が出てますが、あの出血量は大丈夫なんですか？

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはこっちで決めさせて？」
「よし、交渉成立だな？」

これくらいなら、何とかなりますかね?後は皆さんの頑張りとゆーさんの作戦次第でしょうね。

「・・・・・勝負はいつ?」
「そうだな。十時からでいいか?」
「・・・・・わかった」
「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」
「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

交渉は成立し、Aクラスをあとにs「あっ、そうだった。月野君?」
・・・・・?
木下さんが呼び止めます。何でしょうかね?

「はい、何でしょうか?」
「高橋先生が呼んでるわよ?『私の召喚獣になってください』とか言ってたけどあれ何?」
「さあ皆さん一旦戻りましょう!木下さん!?悪いんですが先生には月野はどこか遠くへ旅立ったと伝えておいてください!」

さっさと戻って準備しないといけませんからね!ああ忙しい忙しい!!
別に逃げているわけじゃないんですからね!?

「そういえばゆーさん?気になってたのですが日本史は余り得意で

はなかったはずでは？」
「ん？まあな。だが小学生の問題だろ？何とかなると思うがな？」
「・・・・・・慶安の御触書が発令された年は？」
「・・・・・・は？」
「これ一応小６の問題ですよ？大丈夫ですか？」
「・・・・・・」
「ゆーさんの番が回ってくるまで一通り復習しておいた方がいいのでは？」
「・・・・・・すまんな」

どうしましょう、時間も迫ってますしこれヤバくないですか？
・・・・・・ま、なんとかなりますかね？

２４時間目　交渉人ゆーさん～罰ゲームって危険な感じ～（後書き）

・・・・・・短い？今回やっぱり短いですかね？

う～ん、でもここで切らないと次回の文章量とか流れがおかしいことになりそうなんですよね

すみませんが、この回はここまでです
短い分、今日も可能であれば後でもう一話くらい投稿します

めちゃくちゃな投稿の仕方ですみません
読んでくれた方、ありがとうございました

２５時間目　Ａクラス戦～戦闘描写って難しい～（前書き）

連続投稿ですみません。２５話Ａクラス戦開始です

読んでくださっている方がびっくりするくらいたくさんいて、本当に嬉しいです

なるべく設定が分かりやすいようには書きますが、誤字や矛盾点、改善点などあればアドバイスいただけると嬉しいです

では、２５話よろしくお願いします

25時間目　Aクラス戦～戦闘描写って難しい～

月野Ｓｉｄｅ

「では、両名共準備は良いですか？」

今日の立会人は、毎度おなじみＡクラス担任かつ学年主任の高橋先生です。
一騎討ちの会場はＡクラスで行うことになってます。教室が違いますからね

「ああ」
「・・・・・・問題ない」

実はここまで来るのに、ゆーさんの勉強不足の発覚や高橋先生の暴走？があったので、個人的には問題だらけのような気がしますがね・・・

ゆーさんの件は先に自分たちが一騎討ちを行っている間に、多少は復習するらしいです。
正直時間をずらしてもらった方がいい気がしますが、本人曰くプライドが許さないそうです。
皆さんを不安にさせないように、ゆーさんの件は誰にも言ってませんが・・・・信頼してますからね？ゆーさん？

ついでに高橋先生ですが・・・交渉の結果、試召戦争が終わるまでは自分のことは我慢？するとのこと。自分のことを保護してくれたＦクラスの皆さんに感謝です。

それにしても我慢ってなんでしょうね？事あるごとにちらりちらりとこちらを見てますが先生の持っているその子供用？の服は何に使うのでしょうね？ｏｒｚ

明久Ｓｉｄｅ

「それでは一人目の方、どうぞ」
「アタシから行くよっ」
向こうは秀吉の姉、木下優子さん。だったらここはやっぱり・・・・

「ワシがやろう」
と、その弟の秀吉が出るみたいだ。うんうん、秀吉なら木下さんの苦手科目や集中力の乱し方を知っているはず。頼んだよ秀吉っ

「ところでさ、秀吉？」
「なんじゃ、姉上？」
「Ｃクラスの小山さんって知ってる？知ってるわよね」
「はて、誰じゃそれは？」

あれ?何だろう、秀吉に何かよくないことが起きる予感がする・・・・

秀吉もポーカーフェイスを保っているけど、こころなしか冷や汗掻いてるし。

「ちょっと来てもらうわね?抵抗しても無駄よ」

「いや、姉上。今はそんなことをしている場合では「いいわね?」逝こうかの・・・・・」

秀吉!?『行く』の字が違うよ?大丈夫なの!?

確かCクラスの小山さんは秀吉が罵倒しまくった相手だったはず。

大方そのことが木下さんにばれたのだろう。

『姉上、勝負は・・・・・どうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら?どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ?』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して・・・あ、姉上っ!ちがっ・・・・・!その間接はそっちに曲がらなっ・・・・・・!』

秀吉の悲鳴がAクラスの外で聞こえる。ゴメン秀吉っ!僕は無力だ・・・・・・

ガラガラガラ

「すみません♪秀吉は気分が悪くて早退だそうですっ♪Fクラスは代わりに誰か出てくれる？」

ヤバイ。木下さんが怖い！？秀吉の敵を討ちたいけど、怖くて誰も出ようとしない。

あの雄二ですら引いている！？

「いっ、いや・・・・・・。ウチの不戦ぱ「自分が行きます」造！？」

待って！造が行くのか！？ダメだ造、君が死んだら誰がFクラスのマスコットになるんだ！？

「ごめんなさい、ゆーさん。勝てるかはわかりませんが、不戦敗になるよりいいですよね？」

「・・・・・あいかわらず、掴みどころがないなお前。ま、好きにしろ。任せた」

「はいです！・・・・・・いいですか？木下さん？」

「ええ♪構わないわ。アナタなら」

てかあんなことがあったのに二人とも随分楽しそうだね・・・・・・？

月野Ｓｉｄｅ

ヒデさん、ドンマイです。ですが多少は貴方が悪ノリしたせいでもあるんですからね？本人に聞くと演じているときは、無我夢中になってしまうらしいので仕方ないかもしれませんが。

「もうアナタが出てくるのね月野君。噂の実力見せてもらいましょう」
「はいです。期待に添えるかわかりませんがよろしくです」
「謙遜しなくていいわ、科目はどうするの？」
知っている方が相手では緊張しなくていいですね。木下さんとも一度やってみたかったですし？
「えっと、お任せします。個人的には英語が苦手なので英語以外がいいですが・・・」
「・・・・・それ言っちゃダメでしょ？ここでアタシが『英語で』何て言ったらアナタ不利になるんじゃない？」
A・Fクラスの皆さんが苦笑しています。ああ、確かにそうかもです。
「すみません、ですが木下さんなら別にいいかなと思って」
「よくわからない子ね？・・・・・まぁいいわ。先生物理でお願いします」
「木下さん、羨ましいです。造くんにそんなこと言ってもらえるなんて・・・・」
「「先生！！正気に戻って！？」」
一瞬トリップした高橋先生を戻して（現実に）召喚フィールドを展開します。
物理は普通程度ですね、頑張りましょう。

「試獣召喚（サモン）！」
「えいっ♪」

ポンッ！

木下さんが召喚したと同時に自分もフィールドへ入っていきます。
すぐに反応し自身の姿が召喚獣へと移り変わりました。

『『『『召喚獣になった！？』』』』
『やっぱり噂は本当だったみたいね』
『あいつ凄いな』
『可愛いわね・・・』

おぉそうでした、初めてＡクラスの皆さんは見るんでしたね。

「造くんやっぱり私の召喚《さあ、始めましょう！木下さん！》・・・くすん」

何か危険なことを先生が言う前にとっととやりましょう！

「ふーん？間近で見るとホントビックリするわね。それ大丈夫なの？」
《気にしないでください。別に他の召喚獣と変わりありませんよ》
「そう？じゃ、そろそろ行くけど？」
《はいです。見た目がアレでも情け容赦は無用ですからっ》

≪Ａクラス　木下優子　物理　３１２点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　月野造　物理　３０７点≫

「《勝負ッ！！》」

「やっぱりやるわね！でもその武器じゃ接近戦に弱いでしょ？」
《っとと・・・・・あらら！よく、わかりましたね！》

木下さんは本当に強いですっ！最初のころは拮抗していましたが、
それもすぐに終わりました。
すぐに自分が接近戦に弱いことを理解して、さっきから距離を取らせてくれません。

４００点オーバーしていたなら空を飛べましたが、今回は出来ませんし。
これでも何回かダメージを与えるには与えましたが、決定的な一撃が無理そうです。
ついでにフィードバックがきついです。慣れていないと身体の節々が痛い・・・・・

点数を削ろうにも、自分の箒はやはり戦闘には向いてません。
木下さんの点は１５０点台。今自分の点が１００点を切りました。
これは詰みですかね・・・・・？

「どうやら限界みたいね？長引かせるのも辛そうだし、そろそろ決めるわねっ」

『造っ！危ない！』

そうですね、これ以上は無理でしょう。ですが、少なくともＦクラスには勝ってほしいんです！ここはアレを使いましょう・・・・・アレっていうと大抵ベタなものですよね？

ま、いいや。アキさん？それに皆さんあとは任せました！

明久Ｓｉｄｅ

「造っ！危ない！」

造がよろめいてそれを逃がさずに木下さんの召喚獣が襲いかかる！ヤバい！これを喰らったら、造は！！

そう思った次の瞬間、造の周りに竜巻が起き、木下さんの召喚獣は造もろとも吹きとばされた。

≪Ａクラス　木下優子　物理　０点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　月野造　物理　０点≫

『『『引き分け！？』』』

なんか造が『あ゛ぅう～あとはたのんます～』とか言って吹き飛ばされてたけど・・・・・・
自爆特攻!?なんて無茶を!フィードバックがどれだけ辛いかあの子わかってやってんの!?

「ひ、引き分けです!第一戦は引き分けです。っ造くんしっかりして!すみません保健委員は彼を保健室に!!」

流石先生。ちゃんと勝敗は宣言するんだ。この人がどうして造のことになるとダメになるのかよくわからない。造は元に戻って気を失っているみたいだ。そりゃあんなことするからだよ・・・・・・

でも、僕たちの為に一生懸命やってくれた。これは僕らもやらないとね!
見ててよ造、あの遠い空の上で!君の尊い犠牲は決して無駄にはならない!

『死んでませんよ～』なんて幻聴が聞こえたけど気のせいだね!次は勝ってやる!!

25時間目　Aクラス戦～戦闘描写って難しい～（後書き）

25話でした

・・・・・戦闘描写が書けないっ！

今回分かりにくいところ沢山でしょうが、すみませんです

正直難しいです、何か参考になるものがあればいいのですがね

話が変わってなんですが、手元には清涼祭の大体の部分は書けています

後は、PCに打ち込むこととPCを確保することですかね・・・

少し予告しますと、清涼祭はちょっぴりシリアスな所とオリキャラ？っぽい人が出てきます　苦手な方はすみません

感想を書いてくださった榊さん、レフェルさん、ありがとうございます！

初めて感想をいただけて最初混乱してしまいました（汗）

読んでくださっている皆さんもとても嬉しいです

長々すみません　これからもよろしくお願いします

２６時間目　目を開けるとそこは～最凶の敵の根城でした～（前書き）

２６話！いよいよラストスパートです。

気を失った造が目を覚ます場面からです。

・・・・・ちょっとキングクリムゾン起こしているので、展開早っ！？と思われる方もいると思いますが、ダラダラ書き続けてもしょうがないと思いやむ追えず省略しています

とりあえず２６話です。行きますね。

26時間目　目を開けるとそこは～最凶の敵の根城でした～

「うみゅう？・・・・・ここは？」
「あっ、気づいた？保健室よ」
「・・・・・・木下さん？どして？」
「覚えていないのかしら？月野君、アタシと勝負してて最後に・・・・・」

気がつけば、保健室ですか。なんか頭がぐるぐる回ってる感じですね？

そういえば、そうでしたね。まさかリアルで吹き飛ばされる感覚を味わうとは。
・・・・・結構心臓に悪いですねアレ。

「アタシとの勝負は引き分けよ？悔しいわ」
「いえ、最後のはどう考えても木下さんの勝ちです。あれも一か八かの大博打でしたし」
「いいえ、アタシは勝ちを確信してたのよ？それなのにこれじゃダメね」

と、笑顔で答えています。悔しいと言っている割にはいい表情ですが？
っと！そう言えば一騎討ちの件はどうなったのでしょう？

「あの、木下さん・・・・・」

「一騎討ちは今のところ一勝二敗一引き分け。うちが今のところ負けてるわ」
「へっ？」
「気になっているんでしょ。顔に書いてあるわよ？」
あはは・・・・・敵いませんね、木下さんには。自分の考えなどすっかりお見通しのようです。
やっぱり自分、分かりやすいのでしょうか？
話を聞くと二回戦はアキさんとＡクラスの佐藤さんという方が戦ったそうです。点数差が６倍以上の相手にアキさんは大接戦をし、残り１０点まで追いつめたとのこと。
まあ流石に厳しかったようであと一歩足りなかったとか？
「吉井君悔しがってたけどＡクラス相手に、しかもあの点数差であそこまで追いつめたんですもの。十分賞賛に当たるわ」
そう木下さんも言ってくれます。Ａクラスの生徒がＦクラスの生徒を認めることは凄いことです。
アキさんの頑張りはＦクラスの士気をより高めることにもなったそうですし、アキさんお疲れ様です。ちゃんと『あとは頼みます』って言ったこと守ってくれたんですね。
三回戦は土屋くんとＡクラス工藤さんが戦い、土屋くんが有無を言

わさず一瞬で工藤さんを倒したとか？土屋くんも気合入ってたみたいですね。てかいくら得意教科とはいえ５５０点オーバーを叩きだしたらしい土屋くんには自分も唖然とします。
ホント彼ってＦクラスで一番不思議な方ですね。いい方なんですが・・・・・・

「あと最後に姫路さん。彼女、ほぼ同じ実力のうちの久保君が相手だったんだけど総合で点数差４００点を叩きだしててね。アレには流石に驚いたわ」
「点数差４００！？いえ、確かにここのところ頑張ってましたが・・・・」
「彼女ね、貴方のクラスが好きって言ってたわ。好きなクラスの為に頑張れるって」

なるほど、以前言ってましたもんね。
そうですか、同じクラスメイトとしてとても嬉しいです。

「ここまで頑張っている貴方達を見てね、正直Ｆクラスのこと馬鹿にしてたことを取り消すわ。あんなに一生懸命クラスの為に頑張ってる人たちがいるんだって気が付いたし」

これは嬉しいですね。Ｆクラスのことをこんな風に言ってくれる人がいてくれて。しかもそれがＡクラスの生徒さんともなれば余計にね

「全く、Fクラスも月野君も羨ましいわ。何て言うか飾ってない自然な姿が」
「はい？突然何でしょうか？」

木下さんは少し苦笑いをしながら言ってきます。

「貴方達を見ててね、本当に馬鹿馬鹿しくなったの。見栄張ってる自分がね」
「はい？・・・・・・見栄ですか？」

そうでしょうか？木下さんの態度は見栄というより、Aクラスにいるっていう誇りなんじゃないかと思いますが・・・・・・

「そ、貴方も見たでしょ？秀吉のアタシの演技を。一応学園では優等生面してるけど、家ではあんな感じよ？恥ずかしいでしょ、アタシ？」

どうしてでしょう？何が問題かよくわかりません。

「別に自分を高めるために人に良く見せようとすることが悪いことだなんて思いませんよ？そうしてきた努力が今の木下さんを作っているんですし」

「そうかしら？実際はアレよりひどいかもよ？」
「というより恥ずかしくないでしょう？あの時のヒデさんの演技した木下さんと、今自分と話している木下さん、どちらもきっと本当の木下さんでしょうし」

きっと学園生活を、一生懸命優等生として生きていたんでしょうね。
彼女の責任感の強さも頷けます。

「・・・・・ふふっ。ありがと、なんか少し肩の荷が下りたわ。貴方とFクラスのお陰かしら？」
「大したことしてませんよ？後一つお願いが・・・・・・」
「？　何かしら」
「ヒデさん、確かにちょっとやりすぎましたがFクラスの為にやったんです。まだ怒っているならFクラスに免じて許していただけませんか？」

すると彼女は笑って『こんなの許すも許さないもない』と言いました。
曰く、姉弟間のスキンシップだそうです。ふーむ。姉弟とは不思議なものですね？

「そろそろAクラスとFクラスの最終戦が終わるわよ？行く？」
「あ、はい。行きます！霧島さんとゆーさんですね」
「（ゆーさん？）・・・・ところでアタシとしてはそのままでいてほしいくらい似合ってるんだけど、一度鏡見た方がいいわ」

はい？鏡？・・・・・・・・・・・・！？

「何で！？ヒラヒラ？てか女物！？」

「・・・・・ん？おぅ！起きてたんか？造。今回も似合ってんぞ！」

「何で日高先生が？・・・・・・ってここはそういえば先生のアジト！」

「まあな？お前さんこの前好きにしていいって言ってたろ？これはほーしゅうだぞ？ほーしゅう」

「そう言えば他にもあるんですか？先生？」

「ああ、暇ならこいつ連れてきなじょーちゃん？いろいろ着せ替えてやんぞ」

最悪です。漢気溢れるこの養護の日高先生は、何かにつけては自分に変なものを着せ替えようとします。ここ保健室なのにクローゼット装備の趣味の部屋となっているため、正直怪我をしても自分は立ち寄るのが嫌なとこです。

「どうでもいいですが服を返して下さい・・・・・・自分は変態になるつもりはありませんよ？」

「ダ～メ。今日はそのままな？どの道お前の制服はクリーニングに出したからもうここにはない！」

最悪ですね。なにこの羞恥プレイ？

「とりあえず、この子に何かあればまた連れてきますね、先生」
「おう頼んだ！じゃな～造、譲ちゃん」
「何故か、木下さんが敵についた！？」
ここは地獄で助け無しっと・・・・・・

「面白い先生ね？すっごく気に入ったわ」
「個人的に、関わってはいけない人だと思いますがね・・・・・・？」
結局服は取り戻せず、木下さんに捕獲されてＡクラスに戻ってきてます。
そう言えば自分Ａクラスの生徒でもないのに木下さんに診てもらってたんですね。
悪かったですね。木下さんには・・・・・・

「すみません、付き添ってもらって・・・・・・」
「いいのよ？アタシ保健委員だし。月野君の怪我の原因はアタシだしね」
優しいですね、ああ言ってましたが木下さんもいい人です。飾らない優しさとかがね。

「木下さんって、お姉さんみたいですね。やっぱりヒデさんの影響

ですか？」
「お姉さん？・・・そんなこと始めて言われたわよ？」
「すみません、嫌でしたら謝ります。何か優しいですしそんな感じがしまして・・・
ちょっぴりヒデさんが羨ましいってさっき思ってたんです」
「そ？別に大したものでもないわよ？・・・・・・ふむ？・・・・・・・・姉弟ねぇ」

何でしょうか？木下さんが保健室で見せたようなとても良い笑顔を一瞬覗かせた気がします。
ここは話題を変えて死亡フラグを折った方がいいですかね？

「話は戻りますが、どうして木下さんは保健室に？一騎討ちはまだ終わっていなかったんでしょう？」
「・・・えっ！？・・・・・・ああそれ？実はうちの代表と月野君の代表、一度は戦ったんだけどね」

どうやらあの問題はでなかったようで、両方とも満点のまま引き分けになったそうです。確かに確率的にもあの一問が必ず出ることはありませんからね。

「それで休憩を入れて再度テストをしよう、ってことになってね？時間もあることだしアタシが様子を見に来たの」
「そうでしたか。ではもうすぐ結果が出るでしょうね？」

ゆーさんもあの短時間でよく勉強できましたね？

伊達に神童なんて言われてないってことでしょうか？

「さて、着いたわね。行きましょう？」

いつの間にやらＡクラスにたどりついていました。さて結果はどうでしょうか？

26時間目　目を開けるとそこは～最凶の敵の根城でした～（後書き）

優子さんのキャラブレイクしすぎたでしょうか・・・
書いた後、誰？って作者が最初に思ってしまったら負けですよね？

ま、いいか！えっと、彼女の今後の活躍に期待？してください

あとオリキャラ？日高先生登場です。
また年上か・・・作者は何を求めているのでしょうね？自分でもわかりません

前回言っていたオリキャラが彼女に値します。
ここでは割と重要なキャラになる・・・・・・ハズです。多分

とりあえず、ラスト一話で原作一巻の試召戦争編は終わります（バカテスト集もあるよ！）

本日中に投稿できたらいいと思います。読んでくれた方ありがとうございました

27時間目　土屋くん→こーさん～試召戦争編終了！～（前書き）

試召戦争編終わった！！長いッ、長すぎました・・・・・・

とりあえずすぐ行きましょう。27話スタートです！

27時間目　土屋くん→こーさん～試召戦争編終了！～

≪Aクラス　霧島翔子　日本史　限定テスト　１００点≫
VS
≪Fクラス　坂本雄二　日本史　限定テスト　９２点≫

結果から言うとゆーさんと霧島さんの勝負は霧島さんの勝利でした。
結局例の問題は出ず、ゆーさんもそれで集中力が切れたのか、ミスをしたようです。

しかし、全く勉強していなかったハズなのによく満点近採れますね？寧ろそっちが驚きなんですが？

「くそっ！・・・・・すまねぇみんな。俺のせいで勝てんかった」
「雄二っ、それを言うなら僕も勝てなかったよ！雄二だけのせいじゃない！」
『そうだぞ！実際俺らがやったら３０点も採れない！』
『それに負けちゃいないぜ！？』
『そうだそうだ！まだ引き分けだろ！』

皆さんもゆーさんを励まします。全員で励ましあういいクラスになったんですね・・・・・女性関係が関わらなければ！！

「これは・・・・・どうしますか？Aクラス・Fクラスの皆さん？一旦中断して対談を執り行いますか？」

流石に引き分けになるとは思っていなかったようで、高橋先生も困っていますね。

「・・・・・ゆーさん。落ち込むのはその辺にして、今後のことを話し合いましょう？」

「造・・・・・戻ってきたのか。その格好にツッコミを入れるべきかわからんが、とりあえず、すまんかった。お前も頑張ってくれたのに」

「造。僕もその格好に関してはいろいろ詳しく聞きたいけど、僕も負けちゃって。造との約束果たせなかった・・・・・」

「構いません。皆さんの頑張りは聞きましたし、二人とも自分の約束を十分守ってくれました。お疲れ様です。格好のことは言わないでください・・・・・」

二人ともそんな顔しないでください。本当によくやってくれたのですから。

ありがとうです♪

それにしてもやっぱり男がこんな格好してるとまずいですね。根本くんのこと言えないです・・・・・Fクラスの皆さん？そんな目

で見ないでください。目、血走ってますよ?

「あと土屋くん?貴方の撮っている写真のネガ寄こしなさい。処分します!」

「・・・・・・・・・・・・これはデジカメ」

「潔いのですね!全く!?・・・・・・もういいですがね、こーさん」

「・・・・・・・・・・・・?こーさん?」

「Aクラスの人相手によく勝ってくれましたね。見直しました。こーさんてこれから呼びます。構いませんよね?」

「・・・・・・・・・・・・(コクン)よろしく、造。あとポーズも取ってくれると助かる」

「台無しですよ!?」

何でそうなるのでしょう?ホント面白い人ですね。

独特の考え?を持っているといいますか。改めてよろしくです、こーさん?

「さて、二勝二敗一引き分けとなったが・・・どうする翔子?」

「・・・・・うちは延長戦をやっても構わないし、和平交渉でこの戦争を終結しても構わない。雄二に任せる」

ここで有無を言わさず延長戦を仕掛けてこないあたり、Aクラスの方々は思慮深いです。

「そうか・・・・・正直ここまで来ておいて和平交渉はやりたくない。だが仮に延長戦になれば戦力的にこちらでまともに動けるのは姫路・島田・ムッツリーニだけだな」
「えっ？どうしてさ雄二？」
「もし延長戦になれば、まだ試召戦争中ってことになるだろ？だったら俺、明久、それに
造は『戦死』扱いになってるはずだ」
「あっ！」

そうですね、一応こんな時の為に島田さんが控えていましたが、残りのＡクラスのメンバー相手では戦えるメンバーが明らかに足りません。
これは困りましたね。Ａクラスの皆さんはまだまだ余力があるみたいですし・・・・・・

「お前らどうしたい？ここで延長すれば可能性は残ってはいるが、負ければ更にあの設備が酷いものになる」

『『『『・・・・・・・・』』』』

「俺の策もここまでが限界だ。あとはお前らが決めてくれ」
「ゆーさん・・・・・・」
「お困りのようだね？ジャリガキ共？」
「って！？何でここに学園長が？」

考えをまとめている最中に学園長がやってきました。何故か西村先

生もついてきています。

「なんだい？あんたら随分と暗いじゃないか？本当にアンタらが新学期早々にバカ騒ぎしていたクラスなのかい？」

「・・・・・何の用だ？こっちはばーさんの相手をしてる暇はねえよ」

「雄二駄目だよ、いくらなんでも年寄りにそんな態度をとるなんて。ポックリ逝ったらどうすんのさ？」

「失礼さね！クソガキ共！」

「皆さん言葉使いが・・・・・いいですがね。学園長はどうしてここに？」

「はっ！折角この状況を何とかしてやろうと思って来たのさ。ありがたく思いな！」

はて？どうするのでしょうね？学園長結構突発的なところがありますから・・・・・

「んで？ババ・・・・・学園長、何だってんだ？」

「この戦争、和平交渉にしておきな。別に延長したきゃしても構わんがね？」

「勝手に決めんなよ？それはウチのクラスが決めることだ」

「最後まで話を聞きな！ったくこれだから最近のガキは。・・・・・和平交渉にするなら、教室の設備をＢクラス並みにランクを上げてやってもいい」

『『『『は？』』』』

学園長？一体どうして？あれだけ説得しても無理だって言ってたじゃないですか？

「随分気前がいいじゃないか？何を企んでる？」

「確かに変ですよババ・・・・・学園長。そんなことをして学園長に何のメリットがあるんですか？」

「本当に失礼なガキ共さね！・・・・・一応Ｆクラスの教室設備は前々から問題になっていたし、どこぞの誰かが随分必死に説得してたからね」

「？　なら今回はどうして？」

「これで口実ができるからさ。Ｆクラスの設備向上に反対している教師共にね。何てったってＦクラスがＡクラスを追い詰めたっていう確かな証拠があるからね」

なるほど。確かにそれなら問題ないでしょう。今の環境では体調管理もままならないでしょうし・・・・・

「・・・・・お前ら、それでいいか？」

『『『ああ、問題ない』』』

どうやらクラス皆も同意してくれたようです。

「翔子、すまんが聞いた通りだ。俺たちＦクラスはＡクラスと和平交渉を申し込む」

「・・・・・わかった。みんなもそれでいい？」

Aクラスの皆さんも頷いてくれます。Fクラスの設備向上に喜んでくれる生徒さんもいて嬉しくなりました。

「というわけだ。今回はダメだったが俺らはここまでやってきた！2－Fクラスは文月学園の伝説となるだろう！」

『『『おおおおおおおおおおおお！！！！』』』

「次こそAクラスを落すぞ！今回分かっただろう！？俺らは頂点を目指せることが！！」

『『『その通りだ、坂本！！！！』』』

「いつかAを落す時まで！まずはここで戦争を終結させる！！ご苦労だった、お前ら！」

『『『おつかれさん！！！！』』』

「Aクラスの前でそんなこと言うなんてね。いいノリね、月野君？Fクラスは」

「あはは♪最高のクラスですよ。Aクラスの皆さんありがとうございました。お騒がせしてすみません」

「・・・・・ところで雄二、約束」
「は?約束?何のことだ?」
「・・・・・・負けた方は何でも言う事を聞くって約束」
ああ、そんなこと言ってましたね。忘れてました。
「ちょっと待て?引き分けだろ!?なんで「・・・・・・負けた方は何でも言う事を聞く」ハッ!まさかお前!?」
「・・・・・・私は『負けた方は』と言った。個人戦は私の勝ち」
「へ、屁理屈だろ!?」
「・・・・・・約束は約束。それじゃ・・・・・・雄二、私と付き合って」
?どうしてそんな話に?
「っ、お前、やっぱりまだ諦めてなかったのか!」
「・・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」
凄い・・・・・・皆さん注目している中堂々と言い切りました。
「その話は何度も断っただろ?他の男と付き合う気はないのか?」
「・・・・・・私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」
かっ、かっこいい!こんなに想われて嬉しくない人はいませんよね?

「拒否権は？」

そこでそんな返答ができるあたり、ゆーさんは大物ですね。

「・・・・・ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐぁっ！放せ！やっぱりこの約束は無効だ・・・・・・」

ぐいっ　つかつかつか

霧島さんはゆーさんの首根っこを掴んで教室を出て行きました。残った皆さんは茫然としていますね。

「さて、Ｆクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

あらら？そういえば西村先生が学園長と来ていましたね。

「あれ？西村先生。僕らになんか用ですか？」

「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

『『『『は？』』』』

「おめでとうお前たち。福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにぃっ!?』』』

クラスの男子全員が悲鳴をあげます。自分としてはむしろ助かりますね。

相手があの三人（高橋先生たち）でないならね！

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』といっても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからと言って、ないがしろにしていいものじゃない」

確かにその通りですね。出来ないより出来る方が後々便利でしょうし。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》だからな。それと月野・・・・・」

アキさんが必死に抵抗していますね。何やら逃げ切ってやると、高らかに声をあげてます。

それと呼びましたか？西村先生？

「お前に何があったかわからんが、その格好は校則違反だ」

「違います！これは日高先生が勝手に！」

「・・・・・お前も一応監視を付ける。特にいつもの先生方が率先してやってくださるそうだ。頑張れよ」

「な!?そんなバカな!?」
「そんなわけだ。とりあえず明日からは授業とは別に補修の時間を二時間設けてやろう」

・・・・・地獄の門が開かれる。

「逃げましょう、これは今すぐにでも行動を起こさねば。今日から間違いなく襲われます」
「造?逃げるなら僕も行くよ。僕の生活費と栄養が、姫路さんと美波に奪われそうだからね!」

アキさんも何やら大変そうです。ここは同盟を結び、ここから立ち去りましょう!!

『アキ!待ちなさい。逃がさないわよ!』
『吉井君!映画館へ行きましょう!』
『『『造くん、一緒に補習しましょう!その格好は補習モノです!!!』』』
『造~。これ着てみんか~?』

「あいかわらず月野も大変だな・・・・・・・」

うぅ・・・・・西村先生の言葉に癒されますよ
こうして迫りくる恐怖と共に、ここにFクラスの戦争は一時休戦となりました。

『月野造君・・・・・ね。帰ったら秀吉にいろいろ聞いてみようかしら♪』

27時間目　土屋くん→こーさん～試召戦争編終了！～（後書き）

何とか終わらせることができました・・・

プロローグを飛ばしても試召戦争編だけで２０話以上使うってどんだけでしょう？

無理やり感もありますが、こんな感じでいいのかな？

次回はバカテスト集です　バカテスト集終われば・・・明日にでも清涼祭編にいこうかな？

まだその辺は未定ですが、良ければ次もよろしくお願いしますありがとうございました！

バカテスト集その？（前書き）

休憩がてらにバカテスト集です。今回は短めだけど許してください

ではバカテスト集その？、どうぞ

バカテスト集その？

８問目　保健体育）
問　以下の問いに答えなさい

『女性は（　）を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体付きになりはじめる』

姫路瑞希の答え
『初潮』

教師のコメント
正解です

吉井明久の答え
『明日』

教師のコメント
随分と急な話ですね

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では生理のことを月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が４３？に達するころに初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重のほかにも初潮は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響され

る』

教師のコメント
詳しすぎです

月野造の答え
『初潮』

日高先生のコメント
お前にもいつか来るさ。心配スンナ☆

月野造の返答
きてたまるか！てか何で日高先生がコメントしてるんですか！？

9問目　生物）
問　以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て答えなさい』

姫路瑞希の答え
『？脂質　？炭水化物　？タンパク質　？ビタミン　？ミネラル』

教師のコメント
流石は姫路さん。優秀ですね

月野造の答え
『?糖分　?友達　?先生　?お昼寝　?糖分』

教師のコメント
?，?は微笑ましいですが、間違いです。そして何故二回も糖分と書いているのですか?

吉井明久の答え
『?砂糖　?塩　?水道水　?雨水　?湧水』

教師のコメント
それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え
『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮が来ない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント
保険体育のテストは一時間前に終わりました

１０問目　歴史）
問　次の（　）に正しい年号を記入しなさい

『（　　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え
『１５４９年』

教師のコメント
正解。特にコメントはありません

坂本雄二の答え
『雪の降りつもる中、寒さに震える君の手を握った１９９３年』

教師のコメント
ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです

造　「ゆーさん・・・・・・よくこれで日本史で勝負するって気になりましたね？」
雄　「返す言葉がないぜ・・・・・・だが造？お前のあの英語の悲惨さは何だ？」
明　「確かにアレは無いよね？流石の僕でも英語で造に負けそうにはならないと思う」
秀　「地球外の言語を書いておったお主が言えることかの？」
康　「・・・・・・・・・・・・バカばっか」

雄・明・秀・造「「「お前（おぬし）（貴方）が言うな（言わない

で）！！！！」」」」

康　「・・・・・・・・・・・・っ！？」

優　「アンタたち全員が言えることよ？それ」

瑞　「あはは・・・・・・」

美　「ウチも人のこと言えないかも・・・・・・・」

宗　「補習を倍にするか・・・・・・・」

バカテスト集その？（後書き）

実際のテストでこんな回答したらどうなるんでしょう・・・・・・？
ちょっとやってみようかな・・・・

ま、それはともかくちょっと説明です。

遠藤先生と船越先生、日高先生がバカテスト集にでてて（特に遠藤先生）高橋先生が出ていない！と思われる方がいるでしょうが（思わない？残念・・・）本編で正直高橋先生が出過ぎているので、ちょっとバランスを考えて出していません

高橋先生ファン（自分だけかな？）の方ごめんなさい

では、次回からいよいよ清涼祭編です。ちょっぴりのシリアスと、今まで良い子だった造の意外な面が見れるかも？

また次回お会いできたら嬉しいです。読んでいただいてありがとうございました！

28時間目　中華＋ヨーロピアン～矛盾しててなんか素敵～（前書き）

28話です。新章やっと書けたー！

ここからまた少し原作の話と違ってくると思います
無理があったりもするかもですが、よろしくです

とりあえず、清涼祭編スタート！

28時間目　中華＋ヨーロピアン～矛盾しててなんか素敵～

月野Ｓｉｄｅ

Ａクラスとの試召戦争からしばらくたちました。
桜の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めています。

途中アキさんと姫路さん＆島田さん・ゆーさんと霧島さんのデートでハプニングが起きたり、アキさんが二通の手紙（ラブレター？）をもらいＦクラスが暴走したり、自分が何故か木下さんに拉致され、いつもの三人と日高先生のおもちゃにされたりと、相変わらずの日常が過ぎましたが、これはまた別の話。

「もう桜の花も完全に散ってしまいましたね。いよいよ『祭り』の時期ですか」
「そうじゃの。お主は随分と楽しそうじゃの、造よ？」

朝、いつものごとく通いなれた通学路を歩きながらヒデさんと一緒に『祭り』の話をしています。
自分たちの通うここ文月学園では、新学年最初の行事である『清涼

祭』の準備がもう始まりつつあるのです。結構大がかりなお祭りで、随分と賑わうため楽しみなんですよ♪

「おはよっ月野、木下！」
「おはようございます・・・月野君、木下君」

清涼祭についてヒデさんと談笑していると、見慣れた二人のクラスメイトが話しかけてくれました。
島田さんと姫路さんですね。いつも通り元気な・・・・・・？
むう？なんだか姫路さんが元気じゃないですね？てか怒ってます？

「おはようございます。今日も気持ちのいい朝ですね。・・・・あの姫路さん？なにか怒ってますか？」
「えっ！？あの、どうしてそう思うんですか？」
「何だかちょっぴり機嫌悪そうでしたから。もしかして余計なこと聞いてしまいましたか？」
「確かに少々暗い顔をしておるの、姫路よ」
「あっ、二人もそう思う？なんか瑞希、今朝会ったときから変なのよね」
「す、すみません！でも皆さんに怒っているわけじゃないんです」
ということは別の誰かに怒っているということですか・・・・・・
「差支えなければ聞いてもいいですか？嫌でなければでいいのです

が」
「そうじゃぞ。悩みがあれば相談に乗るぞ？」
「そうよ、瑞希？困っているならウチらはいつでも助けるわ♪」
「・・・・・ありがとうございます。大したことではないのですが、えっと実は・・・・・・」

そう言って姫路さんは不機嫌の理由を語り始めました。

明久Ｓｉｄｅ

「くそぅ、鉄人め！ちょっと人が青春の学園生活・クラスメイトとの草野球編をやってるだけで、鉄拳で殴らなくてもいいじゃないか・・・・・しかも僕が主犯みたいに扱って！雄二が主犯なのに」

クラスメイトとの親睦を深める草野球が悪鬼・鉄人により中断され、教室に戻ってきた僕たち。流石鬼と呼ばれるだけあって、やることが鉄拳制裁と酷い。
さて？教室には姫路さん・美波・造・秀吉が何やら話し合っている様子だね。

「ただいま～戻ってきたよ」
「遅いですよ？今清涼祭の出し物について四人で案を出し合っていたところです。皆さんも聞いておいてください」

『『『『ＯＫ、造ちゃん。お兄さんに任せな！』』』』

流石に引いてるね、造も。なんでも造は秀吉と共にＦクラスのマスコットキャラとしての地位を確立してしまった様子。まあ、君たちの気持ちはわかる。

にしてもあいかわらず真面目だなぁ～造は。傍から見ると中学生いや下手すると小学生なこの子は、だるそうにしている雄二を差し置いてトントン拍子で進めていく。

自主的に動いてるあたり感心するよ。まったく誰かさんに爪の垢を煎じて飲ませたいよね！

「・・・・・というわけで、多数決の結果２－Ｆの出し物は中華喫茶ということになりますが、構いませんね？」

『『『『いいで～す！！！！』』』』

・・・・・本当にクラス代表になった方がいいんじゃない、造？

にしてもやけにやる気だね？姫路さんと美波と秀吉も率先してやってるし・・・・・・

何かあるのかな？

月野Ｓｉｄｅ

ふぅ、何とかまとまりましたね。お店の名前が変じゃないのか？って西村先生にツッコミを頂きましたが気にいってるんですよ？『中華喫茶　ヨーロピアン』って。矛盾している二つの要素が合わさってて・・・・・・

そうそう厨房の件は姫路さんがやると言い出したので、とりあえず島田さんが今説得にあたっています。食中毒で祭りが台無しになるのは勘弁ですからね・・・・・・
頼みましたよ島田さん！自分らと祭りの命運は貴女にかかっています！

で、本命の厨房係は須川くんとこーさんに決定しました。須川くんはとても中華にこだわりを持っていましたね。あそこまで熱弁を振ってもらえば、期待できそうです。頼みましたよ？

あと、こーさん。料理上手だそうですがよく中華料理なんて作れますね？羨ましいです。曰く紳士の嗜みだそうですが、どういう意味でしょうね？
ま、こーさん大抵のことはできそうですし任せて平気でしょう。・・・・・勉強以外は

そんなこんなでＨＲが終わりましたが、ん～これはやはりゆーさんの力が必要ですかね？
ちょうどアキさんが来てくれましたし、頼んでもらいましょう。

「お疲れ、造。・・・・・・どうしたの?随分やる気みたいだけど?」
「ああ、アキさん。ちょっといろいろあるんですよ」
「? 何かあるの?」
「後で教えます。それよりアキさんに頼みがあるのですが・・・・・・」
「のう明久よ。雄二を何とか学園祭に引っ張りだせんか?」
「雄二を?・・・・・・ん~アイツは自分の興味のないことには徹底して無関心だし」
そうですか・・・・・・何とかしたいのですが。
ゆーさんが動かないと経営に支障がでますでしょうし
「それよりどうして雄二を?そんなに成功させたいの?」
「・・・・・・姫路さんの為って言ったらアキさん動いてくれますか?」
「姫路さんの!?」
喰いつき早いですね?やっぱり。これ島田さんが相手でもそうでしょうね。
そこがアキさんのいいところなんでしょうが。
「どういうこと?造に秀吉!?」
「そんなにあわてないでください」
「落ち着くのじゃ、明久よ。順を追って説明するとじゃな・・・・・・」

何でも姫路さんのお父さんと姫路さんが大喧嘩しているそうです。
どうやら姫路さんのお父さんが、レベルの低いクラスで勉強などすると成績が下がるのではと、思わず姫路さんの前で言ってしまったらしくそれに怒った姫路さんは大反発の末、

『お父さんがFクラスのことを認めるまで口も利かないし、今日から家出します！』

と、啖呵を切ったそうです。家出することを親の前で宣言するなんてどうかと思いますが、姫路さんの気持ちは嬉しいですね。流石に家出は止められたようですが。

「それで、姫路さんのお父さんが『だったら清涼祭でお前のクラスを確かめる。そこで判断する』って約束したそうなんです」
「姫路もなかなかに嬉しいことを言ってくれおるし、姫路の家族と姫路が仲違いするのは好ましくないからのう。そこでワシらが手伝おうとしとるわけじゃ」
「そっか、そうだったんだね。・・・・・よしっ！任せて。雄二は僕が説得する！」

そう言って『１０分くらい待っててね～』と、どこかに行ったアキさん。
きっかり１０分後、ゆーさんを連れて戻ってきました。凄いですね？

にしても二人とも傷だらけのボロボロですね？アキさんは制服が少々破れてますし、ゆーさんは何故かまるでスタンガンに当てられたかのように制服が焦げています。

何をしたらこうなるのでしょう？おまけに西村先生の『吉井！坂本！明日は逃がさんぞ！』という声が聞こえた気もしますが・・・・・？

「二人ともどうしたんですか？何かトラブルですか？」

「気にするな造。こいつが悪いだけだ」

「気にしないで造。こいつが悪いんだから」

時々本当に二人の関係が気になります。仲がいいようで悪いような？

28時間目　中華＋ヨーロピアン～矛盾しててなんか素敵～（後書き）

２８話でした。いかがだったでしょうか？

原作では姫路さんの転校がありますが、設備向上のため転校ではなく姫路さんと彼女のお父さんが喧嘩したっていう設定にしました。

えっと、次回からかな？造が黒くなっちゃうのは。驚く方もいるかもしれませんね

更新は・・・いつになるでしょうか？ちょっと父が今日からＰＣ使うらしいのでひょっとしたら遅くなるかもしれません

すみません。なるべく時間を空きすぎないように投稿したいと思います

とにかく、また次回お願いします！読んでいただいてありがとうございます

２９時間目　普段優しい人って～黒くなると凄く怖い～（前書き）

遅くなってしまってすみません。ＰＣ確保できたので早速投稿♪

・・・・・やってしまったかな？造がもうアレです

性格変わり過ぎ？気のせいですよ、多分

とりあえず、２９話よろしくお願いします

２９時間目　普段優しい人って～黒くなると凄く怖い～

月野Ｓｉｄｅ

戻ってきたゆーさんに事情を説明すると、しばらく考え込んでいます。何だかんだで、ゆーさんは自分の近辺のことになれば本気になってくれる優しい人ですね。

「あの姫路が大喧嘩ねぇ？よっぽど悔しかったんだろうな・・・・・だが問題はいくつかあるな」

「え？喫茶店の成功だけじゃダメなの？」

「あのな、明久？例え喫茶店が成功したとして、姫路の父親がそれに納得するのか？ここでの問題は、『姫路の父親が俺らのクラスを確かめる』ってことだ」

「雄二よ。もっと具体的に言ってはくれぬか？」

「あっ、なるほど。つまり姫路さんのお父さんは姫路さんの今の学習環境と姫路さんのクラスメイトである自分たちのレベルを計りに来るわけですかね？」

「ああ、恐らくな。姫路の父親の気持ちもわからなくはない。一応進学校である文月学園で、自分の娘が最低クラスで勉強してるんだ。親心としては不安なんだろう」

確かに。本来の彼女の成績ならここではなく設備も学習面でも優れた環境のＡクラスにいるはずですから。

「じゃが、そうなればこの問題は難しくはないかの？」
「いや、そうでもないさ。現に学習環境はＢクラス並みに上がってるだろ？俺らの勝利の結晶だ」

あれから学園長の働きにより、Ｆクラスは今やＢクラス並みの設備を手に入れることができました。以前のＦクラスが懐かしいです・・・・・

「だから学習環境については何も問題ねえハズだ。寧ろ一番の問題は・・・・・・」
「Ｆクラスのクラスメイトの実力・・・だね。雄二？」
「ああそうだ。これればかりはどうすっかな・・・」

「それについては安心していいわよ？」

おっと？島田さんが戻ってきてますね。姫路さんを説得してくれたんですね！
本当にいろいろお疲れ様です。助かりましたよ♪

「どういうことだ？島田」
「さっき瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしてもお父さんの鼻を明かしてやりたいんです！協力してください』って。ウチと瑞希召喚大会に出るわ。なんか見世物にされるみたいで好きじゃないけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

召喚大会ですか！その手がありましたね。確かにそれならFクラスの実力もわかりますし手っ取り早く姫路さんのお父さんも納得させられるでしょう

「でしたら何人かFクラスからも出ますか？」

「確かにな。本当は姫路抜きでの優勝が一番いいだろうしな。だが出る奴は限定させて出した方がいい」

「そうだね、余りにも酷かったら姫路さんのお父さん怒って帰っちゃうかも」

「まずFクラスの戦力がどんな感じかを見て、それからメンバーを選んだほうがよいじゃろう。ムッツリーニに戦力分析を頼んでおこうの」

まあ、戦えるのはAクラス戦に挑んだいつものメンバーくらいでしょうがね。他の皆さんも少しずつ点は上がり始めていますが。

ガラッ

「月野、ついでに吉井に坂本。学園長が呼んでいる。すまんが行ってやってくれ」

「あっ、西村せんせ♪お疲れ様です」

「「ゲッ！鉄人！？」」

それにしても突然ですね、西村先生？どうしました？

それとアキさん&ゆーさんはどうして逃げようとしているのでしょ

うね？

「吉井、坂本。今日は見逃すが、明日は許さんからな。とにかく急いで行け」

「あのババァの呼び出し？Ｆクラスの代表と観察処分者を呼ぶなんて一体何の用だ？」

「学園長と呼べ！・・・・・・理由は俺にもわからん」

「鉄人！僕は悪いことしてませんよ！どうしてそんな横暴を！！」

「いやいや、アキさん？呼び出し＝悪いこととは限りませんよ？それと西村せんせが静かに怒っていますから、先に謝っておいた方がよいかと」

お～。毎度のことながら、よくアキさん（とゆーさん率いるＦクラス）は西村先生を怒らせるのが上手いですね。一種の才能でしょうか？

「・・・・・まあいい。頼んだぞ月野。こいつらのお守もついでに頼んだ」

「鉄人！そこは『吉井、月野のことは任せた』じゃないの！？」

「吉井、お前に任せられる月野に謝れ」

「それには同感だな」

あのぅ先生？行ってもいいでしょうか？二人も行きますよ？

明久Ｓｉｄｅ

『・・・・・賞品の・・・・・・として隠し・・・・・・・』
『・・・・・こそ・・・・・・勝手に・・・・・・如月グランドパークに』

「どうした、造に明久？」
「？・・・・・ああ、中で何か話をしているみたいです。待ちましょうか」
「いや、ババァが居るとわかったんだから入っちまおうぜ？呼びだしたのはあっちだしな」

そうだね。人を呼んでおいて待たせるなんて最低だし。折角だから入っちゃおう！

「失礼しまーす」
「ちょっと！？流石に失礼では？」
「ふっ、本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つもんだよ」

学園長室には多少不機嫌な学園長と・・・・・
鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い、竹原先生？

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これで

は話を続ける事も出来ません・・・・・・まさか、貴方の差し金ですか？」

「ハァ？アタシが呼びだしたのはこいつらの方で、竹原アンタは端から呼んでないよ。勝手に来てグダグダ言ってるだけならさっさと出て行ってくれないかい？」

なっ、何だか学園内でこんな会話が、しかもトップの人間たちから出るなんて大丈夫なのかな？

「そうですね、なんせ教頭はいつもいつも忙しいのでしょうからさっさと消えていって欲しいものです。お久しぶりですね？教頭。まだお辞めになっていなかったのですか？」

「！ちょっと造！？」

竹原先生相手にこんなことを言うのが一番似合わない造が、不機嫌な態度を隠そうともせず喋っている。

どうしたの造？なんかすっごく怒っているけど・・・・・・

「学園長、何やら不快な生徒がいますが？確か貴方の腰巾着だった覚えがありますよ？」

「・・・・・お止め月野。竹原？アタシは別に負い目があると言う訳でもないよ」

「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」

「隠れてこそこそしていらっしゃる、ネズミの教頭がそれを言いますか？」

怖っ！造めっちゃ怖っ！？暴言に慣れている雄二ですら唖然としてるよ！？

「・・・・・さっきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」

「・・・・・そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう。これで失礼します。この部屋にいるだけで空気が悪くなりそうですし」

「いつもは落ち着けるいい場所なんですがね？教頭が来てくれたおかげで空気が最悪です。学園長？空気清浄機持ってきていいですか？」

「おやめっ！月野」

見かねたババァが止めに入って、何とかこの場は収まったけど・・・・

造？君はどうしたのさ・・・・・・？

教頭先生が出た後も重苦しい空気が漂う。ど、どうしよう。なんて造に声をかけよう・・・・・・

「「「・・・・・・・・・・」」」

「・・・・・ふぅ、さて学園長？一体何のご用ですか♪」

あれ？戻った！？てか切り替え早！

「おい、造？お前・・・・・・・」
「えっと・・・・・・大丈夫？」
「あっ、先ほどは失礼しました。アキさん、ゆーさん。心配しないでください、個人的にあの教頭のことが大嫌いなだけですから♪」
「そっ、そうか・・・・・・・」
「そうなんだ・・・・・・・」

これは聞かないでおいた方が正解なのかな・・・・・・・？

29時間目　普段優しい人って～黒くなると凄く怖い～（後書き）

・・・・・・あ～、うん。ごめんなさい

造は普段はいい子なんです！ただ友人や大事な人たちの為なら情け容赦は一切しませんし、敵とみなせば鬼にもなります（汗）

どうして教頭のことをそこまで腹立たしく思っているかは、清涼祭後半に分かるはずです

とりあえず今回はここまでです。読んでくれた方、ありがとうございました

３０時間目　タッグ結成！～バカ×バカ＝∞～（前書き）

原作崩壊なんのその　３０話です

今回も原作と設定が違うところがあると思います。一応後書きにも説明を入れますが、気を付けてくださいね

ではよろしくお願いします

30時間目　タッグ結成！～バカ×バカ＝∞～

全く、教頭と話すと気分が悪くなりますね。折角の楽しい学園生活が台無しになるじゃないですか！
ま、とりあえずは当初の目的である学園長の話を聞きましょう。

「失礼しました、学園長。それで用件は何でしょう？」
「ん？ああそうだったね。ちょっとしたトラブルさ」
「トラブルですか？」
「ああ、そうさ。しかも二つほどね」
「二つもですか？しっかりして下さいよ、ババ・・・・・・学園長」
「そうだな、しかもそこで何故俺らが呼ばれるんだ？ババ・・・・・・学園長」

あらら、しっかり調子が戻ってますね、二人とも？

「礼儀がなってないガキどもさね。・・・・・・一つはアンタらに関わる問題なんだよ？」

「「「え？」」」

・・・・・学園長の話によると、Ｆクラスの設備を格段に上げたことに対して数名の教師の不満が出たとのこと。確かにＢクラス並みの設備ですから、いずれ不満が出るのはわかっていましたが。

おまけに学園長が点数の水増しをしたのではと、根も葉もない噂が出てきたそうで。
Fクラスの実力をその目で見ていない教師が主立っているようですね。

「それでさね。少し話が変わるが清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」
「だいぶ飛んだな？・・・・・ああ、知っている。それがどうした？」
「アンタたちがそれに出て優勝でもすれば実力を認めるだとよ。アタシとしては馬鹿馬鹿しいことがね。ま、大方召喚大会で博打をするのにいい馬を探しているんだろうさ」
「そんなっ！」

心底嫌そうな顔をしている学園長。確かになんかモヤモヤします。
嘗められているのでしょうね。
アキさん、ゆーさんも苦虫を噛み潰したような顔です。

「それで？Fクラスの誰かが勝てばいいんだろ？何故俺たちを呼んだ」
「・・・・・それがね、そいつらが言うには月野と吉井ペアで出ろだとよ」
「「・・・・・はい？」」
何故自分たちが指定されなければならないのでしょう？

「学園長？どうして自分たちが出なければならないんですか？」
「んなこた知らんよ。ま、これは推測だが賭けの対象にしやすいとか、観察処分者同士ならいい見世物になるとかだろうね。あの連中、試験召喚システムを娯楽か何かと勘違いしてるのさ！」

あらら。学園長怒ってますね。試験召喚システムは学園長の長年の研究の結晶です。
学園にとっても大事な宝であり、生みだした学園長にとっては大事な子供みたいなものでしょうから無理もありませんね。

「で？結局造と明久を召喚大会に参加させるのか？」
「まあ正直な話、アタシがどう言われようが構いはしないのさ。だがこのまま何も手を打たなきゃアンタらが不利になるよ」

学園長がいろいろやってくれているのはよく知ってますが、学園長は主に試験召喚システムの研究をやっています。学園の経理はあの教頭がやっているため、設備などの実権は教頭が握っているのです。

「なるほど？ってことは今回のＦクラスの設備改善反対の首謀者は教頭ってわけですか？あいかわらずムカムカする人ですね」
「まあね。どの道次の職員会議には、Ｆクラスの件は話題になるだろうさ。胸クソ悪い話さね！」
「で、でも！勝てばいいんだよね！？」

「「「・・・・・・・・・・・・・」」」

「あ、あれ?僕おかしなこと言った?どの道勝てば姫路さんの件も解決するかなって・・・・・・
ついでにFクラスの喫茶店の評判だって上がるよ、ね・・・・・・?」

・・・・・そうか。そうですね、勝てばいいんですよね。
流石アキさんです!勝ってあの教頭の鼻を明かせばいいだけじゃないですか!

「その通りですよ、流石アキさん!やりましょう、勝って大事なもの全て守り抜きましょう!」
「う、うん!そうだよね!!」

意外と簡単なことじゃないですか!悩むなんて自分らしくなかったですね。
楽しく学園生活を送ることこそ自分の目標なんですから!

「アキさん。至らないパートナーですが、どうかよろしくお願いします!」
「こちらこそよろしく、造!」
「・・・・・ったく、お前ら能天気だな。何の考えなしに勝てばいいって」
「はん!坂本。そういうアンタも随分やる気みたいじゃないか?」
「嘗めんなよババァ?こいつらを勝利に導くことくらい俺にとっちゃ朝飯前なんだよ!」

何気にゆーさんもやる気ですね。ありがたいです。
ゆーさんのバックアップがあれば百人力ですよ!頼りにしてますからね!

「あ、そういえば盛り上がりすぎて忘れていましたが、もう一個の問題って何ですか?」
「ん?それアンタらが優勝するなら問題ないさね。優勝景品の一つの『如月グランド　プレオープンプレミアムペアチケット』を回収したいのさ」

如月グランド?確か現在建設中の巨大テーマパークですっけ?
もうすぐプレオープンと広告が来てましたね。正直あまり娯楽関係は行ったことないですからよくはわかりませんが・・・・・

「なん・・・だと・・・?おいババァ、今何つった!?」
「だからチケットだよ。何やら知らんがこのチケットよからぬ噂があるらしいね?そんでもう景品に出すって宣言しちまってるから、アンタたちが優勝して回収してもらいたいのさね」

へぇ?ペアチケットですか?ま、優勝すればそれくらい何とかなるでしょうね。
・・・・・あの、ゆーさん?何やらぶつぶつ言ってますし、やけに顔が青いですが大丈夫ですか?

「造！明久！？お前ら死んでも勝て！！俺もバックアップの為に召喚大会に参加して、お前らの邪魔になる敵を排除する！」
「ゆ、雄二・・・・・・そんなにもクラスと姫路さんを護ろうと。うん！任せてよ。ね？造！」
「？　はいです！何かわかりませんが頑張りましょう！」
「いい返事さね。頼んだよ？クソジャリ共！」

こうして我らがFクラスの凸凹コンビ＆マスコットの召喚大会攻略作戦は始まりました。
・・・・・ちょっと？誰がマスコットですって？

「お前ら、俺は少しババァに提案がある。悪いが教室にいる島田たちと合流して店のことを頼む。あとお前らが召喚大会に出ることは伝えてもいいが教室関係のことは言うな。不安にさせたくない」

ゆーさんが何やらそう言って学園長室から自分とアキさんを追い出しました。
ま、長くなりそうですし、あまり自分は策略に向かないタイプの人間なので構いませんが？

「大丈夫なんでしょうか、ゆーさんは」
「大丈夫なんじゃない？雄二に卑怯なことを考えさせれば右に出るものはいないし」

「むしろその卑怯なことが心配ですよ・・・・・・」

『対戦表・・・・・・その・・・・・・・指定・・・・・・・俺に・・・・・・』

『・・・・・・の水増し・・・・・・一蹴して・・・・・・・協力しよう・・・・・・・』

って、なにやら不安になる会話が聞こえますよ!?本当に大丈夫なんでしょうね!?

３０時間目　タッグ結成！～バカ×バカ＝∞～（後書き）

う～ん、こんな内容でいいのでしょうかね？

とりあえず説明
明久とペアを組むのは主人公の造です　雄二のペア相手は次回くらいに分かります
それで、原作であった腕輪の欠陥はありません

ただ、Ｆクラスの設備向上に問題があるという設定になっています
足りない所はまた補足したりしますが、もし変な所があれば指摘してくださると嬉しいです

無茶な設定と内容で混乱される方もいらっしゃるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします

ではまた次回　読んでいただいてありがとうございました

３１時間目　大会・喫茶・営業妨害?～清涼祭スタート～（前書き）

さてさて、清涼祭初日の３１話です。

いよいよ始まった清涼祭、召喚大会に喫茶店に営業妨害?と、なかなか激しいスケジュールの造たち。

無事にいかないのがＦクラスクオリティ?それはそれでありでしょう！

まあ、とにかくよろしくお願いします。

31時間目　大会・喫茶・営業妨害?～清涼祭スタート～

そうして迎えた清涼祭初日の朝。２－Ｆクラスの教室もヒデさん＆こーさん＆須川くんの三人の力により本格的な中華喫茶として新たに生まれ変わりました

「三人とも凄いわね。教室がまるで本場の中華料理店よ?」
「まあ、見かけをよくすることなど、ワシは演劇の舞台設計で慣れておるしの」
「それに、こーさんと須川くんのデザインも完璧ですからね。完璧すぎて何を彼らが望んでいるのかわからなくなりましたが」

すでに一般高校生の学園祭のレベルどころか、どこぞの料理店のレベルを超えていますよ?
あの二人曰く、まだまだ甘いそうですがね?彼らの目指す先には何が待っているのでしょう?

「・・・・・・・・・・・・飲茶も完璧」
「おわっ!」
「むぅムッツリーニか。厨房の方はどうじゃ?」
「・・・・・・・・・・・・味見用」
「土屋君凄いんですよ。皆さんも食べてみてください」

いつもながらこ―さん、日常生活で気配を消すことを習慣づけることに意味があるのでしょうか？
そんなことを一瞬思いましたが、とにかくこーさんと姫路さんがティーセットと胡麻団子を持ってきてくれました。

「凄い！ものすごくおいしそう！」
「土屋、これウチ等が食べちゃっていいの？」
「・・・・・・・・・・・・（コクリ）」
「では、遠慮なく頂こうかの」

島田さん、ヒデさんは手を伸ばし、作りたてで温かいゴマ団子を勢いよく頬張ります。

「美味しい！表面はカリカリで、仲はモチモチで食感も良いし！これホントに土屋たちが作ったの！？」
「確かにのう、甘すぎないところも絶品じゃ」
「よかったですね、土屋君。好評みたいですよ！」
「・・・・・・・・・・・・（テレッ）」

この反応なら、お客さんも入ってくれるでしょう。それにしても飲茶の香りもいいものです。

「うんうん。やっぱり女の子たちが何かを食べている様は絵になるよね？」
「アキさん？そこでヒデさんをカウントしてどうするのですか？」

もはやテンプレですかね、この反応も・・・・・ヒデさんが不憫

すぎです。

「それじゃ僕も貰おうかな？」

「そですね♪甘いものは大好きなんですよ？自分」

「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

まずは軽く一口、いっただきまーす♪おおっ！これ、は・・・・・・？

「「表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとても・・・・・・ンゴパっ！！」」

！？？これ、ひ、ひめじざんのざつじんりょう・・・り？なんで・・・・・・

「あっ、その二つは私が作ってみたんですよ♪」

「誰じゃ！？姫路を厨房に上げたのは！こやつらを殺したいのか！？」

「アキ！月野！しっかりしなさい！今土屋がＡＥＤを取りに行ったわ、その川を渡っちゃ駄目だからね！？」

その後、残していた姫路さんの胡麻団子を帰ってきたゆーさんがうっかり食べてしまい、結局三人仲良く土に還るところでした。姫路さんの（殺人）料理、被害者の会の皆さんの懸命な処置のお陰で現世に戻ってこれましたが・・・・・・

ますます殺傷能力が高まってる気がするのは気のせいじゃありませ

んよね？

中華喫茶が殺人現場に発展するところでしたよ・・・・・・
ＡＥＤを使うのが日常茶飯事なクラスってどんだけでしょうね？

「と、ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」
「ああ、ちょっと話し合いにな」

何やらゆーさん学園長と取引きをしているらしいのですが、事情は話せない皆さんはともかくアキさんと自分くらいには説明してくれてもよいでしょうに・・・・・・

何でも『聞けばまず造が止めるからな。お前ら二人はただ優勝することに集中してくれればいい』っとかっこいいようで、よく聞くとただの悪人の様な事を言ってましたよ？

あっ、ちなみにＦクラスで召喚戦争に出るメンバーは・・・・・・

≪姫路・島田≫Ｆクラス女子ペア
≪吉井・月野≫観察処分者ペア
≪木下・坂本≫美女と野獣ペア

となりました。ヒデさん＝美女？という紹介に怒ってましたね、ヒデさん

そういえば自分はなぜか姫路さん&島田さんにペアチケットはどうするのか、と脅さｒ・・・いえいえ尋ねられたのですが。どちらにしても行く気はありませんしアキさんに任せましょう。何とかなりますよね？

「では、時間ですので行ってきます！」

「それじゃ、喫茶店よろしくね？勝ってくるよっ！」

行きましょう、自分たちの戦場へ！！

『それでは試験召喚大会１回戦を始めます。なお三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください』

会場に着き、早速大会が始まりました。木内先生が立会い人ですね。今回は数学で勝負のようです。

相手はＢクラスの女子ペアですか・・・・・よく見れば以前根本くんに着替えさせていた方たちです。

「あら？Ｆクラスの有名人コンビじゃない？」

「あっホントだ。ね、覚えてる？」

気軽に話をしてくれます。Ｂクラスの皆さんともあれから仲良くなりつつあります。何でも早い段階で自分たちの代表の態度が気に入

らなかったらしく、それを倒してくれたFクラスに感謝すらしてるとか？

「えっと・・・ゴメン造、誰だかわかる？」
「ほら、根本くんを女装させる時に手伝ってくださったお二人ですよ。岩下さんと菊入さんですよね？あの時はお世話になりました」
「ああそういえば！」
「月野君相変わらず礼儀正しいわね。こちらこそよ？」
「ホント可愛いね～？何だか戦いにくいかも♪」
「・・・・・アキさん、泣いていいでしょうか？」
「ほ、ほら！一応誉めてもらってるんだし悪気はないと思うよ！？」

可愛いって・・・普通男に言う台詞じゃないし、それに自分の方が年上です！
くっ、今日は男らしい所を見せて皆さんの評価を変えて見せます！！

『あ～では、始めてください』
「「「「試獣召喚（サモン）」」」」

って、自分試獣召喚（サモン）何て言わなくてもこの姿になるんですよね。虚しい・・・
アキさんは木刀を携えた改造学生服、自分は箒を持った魔法使いです。あいかわらず自分は締りのない格好ですね。アキさんみたいに男らしくないです・・・・・

≪Fクラス　吉井明久＆　月野造　　数学　９２点＆３３４点≫

≪Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　ＶＳ　数学　１７９点＆１６３点≫

点数差はこんなものですね。Ｂクラス相手にも難なく戦えるレベルです。
アキさんもだんだん点数が上がってきてますし、これはまた戦力が上がりますね！

・・・・・・にしても

「「可愛い～♪」」

ハンマーと鉄球を持った召喚獣を従えている二人は、自分の姿にそう言って何故か携帯で写真まで撮る始末・・・・・・もういいです、よ～くわかりました。

《アキさん？自分が二人を倒しますね・・・・・・》
「・・・・・・多少は手加減してやってね？」
《嫌です☆》

一撃で二人を仕留めて、何の問題もなく一回戦を突破しました。ええ何も問題ありません！
・・・・・・一回戦後に岩下さん、菊入さんにおもちゃになんかされてませんよ？
ホントダヨ？

「造？何ボケッとしてるの？早く戻ろうよ」
「あ、そですね」
祭りの間は祭りのことに集中しませんとね

Ｆクラスの教室に戻ると何やら騒ぎがあっているようです。問題発生でしょうか？

「吉井！造ちゃん！やっと帰ってきてくれたか！」
「ちゃんはやめてください。・・・・・トラブルですね？」
「・・・・・・・・・・・営業妨害」
「は？何でそんなこと？」
「とにかく来てくれ、二人とも。坂本がいないところを狙われた！」

はて？一体どんな暇人がそんなことしているのでしょう？顔を拝ませてもらいましょう。

『マジでまずいぜ！何でこんなもん出してんだよ？』
『恥を知った方がいいぜお前ら？』

・・・・・めちゃくちゃ知り合いでしたｏｒｚ　ツネ＆ナツじゃありませんか・・・？

「あ、あいつらっ・・・・何て事を！」

「・・・・・・・・・・・・殺るか？明久？」
「とにかくずっとあの調子だ。周りのお客は食べてくれたから不味くはないってわかっているようだが、怖がって店から出ようともしているし・・・・・」
「あ～大体把握しました。あの二人なら任せてください」
「造？大丈夫なの？」
「ゆーさんが帰って来るまでの時間稼ぎくらいは♪」
さて、どうしますかね？ふふふ♪知りませんよ～？

「まったく、責任者はいないのか！　このクラスの代表「代表の代わりならいますよ？」・・・・・・は？」
「やっほ♪ツネ、ナツ？何やってんですか？」
「っ！月野！？・・・・そうか、ここはお前の」
「ちょうどいいぜ・・・・・ここの店なんだってんだ？こんな不味いもの食わせやがってよ？責任とれ！」
「あらあら？ツネ、残念です。・・・・・・それヒデさんが作ったのにねぇ？」
「は？ヒデさん？誰だそいつは？」
「嫌ですねツネ？貴方いつも言ってたじゃないですか？俺の太陽だって」
「何！？じゃ、じゃあこの胡麻団子を作ったのは・・・・・」
「お、おい常村・・・・・？」

まあ作ったのはこーさんですが・・・・・
ツネを騙すくらい朝飯前です♪もうひと押しでしょうかね？

「折角一生懸命になって作ったのに不味いって言われて落ち込んで

ました。泣きながらさっき教室を出て行きましたし・・・・・・あらあらホント残念です」
「いやぁ！ここの胡麻団子は格別に美味いな！！こんなに美味い物は食ったことがないくらいだぜ！！！」
「つ，常村あああああああああ！？」

ハッ、ちょろいちょろい。ツネはこれで落ちましたね。
残りはナツだけですが・・・・・・

「き、きたねぇぞ！月野！？」
「いやいや、営業妨害している方には言われたくありません。というわけで代表？こちらが何やらご不満があるお客様ですが・・・・・・」
「そうか、ご苦労だった造。・・・・・お客様？私が代表の坂本雄二です。ここでは何ですので、不満は奥で聞きましょう？」
「え〝？ちょっ、マテ・・・・・・・・・」

そうこうしているうちにゆーさんが帰ってきました。ここはお任せＤＥＡＴＨ☆
きっかり五分後・・・・・・

「覚えていやがれ！坂本、月野！」
「またのご来店お待ちしております♪」

ゆーさんと『お話♪』をしたナツは少々壊れたツネを連れ教室から去って行きました。
あいかわらずですかね？

二人を追い出した瞬間、教室から拍手が挙がりました。やはりあの二人には困っていたみたいですね。お客様からも『よくやった！』『美味しいわよ？頑張ってね』と声援がきます。

「大変失礼しましたお客様方。お詫びと言っては何ですが、この場にいる皆さんに胡麻団子のサービスをさせてもらいます。本当に申し訳ございませんでした」

ワオ。ゆーさんマジで商売上手！マイナスのイメージを壊して、更に印象を良くしましたね。胡麻団子も試食になりますから更に評判が良くなるでしょう。

「ふぅ、こんなもんか？」
「ゆーさんお疲れです」
「おう、お前もな。ところで何だったんだ？あいつら？」
「さぁ？このまま何事も無ければ良いのですが・・・・・」

何でしょう、あまり良い予感はしませんね。気をつけておきましょう。

「そうだな。・・・所でその様子だと勝ったようだな？造、明久？」
「うん！雄二たちも勝ったそうじゃない！秀吉に聞いたよ？」
「当たり前だ。ここで躓いてちゃ話にならねぇからな」
「ま、ワシらは召喚慣れしておるからのう。姫路たちもさっき帰ってきておったぞ。問題なく勝ち進んだようじゃ」

おお！これで２－Ｆクラス全ペアが一回戦突破ですか？中々いいですね。

「さて、とりあえずは二回戦が始まるまで、俺らは店を手伝うぞ！任せっきりじゃ悪いしな！」

「「「応！！！」」」

３１時間目　大会・喫茶・営業妨害?～清涼祭スタート～（後書き）

お疲れ様です。３１話でした。

話は変わりますが、学校でこういうお祭りみたいなのがあるのって羨ましいです。
ウチは文化祭なんてありませんしｏｒｚ

何でしょうね?何年か前まではあったそうなのですが・・・
皆さんのところはどうなんでしょうね?

まあいいか。読んでいただいてありがとうございます!また次回～

32時間目　リアル小学生葉月さん～見た目小学生造くん？～（前書き）

はい、32話です。まだまだ続くよ清涼祭～
榊さん、さかさまテルテルさん、感想ありがとうございます。
ではよろしくですです。

32時間目　リアル小学生葉月さん～見た目小学生造くん？～

召喚大会二回戦はAクラスとEクラスの複合ペアとの対戦になりましたが、どちらのクラスもまだ召喚獣の扱いに慣れていなかったので楽に勝つことができました。
確かにEクラスの方はまだ試召戦争を行っていませんし、Aクラスの方も自分たちほど操作が上手いという訳でもありませんからね。

「ただいまー・・・・・あれ？　朝に比べると人が少ないね」
「？本当ですね。昼時なのでもう少しお客がいると思いましたが・・・・・」

朝の方が慌ただしかったハズですが・・・・・？ツネ・ナツの二人の妨害があったとはいえ、ゆーさんがちゃんと対処しましたよね？

「お、戻ってきたようじゃの。お主らも勝ったみたいじゃな」
「ただいま秀吉。その様子だと秀吉たちも勝ったみたいだね」
「うむ、戦わずにの。何せ相手はあの根本とCクラスの小山じゃったからの。雄二がここぞとばかりに根本をダシに脅迫しよったぞ？」

「「・・・・・・」」

流石はゆーさん。やることがえげつなさ過ぎて、もう自分では止められません。
ゆーさんが味方で本当に良かった気がします。

「そ、その話題の雄二はどこに行ったの？」
「ん、トイレじゃ」
「それにしても、妙に少ないですね？あれからひょっとして変なお客でも来ましたか？」
「いや？ムッツリーニと須川にも尋ねたがあれ以降はそんな客は来ておらぬそうじゃ」

変ですね？あれだけゆーさんがパフォーマンスをしたハズですのに。
・・・・・残るは教室外で何か起きているとかでしょうか？

『お兄さん、すいませんです』
『いや。気にするな、チビッ子」
『チビッ子じゃなくて、葉月ですっ』

？ゆーさんの声と小さな女の子の声？
ガラッと音を立てて教室の扉が開きゆーさんと小学生くらいの女の子が入ってきました。

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

ん？ゆーさんの知り合いでは無さそうですね？迷子さんですか？

『お、坂本。妹か？』
『可愛い子だな～。ねぇ、5年後にお兄さんと付き合わない？』
『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』

『キサマ！造ちゃんを捨てる気か！！』
『ま、マテ！？俺はただ両方愛でたいだけだ！』
あはは！そろそろ警察呼びましょうかね？いい加減にしないと、どうなっても知りませんよ？

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』
『お兄ちゃん？　名前はなんて言うんだ？』
『あぅ・・・・・・わからないです・・・・・・』
『？　家族の兄じゃないのか？　それなら、何か特徴は？』

それにしても随分ゆーさん面倒見いいですね。意外と子供好き？
・・・・・まさか自分のこともそれ関係で面倒を見ているわけじゃないですよね？

『えっと・・・・・・バカなお兄ちゃんでした！』
なんとも凄い特徴ですね。お兄さんびっくりですよ

『そうか。・・・・・沢山いるんだが？』
すみません皆さん、先ほどの皆さんの態度で否定できません。

『あ、あの、そうじゃなくて、その・・・・・』
『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その・・・・・すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

早っ！？流石のアキさんもこれには涙が溢れていますよ？

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い・・・・・」

「あっ！バカなお兄ちゃんだっ！」

女の子がアキさんに駆けていき、いきなり抱きつきました。

「絶対に人違い、がどうした？」

「・・・・・人違いだと、いいなぁ・・・・・・・」

アキさん・・・・・

「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いは造しかいないよ？」

「アキさん？喧嘩売っていますか？」

「え？お兄ちゃん・・・・・。知らないって、ひどい・・・・・・」

あらら、泣きだしそうじゃないですか。ひどいお兄さんですね。

「バカのお兄ちゃんのバカぁっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きな

がら来たのに！」

これは・・・・・・キツイ！アキさんの心にダイレクトアタックしてます。

「明久・・・・・・じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

親友たちからの容赦ない一言で沈みかかっていますよ？

「待とうね、お譲さん。流石にお兄さんが泣きそうだからその辺に・・・・・」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに・・・・・」

「犯罪ですね、見損ないましたアキさん。実刑は・・・・・・」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「ごぶぁっ！？」

「必要ありませんでしたか。二人が裁いてくれるでしょう」

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

落ち着いてゆーさんが言います。今日はアキさんの自業自得です！

「瑞希。そのまま首を後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

あらら。これは流石に危険です。そろそろ助け船を・・・・・・

「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然・・・・・・」

「ふえぇぇぇんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」

「助ける余地なしですね、姫路先生、島田先生。お願いします」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「吉井君、そんな悪いことするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいっ！」

カオスになってきました。アキさんは二人に任せてこの子にいろいろ聞いておきましょう

「お譲さん？貴女はどなたといらしたのですか？」

「ふぇ？お姉ちゃんこそどなたですか？もしかして葉月と同じ小学校の６年生ですか？」

あはは！凄いぞ自分！リアル小学生の子にこんなこと言われました！ハッハッハッ、鬱だ氏のう・・・・・・

（アキさんは肉体と精神を・自分は精神を）何とか復活させて話を聞くと意外なことに島田さんの妹さんであることが判明しました。

アキさんとは以前アキさんが困っている彼女をその身を挺して？（アキさん談）助けたとか何とか

いやぁ～よかったです。アキさんにそんな気があったら悲しいですが警察署に連れていかなければなりませんからね。

「ところで、この客の少なさはどういう事だ？もう少しいてもいいと思うんだが」

と、教室内を見まわすゆーさん。

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？　どんな話だ？」

ゆーさんが屈み込んで、葉月さんの目線に合わせます。小さい子との会話の仕方をよくわかっていますね。

って、あれ？自分もそういえばゆーさんと話すとき屈んでもらってるような・・・・・？

「えっとね、中華喫茶には鬼が出るから行かない方が良いって」

「「・・・・・雄二（ゆーさん）？」」

「いや待て。何だその目は？俺はあれ以降何もしてないぞ？・・・・・恐らく例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

「十分鬼じゃな」

鬼というより悪魔っぽいですね。それにしても・・・・・・

「例の連中って、さっきの常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じゃないでしょ？」

ん～。いつもならそこまでする二人じゃないはずなんですが？今回のあの二人、いつもらしくない気がします。

「どちらにせよ、ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「ですね。噂がどこから流れているのか、それとどこまで広がっているのか確認しませんと」

葉月さんまで聞いているくらいです。おそらく相当広がっているのでしょう。

「あぅ、葉月は・・・・・・」

「とりあえず、俺らも休憩を兼ねて様子を見に行くぞ。島田、どうせならチビッ子も連れていけばいいだろ？」

やっぱりゆーさん面倒見いいですね。

「では召喚大会組全員が抜けますが、須川くん？後を任せてもよろしいでしょうか？」

「造ちゃんの仰せのままに！」

「「行ってらっしゃいませえええええええ」」

うん。正直怖いですが、ありがとうございます皆さん。

「って、あら？ゆーさんとアキさんは？」

「うむ、何やら知らぬが島田の妹が『短いスカートをはいた、綺麗なお姉さんが一杯いるお店』で噂を聞いたらしくての」

「？それとあの二人が今、全力疾走していることに何の関係が？」

「さぁの？ワシにも時折じゃがあやつらの考えが読めんことがあるのじゃ」

どうしたのでしょうね？目が血走ってますよ？

『アキ、最低』

『吉井君、酷いです・・・・・』

『お兄ちゃん達のバカ！』

女子組は何やらご立腹のようですし？よくわかりませんが見失う前に追いつきましょう。

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！　早く中に入るよ！」

「頼む！　ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！！」

「自分もゆーさんと同意見です。ヒデさん離して下さい」

「造よ。諦めるのじゃ！じゃなきゃワシが殺されかねん！」
「他の皆さんで行けばいいじゃないですか！ヒデさん？さてはこうなるとわかってましたね！？」

そう、ここはＡクラス。あの木下さんがいらっしゃる魔のクラスです。あ、ちなみにゆーさんとは霧島さんから逃げている仲間です。

Ａクラス戦後、何故か『造くんのこと気に入ったわ♪』と、木下さんからそれはもうありがたいお言葉をいただいてからというもの、事あるごとに自分を３人の先生と共に追いつめては、保健室で日高先生自慢のコスプレを強要されるようになりました。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんと、木下と月野の姉の木下さんが居るクラスだもんね」
「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？月野君もお姉さんの言うことは聞くべきです」

その解釈はおかしいでしょ！？いつから木下妹弟の義弟にされてるのですか！？

「それよりそろそろお店に入ろうよ？　もうすごくおなかが減っちゃったよ。ね？葉月ちゃん？」
「はいです！おなか減りました！」
「それじゃ入るわよ。お邪魔しまーす」

島田さんが１番手となり、Ａクラスの出し物：メイド喫茶へ入ります。

「・・・・おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのは知的な美人メイドこと、霧島翔子さん。ゆーさん?逃げるなら自分も一緒がいいです。

「それじゃ、僕らも」
「はい、失礼します」
「お姉さん、きれ～!」

島田さんに次いでアキさん達も入ります。

「・・・・・お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」
「ほれ、雄二に造。ワシらも行かぬと終わらぬぞ?」
「・・・・・・チッ」
「・・・・・・うぅ」

仕方ありませんね、最悪すぐ逃げ出せるように準備をしておきましょうか・・・・・・

「・・・・・お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」
「お帰りなさい、弟たち。今夜はお姉ちゃんと一緒に寝ましょうね」

「「「どんなアレンジだ（じゃ）（ですか）!?」」」

ここはどんな喫茶店でしたっけ・・・・・・流石に頭がくらくらします。

いつの間に木下さんが・・・・・・？

「霧島さんに木下さん、凄く大胆です・・・・・・！」
「ウチも見習わないとね・・・・・・」
「あのお姉さんたち、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様のリアクションですが見習うものは何一つないと思います。
てか島田さん！葉月さんがとんでもないこと言ってませんか！？それでいいのか姉として！

32時間目　リアル小学生葉月さん～見た目小学生造くん?～（後書き）

32話でした。読んでいただけて嬉しい限りです。

リアル小学生にこんなこと言われると本気でダメージが来ますよね。

あ、別に作者はそんなことありませんでしたよ?散髪に行って料金払おうとしたら小学生の値段でカットされていたなんてことないですもん!

・・・・・・鬱だ。

それはともかく、優子さんのイメージがさらに音を立てて崩壊している気がします
だ、大丈夫かな・・・（汗）

とりあえず、行き先わからぬ32話でした。
読んでいただいてありがとうございます。

３３時間目　変身！僕が女装で～自分はコスプレ？～（前書き）

サブタイで不安になった方はすぐ戻りましょう？
毎回思うんですが、しっくりくるサブタイなかなか思いつかないんですよね・・・

ま、いいか。とりあえず３３話スタートです

33時間目　変身！僕が女装で～自分はコスプレ？～

「お席にご案内いたします」

木下さんたちに連れられて席に向かいます。それにしても少々変わった出迎え以外はとても落ち着けそうな喫茶店ですね。ちょっとした休憩室にもなりそうです。

「・・・・・では、メニューをどうぞ」

霧島さんが立派に装丁されたメニュー表をくれました。教室といい衣装といいとても凝っていますね。流石Ａクラスといったところでしょうか？

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれが良いです」
「葉月もー！」

うんうん。女性陣はよく解っています。喫茶店には甘いものが定番です！

「ワシはこの『ほかほか抹茶ケーキ』を」
「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

ある意味この二人らしいチョイスですね。てかアキさん？そんなも

の頼んだら逆に迷惑でしょうに。
喫茶店は甘いものを食べる為にあるのですよ！

「「それじゃあ、俺は（自分）は・・・・・・」」

「「ご注文を繰り返します」」

待って！？自分とゆーさんまだ何も言ってませんよ！？
霧島さんと木下さんどうして！？

「「『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『ほかほか抹茶ケーキ』を一つ、『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』を一つ、『お姉ちゃんとの甘い時間』が一つ、以上でよろしいでしょうか？」」

「「全然よろしくねえぞ（ありません）！！」」

「・・・・・では、食器をご用意いたします」
「では、こちらになります」

女子三人とヒデさんにはフォークが、アキさんの前には塩が、自分の前には小学校の制服が、そしてゆーさんの前には、実印と朱肉が用意されました。

うんおかしい。何がおかしいって全てがおかしい気がします。

「しょ、翔子！　これ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入

れたんだ!?」
「・・・・・・では、メイドとの新婚生活を想像しながら、おまちください」

「き、木下さん!よく見たらこれ本当に自分の小学生時代の制服じゃありませんか!?」
「もう!優お姉ちゃんでしょ?・・・お姉ちゃん、すぐに仕事を終わらせてくるわね。いい子にしてるのよ?」

二人ともとても優雅にお辞儀して、キッチンへ戻って行きました。
・・・・・・じゃなくて!

「明久、造!お前ら何としても召喚大会に優勝しろ!しなければならないんだ!」
「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど・・・・・・」
「ゆーさん!それなら木下さんを止めるの手伝ってくださいよね!?」
「難儀じゃの・・・・・・」

まぁ、目の前の脅威は一旦置いておくとして今は妨害の話を聞きましょう。

「それで葉月さん?この辺りで先ほどの噂をお聞きになさったのですよね?」
「うん。嫌な感じのお兄さん2人が、おっきな声でお話してたの。あっ!いたいた。あそこに座っているお兄さんたちだよ!」

葉月さんの指差した先には・・・・・・

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな』

『ああ、おまけに暴力を振るう店員もいないしな！』

・・・・・ツネ・ナツ？貴方たち、よっぽど暇なのですか？

てかクラスの方はいいのでしょうかね？ここは小暮さんにいいつけておきましょうか？

アキさんが飛び出していこうとしますが、ゆーさんが抑えます。

「待て明久。ここで殴れば悪評が更に高まり噂に信憑性が増す」

「だったらどうするのさ雄二！このまま指をくわえて見てるだけなんて！」

「やるならもっと頭を使えってことさ・・・・・・おーい、翔子ぉ！」

「・・・・・・なに？」

呼ばれた瞬間に霧島さんが現れました。ひょっとしてゆーさんの近くにいましたか？

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

「・・・・・さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じような事を言ってる」

霧島さんが顔を歪めます。どうやらＡクラスにとっても良くない客みたいですね。

さて?どうしてくれましょうかね。

「そうか・・・・・よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」
「・・・・・わかった」
「わかっちゃうんですか!?」

う~ん。霧島さんがいいならいいのですが、やはりさっきのゆーさんの問題発言はどうかと・・・・・って、ちょっと待ったぁぁっ!

「き、霧島さん!?こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ!」
「そうよ!ここにはケダモノが沢山いるのよ!?」
「わぁ~。お姉さん、胸おっきいです~」

あろうことかその場でメイド服を脱ごうとした霧島さんを、姫路さんと島田さんが慌てて止めにかかります。霧島さん!葉月さんが真似したらどうするんですか!?

「・・・・・雄二が欲しいっていったから」
「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいといった!?予備のヤツがあれば貸してくれって意味だ!」
「・・・・・今、持って来る」

これには流石のゆーさんも真っ赤です。
霧島さんどれだけゆーさんのこと好きなのですか?

騒いでいたおかげで自分たちのテーブルはお客さんの注目の的になっています。

まずいですね、ツネ・ナツに近づきにくくなりましたよ?

「雄二!なんでもいいから早く連中を!」
「いいからもう少し待ってろ。姫路に島田、櫛を持ってはいないか?」
「?持っていますけど・・・・・・」
「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用のものがあれば全部」
「はぁ・・・・・・」

姫路さんが上着のポケットをごそごそとあさって小さなポーチを取り出します。
流石は女の子ですね。女の子はやはり身だしなみ用のものを持ち歩くんですね。

「悪いな。あとで必ず返す」
「・・・・・雄二、これ」
「おう。すまないな」
「・・・・・貸し一つ」
「だ、そうだ。明久、それに造」
「ゆーさん?どうして自分をそうナチュラルに巻きこもうとしているのですか?」

同盟を結んだじゃありませんか?まさかもう裏切り者が出てくるとはね。
ま、自分とゆーさん二人だけの同盟ですが・・・・・・

「わかったよ。霧島さん、御礼に今度雄二を一日自由にしていいよ」

「・・・・・ありがとう。吉井はいい人」
「ちょっと待て！どうして俺が！」
「霧島さん？今度いいカップル専用の喫茶店を紹介します。プロポーズには最適の良い場所だそうですよ」
「・・・・・ありがとう。月野もいい人」
「造、お前何気に怒っているだろ！？」

怒ってません、腹が立つだけです。

「で、これをどうするのさ、雄二？」
「・・・・・着るんだ」
「だってさ、姫路さん、美波、秀吉？」
「え？わ、私が着るんですか？」
「ウチは絶対似合わないわよ・・・・・？」
「どうしてワシが計算に入れられておるのじゃ？」
「心配するな、三人は着ない。というか面が割れているし攻撃できないだろ」
「・・・・・まさか」

姫路さんたちは着ない。葉月さんは丈が足りない。自分は論外・・・・・あれ？

「着るのはお前だ、明久！」
「いやぁぁぁっ！」

確かに嫌ですね。自分もいろいろ着せられているので、その苦しみ痛いほどわかります。

「そして造、お前はその小学校の制服を着ろ」
「いやぁぁぁっ！」
巻き込まれたっ！？てかそんな話をここですると・・・・・・
「「「造くんの小学生の時の格好が見れると聞いて！」」」
「造～。写真撮影はまかせろ～い♪」
「さぁ！お姉ちゃんにお任せよ！」
やっぱり出たっ！？先生方は召喚大会中でしょ？何でいるのですか！？
あと日高先生！？ひょっとして木下さんに自分の小学生の時の制服を提供したの貴女ですか！てか貴女しかいませんよね！？
「木下さんも仕事中でしょ「優お姉ちゃんって呼びなさい」更なる無茶振りしないでください！」
「呼ばなきゃこの前の写真、思わずＷＥＢで全世界に配信しちゃうかも♪」
「・・・・・優姉さん」
「まぁよし♪今度からそう呼んでね♪」
「造よ・・・・・・お主も大変じゃのう」
自分とアキさんはゆーさんの策略により、変身？することになりました。
自分は木下さ・・・優姉さんに、アキさんはヒデさんに着付けをさ

れましたよ。
あの二人の才能は凄いですね。全然嬉しくありませんが・・・・・・

「この上ない屈辱です・・・・・・」
「造、あとで雄二をシバくから一緒に殺ろうね・・・・・・・」

今日ばかりはゆーさんを助けませんよ・・・・・・
こうなったらヤケです！ツネ・ナツ！貴方たち二人を地獄に道連れにします。

「（アキさんはナツ、いえ坊主頭の方お願いします。モヒカン頭は自分にお任せを）」
「（わかった、元はといえばこいつらが悪いんだ。たっぷり殺らせてもらうよ！）」

「お客様」
「なんだ？・・・・・・へぇ。こんなコもいたんだな」
「結構可愛いな」
「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」
「掃除？さっさと済ませてくれよ？」
「ありがとうございます。それでは・・・・・・」
「ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて・・・・・・」
「くたばれぇぇっ！」
「ごばぁぁっ！」

「き、キサマは、Ｆクラスの吉「痛ぁあああああい」い・・・・・・？」

「痛いよう！このお兄ちゃんがぶったよう、うわあああああああん」

「月野？お前何をやって？・・・・・・ハッ！？」

「「「小さい子に暴力なんて最低ッ！」」」

「待て！こいつは俺らと同じ「ごめんなさい、ぶたないで！つくりいい子にするから！」だから違うって！」

「「「子供は国の宝だぞ！」」」

一応、１７ですから子供でいいんですよね？騙してはいませんよね？なんだか少し二人が哀れに思えてきました。容赦はしませんが。

その後ツネ・ナツはメイドにセクハラ・小学生に暴力を加えたとして（まあ、嘘ですが）

ゆーさんの鉄拳で鎮められました。

Ｆクラスの件も彼らが従業員に手を出したので、それをゆーさんが止めたと言うことが噂になり皆さんに伝えられたそうです。これで喫茶店は元に戻りますかね？

二人の件は何とかなりましたが・・・・・・

「吉井君っ！可愛すぎますっ！」

「アキかわいい！すっごく似合ってるわ♪」
「お兄ちゃん、お姉ちゃんだったですか？」

「「「造くん笑ってください！可愛い顔が台無しですよ！？」」」
「造、表情かたいぜ～？ホレ、写真撮れんだろうが」
「日高師匠。あとで焼き増ししてください」

「「今日は最悪だ（です）っ！！」」

アキさんと二人、凹みながらも逃げだして着替えながら三回戦へ向かうことになりました。
本当にこの調子で無事に進めるのでしょうか？

33時間目　変身！僕が女装で～自分はコスプレ？～（後書き）

以上３３話でした。何この混沌（カオス）？

今回も変なとこだらけですって？というか、いつも変なとこしかない？

ＨＡＨＡＨＡ気のせいですよ。今回見てわかったでしょ？例えば・・・・

1．優子さんついに、壊れた・・・・・・

2．小学生つくりくん

3．いつもの先生たち

うん。おかしい所なんか・・・・・・おかしな点しかなかったですね。

ごめんなさい。反省はしています。後悔は（ｒｙ

話がすごく飛んで申し訳ありませんが、読んでくださっている方がまた増えているみたいで、本当に嬉しいです。

皆さんの期待に応えられるかわかりませんが自分なりに、それこそのんきに進めていくと思います。これからもよろしくお願いします。

ではまた次回。ありがとうございました。

３４時間目　チャイナ！～着チャイナ？見チャイナ？～（前書き）

３４話です。まだまだ長いですね・・・・・・
レフェルさん、榊さん、さかさまテルテルさん。感想ありがとうございます！

とりあえずなんですし、早速行ってみましょうか。

３４時間目　チャイナ！～着チャイナ？見チャイナ？～

「で、三回戦は結局不戦勝じゃったと？」
「・・・・・はい」
「な、なんか相手が食中毒で棄権したんだよね」
「ヒデさん・・・・・姫路さん厨房に入っていませんよね？」

慌てて着替えて三回戦に行ったものの、相手は棄権という結果でした。
ウチのクラスの姫路（地獄行き片道切符）さんの胡麻団子を食べた人でないと信じたいです。

さて今とりあえず中華喫茶に戻ってますが、朝の人の出入りから考えるとお客さんは大分いませんね。姫路さんのお父さんや一部の先生方を納得させるためにも、噂が無かったことにされるくらいの何かが欲しいですね。

「ここは一度失った客を取り戻すにゃ、何かインパクトのあることをやる必要がありそうだな」
「ふむ。それで何をするか、じゃが・・・・・」
「任せろ。中華とコレじゃ安直過ぎだが効果は絶大だ。ムッツリーニが保障する」

そう言ってゆーさんが取り出したのは、とても綺麗なチャイナドレスです。
刺繍の鮮やかさといい布地の素材の良さといい相当立派なものです

よ。よく手に入れられましたね？

「ああ、ちなみにこれ作ったのムッツリーニな」

「なん・・・ですと・・・！？」

は？こーさんが！これをですか！？

・・・・・あの人は一体何者ですか！？一流のデザイナー顔負けですよ？

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に・・・・・・」

「ああ。コレを・・・・・明久が着る」

「それインパクトしかない気がしますが？」

「まっ、待って、お願い、許して！これ以上はホンモノだって思われちゃう！」

アキさんも散々な目にあってますからね。目が超必死です。

てかゆーさん。本気でしょうか？まぁ事と次第によっては霧島さんにご報告を・・・・・・

「おい、造。何か恐ろしいことを考えているだろう？冗談だからな。これを秀吉と姫路と島田に着て貰う」

「ほっ、なんだ。冗談か～」

流石にこれ以上はアキさんの神経が持ちそうにありませんし。

このへんで弄るの止めてあげましょうよ？ゆーさん。

「ワシは冗談ではないぞい！？それなら造にも着せるべきじゃろ！」
「ヒデさん！？そこで巻き込まない！・・・・・・幸か不幸かそのチャイナドレスはサイズが自分には合いません。ＨＡＨＡＨＡ残念でしたね！」
「つ、造～ワシを見捨てんでおくれ～」
「あ～残念残念♪自分じゃ着れないですからね～♪」
「くっ、ならば造用のチャイナドレスがあればよいのじゃな！？」

いやいや、どうすることもできませんよ。諦めてくださいな。
これは別に先ほど木下さ・・・いえ、優姉さんに捕獲されたときに裏切られたから、などといった私的な理由では断じて違いますからね？・・・・・・違いますからね？

「たっだいま～！って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」
「あ・・・・・残念です。可愛かったのに・・・・・・」
「お兄ちゃん。葉月、もう一回見たいな～」

おお、三人が帰ってきましたね。てか地味にまだ言いますか？
アキさんの精神ゲージが極限まで下がっていきそうですね。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらうぞ」

おお？珍しくアキさんが強気ですね（女子相手に）

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ？でも・・・・・・」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど？でも・・・・・・」

「やれ、明久」

「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え・・・・・」

「「吉井君（アキ）が望むなら何だって・・・・・・」」

「ゴメン！何かまだ悪いことしてないのに悪い気がしてきた！すんませんマジすんませんした。自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前・・・・・・」

「てか、何やってるんですか・・・・・・？」

あとそこの女子二人！何口走ってるんですか？何残念そうな顔してるんですか！？

「でもどうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

「大好・・・・・・愛してる」

言い直した意味皆無ですね？にしてもその言葉・・・・・・

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく来てあげるわ」
「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

この二人を奮い立たせる魔法の言葉ですね。アキさんマジ魔術師♪
あら？葉月さんが物欲しそうにチャイナドレスを見てますね。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」
「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」
「お手伝い・・・・・・？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」

なるほど、着てみたかったのでしょうね。お姉さんの島田さんも着るみたいですからね。でも葉月さんには悪いですが、彼女に合うサイズのものはありませんよ。

「葉月さんごめんなさい。気持ちは嬉しいのですが、葉月さんの分はサイズが・・・」
「・・・・・・・・・・・・俺の嗅覚を舐めるな、造」
「・・・・・あの、こーさん？どうしてちょうど葉月さんサイズのチャイナドレスが二着ほどあるのでしょうか？そしてどうして自分に一着渡してくれるのですか？」

いつの間に作ったのですか？と言いますか何故に自分の分を！？

「ふっふっふっ。これで造も着なければならぬのう？」
「ヒデさん！？さてはさっきこーさんにこの事を喋りましたね！？」
「大人しくお主も着替えるのじゃ！さもなくば今この場に姉上を呼びだすぞい？」

くっ、ヒデさんが携帯電話を片手に交渉してきます。
なんて悪質な手を使うのですか！これでは身動きとれません！？

「で、ですが番号を打ち込む前に携帯を取り上げれば済む話です！」
「登録しておるから一瞬で電話掛けられるぞい？」

うぎぃいいいいいいいい！これだから携帯は嫌いです！自分が掛けたいときには使えない癖に！

「ぐぅ・・・・・参りました。ですがっ！今度はそう上手くはいきませんよ！」
「ほれ、そんなこと言っておる暇があるなら着替えるぞい？」

今に見てなさい！ヒデさん！

そんなことをしている間にも、姫路さんと島田さんはチャイナドレスを着たまま三回戦に行ってしまいました。

何でもゆーさん曰く一般公開が始まる三回戦で宣伝すれば、上手く人が集まるだろうだそうです。

相変わらず計算されていますね、ゆーさんの作戦って。

「造よ、それでは着替えるとするかの」
「はいはいです。どうして自分が・・・・・・」
「ちょ、ちょっと秀吉と造!ここで着替えるの!?きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ!」

あはは♪やっぱり喧嘩売っていますよね、アキさん?いい度胸です。

「・・・・・最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじゃが」
「・・・・・・同感ですです。何だと思っているのでしょう?」
「気のせいだ。秀吉は秀吉、造は造だろう」
「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』なんだから。男とか女とかじゃないさ。そして造は性別以前に手を出したら犯罪だからね」
「・・・・・・俺が言ったのはそういうことじゃない」

これジョークでしょうか?ジョークですよね?
もし本気でしたら、あることないこと姫路さん島田さんに吹き込みますからね?

「んしょ、んしょ・・・・・・」

あ、葉月さんのこと忘れていました。手伝ってくださるそうで助かりますね♪

「・・・・・・・・・・・・・！！（ボタボタボタボタ）」

「は、葉月ちゃん！キミもこんなところで着替えちゃダメだよ！ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

「・・・・・・どうして小学生相手にそうも取り乱せるのじゃろうか？」

「こーさん？それにその他Ｆクラス男子？今すぐ自首しなさい。今ならまだ通報だけは勘弁しておきますよ？」

大量に出血しているはずの、鼻を押さえているこーさんは心から幸せそうでした。

３４時間目　チャイナ！～着チャイナ？見チャイナ？～（後書き）

３４話でした。今回ちょっと短めかな？

何かここの姫路さんと美波、ちょっと？素直になりすぎな気がしなくもないですがまあいいですよね？

話が変わりますが、試召戦争編が２０話越えしていたので（自分でも驚きました）今回の章はなるべく多くなり過ぎないように気をつけます。

次回、再び造が黒くなるかも？読んでくださってありがとうございました。

35時間目　ニッコリ笑顔で毒を吐く～教頭限定スマイル♪～（前書き）

35話です。今回は再び造が黒く?なっちゃいます♪

書いてて自分もどうしてこうなったのか分からなくなったのは内緒。

ではよろしくお願いします。

35時間目　ニッコリ笑顔で毒を吐く～教頭限定スマイル♪～

月野Ｓｉｄｅ

「たっだいまー」
「ただいま戻りました～」

おお、姫路さんたちが戻ってきてくれました。助かります！

「丁度良かったよ。二人とも疲れてるところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」
「もう人手が足りませんからね、よろしくです！」

驚くべきはゆーさんの作戦と、姫路さん島田さんの人気の高さですかね？流石にチャイナドレスだけでは無理だろうと思ってましたが、徐々にお客さんが増えていき・・・・・・

姫路・島田ペアの勝負が終わるころには、もう席が埋まってしまいました。
にゃんこの手も借りたいくらいですよ。・・・・・・にゃんこはニガテですがね。

「良かった。だんだん持ち直してきたのね？」
「本当に良かったです♪」
「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

「飲茶に関しては相当のものですからね。プロ顔負けの出来です♪」

こーさん、須川くんも誇らしいでしょうね。さあ張り切って頑張りましょう！

葉月さんはともかく、ウェイトレスが自分とヒデさんって酷いあり様でしょうからね・・・・・・

「それじゃ二人ともウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オッケー」

チャイナドレスの裾を翻して二人は注文票やペンを取りに行きます。これでまたお客さんも増えてくるでしょう。これ以上増えると今度は席が足りませんが・・・・・・

「君。注文をしてもいいかな？」

「あ、はい。どうぞ」

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

アキさんがどなたかに呼ばれましたね。ともかく自分も・・・・・・ッ！？

・・・・・何ですか？アキさんに声をかけた人物をよく見ればあの竹原（クズ）じゃないですか。

アイツ何の用ですかね？どうやらアキさんと話をしているようですが。

・・・・・ここは黙って見過ごすのは危険ですかね。アキさんが心配です。

明久Ｓｉｄｅ

「ありがとうございます。後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」

やれやれ、接客って大変だね。注文を取るだけでも一苦労だよ。

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」
「はい。なんでしょうか」

おっとっと？折角決まり文句を噛まずに告げられたのにな。何だろ？って、今更だけど教頭先生じゃないか。さっきもいたのにまた来てくれたのかな？

「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」
「え？吉井明久は僕ですけど・・・・・・」
？何で先生が僕の名を？

「ああ、そうかい。君が・・・・・吉井君（笑）か」

「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいかと思います」
「ああ。それはすまない「本当に最低ですね。竹原教頭（屑）」・・・なんだと？」

って、ちょっと待った！？造？何言ってるの！？これ相当失礼なことじゃ！？

「つ、造。お客さんだよ！失礼のないようにしないと！」
「大丈夫でしょ？生徒をそんな風に言う教師にはこれくらい言っても」
「いやいや！？その発想もどうかと思うよ？」
「ああアキさん、何か島田さんが頼みがあると言ってました。そっちお願いします」
「えっと・・・・・だ、大丈夫なの？造は」
「はい？何がですか？」

これ、ホントに造！？いつものぽやぽやした感じがしないんだけど！？
顔は凄く笑って見えるけど、えらく怖いっ！？

う～ん、まあ本人が大丈夫って言ってるから一応は心配ないと思うけど・・・・・

「あ、あの先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」
「構わんよ。特に用があったわけではないからね」
「へ？そうだったんですか？」

なら何で呼んだんだろ？てか僕まだオーダー入れてないんだけどい

いのかな？

「アキさん、自分がオーダー入れときます。島田さんが困っているといけないので早く行ってあげてください」
「あ、うん。ありがと造！行ってくるよ！」

ちょっと気になるけど、大丈夫だよね・・・・・・
忙しいから、まずは喫茶店を成功させることを考えよう！

月野Ｓｉｄｅ

「・・・・・お待たせしました。本格ウーロン茶と、胡麻団子でございます」
「君が持ってくるとはね。何か入っていなければいいのだが？」
「いやいや、冗談きついですよ？誰が屑と同じことしますか？死んでも御免です♪」

さぁて、仲良くお話しましょうか？ねぇ教頭？

「それで？アキさ・・・吉井くんに何の用だったのですかね？どうせ汚い話なのはわかってますがね？」
「教師に向かってそれか？学園の恥さらしは言葉遣いもなっていないようだな？小学生からやり直すことを提案するよ」
「あはは！教頭は生まれ変わった方がいいのでは？・・・・・・いい加減、吐きなさいな」

はぁ、またムカムカしてきました。コレと話すのきっついな・・・・・・

「とりあえず吉井くんに接触したところを見ると・・・何か彼に危害を加えるつもりじゃないですか?」

「だったら?どうするのかね?」

ちっ、コレが否定はしないあたり、これはちょっと所か本気で危ないかもしれませんね・・・・・・

「もし、彼や自分たちに危害が及んだら・・・・・・本気で知りませんよ」

「だとしても私には関わりが無いはずだがね?やれやれ、本当に何を言っているのやら」

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・・・今回もしあの時と同じことになれば、潰すよ?覚悟しておいてください。

ああ、折角のウーロン茶と胡麻団子が冷めますよ?食べないんですか?」

「いらんよ、こんな所に来たくもなかったからね。私は早く新鮮な空気を吸いたいんだ。

・・・・・・そうそう、吉井君だったね。彼、教室から出てやけに帰るのが遅いじゃないか?」

「ッ!?アンタ!何かもう手ェ出したんか!?」

「随分声が大きいじゃないか。営業中だろう?・・・・・・お代は

ここに置いておく。失礼するよ」

そう言って、アイツは出て行きました。ちぃ！アイツに構ってる暇はないみたいです！

周りのお客さんも、なんだどうしたとこちらを見ていますが、後でフォローするとして・・・・・・

「アキさん、無事でいてくださいね！！」

今はアキさんが優先ですっ！

アキさんが茶葉を取りに行った空き教室に急いで行くとそこには・・・・・

『お、覚えていろっ！』

『てめぇの面、忘れねぇからな！』

『夜道に気をつけろよ！』

・・・・・あれ？負け犬さんが仲良くゆーさんに向かって吠えています？

どういうことなの？説明ぷりーず？てか拍子抜けしちゃいますよ・・・・・？

「こ、これは一体・・・・・・？」

「あ、造。どしたの？」

「アキさん！無事でしたか！？えっと、何がありましたか？」
「ん～よくわかんないけど、なんか雄二と喧嘩したい人が来たみたいだね」
「何です？そのはた迷惑な理由は・・・・・・」
「ったく面倒だな。おう、明久に造！お前ら早く教室に戻るぞ」
「・・・・・この人たちなら、大丈夫ですかね？」

「「？？？」」

一先ず安心しました。いろいろ心臓に悪いですね、全く。
ですがやはりハッタリではありませんでしたね。これは非常にまずいです。

・・・・・仕方ありませんね。

「あの、ゆーさん。ゆーさんにだけは誤魔化せそうにないので、少し耳に入れてほしいことがあるんです」
「？なんだ？・・・・・・ヤバめの話か？」
「・・・・・・・」
「わかった。少し場所を変えるか」

先ほどの空き教室に戻り、今起こるかもしれないことをゆーさんに相談します。
教頭がもしかすると営業妨害まで命令しているかもしれないこと、アキさんが狙われているかもしれないことを一通り話しました。

「・・・・・なるほどな。だがそんなに手段を選ばないなら、下

手すると警察沙汰になるな」
「寧ろその方がスキャンダルになって、アイツにとっては都合がいいかもしれません」
「だがお前のことだ、何らかの対策はしているんだろう？」
「はいです。一応信頼できる先生に見回りしてもらったり、自分も少なくともアキさんからはなるべく離れないように心がけていますが・・・・・・」
「教頭が相手だと、その動きも見破られている・・・か。ふむ、安心しろ。俺も出来る限り気をつけておく」

ゆーさんの理解力には助かります。彼なら何らかの対策を考えてくれているでしょう。
少なくとも清涼祭が終わるまでは気が抜けませんから。

「・・・・・悔しいです、黒幕が分かっていながら何もできないなんて」
「おい、造。お前少し気に病み過ぎだぞ。お前一人が抱え込む問題じゃないだろう？」
「ですがっ！」
「ったく、ガキだな？そのまま見た目通りか？」

そういってゆーさんが自分の頭にポンッと手を乗せます。

「ゆーさん・・・・・・？」
「もっと俺らに頼れ。じゃなきゃお前がパンクすっぞ？」
「・・・・・はい、です」

ホント、いいクラスメイトに恵まれていますね。自分・・・・・・

ゆーさん、ありがとうございます。

35時間目　ニッコリ笑顔で毒を吐く～教頭限定スマイル♪～（後書き）

35話でした。う～ん、造ってこんなキャラですっけ？

だんだん作品のコンセプトの『のんき』さがなくなってきている気が（汗）

ま、本質はのんきなんでいいんでしょうかね？

あと、ラストの雄二がちょこっとかっこつけ過ぎましたかね？いいや、雄二って何だかんだでかっこいいキャラだし。

ここで、今さらですが自分のキャラを（造とか）使いたい他の作者様がいらっしゃったら、どんどん使っちゃって下さい。造も暴れたいみたいですし。

次回は結構詰め込んでます。読んでいただき本当にありがとうです！

３６時間目　僕にいい考えがある！～死亡フラグですか？～（前書き）

３６話です。今回はちょっと多めかな？

大体、姫路・島田ペア戦から霧島・木下ペア戦？まで辺りですかね

それでは今回もどうぞです。

36時間目　僕にいい考えがある！～死亡フラグですか？～

その後は何も問題なく、なんだかんだで二時間が過ぎ・・・・・・

「アキさん、そろそろ四回戦じゃないですか？」

「えっ？もうそんな時間？」

随分と忙しかったからですか、時間がたつのが早かったですね。

「あれ？アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？実は私達もそろそろ出番なんですよ～」

二人がトレイを置いてきました。・・・・・・あれ？

よくよく考えたら今回の相手って姫路さん島田さんペアなのでは？

・・・・・・どうしましょう。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこかいっちゃうの？」

おやおや。アキさんのズボンの裾を握りながら、寂しそうな顔で葉月さんが言います。

本来駄々をこねる子ではないようですが、アキさんがいないのは寂しいようですね。

「チビッ子。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だからおとなしく待ってないとダメだ」

本当に子供の扱いに慣れてますね、ゆーさん。意外と教師などもあっているかもしれませんね。

「う～。でも・・・・・・」

「その代わり、良い子にしてたら・・・・・・・・バカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな？」

超弩級の爆弾をゆーさんが投下しました。犯罪ってレベルじゃないですね☆

「葉月お手伝いしてくるですっ！」

「ち、違うんだよ葉月ちゃん！僕には君が期待するような財力はないんだ！ねぇ、聞いてる！？」

「聞く前に行っちゃいましたね。・・・・・・あらら、それよりアキさん、後ろ後ろ～」

「ゑ？」

「アキ、ちょっと校舎裏まで来て？」

「美波ちゃん、ちょっと待ってください・・・・・・よく見れば次の対戦相手は吉井君たちのようですから。召喚獣でお仕置きしたほうが遠慮なくできますよ？」

追いつめられましたね。てか姫路さんも島田さんも良くも悪くも（この場合は悪く？）Ｆクラスの空気に馴染んでいますね。

「ちょっと待って！僕の召喚獣はダメージのフィードバックつきなんだよ！？姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に・・・・・」

「フン、望むところだ」

「雄二！パートナーでもないのに勝手に僕の生命を左右しないでよ、お願いだから！」

コレどうやって収集つけましょうか？

「上等よ。早く会場に向かいましょうか。アキがどんな声で鳴くか楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら、明久をどこまで大きな悲鳴をあげさせられるか、じっくりと中継を見てやる。お前がどこまで殺れるか見せてもらおう！」

「いつの間にやらペアで戦うことすら忘れてませんか？アキさん、出来る限り手助けします」

「造いいいいいいい！君だけが僕の味方だよ！」

う～ん、ですがこの二人多分アキさんのことしか考えていませんね。悪い意味で

～しばらくお待ちください～

試合の結果ですが、とりあえず『自分』が勝ちました。

え？そこは『自分たち』何ではないかですって？いやぁ、あの二人完全にアキさんしか狙わなかったですからね。とりあえず一撃でや

っつけることは出来ました。

ただ二人を倒した後もアキさんへの折檻は終わらずに、アキさんは今も楽しいお説教中です。

『止めようものなら月野もまとめて討つ』と二人のオーラが告げています。

どうしようもありませんしここは温かく見守ることと、終わり次第アキさんを治療してやることしか出来ません。

「うぅぅ、ひきょうよ月野」

「酷いです・・・・・・」

「そんなこと言われても・・・・・・てか試合をほったらかしてアキさんに攻撃を仕掛ければ隙だらけになることくらいわかってたでしょう？」

「二人とも僕自身と僕の召喚獣の両方に攻撃してくれたもんね・・・・・・」

復活したアキさんたちと教室に戻りながらそんな話をします。

一番の被害者のアキさんは、もう少し労られてもいい気がしますが・・・・・・

「とにかくこうなった以上は絶対優勝あるのみよ！」

「勝って下さいね、二人とも！」

「もちろんさ！絶対優勝する！全てうまくやってやるさ！」
「その通りです！誰にも負けませんよ・・・・・おや？喫茶店かなり盛況じゃないですか？」
「おお、本当だね。結構いいかんじだ」
「よかった。宣伝の効果があったみたいですね！」
「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味が無いものね」
「グッ！そういえばこの恰好のまま自分大会に出てたんですよね・・・・・」

今更ですが、恥ずかしいってレベルじゃないですよ、コレ。誰もツッコミませんし・・・

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

アキさんを見つけた葉月さんは一目散に駆け寄ります。寂しかったのでしょうかね？

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」
「んにゃ～・・・・・・」

『お、あの子たちだ！』
『近くで見ると一層可愛いな！』
『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

お客さんの中からそんな声があがります。

「うむ。全員戻ってきたようじゃな。ウェイトレスがワシ一人だけじゃし大変だったぞい」
「そうだな。しかも数少ないウェイトレスが固まってると客が落胆するぞ。帰ったばかりで悪いが今は喫茶店に専念してくれ」
？ああ、確かにじろじろ見られてますね。てか何で自分も？

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」
「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りましょうか！」
「はいっ。葉月も頑張りますっ」
「・・・・・・ワシは男なのじゃが・・・・・・」
「・・・・・・右に同じく。ここで『自分は男だッ』と言ったらどうなりますかね？」
「造に秀吉。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」
何か釈然としませんね。ま、今日はしかたありませんか。我慢していきますか！

「おっと。そろそろ俺たちも四回戦だ。秀吉、行くぞ」
「おお、そうじゃったな。では皆の衆、後は任せたぞい」
「・・・・・・ゆーさん。勝てますよね？確か相手は霧島さん&優姉さんペアですが」
「ふっ、俺が何の策も用意していないとでも？」
寧ろその策の上を行く霧島さんの様子が見えますが？

「ま、見てな。俺の生き様を！」
「もうそれ死んでませんか！？」
「・・・・・雄二が追いつめられる未来しか見えない気がするよ？」

しばらくたってFクラスに、関節技を極められたあげく縄で縛られたヒデさんと、何やら虚ろな言葉を呟きながら廃人となっているタキシード姿のゆーさんが梱包されてAクラスから送られてきました。

「「・・・・・・・・・・・・」」

ゆーさん？何か言うことは？

「あ〝ど　ば　だ　の〝ん〝だ　（ガクッ）」
「造よ・・・・・・準決勝で、姉上が待っとるそうじゃ（ガクッ）」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「どうすんのさ！？雄二！」
「ゆーさん？後で説教です☆」

勝てますかね？一気に不安になってきましたよ？

「それでどうしましょう？ゆーさんの策が破られた以上、優姉さんと霧島さんに実力で挑まねばなりませんが・・・正直勝てる気がしませんね」

「くっ、やっぱり雄二じゃ当てになんないね。・・・・・・仕方ない、造！ここは任せて、僕にいい考えがある！」

「それなんて死亡フラグですか？」

どうしましょうか？信じたいのは山々ですが先ほどのゆーさんの件があります。

すっごく嫌な予感しかしませんね。

「それにこのままじゃあの二人には勝てないよ！大丈夫。僕を信じてよ、造」

「うっ・・・・・本当に勝てるのでしょうね？」

「もちろんさ！姫路さんと美波に約束したでしょう？絶対勝つよ。（どんな手を使ってでもね！）」

「むぅ、解りました。期待してますよアキさん！（信じてますよ！）」

「うん！さあ逝こうか・・・・・・あっ、セコンドに雄二たちを連れていくね♪」

「？　はぁ、セコンドですか・・・・・・？」

行くの字が違う気がしますが、ここまで言うならアキさんの作戦に頼ってみましょう。

ですが、ゆーさんは今セコンドとしてアドバイスできるほど体力が回復してませんよ？
てかまだ意識が戻ってませんね。でしたら鍵を握るのはヒデさんでしょうか？

ま、最悪自分が自爆特攻で倒すくらいは出来ると思いますし、何とかなりますかね？

さてさて、やってきました準決勝。ここで負ければ折角の苦労が台無しですし勝たねばいけませんね。相手はトップクラスの成績を有する二人ですが、こっちだって召喚獣の操作に関してはトップクラスの実力を持った二人です。負けません！

それにアキさんの『作戦』がありますからね。

「・・・・・吉井に月野、私と雄二の邪魔をしないで」
「いやいや、そんな気は一切ないのですがね？」
「造くん？お姉ちゃんに勝てるとでも思ってるの？」
「ぐっ、今日こそは自分の方が年上ってことを分からせます。覚悟して下さい！アキさん『作戦』は？」
「ふっ、僕と秀吉の出番だね？・・・・・秀吉！」
「うむ。任せよ」

？アキさんがゆーさんを支えてゆーさんを霧島さんの方へ向けてますね？一体何を？

『翔子、俺の話を聞いてくれ。俺はこの清涼祭が終わったらお前に大事な話がしたいんだ』

「・・・・・・話？」

えっと？これ何かのギャグか何かでしょうか？ヒデさんがゆーさんの声まねをして、それにアキさんがゆーさんの体を動かしながら霧島さんと何やら交渉？しています。

いやこれ、無理がありません？霧島さんも普通に会話してますが、おかしいと思うのは自分だけでしょうか？

『お前にとって、とてもいい話だ。それが何かお前もよく分かるだろう？』

「・・・・・・・！雄二」

嘘ぉ！？何か上手くいきそうなのですが！？霧島さんどんだけゆーさんしか見えてないんですか？

『ペアチケットも俺が必ず手に入れて見せる。胸を張れるようにな。だからここは譲ってくれ、式は如月グランドパークで挙げような！』

「・・・・・・うん、うん！」

『ありがとう翔子。愛してるぞ』

「・・・・・・私も雄二のこと愛してる」

だっ、駄目だ・・・・・・圧倒的にツッコミ要員がいません！何もかもがおかしいのにどうして誰もツッコまないのですか！？

ただ一つだけはっきりとしていることは、ゆーさんが詰んだってことくらいですか？

「よっし！最強の敵はこっちに堕ちた！後は木下優子さん、キミだけだ！」

「呆れてつっこめませんでした・・・・・・」

「全く、代表も代表よね？その点アタシにそんな手は通じないわよ？」

「ふっ。木下さん、そう言っていられるのは今のうちだよ？こっちにはムッツリーニが撮った最強の武器があるからね！」

「最強の武器ですって・・・・・・？」

うん、もう最悪の展開になってきた気がします。アキさんが掲げるは一枚の写真。

確かそれこーさんが先ほどから自分を（チャイナドレス　ｖｅｒ）撮っていたヤツじゃないですか！？

「ちょっとアキさ・・・・・・（ムグゥ！？）」

「すまぬな、じゃがこれも姫路たちの為じゃ。大人しくしておれ造よ」

「ムグムグ！ムグーゥ！！ムームームー！？（ヒデさあああああ

あん!?ヤメテ?これ以上は自分のいろいろなものが優姉さんに奪われる!?お願い離して!）」

ヒデさん、ちょっと!?やめてよして堪忍して!?抵抗虚しく優姉さんが釣られて行きました。

・・・・・いやいや、流石に召喚大会を放り出すなんてことはいくら優姉さんでもないでしょう。

「ちょっと木下さん、こっちに来て。交渉しようじゃないか。・・・・・うん、そうこれこれ。これはサンプルに過ぎないんだけど、木下さん次第ではアルバムを譲ってもいいよ」

「先生すみませんが、どうやらアタシたち熱が出てきたので戦えそうにありません。棄権させてください」

ちょっとおおおおおおおおお!釣られたあああああああああ!?

こうして準決勝は何というか召喚獣と無縁のところで決着がつきました。

なんかこう、もうヤダ・・・・・・

３６時間目　僕にいい考えがある！～死亡フラグですか？～（後書き）

３６話でした。いやはや、造も大変ですねー（棒）

今回は詰め込み過ぎて、展開が早かったかもです。なかなか上手くいきませんね。

次回ですがある意味原作でもメインイベント？誘拐事件が起こってしまいます。

正直に申し上げましょう。超展開過ぎるかもです。

ですが今までもそんな感じでしたし、もう知りません。行くとこまで行きますよ？

後、すみません。清涼祭編が終わったら、更新スピードが落ちちゃうかもしれません。

なるべくはあかないようにしたいのですが、ちょっといろいろありまして（泣）

その時になったら連絡します。とにかく読んでいただいてありがとうございます！

37時間目　誘拐・救出・大暴れ！～土下座もあるよ！？～　（前書き）

どうも糖分摂取魔です！

気がつけば清涼祭編も半分をきってましたね。早いのやら遅いのやら・・・・

今回もちょっと多めで、超展開多めです。すみません・・・・

さてさて、では37話に行きましょう！

37時間目　誘拐・救出・大暴れ！～土下座もあるよ！？～

「おおっ、勝ってくれたのか！明久、造。気絶していたせいで何があったわからんが、とにかく助かったぜ！」
「雄二はもっと僕に感謝すべきだよ♪今度何か奢ってもらうからね！」
「ったく誉めるとすぐこうだ、一体どんな手を使ったんだ？」
「・・・・・最悪の禁じ手ですよ。寧ろ大失敗（ブランダー）ですかね？」
「あら？でも不正はなかったわよ？」
「あ？・・・・・まあいい。これで俺は晴れて自由の身だ！」

いいえ？もうゆーさんにそんな未来はないと思います・・・・・・・今くらいは幻想（ユメ）を見させてあげてもいいですよね？

あれから、復活しそうにないゆーさんを保健室で（日高先生秘伝の薬で）回復させ、休憩にFクラスに行くと言ってついてきた優姉さんと四人で教室に戻っています。

ちなみにこーさんとヒデさんまでも抜けると喫茶店に影響が出るので、先に戻ってもらいました。

「と、とりあえず早めに戻りましょう。・・・・・少し心配なことがありますし」

「だな・・・・・ところで、姫路や島田は教室にいるのか？」
「え？　まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」
「ウェイトレスなら普通は教室にいるでしょう？」
確かにそうですね。何故姫路さんと島田さんを？

「多分、そろそろ仕掛けて来る筈だと思うんだが・・・・・」
「！（ゆーさん、まさか教室にいる方まで！？）」
「（そこまでは分からんが、最悪の可能性を考えると、な・・・・・・）」
確かにアイツのことです。それくらいはやるかもしれません・・・・・

「・・・・・・・・・・雄二っ！」
教室の前まで行くと、ドアの前に立っていたこーさんがなにやら慌てて自分たち3人に駆け寄ります。

「ムッツリーニか。何かあったのか？」
「・・・・・・・・・・ウェイトレスが連れて行かれた」
「えぇっ！？　姫路さん達が！？」
「っ！そこまでしますか！？」
「は？何の話よ？」
それはいくらなんでも犯罪です！ここまでの外道ですかアイツは！？

「やはり俺や明久と直接やりあっても、勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」
「ってそんな事より、姫路さん達は大丈夫なの!?　どこに連れて行かれたの!?　相手はどんな連中!?」
「落ち着け明久。これは予想の範疇だ」
「え?　そうなの?」
「ああ。もう一度俺たちに直接何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちょっかい出してくるか、そのどちらかで妨害工作を仕掛けてくると予想できたからな」

「ねえ?一体何の話よ?何やら物騒な会話しているじゃない?」
「すみません、話している暇はありませんが営業妨害の犯罪版です!優姉さん、頼みがあります」
「・・・・・随分大変なことになっているのね。その頼み聞きましょう」
「保健室の日高先生に『月野が“力”を貸してほしいと言っていた』と伝えてください」
「?どうして師匠を?警察に連絡は?」
「寧ろ警察より頼りになります。お願いできますか?」

無茶なお願いですよね。警察の仕事なのにまずは日高先生に連絡なんて・・・・・・
でも頼れるのは今はあの方たちなんです!

「うん、わかった。貴方が言ってるもの、大丈夫よね。・・・・・・

場所は？」
「それは多分すぐに特定できるはずです。無理言ってすみません」
「いいわ、任されたから！」

そう言って優姉さんは保健室へ駆けて行きました。
何も聞かないで手伝ってくれる優姉さんは本当に優しいです。

さて自分たちは・・・・・・

「アキさん、ゆーさん、こーさん。行きましょう！」
「・・・・・・・・・・・・（コクン）」
「造、僕らはどうするの！？」
「明久。王子様の役目は、昔から決まってるだろ？」
「え？　それって？」
「お姫様をさらった悪者を退治する事さ」

『さてどうする？坂本と・・・・・吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』
『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』
『坂本って、まさかあの坂本か？』
『ああ。できれば事を構えたくはないんだが・・・・・』
『気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその二人を動けないようにすることなんだから』

『いや、三人だろ？依頼では“小学生には気をつけろ”って言われてんだが？』
『小学生相手にどう気をつけるんだ？んな情報いらねえよバカ』

こーさんが（何故か）持っていた受信機から、音楽に混じってそのような会話が聞こえてきます。

「（雄二、造。この連中って）」
「（ああ。黒幕に依頼されたそこらのチンピラだろうな）」
「（自分たちの情報を持っているところを見ると間違いないでしょうね）」

こーさんに案内された先は、文月学園から歩いて五分程度にあるカラオケボックスです。
どうやらパーティールームに、全員連れていかれたらしいですね。

『お、お姉ちゃん……』
『アンタら！いい加減葉月を離しなさいよ！』

中で島田さんの怒声が聞こえます。恐らく葉月さんを人質に取られて動けなかったのでしょう。

『お姉ちゃん、だってさ！　かっわいぃー！』

ムカムカしますね。あの屑並みです。やはりあの屑とつるむとこんな風になるのですか？
その声を聞いて、アキさんは飛び出しそうになりました。

「（待て明久、勝手に行動するな！気持ちはわかるが、まずは人質の救出が先だ。ムッツリーニがうまくやってくれるまで待つんだ！）」

「（下手に動けば余計に状況が悪くなるかもしれません、ここは堪えてください）」

「（・・・・・・わかったよ）」

アキさんも悔しいですよね、大事な人たちが危ない目にあっているのに何も出来ないのは・・・・・・

くぅ、まだですか！？日高先生！

『・・・・・・・・・灰皿をお取替えします』

こーさんが潜入しました。頼みます！もう自分もアキさん、ゆーさんも限界に近いです！

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！』

『あっ！ズリー！それなら俺二番ね！』

『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください！』

『だってさ～。どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やっ！さ、触らないで・・・・・・』

『ちょっと、やめなさいよ！』

『あーもう。うっせぇ女だな！』

『きゃぁっ！』

ドンッ

という何かを突き飛ばした音と島田さんの悲鳴が響きます。
その後数瞬遅れて聞こえてきたのはガシャァンなんていう、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音でした。

「（おい、明久！）」
「（アキさん！）」

アキさんが今まで見たことがないほど怒っています。
いえ、怒っているでは済まないでしょう。自分たちの声が届いていません。

『おじゃましまーす！』
『よ、吉井君？』
『アキ・・・・・・・・・』

「マズイっ！明久完全にトんでやがる」
「ゆーさん、タイミングを見て自分たちも行きますよ！！」

『ハァ？お前誰よ？』
『それでは、失礼して・・・・・・死にくされやぁぁっ！』
『はごあぁぁっ！』

アキさんの怒りを込めた一撃で、もう一人倒してしまったようです。

『てっ、てめぇ！ヤスオに何しやがる！』

ゴキッ

と鈍い音が聞こえます。アキさん殴られました！？

『イィッシャァァー！』

『ごぶぁぁっ！』

アキさんは殴られたことも気にせずもう一人倒してしまいました。

強い・・・・・アキさん怖いくらい強いですね。

『テメェら、よくも美波に手を挙げてくれたな！全員ぶち殺してやる！』

『コイツ、吉井って野郎だ！』

『どうしてここが！？』

『とにかく来ているなら丁度いい！ぶち殺せ！』

『たった一人で調子こいてんじゃねぇよ！』

『舐めてんのか！』

『・・・・・っ！』

「ゆーさん、行きましょう！」

「ああ！わかっている、腹が立ってんのは明久だけじゃないからなっ！」

そう、自分も我慢の限界です。さあ力は大事な時にこそ使わねば。

「お前ら全員、絶対ぶっ飛ばす・・・・・・・・・・！」
「やれやれ・・・・・この阿呆が。少しは頭を使って行動しろって・・・・・のっ！」
「げぶっ！」
「雄二っ！」
「ですが・・・・・これは好機でしょう？セイっ！」
「いでででで!?・・・・・・っ？」
「って造も!?」

ゆーさんはアキさんに向かってきた一人を壁に叩きつけ、自分も同じく向かってきた相手の腕を極めて、ついでに思いっきり肩を外しておきました。てかこれくらいで気絶って結構ヤワですね？

「貸しイチ、だからな？・・・・・それにしても造もなかなかやるじゃねえか？」
「あらら？ゆーさんは随分余裕ですね？」

そう言うゆーさんもよく鍛えてありますね？かっこいいですよ。
どうせなら、霧島さんにゆーさんの活躍を見せてあげたいですね。

「で、出たぞ！　坂本だ！」
「坂本まで来ていたのか！」
「しかも変な小学生もいるじゃねえか!?」

ゆーさんを見て、チンピラが浮足立ちました。
てか小学生？うん、いい心がけです。とりあえず言ったヤツら全員の肩外しましょう。

「さ、坂本よぉ、このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかぁ？」

向こうで下衆が葉月さんを羽交い絞めをしています。本当に最低ですね・・・・・・

「良いか？　大人しくしていろよ？　さもないと、ヒデェ傷を・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・負うのはお前」

こーさんが葉月さんを救出しました。うむ、こーさんナイス。すっきりしました。チンピラＡはこーさんが有言実行してヒドェ傷を負わされていますね。見上げた根性ですこと。

「お、お姉ちゃん！　お姉ちゃーん！」
「葉月っ！　良かった・・・・・・怖かったよね・・・・・・・？」
「吉井君っ！」
「姫路さん、それに美波！今は全員を連れて学園に戻って！」

アキさんの的確な判断で人質全員を解放できました。ヒデさんもこーさんが連れて行ってくれましたし、もう大丈夫みたいですね。

さて・・・・・？貴方（チンピラ）たちは後がありませんねぇ？ガタガタ震えて情けませんねぇ？
まあ、自分たちが大分片づけましたが・・・・・・

「足りねえな？これじゃ。姫路たちが受けたコトに比べれば」
「で？どうする雄二、造？こいつらに黒幕を吐かせる？」
「ああ、それなら考えありますよ・・・・・そろそろですか」
「あ？どうするんだ、造？」

ガチャ

「「！？」」

二人が不思議そうにしていると、今度は部屋の扉からとっても厳つい男性たちが入ってきました。流石にチンピラたちの仲間かと、アキさんとゆーさんは身がまえますが・・・

「「「坊！無事ですかいっ！？」」」
「すまんな～造。ちょちこいつら連れてくんのに時間くったわ～」
「全く、もう終わりましたよ？・・・・・ああ、大丈夫ですよ二人とも。知り合いです」
「は？このヤク・・・・・この兄さんたちが知り合い！？」
「というかなんで保健の日高先生がいるの！？」

日高先生とその他大勢が、やっと来てくれました。
保険の為に待機してもらう予定でしたが、遅いですよ?今回は大丈夫だったのでいいですが。

「すみません、こいつら吐かせて貰えますか?・・・・・お仕事中に申し訳ありませんが」
「いえ!気にせんといて下さい。坊と姐さんの頼みならいつでも駆けつけやす」
「んで?この馬鹿共ですかい?坊に喧嘩売っとる連中言うんは?吐かせりゃいいんですね」
「はいです。叩けば何かボロを出すと思いますので頼みます」
「んじゃ、ついでに社会のルールも教えてやってやんな~」
「任してくだせい、坊に姐さん!」

「「・・・・・・・・・・・・」」

あちゃー、アキさんもゆーさんも引いてますね?別にこの人たち『ヤのつくアレな人』じゃ無いんですが・・・・二人には後でちゃんと詳しい説明をしませんとね。

まあ見た目はホンマもんのその手の方々ですからね。皆さんそんな顔じゃ仕方ないですよね。

「ではよろしくお願いします」
「ごくろーさん。また頼むわ」
「「「では、失礼しやした!」」」

だから、それ止めてほしいのですがね?どこの組の挨拶ですか・・・

・

威勢よくチンピラを連れて出て行ったお兄さん方。さてアキさんゆーさんに説明を・・・

「・・・・・あの、二人とも?説明するので土下座は勘弁してもらえます?」

「「今まで失礼なこと言ってすんませんでした!」」

「いえ、だから違うんですよ・・・・・・」

「ハッハッハッ!おもろいな~アンタらも♪」

あうぅ、こうなるから嫌だったのですが・・・・・・

それと、日高先生は笑いながら二人を携帯で撮らないであげてください・・・・・・

37時間目　誘拐・救出・大暴れ！～土下座もあるよ！？～　（後書き）

・・・・・・うん、ごめんなさい。37話でした。

何この後半部分。自分でもよくわからない出来になりました。

・・・・・・いつものことですがね！もうこのままの路線で行きますね☆

よくある話ですが、投稿した後5分もかからずに誤字脱字が見つかる時が多々あります（涙）もし見つけてくださった方は、こっそり教えてもらえると助かります♪

前回も今回も少し詰め込み過ぎましたので、次回はもっと余裕を持って書ければいいと思います。

読んでくださってありがとうです！

38時間目　決意と覚悟～決勝前の絶対勝利宣言～（前書き）

やって来ました38話です。
レフェルさん、さかさまテルテルさん、榊さん。いつも感想ありがとうございます

原作と流れが結構違いますが一応原作に沿っているつもりです。あくまでつもりなので、わかりにくくてすみません

では今回もよろしくお願いします。

38時間目　決意と覚悟～決勝前の絶対勝利宣言～

学園に戻ると西村先生に凄く叱られました。『どうしてそんな無茶をした！俺を頼らんかバカ者共がっ』って叱りつけた後、ホッとしたような顔をして『とにかく、無事で何よりだ』って言ってましたね。

先生に心配かけるのは本当に申し訳ないです。西村先生ごめんなさい、心配してくれてありがとうです。貴方は生徒のことを親身になって考えてくださる素晴らしい先生ですよ。

学園長に事件のことを新たか報告した後『少し話があるから吉井・坂本だけでも残して教室で待っておきな』と言われました。

本当は教室に待っておくつもりでしたが、姫路さんと島田姉妹が心配でしたので一旦家に彼女たちを送って、再び２－Ｆクラスに戻ってきました。今いるメンバーは自分、アキさん、ゆーさん、こーさん、ヒデさん、日高先生に優姉さん・・・・・・ってあれ？

「優姉さん！？何故にここにいらっしゃるのですか？」
「ん？造くんと師匠がいるところにアタシ在りでしょ？」

何その超☆理☆論!?しかも当たり前でしょ?みたいに言わないでください。

「それに一応アタシのお陰で師匠を呼ぶことができたじゃない?何があっているか教えてもらってもいいわよね?」
「・・・・・・はいです」
「あはははは♪いい心がけだぜぃ優子っち!流石我が一番弟子ぃ」

最悪の師弟関係ですこと・・・・・・
この二人といつもの先生三人組には一生かかっても勝てそうにありません・・・・・・

しばらく待っていると、学園長が教室にやってきました。

「待たせたね、・・・・・とりあえず全員無事のようだね」
「随分遅かったじゃねえか?ババァ」
「雄二、ご老体に無茶を言っちゃ駄目だよ」
「こやつらは本当に失礼なやつらよのう?」
「すみません、学園長・・・・・・」

こんな時でもアキさん&ゆーさんはぶれませんね。ある種の才能ではないでしょうか?

それにしても学園長、本当は凄く心配だったみたいですね。入ってきた時は顔がかなり強張っていましたし。口は悪くても生徒のこと

をちゃんと考えているんですよね、学園長（この人）は。

「被害者には後日アタシから言うつもりだが・・・・すまなかったね。こんなくだらないことに巻き込んじまって」

「・・・・・いえ、どちらかと言えば学園長も被害者でしょう？それに本当に謝罪すべき人が残っていますし」

「そうだね・・・・・今ここにいる全員に起こっていることを話そうかね」

「すみませんがお願いします。何が起こっているのか、多分ほとんどの人が知りたいでしょうし」

そうして自分と一応話をしておいた日高先生、ゆーさん以外のメンバーに学園長が説明します。竹原のこと、Fクラスのこと、自分とアキさんのことなど一通り話して下さいました。

「妨害行為に裏付ける証拠がないが、噂じゃどうやら奴は近くの私立校に出入りしているらしいんだよ」

「だからってFクラスの実態を周囲に流して悪評を出したり、観察処分者同士のペアを見世物にしたり、自分から警察沙汰になるような行為を依頼したのですか！？」

「吐き気が起こりそうなくらいの下衆じゃな・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・許せないっ！」

皆さんの怒りも無理ありませんね。実際今回の誘拐事件は本当に危

なかったです。

「ウチの連中が例のチンピラ共に話を聞きだしたんだが、やはり教頭が依頼したようだね。ただ奴も用心深いもんで証拠は一切残ってないんよ。ホントネズミかい？アイツは」

「まあ、教頭の部屋を探せば何か出てくるかも知れんがね。ヤツは頑なに入れさせないからね」

やはり、証拠を得るには教頭室を押さえるしかなさそうですね。

・・・・・・少し考えておきますか。

「この文月学園が試験校故に、悪評に弱いことをよく知っている教頭だから出来きるんだろうね。

・・・・・・それと最近じゃヤツはこの試験召喚システムも他の研究者に売っているそうだ」

「は！？学園のシステムをですか？」

「ああ。今までどうして観察処分者同士のペアで参加させたかわからんかったがようやく見えたよ。お前たち二人のデータを余所に流しているそうさね。・・・・・・おそらく、優勝賞品の腕輪も優勝者に取り引きして回収したのち、余所の研究室で研究材料として使われるんだろうさ」

忌々しげに学園長が唇を噛み締めています。相当嘗めたことしてくれますね？あの下衆は！

「でもそれなら、いざとなれば優勝者に事情を話してこっちが回収すれば・・・・・・」

「無理だな明久。お前らの決勝の相手を見てみろ」

そうです、これがほかの方なら事情を話して説得してもよいのですが・・・・・・・

「っ！常夏コンビ！？」

「そうさね、やつらも教頭の手先さ。優勝すれば喜んで腕輪を提供するだろうよ」

ツネ・ナツの二人。多分教頭に大学の推薦とかで従っているのでしょうね。

あの時と同じように

「そっ、それでどうするんですか！僕たち黙って指をくわえて待っているのはゴメンですよ！」

「明久、これはもう俺らがどうこう出来る話じゃない。お前に出来ることはただ一つ、だろ？」

・・・・・・そうですね。自分とアキさんしかできないやり方でやるしかないです。

「僕の出来ること・・・・・・！造っ」

「はいです、アキさん！」

自分とアキさん、お互いに拳を突き出して高らかに宣言しました。

「「絶対優勝するよ（しますよ）！」」

学園底辺の力嘗めないでください？教頭には思い知らせてやりましょう！

「やるからにゃ、勝たねえとこの学園は終わるぞ？しっかりやれよ！」

「そうじゃな、特に明久には姫路のこともあるじゃろし」

「・・・・・・・・・・・それは初耳」

「ひ、秀吉ぃいいい！？言わないでいいじゃない！？」

「へぇ？くわしく聞きたいわね？造くん教えて♪」

「えっとですね、姫路さんと姫路さんのお父さんが喧嘩をしていてですね・・・・・・」

「造も！言わないでいいから！！」

「アタシは身内の恥を生徒に押しつけてしまったかね・・・・・・」

「学園長。あの子らは自分の意思で優勝するって言ってるだけですよ、気にせんでいいです」

「・・・・・日高先生、アンタにも迷惑かけて悪かったね」

「いやいや♪すべて坊ちゃまの意思ですからな。気にしないでくださいな♪」

その日はそれで解散になりました。ゆーさんは何やら学園長と話があるらしく残りました。少々気にはなりましたが、自分とアキさんは明日の為やるべきことを果たしに行きましょう。

「アキ、月野。おはよ～」
「おはようございます。吉井君、月野君」
「あ、2人とも。おはよう」
「おはようです。二人とも」

学園祭二日目の朝。揃って登校してきた島田さんと姫路さんに挨拶をします。
良かった、見た感じ元気そうですね。

「あ～、その・・・・・・昨夜はぐっすり眠れた？」
「え？　はい、ぐっすりでしたけど」
「そう。それじゃ・・・・・・朝ご飯はきちんと食べて来た？」
「当り前じゃない。今日が清涼祭最終日だからね！」

アキさん。気にしていますってオーラ出しすぎですよ？そこがいいところなんですが

「えっと、それじゃあ変な夢とかは・・・」
「「ふふふ♪」」
「ってどうして二人とも笑ってるの？」

そりゃ、ねえ？

「大丈夫、気の遣いすぎよアキ？」
「大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いてますから」
「そ、それはよかった「「それにね？」」・・・・・・？」

そして二人はとびっきりの笑顔でアキさんに、

「「それに、何かあれば助けてくれるでしょ？アキ（明久君）♪」」

おっと、これはすごい。何かここにいるだけでお砂糖吐きそうです。
いつの間にか姫路さんもアキさんのこと明久君って呼んでますね？
なんかまた、気まずくなりそうなので退散しますか？

「おーおー。見せつけてくれるな？明久」
「またかの？・・・・・・造も大変じゃの、馬に蹴られたか？」
「・・・・・・・・・・・・妬ましい、羨ましいっ！」

三人が来てくれました。良かった。ヒデさんも大丈夫そうですね。
優姉さんも一緒に来たそうなのでひとまず安心ですか？

「（コホンッ）・・・・・・アキと月野はやけに早いのね？」
「（コホンッ）・・・・・・そ、そうですね、二人とも早いですね～」
「あはは、朝一でテストを受けてましたからね」

「僕もおかげで寝不足だよ・・・・・・ふわぁ」

確かにここのところあまり休めていませんね。
それにアキさんは確か昨日から全然寝ていないとか。

「そんなんじゃ、試合にならんだろ？お前らどっかで寝てこい」
「いえ、それだと喫茶店が・・・・・・」
「お主らは昨日から張り詰め過ぎじゃ。ここはわしらに任せい」
「・・・・・・・・・・・・優勝だけを考えればいい」
「造、ここはみんなの好意に甘えよう？僕はともかく、造は休まないとダメだって日高先生が言ってたでしょ？」

うっ、日高先生が先手を打ってましたか・・・・・・
確かにこのままでは集中力がもたないでしょう。

「そういうことなら、二人ともゆっくり休んでください」
「そうね、起きれそうになかったらウチらが起こしに行くわ」
「・・・・・・すみません、なら十一時までに起きなかったら呼んでもらえます？」

皆さん本当に優しいですね。正直に言うと助かります、眠気が・・・・・・

「あら？試合は一時からでしょ？」
「流石に混み合うお昼時ぐらいは手伝うよ、ね？造」
「はい、そのつもりです。ではよろしくですね皆さん、保健室はマズいので屋上で寝ておきます」

「それなら、僕も屋上にいるからよろしくね」

アキさんと二人、少々よろけながら屋上へ向かいます。

「（やっぱり一緒に寝るんでしょうか？）」

「（間違いないわ。きっとアキの腕枕に月野が・・・・・・）」

何か二人が言っていた気がしますが、眠くて聞こえませんでした。

聞こえていませんよ？全然ねっ！？

38時間目　決意と覚悟～決勝前の絶対勝利宣言～（後書き）

38話でした。ありがとうございます。

う～む。姫路さん・美波の二人を素直にしすぎたかな～？でも窮地を助けてくれた相手がしかも好きな人だったらこれくらいは素直でもいいかな？

ネタバレ？になるかもですが、ここから姫路さん・美波は明久に尽くすようになるかもしれません。まだ作者もわかっていませんが・・・

次回はいよいよ決勝戦・・・と言いたいところですが、先に清涼祭アンケートとちょっとした短編を投稿します。決勝戦はそのあとですかね？

今回も読んでいただいてありがとうございます。

清涼祭アンケートまとめ＋短編集　坂本雄二の裏事情（前書き）

どうも糖分摂取魔です。まずはＬＥＮさま、さかさまテルテルさま、レフェルさま。感想ありがとうございます！

今回はちょっと休憩？みたいな形です。
清涼祭アンケートのまとめと短編：坂本雄二の裏事情となっています。
ここで少しだけ伏線回収しちゃうかも！？

それでは行きましょう！どぞ。

清涼祭アンケートまとめ＋短編集　坂本雄二の裏事情

清涼祭アンケート　まとめ

第一問　学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え
『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント
なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物がいいかも知れませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え
『Ｈな本（訂正）　成人向けの写真集』

教師のコメント
取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
この回答に君の生命の危機が感じられます。

月野造の答え
『楽しい学園生活』

教師のコメント
思わず涙が溢れてきました。

第二問　学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え
『家庭用のエプロン』

教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

月野造の答え
『いつもの制服』

教師のコメント

喫茶店ではあまり好ましくないのでは？

土屋康太の答え
『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを・・・・・・』

教師のコメント
裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

第三問　学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？
【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　　）
また、そのときのリーダーの候補も挙げてください
』

土屋康太の答え
『【?可愛らしさ】候補・・・・・・姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント
甲乙がたいといったところでしょうかね。

月野造の答え
『【?統率力】候補・・・・・・坂本雄二』

教師のコメント
貴方は何かとんでもない勘違いをしていますよ。

木下優子の答え
『【?可愛らしさ】候補・・・・・・月野造』

教師のコメント
一瞬何の問題もなさそうに感じた先生を許して下さい、月野君。

吉井明久の答え
『【?可愛らしさ】候補・・・・・・木下秀吉&月野造（訂正）姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント
用紙を姫路さんと島田さんがもってきてくれましたが吉井君はどうしたのでしょう?

坂本雄二の答え
『【?その他（結婚相手）】候補・・・・・・霧島翔子』

教師のコメント
どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか?

月野造の答え
『【?その他（頼りになる教師）】候補・・・・・・高橋先生』

月野造の答え
『【?その他（頼りになる教師）】候補・・・・・・遠藤先生』

月野造の答え
『【?その他（頼りになる教師）】候補・・・・・・船越先生』

月野造の答え
『【?その他（コスプレ担当者）】候補・・・・・・日高先生』

西村先生のコメント
先生方には配っていませんが?とりあえず仕事をしてください。

月野造の返答
西村せんせが一番頼りになりそうです・・・・・・

☆

俺の名は坂本雄二。文月学園二年Ｆクラス在席、そしてこのＦクラスの代表である。
今日は学園の祭、『清涼祭』の裏で起こっていたことをまとめてみようと思う。

坂本雄二の裏事情　その？月野造の正体

「そういや、有耶無耶になりそうだったが、造と日高先生、それとあの強面の兄さん方はどんな関係だ？」
「ちぃ、忘れていませんでしたか！」

やはり有耶無耶にする気だったな？こいつは。なんせ自分のことになるとあまり喋らないヤツだ。
ここで聞かねえとまた先延ばしになりそうだしな。

「んじゃ、こいつらに納得のいく説明してやんな？造」
「うぅ、そうですね・・・・・まず日高先生と自分の関係から。えと、簡単に言うと日高先生の家系は自分の本家の専属医師の家系だったんですよ」

序盤から次元が違う話になってねえか？

「んぁ～そうだっけか？医者らしいことした覚えねえぞ？」
「ま、確かに自分は必要なかったですし。ですから忌まわしき過去なのですが、日高先生は自分の護衛兼教育係として一緒に暮らしてきたんです」
「あんころからホントかあいかったもんな～造は。なんせアタシを『かあさま』なんて言ってたくらいだぜ？」
「そこ！黙っておいてください！！」

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

いかん、流石に全員が処理落ちしてやがる。

「ちょっと！？皆さん引いていますか？どうしてくれるんですか、日高先生！」
「造はアタシが育てた！ああ、ちなみに造の護衛術も仕込んだのはアタシな～」
「んなこと聞いてませんよ！？日高先生、いい加減にしないと・・・・・」
「なぁ、もう一度あんときみたいに『かあさま』ってアタシを呼んでくれや。造～」
「くっ・・・・・・皆さん？この人の言うことは聞き流していいですよ」
「つれねえなー？つーちゃん♪」
「もう一言も喋んないでください」

ここで止めるか。いや、止めないと俺らがついて行けないからな。

「・・・・・・マテ。いろいろおかしいがとりあえず一つだけ聞

かせろ」
「はい？何でしょうか、ゆーさん？」
「肝心のお前は何者だ？造」
「ただの高校せ「こいつは一応坊ちゃまだぜ？それなりに名の通った財閥のよ」いですよ・・・・」
「「「「「はぁあああああああ！？」」」」」
こいつ、やっぱりそうか！翔子がどこかで見たことがあると言っていたから気になってたが・・・・大方どこぞのパーティで会ったんだろう。
「何で言うんですか！ここは隠して謎キャラを演じていいでしょ！？」
「いやいや、どーせお前さんにゃそんなキャラは似合わんよ～♪」
「折角の伏線とかがっ！一瞬でなくなった！？」
「ついでに言うとさっきのがめつい奴らは、こいつのまぁ護衛？いや執事たちか？どっちでもいいや」
「嫌ですっ！自分そんなキャラじゃありません！自分平凡な高校生です！？」
・・・・・・まっ、本人はどの道変わらないようだがな？
「・・・・・・で？そんなお坊ちゃんが留年やら問題行動やら起こして親は何とも云わないのか？」
「ハッハッハッ！坂本だっけか？そう思うんは当然だろうが、こいつの親もこいつ以上にのんきなんさ。基本放任主義で、問題行動を起こした時は寧ろ喜んでたぜ？よくやったってな！」

「「「「「「ああ、造（くん）の親なんだな（ですね）」」」」」」

「どうしてその反応がでるのでしょうか！？」

蛙の子は蛙ってことか・・・・・？

それがよく分かった放課後だった。

☆

坂本雄二の裏事情　その？学園長の真意

造と明久が決勝戦の勉強するため帰った後、俺はババ・・・・・学園長に最後の質問をするため残っていた。

「それで？アタシに聞きたいことってのは？」

「アンタが俺の提案を受け入れたことだ。俺は結果的に負けちまったが、いくらあいつらに勝ってほしいといっても科目変更まで認めたのが引っかかってな。最初他の奴にも話をつけているかもしれないと踏んで科目変更を頼んだんだがな」

「なるほどね、科目変更でアタシを試したんだね？」

「ああ。それで今回は完全に明久と造を優勝させたいのだと確信した。そこまでアイツら・・・・いや、造にこだわる理由は何だ？」

「・・・・・はぁ。別に大した理由じゃないよ。アンタ今回の優勝商品の腕輪のことは知ってるかい？」

「腕輪？・・・ああ、確か二獣召喚できるタイプとフィールド形成タイプの二種類だったな？・・・・・おい、まさか」

フィールド形成の腕輪を造に渡したかったのか・・・・・!?

「詳しいことは言えないが、あのガキの体があなっちまったのは、結果的には試験召喚システムが原因なのさ」

まあ、そうだろうな。自身が召喚獣になるなんてありえないはずだしな。

「本人は気にしてないが、少し気になってね。いちいち召喚フィールドに入れば問答無用で召喚獣になっちまうし。だったらせめてアイツの意思で召喚できるようにしてやりたかった・・・・・それだけさ」

これは・・・・・正直驚いた。まさかここまで考えていたとはな。

「何としても勝ってほしいのさ。ま、これがアタシの罪滅ぼしになるなんて思っちゃいないがね」

そう言ってスッと立ち上がり俺に向かってこう言った。

「それにアイツには自由に生きてもらいたいのさ、アタシはね。アイツに言うんじゃないよ?」

「ちっ、わかってるさ・・・・・・」

あいつは本当にいろんなもん背負込み過ぎているからな・・・・・

本当に俺の周りはバカだらけで困るぜ。

☆

坂本雄二の裏事情　その?見知らぬプロポーズ

俺は今翔子に拉致され、翔子の家にいる。いつものことだ。だがそこで何故か翔子らしくない物を翔子が持っていたため気になり問いただすと、持っていた機械から爆弾発言が跳び出してきた。

『ペアチケットも俺が必ず手に入れて見せる。胸を張れるようにな。だからここは譲ってくれ、式は如月グランドパークで挙げような!』
「・・・・・・うん、うん!」
『ありがとう翔子。愛してるぞ』
「・・・・・・私も雄二のこと愛してる」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「おい翔子、これはどういうことだ?」
「・・・・・・雄二の私への告白。言い変えるとプロポーズ（ポッ）」
「知らん!俺はこんなこと言ってないぞ!?」
「・・・・・・雄二は恥ずかしがり屋さん♪って吉井が言ってた」

ア・イ・ツ！これか！これで準決勝を勝ち進んだんだな！？
やはり、バカに頼ったのは間違いだったか・・・・・・・

「・・・・・でも、月野が言っていた。『ゆーさんはまだ結婚年齢に達していませんからね。少なくともそれまではゆーさんにも考える時間、選べる選択肢をあげてください』って」

造が神に思えてきたっ！いいぞ造、お前の言葉なら翔子も納得するだろう！

「・・・・・・月野の言うことも一理ある。だから私は雄二に選んでもらうことにした」

やはり造は神なんだな？翔子がこんなにも素直に言うことを聞くとはな・・・・・・
これで俺にも未来が拓けてきたぜ！

「・・・・・雄二、ウェディングドレスと白無垢どっちがいい？」
「選ばせてもらってねえぞ！？根本的な何かを！？」

造、すまない・・・・・こいつはもう駄目だったよ。
そしてとりあえず明久はブチのめす！！

清涼祭アンケートまとめ＋短編集　坂本雄二の裏事情（後書き）

お疲れ様でした。いかがだったでしょうか？

造「・・・・・ナニコレ？こんな伏線の回収の仕方ってないんじゃないですか？糖分摂取魔？コレ何なの？」

だって、これくらいしか思いつかなかったもん！それに一番大事なとこはまだ出してないしいいじゃない！

てなわけで、何が何やらわからないことになりましたね。学園長は優しいし、日高先生は相変わらずだし・・・・・・
いつものことでしょうか？そですね♪

次回はいよいよ召喚大会決勝です！読んでいただきありがとうございます！

３９時間目　召喚大会決勝戦！～最強のバカ×２～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。やっと決勝戦を出せましたね。

もうとりあえず何だかんだ言わずに、３９話よろしくお願いします！

39時間目　召喚大会決勝戦！～最強のバカ×2～

「さてと。行こうか造」
「ええ。皆さん、自分たちは抜けますが大丈夫でしょうか？」
「ふふっ、大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが」
「そうですよ、大事な決勝戦なんですから」

結局、自分とアキさんは30分程度しか手伝いをしていません。クラスの皆さんが疲れているだろうからと、気を遣ってくださったようで、寝かせてくれてました。

何だかんだで良いクラスですものね♪ですからここを護る為にも勝ちますよ！

「後で私たちも応援に行きますね」
「アンタたち、頼んだわよ！」
「ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ？」
「・・・・・・・・・・・・優勝」
「わかってる、絶対勝つよ！」

皆さんが激励をしてくれます。より力が入りますね。

「（ゆーさん、決勝戦を前に最後の妨害があると思いましたが、何

もありませんでしたね？）」
「（ああ。もう小細工が通用しないと諦めたか、俺たちの居場所がわからなくなったか。そんなとこか？だが用心に越したことは無い。教室のやつらや姫路たちは任せろ）」
「（お願いします、行ってきますね！）」
「（勝ってこい、造！）」

「流石決勝だね」
「ええ、超満員とはこのことですかね？」
「吉井君と月野君。入場が始まりますので急いでください」

こうして係員をわざわざ配置しているってことは、決勝はこれまでと扱いが違うみたいですね。

『さて皆様、長らくお待たせ致しました！　これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

アナウンスが会場に響き渡ります。このアナウンス、文月学園の先生じゃないですね？ひょっとしたらプロの方を呼んでいらっしゃるのかも。

『出場選手の入場です！』
「さ、入場してください」

先生にポンと背中を押され、アキさんと軽く頷き合って観客の前に

歩み出ます。

『二年Ｆクラス所属・吉井明久君と、同じく二年Ｆクラス所属・月野造君です。皆様、拍手でお迎えください！』

盛大な拍手が、自分たちをを出迎えます。何だか恥ずかしいですね。
そういえば姫路さんのお父さん、決勝を見に来るそうでしたね？
きっとこの観客の中のどこかにいらっしゃるのでしょう。

『なんと、最高成績のＡクラスを抑えて決勝に進んだのは、二年生の最下級であるＦクラスの生徒コンビです！　これはＦクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

「（あの司会の方、嬉しいことを言ってくれますね♪）」
「（だね。姫路さんのお父さんに好印象になるね）」

『そして対する選手は、三年Ａクラス所属・夏川俊平君と、同じくＡクラス所属・常村勇作君です！皆様、こちらも拍手でお迎えください！』

来ましたね、ツネ・ナツ。
貴方たちもある意味教頭の犠牲者なんです・・・・・・

『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきっちりと決勝に食いこんできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

そうアナウンスが言い終わった後、ルール説明に入りました。
分かりきっていることなので、今は無視してても大丈夫でしょう。

ツネ・ナツが自分たちの目の前にやってきました。

「結局、お前らが勝ち進むとはな。どうなっても知らねえぞ？」
「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、いろいろ配慮したんだがな。Fクラスの頭じゃ理解できないみてぇだな？」

「「・・・・・・」」

自分からは言うことはありません。というか、ここはおそらくアキさんが言いたいこと全部言ってくれるでしょう。

「先輩。一つ聞きたいことがあります」
「ぁんだ？」
「教頭先生に協力して理由はなんですか？」

多分あの外道のことですから、理由はハッキリしてますけどね・・・・・

「・・・・・そうかい。事情は理解してるってコトかい」
「大体は。それでどうなんですか？」
「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ」
「そうですか。そっちの・・・・・・常村先輩も同じですか？」

「まぁな」
「・・・・・そうですか」
「何か文句あんのか？」
「ツネ・ナツ、自分からは何も。この試合が終わったら少し話がありますがね？忘れないで・・・・・」
「・・・・・あん？」

「（アキさん、もういいですか？）」
「（うん。僕が聞きたいことはこれだけだよ）」
「（では行きましょう）」
「（勝ちにね！）」

『それでは試合に入りましょう。選手の皆さん、どうぞ！』

「「「「試獣召喚（サモン）」」」」

って癖で言ってしまいますが、自分はフィールドに入れば済む話ですよね？

観客が『あの子召喚獣になった？』とか『最近のシステムはここまで進化しているのか！？』とか『あの小学生カワイイ～』とか言ってますね・・・・・

小学生がここにいるわけ無いでしょ！？ま、試合中ですからいいですがっ！？

≪Ａクラス　常村勇作　日本史　２０９点　＆　Ａクラス　夏川俊

平　日本史　１９７点≫

ま、彼らは理数系ですからこんなもんでしょう。

「吉井、お前じゃこんな点は取れねえよな？」
「俺らの敵は月野、お前だけってことだ！」

・・・・・あらら？二人ともアキさんを嘗めると痛い目に遭いますよ？
何たって、アキさんは自分より何十倍も何百倍も強い人ですからね。

「・・・・・・前に」
「ぁん？」
「前に、クラスの子が言っていた」

「「・・・・・・？」」

「『好きな人の為なら頑張れる』って」
「は？お前何言ってんだ？」
「・・・・・僕も最近、心からそう思った」

アキさんらしい強さの理由ですね。さて、見せてやりましょうか？
アキさん！

≪Ｆクラス　月野造　　日本史　４２４点　＆　Ｆクラス　吉井明久　日本史　１８６点≫

「「なっ！？」」

「《小細工なしの実力勝負でブッ倒してやる（やりますね）》」

さあ！これが最後の勝負です！全力で勝ちに行きましょう！

「クソッ！月野！？テメェ日本史は３００点前半キープだっただろ！？」

「吉井もだ！試召戦争じゃ６０点程度だったハズ！？」

なるほど？ちゃんと自分たちの情報を手に入れているようです。大方用心深いあの下衆が提供しているのでしょう。

ま、随分古い情報ですがね？対策は万全です！

《アキさんは試召戦争以来、ちゃんと勉強してますからね》

「まあね、それにたまたまこれが一番の得意教科だったって理由もあるけどね。さて先輩方？・・・・・・行きますっ！」

アキさんが跳び出しました。ナツの方ですね。では・・・・・

《ツネ、自分も全力で行きます》

「ちぃ、オイ夏川！こいつは二人じゃねえと倒せねえ。そいつをさっさと片付けちまえ！」

『わかってる！わかってるが、このバカも強いぞ！？』

『よそ見してると、やられちゃいますよ！センパイッ？』

ナツはアキさんがやっつけてくれるでしょうね。でしたら自分は自分の仕事をしましょうか。

《安心してください。自分は一対一でしか戦いません。あっちはアキさんが倒してくれるでしょうし？》

「ハッ！えらく上から目線じゃねえか？お前が接近戦が苦手なことくらい調査済みだぜ！」

そう言ってツネは接近戦で来ました。やっぱりこの箒じゃ接近戦は相性が悪いです。

何度かの鍔迫り合いの後、徐々にフィールド外に追いつめられてきます。

「どうしたよ！折角の点数が泣いてるぜ？このままフィールドへ出ればお前の場外負けだっ！」

ふむ、流石に弱点は知られてましたね。ですが・・・・・・

《ツネ、貴方忘れてませんか？自分の腕輪の能力を・・・・・・真上ががら空きですよ？》

「何っ！？しまっ・・・・・・！」

追い込んだつもりが追い込まれましたね、ツネ？自分の領域は地上だけじゃないんですよ。

腕輪の能力で空へ舞いツネの上を取りました。何て言うか、空を飛

ぶのは気分がいいですね。
本当に自由になれる気がします。
翼を持たない者には空は絶対不可侵領域です。そうここは自分の独壇場っ！
さて、あとは全力です。残りの点数を使って・・・・・・

「くそおおおおおおおおおお！」
《終わりです、ツネ。・・・・・・ごめんなさいね》

≪Ａクラス　常村勇作　日本史　０点　ＶＳ　Ｆクラス　月野造　日本史　１０３点≫

ツネは倒せましたね。あとはアキさんですが・・・・・・

『くそぉぉっ！お前如きに三年の俺が・・・・・・！』
「くたばれえぇっ！』

《アキさん流石です、三年生相手にとてもかっこいいですね♪》

『吉井・月野ペアの優勝です！』

「いいいよっしゃぁああー！！」

「ナイス！アキさん！」
「造！うん、勝った！僕ら勝ったんだあああああああ！！」

二人でハイタッチし、勝利を分かち合います。最高の気分ですよ！
湧き上がる歓声の下、ここに長かった召喚大会は幕を閉じました。

３９時間目　召喚大会決勝戦！～最強のバカ×２～（後書き）

３９話でした。ありがとうございます。

相変わらずの戦闘描写が苦手な糖分摂取魔です。難しいですね。

ネタというか、参考に友達に借りた漫画の技：浅●流剣術『烈風』・・・・・とか使おうと思いましたが、少し古い漫画だそうでわかりにくいかもと思い断念しました。

戦闘描写の参考になりそうな物ってあんまり知らないんですよね、自分は。

友人に色々借りたりもしましたが、借りると続きが気になり小説が書けないというジレンマｏｒｚ

こんな作者でごめんなさい。後、次回予告！

正直に言います、ちょっと重い話になるかもです。物語の構成上そうなりました。

苦手な方はごめんなさい。

長々とすみませんでした。ではまた次回に！

４０時間目　過去と自分と後悔と～泣き虫造の『昔話』～（前書き）

やって来ました、４０話です。

この４０話は人によっては重いかもしれないし、人によっては散々重い重い言っていて何か肩すかしだな、と思われるかもしれません。正直基準がわかりません。

後書きでも補足を入れると思います。とりあえずよろしくお願いします。

４０時間目　過去と自分と後悔と～泣き虫造の『昔話』～

「お兄ちゃん！　すっっっごい格好よかったよ！」
「ぐふっ！　は、葉月ちゃん・・・・・今日も来てくれたんだ。ありがとう」

授賞式と簡単なデモンストレーションを終えて教室に戻る途中で勢いよくアキさんの鳩尾にダイブしたのは葉月さん。

どうやら島田さんと姫路さんに連れられて自分たちを迎えに来てくれたようですね。
正確にはアキさんを迎えにでしょうが・・・・・・

それにしても、良かったです。葉月さん、軽いトラウマになっていないかと心配でしたが大丈夫そうですね

悶絶するとこをグッと堪えたアキさんも浮かばれるでしょう。

「二人とも、お疲れ様。凄かったわね」
「本当です！とっても素敵でした！今度土屋君ビデオのコピーを貰おうと思ったくらい！」

へえ？こーさんビデオ撮ってくれてたんですね。自分も頂きたい所ですが、ビデオの使い方がわかりませんし誰かに頼みますかね？

「あはは。そんなでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いです～っ！それに召喚獣のお姉ちゃんも凄かったです！」
「葉月ってば。アキが困ってるわよ？」
あらら。葉月さん、本当にアキさんのことをお兄さんみたいに思っているんでしょうね。
ゴロゴロと猫のようにアキさんに頭を擦り付けて、可愛らしいです。
・・・・・・・・・・・・召喚獣のお姉ちゃん？
「お疲れさん、造。何とか優勝できたな」
「ゆーさん！いえいえ、アキさんが頑張った結果だと思いますよ？なんせ１２０点近くも点数を上げたのですからね」
「バカの底力か？ま、それを引き出したのはお前だからな、改めてお疲れさん」
とか言うゆーさんもアキさんに勉強を教えていましたから、影の功労者ですがね。
「んじゃ、そろそろ戻るぞ！こいつらの優勝が喫茶店をさらに盛り上げてるからな。祭りはまだ終わってねえんだ！」
そうですね、手伝いに行きましょう。
・・・・・・・・・・・・祭りはまだ終わっていないです、か。

☆

『ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「よっし、終了だ！」
「お、おわったね・・・・・・」
「あう、結構しんどいですね・・・・・」
「そうじゃな、流石に疲れたのう・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

あれから怒涛の勢いでやってくるお客さんを捌きに捌いて、ようやく終わりました。
ウェイター（ウェイトレス？）ってここまで疲れる仕事なんですね。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろ？」
「ん？　お義父さんが気になるのか？」
「なっ！？雄二！どうしてそうなるの！？」
「後夜祭の後で、話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じゃな」

そうでしたね。ただ今回はいい結果が待っていると思いますよ？
さて・・・・・・自分は自分の祭りを終わらせに行きますか！

「（ゆーさん、ゆーさん。少し抜けてもいいですか？）」
「（ああ、構わんが・・・・・・・・決着をつけるのか？）」
「（あはは。そんなんじゃないです。用事が二つほどあるだけです）」
「（なあ、俺らは行かなくていいのか？）」
「（気持ちはありがたいですが、これは自分の祭りです。心配は要りません）」
「（・・・・・行って来い。後夜祭にはちゃんと出ろよ？）」
「（ええ。見ててください。後夜祭の花火を上げてきます！）」

☆

「ツネ、ナツ。やっぱりここにいましたか」
「「！？っ、月野？何でここに！？」」
ここは学園長室。ここに来れば必ず会えると思っていましたよ。
なんせあの下衆が黙って見ているとは思えませんからね。
「当てて見ましょうか？恐らく今回の召喚大会のデータの引き抜きと・・・・・盗聴器の回収ですね？」
「「！？」」

「・・・・そうみたいですね。ツネ、ナツ。貴方たちに言わなければならないことがあります」
「・・・・・なんだ？また俺たちを嵌めるつもりか？」
「もうこうなりゃ、意地でも何とかしねえと俺たちは「教頭に退学にされてしまう、でしょ？」・・・・・な！？」

あの時と変わりませんね。怒りを超えて、もう何も感じませんよ・・・・・

「違うんです、自分が言いたかったのは。・・・・・ツネ、ナツ。二人ともごめんなさい」
「・・・・・・・は？」
「・・・・・・・何でお前が謝るんだよ？」

「貴方たちも必死だったんですよね？進学がかかっていますから。・・・・・教頭を止める為とはいえ貴方たちの推薦の件を無かったことにしたこと、本当にすみませんでした」

「「・・・・・・」」

「理解できませんよね？ですが二人とも、貴方たちが間違いを犯す前に止めることができて本当によかった」

そう、止めることができるんです。あの時は手遅れでしたが今回は、今回こそは！

「自分の話、聞いてもらえませんか？ちょっとした昔話です」
「・・・・・・昔話？」
「・・・・・・・何のことだ？」

この話をすることになるとはね。ですが二人を止める為にも必要なんです。

「まあ聞いてください・・・・・・ある年の文月学園にとても仲の良い二人組がいました。
それこそ文月学園に入ってすぐの関係でしたが、何か波長が合ったのでしょうね。その二人は学力もそこそこで、二年になればＡクラス入りはまず間違いないはずでした」

「・・・・・・・？それどこかで」
「・・・・・・・聞いたことあるな」

「ところがその二人の内の一人は振り分け試験の日、家の事情で試験を受けることができません。それで仕方なくＦクラスの生徒として所属されることになりました。ま、どのクラスにいようと二人は仲は崩れるどころかさらによくなってきましたけどね」

「「・・・・・・・」」

「ところがです、その子にまたもトラブルが起こります。家が苦しい為『彼』は奨学金で通っていたのですが、Ｆクラスにいるという理由で内申が下げられたんです。それだと奨学金はでませんよね？もちろんこれには『彼』自身は何も悪くありませんし、正当な理由もあります。そこで奨学金を担当していた教師に抗議に行きました」

ハァッ、少し一息入れますか・・・・・・キッツいですね。

「ですがその教師、『内申がとりたいなら協力してもらう』なんて言い出します。

・・・・・信じられますか？ホント教師の言葉じゃありませんよっ！」

「おい待て！その担当って！？」

「・・・・・確か竹原じゃねえか！？」

「すみません、もう少し聞いてください・・・・・その当時『彼』は凄く悩んでました。『彼』は誰かに相談しようとしていましたが、こんなこと普通誰にも言えません。訳がわからなくなったのか、『彼』は荒れ始めてその親友にすら、当たるようになったんです」

ふぅ、何故でしょう？涙が出そうです。

・・・・・ですが、これだけはこの二人にも伝えなければ。

「不審に思いその親友は『彼』の行動をチェックしてみると、ある日その教師が『彼』に命令しているところを見てしまったんです。『学園長室に行ってデータを盗め』ってね。」

「「なっ！？」」

「そのことでその親友はその教師に訴えましたが、シラを切られておまけに『彼』の奨学金の話も無くなりました・・・・・その後は『彼』は転校って形で学園を去りました。その時ですね、この事件のあらましを聞いたのは」

「「・・・・・・・・」」

ヤバイ、泣きそう。思い出すと悔しくて・・・・・・
耐えなきゃ・・・・『彼』の為にもっ！

「『彼』に『アイツには気をつけろ。アイツは自分の為ならなんでもやっちまう』と教えられました。自分も悔しくて信頼できる先生方に頼んでみたりして教頭の悪事を突き詰めようとしましたが・・・・・ダメでした」

「月野・・・・・・」
「おい、お前・・・・・・」

「自分の、したことは、『彼』を追いつめて、学園を追い出してしまったことに、か、かわりないんです。『彼』に、は『あの時、俺が間違いを犯さないでよかった。辛く当たってゴメンな?ありがとう』って言われ、ました・・・・・・言われましたが！これ、は自分の、せいなんです！」

「お、おい月野・・・・・・」
「泣くなよ、おい！」

「はなしはここで、おしまい、です。おねがいです、からアイツの、いうことは、きかない、で」

「「・・・・・・・」」

「おねがい・・・です」

もう限界です、今日はつかれたのかな?なんかいつもより涙戦緩いですね。
どうしても涙が止まりません・・・・・・

戸惑いながら、二人が慰めてくれました。ごめんなさい、泣き虫で。
・・・・・・そして、ゴメンなさい二人とも。こんな話に付き合わせてしまって。

☆

「・・・・・すみません、もう落ち着きました。ありがとですです、二人とも♪」
「い、いやいい。・・・・・・悪かった」
「・・・・・・なぁ、月野。お前観察処分者になったのはひょっとして教頭関係じゃないのか?」

やれやれ。何とか復活は出来ましたが、ここはやっぱり聞かれます

か・・・・・・

「・・・・・まあ、夜な夜な教頭室に忍び込んで証拠を漁って、ついでに教頭に殴りかかれば留年くらいにはなるでしょうか？てかよく退学にならなかったな～なんて今でも思っていますよ？」

「お前は・・・・・・」

「そこまでしたのか・・・・・・？」

ちょ！？二人とも引かないで！その時は自分も必死だったんですって！

ま、正直に話すとこれはきっかけなだけで、特別観察処分者になったのには別の理由があるんですがね？

「ま、結局こうなりましたがね。ただ別に自分的にはラッキーだったんですよ？復讐のチャンスが増えますし、のんびりやれますし。Fクラスにいれば楽しいですし♪」

「おい、常村、これは月野の評価を変える必要がありそうだな？」

「ああ、こいつは本格的なバカだ。本当に観察処分者の名にふさわしいバカだ」

あ、あれ？何でそうなるんですか？この流れでそんな話には何ないでしょ！？

「・・・・・ま、これで俺たちは退学か！しかたねぇわな、常村？」

「ああそうだな。でもまあ、教頭に踊らされる位ならこれでいいのかもな」

「は？何言ってるんですか？」

「「は？」」

いや、何ですか？そこの二人？お前が何を言ってるんだって顔は？

「大丈夫です。二人は絶対に退学にはさせません。アイツは社会的に退場させるつもりですが♪」

「・・・・・・月野、何かやらかすつもりだな？」

「・・・・・・お前を止めた方が良い気がしてきたぞ？どうする夏川？」

ひどいですね。自分はただ清涼祭の花火を打ち上げに行くだけですのに？物理的に。

見てなさいな、教頭先生？貴方は学園の超問題児を敵にしているのですからね？

４０時間目　過去と自分と後悔と～泣き虫造の『昔話』～（後書き）

４０話でした。ここで少し補足。

造の家が金持ちなら何とか出来たんじゃない？と思われる方もいると思いますが、『彼』が学園を去ることが決定していて、もうどうしようもなかった設定です。

しかも『彼』曰くここで友人として造に金を借りてしまえば、自分たちの関係が崩れると思い相談しなかったとか。

造も色々と必死に手を回したようですが、間に合わなかったそうです。それ以来造は教頭を恨み、結構無茶をした結果がアレです。

多分納得いかない点が多々あると思いますが、出来る限り感想などで補足したいと思います。なんかややこしい設定ですみませんでした。

次回、清涼祭編ラストです。今回も読んでいただきありがとうございました！

４１時間目　自分と花火と祭りの終わり～清涼祭編終了！～（前書き）

４１話です。清涼祭編もこれでラストとなります！

前回重苦しい話？でしたが、そこは造のこと。早速空気を破壊にかかります♪

てな訳で、よろしくですです！

４１時間目　自分と花火と祭りの終わり～清涼祭編終了！～

ではでは、花火を打ち上げますかね！祭りには、やはりふさわしいですし。
現在、文月学園の教頭室の真下にいます。何をしているかって？それは見てのお楽しみ♪

そんでツネ・ナツの二人に手伝ってもらい、例の『ブツ』を運んでもらいました。
コレ実物を見るのは初めてですね。割と重量ありますし、実際危険な物ですよね。
ま、これのおかげで何とかなりそうなんですが♪

「・・・・・・おい月野、本当にやるのか？」
「・・・・・・俺らはこいつを止めるべきかもな」
《あはは♪大丈夫です、やるのは自分だけなので二人には迷惑かかりません！》

「「・・・・・・・・・・・・」」

あっ、ちょっと何ですか、そのジト目！自分呆れられてます？
まあ確かにちょっと無茶をしますが、これも教頭を止める為ですよ！？

「まあいい。どうなっても知らんからな？・・・・・・電話するぞ？」
《あいあいです》
ナツが教頭に電話します。多分教頭のことですから、成功したと思って電話に出るでしょう。
『私だ。成功したのか？』
「（出たぞ、後は任せる）」
《（はいです、任されました）》
さてここからは、教頭にはたっぷりと礼をしませんとね？
後悔しても遅いですよ？なんせ問題児を相手にしたんですからね。
《あ～、聞こえますか～？学園の問題児です☆残念でしたね教頭先生、全て失敗ですよ？ＨＡＨＡＨＡ！》
『っ！？貴様！・・・・・・何のことかな？』
あう、コレ一昔前の悪役のいいわけですね。わかります。正直面倒ですね。
何やら『自分が犯人だとでも』とか、いろいろ言ってきてますが、面倒ですし本題に入りますかね？
《そんなものはどうでもいいです。実は貴方にプレゼントしたい物が二つほどあります》
『ハッ！要らんね、正直気持ちが悪い』

はいはい、アンタが言うな。・・・・・なんて思ったら負けですか？

《一つはこの学園から立ち去ってもらいます。出たがってましたよね？》

『おお、それはありがたいな？こっちから辞めるつもりだったしね』

《ちなみに貴方と取引きしていた、学校の先生方と研究者さんも見事首が跳びましたよ？》

『なっ！？』

日高先生に頼んでちょっと本家にやってもらいました。自分も本気になる必要があるとわかりましたし。

教頭に学んだことは“力”は腐らせるのではなく遣うべき時に誤らずに遣うって事ですか？

自分たちの仲間に手を出した分の利子は、きっちり払ってもらいますね♪

覚悟してくださいな？・・・・・相当怒ってますから、自分。

『だが、そんな勝手が許されるとでも？一人の教師を辞めさせる理由がないだろう？』

《アンタが今までやってきたこと、その全てが理由じゃ、ボケが》

おっといけない。言葉がなんかおかしいですね。場の空気にあてられましたか？

ちょっとツネ・ナツ、引かないで・・・ちょっとした言い間違いで

すよ?

『・・・・・それで?証拠でもあるというのかな?』

《おっとっと、まあ焦んなくていいですよ♪それは今から探します。多分教頭室に一杯あると思うんで》

『ハッ、以前みたく探す気かい?今度は問答無用で退学にするぞっ!』

おお、こわいこわい。地が出てきたのは向こうもですか?あ~ヤダヤダ

《そんなことしませんよ?ちょっとだけ教頭室をリフォームしながら気長に見つけます。・・・・・ところで先生。窓から真下を見てくれますか?》

そう言ってしばらくすると窓から教頭の間抜け面が見えました。

おお!自分を見て焦っていますね。気分が凄くいいです。

《見えました~?これが二つ目のプレゼントです。そこにいると火傷じゃ済みませんよ?》

『お前っ!?こんなことをしていいと思うなよ!?』

《それはこっちの台詞でね?自分の大事な友達を傷つけてタダで済むと思うなよ?屑が》

『っ!?』

《た~まや~♪》

そう言った後、思いっきり教頭室目掛けて投げ入れてやりましたよ。
・・・・・・祭りで使う花火をね。

ヒュ～・・・・・・・・・・・・・・・　　ドォン！

とてもいい音と共に、綺麗な花が教頭室に咲きました。ああ、すっきりしますね・・・・・・・
ま、教頭の根城にしては華々しく散ったのですかね？

☆

教頭室にガサ入れをしようにも、何かしら理由は必要です。
ですがそこは教頭のこと、簡単にはいきません。適当な理由をつけ絶対に立ち入らせないでしょう。

例えばそうですね。【教頭室が破損して業者を呼ばなくてはならない】くらいの理由がなければ。

今回の作戦はいたって単純。
召喚大会で手に入れた腕輪：白銀の腕輪を使いフィールドを形成し、自分を召喚獣にしてたまたま運んでいた花火をうっかり教頭室に投

げ入れてしまえばいいんですよ！

これって偶然起こった事故なのでとっても正当な理由でしょ？でしょ？

この作戦をツネ・ナツに話したところ、本気で病院に連れて行かれそうになりました。

なんですか？失礼ですよ？これでも真面目に考えたのに・・・・・・

「ホ、ホントにやりやがった・・・・・・！」

「お前、呆れるを通り越して寧ろ感心するぞ・・・・・・？」

だから一生懸命考えたんですって！確かに誉められることじゃありませんが！

ま、これで何とかなるでしょう。怒られるレベルを遥かに超えてしまった気もしますがね？

まあ、なんとかなるでしょう・・・・・・たぶん

☆

「あう～ただいまです・・・・・・」

「おかえり～・・・・・・じゃない！何てことしてるのさ、君は！」

「ふっ、随分派手にやったな？造」

「見ておったが、何ともまあ破天荒なやつじゃお主は」

「・・・・・・・・・・・・明久以上？」

西村先生にこってり絞られて、ようやく帰ってこれました。

先生は本気で怒っていましたが、それと同時に今回のことを理解していたみたいで、怒られた理由が『花火を使うな、お前が怪我したらどうするんだ！』ですからね。ちょっと笑いそうになりましたよ、先生らしくない慌てぶりでしたし。

ここまで心配されていますし、極力問題行動は避けるべきですよね？正直、自分は西村先生の期待だけは裏切りたくありませんから・・・ね。

「いやぁ～流石にやり過ぎたみたいで、拳骨もらっちゃいました♪」

「ま、拳骨で済んで何よりだな。俺は本音を言えば黒幕に一発殴りたかったんだが」

「もう！そんなことするなら僕たちも呼んでよね？僕もやりたかったし！」

「・・・・・・・・・・・・俺もだ」

なんだかんだで、教頭に皆さん不満があったようですね。営業妨害にクラスの件や大事な仲間に手を出されましたからね。相談すれば、恐らくこのメンバー全員で乗り込んでいったでしょうし？

あ、そうそう。教頭ですが、自分がうっかり怪我を負わせてしまったので本家（ウチ）の病院で預かることになりました。あの怪我ではお仕事に影響が出るでしょうし、本家（ウチ）がしっかりと面倒を見てくれるそうです。ウチは怪我の治療からアフターサービスまでもうバッチリですね☆

「まったく・・・・・造よ?お主恐らく拳骨より恐ろしいものを今より見ることになるぞい」
「?どういう意味です「・・・・・・・造くん?おかえりなさい」かね・・・・・・・」
何ですかね?このヤバめのオーラは。怖くて後ろが振り向けませんよ?

「こっちを向きなさい、造くん」
「・・・・・・はい」

底冷えする感覚を味わいながら振り向くと、優姉さんがいました。
それはもうとてつもなく怒って。
隣には高橋先生、遠藤先生、船越先生に日高先生が同じようにいます。

「「「「それじゃ後は任せた」」」」
「待って!置いていかないで!?ここは仲間として助け合いましょう!」
「「「「骨は拾ってやるよ?」」」」
「かむばっくーっ!?」

四人に見捨てられて、四面楚歌以上にヤバい雰囲気です、囲まれました。

「アタシたちが何をするかわかってるわよね?」

「・・・・・・はい」

フッ、それくらい顔を見なくてもよくわかりますよ？

お姉さん？＋保護者？＋先生×３＝第二次お説教タイム♪スタート・・・ってことくらいね！

その後、五人に西村先生以上にこってり絞られたあげく、日高先生の『んじゃ、心配かけた分は体で払ってもらうかんな～』の一言で荒れに荒れた後夜祭でした。

説教して貰っている時に思いました。この人たちには一生敵わないと。

折檻されている時に思いました。この人たちには一生逃げられないと。

そうそう、姫路さんのお父さんの件は理解してもらったとの事。Ｆクラスの教室の件も学園長が何とかしてくださったお陰で、なんだかんだで無事に？清涼祭は幕を下ろしましたとさ。

だいぶ疲れましたが、腕輪もちゃっかり手に入りましたし、復讐も出来ました♪

やることやりましたし、楽しかったのでこれでいいんですよね♪

・・・・・ただし清涼祭後、ますます先生×４＋優姉さんに捕獲される回数が格段に増えましたが。

４１時間目　自分と花火と祭りの終わり～清涼祭編終了！～（後書き）

４１話でした。ありがとうございます。

やっちまったぜ☆っていうか、これ本当にやったら退学モノですね……（汗）

絶対にしませんし、皆様もしないでくださいね！

ちゃんと前回の空気破壊できたかな～？まあいいですかね？

次回は本来なら強化合宿編ですが、先にバカテスト集とちょっとだけ短編を投稿します。

後、前から言っていた通り更新スピードが落ちるかもしれません。

理由は次回か活動報告にて話します。勝手ですみません。

とりあえず、また次回お会いしましょう♪

バカテスト集その？＋短編：吉井明久の楽しい？後夜祭（前書き）

どうも糖分摂取魔です。
ＬＥＮさん、レフェルさん、榊さん、さかさまテルテルさん感想ありがとうございます！

今回はまたちょっとお休みのバカテスト集＆短編です。結構さっくり読めると思います。あらかじめ言っておくとキャラ崩壊ってレヴェルじゃないです（汗）

とりあえず今回もどうぞ！

バカテスト集その？＋短編：吉井明久の楽しい？後夜祭

バカテスト　地理）
問　以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え
『リトアニア　エストニア　ラトビア』

教師のコメント
そのとおりです。

土屋康太の答え
『アジア　ヨーロッパ　浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え
『香川　徳島　愛媛　高知』

教師のコメント
正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

月野造の答え
『リトアニア　エストニア　ラトビア』お相撲さんのバ●トさんはエストニア出身

教師のコメント
よくご存じですね。

バカテスト　現代社会）
以下の問いに答えなさい。

『ＰＫＯとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え
『Ｐｅａｃｅ－Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略。
国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント
そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　ＰｅａｃｅＫｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｉｋｉ　Ｏｐｐａｉの略。

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント
君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え
『パウエル・金本・岡田　の略』

教師のコメント
それはセ界の平和を守る人達です。

月野造の答え
『Ｐｏｋｅｍｏｎ　Ｋｅｎｎｋｙｕｕｓｙａ　Ｏｈｋｉｄｏ　の略』

教師のコメント
そりゃそうじゃ！・・・・・・って何やっているんですか、月野君？

月野造の返答
英語でしたからつい・・・・・・先生も割とノリいいですね？

バカテスト　化学）
以下の文章の（　　）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　　）である』

姫路瑞希・月野造の答え
『水酸化カルシウム』

教師のコメント
正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太・島田美波の答え
『塩化吸収剤』

教師のコメント
勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え
『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です。

木下秀吉の答え
『水酸化カリウム』

教師のコメント
慌てましたか？間違って覚えていると大変なことになりますよ。

バカテスト　歴史）
以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（　　）年である』

姫路瑞希の答え
『６０３』

教師のコメント
正解です。

月野造の答え
『６０３年』

教師のコメント
年は問題文にもついていますから、おしいですが部分点を差し上げます。

坂本雄二の答え
『６０３』

教師のコメント
一体どうしたのですか？　驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『６０３』

教師のコメント
君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

バカテスト　英語）
以下の問いに答えなさい。

【？】と【？】に当てはまる語を答えてください。
『マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞希の答え
『マザー（母）から【Ｍ】を取ったら【ｏｔｈｅｒ】（他人）です』

教師のコメント
その通りです。Ｍｏｔｈｅｒから『Ｍ』がなくなるとｏｔｈｅｒ（他人）という単語になります。こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え
『マザー（母）から【Ｍ】を取ったら【Ｓ】（他人）です』

教師のコメント
土屋君のお母さんが『ＭＳ』でも『ＳＭ』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え
『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

月野造の答え
『マザー（母）から【食べ物】を取ったら【鬼人】（他人）です』

教師のコメント
英語関係ないじゃないですか。貴方たちのお母様はどんな方なのですか？

造「今回もまた凄いですね。所々に妙な回答が連発していますよ？」
明「そういう造も英語は本当にアレだね」
雄「お前は頭がアレだがな？」
明「表にでろ！バカ雄二！」
秀「ムッツリーニよ、お主はあれで良いのか？」
康「・・・・・・・・・・・フッ。保健体育以外は任せた」
造「任してどうするのですか？」

美「それにしても瑞希は本当に頭いいわね？」
瑞「そ、そんなことないです。美波ちゃんだって数学出来るじゃありませんか」
優「そう言って姫路さんもちゃんと数学解けているからまた凄い

のよね」

瑞・美　「「木下さんには言われたくありません（ないわ）！！」」

優　「あら？」

宗　「男子と女子で、どうして結果はこうも違うのだろうな？お前たち男子は全員補習だっ！」

☆

吉井明久の楽しい？後夜祭

明久Ｓｉｄｅ

えっと、何？この状況・・・・・・ドッキリ？もしかしてカメラ入ってる？

「明久君～♪えへへ、明久君はいい匂いです～」

「ア～キっ！アハハっ♪アキの肌すべすべね～」

「・・・・・・・・・・・・えっと？」

うん、おかしい。おかしすぎるね。何で姫路さんも美波もこうなってるの？あろうことか僕にすり寄ってきてるし、二人ともなんだかいい匂いですべすべだし・・・・・って違うっ！？

木下さんと先生たちに造を生贄に捧げて、後夜祭に戻ってみればご覧のありさまだよ!?
Fクラス男子全員は何やらトチ狂い暴れだしているし、姫路さんと美波はこうだし!?

「・・・・・地獄絵図じゃの?造がおれば何とかしてくれたじゃろうが」
「くぅ、まさか最後の最後にこんなトラップがあるとは!・・・・・・ってちょっと二人とも僕の服脱がせようとしないで!?」

誰か止めて!?というか本当に何なのこの状況?ムッツリーニは相変わらずの傍観者で写真を撮りまくっているから使えないし、雄二は霧島さんに捕まりもうここにいないから最初から当てにしていないけど!

唯一頼りになる秀吉とこの状況を打破する作戦を練る。
ゴメン造、やっぱり君がいないと色々と大変だよ・・・・・・

「と言うか、そもそも何でこんなことに!?」
「そうじゃの・・・・・む?明久よ、姫路たちの飲んでいるジュース、何かおかしくないかの?」

へ?ジュース?そう言えば見たことないジュースだね。えっとなになに?

『オトナのオレンジジュース』

「「・・・・・・これお酒だ（じゃ）！？」」

誰だ！酒とジュースを間違えて買ってきたバカは？これか！このジュースが二人をこんな風にしてるのか！？てかばれたらまた鉄人に鉄拳モノだよっ！

「「アキ（明久君）・・・・・・ありがとう（ございます）」」

「へ？いきなりどうしたのさ、二人とも？」

ん？何だろう、姫路さんも美波も酔いが覚めたのかな？どこかしら二人とも目が真剣だし・・・・・・

「あのですね、明久君はすっごくかっこいいんです！」

「ウチらを一生懸命護ってくれてるのよね、アキは」

「はい？えっと、ああ！ひょっとして誘拐事件のことかな？それなら朝にもう「「それだけじゃないですよ（ないわ）！」」・・・・・・えっ？」

うーん？僕姫路さんと美波、護ってるっけ？試召戦争の時に二人に護られた記憶はあるけど・・・・・・

「ある人から、Ｆクラスの教室の問題のことを聞きました」

「それにアキが試召戦争を始めた理由も・・・・ね」

な!?だ、誰だ?そんな恥ずかしいことを喋ったヤツは!

「(ボソッ)明久君のそんな優しさ・・・・・大好きです」
「(ボソッ)ウチもアキがウチらを大事に思ってくれる心が大好きよ」
「・・・・・・ふぇ?何か言った?」

二人が小さい声で何か言った気がしたんだけど・・・・・・?

「「というわけでお礼をするから(ので)服を脱いでね(ください)♪」」

「なにゆえ!?」

二人が何を言ったのかわからなかったけど、僕にはこれだけはよくわかった。
この二人にコンビを組まれると多分一生僕は勝てないだろうって・・・・・

「ふむふむ。これは中々面白くなってきたのう♪・・・・・まあ、明久のは少々見てて胸やけを起こしてしまいそうじゃがの」

とりあえずFFF団が僕らに気付き嫉妬により殺戮が始まり、鉄人が騒ぎを聞きつけて止めに入るまでこの宴は終わらなかった。後夜祭、恐るべしっ!

バカテスト集その?+短編：吉井明久の楽しい?後夜祭（後書き）

いかがだったでしょうか?

美波がもうツンないよ!?ツンのない美波なんて認めないっ!という方はホントすみません。どうしてこうなったんでしょうね!

あと、皆様に報告!

更新速度が遅くなると思います。理由に関しては長くなるので、活動報告を読んでもらえると助かります。こちらの勝手な理由で申し訳ございません。

明日は普通に更新するとは思いますが、明日以降は割と不定期になる恐れが。

身勝手にすみません。

読んで下さった方、本当にありがとうございます!ではまた次回!

４２時間目　そうだ！合宿に行こう～強化合宿編スタート～（前書き）

糖分摂取魔です。いよいよ新章突入です！

強化合宿編もいろいろと暴走して原作崩壊すると思います（汗）

いつものことですね

とりあえず４２話、どうぞ！

４２時間目　そうだ！合宿に行こう～強化合宿編スタート～

長かったようで短かったような清涼祭が終了してからしばらく、新学期から数えると早二ヶ月が経過しました。もう日没の時刻にもはっきりと変化が見られるようになりましたね。

あれからの日常は・・・・・・

ツネ・ナツがＦクラスの皆さんに謝りに来たり（流石の自分も驚きました）

元教頭を本家（ウチ）で世話をすることになったり（せいぜい必死で働いてください♪）

いつの間にやらこーさんが出版した【木下秀吉＆月野造】写真集が出回るのをヒデさんと一緒に阻止したり（こーさんは油断なりませんね）

何故か清涼祭終了後から、アキさんにべったりの姫路さんと島田さんを見て砂を吐いたり（アキさんは困惑していましたが）

それを恨めしく見ていたＦクラス男子の暴走を止めたり（もう止めるのは限界そうです）

ゆーさんの浮気？に嫉妬する霧島さんをなだめたり（ゆーさん、ファイト！）

以前以上に過保護になった先生ズ＋優姉さんから逃走したり（誰か止めて・・・）

学園長の研究につきあったり（割と楽しいですね）

西村先生の所でお茶をしたり（一番落ち着きます）

・・・・・となんら変わり映えのない日常でした。うん、何も問題ありませんね。

その辺のお話はまた別の機会に。ま、それこそ、いつもと変わらぬ日常ですよ♪

☆

「それで、姉上が関節を極めての・・・・・」

「ヒデさんは自分とは別の意味で大変なんですね・・・・・」

いつものように朝偶然会ったヒデさんと一緒に登校しています。優姉さんは、今日は日直らしいのでヒデさんと一緒ではありませんでしたけどね。

「おはよう造・秀吉。二人とも早いね」

あや？この声はアキさん。珍しいですね？アキさんがこの時間に登校とは。

「うむ。おはようじゃ明久よ。じゃがそれはこちらの台詞じゃぞ？」
「おはようです、アキさん。いつもよりお早いですね？」
「いやぁ～なんか早く目が覚めちゃってね」
とても明るい顔でアキさんはそう言います。爽やかな朝らしい顔ですね。

「さてはお主、明日からの強化合宿で浮かれとるな？」
「あはは、そうかもね」
「アキさんもですか？自分も気づいたら四時ごろ目が覚めて、とりあえず学園に来たんですよ？」
「「は？四時！？」」
お祭り前はこんなものでしょう？あとでちょっと疲れますがね。

「また開いていませんでしたから無理にでも侵入しようとして、当直の西村先生に見つかったんです。お茶をごちそうになりました♪」
「「・・・・・・」」
「それから『早すぎるから一度家に帰ってちゃんと飯を食べて来い』って言われて、んで現在にいたるんです・・・・・・・・・・って何ですか？二人ともその目は？」
「造よ・・・やはりお主はよくわからんの」
「造がいいならいいけどね・・・・・・」

失礼ですね!?誰にでもそんな経験四度や五度くらいあるでしょうに・・・・・・

と、そんな会話をしながらクラスに入っていきます。

「しかしお主の言うように学力強化が目的とは言え、皆で泊まりがけなのじゃ。楽しみになるのは仕方がないじゃろうな。ワシとて胸が躍っておるしの」

机に鞄を置いてヒデさんが自分の席に来てくれます。あれ?アキさんは何やら驚きながらアキさんの机の中をゴソゴソしてますね、どしたんでしょうか?ま、いいですがね?

「でしょ?ああ、早く明日になりませんかね?皆さんとの勉強会!ワイワイ楽しく入るお風呂!夜はこっそり眠くなるまで皆さんと談笑!これこそ最高の『最悪じゃあああああっっ!!』・・・・最悪の?」

「なんじゃ?何やら明久が壊れておるぞ?」

突然叫び出したアキさん。手に持っているのは・・・・・手紙?どうやらアレが原因でしょうかね?とりあえず落ち着かせて話を聞きますか。

☆

「「脅迫状!?」」

必死に隠そうてしていたアキさんですが、とりあえず誘導尋問して聞き出しました。

やり方がおかしい?いえいえ、これはアキさんの為ですから問題ありますん（どっち!?ｂｙ明久）

「う、うん。これには『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと』って書いてあるんだ」

何故でしょうか?大きな問題は大体片づけているのですが、Ｆクラスにいるとどうしても恋愛（コッチ）関係の話の問題が解決できませんね・・・・

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおる異性に対してなんらかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが。つまり・・・・・」

「うん。手紙の主はこのクラスの貴重な四人の異性、つまり姫路さんか美波か、もしくは秀吉か造の中の誰かに好意を寄せているヤツだってことがわかるね」

「ヒデさん、やっぱり聞かなかったことにしましょう」

「そうじゃな。ワシらは何も聞いておらなんだ」

「待って!?冗談!半分冗談だから!?」

全部冗談でしょうが?まったく・・・・・・

まあ、聞いたからには最後まで何とかしますがね?

「わかってますよ、まったくアキさんは・・・・・・」
「はぁ・・・それで？何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」
「あ、そういえばまだ知らないや。えっと『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』だって。写真って、こっちの封筒に入っているやつかな？」

丁度写真が入るようなサイズの封筒が同封されていたので、三人で中身を確かめます。
それは三枚のアキさんが写った写真でした。

・・・・・アキさんの女装姿（メイド服　ｖｅｒ）の。

「お、落ち着くのじゃ明久よ！？人間一度はメイド服くらい着るものじゃ！」
「そ、そうですよ？自分なんかこんなこと日常茶飯事ですし！？」
「・・・・・僕を死に追い詰める卑劣な策略だよ」

なまじ似合っているだけに、どう上手くフォローすればいいかわかりません。ヒデさんも同じようですね。

「おはようございます。皆さん」
「おはようみんな。どうしたの？アキの叫び声廊下まで響いてたわよ？」

とそこへ姫路さん島田さんがやって来ました。
おお！彼女たちなら上手いフォローが出来るやもしれません。

「ア、アキさん！二人の意見を聞いてもらいましょう？女の子らしい意見が聞けると思いますよ！？」
「そ、そうじゃの、先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと二人に証明してもらうとしようかの。・・・・・二人とも、少々良いか？」
「あ、はい。何でしょう？」
「何か相談かしら？」
「うむ。二人に質問なのじゃが、明久のメイド服姿の写真があったらどう思うかのう？」

ヒデさん大☆直☆球。ですが自分もこの質問しか浮かびませんでした、はい。

「う～ん、そうですね・・・・・・」
「悩みどころね・・・・・・」

アキさんがハラハラと様子を窺っていますね。確かに自分の評価が決まるわけですからそうなりますよね？

「もしそんな写真があったら・・・・・・とりあえず、スキャナーを買います」
「ウチは・・・・・そうね、サイトを立ち上げようかしら」

「「「？？？」」」

なんでそんな話に？よくわかりませんね？

「えっと、どうしてでしょうか？」

「「だってそうしないと、アキ（明久君）の魅力を全世界にＷＥＢで発信できないじゃない（ですか）・・・・・・」」

なんてこったい。この二人、完全に思考が日高先生たち向きだぜい！

「明久、落ち着くのじゃ！　飛び降りなんて早まった真似をするでない！」

「アキさんっ自分も何とかします！ですから止めてください！」

「放して秀吉、造！　僕はもう生きていける気がしないんだ！」

気持ちは痛いほど分かります！分かりますから落ち着いてください、アキさん！

「そ、そうじゃ！　ムッツリーニじゃ！　ムッツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！」

「そ、そうですね！こーさんならきっと事情を説明して・・・・・・」

「ムッツリーニに笑われる？」

「違う！　事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらうのじゃ！」

「おそらくこーさんがいれば脅迫相手くらいすぐに見つけられますよっ！」

「おおっ！　なるほど！」

よ、よかったです。何とかアキさん、我に返ってくれました。

こーさんは底が知れない人です。頼めばアドバイスくらいくれるで

しょう。

「ナイスアドバイスだよ秀吉に造！流石は僕のお嫁さんと愛娘だ！」
「婿の間違いじゃろう！？」
「そこは息子でしょう！？」

「「えっと・・・・・・どっちも間違いだと思うわよ（思いますよ）・・・・・・」」

何て失礼なことを言うのでしょう？ヒデさんも自分も男だっていうのに！

「ところで、明久君のメイド服姿がどうとか・・・・・・」
「詳しく聞きたいんだけど・・・・・・」
「あ、アキさんはこーさんに用事があるんですよね！？（早く行ってください！）」
「姫路に島田！　ワシらと少々話でもせんかの！？（この二人はワシらが引きつけておく！）」

何とかアキさんを逃がしましたが・・・・・・
この二人、本当にFクラスに馴染んできましたね・・・・・・？

☆

「は？ゆーさんにも問題が？」
「このクラスに平穏は訪れんのかのう・・・・・・？」

戻ってきたアキさんとゆーさん、こーさんの話を聞くとアキさん同様、ゆーさんも同じような被害に遭っているそうです。何でも召喚大会中のゆーさんの偽のプロポーズが霧島さんに売られているとのこと。

「翔子の奴、婚約の証拠として父親に聞かせるらしい・・・・・」

それ後がないですね。てか、まさかアレが録音されているとは・・・・・

こうなった原因は自分にもありますので、手伝わないといけませんね！

とにかく二人の件は、こーさんが調べてくれるとのこと。自分はこーさんについて調べてくなりましたよ？前々から思っていましたが、本当に何者なんでしょうね？

☆

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。ＨＲを始めるから席についてくれ」

ん、西村先生もいらっしゃったしここは席に戻りましょう。

それにしても自分も手伝うと言ったのに・・・・・・西村先生も頑固ですね？

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくよう

に。まぁ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

そう言って先生は冊子を配ります。ですが勉強合宿とはいえ流石にワクワクしますね♪

「集合時間と場所だけはくれぐれも間違えの無いように。特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

ああ、そうでしたね。確か去年のAクラスはリムジンバス。Fクラスは現地集合でしたっけ？

「本来ならお前たちは現地集合だったが・・・・・・」

『『『案内すらないのかよッ！？』』』

「話を聞かんかバカ者が！今回はバスが出る。しおりを各自読んでおくように。以上っ！」

珍しく、自分たちの扱いが良いことに全級友が涙を流していました。そこまで感動しますか・・・・・・？

てか、しおりに書かれているバスに見覚えが・・・・・・？

きっ、気のせいですよね？気のせいだとイイナ・・・・・・

４２時間目　そうだ！合宿に行こう～強化合宿編スタート～（後書き）

４２話でした。いかがだったでしょうか？

まあ、一応は原作に沿っているのでこんなものでしょうか？

姫路さんたちが暴走してますがね！

話が変わりますが、ウチの学校も学習合宿あるんですよね～

……鬱だ。普通の合宿でいいじゃないですかっ！？何が楽しくて朝の９時から夜の１１時まで勉強するんでしょうかっ！？バカですか！先生たちは！？

……ごめんなさい。毎年のこととはいえ、あれは体と精神に堪えるイベントです。

バカテスの世界だったらもっと楽しいでしょうね♪

とりあえず、こんな感じでしょうか？また次回もよろしくお願いします！

４３時間目　心理テストとバスの中～貴方の心は？～（前書き）

４３話です。相変わらず長いね（汗）

毎回思うのですが、サブタイと前書き書くのが一番考えるとこかも地味に悩むんですよね。

まあいいか、とりあえずどうぞ！

４３時間目　心理テストとバスの中～貴方の心は？～

遠藤先生＆ＤクラスＳｉｄｅ

「お、おい平賀！また遠藤先生が何処かに行こうとしてるぞ！？」
「またか！？先生！月野は別の方法で合宿場に行ったんですって！」
「は、離して下さい！わ、私だって造くんと一緒のバスに乗りたいんです！」
「アンタは俺たちの引率でしょ！？」

造くん・・・・・寂しいですよぅ。Ｄクラスの担任なのでそんなこと出来ないのは分かってますが、寂しいものは寂しいんです。合宿中は一緒に勉強くらいは出来たらいいのですが・・・・・

「うう、寂しいですよぅ・・・・・造くん分が足りないですよぅ」
「・・・・・誰か、月野の写真でも持ってないか？」
「・・・・・それで足りると思うか？」

「「「無理だな（ね）・・・・・・」」」

？？？『これだから男は危険なのですわ！先生すらも誑かして、ああ汚らわしい！』

船越先生＆先生方Ｓｉｄｅ

「あの、船越先生？無言で電車の窓から跳び下りようとしないでください」
「またですか？皆さん、ちょっと押さえておきましょう・・・・・・」
「離して下さい。今からでも造くんに追いついて見せます」
「物理法則的に無理があることをしようとしないでください！？」
「・・・・・・月野をここに呼ぶべきだったか？」

くっ！どうせならバスの中に潜り込んでおけばよかったですかね？
この鬱憤は合宿で晴らさないと気が済みません・・・・・・

「造くん、合宿、勉強会・・・・・・コスプレ、風呂」
「！？・・・・・・月野。お前は逞しく生きてくれ」

優姉さん＆高橋先生＆ＡクラスＳｉｄｅ

「たっ、大変！またバスから出ようとしているわ！？」
「代表！だから坂本君は別のバスですって！」
「・・・・・・私は常に雄二と一緒に在るべき」
「ダメです！もう代表、完全に私たちのことを見えていません！」

「高橋先生はどうした！？」
「造くん・・・・・・私も行きますっ！」
「せんせえええええええええええ！？」
「先生まで！？こ、こんなのってないですよ・・・・・・」

「駄目です！高橋先生！」

「おお！木下さん！？彼女ならあるいは・・・・・・」
「どうして・・・・連れて行ってくれないんですか！？アタシも行きますっ！」
「「「誰か止めてえええええええええええええ！？」」」
？？？『吉井くん・・・・・・』
？？？『あははっ♪Ｆクラスの人たちは大人気だね～♪』
西村先生＆日高先生＆Ｆクラス（第二号車組）Ｓｉｄｅ
『野郎どもっ！盛り上がっているかあああああああああああああ！？』
『『『うおおおおおおおおおおおおおおおお！』』』
『足んねえぞ！盛り上がってんのかあああああああああああああああ！？』
『『『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！』』』
『誰のおかげでここまで来れたか言ってみなッ？』
『『『日高師匠のおかげですッ！！！』』』
『そうだッ！アタシのおかげだぜ！てめえら、忘れんなや！』
『『『Ｙｅｓ，　Ｍａ－ａｍ！』』』
「・・・・・・」

バス内が混沌（カオス）と化した・・・・・・
Ｆクラスの生徒以上に日高先生がこれほど厄介だとはな・・・・・・

日高先生には『自分がＦクラスを送る。文句あるかい？』と他の教師の言い分をばっさり断ち、彼女の仕える家からほぼＡクラス送迎用リムジンバス並みのバスを無償で提供してくれた恩がある。とはいえ・・・・・・

『お前ら、叫べ！歌えええええええええええええええええ！』

「日高先生！貴女引率であることを忘れないでくださいッ！！」

教師がこの調子ではな。全く、月野の苦労が窺えるな？
まあ、ここに月野がいればアイツも同じことを言うだろうが・・・

月野＆Ｆクラス（第一号車組）Ｓｉｄｅ

「・・・・・・！？何でしょう？凄い嫌な電波が受信された気がします」
「・・・・・・造もか？俺も翔子が何やら妙なことを言っている映像（ビジョン）が見えた」
「「・・・・・・・（ハァ）」」

何故でしょう、すっごく寒気がするのと同時に西村先生に凄く申し訳ない気持ちになってきます。もう一台のバスで何が起きているか、大体予想がつくのがまた、申し訳ないです。

西村先生？合宿場に着き次第、何か手伝いますよ。
それまで日高先生の暴走を止めていてください・・・・・本当にご苦労様です、先生。
とりあえず、そのことは後にして今はのんびりしますかね？

合宿とはいえ目的地に着くまで、楽しい旅行のような気分になります。
加えていつものメンバーですからね。小旅行気分ですね♪

「つ、造？あと二時間くらいで着くのか？」
「え、ええ。まだまだかかりますね」
「二時間か。眠くもないし、何をしていようかな～」

アキさんも会話に加わります。確かに手元に何もない以上、結構暇ですからね。
こればかりは眠る以外に話くらいしかないですもんね。

「って、美波と姫路さんは何を読んでいるの？」

あら？何やら二人とも楽しそうですね？手帳くらいの本を仲良く読んでいます。

「ん、これ？心理テストの本。１００円均一であったから買ったのよ。結構面白いのよ？」
「簡単なものみたい何ですが、なかなか楽しいです♪」

心理テストですか？・・・・・あれ、当たるんですかね？
ま、当たる当たらないはともかく楽しむものですよね？

「へぇ～。面白そうだね。二人とも、僕にその問題を出してよ」
「え！？・・・・・い、いいわよ？」
「み、美波ちゃん！・・・・・・アレ出してみます？」
「そ、そうね！・・・・・・（コホン）それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げてください』」

何故に二人が慌てている分かりません？ま、いいですけどね。

「『？緑　？オレンジ　？青』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

ふむふむ。緑とオレンジと青ですか。

「えーっと・・・・・って二人とも？何でそんなに期待の眼差しで僕を見てるの？」
「べ、別にそんなわけじゃ・・・・・！」
「そ、そうですよ！まだかなって思っているだけです！」

いやいや。そんな風に見られたら誰だって意識しますよ？

「？ま、いいか・・・・・順番に『緑→造　オレンジ→秀吉　青→姫路さんと美波』って感じかな？」

「ＯＫ、ちょっと待ちましょう」
「その答え、おかしいじゃろ？」

「？どしたの二人とも。何か変だった？」
「アキさん？自分らに喧嘩を売っていると見ていいんですね？」
「何やらおかしな点が多々あったのう、明久よ？」
「？あっ、ゴメン・・・・・やっぱりおかしかったよね？」
ようやく気付いてくれましたか。アキさんにも困ったものです。

「でも、姫路さんも美波も何となく『青』って感じがしたから、つい二人とも呼んじゃった」

「「そっちじゃないでしょ（じゃろ）！？」」

くっ、最近Ｆクラス全員が自分とヒデさんを女子扱いしている気がします・・・・・・

「・・・・・・ヒデさん。今日のお風呂頑張りましょう！」
「・・・・・・そうじゃの。何としてもワシらが男じゃと認めさせねばっ！」

風呂でどう頑張ればいいか分かりませんが、頑張りましょう！自分はちゃんと男ですから！

それにしても結果はどうだったんでしょう？
姫路さんも島田さんもえらく真っ赤で、それでいて妙に幸せそうですね？

「どれどれ・・・・・ふむ」
「あっ！ちょっと！？」
「坂本くん！？」

二人が放心している間にゆーさんが島田さんの手元から本を取り上げます。

「なるほどな？緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はっと・・・・・・」

そう言ってゆーさんが面白そうにアキさんと姫路さん、島田さんを見ています。
というか結果は？言わないのでしょうかね？

「さ、坂本！返しなさいよ！」
「そうですよ！あと言わないでくださいね！？」
「悪い悪い。面白そうだったもんで、つい借りちまった。・・・・・・おめでとさん？」

「「っ～～／／／／／／／／」」

？まあその辺にしておいてあげてください、ゆーさん。
もう何だか、見てて気の毒になってきますからね？

「うむ、まあよい。ワシも参加していいかの？」
「んじゃ俺もやるか。どうせ暇だしな」
「べ、別にいいわよ！／／／／／／」
「み、皆さん一緒にやりましょうね！／／／／／／」
「それじゃ自分も・・・・・・あれ？こーさんは？」

何故か先ほどから見ませんね？いつもならここは皆さんでやるところ何ですが・・・・

「ああ、ムッツリーニなら眠っておるよ？色々調べ物をしてくれておったしの」
「そのようだな・・・・・・ここは眠らせてやるか」

アキさんとゆーさんの件を一人で調べていたようですからね。お疲れです、こーさん。

「それじゃあ二問目ね？『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を、順番に二つ挙げてください』だって。どう？」
「俺は5・6だな」とゆーさん。
「ワシは2・7じゃな」とアキさん。
「僕は1・4かな」とヒデさん。
「私は3・9です」と姫路さん。

「自分は４・３ですね」と最後に自分です。
それらを聞き終えた島田さんがゆっくりページをめくり・・・・・・

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ・・・・・・」

島田さんが順番に・・・・・・

「クールでシニカル」→ゆーさん
「落ち着いた常識人」→ヒデさん
「明るく外交的」→アキさん
「温厚で慎重」→姫路さん
「呑気で天然」→自分

とのこと。

「ふむ。なるほどな」
「常識人とは嬉しいのう」
「外交的ってなんだっけ・・・？」
「温厚で慎重ですか～」
「呑気は認めますが、天然・・・？」

ま、いいですけど。皆さんのも的を得てますし？

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ・・・・・・」

また先ほどと同じように島田さんが順番に・・・・・・

「公平で優しい人」→ゆーさん
「色香の強い人」→ヒデさん
「正義感の強い人」→アキさん
「意志の強い人」→姫路さん
「面倒見の良い人」→自分

となりました。

「秀吉は色っぽいのか」
「明久は確かにそうじゃの（雄二以外には）」
「姫路さんらしいね」
「月野君はそのままですね」
「ゆーさんは優しいですもんね（アキさん以外は）」

と、何だかんだで心理テストは盛り上がり結構時間を潰せました。
ちなみに島田さんは、『1・8』で最初のはアキさんと一緒、二番目のは「純情で一生懸命な人」みたいでしたね。・・・・・地味にこの心理テスト合ってませんか？

そうして楽しい時間を過ごしていました。こういう時間もいいですよね？
そう、昼時に姫路さんの『アノ』殺人兵器が出て来なければねっ！

「「グボハッッ・・・・・・！？」」

今回の犠牲者
吉井明久（死因：唐揚げらしきもの）
月野造　（死因：エビフライらしきもの）

流石です姫路さん。楽しい旅行を弁当の一品で地獄に変えてしまうとはね・・・・・・

４３時間目　心理テストとバスの中～貴方の心は？～（後書き）

４３話でした。またまた変えましたね。心理テストのとことか、明久マジ女性たらし

造「そう言えばアキさん？どして『青』で姫路さんと島田さんを？」
明「え？……えっと、美波は何となく『波』で海の色を思い出して、姫路さんはあの大きな瞳を見ると空の色を思い出して」
秀「ふむふむ。……それで？『緑』と『オレンジ』の『異性』は誰と誰じゃ？」
明「『緑』、造『オレンジ』、秀吉」

造・秀「「・・・・・・・・・・・・・」」

明久が二人を『青』に選んだのはこんな理由だそうです。わーすごく口説いてるっぽーい（棒）そして結局姫路さんの弁当は明久と造が食べることに（笑）

こんな感じでしょうか？ナニコレ状態ですが気にしません。

今回はここまでです。読んでいただいてありがとうございます！

４４時間目　自分とヒデさんとお風呂～覗くなよ☆ｂｙ日高～（前書き）

４４話です。さかさまテルテルさん、ＬＥＮさん、レフェルさん感想ありがとうございます！

今回はちょち短めですかね？まあとりあえず始めましょう！

４４時間目　自分とヒデさんとお風呂～覗くなよ☆ｂｙ日高～

「ふぅ、ひどいめに遭ったね・・・・・」
「ですです・・・・姫路さんのお弁当、食べるたびにパワーアップしてませんか？」

いつもの如く姫路さんのお弁当の被害者メンバーたちに救命され、アキさんと自分は復活できましたが、アレはもう生物化学兵器を超えている気がします。
先に日高先生秘伝の薬（合法ダヨ？）を飲んでいたお陰で、即死は免れましたがね？

・・・・・しかし、だんだんとアキさんと自分、耐性が付いてきてる感じがします（汗）いいことはありませんがね。強いて言うなら最近姫路さんのお弁当のおかげで？好き嫌いが少なくなってきました。
食べられるだけでもありがたいんですね！それがよくわかりましたよ・・・・・・・

「それで？ムッツリーニ、調べてくれたんだろ？」
「・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

しばらく寝ていたこーさんもお昼ご飯になって起きたようです。よっぽど疲れていたのでしょうね。今度何か奢りますよ。

「・・・・・・・・・・詳しくは合宿場に着いてから。だが明久と雄二の件は恐らく同一犯と思われる」
「まあ、脅迫紛いのことをやる奴なんてそう多くはないだろうしな」
「だね、断定してもよさそうかな？」

いやいや、普通はそんな人いないと思いますがね？どうしてまた文月にはそういう教師・生徒が出てくるのやら・・・・・・

「ん？アンタたちさっきから何の話しているの？」
「どうかしたんですか？」

女子ペアが聞いてきますが、無駄に二人を心配させるのも悪いですからね。
ここは一応誤魔化しておきましょう。

「ええっとですね。合宿場の部屋割について話していたのですが、いつものメンバーでよかったなって話です」

「「・・・・・・そう（ですか）」」

ってあれ？何で恨めしそうに自分とヒデさんを見ているんでしょう？何やらいらぬ地雷を踏みましたか、自分！？

「月野君も木下くんも羨ましいです・・・・明久くんと一緒の部屋で」

「アンタたち変わんない？二人がこっちに来てウチらが・・・・・・」

「「お断りじゃ（です）！！」」

何でそうなるんですか！？自分もヒデさんも立派な男子なのにっ！
これは皆さんに一度ハッキリとさせた方がいいのでしょうね。ヒデさん！今日は一緒に頑張りましょうね！

「でもウチらの部屋はＡクラスと一緒で、しかも木下さんと一緒なのよ！？」
「そうです！お二人ともお姉さんがいた方がいいのでしょうし！？」

なん・・・だと・・・？二人の部屋には優姉さんが？
マズいです。冗談でも彼女らの部屋に遊びにでも行けば、確実にヤラれる！

「「どうかしら（ですか）！？」」
「「・・・・・・・・・」」

「自分、ますます行くのが怖くなりました・・・・・・」
「じゃな。間違っても姫路たちの部屋には行かんようにせんとな・・・・・」

もう帰ってはこれない自信があります。自分もヒデさんもね。
てかどの道女子の部屋に男子が行ったら、それだけで問題になりそうですよね？
男子は男子の部屋、女子は女子の部屋です！そして自分とヒデさん

は男子なんですからね！

☆

そうこうしているうちにバスはやっと合宿場に着きました。綺麗で中々いい所です。
何でも文月学園が買い取った施設らしいですね。ついでに言うと召喚獣を呼び出せるように作り変えられたそうです。あら便利。

「いやぁ～流石に喉枯れたわ～♪」
「先生は何をしにここまでいらしたのですか・・・・・・？」

「「「心地よい疲れだ・・・・・・」」」

「お前らも何しにここまで来たっ！？」

向こうのFクラスのバスも着いたみたいですね。というか・・・・・・
日高先生とFクラスの皆さんがとてもいい顔をして、西村先生が疲れた顔をしています。
何があったか想像がつく分、西村先生は大変だったのでしょう。

「せんせ、お疲れ様です。いろいろすみません」
「おお、月野か。お前の苦労がよくわかるぞ・・・・・」

「どもです・・・・これから荷物運びですよね？Ｆクラスの皆さんに頼んで手伝うことにしていますから安心してください」
「・・・・・すまんな、助かる」

西村先生の手伝いの後、（途中『『『造くん何処ですか！補給させてください』』』なんて幻聴があったのですが）とりあえず皆さんと夕食を食べ、部屋に戻って対策会議が始まりました。

「それでムッツリーニ、どこまでわかった？」
「・・・・・・・・・・・残念ながら犯人までは特定できなかった。すまない」
「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」
「・・・・・・・・・・・だが、それらしい人物の会話は手に入れることができた。そこから二人の件の犯人は女子であることが判明した。今聞かせる」

と、こーさんが学園中に仕掛けたらしい盗聴器？を取り出し皆さんに聞かせます。
昨日の話でしたのに、よくもまあこんなに早く情報が得られましたね？

・・・・・事が事ですが、こーさん色々と大丈夫なのでしょうかね？捕まりませんか？

とりあえず盗聴器（それ）によると、その犯人は霧島さんと取引きしており、ゆーさんのプロポーズを売買していたとのこと。しかも話を聞く分だとアキさんの写真もそこで売買されているとか。

「僕お嫁にいけない・・・・・・」

・・・・・アキさん？落ち込まないでください。気持ちは凄くわかります。
ですが嫁なんですか？この会話いつか何処かでしましたよね？

ま、どうやら女子の間でそのような取引きをしている人物のようです。
・・・・・例えるなら女子版のこーさんでしょうか？
残念ながらこーさんの言う通り、音質が悪く誰の声かはっきりしませんが自分のことを乙女と言ったり、声や口調からして女子の犯行とみて間違いなさそうですね。

それでその女子の手掛かりですが、その人は少々危険なことをしており、それが原因で母親に文字通りお尻に灸を据えられたのこと。
犯人を特定するにはこんなものでしょうか？

「・・・・・ハッ！そうだ！そう言えばもうすぐお風呂の時間だし、造と秀吉の見てきてもらえばいいじゃない！女子のお尻にに火傷の痕が残ってないかを！」
「全力でお断りです。アキさん？良い根性してますね」
「お主はワシらをなんだと思っておるのじゃ・・・・・？」

何故に自分らが女子風呂に入ること前提で話をしているのですか？
今回は本気で行かないと完全に女子扱いされそうで怖いですね。

「残念ながらそれは無理だぞ、明久」

そうです！ゆーさん言ってやりなさい。自分らは立派な男子なのですと。

「しおりの３ページ目を開いてみろ」
「はい？何でそんな話になるのでしょうか？」
「？どれどれ・・・・・・」

～合宿所での入浴について～
・男子ＡＢＣクラス・・・２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＤＥＦクラス・・・２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス・・・２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＤＥＦクラス・・・２１：００～２２：００　大浴場（女）

※Ｆクラス木下秀吉・月野造・・・２０：００～２１：００　個室風呂？

「「「「・・・・・・・・・・」」」」

「・・・・・くそっ！これじゃ二人に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」
「・・・・・・・・・・・・残念」
「どうしてワシらだけ個室風呂なのじゃ!?」
「これ最早いじめレベルですよね!?」

ば、バカな!?今日こそは皆さんに自分たちが男子であるという証拠を見せるチャンスですのに!何ですかこの仕打ちは?さては日高先生達が暗躍してますねっ!?

ヒデさんと二人、涙を流します。何で?どうして?これ何の嫌がらせ?
てかゆーさんも自分たちが行けたら本気で女子風呂に行かせようとしてましたね!?

「ま、とにかくだ。こうなった以上何か別の方法を・・・・・・?外が何やら騒がしいな」
「ホントだ?何だろう?」

『いいからこの部屋の男子たちを出しなさい!』
『庇ってもいいことはないわよ?』
『そうですお姉さまっ!どうしてあんな豚どもにお情けをおかけになるのですか!?』

『アンタたち!だから違うって言っているでしょ!?』
『そうです!冤罪ですよ!』
『証拠はあるのかしら?』
『・・・・・決めつけるのはよくない』

・・・・・・？何やら女子たちが扉の前で騒いでいるみたいですね？
かなり大勢の女子たちがいるようですが、どうしたのでしょう？

４４時間目　自分とヒデさんとお風呂～覗くなよ☆ｂｙ日高～（後書き）

４４話でした。ありがとうございます！

さて、いよいよ合宿場に着いた造たちなわけですが、次回は例の騒ぎがありますね。ふと思ったのですが、秀吉ってやっぱり原作では一人でお風呂だったんですかね？……なんか悲しいｏｒｚ

ま、いいですかね？ある意味ゆっくり入れるんのでしょう？

次回は多分いつもの時間に投稿できません。平日はＰＣ使うなって言われてて（涙）家族が寝静まってから投稿するかと（汗）

ではまた次回！読んでいただいてありがとうございますです！

４５時間目　盗撮と疑いと造覚醒？～『先輩』は勘弁して～（前書き）

更新遅れてごめんなさい。糖分摂取魔です。

遅くなった分、今回は結構長め？かな？いつもより多めになっていると思います。

うだうだ言うのもあれなので、早速行きます４５話！

45時間目　盗撮と疑いと造覚醒？～『先輩』は勘弁して～

自分たちの部屋の前で騒いでいるみたいですね。
何でしょう？気になりますし様子を見に行きますか？

「あの？どうかしましたか・・・・・・！？」
「造？一体何があったの・・・・・・！？」
「あん？何だこりゃ？」
「姉上も、これは一体何の騒ぎじゃ？」
「・・・・・・・・・・・・何の用だ？」

扉を開けると女子の皆さんがぞろぞろと集まっています。一応女子も男子の部屋には来てはいけないのですがね？口々に『部屋の男子を出せ！』って言ってますが？

先頭に立つのはCクラスの小山さん、後ヘアバンドをした女子の・・・・？どなたですっけ？顔を見たことがない人は流石にわかりませんね。それでもってDクラスの清水さん。島田さんにホの字の愛の暴走戦士だとか？以前アキさんたちのデートで妨害してきた方でしたね。

そして扉の前には優姉さんに姫路さんに島田さんに霧島さんが扉を守るような形で立っています。

・・・・・なにこの状況？ドッキリ？カメラ回ってますか？

「出たわよ！姫路さんたち、どいて！」
「そいつらが犯人何だから、庇うと貴女たちも同罪になるわ！」
「そうですわ！早くそいつらを血祭りにあげねば、お姉さまが大変なことになりますわ！」

周りの女子たちもそれに賛同するように、大きく頷きます。
えっと・・・・・犯人？何か勘違いなさってませんか？

「アキ！出ちゃダメよ！」
「明久くん、今は部屋にいてください！皆さんも！」
「造くん、ここにいては危険よ」
「・・・・・何をされるかわからない」

・・・・・ん～？とりあえず、状況を整理しますか？

何かトラブルがあってそれが自分たちが犯人だと思われている。
←
それを優姉さんたちが自分たちを無実だとして守ってくれている。
←
それでここで一波乱起きそうな状態になっている？

・・・・・ですかね？大まかな所はこんなものでしょうか？

「あの？よくわかりませんが一度話し合いませんか？何が起こっているかわかりませんし」
「そうだよ。ホントこの状況何なの？」
「うるさいわね！あんたら逃げようたってそうは行かないわよ！」
「いえ、ですから・・・・・・」
「証拠もちゃんとあるのよ！言い逃れは出来ないわ！」
「話を聞いて・・・・・・」
「お姉さまに危害を加える豚どもは、死をもって償うべきですわ！」
「・・・・・・・・・・・・ほう？」

「「「「っ！？あ、あの造・・・・・・？」」」」

「あらあら？造くん、怒っちゃったわね？・・・・・・姫路さん島田さん、それに代表？ちょっと部屋に入らせてもらいましょ♪」

ありがとうございます、優姉さん。よく自分がやることわかりましたね♪

「・・・・・・起動（アウェイクン）」

「「「「え！？」」」」

ポンッ！

召喚大会で頂いた腕輪、これがあればいつでもどこでも自分は召喚獣になれます。ここでも例外ないですね。ま、召喚獣を呼び出すこと前提の合宿場ですし。

《さて？すみませんが、ちょっと荒っぽく行きますね？・・・・・・吹き飛びなさいッ！》

「「「「き、きゃあああああああああああああ！？」」」」

一応観察処分者ですから、この風も実体化しています。流石にそう多くは使いませんがね。

この設定をこ―さんに言ったら『・・・・・・・・・・・・パンチラ見放題！？（ブフッ）』と鼻血を出して倒れたのは内緒。こーさんの頭の中はどんな作り方になっているのですか？

それはまあ置いといて、一度彼女たちを落ち着かせるためにもここは威嚇しておきますかね。

ま、加減して怪我だけは絶対にしないようにしてますがね？こんなことで怪我させちゃ元も子もないですし。

～しばらくそのままでお待ちください～

一通り吹き飛ばして、女子の皆さんが落ち着き始めましたね。

《・・・・・ふぅ、それで？話を聞かせてもらえますかね？》

「「「「「・・・・・・はい」」」」」

あぅ、やりすぎちゃいましたか？ちょっと反省ですかね。

☆

「カメラとマイク、盗撮ですか・・・・・・」
「ええ、そうよ・・・・脱衣所に設置されていたの・・・・・」

とりあえず人数が人数である為、空き教室を借りて話を聞くことにしました。
小山さんが今回の代表のようなので、彼女中心に話を進めましょう。

どうでもいいですが、流石に自分は怖がられてしまいましたかね？
女子たちが自分を見て何やらひそひそしています。『どうして女の子が男子の味方なの？』何て聞こえませんでしたよ？全然ねっ！？

「こんなこと、普段Fクラスで騒いでいる貴方たちしかしないだろうって女子の間で考えがまとまって・・・・」
「その中でも特に問題児の俺たちが中心となってやっただろう・・・・ってことだな」
「・・・・・ええ、そんな感じよ」

確かにFクラスの男子は、普段そのような目で見られてもおかしくない行動はしていますね。

ま、最近は何故か沈静化し始めていると聞きますが。（自分とヒデさんがマスコットになったからと言う意見もありますが、そんなオ

カルトありえません）

「ですが今回はFクラスの皆さんは事件に関係ありませんよ？ちゃんとしたアリバイもありますし」

「あ、そうだよね。僕たち鉄人に荷物運びをさせられていたから」

そうなんですよね・・・・先生方の使う器具やテスト問題など、自習室に全員で運んでますし。

そのあとは全員揃っての夕食で、そんなことする暇はまずありません。

「だからそう言ってるじゃない！」

「そうです！明久君たちは無実です！」

「まあ、今回は証拠が不十分だしね」

「・・・・・雄二はそんなことしないし、させない」

・・・・・ありがとうございます、皆さん。女子の皆さんを貴女たちが止めてくれていなければ、多分問答無用で危害を加えられてたでしょうし。信じてくれたんですね。

「・・・・・でも、それじゃあ誰がやったのよ！？」

「そうよ！アンタたちじゃないなら誰が犯人なの？」

「こいつらを信じてはいけません、お姉さま！どうせ協力者がいるに違いありません！」

そうよ！そうよ！と女子たちが騒ぎ出します。・・・・・これじ

ゃ平行線ですね。

「・・・・・はぁ、えっと小山さん?自分は貴女に失望しました。随分短絡的な方だったのですね?」
「っ!?何よいきなり!何でアンタにそんなこと・・・・・」
「そういう所がです。それでも貴女、小暮さんの後輩ですか?」
「なっ!?」

あんまりこういう切札出したくないんですがね。状況が状況ですし、仕方ないですか。
小山さんが小暮さんを慕っていることは、小暮さんから聞いてましたし。

「彼女は貴女に何を教えているんでしょうね?・・・・・人を疑うこと?考えることを止めること?卑怯なこと?そんなことを教えているとは聞いてませんが?」
「うぅ・・・・・」

小暮さんには悪いですが、ちょっとだけ名を借りましょう。後でちゃんと謝りに行きますか。
まあ、小山(リーダー)さんの動揺は他の皆さんにも伝わりますし・・・・・

「冷静に状況を見つめて、賢くなりなさい!そんなことも忘れたのですか!!」
「は、はい!」
「貴女は本当はこんなこと言わなくてもわかってくれる方です。熱くなりすぎず、まずは考えをまとめ、思考することから始めなさい」

「・・・・・・!そうです、そうでした!」

・・・・・あの、これ言ってて恥ずかしくなってきましたよ?何か皆さん自分を見てますし。

一応小暮さんの口調を真似しているんですが、こういうの自分に不釣り合い何だと思うんですがね?

ま、ですがこれで彼女も落ち着いてくれれば話しやすくなります。

「大きな声を出してすみませんね。驚いたでしょう?・・・・・・自分も言い過ぎましたね」

「い、いえ!私も少し熱くなっていたみたいです。すみませんでしたっ!」

「とりあえずはFクラスの男子はこの件に関しては関係ないです。ですが関係ないとはいえ見逃すことにはなりません。こちらも出来る限り協力しましょう。・・・・・いいですよね、ゆーさんたち?」

「ああ、疑われた分はきっちり真犯人に返すぜ?協力してやろうじゃねえか」

「どもです♪ここからは代表たち同士で話し合いませんか?他の女子の皆さんは一度部屋に戻って、後日小山代表から話を聞く形で」

「「「・・・・・わかりました」」」

一応納得はしてもらえたそうです。てか何で小山さんも皆さんも敬語になっているんですか?

恥ずかしいですから止めてください。こういうのダメなんです、自

分。

あっ！ゆーさんたちも、こっち見てにやにやしないでください！？
自分でわかっていますよ?説教が自分に似合わないってことくらい・・・・・・ｏｒｚ

ですが盗撮なんて、今回のアキさんゆーさんの件と言い何が起こっているのでしょう?
とりあえず、今後のことを考えながら対策を練りましょう。

？？？「・・・・・・（クッ、失敗ですわね）」

☆

「やれやれ、散々な目に遭うとこだったな。交渉が上手くいって何よりだ」
「そうですね。・・・・・優姉さん、姫路さん、島田さん、霧島さん。ありがとうございました。おかげで助かりましたよ」

四人とも、当たり前のことをしたまでと言ってくれます。嬉しい限りですね。

とりあえず話し合いの結果Ｆクラスは無罪放免ですが、盗撮騒ぎがあった以上そのような行為が見つかり次第即刻罰する。自分たちの

無実が完全に晴れるまで、自分たちも犯人捜しに協力する、ってな感じで同盟が結ばれました。

発見されたＣＣＤカメラと小型集音マイクはこーさんが調べに行ってくれました。こーさんっていろんな意味で頼りになりますよね。

「それにしても・・・・・・フッ、造も立派に『先輩』してるじゃねえか？」

「そうね、かっこよかったわよ？造くん♪いいえ、造先輩♪」

「・・・・・先輩って言うのはやめてください、地味に凹みますからね」

くぅ！ゆーさんも優姉さんも、ここぞとばかりに（楽しそうに）弄ってきますね！？

あの後小山さんが『今後定期的に情報を交換しましょう！先輩』何て言いだしますから・・・・・・

話を逸らして、この二人を止めましょうね。

「そ、それにしてもよく信じてくれましたね、優姉さん。自分たちが無罪だって」

「え？・・・・・・当たり前じゃない。大事な弟たちですもの？」

「優姉さん・・・・・・」

「姉上・・・・・・」

そんなにも自分たちのことを・・・・・・

「ちゃんと二人をストーキン・・・・・ゴホンッ、成長観察の為に日高師匠と一緒にビデオ回していたもの。証拠はちゃんとあるわ！」

「「ちょっと待ちましょう（待とうかの）」」

うん、なんか変な単語聞こえた気がする。優姉さん自分たちのことを大切にし過ぎてて、何か変なとこにいってる気がします。マズイ、ここは別の人に話を振らないと非常にマズイ。

「ひ、姫路さんも島田さんもよく自分たちのこと助けてくれましたね？ありがとうです！」

「そうだね。ありがとう姫路さん！美波！嬉しいよ」

「そ、そんなことないですよ」

「そうね、ウチらアキたちのこと信じてたし」

うんうん。以前に比べると島田さんも素直になりましたし、姫路さんも自然体になってきましたね。いいことです。

「「それに私（ウチ）たち・・・・・・」」

「？どしたの二人とも、僕の顔を見て・・・・・・」

「「明久君（アキ）なら覗きじゃなくても見てもらっていいですし（いいし）？」」

「「待てえええええええええええええ！！？」」

どうしましょうこれ？島田さんは素直？になりすぎてますし、姫路さんはこれが自然体でしょうか？なんか自分、開けてはいけない箱を開けてしまった気がします・・・・・・

アキさんもパニくってますし、こうなれば霧島さ・・・・・・

『・・・・・雄二になら全てを捧げてもいい？』
『お前は本当に止めろ！やりかねんから質が悪い！』

ゴメンゆーさん。霧島さんは平常運行でしたね・・・・・・
あかん、もうこの女性軍団怖すぎる。あと饅頭怖い。

「と、とりあえず犯人特定とFクラスの男子に盗撮&覗きをしないようにすることが、今できる事ですね」
「あ、ああ。・・・・・・ま、犯人はおいおいとっ捕まえることにして、Fクラスの連中なら俺に考えがあるから安心しろ。絶対に覗きはさせん」

何かこの会話、何処かでした記憶ありませんか？どう考えても死亡（コンボイ）フラグですよね？一応信じておきますが・・・・・・

今日の所はこのくらいにして、休むことになりました。初日からこれですか・・・・・・
ま、楽しくなればいいのですがね？

４５時間目　盗撮と疑いと造覚醒？～『先輩』は勘弁して～（後書き）

４５話でした。ありがとうございます。

今回は造も一応『先輩』としての立場を『後輩』に見せることが出来たのではないかと。……似合わねー（笑）地味に忘れられつつありますが、造は一応年上なんですからね！作者もたまに忘れるけど！

前回言うの忘れてましたが、合宿編はストーリーを大分変えています。ちょっとだけ原作４巻の内容も含みます。ご注意くださいませ。

とりあえずは今回はここまで！次回いつ更新か分かりませんが、なるべく早く更新できたらいいと思います。読んでいただいてありがとうございました♪

４６時間目　同士との出会い～合言葉はシュークリーム！～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。ＬＥＮさん、レフェルさん、榊さん感想ありがとうございます！

気がつけば、バカテスト集まで含めると５０話を越えてました（汗）
だからどうしたというわけでもないですが、少し感動です。

早速ですが４６話行ってみましょう！

４６時間目　同士との出会い～合言葉はシュークリーム！～

「・・・・・雄二。一緒に勉強できて嬉しい」
「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」
「お二人とも相変わらずですね？いえ、ここは皆さん相変わらずですね、でしょうか？」

強化合宿二日目です。今日から本格的に勉強合宿となり、Ａクラスとの合同学習になっています。ま、基本は自学自習ですから割と自由に動けるのがいいですよね。

「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」
「授業？そんなもんやるわけないだろ」

アキさんの独り言を聞きつけて、ゆーさんがやってきました。あのままじゃＦクラスの男子がいつ暴走してもおかしくないですからね・・・・・

「ああ、アキさんそれは・・・・・・・」
「・・・・・この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」
「代表の言う通りよ。それにＡクラスの学習方法をＦクラスが試してみたり、わからなければＡクラスの生徒に質問出来るでしょ？逆に、Ａクラスの生徒も見られているという意識で気が引き締まるし、

質問を受けたら自分たちも勉強になることもあるわ」

おお、流石Ａクラスのトップ陣。優姉さんと霧島さんの非常にわかりやすい説明に周りのメンバーも成程と頷きます。と、そこへ・・・・

「あ、代表それに優子も。ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

あれ？知らない女子生徒さんですね、どなたでしょう？

「あれ？工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

ふむ、アキさんのお知り合いでしょうかね？少なくとも自分と面識はないハズです。

「アキさん？この方は？」

「え？ほらＡクラスの・・・・・あ、そうだ造、あの時気を失って保健室にいたんだっけ？えっとね・・・・・・」

アキさんが言うには、Ａクラス戦でこーさんと戦った生徒さんのようです。そういえばＡクラス戦のこと、ほとんど見てないんですよね・・・・・

「ああ、キミが噂の月野君だね？それじゃ、改めて自己紹介させて

もらうね。Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「!?　何ですって?今何と言いました!?

「く、工藤さん!貴女今何て・・・・・?」

「そ、そうだよ工藤さん!そんな恥ずかしいことこんな所で言っちゃ・・・・・・・」

「ちなみに何処のシュークリームがいいと思いますか!?」

「え?つ、造?」

「!・・・・・まさかキミも!?」

「はいっ!とあるお店でゴールド会員になってしまうほどに!」

「そんな!?まさかこんな所で同士に会えるなんて・・・・・・」

「・・・・・あ、あの造?どしたの?」

「ったく、造はたまに何処かでおかしくなるな・・・・・・」

「あらら、そう言えば造くん甘いもの好きだったわね♪」

「・・・・・・以外」

しばらく工藤さんと甘いもの、特にシュークリームの話で盛り上がりました。

ホントに良いモノですよね♪甘いものは!

「おっと、話が凄く飛んでしましましたね？何でしたっけ？」
「あれ？ボクも忘れちゃった。・・・・・まっいいか♪」

「「「「二人とも、我を忘れるほど好きなんだ（なのね）シュークリーム・・・・・」」」」

皆さんそこまで唖然としなくても・・・・・いやはや、すみません♪

「・・・・・・・・・？何故ここに工藤愛子が？」
「おや～？ムッツリーニくんじゃない♪久しぶりだね」

おや、こーさんも戻ってきましたね。って、どうして工藤さんと火花を散らせているのでしょう？

アキさんに聞くと、二人は保健体育の一位二位を賭けたライバルだそうです。そう言えばこーさん保健体育では、学年はおろか学園最強らしいですね・・・・・・

どういう形であれ、好敵手（ライバル）がいることは良いことです。

「・・・・・・・・・・今日の所はいい。それより雄二、わかったことがいくつかある」
「おお、相変わらず早いな！それじゃ、後で対策会議を開くからそこで話してくれ」
「・・・・・・・・・・・・（コクン）」

流石ですね・・・・まだ半日も経たずに手がかりを見つけるとは。こーさん、本当に忍者さん何でしょうかね？こーさん、頼りになりすぎですもん。

「あ、それって例の盗撮のコトかな？」
「うん。あれ？工藤さんそのこと知ってんの？僕たち言ったっけ？」
「ああ、代表たちから聞いたんだよ。ボクと代表と優子に姫路さんに島田さんは同じ部屋だからね」
「成程。それで昨日の件を知っているわけか？」
「うん。昨日お風呂から上がって部屋に戻ったら誰もいないんだもん。びっくりだよね～」

確かに。部屋に戻れば自分以外いないのは寂しい以前に、不気味でしょうね。

「ま、ボクも何か気が付いたら報告するよ。頑張ってねー」
「どもどもです♪」

☆

とりあえず今日は夕食を食べた後、女子の皆さんと情報を交換し合いました。今のところは進展なしのようです。女子の皆さんも緊張しているのでしょう、早くゆっくりとお風呂に入れるようにしてやらないとですね。

「あ、そう言えばゆーさん。Fクラスの皆さんに絶対覗きとかさせないって言ってましたが対策はしているんでしょうか？」
「ああ、それか。もうムッツリーニに手は打ってもらった。奴らは今回俺に絶対服従しているから安心しろ」
「何やら物騒な話じゃの・・・・・・」
「てか雄二、どうやったのさ？」

確かに気になりますね。朝のゆーさんと霧島さんのやり取りですら、Fクラスの男子はあそこまで暴走しかかっていたんですから、基本安心できませんし。

「ふっ、ちょっとした『お宝』をな、奴らに夕飯の時に渡しておいた」

「「「お宝？」」」

「ああ、奴らすぐに俺の交渉に応じたぞ？」
「・・・・・ハッ！？ねえ雄二！僕もそのお宝見たいんだけど！」

「「「・・・・・・・・・・」」」

・・・・・なんでしょう、凄く嫌な予感がします。ヒデさんも何か察しているみたいですし

「それはな・・・・・・『コレ』だ！」

「「「!?」」」

そう言ってゆーさんが取り出したるはとある一枚の写真。当然その内容は・・・・・・・

自分とヒデさんの、朝の寝起きの一枚（浴衣　ｖｅｒ）でした。あらあら、二人とも抱き合っていてまるで本当の兄弟のように仲が・・・・・・

「「ってなんでワシ（自分）たちの浴衣姿なんじゃ（なんですか）!?」」

待って、おかしい！自分こんなの知りませんよ!?浴衣に着替えた覚えすらないし!?

「雄二!それとムッツリーニ!お主ら何の真似じゃ!?」

「二人ともいつ撮ったんですか!それ以前にどうして自分ら浴衣何ですか!?」

「いやいや、男子を押さえつけるにはな、こうするしかなかったんだ。朝方、木下と日高先生に頼んでやってもらった」

「「・・・・・・最悪じゃ（です）」」

「お前らの犠牲のおかげで少なくともＦクラスの動きは止められる。ま、尊い犠牲だったな」

「・・・・・・ゆーさん、いつか見てなさい?」

「・・・・・お主らいつかバチが当たるぞ？」

くぅ、優姉さんたちも悪ノリしすぎですよ。・・・・・ま、これでFクラスが何とかなるならいいでしょうが。どうして男である自分たちに釣られるんですか？

ついでにアキさん、鼻血止めてください？もうツッコミませんからね？

「だが、今回の犯人は誰なんだろうな？ムッツリーニ以上の能力がないと、こんなこと出来ねえぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・俺以上の能力を持ったやつなど、この学年にはいない」

「そうですね・・・・・そもそも短時間で女子の脱衣所に忍び込むこと自体無理がありますし」

「確かに覗きや盗撮が起らぬよう、脱衣所には昼間は施錠しておるし・・・・・・」

「それに確か、お風呂の時間は先生が見張っているんでしょ？」

「「「「「う～ん・・・・・」」」」」

これ本当に可能なのでしょうか？手口もさっぱりですよね・・・・・

「それとは別に、今回俺と明久には脅迫紛いの件もあるからな」

「ゲッ、忘れてたよ・・・・・」

そうなんですよね、この二人は別の件でも追い込まれていますし。

トラブルが自分らを中心に引き寄せられている感じがします。

「と言いますか、事情を説明して霧島さんに聞いてみてはいかがですか？ゆーさん」

「・・・・・いや実はな？俺も『明久も脅迫されている。今回は手伝ってほしい』って翔子に言ったら話してはくれたんだ」

へぇ？意外ですね？ま、霧島さんにも『余裕を持ってください』って言っておきましたし、それが吉となったんですかね？

「だがアイツも顔まではわからなかったそうだ。いつも仮面をつけていたらしいしな？」

「そうでしたか・・・・・とりあえず今回の件もアキさん、ゆーさんたちの件も証拠が足りませんね」

「ああ、もう少し調べる必要がありそうだな。ま、とりあえず今日はこんくらいにして寝るか？」

「そうだね、今日は勉強漬けでもう眠いし・・・・・」

コンコンッ

「「「「「え？」」」」」

話を終え、休もうとした時に戸を叩く音がしますね。どうしたのでしょう？

「はい？どなたでしょうか？」

『あ、あの！小山です、すみません緊急事態です！』

あらら？小山さん？緊急事態ですか・・・・・・アキさんたちも少し緊張が走ります。

「今開けます・・・・・どうしたのですか、小山さん？」

「あ、あの！実は・・・・・・今度は覗きが現れたんです！」

「「「「「は？・・・・・・覗き！？」」」」」

全く次から次へ、どんどんトラブルが舞い込んできますね？

４６時間目　同士との出会い～合言葉はシュークリーム！～（後書き）

ありがとうございました。４６話でした。

原作と大分違いますね……ここでは一日目に覗きはしないので、これからの展開が随分と変わって来ます。おまけに工藤さんとの出会いで、何だこの展開は？になってますね（汗）

話飛んでアレですが、何気に作者も甘いものが大好きなので（糖分摂取魔ですし）とあるお菓子のお店でリアルに会員になってしまいました。お小遣いのすべてに甘いものって……もちろん親には怒られましたが。

更新が遅れてしまいすみません。今日は何とかＰＣ確保出来たんですが、これからはいつ更新できるかわからないと思います。本当にすみません。

読んでいただいてありがとうございます！次回もどうかよろしくお願いします！

４７時間目　覗き・盗撮・盗聴～全てアウトですよね？～（前書き）

こんにちは、糖分摂取魔です。さかさまテルテルさん、レフェルさん、ＬＥＮさん、榊さん。感想ありがとうございます！

原作と流れが違うので区切り方がイマイチですみません（汗）後書きで少し説明を入れたいと思います。よろしくです。

とりあえず４７話行きましょう！

47時間目　覗き・盗撮・盗聴～全てアウトですよね？～

今度は女子風呂に覗きが出たということで、夜遅かったのですが対策会議が始まりました。
日高先生に頼んで空き教室を会議場にしています。

「えっと、それでどういった事が起きたんでしょうか？」
「それが今回の覗きですが・・・・・・」

なんでも聞けばDクラスの男子生徒数人が、正面から覗きに行ったとのこと。全く度胸があるのだか、向こう見ずなのかわかりませんね？・・・・・遠藤先生大丈夫でしょうか？Dクラスの担任ですし、落ち込んでなければいいのですがね。

覗き犯ですが、盗撮の件があり西村先生たちが警戒を強化して待機していたために失敗に終わり、只今絶賛説教&補習中だそうです。

「ってことはDクラスの人が犯人なの？」
「それならウチらも安心してお風呂に入れるわね♪」
「そうですね。明久君や皆さんの疑いも晴れるでしょうし♪」

・・・・・ん～？何かモヤモヤしますね。何でしょうかこの違和感？
同じように三人ほど腑に落ちない顔をしている方々がいらっしゃい

ます。

「（ゆーさん、優姉さん、それに小山さん、どう思いますか？）」
「（正直あっけなさすぎる。そもそもカメラまで仕込んだやつの犯行とは思えん）」
「（あ、あの！私もそう思ってたんです。でもみんなを不安にさせたくないから）」
「（黙っておこうって、私と決めたの。で？どうするの造くん）」
「（・・・・・そうですね、ここは一応解決したと言っておきましょう）」
「（は、はい！わかりました。・・・・・それでその後はどうしますか？）」
「（今はまだ何とも言えませんが、先に打てる手を打ちましょう）」
「（ま、妥当なところでDクラスの連中に話を聞いてみるか？）」
「（それがいいわね。彼らも突発的すぎるから、何かあったのかも）」

と、四人で取り決めます。ひょっとすると真犯人がいるかもしれませんし。

「（すみませんが小山さん、女子の皆さんに説明をお願いします）」
「（あ、はいっ！すぐにやりますね）」

だからあれほど敬語は止めてくださいと・・・・・もういいですがね。

「みんな！一応これで解決よ、でも釣られて他の男子がやってくる

かもしれないわ。今後もみんな十分に気をつけま「ちょっと待って下さい！」・・・・・？」

ん？突然とある女子生徒が声を上げました。あれ、確か清水さんですよね・・・・・・？

「・・・・・何かしら清水さん？」

「男共が覗きに来たんですよ！どうしてならそいつらも捕えないのですか！？」

「・・・・・ちょっと美春？アンタ何言ってるのよ！」

ん～？何やら雲行きが怪しくなって来ましたね？島田さんもそれに気が付いてか、止めようとしています。

「お姉さまは分かっていないんですわ！そいつらは醜い豚です！放っておけば何をしでかすかわかりません！今回の共犯者の可能性だってあるじゃありませんか！」

ワオ、その発想はなかったですね。てか随分自分たち嫌われてますよね？

「アンタ！？何言ってんの！アキたちにはアリバイだってあるのよ！それに疑われた後もこうして文句も言わず手伝ってくれてるじゃない！」

「・・・・・美春はこんなにもお姉さまのことをお慕い申しておりますのに。もういいです、知りませんっ！」

「あ、ちょっと美春！？話はまだ・・・・・」

あらら、行っちゃいましたね。どうしたのでしょう、かなり焦っているみたいでしたが？

「ったくあの娘は・・・・・・みんな、とりあえず放っておきましょ？あの娘、たまに暴走するだけだし」

「・・・・・そう？ま、いいわ。それじゃまた何かあれば連絡を取り合いましょう。みんな、お疲れ様！」

これで今日は解散になりました。やれやれ、何が起きているのでしょうね？

清水さんも覗きのことでピリピリしているのでしょうか？

とりあえず、解散となり部屋に戻り（その前に遠藤先生と少し話をして）そのまま休むことにしました。

☆

そんでもって翌日。強化合宿三日目～

朝は起きたら何やらアキさんとゆーさんが暴れてましたが何だったのでしょうね？

とりあえず、アキさんがゆーさんを撲殺しようとしていましたのでヒデさん、こーさん、そして起こしに来てくれた西村先生で取り押さえるハプニングがあった事だけ報告します。朝から元気ですね～♪

「結局Dクラスの人たち口を割らなかったね」
「ああ。だがあれだけ何も喋らないってことは逆に何かを隠しているんだろう」

あれからDクラスの覗き未遂犯たちに話を聞きに行きましたが、知らぬ存ぜぬの一点張り。
これはまた振り出しに戻ってしまいましたね。やれやれ困りましたね?

「それで?これからどうすんのさ?手がかりなしに戻っちゃったよ?」
「犯人像すら浮かんでませんし、困りましたね・・・・・・」
「それならムッツリーニにまたあのカメラの解析をしてもらっている。今んとこ、あれしか証拠の品はないからな」

いっそ指紋鑑定でも頼みましょうか・・・・・・日高先生あたりに頼めばすぐ特定しそうです。
ま、最終手段ですがね?出来ればそこまではやりたくないですし。

「あ、いたいた。こんな所にいたのねアキたち」
「明久君、それに皆さん探しましたよ?」
「・・・・・・雄二、見つけた」
「あら、ひょっとしてまた話し合いかしら?」

いつもの女子のメンバーもやってきましたね。あれ?それに今日は・・・・・・

「やっほー♪ボクも混ぜてよー・・・・・あれれ？ムッツリーニ君は？」

工藤さんも一緒のようです。そういえば皆さん一緒の部屋らしいですからね。

「こーさんならちょっと調べものですよ」

「なーんだ、残念。今日こそは決着をつけようと思ってたのになー」

「愛子、いつもそればかりね？」

「何じゃ？工藤はムッツリーニのことをそんなに気にしておるのかの？」

「あはは、そんなんじゃないよ弟クン？ムッツリーニ君とは永遠の好敵手（ライバル）だからね」

「あら愛子？満更でもなさそうだったじゃない？」

「ちょっと優子、違うってば！」

「明久君、わからない所は私たちが教えますね」

「ウチは数学くらいしかダメだけどね？」

「あ、ありがとう二人とも。あとで教えてくれるかな？」

「「はい（ええ）♪」」

「・・・・・雄二、事件のこと何かわかった？」

「ん？ま、ここは一旦様子見だな。手がかりが少なすぎる」

「・・・・・何か分かればすぐ知らせる。私は雄二の妻だから」

「おー頼んだぞ、そして・・・・・いつからお前は俺の妻になっ

た！？」

ま、相変わらずの自分たちですね。よくよく考えれば珍しい組み合わせなのかもしれませんが。ＡクラスとＦクラスの仲良しグループですし。

ちなみに事件のことや裏のこともある程度、姫路さんたちにも話しておきました。

優姉さんが『また問題が起こる前に話しておくべき』と助言してくれましたからね。

「・・・・・・・・・・・・雄二、カメラの解析が終わった」

おや？噂をすれば何とやらですかね。ちょうどこーさんも戻ってきたみたいです。

「あっ、ムッツリーニ君。おかえり～」

「・・・・・・・・・・・・工藤か。今日も負けんぞ」

「ふっふっふっ。そんなこと言っていられるのも今の内だよ？今日こそボクはキミに勝つ！」

ある意味、本当にいいコンビなのかも知れませんね？この二人は。

「あー・・・・・・それで？何かわかったのか？ムッツリーニ」

「・・・・・・・・・・・・（コクン）」

「そうか・・・・・・よし、この後ちょうど昼休みだ。対策会議を執り行うぞ」

おお～、っと皆さんで掛け声を上げます。何気に全員ノリがいいです♪

「ん～それならボクもその会議とやらに参加しようカナ？」

おや？工藤さんも参加でしょうか？こーさんの好敵手（ライバル）だけあって期待できそうですね。

「・・・・・・・・・・・・工藤、何を企んでいる？」

「あ～れ？ムッツリーニ君、そんなこと言っていいの？ボク、ムッツリーニ君が知らない情報持っているんだけどな～」

「・・・・・・・・・・・・何だと？」

「そんな態度でいいのカナ？ボクはどっちでもいいんだけどね」

あの、こーさんに工藤さん？二人で火花を散らすのは良いのですが、自分たちを置いていかないでくれますか？

「えっと、とりあえずその話聞かせてもらってもいいでしょうか？」

「えーどうしようかなー？ムッツリーニ君のせいで話したくなくなってきたよー」

いやいや。話を振っておいてそれはないでしょう？

女子のメンバーはメンバーで『またか』的な顔で工藤さんを見てますね。

「工藤、頼む。お前も盗撮されるのは嫌だろう？」
「ん～？ボクは別に見られてもいいけど？ネ☆ムッツリーニ君♪」
「ちょっと工藤さん！その話はムッツリーニの前じゃ危険だッ！」

こーさんが鼻血を出して倒れかかっています。もう、しっかりしてくださいよ？
まだこーさんに話聞かせていただいていませんからね？

後、工藤さん？駄々を捏ねないでください。絶対にこ―さんの反応を見て面白がっていますね？
・・・・・・やれやれ仕方ありません。ここは最終兵器を使いましょう。

「・・・・・今度とっておきのシュークリーム専門店の無料券差し上げます」
「おっけー♪任せて！どんどん喋っちゃうよ～」

「「「「早っ！？」」」」

「「「「工藤さん（愛子）・・・・・・」」」」

うむ。流石同士なら、ここはわかってくれると思いましたよ。
まったくシュークリームの力は偉大ですね♪

「・・・・・まあいい、工藤。お前の持っている情報とやらは何

だ?」
「実はね・・・・・・まだ脱衣所には見つかっていないカメラが一台残っているんだよ」
「「「「・・・・・・・は!?」」」」
・・・・・それマジですか?何かもう、更に厄介なことになってきた気がしますね。
自分たちの周りはどうしてこんなにトラブルが押し寄せるのでしょうね?

４７時間目　覗き・盗撮・盗聴～全てアウトですよね？～（後書き）

ありがとうございました。４７話でした。
ちょっと時間軸の確認と設定の確認行きます。

一日目は姫路さんたちが庇ってくれたので、明久や造は覗きはしていません。女子とも同盟を結んでいます。

二日目は工藤さん初登場。ボイスレコーダーはシュークリームのせいで犠牲になりました。期待していた方ゴメンね☆この日の夜、Ｄクラスの生徒が覗きに行っていることになります。

今回は二日目の夜～三日目の昼前の話です。時間軸がおかしくてすみません。
そして追加設定として以前ちらっと言ってましたが、遠藤先生がＤクラスの担任となっています。変な設定ですみません。

次回ですが、ちょっと休憩がてら、強化合宿の日誌およびその中で短編集を入れたいと思います。西村先生と遠藤先生の視点の話です。
……誰得？

多分ですが、ここで先生方が造をどうして大切にしているかが、少しだけ分かると思います。あくまで多分ですが。

読んでいただいてありがとうございました！次回もよろしくお願いします。

強化合宿の日誌：その？＋先生の合宿：西村・遠藤編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

今回は宣言通り強化合宿の日誌＋短編？をお送りします。相変わらず、計画性のない投稿ですみません。

とりあえずどうぞです♪

強化合宿の日誌：その？＋先生の合宿：西村・遠藤編

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌
『バスが止まり合宿場に降り立つと、不意に目眩のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵な事が起きる様な、そんな予感がしました』

教師のコメント
環境が変わる事でと良い刺激を得られたようですね。姫路さんに高校2年生という今この時にしか作ることのできない思い出がたくさんできる事を願っています。

土屋康太の日誌
『バスが止まり合宿場に降り立つと、不意に目眩の様な感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント
乗り物酔いです。

坂本雄二の日誌
『合宿場で大きく息を吸い込むと、少し甘い様な、仄かに酸っぱい様な、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませんね。

月野造の日誌
『バスから降り、すぐさまこーさんを医療室へ連れて行きました。その後日高先生に仕事をさせて西村先生のお手伝いをFクラス全員でやりました。いつも通りの日常で、合宿らしさが見られない一日目でした。』

教師のコメント
月野君もいつもと変わらないですね。色々と大変でしょうが、貴方もこの時にしか作れない思い出をたくさん作ってください。

☆

強化合宿・1日目　その日の西村先生

「やれやれ、日高先生はもしやいつもあんな調子なのか？」
「あー・・・・・『あんな調子』がどんなのかがわからないハズですが、間違いなくあんな調子ですよ」
「・・・・・本当にお前も苦労しているな、月野」
「・・・・・いえいえ、せんせ程じゃないですよ？」

合宿場に着いてすぐ、俺の手伝いをすると言ってきた月野。

根回しがよいようで、Fクラスの男子も文句を言いながらも手伝っている。

こいつには本当に助かっているな。こういう気配りが自然に出来るから助かる。

正直俺だけでこのFクラスを収めることは出来んかったかもしれんからな・・・・・・

「そう言えばここの大浴場、また新しく改装したとか！楽しみですね～♪」

「・・・・・・・・・・・（ボソッ）すまんな月野」

「へ？何か言いましたか？」

本当にすまんな。お前と木下が男子共と一緒に入ることで絶対に問題が起こると言って、日高先生がお前らを個別風呂に入れさせることになっているんだ。

もし時間があれば、先生方が入る時間にお前と木下を大浴場へ連れて行ってやるからここは我慢していてくれ。

「あ、そう言えばここってもちろん召喚獣が使える様に設定されているんですよね？」

「ああ、だからお前の腕輪も有効だ。だがあまり多用はするなよ？」

「え？どうしてですか？」

「お前が腕輪を使うときは、色々と危ないことをする時だからだ」

「・・・・・・あはは～ばれてましたか？」

こいつは、まったく。厄介事を深く考えずに、喜んで引き受けるか

らな。
まあ、こういう奴だから皆に好かれるのだろうな。

「さて、これで全部だ。後は食事に行っていいと全員に伝えておいてくれ」
「はいです。では失礼します、西村せんせ♪」

そう言って月野は少々駆け足で行った。アイツも今回の合宿くらいは休めるといいのだがな。

「・・・・・・・・・・・・無理かもな。トラブルがアイツに引き寄せられるからな」

☆

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント
Aクラスと一緒に勉強する事で姫路さんに得られるものがあったようでなによりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイ

トになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう

土屋康太の日誌
『前略。夜になって寝た』

教師のコメント
前略はそうやって使う物ではありません

吉井明久の日誌
『全略』

教師のコメント
あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

月野造の日誌
『Ａクラスとの合同勉強はとても有意義なものでした。今度Ａクラスに差し入れを持って行こうと決めました。友情を結ぶシュークリームはとても偉大と言うことがよくわかった一日でした」

教師のコメント
Ａクラスとの学習が学力だけでなく、クラス間同士の仲を良くさせるのは素晴らしいことですね。・・・・・シュークリームはよくわかりませんが。

☆

「・・・・・西村先生、すみませんでした。私のクラスの生徒が迷惑を」
「とんでもありませんよ。遠藤先生も大変でしたな」
「いいえ、本来叱りつけるのは担任である私の仕事ですのに・・・・・」

私の生徒が女子のお風呂の覗きに来たということで、私も説教をしに来たつもりでしたが、西村先生に頼りっぱなしで担任らしいことが出来ませんでした。

「あまり気になさらない方がいいですよ?うちのクラスは毎回問題を起こすくらいなんですし」
「・・・・・・はい。ありがとうございました、西村先生。失礼します」

とりあえず、後の補習や罰は西村先生が与えるそうなので私は一旦部屋に戻ることにしましょう。ここにいても私じゃ何も出来ませんし。

「ハァ、どうして覗きなんかをしたのでしょう・・・・・・」

私まだまだ先生として甘いのかな・・・・・、なんてブルーになりそうです。生徒は覗きなんてするし、それを上手く叱ることも出来ませんでした。厳しくするってどうすればいいのでしょうね?こ

ればかりは昔から私ニガテなんですよね。

「・・・・・藤先生。遠藤先生!先生ってば!」
「っ?はいっ!なんでしょうかって・・・・・造くん!?」
「ああよかった。もう!何度も呼びましたよ?大丈夫ですか?」
「えっ?あぅ!?す、すみません、ボーっとしてました・・・・・・」

びっくりしました、造くんでしたか。相変わらず可愛い子です。思わずお持ち帰りしたくなるのは私だけではありませんよね?先生方皆さんが言ってましたし。

「・・・・・あの?どうしたんですか?何か別の変なこと考えてませんか?」
「いいえ?気のせいですよ?・・・・・それより何か私にご用ですか?」
「まあいいですが・・・・・いえ用があるわけではないのですが」

あら?でしたらどうしたのでしょう?・・・・・もしかして!

「わかりました!補習ですね!?任せてください!」
「だからどうしてそんな発想になるんですか?しかもやけに嬉しそうですね!?違いますって!」
「えっと?でしたら一体何でしょうか?」

「・・・・・あの、何か先生が悩んでいるかなって思いまして。覗きもですけどそれ以上に何か大きなことに悩んでますよね？」

うっ、鋭いです。たまに造くんは私が思う以上に物事の核心に触れてきますね。

「あ、あぅ・・・もしかして顔に出てますか？」

「いいえ？・・・・・ですがそうみたいですね？」

「・・・・・はい。あのっ、実はですね・・・・・・」

やっぱり敵いません。造くんの前で隠しごとは出来ませんね。天然さんのようで何処かしっかりしているんですよね、この子。ついつい造くんの前では愚痴を零してしまうんです。

「・・・・・なるほどです。自身の生徒に厳しく接してやれないことが、今回の覗きのような問題に発展してしまったのではないか、と？」

「はい・・・・・西村先生みたいにとは言いませんが、私も少しは教師らしいことをしたいんです」

・・・・・本当に不思議な子。見かけは幼さが残るのに、しっかりと自分の考えと意見を持っているんですよね。私たち教師と対等に話すことが出来るのが良い証拠ですし。

「ん～と、そですね。遠藤先生？少し話は逸れますが、どうして教師らしいことをしたいのでしょうか？」

「・・・・・え？」

突然謎かけみたいに尋ねられます。えっと、『どうして』ですか・・・・・

「・・・・・教師だから、じゃいけませんか?私は皆さんよりも大人で、たくさんのことを教える義務、責任があります。だから・・・・・」

「それで良いじゃありませんか。先生は」

「えっと・・・・・・・?」

よくわかりません、たまに造くんは発想が自由すぎてついていけなくなります。

「遠藤先生は『先生としてのやるべきこと』がしっかりとわかっています。ですから無理に厳しくしなくても、生徒に『大事なこと』を教えてあげられるんですよ♪」

「・・・・・私に、そんなこと出来るでしょうか?」

「もちろん出来ますよ!なんたって遠藤先生は自分たちの先生なんですからね♪」

そう、ですね。やることは一つなんです。何となくですがわかった気がします。

「ありがとうございます造くん。・・・・・うぅ、造くんに頼ってばかりの自分が情けないです」

今更ながら、生徒に悩みを相談する先生ってどうなんでしょう?

今度は別の意味で余計に落ち込んできました・・・・・・

「あらら?先生、また暗い顔ですよ。・・・・・・いいじゃないですか、先生が生徒に悩みを言うことのどこが悪いんですか?」

「悪い悪くないじゃなくて、単純に情けないです。私は」

「先生も人ですよ?神様や仙人なんかじゃないです。誰かに相談したりされることは当たり前でしょう?・・・・・・先生の場合、たまたまそれが自分だっただけです♪」

・・・造くんはずるいですね、そんな優しい顔で言われたら何でも相談したくなってしまいます。

「それに自分はバカですから。先生の助けになっているなんて思えませんよ?寧ろ助けになりっぱなしです♪この前の構文、やっぱりわかりませんでしたから♪ＨＡＨＡＨＡ!」

私にこんなに気遣ってくれる生徒さん。私は幸せ者なんですかね?いつか本当の意味でこの子に恩返しできたらいいです・・・・・・

「あらあら!それはいけませんね?夜はは時間もたっぷりありますし、今日はでしたらじっくりわかるまで手取り足取り服を剥ぎ、補習しましょう♪」

「しまった藪蛇!?これは巧みな遠藤先生トラップ!?てか服を剥ぎって何ですか!」

ありがとうございます。造くん?

造くんのお陰で、何となくですけど前に進めそうです♪

「いやいや、話を聞いてください！先生！？」

「大丈夫です！造くんがわかるまで、とことん教えてあげますよ♪」

強化合宿の日誌：その？＋先生の合宿：西村・遠藤編（後書き）

……やってもうた。これ書き終わった後に、自分が何をしたいのかよくわからなくなりました。

先生視点のつもりで書きましたが、西村先生はともかく遠藤先生の性格わかんなくて崩壊させ過ぎましたかね（汗）ホントあんた誰？な状態ですよ……

もういいや。綺麗さっぱり忘れて次回予告に行きましょう。

次回は工藤さんの見つけた隠しカメラから造たちが犯人を割り出すと思います。てかミステリーじゃないので犯人特定なんて、すぐ終わるかと（汗）作者にミステリーを考え付くような頭はありませんのであしからず。

読んでいただいてありがとうございます！

４８時間目　推理と罠と犯人探し～推理物も難しい～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です！

前からですがサブタイがいいの思いつきませんね。パッと出てくる時と悩み過ぎて１時間以上かかる時との差が激しいですもん。できてもタイトル詐欺もいいところですし（汗）

とりあえず４８話！よろしくお願いします。

48時間目　推理と罠と犯人探し～推理物も難しい～

話がややこしくなってきたので、昼休みに再び集まり話をまとめてみることになりました。
今回また混乱するといけないので、昨日の女子たちには考えがまとまって相談することになっています。

小山さんも『今回の件は先輩に任せます。よろしくお願いします！』とのこと。先輩は止めてね？
優姉さんたちは、脱衣所に誰も来ないように交代で見張るとのこと。
お世話掛けます。

「それで？どういうことか詳しく聞こうか、工藤」
「うん、りょーかい。あのねー・・・・・・」

何でも工藤さんによると、工藤さんが見つけたカメラは見つかったカメラとはまた別の、見ただけではほぼわからない位置に取り付けてあるとのこと。素人目では絶対見つからないそうです。

「だからね、一昨日の件はひょっとしたらカモフラージュの為にわざと見つかりやすい所に仕掛けたんじゃないかなって思ったの」
「・・・・・・・・・・俺も同意見。見つかったカメラ・マイクはどちらも回線が繋がっていなかった。おまけに隠しカメラを使用する犯人は、すぐに見つかりやすい場所にはまず設置しない」

・・・・・お二人とも、良いコンビネーションですね。息ピッタリですよ?
何だかんだでお互いに認め合っているようです。話がこんなので無ければですが・・・・・・

「要するに、俺らは嵌められそうになっていたって訳だな?・・・・・となるとこりゃ犯人は、単に盗撮だけが目的とは言えねえかもな」
「えっと・・・・・・?どういうこと、雄二?」
「・・・・・あのなぁ、明久。お前も俺も脅迫紛いのことを受けているだろ?おそらく今回の盗撮の犯人とお前を脅迫し、翔子と取り引きをした犯人は同一人物だ」
「は?いやいや、普通そんなことまでする!?」
「多分、俺らを嵌めることと盗撮の二つの目的を果たそうとしているわけだ」
「・・・・・・・・・・雄二の言うとおり。見つかったカメラとマイクは回線こそ繋がってはいなかったが、脅迫犯の使っていたものと一致した」
「それはまた随分と用意周到な奴よのう・・・・・」

ホント悪知恵が働く犯人ですね。ピンポイントにアキさんたちを狙うことと言い、女子の動きを把握していることと言い、これは一筋縄ではいきそうにありません。

「もしかすると、昨日の覗きもその犯人が仕組んだことかもしれねえな」
「・・・・・・・・・・可能性は大」

「工藤さん、そのことを他の誰かに話したりしてませんか？それとカメラはどうしました？」
「今のところは誰にもね、カメラは不意に動かせば犯人に気がつかれると思ってそのままだよ」
「ナイスだ工藤。十分それは証拠になる。それで犯人だが・・・・・・」

それにしても、こんなこと出来る生徒は限られてきますね。
と言いますか、この犯行って・・・・・・

「あの、これ状況的に男子生徒がやることはほぼ不可能じゃありません？」
「だな。脱衣所に侵入し本命とダミーのカメラを設置するなんざ、まず男子がやってたら見つかっちまう」
「・・・・・・・・・・・・女子の誰かが主犯、もしくは協力者の可能性がある」
「じゃがそれで犯人に何のメリットがあるのじゃ？男子が女子を盗撮するなら未だしも」
「しかもその女子、僕にこんな変な脅迫文を送ってきたんだよね？わけわかんないよ」

なんか状況を整理していけばいくほど混乱してきましたね・・・・・・

脅迫犯＝盗撮犯＝とある女子生徒、まではわかりますがホント何でまた女子が女子の盗撮を？

「そういえば、さっきから脅迫とか何とか言ってたけどナンのことかな？」

「あっ、ええっとですね・・・・・・ちょっとプライベートなことなんで少しぼかしますが・・・・・」

折角ですし一応、工藤さんにも話くらいはしておきましょう。
ひょっとすると女子の観点からわかるか「な～んだ、簡単じゃない！」も・・・・・・！？

「「「「「わかるの（ですか）（かのう）？」」」」」

あれ？そんなに簡単にわかったのですか？　てか自分たちの悩んだ時間を返してください！？

「そ、それで？どういうことですか、工藤さん？」
「あれ～？ひょっとして誰も気づいていないの？」

「「「「「わかりません」」」」」

はい、それはもうさっぱりです。もう混乱し始めていたくらいですからね

「要するに吉井君の件は『吉井君の身近な女の子に近づくな』で、盗撮の件は『女の子が女の子の盗撮をしている』ってことでしょ？てことは、犯人はきっと姫路さんか島田さんのことが好きな女の子なんじゃない？この学園、結構そういう子一杯いるよ～？」

「「「「「・・・・・・その可能性を忘れてた！？」」」」」

あう、そうでした。ここは恋愛に関して言えば凄く幅広い（いろいろな意味で）学園でしたね。
ですがアキさんの身近にそんな人いましたっけ？

・・・・・・ってあれ？なんか凄く心当たりがありませんか？

「・・・・・・ねえ？みんな、僕凄く心当たりがあるんだけど」
「そうですね。自分も一人の生徒さんを思い出しました。同時に全て納得がいきましたよ」

『彼女』ならこういうことも出来そうですし、随分とアキさんを敵視してましたからね。それにDクラスの男子が突然覗きを始めた理由も、これで何となくですが推測できます。

・・・・・・他のメンバーも納得がいったようで苦笑いしています。

「んで？どうするんだコレ？罠でも張るか？」
「罠？雄二、罠って言ったってどうするのさ？」
「そうだな、明久を囮に使ってだな。簀巻きにした明久を誰もいない教室に・・・・・・」
「待って！？僕殺されちゃうよ！？本当に脅迫犯だったら僕殺られるからね！？」
「ゆーさん、冗談はその辺で・・・・・・」
「ん？ま、半分は冗談だが実際これが一番手っ取り早いだろ？任せとけって」

半分って・・・・・・ですがあの子をおびき寄せるには、確かにアキさんが一番でしょうね。やれやれ、厄介な問題なうえに厄介な人

が相手ですか？

「と言いますか、本当に任せて大丈夫なんでしょうね？ゆーさん」

「もちろんだ。それじゃ作戦だが・・・・・・」

☆

ゆーさんが作戦を立ててくれました。立ててくれたはいいのですが、これ本当に上手くいくのでしょうかね？この作戦って結構無理がありますもん。ま、その時はその時で何とかなりますか？

作戦は女子がお風呂に入っている時間帯に行うこととなりました。只今空き教室でアキさんと待機中。

他のメンバーも教室の外で待機しています。こーさんと工藤さんが仕掛けたカメラで常に教室（ここ）の様子がわかって、問題があればすぐさま動けるようになっています。

《アキさん大丈夫ですか？今回の作戦、アキさんが一番大変でしょう？》

「うぅ、そうなんだよね・・・・・・でも女子たちにこれ以上迷惑をかけられないじゃない？」

《あらあら？アキさん結構紳士さんですね♪いえフェミニストですか？かっこいいですー》

「・・・・・・あーのーねーえー？」

《一応誉め言葉ですよ～？アキさん弄るの面白いです♪》
「ちょっと！？それ堂々と僕の前で言う台詞じゃないよね！？」

こういうやり取りできるのもいいものですよね？学園生活はこうでなくては！

「くっ・・・・・そ、それを言うなら造も大変じゃない？」
《そですか？アキさんに比べたら特に何ともないでしょ？それに今回の自分の役割はあくまでアキさんのバックアップですからね？》
「結局はそこに戻っちゃうわけだね？」

そうなんですよね。今回の問題って単純そうでいて、なかなか複雑です。まずは彼女と落ち着いて話し合う場を作らねばならないです。そこまでは自分の仕事。

そのあとが一番大変で、彼女を納得させてこんなこと止めさせないといけません。
それが出来ないなら強行手段で学園側に彼女を突き出さなければならなくなります。
・・・・・それだけはしたくないですもんね。

《・・・・・そろそろ時間ですね。アキさん、自分も途中までは何とかします》
「うん・・・・・ありがと造、それじゃ隠れて」

時間になったので指定された場所に隠れます。上手く釣れれば良い

のですが・・・・・・

ガラッ

っ！来た！？教室に一人の女子生徒が入ってきました！アキさんも自分も緊張が走ります。

「・・・・・好都合です。豚一匹を抹殺するのに、このような好機見逃せませんわ！」

ゴメンアキさん。正直彼女が結構怖いです・・・・・・アキさんも若干引いていますね。が、頑張れアキさん！

教室に侵入してきた生徒は、くるくると縦ロールにしている左右におさげにした髪が特徴で、島田さんにいつも愛を語っている一人の女子生徒・・・・・・

「・・・・・清水さんどうしたの？」

そう、清水美春さんでした。

４８時間目　推理と罠と犯人探し～推理物も難しい～（後書き）

……捻りも、伏線も、新展開も、何一つない・・・だと？

ごめんなさい、犯人変えられませんでした。ただ展開的に次回から多少は変わってくるはずです。ホントすみませんです（汗）

と言いますか、今回短いのかな？区切りのいいとこで切ったんですが、実際どんなものでしょう？とりあえず今日は何とかもう一話投稿出来ればいいと思っています。ある意味これが前編で次回が後編っぽいですし。

しかも親今日いないですし♪ＨＡＨＡＨＡ！自由ですよー！ま、それはともかく９時～１０時くらいになるのかな？次回もよろしくです！

４９時間目　恋と愛と彼女の心～好きになるって命がけ？～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。連続更新ですみません（汗）

今回の話は少し重くはないですが、人によっては理解しにくいかもしれません。月野造という人間の価値観が変わっているからこその話なので……

うだうだ言ってもアレですから、行きます４９話です！

49時間目　恋と愛と彼女の心～好きになるって命がけ？～

「流石は愚かな豚以下の存在ですわね！こんな時に一人になる状況をつくるとは、好都合ですわ」
「息を吐くように僕の扱いを豚以下に扱わないで！？」

やはり貴女でしたね、清水さん。と言いますか貴女しかいないと自分たちメンバー一同確信してしていましたよ（汗）さて、ここから上手く盗撮のことを誘導尋・・・・・ゲフンゲフン、聞き出しましょう。頼みますよ、アキさん？

「というか、どうして清水さんがここに？今はお風呂の時間じゃないの？」
「家畜の駆除に決まっているではありませんか！お姉さまに家畜の臭いが移らない為にも早急に殺らねばなりません」

・・・・・コレ本当にアキさんの精神力が持ちますか？同じ教室にいるだけで鬱になりそうなくらいの罵倒をダイレクトに受けてますし。アキさん泣いていいんですよ・・・・・・

「・・・・・いや、そもそも何で僕が一人でここにいるってわかったのさ？」
「ハッ！家畜の行動など美春には筒抜けですわ！脱衣所の噂通り、観察処分者のバカが問題を起こしてここでお風呂の時間は一人罰として自習を受けていましたわね！」

・・・・・言いましたね？清水さん。
これ清水さんが犯人だって、貴女自身が証明したんですよ？

「・・・・・そう。清水さん、やっぱりキミが脅迫犯でありそして今回の事件の犯人なんだね？」
「はぁ？いきなり何かと思えば、そんなくだらないことが遺言ですの？」
「・・・・・脱衣所の噂って何のことだろうね、造？」
《そうですね。残念ながら、アキさんも自分も罰の為にここにいるわけじゃないですし？》
「っ！？・・・・・何故ここに！？」

ふぅ、やっと出られる・・・・・隠れる為に召喚獣になってアキさんの鞄の中に入っていましたが、以外に暑かったですよ？次は御免です。

「清水さん？その会話は何処で聞いたのかな？」
「・・・・・言いましたでしょう？脱衣所で《それはいつの話でしょうね？》・・・・・？」
「残念だけど、その噂は盗撮犯をおびき寄せる為にとある女子たちに頼んでおいた嘘なんだよ」
「な！？」
《この話は盗撮用のカメラの前で行われました。この嘘の情報はカメラの前で喋っていた人達以外には『盗撮犯』しか知り得ない情報なんです》
「・・・・・・・・・・・・・・・」

ゆーさんの策はこうです。早めに優姉さんと小山さんに脱衣所に行ってもらい、二人でカメラの前でこの偽の噂を喋ってもらいます。

犯人はアキさんたちが盗撮犯ではないと断定され、しかも女子側についているのでかなり焦っているハズ。

そこに最大の狙いのアキさんが一人で誰も来ないであろう時間に空き教室にいれば、必ず犯人はアキさんを抹殺に来るだろう、ということなのですが・・・・・・

やれやれ、このゆーさんの作戦ですが清水さんが来なかったらどうしたんでしょうね？

そもそも普通は処刑にやってくるなんて思いませんし、その発想はどうかと思いますがね？

「・・・・・美春を嵌めましたねっ！まあいいです！どの道貴方もそこの家畜同様、抹殺するつもりでした！まとめて殺ります」

わー何か凄いこと言ってるよーこの子？てか目がホントに怖いよーアキさん怖いのでパスしていいですか？・・・・・・あ、ダメ？残念。

《まあいいです！貴女の性根叩きなおしてあげますよ！》

「死になさいっこの愚図共！お姉さまに近づく腐れ外道共は皆殺しです！」

「何か二人とも怖いんだけどっ！？」

清水さんがスタンガンで襲いかかっていました。・・・・・・ってスタンガン？

スタンガン装備の女子ってなんなんでしょうね？
てか清水さん？貴女召喚獣を相手にしているってわかっていますか？

《突っ込むだけじゃダメですよ？えいっ♪》
「っ～～～～～～」
《あらら？これでもまだ向かってきますか？》
「死にさい！消えなさい！」
「っととと。何でまたスタンガンなんか持ってるんだろうね？」
《さあ？・・・・・・あっ！そっち行きましたよアキさん！》
「死に腐れえええええええ！！」
「ねえ！？ここまで来ると、普通のホラーが楽しくなるくらい清水さん怖いよ！？」

それ同感です。夢に出てきたらどうしましょうか？

☆

何とか捕まえられましたが、いやはや生身で召喚獣に突っ込むとは・・・・・・
しかも、手加減しているとはいえ何度か風の檻を抜け出してますし、この子は一体・・・・・・

「と、とりあえず捕まえられたね」

《疲れました・・・・・まさか生身の人間相手に点数をごっそりと削らされるとは・・・・・・・》

この学園は変な所で優秀すぎる生徒さんが多すぎますね。こーさんとか。

「ちぃっ！離しなさいっ！この下衆共！」

《まだ暴れますか・・・・・・？あの清水さん、話し合いましょうよ～》

「誰が豚共と！話し合いとは対等な人間が行う行為です！」

・・・・・・らちが明きませんね。もうここはこっちから話を進めるしかありませんね。

《ま、とりあえず聞きましょうか。どうして盗撮などしているのですか？》

「ハッ！お姉さまの神聖な素肌を観察するために決まっているじゃありませんか！」

「造どうしよう。最初からいろいろとアウトなのに、ツッコむ余地がなかったよ・・・・・・・」

確かに。それ断言されても困りますよね？と言いますかこの子って・・・・・・

《・・・・・・次です。どうして脅迫を？》

「その豚野郎がお姉さまに近づくからに決まってます！」

「・・・・・・どうすればいいのかな？僕、泣いていいよね」

アキさん・・・・・今度何か奢りますね？
それにしても清水さんって随分・・・・・・・

《随分と勝手なことをおっしゃいますね？貴女は結局何がしたいのですか？》
「バカですか貴方。お姉さまに愛してもらうことに決まっているじゃありませんか？」
「いや、多分キミが間違っていると・・・・・・」
「同性愛が間違いだというのですかっ！馬鹿にしないでください！」
・・・・・・・・・・・・・なるほど、そうですか。

《アキさん、確かに誰かを好きになることに間違いなんてありませんよ？同性を好きになることも間違いじゃありません》
「え？・・・・・造、どうしたの？」
「はん！まあそちらのバカは理解はあるようで《ですが清水さんは間違っています》・・・・・・何ですって？」

少しだけ、自分も言いたいことは言わせてもらいましょうね。

「美春が間違っている？何をですか！？美春はお姉さまとの愛を・・・・・」
《人を好きになることに間違いはないです。ですが好きになった相手に対しての、一方的な愛の押し付けは間違っています》
「一方的ですって！？言わせておけばこの家畜は・・・・・・」
「つ、造あの・・・・・・」

清水さんもアキさんも何か言いたそうですが、拗れそうなので無視です。

《現に島田さんには大事な人、大好きな人がいるじゃありませんか？貴女はそれを妨害してる上に脅迫などの間違ったことをしてますよね？》

「お姉さまがくだらない男共なんかを好きになるハズありません！」

・・・・・・くだらないですか。本当にそう思っているのですか。

《・・・・・・貴女、言って良いことと悪いことの区別付いていないでしょ？》

「お姉さまが今抱いている感情は間違いなのです！ですから今すぐ始末しないと！」

そう言って、清水さんは再びアキさんを睨みつけます。想いの方向が違うでしょう？

《・・・・・・貴女、島田さんのこと嫌いなのですか？》

「・・・・・・・・・は？何をバカなことを」

《島田さんのことわかろうとしてないじゃないですか》

「っ！？貴方にお姉さまの何がわかるのですか！」

《貴女も島田さんの何を見てきたのですか？》

清水さん随分怒っていますね。ですがこちらも少し頭に来ているんですよ？

《清水さんは島田さんがどれだけ想い人を想っているのかわかってないです。わかろうともしてません。島田さんの気持ちを否定することは彼女を否定することでもありますよ》

「何ですって!?美春は・・・・・・」

《清水さんは島田さんのどこが好きなんですか?》

前々から気になっていたので少々聞かせてもらいましょうか。

「っ!全てです!お姉さまの全てを美春は愛しています!」

《では島田さんの『心』はその『全て』に含まれていない、と?》

「!?」

《例えば、彼女が大事にしている人や物を想う『心』は清水さんの言う『全て』に含まれていないと?》

「・・・・・・・・・・・・」

やれやれ、少しは落ち着いて話を聞く気になりましたかね?

《誰かを好きになること、とても素敵なことだと思います。身分の壁?年齢の壁?性別の壁?そんなものどうでもいいです。そもそも恋愛は自由なものだと思いますし》

「造・・・・・・」

《ですが理解しようともせずに、相手を否定することはまた別の問題でしょう!島田さんの気持ちを否定した貴女は島田さんを否定しているのと同じなんですよ!》

「・・・・・・・・・・・・」

《加えて愛の表現が盗撮に脅迫ですか?バカにするのもいい加減に

しなさいっ！》
「・・・・・・・くっ」

あう、ちょっと熱くなりすぎましたか？まあこれだけは言いたかったですし。
さてそろそろ自分の役割も終わりですね？

《・・・・・後は当事者たちの問題です。部外者はここで一度抜けます。貴女も解放しますよ。解除（キャンセル）》

キュウウウゥゥゥン　ボンッ

解除（キャンセル）の一言で召喚フィールドが消えます。やれやれやっと元に戻れました。

「アキさんに清水さん、二人で話をつけてください。教室の外にいますので終わったら呼んでくださいね。・・・・・・別に聞いたりはしませんから安心してください」
「・・・・・・うん、ありがと造」
「・・・・・・いえいえ、頑張ってください♪」

ここからがアキさんの本当の出番です。清水さんに納得のいく答えが出せるかわかりませんが、答えを出すことが全てではありませんからね。今は話し合うことしか出来ませんし。

・・・・・でも、アキさんなら何とかしてくれる気もします。何たってアキさんですから♪

「・・・・・話は終わったよ、造」
「そですか・・・・・・結果は？」
「・・・・・・とりあえず美春はもう、盗撮はしませんし脅迫も止めにします」
「わかりました。カメラも出来れば早いうちに処分してください」
一応話はついたようですね。どんなふうになったのかはわかりませんが。

☆

「・・・・・それでも美春は諦めません！お姉さまのことを想い続けます！」
「ふふっ、それでいいのではないですか？それだけ島田さんも好かれているってことで♪」
まあ、結果はどうであれギスギスした空気は大嫌いですからね♪

「一応、謝っておきますわ。・・・・・すみませんですわ」
「何のことでしょう？今回の件はもう解決してますし、わざわざ蒸し返さなくてもいいでしょう？」
「造ってさ、やっぱりキミも紳士なんじゃないの～」
「もうアキさん？先ほどの仕返しですか？」

「・・・・・やれやれですわね」

まあこれで何とか解決できましたね。後で女子の皆さんにもフォローを入れておきましょうかね。

「ふぅ、やっとこれで女子も安心できるね？」

「そうですね。早速ですがゆーさんたちと合流して話がついたと「あっ！そうですわ！？」連絡を？」

いきなり清水さんが大声をあげましたが、何事ですかね？少しばかり嫌な予感がしますよ？

「大変ですわ！非常事態ですわ！？」

「あの・・・・？落ち着いて？どうしたの清水さん？」

「落ち着いていられません！美春はなんてことを・・・・・」

「ですから、何が大変なのでしょうか？話してください」

「あう、そうでした。実は・・・・・」

「「は！？Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅクラスの男子全員を煽って覗きをするようにしてしまった！？」」

これで何とかトラブルを回避できたはずでしたが、まさかこんなことになるとは・・・・・

４９時間目　恋と愛と彼女の心～好きになるって命がけ？～（後書き）

ありがとうございました。４９話でした。

以前から造が恋愛感情がよくわかっていないと書いていましたが、造の場合好きの概念が曖昧です。ややこしい設定ですみません。

てか、最近の造説教ばっかですね。やっぱり似合わん。ダイジョウブ！次回からは戻るはずです。ちなみに次回からは覗き撃退編です。

えっと、清水さんと明久の会話の内容はほぼ４巻のラストと同じになると思うのでまだ書きません。と言いますか、疲れて書かないかも（汗）期待していた方すみません。書いた方がいいなら言ってください。番外編で書くかもです。

長々すみません。次回からはもう少しすっきり書けるように頑張ります！

５０時間目　こちら覗き撃退対策会議～先生もいるよ☆～（前書き）

やっとここまで来ました！祝？５０話！

……ま、本当は設定や短編を含めると、とっくに５０話越えてましたがね？

さてさて、合宿編の盗撮問題を解決した造たちの前にさらなる敵：覗き魔たちの魔の手が！……はい、ゴメンなさい。とりあえずどうぞ。

50時間目　こちら覗き撃退対策会議～先生もいるよ☆～

とにかく清水さんの話では今女子の方は大変なことになっているハズ。
ゆーさんたちと合流して、状況を伝えながら覗きを止めに走ります。
ちなみに清水さんは煽った張本人である為、ここは行かない方がいいとゆーさんに止められて部屋で待機してもらっています。辛いでしょうが、ここは自分たちに任せてもらいましょう！

「ったく、一難去ってまた一難ってか？やれやれだぜ」
「ホントだよっ！折角これで解決と思ったのに」
「これを乗り切れば何とかなると思いますよっ！」
「じゃがまさかそんなにも釣られるとはの・・・・・・何を考えているおるのやら」
「・・・・・・・・・・・覗きだけしか考えていない」
「あはは♪ムッツリーニ君が言うと説得力あるね～」

メンバーは自分にアキさん、ゆーさん、ヒデさん、こーさんに工藤さんです。
ホントに工藤さんには色々迷惑かけてますね・・・・・・ありがとうございます！

一応は先生方が待機しているハズですが、余りにも数が多いですからね。早く助太刀に行きませんと！

「護衛で何人くらい教師はおるのじゃっ？」
「清水さんの話では六人位だそうです！しかも援軍を呼ばせないために、入口を固めてあるとか！」
「どうしてそんな所で頭を使うのじゃろうな・・・・・・」
全くですね。ここでもしＡ・Ｆクラスの全員までもが参加すると考えたら怖気が走りますよ。

☆

『全員一気に畳みかけろ！理想郷（アガルタ）は目の前だぞ！？』
『『『おおおおおおおおおおおおおおおお』』』
『お前ら、いい加減にせんか！？』
やっと辿り着きましたが、何ですか？この地獄絵図。男子諸君、本気で怖いですよ？
やはり教師が足りないようで苦戦していますね。
「せんせ！助太刀します！起動（アウエイクン）！」
「「「「そして試獣召喚（サモン）っ」」」」

今回二人も保健体育のエキスパートがいますから、ここは保健体育のフィールドで行きましょう。

「な、何だお前ら!?邪魔をする気か!?」
「構わん、やってしまえ!」
「俺たちの理想(ユメ)は俺たち自身が掴むんだ!」

かっこいいことを言っても覗きは犯罪です。貴方たち、大人しくお縄につきなさい!

《吹き飛べえええええええ!!》

とりあえず、入り口で固まっていた生徒たちを召喚獣もろとも吹き飛ばして、先生達の活路を開きます。

《せんせ、大丈夫ですか!?援軍に来ました!》
「おお、月野助かる!・・・・・・・・吉井たちは覗きじゃあるまいな?」

「「ちょっとマテ!それはあんまりだろ(でしょ)鉄人!?」」

「普段の行動が行動じゃからの・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・自業自得」
「いや~ムッツリーニ君が一番人のこと言えないよね?」

皆さん余裕ですね?まあこの人たちがいれば無双出来そうですが・・・・

《まあいいや。・・・・・皆さん、覗きは犯罪ですからね？ここは止めますよ》
「くっ、教師だけでなくこの厄介なメンバーまで・・・・・・」
「ど、どうするよ？これまずいんじゃないか？」
「ここまで来れば後には引けない！全員でやっちまえええええええええ」

なるほど、威勢はいいですね？さあ、勝負ですっ！

～しばらくお待ちください～

『・・・・・・・・・・』（↑土下座）
『・・・・・・・・・・』（↑土下座）
『・・・・・・・・・・』（↑土下座）

「・・・・・お前らには全員反省文と戦死の為に補習だな」

『『『鬼！悪魔！鉄人！？』』』

「・・・・・とりあえず、お前ら全員補習の時間倍だ」
「西村せんせ、お疲れ様です。大変でしたね？」
「月野か、正直助かった。・・・・・やれやれ教師が遅れをとるとはな」
「今回は数が数じゃからの。恐るべきは男子の執念じゃろうか？」

その執念をもっと別の所に燃やしましょうよ、皆さん？

「んで鉄人、これからどうすんだ？このままじゃ明日も来るぞ、こいつら？」

「そうですよ鉄じ・・・・・西村先生。女子風呂使用を控えるとかしないでいいんですか？」

ホントどんな時でもぶれない二人ですね？そこがこの二人らしいのですが。

「お前らも後で補習を受けたいらしいな？・・・・・流石に使用禁止はマズイ。明日は先生方を増やして対応するか」

「そうだよね～女子はお風呂に入れないのはイヤだもん。と言うわけでボクもお風呂行ってくるね～」

工藤さんが入ろうとします。お疲れでした、助かりましたよ♪

「おっと・・・・・工藤さん、ちょっといいですか？」

「ん～覗き？流石にダメだよ～？」

「ＨＡＨＡＨＡ、こんな騒ぎの後でどうしろと？」

用件が二つほどありますし、とりあえず小声で伝えましょう。

「（すみません、清水さんの件は優姉さんと小山さん以外には黙っていてもらえますか？）」

「（・・・・・なるほどね。うんいいよ。盗撮の件は任せるね～）」

「（後この騒ぎも女子の皆さんには伝えないであげてください。不安にさせたくないみたいですから。特にアキさんたちがね♪）」

「（あはは！りょーかい。大丈夫だよ♪）」

うむ、やはり話が早くて助かります。シュークリーム同盟は偉大なのです。

今度Ａクラスに行く時は必ずシュークリームを持参しましょう。

「んじゃ、また会議の後で～・・・・・あっ、そうだった！ムッツリーニ君！」

「・・・・・・・・・・・・何だ？」

「ムッツリーニ君も入る？（チラッ）」

あらら、スカートに手をかけてこーさんを誘惑？ですか。

何か凄く大胆ですね。てかそれこーさんにしたら・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・ブフォッッ～～～～～～！？」

鼻血が噴水みたいに出てますね。いやこれヤバくないですか？

こーさんしっかり！傷は浅いですよ！？

最後までいろいろハプニングがありましたが、とりあえず今日は解決って事でいいでしょうかね？

「それじゃ、今から明日の対策会議をやるか。このことは女子に知られるのもなんだしな」
「そだね。立て続けに女子のみんなに迷惑がかかるのも申し訳ないし、今日明日くらいはのんびり入っててもらおう」
「うむ。ならば皆も当然、明日も先生方と男子たちを止めるのかの？」
「そうですね。ここは先生たちとも協力しませんと」
「・・・・・・・・・・・・（コクン）」
「まさか、お前らが俺らの手伝いを素直に受けるとはな・・・・・・・明日は嵐が来るか？」

普段の行動はアレですが、今回は任せてくださいね！西村先生！

☆

とりあえず空き教室に戻り、明日の防衛に関して作戦を練ります。
もう完全に、ここが作戦支部になって来ましたね。

「Fクラスの連中は今回は絶対に動かさんようにするぞ。いつ裏切り者が出てもおかしくない連中だからな」
「・・・・・・毎回思うけど、僕らの学年って欲望に忠実だよね？」

それは同感です。下手すると今回のことがなければ真っ先に覗きに行っていたかもしれません。
作戦を聞いている西村先生たちもため息をついています。

「それで雄二よ、具体的な作戦は何じゃ？」
「そうだな・・・・・俺たち五人が五人、別々の役割を果たすことにしよう」
「え？全員で動かないの？相手が大勢なら、僕らもまとまって動く方がよくない？」

まあ普通でしたらそうでしょうね。ですが今回は・・・・・・

「あまりにも相手が多すぎる。今日は何とかなったが、数で来れば俺らは歯が立たない」
「そうですね。明日はおそらく今日以上に戦力を増やすでしょう。補充試験のおまけつきでね」
「それじゃどうすんのさ？僕らの役割って？」
「まあ落ち着け、すでに考えてある。まずは・・・・・・」

ゆーさんの作戦、本日二回目！ゆーさんとこーさんが敵側のスパイとして潜入。明日覗きが始まるまで情報を先生方とこちらに流して、覗きが始まれば内側から敵を殲滅するとのこと。
交渉の上手いゆーさんと、潜入・情報操作・撹乱などのスキルに長けたこーさんならではの作戦です。

次に自分とアキさん。観察処分者二人は先生方と防衛に参加。召喚獣の扱いに長け、召喚大会で頂いた腕輪がある二人が防衛の要になるとのこと。
自分はともかく、アキさんは本当に召喚獣の扱いがもはや教師以上ですからね。期待大です。

そして最後はヒデさん。ヒデさんの役割はA・Fクラスの男子の抑圧です。Aクラスの生徒は多分大丈夫でしょうが念のため、交渉してあわよくばこちらの戦力に。Fクラスの男子はヒデさんが誘惑?して押さえておくとのこと。

余談ですがヒデさん泣いてましたよ?『ワシは男じゃぞ?』って。・・・・・・今度一緒に甘いものでも食べに行きましょう?奢りますよ。

「今回は女子の手は借りない。ある意味、今回は俺らのせいで覗きが始まったんだからな」

「覗きの件も工藤さんたちしか知りません。他の女子たちに心配かけたくありませんからね」

「うん!わかってる、いつも迷惑かけてばかりだし頑張ろう!」

「「「「応っ!」」」」

「・・・・・お前らがいつもがこんな感じだと助かるのだがな?」

「「それは無理だ(です)鉄人!」」

言い切りましたね、二人とも♪ある意味二人らしいのでいいですがね!

こうして三日目の夜は、相変わらず慌ただしくそれでいて楽しく過ぎて行きました。

５０時間目　こちら覗き撃退対策会議～先生もいるよ☆～（後書き）

５０話でした。読んでいただきありがとうございました！

前書きでもちょっと言ってましたが、合宿編の前半部分が清水さんの盗撮事件編で、今回からの後半部分は覗き撃退編です。ある意味区切りのいい５０話ですかね？話の内容は区切りなんてよくないですが。

次回からも原作崩壊なので、できるだけ皆さんが読みやすいように努力します。

ではまた次回！よろしくです。

５１時間目　説得・交渉・久保登場～百合の次は薔薇？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。５１話です！

今回はバカテスの中でも屈指の（変態的な意味で）人気キャラのあの人登場！明久だけじゃなくて造も逃げて！

とりあえず行くよっ！

51時間目　説得・交渉・久保登場～百合の次は薔薇？～

あれから解散した後も、先生方と何処で防衛するかや自分たちの作戦の説明をしたりと結局また忙しい夜でした。普段先生たちに怒られているハズのアキさんとゆーさんが先生方に指示するのは、結構面白い光景ですね♪

その割と忙しい三日目が過ぎ、とうとう四日目に突入しました。明日は移動だけですから実質覗きさんたちが覗けるチャンスは今日のみ。従って自分らも今日を乗り切ればいいのです。

「それで？これから僕らはどうすればいいの？雄二」
「一応自分もアキさんも点数補充は済ませましたよ？」

今回先生方と共に防衛する主力となるのは自分とアキさん。戦いやすいようにアキさんは日本史を、自分は現代国語中心で補充をしておきました。

「そうだな、お前らは一応夜まで暇だしな・・・・・・明久、そして造よ、お前らに非常に大事な任務を与える。大丈夫か？」
「・・・・・雄二がそういう時って大抵僕がひどい目に会うよね？まあ話は聞こうじゃないか？」
「ゆーさん、それでその任務とは？」

何やら緊張が走りますね。どんな任務何でしょう？

「Aクラスの久保と交渉してきてほしい。願わくばAクラス男子を戦力に入れてくれ」
「はい？・・・・・・随分簡単じゃないですか？」
「そうだよね。ってあれ？でも交渉は秀吉の役目じゃないの？」
「うむ。じゃが久保はお主ら、いや明久が適任じゃな」
「・・・・・・・・・・・・・・頼んだ」

どうしてまたアキさんを？ひょっとしてアキさんと久保くんは仲がいいとかでしょうか？

「あ、そう？別にいいけど」
「自分もアキさんに同じく」

特に拒否する必要ないですよね？アキさんもそのようですし。と言いますか、ゆーさんもこーさんもヒデさんも何故に目を逸らしているのでしょう？

「そうか助かる。なんせお前ら・・・・・・いや明久は特に久保に好かれている。安心して行ってこい」

「「？うん（はいです）。わかったよ（ました）」」

「ただし、いざとなればコレを使え」
「・・・・・・・・・・・・造にはコレを」

そう言ってゆーさんがアキさんに、こーさんが自分に何かを渡します。何ですかコレ？

スタンガン（二十万ボルト）↑アキさん用
防犯ブザー&催涙スプレー　↑自分用

「「・・・・・・・・・・・・」」

どうして同じ学園の生徒さんにお願いしに行くのにこんなもの渡されるのでしょうか？
なぜでしょうね？一抹の不安が残ります。

「そ、それじゃあ行ってくるね」
「が、頑張ってきます」

釈然としませんが、とにかく二人で久保くんに会いに行きます。そういえば自分は久保くんに直接会うのは初めてですかね？合宿中は同じ教室ですので楽でいいです。

「あのさ、久保君。ちょっといい？」
「すみません久保くん、学習中に失礼します」
「おや？キミたちは吉井君に月野君じゃないか。珍しいね、とにかく座りなよ」
「・・・・・あの、その気持ちは非常に嬉しいのですが一人掛けの椅子に三人も座るのは困難では？」
「ああ、だったら月野君は僕の膝の上に座るといい」

ああ、なるほど。久保くんなりのジョークですね？
へぇ、現在の学年次席と聞いてましたが中々面白い方じゃないですか？

「あはは、ナイスジョーク！久保君。僕らはこっちの椅子に座らせてもらうね」
「そうか。まぁ、キミらがそうしたいならそれで良いが」
「それで、少しお話があるんですが・・・・・・」
「うん、そうなんだよ。久保君、お願いがあるんだけどね」
「引き受けよう」

「「実は・・・・・・って早っ！」」

まだお願いの内容言ってませんよ！？久保くん、これもギャグか何かでしょうか？

「すまないね、少し冷静さを失っていたかな？それで話とは？」
「えっと、ですね・・・・・・」
「う～ん、実はね・・・・・・」
「遠慮なく言ってくれ」

おお、力強い言葉ですね。これなら遠慮せずに話して大丈夫でしょうか？

「「その・・・・・・女子風呂の覗き「断る」ってまた早い（です）よ！？」」

ひょっとして、久保くんって意外とせっかちさんでしょうか？

「いえ、女子風呂の覗きが出ているんですが・・・・・」
「それの撃退に参加してほしいんだけど、ダメだよね？」
「何だ、そんなことか。それなら考えてもいいよ？」

ほっ、良かったです。てかまずは話を聞きましょうよ久保くんは。

「それで、そもそもどうして覗きが？そんな話は聞いていないと思うが？」
「ああ、女子を不安にさせないように黙っているんですよ」
「覗きが出た！なんて聞いたらお風呂にゆっくり入れないだろうし」

なるほど、久保くんって話せばわかってくれる人みたいですね。
まあ、ちょっと人の話を聞かない所があるみたいですが。

「それで、ついでと言っては何ですが他のＡクラスの方にも手伝えないか頼んでもらってもいいでしょうか？最悪覗きに参加しないよう説得してもらえればいいですから」
「ふむそうだね。Ａクラスにそんな人間はいないと思うが、手伝える人を探しておくよ」
「ありがとう久保君！そうだよね、覗きは人として間違ったことだもん！」
「まあ、確かに人の道に外れる行為でしょうね～」

とりあえず上手くいきましたね。Ａクラスの方が覗きに参加しないだけで大きく違いますから。何とかなるでしょう。

それだけを告げてゆーさんの所へ戻ります。
それにしても久保くんいい人でしたね。ただ別れ際に・・・・・・

「・・・・・人として間違ったこと、人の道に外れること、か・・・・・・」

と呟く声が聞こえました。彼にも何か悩みがあるのでしょうかね?

「明久、造。どうだった?」
「あ、うん。成功したよ」
「少なくともAクラスは覗きには参加しないし、絶対にさせないそうです」
「そうか!それに二人が無事で何よりだ」

はい?ゆーさんはさっきから何を言いたいのでしょうかね?
アキさんと二人首をかしげましたが答えは出てきませんでした。

「それで?雄二とムッツリーニは上手く潜入できたの?」
「ああ、どうやら午後八時きっかりに全軍が覗きに向かうそうだ」
「・・・・・・・・・・・・向こうのリーダーは根本」
「・・・・・・あー、はいそうですか」

根本くんも女子の護衛につけば、少しはBクラスで地位が上がるでしょうに・・・・・・
ここは彼を説得すべきでしたかね?まあ、過ぎたことはどうにもな

りませんが。

「ヒデさんはどうですか？上手く行きそうですか？」
「うむ、何とかの。じゃがＡクラスの説得はワシだけではやはり無理そうじゃ」
「大丈夫だよ、秀吉はとりあえずＦクラスのみんなをお願いね」
「任されたぞい！あやつらはワシが何とかしよう」

これで打てる手は一通り打ちましたね。Ｆクラスが若干不安ですが。
・・・・・いえ、実はまだもう一つ対Ｆクラス用の手はありますが、これ地味にヤバいので、最悪の事態が起こったらヒデさんに発令してもらいますかね。本気で最悪の奥の手ですし。

☆

あれから他の教科も補充して、夕食の後先生方と待機しています。
女子には『観察処分者二人に教師の仕事を教える』との名分で、アキさんと自分が先生たちと覗き対策をしていることにしています。

なるほど、ゆーさんの作戦はこのことも見越したうえでの役割分担でしたか。
これなら女子も心配しなくて大丈夫ですね。

《ゆーさんの作戦っていつもかなり裏まで考えてありますよね》

「まあ、悪知恵だけは働くからな。アイツと吉井は」
「ちょっと！雄二と一緒にしないでください！僕のはれっきとした作戦です！」
「どっちも変らんだろうが・・・・・・」

そんな会話をしながら、自分たちは時間になるまで待機しています。先生方は今回はそれぞれの階に二人ずつ、そしてここに西村先生と・・・・・高橋先生が配置されています。

何やら高橋先生と遠藤先生と船越先生とで、誰が自分の近くにいるか散々もめたらしいです。ですが自分は英語がダメ、数学はアキさんがまだ点が足らない為にオールラウンダーの高橋先生がここにいる状態です。

なしてそんなことで争う必要がありますかね？ひょっとして遠藤先生と船越先生に後でフォローしなくちゃなりませんか、コレ？

「造、鉄じ・・・・・西村先生に高橋先生、雄二とムッツリーニの話だとそろそろです！」
「うむ、準備は良いな二人とも？それに高橋先生も」
《はいです、いつでもスタンバイ出来てます！》
「あぁ造くん可愛いです・・・・・・」

「「「先生は正気に戻ってください！？」」」

「あらら？私としたことが・・・・・・」

先生はとりあえず集中しましょう？悲しくなってきましたよ・・・・

・・・

干渉を避ける為、それぞれがバラバラに隊を組んでいます。アキさんは高橋先生が形成したフィールドでの日本史、自分は腕輪で出した現代国語、西村先生はその他の教科で生徒を倒すことになっています。

Ａクラスの生徒さんは結局どうするかわかっていません。
ま、覗きに参加しないだけでもいいですがね。

現在ＰＭ８：００　どこかで大勢が走りだす音が聞こえます。
さあ、これが強化合宿最後のイベント？です！来るなら来なさい、全員その煩悩ごと吹き飛ばしてやりますよ！

５１時間目　説得・交渉・久保登場～百合の次は薔薇？～（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。５１話でした。

久保くんが何故造にまで……ゴメンなさい、自分でもよくわからん！ま、彼は明久一筋ですし造に何かあることはないとは思いますがね……（汗）

原作とは違い、今回の女子は覗きのことを知らないため先生方＋造たちメンバー対男子学生の防衛戦ですね。これホントに護りきれるのでしょうかね？

あ、それと先に言っておきますと造は清水さんのことで目立ったので、今回の防衛戦は明久中心の戦いになると思います。一応造はこの中では主人公？ですが、バカテスの主人公はやっぱり明久だと思うので。

戦闘はあと一話二話待ってください。頑張って書いてみますので（涙）

読んでいただきありがとうございました！

５２時間目　ｖｓ覗き連合軍！～合宿最後のそれぞれの戦い～（前書き）

そろそろネタのストックが本格的になくなってきた、糖分摂取魔です。

今回は複数視点の物語となっています。それぞれの戦いを短めではありますが、見ててください。今回の敵は意外と厄介かも？

では５２話です。よろしくお願いします。

52時間目　vs覗き連合軍！～合宿最後のそれぞれの戦い～

3階：船越先生ｖｓＥクラス男子Ｓｉｄｅ

「・・・・・貴方たち？覚悟しなさい、この恨みは貴方たちで晴らします」

『ちょっと！？船越先生が本気で怖いよ！』

『そ、そんなに覗きに対して怒りを抱いているのか・・・・・？』

『くっ！？一番抜けやすい3階ですらこのプレッシャーなのかっ！？』

「・・・・・造くんと一緒に行動出来ないのは、全て貴方たちの覗きのせいです」

『『『覗き関係ない！？しかもすっごく私的な理由だっ！！？』』』

「覚悟しなさい！・・・・・試獣召喚（サモン）っ」

『『『（やらなきゃ殺られるっ！？）試獣召喚（サモン）っ』』』

「造くん、見ててくださいね・・・・・私の勇姿を！」

『『『いやいや！アイツはここにはいませんよ！？』』』

「・・・・・あの、これ私たち必要ありませんよね？福原先生？」
ｂｙ布施先生
「・・・・・私たち、他の階へ助太刀に行きますよ、布施先生？」
ｂｙ福原先生

２階：遠藤先生ｖｓＣ・Ｄクラス男子Ｓｉｄｅ

「貴方たち！こ、ここから先は絶対に行かせませんっ！」

『遠藤先生だ！一番突破しやすい遠藤先生の所を落すぞ！』
『ああ、先生には悪いが、ここは通させてもらおう！』
『担任だからって容赦しませんよ！遠藤先生！』

「わ、私は造くんと二日前に約束したんですっ！生徒の為に何が出来るか一生懸命考えると！私はみんなの先生だから！絶対にここはみんなを通さないっ」

「遠藤先生、今日はやけに気合い入ってますね？一体どうしたんでしょう」ｂｙ竹中先生
「何でも、いつもの如く月野の“魔法の言葉”で吹っ切れたそうですよ？」ｂｙ木内先生

「「やれやれ、月野らしいですな」」

「みんなに覗きなんてさせない、だって間違っているから！間違い

は大人が、先生が正さないといけないからっ！行きます、試獣召喚（サモン）っ」

『『『俺らにも意地があるんです！試獣召喚（サモン）っ』』』

「（・・・・・そうですよね？造くん？）」

1階：雄二＆康太＆大島先生ｖｓＢクラス男子Ｓｉｄｅ

『テメェら！俺たちを騙したのか！？』

『どういうことだっ！？かの有名なムッツリーニまで覗きの邪魔をすると言うのか！』

『坂本ぉ！何の真似だ！』

「ったく、御目出度い奴らだな？さてどうやるか」

「すまんな坂本、土屋。ここがある種、一番防衛に難しい場所だ。頼むぞ？」

「・・・・・・・・・・・・（コクン）全力で止める」

『いい気になるなよＦクラス風情がっ！こっちだって上位クラスの意地があるんだ！』

『教師一人にバカ二人で守りきれると思うな！』

『全員で討ち取れ！こいつらに俺らの強さを思い知らせるんだ！』

「・・・・・・・・・・・・俺たちが上位クラスの人間に勝てないと誰が決めた？」

「土屋？どうしたお前？」

「・・・・・フッ、そうだなムッツリーニ。俺らを嘗めている奴らに思い知れせるか？」

「「Fクラスの底力を！！試獣召喚っ」」

「・・・・・なるほど？ここはお前たちに任せようか」

『『『くたばれえええええ！試獣召喚っ』』』

？？？：秀吉ｖｓFクラス男子Ｓｉｄｅ

『おいっ！本当にいるのか？』
『ああ、ムッツリーニの情報に狂いはない』
『じゃあ秀吉はここにいるんだな！この風呂に』

「・・・・・・・・・・」

『お、お前ら準備いいいな！？』
『大丈夫であります、須川会長！』
『押すなよっお前ら！全員で秀吉の裸見るんだろっ！？』
『わかってるって！・・・・・凄く興奮してきた！』

『『『さあ行くぞっ！』』』

「・・・・・・・・・・」

『『『秀吉いいいいいいいいぃぃぃぃぃ・・・・・・？？？』』』

『『『ぎゃあああああああああああああああああああ！！！？？？』』』

～しばらくお待ちください～

「おお、引っかかったようじゃの？」
「んぁ～？マジでかかんのか！いやーアンタのクラス、やっぱおもろいな～♪」
「日高先生よ、すまぬな。助かったぞい？」
「いいよいいよ。造が気に入ってる同性の男の娘なんだし、それに加えて優子っちの弟だかんな～」
「・・・・・今男の子の発音おかしくなかったかの？まあよい、ワシも加勢に行くかの」
「おー！しっかりやんな～♪」
「ではすまぬがあやつらを頼むぞ、日高先生？」
「まあ、任せな！お前さんは早く行ってこい♪」

女子大浴場前：造＆明久＆西村＆高橋ｖｓ？？？Ｓｉｄｅ

どうやら各階ですでに戦闘が行われているようです。そして自分たちにも、ある意味自分たちの相手に相応しい相手がやってきました。
そう、二年男子の中で最強の相手が・・・・・・

「なんで!?どうして君がこんな所にいるの!?」
《・・・・・ひょっとして何か脅されていますか?》
「随分意外なヤツらが来たな・・・・・」
「どうして皆さんがここに!?」

「《・・・・・久保くんっ!》」

「・・・・・・・・・・・・」

学年次席であり先ほど手助けしてくれると約束した、久保くんの姿がAクラス男子全員と共にそこに在りました・・・・・・

☆

「・・・・・すまない、キミたちにはどう思われてもいい。だが悪いがここは通してもらう」
「そういうわけだ、お前たちはここで俺たちが潰す!」

久保くんの側にいるのはBクラス代表で今回の覗きのリーダーでもある根本くん。
ふむふむ、何かまたいらんことをしましたね?まあ、今度は女装では済ましませんよ?楽しみです♪

「・・・・・おい小学生?今とんでもないこと考えたな?」
《何のことです?と言うかこれは何の真似ですか?後、小学生って誰のことですかねぇ?》
「久保君!そいつに脅されているんでしょ!?僕らが何とかするよ!だから覗きなんて止めるんだ!」
「・・・・・わかっているよ、でもここは通らなくてはならないんだ!」
ちぃ!やはり止められませんね。Aクラスの他の男子も若干乗り気みたいですし。実は覗きに興味があったんでしょうか?・・・・・・そこはやっぱり男の子ですかね?
さて、自分の戦闘力でどう戦いましょうか・・・・・正直人数が多すぎますね。
「Aクラスの皆さん。ここは私が相手になります」
『『『先生・・・・・・』』』
「どういう事情か知りませんが、ここは教師として、学年主任として、貴方たちの担任として止めて見せます」
た、高橋先生が凄くかっこいい!どうしましょう、ちょっと惚れ直しましたよ?クールビューティ復活でしょうか?頑張ってくださいっ!

「さあ行きましょう、試獣召喚(サモン)っ」

『『『先生すみません！試獣召喚(サモン)っ』』』

≪学年主任　高橋洋子　　日本史　７９３点≫

ＶＳ

≪Ａクラス　男子２３人　日本史（平均点）３２８点≫

高橋先生ｖｓＡクラス男子が始まりましたね。相変わらずの点数で驚きです

そしてここでも戦いが・・・・・・

「・・・・・久保君、ここは僕が相手だ！久保君の目を覚まさせてあげるよ！」

「すまないね吉井君、ここは勝たせてもらうよ」

「「試獣召喚(サモン)っ」」

≪Ａクラス　久保利光　日本史　３９２点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　吉井明久　日本史　２０４点≫

アキさんも相当力をつけていますが、やはり相手は学年次席。そう簡単にはいかないですかね？と言いますか、４００点オーバーでな

かったことを喜ぶべきでしょうかね？

そしてもちろん、残りの自分にも・・・・・・当然相手は、色々因縁のあるＢクラス代表：根本くん！

「小学生、お前の相手は俺だ！かかって来な！」

《小学生って誰のこと言っているんでしょうか？ねえ、西村せんせ？》

「・・・・・・月野、泣くくらいなら俺が変わるぞ？」

あはは。いやですね、泣いてませんよ？ちょっぴり今日の夕食が塩っ辛かっただけですよ？

《ええい！とりあえずかかってきなさい！その腐った性根と根性、叩きなおしてやります！》

「お前と坂本、吉井には散々してやられたからな！今度はこっちの番だ！試獣召喚（サモン）っ」

≪Ｂクラス　根本恭二　現代国語　３０２点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　月野造　現代国語　４９７点≫

そうしてここに戦いの火ぶたが切って落とされたのです。

「って待て！お前どんだけ点数高いんだよ！？普通あり得ないだろ！？」

《そですか？こーさんなんて今回の為に限界を越えて７００点オーバーしてますし、コレ良心的でしょ？》

「て、点数の水増しじゃ・・・・・・」

《んなことするわけないでしょ？それじゃ、サクッと終わらせましょうね♪》

「すまんっ！俺が悪かっぎゃあああああああああああああ！？」

≪Ｂクラス　根本恭二　現代国語　０点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　月野造　現代国語　３９７点≫

はい、根本くんあうとー！戦死者はほしゅー☆

・・・・・てか首謀者なのに随分呆気なかったですね？戦いの火ぶた切ったばかりですよ？

52時間目　vs覗き連合軍！～合宿最後のそれぞれの戦い～（後書き）

52話でした。ありがとうございますです♪

造「……そこの糖分？これは何ですか？バカにしてますか？」

ま、待ってください、造様！？これは次回の明久ｖｓ久保君を引き立てるために仕方なくですね……！別に戦闘描写が苦手で明久に託したわけでは……

造「……アキさんが活躍するのは大いに構いません。が！展開があまりに急でしょうが！読者さま方に謝りなさいっ！」

いや、本当にすみません！いるか分からないけど根本ファンの方もすみませんっ！次回は！次回こそは書いて見せます戦闘シーン！期待はしないで待ってて下さい！

てか、次回である意味合宿編最後なんですよ。一応まだ続きますが。明久に漢を見せてもらいたくてこんな内容になってしまいました（汗）

とりあえず、読んでいただきありがとうございます！

５３時間目　決戦・決着・防衛完了！～アキさんｖｓ久保くん～（前書き）

何か今日は体が重い糖分摂取魔です。風邪かな……？

えっと、展開が速過ぎましたが明久ｖｓ久保の一騎打ちですね。

二学年男子最強ｖｓ二学年男子最弱？の戦いの結果は！？

とりあえず５３話ですっ！よろしくお願いします！

53時間目　決戦・決着・防衛完了！～アキさんｖｓ久保くん～

造Ｓｉｄｅ

随分あっけなかったですが、とりあえずこの覗き（根本くん）のリーダーは倒して捕縛しておきました。
後は一番厄介な久保くん率いるＡクラスの生徒さんたちですね。

《西村せんせ、首謀者一人片づけましたー》
「うむ助かった。ご苦労だったな・・・・・・それで、吉井の援護に入らなくていいのか？」
《・・・・・アキさんなら何とかしてくれそうな気がしますから♪それに男と男の真剣勝負に水を差すのも悪いですからね》
「ほう？お前が言うなら見ておくとするかな。吉井がどれだけやれるか」
《どもです♪・・・・・・ところで高橋先生は？》

気になったので彼女と戦っているＡクラスの男子生徒の方を見ると・・・・・・

『た、高橋先生強すぎるぞ！』
『これ点数よりも寧ろ召喚獣の扱いがヤバイ！吉井以上か！？』
『もう後が残ってない！と言うか誰一人としてダメージ一つ負わせてないだろっ！？』

『・・・・・・Ａクラス男子、これで補習決定です』

『『『くぅ、せめて一矢報いるぞ！！』』』

《あらら～相変わらずお強いですね？高橋先生は》

「高橋先生は学力もさることながら、召喚獣を扱うことに関しては学園長のお墨付きだしな。まあ欠点らしい欠点と言えば・・・・・・」

『・・・・・・どうせなら造くんと一緒に補習したいです。あぁ造くん？』

《・・・・・・・・・・・・・・》

「コレくらいか・・・・・・」

《と、とにかくアキさんの方見てきますね》

「ああ、それじゃ俺は高橋先生に加勢する」

高橋先生はかっこいいのに残念です・・・・・・ま、それも先生の魅力なのかもしれませんね？

さて、アキさん！ここが正念場ですよ！頑張ってくださいっ！

明久Ｓｉｄｅ

「ふっ・・・・・・ととと。やっぱりキミはやるね、吉井君？」
「クッ！ハァッ・・・・・ハァ、全然、そうは聞こえないん、だけどね・・・・・？」

≪Ａクラス　久保利光　　日本史　　２５２点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　　日本史　　１１８点≫

しんどいっ！３００点以上の相手と戦うのはＡクラス戦以来だけど、やっぱり正直しんどいよ！？
・・・・・・１００点以上削っても先は見えないし、地味にフィードバックがキツイし。

「久保君！どうやら根本君はやられたみたいじゃない！もう加担する必要ないでしょう！？」
「・・・・・勝たないといけないんだよ、吉井君。正直覗きには興味ないが、ここで勝たねばならないんだ」

くぅ！久保君も引かないのか・・・・・でも、造もみんなも頑張ってるんだ！それにここで突破されたら、姫路さんと美波、それに他の女子たちに申し訳ないっ！

「・・・・・ここからは僕も全力で久保君を倒すっ！行くぞっ二重召喚（ダブル）っ！」

点数差二倍なら、こっちは召喚獣を二体にすればいい！幸いにも僕

にはその力がある。

「二重(ダブル)召喚!?くっ白銀の腕輪か。この前の召喚大会の優勝景品だったね。厄介なものだ」

そう、この前造と共に優勝した時に貰った景品。造のは召喚獣を呼び出せるフィールド形成の腕輪で、僕が貰った腕輪は召喚獣をもう一体増やせるタイプだ。点数差二倍でもこれならいける!

「勝負はこれからだっ久保君!」

雄二&康太&秀吉&先生方Ｓｉｄｅ

「ハッ!これで終いか?随分とあっけねえな」

「・・・・・・・・・・・・上位クラスが聞いて呆れる」

「いや。お主らが、特にムッツリーニが異様に強かったからじゃろ?」

『ば、馬鹿な・・・・・・』

『もう全軍全滅・・・・・・なのか?』

『俺らの理想郷(アガルタ)への旅は・・・・・・終わったのか』

「あー、とりあえずお前らには罰と処分が与えられるだろうな。覚悟しておくように」

『『『ね、根本おおおおおおおおお！絶対成功するって言っただろう！？』』』

「やれやれだな、本当に反省しているのかこいつらは？」
「大島先生もお疲れ様じゃ」
「ああ、お前ら助かったぞ。後は首謀者の確保だな」
「・・・・・・・・・・・・・根本恭二」
「ま、それはあっちで何とかするだろな。造と明久がいるわけだし」

「「・・・・・・造くん頑張ってください」」

「・・・・・・先生方？何故ここで祈りを捧げているのですか？」

「「・・・・・・造くん」」

「聞いていませんよ？どうしますか、この先生方を？」
「もう月野がいないとダメですね、この二人は・・・・・・いえ、本来ならもう一人ですか」

造Ｓｉｄｅ

どうしてか、自分に向かって祈りを捧げている二人の先生の映像（ビジョン）が見えましたよ？

何でしょうかね、今のは・・・・・・

それはともかく、高橋先生の方は残り僅かで問題ないようです。流石に強い、高橋先生と西村先生には未だに（色々な意味で）勝った事がないですもん。

問題はアキさんｖｓ久保君ですが・・・・・・

「吉井が二重召喚をしたな・・・・・・学園長も面白いものをよく作る方だ」

《・・・・・・これならいけますね》

「そうか？操作する召喚獣が増えるほど、操作がかなり難しいと思うが？」

確かに並みの生徒では不可能でしょう。ですがアキさんは、アキさんなら・・・・・・

明久Ｓｉｄｅ

「流石だよ吉井君！だが二体に増やしたことで、召喚獣に逆に隙ができるよ！」

「っ！・・・・・・ま、だまだ！ここでやらなきゃ、男が廃る！」

≪Ａクラス　久保利光　　日本史　　１１５点≫

≪Fクラス　吉井明久　　VS　　日本史　　４６点≫

結構削ったけどまだ足りない。二獣を操るのは結構難しい。フィードバックで身体が軋む。
でも！それでも負けられないっ！最後の最後まで戦い抜くっ

「召喚獣の動きに隙ができ始めているよ。防戦一方だね？もう限界なんだろう」
「・・・・・・いいや？まだまださ」
そう、まだまだなんだ。もう少し、もう少しで掴めそうなんだ！それまでは堪えるしかないっ
久保君の召喚獣が主獣を襲う。それをバックステップでかわしつつ、副獣で牽制する。
よしっ！だんだん出来るようになってきた。あとはタイミングだけだ・・・・・・！

「そろそろとどめに入ろうか・・・・・・すまないっ吉井君！」
キタ！久保君が勝利を確信した！今が絶好のチャンスだっ！！
「今だ！解除（キャンセル）」
「っ！？何っ！？」

副獣の間合いに入られた瞬間、解除（キャンセル）して元の一体の召喚獣に戻す。
当然、副獣は消え久保君の攻撃が空を切った！

「っ！まさか最初からこれを狙って！？」
「もう一度二重（ダブル）召喚っ！」

そう僕が狙っていたのは、久保君が勝利を確信して油断すること。
久保君が『二体の召喚獣を操りきれていない』と錯覚させること。
そして僕自身が二体の召喚獣の扱いに慣れる為の時間稼ぎをすること
だっ！

正直に言うと二体のコントロールは、戦い始めて随分前から慣れて
いた。でも久保君にはそれだけじゃ届かない。だからこそこの油断
を誘ったんだっ！

「これで終わりだあああああああああああああ！！」
「・・・・・・完敗だよ、吉井君」

≪Ａクラス　久保利光　　日本史　　０点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　　日本史　　２１点≫

こうして僕らの強化合宿：女子風呂覗き防衛戦は、僕らの完全勝利
で幕を下ろした。

造Ｓｉｄｅ

「アキさん、お疲れ様です。今怪我の治療をしますよ」
「ありがと造。造もお疲れ様・・・・・なことはないね？一発も攻撃されてないし」
「ふふふ♪アキさんのこの傷は名誉の負傷ですね。アキさん、かっこよかったですよ♪」

なんせ学年次席と戦って、しかも実力で倒してしまったんですからね。
実質の二学年男子、最強の召喚獣の使い手じゃないでしょうか？凄いです♪

その久保くんと高橋先生・西村先生がノーダメージで倒しきったＡクラスの男子生徒は、西村先生たちに説教されています。仕方がないことですがね・・・・・・

「久保、お前に何があったか俺には分からん。だが罰は罰だ、合宿が終わり次第処分されるだろう」
「久保君、それにＡクラスの皆さん。私が担任として責任を持って罰を与えます」

やっぱりそうなりますよね・・・・・ことがことだけに。
まあここは少しだけ、学園長に頼んで罰を軽くしてもらいましょうかね？

「わかっています。自分たちがやったことは許されない行為です。

ちゃんと罰も処分も受けましょう」

「「「すみませんでした」」」

そこはやはり潔いですね。流石はAクラスと学年次席の久保君です。ですが、ではどうして久保くんは覗きなんかを・・・・・・

「久保君、どうして覗きなんかに参加したの？久保君そんなことする人じゃないでしょう？」

「そうですよ。根本君に脅されたんでしょう？それなら自分たちに相談してくれれば・・・・・・」

「いいんだよ二人とも、ありがとう。でも僕が許されないことくらい、自分自身が一番わかっているからね」

久保くん・・・・・・何処までも、貴方は人に弱みを見せないんですか？自分たちに相談くらいしても良いでしょうに。

「・・・・・そう、これは許されない恋なんだ・・・・・・それでも、僕はっ」

はて？何でしょう。何か久保くんが言っていたような？

西村先生に連れられて行く久保くんは、何故かとても印象的でした。

53時間目　決戦・決着・防衛完了！～アキさんｖｓ久保くん～（後書き）

53話でした。ありがとうございます。

造「……戦闘描写、結局あまりなかったですが？糖分？」

……こ、これでも必死でガンバタヨ！？トウブン、凄くガンバタヨ！？

造「ま、この糖分じゃこんなものですかね……。とりあえず覗き撃退編はこんな感じです。展開が速いのは勘弁して下さい」

うぅ……え、えっと次回はエピローグの前に強化合宿の日誌と高橋・船越先生の短編＋αです。この二人動かすのホントに難しいです（汗）船越先生が特に。

＋αは誰の話でしょうねー（棒）まあすぐわかると思います。例のあの子の話です！

読んでいただきありがとうございます！

強化合宿の日誌：その？＋先生の合宿：船越・高橋編＋α（前書き）

どうも糖分摂取魔です。
父にＰＣのことでまた怒られましたが、気にせずレッツ★投稿！

……また怒られますかねｏｒｚ　平日じゃないなら使っていいって言ったじゃないですかお父さん！平日もこっそり使ってますが……

今回は強化合宿の日誌その？！扱いにくいキャラ苦手ですが頑張ります！

強化合宿の日誌：その？＋先生の合宿：船越・高橋編＋α

強化合宿3日目の日誌を書きなさい

土屋康太の日誌
『前略。（※坂本雄二に続く）』

教師のコメント
今度はリレー形式ですか。次から次へと良く思いつく物です

坂本雄二の日誌
『中略。（※吉井明久に続く）』

教師のコメント
・・・・・大体続きは読めました。

吉井明久の日誌
『後略。（※月野造に続く）』

教師のコメント
そこで月野君に投げないでください。

月野造の日誌
『皆さん今日はとても疲れていらっしゃるので申し訳ございませんが、日誌のことは許してあげてください。明日は大事な防衛戦、皆さん気を引き締めていきましょう！（※先生のコメントに続く）』

教師のコメント
吉井君たちはとりあえず、月野君の爪の垢を煎じて飲んでおいてください。

☆

強化合宿・3日目　その日の船越先生

「・・・・・残念です、造くん」
「あらら?ひょっとして間違ってますか?どの辺でしょうか?」
「一つも間違いがないのが残念です・・・・・・はぁ」
「それを自分にどうしろと!?」

ただいま強化合宿の自習時間中。あくまでこちらは生徒の自主性を高めるために授業はしません。その分、質問などをその教室にいる教師に頼めるというシステムです。

先ほどちょうど造くんが来て、『頂いた模擬テストの採点をしてほしい』と頼まれたので、数学を採点していたのですが・・・・・・

「何一つアドバイス出来ませんでした・・・・・・本当に残念です」
「あ～ぅ、拗ねないでくださいよ。第一この問題一度やったことがありますし、仕方がないと思いますよ?」

「・・・・・まあそうなりますが、納得いきません。不公平です」
「いやいや!?どういう理屈でしょうか?」

造くんは正直凄い子です。弱点は確かにありますが（英語とか）大抵のことは何とかしてしまいます。そしてそれは、私の担当の数学も・・・・・・・

「なんか私、造くんにとっては必要ないのではないでしょうか・・・・・」
「・・・・・またそれはとても極端な話ですね?例え数学がわかっていてもわからなくていても、船越先生は『先生』なんですから。自分は必要としてますよ?」
「ですがそこは、やはり教師としては生徒の為に何か動きたいです」

私が教師としてできることは、問題を解き方を教えること位しか出来ないです。
私にだって、悔しさはやはりあります。

「・・・・・先生が生徒の為に動こうとしてくださる事は凄く嬉しいですし、ありがたいです。でも先生は先生だけの教えることが一杯ありますよ?自分も教えて貰っています」
「そうですか?よくわかりませんが」
「あはは♪・・・・・・大丈夫ですよ?本当に必要としていますから♪」

・・・・・やはりよくわかりません。
わかりませんが、この生徒が言うならそうなんでしょうね。そういう子ですから。

強化合宿４日目の日誌を書きなさい

☆

久保利光の反省文

『自分の気持ちに嘘をつけずに、迷っていた心が吉井君と月野君に刃を向けてしまいました。女子の皆さんを不安にさせてしまったことや、学年次席としての立場らしくない行動をとったことを深く反省し謝罪します。・・・・・・ですが、それでも吉井君と月野君を・・・・・・』

教師のコメント

貴方らしくない行動に、先生は正直驚きを隠せません。何か疲れているようにも感じました。悩みがあれば先生に相談してください。ともかく反省しているのであれば貴方は大丈夫でしょう。他のＡクラスの生徒もしっかり反省しているようですし、Ａクラスの皆さんももういいでしょう。

Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ男子の反省文

『根本を許せないと思いました。アイツの言うことはもう信じません』

教師のコメント
貴方たちは反省する所が違います。もう少し自分たちの行いに対して深く反省しなさい。とりあえず罰を増やしましょうかね。

根本恭二の反省文
『全男子に裏切られた気分だ』

教師のコメント
貴方もです。と言いますか、このままでは恐らく女子にも見捨てられますよ?

とあるFクラス男子の日誌
『ヒドイものを見た。秀吉に裏切られたかと思った。もう何も信じない』

教師のコメント
Fクラスの方は今回覗きに参加しませんでしたね。それは良いことなのですが、Fクラスに一体何があったのでしょう?他のFクラスの男子も同じようなことを書いています。

☆

強化合宿・4日目　その日の高橋先生

「ふぅ、全員の反省文はこんな感じでしょうか、西村先生？」
「そうですね。まったく、アイツらもＦクラス並みになってきている気がしますよ・・・・・・」
全男子（防衛に参加してくれた、造くんや吉井君・坂本君・土屋君・木下君、そしてＦクラスの男子は除く）の反省文を書かせて、今日の所は帰すことにしました。明日は移動日ですから罰は学園に帰って与えましょう。

「西村先生すみません。結局私のクラスまで問題行動を起こしてしまって」
「なに、いつもの馬鹿共に比べれば可愛いものですよ。ちゃんと反省もしていますしな」
Ａクラスの皆さんもちゃんと反省してくれたので良かったです。そこはやはり最高成績者のクラスでしょうか？それにしても、ふふふっ♪

「・・・・・・ふむ？高橋先生は何やら嬉しそうですな？」
「え？・・・・・・私、そう見えますか？」
「ええ。それに何と言うか、ホッとしているようにも見えます」
あら、顔に出ていましたか？私らしくないですかね？

「こんなことを教師が言うのも何ですが、Ａクラスの子も男の子なんだと思いまして」

「はい？それは覗きをした行為に対してですか？」
「あ、いいえ。そっちではなく私に挑んできたことです。絶対に私に勝ってみせると挑んできた子もかなりいたそうなんですよ」
Aクラスの中には、自分の実力を確かめたい！先生に挑んでみたい！という理由で今回の件に参加してきた子もいました。

「ちゃんとそんな所は男の子なんだなって思いました。勉強ばかりで彼らもストレスが溜まっていたみたいですし、ある意味今回の件はいいストレス発散になったのかと」
「・・・・・なるほど、確かにそれはあるかもしれませんね？」
まあ、それが覗きに参加していいことにはなりませんがね？次は許しませんから。

「・・・・・それに、造くんと一緒に戦えましたし！ああ、可愛くて凛々しかったです！」
「・・・・・・・・・・・これさえなければ、いい話でしたのに」
どうせなら日高先生に頼んでビデオに収めるべきでしたかね？それが残念です♪

☆

強化合宿・４日目　清水美春の（反省）日誌

覗きたち撃退の後、あの小学生たちが（誰が小学生ですかっ！？ｂｙ造）いつもの空き教室に美春たちを呼び出しました。一日目に美春に騙され、部屋に押し寄せてきた女子たちです。

呼び出された理由は・・・・・・美春の仕掛けたカメラとマイクについて説明するそうです。

・・・・・これは美春の罪です。今回は皆さんの迷惑もかけましたし、美春もどんな罰も受ける覚悟があります。そうでなければお姉さまと対等に話すことが出来ませんから。

この件はあの小学生に全て任せています。美春は反論しないことだけ言われています。きっときちんと美春に罰を与えることでしょう。

「皆さんすみませんね、合宿最後の夜にわざわざ」
「いいえ、大丈夫です。それで話とは・・・・・・？」
「ええ、実は一日目のカメラとマイクの件なのですが・・・・・・」
「待ってください。・・・・・・それは美春が言いますわ」

ここは美春が言わなくてはなりません。そこは譲れませんから。

「え・・・・・？なんで今更カメラなんかを？」
「どうしたの、清水さん？」
「えっと、どうしたんでしょうか？」
「・・・・・・美春？」

お姉さま、本当にごめんなさい。美春は、美春は・・・・・・！

「皆さん、すみませんでしたっ！あのカメラとマイクは美春が取り付けたんです！」

「「「「え、ええっ！？」」」」

「（清水さん、堂々と言ったね・・・・・・）」

「（まあこれが罰だし仕方ねえな）」

「（自分もこんなにはっきりと言うとは・・・・・・さて？どうしますかね）」

「美春のせいで不安にさせてしまい、申し訳ございませんわ！」

「ま、待ってよ！どうしてそんな！？」

「男子が犯人じゃなかったの？」

「清水さんもそう言ってたじゃない！？」

「・・・・・・それ、は」

責められるのはわかっていますが、これはキツイですわね。どう説明しますか・・・・・・

「それは清水さんが女子脱衣所で男子がうろつくのを見たから、なんですよ？」

「えっ！？」

いつもの小学生がそんなことを言いだします。ちょっと!?何故そんなことを!?

「えっと、男子をですか?でもそれとカメラは何の関係があるのですか?」

「えっとですね、清水さんは『ひょっとしたら男子が女子脱衣所に侵入しているかもしれない』と考えたそうで、その証拠を押さえる為に仕掛けておいたそうです」

あの人は何を言っているのです!?どうしてそんな嘘を!?

「で、でも私たちの着替えを・・・・・・」

「ああ、女子の皆さんが着替える時になれば自動的に回線が切られる仕組みだったそうです。現に工藤さんやこーさ・・・土屋くんもそれは確認しています。ですよね?」

「うん、映像は残ってないよー」

「・・・・・・・・・・・・・・(コクリ)」

・・・・・・呆れました。まさか美春を庇う気ですか?本当に何を考えているのですかっ!?

「そういうわけですので、清水さんがしたことは水に流してやってくれませんか?彼女も流石にやり過ぎたと反省していますし・・・・・・」

「う~ん、そういうことだったのね」

「まあ、男子を捕まえる為にやったことだし・・・・・・」
「と言うか、私たちに実害はなさそうだしいいんじゃない？」
「何だ、それならそう最初から言いなさいよ、美春？」

「あ、あの！そうではな「そうですもんね♪清水さん！」・・・・・・くっ！」

ま、またしても嵌められました！？任せると言ってしまった以上、美春には言い返せません。

「そういうわけでした。多分疑問に思っていた方もこれで納得できるでしょう？」

「「「「ええ、大丈夫です」」」」

「これで話は終わりです。皆さん明日は移動日ですし、早めに休んでください。長々とすみませんでしたね。お疲れ様でした！」

そう言って、終わりにしてしまいました。女子も何とか納得しています。
ですが、・・・・・・どうしてこんなことを？

「（・・・・・・どういうつもりですか？）」
「（え？ああ、清水さんが深く反省していますし、ならいいかなって思いまして）」

「（造も甘いよねー・・・・・まあ造らしいかな？）」
「（やれやれ。ま、これで俺らも完全に疑いが晴れたな）」
「（・・・・・・・・・・一件落着）」
「（では戻るとするかの？）」
「（・・・・・・貴方たちはそれでいいのですか？）」

こんな結果で、しかも犯人が罰を与えられていないのですよ・・・・・？

「（ワシは特には問題ないぞい？）」
「（・・・・・・・・・・右に同じく）」
「（写真を取り返せたし、脅迫もしないって約束だし別にいいよ）」
「（プロポーズを翔子に売らなきゃ問題ないぞ）」
「（と言うわけだそうです。いいじゃありませんか清水さん。ちゃんともうしないって約束してくれましたし）」

・・・・・お人よしですわね。もう呆れて反論できません。

「さて、戻りませんと消灯に間に合いませんよ？」
「うむ。折角説教されずに合宿を終われる所じゃし、急いで戻るとするかの？」
「だね？いや～珍しく今回は鉄人に怒られなくて済んだね」
「問題児のお前らしくないな？今からでも何かしでかしそうだ」
「何だと！問題児の雄二に言われたくないね！」
「お前の方が問題児だろうが！」
「・・・・・・・・・・早く戻る」
「あはは♪では、清水さんもお休みなさいです」

そう言って彼らは出て行きました。慌ただしいですこと。

「・・・・・・やれやれですわね」

美春を責めるどころか、結局何の御咎めもなしですか?甘い方たちですわね。

「・・・・・・あの人たちにも何かしてやりませんと。借りを作るのは御免ですわ」

強化合宿の日誌：その？＋先生の合宿：船越・高橋編＋α（後書き）

ありがとうございました、短編いかがだったでしょうか？

……船越先生扱いにくいっ！本気で資料を探しても先生が喋っている所ほとんどありませんし、いつもの先生ズの中で一番扱いが厄介すぎる……

そしてぶれない高橋先生。キャラはもうこれでいいですかね？

そして何故か救済？清水さん。この話のせいで４巻のＤクラス戦が潰れてしまったことに今さっき気づいて焦ってます……（汗）ひょっとしたら、本気でなくなるかも？

次回予告ですが、合宿の夜！と言えば何かわかりますよね？そうです、原作の美波＆翔子がやったアレです。内容はどうなるかわかりませんが……

読んでいただきありがとうございます！

５４時間目　感謝と夜這いと最後の夜～強化合宿編終了！～（前書き）

５４話です。強化合宿編のラストになると思います。

やっと、やっと強化合宿編の本編が終了です！もちろんまだ短編は入れますが。

長かったような、展開が速過ぎたような？これが糖分クオリティ！

今回、さかさまテルテルさんにお借りした、とある『ブツ』があります。知る人ぞ知るアレです。さかさまテルテルさん、ありがとうございますです！

とりあえず、行くよ！

５４時間目　感謝と夜這いと最後の夜～強化合宿編終了！～

「それじゃＡクラスの男子全員が相手になったのか・・・・・・」
「お主らも大変じゃったの？特に明久はあの久保までも倒すとはの」
「・・・・・・・・・・・・成長してる？」

あれからＦクラスの男子以外の男子生徒を先生方が捕え、自分たちはゆっくり部屋で先ほどの戦いの様子を話合っています。てかよくよく考えると、Ｆクラスの男子が参加していないのはある意味では異端なのでしょうか？普段の行動を考えるとなおさらですね。

「いやー、でも高橋先生も凄いよね？Ａクラス男子２３人相手に、一応鉄人も参戦はしてたけどほぼ一人で壊滅させてたもん」
「それは恐ろしいのう・・・・・・」
「まったくですよ・・・・・・あ、そう言えばＦクラスの皆さんは？」

そういえば肝心の彼らはどうしたのでしょう？あれ？ひょっとして・・・・・・

「ヒデさん、あの兵器を使ったんですか？」
「うむ、効果は絶大じゃったな。あやつら今も沈んでおるよ」

「「兵器？何の話（だ）？」」

おお、そう言えばゆーさんたちに説明してませんでしたね。忘れてました。

「ええっと、Fクラスの皆さんが暴走した時の為に備えておいたんです」

「ある意味最凶の兵器じゃそうな。効果は抜群であったしの」

「・・・・・それ何さ？」

「個別風呂にヒデさんと自分が一緒に入っていて、見張りの先生が女子の覗き対策で誰もいないことを先に噂させておくんです」

「「「ふむふむ。それで？」」」

「そのお風呂には・・・・・・・・・・日高先生に命令されて待機していた『あの』自分の執事たち？が満面の笑みを浮かべてウェルカムしてるんです」

「「「ぎゃあああああああああああああああ！？」」」

ワオ、想像しただけでこの威力ですか？こーさんに至っては本気で錯乱しかかってます。まあ、自分も正直そんな光景は怖くて見たくありませんが。話を聞く分だと、Fクラスの皆さんも阿鼻叫喚でしばらく塞込んでしまったとか？

「あ、危なかった・・・・・・なんて恐ろしい兵器なんだ！？」

「お前もよくそんな作戦考えたな！？」

「・・・・・・・・・・・死ぬかと思った」

一応考えたのは日高先生なんですがね？あの人こういうことに関し

ては、天才（天災?）でしょうし。

「さて、そろそろ寝ますかね?本気で疲れましたし」
「ん、そだね。んじゃおやすみー」
「うむ、お休みじゃ皆の衆」
「・・・・・・・・・・・良い夢を」
「んじゃ電気消すぞー?」

やれやれ、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうものですね。
仕方がありませんが。
明日の為にもさっさと寝ましょう。お休みなさいです♪

☆

「・・・・・・・くん、起きて。造くん。」
「ムニュ・・・・・・・」

何でしょう?何か呼ばれている気がしますが、流石に疲れているので寝かせてください・・・・・・

「・・・・・・造くん、起きないとどうなっても知らないわよ?」

すみません、眠気には勝てないみたいです。別の機会にどうぞです・・・・・・

「・・・・・起きなきゃコレに着替えてもら「危険感知！造、起きますっ！」いましょうか？」

なっ、何でしょう今の邪気！？殺気とも違う何か別の黒く恐ろしいものを感じましたよ！？

「あら？起きてくれたのね♪お姉ちゃん嬉しいわ」
「・・・・・そのとんでもない服を持ってどうしようとしていたのかは敢えて聞きませんが、これはどういった状況なんですか？」

え、え？優姉さん！？ここ一応自分の部屋ですよね？

「おはよう♪と言ってもまだ深夜なんだけどね？」
「・・・・・夢でしょうかね？何故ここに優姉さんが？」
「寝ぼけているのかしら？造くんの愛しのお姉ちゃんよ？」

優姉さんが寝ぼけているのは確かでしょうか。まあこれが夢と言うわけでもないようですね。
うむ、とりあえず落ち着いて状況を確認しましょうか。まずは自分の周囲の状況から。

今自分の周囲は・・・・・

・セーラー服でさめざめ泣いているヒデさん
・工藤さんの膝枕で鼻血を出しているこーさん

・浴衣姿でゆーさんの布団に侵入しようとしている霧島さん
・同じく浴衣姿でアキさんにくっついている姫路さん&島田さん

「・・・・・・・・・・・・」

ああ、今日は疲れているんでしょうね。頭を振りもう一度確認です。

・『造、お主だけでも逃げるのじゃ』と言いたげにこちらを見ているヒデさん
・嬉しそうにこーさんの寝顔?を見ている工藤さんと天に召されそうなこーさん
・浴衣の帯を緩めようとする霧島さんを必死で止める顔が真っ赤なゆーさん
・真っ赤になりながらもアキさんに抱きついている姫路さん&島田さんとパニックになってるアキさん

あ・・・れ?ここもしかして女子の部屋でしょうか?おかしい、夢でないとすれば間違って自分たちは優姉さんたちの部屋に入って「ああ、先に言っておくとアタシたち全員夜這いね」しまった・・・・・?

・・・・・・YO☆BA☆I?ワオ!そいつはびっくりだZE☆

「って待ってえええええ「静かにね♪」ムグゥ!?」

大声を上げようとしたら優姉さんに口を塞がれました。・・・・・・どうやら本当に女子全員が夜這いに来たようです。呆れるといいますか、感心するといいますか？

「えっと？それでまた何故に夜這いなんかを？」

声を最小にして優姉さんに聞きます。とにかく今は状況確認とこの状況の打破を考えるのが先です。

「お礼に決まっているじゃない？みんなアナタたちにお礼がしたくてここまで来たのよ？」

「はい？何のでしょうか？」

「フフッ、覗きを止めてくれたでしょ？そのお礼」

なるほどです・・・・・・って有り？覗きのことは工藤さんに黙っていてほしいと言ったような？

「・・・・・・もしかして、工藤さんに聞きました？覗きが出ることを」

「いいえ？教えてくれたのは清水さん。何でも『借りは返しますわ』だって」

・・・・・・あちゃー、これは一本取られましたね。清水さんなりの謝罪と仕返しでしょうか？

「と言うわけだから、それぞれにお礼がしたくて、ね☆」

「アキさん、ゆーさん、こーさんはともかくヒデさん&自分のお礼がどうしてコスプレにつながるのかさっぱりですがね！」
「？ああ、これは趣味。お礼は別よ？二人とも」
「「こっちは趣味なんですか（じゃと）！？」」
「二人とも静かになさい？先生に見つかればもっとひどい格好になるわよ？」
「「・・・・・・・・・・・・・・・」」
そうですね。そんな光景（ビジョン）がハッキリと見えます。特に今回あまり話せなかった日高先生から酷い目に遭わされるでしょうね。
「それでね、・・・・・ありがとう。アタシたちの為に頑張ってくれて」
「・・・・・いいえ、自分は特に何かしたわけではないですよ」
「・・・・・ワシもじゃな。姉上が気にすることじゃないのう」
「こーら、二人とも。人の感謝は素直に受け取りなさい？」
ま、実際に頑張ったのはアキさんたちなんですよね。アキさんたちも今お礼を言われているみたいです。・・・・・形はどうであれ。
「そんなわけでお礼ね」
「だから別に気にしなくても（チュッ）・・・・・・・・・・・・ふぇ？」
「あ、姉上！？何をして（チュッ）・・・・・・・・・・・・え？」
「ふふふ♪二人は私から・・・・・ね？」

え?えっと?え?ごめんなさい・・・・・・どういうことです、か?
頬に残る優姉さんの唇の感触・・・・・・なんでしょう、コレは?

「・・・・・さてと!じゃあ造くんの着替えをしなくちゃね!」
「・・・・・・はい、そうですね。・・・・・・は!?」

え?この空気でやることがコスプレですか!?
いや、何でしょうか?正直呆気なようなホッとしたような、残念なような?

「さあ!これに着替えてもらうわよ~♪」
「優姉さんの何事にも動じないその心が羨ましい!?でも待って下さい!?てかそのチャイナ服まさか、かの有名な『4分の1エロチャイナ』ではっ!?」
「うふふ♪可愛さとセクシーさが合わさって凄くイイと思わない?」
「ちょっと!?マジでそれは危険ですよ!誰か助けてえええええええ!?」

結局それから日高先生&いつもの先生×3がやって来て、案の定止めるどころか参加して大変なことになりました。ヒデさんと二人、撮影会になったのは最大の屈辱です。西村先生が何とかその場を押さえるまで、その宴は終わらなかったことだけは申し上げましょう。

そうそう、アキさんもこーさんもゆーさんも何やらあったようで顔が真っ赤でしたね。
深くは突っ込みませんが、まあいいのではないでしょうか?

こうして強化合宿の最後の夜は、相も変わらず慌ただしく終了しました。

「・・・・・造よ？姉上はどうしてまたこんなことをしたと思う？」

「・・・・・正直よくわかりません。ですが、この好意は受け取るべきでしょうね」

「・・・・・ワシもかの？」

「・・・・・です、かね」

思う所は一杯ありますが、それでもいつも通りの日常ですね。

☆

そんなこんなで、無事に？強化合宿は終了しました。いやはや何とも自分たちらしい、騒がしくも面白おかしい合宿ですね♪それが自分たちらしいのでしょうがね？

あ、ちなみに男子たちは一応、様子見に来ていた学園長に頼んで停学だけは無しにしてもらいました。

罰は与えられますがとりあえずは未遂ですし？いいのではないでしょうかね？

「ったく、アンタは相変わらず甘いねえ。それで本当にいいのかい？」

「ん～と。反省していますから別にいいのでは？ちゃんと罰は与えられるでしょうし」

「お主らしいの。ま、被害自体は何もなかったわけじゃし、これはこれでいいじゃろ」

「はっ！アンタらお人よしだね。まあ、こっちも問題が公にはされたくないさね。助かったよ！」

帰りの車でヒデさん、学園長と話します。え？バスに乗らないのかって？だって多分ですがバスには・・・・・・

『『『造くん！？どこですか！？』』』

『造！アタシを嵌めたね！？今度は容赦しないよっ！』

『なるほど？用意がいいわね、造くんは。大方秀吉も一緒ね？』

『『『・・・・・・（なんでFクラスのバスの中に先生と木下さんがいるんだろう？）』』』

てなことに、なっているでしょうからね？前もって学園長に頼んで送ってもらうことにしてました。

フッ、自分も少しは成長するんですよ？

・・・・・ま、学園に着いた後にヒデさんと二人、散々弄られたのはまた別の話ですがね？

ちなみに優姉さんが持ってきた『４分の１エロチャイナ』を着た自

分とヒデさんの写真がムッツリ商会で爆発的に売れ、プレミアまでついたと聞きましたがそんなオカルトありえません。

５４時間目　感謝と夜這いと最後の夜～強化合宿編終了！～（後書き）

５４話でした、ありがとうございます。

ここまでやっても、恋愛に発展しないのが月野造クオリティ？お子ちゃまですからね。今回の優子さんの場合、家族にするキス感覚っぽいな～（汗）上手く表現できなくてすみません。

そして、さかさまテルテルさん！『４分の１エロチャイナ』お貸しくださりありがとうございますです♪知らない方に説明するとこの『４分の１エロチャイナ』は裾の部分の長さが足のつけ根から膝までの長さの半分の長さになっている、色々とヤバいブツです。てか、造と秀吉が着ていいもの何でしょうか？（男の娘的な意味で）

さかさまテルテルさん、本当にありがとうございました。またお借りするかもです（汗）

ちなみに次回は、強化合宿編の日誌と明久視点の夜這いの話です。上手く書けるか分かりませんがよろしくお願いします。

強化合宿の日誌：その？＋短編：その夜の明久（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。最近ＰＣが使う時間が限られてきたので携帯で投稿しようかなと考えましたが、携帯の使い方が全然わからないのですぐに諦めました。携帯ってムズカシイネ

そんなことはともかく、これが強化合宿編最終のお話です。ではではよろしくです！

強化合宿の日誌：その？＋短編：その夜の明久

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい

姫路瑞希のまとめ

『他のクラスの人と勉強する事で良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えて貰う事が出来たので、今後もさらに頑張っていきたいと思います。夜はいつもの様に騒ぎがあったそうですが、これはこれで私達の学校らしいと思います。それに明久君が私たちを守ってくれましたし♪』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので、伸び悩んで居る科目があったと言う事には驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。AクラスとFクラスを合同で学習させたのは間違いではなかった様で安心しました。バカ騒ぎに関してもいつものFクラスの生徒が関わらなかったようで、Fクラスの評価も上がってきていますね。吉井くんも頑張っていましたよ。彼らには今度お礼をしなくてはなりませんね。

島田美波のまとめ

『学習面もそうだけど、この合宿でいろいろな変化がおきた気がする。覗きや盗撮の問題もあって、ホントは少し不安だったけどアイツがウチらのことを守ってくれたことが何よりもうれしい。瑞希と話し合ってウチらはアイツのことを信じてみたけど、それが間違い

じゃなくてホントによかった』

教師のコメント
この合宿では少々トラブルが多かったですからね。不安にさせてしまったのは先生の落ち度で申し訳ないです。ただ貴女の言うアイツが誰かはわかりませんが、Ｆクラスの有志が覗きを撃退してくれたおかげで問題にならずに済みましたね。改めて彼らにお礼を言いたいと思います。島田さんも良かったら彼らに感謝の気持ちを伝えてあげてください。

姫「お礼ですか・・・・・・」
美「感謝の気持ちね・・・・・・」

姫・美「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

☆

強化合宿・まとめ　吉井明久のその夜の日誌

「・・・・・・久君、起きてください・・・・・・」
「・・・・・・キ、起きてアキ・・・・・・」
「んむぅ・・・・・・」

なんだろう?何か揺さぶられているような・・・・・?

「・・・・・美波ちゃん、明久君起きてくれませんよ?」
「・・・・・・困ったわね。それにしてもアキの寝顔って」

「「か、可愛いわよね（ですよね）・・・・・・」」

何だか男の尊厳がブチ壊されそうなことを言われている気がする。
でも何だ?疲れているせいか目が開けられない・・・・・・

「・・・・・・美波ちゃん、カメラは?」
「・・・・・・携帯でいいかしら?土屋に借りればよかったわね」

・・・・・・あれ?これ、死んでも起きないとヤバい気がしてきたぞ?

「・・・・・・このまま撮ってもいいけど、何か足りない気がするわね?」
「・・・・・・あ、そう言えばさっき木下さんにセーラー服と『4分の1エロチャイナ』を「吉井明久!只今起きます!?」借りて?」

いかん!これは放置しておくと確実にヤラれる!?と言うか誰?何?どうしたの!?

「って姫路さんと美波!?どうしt「「静かにしてください（しな

さい）！」」ムグッ！？」

慌てた姫路さんと美波が僕の顔に胸を押し付けてくる。え、えっ！？どうして姫路さんと美波がここにいるの！？

・・・・・ってムネ？あぁ、姫路さんの柔らかいね。美波のだって見た目よりずっと柔らかくて、やっぱり女の子なんｄ・・・・・・・・・・胸！？

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：」

「あ、明久君！？落ち着いてください！」

「ア、アキ！？ゴメン放すから、まずは深呼吸よ！」

そう言って二人は離してくれたけど、何だろう凄く残念なようなホッとしたような、とても複雑な気分

・・・・・まあ、おかげで落ち着くことは出来たけど。

「だ、大丈夫ですか？」

「アキ？落ち着いた？」

「う、うん。何とかね？・・・・・・で？二人はどうしてここに？」

と言うか、ここ僕たちの部屋だよね？どうして姫路さんと美波が？こんな時間に女の子が男子部屋に来るなんてよっぽどのことだ。・・・・・ひょっとしてまた何かトラブルがあったのだろうか！？それの相談に来たとか！？

「ふ、二人とも！今すぐ先生の所へ行こう！きっと何とかしてくれるよ！」
「え？どうしてですか？寧ろ先生に見つかる方が大変だと思いますよ？」
「先生のとこに行ったらウチらの夜這いがバレるじゃない、ダメよ」
・・・・・何かおかしい単語が聞こえた気がするのは僕の思い過ごしだろうか？こんなこと二人が一番言いそうにないよね。・・・・・
・・最近ちょっと言動がおかしいけど。
やっぱり夢を見ているんだろうか？冷静に周りの状況を確かめてみよう。

今、僕の周囲には・・・・・・

・木下さんに（かの有名な『４分の１エロチャイナ』に）着替えさせられかけている造＆秀吉（エロ可愛い？）
・工藤さんの膝枕を堪能しているムッツリーニ（異端者は審問会に連れて行こう）
・浴衣姿で雄二の布団に侵入しようとしている霧島さん（雄二コロス）

「・・・・・・・・・・・・」

あれ？何もかもが間違っている気がする。頭を振ってもう一度確認しよう。

・木下さんにセーラー服を着せられた秀吉と今まさに『４分の１エロチャイナ』に着替えさせられようとしている造（いかん、鼻血が）

・工藤さんの膝枕で静かに天国へ逝きかけているムッツリーニ（裁きを与えるまでもなかったか）
・慌てふためく雄二をよそに浴衣の帯を緩めようとする霧島さん（雄二！お前は僕の敵だっ！）

「・・・・・・何この混沌（カオス）？ってかホントに何でここにみんながいるの！？」

「「だから夜這いって言っているじゃないですか（じゃない）」」

「ナチュラルに返された！？二人とも、夜這いが当然みたいに言わないで！？」

本当に夜這いなの！？一体何を考えているんだキミたちは！？

「あの、ですね・・・・・・実は」
「アキにね・・・・・・お礼がしたかったの」

へ？お礼って？急に凄く真剣な顔になった二人がそう言ってくる。
どうしたんだ一体？

「ある人に聞いたんですよ、明久君たちが覗きから私たちを守ってくれたって」
「それもウチらが不安にならないように黙っていてくれたのよね？」

・・・・・・え？えぇ！？二人とも知ってたの？誰だ？このことをバラしたのは！？

「い、いや・・・・・・別に大したことじゃないし」

「「大したことありますよ（あるわよ）！」」

おおぅ、二人の剣幕に怯んでしまう。まあ考えてみれば、覗きが出ていて不安にならない訳ないもんね。二人ともよっぽど不安だったんだろう。

「ま、二人が何ともなくてよかったよ。僕はそれだけで十分嬉しいし」

「「・・・・・・明久君（アキ）／／／／／／」」

二人には折角の合宿を嫌な気持ちで過ごして欲しくないし。一応頑張った甲斐はあったかな？

「そ、それでですね明久君・・・・・・」

「お、お礼なんだけどねアキ・・・・・・」

「いや、だからもう十分に「「えいっ！（ぎゅ～）」」・・・・・・！？ひ、姫路さん！み、美波！？」

二人とも何故か僕の腰に抱きついてきた。そう言えば清涼祭の時もこんなことあったような・・・・・・？こ、これはマズイ。主に僕の心拍数と理性が。

「あ、あのさ二人とも。僕が危険にならないうちに離れるんだ。このままじゃ僕が暴走する！」

頑張れ僕の理性。静まれ下のパトス。お前なら耐えられるはずだ、吉井明久！

「・・・・・本当に明久君は私たちの王子様ですよ」

「・・・・・いつもウチらのこと、守ってくれてありがと」

二人がそろってそんなことを言ってくる。ヤバい、本当にこれは何か吹っ飛んでしまいそうだ。

「ほ、ホントにヤバいんだって！二人ともいい加減に・・・・・」

「「こ、これはお礼ですからね（だからね）！？」」

そう言って二人は僕の両頬に柔らかな何かを押しつけた。あれ？・・・・・これって。

それが何かわかった瞬間に、僕の意識はブラックアウトした。

『・・・・・え？あ、ああっ！明久君！？美波ちゃん、明久君が！？』

『ア、アキ！しっかりして！目を覚まして！？瑞希！こういう時ってどうするんだっけ！？』

『じ、人工呼吸でしょうか！？え、えっとそれとも心臓マッサージ！？』

『い、いきなりそれなの!?どうしよう!?』
『私、急には出来ませんよ!?』

何か意識が跳ぶ前に二人が慌てていたけど、それが何なのかよくわからなかった。

☆

「・・・・・・雄二。夜何があったの?随分いい思いしたみたいじゃない?」
「・・・・・・お前が言うな、明久。顔がまだ赤いじゃねえか、知恵熱か?」
「・・・・・・・・・・・・・・二人とも真っ赤」

「「お前はまず鼻血を止めてから言えっ!」」

今は帰りのバスの中。雄二もムッツリーニも色々あったみたいだけど、頑なに話そうとしない。まあ、僕も人には言えないことがあったんだけど・・・・・・

「・・・・・・造は?それに秀吉は?」
「・・・・・・・・・・・・多分、先生たちの行動を予測して別ルートで帰宅中」
「ちっ!逃げやがったな?俺らに何があったのか聞かれないようにする為でもあるんだろうな」

造も秀吉も朝はいつもより焦っていたみたいで、道連れにしようと思ったらバスにいなかった。ズルイ！どうせなら僕も一緒に逃げたかったよ！なんせ今現在の状況は・・・・・・

僕は姫路さん&美波に、雄二は霧島さんに、ムッツリーニは工藤さんに抱きつかれてバスに中にいる。女子のみんなは疲れてか全員ぐっすり眠っている。みんな気持ちよさそうに眠っているね。あえて霧島さんと工藤さんが何でここにいるかは聞かないよ？造を追って先生×４＋木下さんまでここにいるし。

ここまで言えばわかると思うけど、ＦＦＦ団のみんなが虎視眈々と僕らを亡き者にしようとしている。
万が一僕らが隙を見せようものなら、一瞬でこのバスの中は殺戮場となるだろう。

今は女子たちが寝ているから行動（アクション）は起こさないようだけど、バスから降りればすぐに審問会が開かれること保証付き☆　みんなの視線がとっても熱い。こんな風に・・・・・・

『吉井コロス・・・・・本気でコロス、もう容赦せん』
『坂本クタバレ・・・・・いやマジで、って言うか俺が殺る』
『ムッツリーニの裏切り者・・・・・お前に明日の朝日は拝ませんぞ』

『『『異端者共に死の裁きを！男は愛を捨て、哀に生きるものなり！』』』

ネ♪異端審問会の熱烈な、まるで突き刺すような視線を受けながら僕たちはこれからのことを思った。

「「「ま、とりあえず学園に戻ってからは・・・・・・」」」

ＦＦＦ団から逃げ出すこと。夜あったことをＦＦＦ団にバレないようにすること。そして造&秀吉に何があったかを聞き出すこと・・・・・かな?二人だけ逃げようたってそうはいかないからね?

強化合宿の日誌：その？＋短編：その夜の明久（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？またさかさまテルテルさんのアレをお借りしました。ありがとうございますです♪

キャラがもう全然違うって？……ＨＡＨＡＨＡすんませんでしたっ！作者自身が分かってません。知りません。

えっと、次回から日常編に入ると思います。と言っても、基本造が話に絡まないといけないので３．５巻の明久の観察処分者になる話とかはできないと思います。一番早くてラブレター騒動編かな？

ちょっと皆さんにお聞きしたいんですが、この小説の長さってどんなものなんでしょう？最近文章量が安定してなくて……基本的に目安は決めてますが、長すぎたり、短すぎたりしてないでしょうか？もし要望があれば可能な限り対応できるよう頑張ってみますが……

とりあえず、次回は作者のペースでやってみますね。すみません、変なこと聞いてしまい。また次回よろしくです！

番外編：二通の恋文は～Fクラスの起爆剤～前編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。今回から番外編ですね。

意外と番外編書きづらいです（汗）まあ、ボチボチ頑張りますが。

今回のラブレター騒動は前編・後編で書きたいと思います。まとめて書こうとしたら、いつもより文章量が2倍近くになったので……

その分ちょっと短いかもしれませんが、ご勘弁を。ではよろしくお願いします！

番外編：二通の恋文は～Ｆクラスの起爆剤～前編

新学期初日から二学年全体を巻き込んだ２－Ｆの試召戦争からしばらくして、あれだけの大騒ぎがまるで嘘のように穏やかな日々が過ぎて行きます。

ですがまあ、そこはご存じ２－Ｆクラス。そんな日常の中だってちょっとしたトラブルはどこにでも潜んでいます。これはそんないつものＦクラスの出来事です。

☆

「う～ん・・・・・あり得ない登校時間だ」
「そうですか？あ～、確かにアキさんいつもギリギリでしたね」
「ま、いつもはね。早起きは三文の徳って言うし、何かイイコトがあるといいな～」

いつものように学園へ向かっていると、珍しくアキさんに会ったので二人で話をしながら学園へ向かいます。この時間はあまり通学路は混みませんので、一種の散歩道みたいで気持ちいいんですよね。空は澄みわたりとても気分のいい清々しい朝です。

「う～ん、でもこんなに天気がいいなら洗濯でも先にしとくべきだったかな～」
「ああ、アキさんは一人暮らしをなさっているんでしたね。素晴ら

しいことです」
「そう?そこまで大したものでもないけどね?・・・・・ん?」
「どうしましたか?・・・・・ああ、西村せんせですね♪挨拶しときましょう」
「そだね、アレでも一応僕らの担任だし」

校門の近くに見知った後ろ姿が見えました。Aクラス戦以来自分たちの担任になってくれたんですよね♪てかアキさん、一応って?自分は正直先生が担任で、ホントに助かりますよ

・・・・・だってあのままでしたら、いつもの先生×3がいつまた担任になる!と言い出しかねませんでしたからね。あぅ、考えてだけでも恐ろしいです・・・・・

「先生、おはようございまーす」
「せんせ、おはようございますです♪」

そういうわけで、二人で後ろから元気に声を掛けます。西村先生は爽やかな笑顔で振り向いて、

「おう、おはよう!部活の朝練か?感心だ・・・・・」

自分たち二人を見たとたん、動きが止まりました。

「・・・・・すまん。間違えた」
「えっと?どうして謝るんですか、せんせ?」
「人違いですか?　いやそんな、別に謝る必要なんて」

「月野。お前はまた俺の手伝いをすると言って、仕事を取り上げる気だろう?そして吉井。こんな早朝に来て何を企んでいる」

おっと?その対応は予想してませんでしたよ?そんなに怪しまなくてもいいのでは無いでしょうか。

いや、本当に何もないんですがね?てか自分たちはどんな風に思われているのでしょうか?

「鉄人!その態度はあんまりです!と言うか、僕と造の態度があからさまに真逆すぎじゃありませんか!?」

「当たり前だろう?お前は普段の行いが悪すぎる」

「いやぁ~自分も大分悪い問題児ですがね?」

「お前の悪いの基準が俺にはわからんがな・・・・・・」

そうですかね?試召戦争時に窓ガラスを破壊したりしてますし、何か次は校内を爆破しそうな予感がするので(どんな予感だ!?by西村先生)十分悪い子だと思いますよ?

「・・・・・まあいい、二人とも頼みがある。ちょうど≪観察処分者≫が揃っているしな」

「げ。てことはまた力仕事ですか?」

「了解です♪それではアキさん、ちゃっちゃか終わらせましょうか?」

「うぅ、造のその純真な心が羨ましいよ・・・・・・わかったよ、僕もやるよ」

「・・・・・ふむ。吉井も月野といれば多少はマシになるのか?」

そんな訳で、とりあえずお手伝いスタートです♪何でも古くなったサッカーゴールの取り換えだそうです。てか、自分たちが来なかったら西村先生はお一人でこれをなさるつもりだったのでしょうか？

・・・・・十分にありそうですね、先生冗談抜きで無茶が通る身体ですから。ホント素直に尊敬しますよ。

☆

二人で先生の手伝いを終えて、そろそろＨＲの時間になったのでとりあえず教室へ向かいます。意外と時間を取ってしまいましたね。早く行かねば遅刻ですし急ぎましょう。早めに来たのに遅刻なんて嫌ですし。

「さてアキさん、急いで行きまｓ「なっ、なんじゃこりゃぁぁっ！？」・・・・・アキさん？」

あら？突然どうしたんでしょうか？靴箱で何やらアキさんが、まるでラブレターらしき手紙を二通持って叫んでいます。やれやれまた何かトラブルでしょうか？

「あの、どうかしました？アキさん？」

「いつも以上に変な声を上げて、一体何があった明久」

おっと？いつの間にかゆーさんが来てますね。あれ？何処から現れ

ましたか、ゆーさん?ゆーさんも遅刻でしょうか?珍しいですね。

「ゆーさん、おはようです♪」
「おう。んで?明久は何を慌てているんだ?」
「さあ?何やら二通の手が「お、おはよう雄二!今日もいい朝だね!でも雄二も造も早く行かないと遅刻になっちゃうよ!?」・・・・・?」

あらら?アキさんえらい慌てようですね?隠したいものなら敢えて言いませんが?と言いますか、そんなにあからさまに慌てたら、隠すものも隠せない気もしますが?

「・・・・・ふむ、そうだな。校内にいて遅刻にされるもの癪だ。明久・造、行くぞ」
「あ、はいです。ではでは行きますかね~♪」

どうやらゆーさんも何かを察して敢えて聞かないでおいたようですね。なるほど?ゆーさんもアキさんを気遣ったんでしょうね。ゆーさんとアキさんは何だかんだで良い相棒のような関係でしょうか。

そう、ここまでは自分もそんなことを考えていましたが・・・・・・

☆

「工藤」「はい」「久保」「はい」

「近藤」「はい」「斎藤」「はい」

「坂本」「・・・・・・・・・・・・明久がラブレターを貰ったようだ。」

『『『殺せえぇぇえええええええええええええええっ！！』』』

出席を取っている最中に、ゆーさんが爆弾を投下しました。それもクラス全体に響くような爆弾です。たった一言で起爆する魔法の言葉をありがとうですゆーさん。てか、ゆーさん？貴方アキさんのこと気遣ってたんじゃないのでしょうか？

・・・・・それと皆さんもそれくらいで人を殺めようとしないでください？と言いますか、小声でゆーさんが言ったにもかかわらず、どうして皆さんそれを聞きとれるのか非常に気になりますね。

「ゆ、雄二！いきなりなんてこと言い出すのさ！」

『どういう事だ！吉井がそんな物を貰うなんて！』

『それならオレたちだって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席近くを探してみろ！』

『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『・・・・・出てきたっ！未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

教室内が凄いことになりました。アキさんはいいとばっちりですね。てか最後の方は本末転倒ですよ?ひょっとしてパンがお好きなんですか?

それにしても今はHR中なハズですが、大丈夫なんですか?西村先生も呆れていますし。

「お前らっ!静かにせんかっ!・・・・・今何の時間だと思っている!?」

『『『・・・・・・・・・・・・・・・』』』

HRの時間ですよねー。シーンと、教室に静寂が戻りました。これで少しは皆さんも冷静になるで「・・・・・ちなみに二通も貰っていたぞ?」・・・・・しょうか?

ガタッ!ガタガタッ!!

『『『コロスッ!生かして帰さんッ!!』』』

「ゆ、雄二いいいいいいいい!?覚えておけよっ!?」
「すまん、もう忘れた」
「早いよ!?ちくしょおおおおおおおおお!?」

『・・・・・・・・・・・・・妬ましい、羨ましい、憎らしい。裏切り者には、死を』
『『『吉井をひっ捕らえろ!捕まえて火炙りじゃあああああああああ!!』』』

あらら？こーさんを筆頭に、クラスの大半が教室から出て行っちゃいましたね。ですが、ＨＲ中ですよ？これどう収拾つけるのでしょうか？そしてこのクラスの担任の教師である西村先生は・・・・・・

「・・・・・・アイツら、今日の放課後は全員補習だな」

「・・・・・・せんせ、お疲れ様です」

とても疲れているような、そんな大人の背中が見えた気がしました。

ちなみに教室に残ったメンバーは・・・・・・

姫路さん・島田さん・ヒデさん・自分・そしてゆーさん・・・・・・・・ん？

「あれ？煽ったゆーさんがどうして残っているんですか？」

「む？そう言われてみればそうじゃの？雄二よ、いつもなら真っ先に明久を殺りに行くじゃろ？」

「ん？確かにいつもなら確実に追い詰めて殺るとこだが・・・・・・」

こんな会話をしている時点で、何かおかしい気がするのは自分の気のせいでしょうか？この感覚がＦクラスにいるだけで麻痺してしまう恐れがあると、常々思っていますが。

「明久が追い込まれる所をじっくりと見るのは気分がいいからな！」

「「鬼ですね（じゃな）・・・・・・・」」

満面の笑みを浮かべて、ゆーさんはそう宣言します。アキさんとゆーさんの関係を表す言葉があればどなたか教えてください、参考にできませんがね？

『み、美波ちゃん!?・・・・・・美波ちゃんもひょっとして？』

『み、瑞希も!?・・・・・・ホントどうしよう、どうしてこんなことに？』

ん？姫路さんたちが何か二人で相談しているようですが、顔色悪くないですか？大丈夫でしょうか？

番外編：二通の恋文は～Fクラスの起爆剤～前編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

とりあえず前編でした。う～ん、何か物足りないですね。今回は特にほぼ原作のままですから……。てかラブレター騒動自体、造と絡め辛くて困ります（汗）

次回の後編が終われば、皆さん大好き（？）な如月グランドパーク編ですが、作者の思い入れが激しいせいか、結構長いうえに原作崩壊しすぎています。気を付けてくださいね（汗）多分、皆さんが思っているような入り方ではないかと……

長くなってしまいすみません。とりあえず次回の後編もよろしくです！

番外編：二通の恋文は～Fクラスの起爆剤～後編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。今回は前回の後編ですね。

先に言っておくと、造は空気化する恐れがあります。まあ、いつもの造ですね。読んでいただければわかると思います。

さて、とっとと行きましょう！後編スタートです。

番外編：二通の恋文は～Ｆクラスの起爆剤～後編

とりあえずこのままじゃ授業どころではないので、残ったメンバーで皆さんを呼び戻しに行くことにしました。と言いますか、それ以前に暴走した皆さんを止めることなんて出来ますかね？アキさんも無事でしょうか？

そのことをゆーさんに聞くと・・・・・・

「ん？ああ、大丈夫だろう。アイツのことだ、さっき追いかけて行った連中如きじゃ止められん。ムッツリーニが一番怖いがアイツなら何とかするだろうよ」

とのこと。・・・・・凄いです。一見バカにしているように見えてその実、結構アキさんのことを信頼しているんですか。ある意味真似できないことですよね？やっぱりそこは親友なんでしょうね。

「じゃが、それなら明久はどこにいるのじゃ？」

「それもあの下心を持った単純バカのことだ。どうせ『告白の下見』とか考えて屋上にでも行ってることだろう」

・・・・・すみません、親友は訂正します。良くて悪友ってヤツですかね。信頼しているように見えましたが、結局はバカにするんですもの。本当にどんな関係なんですか、お二人は？

「まあ、とりあえずはゆーさんの言った通りに屋上にでも行きますか？二人もそれで良いですか？」
「え！？は、はい！大丈夫ですっ！必ず奪い返しますっ！」
「そ、そうね！奪い返せばいいのよねっ！？」
「・・・・・二人とも大丈夫ですか？色々と」

姫路さんと島田さんが物騒なことを言ってますね。ちょっぴり不安になって来ましたよ・・・・・？

☆

「・・・・・本当にいましたね、アキさん」
「・・・・・そうじゃな。何の捻りもないとはの」

ゆーさんの宣言通り、アキさん屋上に来ましたね。付き合いが長いからなのか、ゆーさんが一枚上手だからなんでしょうか？現在ゆーさんとアキさんが睨みあい、緊迫した空気が流れます。

「雄二、流石だね？僕の考えを読んでくるとは」
「お前の考えそうなことくらい誰でもわかる。ま、ラブレターを読みたいなら普通トイレに行けば誰にも邪魔されずに読めると思うんだがな？」
「・・・・・・・・雄二、僕ちょっとお腹が痛いからトイレに行って来るね♪」

アキさん気づいてなかったようですね？今、あっ！って顔してましたし。

「と言いますか、自分たちはただ単に皆さんを授業に呼び戻しに来ただけなんですが・・・・・」

「いつの間にやらラブレター争奪戦になっておるようじゃの？姫路たちもあの手紙が気になっておるようじゃし」

確かに姫路さんたちもそわそわしています。そこまで気になるものなんでしょうか？と言いますか朝からやけに慌てているお二人さん。どしたんですかね？

「雄二、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！そんなことしなくても、雄二にとってのメリットは何もないはずなのに！」

アキさんがゆーさんに問いかけます。うーん、確かに気になりますね。そこまでするゆーさんの行動理念って何でしょうか？

「そうだな。確かにお前の言う通り、こんな行動は俺にとって何のメリットも無い。いや、それ以前に俺には彼女が欲しいなんて気が全くない」

「だ、だったら、どうして・・・・・？」

ゆーさんが凄く真剣に、そして真面目そうな顔で迷いなく宣言します。

「そういう問題じゃないんだよ、明久。オレはただ、純粋に・・・・・お前の幸せがムカつくんだよ」
「アンタは最低の友達だ！」

アキさんの、最低の友達。むしろコレ友達と言ったアキさんが凄いですね。ゆーさん、超理論どうもありがとうございます。

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねぇ。本気でかかってこい」

そう言ってゆーさんは上着を脱ぎ、ネクタイを外しました。戦闘態勢に入り、また緊迫した空気が流れます。・・・・・ですが待ってください。

「だから！どうして皆さんを呼び戻しに来ただけですのにこんなことに！？」
「造よ、もうワシら教室に戻るかの？こやつらにはどう言っても無駄そうじゃ」

何故かアウェーな空気が漂う自分とヒデさん。常識人は時としてその立場ゆえに扱いが酷くなりますね。自分のどこが常識人って？はい、そこ！うるさいですよ？

「姫路。上着を持っていてくれるか？」
「あ、はい」

そう言って姫路さんに上着を渡したゆーさん。関係ないですが、ゆ

ーさん随分鍛えられてますね？何と言いますか、引き締まってて喧嘩慣れしている感じがします。

「やる気だね？雄二。いいさ、僕だってやってやる！逃げるわけにはいかないんだ！・・・・・美波、僕の上着持っていてくれる？」

「え？あ、うん」

アキさんもゆーさんと同じように上着を島田さんに渡します。こちらも戦闘態勢に入りましたね。

・・・・・・・・・・・ん？『上着』を島田さんに渡した？

「さあ来いっ！雄二！」

「・・・・・明久。やっぱお前バカだろう」

「へ？」

呆れるゆーさんの視線の先は、アキさんが島田さんに渡した上着があります。そう、その上着の中には・・・・・・

「え、えっと？見ちゃっていいのかしら。手紙がポケットの中に入っているんだけど？」

「そ、そうですね、二通ともちゃんとあります」

そう、アキさんが大事に大事に保管していた手紙が二通ともしっか

りとありました。アキさん、貴方って人は本当に・・・・・・

「だ、駄目だよ！戦わないでそれを見るのは反則だよ！」
「お前がバカなだけだろうが！やれ！島田、姫路！その手紙を始末するんだ！」

ゆーさんがアキさんを羽交い絞めにします。何の漫才を見ているのでしょうかね？

「こ、この手紙って・・・・・・」
「や、やっぱりこれ・・・・・・」

ん？姫路さんも島田さんも、手紙を見て戸惑いつつもどこかホッとしたような顔をしていますね？

「姫路さん！美波！」

「「え？あ、はい（うん）！なんですか（何かしら）吉井君（アキ）？」」

「僕には分かってるよ。優しい姫路さんと美波は手紙に込められた人の気持ちを踏みにじる事なんてできないってこと。だから、おとなしく「手紙を細切れにするんだ」って違う！そうじゃない！雄二、卑怯だぞ！そうやって人の台詞みたいに繋ぐのは反則だ！」

あらら、またもやおかしなことになってきましたね。姫路さんも島田さんもそんなことするわけが・・・・・・

「「はいっ（ええ）！わかりました（わかったわ）！！」」

わかっちゃうんですか？あらー、二人とも見事に破っちゃいましたね。アレじゃもう読めませんよ？

「ぎゃあああああああああああ！？二人ともどうしてこんなことを！？もう読めないよね？僕の幸せな未来は読むこと出来ないよね！？」

「まさか二人が本当に破るとは思わなかった。すまん、明久。・・・・・せめてもの詫びだ。ホレ」

そう言ってゆーさんは散らばった手紙を集めてきました。それどうするんでしょうか？

「ありがとう、雄二。最後の可能性に賭けてこの紙くずをつなぎ合わせ」

「・・・・・未練を絶ってやる」

「ってなに燃やしてくれてんの！？バカか！雄二のバカぁ！もうこれ１００パー読めないじゃない！？返せ！僕の幸せな未来を返せ！？」

「明久、お前は知らなかっただろうが」

「なに！？なんでもいいから水を持ってきてよ！」

「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」

「知ってるよ！バカ！ちくしょー！」

アキさんによる必死の消火活動空しく、ものの見事に灰になってし

まった手紙。あやや、ゆーさん容赦ないですね？

「あ、あの？坂本君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」
「そうよね、アンタも気になってたんじゃないの？」

灰になった手紙に安心した二人が、ゆーさんに問いかけます。二人とも今日はホント変ですね？

「全然興味がないな。俺は明久の幸せを妨害出来たらそれでいい。もっとも・・・・・・」
「は、はい。なんですか？」
「な、なんでウチらを見てニヤニヤしてんのよ？」
「二通の手紙が誰たちからの手紙だか、目星は付いたがな？他人の書いた手紙を破り捨てたら問題あるよな、二人とも？」

「「っ～～～～～～！？／／／／／／／」」

・・・・・ああ、なるほどです。それで朝から二人とも変だったわけですか。大方何処かに落としてしまった手紙をゆーさんが靴箱に置いたのでしょう。それなら朝ゆーさんが靴箱にいたことも、おおよその見当がついていたことも納得できます。

「雄二！その話もっと詳しく」
「だ、駄目です！吉井君！」
「そうよ、アキ！絶対に聞いちゃダメ！」
「そ、そんな！？僕の最後の幸せなのかもしれないのに！？」

アキさんたちがまた、もめにもめていますね。やれやれ、何しに来たんでしょう自分たちは？

「・・・・・造よ？今回のワシら、本当に空気じゃったな」
「・・・・・・ヒデさん。それ言わないでください」
「・・・・・・これはどう収めるべきかのう？」
「・・・・・・心配しなくていいと思いますよ？だってそろそろ」

『お前らっ！いい加減に戻ってこんかっ！！一体いつまで待たせる気だ！？』

「・・・・・なるほどの？西村先生がおったの」
「・・・・・いつもお世話かけます、せんせ」

☆

そんでもってその翌日～♪

「あ、おはようですヒデさん」
「おお、おはようじゃ造」

いつも通り学園に着くとヒデさんと靴箱でバッタリ会いました。

「昨日は大変でしたねー」
「うむ。もう恋文はこりごりじゃな・・・・・・ん？」
「あり？どうかしまし・・・・・・あれ？」

ガチャ　ドサドサッ！×２

「「・・・・・・・・・・・・え？」」

自分とヒデさんが同時に靴箱を開けると、中から何かが大量に出てきました。
えっと？これ全部が手紙、ですか？どれどれ・・・・・・

『造ちゃあああああああああん！俺に愛でさせてくれえええええええええええ！』
『秀吉いいいいいいいいいい！俺と結婚を前提に付き合ってくれえええええええええ！』

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

ガチャ　バタン！×２

「何も見てませんよねーヒデさん♪」
「そうじゃの。目の錯覚じゃな造♪」

「「あははははは・・・・・・はははは・・・・・・・・・はぁ・・・ｏｒｚ」」

この後、この手紙（ラブレター？）を誰が自分たちに出したかで、またFクラス間で争いになったのは別のお話です。まあ差出人は、アキさん・こーさん・ゆーさん以外のクラスの男子全員でしたがね・・・・・・orz

改めて言いましょう。恋文は本当に本当に本当にっ・・・・・・こりごりですっ！

番外編：二通の恋文は～Fクラスの起爆剤～後編（後書き）

読んでいただきありがとうございました。いかがだったでしょうか？

……いや、うん。原作と書き換えたとこもあったし、削ったとこもあったけど基本何も変わっていませんね（涙）どうしよう……いいのかな？

えっと、今回のことはちょっと置いておくとして、次回からみんな大好き如月グランドパーク編です！好きじゃない？……ゴメンなさい。とりあえず、下書きで5話分くらい消費することが判明しました（汗）多すぎないか心配です……

土日でできる限り投稿すると思いますが、予定がわかりませんのですみません、迷惑をかけます。

次回もどうかよろしくお願いします！

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（前書き）

どうも糖分摂取魔です！

今回から如月ハイランド編です！皆さんが思うような話にならないかも（汗）主人公は基本巻き込まれやすい体質ですからね～

とにかく行きます！どうぞです♪

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？

雄二Ｓｉｄｅ

ドドドドドドドドドドドドドド！　ガチャッ！

「おふくろ！　どういうことだっ！？」

「あら雄二。おはよう」

俺がキッチンに駆け込むと、おふくろは流しで洗い物をしながらにこやかに朝の挨拶をしてきた。それはいい、それはいいんだ・・・・・・

「おはようじゃねえっ！　どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちまっただろうが！」

そう、朝起きると俺のベット脇に翔子がいた。もちろん俺はこいつと何か約束しているわけでもなく、ましてや俺の部屋に入れた覚えもない。寝ぼけた頭をフルに回転させ、こいつが不法侵入だとわかり警察に連絡してしまった、っと言うわけだ。

ちなみに『幼なじみが無断で俺を起こしに部屋に入ってきた』と告げた時の相手の反応は俺の心に深い傷を与えてくれた。何一つ嘘は言った覚えはないのになっ！？

「・・・・・え？　翔子ちゃんが？」

ん？このおふくろの態度からして、翔子の単独行動か？マズった、いきなり朝から怒鳴るのは少々浅慮だったかもしれない。

「ああいや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に・・・・・・」

「もう、翔子ちゃんってば奥手ねぇ。折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんてもったいな・・・・・あら雄二。どうしてお母さんの頭を鷲掴みにするのかしら？」

「やっぱりアンタの所為か・・・・・・！」

この母親に一度常識と言うものをきっちり教えてやらねばならないようだ。

「・・・・・雄二。お義母さんを虐めちゃダメ」

「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないといけないんだ」

遅れてやってきた翔子が俺を止めに入る。こいつの『お母さん』の発音が普通と違う気がするが、それをツッコんだら負けだろう。

「・・・・・言う事を聞かないと、この本をお義母さんと一緒に読む」

そう言って、翔子が取り出したるは一冊のＡ４の冊子。うん？あれ

は・・・・・・まさか!?

「ま、待てっ!　それは女子供が読むものじゃない!　早くこっちに寄越すんだ!」
「あら翔子ちゃん。それは雄二が世界史の資料集の表紙をかぶせて机の三番目の引き出しの二重底の下に隠している、秘密の本じゃない?」

なん・・・だと・・・!?今ほど明久の一人暮らしが羨ましいと思ったことはない。

「わ、わかった。おふくろは解放しよう」
「・・・・・・そう。それなら、この本は燃やすだけで許してあげる」
「すまん翔子、どう考えてもそれは許された時の対応じゃない」
「・・・・・じゃあ、燃やしても許さない」
「燃やさないと言う選択肢はないのか!?」
「あらあら。相変わらず二人は仲良しねぇ」

いかんな。俺と翔子は小学校からの付き合いだが、考えについていけなくなった。
おふくろはおふくろでマイペースに対応していやがるし。

「やれやれ・・・・・・。んで、どうして翔子が来てるんだ?」
「・・・・・・約束。これ」

約束?んなことしたか俺?そう言って翔子が俺に差し出したのは・・

・・・・・

「あら、如月ハイランドのプレオープンチケット？しかもプレミアムって書いてあるから特別なチケットなんじゃないの？　凄いわ翔子ちゃん、よくこんなもの手に入ったわね～」

「・・・・・・優しい人がくれた」

よし、まずやることができた。携帯電話の番号通知をＯＦＦにしゲ吉ス井明久野郎の番号を呼び出す。数秒の呼び出し音の後に、怨敵の軽快な声が聞こえた。

『はいもしもし？どちらさまですか？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・キサマヲコロス」

『え！？なになに！？本当に誰！？メチャクチャ怖・・・・・・（ブツッ）』

ふぅ、少しはこれで気分が晴れたな。さてコレはどうするべきか・・・・・

「・・・・・雄二、行こう？」

俺の手を翔子がそっと握る。やれやれ、余程行きたいのだろう。もちろん俺は・・・・・・

「絶対に嫌だ」

残念だが、これが普通のテーマパークなら考えてもいいがあそこは別だ。なんせ明久や造くらいの一部の人間しか知らないが、『如月グループの力を以て結婚を強要する』らしいからな。

もしコイツがそれを知れば、どんな汚い手を使ってでもそれに参加するだろう。

「あら。どうしてそんなに嫌がるの？翔子ちゃんと一緒に行ってきたらいいじゃない」

「おふくろ煽るな。こっちにも色々事情があるんだ」

ったく、ここはやはりハッキリと言わんとわからんらしいな。『翔子、俺のことは諦めてくれ』と言ってやろう。

「翔子っ！」

「・・・・・・・イヤ」

「・・・・・・俺のこと・・・・・・って早いわ！名前だけしか言ってないだろ！？俺は行かんぞ！絶対に行かん！」

「・・・・・・そう。どうしても行かないなら選んで？」

おお！翔子も最近は何かと俺に選択肢を与えてくれる。造の影響かわからんが、助かった！

そう言って翔子が取り出したのは、結婚式場案内のパンフレット。・・・・・すまん、やはりこいつの考えはわけがわからない。そもそも何を選べと？

「・・・・・約束を破れば即挙式って誓ってくれた」
「お母さんはハワイとかの海外がいいな～」
「誓約の内容が違っている上に、そもそもチケットの件も俺は知らんっ！そしてどうしておふくろはそんなにマイペースなんだ！？」

駄目だ・・・・・この二人相手じゃ歯が立たん。会話が成立しないうえ、翔子に完全に外堀を埋められている。何かないか？誰か助けてくれそうな奴は・・・・・・・・

そ、そうだ！造だ！アイツなら何とか出来るかもしれない！すぐに電話を・・・・・・！

『おかけになった電話番号は、電波の届かない場所にあるか・・・・・』
「造っ！後生だ！頼むから携帯の使いかたを早く覚えてくれ！？」

アイツが翔子並みに機械オンチなのを忘れていた・・・・・・もう詰んだのかっ！？

ピンポーン♪ピーンポーン♪

「あらあら？こんな朝早くにお客様かしら？」
「おふくろっ！俺が出るから大丈夫だぞ！？」

どこの誰だか知らんが、いいタイミングだ！あわよくばついでに脱出できる！

「・・・・・雄二、逃げたらどうなるかわかってる？」
「はっはっは。ナンノコトダ翔子？」
・・・・・上手く逃げ出せるといいがな。まあ、状況打破になるなら何でもいい！誰だか知らんが待っていろ。今開けるぞ！
そうして玄関の扉をあけると・・・・・・
「おーどもどもです♪朝早くにすみません。ゆーさん、遊びに来ましたよ～」
何故か救いの神・造が立っていた。いつもの飄々とした声がずっと頼りに聞こえる。まったくお前は空気を読みすぎだぜ！
☆
造Ｓｉｄｅ
いやはや。ゆーさんが家にいてくれて助かりました♪なんせいつも通り相変わらず暇だったので皆さんの家に遊びに行ったはいいものの、いつものメンバー全員すでに家を出たみたいですもん。どうしたんでしょうかね？
「つ、造！よく来た！まあ上がれや」
「？はいです。おじゃまします」

ゆーさんが何やら慌ててますね。都合が悪かったのでしょうか？

「・・・・・月野？どうしてここに？」

「あや？霧島さんじゃないですか？霧島さんこそどうして？」

「いいからっ！まずはゆっくり茶でも飲もう！菓子も出すから待ってな！」

「あっ！ちょっと、ゆーさん！？」

家に入れてもらえたのはいいのですが、一体どうしたんでしょう？

自分と霧島さんを残してさっさと行ってしまいました。

「「・・・・・・・・・・・・・？」」

・・・・・とりあえず状況確認をしてみますか？

「えっと、霧島さんはどうしてゆーさんの家に？あ、ちなみに自分は暇だから来ただけで特に理由はないですよ♪」

「・・・・・・デート。雄二と行く予定だった」

そう言って霧島さんが見せたのは、如月グランドパークのペアチケットでした。

・・・・ＯＫ。造、把握しました。ゆーさん、逃げられそうにないから自分に助けを求めているって感じですかね？もともと召喚大会の優勝商品ですが、確かアキさんが霧島さんとの取引の材料としてあげたんでしたね。

「えっと、今日それでゆーさんを誘いに来たんですね？」
「・・・・・・（コクン）でも雄二行きたくないみたい。だから結婚しに行く」
「ごめんなさい、状況が一気に読めなくなりました」
デートがダメなら結婚ってどんな理論ですか・・・・・・？

「造、あまりそいつの妄言は聞かんでいいぞ？と言うか聞くな」
ゆーさんがお茶菓子を持って戻ってきました。おいしそうですね♪・・・・・・ん？ゆーさんに続いて優しげな女性がやってきます。どなたでしょうか、そちらの女性は？

「ゆーさん？そちらの方は？」
「ああ、赤の他人「・・・・・・雄二のお母さんで、私のお義母さん」って違う！俺のおふくろだが、お前は普通に赤の他人だろうが！？」

・・・・・・あ～、とりあえずゆーさんのお母さんなんですね？結構お若いですね～

「えっと、初めまして。月野造と申します」
「あらあら。礼儀正しい子ね♪いらっしゃい。私は雄二の母親の雪乃と言います」

いやはや、とてもお優しそうな方です。でもどうしてゆーさんは赤の他人なんて言いそうになったのでしょうか？

「あら？ひょっとして造くんはうちの子と翔子ちゃんの・・・・・・」

「あ、はい♪ゆーさんと霧島さんの・・・・・・」

同じ学園の同学年の生徒ですもんね。ゆーさんが話してくれていたのでしょうか？

「隠し子ですね！可愛らしいです♪」

「「その発想はなかったぞ（ありませんでしたよ）！？」」

「・・・・・・雄二と私の子（ポッ）」

「「翔子（霧島さん）もしっかりしやがれ（してください）！？」」

いやいやいや！？なんでしょう？今まで散々小学生扱いされてきましたが、まさか同学年の友人たちの子供扱いは想像してませんでしたよ！？ゆーさんのお母さんってもしかして若干？天然さんでしょうか！？てか、自分の方がゆーさんたちより年上です！

「・・・・・造、スマン。この母親と翔子にはどうやら、いや間違いなく精神に異常がある。今度病院に連れていくから勘弁してやってくれ」

「い、いえ。これは冗談でしょうし、いいですよ？そうですよね？

そうだと言ってください！」
「造ちゃんは私の孫ですか♪まさかこんなにも早く孫ができるなんて♪」
「・・・・・・月野は弟と妹、何人欲しい？」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」
もうヤダ、この二人。ゆーさんのお母さん？何でそんなに嬉しそうなのでしょうか？霧島さん？ゆーさんは産婦人科ではなく精神科と言っているんですよ？
「そ、それで？これからどうするんですか？ゆーさん」
「そ、そうだな。んじゃ俺の部屋で男同士でゲームでもやるか！翔子はおふくろと話でもしておいてくれ！」
このある意味ヤバい状況から抜け出すためにも、そう言ってゆーさんが自分を連れて行こうとすると・・・・・・
「・・・・・雄二？デートｏｒ婚約」
「ちぃ！忘れていなかったな！？」
あらら、霧島さんに捕まっちゃいましたね？さてどうしましょうか？
「し、翔子！俺らが二人で行けば造が一人になるぞー？俺は子供がそんな風になるのは嫌だぞー（棒）」
「ゆーさん？さり気なくいい根性してますね？ヘルプしようと思いましたが考えが変わりそうですよ？」

誰が誰たちの子ですか?全く・・・・・。ですが、確かにこれなら霧島さんも考えを改めてくれますかね?すっごく不本意ですがねっ!?

「・・・・・・大丈夫。月野も一緒に行けばいい」

「「・・・・・・・・・・・・は?」」

・・・・・えっと?どういうことでしょうか?嫌な予感がしまくっているのですが?

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

造「……何です？この出だしからの原作崩壊は？普通はここで、アキさんたちと合流して自分もゆーさんと霧島さんをくっつける役割になるのでは？」

はぁ？それじゃ造弄れないじゃない？何バカなこと言ってんの？

造「……おまけに何ですか？ゆーさんたちの息子ですって？」

娘でしょ？ＨＡＨＡＨＡ！まあ、頑張って霧島さんを『お母さん』雄二を『お父さん』って言いな～

造「……」

相変わらずの超展開ですみません。ま、いつものことですかね？

とりあえず今回はここまで！ありがとうございました♪

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。その？の投稿ですね。

これやっぱり５話分くらいありますが、文章量が気合入れ過ぎてかいつも以上に多くなっています（汗）次回なんか目安の２倍近くまで文章が増えましたｏｒｚ

とりあえず行きましょう。よろしくです。

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？

雄二Ｓｉｄｅ

「俺は無力だ・・・・・・」
「何故に自分まで・・・・・・？」
「・・・・・家族が遊園地に遊びに行くことはおかしいことじゃない」

「「誰が家族だ（ですか）！？」」

翔子が言い出した『月野も一緒に行けばいい』の一言で、状況は造を巻き込み最悪の展開になっちまった。何とあのバカ、自分の家に連絡して『子ども：一人』分のプレオープンチケットを手に入れやがった（なんで子ども料金で！？ｂｙ造）。なんつう権力の無駄遣い。ひょっとしてこいつが本気になれば、プレミアチケットも軽く手に入れられるんじゃないかと思うと背筋が凍る。

そんでもって電車とバスで二時間ほどかけ、俺たちは如月ハイランドの前にいた。

「ゆーさん？巻き込んだ責任は今度、ちゃんと果たして下さいよね・・・・・？」
「正直すまんかった。善処する・・・・・・」

いや、マジですまん。まさか翔子がここまで本気だとは・・・・・・

「・・・・・二人とも入る」

「「いだだだだだだだだだ!?翔子（霧島さん）！なんで肘を極めるんだ（ですか）！?」」

な、何だ!?翔子が俺たちの肘を突然極め始めやがった!とうとうトチ狂ったか!?

「・・・・・家族は皆こうしてる」

「き、霧島さん!違いますって!?ちょっととりあえず離して下さい!?」

「お前には、家族仲良く手を繋ぐ行為がサブミッションを極めているように見えるのか!?」

俺と造の懸命な説得により、何とか手を繋ぐまでに収まった。翔子と手を繋ぐのは・・・・・まあ、サブミッションを極められるよりマシだろう。

ちなみに、造を真ん中に手を繋ごうと言ったら、

「連れ去られる宇宙人っぽくて嫌です」

と先に封じられてしまった。まあ、しゃーないな。俺・翔子・造の並びで手を繋いで（繋がれて）入場ゲートに入る（連行される）。ホントどんな図だ、これは・・・・・？

「いらっしゃいマセ！如月ハイランドへようこソ！」

そう言ってきた男は日本人じゃないのか、若干りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた。ま、んなこたどうでもいいか。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですカ？」

「・・・・・はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す。ついでに即興で手に入れやがった造のチケットも。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった。

「・・・・・そのチケット、使えないの・・・・・・？」

翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる。俺は寧ろ使えないチケットであってほしい。

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員はそう言うと俺らを背に向けどこかに電話し始めた。

「・・・・私だ。例の連中が来た。お子様も連れている。ウェディングシフトの用意を始めろ。確実に仕留めるぞ」
「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」
「自分、ゆーさんたちの子供として認定されているんですか・・・・・・？」

この係員、急に目の色が変わりやがったぞ。まさか例のジンクスを作るための工作員か？造のことまで話が通っているところから見ると、かなり本気だぞ？

「・・・・ウェディングシフト？」

翔子が首をかしげている。如月ハイランドの企みを知らないコイツにはよくよくわからない単語だろう。寧ろ知らんでいろ、その方が幸せになる（俺が）。

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」
「アンタ、さっき流暢に日本語話してなかったか？」
「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカりまセーン」
「清々しいくらいの開き直り様ですね？」

この係員ムカつく。

「ところで、そのウェディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」
「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トッテモ豪華な

おもてナシさせていただきマース」

余計な御世話だ。俺にはお前らの企みがわかっている。そんなもん誰が乗るかっ！

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

「・・・・・ゆーさん家はどんな風になっているんですか？」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろう。なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め・・・・・！あと造、引かんでくれ。気持ちは分かるが。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「・・・・記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛とその愛の結晶のメモリーを残しマース」

「・・・・・・・・・・・・・雄二と、お似合い。愛の結晶・・・・・・・・（ポッ）」

「・・・・・・なんか自分、いつの間にやら本気で家族にされかかっているんですが？」

翔子は似非外国人の言葉に仄かに頬を赤らめていた。造は似非外国人の言葉に仄かに涙を流していた。

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。うん？なんだか見覚えのあるヤツだな。帽子で顔を隠しているのが怪しいが・・・・・・

「アナタが持ってきてクレだのデスか。わざわざありがとうございマス。助かりマース」

似非野郎が礼を言いながらカメラを受け取る。やはり妙だ。

「（ゆーさん、あの人もしかして・・・・・・）」

「（・・・・・・造もそう思うか？）」

そこらのコンビニならともかく、こういった場所のスタッフが客の前で同僚に丁寧な礼を言うだろうか？

・・・・・・ふむ。少し試してみるか。

「悪いがちょっと電話させてくれ」

「わかりまシタ」

とりあえず携帯を取り出して、番号非通知で『吉井明久』と言う名のバカに電話をかける。

Ｐｒｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒｒ

「ああ、すいません。僕の携帯ですね」

すると、先ほどカメラを持ってきたスタッフの尻ポケットから、電子音が響きだした。

「・・・・・ビンゴですね」

「・・・・・いよう明久。テメェ、面白いことしてるじゃねぇか・・・・・！」

「人違いですっ」

「まんまアキさんでしょうに・・・・・」

ダッ！

「あっ、コラ！逃げるなテメェ！造追え！そして・・・・・ええい、離せこの野郎！」

「あう・・・・・離して下さい～」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ（３５歳）、通称スティーヴでース。吉井ナントカさんではありまセーン」

「黙れ！　人種性別年齢氏名全てにウソをつくな！しかもどう考えてもその名前で通称スティーヴはないだろ！」

「ついでにゆーさんは一言も吉井なんて苗字言ってませんからね？」

この似非外国人に絡まれているうちに明久の姿は見えなくなった。
おのれ明久！キサマ、絶対に俺をハメる気だな・・・・・・！？俺の人生をなんだと思っていやがる！さてはいつもの仕返しか！？

それにしてもアイツがスタッフになりすましているところをみると、かなり大掛かりな話だ。ここまでくると明久以外にも協力者がいるだろう。

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ！」
「・・・・・・？？？」
「ちょ！？ゆーさん！？」

キョトンとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。見えるか見えないかのギリギリの高さまで持ち上がると・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・っ！！（ギラッ）」

案の定反応しやがったムッツリの人影、いやキツネの着ぐるみ一匹。

「あの動き、そして着ぐるみから溢れだす鼻血・・・・・・やはりムッツリーニも来ていたか」
「えらい不気味な着ぐるみですね？子供たちがマジ泣きするレベルですよ？」

こりゃ明久とムッツリーニがいるなら、秀吉や姫路たちもいるのだろう。造は全員家にいなかったと言っていたしな。

「・・・・・雄二、子供が見ている前でえっち」

翔子が少し怒ったような顔で、俺を見つめる。

「なっ!?　ちっ違うぞ翔子!俺は「・・・・・続きは帰って月野が眠ってから」マテ、全てがおかしい!?」

「・・・・・・・・・・・・ひょっとして、助けるべき人間違えたですかね?」

造!?頼むっ!見捨てないでくれ!!

☆

造Ｓｉｄｅ

いやはや、まさかアキさんだけじゃなくて皆さんがコレに関わっているなんて思いませんでしたよ・・・・・ゆーさんと霧島さんをくっつけたいのはわかりますがね?

「でハ、写真を撮りマース。皆さん行きますヨー?」

「だから撮らんと言って・・・・・ぐおおおおおおおお!?翔子!なんでチョークスリーパーをかける!?」

「ぎ、ぎりじまざん・・・・・?ぐるじいです・・・・・」

「・・・・・?幸せ家族の記念写真」
「でハ。はい、チーズ」

近くでフラッシュが焚かれ、ピピッという電子音と共に撮影終了。
同時に自分とゆーさんの息もそろそろ終了しかかっています。何と言うかもう虫の息?

霧島さんには家族が肩を寄せ合う行為がチョークスリーパーをかけあっているように見えるのでしょうか?

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくださイ」
「・・・・・わかった。このまま待ってる」

「「タップ!タップ!!」」

律儀にも絞めあげたまま待たないでください、霧島さん!?何気に頸動脈を重点的に絞めあげられているので、あかん意識が・・・・・

・

「はい、どうゾ」
「・・・・・ありがとう」

「「ぜぇ・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・・・・・・・・・・」」

解放された瞬間思いました。空気っておいしいんですね・・・・・・
姫路さんの料理を食べた時と同じトコに逝きそうでしたよ・・・・・

・

「・・・・・雄二、月野。見て。私達の思い出」
「・・・・・・なんだ、この写真は？」
「・・・・・・どういうことでしょうね？」
「サービスで加工も入れておきまシタ」

そう、写っていたのは霧島さんの両脇で首を絞めあげられている自分とゆーさん。そして・・・・・・

3人を囲う様なハートマークと、『家族が出来ました』という文字。チョークスリーパーをかます女性とそれに苦しむ夫と子供の周りを祝福する様に天使が飛び廻る図です。

傍から見ても、この家庭が幸せになれるとは思えませんね？てか、完全に自分二人の子供扱いですか？そこまで幼くないですよ？・・・・・多分。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」
「キサマ正気か！？　コレを飾る事で何のメリットがあると言うんだ！？」
「断固拒否です！寧ろ評判が悪くなりそうですよ！？」
「・・・・・二人とも照れてる？」

「「どこがだ（ですか）！？」」

この写真のどの部分に照れる要素があるのか、ゆーさんと頭を悩ましていると・・・・・・

『ああっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおーよ！』
『オレたちの結婚の記念に、か？おい係員、オレたちも映ってやんよ！』

・・・・・？何やら変なカップル？がやってきましたね？

『すいまセン。こちらは特別企画でスので・・・・・』
『あぁっ！？いいじゃねーか！オレたちゃオキャクサマだぞコルァ！』
『きゃーっ。リュータかっこいーっ！』

・・・・・どうやら本当にこれ特別サービスのようですね。むう、ちょっとこれはどうしましょうか？見てて係員さんが居たたまれない気がするんですが・・・・・

「・・・・・ん？造？お前何を・・・・・？」
「ああ、ちょっと行ってきます♪」
「・・・・・月野？」

「ああっ！？グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について投書すっぞゴルァっ！！」
「そーよっ！アタシたち、オキャクサマなんだからねっ！」
「で、でスから「このサービスは有料ですよー♪」・・・・・？」

ちょっと失礼して割り込みましょうね～♪

「あぁん!?なんだこのガキぃ?」
「ちょっとー?ボクちゃんはひっこんでなさいよー」
「あらあら、すみません。ですが自分たちはこのサービスを買ったうえで写真を撮らせていただいたんです。お高いんですがそれでもいいのですか?」

ま、ある意味『お高い』サービスですからね?間違ってはいないでしょう?

「はぁ?っち、有料かよ!」
「いーじゃん、買ってよーぉ。リュータ」
「そうだな、オイっ!いくらだ!」

さて、自分の本領発揮と行きますか♪面白くしましょうねー
決して先ほどからの自分の扱いに腹立ってて、そこにいい憂さ晴らしのカモが見つかった!なんて思ってませんよー?

「ちょっとお耳を拝借・・・・・・(ゴニョゴニョ円でさらにオプション付きがゴニョゴニョ円です♪)」
「(・・・・・なっ!?ハァ!?高すぎんだろ、アイツらわざわざ買ったのかよオイ!)」
「(ええ、ですから止めた方がいいと二人に言ったんですが、あのバカップル話を聞かないんですよ~)」
「(・・・・・ちぃ、しゃーねーか)オイっ、写真は後だっ!とっとと行くぞ!」
「え、えええぇー!?買ってよーぉ!何よー!?」
「いいから行くぞっ!」

そう言って二人の（バカ）カップルは行っちゃいました。ふぅ、いい仕事しましたねー♪

「た、助かりマシタ！ありがとうございマス！」
「いえいえ～？何のことでしょね？」
「・・・・・・造？お前何した？」
「ないしょです♪さて、行きましょか二人とも？」
「・・・・・・（コクン）」

折角の休日で、ここはプレオープンしたばかりですからね？トラブルは極力ない方がいいですし♪

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（後書き）

ありがとうです！いかがだったでしょうか？

言い忘れてましたが、この如月ハイランド編は雄二→造の順で視点変更する仕組みにしています。何でそんなことをしたかって？……何故でしょう（汗）自分もさっぱりです……

何だか最近家族にされるのが多い造ですが、面白そうですから放置です☆

次回は切り方が難しいので更に長いと思います。すみませんです。

とりあえず今回はここまでです。読んでいただきありがとうございました♪

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（前書き）

こんにちは、糖分摂取魔です。

すみません！ＬＥＮさんから指摘を受けて気が付いたのですが、昨日までこの番外編のサブタイが如月ハイランド～のつもりが、如月グランド～になってましたｏｒｚ

原作とアニメがごっちゃになってましたね……（汗）本当に申し訳ございませんでした。そしてＬＥＮさん、ご指摘ありがとうございます！

とりあえずその？です。よろしくお願いします。

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？

雄二Ｓｉｄｅ

「さて。それじゃ、テキトーに回って帰るか」
「・・・・・・楽しみ」
「ゆーさん、すでに帰ることを第一に考えてますね？」

あれからもう引き返すのは無理と判断し、適当なアトラクションを探すことにした。ま、今回に限り俺には造と言う名の生贄・・・・・・もといパートナーがいる。何かあれば何とかしてくれるだろう。

「・・・・・・今何か変なこと考えてませんでした、ゆーさん？」
「気のせいだ。そうだな映画館でもあれば楽なんだがな」
「・・・・・・折角一緒にいるのに、そんなの楽しくない」

ちぃ、ダメか。そんなことを考えていると、ひょこひょことキツネが近づいてくる。このテーマパークのマスコットキャラのキツネらしいな。リボンをしてるしメスなのだろうか。

『お兄さんたちにボク？フィーがとっても面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

着ぐるみの中から聞こえてくるのは若い女の声。・・・・・・と言うか

「・・・・・ゆーさん、どう考えても聞いたことある声だと思いませんか？」
「・・・・・・奇遇だな造。俺もクラスのとある優等生の声に聞こえるぞ」

おまけにご丁寧にも印象的なピンク色の髪の毛がはみ出てるしな。

「確かめましょうね。・・・・・そう言えば先ほどアキさん怪我をしていましたが、アキさん平気でしょうか？」
『えぇっ、明久君が！？だ、大丈夫なんですか！？』

「「・・・・・姫路（さん）アルバイトか（ですか）？」」
『あ・・・・・っ！ち、違いますっ！私・・・・・じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ？見ての通りキツネの女の子だよっ♪』

「「・・・・・姫路（さん）は真面目だな（ですね）」」

ここまできてちゃんと取り繕う所とかな。

「じゃあフィーとやら、お前のおススメを教えてもらえるか？」
『あ、う、うんっ。フィーのおススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

ふむ。なるほどな、だったら・・・・・

「そうか、ありがとう。じゃあ造に翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」
『ままま待ってくださいっ！　どうしてオススメしたのに！？』
「どうしてもクソもあるか！どうせそのお化け屋敷には余計な仕掛けでも施されているんだろう？わざわざ行かんぞ」
「向こうにアキさんがいますからねー。日頃の恨みとか言って凄いことしそうですね」

その通りだな。あのバカはこういうことには頭が回るから困る。

『そ、そんなの困りますっ！　お願いですからお化け屋敷に行ってくださいっ！』
「断る！」
『で、でしたらそこのボク！？お化け屋敷は面白いよ～？』
「・・・・・姫路さんが自分を普段どんな風に見ているのか垣間見えましたね。自分も断固拒否です」

そう言って俺らが離れようとした時・・・・・

『そこまでだ雄二・・・・・じゃなくて、そこのブサイクな男っ！子供まで盾にするなんて、なんて卑怯なヤツなんだ！』
「その頭の悪そうな仕草・・・・・明久かっ！」
「誰が子供ですか？てかその格好、正直怖いですよアキさん？」
『失礼なっ！　僕・・・・・じゃなくて、ノインのどこが頭が悪いって言うんだ！そこのボクもノインは怖くないよ～』

本来可愛らしいであろう着ぐるみは頭部の装着が前後逆になってお

り、とてもシュールな生き物となっていた。シュールというか、ぶっちゃけると不気味な生き物（？）だな。

「・・・・・雄二、月野。ノイちゃんはうっかりさんだから」

「「うっかりで済ましちゃマズイだろ（でしょ）！？」」

『あっ、明久君っ。頭が逆です！ああっ！今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

『うわっ、しまった！道理で前が見えないと思った！ゴメンね造！怖くないよ～』

『違いますよ！別の小さな子です！早く治さないと坂本君たちにバレちゃいます！』

未だにバレていないとでも思っているのだろうか？最近姫路もおかしい気がする。

『と、ところで明久君！怪我したんでしょう！？手当は済んだんですか！？』

『ほぇ？何のこと？僕は別に何も・・・・・って、姫路さん誰に電話してるの？』

『今美波ちゃんを呼びました！急いで治療しますっ！？さぁ、脱いでください！？』

『はっ？いやいや、何で急にそんな話に！？オープン初日にそんな僕を露出狂にする気！？ここの評判に響く・・・・・って何！？なんだかすごい勢いで誰かが走って来てるみたいなんだけど！？』

『アキいいいいいいぃぃぃぃ！？大丈夫！？どこを怪我したの！？瑞希っ！今すぐ脱がして確かめるわよっ！』

『ちょ、美波まで!?二人とも落ち着いて!?』

「「・・・・・なんだ（なんでしょう）この状況・・・・・・？」」

最近おかしいのは島田もだったか。明久に危害を加えなくなった代わりに大分積極的になってきたもんな・・・・・姫路同様おかしい方向に積極的になってきたが。

そんなことを思っていると、先ほどの係員が翔子の耳元で何か呟いていた。

・・・・・あっ！し、しまった!?油断した!何翔子に吹き込んだ!?

「・・・・・雄二。お化け屋敷に行きたい」

「おい！翔子に何吹き込んだ!?」

「坂本翔子サンにお化け屋敷は旦那に抱きつき放題ダト」

「キサマ勝手に翔子を入籍させるな!?しかもなんて汚い手を・・・・・だ、だかこちらにも考えはある」

「・・・・・・？何ですかゆーさん、自分を見て?」

そう、今日の俺にはこの万能の身代わ・・・・・・もとい、万能の相棒：造がいる!見てろっ！

「翔子、悪いが造は怖いものが苦手なんだ「ちょ！?何言い出すんで（ムグゥ！?）」こいつの為にもお化け屋敷は止めておいた方が

いい」
「・・・・・・そう、残念」
「ムグウウウウウウウゥゥゥウ！！（ゆーさん！次は許しませんよ！？）」

フッ・・・・・なんて完璧な作戦だ。翔子もこれなら納得するだろう。造が俺を睨みつけるが、お前の犠牲は無駄にはせんから安心しろ。

「ご心配ナク！そちらのお子サマにハ、係りのお姉サン方がアトラクション終了まで付いてくれルそうデース」

「「・・・・・・・・・・・・・・・る？」」

そう係員が言うや否や、二人の人影が何故か造に襲いかかった。

「お姉ちゃ・・・・・・もとい、係りのお姉さんよ？さぁ、行きましょう造くん？」
「造～母さ・・・・・・もとい、係りのお姉さんその2だぜ！行くぞっ！造！」

「「・・・・・・・・・・・・・・・は？」」

何だこれは・・・・・？痛いってレベルじゃないな・・・・・・・造に至っては、頭が痛そうだ。

木下姉と日高先生がテーマパークキャストの服装をして造を捕獲している。と言うか、木下姉はともかく日高先生は仕事はいいのか？

「優姉さん、日高先生？何をしておるのですか？」
「私はそんな素晴らしいお姉さんの名前じゃないわよ？さ、行きましょう」
「アタシもそんな美しい母さまの名前じゃねえな？とりあえず行くぞ」
「もうツッコミませんよ？優姉さんはともかく、日高先生は仕事を・・・・・って！？離して下さい！？」

「「うるさいわよ（ねぇ）？ほら、行きましょ（ぜぃ）♪」」

そう言って造を二人が捕まえてどこかへ行こうとする。・・・・・・・ってマズイっ！？

「だからっ離し・・・・・・ゆ、ゆーさんっ助け・・・・・・」
「つ、造っ！？待ってくれ！？俺を置いていくなあああああああ！？」
「・・・・・・雄二。じゃあ、私たちはお化け屋敷に」

さ、最悪だあああああああああああああ！？

造Ｓｉｄｅ

優姉さんと日高先生に拉致され、お化け屋敷の裏のなんだかとってもファンシーな場所に連れてこられました。あはは♪ぬいぐるみだ

らけで可愛らしい場所ですねー・・・・・・って！

「なんで二人がここに！？大体想像はつきますがねっ！？」

「「そこに造くん（造）がいるから！」」

「違うっ！それどんな理屈ですかねっ！？・・・・・大方、アキさんたちにゆーさんと霧島さんをくっつけるのを手伝ってほしいと頼まれましたね！」

自分とゆーさんたちを離れさせて、何かとんでもないことをゆーさんにしようとしてますね？このままじゃ本気でゆーさんが・・・・・

『畜生っ！よりにもよって処刑道具まで用意してくるとは！造！何とかしてくれ！？』

くっ！何だかわかりませんが、今ゆーさんの身にすんごい危機が迫っている気がします。具体的には何か黒いものに追いかけられて撲殺されかかっているような気がします！？

「二人とも！さっさと解放してくｄ「造ちゃ～ん？お姉さんたちが造ちゃんに合うコスチュームを着せてあげますからね～♪」・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・うん、ヤバいです。いろいろと。

ゴメンゆーさん、自分も命じゃありませんが何か重要な物を奪われそうです。すみませんが今はゆーさんで何とかしてくださいね♪

「このぬいぐるみに合うようなカワイイ服を用意してからね☆」
「まあ、とりあえず・・・・・・・・・・・・・・・脱げ。話はそれからだ造ちゃん♪」
「ゆーさんっ！寧ろ自分が助けてほしいですっ！？」

フリフリでヒラヒラなとても男モノとは思えない、明らかに狙ったような服を持った二人と壮絶な（地獄の）鬼ごっこ☆スタート♪

☆

な、何とか二人を撒けた様ですね・・・・・・。今日着てきた服と自分のプライドの犠牲は、無駄にはしませんよ！

とりあえずお化け屋敷の前まで戻ってみると、全力疾走して息切れしかかっているゆーさんがいました。よかったです、一先ず無事ではあるようですね。

「ゆーさん、お疲れ様ですね・・・・・・自分も主に精神的に疲れましたが」
「造・・・・・・。その魔法を使う少女的な服装でお前に何があったか大体想像つくが、大丈夫か？」

「言わんで下さい・・・・・・。心が打ち砕かれそうですから」
「・・・・・月野、可愛い。雄二も着る？」
「お前は俺に何をさせたいんだ・・・・・・？」

ゆーさんも疲労してか、ツッコミがまともに出来てませんね。ホントにお疲れです。

「・・・・・・そろそろ、お昼」

霧島さんが指した方向を見ると、大時計が午後一時過ぎを示していました。ああ、通りでお腹が空くわけですね？

「・・・・・あの、私のバック・・・・・・」
「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、こちらへいらして下サイ」
「・・・・・・あっ・・・・・・」
「？翔子、どうした？」
「・・・・・・霧島さん？」
「・・・・・・なんでも、ない」

「「？？？」」

何でしょう？一瞬寂しそうな顔をしてた気がします。ゆーさんも気づいてますし。

「・・・・・二人とも。急がないとはぐれる」
「お、おう」

「・・・・・・・・・・・・むぅ」

まあ、とりあえず保留にしておきますかね？

係り員さんの誘導に従ってしばらく歩くとお洒落なレストランが見えてきました。中に入ると、そこはパーティー会場の様な広間でしたね。いえ、と言うよりここは・・・・・・

「・・・・・・クイズ会場？」

「みたいですね。ステージもそれっぽいですし」

「確かによくテレビで観るクイズ会場っぽいな」

何だか面白そうなとこですね♪何やらイベントでもあるのでしょうか？

「いらっしゃいませ、坂本雄二様、翔子様、造様」

「御家族三人のお越しで間違いありませんね？」

「・・・・・・間違いない」

「「間違いだらけだ（です）っ！？」」

今度はヒデさんと島田さんですかっ！そして誰が家族ですって！？

「お前ら・・・・・・イヤいい、もう何も言うな。秀吉がいるってことはもう大体予想付いてたし、島田もさっき見かけたしな・・・・・」

「ゆーさん、自分もツッコミ疲れました・・・・・・」

やれやれですね。とりあえず二人に連れられて席に着きます。出される料理は言うだけあって中々いいですね。ウェイターの動きや料理の出し方も、まあ及第点ってとこですか？正直、あまりこういうとこは好きじゃないんですけどね。

それにしても、いつもならアキさんでしたらゆーさんにここら辺で仕掛けてくると思ったのですがね・・・・・・？もう安心していいのでしょうかね。

そう思ったのが間違いだと気づいたのは、（美味しい）デザートを食べた後でした。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！》

会場に大きくアナウンスの声が響き渡ります。

《なんと本日ですが、この会場には結婚式を控えていらっしゃる御家族の皆様がいらっしゃいます。籍は入れてあるのですが式を挙げる機会がなかったそうで、常々その機会がないか考えていらしたとのこと！》

「・・・・・・・・・・・・なあ、造？まさか俺らのことじゃねえよな？」

「・・・・・・・・・・・・ち、違うはずですよ？流石にこれは冗談じゃ済みませんから」

あ、あはは？これ別のお客さんですよね？坂本家の子供になる気はありませんよ？・・・・・木下家の義弟にもね？

《そこで、当如月グループとしてはそんな家族を応援する為の催しを企画させて頂きました！題して、【如月ハイランドウエディング体験】プレゼントクイズ！》

出入口を封鎖する重々しい音が聞こえてきます。まさか退路を断ったわけじゃないですよね？ね？

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、籍は入れてあるわけですからご本人様の希望によっては、本日そのまま結婚ということでも問題ありませんが》

あるぇー？関係ないはずなのに嫌な予感が凄くしますよー？コレ何の冗談でしょうねー？普通コレ冗談抜きの大問題でしょ？

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！娘さんの造さんを連れて、前方のステージへとお進み下さい》

「だから誰が娘なんですかっ！？」

「そこはツッコムとこじゃないが・・・・・・・・・とりあえず、明久コロス」

ご丁寧にも司会さんが自分たちの席を示してくれたおかげで、レストランにいる観客が一斉にこちらへと目を向けます。進退窮まったとはこのことですか？

「・・・・・ウエデイング体験・・・・・・頑張る・・・・・・！」

「落ち着け翔子。そういったものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだだっ！耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

「霧島さん！自分にゃんこじゃないので、首根っこ掴まないでくれると嬉しいのですがががが！？し、絞まってます！凄く首絞まってます！？離してください！？」

今日はもう散々ですね・・・・・これ以上何が起こるのやら？

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

今回いつもより多めになってしまいましたね（汗）いつもの１．５倍くらいあるのかな？原作とほぼ同じ所はカットすべきでしたが、流れから考えるとやっぱり削りきれなくてｏｒｚ

この話が中間ですから、如月ハイランド編は残り二話ですね。今日はこの話が多めでしたから更新はもう出来ないかもです。明日は残り二話をちゃんと更新すると思いますので、すみませんがよろしくお願いしますです。

読んでいただきどうもありがとうございます！

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（前書き）

糖分摂取魔です。如月ハイランド編その？ですね。

ちょっと先の話ですが、これ終わればプール回になると思います。
如月ハイランド編が長い分、そっちはなるべくは短くしたかったのですが難しいかもです。上手くいきませんね、中々。

とりあえず、行きましょう。

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？

雄二Ｓｉｄｅ

《それでは【如月ハイランドウエディング】プレゼントクイズを始めます！》

俺と翔子の間に大きなボタンが一つ設置されている。コレを押してから解答するというオーソドックスなシステムのようだ。

つうことは『正解したらプレゼント』＝『間違え続けたら無効』になるのだろう。それなら俺が間違え続けるとするか。

ちなみに造は【お二人の愛の結晶】と、でかでかと書かれた椅子に拘束され・・・・・いや、座らされている。おまけに口封じもされているな。ちぃっ！造が封じられるのは正直痛い。

客席から『あの子が二人の子供だってさ』とか『ハァ！？何歳で産んだ子だよ！？』とか『どっちでもいいわ・・・・・カワイイ』とか『造はアタシん子だッ！』とか『アタシはお姉ちゃんよッ！』とかが、聞こえなくもないが敢えてスルーしておくことにする。スマン、耐えてくれ造。

《では、第一問！》

ここは造を解放してやる意味でも気合いを入れて間違えんとな。さて、どんな問題が来る・・・・・・？

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

おかしい。問題文の意味がわからない。造に目で合図を送ったが、造ですら解けない難問らしい。

・・・・・・ピンポーン！

し、しまった！？油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！だが、いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて・・・・・・

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「・・・・毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！正解です！》

正解だとっ！？・・・・・・くそっ！こりゃ出来レースだな？そこまでして俺たちにウエディング体験とやらをさせたいのか！？司会もスタッフもウェイターも俺の敵だ。ひょっとすると客の中にもサクラがいるかもしれん・・・・・・

いいだろう。それならば・・・・・・俺は意地でも間違って見せよう！

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうかっ？》

・・・・・ピンポーン！

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「鯖の味噌煮！」

《正解です！》

「なにぃっ！？」

どう考えても不正解を引いたハズ！すでにクイズが質問と化している回答が『鯖の味噌煮』でどうして正解なんだっ！？

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

「待ていっ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

《第三問！お二人の出会いはどこでしょうかっ？》

ダメだ、聞いてねぇ・・・・・・！だが、向こうのやり口はわかった。今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押し、間違った解答を「・・・・・・させない」

ブスッ

「ふおぉぉぉっ！？目が、目がぁっ！」

・・・・・ピンポーン！

《はい、解答をどうぞ！》
「・・・・・小学校」
《正解です！お二人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚までに至るという、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！》

おい、そこの司会！一度仲睦まじいと言う意味を辞書で調べて来い！今俺が目を突かれたのは見えてないのか！？だったら眼科に行けっ！精神科でもいいっ！

俺がそんなことを思いながらのたうち回っていると、もう次の問題に行っていた。くっ！？目が開けられん・・・・・・

《第四問！お二人のお子さんの名前は？》

・・・・・・ピンポーン！

《はい、解答をどうぞ！》
「・・・・・造。ちなみに妹は『しょうゆ』で弟は『こしょう』」
『ムグウウウゥゥゥゥゥゥ！？（霧島家の息子になった覚えはないですよ！？）』

造が完全に俺らの子供扱いか・・・・・・と言うか残りの二人の名が地味に気になる。

《正解です！とっても味のある名前ですね！それでは最終問題です！》

いかんな、このままじゃ奴らの思う壺だ。何とかして打破する策を・・・・・・

『ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそいつらだけがトクベツ扱いなワケ～？』

何やら不愉快な口調の救いの神が現れた。その場の全員が声の主を探る。すると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか・・・・・・』

『あぁっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちはオキャクサマだぞコルァ！』

茶髪で顔中にピアスをつけた男がスタッフを威嚇するように大声をだす。どこかで見た連中だと思ったら、入場口で絡んできたチンピラどもか。造に追い払われて帰ったと思ってたがな。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど～？』

『で、ですが・・・・・・』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ！オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

『そ、そんな・・・・・・』

ふむ?こりゃひょっとしたら好機か?あの司会者が相手なら間違えられなかったが、この連中が相手なら間違えられることができる。翔子の手を握って目潰しは封じたし、これで問題を遠慮なく間違えることが出来る!

「・・・・・・ゆ、雄二・・・・・・?」
「・・・・・・・・ムグゥ(ゆーさん)」

『じゃあ、問題だ』

チンピラ共が設置してあったマイクをひったくり、わざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う。さて、どんな問題だ?安心してくれ、どんなに簡単な問題でも間違えて・・・・・

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ!』
「・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を、失った。マテ、ホントにマテ。

『オラ、答えろよ。わかんねぇのか?』

確かにわからないと言えばわからない。俺の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。その首都を答えるなんて不可能だ。まさか問題そのものが間違えているとは・・・・・

《・・・・・坂本雄二さん、翔子さん、造さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウエディング体験】をプレゼントいたします》

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？オレたちの勝ちじゃねぇかコルァ！』

『マジありえなくない！？この司会バカなんじゃないの！？』

バカップルもとい、馬鹿カップルがぎゃあぎゃあと騒ぎ立てる中、ステージの幕が下りてくる。他の客も呆れたような、哀れなような目でアイツらを見ていた。

明久以上のバカがいるとは、世界って広いもんだな・・・・・・

☆

造Ｓｉｄｅ

・・・・・いやはや、トラブルにならないか冷や冷やしましたが彼らがアレなお陰で何ともなくて良かったです。ゆーさんの手助けが何も出来なかったのが申し訳ないですが。

「おメデとうございマス。ウェディング体験が当たるなんテ、ラッ

キーでスね」
「・・・・・凄く嬉しい」
「嘘つけ、初めから出来レースだっただろうが」
「ですね・・・・・そして自然な流れで家族にされかかっていますよ、自分」

いかん、最近本当に誰かの家族にされることが増えている気がします。おまけに本当に実行できそうな方が多いですし。

「そういえば翔子。お前の持ってきた鞄は何が入っているんだ?随分と大きいが」
「・・・・・別に、なんでも・・・・・」
「・・・・・ん~?」

そう言えばかなり気になります。朝から大事に持っていましたよね?霧島さんのことですから、ゆーさん絡みのものですよね?

そうこう考えているうちに、霧島さんがとあるスタイリストに連れられて行きました。・・・・・ん?あの人かなり有名なスタイリストでは?顔見たことありますし。こりゃ本気で結婚式の擬似体験をさせる気でしょうかね?

「あのう?自分たちはこれからどうすれば?」
「そうだな、俺らは長い時間待たされるのか?」

ゆーさんと共に係員さんに聞きます。時間がかかるのでしょうか?
めんどくさいですねー

「ご安心下サイ。お二人の対応は吉井サンから聞いテ・・・・・・
ではナク、ワタシが考えてありマース」
「もう今更隠す必要もないだろ」
「ですね、アキさんから指示が出ているんでしょ？」

あれ？アキさんからの指示？何か嫌な予感が・・・・・・

「ハイ。お二人は逃亡を考えるだろうカラ、気絶させてカラ着替えさせるように、との指示デース」
「あ、明久ぁあああああああああああああああああっ！！」
「少しガマンして下サーイ」
「ちょっ！？ゆーさんっ！」

気づけばゆーさんはスタンガンで眠らされてしましました。
そして自分もハンカチで口をふさがれたかと思うと・・・・・・

『おやすみ、造くん♪』
『着せ替えはアタシらに任せろー（ビリビリ』
「やめて！」

薄れゆく意識の中、甘い香りと共に聞きなれた二人の声が聞こえました。
今自分の着ている服が破られる音と共に・・・・・・

☆

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》

「・・・・・やられたな俺たち」
「・・・・・ですね。もうこの恰好もツッコミませんよ？」
「・・・・・涙は拭けよ、造」

目を覚ませばステージの上で先ほどの椅子に座らされ、子供用（かつ女の子用）のドレスに着替えさせられてました。入場してきたゆーさんはタキシード姿ですか？正直かっこいいですね。自分もできればそれがよかったですよ・・・・・

「それにしても・・・・・なんだよこのセット・・・・・」
「お金・・・・・随分とかけてますね・・・・・」

数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席、スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見えますね。借りの結婚式にしては、本気出し過ぎでは？

《それでは新郎のプロフィールの紹介を・・・・・》

「あや？ここまでするんでしょうかね？」
「そうだな。さっきのクイズもだが、大方明久にでも聞いたんだろう」

《・・・・・省略します》

「「手抜きすぎだろ（でしょ）！？」」

『ま、紹介なんていらねぇよな』

『興味ナシ～』

『ここがオレたちの結婚式に仕えるかどうかが問題だからな』

『だよね～』

・・・・・ん？また嫌な声が聞こえますね。先ほど騒いでいた人達ですか。最前列に座っているのに大声で会話なんて、小学生でもわかるマナーをわかっていない御様子で。

《・・・・・他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってんの～？』

『違ぇだろ。オレらはなんたってオキャクサマだぜ？』

『だよね～っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分がいいか悪いかってのが問題だろ？な、これ重要じゃない？』

『うんうん！リョータ、イイコト言うね！』

「あの人たち、他のお客様が気分がいいか悪いかもわからないのでしょうか？」

「ほっとけ造。ああいう輩は、理解出来ん頭の構造をしてるんだ。さっきの問題でわかったろ？」

・・・・・・う～む。ゆーさんの言うことに全面同意ですかね？まあ、今はとりあえずほっときますか。

《・・・・・・それでは、いよいよ新婦のご登場です！》

さていよいよ本命の登場ですか。仮の結婚式とはいえ、ここまでくれば問題なく済めばいいのですがね・・・・・・

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（後書き）

ありがとうございました。その？いかがだったでしょうか？

変な切り方ですみません。次回はなるべくは今日中に更新したいと思いますので、すみませんがよろしくお願いします！地味に長いんですよね（汗）

話変わりますが、下書きではプール回までは書きましたが、バイト回は本気で難しいですね。構成が上手くいきません……時期を変えたり、文を変えたりと頑張ってますが、扱いにくいです……まあ、何とか書いてみます！

長々すみません。ではまた次回に。

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（前書き）

どうもです、糖分摂取魔です！

今回で如月ハイランド編、ラストになります。正直に言うと、またちょっと削っている所が多々あります（しかも重要な所を）。その辺は、皆さんの脳内で補ってもらえると嬉しいです（汗）

それじゃ行きましょう！その？ですっ！

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？

雄二Ｓｉｄｅ

あの馬鹿カップルの声を遮るかの如く心なしか音量が上がったＢＧＭとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。スモークが足元に立ちこめ、否応なしに雰囲気が盛り上がる。

・・・・・ははっ。コレで翔子に花嫁衣装が似合っていなければ興ざめもいいところだな。

ま、脱出はもう少し待つか。折角ここまで来たんだ、翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。そんなことを考えながら待っていると、目が暗がりに慣れるよりも早く、一条のスポットライトが点された。

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗闇から一転して輝き出す壇上に、思わず目を瞑ってしまう。

そして、再び目を開けた時に飛び込んできた姿に・・・・・俺は一瞬、言葉を失った。幼い頃からの知り合いでありながらも今日この場で初めて出会ったような、そんな感覚を抱かせるほどの見違え

た姿。彼女は花嫁と呼ぶに相応しくたおやかに佇んでいる。あれは・・・・・・誰だ？

「・・・・・・お綺麗ですね、霧島さん」

ポツリと俺の隣に座っていた造が呟く。まるでそれは俺にそのことを確認するかのように、優しい目で翔子と俺を見ながら・・・・・・

余程入念に制作したのか、純白のドレスは皺一つ浮かべることなく着こなされている。スカートの裾は床にすらない限界の長さに設定されているようで、アイツがステージの中央まで歩いてくる間、一度も床に触れることはなかった。

「・・・・・・雄二・・・・・・・」

ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む幼なじみが、どこか不安げにこちらを見上げている。胸元に掲げている小さなブーケが所在なげに揺れた。

「翔子、か・・・・・・？」

「・・・・・・うん」

頭の中が真っ白になり、いわずもがなの質問が口をついて出た。あまりの変わりように、確認せずにはいられなかったのかもしれない。動揺する俺に、翔子は恥ずかしげに問いかける。

「・・・・・どう・・・・・・?私、お嫁さんに、見えるかな・・・・・?」

コイツが見知らぬ少女に見えたせいか、会場の雰囲気に飲まれたのか、それとも他の要因か。俺は考えを巡らせることもなく勢いで返事をしてしまった。

「・・・・・・ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

先ほど頭に浮かんだ『似合わなければ興ざめだな』なんて言葉は既にどこかへと飛んでいた。

「(クスッ)・・・・・・ゆーさんにしては上出来ですね♪」

・・・・・・造の言葉に少々引っかかるがな。

「・・・・・・雄二・・・・・・・・」

翔子は小さな声で俺の名を呼び、ブーケを抱え直した。そして、その場で動きを止める。

「お、おい。翔子・・・・・・・?」

なんだ?様子がおかしい。俺の返事が何かマズかったか?駆け寄るべきか、一瞬迷うが俺が迷ってる間に、翔子は再び言葉を紡いだ。

「・・・・・嬉しい・・・・・・」

目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。そして、それ以上は言葉を発することなく静かに震え出した。

《ど、どうしたのでしょうか?花嫁が泣いているように見えますが・・・・・・?》

言われて初めて気づいた。俯いて肩を震わせて・・・・・翔子は静かに泣いていた。

「お、おい。どうした・・・・・・?」

「・・・・・ゆーさん落ち着いてください。大丈夫ですよ」

造はそう言うが、ヴェールとブーケが邪魔で表情が見えないため、なぜ翔子が急に泣き出したのかわからない。会場から静寂が消え、観客の間に少しずつざわめきが生まれ出す中、彼女は小さな、だがはっきりと聞き取れる声で呟いた。

「・・・・・ずっと夢だったから」

涙混じりの掠れた声。・・・・・コイツ、まさか。

「・・・・・小さな頃からずっと・・・・・・夢だった・・・・・

・。私と雄二、二人で結婚式を挙げること・・・・・。私が雄二のお嫁さんになること・・・・・。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢・・・・・」

・・・・・口数の少ない翔子が懸命に紡ぐ言葉は、俺に形容し難い何かの感情を喚起した。幼い頃のある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への想い。それは罪悪感と責任感からくる勘違いなはずなのに・・・・・コイツはどうしてここまで強い気持ちを抱けるのだろうか。

「・・・・だから・・・・・本当に嬉しい・・・・・。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが・・・・」

そこまで言って、あとは言葉にすることができずに翔子は静かに泣いた。

会場のどこかで鼻を啜る音が聞こえてくる。何故か知らんが俺の隣の方でもそれと同じ音が聞こえる。やれやれ、随分涙腺の弱いヤツもいたもんだ。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》

・・・・・どう答えるだと?んなもん決まってる。俺がやるべきことはただ一つ。コイツの勘違いを正してやることだ。そう頭では考えているのにそれなのに・・・・・・

不思議なことに俺の口はなかなか言葉を紡ぐことができずにいた。

「ゆーさん・・・・・・ここは貴方の答えを出す所では？」

造も何故か促してくる。・・・・・・・・・・・・これは、その時なのか？

「翔子。俺は・・・・・・・」

『あーあ、つまんなーい！』

何かを言いかけたところで、観客から大きな声があがる。俺は慌てて口を噤んだ。よくわからないが、どこかでホッとしている自分がいる。ということは、これは俺にとって天の助けなのか。

『マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、早く演出とか見せてくれな～い？』

『だよな～。お前らのことなんてどうでもいいっての』

どうやら俺の窮地を救ってくれたのは最前列に陣取るあの馬鹿二人組みのようだ。会場が静まり返っていたおかげで発言者がはっきりとわかる。

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？なに？キャラ作り？ここのスタッフの脚本？バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドぉ～。あのオンナ、マジでアタマおかし

いんじゃない？ギャグにしか思えないんだケドぉ』
『そっか！コレってコントじゃねぇ？あんなキモい夢、ずっと持ってるヤツなんていねぇもんな！』
『え～っ！？コレってコントなのぉ？だとしたら、超ウケるんだケドぉ～！』

口々に文句を言い、翔子を指差し笑い始める二人組。すると・・・・・

《んだとテメェらっ！もういっぺん言ってみやがれ！》
《あ、明久君！落ち着いてっ！》
《アキ！気持ちはわかるけどステージが台無しになっちゃうわ！》

聞きなれたバカの声と共に、暴れ出す音が聞こえてきた。腹を立てて暴走しているのだろう。気になり、その声のする方向に視線を向けた短い時間に、

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？》

翔子は壇上から姿を消していた。さっきまで立っていた場所にブーケとヴェールを残して。ヴェールを拾い上げるとそれは羽根のように軽いはずなのに、涙で湿って少し重くなっていた。

慌てたスタッフは、客たちにも翔子を探すように言い出す始末。こりゃイベントは中止だな。ご苦労さんだったな。さて、俺は行くかな・・・・・・

「・・・・・ゆーさん、行くんですね？」
「ん、ちょっと便所にな」
「わかりました。では自分は花嫁さんのお色直しの手伝いに行きます」
「・・・・・すまんな。頼んだ」
「ゆーさん。わかっていると思いますが、仮にも今日の貴方は花婿です。花嫁を振り向かせるには花婿の言葉でしか出来ないことをお忘れなく。・・・・・自分はあくまでお色直しの手伝いに行くだけですからね？」

・・・・・割と、手厳しいな。だが助かるぜ？造にゃ今回世話になり過ぎた。今度借り返さねえとな。

「すぐに行けば5分もかからないハズです。彼らにはしっかりと挨拶して来てくださいね？」
「・・・・・だから便所だっての」
「はいはい。・・・・・あ、そうでした！ゆーさん、コレ！」
「ん？・・・・・何だ、翔子の鞄じゃねえか」
「ゆーさんも気づいてたと思うんですけど、霧島さん朝から大事に持ってたんです。中身は自分は分かりませんが、ゆーさんならわかるでしょ？」

・・・・・やれやれ、本当にこいつは要らん気を回しやがるぜ。

とりあえず造と別れ、そのまま退場していく客に混ざり会場を出て行く。造の言った通り5分もしないうちに目的地が見えてきた。

『いや、マジでさっきのウケたな！』
『うんうん！私・・・・・結婚が夢なんです・・・・・。どう？似てる？可愛い？』
『ああ、似てる！けど・・・・・キモいにきまってんだろ！』
『だよね～！』

さてさて。それじゃ、とっとと用を済ませるか。ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける。

「なぁ、アンタら」
『ぁあ？ぁんだよ？』

二人組が真っ茶色な顔をこちらに向けてくる。この二人が俺の窮地を救ってくれたんだ。造の言うとおり、きちんと礼をしておかないとな。

『リュータ。コイツ、さっきのオトコじゃない？』
『みてぇだな。んで、その新郎サマがオレたちになんか用か、あァ！？』

男の方が一歩前に出て、威嚇するような仕草を見せた。

「いや。大した用じゃないんだが・・・・・」

借り物の上着を脱ぎ、タイを緩める。不思議なことに、身体は準備

体操を必要としないほどに温まっていた。

「・・・・・・ちょっとそこまでツラぁ貸せ」

☆

造Ｓｉｄｅ

「・・・・・・霧島さん、み～つけたっ♪」

「・・・・・・月野？」

「ゆーさんじゃなくてすみませんね。これハンカチです、どうぞ」

「・・・・・・う、ん」

会場から離れたミラーハウスの中に霧島さんはいました。泣いていたのでしょう、目が少し赤いです。とりあえずちょっと失礼して、霧島さんの隣に腰掛けます。

「・・・・・・（グスッ）」

「・・・・・・」

ここは何も言わないでおきましょう。必要なら彼女が何か言って下さるでしょうから。できれば一人で泣きたいでしょうが、今の霧島さんを一人にするのは少々不安ですし・・・・・・

・・・・・・・・・・・・どれくらいの時間が流れたのでしょうか。しばらく泣いていた霧島さんがポツリと話し始めました。ゆーさんとの出会い、霧島さんをゆーさんが守ってくれたこと・庇ってくれたこと、それから始まった霧島さんのとても素敵な恋のお話。

断片的でしたが、霧島さんのゆーさんへの想いとゆーさんの霧島さんへの優しさが伝わって来ました。そして大方話し終えた後に、霧島さんが尋ねてきます。

「・・・・・・月野は、どう思う?私の夢、変なの?」

・・・・・・なるほど。それだけの長く強いゆーさんへの想いがあったからこそ、今回のことはショックだったのでしょうね。

「・・・・・・霧島さん、今自分が何を言っても霧島さんが本当に納得する答えを出すことはできません」

「・・・・・・っ!」

「ですが!・・・・・・ですが、貴女にこれだけは言わせてもらいます。ゆーさんのことを信じてあげてください」

「・・・・・・雄二を、信じる?」

霧島さん、突然自分が何が言いたいのかわからないでしょうね。でも、霧島さんのゆーさんの昔話を聞いて確信しました。ゆーさんは

本当に霧島さんのことを大事になさっているんですね。

「霧島さんは、不安なんですよね？ゆーさんと離れることが」
「・・・・・！どう、して？」
「見ればわかりますよ？信じてくれるかわかりませんが、ゆーさんは人一倍霧島さんのことを大切になさっています。だからこそ、信じてみてください」
「・・・・・月野の言いたいこと、わかるようでわからない」

あやや？やっぱり言葉にすると難しいですね。ま、自分じゃせいぜいここまででしょうし。

「自分はこれだけしか言えません。・・・・・さて、行きましょうかね？」
「・・・・・何処へ？」
「貴女の花婿さんの所へ・・・・・ですよ♪」

☆

「おう、お前ら随分遅かったじゃねえか？」
「・・・・・雄二」
「いやぁ～お待たせでした♪」

如月ハイランドの中のグランドホテル前にゆーさんが待っていてくれました。あらら、随分派手に挨拶したみたいですね♪凄い格好で

すよ、ゆーさん。

さて、自分の役割はここまでですかね？あとは花婿さんの仕事です。とりあえず、ゆーさんたちと別れてまた戻りましょう。大事な後片付けが残ってますからね？

「では、自分はちょっと後片付けに行きます。お二人とも今日は楽しかったですよ～」

「・・・・・月野！？」

「何から何まで今日はすまなかったな、造」

「いいえ～また学園でお会いしましょ～」

そうそう、ゆーさん？ここは男を見せなきゃ許しませんよ！

☆

そんでもって週明けの学園にて・・・・・・

「おはようございます、ゆーさん」

「おっ造！あの時は色々助かったぞ。今度改めて礼をするからな」

「いえいえ～・・・・・ふふふ♪大丈夫みたいですね」

ゆーさんの顔には影は見られませんし、霧島さんのことも何とかなったようですね。

良かった良かった♪少しはゆーさんたちに手を貸した甲斐がありましたかね。

「それよりお前、あの後何かしなかったか？『後片付けがある』って言ってたろ？」

「・・・・・・ふふふ♪いいえ？なーんにも覚えてませんね？」

「・・・・・お前のことだ。あの馬鹿カップルに制裁でも？」

「・・・・・いやいや？何のことでしょうかね～♪」

「・・・・・お前は何気に一番怖いかもしれんな？」

酷いですね？ちょっと彼らにはお話をしに行っただけですのに。

「それよりもゆーさんこそ、アキさんに制裁を加えると言ってませんでしたか？」

「ん？ああ、それなら・・・・・」

『これより異端審問会を開催する。異端者・・・・・吉井明久っ！』

『ちょ！？ぼ、僕が何をしたと！？』

『とあるテーマパークにてクラスの美少女二人とデートしたそうだな？』

『は！？いやそんなことは・・・・・』

『証拠もちゃんと残っている。弁解の余地無しだな』

『こ、これ如月ハイランドの！？どこでこんな写真を・・・・・！？』

『『『異端者は・・・・・シケイイイイイイイイイイイイイイ

！！』』

『ま、待って！真の異端者は雄二なんだって・・・・・ちょっ！？危なっ！』

『『『死ねえええええええええええええええええええええ！！』』』

『ど、どうしてこんなことにいいいいいいいいいい！？』

「ま、こんな感じだな。せいぜいアイツには俺らの苦労を味あわせるとしよう」

「あ、あははははは・・・・・・」

ま、まあ終わり良ければすべてよし、ですかね？

『終わってないよ！？』

『『『オマエノ　ジンセイ　オワラセル！！』』』

・・・・・これもまた、Ｆクラスらしい日常ですかね？

番外編：如月ハイランドと結婚騒動～おまけの造～その？（後書き）

如月ハイランド編、いかがだったでしょうか？長すぎたかな……？

ちょいとおまけ。

「造、ホントにヤツらに何したんだ？」

「ゆーさんもしつこいですねー？大したことしてませんよ？……ただ、プレオープンですからチケットって必然的に人を選んで渡されるんですよ」

「ま、そうだろうな」

「それでいて、あんな大騒ぎしていた人たちが選ばれるのはおかしいと思いましたから、ちょっと調べればすぐに素性がわかりましてね？」

「ふむふむ。それで？」

「あのチンピラさん、どこかの企業の跡取り息子だったみたいです。んで、とりあえずそこの企業にあの後自分がお世話になった、と言いに行っただけですよ？」

「……」

「何故かあの後、凄い勢いで謝られましたね～？あのチンピラさんも坊主にされて土下座しに来ましたよ～？不思議ですね～？」

「月野グループに目を付けられちまったわけか……」

こんな感じのことがあったとだけ、言っておきます。長々すみませんです（汗）次回からはプール編！これも意外に長いかもです。

後書きが長くなってすみません。読んでいただきありがとうございました！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（前書き）

どうも糖分摂取魔です。今度はプール回ですね。

いやぁ～前回がシリアス（笑）でしたが、プール回は特にはそんな要素ないので書きやすいです。……ゴメンなさい、嘘です。逆に難しいかも……

いいや、今回は少し短いですがよろしくです。

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？

先週末にあった如月ハイランド結婚騒動も無事に（？）終わって、いつもどおり平穏な週末の夜がやってきました。ま、いつもと違う点は学園長に身体に異常がないかチェックしてもらうために、学園にお泊りしていることくらいですかね？学園に泊まれるなんてドキドキしますね～♪

「すまんな月野。本当だったら日帰りのはずだったんだが。・・・・・ほら、茶だ」

「どうもありがとうです。あはは♪いいんですよ、どの道今日は家族全員いないですし」

『つーちゃん♪ちょっと海外に行ってくるわ～♪お留守番お願いね～』何て母さんが言い出すのも慣れましたからね。今頃何処にいるのやら。ちなみに日高先生も母さんに捕獲されて一緒に（連行されて）行っています。日高先生も相変わらず母さんには敵わないらしく、『造！寂しくなったら電話しろっ！てかアタシが寂しいっ！』・・・・・と、涙交じりに言われましたっけ。

たまたま当直だった西村先生と一緒にお茶を飲みつつ、のんびりします。いつものお祭り騒ぎも悪くないですが、やっぱりこういう時間も自分大好きですね～

「そうか？・・・・・おっと、もうこんな時間か。それじゃ、俺は見回りに行ってくる」

「あっ、手伝いましょうか？」
「いや、すぐ終わる。お前は休んでいろ」

そう言って先生は宿直室から出て行きました。う～ん、暇なので自分も行きたかったのですがね～。まあ、すぐ終わるのでしたらいいですが。どうでもいいですが宿直室ってなんか独特の空間ですよね？狭いのですが、自分はこの狭さがワクワクしまｓ『お前らっ！！何をやっておるのだっ！！』・・・・・・・・・・・？

西村先生の声とあと二人分の声が聞こえてきます。はて？どうしたんでしょうか？

・・・・・・二人の声どこかで聞いたことがあるような、いつも聞いているような感じがしましたが？

☆

「・・・・・・・二人とも何をやっておるですか？」
「・・・・・・・で、お前ら何か言い訳はあるか？」

「「コイツが悪いんです」」

綺麗にハモりましたね二人とも？声の主はアキさんとゆーさんでした。何でもプールに忍び込んで遊んでいたのを西村先生に見つかったみたいですね。お二人とも、相変わらず行動に予測がつかない方々です♪

「って、明らかに悪いのは雄二じゃないか！雄二がまともな差し入れを持ってきたらこんなことにはならなかったのに！」
「それは違うだろ！お前がガス代を払っておけばこんなことにはならなかったんだぞ！」
「何を言うのさ！水が出るだけマシじゃないか！」
「お前の家は水すら出ない事もあるのか！？」
「お二人とも？論点が変わっている気がしますよ？」

ついでに西村先生がそろそろ限界突破しそうなのですが？

「・・・・・・・・・・・もういい。よくわかった」
「わかってもらえました？　それは良かったです」
「んじゃ、わかって貰えたところでそろそろ帰るか。いい加減時間も遅いしな」
「そうだね。何で造がここにいるか分かんないけど、一緒に帰ろう？」
「んじゃ鉄人、邪魔した・・・・・・ぐぇっ！」

どさくさに紛れて帰ろうとした二人を先生が捕えます。これは苦しそうですね？

「そう急ぐ事もないだろう二人とも。帰るのは恒例のヤツをやってからでも遅くはないよな？」
「そっそうですね・・・・・・是非、そうさせてもらいます・・・・・」
「お、俺も、そうさせてもらおう・・・・・・」

「せんせ、とりあえず離してあげてくださいね？」

と、言うわけで『朝まで生補習☆西村先生の特別講座』が開かれました。ちなみに教科は英語だったので、自分も参加させてもらいました。結果は・・・・・聞かないでね？英語難しいです。

☆

「てな事があって、おかげで散々な週末だったよ」

「こればかりは、せんせが正しいですがね？まあ、お疲れですアキさん」

「うぅ・・・・・。造に言われると反論できない」

週明けの教室で朝のＨＲが始まるまでの時間、自分たちはいつものメンバーと共に談笑します。

「まあ、それは災難じゃったのう・・・・・」

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はぁ・・・・・」

「・・・・・・・・・・重労働」

「だよね。あんなに広い所を掃除なんて、考えただけでも気が滅入るよ」

そうなんです。今回の二人の罰として西村先生はプール掃除を命じました。時期が時期だけにそれそろ授業で使うので、一度ちゃんと

掃除しようと言うことだそうです。

「あっ！ですが罰だけじゃないんでしょう？」
「そうだな。褒美というほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使っても良い』と鉄人に言われたぞ」
「え？そうなの？」
「ええ。だからと言うわけではないですが、自分も掃除に行きますよ？」

どの道大変そうだったので手伝うつもりでしたし。

「つ、造！キミはなんていい子なんだ・・・・・！」
「助かるぞ造。てなわけで秀吉とムッツリーニも、今週末にプールに来ないか？」

そうゆーさんが尋ねるとこーさんが頷こうとして、

「ただし、ムッツリーニにも掃除を手伝ってもらうけどな」
「・・・・・・・・・・・・」

ゆーさんの言葉でこーさんは止まりました。確かにプール掃除は大変でしょうし、無理にとは言えませんよね？

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」
「・・・・・・・・・・・・ブラシと洗剤を用意しておけ」

早っ!?と言いますか、こーさんお手軽すぎでは?こーさんらしいですがね。

「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、こんな時でなければ中々体験できんじゃろうし、相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「助かりますよ♪一緒に遊びましょうね～♪」

「うむ。今から楽しみじゃのう」

「二人とも、なんて偉いんだ!二人は水着を見せてくれるだけでいいのに・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・?」」

アキさん?貴方何言ってるんですかね?

「んじゃ、あとは向こうの二人だな。おーい、姫路、島田!」

「どうしたの坂本?何か用?」

「呼びましたか、坂本君?」

Fクラスのただ二人の女子である姫路さんと島田さんにも折角ですし、来てもらしましょう。プール掃除のことは言いませんが、遊ぶのに人は多い方がいいですからね。

「二人とも今週末は暇か?　学校のプールを貸し切りで使えるんだが、良かったらどうだ?」

「「え・・・・・・?」」

あや？この反応は行けないってことでしょうかね？

「あ、さては２人とも予定があったりする？」

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな・・・・・？　プールって言うと、やっぱり水着だし・・・・・・」

「そ、そうですよね。水着ですよね・・・・・・その、えっと・・・・・」

何でしょう？随分と歯切れが悪いですね？何か悩みでもあるのでしょうか？

「まぁ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが・・・・・・。一つ言っておくと、造と秀吉も来るぞ？　明久に水着を見せに、な」

はい？いや別に自分もヒデさんも、アキさんの為に水着を見せに行くわけではないかと？

そうゆーさんが二人に言うと、二人は急に目つきを変えて自分とヒデさんに鋭い視線を送ってきました。

「ひ、卑怯よ木下！　自分は自信があるからって！」

「そ、そうですっ！　木下君はズルいです！」

「？？？　お主らは何を言っておるのじゃ？」

・・・・・？最近二人が何を言っているのかわかりませんね？どの辺が卑怯なんでしょうか？

「そ、それと月野！アンタはもっと自分を大事にしなさいっ！」
「そ、そうですっ！月野君は明久君を犯罪者にする気ですかっ！？」
「？？？　わけがわからないよ？」

・・・・・？最近二人が何を考えているのかわかりませんね？どういう意味かさっぱりですよ？

「で、どうするんだ2人とも？」
「い、行くわ！　その、イロイロと準備をして・・・・・」
「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

てなわけで、お二人さん確保～♪まあ、楽しんでくれればいいでしょうからね。

「そうだ、ヒデさん。折角ですから優姉さんを誘いませんか？」
「うむ、そうじゃの。雄二よ、それでもいいかの？」
「ん？ああ、問題ねえぞ」
「あ、だったら雄二。霧島さんにもきちんと声をかけておいてね」
「・・・・・言われなくてもそのつもりだ」

おや？いつもでしたら『だ、誰があんな奴呼ぶか！』なんて言いそうですが？ゆーさんも素直になってきたのでしょうかね？

「うんうん。雄二も大人になったね」
「いや、そういう問題じゃない」

「え？ではどうしてですか？」
「そうだよ、雄二らしくないよ？」
「いいか、想像してみろお前ら。俺の立ち場で、後々になってからこの事が翔子に知られるという状況を。最近のアイツの行動を踏まえてな」

・・・・・最近の霧島さんの、行動ですか。ん～と暴力は減りましたがその分確か優姉さんや姫路さん＆島田さんたちの行動をを参考にしているそうで・・・・・・？

「セーラー服・・・・・・（裸）エプロン・・・・・・コスプレしたまま婚約」
「女装・・・・・・撮影・・・・・・アップロード。いえ、動画配信・・・・・・？」
「俺のお仕置きの方法を詳しく言わんでいい。大体お前らも同じ目に遭いそうだろうが」

成程です。それは本気でマズイですよね？心当たりがありすぎて、ゆーさんに同情してしまう自分が悲しくなってきました。

「とにかく、全員オッケーなようだな。んじゃ、土曜の朝１０時に校門前で待ち合わせだ、水着とタオルを忘れるなよ」

そんなゆーさんの締めの台詞とほぼ同時に、西村先生がドアを開ける音が教室に響きわたりました。

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

すっごくどうでもいいですけど、皆さんの学校ってプールありますか？ウチは何故かありませんｏｒｚ　そのくせ水泳部はあるというわけがわからないよ？状態です。いいな～プール羨ましいな～。実は作者も水泳部ですが……どこで練習しろと？

まあ、自分のことはいいですがね……今回は前回より短めですみません。次回はもう少し多めに書けるかな？これ合わせて４話程度になるかと思います。

読んでいただきありがとうございます！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（前書き）

どうも糖分摂取魔です！プール回その？ですね♪

う～む、難しい。何が難しいって水着をどう表現すればいいのか悩みます……。着たことのない水着とかどう表現しろと……？すみません、作者の知識不足です。

ま、いいかな？とりあえず行きましょう！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？

「おはよー。絶好のプール日和だね」

そして待ちに待った週末、雲一つない青空の下。先に来ていた皆さんと談笑していると、アキさんがやってきました。

「おはようです♪アキさん、お待ちしてました」
「おはようじゃ明久、良い天気じゃな」
「おはようございます明久君、今日は良い一日になりそうですね」
「おはよう吉井君。待ってたわよ」

姫路さんとヒデさん、そして優姉さんも来てくださって良かったです。こういうのは皆さんで楽しまないと面白くありませんからね？

「あ、秀吉のお姉さんも来てくれたんだね（こ、これってここに美波も加わればまさに天国じゃないかっ！？イヤッッホォォォオオォオウ！）」

・・・・・？何か知りませんがアキさんがガッツポーズしてますね？

「・・・・・・ってあれ？ムッツリーニもいるじゃない。おは・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・！！（カチャカチャカチャ）」

「あー、アキさん。こーさん来た時からこうなんですよ。忙しくて手が離せないんですって」

鬼気迫るような表情でカメラのお手入れをしているこーさん。来たときは流石の自分も少々引きましたよ？一体何がこーさんを駆り立てるのでしょうね？

「ムッツリーニ。準備はいいけど、無駄になっちゃうんじゃない？」
「・・・・・・・・・・・・なぜ？」
「いや。だってさ、ムッツリーニはどうせ鼻血で倒れちゃうんじゃないかな」

確かに。葉月さんと（何故か）自分とヒデさんのチャイナ服ですら鼻血出してましたもんね。

「・・・・・・・・・・・・甘く見てもらっちゃ困る」

そう言ってこーさんが持っていたスポーツバックを開けて見せてくれました。

「・・・・・・・・・・・・輸血の準備は万全」
「うん。最初から鼻血の予防を諦めているとこはホント男らしいよね」
「いやいや、と言いますか何処でコレ入手したんですか・・・・・・？」

入っていたのは携行用の血液パック。つくづくこーさんの正体が気

になる今日この頃です。

「そうそう準備と言えば、造と秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？忘れずに買って来た？」
「イエスです！当たり前ですよ」
「うむ。無論じゃ」
「そうなのよね・・・・・アタシが二人の水着を選びたかったわ」

そんなことになれば、優姉さんどんなもの持ってくるかわかりませんからね。断固拒否です！

「「ちなみに買って来た水着じゃが（ですが）・・・・・・・・・・・・」」
「・・・・・・・・・・・・・！！（くわっ！）」
「「・・・・・・・トランクスタイプじゃ（です）」」
「「バカなぁぁぁああっ！！」」
「そんなっ！？」
「（ホッ）」

何故か地面に突っ伏すアキさんとこーさん。『信じられない、一体何を考えているの？』とでも言いたげな優姉さん。そして何故かホッとしている姫路さん。まったく貴方がたは何をしているのですか？

「最近お主らは、ワシらのことを女として見ておるようじゃからの」
「そう言うわけで、二人で一緒に買いに行ったんですよ。自分たちが男であると再認識してもらう為にも・・・・・あの、聞いてますか？」
何で（姫路さん以外）全員そんなに世界の終わりを見たかのような反応でしょうか？

「酷いよ二人とも！君らは僕のこと嫌いなの！？」
「・・・・・・・・・・見損なった・・・・・・！」
「今からでも遅くはないわ！買いに行くわよ二人ともっ！」
「べ、別にいいのではないでしょうか？」
・・・・・理不尽なことを言われている気がするのは気のせいでしょうかね？

「・・・・・・ヒデさん、今日は頑張りましょうね！」
「・・・・・・うむ。あやつらの目、覚まさせようぞ！」
絶対にわからせてやりますよ！貴方がたに世界の真実をッ！

・・・・・タタタタッ

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」
「わわっ！？」

ヒデさんと二人で固く決意していると、アキさんの背後に何かが跳びついてきました。

「もう葉月ってば、アキがビックリしてるでしょ？」
「ああ、やっぱり葉月ちゃんだ。おはよう」
「えへへー。二週間ぶりですっ」

やってきたのは島田姉妹ですね。葉月さんは召喚大会以来でしたっけ。相変わらず元気そうで何よりですね♪

「葉月さん、お久しぶりです。おはようございます」
「あっ！召喚獣のお姉ちゃんも一緒だっ♪」
「・・・・・・・・・・・召喚獣の・・・・・・・お姉ちゃんって」

召喚獣はわかりますが、お姉ちゃんって・・・・・・。いけませんね、葉月さんにも教えなくてはならない世界の真理が今日ここにあるようです。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですか？」
「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん。でも葉月ちゃんにはプールが深すぎるかなって思ってね」

ああ、確かに。高校のプールですからそれなりに深いですよね。

・・・・・・ん？そう言えばアキさんが昨日やけに自分に浮き輪を

持ってくるように言ってましたような・・・・・・？

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから・・・・・・」
「いいじゃない。折角だし妹さんにも楽しんでもらいましょ、島田さん？」
「あぁ、木下さんも来てたのね♪ところで坂本はまだ来てないの？ウチが最後だと思ったのに」
「いえ、もう来てますよ？　今職員室に鍵を借りに行って・・・・・・あ、丁度戻ってきたみたいです」
噂をすれば戻ってきたみたいですね。お疲れ様です、二人とも。

「おはよう雄二、霧島さん」
「おう。きちんと遅れずに来たようだな」
「・・・・・おはよう」
「お兄さんたち、おはようですっ！」

ゆーさんたちに元気よく挨拶する葉月さん。清涼祭の時も思いましたが、中々社交的な子ですね。

「ん？チビッ子も来たのか」
「チビッ子じゃないですっ、葉月ですっ！」
「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」
「はいっ」

楽しそうに葉月さんの頭にポンポンと手を置くゆーさん。ふむ、や

っぱりゆーさんって子供好きですよね。優しいお顔になってますよ♪そして霧島さんも誇らしい顔をしています。葉月さんもアキさんとゆーさんによく懐いてますね～。見てて微笑ましいですよ。

「・・・・・雄二は子供好き。将来何人兄弟は欲しい、造？」

「さて！早速着替えるとするか。女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行ってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ！」

「そうですねっ！さっさと着替えましょう！」

・・・・・いつの間にか霧島さんに『造』って呼ばれてますね。そう言えば自分、坂本家の子供に成りかかってましたね。もう忘れたい記憶ですが。アレ以来、霧島さんが自分のことを本格的に息子を見る目で見られている気がするのは、気のせいであると信じたいです。

とりあえずゆーさんの言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれます。優姉さんと姫路さんと島田さんは霧島さんに、自分とアキさんとこーさんとヒデさんと葉月さんはゆーさんに・・・・・ん？

「こーら？葉月さんはお姉さんたちと一緒に行かないとダメですよ？」

「そうだよ。そして秀吉と造も女子更衣室でしょ。霧島さんについて行かないと」

「えへへ。冗談ですっ」

「「ワシ（自分）らは冗談じゃないのじゃが（ですが）・・・・・？」」

そ、そろそろ自分もアキさんにガツンと言うべきでしょうかね？ヒデさん共々、扱いが日に日に酷くなる一方ですが？

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下、月野」

「し、島田！？　ついにお主までそんな目でワシらを見るように！？」

「ちょっと！？嫌ですよ！女子更衣室で着替えるのだけは！？ゆ、優姉さんは止めてくれますよね！？」

「ああ、二人とも着替えさせて欲しいのね？わかったわ♪」

「「わかっておらぬじゃろ（いませんよね）！？」」

「あの・・・・・それなら、二人はどこか別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」

グッ・・・・・皆さんどんな目で自分たちが見られているのかが凄く気になりますよ？

「ぬ、ぬぅ・・・・・・。得心行かぬが、この際我慢じゃ・・・・・・」

「そ、そうですね。水着姿を見せればきっと皆も自分たちの見る目を変えてくれますよっ！」

とりあえずは、ここは戦略的撤退と言うことでヒデさんと共に渋々校舎の空き教室に向かうことにしました。ああ、泣いてませんよ？今日のことがワクワクしてて、寝不足で欠伸しただけです。

「・・・・・ヒデさんっ！自分たちの誇りとプライドを今こそ示しましょうっ！」
「・・・・・うむっ！お主がワシの戦友（とも）で本当に良かったぞい！」

☆

「なんじゃ・・・・・？この地獄絵図は」
「まさに阿鼻叫喚ですね。平和なはずのプールサイドが正直怖いくらいの絵ですよ？」

着替えるのに少々手間取りましたが、何とかプールサイドに辿り着きました。辿り着いたのはいいのですが、凄いことになってますね？アキさんとこーさんは鼻血の海に沈みかかり、ゆーさんは霧島さんに脱がされかけています。

そして優姉さんはキラキラした目で自分たちを見つめ、姫路&島田ペアは恨みの籠った目で自分たちを見つめてきます。一体なんでしょうか？

「・・・・・まあこれもいつものことかの？すまぬ、少々待たせたの」
「着替えと校舎がプールに遠かったせいで遅れちゃいました」
「☆●◆▽□♪◎×（ううん。そんなに待ってないよ二人とも）」
「落ち着け明久、ここは地球だぞ。そして落ち着け翔子、これは犯

罪だ」

ゆーさんが霧島さんに脱がされかかりながらも、冷静かつ的確なツッコミを入れてきます。ある意味羨ましい才能（？）ですかね？

まあ、それはともかくいよいよ自分たちの姿を見てもらいましょう！絶対にこれで男であると証明して見せます！

「ど、どうじゃ・・・・・・？これで少しは、ワシらも男らしく見えるかの・・・・・・？」

「ちょ、ちょっとは自身あるんですよ？一生懸命店員さんに聞いて選びましたから」

おお皆さん、急に黙ってしまいましたね。これは成功でしょうか・・・・・・？

「わっ！お姉ちゃんたち、とっても可愛いですっ」

「「・・・・・・『可愛い』・・・・・・？」」

あ、あれ？葉月さん、何でそんな反応なのですか？

「島田妹よ、何を勘違いしておるのじゃ？」

「そうですよ？自分ら二人は見ての通り男ですよ？」

「ふぇ？でも、葉月はお姉ちゃんたちの水着、女の子用だと思うです」

「「な、なんじゃと（なんですって）！？」」

ば、バカなっ！？そんなはずありませんよ！ちゃんとお店で購入したものですよ！？それが可愛いですって？女物ですって？店員さんに『トランクスタイプのカッコいい系をください！可愛いなんて言われないヤツをっ！』と、あれだけ念を押して選びに選んだ逸品ですよ！？

「ア、アンタたち・・・・・・！どこまでウチらを邪魔したら気が済むの・・・・・・！」

「二人とも卑怯です・・・・・・！トランクスだなんて私たちを油断させておいて、最後の最後に裏切るなんて・・・・・・！」

「あぁ、二人とも？アタシをとうとう堕としにきたのね・・・・・・♪」

「秀吉に造っ！やっぱり君たちは僕らの気持ちを察してくれていたんだね！」

「・・・・・・・・・・・・永遠の友情と劣情をその水着に誓う」

ひ、酷いですっ！何でそこまで言われないといけないのですか！？れ、冷静に自分とヒデさんの格好を見てみましょうっ！

自分はアクティブウェアの、ヒデさんはスポーツタイプの水着です。上はヒデさんは緑のショートトップ、自分は青の袖付きフィットネスタイプです。下は黒の水着パンツに重ねた短パンのようなものになっています。おしゃれの為に一番上のボタンは外してあり、間違いなくトランクスタイプの格好です。何にもおかしい所はありませんね？

「ち、違うのじゃ！ワシらは本当に男物を買った筈なのじゃ！のう、造よ！？」

「そ、そうですよ！きちんと店員さんに『トランクスタイプが欲しいです』って言いましたよ！？」

「多分、その店員さんは勘違いしたんでしょうね・・・・・。何も知らずに二人に『トランクスタイプが欲しいです』何て言われたら」

「・・・・・そうね。ウチでも間違いなくそんな感じの水着を勧めるわ」

「造くんと秀吉のソレは正式には『タンキニ』ね。可愛いというよりカッコいい系の水着よ。ユニセックスなファッションが似合う、二人ならではの正統派な格好ね。ホントなら二人はもっと可愛いのもイイけど・・・・・これはこれで♪」

・・・・・何でこんなことに？確かに妙な勧め方だなとは思いましたが。てか優姉さんはガチで評価しないでください。詳しすぎですし、こーさんですか貴女は？そもそもタンキニとかユニセックスとかって何ですか？

「そ、そうじゃったのか・・・・・。ワシらも何故男物の水着に上があるか気になってたんじゃが・・・・・」

「て、てっきりこれってそんなデザインか日焼け予防のものかとばかり・・・・・」

かくして、自分とヒデさんの計画は水に入る前に打ち壊されました・・・・・・ｏｒｚ

「・・・・・ヒデさん、次は頑張りましょうね」

「・・・・・・うむ。造よ、お主だけがワシの心の安らぎじゃ」

無念・・・・・・っ！ですが諦めません！自分らの尊厳の為にも戦い抜くのですっ！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

タンキニって何だよ？って方はぐぐってください。……とは言えませんね（汗）えっとですね？ようはタンクトップとボトムが別れて露出が少なくて洋服っぽいヤツって言えばいいのかな？う～む、いい表現が思い浮かばない……

ま、そこは気合と根性で妄そ……ではなく想像してください。本当にすみません、表現力ない作者で（涙）

読んでいただきありがとうございました！また次回もよろしくです！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（前書き）

どうも糖分摂取魔です。その？ですね。

今回ちょっと短めです。前回が張り切り過ぎたのかな……（汗）

それじゃ今日も頑張って行きます！よろしくです。

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？

とりあえず、水着のことは諦めて今は大いに遊ぶことにしました。
自棄になったのかって？ナンノコトデスカ？

準備体操を終え、優姉さんとプカプカ浮いていると復活したアキさんたちが跳び込んできました。ちなみにヒデさんはこーさんの（鼻血の）手当てをしている所です。しばらくしたら自分が交代に行きましょうね。

「ん～～～～気持ちいいね～」
「そうね～やっぱりこの季節はプールが気持ちいいわ♪」
「ふふふ♪お二人ともいい跳び込みっぷりですね♪」
「ホント。まさに水を得た魚って感じよ二人とも？」

うむ、アキさんと島田さんはホントに元気がいいですね。見てて楽しくなるくらいに。とそこに、このお二人とは対照的に、静かに梯子を使い水の中に入ってきたのは姫路さんです。

「わぁ！明久君、美波ちゃん、木下さんそれに月野君も、皆さん泳ぐの上手ですね～」
「ん～まあ人並みくらいはね♪・・・・・・あれ？姫路さんひょっとして？」
「瑞希って水泳苦手なの？」
「あら、そうなの？ふふふ♪優等生にも苦手なことはあるものね」

あら、そうなんですか？まあ確かに、姫路さんがすいすい泳ぐ姿はあまり想像できませんが。・・・・・ですが優姉さんは知らないでしょうが、姫路さんがもっと苦手な教科（？）は恐らく、いや間違いなく家庭科だと思いますよ？関係ないですが。

「はい。恥ずかしいですけど、水に浮く程度しか・・・・・月野君はどうやって泳げるようになったんですか？」

「ん？どうして自分が対象に？えっと、言うなれば特訓して・・・・・でしょうか？」

「あぅ・・・・・やっぱりそうですよね。私も小さいころからスイミングスクールにでも行くべきでした」

「？？？（何でしょう？会話が噛み合ってないような？）」

「（月野君くらいの歳の頃からちゃんと泳げるようになっておくべきでしたね）」

一応小さい頃から色々なものを習わされてましたからね。人並み程度には泳げますよ？はい、そこっ！今も小さいだろうって言いましたねっ！やかましいですよ。それと、微妙に姫路さんに変なこと考えられている気がしますが・・・・・

「だったらウチが教えてあげるわ！いつもお世話になっているし♪」

「そうね、アタシも手伝おうかしら？姫路さんさえ良ければ、ね♪」

「は、はい！よろしくお願いします！」

「任せてよ！ウチこう見えても水泳は得意なのよ」

「ふふっ、右に同じく♪」

あらら♪優姉さんはともかく、島田さんと姫路さんはいつもと立場

が変わったって事ですね。中々面白いかもです。

「・・・・・こうして見ると美波がAで姫路さんがFみたいだよね♪」

「ああ、なるほど。学習面でAクラスの姫路さんと運動面でAクラスの島田さんってことですね？そうなると学習も運動もAクラスの優姉さんは改めて凄いです♪」

アキさんと二人でそう言うと、何故か優姉さんと島田さんのお二人はご自身の胸に手を当てて何やら暗い顔をしています。あらら？誉めたつもりでしたが、どうしたのでしょうかね？

「・・・・・Aクラスね（・・・・・来年には、きっと）」

「・・・・・Aクラスね（造くんは大きいのがいいのかしら？）」

『・・・・・雄二。ちなみに私はCクラス』

『？何を言っているんだお前は？』

『ム、ムッツリーニどうしたのじゃ！？鼻血をまた吹き出しおって！？』

『・・・・・・・・・・もっと詳しく教えろ』

『じゃから、どうしたのじゃと言っておろうが！？』

・・・・・何でしょうか？突然空気が変わりまくりましたね？正直何か恐ろしいです。

「・・・・・瑞希、わかったわアンタが泳げない理由」
「・・・・・ええ、アタシもわかった気がするわ」
「え？なんですか？」
「そんな大きな浮き輪をずっとつけているからいつまで経っても泳げないのよ！」
「さあ、姫路さん？外しなさいな。そしてそれをアタシたちにわけなさい！」
「ちょ、ちょっと二人とも目が凄く怖いですよ！？無茶苦茶ですし！？」

な、何でしょう？優姉さんと島田さんから、よくわからないオーラが発せられています。これは邪魔してはいけないと本能が警告してますね・・・・・・

「造くん、それに吉井君？二人はちょっとあっちに行っててね？」
「ちょっと時間かけて瑞希を特訓するわ。邪魔したらわかってるわよね・・・・・・？」

「「了解ですっ！！」」

すみません、姫路さん。多分優姉さんと島田さんなら、流石に姫路さん相手に酷いことはしないと思うので、ここは心を鬼にしてお二人に任せます。決して二人が怖くなったとか、そんなことはありませんよ？

「あ、明久君！月野君！待って下さいっ！美波ちゃんたちが怖いんですよぅ！？」
「さあ、瑞希？頑張って泳げるようになりましょうネ？」

「それは無駄な脂肪なの。たくさん泳いでいっぱい燃焼させればすぐ泳げるようになるわ♪」
「い、嫌あああああああああああああああああああ！？」

「・・・・・・アキさん。何か、見てはいけない物を見そうになったのでしょうか？」
「・・・・・・どうだろ。きっと皆、何かを抱えて生きているんだよ」

こ、これもまた青春なのでしょうかね？とりあえずアキさんとしみじみとそんなことを言いながら、他の皆さんの所へ行くことにしました。

『あ、あの。良い事ばかりじゃないんですよ？肩凝って大変ですし・・・・・』
『『それでもいいの！肩凝りくらい我慢するわ！』』

何故か最後の二人の言葉からは、魂を感じ取りました。

☆

アキさんと一旦分かれてから、ヒデさんとこーさんの様子を見に行きます。あれだけの出血ですからね、病院に行かせるべきかと思い

ましたが・・・・・・・

「ヒデさん、お疲れ様です♪こーさんはどうですか？」
「おお、造か。うむ、峠は越えたようじゃ」
「つくづく思いますが、自分ら何故にこんなにも臨死体験が多いのでしょうね？」
「・・・・・・言うな造よ、悲しくなるぞい」

そうですね・・・・・・・ま、これが自分たちらしいのでしょうが？

「それはそうと、ヒデさんも遊んできてください。まだ入ってないでしょう？」
「む？じゃがムッツリーニはどうするのじゃ？」
「自分が代わりますよ。行って来てください」
「う～む。じゃがそれじゃと造に悪いのう」
「・・・・・・・・・・・・二人とも行くといい」

おや、こーさんお目覚めですか？まだフラフラですが、あまり無理しない方がいいかと。

「いやいや、こんな状態のこーさんをほっとけませんよ？」
「そうじゃな。お主今まで生死の境を彷徨っておったのじゃぞ？」

最近じゃこういうことに慣れてきたせいで、あまり驚かなくなった自分が怖いですね。

「・・・・・・・・・・・・・・・頼むっ！行ってくれ。俺は大丈夫だ」

「「いや、しかしですね（のう）・・・・・・・」」

「・・・・・・・・・・・・・・・この通りだ」

そう言ってこーさんは頭まで下げてきました。頭を下げてまでそんなに自分たちに気を使うなんて、こーさん優しいんですね！やっぱり良い人です♪

・・・・・・そうですね。ここはこーさんの言うことを聞きましょうかね。

「わかりました、こーさんっ♪ですが無理はなさらぬよう気をつけてくださいね？」

「何かあればすぐに言うんじゃぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・（コクン）二人にはプールがよく似合うから」

そう言って、こーさんはまた横になりました。ま、ちょこちょこ様子を見ればいいでしょうね。

「ふふふ♪ありがとうございます。こーさんも、復活したら遊びましょうね」

「それじゃワシらは行くぞい？造、では行くかの？」

「ええっ！それじゃ思いっきり遊びましょう♪」

さて、まだまだプールは始まったばかりですから！遊びつくしまし

ょうね♪

『・・・・・・・・・・・・（二人のツーショットは最近の一番人気。シャッターチャンスは逃さない）』

・・・・・・何か今、こーさんの方から邪気（？）を感じたような？

☆

こーさんと離れてヒデさんと仲良く泳いだり水遊びしたりと、ガラにもなく遊んじゃいました。え？年相応だろって？・・・・・・ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ♪まったく良い根性ですね♪

それにしても、ヒデさん演劇部の割には泳ぎ上手です。フォームが綺麗で魅せられますよ。

「ふぅ、ヒデさんも中々泳ぎお上手ですね？」

「そうかの？それを言うなら造もじゃろ？まあ、そう言ってくれるのは嬉しいが、ワシらよりあやつらの方が上手いじゃろ。ホレ見てみい」

そう言ってヒデさんが指さした先はアキさんとゆーさん、霧島さんがトップスピードで泳いでいる姿でした。しかも、三人とも絵になる綺麗な泳ぎです

と言いますか、少々早過ぎでは？霧島さんはともかく、アキさんとゆーさんは鬼気迫る泳ぎですね？

『明久っ！まずはお前が溺れろっ』
『嫌だねっ！雄二と心中するつもりなんてさらさらないよっ！』
『・・・・・雄二、私と共に沈んで・・・・・』
『お前は怖いわっ！？明久っ！テメェ翔子に何吹き込みやがった！？』
『霧島さんっ！そこの霧島さんの旦那を止めてっ』
『・・・・・旦那、そして私が奥さん（ポッ）』
『お兄ちゃんたち、泳ぐのとっても速いです！』

「「・・・・・？何じゃろな（何でしょうね）？？？」」

とりあえず、葉月さんが楽しそうなので良いのでしょうかね？危なくなれば止めますが。やっぱりアキさんもゆーさんも仲がいいのでしょうかね？某猫と鼠の関係でしょうか？仲良く喧嘩しな的な？

そんなわけでヒデさんと二人でアキさん・ゆーさん・霧島さんの三人によるデットヒートをしばし観戦しました。

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（後書き）

ありがとうございます、その？でした。

残念ながら今回、あんまり造弄れませんでした。う～ん、ちょっと絡ませ難かったですね。何だかんだで、次回はプール回最後です。次回はちゃんと弄れるように頑張らないと！

読んでいただきありがとうございます！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。プール回ラストですね。

なんかまた、親にグチグチ言われてＰＣが取られそうです（涙）まさかバレてるのかな？一応親が寝た時にパソ使っているのですが…。ひょっとしてＰＣ使った後って、履歴とか残るんですっけ？…

ま、いいや♪とりあえず更新できる時にさっさか更新しますね。今回もよろしくです！

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？

最近思うのです。こういったみんなで過ごす平穏な日常も、少しでも気を抜けば命にかかわる非日常へと姿を変えることがあると・・・・・・

あれから三人と葉月さんのじゃれ合い（？）を見ながら、ヒデさんとプカプカ浮きつつのんびりしていました。やっぱり意外とヒデさんと自分って似ているのでしょうか？本質的に。そんなことを思いながらのんびりしていると、知らない女子が二人ほどプールサイドに来ていました。

アキさんたちの知り合いさんみたいですね。記憶の限りでは、知らない生徒さんですが。その二人も混ざっての女子による3対3のバレーボールを皆さんで観戦し、女子が休憩に入った時に事件は起きました。

「ところで、どうしてプールを借りることができたんですか？」

姫路さんが不思議そうに尋ねてきます。ああ、そう言えば事情を話していませんでしたね。

「まぁ、ちょっとイロイロあってね」

「プールのお掃除を引き受ける交換条件として、一日貸し切りにしてもらったんですよ」

アキさんたちの面子に関わりそうなので、ここはフォローしときましょう。

「プール掃除？それならウチも手伝おっか」
「私もお手伝いします。遊ぶだけじゃ悪いですし」
「アタシもやるわ♪」
「・・・・・雄二たちがやるなら、私も」

本当に皆さん優しいですね♪手伝うのが当然なんて思えるなんて、良い方たちです。

「ありがとう。でも、掃除は僕らだけで充分だよ。道具も5人分で借りちゃったわけだし」

アキさんもやんわり断ります。皆さんに申し訳ないと思っている顔ですね？あれは。

「そうですか・・・・・」
「う～ん、道具がないなら仕方ないわね」
「あ、そうでしたっ！お手伝いできない代わりに・・・・・・」

「「「「「っ～～～～～～～～～！？」」」」」
「（ビクッ！？）み、瑞希・・・・・・！？」

・・・・・！？今本能が何かを告げました。自分以外もいつものFクラスメンバーの全員が何かを感じ取ったみたいです！？これは、もしや・・・・・？

「ちょっと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙ってたんですけど・・・・・・」

確認・把握・全員集合！目まぐるしいアイコンタクトがいつものメンバー内でやり取りされました。間違いなく『アレ』が来るはずですっ！

「実は今朝作ったワッフルが四つ・・・・・・」

「第一回っ！」（ゆーさんの声）
「最速王者決定戦っ！」（アキさんの声）

「「ガチンコ水泳対決」」（ゆーさん&アキさんの声）

「「「イェーッ！」」」（自分&ヒデさん&こーさんの合いの手（哀の手？））
「「「えっと・・・・・・？？？」」」（状況がわかっていない姫・優・霧）

「アンタたち・・・・・・ゴメン、ゴメンね」（島田さんのすすり泣く声）

いいのですよ、島田さん。貴女は自分たちの勇士を見ててくださいね・・・・・・？

「明久、ルール説明だ！」
「オッケー！ルールはとっても簡単！このプールを往復して、最初にゴールした人が勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です！」

ええ、簡単な話です。この勝負に勝った者が惨劇を回避できるというだけのことなのですから。二位でも三位でも駄目なんです。一位にしか生き残る権利は与えられていないのです。

「バカなお兄ちゃんたち、突然どうしたですか？」
「葉月、このお兄ちゃんたちは戦って手に入れなければならないものがあるのよ」
「か、かっこいいですっ！プライドを賭けた勝負ってやつですねっ」

賭けているのは自分たちの命なのですがね？重いです、果てしなくこの勝負重いですよ。

と、言うわけで・・・・・・

☆

「はい、行くよ！位置について・・・・・・・よーい・・・・・・」

自分・アキさん・ゆーさん・ヒデさん・こーさんの５人で飛び込み

台（処刑台）に立ち、アキさんたちの知り合いの水泳部員さんのコールに皆さん緊張が走ります。各々目的は一緒、ただ単純に自身が生き残ることが全てです。ですがこの勝負、何が何でも譲れませんよっ！

「・・・・・・スタートっ！」

『『くたばれぇぇっ！！』』

はい・・・・・？何故かアキさんとゆーさんは飛び込まずに乱闘（？）を始めたようですが、いいのでしょうか？とりあえずあの二人には悪いですが、本気で勝ちに行きましょう！

『あの？二人とも勝負はいいのでしょうか？』

『・・・・・雄二、余裕？』

『ねぇお姉ちゃん？どうしてお兄ちゃんたちは水泳なのにプールに入らないですか？』

『あの二人も必死なのよ・・・・・お願い、責めないであげて・・・・』

『あら？でもあっちの三人はもう折り返しね』

『ホントだね～♪おーい、取っ組み合いもいいけどそろそろ決着ついちゃうよ？』

『『何だとっ！？』』

『そうは行くか、明久！お前は秀吉を！俺は造を止める！』

『了解！ここは一時休戦だね！ムッツリーニはどうするの！？』

『アイツは二人を止めてからだっ！今の奴は疲労している、まずは

あの二人を！』

・・・・・ちぃ！嫌な同盟が結ばれたようですね？これからラストって時にヒデさんにはアキさんが、自分にはゆーさんがそれぞれ妨害してきます。

「ゆーさん！これはプライドを賭けた真剣勝負でしょうっ！？」
「悪いな。命とプライド、天秤に掛けたら命が勝った」

「明久よ！お主は隣じゃろう！？」
「ダメだよ、秀吉！ここは通さない！」

自分と同じようにヒデさんも止められましたね・・・・・・くっ、絶対に勝たねばっ！

「グゥッ！？放して、ください、な・・・・・・！」
「死ん・・・でも・・・・・・放すかっ！」

「明久、放す・・・・・・のじゃ！」
「逃がす・・・・・・もんかぁぁあっ！」

四人が四人、全員が必死の取っ組み合いです。ここで状況を変えたものが勝者になるんですからっ！負けませんよっ

ズルッ×２

・・・・・へ？『ズルッ』？何の音ですかね？てか変に胸元が涼しい気が？

「あ、明久君に坂本君！何してるんですか！」
「へ？」
「は？」
「あ、アンタらそれって・・・・・・！？」
「・・・・・・ゆう、じ？（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！）」

姫路さんと島田さん、霧島さんがアキさんとゆーさんの手の中にある何かを指差しています。

「あはは・・・・・・。コレって秀吉の水着に似ているね？」
「これは・・・・・・。造が着ていたヤツにそっくりだな？」

「んむ？そう言えば胸元が涼しいのう」
「ああ、なんだ。上が脱げただけですか」

ヒデさんも自分も水着の上が脱げただけのようです。流石に女性なら問題ですが、自分たちは男ですからね。それくらい何も問題になどならな・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・死して尚、一片の悔い無し・・・・・・！！」

・・・・・・？こーさん？アンタ何をそんなに興奮して・・・・・・！？こーさんの血の量、凄いやばくないですか！？プールがどんどん血で染まっていきますよ！？

「ってこれ秀吉の水着の上！？ごごごめんなさいっ！神に誓って僕は何も見ていないから！」

「つ、造っ！早くコレを着ろっ、いろんな意味で翔子がヤバい！？」

「って、待つのじゃ明久に雄二よ！ワシらは男じゃぞ！」

「そうですよ！？自分らの上半身さらしたくらいでどうしてそこまで慌てるのですか！」

何で！？貴方たちは自分らをどう見ているのか、今一度お聞かせ下さいな？そうこうしている間にもプールはこーさんの鼻血で赤く赤く染まっていきます。Ｂ級映画もビックリの迫力ですね？

「ちょっと！？ムッツリーニが本気でマズイ！血が止まらないよ！？」

「き、木下に月野っ！アンタら早く胸を隠しなさい！土屋の血が止まらないから！」

「いいいイヤじゃっ！ワシらは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじゃ！」

「そ、そうですよ！？いくらなんでも、この自分とヒデさんの扱いはないでしょ！」

「二人とも！わがままを言っちゃダメです！土屋君が死んじゃいます！」

だからっ！何でそう自分たちを女性扱いするのですかっ！？納得行きませんよ！

「・・・・・雄二、脱ぐ。お仕置き」
「ま、まぁ待て翔子。相手は造だぞ・・・・・・って、本気で脱がすなっ!?」
「あらあら・・・・・愛子、救急車の手配頼めるかしら?ついでにカメラも頼める?」
「はーい。やっぱりFクラスの皆は面白いねぇ。カメラはムッツリーニ君の使おう♪」
「バカなお兄ちゃん達、いつも楽しそうで羨ましいですっ」
「お姉さま、愛しています・・・・・」

・・・・・結局こーさんは、何度も峠を迎えながら皆と救急隊員の懸命な延命措置で命を取り留めました。まあ今回は、どさくさに紛れて姫路さんの殺人ワッフルを食べなくてよかったですし、誰の命も失わずにすんだので良かったのでしょうかね?

☆

明久Ｓｉｄｅ

週明けの朝、僕と雄二は鉄人に呼び出されていた。

「・・・・・吉井、坂本、ちょっと聞きたいことがある」

現れるなり低い声で僕らに聞いてくる、朝の挨拶もなしに。

「断る」

「黙秘します」

それに対し、僕と雄二は拒否の構えを示すと鉄人はブルブルと震え始め・・・・・・・

「・・・・・どうして・・・・・どうして掃除を命じた筈なのにプールが血で汚れるんだ!?　鉄拳をくれてやるから、生活指導室で詳しい話を聞かせろ!!」

教室中を揺るがすような大音響、心外だよ!僕らは寧ろ誉められる立場だというのに!

「説教なんて冗談じゃねぇっ!　むしろ死人を出さなかったことを褒めてもらいたい位だ!」

「そうですよ!　本当に危ないところだったんですからね!」

「黙れ!お前らの日本語はさっぱりわからん!ええぃ、月野はどうした!アイツしか頼りがおらん!」

「造ならあそこだ・・・・・・」

そう、造と言えば・・・・・・

『造っ!やっと帰ってきたぞっ!とりあえず補給させろ!そしてこ

のお前の裸の写真について詳しく聞かせろっ！』

『『造くんっ！コレ着てみましょうっ！絶対似合いますっ！！！』』

『ちょっと！？何でこの写真があるんですか、日高先生！？そしてスクール水着なんか持って何する気ですか先生たち！？』

『ふふふ♪師匠が寂しがると思って、写真撮っちゃった♪あっ、もちろん秀吉のもね♪』

『あ、姉上っ！？何てことをしてくれたのじゃ！？』

『ゆ、優姉さんっ！・・・・・って、先生方が怖いっ！ヘルプッ！誰かヘルプっ！？』

何でも、あの造と秀吉の衝撃の写真が売れまくったそうで（あの四人の先生はもちろん、聞く所によると男の先生も買ったとか？）写真の詳細を聞かれまくり、更には二次撮影会が開かれかかったようだ。あれは僕らには刺激が強すぎる・・・・・

「くっ！？月野くらいしかまともなヤツがいないからな・・・・・・月野が無理なら仕方ない、お前らと拳で語り合うことにする！」

「ええい、この暴力教師め！　逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

「貴様ら、今度は反省分とプール掃除では済まさんぞっっ！！」

その後、必死の抵抗空しく僕らは鉄人に捕まった。殴られながらも一応事情を説明すると、鉄人はため息交じりに、

「・・・・・今度の強化合宿の風呂は、月野と木下のことを考えねばな・・・・・・」

と呟いているのが聞こえた。

番外編：プールサイドは～夢の楽園（エデン）？～その？（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

結局、造が関わっても結末は大きく変えることは出来ませんね（汗）
このメンバーらしいと言えばらしいのでしょうか？そしてブレない先生たち（笑）

そう言えば、番外編を入れてしまい、ちょっと時期がわかりにくいので説明です。大体こんな感じですかね？

試召戦争→ラブレター騒動→清涼祭→如月ハイランド→プール回→強化合宿→アルバイト

的な感じになっています。原作とほとんど時期的には同じですが、次回からのバイト編は強化合宿後のお話にしています。原作では確か、バイトの後に強化合宿でしたよね？些細なことでしょうが、あるキャラ的に強化合宿後の方がいいかなと思いまして……

わかりにくくてすみません。読んでいただきありがとうございました！

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～前編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

いよいよバイト編ですね。バイト編終わったらどうしましょうか…一応、玲さん襲撃もとい、一学期末編は頭らへんは書いたんですが……ま、これはバイト編が終わってからでいいですかね？

とりあえず早速行くよ！相変わらずの無法地帯ですが、今回もよろしくです！

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～前編

「つーちゃん～。甘いもの食べたいわ、何か作って～♪」
「それ、そっくりそのまま貴女に返します母さん。自分で作ればいいじゃないですか？」
「嫌よ、疲れるもの！ねーねー作ってよつーちゃん～。フォンダンショコラがいいわ～♪」

あの楽しかった強化合宿を終え、しばらく経ったある日のこと。久しぶりに家でのんびりくつろいでいると、母さんに捕まりました。駄々を捏ねられるというおまけつきでね。母さんはもう少ししっかりすべきだと自分は思いますよ・・・・・・

「と言いますか、母さん作れないわけではないのですし、自分で作りましょうよ？自分も食べたいですし。てか母さんの手料理を最後にいつ食べたのか、本気で記憶にありませんが・・・・・・」
「つーちゃんのが食べたいの～！食べたい食べたい、たーべーたーいー！！」

・・・・・我ながら恥ずかしい母親ですよ。貴女はいくつですか？子供ですか？

「ってあれ？日高せ・・・・・・ではなく、サクヤさんはどうしたんですか？」
「そうなのよ～！サクちゃんが今日からお出かけでおやつのデザートがでないのよ～」

いつもは日高せ・・・・・・ではなく、サクヤさんが母さんの料理を作っているんですよ。まぁそもそもサクヤさんは料理人でもなく自分の教育係だそうですが。何でも出来て凄いんですよね♪

・・・・・あぁ、なるほど。ですから自分に作れと？てか自分の息子に作らせますか、貴女は？

「ですがキッチンに行けば、サクヤさんの作り置きのデザートくらいあるでしょう？」

「・・・・・・な、なかったわよ？どこにいったのかしらね～？おほほ～♪」

・・・・・すでに食べましたね？と言いますか、その様子だと貴女自分の息子の分まで食べましたね？やりやがりましたか。これでもサクヤさんのデザート楽しみにしてましたのに。

「・・・・・食べ物の恨みは恐ろしいですよ？絶対に作りませんっ！」

「なっ！？つーちゃん！お母さんに向かって反抗！？反抗期ね！家庭内戦争ね！」

なして嬉しそうなんですか？どうやら暇でもあったみたいですね。この人は本当に子供ですから。

「うふふ～♪こっちもつーちゃんがデザート作ってくれるまで、お母さん戦うわよ～」

「（また始まった・・・・・・）それで？どうするのですか？」
「ふふっ、そうね～・・・・・・・・・よしっ！」
そう言って母さんは声高らかに宣言しました。
「デザートをつーちゃんが作るまで、つーちゃんのお小遣い無しっ！ついでにご飯もあ～げない♪」
「・・・・・・・・・・・・はい？」

☆

その翌日。Ｆクラスにて・・・・・・

「時代はバイトですっ！働かざるもの食うべからずですっ！」
「「「「は？」」」」
「ですから、皆さんバイトしませんか！？しましょうよ！」
「「「「何を言ってんの（おるのじゃ）？造」」」」
「・・・・・すみません、端折りすぎました。実は・・・・・・」

かくかくしかじか

「つまり、親にメシ抜きにされ・・・・・・」
「造のお母さんを説得するにはお菓子を作らないといけないと？」
「その上小遣いも止められ、材料を買えないじゃと？」
「・・・・・・・・・・・・造も苦労している」

はぁ、そうなんですよね・・・・・今週日高先生がいないことをいいことに、母さんやりたい放題好き放題やってます。まあ、日高先生がいても変わらないですが・・・・・・

てか、まさか母さんに小遣いまで止められるとは。何も買えなくて今正直ヤバいんですよね。母さんも少し考えれば小遣いを止めたら、材料が買えなくなることくらい気がつくと思いましたが聞く耳持たずでして・・・・・・

その辺はやはり自分の母親、どこか抜けてます。自慢できませんがねっ！はぁ・・・・・・

「それまた破天荒なお母さんだね・・・・・・（僕のとこも似たようなものかな？）」
「造、お前もまた苦労しているんだな・・・・・・・（俺も同じようなもんだしな？）」

やけに温かい目で二人が見てますね。同情するなら金をくれですよ・・・・・・

「じゃが急にバイトと言ってもどうするのじゃ？」
「実は凄いの見つけたんです。コレですコレっ！」
「ん～と？『ラ・ペディス』？コレ確か文月学園御用達のお店じゃない？」
「どれどれ？今週の土曜だけの募集だな。『１１：００～２０：００勤務　８８００円程度　未経験者歓迎！』だと？」
「・・・・・・・・・・・・日雇いで未経験者歓迎、怪しい」

まあ、そう自分も思いますがあまり贅沢言えない状況ですし？
・・・・・・それにただ単に切羽詰まっているだけかもしれませんよ？

「それでちょうど募集が五人までだったし、皆さん確かバイトがしたいと言ってたでしょう？少々不安ではありますが、条件も中々ですしどうかなと思いまして」
「ま、俺もちょうどバイト探してたし、面接に行くかな」
「そうだね。てか、造と同じで僕もちょっとヤバいことになってるし行くよ！」
「ワシも演技の幅が広がるかもしれん。行こうかの」
「・・・・・・・・・・・・カメラの購入資金の足しになる」

てなわけで、いつもの男子メンバーで行くこととなりました。まあ、どの道いい経験になるでしょう。このメンバーですから、何事も楽しみましょうかね♪

☆

「ああ・・・・・・。よく来てくれたね・・・・・・・。今日一日宜しく頼むよ・・・・・・・」
「は、はいです。宜しくお願いします、ですよ・・・・・・・？」

そうして土曜日、バイトの当日の朝。開店時間前に集合した自分たちを待っていたのは、生気が抜けかけ今にも倒れそうな店長さんでした。

見るからに、ヤバいオーラを発しています。少々不安になり、いつもの目の合図で全員で相談です。

「（ねえ、この店長さん大丈夫なのかな？）」
「（むう・・・・・何かきっかけがあればすぐに富士の樹海に向かいそうじゃのう）」
「（随分弱ってますよね？生気がほとんど感じられません）」
「（これは噂なんだが・・・・・・あの店長どうやら奥さんと娘に逃げられたらしい）」
「（・・・・・・・・・・・・俺もその噂、聞いた）」

ああ、それで日雇いでバイトを募集してたのですね？大方、奥さんと娘が帰ってくるまでの繋ぎでしょうね。

「（あれ？でも、前来た時はバイトの女の子が何人かいたはずなのに？）」
「（その連中がどうしたかは知らないな。だが・・・・・・）」
「（・・・・・・・・・・・・この状態の店長とは働きたくない）」

あー、否定できませんね。ま、何があったか知りませんがとにかく自分たちはただバイトをするだけです♪

「それじゃこれ、君たちの制服・・・・・・。サイズが合わなかったら言ってね・・・・・・」

気を取り直したのか、店長が自分たち全員に畳まれた制服を渡します。ですが・・・・・・

「「「サイズが合いません」」」

「「性別が合いませぬ（ん）」」

渡された瞬間、アキさん・ゆーさん・こーさんの三人の声が、自分とヒデさんの二人の声が綺麗に重なりました。何ですかコレ・・・・・？

「あれ？　おかしいな、きちんと目測したはずなんだけど・・・・・」

明らかにアキさんたちはサイズが、そしてヒデさんと自分は性別がおかしいことになっています。自分らの渡されたのウエイトレスの制服ですよ・・・・・・？

「店長。僕は若干小さいだけですが、雄二とムッツリーニ・・・・・・じゃなくて坂本と土屋のサイズどう見てもあってませんよ」

アキさんが店長に助言します。ついでに自分とヒデさんの制服も指摘してもらいたいのですがね？

「でも、坂本君はS、吉井君はM、土屋君はエロ・・・・・・じゃなくてLに見えたんだけど・・・・・・・ホントに合ってない？」

「「「なん・・・・・・だと・・・・・・・・！？」」」

何の話ですか？それにアキさんたち、驚き過ぎではないでしょうか？その後、何とか店長に三人は制服は取り替えてもらいましたが・・・・・

「そうだよね・・・・・・。ははっ、うっかり制服と性癖を間違えちゃったよ・・・・・・・」

なんて妙なことを言う店長が気になったのと、

「じゃからワシらは性別が合わぬと言っておるのにのう・・・・・・・」

「自分らはこんなフリフリを着なきゃいけないんですか・・・・・・・」

ヒデさんとため息を共につくことになりました。バイト、こんなので上手くいきますかね？

☆

何とか制服を入手した自分らは、着替えの為にロッカールームに来ました。少々狭いのでアキさんとこーさんが先に着替えています。

「お待たせ、三人とも」
「・・・・・・・・・・・・待たせた」

ああ、二人が着替え終わったようですね？おおっ！二人とも、結構様になってますね♪

「ははっ。意外と似合うものだな。それっぽいじゃないか」
「なかなかの男前じゃぞ、二人とも」
「ホント似合いますね、カッコいいです♪」
「そ、そうかな・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・照れ臭い」

あはは♪照れてますね？ですが本当に似合ってます。バイトが終わったら、写真に撮っておくのもいいかもしれませんね？

「ではワシらも着替えるとするかの」
「ですです。遅れるとマズイでしょうし」
「そうだな」

そうやって、三人でロッカールームに入ります。へぇ？こんな風になっているんですね？鍵は入ると自動的にかかるようになってますね。なるほど、鍵がないと向こうから開けられない仕組みですか。これなら女性も心配せずに着替えられます。上手く出来てますね～

『って！？何やってんのバカ雄二！　造と秀吉の二人と一緒に着替えようとするなんて！？』

『・・・・・・・・・・・・万死に値する・・・・・・・っ！』

突然アキさんとこーさんが、まるでドアを蹴破らんとする勢いでドアを開けようとします。一体何なのですか？

「お前ら何言ってんだ。こいつら男同士なんだから、別に問題ないだろうが」

「そうですよね！いやはや。ゆーさんはよくわかっています♪」

「そうじゃな♪あやつらはいい加減に目を覚ますべきじゃ！」

やれやれ、アキさんたちには困ったものです。

『雄二！秀吉と造のそれは、あくまで戸籍上の話だよ！？と言うか雄二ぃ！やっぱりキサマ、ロリコンだったかっ！』

「待つのじゃ、明久！事実ワシらは男じゃ！？」

「アキさん！貴方自分のことをなんだと思ってますか！？」

アキさん？その、まさかだとは思いますが、自分を幼い女の子だと思っていませんか？本気で一度、話合った方がいい気がしますよ？

「やっぱりって何だ!?誰がロリコンだっ！ったくお前らはまずそこで落ち着いて待ってろ」
『ちぃ!?雄二ぃ！もしどうしても考えを改めないのならば・・・・・』
「あ?突入はすんなよ?ドアの弁償なんざ冗談じゃねぇぞ?」
『霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露する！』
『・・・・・・・・・・・・音質はすでに取ってあるっ！』

ガチャッ　バタンッ！

『俺は廊下で着替えよう』
『よしよし。それじゃ僕らは店長のところへ行こうか』
『・・・・・・・・・・・・うむ』
『と言うわけだ。すまんな二人とも、俺は自分の未来が惜しいんだ』

「「・・・・・・・・・・・・」」

ロッカールームに残るは自分とヒデさん。そしてゆーさんが抜けたことによる一人分の空間でした。

「・・・・・ヒデさん、背中のファスナー上げるの大変でしょ?手伝いますよ♪」
「・・・・・・おお！すまぬな、造よ。お主も着にくかろう?すぐに手伝うぞい♪」

別に気にしていませんよ?ヒデさんと一緒にいますし?悲しくなん

てありませんもの。グスン。二人で一緒に涙を堪えながら、着替えたことは一生（？）忘れません。

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～前編（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？バイト編は造たち充分に弄れて楽しいですね♪

すんごい今さらですが、造のお母さん出しました。造以上ののんきさと天然なお母さんです。あと日高先生の本名が出ましたね。日高サクヤさんです。『サクヤ』さんの名前とキャラの元ネタは……わかる人いるかな？時止める咲夜さんじゃないよ？赤い糸的な作品に出てくるサクヤさんね。わかる人は作者と友達（？）

どうでもいいですが、日高先生のキャラ紹介っていりますか？……正直、自分も日高先生のキャラを把握できてないので悩み中です。書くとしたら番外編ってことでプロフィール作ってみますが……。まあ、皆さんにお任せです（↑オイ）

ちなみにこのバイト編は前編・中編・後編でお送りいたします。前・中は程よいものでしたが、後編が長いです。すみません（汗）

長々すみませんね、読んでいただきありがとうございました！

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～中編（前書き）

どうも、糖分です。長いので糖分でいいや……

今日（と言いますか昨日？）は帰ってすぐ更新するつもりでしたが、親に止められいつもの時間になりすみません。

それじゃ、さっさと行きましょうか！中編です。

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～中編

「ど、どうしましょうコレ？」
「どうしようもなくないかな？」

「「「だな（じゃな）・・・・・・」」」

そう言って皆さんと溜め息一つ吐きながら、悩みの元をじっと見つめます。

自分たちが見つめる先には、少々焦げ臭いにおいと共にまるでスタンガンを押し付けれらたような痕がいくつか見られる、気絶した店長が倒れています。

・・・・・そうそれは遡ること、１０分前の出来事です。

☆

「ゆーさんの服がとても羨ましいですよ・・・・・・」
「そうじゃな。やはりワシらだけ別の制服と言うのは・・・・・・」
「諦めな二人とも。これも仕事だ」

「「むぅ・・・・・・納得いくようないかないような？」」

「それに清涼祭の時と思えばどうってことはないだろ？こっちは本業の制服だ」
「・・・・・・まあ、そう言われるとそうでしょうが・・・・・・」
「・・・・・・確かにこれも給金のうち。諦めるかの・・・・・・」
何とかヒデさんと共に着替え終わり、待っていたゆーさんと一緒にホールへ移動します。割と時間かかりましたね。早く行かないと開店の時間になりますね。急がねば。

『ま、待って下さい店長！って言うかそのナイフどこから出したんですか！？』
『あ、ああ、ごめんね・・・・・・。キミ、アルバイトの子だったね。ボクの可愛い可愛い天使に手を出すようなクソ野郎じゃなくて・・・・・・』
『そ、そですよ。あはは、嫌だなぁ』
『あはは・・・・・・。ごめんよ・・・・・・』

・・・・・・？何か寒気と、嫌な空気が漂ってますが大丈夫でしょうか？アキさんも冷や汗かいてますね。緊張なさっているのでしょうか？

「あ、三人とも。結構時間がかかって・・・・・・っ！？」
「・・・・・・・・・・・・後で撮らせろ二人ともっ！！」

アキさん・こーさんが振り返った瞬間に鼻血を吹きだしました。貴方たちはもう少し落ち着きなさい。何が悲しくてヒデさんと自分の姿を見て鼻血出すんですか？折角の制服が血で染まっちゃいますよ？

「すまぬの。この服は存外複雑な作りでのう」
「まあ、着替えるのに割と苦労したんですよ？」

え？自分たちの今の姿ですか？困ったことにヒラヒラかつフリフリのエプロンドレスです。簡単に言うとウエイトレス。嗚呼、なんて素晴らしき響きでしょう。自分とヒデさんの心を一瞬で鬱にする魔法の言葉です。

「ふ、二人とも・・・・・、すっごく似合って「ディア・マイ・ドウタァアアアアアズ・・・・・・ッッッ！！」って、店長！？」

アキさんが何か言い終わる前に、突然店長が両手を大きく広げ怪鳥のように舞いあがり自分とヒデさんに飛びかかります。っ！？何でしょうか、恐ろしすぎますよ！？

「ちょっと！？店長さん、落ち着いてください！」
「な、なにごとじゃ！？」
「て、店長！？何をトチ狂ってんですか！？」
「ディア・マイ・ドウタァアアアアアズ・・・・・・ッッッ！！」

聞いてないというより、言葉が通じてませんよ！？

「くっ、仕方ない！雄二、迎撃行くよ！」
「了か・・・・・っ！？ダメだ、あたんねえ！速過ぎる！？」
「ならムッツリーニ！店長にスタンガンを！」

「・・・・・・・・・・・・目標が絞れないっ！俺以上の速さだと・・・・・・！？」

あのゆーさん・こーさんですら対応出来ないなんて、この人何者ですか！？

「秀吉！造っ！君らの出番だっ！」

「な、なんじゃ明久よ！？」

「何か手があるんですね！？」

「店長の動きを止める！秀吉は『父親に勝手に日記を読まれた思春期の女の子』の台詞を！造は『パパに遊園地に連れて行ってもらえなかった女の子』の台詞を大声で叫ぶんだ！」

くぅ、ここはアキさんに従うしかないですね。とりあえずそのイメージを想像してヒデさんと共に叫びます！

『・・・・・お父さんなんて、大っキライ！！！！！』

『・・・・・・パパなんか、もう知らないっ！！！！！』

こ、これならどうですか・・・・・・？恥もプライドも捨てた渾身の一撃ですよ？

「そうかっ！　それじゃあ今夜はお父さんと一緒にお風呂に入ろうっ！寝るときはパパの胸で眠ろうなっ！」

か、会話のキャッチボールが出来てません！？ダメです！会話のドッジボールですよコレ！？

「こうなりゃ実力行使だ！造と秀吉は下がって急いで服を着替えるんだ！雄二、ムッツリーニ！全力で行くよ！」

「「了解っ！」」

「ディア・マイ・ドウタァアアアアアズ・・・・・・ッッッ！！」

アキさんたちの決死のスタンガン（最大出力×４）により、やっと店長は床に沈みました。

☆

そんでもって、冒頭に戻るわけです。とりあえずあれだけの騒ぎの中で、店内の被害が少なかったのは不幸中の幸いでした。ですが流石に店長なしの初心者５人では店を回すのは難しいでしょうかね。

「それで、これからホントどうしましょうか」

「どうするもこうするもねぇな。店長がこのザマじゃ何もできないだろ」

「・・・・・・・・・・・・臨時休業の札を貼ってくる」

「そうじゃな、バイトはまたの機会じゃな」

そう皆さんで愚痴りつつ、休業の札を貼りに行こうとしたその時、

・・・・・・カランコロン♪

「いらっしゃいませっ・・・・・・・・・・・・・・あ〝」

「「「あ、明久!?」」」

「あらら、やっちゃいましたね?」

『良かった。やってるみたい。時間潰す場所がなくて困ってたのよね～』

『ほんとね、助かったわ』

ＯＬのお姉さん風の女性を二名、アキさんが迎え入れてくれちゃいました♪こりゃ休業です何て言えませんね。

「（おい、明久!お前何勝手に招き入れてるんだ!）」

「（ご、ごめん!わざとじゃないよ!頭の中でシミュレーションをしてたらお客さんが来てしまって・・・・・・!）」

「（困ったのう。もはや追い返せるには無理そうじゃ・・・・・・）」

「（・・・・・・・・・・・店長が起きるまで頑張るしかない）」

「（うぅ・・・・・・。ごめん・・・・・・）」

「（ま、何とかなるでしょう?ゆーさん、自分はお客さんの対応に行くので皆さんに指示お願いです）」

「（しゃあねぇな。そっちは一旦頼む、造）」

りょーかいです。初バイトですが、楽しくやりませう～♪

「お待たせしました。いらっしゃいませ、二名様で宜しいでしょうか？」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

ってあれ？最初からダメだしでしょうか？お姉さん方、自分を見て固まりましたよ？

「「かっ・・・・・・・・・・・・・」」

「か？」

「「可愛いっ～～～～～～～～～♪ボク、お手伝いの子？偉いわね！」」

・・・・・大体わかってはいましたが、この反応は酷いですよ？お客様ですから我慢しますがね？スマイル、スマイルです。

「あはは♪お姉さんたち、一応これでもバイトなんですよ？」

「バイト？キミみたいな子が？」

「高校生ですからね？ですが初バイトなので、不慣れなところがあるかと思いますがよろしくです」

「え！？キミ高校生なの？小さくて可愛いのにね～？」

くぅ、誉められているのか貶されているのかわかりませんよ・・・・・

「こちらへどうぞ。ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

「「は～い♪」」

やれやれですね。ま、基本は清涼祭の時と同じ要領でいけばいいでようかね？お客さんも掴みはいいみたいですから。

「す、凄いよ造！バッチリじゃない！」
「うむ、流石じゃの。ワシらも負けられんの」
「おお、二人とも。見た感じ、二人がホールですかね？」

ではこーさん、ゆーさんが厨房ですね。こーさんは清涼祭でも厨房を担当してましたし、ゆーさんは全体の指示が出来るのでちょうどいい配役でしょう。

「うん、そうだよ。よしっ！僕も造みたいに頑張るぞっ！」
「そうじゃの。・・・・・まあ明久よ。お主はあまり気負い過ぎぬことじゃ。お互いがフォローし合えば良いじゃろうし。リラックスじゃぞ？」

『『すみませーん！注文お願いねー♪』』

おお、早速お呼びのようですね。ではでは・・・・・

「それじゃ行きますかっ！」

「「応っ！！」」

さてさて、折角ですから楽しく働きますかね♪

☆

「ご馳走様。美味しかったわよ～♪」

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

ふぅ。あれから結構お客さんが増えましたが、何とかなってますね。

『ご注文はお決まりでしょうか？』

『エスプレッソとレモンティー、季節のシャーベットを二つ下さい』

『畏まりました。エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットをお二つですね。少々お待ち下さい』

流れるような動作でお客さんに対応するのはヒデさん。ヒデさんは演劇部で鍛えられた度胸と持ち前の天性の演技力でそつなく対応できてますね。バイトが初めてとは思えないほどの動きです。恐らく

ヒデさんのことですからウエイターを『演じて』いるのでしょうね。

『す、すみません！ご注文の確認をしてませんでしたっ！』
『あはは♪大丈夫大丈夫。ゆっくりでいいよ』
『あ、ありがとうございます。え、えっとご注文を確認します！』

微笑ましい空気を見せてくれているのはアキさん。アキさんは少々噛んだり慣れない部分のミスもありますが、お客さんに励まされたりと好感を持って対応出来ているみたいなので寧ろ客受けしてますね。流石はアキさん、人に好かれやすいのでしょうね～♪

自分も多分、無難にやっていると思います。何故か先ほどから『写真撮っていい？』とか『寧ろキミを注文しようかしら♪』とか『ねー♪お姉さんたちとお話しましょ？』とか何か危険な言葉が聞こえますが気のせいです。誰が何と言おうと気のせいですっ！！

・・・・・カランコロン

おお、本日初めての男性のお客様ですね。さあ、頑張っていきますか。

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」
「おう、二人だ・・・・・月野じゃねえか？何やってんだ、んなとこで」
「マジだ・・・・・似合わんなその服・・・・・」

よく見ればツネとナツでしたね。おお、何か久しぶりな気がします。
あと余計なお世話です。

「ふふふっ♪バイトですよ。・・・・・コホン、お客様、お席にご案内します」
「なんかお前がそんな服着ていると違和感あるな」
「確かにな。お前のことだから、ウエイトレスの格好でも・・・・・・」
「お客様?ご注文がお決まりになりましたらお呼びください?」

最後までは言わせませんよ?ＨＡＨＡＨＡ、嫌ですね～?自分がそんなに女装するとでも?そもそも女装なんてそんなこと、そう多いことじゃありませんし!残念でしたねっ!?

・・・・・その時気づくべきでした。自分でフラグを立ててはいけないと。

その後、ちょっとコーヒーメイカーの調子が悪くなり、何故だかピンポイントに自分とヒデさんにコーヒーがかかり制服が汚れてしまい、本当にヒデさんと二人（何故かウエイターの制服がなかったので仕方なく、本当に仕方なくっ！）ウエイトレスの制服で仕事しなくてはならなくなりました。

そしてこの姿を見たツネ&ナツがそれぞれ一言・・・・・・

「・・・・・わりぃな、一瞬だがこっちがやっぱりお前にしっくりくると思っちまった」

「・・・・・俺もだ。ま、客は喜んでるみたいだしいいんじゃねえのか？（秀吉は可愛いしなっ！）」

「・・・・・ご、ご注文は・・・・・？」（↑涙目）

『『『可愛いっ～～～～～～！！』』』

もうヤダ、こんな店。ヒデさんと共に本気で鬱になりそうですよ・・・・・？

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～中編（後書き）

ありがとうございました。中編でした。

いつもみたいに、土日でまとめての更新が今回から出来なくなるかもしれません……（涙）とうとうＰＣ使用禁止っぽいです……

平日みたいな一話ずつになると思いますが、ホントにすみません。とりあえず、本格的な使用禁止になるまでは続けたいと思いますので、よろしくお願いします。

えっと、とりあえず次回がバイト回最後の話ですね。ちょっと長いうえに無駄に詰め込みすぎているかも？

読んでいただきありがとうです！

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～後編（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。更新が遅れてしまいすみません。

えっと、ＰＣホントに取り上げられましたｏｒｚウチ父のノーパソしかないんですよね……。父の書斎に持ってかれています（涙）今日父が出張で、やっと更新できてます。

更新できなかった分、今回えらい多めですがすみません。とりあえず早く行くましょう、バイト回後編です！

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～後編

ツネ・ナツも帰り（ツネは名残惜しそうに）、しばらくするとお客さんの出入りが落ち着いてきましたね。おまけに初バイトにしては全員動きがスムーズに成り始めて来たので、慌ただしかった昼時に比べ全員が少々手持ち無沙汰になり始めました。まあ、要するに暇ですね。

壊れたコーヒーメイカーと、無くなったミルクをどうするかでヒデさんたちがマニュアルを探しに行ってもらっています。アキさんと二人で見える範囲のホール清掃も終えましたし、さてこれからどうしましょうか？

・・・・・カランコロン♪

「「はい、いらっしゃいませー」」

おっと、考えている矢先にお客さんですね。やっぱり油断はできませんね。って、あれ？

「こんにちは、明久君と月野君。遊びに来ちゃいました♪」
「やっほー♪アキに月野。へぇ？似合うじゃない二人とも」

「「姫路さんに美波（島田さん）？どうしてここに？」」

お客さんはクラスメイトの二人でした。話しぶりからすると自分た

ちがここにいることがわかっていたようですが、自分らバイトのこと話しましたっけ?

「ふふふ♪どうしたんですか?」
「ほらほら、店員さんたち?ボーっとしてないで案内してもらえる?」

「あ、うん・・・・・じゃなくて、はい!何名様ですか?」
「えっと、五人です」
「・・・・・?すみません、後の三名は?」
「ああ、それなら一人はちょっと遅れて来るって。後の二人は・・・・・」

そう言って島田さんが奥の厨房に指をさすと・・・・・・

『おわっ!?しょ、翔子!?お前なんでここにいるんだ?』
『・・・・・雄二の観察に。頑張ってる?』
『か、観察・・・・・?それは一旦置くとして、真後ろに立つな!流石にビビったぞ?』
『・・・・・わかった。常に雄二の目の届く場所にいる』
『気が散るわ!?』

『ふっふっふっ♪ボクもこの服着てみようカナ?・・・・・どう思うムッツリーニ君?』
『・・・・・・・・・・・・微塵も興味はない(ダバダバダバ)』
『あはは!身体はしょーじきだね~♪やっぱりムッツリーニ君面白いね』

『・・・・・・・・・・・・・・そもそもなぜここに工藤が？』

・・・・・・もう今更どうしてここに自分らがいるのかがわかったのかは聞きません。多分愛の力で探しだしたのでしょう。ですからそのことは聞きませんが、二人ともどうやって厨房に入ったのでしょうか？

・・・・・・ま、それこそ今更でしょうかね？とにかく接客、接客♪

「それで？ご注文は・・・・・・って、聞いてませんね姫路さんも島田さんも」

振り返り、二人に注文を聞こうかと思いましたが時すでに遅し。二人が二人、アキさんに目が釘付けですね。アキさんとお話し始めましたよ？

ふむ。ま、お客さんも少ないですしアキさんも休憩に入ってもらいましょうか。ずっと張りつめてましたし、いい気分転換になるでしょうからね。

「アキさん、休憩入れてください。お客さんもほとんどいませんし休める時に休んでおくことも大事ですよ」

「えっ！？い、いいの？」

「ええ、忙しくなったら呼びますし。ゆっくり休んでて下さいな？・・・・・・三人で、ね？」

「「・・・・・・あう。ゴメンね（なさい）月野（君）／／／／／／

／」」

「そ、それじゃあ何かあったら呼んでね？」

「ふふふ♪いいんですよ？三人で楽しんでくださいね～♪」

それにしても島田さんの言っていた『後から来る』人って誰でしょうかね？聞きそびれましたが今のあの三人の甘いフィールドに特攻するのは勘弁ですし、そのうち来るのでしょうか？気長に待てばいいのですかね？

ですが後に、このメンバーから誰が来るのかが予想できなかったことを後悔することになるなど、この時の自分は考えてもいませんでしたよ・・・・・・

☆

「何じゃ、姫路たちじゃったのか。それで明久に休憩を入れさせたんじゃな？」

「ええ、アキさんたちに任せた方が手っ取り早そうなので放置してきました」

「そうじゃの。最近になってようやく、あやつらの対処法がわかってきたぞい」

ヒデさんと合流しのんびりとしたＢＧＭと共に、カウンター内の整

理をしながら談笑します。お客もあれから増えもせず減りもせずで、変化なし。穏やかな時間が過ぎて行きますね。

「それにしても、これからどうするのじゃ？夕食時は流石にワシらだけではキツイぞい？」

「まあ、そろそろ時間も時間ですから、店長も起きる頃ではないでしょうか？それで今回のバイトは終わりって事で」

と言いますか、起きてくれないと色々困るんですよね。マニュアル見ても流石にコーヒーメイカーの直し方なんてわかるはずもないですし、在庫の補充も出来ませんし？

・・・・・カランコロン♪

「「いらっしゃいませ・・・・・って姉上（優姉さん）？」」

「あらあら、二人とも？すっごく似合ってるわね。いい感じじゃない」

おやおや。お客さんかと思いましたが、優姉さんですか？今日は色々千客万来ですね。

「姉上よ、どうしてここに来たのじゃ？」

「あっ、島田さんの言っていた遅れてくる一人って優姉さんでしたか」

なるほど。よくよく考えてみれば、女子の皆さんはいつもの仲良しグループですね。強化合宿以来より仲良くなったとか？・・・・・・それはそうと何でしょう、優姉さんのそのお荷物は？

「ええ。ふふふ♪ちょっと造くんと秀吉の分を準備してたら遅れてね？」

・・・・・っ！？今何か寒気がしたような？ヒデさんも少々震えてますね。何ですか、その準備って？そして何ですか、その持っている紙袋の中身は？嫌な予感しかしませんよ？

「そ、そうでした！優姉さんも席に案内しなければ！」
「あら、ここでいいわよ♪」
「あ、姉上よ！ご注文は何じゃ！？」
「ああ、じゃあいつものお願い♪」

「「いつもの！？何ですか（じゃ）それは！？」」

いきなり常連さんみたいに『いつもの』って爽やかに言われてもわかりませんよ！？

「だからいつものよ？・・・・・・・・・・・・造くんと秀吉のお着替えを一つずつ♪」

「「只今在庫を切らしております。申し訳ございませんが、お引き取り下さい」」

「だから、持ち込んだんじゃない。はいコレ♪」

そう言って優姉さんは持っていた紙袋の中から、ソレを二着取り出してきました。そう、ソレは着てしまったら最後、着た者の魂を冥土に送ってしまうという呪われた装備品、

・・・・・・・・・・・・冥土(メイド)服です。

「「嫌あああああああああああああ!?」」

「ほら、注文したんだし早く着換えてね♪」

だっ、誰がこんなもの着ますか!?死んでもお断りですよ!そいつは呪われた一品です、人が触れてはいけないものなんですよ!?誰か自分とヒデさんに救いの手を!

・・・・・そ、そうです!ここはアキさん・ゆーさん・こーさん!ヘルプです!!

『『・・・・・・アキ（明久君）も着てみない（みませんか）？』』

『ちょ!?何で僕も巻き込まれかけているの!?』

『・・・・・・私、雄二の新しい姿見たい』

『お前は俺を何処に連れて行く気だ!?』

『ムッツリーニ君も意外と女装似合いそうだよね～♪』

『・・・・・・・・・・・・!?（ブンブンブン）』

だ、ダメですっ!?全員冥土服に呪われてしまったようですっ!寧ろ被害者が増えました!

「ゆ、優姉さん!こんな所で女装なんてお客さんに悪いですよっ!」

「そ、そうじゃ!男共の着替えを女性の前で晒すのはマズイであろう!?」

いくら少ないとはいえ、今いるお客さんはほとんど女性です。そんな誰も得しないようなものを見て、不快な気持にさせてはいけないのではないでしょうか!?よくありませんよね!?

「あら?そうでもないみたいよ?よく周りを見てみなさい」

そう言う優姉さんの周りのお客さんは・・・・・・

『あの子たちのメイド姿だって～♪』

『なになに?これ何かのイベントかしら?』

『男の子たちのメイド服ですって?見てみたいわね～』

『これって撮影アリかな?ちょっとドキドキしてきたわ』

ＨＡＨＡＨＡＨＡ，お客さん方？自分は貴女がたの行動にドキドキと言うかハラハラしてきましたよ？・・・・・・あかん、男子組全員が追い詰められかけています。どうすればこの惨劇を回避できるのですか？

そう、もうダメかもしれないと最悪の展開を考えていた時に・・・・・

「き、君たち！お客様の前で何をしているんだ！」

鋭い叱咤が店内に響き渡り、救いの手は伸ばされました。

☆

救いの手の主は、ある意味この状況を作り出した張本人の店長、その人でした。この人も真面目にやればちゃんと店長出来るんですね・・・・・・

「まったく、人が倒れている間に何をしているんだ君たちは！店を開けてしまったことはともかく、お客様の前でこんな真似をするなんて何を考えている！」

まだまだ弱っていますが、それでも力強い店長の声に背筋がシャンとなります。過ちを犯そうとする優姉さんや姫路さんたちを見事に

抑え込んでいますね。やれやれ、これでようやくお店として機能するでしょうね。

「お客様、大変失礼致しました。どうぞお気になさらずにごゆっくりお寛ぎください」

そう言ってお客さんのフォローも忘れないあたり、しっかりした店長のようですね。娘さんが関わらなければ・・・・・・

それと、失礼かけたはずのお客さんから『ちぃ・・・・・・惜しかったわね』とか『もう少しだったのにね』とか『マスターの方が空気を読んで欲しいわ』とか聞こえた気もしますが、きっと空耳でしょう。自分を見る目が怖いのも、気のせいでしょう。

とりあえず、訪れた店の平穏と己の貞操（？）の平穏に胸を撫で下ろしていると、

・・・・・・カランコロン♪

その直後カウベルの音が鳴り響き、母娘と思しき二人組が店内へと入ってきました。ってあれ？見たことある人ですね。と言いますか、

「どう？お父さん。少し反省した？」

店長にそう告げるのは、強化合宿で色々な意味で活躍した清水美春さんでした。って、え?お父さん!?ここの店長の娘さんって清水さんのことですか!?

「み、美春・・・・・・!?　ディア・マイ・エンジェル・・・・・・!」

て、店長に生気が戻りましたね・・・・・・。何か一気に若返った感じがしますよ?ま、まあこれで店長も元に戻って、お店も立て直せるでしょうかね?

「店長、良かったですね。奥さんも娘さんも、帰ってきてくれたじゃないですか」
「うん、うん!ありがとうキミたち・・・・・・!」

ふぅ、これならバイトも恙無く終われるですかね?ナイスなタイミングの清水さんに感謝でしょうか。

「美春も許してあげたら?この店長さん、十分に反省しているみたいよ?」
「そうですね。少々行き過ぎた愛情表現は気になりますが、それだけ清水さんのこと大切なんだと思いますよ?」
「ハァ・・・・・・。お姉さまも小学生も甘いですわ。この男は少し油断す・・・・・・ると・・・・・・?って!?お、お姉さま方!?美波お姉さまに小学生ではないですか!?何故ここに?」

・・・・・・小学生は渾名か何かですか?一応人間扱いではあるよ

うですが。

「ん?何でって遊びに来ただけよ?と言うかココ、アンタの家だったのね」

「自分はバイトですが・・・・・?どうしてそこまで取り乱すのですか?」

「お二人とも!特にお姉さまはここからすぐここから離れてくださいませっ!早くっ!」

偉く慌てていますね?何か自分たちにとってマズイものでもあるのでしょうか?

「・・・・・・・・・・・み・・・・・・・は、る・・・・・・・?」

「「「「て、店長?」」」」

あ、あれ?何でしょう?朝乱闘した時以上に、自分らの身に危険が迫っている気がするのですが?店長からドス黒い憎悪と殺気が感じられます!?

「キサマらが・・・・・・」

「「「「は?」」」」

「「な、何なの(ですか)?」」

「キサマらが、娘を誑かす女たちかぁあああああああああ!!」

そう言って店長が駆け出したかと思うと、こーさんの召喚獣以上の動きでナイフ片手に自分と島田さんに襲いかかってきました!?

「キサマらが美春を誑かした魔女だなっ!?許さん、コロスッ!」

「て、店長!落ち着いて下さい!まずは『娘を誑かす女たち』っていう言葉は何処かおかしいということに気がついてください!そしてそのナイフは何処から出したんですか!?」

「ディア・マイ・ドウタァアアアアア・・・・・ッッッ!!」

くっ!?アキさんの説得も聞かずに、全く止まる気配ありませんよ、この暴走戦士はっ!?ってか本気でナイフ投げてきましたし、この人危なすぎでは!?殺す気ですかっ!?

「や、やむ追えません!アキさん行きますよ!起動(アウェイクン)!!」

キュウウウウン　ボンッ!

「なるほどっ!召喚獣で対抗するんだね!よしっ試獣(サモン)召喚、そして二重(ダブル)召喚!!」

この人を止めるには、もう人じゃ対処できませんっ!朝でさえああだったのに今は近づきだけで狩られそうですもん。腕輪で召喚獣に成り一気に制圧しましょう!作戦なんてあってないようなもの!アキさんと一先ずこの人（?）の動きを封じつつ、男子全員で取り囲みますっ!

《優姉さんたちは早く避難を！お客さんの誘導もお願いしますっ！！》

「わ、わかったわ！行くわよ皆」

「「「皆さん（みんな）（雄二っ）頑張って！！」」」

「美春っ！アンタも避難するわよ！色々と刺激しかねないわ！」

「お、お姉さま！ですがっ・・・・・・」

『ディア・マイ・ドウタァアアアア・・・・・ッッッ！！』

《し、島田さん！清水さんを連れて早く行って下さい！抑えが効きません！？》

「了解よ！美春！アキや月野に任せて行くわよ！」

「くっ・・・・・・また借りを作ってしまいますわね・・・・・・」

《店長！貴方いい加減にしないと、また娘さんたちに逃げられますよ！！》

「ディア・マイ・ドウタァアアアア・・・・・ッッッ！！」

さ、更に加速した！？とうとう『ディア・マイ・ドウタァアアアアアア・・・・・ッッッ！！』しか喋らなくなった怪物（モンスター）相手に遠慮すれば負けですっ！全力で戦わないとこちらが死にそうですしっ

《すみませんが、危険なので本気で止めますっ！吹き飛べえええええええっ！！》

「僕も行くよッ！！店長、大人しくしてくださいっ！」
「ディア・マイ・ドウタァアアアアア・・・・・ッッッ！！」

「ワ、ワシらも援護せねば！？造と明久がやられてしまうぞい！？」
「わかってる！ムッツリーニ、スタンガン用意！動きが止まり次第討つぞっ！」
「・・・・・・・・・・・・・出し惜しみしない。全力で倒すっ！」

～しばらくそのままでお待ちください～

その後何度も何度も風の檻は破壊されつつも、自分とアキさんの持ち点ほぼ全部とこーさんの持っていたスタンガンの全ての電池が切れるまで男子全員で戦い抜いたお陰で何とか店長を無事に（？）沈めることが出来ました。

「し、死ぬかと思った・・・・・・途中ターゲットが僕と造に絞られてから特にね」
「み、右に同じく・・・・・・まさか生身の人間に召喚獣状態で殺されそうになるとは」

そう言えば、強化合宿の時に清水さんにも風の檻を突破されましたよね・・・・・？清水家にはそう言った特別な対召喚獣用体術でも伝承されているのでしょうか？流石に今回は腕一本くらいは全員覚悟しましたし。

その店長は最期まで、『ディア・マイ・ドウタァアアアアア・・・・・ッッッ！！』と叫びつつけてましたよ。親バカもここまで来ると恐怖を感じます。

そうそう肝心のバイトのことですが、店長撃退後に一応清水さんのお母さんから今回のバイト代と迷惑をかけた分ということでそれにプラスで頂きました。お陰で何とか自分の目的は果たせたのですが・・・・・・

「・・・・・・やはり『アレ』は大っ嫌いですっ！！」
「・・・・・・本気で『アレ』と離婚考えようかしら」

清水さん&清水さんのお母さんと店長の間にはマリアナ海峡もビックリの溝が深まりました。お二人ともお疲れ様です。こうして波乱の初バイトは、自分らに深いトラウマを植え付け終了しました。

番外編：初めてのバイトは～危険がいっぱい！？～後編（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

ちょっとおまけ～♪

「・・・・・と言うことがあったんですよ」

「お～♪おもしろそうね～。私もそこの喫茶店に行けば良かったかしら～？」

「造！すまんっ！アタシが造の側を離れたばかりにっ！どこも怪我してないかい！？」

「日だ・・・・・ではなく、サクヤさんは心配し過ぎですよ。ホントに大丈夫ですから」

「そーよ、そーよ！サクちゃんはつーちゃんに甘すぎよ！このフォンダンショコラ以上に甘甘よ！」

「「元凶のアンタ（母さん）が言うなっ（言わないでくださいっ）！！」」

「ぶぅ～、二人して酷いわ～！」

「ちっとも反省しようとしないんですから・・・・・それにしても、清水さんと清水さんのお母さんには申し訳ないことをしました・・・・・」

「ん～そだね。仕方なかったとはいえ、店の評判下げちまったかもしんないね」

「ああ、そう言えばその喫茶店のことで噂を聞いたんだけど～」

「・・・・・噂ですか？」

「ん～。確か可愛らしい小学生がメイド服でお姉さんたちにご奉仕してくれるとか～」

「・・・・・何だいそりゃ？造、アンタどんなとこでバイトしてきたんだい？アタシは不安だよ？」
「可愛らしい・・・・・・小学生・・・・・・・メイド服・・・・・・・ですと？」
「あっ、あとね～。その子がマスコットになってね～？てんちょーと戦うイベントとかが行われるそうよ～」
「・・・・・・造？ホントに何処でバイトしてきたんだい？」

それを聞いた時、自分はある決断をしました。今後バイトを探す時はちゃんとした所を選ぶことを。

ですが、それからしばらくして清水さんを通じて清水さんのお母さんから『あの時のメンバーでまたバイト頼めないかしら？実はあの時はいつも以上に売れ行きが良かったのよ？お客様も期待してるし・・・・・・』なんてお誘いがあったのは、また別のお話です。

☆

こんな感じです。無駄に長くてすみません。これから更新が不定期になるかと思います。その分今日はもう一話くらい更新しようかと思います。

読んでいただき、ありがとうです！

番外編：週刊☆文月学園相談室～貴方の悩み応えます♪～（前書き）

どうも糖分です。本日二度目の更新ですね。相変わらず変な更新ですみません。

今回が最後の番外編かな？これ番外編の中でも異質の番外編かも（汗）

とりあえず、すっごくカオスですがよろしくです♪

番外編：週刊☆文月学園相談室～貴方の悩み応えます♪～

ここは、とある文月学園のどこかにあると噂されるスタジオの中。
今日も様々な視聴者からの（視聴者って誰？なんてツッコんじゃダメですよ？）悩みを解決すべく、教師・生徒有志が集り知恵を出し合います。

本日の悩める皆さんのスペシャルアドヴァイザー

・坂本家の皆さん（ホカホカ幸せ家族）
・土屋＆工藤（保健体育の帝王＆女帝）
・西村先生（言わずと知れた補習の鬼）

さて、本日の彼ら彼女らは一体どんな悩みや相談を解決していただけるのでしょうか？

☆

一つ目の相談は・・・・・ズバリ、恋愛相談。よってここはこの家族に解決していただきましょう！

～坂本家の食卓『教えて坂本翔子さん☆マル秘恋愛講座』～

「・・・・・お い翔子。とりあえず俺らにわかるように状況を説明しろ。そして俺と造をさっさと解放しろ」

「・・・・・これは私達坂本家が、どのようにして幸せな家庭を作れたかを参考に、私達が恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」

「おい造、俺は驚いたぞ、このタイトル『の』以外全部嘘の事しか書いてないな」

「・・・・・それ以前に自分、坂本家の人間決定なんですか？」

何やら今更感があるよ、雄二に造や？まあ、それはともかく坂本翔子さん。こちらが今回の相談のお手紙です♪

「・・・・・どうも。ではハガキの紹介『突然ですが、仲良し家族の坂本家の皆さんに相談です』」

「ハガキの差出人よ、良く聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度考えてみてほしい」

「自分はいつぞやの如月ハイランドの椅子に拘束されています。これなんてデジャビュ？」

はいはい、進まないから二人とも静かにしてね～♪坂本翔子さん、続きよろしくです♪

「・・・・・『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないかが心配です。どうしたらいいでしょうか？』」

「いや、どうしたらと言われてもな」
「自分らに言われても・・・・・・ですよね？」
「・・・・・・夫の浮気は私も心配。造に悪い影響を与えかねない。他人事とは思えない」
「「頼むから（頼みますから）他人事だと思ってくれ（下さい）」」
「・・・・・だから、私の考えた浮気防止法を教えてあげる。造も一緒にチャレンジ♪」
「翔子よ、それは俺らの身に降りかかる不幸の予告とみなしていいんだろうか？」
「どうして巻き込まれるんでしょうね？そして笑顔で『チャレンジ♪』なんて言わないでください」
「・・・・・・用意する物は３つ」
はいは～い♪持ってきましたよ、翔子さん。こちらですね？
「？おい、浮気防止に道具が必要なのか？」
「ですよね？う～ん、例えばですが家族の写真を持たせるとか、ですかね？」
「・・・・・・一つ目は」
「「一つ目は？」」
「・・・・・・『睡眠薬』」
「翔子、ストップだ。いきなり犯罪臭がする」
「そ、そう言えばここに来る前に嗅がされたのってもしかして・・・・・・？」
「・・・・・・二つ目は」

「やっぱり聞いてないな。んで、二つ目は？」
「てか、一つ目が怖すぎて二つ目が予想がつくようなつかないような？」
おおぅ、雄二に造、追い込まれてきましたね～♪見てて楽し・・・・・コホン、ハラハラしてきますよ。
「・・・・・『エプロン』」
「ちょっと待ってくれ。急にお前の考えが読めなくなった。というか、その組み合わせで俺らに何をするつもりなんだ！？」
「いえ、何かわかったかもしれません・・・・・」
まあそりゃ、普段造が受けている仕打ちだし？
「・・・・・そして、三つ目は」
「「・・・・・・・・・・・・み、三つ目は？」」
「・・・・・『ビデオカメラ』」
「貴様何を撮るつもりだ！？　睡眠薬嗅がされエプロンでドレスアップされた俺らの何を撮るつもりだ！？」
「ヤバイ。めちゃくちゃヤバイ。霧島さんの目、本気ですよ・・・・・？」
「・・・・・その三つを用意して、夫に浮気の怖さを教えて、そして娘の可愛い成長日記をつけると良い」
「俺は今翔子、何よりもお前が怖い」
「誰が娘ですか？いえ、そもそもこれ参考になるんですか？」
「・・・・・以上、『バカなお兄ちゃん大好き（１１歳）』ちゃ

んからのおハガキでした。もしかして造と同級生の子？」
「差出人小学生かよ！？　世も末だな！」
「自分はどんな風に見られているんでしょうね・・・・・・？」

「・・・・・・所で翔子、さっきのは冗談だよな？」
「・・・・・・カメラは五台以上が望ましい」
「まぁ待て、じっくりと話し合おうじゃないか」
「それより、まず自分らの解放をお願いします」
「・・・・・・大丈夫、先に二人のは撮ってあるから♪」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ゑ？」」

いやはや、浮気なんてダメですよね。それが家庭を持っているならなおさらです。皆さんもそれを忘れちゃだめですよ？

坂本家の皆さん、どうもありがとうございました！

「「勝手に家族にするなっ！！」」

☆

さて、二通目の相談に参りましょうか！何々・・・・・？ふむ、これは専門家の力が必要ですね？では、あの二人を呼んでみましょう！！

～青春街道まっしぐら！『土屋＆工藤の悩まし☆性活小噺』～

「・・・・・・・・・・・・・土屋と」
「工藤の」
「「悩まし☆性活小噺っ！」」

「はい。このコーナーでは日々の生活に根ざしたちょっとエッチな小噺をボクこと工藤愛子とムッツ・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・土屋康太」
「ムッツリーニ君が紹介していくコーナーです♪」
「・・・・・・・・・・・・・最近、造くらいしかまともに呼んでくれない」
「・・・・・・あの？それよか、何故に自分がここに？」

ん？いやぁ～ツッコミ担当がいないからね？造には引き続きコーナーを回して貰うよ？

「・・・・・・どう言う意味ですか？」
「いいじゃない♪月野君って普段こういう話全然しない分、今日はしっかりと勉強してもらうよ～♪」

ま、確かにお子ちゃまな造にはいい勉強になるかもね～

「何か、言い様が無い腹立たしさが・・・・・・別にいいですが」
「では、今日のテーマですが・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・本名・・・・・・」
「・・・・・・『シャワーの正しい使い方を教えて！』です♪」
「・・・・・・・・・・・・っっ！！（ドバッ！）」
「えぇっ！？　もう鼻血！？　ムッツリーニ君、想像力豊かすぎない？」
「ちょっと！？話し始めってないのにこれじゃ、危ないのでは！？」
「・・・・・・・・・・・・構わず続けろ」
「う、うん。えっと、ちょっとエッチなおはなしという事なので、ボクの体験談をお話します」
「ほ、本当に続けて大丈夫なのでしょうか？」

いいから！工藤さんのお話し聞きなさいっ！自分はｗｋｔｋしてるんだからねっ！？

「ホントどう言う意味ですか・・・・・・？」
「まあ、本人が大丈夫って言ってるならいいのカナ？えっとね、実は先日、学校帰りに雨が降ってきて」
「・・・・・・・・・・・・っ！（だらだら）」
「こ、こーさん？今の話しの何処に鼻血を出す要素があるんですか？大丈夫なんですか？」
「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

す、スタジオが鼻血で染まっていく・・・・・・！？でも、ここは面白そうだしほっとこうかな♪

「運の悪い事に、その日はふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、下着がビショビショになっちゃったんだ」
「・・・・・・・・・・・・っっ！！（ダバダバ）」
「下は流石に我慢して吐いていたんだケド、上は・・・・・・・・・ってムッツリーニ君！？　もう二リッター位血が出ているみたいだけど、本当に大丈夫なの！？」
「こーさん！意識をちゃんと保って！てか本当に危険ですよ！？」
「・・・・・・・・・・・・・・構わずに、続けるんだ・・・・・・・・・っ！！」
「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」
「・・・・・・・・・・・・・っっっっっ！！！（ブシャァァアア）」
「こーさあああああああああん！？誰か医者！日高先生を！緊急事態ですっ！？」
「や、やっぱりこの企画無理があるよ！　まだシャワーの話に入っていないのに、相方がグロッキーになってるんだもん！」
「・・・・・・・・・・・・・死しても尚、魂で聞き続ける・・・・・・っ！」
「そんなの無理に決まってるでしょ！？　とにかく今回はこれで終わり！　それではまた次回お会いしましょう！　お元気でー！」
「そもそも次回ってあるんでしょうかね・・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・・・続きが気になる」

「「それより先に保健室！！」」

え、えっと・・・・・・・・放送事故でしょうかね？まあ、造の保健体育の個別授業は担当の先生が五人もいるからいいですがね？

「いやいや!?いつの間にかコーナーそのものが変わってますよね!?」

ん～?でも、担当の先生方は本気(マジ)みたいだよ～?

「造ちゃん?アタシらが特別に教えてア・ゲ・ル♪」
「うふふ♪お姉ちゃんたちの個別授業よ?嬉しい?」

「「「つ、造くんと個別の／／／／／／／／（ポッ）」」」

「・・・・・っ!!?い、嫌あああああああああああああああああ!?」

☆

さてさて?何故かアドヴァイザーの皆さんがほとんど居なくなってしましましたね?まだ何通か相談が余ってますのに・・・・・・

仕方ありません!ここはやはり教師の中の教師、文月が誇る無敵の超人。あの人に全てを任せましょう!

～特別授業!西村先生の鉄拳人生相談道場～

「・・・・・あ～、何故俺がこんなコーナーを？」
「す、すみません、せんせ！ですが皆さんでは色々と回らなくて・・・・・・・」
「・・・・・・お前の苦労が絶えんな。まあいい！ここでは俺こと鉄拳先生が諸君らの悩みに応えよう」
「一応自分がアシスタントです♪」

うんうん、ホント造は似合わないね（笑）せいぜいマスコットかな？

「そこ！煩いですよ！・・・・・・・せんせ、ではこちらからどうぞです」
「うむ、任せろ！何々・・・・・・・？」

三年　T村Y作さんのご相談

鉄拳先生、僕の悩みを聞いてください。実は僕には好きな子がいます。
その人はとても可愛らしくて人気があります。ですがそのK下Y吉さん（君？）はどうやら戸籍上では♂のようなのです。これは同性愛になってしまうのでしょうか？
先生、僕はどうしたらいいのか教えてください。

鉄拳先生のアドバイス

「「・・・・・・・・・・・・・」」

「えっと、多分ものすごく知っている人からの質問です、これ」
「・・・・・すまない。いきなり凄い質問が来て戸惑っている。正直このコーナーを引き受けなければよかったと後悔しているくらいな」
「せんせ、どうしましょうね？応え難いなら保留しましょうか？」
「・・・・・君の好きになった相手には双子の姉がいたはずだ。容姿に惚れたのであれば彼女に想いを告げることだ。容姿ではなく内面に惚れたのであれば・・・・・」
「その想いを冷静に受け止めてから、相手のことをよく考えてみてください。誰を好きになるのも自由でしょうが、その相手がどう思うのかもよく考えてくださいね。相手を想うならなおさら、ね？」
「すまんな月野。俺も月並みなことしか言えそうにないぞ・・・・・」
「ま、まあ相談が相談ですからね？とりあえず次行ってみましょうか？」
「ああ、そうだな。どれどれ・・・・・？」

二年　K保T光さんのご相談

最近、寝ても覚めても頭から離れない人達がいます。彼ら・・・・・・Y井A久君とT野T君が笑いあう姿を見ていると僕まで幸せになり、彼らが落ち込んだり沈んだ表情をしていると僕まで悲しくなってしまいます。
彼らは同性なのですが・・・・・この気持ちは恋愛感情なのでしょうか？それとも保護欲なのですか？

鉄拳先生のアドバイス

「・・・・・月野、すまんが少しの間、向こうに行ってて貰えるか？」
「はい？どうしたんですか？」
「ちょっとな。すまん・・・・・・」
「は、はぁ。わかりました・・・・・・？」

造～こっちにおいで～♪はい、ちょっと耳栓してね・・・・・・？うん、そうそう。

・・・・・・鉄拳先生っ！オッケーですっ！

「うむ。あ～、君はここ最近強く頭を打っていないか？記憶にないとしても念の為病院で診察を受けることを推奨する。同性愛云々の話はその後だ。あとむやみにそのT君のことが好きと言わない方がいいと思う。彼の保護者（？）達が黙ってないからな」

流石、先生はよくわかっていらっしゃる。んじゃ造を戻しましょうかね～

「ふぅ、解放されました♪えっと、どんな質問だったのですか、せんせ？」
「・・・・・人の業についてか・・・・・・？」
「ず、随分とまた深い悩みですね・・・・・・？」
「そうだな、次行くか。次くらいはまともな質問であればいいのだがな」

名無し×5からのご相談

最近と言いますか、出会ってからずっとTくんが可愛過ぎて悩まされます。これはアタシ（私）達を萌え殺しにきているのでしょうか？やっぱりここは襲う・・・・・コホン、可愛がるしかないのでしょうか？

鉄拳先生のアドバイス

ダッ！×2

あっ！ちょっと二人とも！？・・・・・えっと、本日のアドヴァイザーが全員帰ってしまいましたので、本日はここまで！来週も皆さんからのご相談、楽しみに待っています！悩めるご相談をどしどし送って下さいね♪

ではまた来週！しーゆーねくすとうぃーく♪バイバイ～

「ぜえええええええええええったいに、二度と、やるかっ！」

番外編：週刊☆文月学園相談室～貴方の悩み応えます♪～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

今回ある意味作者が小説内に出られました！ヤッホオオオオオオオ！！……活躍は出来ないけどね？

えっとですね、次回からようやく玲さん登場編？ですが……何だか書いてて変なことになって来ました（汗）詳しくは次回話すかと思いますが、何故でしょう？書いてて秀吉フラグ？っぽくなってきたよ？いかん、疲れているのかな？

もしかしたら、ちょっとそのことでアンケート？とるかもです。まあ意見を聞きたいだけです、ハイ。ついでに更新のことについても

と、とりあえずまた次回！読んでいただきありがとうございました！

５５時間目　電車と常識とバスローブ～玲さん襲撃！～（前書き）

どうも糖分です。いや、何度もすみません。更新できる時にやっておきたくて（汗）

今回からいよいよ本編に戻ってきます。玲さん襲撃編ですね！（何か違うって？気のせいですよ）正直、またいつも以上に妙なことになりそうで怖いですね……

まあ、それこそいつものことでしょうか？とりあえず行きましょう、５５話です！

55時間目　電車と常識とバスローブ～玲さん襲撃！～

あの楽しくもどこか非日常的な強化合宿から、しばらく過ぎました。その途中もそれこそ色々とトラブルやハプニングがありましたが（バイトとかですね）、それはそれで自分たちらしい日常のバニラエッセンス？いえ、スパイスと言ったところでしょうかね？

今日はそんな忙しい日々の休息の日、簡単に言ってしまえば日曜日です。この地域では珍しく、少々雨が降っていますが、まあそれは普通のことです。ですが、『非日常的な物は時に何の前触れもなく来るものである！』と本日自分はよく学びました。

そう。それは自分にしては珍しく、ちょっとだけ遠出をして買い物を済ませ電車に乗っていた時のこと。窓際に立っていた、目の前のお姉さんがいきなり服を脱ぎ始めました。

ええ、わかっています。突然こんなこと言われても信じてもらえないでしょう。ですが自分は嘘も冗談もついてはおりません。そのお姉さんは何の前振りもなく脱ぎ始めました。その回想から今回は始めましょうね。

☆

「ちょ!?そこのお姉さん!?お聞きしたいことが山ほどあるのですがっ!?」
「・・・・・え?私ですか?どうしましたか?もしかして迷子でしょうか?」
「確かに今自分の目の前に、色々な意味で道に迷われている方がいらっしゃいますが・・・・・そうではなく、何をなさっているのですか!?」

突然脱ぎ出したこのお姉さんに、一先ず説明を求めます。自分も少々混乱してますしこれどういうことでしょうか?あと、誰が迷子ですか?ちゃんと大人料金で払った(↑ここ重要!)電車内でどう迷えと?

「何と言われましても・・・・・服を着替えようかと?」
「ここでですか!?オーケー落ち着いてください。お姉さん、暑さで参っているのですよね?」
「ええ、確かに暑いですね。そこで私はコレに着替えようと思ったんですよ」

そう言って、このお姉さんが取り出したるは・・・・・バスローブ・・・ですと?わからない。このお姉さんの言いたいことも行動も考えも、何もかもがわからない・・・・・!?

「ごめんなさい、自分はどうやら理解するには少々頭が悪いようです。出来ればどうしてそれに着替えようと思ったのか説明してもらえますか・・・・・?」
「そうですね・・・・・実は、」

そう言って話し始めたお姉さん。ふむふむ、大体の概要はこんな感じでしょうか？

海外から一年ぶりに日本に帰ってきたと言う、このお姉さん

←

その為か荷物が結構重く、更に久しぶりの日本は暑かった

←

重い荷物を運んでいた疲れと蒸し暑さにより、大量の汗をかいてしまう

←

電車に映る自分の姿は、一年ぶりに会う自分の弟に相応しくないのではないかと考える

←

そこで全身の汗を何とかするため持っていたバスローブに着替えようと・・・・・・

「ストップッ！はいそこストップですっ！」
「はい？どうかしましたか？」
「どう考えてもおかしいでしょう！？」
「あら？どの辺がでしょうか？この服は私が今持っている中で一番吸汗性に優れて・・・・・・」
「タオルで拭きましょう！？どこの世界に電車の中で着替える人がいますか！？」
「あら、それは盲点でした。なるほどその手がありましたね」
「いえ、少なくともバスローブよりも早く気付くべきでしょう？・・・・・・はい、どうぞです」

見てられずに、思わずツッコミを入れてしまいました。この人母さんや日高先生並みに強いかも・・・・・・

「・・・・・？これ貴方のタオルでしょう？」
「いいですよ、差し上げます。いきなりバスローブに着替えられるよりよっぽどいいですからね」

心臓に悪いですね。てか周りのお客さんが少なくてホントによかったです。

・・・・・ところで残念がっているそこのお兄さん、おじさん、お爺さん？貴方たちは何を期待してるんですか、全く。まずは貴方たち大人が止めてくださいよ？

「いいのですか？会ったばかりの赤の他人ですのに？」
「とりあえず、バスローブに着替えなければ何でもいいです・・・・・」

じ、自分がまさかこんなにも振り回されるとは。やれやれ頭が痛いですね。タオルを渡した後、このお姉さんと話しつつこの場で脱ぐのは我慢してもらえるように説得出来て本当によかったです。電車の中でこんなことになろうとは・・・・・常識ってなんでしたっけ？

≪次は～○×駅、○×駅。お降りの際はお足下にご注意下さい≫

あらら。一応お姉さんがまた奇行に走らないように監視していましたが、そろそろ降りなければならないですね。すんごい不安ですよ？このお姉さんを一人にするのは。

「あ～非常に不安ですが、すみません自分はここで降りますね。お姉さんは出来ればもう妙なことしないでくださいね？」
「おかしいですね？私は別にそんなことをした覚えは・・・・・・あら？私もここで降りますよ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・ゑ？」

・・・・・・うぅ、すっごく嫌な予感です。

☆

電車から降りた後も、このお姉さんはとても破天荒すぎました。また暑いからと言って脱ごうとする、弟さんのお土産に妙な物を買おうとする、挙句の果てにはコスプレショップで何かを物色し始めるなどなどです。とても散々な目に遭いました。この人、日高先生とウチの母さんを足して割ったくらいの戦闘力ですね。正直参りました、降参です。

「あ～うぅぅう・・・・・駄目です、疲れました」
「ごめんなさいね、色々と付き合わせてしまって。貴方の用事はいいのですか？」

「それは・・・・・もう大丈夫です。それよりその弟さんの家を探しているのですよね？」

ここまでくれば、自分も意地でもこの人を連れて行きますよ？用事と言うよりただ今日は友達の家に遊びに行くつもりでしたが、キャンセルしてしまったんですからね！すみません、行けなくて・・・・・

「ええ。ですが流石に一年ぶりとなると記憶が曖昧でして・・・・・一応地図はあるのですが」

「あら？でしたらわかるかもしれません。見せてもらってもいいですか？」

「すみません、お手数をかけます。・・・・・コレですかね？」

そうやってお姉さんに見せてもらった地図は・・・・・あれ？見覚えがありますね？

「ああ、ここでしたらちょうど友人のマンションですね。すぐに見つけられますよ♪」

「本当ですか？何から何まですみませんね。助かります」

「いいえ、ちょうど自分もこのマンションに用があったので♪これまた面白い偶然ですね」

あはは♪何だかんだで自分と同じ場所に行くんでしたか。本当に中々面白い縁ですね。そう思いながらお姉さんとそのマンションに向かい歩きます。途中途中で彼女の弟さんの話を聞きながらね。

「・・・・・と言うわけなんですよ」
「へぇ?面白い弟さんなのですね?・・・・・・・おっと、ここですよ」

いつの間にか、『彼』のマンションに到着していました。さて後は流石にこのお姉さんもわかるでしょうし、自分は『彼』の家に遊びに行きますかね。

「では自分もここで友人宅へ行きますね。お姉さん、さよならです」
「あ、少し待って貰えますか?折角ここまでついてきてくれたのです。お礼にお茶くらい出させます」
「・・・・・・出させるって。ひょっとして弟さんに、ですか?」

それはあんまりでは・・・・・・?う〜む、ですがここで断るとまたこの人は何かやらかしそうで怖いですね。

「・・・・・・でしたら、お茶を一杯だけ貰えますか?自分はその後友人宅に行きますから」
「ふふふ♪ありがとうございます。気を遣ってくださって」
「・・・・・・何のことでしょうか?」
「いいえ?ただ貴方が優しいと言うことですかね」

ありゃ、バレてますね。ずっと気になってましたが、このお姉さん頭の回転は異様に早いですね?まあ、でしたらどうしてあんなことをするのかが一向にわかりませんが?

「それより早く行きましょう？その弟さんの所に」
「ええ、こっちですよ。ついてきて下さい」

やれやれ、最後まで振り回されっぱなしですね。まあ、本当にこのお姉さんの弟さんのことも、ちょっとは気になりますし、これはこれで良いでしょうかね？

そう思いながらお姉さんに着いていくと・・・・・・・・・ん？え？あ、あれ？ここはっ！？

「ああ、ここですね。変わっていなくてよかったです♪」
「・・・・・・・・・お姉さん、ちょっと聞きたいことが」
「何でしょう？残念ですがスリーサイズは教えられませんよ？」
「んなことはどうでもいいですが・・・・・お姉さんのお名前は？」

お姉さんがチャイムを鳴らしながら、今初めて気がついた・・・・・・的な顔で自分を見ます。

「ああ、そう言えばまだでしたね？ですがいけませんよ？まずは人に尋ねる前に名乗らなくては」
「月野造です。・・・・・で？お姉さんの名前は何ですか？」
「造くんですね？よろしくお願いします。私の名前は・・・・・・」

そう言って一度溜めてから、お姉さんは彼女の名前を言います。

「吉井玲です、以後お見知りおきを♪」

ガチャ　「って・・・・・・・・・・・え?」

そう彼女が言うのと同時に、自分の目的の場所の主がドアを開ける音がしました。

「ね、姉さん?それに造も・・・・・・・?」

そう、自分のクラスメイトにして友人、今日の自分の尋ね人の・・・・・・吉井明久(アキさん)が。

５５時間目　電車と常識とバスローブ～玲さん襲撃！～（後書き）

ありがとうです。いかがだったでしょうか？

うん、とりあえずまた造が巻き込まれましたね。造はトラブル吸引機ですからね。仕方ないでしょう。

それで話が変わってアレですが、ちょっと質問です。前回話してたことなんですが、何故か書いているうちに……造に秀吉フラグが（汗）……原作での明久と秀吉と似た空気が漂っているんですが、どうしてこうなった！疲れてんのかなｏｒｚ

質問というのはこのまま書き続けてもいいか、それともちょっと書きなおすべきか何ですが……うーん、ホントどうしたんでしょう自分……ちょっと書いてて自分を見失ったかな（苦笑）

まあ、どっちでもいいならいつも通り超展開に任せて書くかと。なにかアドヴァイスがあればお願いできますでしょうか？

作者的にはどっちでもいいですけどね（笑）お任せです♪

関係ないけど、そう言えば今日バカテス９．５巻発売ですね。楽しみです♪

読んでいただきありがとうございました！

５６時間目　突撃☆吉井家の姉弟！～レポーター造♪～（前書き）

どうも糖分です。急に暑くなってきましたね？体調管理は皆さんしっかりとしてくださいね？

さて、今回も玲さん無双ですね。てか、書いてて思いましたが玲さん、キャラが濃すぎ（汗）ヤバい主人公が喰われそう（色々な意味で）

とりあえず５６時間目です。よろしくお願いします！

56時間目　突撃☆吉井家の姉弟！～レポーター造♪～

驚いたことに、このお姉さん・・・・・いえ、玲さんは何とアキさんのリアルお姉さんでした。確かに雰囲気はどこか似ているかもしれませんね。優しそうな所とか、何処か天然な所とか？とりあえず、混乱しているアキさんにこれまでの経緯を（玄関先で）説明しました。

「ね、姉さんは何を考えているのさ!?造がいなきゃ、電車の中で露出狂になるところだったの!?」
「あ～、アキさん？そこまで言わなくても・・・・・」
「アキくん？玄関先でうるさいですよ？ご近所迷惑です」

「「えっ!?そっちなの（ですか）!?」」

「造くんもです。貴方たちは常識と言うものを知りなさい」

「「バスローブで公衆の面前を歩こうとする姉さん（玲さん）に言われたくないよ（ですよ）!?」」

いけません、またしても玲さん時空にのみこまれてきました。この人はひょっとすると日高先生と同じく自分の天敵かも知れませんっ・・・・・

「それで？造は遊びに来るって事はわかってたけど、姉さんは何さ？」

「そうでした。とりあえず中に入れてください。姉さんは造くんにここまで案内して貰ったお礼と、アキくんがどんな生活を送っているのかをチェックして母さんに報告する義務があります」

あや?そういうことでしたか。・・・・・あれれ?アキさんひょっとしてピンチじゃないですか?

「ふ~んそうなんだ。生活チェックか~」

「そうなのです」

「(アキさん、大丈夫なのですか?)」

「(まあ、見てて)そっかそっか・・・・・。ところで姉さん」

「はい?」

「アレなんだろうね?」

「なんでしょう?」

アキさんが明後日の方向に指差すと、疑うことなく玲さんはそちらを向きました。そしてその間にアキさんは・・・・・・

・・・・・グイッ　バタン。　ガチャガチャンッ

冷静かつ手際良く自分を引き連れて、扉を閉じ鍵をかけました。・・・・・ん?

ピンポーン

『アキくん。開けてください。姉さんはまだ家の中に入っていませんよ?』

「やってくれたな、母さんっ！！」

耳を塞ぎ、アキさんは蹲ります。えっとアキさん?どの辺が『まあ、見てて』なのでしょうか?

「アキさん、ホントにどうするのですか?」

「うぅ、このままじゃ今の僕の生活がバレてしまうよ・・・・・・助けて造っ！」

「これまたいきなりですね?・・・・・・う～ん、ちょっと考えましょうか」

それにしても玲さん、やっぱりアキさんのお姉さんなんですね。素直すぎてあんなアキさんの手に引っかかるとは・・・・・・

ピンポーン

『アキくん。聞こえていないのんですか?造くん、申し訳ありませんがそこにいるであろう愚弟の耳を引っ張って、ちゃんと聞こえるか確かめてもらえませんか?』

「何やら言われていますが・・・・・・?」

「無視しよう。ゲーム機と漫画くらい隠せたらよかったけど、どうすればいいと思う?」

「そう、ですね・・・・・・自分がアキさんに貸してて、今日偶然返してもらいにここに来たというのはどうですか?」

「それいただきっ！流石造！」

ピンポーン

『アキくん、造くん。もしや、姉さんにイジワルをしていますか？どうして姉さんを家に入れてくれないのですか。何か姉さんを入れたくない理由でもあるのでしょうか？』

「玲さんの話、飛躍してませんか？」

「ツッコミを入れちゃダメだよ。姉さんのペースに呑まれる。それにしてもどうしてこんな時期に姉さんを刺客として送ったんだろう、母さんは？」

「・・・・・多分ですが、期末が近いせいだからでは？テスト結果も踏まえてアキさんの生活もチェックする的な・・・・・」

「・・・・・それだね、時期も合うし母さんが考えそうだ。造がいると考えがまとまりやすくて助かるよ・・・・・」

それは嬉しい言葉ですね。ところで玲さんを放置してていいのでしょうか？何故か知りませんが、彼女を一人にすると危険な気がしますよ？

『・・・・・ああ、二人の言いたいことがやっとわかりました』

おや？何も言ってないのですがわかったのでしょうか？アキさんのことは何でも知っていると、先ほど豪語してましたし流石姉弟ってとこでしょうか。

『家に入れて欲しければ・・・・・・メイド服で来い、と』

誰がそんなこと言いましたか？

「ちょっと！？玲さん何考えているんですか！？」

「だ、ダメだ造っ！これは姉さんの天然の罠だ・・・・・・！ここで二人でツッコミを入れる為にドアを開けたら最後！わかるね・・・・・？」

「な、なんて計算された巧妙な罠なのですか・・・・・・？ツッコミを逆手に取るなんて！？」

玲さんの底深い策略に戦慄させられます。・・・・・・策略なのかわかりませんが。

『仕方ありませんね。今からお隣さんに事情をお話しして、メイド服を借りてきます』

ガチャガチャンッ　バンッ！

「やめてっ！何処の世界にご近所にメイド服を借りようとする姉がいるの！？」

「それに日本の家庭にはメイド服は常備されていませんよ！？」

二人してドアを開けて叫んでしましました。なんて恐ろしい方でしょうか。一応部外者である自分ですら、この人を玄関先に放置する

ことが恐ろしいと感じました。

「そうなのですか？でも、この前海外で知り合った方に『Ｆｕｊｉｙａ－ｍａ』　Ｔｅｎｐｏ－ｒａ　メイド服』こそ日本の文化だと言ってましたよ？」

「姉さん、ソイツ絶対おかしい！どうして『富士山』も『天ぷら』もちゃんと言えてないのに『メイド服』だけは発音が流暢なの！？」

「・・・・・何故か思い当たる人の顔を自分は思い出しましたよ・・・・・・？」

そういやこの前確か日高先生、母さんに連れられて海外に行ってましたよね？

あ、あははは？いや、まさかね・・・・・・

「まあ、積もる話は後にすることにして、とりあえず上がらせてもらいますね」

「「あ」」

なんてことでしょう？玲さんの巧みな話術によって、侵入されてしまいました！？この人やっぱり出来るッ！？

「・・・・・アキくん？脱いだ靴は揃えるべきですよ」

「あ、それはアキさんの靴ではなく自分の「造くん、嘘はダメですよ。造くんのはちゃんと揃えられてますよね」・・・・・・やっぱりバレますよねー」

さっきまで自分が履いていた靴くらい覚えられてますよね・・・・・この人相手じゃ、フォローするの難しいかも?アキさん、ゴメン。先に謝っておきます。

「なるほど。靴の脱ぎ散らかしから想像するに、アキくんと造くんは部屋の片づけや私をどう対処しようか相談してましたね?」

「くっ、流石姉さん・・・・・普通はメイド服より先に思いつきそうなことだけど、誤魔化しが効かないね」

いやまあ、確かに。ですがよく靴が脱ぎ散らかされていただけで、咄嗟にこんなこと思いつきますね?

「まったく、アキくんは・・・・・。造くんも甘やかさないでください」

「いや、それは、その」

「あ~、それ言われると耳が痛いかもです・・・・・」

この人、やっぱり自分（とアキさんの）の天敵ですね・・・・・・

☆

その後もアキさんがやっていたゲームのデータを破壊されたり、アキさんが所有する『成人向けの大人の雑誌』について言及されたり、

学習面に関して自分にまで聞いてきたりと第三者の自分ですら脅える家宅捜索が続きました。玲さんマジ怖い。

「やれやれ、アキくんは困った人ですね」
「・・・・・・（クスン）姉さんの方が、よっぽど困った人だと思うよ？」
「あ、あははは・・・・・・ですが玲さん、今回のゲームや漫画は自分が貸していたものですので、許して貰えませんか？」
「・・・・・・まあ、今日は造くんに免じて減点は５点程度で許しますが」

「「・・・・・・減点？何（ですか）ソレ？」」

アキさんも知らないってことは、玲さんルールなのでしょうか？玲さんによると、これはアキさんが一人暮らしの基準を決めるルールだそうで、減点が今回のアキさんの期末の点をを上回れば即アキさんのお母さんに報告。一人暮らしを無しにするとのことです。

まあ、アキさん一人でここに住むのには親兄弟としては不安なのでしょう。アキさんにとってはありがた迷惑かもですがね？凄く絶望した顔してますよ、アキさん？

「まあ、姉さんもそこまで鬼ではありません。普段の生活態度や学習面で良い結果を示せればもちろん加点します。それに、アキくんの学力は私も母さんもよく知っています。前回の定期テストと今回の期末テストの成績の差も、加点対象としますよ」
「おお、アキさんそれなら大丈夫じゃないですか？最近大分、点数上がりつつありますし」

「そ、そうだね！頑張れば許してくれるってことだよね！？」

希望が見えてきましたね♪何だかんだで玲さん優しいです～

「さて、それでゲームや学習面のことは置いておくとして、もう一つの約束はちゃんと守れてますか？」

「あら？まだアキさん約束を？」

先ほどは『ゲームは一日３０分』でしたね。勿論守れてませんでしたが。

「・・・・・・・・・・・・もしかして不純異性交遊の全面禁止ってやつ？」

・・・・・は？ナニソレ怖い。優しいと思ったのってちょっと甘かったですか？

「アキさん、そんな約束してたんですか？」

「ううん。全然覚えてな「ちなみに覚えていない場合、姉さんがお嫁に行けなくなるチュウをします」・・・・・いわけないよね？バッチリ覚えてるよ☆」

何やら学習面や生活態度よりも危ない話題じゃないですかね、コレ？聞けば玲さんがお嫁に行けなくなることにより、罪の意識を背負いこれから生きていく罰だそうです。その罰地味に怖いです。

「えっと・・・・・よくわかりませんが玲さん？それは何をどうすると不純異性行為に当たるのでしょう？」
「造くんいい質問です。そうですね、異性と手を繋いだ場合減点１００点にあたる程度でしょうか」
それもう、アキさんからしたら即死ものですよね？なんせ抱きつかれ、ほっぺにキスされてますし（二人にも）

「あら、どうしましたアキくん。顔色が悪いですよ？」
「あ、あはは・・・・・。気のせいだよ」
「怪しいですね。何か隠し事を「あっ！そう言えばそうでしたっ！アキさん自分お土産にケーキ買ってきたんですよ！六つありますから三人で分けて食べましょう♪」・・・・・？」
ヤヴァイ。アキさん今超ヤヴァイ。ここは玲さんの気を逸らしておきましょう。

「わ、悪いね造！じゃ、じゃあ僕はお茶を入れるよ！姉さんを連れて来てくれたお礼も兼ねてね！」
「ああ、そうでしたね。すみません造くん。お客様なのにお礼もまだで」
「いいえ！気にしないでいいですよ。さあ、食べましょう！すぐ食べましょう！その前に玲さんはシャワーなど入られてはどうでしょう？汗かいて気持ち悪いって言ってましたよね！？」
「そうですね、何から何まですみません。ではお言葉に甘えて入らせてもらいます」
この場はケーキとシャワーで誤魔化すとして、アキさんと緊急作戦

会議開始です。

「（ホントゴメン造・・・・・・）」
「（乗りかかった船です、ここはアキさんに手を貸しましょう）」
「（流石！僕の愛娘は頼りになるねっ♪）」
「玲さ～ん♪実はアキさんは・・・・・・」
「ぎゃあああああああああ！？嘘！冗談！ジョークだって！？」

う～む。何か釈然としませんね・・・・・・

56時間目　突撃☆吉井家の姉弟！～レポーター造♪～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

テストもオワタので、今日はもう一話更新すると思います。父には一応許可は取りましたし♪

それにしても今回も計画性がなく書いてますから、ちょっと心配です（文字数的な意味で）今回でさえアレなのに、目標文字数をちょっとオーバーする話もありますからね……（汗）

とにかく、また次回！読んでいただきありがとうございました！

５７時間目　玲さん撃退作戦始動っ！～３秒で計画破壊～（前書き）

どうも糖分です。５７時間目ですね。

さて、今回もまた妙なことになって来ましたよ♪もう超展開とノリに身を任せてガンドコ進むだけです。今回から秀吉が若干おかしくなり始めるのかな？

とりあえず行きますよ！今回もよろしくお願いします！

57時間目　玲さん撃退作戦始動っ！～3秒で計画破壊～

玲さんがシャワーを浴びている間にアキさんと作戦会議を行いました。ま、とりあえず今回の任務（ミッション）は・・・・・・

1. 全体的なアキさんの学力の向上（レベルアップ）
2. アキさんの生活態度を玲さんに誤魔化す
3. 学園の恋愛事情を絶対に玲さんにバレないようにする

・・・・・ですかね。1に関しては余程のことがない限り、今のアキさんにとっては問題ないことでしょうね。2に関しては・・・・・う～む、玲さんがここにいるまではきちんとした生活を送れるように心がけてもらいますかね？大変でしょうが、ここは頑張っていただきますか。

・・・・・問題は3ですね。玲さんのことですから薄々は何かに気づいているでしょう。ま、ないとは思いますが例えば学園に乗り込まれれば速攻でバレてアキさんの人生が色々とマズイことになる・・・・・・っと。

「とりあえずは期末が終わるまで、勉強会と言う名目で自分がアキさんの家にお邪魔して玲さんを抑えますよ。朝も迎えに来て玲さんが奇行に走らないようにしておきます」

「何から何までゴメンね造・・・・・。あの姉さんホントに常識外れだから」

・・・・・いいのですよ？ウチにも二人ほど非常識が服を着て歩いている方がいますし。

「とりあえずはこんな感じですね・・・・・・。おっと、玲さん来ますよ？」

「うん、それじゃ悪いけど、造。色々口裏合わせてね」

シャワーを浴び終え玲さんがやってきます。さてさて？どう誤魔化します・・・・・・かっ！？

「お待たせしました。アキくん、造くん」

「「待てえええええええええええええっ！？」」

「？だからお待たせしましたと？」

いや、そうではなくて・・・・・・！？振り返って玲さんを見ると、一般家庭ではとても見られない貴重な服を（？）着た玲さんが立っています。

・・・・・・・・・・・・なぜかナース姿で。

「「なんで（なぜに）ナース姿なのさ（なんですか）あああああああああっ！？」」

「造くん、今日はありがとうございました」
「そ、それはどうもです・・・・・。ですがまさかの今の自分らの発言スルーですか!?」
「どうしよう。自分の姉さんなのに上手くコミュニケーションが取れない!?」
「ああ、二人ともこの恰好に驚いているのですね?」
「「そうだよ（ですよ）っ!?やっと気づいてくれたの（んですか）!?」」
「二人とも大声を出さないでください。これにはわけがあるのです」
わけ・・・・・?あ、ひょっとして服がないとか?洗濯したとかでしょうか?ああ、それなら納得は一応しますが、
「造くんのお礼とアキくんへの誘惑です」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
・・・・・・??あ、あれ?もう何だかわからなくなってきましたね?
「ね、姉さん?どうしてお礼でナース服?」
「若い子はこうした服が好きなのでしょう?」
「それ多分人に寄りますよ・・・・・?そして堂々と自身の弟を誘惑すると言いきった玲さんは、ある意味尊敬します」

どうしましょうか、これ？アキさんと自分がフルでツッコミに回っても対応できないなんて思いもしませんでしたよ？と言いますか、電車の中ではあれだけバスローブに着替えたがっていたのに、あれは本来使われる場所で使わないのですね、玲さんは？

その後も玲さんの猛攻は続き、自分が家に帰るころには精神が崩壊しそうになってました。

☆

「・・・・・それで？その後どうなりましたか？」

「う、うん。何をトチ狂ったのか、脱衣所に姉さんが着ていたナース服とエプロンと野球帽が置いてあってね・・・・・・」

玲さん襲来から翌日、二人で学園にため息交じりに登校します。自分ですらあれだけ振り回されたんですから、アキさんの苦労は火を見るよりも明らかです。ノイローゼにならないか心配ですね・・・・・

「えっと、それで今の減点はどれくらいです？確か昨日５点減点でしたよね？変化ありました？」

「ゴメン造・・・・・・。あの後２０点引かれた。今の減点は１５点」

あらら・・・・・・大変ですね?ん?ですが１０点分回復してませんか?

「アキさん、ひょっとして１０点分生活態度で回復出来たんですか?」

「う、うん・・・・・・（言えない、『造くんとの不純同性交遊はいいですよね♪』なんて、わけがわからない姉さんの加点だったって言えない・・・・・・）」

ま、マイナス１５点位なら大丈夫でしょうか。アキさんの自分を見る目が生温かいのは気になりますが、今日から準備していけば十分対処出来ますよね。

そんなことを考えていると・・・・・・

「むう?造に明久ではないか?とりあえずおはようじゃ」

「あ、おはよう秀吉」

「おはようです、ヒデさん♪」

小走りでこちらにやって来たのはヒデさんですね。何やら不思議そうな顔をしてこちらに来ました。

「・・・・・どうしたのじゃ、明久よ?造はともかく、お主はいつもと違い早いではないか?」

「ああ、ヒデさんそれｈ・・・・・・（ムグゥ）！?」

なっ!?いきなりアキさんに口を塞がれました?何事でしょうか?

「あ、あはは!いいじゃない秀吉!ぼ、僕にだって早く来るときだってあるさっ!」

「・・・・・・ふ~む。まあとりあえず明久よ、まず造を放すのじゃ」

「おっと!ご、ゴメン秀吉!そうだね、ちょっと造と話してくる」

「いや、『放す』と『話す』違いなんじゃが・・・・・・?」

何やらわかりませんが、アキさんに連れられてしまいました。一体何ですか?

「・・・・・プハッ!アキさん!苦しいですよ?」

「ご、ゴメンっ!でも造、姉さんのこと話す気だったでしょ!?お願い!姉さんのことは皆には内緒にしておいてっ!」

「ああ、そう言うことですか。・・・・・う~ん、寧ろ下手に隠すと余計に気になられるかと思いますが?」

「もし話したら、昨日造が姉さんにされたことを包み隠さず暴露するっ!」

「HAHAHA!ダイジョウブ、造ナニモハナサナイヨ?」

ちぃ!ここで脅されるとは・・・・・・う~ん、まあアキさんがそこまで言いたくないなら仕方ないですね。ですがすぐにバレると思いますがね?

「はぁ・・・・・・なら黙っておきますが今回はあまりフォローは

出来ませんよ？玲さん相手じゃ自分役に立ちそうにありませんし」
「つ、造！本当にありがとう！」

ま、アキさんにここまで頼まれては仕方ないでしょうがね？見てると本当に自分が日高先生と母さんに振り回されているのに重なりますし。

そんなことを思いながら、ヒデさんの所に戻ります。

「なんじゃ、お主ら二人して？特に明久は今日は妙じゃぞ。着ている制服もちゃんとアイロンはかかっておるし、いつもと違い血色が良いようじゃし？」
「そ、その！そんな日だってあるさ！ね、ねえ造！？」
「そうですね。そんな日もあるかもですね」

あ～、アキさん嘘つくの下手でしたね。素直すぎますし。

「そ、そう言えば僕、鉄人に呼ばれてたんだった！二人とも悪いけど先行くね！」
「あらら、行ってしまいましたね？」
「・・・・・・明久め、逃げおったな？造、どう言うことじゃ？」
「・・・・・・そうですね、アキさんにも隠したい秘密がある。ってだけ言っておきますか？」

流石にヒデさんには、あんな調子のアキさんを誤魔化すことは出来ないでしょうしそれだけは言っておきましょうかね？

「ふ～む。・・・・・ま、いいがの？お主や明久のことじゃし」
「すみません、アキさんに頼まれたので」
「・・・・・むぅ、釈然とせんの（何故か知らんが複雑じゃ）」

あらら？何やらヒデさん難しいお顔ですね。今度一緒に甘いもの奢りますので今回は勘弁して下さい。そんな訳で、アキさんを追う形でヒデさんと（ちょっと宥めながら）二人で学園へ向かうことにしました。

そんでもって、学園に辿り着くと・・・・・・

『我ら正義のＦＦＦ団。諸君っ！我らがやるべきことは？』

『『『『異端者どもを赦すなっ！！』』』』

『その通り。異端者・・・・・吉井・坂本・ムッツリーニ。覚悟ッ！！』

『『『『消え去れえええええええええええッ』』』』

『『『ちぃ、毎度毎度しつこいっ！！！』』』

・・・・・相変わらずのＦクラスでした。学習合宿以来、Ｆクラスの皆さんの標的が確立してしまい、もう自分じゃ止められませんん・・・・・・

「あやつらも相変わらずじゃな」
「・・・・・ですね。ヒデさん、申し訳ないのですが、」
「みなまで言わんでよいぞい。止めるかの・・・・・」
「ありがとうです、ヒデさんが優しくて助かります♪」
「そ、そうかの♪ならいいのじゃ♪」

あや？ヒデさん機嫌直りましたか？うんうん、やっぱりヒデさんはそんな風に笑顔が一番ですよね♪

～しばらくお待ちください～

「「「ひ、酷い目にあった・・・・・」」」

いつもの如く、三人を解放してアキさんの机の周りに集まりました。三人はいつも大変ですよね。

「お疲れ様です皆さん。そんでもってゆーさんとこーさんはおはようです♪」
「おう、すまん。また助かったぜ？」
「・・・・・・・・・・・恩に着る」

いえいえ～♪皆さんにはお世話になってますし、これくらい大したことないですもんね。さて、それはそうとこーさん？やけに荷物多

くないでしょうか？

「おはよう雄二にムッツリーニ。ところでムッツリーニはどうしたの？随分荷物が多いけど」

「ん？そういやそうだな？何だ、今日は別に体育なんて無いだろ？」

ですよね？と言いますか、明らかに授業用でもなさげですし・・・・・

「・・・・・・・・・・・ただの枕カバーとぬいぐるみ」

「枕カバー？そのわりには包みが大き過ぎない？」

「それにお前、ぬいぐるみって・・・・・どうしたムッツリーニ？」

「・・・・・・・・・・・・別に何でもない」

こーさんはそう言いますが、明らかに何か隠してますよね？何でしょうホント？

「ごめんムッツリーニ。　ちょっと中身を見せてね」

「・・・・・・・・・・・・あ」

アキさんが大きな荷物のせいで動きの鈍いこーさんから荷物をを奪い取ります。ふむ、何が入っているんで・・・・・しょう、か？

「さて。何が入っているのか・・・・・な・・・・・」

「何・・・・・・・・・です・・・・・・・・？『コレ』は？」

開けてビックリ、と言うより唖然とします。中から出てきたのは、

・・・・・・等身大のアキさんがプリントされた布と、召喚獣サイズのデフォルメされた自分のぬいぐるみでした。

「・・・・・・・ムッツリーニ・・・・・・・何、コレ・・・・・・・？」

「・・・・・・・こーさん・・・・・・・？説明よろしくお願いします」

「・・・・・・・・・・・・・ただの抱き枕カバーとぬいぐるみ」

ほぅ・・・・・・・？これをただの抱き枕カバーとぬいぐるみと言いはりますか、こーさん？

「ただのじゃないっ！？枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たりがあるということをよく覚えておくんだ！っていうか、どうして僕の写真なの！？」

「そうですよ、こーさん！？こんなもの作ってどうする気ですか！？と言いますか、正直完成度高すぎて、怖いですよ！？」

「・・・・・・・・・・・・・二人ともいい仕事する。最近の目玉商品」

「何言ってんのさ！ムッツリーニも考えてみなよ！」

「そうですよこーさん！こんなものを欲しがる人なんて誰も・・・・・・」

コンコン

「失礼。土屋君はいるかな？以前頼んでいた枕カバーを・・・・・・」
「失礼します。土屋くんはいます？注文のぬいぐるみを・・・・・・」
Aクラスの久保くんと、Cクラス代表の小山さんが登場です。
「あれ？珍しいね久保君。ムッツリーニに何か用？」
「・・・・・なんでもない。少々用事を思い出したのでこれで失礼するよ」
「小山さんもお久しぶりです♪こーさんに用ですね？」
「・・・・・すみません先輩。私も先生に呼ばれていたので失礼します」
・・・・・？登場したと思いましたら、二人ともそそくさ行ってしまいましたね？どうしたんでしょうか？
「（おい、ムッツリーニ。あの二人まさか・・・・・・）」
「（・・・・・・・・・・強化合宿以来、二人ともお得意様に）」
「（久保は明久だろうが、Cクラス代表は・・・・・・造狙いか？）」
う～ん？本当にどうしたんでしょうか？小山さんも、何か悩みがあって相談に来たとかですかね？・・・・・それは後で考えるとし

て、

「はぁ・・・・・。とにかくムッツリーニ。とりあえずその抱き枕カバーは後で没収するからね・・・・・。ぬいぐるみは先生方に寄付しよう」

「アキさん?さり気なく自分を売らないでください」

ぬいぐるみも同様に回収ですよ?てか、こーさんが妙に高そうなカメラをいつも持ってますがその資金源って、まさか・・・・・?

「ま、それはともかく明久。お前今日変じゃねえか?」

「・・・・・・・・・・確かに」

「む?やはり雄二やムッツリーニもそう思うかの?こやつは朝あった時からこうじゃ」

「な、何のこと!?」

あらら、忘れてましたね。アキさん疑われていましたっけ。

「お前がこんな時間にちゃんと来ていることも変だが、制服がきちんとしているのは妙だ」

「・・・・・・・・・・寝癖もない」

「じゃろう?ワシもそれを聞きたいのじゃが・・・・・」

あはは・・・・・。皆さんよくわかりますね?アキさん冷静に分析されまくりですよ?

「た、たまにはそういう気分の日もあるんだよ！ね、造！？」
「あ、あはは。そですね、今日がそんな日だっただけじゃないですか？」
「そ、そうそう！あっ！そろそろチャイムが鳴るよ！鉄人が来る前に席につかないと！」
えらい強引に話を打ち切り、アキさんは自分の席に戻って行きました。

「「「怪しい・・・・・・」」」
完全に疑われてますね？まあ、今回は許してあげてください。色々と抱えているんですよ、アキさんもね？

57時間目　玲さん撃退作戦始動っ！～3秒で計画破壊～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

キャラ崩壊？原作崩壊？ＨＡＨＡＨＡ今さらですね♪……反省はします。

えっと、また皆さんに聞きたいことがあるのですが（汗）最近なんかこういうのが多くてすみません。もう少し先の話ですが、美波の家に行く話が原作ではありますよね？あれを造の家に行くことにしてはダメですかね？

美波の家に行くなら姫路さんの家にも行かないと、今の姫路＆美波のコンビは納得いかない設定ですし……（汗）で、でも言っときますが美波が嫌いなわけではないんですよ！？トラブルを回避しつつ、造を弄りたいだけなんです！！

とりあえずそのことでアドバイスいただけたら嬉しいです。何もなければ、やっぱりガンガン行くかと……

まあ、まだもう少し先のことですし気長に書くと思います。読んでいただきありがとうございました！

58時間目　珍しきもの～勉学勤しむ真面目なアキさん?～（前書き）

どうも糖分です。……寝ぼけながら更新です。

いつものように12時に更新しようとしてたら、気づいたらパソコンつけっぱなしで寝てました（汗）

まあ、とりあえずいつものごとく行きますか。58時間目、よろしくです♪

58時間目　珍しきもの～勉学勤しむ真面目なアキさん？～

「月野。吉井は一体どうしたんだ？」
「あ、あはは・・・・・・今日は朝から、先生方全員がそれ聞いてきますね」

お昼休みに西村先生に職員室に呼び出されました。アキさんが真剣に勉強しているのがそこまで心配されることなんですかね？

「えっと、アキさんも勉強しなきゃいけない立場に追い込まれたってことですかね？」
「・・・・・アイツがあんなに真面目に授業に取り組んでいると、本当に不気味だぞ」
「そこまで言わなくても・・・・・・。あれ？自分はそれだけで呼び出されたんですか？」

本当にそうなら、普段のアキさんの態度が気になりますね？まさかそれだけじゃないでしょうし？

「ああ、学園長がお呼びだ。召喚システムに関して何か言ってたぞ？まあ、吉井が何を企んでいるか気になってたのもあるがな？」
「アキさんの普段の生活態度が本当に気になりますね・・・・・・。それはそうと学園長ですね？ありがとうございます、ちょっと行ってきます」

そう言って西村先生とわかれ、とりあえずは学園長室に向かいます。

☆

「・・・・・それで？なしてアキさんとゆーさんがここに？」
「うん、ちょっとね・・・・・・・」
「ま、色々あってな・・・・・・・」
「ホントにこのクソジャリ共は何しに来たんだか」

学園長室に来てみれば、アキさんとゆーさんがいました。本当にこの二人は神出鬼没と言いますか、破天荒と言いますか・・・・・・

「月野、このバカ共の手綱をちゃんと握っておきな。目を離すとすぐコレだからね」
「失礼ですよ、ババァ！？それじゃまるで僕が造に迷惑かけているみたいじゃないですか！雄二はともかく」
「そうだぞババァ。明久はともかく、俺をバカ扱いするなんて失礼な。それに俺は明久ほど造に迷惑かけてないぞ？」
「なんだと！バカ雄二！お前造に毎回迷惑かけているじゃないか！」
「ハン！お前はただでさえアレなのに、造に心配かけ過ぎてんだよ！」
「アンタらどっちも同じバカ共だよっ！？」

あ、あれ？何でしょう？話が進みませんね・・・・・・？そもそもどうしてこんな話に？

「あ、あの?それで学園長?呼んでいると聞いて来たんですけど?」
「ああ、そうだったね・・・・・このバカ二人のせいで忘れそうだったよ。実は召喚システムの件でちょいとね」

学園長の話によると、何でも最近試験召喚システムの調子が悪く、調整が必要とのこと。それでもしかすると自分の身体に何か影響があるかもしれない為、十分気をつけることを忠告されました。

「まあ、調子は悪いがそんなに心配はいらんと思うがね。ただ用心の為にも夏休みに入るまではシステムは使わないようにするさね」
「ちょっと待ってくださいババァ。すると試召戦争も・・・・・・?」
「ああ、二学期まで待ってろってことさね」
「ちぃ、計算が狂いそうだな・・・・・おいババァ?そこを何とか出来ないのか?」

あ~、確かにゆーさんにとっては試召戦争は悲願ですからね。今までも大分計画を立てていたみたいですし、出来れば今すぐにでも試召戦争を起こしたいのでしょうね。

「別に使えないこともないが、このチビジャリがどんな影響を受けるかわからないさね。教師にも試召戦争の申し込みを止めるように、すでに伝えてある」
「あ、自分は別にどっちでもいいでｓ「そう言うと思ったからね、一応オマケも考えているさね」・・・・・うぅ」

先に潰されました・・・・・。最近学園長、自分の扱いに慣れてきてませんか?

「それで？『オマケ』って何だ？」
「システムのリセットさね。メンテナンスの件もあるし、一旦システムに蓄積されているデータを白紙に戻してやるよ。これなら文句はないだろう？」
「ほぅ・・・・・それは悪くない話だな」

あやや！それいいじゃないですか。特に今のアキさんにとっても♪

「（アキさん！これチャンスですよ！）」
「（ん？それどう言うこと、造？）」
「（期末試験の点数次第ではアキさんの装備がまともなものになる可能性があるってことです）」
「（えっ？装備の変更って学期末試験でしか変更できないのに！？僕の木刀がランクアップする可能性もあるって事！？）」
「（ええ！それに試召戦争が中止になればその分、勉強もはかどるでしょ？）」

「そ、それだあああああああああああああ！」

「「！？何さね（だよ）そこのバカ！？急に大声出して！？」」

「アキさん、落ち着いて・・・・・気持ちはわかりますから」

ですが本当に、これなら上手くアキさんの減点や玲さんの生活チェックも何とかなりそうですね。それに後々のアキさんの戦力強化にも繋がって、いいことづくしです♪

「分かりましたっ！期末試験、頑張りますっ！やろうよ雄二、造っ！良い点取って二学期の試召戦争で確実にＡクラスを奪取するんだ！」

「お、おう。そうだな（えらく気合い入ってんな？）」

「はいです♪頑張りましょうね」

それにしても絶好のタイミングでいい話が来ましたね。後は玲さんの暴走を止めることと、アキさんの頑張りにかけましょうね。

「まあ、そう言うわけさね。月野は今からちょいと気をつけることと、こいつらのお守をしっかりやんな」

「なんか気になるけどいいや！それじゃ、失礼します！」

「あ、おいっ！明久！？今、廊下を出て行ったらアイツらが！」

「え？ゆーさん、それってどういう・・・・・・」

アキさんに手を掴まれながら学園長室から出て行くアキさん。すると・・・・・・

ガチャ

「「「「ウェルカム」」」」

何故か四人ほど学園長室の扉の前に立っており、アキさんとゆーさんに捕獲されたまま逃走劇に自分も付き合うことになりました・・・・・・

アキさん？貴方勉強しなくて良いんですか・・・・・・？

☆

そんでもって毎度お馴染みの終業のチャイムが鳴り響く放課後～♪

「造、今日は僕の家じゃなくて造の家で勉強しない？出来れば泊めてもらえるとなお嬉しいんだけど・・・・・・」

アキさんの家で勉強会でもと思っていると、アキさんが意外なことに、自分の家に行きたいと言い出しました。

「あ～、すみません。ウチはあんまり来てもらいたくないので・・・・・」

「ん？明久、今日はお前ん家でボクシングゲームをやる予定だったろ？」

「（う～ん、雄二でも良いかな）そのつもりだったけど、今日はダメだよ。ねえ雄二、雄二の家に泊めてくれない？期末試験の出題範囲の勉強をしたいし」

・・・・・・ザワッ

あれ？アキさんの言葉に教室にざわめきが広がりましたよ？

『おい・・・・・聞いたか、今の・・・・・・』
『確かに聞いたぜ。俄かには信じがたいことだが・・・・・』
『まさか、アイツらがな・・・・・』
『ああ。まさかあの吉井と坂本が・・・・・』

『『期末試験の存在を知っているなんて・・・・・』』

それはどんな意味ですか・・・・・？

『そして聞いたぞ、吉井・・・・・？』
『ああ、確かに聞いた。これは遺憾だな』
『なんせ、今アイツ・・・・・』

『『造ちゃんといろんな意味でお勉強だと・・・・・！？』』

はい、ツッコミませんよ～？最近、スルーすることの大切さを学びましたし。

「勉強だと？お前・・・・・まだ七の段が覚えられないのか」
「待って！　僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ！？分数の掛け算だってきちんとできるからね！？」
「ああ、そうか。三角形の面積の求め方に躓いているところだったよな？」
「（底辺）×（高さ）÷２＝（三角形の面積）！いい加減僕をバカ

扱いするのはやめなさい！」

「「「「なん・・・・・・だと・・・・・・・！？」」」」

いやいや！？クラス全体が揺れるほど驚かなくてもいいのでは・・・・・？

「「アキ（明久君）！！よく頑張ったわね（頑張りましたね）！！」」

「・・・・・・・・・・・明久が、壊れた！？」

「お前っ！熱でもあるんじゃねえか！？おい、誰か医者呼んで来いっ！」

クラスが騒然としました。アキさんが普段どう思われているのか、本気で心配ですね？

「まあ、冗談はそれくらいにして急にどうしたのじゃ？明久が積極的に勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

おお、流石ヒデさん。常識人だけあり、正確かつ鋭い質問ですね？

「いや、ホラ。　さっき雄二と造がが説明したじゃない？『試験召喚システムのデータがリセットされる』って。木刀と学ランなんて装備をそろそろ卒業したいし、頑張ってみようかな～、なんて」

「・・・・・・・・・・・明久らしくない」

「だな。お前がそんな理由で勉強するハズはない。やっぱり今日は変だぞ、明久？」

アキさんが『勉強する』と言った途端にメンバーが全員集合するとは・・・・・ある意味団結しているのでしょうかね？

「あの、明久君。私で良かったら・・・・・・一緒にお勉強、しませんか？」

「そうね・・・・・ウチも数学くらいしか役に立てないけど、アキどうかしら？」

姫路さんと島田さんが提案してくれます。ふふっ、二人ともお優しいですね。特にアキさんには♪まあ、今回は事情が事情なので複雑なんですが・・・・・・

「二人の家に泊めてもらうわけにはいかないしなぁ・・・・・・」

「「えっ！？ウチら（私たち）の家に来たいんですか！？」」

「・・・・・ほぇ？何でそんな話に？」

ちょっと？女子二人が別の次元に飛んでしましましたよ・・・・・・？

「美波ちゃん、順番はどうします？」

「そうね・・・・・今日は瑞希からでどう？あっ！ついでにウチも泊りに行っていい？」

「ええ、待ってて下さいね。確認の電話をしてみます」

「「「「「・・・・・・あの？二人とも・・・・・・・」」」」」

うん、最近のこの二人、何を考えているのかさっぱりです。と言いますかこの二人の存在が玲さんにバレたらと思うと・・・・・・アキさん合掌？

「（・・・・・・造よ。お主いつまで隠しておくのじゃ？）」

っと、そんなことを考えているとヒデさんがこっそり耳打ちしてきました。

「（あー、それがアキさんの家の事情でして・・・・・・自分は多くは言えないんですよ）」

「（・・・・・・ワシにもかの？）」

「（う～ん、もしこれが自分のことでしたらヒデさんにも相談したいですが・・・・・・）」

「（・・・・・・納得、いかんのう・・・・・・）」

あ、あれ？今日のヒデさん、なんか怒りっぽくないですか？ある意味あの別次元に飛んだ二人と同じオーラを感じますよ・・・・・・？じ、自分だって相談できるなら相談したいのですがアキさんに釘を刺されてて仕方がないんですよ！？

「そんで？何で明久は俺の家に泊りたいんだ？自分の家に何かあったのか？」

「あー、えっと、実は」
「嘘をつくな」
「急に勉強に目覚めて・・・・・・って、早いよ！　まだ何も言ってないのに！」
「アキさんも色々あるんですよ、色々ね」

う～ん、今回は下手に言い訳すると、余計感づかれそうですね？ゆーさん勘いいですし。

「造は朝からそればっかだな？まぁ、次の試召戦争の事もあるし、勉強くらい一緒にやらんでもないが」
「え？　ホント？」
「ただしお前の家で、だ。別にそれなら構わんだろ？何か問題でもなけりゃ、な？」

おおぅ・・・・・・流石ゆーさん。踏みこんできましたね。それにしてもボソッと『我が家にはあの母親がいるからな・・・・・・』と呟くゆーさんの顔が哀愁漂ってました。ゆーさんの家には雪乃さんがいますからね。確かに自分も孫扱いはゴメンですし？

「って、僕の家はダメだよ！今日はちょっと、その都合が悪いんだ！ね、造！？」
「あの・・・・・・アキさんわざわざ自分に振らないでください」
「都合が悪いだと？それじゃ何かあるのか？」

ここは上手くあしらえたらいいのですが・・・・・・

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」
「そうなんです、自分はその改装の手伝いに」
「嘘つけ。本当なら今日はお前の家でボクシングゲームをやる予定だったろうが。改装業者が来るはずないだろ。そして造は業者に混ざって手伝う気か？」

ゴメンアキさん。今日の自分はあまり上手いフォローが出来そうにないです。

・・・・・アキさんファイトっ！ここは上手く逃れてください！

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」
「そうなんです、自分はアキさんの鍵開けの手伝いに」
「マンションなんだから管理人に言えば開けてもらえるだろ。造はいつからピッキング出来るようになった？お前はムッツリーニか」

ゴメンアキさん。やっぱり上手くフォロー出来ません。てかこーさんピッキング出来るんですか！？

・・・・・それはそうと、頑張れアキさん！？あまり後がないですよ！

「でもなくて、家が火事になっちゃって」
「そうなんです、自分はアキさんの部屋の消火活動に」
「火事に遭ったくせに弁当を用意してＹシャツにアイロンをかけてきたのか？お前はどこまで大物なんだよ。あと造、今更消火しに行ってどうするんだ？」

ゴメンアキさん。もうネタ切れです。何か自分でも言っておかしいとは思ってましたが。

・・・・・・これはもう詰みましたかね？

「あー、えーっと他には他には・・・・・・！」

「アキさん、もう無理みたいですよ・・・・・・？」

「ああ。明久、お前の嘘は底が浅いんだよ。造もおかしなフォローを入れようとすんな」

そうですね。アキさんも観念したようで、帰り支度を始めました。

「わかったよ。今日はおとなしく家でやるよ。・・・・・・造、お願いできる？」

「あいあいです。それでは皆さん、さようなら（ガシッ）・・・・・・ゑ？」

アキさんと一緒に帰ろうとすると、何故かヒデさんがしっかりと肩を掴んで止めました。あのぅ、ヒデさん？地味に痛い上にお顔が怖いのですが・・・・・・？

「待つのじゃ造に明久よ。何をそこまで隠しておるのじゃ？それに二人だけで勉強会とは水臭いのう？」

「うぇっ！？いや、別に何も！」

「そ、そうですよ？てかホントに痛いのですが・・・・・・」

「何があるのかわからんが、このバカと造がそこまで隠そうとすることか・・・・・・。面白そうだな」

と、ニヤニヤゆーさんがアキさんを目で笑っていますね・・・・・・

「よし、んじゃ確認に行くとすっか」
「そうじゃな、どうやら造も何か知っておるようじゃし、造と明久を連れて明久の家にお邪魔するかの？」

あ、あのヒデさん！？何か今日やけに怒ってませんか？自分何かしたのでしょうか！？と言いますか、また巻き込まれました！？

「そうね。何かアキの新しい一面が見られるかもしれないし」
「私も興味があります」
「・・・・・・・・・・・・家宅捜査」

何故か大事になってきましたよ？何か、何か上手い言い訳を・・・・・・

「あ、あの！ヒデさんは部活では！？」
「テスト期間で部活もないからのう。さあ一緒に行こうぞ、造よ♪」

マズイ、今日のヒデさん何か本気です・・・・・・。アキさん！何とかしてください！

「ダメだよ！今日は僕の家はダメなんだ！その、凄く散らかっているから！」
「あの、それならお手伝いしますけど？」
「そうね、ウチも手伝おうかしら・・・・・・？」
「でも、散らかっているのは２０００冊以上のエロ本なんだ！」

「・・・・・・・・・・・任せておけ（グッ）」
「しまった！更にムッツリーニの興味を煽る結果に！？もの凄い逆効果だ！」

くぅ、このままでは本気で行く流れに！？今日のヒデさん怖いですし、出来れば行って欲しくないのですが・・・・・。こうなれば奥の手です！？

「ひ、ヒデさん。実は今日アキさんと自分はコスプレをしに行くんですよ！」
「なら姉上を誘うかの♪」
「・・・・・・・・・・・・撮影は任せろ（グッ）」

「「アキ（明久君）！！さぁ行きましょう♪」」

「「皆が乗り気になったあああああああああああ！？」」

あかん、今日の皆さん本当にいつも以上に変ですよ！？てかコスプレが決め手になるなんて思いもしませんでしたよっ！

「んじゃ、意見もまとまったことだし、明久の家に行くか」
「うむ、ちゃんと造を連れての♪」

「「「おーっ！！！」」」

「「やめてーっ！」」

アキさんと二人、一応抵抗はしましたがアキさんは姫路&島田ペア

の腕の中に収まり、自分はヒデさんに捕まり（何故か抱っこで）アキさんの家に向かうことになりました。

・・・・・嫌な予感しかしませんね？

58時間目　珍しきもの～勉学勤しむ真面目なアキさん？～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

相変わらず文字数が安定しなくてすみません（汗）下書きしておきながら、安定しないって……orz

この話とは全然関係ないですが、バカテス9．5巻読みました♪詳しくはネタバレになるので書きませんが、雄二も明久もカッコいいし優しいし面白い一面が見られて楽しかったです。あと高橋先生とかのネタが増えましたよね（笑）ヤバい、相変わらず面白いですよね～♪

すみません、関係なくて。それじゃまた次回！読んでいただきありがとうございました！

５９時間目　玲さん最凶伝説～今日の獲物は弟＋造～（前書き）

どうも糖分です！いつも読んでいただきありがとうです♪

最近（といっても結構前から）作品のコンセプトの造の『のんき』さが行方不明ですが気にしないでください。と言いますか正直最近、女装ｏｒ男の娘がこの作品のコンセプトになっている気がしますよね（汗）

いいやどうせ造だし♪それでは行きましょう！５９時間目です。

59時間目　玲さん最凶伝説～今日の獲物は弟＋造～

「（どうしましょうアキさん？このままじゃ皆さんに玲さんが）」
「（僕が聞きたいよっ！？何でこんなことに・・・・・・）」

アキさんの家に向かう途中で、自分とアキさん以外は凄く楽しそうに会話しています。

「さて、何があるんだろうな」
「ムッツリーニと違って造も明久も滅多に隠し事をせんからな。何があるのか楽しみじゃな」
「・・・・・・・・・・・・隠し事なんて何もない」
「女物の下着に興味はあるか、ムッツリーニ」
「・・・・・・・・・・・・あるわけがない」
「流石に隠し事に慣れとるだけあるの。嘘も堂に入ったものじゃ」
「・・・・・・・・・・・・！（ブンブン）」

・・・・・どうでもいいですが、道の真ん中でそんなこと言わないようにね？

「でも、何でしょうね？明久君がそこまで隠すものって」
「おまけに月野もグルでしょ？・・・・・・うーん、思いつかないわね」
「そうじゃな・・・・・・。今日の明久のおかしな点と言えば、急に手作りの弁当を持ってきたことや、Ｙシャツにアイロンがかかっておったことじゃったの」
「・・・・・・・・・・・・それらを踏まえると」

「ははっ、造と明久が付き合い始めたとかか？」

「「「「・・・・・・・・・・・っ！？」」」」

ゆーさんの言葉に全員が反応しました。てかゆーさん、そのことについてちょっとお話があるのですが？あと、ヒデさん？そろそろ肩外れそうなので放していただけると嬉しいのですが・・・・・・

「ア、アキっ！？何考えているのよ！？」

「そ、そうですよ！？月野君に手を出すなんて犯罪ですよ！？」

「・・・・・・・・・・外道がっ！見損なったっ！！」

「僕ら、何も言ってないんだけどな・・・・・・」

「造よ？どう言うことか説明して貰おうかの？」

「ヒデさん？笑顔なのに目が異様に怖いのですが・・・・・・」

何か今日のヒデさん、微妙に先生たちや優姉さんと同じ雰囲気がしますよ？ホントどうしたんですか？

そうこうしているうちに、アキさんのマンションに着きました。って！？ヤバイです、何も対策考えてないですよ！？

「（どどど、どうすんのさ造！？）」

「（そんなこと言われても何も思いつきませんよ！？）」

「（こ、こうなれば隙を見て逃げ出すしか・・・・・）」

「（ア、アキさん！？もしや自分を生贄にする気じゃないですよね！？）」

「（ナンノコトカナ？）」

「お主ら、言っておくが今日は逃げられぬからの？」
「・・・・・・・・・・・逃げ道は塞いである」
「と言うこった。明久、鍵を出せ。造も逃げるなよ？」
さ、先に逃げ道をこーさん達に塞がれました・・・・・どうして皆さん、こんな時の連携が素晴らしいんでしょうね？
「くっ・・・・・・・い、嫌だっ！開けないっ、開けたくないっ！！」
「ゆ、ゆーさんに皆さん！ここは勘弁していただけると・・・・・・」
せめてものアキさんと二人、最後の抵抗です。
「ハァ・・・・・・・明久。裸Ｙシャツの苦しみ、味わうか？」
「・・・・・・・・・・・造も一緒に、涙目＋上目遣いで頼む」
「「待って（ください）！？途中のステップたくさん飛んでない（飛んでませんか）！！？」」
最近、説得（？）の内容が日に日に酷くなってる気がします・・・・・
「土屋くん。Ｙシャツのボタンは上二つ開けでお願いします」
「ウチと瑞希はアキのセットを予約するわね」
「・・・・・・・・・・・・毎度」
「ちょっ！？アンタらホントにおかしいからね！？てか姫路さんも

美波も何言ってんの!?」

本当に二人はどうしてこうなったんでしょうね・・・・・。素直になった結果がコレだよ!むしろ自分の欲求に素直になった結果がコレだよ!!

「造よ?お主裸Yシャツの件を姉上に報告されたいのかの・・・・・・?」

「ひ、ヒデさん!?それだけはっ!?それだけは勘弁してもらえるとっ!」

「なら話してはくれぬか?のう造よ、別に疾しいことはないのじゃろう?」

今日のヒデさん本気(マジ)だ・・・・・。疾しいわけではないのですが、ここでバラすと昨日の玲さんにされかけた(ちょっとされた)恥ずかしいことがアキさんにバラされることに・・・・・・

「あ、アキさん!ここは開けましょう!別にそれくらいなら大丈夫でしょう!?」

「くっ!そうだね・・・・・わかったよ開けるよっ!開ければいいんでしょう!?」

「「「「ボタンを?」」」」

「「鍵を!!」」

こうなれば玲さんがいないことを祈るだけです!アキさんが恐る恐る鍵を開けて・・・・・おお、どうやら玲さんの靴はなさげです

よ！これならばっ！

「（アキさん！玲さんいない様ですよ！）お邪魔しまーす♪」
「（そうみたいだね！よしっ！これなら）さぁ、みんな入ってよ」

不在とあらば問題ないハズです。アキさんもホッとしたようで皆さんを招き入れます。そしてリビングのドアを開けた直後・・・・・・

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

皆さんの目に飛び込むは、ブラジャーと言う名の女物の下着でした。

「い、いきなりフォロー出来ないものがあああああああああ！？」
「さ、流石玲さん。すでにトラップを張っていようとは・・・・・・」

アキさんはとにかく大慌てで洗濯物を別室に放り込みます。うーん、お風呂場に干すとか玲さんは考えなかったのでしょうかね？

そしてこの光景を見た皆さんの反応は・・・・・・

「「・・・・・アキ（明久君）？ダメじゃない（ですか）」」

「な、何が・・・・・・？」

「「あのブラ、アキ（明久君）にはサイズが合ってないわよ（ないですよ）？」」

「ちょっと!?どう考えたらアレが僕のものになるの!?」
「やれやれ。とうとう明久も目覚めたのか」
「・・・・・・・・・・・変態」
「雄二っ!キサマなんてことを!?あとムッツリーニにだけはそれ言われたくない!」

「造よ?説明しだいでは今すぐ姉上達に報告するぞい?」
「いやいや!?自分はアレ関係ないですよ!?先に言っときますが、アレ自分のでもないですからね!」

たった一着の女性物の下着でここまで荒れるなんて、このメンバーはどうなっているんでしょうね・・・・・・最近、いろんな意味で不安です。良い人達なんですがね?

「アキさん、ここは素直に話した方が良いかと・・・・・・」
「ハァ・・・・・もうこうなったら仕方ないよね?正直に言うよ。実は今、姉さんが帰ってきているんだ・・・・・・」

これ以上隠そうとすると、更に泥沼な気がしますし話しておく方が良いですよね。アキさんと自分が女装癖があるなんて思われるのもゴメンですし。

「「「何だ、そう言うことか（ですか）」」」

・・・・・一応納得してもらえたようですね。ですが何故アキさんにお姉さんがいるかもしれないと思うより先に、女装が思い浮かんでくるのでしょうね・・・・・・？

「そんなわけで色々と今日はちゃんとしてたの・・・・・・わかってもらえたかな？」

そう言ってアキさんが話を打ち切ろうとすると・・・・・・

「待て明久。姉がいるのは分かった。が、それだけで何故家に帰るのを嫌がる？」

「造もじゃ。そのことを何故お主が隠さねばならないのかの？」

「あ、そういえばそうですよね？」

「・・・・・・・・・・・・（こくこく）」

「なら何か隠し事しているのかしら？」

「なぁ明久？ここまで来たんだ。もう全部ゲロって楽になれよ、な？」

「造よ。庇うなら明久の為にはならんぞい？」

グゥ、鋭い・・・・・・！ヒデさんとゆーさんの二人には隠し事が出来ませんね・・・・・・？

「・・・・・わかったよ、僕も腹を括るよ。・・・・・・実は・・・・・僕の姉さんは、かなり、その・・・・・珍妙な人格をしているというか・・・・・常識がないというか・・・・・だか

ら、一緒にいると大変で・・・・・・減点が」
「えっと、自分も昨日彼女に会ったのですが・・・・・・凄く、その・・・・・・常識にとらわれない方でして、自分もかなり振り回されて・・・・・・」

良く言えば柔軟な考えを持っている方で、悪く言えば破天荒な方ですよね。いや、良い人なんですが、ちょっと凄い方ですもの。

「この二人が非常識って言うなんて、どれだけ・・・・・・？」
「むぅ・・・・・・恐ろしくはあるが、気になるのう・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・是非会ってみたい」
「そうですね。会ってみたいです」

貴方がた四人はそうでしょうが、自分らにとっては大変なんですよ・・・・・・？

「（おい造、そんなに酷いのか・・・・・・？）」
「（・・・・・・ゆーさんのお母さんの雪乃さんといいレベル、ですかね？）」
「（・・・・・・そう言うことか）あー・・・・・・お前ら、そういう下世話な興味は良くないぞ。誰にだって、隠したい姉とか母親とか、そんなもんがいるモンなんだから」

珍しくアキさんのフォローをしてますね。後、えらく母親を強調していますね、ゆーさんは。ま、自分も孫扱いされたことは忘れたいので言いませんが・・・・・・。

「ゆ、雄二・・・・・・・・・・!ありがと・・・・・・・・」

ガチャ

・・・・・・『ガチャ』?・・・・・・・・こ、この音はまさか・・・・・・!?

『あら・・・・・・?姉さんが買い物に行っている間に帰ってきていたのですね、アキくん』

このタイミングで帰ってきますかっ!?まさか狙ってませんよね、玲さんは!?

「うわわわわっ!か、帰ってきた!皆、早く避難を・・・・・・」

「明久君のお姉さんですか・・・・・・・?ど、ドキドキします・・・・・」

「う、ウチ、きちんと挨拶できるかな・・・・・・・・?」

「ダメだ!　会う気満々だ!」

皆さんが興味深々で玲さんが現れるのを待つ中、アキさんは一人『せめて、せめてまともな服装でいてくれ姉さん・・・・・・・・!』と呟きます。確かに電車の中でさえああでしたから、アキさんの気持ちは何となくわかりますよ。

そして緊張の一瞬（主にアキさんの緊張ですが）の後リビングのド

アが開かれて・・・・・・

「あら。造くん♪今日も来てくれたんですね？そしてお客様ですか。ようこそいらっしゃいました。狭い家ですが、ゆっくりしていってくださいね」

そんなごく普通の挨拶をした玲さんは、七分丈のパンツに半袖のカッターシャツ、その上に薄手のベストという常識的な格好をしていました。

「どもです、玲さん。すみません、またお邪魔してしまって」

「「「「「お、お邪魔してます・・・・・」」」」」

普通の格好に普通の挨拶。ごくごく一般的で常識的な姉さんの振舞いを見て、拍子抜けと言ったような表情をしているヒデさんやゆーさんたち。ま、事前に『非常識』と言ってましたし、そんな反応するのも当然と言えば当然でしょうか？

「失礼しました。造くん以外の皆さんにはまだ自己紹介をしていませんでしたね。私は吉井玲と言います。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

深々とお辞儀をする玲さん。どこからどう見ても普通のアキさんのお姉さんですね？これならいけますか・・・・・？

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

我に返ったゆーさんが慌てて頭を下げます。・・・・・どうでもいいですが、ゆーさんの敬語久しぶりに聞いたかも?

「・・・・・・・・・・・・土屋康太、です」

続いてこーさん。

「はじめまして。雄二くんに康太くん」

そして笑顔で返す玲さん。ず、随分とまた平和ですね?正直昨日の騒動は何だったのかと思ってしまうくらいの呆気なさですよ?

・・・・・まあ、そろそろ皆さんもわかると思いますが・・・・・

「(おい造。普通の姉貴じゃないか。これでおかしいと言うなんて、明久はどれだけ贅沢者なんだ!造も知ってんだろ!?俺なんか、俺なんか・・・・・っ!)」

「(まあ、見ててください。そろそろ普通ではないことは分かりますよ)」

ゆーさんの小声で会話しているよそで、今度はヒデさんの番のようですね。

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく・・・・・・」
「ええ。男の子ですよね？秀吉くん、ようこそいらっしゃいました」
「・・・・・・・・・・・・・っっ！！」

その言葉を聞いて、ヒデさんは驚いたように玲さんの顔を見上げます。・・・・・・ヒデさん、言いたいことはわかりますよ？

「わ、ワシを一目で男だと分かってくれたのは、造と主様だけじゃ・・・・・・！」
「勿論分かりますよ。だって」

微笑みを浮かべて玲さんがが答えます。

「だって、うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんて出来るはずもありませんから」

玲さん、それは流石にあんまりでは？アキさん泣きそうですよ？アキさんが玲さんに何かツッコミを入れようとするより早く、玲さんは姫路さんと島田さんの方を向き、

「ですから、こちらの二人も男の子ですよね？」

と、爆弾発言をしました。嗚呼、やっぱり始まりましたか・・・・・・

「ちょ、ちょっと姉さん!?出会い頭になんて失礼なこと言うのさ!姫路さんも美波も、秀吉も造もみんなきちんと女の子だよ!?」

「「アキさん（明久）!!自分ら（ワシら）は男で合ってますよ（おるぞ）!?」」

くぅ・・・・・やっぱりアキさんも玲さん同様、常識知らずのようですね!?やっぱりちゃんと思い知らせねば!

っと、それはともかく玲さんはアキさんの台詞に反応し、ゆっくりとアキさんの方を向きます。

「・・・・・・・・・・・女の子、ですか・・・・・・?そうですか。まさかとは思いましたが、アキくんは家に女の子を連れてくるようになっていたのですか・・・・・・・?」

これは、アキさんマズイですね・・・・・・・?玲さんは『不純異性交遊全面禁止』と豪語してましたし。

「い、いやあの、姉さん。これには深い深〜い事情があって・・・・・」

「あー、玲さん?後でこれは自分が説明をしますから・・・・・・」

「・・・・・・そうですか。女の子ですか。変な事を言ってごめんなさい」

「実は・・・・・・・・・ってあれ?」

「・・・・・・・玲さん?」

・・・・・ん？玲さん怒ってないのでしょうか？昨日の反応や行動から考えると、怒らない方が変な気もしますが・・・・・？

「どうかしましたか、アキくんに造くん？」
「いや、姉さん怒ってないのかなって思って・・・・・・」
「ですよね。玲さんらしくないと言いますか・・・・・・」
「？二人とも何を言っているのですか？どうして姉さんが怒る必要があるのですか？」

う～ん、本当に怒っていない、ですよね？少々昨日のことで焦りすぎましたかね？アキさんと二人で胸を撫で下ろしていると、玲さんが満面の笑みを浮かべたまま告げました。

「ところでアキくんに造くん？」

「「はい（ん）？何でしょうか（何さ）？」

「今日はお客様がたくさんいらっしゃっていますし、アキくんの楽しみにしていたお医者さんごっこは明日でもいいですね？造くんも折角付き合ってくれる約束だったのにすみませんね？」

・・・・・・・・・・・・あはは♪油断した途端にコレですよコレ。冗談じゃないですっ！？

「ね、姉さん、何言ってるの！？まるで僕が日常的に実の姉とお医者さんごっこを嗜んでいるかのような物言いはやめてよ！」
「てか何故に自分も巻き込まれているのですか！？自分そんなこと

する気はサラサラないですよ!?」

やっぱり玲さん怒ってましたね・・・・・・?間接的にアキさんを弄っているようです。それとこの人、ホントに何故自分まで巻き込むのでしょうかね?

「あ、明久君・・・・・・。お姉さんとお医者さんごっこなんて・・・・・」

「アキ・・・・・・。血の繋がったお姉さんが相手って・・・・・・・。法律違反なのよ?」

「造よ・・・・・・。それでワシに黙っておったのか・・・・・・・?」

そして生まれる新たな誤解。

「姉さん!お説教なら後でいくらでも受けるから、その台詞訂正してよ!」

「玲さん!そもそも自分は全く関係ないはずでしょう!?」

「何を慌てているのですか、アキくんに造くん。それより、昨日アキくんたちに渡した姉さんのナース服はどうしましたか?」

「「このタイミングでそんな事を聞くなぁあああああああ!!」」

もう嫌です。この人本当に怖いです。こんなことになるなら、やはり先に逃げておくべきでしたね?

「・・・・・すまんな、明久に造よ。さっきの言葉を訂正させて

もらう。お前ら苦労しているな」

ゆーさんの言葉が凄く優しく聞こえたのは、とても印象的でした。

59時間目　玲さん最凶伝説～今日の獲物は弟＋造～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

なんか玲さん襲撃編は、いつも以上に長くなるのかな……？書いて気がつくと設定した文字を最近オーバーしすぎてて焦りますよ……

まあ、書く分は楽しいのでいいのですが、読んでいただいている皆さんが大変ですよね（汗）なるべくは読みやすい工夫とかしてみようと思います。

とりあえず今回はここまで！読んでいただきありがとうございました！

６０時間目　造ＶＳ玲～ツッコミが追いつかないｂｙ造～（前書き）

どうも疲れたときは甘いもの。糖分摂取魔です！

今回の期末編長くなりそうですよね（汗）一応先に先に下書きだけは書いてますが、文章量も内容もいろんな意味でパンクしそうですもん……。

まあ、とりあえず行きます！６０時間目です。

60時間目　造ＶＳ玲～ツッコミが追いつかないｂｙ造～

あの後、当然の如く『不純異性交遊の現行犯として、アキくん減点２００点です♪』といったやり取りがありました。結構アキさんには痛い減点ですね・・・・・・。と言いますか、アキさんご愁傷様です。

「ごめんなさい、話が逸れてしまいましたね。貴女方お二人のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」
「あ、はい。申し遅れて申し訳ありません。私は姫路瑞希と申します。明久君とは・・・・・・く、クラスメートです」
「ウチは島田美波です。アキとは・・・・・・と、友達です」
あらら、二人とも？どう言おうか迷いませんでしたか？ふふっ♪青春ですね～♪

「姫路さんに美波さんね。はじめまして」

やれやれ、玲さんこういう大人の対応が出来るハズなのに、逆にさっきのようなことになるのは何故でしょうね？ギャップが激しすぎて困りますよ？

「ところで、姉さんは何をしに出掛けてたの？」
「お夕食の買い物に行っていました」
「あれ？それにしては随分と量が多くない？」

玲さんが持っていた袋にはアサリやベーコンなどの食材が見えます。
ですが、確かにアキさんと玲さんの二人分にしては少々分量が多めですね？

「いいえ。その量で合ってますよ」

そう言う玲さんは・・・・・あら？何故か少しだけ不機嫌そうですよね？

「折角皆さんがいらしたことですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？それこそ大したおもてなしはできませんが」

・・・・・うーん、よくわかりませんね？何でしょうか、ちょっぴり玲さんらしくないような？

「それじゃ、ありがたく好意に甘えさせてもらうかな」
「・・・・・・・・・御馳走になる」
「迷惑でなければワシも是非相伴に預からせて頂きたい」
「ウチも御馳走になろうかな」
「じゃ、じゃあ、私も・・・・・」

昨日あれだけ飄々とした態度をとっていた玲さんが露骨に不機嫌な態度なんて？

「・・・・・・・・・・・うーん？」

「あら?造くんは今日はご予定でもあるのですか?」
「あれ?造、そうだったの?」
「えっ?・・・・・ああすみません、ちょっと考え事を。自分もいいでしょうか?」
「ええ、もちろんです。昨日のお礼も大して出来てませんし。皆さんもよかったです。ではアキ君お願いします」
「うん。了解」

そう言ってアキさんに持ってた袋を渡す玲さん。・・・・・まあ、今日はあまり深く考えても仕方ないでしょうか?玲さん本人も、すでにそんな顔してませんし。

「え?アキが作るの?」
「うん。そうだけど」
「明久君って、お料理で来たんですか!?」

おっと。こっちではアキさんがお料理出来ることに驚く女子二人ですね。そんなに驚くようなことですか?

「お昼に言ったじゃないか。お弁当作ったって言ったじゃないか」
「そ、そういえばそう言うことも・・・・・」
「確かにそんなことそ言っていましたけど・・・・・」

あらあら、何やら釈然としないご様子。・・・・・ま、アキさんの普段の生活から想像すれば、意外ではあるかもしれませんよね?

「そう不自然な事でもないだろ?　俺だって料理を作るしな」

「・・・・・・・・・・・・紳士の嗜み」
「わ、ワシは、その・・・・・・あまり得意では・・・・・・」
「あー、自分は一応出来ますが、どちらかと言うとお菓子専門ですかね？」

そう言えばゆーさんもこーさんもお料理上手でしたね♪カッコいいですよ♪ヒデさん、そんなに落ち込んだ顔しないでください？もし必要なら自分も教えに行きますし？

「へぇ？ムッツリーニや造はともかく、雄二はやっぱり家で夕飯作って覚えたタイプでしょ？」
「おう。その通りだが・・・・・やっぱりってのは何だ？」
「あはは♪だって雄二、家の中で一番立場が低そうだもん」
「？お前は一体何を言っているんだ？」
「え　何って・・・・・夕飯って、家の中で一番立場が弱い人が作るものなんでしょ？」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」

・・・・・え？えっと、ひょっとして世間一般の家庭はそんなルールがあるのですか？自分の家は基本日高先生がはりきって作るので、よくわかりませんが・・・・・・？

「母の方針で、我が家ではそう言うことになっています」
「そ、そうなんですか・・・・・」
「アキのお母さん、なんかパワフルな人っぽいわね・・・・・」
「普通は立場に関係なく、作れる人が作る物なんじゃがな・・・・・」

「え!?普通の家では違うの?おのれ母さん!よくも今までずっと僕を騙し続けてくれたな!?」

なるほど・・・・・。アキさんのご家庭での立場と、アキさんのお母さんの立場が何となくよくわかりました。やはりどの家庭でも『母は強し』ですね・・・・・?ウチもある意味母さんが最凶ですからね。

「んじゃ、ちょっと早いが先に夕飯の準備から始めるか。手伝うぞ、明久」

「・・・・・・・・・・・協力する」

「あ、うん。ありがとう、二人とも」

「あのそれなら私もっ!」

「「「「「いや、女子は座っててていいから!」」」」」

「そ、そうね!?瑞希!ここはアキたちに甘えましょう!?」

「は、はぁ・・・・・・。そうですか・・・・・・」

あ、危ない・・・・・・!ここで姫路さんを出撃させるわけにはいきませんね?

ん・・・・・?ですがアキさんにとってこれはもしやチャンスでしょうか?

「(アキさん、ここでゆーさんとこーさんに玲さんのこと説明しておく方がいいのでは?)」

「(あっ!そっか、そうだね!余計なこと言われてまた減点される

のは危険だし！）」
「（そう言うわけで自分は玲さんと姫路さんを止めるのと、ヒデさんに事情を説明しておきます。すみませんがお料理は任せても・・・・・？）」
「（むしろ大助かりだよ！ゴメンね？ホントに色々と・・・・・・
まあ、どの道女子には休んでて貰いたかったし、料理は任せてね♪）」

そう言うわけで自分とアキさんで、先に皆さんの口を封じることにします。姫路さんと島田さんは、説明しない方がいいでしょう。説明入れれば、逆に拗れる気がしますし？

・・・・・ところでアキさん？その最後の『女子には休んでて貰いたかったし』って言う台詞は、まさか自分とヒデさんは含まれてませんよね・・・・・・？

☆

「・・・・・と言うわけ何ですよ。ですから玲さんにアキさんの普段のことは黙ってて貰えると助かります」
「なるほどの♪そういうことじゃったか。安心せい。明久が不利になることは言わんでおくぞい」

とりあえず玲さんと女子二人が話している隙に、ヒデさんに事情を

話しました。流石にわかってもらえましたね。・・・・・今更ですが、最初からヒデさんには話しても良かったかもですね？

「後すみません、黙ってて。今度ちゃんと埋め合わせはしますので・・・・・・」

「・・・・・・っ！？そ、そうかの？（こ、これは思わぬ収穫かの・・・・・・？）」

「ん？ヒデさん、どうかしました？」

「な、何でもないのじゃ！それよりも姫路たちのとこに行くぞい！」

？？？何かヒデさんえらい嬉しそうですね・・・・・・？まあ隠し事が何なのかわかってすっきりしてるんでしょうかね？本当にすみませんでした、ヒデさん。

とりあえずヒデさんの説得も成功ですし、玲さんから目を離すのは危ないですのでそろそろ戻りましょうか。

「どうもです♪お電話お借りしてすみません。家に電話して来ました」

「うむ、ワシも今日は相伴させて貰うと連絡してきたぞい」

「そうですか。電話くらい、いつでも使ってくださいね？」

一応、本当に電話はお借りしました。ヒデさんを誘う口実にもなりますし、携帯なんて面倒な機械使わなくていいですし♪

「あはは・・・・・すみませんです、自分携帯苦手で。ところで玲さん？何をなさっているんですか？」

「ああこれですか？姫路さんと美波さんのお二人に、アキくんの小さな頃の写真を見せようかと思いまして」

そう言って玲さんが取り出したのは・・・・・なるほどアルバムですね。先ほど玲さんがご自身の部屋に向かっていたのはその為ですか。

「宜しければ造くんも秀吉くんも見ますか？」
「ふむ。明久の昔の写真かの。それは面白そうじゃ」
「あらら、アキさんに後で怒られないか心配ですね♪」

ま、ちょっぴり気になるので見せてもらいましょうね。玲さんに暴走されるよりもいいでしょうし？

「ふふっ♪それでは・・・・・これがアキくんの二歳の時のお風呂の写真です」
「す、すっごく可愛いですっ！」
「うむ、中々愛らしい顔をしておるのう」
「素直そうでとっても可愛いわね～」
「なるほど。流石にこの頃のアキさんになら負けませんよね（背丈的な意味で）」

ああ、そう言えば自分もよく日高先生に撮られてましたね。自分はあまり写真は撮らないですが、形に残るものも悪くはないですからね。

「それでこっちが、アキくんが四歳の時のお風呂の写真です」

「あははっ！アキってばお風呂の中で寝てるわ」
「温かくて気持ち良かったんですね」
「無邪気な寝顔じゃのう」
「ホッとする写真ですね♪」

うんうん。当然と言えば当然でしょうが、アキさんもこんな時期があったんですよね♪面白いですね～

「そしてこっちがアキくんが七歳の時のお風呂の写真で」
「小学生の頃ですね。懐かしいです」
「かなり背丈も伸びておるのう」
「そうね。大分大きくなってるわね」
「・・・・・・・・・・・・ん？あれ？」

い、いや。確かにアキさんの成長がわかるアルバムなんですが、さっきから何か違和感が？

「更にこちらが、アキくんの十歳の時のお風呂の写真です」
「待って！？玲さんストップです！気になってたんですが、先ほどからお風呂の時のアキさんしか見ていない気がするのは気のせいでしょうか！？」

『造の言う通りだよ！？姉さん、どうしてお風呂の写真ばかりなの！？そのアルバムは何の写真を集めてるのさ！』

台所でアキさんの声が聞こえますね。まあ、確かにいくら小学生の時のものとは言え、女性陣にお風呂の写真ばかりは・・・・・・

「そして、これがアキくんの昨日のお風呂の写真です」

「「・・・・・・・・・・・・（ゴクリ）」」

「玲さあああああああん！？ホントと待ってください！！色々とおかしすぎてツッコミが追いつきませんよ！？」

『このバカ姉がぁーっ！！いつの間にそんな写真を！？さては着替えか！脱衣所に着替えを持ってきた時かっ！？造っ！そこのバカ止めるか殴り倒して！！』

『明久、鍋から目を離すな。吹きこぼれるぞ』

『もうそんなことはどうでもいい！それよかあのバカの頭をフライパンでカチ割ることの方が大事だっ！』

『料理を舐めるな。いいからおとなしく鍋を見ていろ』

『離せーっ！雄二のバカーっ！造ーっ！頼む、僕の代わりにそこのバカをっ！！』

アキさんの暴れる音が聞こえます。アキさんよ、気持ちは凄くわかりますよ。日高先生も昔、同じことをしてましたし。

「ああそうそう。造くんと秀吉くんはこちらを・・・・・・・」

「うむ？何じゃ・・・・・・・・・っ！？／／／／／／／／／／」

「え？な、何ですかヒデさん？その反応・・・・・・はうぁ！？」

玲さんが自分とヒデさんに見せてきたのは・・・・・・・自分のナース姿・・・・・・って！？

「ちょっ、ちょっと玲さん!?何でこんなものが!?まさか昨日のですか!?」
「ふふふっ♪どうですしょうコレ?綺麗に撮れているでしょう?」
「そんな問題ではありませんよ!?ひ、ヒデさんも悪ノリしてそんなに見ないでくださいっ!?」
「う、うむ。すまんの・・・・・・ま、まあ確かに綺麗に撮れておるの?」
「だ、だから見ないでください!!また一つ黒歴史が増えましたよっ!?」

ホントにこの人には敵いませんっ!いかん、涙出てきそうですよ・・・・・?それから食事ができるまでの数十分、玲さんを止めたりツッコんだりと振り回される始末。自分は勉強会に来たはずですのにね・・・・・・?

60時間目　造ＶＳ玲～ツッコミが追いつかないｂｙ造～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

今回の話やっぱり長くなりそうですよね……明久の家から全然進みませんもん（汗）あんまり進まないので一気に更新しようか迷いましたけど、それじゃあんまりでしょうから今回は一話だけ。話が繋がっているのでなるべく早く更新しようかと思います。

余裕があれば（パソコンが使えれば）すぐまた更新しますのでご勘弁ください。後最近本当に文字数的な意味でバラツキが多くてすみません……

それから、次回更新したらバカテストを挟むつもりです。今回はあんまりストーリー性がないかもですが、面白くなるよう出来るだけ頑張ってみますね。

とりあえずまた次回！読んでいただきありがとうございました！

６１時間目　アキさんの参考書？～保健体育でも使いません～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。ホントに暑いですね……

早く更新すると言っておきながら、結局いつも通りの更新ですみません（汗）まあ、相変わらずですかね……

さて、では行きましょうか。６１時間目です！どうぞ♪

61時間目　アキさんの参考書?～保健体育でも使いません～

そんなこんなで時間が過ぎて・・・・・・

「みんな待たせたな。夕飯が出来たぞ」
「ありがとうございます。お客さんなのにアキくんのお手伝いまでさせてしまって」
「いや、気にしないでくれ。料理は嫌いじゃないからな」
ようやく出来たお料理に、自分はホッとしました・・・・・・。つ、疲れた・・・・・・。

「あ、ありがとうございます・・・・・・（ポッ）」
「お、おいしそうね・・・・・・（ポッ）」
「姫路さん、美波、どうして僕の顔を見て赤面してるの?」
ゴメンよアキさん・・・・・・玲さんを止めようと努力はしましたが、ね?

「それにしても、アキくん。あなたはどうしてそんなに落着きが無いのですか。リビングにまであなたの声が響いてましたよ」
「「それは姉さん（玲さん）の行動が原因だからね（ですからね）!?」」

ダメです・・・・・・。ツッコミに力が入りませんよ。

「ほらまたそうやって大きな声を出して・・・・・・。造くんもです。アキくんはカルシウムが足りないのではないですか?そして造くんはお腹が空いてイライラしているんでしょう?」

そう言った玲さん。何故かアキさんのパエリアを自分の所に持ってきました。そしてアキさんには代わりに深皿を差し出しました。・・・・・えっと?

「皆さん、貝の殻はこのお皿に入れてくださいね。造くんはアキくんの分までしっかり食べて大きくならないと♪」

「何それ!?僕の夕飯は貝の殻だけ!?」

「あの?カルシウム不足以前の問題かと?自分もそんなに食べられませんよ?」

これが玲さんなりのジョークなのか、はたまた本気なのか、それとも玲さんの愛情表現なのか、非常に判断に困りますね・・・・・・?

「姉さん・・・・・・。やっぱり、姉さんは僕の事が嫌いなの・・・・・・?」

まあ、昨日から見てきた自分もよくわからないですからね、玲さんは。

「心外ですね。何を言っているのですかアキくん。姉さんがアキく

んを嫌う訳ないでしょう?」

そりゃ確かにとてもアキさんのことを想っているのは間違いないと思いますが。

「寧ろ、その逆です」

「え?　逆ってことは?」

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ・・・・・・」

「はい。姉さんはアキくんの事を愛しています」

あらら、『愛しています』ですか?中々恥ずかしい台詞ですね♪家族とは言え、とても大切な言葉でいいですよね~♪

「・・・・・・一人の異性として」

・・・・・・ツッコむべきでしょうか?玲さんの目は本気ですから、あんまり触れない方が良いのでしょうかね?

「最後の一言は冗談だよね!?それなら嫌いでいてくれた方がよっぽど嬉しいんだけど!?」

「日本の諺にこういう言葉があります」

「何!?　また余計な事を言うの!?」

「バカな子ほど可愛い、と」

それは何か色々な意味で違う気もしますがね?

「諦めろ明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」
「待って！　それは僕が世界で一番バカだって思われてるってことなの！？」
「今頃気づいたか、バカ久」
「う、ウチだってアキの事を世界で一番バカだって思っているわ！」
「わ、私だって！この世界で明久君以上にバカな子はいないと確信しています！」
「やめて！？僕の心のライフポイントはもうゼロだよ！？」
「てか、皆さんバカバカ連呼し過ぎですよ・・・・・・？」

アキさん、玲さんが来てからと言うもの踏んだり蹴ったりですね・・・・

「まぁ、そんなことはどうでもいいとして、冷めないうちに頂きましょう」
「ど、どうでもいいんだ・・・・・。いいや、いちいちツッコんでられないし。んじゃせーの」

「「「「「頂きまーす」」」」」

とにかく、ようやく夕食の時間です。

「む。これはまた、美味い物じゃな」
「ホントですね♪素晴らしい出来栄えですよ」
「そうか。口に合って何よりだ」
「そう言って貰えると作った甲斐があるよ」
「・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

何でもアキさんの好物かつ、得意料理だそうです。うんうん、やっぱりアキさん凄いですね。ところでそのアキさんＬＯＶＥのお二人の反応がまだのようですが・・・・・・？

「あれ？二人ともパエリアは苦手だった？」

「う・・・・・・。いや、嫌いじゃないし、凄く美味しいんだけど・・・・・・」

「だからこそ、落ち込むと言いますか・・・・・・」

・・・・・なるほど？まあ、好きな男性が自分たちよりお料理上手となれば、乙女心は複雑なんでしょうかね？ボソッと姫路さんが『私も、もっとオリジナルの味を・・・・・・』なんて言ってたような気もしますが、多分幻聴でしょう。

「確かに上手に出来ていますね。まあ、アキくんの知っているレシピとは違う材料を用意したのに、いつも通りなのは残念ですが」

「偉そうに言うなあ。姉さんは料理は全然ダメなくせに」

あら？意外ですね？確かに今日もアキさんに全部任せてましたし、誰にでも向き不向きがあるのでしょうか？・・・・・・姫路さんと料理みたいな？

「何を言うのです、アキくん。姉さんだってアキくんの知らないところで成長しているんですよ」

「ふ～ん。成長ね？んじゃどう成長したのさ？」

「胸がＥカップになりました」

「姉さんにに恥じらいという概念はないのか！料理は何処行った！？」

ヤバイ・・・・・アキさん今日何度目のツッコミでしょうか？

「勿論料理の勉強もちゃんとしました。最近ではついにウニとタワシの区別だってつくようになりましたよ」

「「今まで区別できてなかったの（ですか）！？」」

ハッ！？む、無意識にツッコんでしまった・・・・・！？もうすでに玲さんのペース！？

「そうそう。ところで皆さん、家の愚弟の学校生活はどんな感じでしょうか？　例えば成績や『異性関係』とか。造くんに聞いただけではわからない所もあるでしょうし」

おおぅ、玲さん抜け目ないですね？やはり来ましたか。異性関係のとこがやけに強調されてたのが気になりますね・・・・・

「えっと明久君は凄く頑張っていると思います。最近は成績も伸びてきたみたいですし」

「そ、そうね。よくドキッとする時があるわ」

「そうですか、それで異性関係は？」

「え、えっと、それは・・・・・よく分かりません・・・・・

『異性関係』は」

「そ、そうね・・・・・ウチもあまり知らないです。『異性関係』

は」

お二人とも?わざわざ玲さんと同じように異性関係を強調しなくてもいいのでは?

「そうですか。雄二くんたちはどうですか?」

「ああ、俺らも知らんな?ま、直接明久に聞いて下さい」

「・・・・・・・・・・・・(コクリ)」

「じゃな。そういうことは、本人が直接言うじゃろしな?」

やれやれ、先手を打っておいてよかったですね。これなら玲さんも納得して・・・・・・

「・・・・・・皆さん、何か隠してますね?」

・・・・・・くれるはずもないですよね?玲さんの勘の良さと頭の回転の早さを甘く見てましたよ。

「ふふっ♪秘密ですか。それでは・・・・・・今度アキくんに『ぼっきり』と、造くんに『ねっとり』と聞かせて頂くことにしましょう」

「「姉さん(玲さん)待って(下さい)!?普通そこは『じっくり』とか『ゆっくり』だよね(ですよね)!?」」

逃げ出したくなってきましたよ?玲さんはひょっとして自分らで遊んでませんかね?

「明日のおかずは魚にしようかな・・・・・」
「まだ今日の夕飯食べているのにもう明日の献立を考えているのですか。アキくんは食いしん坊ですね」
「いや、そう言う訳じゃないよ」
ええ、おそらくアキさんは骨折対策でしょうね？
「そう言えば言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくて結構ですよ」
「え？そうなの？」
「はい。こちらで済ましておかなければならない仕事があって、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうです」
へぇ？それならアキさんも集中して勉強出来そうですね♪心なしか、アキさんに笑みが。
「嬉しそうですね、アキくん？」
「ぅえ！？い、いや、そんなことないよっ！折角帰ってきた姉さんがいなくなるのは凄く残念だよ！」
「英語で言ってみてください」
「Ｈａｐｐｙ♪」
「・・・・・・・・・・」
「あっ！痛っ！姉さ・・・・・っ！食事中にビンタは・・・・・・っ！」
「お、落ち着いて下さい、玲さん！アキさんのジョークですよ！？」

この後のアキさん曰く『デザートに血の味が混ざっていた』そうです。

☆

食事後に全員で勉強会です。玲さんも監視しているので色々と気をつけなければ。

「そろそろ始めましょうか？」
「そうね。あまり遅くなるのは困るし」

夕食の支度が早かったので、今日はたっぷりと勉強出来そうですね♪

「さあ、みんな頑張ろうね！テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強やるよっ！」

「「「明久が言うと不気味だな（じゃな）（だ）・・・・・・」」」

あはは・・・・・そう言わないであげてくださいね？アキさんも必死なんですから。

「では今日はどんな教科にしますか？自分英語以外なら何とかなると思いますが？」

「造よ！すまぬがワシに教えてくれぬかっ！」

おおっ！ヒデさんが燃えていますね。なるほどヒデさんも頑張っていい点を取りたいんでしょうね。ここはいつもお世話になっている分ヒデさんのお手伝いができるように頑張りましょうかね♪

と、そんなことを思っていると、玲さんが急に何か思い出したように立ち上がり、

「皆さんでお勉強ですか？それなら良い物がありますよ」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきますね」

そう言ってリビングを出てから、何かを取りだした後再び戻ってきました。

「参考書という物なのですが、役に立つかもしれませんので」

そう言って玲さんは一冊の本をテーブルの上に置きます。何々・・・・・？

【女子高生　魅惑の大胆写真集】

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがあああああああああっ！！」

「あらら・・・・・。てかアキさんまだ持ってたんですか？」

昨日の玲さんによる荒探しで大体処分されたと聞きましたが、恐るべきは思春期の男子高校生の執念と、弟を大好きなお姉さんの意地でしょうか・・・・・・？

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！こんなもの参考になるかーっ！？」

「そ、それじゃあ、あくまでお勉強の参考書として・・・・・・・」

「そ、そうね。ウチもちょっと勉強しておこうかな・・・・・・・」

「ちょっ！？二人は無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ！？寧ろ見ないでくださいお願いします！！」

あのぅ、勉強会は・・・・・？あの姫路さんでさえ、アキさんのことを知る為に勉強を放り出すとは・・・・・・青春でしょうかね？

「アキくん。ベットの下に置いてあった他の参考書も全て確認しましたが、あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルは柔らかいロングの女子。もしくは逆にバストサイズが控えめで、かつヘアスタイルはポーニーテールの女子という二つの範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで！いくら言い方を変えて取り繕ってくれてもそれが僕の趣味傾向だってことがバレちゃうんだから！」

「「～～～～～～～～っ！！／／／／／／」」

アキさーん？今さらりと姫路さんと島田さんを堕とす台詞を言ったことは自覚してますかー？あれれー？今日食べたパエリアって甘かったですっけー？口の中が甘いですよー？

「む？そう言えばどうしたのじゃムッツリーニ？お主先ほどからやけに大人しいの？」
「・・・・・・・・・・・・明久」
「ん？何？鼻血出し過ぎでもしたのムッツリーニ？」
「・・・・・・・・・・・・あと１９９９冊は？」
「ちょっと！？もしかして２０００冊のエロ本の話、本気にしてたの！？」

こっちはこっちで勉強が進みませんね・・・・・・。

「ったく、お前ら明久のエロ本の話は置いといて、勉強やるならさっさとやるぞ」

よ、よかった・・・・・ここで自分がツッコミしなければならないかと焦ってましたから、ゆーさんがまともで本当によかった・・・・・

「よろしければ私がお勉強を見て差し上げましょうか？」

そう玲さんが言ってきます。うーむ、真面目にやってくれるなら大助かりなんですが・・・・・・？

「え？お姉さんがですか？」
「はい。日本ではなくアメリカのボストンにある大学ではありますが、大学の教育課程は昨年修了しました。多少ならお役にたてるか

と」

ボストンですと・・・・・・?あ、あれ?ひょっとして?

「ぼ、ボストンの大学だと・・・・・・!?それ、まさか世界に名高いハーバード・・・・・・」

「よくご存じですね。その通りです」

「「「「「ええええええええええ!?」」」」」

「・・・・・・・・・・」

「あら?造くんどうしてそんなに脅えた顔なんですか?」

「い、いえ・・・・・・!知り合いと言いますか、育ての母親っぽい人もそこの出なので・・・・・・は、ははは・・・・・・」

や、やっぱり玲さん、日高先生と何か繋がりが・・・・・・!?い、いやまさか。それに昨年教育課程修了なら、時期的に関係ないハズですよねっ!!

ま、まあそのこと聞くのは別の機会にしておきますが・・・・・・?別に聞くのが怖いとかそんなものではありませんよ?今は勉強会ですからね。余計なことは考えずに一心不乱に、勉強したいだけですからね!?

「それにしても明久よ。そうか、出涸らしか・・・・・・」

「雄二、その発言の真意を聞かせてもらえないかな?」

ゆーさん言い過ぎですよ?やれやれ、何か勉強始まってすらいないのに疲れてきましたね?

「そう言うことなら教えてもらおうぜ。本場の英語とか、こっちの教師にゃ知らんことも色々知っていそうだしな。造もひょっとすりゃ英語が出来るようになるかもな!」

「・・・・・・・・・・・・・・頼もしい」

「そうじゃの。造は英語さえ何とかなれば本当に凄いからの」

「あの?そこまで酷いんですか?自分の英語力?」(↑前回の英語Wのテスト2点)

「わかりました。それでは英語あたりから始めましょうか。造くんには後で『ねっとり』教えてあげるので心配しなくても大丈夫ですよ」

「「「「「よろしくお願いします!」」」」」

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

ま、まあそれはさておき、その日は十時頃まで玲さんの講義を聞き解散となりました。

61時間目　アキさんの参考書?～保健体育でも使いません～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか?

関係ありませんが、もうすぐアニメも始まりますね♪しかし作者の家のテレビ環境では見れないというオチです……仕方ないのですしDVD出るの待つかな……

あ、次回はバカテスト集ですね。今回の話や次の本編の話と微妙に繋がっている設定です。まあ、そこまで凝ってはいませんが……

もしかしたら、次回の話で携帯版の方は文字化け（?）起こすかもです。ドイツ語って携帯じゃ表記できないんですっけ?ウムラウトとか……?その時はすみません。

まあ、とりあえずまた次回!読んでいただきありがとうございました♪

バカテスト集その？＋吉井玲先生の特別試験集（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

今回は本当に久しぶりのバカテスト集です。もしかしたら文字化け起こしているかもしれませんが、そこは脳内補正で（？）お願いします。

とりあえず行きましょうか！今回もよろしくです♪

バカテスト集その?+吉井玲先生の特別試験集

バカテスト　英語)
問　以下の英文を正しい日本語に訳しなさい。

『Die Musik gef?llt Leuten und bereichert auch den Verstand.』

島田美波の答え
『音楽は人々を楽しませる上に心を豊かにします。　※これは英語ではなくてドイツ語だと思います』

坂本雄二の答え
『出題が英語ではなくドイツ語になっている為に解答不可』

教師のコメント
申し訳ありません。先生のミスで違う問題が混入していました。日本語訳は島田さんの解答で正解です。ただ、今回はこちらの手落ちなので無記入の人も含めて全員正解にしたいと・・・・・・

土屋康太の答え
『　　↑あぶりだし』

吉井明久の答え
『　　↑バカには見えない答え』

教師のコメント

・・・・・思っていたのですが、君たち二人だけは例外として無得点にしておきます。真面目に答えなさい。さて、そう言えばいつも月野君は英語が苦手な分ここは嬉しい加点でしょうかね？

月野造の答え
『音楽は人々を気に入らせ感情を豊かにします』

教師のコメント
・・・・・・・・・・・・あ、あれ？え、えっとですね？ここでは島田さんの訳のようにｇｅｆ？ｌｌｔ（ｇｅｆａｌｌｅｎ：気に入る）を『楽しませる』とした方が自然ですが、訳としては一応意味は伝わりますね・・・・・？
で、ですが月野君？貴方ドイツ語がわかるのですか？英語は苦手ですのに？

バカテスト　政治・経済）
問　日本国憲法第７６条『裁判官の職権の独立』について、以下の（　　）に正しい語句を記入しなさい。

『すべての裁判官は、その（　　）に従ひ（　　）してその（　　）を行ひ、この（　　）及び（　　）にのみ拘束される』

姫路瑞希・月野造の答え
『すべての裁判官は、その（　良心　）に従ひ（　独立　）してそ

の（　職権　）を行ひ、この（　憲法　）及び（　法律　）にのみ拘束される』

教師のコメント
大変よくできました。これは日本国憲法における重要な条文の一つですね。裁判官の権限の行使にあたっては、政治的権力や裁判所の上級者からの指示には拘束されないことが憲法上保障され、それによって独立して職務を執行できるということです。この内容には裁判官の身分保障なども含まれていますね。豆知識として覚えておくとよいでしょう

吉井明久の答え
『すべての裁判官は、その（　ピー　）に従ひ（　ピー　）してその（　ピー　）を行ひ、この（　ピー　）及び（　ピー　）にのみ拘束される』

土屋康太の答え
『すべての裁判官は、その（　本能　）に従ひ（　脱衣　）してその（全裸体操）を行ひ、この（現行犯により警察の手）及び（　手錠　）にのみ拘束される』

教師のコメント
憲法第７６条を何だと思ってますか？全ての裁判官の皆様に対しての誠意ある謝罪文を要求します。

この答えを見た玲さんのコメント
とりあえずアキくんは姉さんが拘束しますね。ついでに造くんも。

バカテスト　英語）
問　（　　）内の英単語の正しいアクセントを答えなさい。

『Don't mind. It's your（imagination）. He had stayed on business in New York yesterday.』

姫路瑞希の答え

『imagina,tion』

教師のコメント
正解です。一般的に“～tion”という単語は“tion”の前の母音にアクセントがつきます。覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『i,m,a,g,i,n,a,t,i,o,n,』

教師のコメント
数を打てば当たるというものでもありません。

吉井明久の答え

『imagination!』

教師のコメント
たまに君は天才なんじゃないかと錯覚することがあります。

月野造の答え
『ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ♪』

遠藤先生のコメント
可愛らしいですね♪そんな造くんには、私がアクセントをつけたこの服を着てもらって補習してもらいましょうね♪

月野造の返答
補習は受けますが、そんな服は着ませんよっ！？

☆

～吉井玲先生の特別試験集～

「・・・・・姉さん？これ何さ？」
「こちらでは私、吉井玲が学校の試験とは異なる形式の問題を出していきたいと思います」
「え、えっと・・・・・テスト勉強になるなら受けさせてもらってもよろしいでしょうか？」
「勿論です♪ただ正解が一つに限られる画一的なものではなく、もっと自由に幅広い解答が可能な出題形式です」
「・・・・・姉さん？今度は何企んでいるの？」

「失礼ですねアキくんは。まあ決して個人的な調査を目的としているわけではありませんが、質問には正直に答えて下さいね」

「「・・・・・・・・・・・・（激しく不安だ）」」

吉井玲先生の特別英語試験

問　あなたの今までの異性とのお付き合いや経験について、英語で答えて下さい

姫路瑞希の答え

『Ｉ　ｈａｖｅ　ｎｏ　ａｓｓｏｃｉａｔｅｄ　ｗｉｔｈ　ａ　ｍａｌｅ.』

吉井玲先生のコメント

瑞希さんは今までに男性とお付き合いをしたことはないのですね？それは大変結構なことだと思います。学生の本分は勉強ですからね

尚、異性と付き合うという意味で用いる場合の“ａｓｓｏｃｉａｔｅ”は主に否定的な内容を伴います。間違いではありませんが、“ｒｏｍａｎｔｉｃ　ｏｖｅｒｔｕｒｅ（男女交際）”等の単語を用いると更に良いかと思います。姫路さんは優秀ですね♪我が家の愚弟に爪の垢を煎じて飲ませてあげたいです。

坂本雄二の答え

『Ｉ　ｗａｓ　ｋｉｓｓｅｄ　ｗｈｉｌｅ　ｓｌｅｅｐｉｎｇ.』

吉井玲先生のコメント

英文としては正解ですが、内容が少々気になります。寝ている間に接吻をするとは、最近の日本の高校生は随分と進んでいるのですね。造くんに悪い影響がないか心配です。そして我が家の愚弟がそのような真似をしていないのかも不安です。あの子たちの解答がとても気になってしまいます。

吉井明久の答え
『英作文ができませんでした』

月野造の答え
『アキさんに同じく』

吉井玲先生のコメント
・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・なるほど、アキくんはともかく造くんは英語が苦手でしたか。今度は少しだけランクを下げて出してみましょうね。ちなみにアキくんは減点ですね」

吉井玲先生の特別（？）英語試験

問　あなたの今までの異性とのお付き合いや経験について、日本語でもいいから答えなさい。

吉井明久の答え

『もうコレただの質問じゃないの！？』

吉井玲先生のコメント
これはテストです。異性と抱擁を交わしたことのあるなら、抱擁と、接吻したことがあるのなら接吻と、きちんと正直に解答して下さい。アキくんには後ほど尋も・・・・・補習を行います。姉さんと今夜はぽっきりとお勉強をしましょう。

島田美波の答え
『前に一度だけ、節分をしたことがあります』

吉井玲先生のコメント
豆まきは異性とのお付き合いに含まなくても大丈夫ですよ♪

月野造の答え
『（もはや英語は関係ない気もしますね）周りの異性（？）によく変な服を着せられます』

木下秀吉の答え
『ワシもじゃ』

吉井玲先生のコメント
大丈夫です。それは清く正しい男女間のお付き合いです。

造・秀吉・明久・雄二の反応
「「「「・・・・・・・・・・！？」」」」

「アキくんが正直に答えてくれないので、ここは一旦アキくんの得意分野で調子を上げてみましょうかね。あ、ちなみにさっきのも勿論減点です♪」

吉井玲先生の特別化学（？）試験

問　酢酸の化学式を答えて下さい。また、その酢酸を使った料理の一つであるマグロのカルパッチョの簡単な作り方を説明してください。

島田美波の答え
・酢酸の化学式
『ＣＨ？ＣＯＯＨ』

吉井玲先生のコメント
その通りです。ＨＣＯＯＨ（ギ酸）、ＣＨ？ＣＯＯＨ（酢酸）、Ｃ？Ｈ？ＣＯＯＨ（プロピオン酸）といった具合にカルボキシル基を持つ化学式の式は一定の法則を持っています。一つ一つを覚えていくよりも法則を理解して全て並べて覚えると良いでしょう。

吉井明久の答え
・カルパッチョの作り方
『確かカルパッチョソースは、酢とオリーブオイルと塩を混ぜて作ったはず。他にも酢を入れずにレモン果汁のみで酸味を出すっていう作り方もあるし・・・・・ってこの問題は化学にあまり関係がない気がするんだけど？』

吉井玲先生の答え
余計な疑問は抱かずに、問題の解答のみを述べて下さい。

姫路瑞希の答え
・カルパッチョの作り方
『カルパッチョは？酸味がある　？塩味がある　？独特のにおいがする　という料理だったので、その条件を満たす化合物を組み合わせてソースを作ると良いと思います。

なので、ソースの材料の式はＣＨ？ＣＯＯＨ（酸味を持つ酢酸）＋ＮａＣｌ（塩味を持つ食塩）＋ＨＣＮ（甘酸っぱい匂いを持つシアン化水素）となります』

吉井玲先生のコメント
その材料であれば触媒と製法次第ではＨＣｌ（塩酸）とＮａＣＮ（青酸ソーダ）が生成されます。小皿一盛で成人男性５０名を死に至らしめることの出来るカルパッチョが出来上がるかと思うと、流石に恐怖を感じずにはいられません。

この答えを見た『姫路さんの殺人料理被害者友の会』全員の反応
「「「「「「「・・・・・・（ガクガク、ブルブル）」」」」」」」

※明久たちは特殊な訓練を受けています。姫路さんのアレは『ＫＩＬＬパッチョ』もしくは『（命を）狩るパッチョ』というものです。良い子のみんなも悪い子のみんなも絶対に真似して作らないでください。あまつさえ絶対に口にしてはいけません。

なお、姫路さんが作ったカルパッチョはスタッフ（生贄たち）がおいしくいただきました。

「「・・・・・・・・・・・・（グッタリ）」」

「おいっ！？明久、造！しっかりしろっ！？」
「アキっ！！お願い目を開けてっ！？」
「造よ！頼む、死なんでくれ！ワシは、ワシはっ！！」
「・・・・・・・・・・・・すぐに蘇生の準備をっ！」

皆さんも、絶対に化学薬品を料理に使わないでね♪以上、吉井玲先生の特別試験集でした！

バカテスト集その？＋吉井玲先生の特別試験集（後書き）

ありがとうございます。いかがだったでしょうか？

えっと、ドイツ語のところは父の部屋にある辞書引っ張り出して読んだだけですので、文法的にあっているかわかりません。信用しないでね？

それにしても、恐ろしきは姫路さんの殺人料理ですね……そもそも彼女はどこから塩酸やシアン化水素などを入手しているのやら……

皆さんもまぁ、まず入手すら困難でしょうが絶対に姫路さんの料理を再現しようなど考えないでくださいね？

とりあえずまた次回！読んでいただきありがとうございました！

６２時間目　再びのゆーさん家～相変わらずの孫扱い！？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です！皆さん、いつも読んでくれてありがとうです♪

前回の携帯版の方、やはり文字化け起こしていたそうですね（汗）
すみません、文字化けのところはパソコンで見るか脳内変換でよろしくお願いします。

さて、今回は前回バカテスト集で短めでしたからちょっと長いです。
とりあえず行きましょうかね？６２時間目です。どうぞ。

62時間目　再びのゆーさん家～相変わらずの孫扱い！？～

「というわけで造に雄二。今日も楽しく勉強会をしよう！」

アキさん宅での玲さんによる特別授業を行った翌日の放課後。アキさんは素早く帰り支度を整えると自分とゆーさんの席に駆け寄ります。

「あいです！了解ですよ～♪」
「・・・・・・明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」
「何とでも言ってよ。今の僕には体裁を気にしている余裕はないんだから」

あはは・・・・・・確かに只今絶賛減点中のアキさんにとっては、テストの点数ブースターを逃がすわけにはいかないでしょうね？

「何だ。また減点でも喰らったのか？」
「あやや・・・・・・そうなのですか？」
「うん・・・・・・朝からいきなり英語の問題を出されてさ・・・・・・」

まあ、それに更に付け加えるなら『ちょっと大人向けの本』をまた見つかったらしくそこで減点をくらったとか？玲さんの『姉萌え本が無かったから』と言った減点の理由はわけがわからないのですが、それ以前にアキさんもどれだけそういう本を所持しているのですか・・・・・？

「そうか。それで、今はどのくらいの減点なんだ？」
「確か朝のを加えて合計でジャスト３００点。ちょっと厳しいんだよね」
「でも今のアキさんならこれくらいならまだ余裕がありますよね」
「確かにな。そうなると、期末の総合目標は１１００くらいだな」

１１００点と言えばＥクラス中堅くらいの点数ですよね。今のアキさんならＤクラスも狙えるほどになってますし、これ以上の減点さえ気をつけておけば何とかなるでしょうね。

そうアキさん、ゆーさんとテスト対策をしていると鞄を抱えてヒデさんがやってきました。

「なんじゃお主ら。今日も明久の家で勉強会かの？」
「僕の家か・・・・・う～ん、今日からは姉さんが仕事でいないから、それも良いんだけど・・・・・」

「「「けど？」」」

「今日は雄二の家にしようよ。たまには僕の家以外にも行ってみたいし、何よりも僕の部屋には参考書とか勉強道具があまり揃ってないし」
「・・・・・ああ、そう言えばそのことで玲さんにも減点されてましたっけ？」

確かに昨日いざ勉強しようという時に、アキさんの勉強道具が不足しており、すかさず玲さんに『アキくんは保健体育の参考書しか持

っていないのですか？』と、減点されてましたもんね。

ですが・・・・・ゆーさんのお宅ですか？うーん、雪乃さん大丈夫かな？

「良いよね、雄二？昨日は無理を押して僕の家に来たんだし」

「まぁ、確かに昨日は無理矢理押し入ったようなもんだしな・・・・・」

少し考えるゆーさん。それは出来ればあのゆーさんのお母さんを皆さんに会わせたくないのでしょうし？雪乃さんは優しくてほんわかしたお母さんなのですが、ちょっぴり（？）天然さんですから調子が狂いますし・・・・・

「・・・・・よし、分かった。今日は俺の家でやるか」

「・・・・・え？（ゆーさん？いいのですか？）」

「（おう！なんせ幸いにも今日はおふくろは温泉旅行で不在だ）」

なるほど、なら大丈夫でしょうかね♪自分も出来れば孫扱いはされたくないですからね。

「それならば、ワシも同行させてもらって良いかの？一人では勉強をする気が起きんのじゃ」

「もちです♪ヒデさんと一緒なら自分も嬉しいですし♪」

「そうかの♪それは嬉しいことを言ってくれるの、造♪」

「というか、どうせいつものメンツが来るんだろ？それならさっさとしようぜ」

「そうだね。おーい、ムッツリーニ、姫路さん、美波ー！」

そしてアキさんが、まだ教室内に残っている三人に呼び掛けます。

「はい。何でしょうか、明久君？」

「何かあるのかしら、アキ？」

「・・・・・・・・・・・・どっかに行くとか？」

勉強道具を鞄にしまっていた三人は、それぞれ鞄を手にこちらにやってきます。

「うん。今日はね、雄二の家でテスト勉強をしようと思うんだけど良かったら・・・・・・」

皆さんも二つ返事で参加ですね。テストに向け気合い十分でしょうか♪

☆

「んじゃ、入ってくれや」

学園から歩くこと十五分程度。住宅街の一角にあるゆーさんのお家に到着しました。如月ハイランドの件以来の訪問ですね。

「「「「「「お邪魔します」」」」」」

とりあえず玄関で靴を脱ぎ中に入ります。前来た時は慌ただしくて気にかけませんでしたが、ゆーさんの家って結構オシャレですよね～♪

「ねぇ雄二。家には誰にもいないの？」

そんなことを考えていると、アキさんが前を歩いて居間へと案内してくれるゆーさんに尋ねます。

「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校の同級生達と温泉旅行らしい」

「そうなんだ。そう言えば、前に来たときも雄二の家族は留守だったよね」

「ああ。その方が都合が良いからな。色々と」

「そう言えば自分、以前ゆーさんの家に来た時はリビングまでしか上がってませんでしたね？」

「む？お主はここに来たことがあるのかの？」

「・・・・・ああ、お前らが俺らを嵌めやがった如月ハイランドの時にな？」

そう言ってゆーさんが皆さんをジロリと睨むと、皆さんすぐに目を逸らしました。あはは・・・・・そう言えばそうでしたね？

「思えばあの時造が来なかったら・・・・・すまんな造。今日は

何も気兼ねせずゆっくりしてくれ」
そう言って晴れやかな笑顔でゆーさんがリビングの扉を開けます。
すると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ぷちぷちぷちぷちぷち）」

居間には一心不乱にプチプチを潰している女性の姿がありました。
と言いますか、見たことがあるお顔ですよね・・・・・？

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・・バタン

そして何も言わずに扉を閉めるゆーさん。

「・・・・・・ゆーさん」
「・・・・・・何も言うな造」
「ゆ、雄二・・・・・・？　今の、山ほどあるプチプチを潰していた人って・・・・・・・」
「・・・・・・赤の他人だ」
「さ、坂本の母親なの・・・・・・？何だか、随分と凄い量を潰していたわよね・・・・・・」
「う、うむ。あれほどの量。費やした時間はおそらく一時間や二時

間ではきくまい」
「・・・・・・・・・・・凄い集中力」
「坂本君のお母さんはそういうお仕事をされているのでしょうか？」
さまざまな推測が飛び交う中、その中心にいるゆーさんはとても暗い顔で、
「恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。何せ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」
ゆーさん、貴方らしくない苦しい嘘ですよ・・・・・・？
と、ゆーさんが閉めた扉の奥で、
『あら・・・・・？もうこんな時間。さっき雄二を送り出したとおもったのに』
待ってください？八時間近くあの作業を続けていたことになりませんか？
『続きはお昼を食べてからにしましょう』
しかもまだ続けるつもりみたいです。寧ろ拷問でしょう、コレ・・・・・？

「おふくろっ！何やってんだ！？」
「そうですよ、雪乃さん！ちゃんと休みを入れてくださいっ！」
「造違う！そっちじゃないだろっ！？」

耐えられずにゆーさんとツッコんでしまいました。流石は雪乃さんですね。冷静な判断を取れなくさせるなんて・・・・・・

「あら雄二。おかえりなさい。つーちゃんもいらっしゃい」
「おかえりじゃねぇ！何で家にいるんだ！？今日は泊りで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」
「と言いますか誰が『つーちゃん』ですか・・・・・・？」
「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。７月と１０月って、パッと見ると数字が似ているから困るわね」

似て、る・・・・・・？漢数字を見れば何となく似ている風にも・・・・・すみません。見えませんねやっぱり。

「どこが似ているんだ！？数字の形どころか文字数すら合ってないだろ！？」
「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ！確かにつーちゃんみたいな可愛い孫はいるけどね？」
「サラッと図々しい台詞をぬかすな！あんたの黄金期は十年以上前に終わっているはずだ！」
「だから誰が孫ですかっ！ゆーさんたちより自分年上ですからね！？」
「あら、二人のお友達かしら？」

「「だから人の話を聞けぇっ（聞いて下さいぃ）！！」」

いかん、怒涛の天然コンボにゆーさんと自分は疲弊し、皆さんは何も言えないでいますね・・・・・・？玲さんのことで頭が一杯なハズのアキさんまでもがね。

「皆さんいらっしゃい。うちの雄二と孫のつーちゃんがいつもお世話になってます。「だから誰が孫ですか！」私は雄二の母親の雪乃と言います」

聞いてください・・・・・・。

「さ、坂本の母親って・・・・・・若過ぎない！？」
「むぅ・・・・・・とても子を産んでおるとは思えん・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・美人」
「まるでお姉さんみたいですね～」

皆さんは雪乃さんの外見に驚いているようですね？自分はそれこそ彼女の内面こそ驚くべきと思いますよ・・・・・・？

「み、皆、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ・・・・・・」
「そ、そうですね。失礼します、雪乃さん」
「う、うん。それじゃ、お邪魔します」

頭を下げて上にあるゆーさんの部屋に向かいます

『皆さん。あとでお茶を持っていきますね』

居間からはそんな声が聞こえてきました。まあ若干（？）変わってるみたいですが、綺麗で優しい、ゆーさんのお母さんなんですよね。

「ここが俺の部屋だ。入ってくれ」

言われた通り中に入ります。へぇ？ここがゆーさんのお部屋ですか？

「そういや、久しぶりに雄二の部屋に来たよ」

「ワシもじゃな」

「・・・・・・・・・・・・同じく」

「あら？そうなんですか？」

意外ですね？てっきりよく遊んでいるんじゃないかと思ってたんですが？

「アンタ達はよく来てるんじゃないの？」

「ん？ああ、大抵は僕の家に集まっていましたからね。雄二の家だけでなく、ムッツリーニや秀吉の家でもあまり遊んだことはないんだよ」

「場所といい、広さといい、明久の家は都合が良いからな」

「そっか、確かにちょうどいい広さだったもんね」

「家族用のマンションで一人暮らしですもんね。贅沢です」

まあ、その一人暮らしを続けられるかどうかはアキさんの頑張り次第ですがね？

「それはそうと・・・・・・やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。参ったな・・・・・・・」

確かに。今自分たち全員で七人。座って話をするならともかく、勉強道具を広げて勉強をするにはちょっと広さが足りないかもです。

「居間じゃダメかな？」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

ゆーさんが心底嫌そうな顔をします。霧島さんと雪乃さんはゆーさんの最大の弱点ですよね？

「もうっ。ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いしてっ」

「いや、そうは言うがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんな事が言えるんだ。四六時中一緒にいるとツッコミどころが多過ぎて・・・・・・」

Ｐｒｒｒ！　Ｐｒｒｒ！

「あ、ウチの携帯ね。　ちょっとゴメン」

ゆーさんが反論していると、島田さんに電話みたいですね。自分は

使えないのでよくわからないのですが、めーるでなく電話と言うことは何か急用でしょうか？

『もしもし？あ、Ｍｕｔｔｅｒ？どうしたの？』

「？？？ねえ雄二？むたぁーって何？」
「さあな？話しから察するに知り合いじゃねえのか？」
「『Ｍｕｔｔｅｒ（ムッタァ）』ですよ。お母さんって意味です」

「「へぇ？そう言う意味か～」」

「「・・・・・・・・・・・・？」」

『・・・・・うん。Ｖａｔｅｒは？・・・・・うん。そう。分かった』

「ふぁーたー？何と言う意味かわかるかの姫路にムッツリーニ？」
「・・・・・・・・・・・・（ブンブン）」
「え、えっと・・・・・・・お父さん・・・・・・でしょうか？」
「合ってますよ姫路さん。ドイツ語のお父さんって意味の『Ｖａｔｅｒ（ファーター）』です」

「「「なるほど（です）」」」

「「「・・・・・・・・・・・・！？」」」

ああ、御家族からのお電話でしたか。何かあったのでしょうk「ちょっと待って造？」・・・・・・？

「何ですかアキさん？それに皆さんも何でボケっとしていらっしゃるのですか？」

「い、いや・・・・・・造、ひょっとしてドイツ語わかるの・・・・・？」

「え？ああ、といってもちょっとした日常会話くらいならですが」

「「「「「・・・・・・（ドイツ語わかって英語がダメな理由がわからない）」」」」」

「？？？ですからどうかしたんですか？」

何でしょうね？この皆さんの変な目は？

「ゴメンね。遅くなって・・・・・・？どうしたの？」

「さぁ？突然こうなりました。あ、それで？何かありました？」

「うん・・・・・今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど・・・・・・ちょっと急な仕事が入って家にいられなくなったみたい」

「あ、そうなの？それじゃ、葉月ちゃんが家に一人ってこと？」

何とか立ち直ったアキさんが聞いてきます。ふむ、でしたらここは・・・・・

「そうね。だから、悪いけど今日はウチは帰るわ。勉強会は、」

「島田さん、ちょっと待って貰えますか？」
「ん？どうかしたの月野？」
「皆さんどちらにせよ、ゆーさんの部屋でこれだけの人数で勉強は難しいでしょ？」
例え島田さんが抜けてもまだ多めですし？ゆーさんも本音を言えば早くこの状況を打破したいでしょうし？
「確かにそうだな。んで？どうする気だ造？」
「それでですね、自分の家に来ませんか？島田さんも葉月さんを連れてね」
「「「「「「・・・・・・え？」」」」」」
それに島田さんも出来ればアキさんたちと勉強したいでしょうから・・・・・ね？
「そ、それ葉月を連れてきてもいいの！？ここからだと遠くなるけど本当にいいのっ！？」
「寧ろ島田さんと葉月さんの都合が良ければですよ？何でしたら車を出して貰いますし♪」
「し、島田っ！すぐあのチビッ子に確認の電話を！本当に良いんだなっ造！？」
あー、島田さんもやっぱりアキさんたちと一緒にいたかったみたいですね？そしてゆーさんは今すぐにでも出て行きたかったみたいですね・・・・・・？

「勿論大丈夫ですよ？ヒデさんもどうですか？」
「つ、造のお宅かの・・・・・・何か手土産でも・・・・・・？」
ヒデさん、そんなに畏まらないで？
「皆さんも大丈夫ですか？都合悪くないですか？」
「ううん！全然♪（造の家か～どんなとこだろ？）」
「ええ、大丈夫です（明久君と美波ちゃんが一緒なら♪）」
「・・・・・・・・・・・・楽しみ（造の私生活を撮れるチャンスっ！）」
ふむ、大丈夫そうですね？今日は厄介な二人がいないですし、ちょうどいいでしょう♪
「よしっ！そうと決まれば早速移動だ！チビッ子も一人じゃ寂しいだろうからな！島田！連絡はっ！？」
「大丈夫よっ！葉月も『バカなお兄ちゃん達に会えます♪』って喜んでたわ！」
お、お二人とも行動早いですね・・・・・・？島田さんはすでに玄関に靴を履いて待機してて、ゆーさんは皆さんを早々と玄関に追いやりました。
「あ、ではゆーさん。電話を借りてもいいですか？連絡をしたいので」
「ああ！どんどん使ってくれ！さあ、早く！俺はおふくろにこのこ

とを伝えてくるな！」

そう言ってゆーさんは雪乃さんの所へ行きました。

『おふくろ。ちょっと出掛けてくる。夕飯は昨日の残りが冷蔵庫にあるから、それを温めて食べてくれ』

『あら、もう行っちゃうの？お茶を用意しているところなのに』

『悪いな。ちょっと事情が変わったんだ・・・・・・ところで、その麺つゆのボトルは何に使うんだ？』

『麺つゆ？　あらら・・・・・・てっきり、アイスコーヒーだとばかり・・・・・・』

『おふくろ・・・・・・色や匂いで気づいてくれとは言わないから、せめてラベルで気づいてくれ・・・・・・』

あらら？ゆーさんは家にいる方が学校にいるより疲れてますね？さて、自分は電話を・・・・・・

～しばらくお待ちください～

「そろそろ迎えの車が来ると思いますよ？まず葉月さんを乗せてから自分の家に行きますね？」

「ゴメンね月野？ウチの都合で。ナビゲートはウチに任せて？」

「いや島田、これは俺の希望でもあるからな？」

「それにしても本当に都合が良かったの。島田の妹とは全員が顔見知りじゃし、丁度雄二の部屋は手狭だったところじゃし」

「それに葉月ちゃんとも会えますし♪」

「造、何か僕らに出来ることあったら言ってね？」

「・・・・・・・・・・・・なんなら、夕飯を作る」

ふふっ♪その気持ちだけで十分ですよ?皆さんお優しいですね♪

「ところで造?割と人数多いが大丈夫か?車乗り切れるのか?」

「ええ、ですからちょっとしたバスを呼びました」

「バス?それって強化合宿の時みたいなのを?」

「あはは♪アキさん?いくらなんでも流石にあんな大型のを借りませんよ?」

第一自分が恥ずかしいです。

「そうだよね。いくら造の家がお金持ちでも、」

「呼んだのはリムジンバスです♪」

その瞬間、全員が何故かその場で土下座をしました。・・・・・・

あ、あの?

「み、皆さん?ちょっと・・・・・・」

「「「「「「ごめんなさいっ!!」」」」」」

「いえ、ですから土下座は止めてください・・・・・・」

うーん、行く前からこれですか。大丈夫でしょうかね、これから?

62時間目　再びのゆーさん家～相変わらずの孫扱い！？～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

次回からは完全にオリジナルの造の家訪問です。とりあえず次回はここぞとばかりに造を弄ります。と言いますか今回の章で一番弄るかも♪楽しみにしててください！

……ところでこの期末編が終わったらどうしましょう……。先にちょっと聞きたいのですが、3年生と2年生の肝試し編が3年生を外して2年生内で行う肝試し、もしくは生徒ｖｓ先生になるかもしれません（汗）オリジナルとまでは言いませんが、やっぱりどこか原作崩壊かも？もし『原作のままがいい』とか『ここはこうすればいい』とかありましたら、アドバイスいただけると幸いです。

……この作品、ある意味造のせいで圧倒的に悪役・敵役が少なすぎるんですよね（汗）常夏コンビや清水さんを綺麗なジャ●アンみたいにしすぎましたかね……？

まあいいや！しばらくしたらアンケート取るかもです。読んでいただきありがとうございました！

６３時間目　おいでませ月野家へ～月野造・最大の屈辱編♪～（前書き）

いつもの如くこんにちは♪どうも糖分摂取魔です。

今日と言いますか、あと数時間でバカテス２期の始まりですよね？
前にも言いましたが自分の家じゃ見れそうにないので、友人に録画したものを借りるか、それが無理そうなら大人しくＤＶＤ待ちです……ｏｒｚ

な、泣いてませんよ！？いいから行きましょうね！６３時間目です！

63時間目　おいでませ月野家へ～月野造・最大の屈辱編♪～

造Ｓｉｄｅ

「凄いです！ふかふかでとっても広いお車ですっ！」
「あはは♪広さだけが取り柄ですからね。葉月さんが楽しそうでよかったですよ♪」

一先ず葉月さんを車に乗せて、自分の家に向かっています。うんうん、これくらい喜んでもらえると嬉しいですね♪

そして、葉月さん以外の皆さんは・・・・・・

「は、葉月！お願い、何も壊さないでね！？」
「の、乗っているだけで緊張します・・・・・・」
「忘れておった。造がこういった家系の息子じゃと」
「そ、そこは娘じゃない？そそそ、それにしてもまだかな造の家は」
「・・・・・・・・・・・・（ブルブル）」

・・・・・皆さんこんな調子ですもん。こっちまで調子狂いますよ？

「お前ら緊張しすぎだ。いいから落ち着け」
「ゆーさんがいつも通りでよかったです・・・・・・」

初めのころは流石に緊張していたのかゆーさんもあまり喋らなかったですが、もうすでに慣れてきた模様。ゆーさんくらいしか今のところ、まともに喋ってくれないのは残念ですがね。

「いや、な・・・・・・？翔子に捕獲された時に何度か乗ったしな・・・・・・」

ちょ、ちょっと!?そこでゆーさん暗くならないでくださいよ!?いかん、前途多難ですね。

『ハハハ!気にしなくても大丈夫ですよ、造さんのお友達の皆さん』

そう思っていると運転席の西岡さんが、朗らかに言ってくれます。

『造さんも奥様方も、ほとんど利用なさらないのに私を雇ってくれていますから。久しぶりに私にも仕事が回って助かってます。皆さんありがとうございますね』

「「「「「あ、はい・・・・・・」」」」」

『そう緊張しないでください。宜しければお飲み物もあるのでどうぞ。造さん、皆さんに渡して貰えますか？』

「あらら♪その雇っている家の息子にさせるのですか?西岡さんは」

『おや?造さんはお客様を招いたのでしょう?お客様にさせるつもりですか?随分立派になられましたね♪』

「はいはい、そうですね♪西岡さんにもまだまだ敵いませんね?では皆さんもどうぞ好きなのを取ってくださいね?」

「「「「「「け、結構フランクだね（ですね）（よね）（じゃな）？」」」」」」

「お前らが緊張し過ぎなんだって。ホレ、チビッ子飲むか？」
「はいです！でもチビッ子じゃなくて葉月です！」
「おお、そうだったな。葉月はオレンジジュースでいいか？」
「はいっ！お兄さんも飲むです！」

そうやって、しばらく乗ることようやく自分の家に辿り着きました。

「それでは私はこれで失礼しますね。また夜にでも呼んでください。皆さんをお送りいたしますから。それから造さんはもう少し次からも私を利用して下さいよ？」
「西岡さんがいじめるので、後ろ向きに考えておきますね♪とにかくありがとうございました」

相変わらず面白い方ですね西岡さんは。そうして西岡さんと分かれて只今玄関前です。

「それではいざ自分の家に行きますか」
「わーい！お城みたいなお家ですー！」
「翔子の家とどっこいどっこいだな？」

この二人はこの反応ですが後ろの方々は・・・・・・

「お、大きいですね・・・・・・」
「ウチの家の何倍よ・・・・・・・？」
「造が遠い人に見える・・・・・・」
「や、やはり何か手土産を・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・畏れ多い」

またこんな感じですね。うーん、無駄に大きいだけで、後は特に何もないですが？

「皆さんそんなに大したものではないですからね？とりあえず入ってください。母も日高先生も今日はいないようですし、ゆっくり勉強出来ますよ」
「そうだぜ？今日の本来の目的を忘れんなよお前ら？んじゃ邪魔するか」
「う、うむ。では失礼するかの・・・・・・」

・・・・・・ガチャ

「「「お帰りなさい、造くん（造）（つーちゃん）♪」」」

・・・・・・バタンッ！

「「「・・・・・・・・・・」」」

おかしいですね？目が悪くなってきたのでしょうか？今扉の向こうに今日は出掛けるハズの二人と、本来いるハズのない一人がいた気がしました。

「・・・・・のう、造よ？今姉上がメイド服姿でおらんかったかの」

「ＨＡＨＡＨＡ、いやですねヒデさん？そんなわけないじゃないですか」

「・・・・・おまけに日高先生がいたよな、ご丁寧にメイド服着て」

「ＨＡＨＡＨＡ、何言っているんですゆーさん？今日はお出かけと言ってましたよ？」

ふう、集団幻覚でしょうか？ひょっとしたらこの家、悪霊に取りつかれたのかもしれませんね？

すると扉の向こうで何やら聞こえてきました。

『どうしてつーちゃん扉閉めちゃったのかしら？』

『ん～、アタシらのメイド服じゃダメなんか？』

前言撤回、ごめんなさい。何も聞こえません。どうやら耳がやられたようです。

『師匠にお母様。アタシたちは勘違いしてたんですよ！』

『『どう言うこと？ゆーこちゃん（優子っち）？』』

ここに優姉さんの声が聞こえるはずもないですし、やはり今日は耳がおかしいみたいですね？

『造くんは・・・・・メイド服を見たいのではなく、着たかったんですよっ！！』

ガチャッ！！

「どうしてそうなるんですかっ！！？おかしいですよね！！？」
「あら、おかえりなさい造くん。秀吉も一緒ね？」
「華麗にスルー！？自分の発言スルーですか！？」
「あ、姉上？何じゃその格好は・・・・・いや何でもない。言わぬ方が良さげじゃな」
「ん～、何だいつもの仲良し軍団じゃねえか？入んな～♪」
「つーちゃんのお友達～？いらっしゃーい♪」

「「「「「は、はぁ・・・・・お邪魔します」」」」」

さ、最悪です・・・・・！ヤバい！？過去最悪の事態ですよコレっ！？

明久Ｓｉｄｅ

とりあえず造に大慌てで部屋に連れられて造の部屋に（勿論しっかりと鍵をかけて）入ったけど・・・・・アレって一体？

「ねえ造？もう日高先生や木下さんのことはいつものことだから聞かないけど、もう一人の女の人って」

「あ、姉上が『お母様』と言っておったの・・・・・・」

「おい造、まさかあの人が・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・信じられないかもしれませんが、母です」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・う、嘘！？」」」」」」

うん、みんなの反応は間違ってないよね？僕も信じられない。だって・・・・・・

「すっごく綺麗で背が高いお姉さんでした♪」

「あ、あはは・・・・・ありがとです、葉月さん・・・・・・どうして遺伝子は自分を見放したんですかね？」

そう、造のおね・・・・・じゃなくてお母さんは見た目はモデルのような人で、おまけに・・・・・造のお母さんとは思えないくらい背が高かった。てか雄二並みの背の高さだよね？

「そんなことはいいんですっ！！さあ、勉強しましょう！？部屋から一歩も出ずに、誰も部屋に入れずに！！」

「ああ、勉強会か。期末近いからな～」

「そういうことね。アタシも何か手伝えるかしら？」

「ん～、ならお母さん葉月ちゃんと遊んでるね～♪みんな頑張れ～」
「なんですでに入っているんですかっ!?どこから入ったんですかっ!?」

そして気づかないうちに日高先生たちに侵入されていたようだ。凄い、なんていうか、この人たち姉さん並みに凄い・・・・・・

「造くん、やっぱり英語を勉強かしら?それとも秀吉の勉強を教えに?」

「「どうして優姉さん（姉上）がここに・・・・・・?」」

「アタシが呼んだっ!いいじゃねえか、嬉しいだろ～?」
「日高先生、そう言うことは事前に（ペチッ）痛っ!?」

あれ?木下さんはいつも通りだけど、日高先生が造にデコピン?どうしたんだろ?

「家の中は『サクヤさん』だろ!その呼び方は寂しいじゃねえか?あっ、もしくは『かあさま』で♪」

うんうん。日高先生もやっぱりいつも通りだったね。というか日高先生の下の名前ってサクヤさんって言うのか。初めて知ったよ?

「・・・・・はいはい。すみませんねサクヤさん。そんなわけで（?）本気で皆さんで勉強するので優姉さん以外は出て行ってくれませんか?」

「あら♪嬉しいわ。アタシも入れてくれて」

「「えー？優子っち（ゆーこちゃん）贔屓ー？」」

どうしよう・・・・・絵柄的には小学生に怒られて駄々捏ねているお母さんたちにしか見えない。造が小さいせいなのか、はたまたこの人たちにギャップが有り過ぎるせいなのか。

「勉強するって言ってるでしょ！？それが嫌なら母さんはともかく日d・・・・・ではなく、サクヤさんが勉強教えてくださいよ？」

「！？い、いいのかっ！？おっしゃ！お前ら、ビシビシ行くぜ！！」

「（おい、造？日高先生って一応養護教師だろ？）」

「（あっ、そうだよね？大丈夫なの？色々と・・・・・・）」

まあ文月学園の教師はみんな、テストを受けさせられているらしいけど流石に日高先生は養護教師だからね・・・・・・？

「いえ、これでもサクヤさん結構いいとこ出ですからね・・・・・・」

「そうよ～、『はーばーど』出よ～サクちゃんは～」

「「「「「「またハーバード！？」」」」」」

い、意外な共通点だよね・・・・・・？まさか日高先生とウチの姉さんは・・・・・？いや、考えるのはよそう。造がすっごく嫌そうな顔になってるし、僕も嫌な予感がする。

「サクヤさんの実力は認めてますが、一応本当に勉強しないといけないので真面目にお願いしますよ？」
「師匠の特別講座ね？楽しみだわ♪」
「任せときな♪んじゃ、まずは・・・・・・」

まあ、姉さんもアレで勉強は教えてくれたし（ちょっと暴れてたけど）日高先生ならもっとちゃんと教えてくれるよね？少なくともウチの姉さんより日高先生の方が常識人だろうし。

「・・・・・造の秘密大公開☆何でも教えちゃうの授業を！」
「待てえええええええええええええええ！？」

前言撤回。やっぱり頭の良い人達はどこかしらずれているようだ。

「「お、教えてくださいっ！！」」

「そこの木下さんちの優子さん&秀吉くん！？悪ノリしないで良いですよっ！？」

いや、秀吉はわからないけど木下さんは割と本気だよね？もの凄くキラキラした目で日高先生を見てるよね？そりゃ多少は僕も気になるけどさ？

「んじゃ行くぞ？造は犬猫が苦手なんだがな？それは造が意図せずに犬猫を引き寄せちまうからなんよ。週末の公園にコイツ一人でいると、散歩していた犬や野良猫共が一斉にじゃれつきに・・・・・・」

「話し始めないでくださいよ!?てか何でそんなことまで知ってんですかっ!?」
「ああ、それでよく散歩中の犬に脅えていたのね?」
「そう言えば以前学園に入ってきた猫は、真っ先に造に懐いておったの?」
「そうなのよ~♪つーちゃんはそれだけで食べていけそうよね~」
造の生活にプライベートと言う言葉は無いようだ。どうしてかウチの姉さんを思い出す。

「それから造の“のんき”さと言うか、“天然”さは異常でよ?以前強盗紛いがウチに侵入しようとしてたことがあってよ。それを造が何を思ったのか、その強盗を迎え入れちまってな?茶菓子を出したうえにその強盗の身の上話を聞いててよ?話し終わった時にその強盗改心したのか、自首までしちまったとか」
「ああ、あったわよね~そう言うこと。何でもその泥棒さん、自首した時に泣きながら『あのお譲ちゃんはホンマ天使や』とか言ってたそうね~」
「止めてっ!お願いですから暴走しないでくださいっ!?てか忘れてくださいっ!!」
「あ、危ないわね・・・・・よく無事で」
「造らしいと言えば、造らしいの・・・・・?」
最早誰にも止められないみたいだ。雄二は唖然とし、姫路さんや美波は微笑ましそうに造を見ている。ちなみにムッツリーニは普段見せない造の本気の慌てぶりを激写している。

「最近のコイツの隠し事と言えば、身体測定の時に『シークレット

インソール』っていうものつけて測定してな？自己申告では『１４８ｃｍ』だが、ありゃ３ｃｍは誤魔化してる「もう嫌あああああああああああああ！？」はずだぜ？ったく養護教師を嘗めんなよ？」

「あらら？つーちゃん結局１ｃｍも伸びなかったの～？でもそのままの方が可愛いし、いいんじゃないの～？」

「「造くん（造）・・・・・・」」（↑優しい目）

どうしよう・・・・造が凄く居た堪れない。造はこんな地獄をいつも耐えてたんだね？そりゃツッコミにも慣れているハズだよ。やっぱり姉さんのこと、あんまり迷惑がかからないようにしてあげないとね。

「造、元気出してね・・・・・・？」

「造、今度甘いもんでも奢るからな」

「・・・・・すみませんです、二人とも・・・・・・」

まさか雄二と僕が造を励ますことになるなんてね。これが今日一番の収穫なのかな？

63時間目　おいでませ月野家へ～月野造・最大の屈辱編♪～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

いやはや今回は造の秘密にしておきたいことがたくさん暴露されましたね♪書いててやりきった感がありますもん♪

ところで『シークレットインソール』って何って方がいると思いますが、アレは履くだけで身長ｕｐする魔法の一品です。造の使用したのは靴下の中にも入れられるタイプですね。普通はわからないのですが、そこは日高先生ですね♪

えっ……？何で詳しいのかって？……さて、次回は造の家訪問編の後編っぽいのですね。今回十分に弄りましたので、次回は流石に弄りきれないかもね？

読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです♪

６４時間目　夕食と帰りと葉月さん～モテモテ☆アキさん♪～（前書き）

どうも糖分摂取魔です！珍しくこの時間に更新できました♪

造の家訪問後編ですね。前回全力で造を弄り過ぎたので今回はほとんどないです（苦笑）てか多分ですが、今回は（今回も？）力を入れる所が間違っているかも（汗）

とりあえず行きましょ！６４時間目です！

６４時間目　夕食と帰りと葉月さん～モテモテ☆アキさん♪～

あれからサクヤさんが『本格的に勉強教えんのは夕飯の後でな～』と、出て行ってくれたお陰で（？）ようやく勉強会が始まりました。これ以上無いほどの辱めを受けましたがねっ！？

ついでに母さんも『あ～、いつものテレビ始まっちゃう～』と言って出て行きましたよ。あの人は本当に・・・・・・

とりあえず大きめのテーブルを囲って、皆さんで勉強し始めます。と言っても本格的に始めるのは夕食後ですし、今は今日の授業のまとめ程度しかしていませんがね？急に根を詰め過ぎるのも良くないですし。

そう言うわけで皆さんでのんびり今日の復習をやっていると島田さんが・・・・・・

「（あのね、みんな？特に月野に謝りたいんだけど、勢いでつい葉月も呼んじゃって本当にゴメンね。ちょっと軽率だったでしょ・・・・・？）」

と、葉月さんに聞こえないように小声で聞いてきます。ちなみに今葉月さんは、優姉さんに算数のドリルでわからない所を教えて貰っている所です。何だか微笑ましい光景ですね♪

それにしても島田さんは本当にお優しいですよね？姉として妹の心配もしつつ、自分らに気を遣ってくれている所もね♪

「（あはは♪自分は大丈夫ですよ？心配しないでください）」
「（でも、葉月の勉強まで見てもらって・・・・・・）」

一応葉月さんを呼んでおきながら葉月さん一人だけ仲間はずれにならないように、先に葉月さんに『学校の宿題と予習できるものを持ってきてください』と言ってあります。葉月さんって、年の割にかなり気の回る良い子ですからね。先にこうでもしておかないと『葉月一人で遊びます』なんて言いかねませんし。

「（島田、別に問題ねぇさ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないしな）」
「（雄二、何故こちらを見ながら言ってんのかな？キサマ、それは僕の学力が小学生レベルだって言いたいの？）」
「（美波ちゃん、皆さんこう言ってますし♪）」
「（ワシはあまり教えてやれぬが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃしの）」
「（・・・・・・・・・・保健体育なら教えてあげられる）」
「（こーさん？その台詞は説明次第では追い出しますよ？）」

ま、まあ皆さんこんな感じですし、葉月さんがいると楽しいですし問題ありませんね♪

「（アキはその、いいの？今度のテストはかなり頑張らないといけないはずなのに）」
「（みんなの言う通り大丈夫だよ。葉月ちゃんは良い子だから邪魔にならないし。それに一人だけ仲間はずれみたいなんて、その方が

可哀想で、かえって勉強にならないからね）」
「（・・・・・ありがと、アキ、それにみんな）」

ふふふっ♪島田さん、今とても優しい目ですね。やっぱり本当にいいお姉さんなんでしょうね。そんな感じで皆さんでほんわかしていると、葉月さんと優姉さんが戻ってきました。

「お待たせしましたですっ」
「あ、おかえり葉月ちゃんに木下さん。どうだった葉月ちゃん？わかった？」
「はいです！このお姉さん、とっても教えるの上手ですっ♪」
「あら♪嬉しいこと言ってくれるわね。ありがとね葉月ちゃん」

へぇ？優姉さんも子供好きですか？なんて言いますか様になってますよね？

「葉月は自分の席に戻るです！」

と、そう言って葉月さんがアキさんの膝の上に乗っかかります。あらあら♪本当に葉月さんはアキさんのこと大好きなんですね♪

「コラ葉月、本当だったらアキのお勉強の邪魔になるからダメなんだからね？」
「あはは♪いいっていいって美波。僕なら別に大丈夫だよ。葉月ちゃんなら小柄だし」
「バカなお兄ちゃん、優しいですっ！」
「もう、葉月ったら。アキも優しすぎよ♪」

そう口では言いながらも、一番葉月さんに優しいのは島田さんですよね♪そんなことを心の中で思いつつ、勉強再開です！

☆

それから1時間ほど経過してから・・・・・・

「おうっ！お前らメシだぜ～♪休憩も入れろな～」

「あ、はいです。では皆さん、きりも良いですし食堂に行きましょうか？

「「「「「「「「「「は～い♪」」」」」」」」」」

サクヤさんが自分らの夕食を作ってくれました。ちなみに母さんは『サクちゃんお腹空いた～』と先に食べてしまったようです・・・・・・今頃お腹一杯になって、寝ていることでしょうね・・・・・・？

そんなことを思いながら食堂に近づくと・・・・・・おお、何やら美味しそうな香りがしますね。とりあえず席に着き料理を見ると、ふむこれはトルコ料理ですね。サクヤさん昨日作るってはりきってましたが、よくこの人数分作れましたね？流石サクヤさんと言ったところですかね？

今日はこの後も勉強会が続くので、料理の出される順番は関係無し

のようですね。そもそもサクヤさん自身がそう言うものに拘らないせいでもありますが・・・・・。キョフテやビベルドルマなどの肉料理を中心に前菜のフムスや主食のブルグルピラウ、スープのメルジメッキチョルバスなどテーブルの上に所狭しと並べられています。サクヤさんもこんな風に皆さんで食べるご飯ってものが好きなので、結構気合い入ってますよね。

「あー、すまんな。お前らが来るってわかってりゃ、もうチョイ用意出来たんだが」
「ええっ！？こんなに美味しそうなのにですか！？」
「これだけでも、十分ご馳走ですよね・・・・・・？」
「す、凄い・・・・・・」

誰が言ったかはわかりませんが、『た、食べていいの？』という言葉と共にごくりと唾を飲む音さえ聞こえる始末。これは・・・・・・あらあら♪皆さんもどうやら早く食べたいようですね？

「ふふっ♪サクヤさんが折角作ってくださったものですし、冷めないうちに食べましょうかね？」
「おう！お前らしっかり食いな！遠慮すんなよ～？」

「「「「「そ、それじゃ頂きますっ！！」」」」」

そうして、夕食タイムスタートです♪皆さん怒涛の勢いで食べ始めました。お腹空いててこの料理を出されたら、そりゃこうなりますよね～？

「い、生きててホントに良かったっ！」（アキさんの涙ながらの声）

「「とてもおいしいです（わね）～♪」」（女子二人の嬉しそうな声）

「「絶品ね（じゃの）流石師匠ね（日高先生じゃ）♪」」（木下姉弟の感嘆の声）

「凄く美味しいですっ！葉月これ初めて食べましたっ！」（葉月さんの明るい声）

「・・・・・・・・・・・・美味いっ」（こーさんの興奮した声）

「ふむ、こりゃレシピ教えて貰うかな」（ゆーさんの楽しげな声）

などなど。うんうん、皆さん楽しそうで何よりですね♪良かった良かった。お腹一杯で眠くならないようにしてくださいね♪そして大体食べ終わった頃に・・・・・・

「お前ら、わかっていると思うけど、デザート食ったらまた勉強だからな～？今度はアタシがちゃんと教えるから覚悟しときな♪」

デザートのバクラヴァを出しつつ、サクヤさんがニッと笑いながら皆さんに言ってきます。

「本当にちゃんと教えてくださいよ？期待してますからね？」

「おうっ！！任せときなっ！お前らもいいなっ！！」

「「「「「「「「「はーい♪」」」」」」」」」

デザートを食べてから、サクヤさんも本気出すようなので安心です。この人やれば本当に凄い人なんですから、いつもそうだと良いのですがね？さてデザートデザート♪

「「「こ、このデザートも美味しいですね（わね）（です）！！」」」

「「「本当ね（じゃ）凄いわ（のじゃ）・・・・・・♪」」」

「ほ、本当に美味しい！どうせならパックで持って帰りたいな・・・・」

「葉月も持って帰りたいです♪」

「明久お前は止めろ。流石に意地汚いぞ？」

「・・・・・・・・・・・気持ちはわかる」

「まあ、そりゃそうだな。レシピくらい貰えますか？日高先生？」

そう言ってゆーさんがサクヤさんに尋ねます。ああ、ゆーさん？これは違うくて、

「ん？これのか？・・・・・・アタシはこれ、作り方知らんぞ？」

「・・・・・・は？でもこれは？」

「料理はアタシが作ったが、デザートは造が作ったぞ？」

まあ、作ったのは昨日ですがね？今日はそんな暇無かったですし？

「「「「「「・・・・・・・・・・・・はあっ!!?」」」」」」

「い、いや・・・・・そこまで驚かれると流石に傷つきますよ?」

「へぇ?造くんが・・・・・・ねぇ?」

い、一応これでも自分が作ったんですが・・・・・?そんなに意外なんですかね?

「待って!?これ正直お店のかと思ったくらいだよ!?つ、造がホントに作ったの!?」

「え、ええ。いや流石にお店のには負けますが、確かにこのバクラヴァは自分が作りましたよ・・・・・?」

サクヤさんに『明日トルコ料理作るからな~』って言われてたので、昨日作って冷蔵庫に入れておきました。トルコ料理にはやっぱりトルコのデザートでしょうし?

「・・・・・造って、本当に色々と凄いんだね・・・・・?」

そのアキさんの言葉に全員が首を縦に振ることになりましたが、別にそうでもない気がしますがね?

☆

その後、サクヤさんを交えての勉強会となりました。ふむ、結構真面目にやってくれたので助かりますよ。時々余計なことは言いますが、そこはスルーしとくことにしました。そしてしばらく時間が進み・・・・・・

「ん？もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

・・・・・・気がつくと、時間は１０時１０分前を指していました。

「なんじゃ。あっと言う間じゃったな」

「そうね、随分経つのね？」

「・・・・・・・・・・・・集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

ゆーさんの一言に皆さんがペンを置きます。自分もですが、特にアキさんは今日ゆーさんや姫路さんを筆頭に随分勉強が進んだようですね。良いことです♪

「あとはまた今度にするとして、今日は帰ろうぜ」

「そんじゃ、帰りの車を出すとすっかね。帰る方向考えて二手に分かれりゃ、アタシと西岡で十分だろ？」

「ええ、そうですね。距離と人数的にアキさん、姫路さん、こーさん、ゆーさんのグループと優姉さん、ヒデさん、島田さん、葉月さんのグループってとこですかね？」

「何から何まですみません。月野君に日高先生。今日はありがとうございました」

「本当にゴメンね？色々とありがと。ほら葉月も、お礼を言いなさ・

・・・・葉月？」
「Ｚｚｚｚ・・・・・」
「あはは。疲れちゃったみたいだね」

葉月さんはいつの間にかアキさんの膝の上で眠ってしまっていました。まあ時間も時間ですし。

「もう、葉月ってば・・・・・・アキ、悪いけどこっちに渡してもらえる？」
「あ、うん。そうしたいんだけど・・・・・・」

あら・・・・・？葉月さん、アキさんのシャツを握りしめて寝ていますね。

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

島田さんが軽く葉月さんの肩を叩きます。

「んぅ・・・・・・」

すると葉月さんは少しだけ目を開けて、

「お兄ちゃんは帰っちゃ、嫌です・・・・・・」

そう言って更に強くアキさんのシャツを握りしめました。

「葉月。あんまり我儘言うと、お姉ちゃん怒るからね」

島田さんの口調が少しだけ強くなります。なるほど、この様子を見るに島田さんは優しいだけじゃなく、きちんと怒る時には怒る良いお姉さんをやっているというのが伝わってきますね。

「・・・・・お姉ちゃんには、分からないです・・・・・・」

「え？何が？」

「・・・・・・お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるから良いです・・・・・・でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです・・・・・・」

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」」」」」

なるほど、です。寝惚けているからこそ聞けた、葉月さんの本音に思わず自分達は顔を見合わせてしまいます。葉月さんはそこまでアキさんのことを慕っているのですね。

「・・・・・ねえ明久君？遠回りになりますが、明久君は美波ちゃんの家に寄って帰ってはどうでしょうか？」

「うん、そうだね。・・・・・日高先生、それでもいいですか？」

「え、えええっ！？」

おお・・・・・自分もアキさんに言おうかと思いましたが、真っ先に姫路さんが言ってくるとは。これはちょっと意外ですね？

「そうですね。サクヤさん、自分からもお願いします」
「おうよ!今の聞いたらそうするっきゃねえだろ?」
「まあ、今のチビッ子の台詞を聞いたらそうなるだろうな」
「そうじゃな。明久よ、モテる男は辛いのう」
「ホントよね?吉井君モテモテじゃない♪」
「・・・・・・・・・・・人気者」

どうやら皆さんその考えに乗ったようですね?やっぱり良いメンバーです♪

「い、いいのアキ?反対方向でしょう?そ、それに瑞希・・・・・・」
「あはは♪姉さんに関わりたくなかったし、まだ家に帰りたくなかったんだよね♪」
「ふふっ♪美波ちゃん?貸し一つ、ですからね♪」

そう言って二人は笑顔で島田さんに言います。まあ、アキさんの場合ちょっぴり本音も混じっているかもしれませんがね♪

「もうっ!瑞希ったら♪・・・・・ゴメンね、今日は許してね?」
「ふふふ♪葉月ちゃんに免じて、ですよ?」

この二人も、えらい仲良くなりましたよね~♪大切な人が共通しているからでしょうかね。

「そんじゃお前ら、西岡呼んでるし外に行こうや」
「では皆さん、今日はお疲れ様でした。自分はここで失礼しますね。

また明日です♪」
「それじゃ、造。今日はありがとうな」
「また明日学園でね♪バイバイ造くん♪」
「大勢で押し掛けてすまなかったのう」
「・・・・・・・・・・・ありがとう」
「月野君、ありがとうございました♪」
「ご飯美味しかったよ造！またね～」
「それじゃ、またね月野！今日はホントにありがとう」

そう言って皆さんお帰りになりました。ふぅ、ちょっぴり疲れましたが楽しくも勉強になった勉強会でしたね♪

・・・・・それにしても姫路さんのあの対応♪大人になったんでしょうかね～？島田さんも島田さんで、最近姫路さんのアキさんへのアプローチには寛容の精神を持っていますし、アキさんは色々な意味で愛されてますよね♪これが何と言いましょうか、大人の対応（？）ってやつですかね♪

『ああっ！！つーちゃんの作ったデザートってもう無いの！？どう言うこと！？』

・・・・・家の中に、全く成長していない大人もいましたがね・・・・・・？あの人は・・・・・・

６４時間目　夕食と帰りと葉月さん～モテモテ☆アキさん♪～（後書き）

ありがとうございました。６４時間目、いかがだったですか？

どうでもいいこと補足

フランス料理とか中華は有名だけど、トルコ料理ってあんまり日本では馴染みがないよねって友人に言われました（泣）美味しいのにね？日本ではドネルケバブとかドンドゥルマ（伸びるアイスクリーム）とか有名ですね。んじゃちょいと説明？

今回出てきたトルコ料理

・キョフテ・・・・・・トルコの肉団子（どっちかと言えばハンバーグかな？）っぽいヤツ。

・ビベルドルマ・・・・・・ピーマンの肉詰め

・フムス・・・・・ひよこ豆のペースト。前菜（メゼ）。どうでもいいですけど、ひよこ豆って見た目も名前も可愛いですよね？

・ブルグルピラウ・・・・・挽き割り小麦の日本で言うならチキンライスっぽいヤツ

・メルジメッキチョルバス・・・・・・定番の赤レンズ豆のスープ

・バクラヴァ・・・・・トルコの有名デザート。一言で言うと、死ぬほど甘い。だが美味い。トルコのデザートは大抵甘いけどね？

だがそれが良い。薄いパイ生地にクルミを砕いたものを挟んで、砂糖シロップをたっぷりかけたもの。流石の自分も初めて食べた時は甘すぎてビックリしました。友人に食べさせたら『頭が痛くなった』って言ってました。でも美味しいです。

こんな感じですかね？力入れるところが違うだろって？・・・・・・うん、ゴメンなさい。作者（と作者の母）の個人的な趣味です。お腹空いてきましたね。

本来島田家で行われるはずのやりとりを、造の家でやったので無理やりなとこもありましたが、これが自分の全力ですね（汗）すんません、わかりにくかったりしたらすみません。

次回は霧島さん家にご招待♪読んでいただきありがとうございました！

６５時間目　霧島家へご招待♪～お泊まり会に行きましょう～（前書き）

どうも糖分摂取魔です♪相変わらずの変な更新ですみませんです……

今回から霧島さんの家でのお泊まり会兼勉強会ですね。うん、正直に言うと長いです。勉強会だけで５話分消費してますもん。

それじゃ行きましょかね？６５時間目です。よろしくお願いします♪

65時間目　霧島家へご招待♪～お泊まり会に行きましょう～

「それで姫路？昨日帰ってから親に説教された、と？」

翌日の昼休み、自分らは皆さんで集りお弁当を食べてます。アキさんも珍しくお弁当を用意してますね♪玲さんがいるからとは言え、ちゃんと食べないと身体に悪いのでそこは良いことなんでしょうね。

「は、はい・・・・・すっかり舞い上がってて、家に連絡をすることを忘れてました・・・・・・」

何でも姫路さん、二日連続で遅くまで帰ってこなかった上に昨日は遅くなることを親に連絡していなかったそうです。そりゃ大事な娘さんがあんな時間まで外に出てたら心配もするでしょうね・・・・・？

「おかげで週末までの間、学校以外の外出を禁止されちゃって・・・・・」

「あらら。それは可哀そうに」

「まぁでも、そこは自業自得だろ。電話くらいかけときゃ姫路の親だって安心しただろうに」

「あ、あはは・・・・・・実は電源を入れてませんでした・・・・・・」

その気持ちはわかります。よく自分も『電源入れてくれっ！造！！』って皆さんに言われますし？

「でもさ、雄二？雄二の方は大丈夫なの？」
「ん？ひょっとしてゆーさんとこも門限とか結構厳しいんですか？」
「いや、そんなもんねえぞ？俺の親は何も言わないから大丈夫だしな」
「ああ、そっちじゃなくて」
「何だよ？」
「二日連続で女の子と夜遅くまで出かけて、それに造まで巻き込んだでしょう？霧島さんは怒らないの？」
「・・・・・・・・・・・・・」

あ、ああそう言うことですか。うーん、確かに自分のことはともかく、ゆーさんも霧島さんを誘えばよかったかも知れませんね？ゆーさんも『やってもうた』って顔をして震えていますし。

「ま、まあ、大丈夫だろ。バレなければなんの問題も」
「・・・・・雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」

なんてバッドタイミング・・・・・ゆーさんもツキが回ってませんね？

「まあ、待て翔子。お前は勘違いをしている。お前の考えているような事は何も起きていないし、造を連れまわした覚えもないし、ましてはそもそもお前に俺が責められる謂れはないと」
「・・・・・うん。言い訳は向こうでゆっくりと聞かせてもらう。子供を連れまわすなんてお仕置きも必要」

ゆーさん&霧島さん退場です・・・・・

Ｐｉ Ｐｉ Ｐｉ Ｐｉ Ｐｉ！！！

その直後、アキさんの携帯のめーる着信音が鳴り響きました。アキさんが携帯取り出して泣きそうになりながら自分らに見せてくれました。

【Ｍｅｓｓａｇｅ　Ｆｒｏｍ　坂本雄二】
たすてけ

きっと『助けて』と打ちたかったんでしょう。皆さんもグッと涙を堪えます。

「ふむ。こうなると放課後の勉強会は厳しそうじゃな」
「そうね。瑞希も坂本もいないとなると、教えてくれる人が月野くらいよね？」
「・・・・・・・・・・・・（こくり）」
「あ、そうでした。すみません、実は自分も週末まで学園に残らねばならなくて」
「えっ！？そうなの造？」

しまった、すっかり皆さんに伝えることを忘れてました・・・・・・

「ええ。まだ召喚システムの調子が不安定だそうで、週末まで自分泊まりで学園長に検査してもらわないといけないんです・・・・・・」

「ええっ!?それ造は大丈夫なの!?」

「お主もしや無理をしておらぬか!?」

「勿論問題ないようですよ?ただどんな影響が出るかわからないから用心のためにだそうです」

そう言うと皆さん、ホッとした顔をしてくれます。優しいですね、皆さんは♪

「でもそれじゃ、勉強会は中止か・・・・・・弱ったな・・・・・・」

「ごめんなさい。私の家の都合で勝手に・・・・・・」

「自分もすみませんです、アキさん。協力すると言っておきながら・・・・・・」

「ああいや、二人は全然悪くないよ。自分達の勉強を置いといて僕らに教えてくれてるんだから、感謝してるくらいなのに」

そう言ってくれるのはとても嬉しいですが、アキさんも本当はあんまり余裕はないハズです。さてどうしたものでしょうかね・・・・・・?

「・・・・・造に吉井」

「「ぅわっ!」」

不意に背中から声がかけられたました。ど、どちらさまでしょうか!?

「き、霧島さんか。びっくりした・・・・・・」
「そ、そうですね。どうかしましたか?」
「・・・・・・二人とも勉強に困ってる?」
「あ、うん。そうなんだよ」
「勉強もですが、学習環境が無いことに困ってます」

ところで霧島さん?その満面の笑みと全身から溢れるようなやり遂げた感は何でしょうかね?そしてゆーさんはどうなったんでしょうかね?

「・・・・・・それなら、私も協力する」

「「え?　協力って?」」

「・・・・・・週末に、皆で私の家に泊りに来るといい」

皆さんで泊り、ですか・・・・・・それなら遅くまで勉強できるってことですよね?しかも学年一の頭脳を持つ霧島さんに教わるなんて、これはアキさんにとって嬉しいことではないでしょうか♪

「いいの、霧島さんっ?」
「自分も大丈夫でしょうか?」
「(こくり)・・・・・・娘に勉強を教える、私の夢でもある。それに吉井にはいつかお礼をしたいと思っていた」

何か聞こえた気もしますが、ここはグッと堪えてスルーしましょう。
これ以上ツッコんだら自分の身が持ちそうにありません・・・・・・

「皆でということは、ワシらも良いのかの？」
「・・・・・・勿論」
「週末ってことならウチも行けそうだし、お邪魔しちゃおうかな。瑞希はどう？」
「た、多分大丈夫です！ダメでも、なんとか両親を説得します！」
「そっか♪もし上手く行きそうになかったらウチも説得に行くからね♪」
「ありがとうございます、美波ちゃん！」
「・・・・・・・・・・・・・参加する」

うんうん。ヒデさんに続き島田さん、姫路さん、こーさんも参加が決定です。これはとても楽しい週末になりそうですね♪

「・・・・・優子や愛子も誘う」
「それいいね。そう言えば雄二は参加できるのかな？」
「・・・・・・大丈夫」
「あ、そうなんですか？」
「・・・・・その頃にはきっと立ち直ってる。これ、見る？」

「「・・・・・・・・・・・・・・！？」」

そう言って霧島さんが見せてくれたのは一枚の写真。

・・・・・・ゆーさんのドレスアップされた写真でした。

「・・・・・・雄二」

「・・・・・・ゆーさん」

アキさんと二人、消えて行ったゆーさんの方角に向け敬礼をします。

ゆーさん、どうか色々な意味で無事でっ！！

☆

そしてあっという間にやってきた週末。色々と玲さん的な意味で心配でしたので、アキさんを誘って行くことにしましたが・・・・・・

「そうですか・・・・・霧島『さん』のお家で勉強会ですか」

「あっ！？いや、その違うんだ姉さん！これは・・・・・・」

「いい心がけです。姉さんに隠し事をせず正直に話してくれたことといい、自らハードルを上げるというその心意気も」

「待って姉さん！今手帳に四桁の数字を書かなかった！？誤解だよ！霧島さんは女の子だけど、雄二のお嫁さんで造のお母さん・・・・・って違うよ！浮気関係にあるってワケでもないよ！？だからその五桁の数字は取り消してっ！？」

「・・・・・・・・・・お二人とも、何をやっておるですか？」

こんなやり取りが玄関先で行われていたことだけは申し上げましょ

う。一先ず、玲さんの説得とアキさんの『霧島さんは造のお母さん』発言を取り消すことからその週末は始まりました。

「・・・・・なるほど?あくまでも勉強が目的で他意はない、と?」

「うん」

「人数的にも霧島さんのお宅がちょうど良かったですし、彼女自身とても優秀な方ですので教わるついでに・・・・・と言うわけです」

「そういうことなら造くんにも免じて、大幅な減点は見逃してあげてもいいですが・・・・・それでもやはり褒められたものではありませんね」

「え?何で?勉強するのに」

「・・・・・テスト前のお泊まりは、好ましくないってことでしょうか?」

「その通りです。テスト前に泊りで勉強をしなければならない状態にある時点で間違いなのです」

あー、確かにわざわざ泊まるのは霧島さんにも迷惑がかかるでしょうし、何よりお泊り会のようなものになれば勉強どころではなくなる心配もあるかもしれないですよね?

「まあ、提案したのが自分ですし、アキさんもここ最近学習意欲が高まってます。実際かなり学力が上がっているので心配はないと思いますよ?」

「そうですね。・・・・・造くん、アキくんのこと任せてもよろしいでしょうか?」

「寧ろ自分もアキさんに迷惑が掛からぬようにしますね。何でした

ら明日、アキさんの今日の状況を報告に伺いますから」
「本当にすみませんね。・・・・・アキくん、姉さんはもう行きますがくれぐれも粗相のないようしてくださいね」
「な、何か釈然としないけどいいや・・・・・僕らもう行くから。姉さんも行ってらっしゃい」

そんなわけで玲さんはお仕事に行ってしまいました。ふぅ、何とか最低限の減点で済みましたかね？

「では自分たちも行きましょうか、アキさん？」
「あ、うん。・・・・・行く前から疲れたけどね」

ドンマイです、アキさん。・・・・・それにしても玲さんってお仕事終わってから、どうしているのでしょうかね？アキさんの話を聞くと、お仕事の時間が終わった後も何故か最近遅いそうですが？

まあ、今はとにかく急いで霧島さんのお宅に向かいましょうかね？

～造＆明久移動中～

「・・・・・吉井、いらっしゃい。造、お帰りなさい」

呼び鈴を鳴らして待っていると大きなドアを開けて私服姿の霧島さんが出迎えてくれました

「お、お邪魔します」
「何故『お帰りなさい』になるのかわかりませんが、お邪魔します」
とても立派な造りの家ですね♪自分の家はただ大きいだけですが、ここは何と言いましょうか品がありますね。住み込みの家政婦さんもいそうな雰囲気です。

「・・・・・もう皆、だいたい揃ってる」
「あ、僕らが最後なんだ」

先導してくれる霧島さんについていきます。おおぅ・・・・・廊下も綺麗ですね～♪

「ふぇ～。　部屋がいっぱいあるね～」
「・・・・・用途別」
「それじゃ、あの本が並べられている部屋は？」
「・・・・・書斎」
「では、あのスクリーンがある部屋は何でしょうか？」
「・・・・・シアタールーム」

へぇ？ウチとは違って探検とかしてみれば面白そうですね～

「あのえらくたくさん服のある部屋は？」
「造たち子供たちの衣裳部屋」

・・・・・ん？

「あの『しょうゆ』とか『こしょう』とか『造』とか書かれている部屋は？」

「・・・・・・造たちの大きくなった時の一人部屋」

・・・・・・えっと？

「あのキングサイズのベッドがある部屋は？」

「・・・・・・私と雄二と造の寝室」

た、耐えるんですっ！ここでツッコんでは、これから先ずっとツッコまなければなりませんっ！？

「・・・・・・そして、ここが勉強部屋」

しばらく歩いたところで霧島さんが立ち止まってドアを開けます。その中には一組の男女が言い争っている姿がありました。あれは・・・・・こーさんと工藤さん？

『ムッツリーニ君は頭でものを考えすぎだよ！「百聞は一見に如かず」って諺を知らないのっ？』

『・・・・・・・・・・・・充分なシミュレーションもなく実戦に挑むのは愚の骨頂』

『そうやって考えてばかりだから、スグに血を噴いて倒れちゃうんだよ！』

『・・・・・・・・・・・・何を言われても信念を曲げる気はない』

『またそんな事ばかり言って・・・・・！　この分からずやっ！

（チラッ）』
『・・・・・・・・・・・・・卑怯な・・・・・・・っっ！！（ブシャァァ）』

工藤さんがシャツの襟元を開き、こーさんが鼻血の海に沈みました。
貴方たちは何やってんですか？そんなに自分にツッコミを入れさせたいのでしょうか・・・・・・？

「おおっ！造に明久、やっと来おったな」
「あら、待ってたわよ♪」
「こんにちは、秀吉に木下さん」
「お待たせです、ヒデさん、優姉さん。それであの二人に何があったのですか？」
「うむ。それがの・・・・・・？」
「あの二人『第二次性徴を実感した出来事は何か』という議論が高じてああなったみたいね」
「あのさ。その原因になった議題からして既に何かがおかしいと思うんだ」
「ですね・・・・・・そもそも何故にそこまで白熱できるのでしょうね？ある意味興味が湧きますよ」
まあ、『あの二人だから』と言えばそれで納得がいくんですがね？

「あっ！明久君に月野君、こんにちは」
「二人とも遅いわよ～」
そうしてボケっとしていると、姫路さんに島田さんがこちらにやってきました。ふむ、後はゆーさんだけですか？

「あ、二人ともお待たせ。姫路さん、今日のお泊りの許可が下りて良かったね！」
「はいっ！美波ちゃんが私の両親を説得してくれたんですよ♪」
「いやいや、ウチはただ瑞希を迎えに行っただけよ？」
あらあら♪この二人ってやっぱり女子ベストコンビですよね～
「それにしても、ウチの方も今日はすんなりと出てこれて助かったわ」
「え？美波も何かありそうだったの？」
「ううん。ウチじゃなくて、葉月が、ね」
「葉月さんがどうかしたんですか？」
「泊りで勉強会だなんて知られたら、絶対に『連れて行け』って駄々をこねるに決まってるわ」
「あはは。そうなんだ」
「両親が映画に連れて行ってくれていて助かったわ。出掛けるところを見られたら大変だっただろうから」
まあ、皆さん葉月さんが来るのは歓迎でしょうがこの前の件もあるので、島田さんが遠慮してくださった様ですね。葉月さんの気の回る所はお姉さん譲りみたいです。
「これで後はゆーさんだけですか？」
「あれ？そう言えば雄二いないね？」
「んむ？ワシらもまだ見ておらんな。遅刻じゃろうか？」

そう皆さんでゆーさんに電話でもしようとしていると、

「・・・・・・雄二を連れてきた」

ドサッ

絨毯の上に何故か着ぐるみを着せられたゆーさんが転がされます。
どうでもいいですが、コレ何の生き物でしょうかね・・・・・・？

「ん？明久、造。それにお前ら。どうしてここにいるんだ？」
「・・・・・・ああ、えっと霧島さんの厚意でね」
「・・・・・・ゆーさんに何があったんでしょうね」
「雄二よ。お主は今日の勉強会の話は聞かされておらぬのか？」

ヒデさんがとりあえず、ゆーさんの着ている着ぐるみ（？）のパーツを取りつつ聞きます。

「あん？何だそれ？俺はそんな話聞いてねえぞ？いつものように急に眠くなったと思ったら、ここにいた」

『いつものように』という言葉が、哀愁漂ってますね・・・・・・？

「それじゃ、勉強道具は？」
「・・・・・・大丈夫。準備は万全」

霧島さんが掲げて見せたのはゆーさんの鞄ですね。着替えも持ってきてあるようですし、手抜かりはないようです。

「さて、と。それじゃ皆揃ったみたいだし、始めようか」
「そうじゃな。それがいいじゃろ」
「ですね、そうでないと・・・・・・」

『それは違うよっ！世論調査では成人女性の６８％以上が・・・・・・』
『・・・・・・・・・・違わない。世界保健機関の調査結果では成人男性の７２％が賛同している』
『またそうやって屁理屈を・・・・・・！』
『・・・・・・・・・・屁理屈じゃなくて事実』
『くぅ・・・・・・っ！　こうなったら、今度のテストでムッツリーニ君を抜いてボクの方が正しいって証明してみせるからね！』
『・・・・・・・・・・学年一位の座は揺るがない』
『そうやって憎たらしいこと言って・・・・・・ムッツリーニ君なんてこうだよっ！（ピラッ）』
『・・・・・・・・・・卑劣な・・・・・・っ！！（プシャァアア）』

「「「早く勉強を始めないと（ませんと）、あの二人が何か問題を起こしそうだし（ですし）（じゃし）」」」

65時間目　霧島家へご招待♪～お泊まり会に行きましょう～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

うーん、いくつか質問ですが……この章の結末、原作と大きく変えてもいいですか？原作では明久が名前をアレクサンドロス大王に改名するハプニングがありましたが……なんか、それだと頑張ってきた明久がどうにも居た堪れなくてですね……

あっ！ですが安心してください。勿論玲さんは日本に残しますよ？あんないいキャラをアメリカに帰すわけにはいきませんし♪

もしダメそうなら言ってください。頑張って変えてみたりします。後、これが終わったら肝試し編ですが……やっぱり3年生は加えるとしても、悪役・敵役がいないんですよね（汗）そのことでアドバイス頂けると泣いて喜びます♪

一応、考えはまとまりつつあるんですが、まだ肝試し編の下書きを一切書いておりませぬ（汗）これから書くので宜しければ、アドバイス貰えると嬉しいです。

長々すみません。次回は久しぶりに完全明久Ｓｉｄｅでお送りします。読んでいただきありがとうございました！

６６時間目　僕らの楽しい（？）勉強会～それぞれの学習風景～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。いつも読んでくださり、とても嬉しいです♪

今回は完全明久Ｓｉｄｅでの、造たちの勉強風景を書いていきます。

原作とはちょっぴり違うのはいつものことカナ？

とりあえず行きましょうね。６６時間目、どうぞです。

６６時間目　僕らの楽しい（？）勉強会～それぞれの学習風景～

明久Ｓｉｄｅ

「明久君、美波ちゃん。そこは東洋やインドを別々に考えずに、同じ時代にそれぞれの国で何が起きていたかっていう覚え方をするといいですよ」
「それぞれの国で？」
「えっと、どう言うこと？」
「そうですね、例えば紀元前５５０年頃中国で孔子という偉人が誕生した時、インドでも有名な人が生まれているんです」
「孔子って名前、どこかで聞いた気がする・・・・・・？」
「え、えっと『儒教』を考えた人だっけ・・・・・・？」
「美波ちゃん合ってますよ♪『儒教』の創始した人です。明久君の好きな三国志にも大きな影響を与えた方です」
「あっ、そう言えば漫画とかゲームで出てきた気がする」
仁義礼智信の教えだったかな？孫子の兵法とか、そういった単語と並べて出てきた気がするね。

「その儒教の創始者である孔子が生まれた頃、実はインドでも同じく『仏教』と『ジャイナ教』の創始者が生まれているんです」
「仏教の創始者というと・・・・・・」
「えっと、お釈迦様かな？」
「はい、明久君正解です。ゴータマ・シッダールタと呼ばれている人ですね」

「ジャイナ教って方は分からないや」
「ゴメン瑞希。ウチも・・・・・・」
「ちょっと難しかったでしょうか。そっちはマハーヴィーラという人です。どちらも歴史上ではとても有名な宗教の創始者なので、覚えておいた方がいいと思います」
「ふむふむ」
「なるほどね」

ゴータマ・シッダールタが仏教で、マハーヴィーラがジャイナ教ね

「これって面白いと思いませんか、明久君に美波ちゃん」

「「え？何が？」」

「だって、この広い世界の長い歴史の中で、有名な宗教を作った人がほぼ同時期に三人も生まれているんですよ」
「あ・・・・・そう言えばそうね」
「ホントだね、これって偶然かな？」
「偶然かもしれませんし、そうじゃないかもしれません。もしかすると、人という種族はある程度の時間が経つと、同じような思想を持って神様を信じ始めるのかもしれませんね」
「それって凄いわよね・・・・・・」
「うん。場所が違っても、人の進化は同じように進んでいるってことだよね」
「はい。あるいは・・・・・・」

「「あるいは？」」

「もしかしたら、本当に神様が世界に降り立って、インドや中国を

巡って教えを授けたのかもしれませんよ？」

「おおっ、なるほど！」

「凄いわね！そう考えると、確かに同時期に宗教が生まれたことに説明がつくわ・・・・・それに、凄くロマンがあるわね♪」

「ふふっ♪本当のところはどうだか分かりませんけどね」

姫路さんが茶目っ気たっぷりの笑顔を浮かべる。本当に神様がやってきた、なんて教科書には書いてないけど、それって凄く面白い考えだよね。

「それじゃ二人とも、そこの括弧の中に何が入るかは分かりますか？」

「うん。勿論だよ」

「ええ、大丈夫♪」

「「儒教の創始者は・・・・・『孔子』っと」」

「はい。その通りです♪」」

姫路さんに教わりながら美波と問題集の空欄を埋めていく。、姫路さんはこんなサイドエピソードを交えて教えてくれる。進行速度は落ちてしまうかもしれないけど、これだと印象に強く残って覚えられるし、それに何より、ただの暗記なんかよりよっぽど面白い。姫路さんはこういった考え方をすることで勉強を興味深いものにしているんだろう。

さっきは美波に数学を教えて貰ったけど、それもとてもわかりやすくてやっぱり勉強の仕方一つ取ってもそれぞれの個性って出るもの何だよね。

「ゴメンね瑞希、ウチにまで教えてくれて・・・・・」
「そんなことないですよ♪さっきの美波ちゃんの数学の解きかたとか勉強の仕方だって、私考えもしなかったですし」
「寧ろ僕二人に支えられ過ぎかな・・・・・・」
「「そんなことないですよ（ないわよ）！！」」
「ふ、二人ともありがとう・・・・・・」
うぅ、二人の優しさが身に沁みる。確かに姉さんの言うこともあながち間違ってないかも。もう少しみんなに迷惑がかからないように勉強しておくべきだったかな・・・・・・？
『造、だから違うだろ？ホントお前の英語力は明久以下だからな・・・・・せめて二桁は取ってくれないと試召戦争の時に困るだろうが』
『あぅ・・・・・・と、言われましても人間出来ることと出来ないことがありましてね？』
『ドイツ語が理解出来んなら英語だって理解できるだろうが！？寧ろどうしてドイツ語が理解できるのか俺にはさっぱりだぞ！？』
『うぅ・・・・・そんなこと言われましても』
『いいからいくぞ。次の問題だ。【Ｔｈｏｕｇｈ　ｈｅ　ｋｎｅｗ　ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ，　ｈｅ　ｄｉｄｎ'ｔ　ｔｅｌｌ　ｍｅ　ｉｔ.】この文を分詞構文に直し訳してみろ』
『・・・・・・・・・・・分子？構文をバラバラにするんですかね？』

『・・・・・・・・・・・お前、ちょっとそこで正座しろ』

雄二は造に英語を教えている。まあ、さっきまでは雄二が造に色々習ってたけどね？ちなみにその時までは霧島さんも一緒だったけど、今は席を外しているようだ。

『ホラ、秀吉集中しなさい。アタシも造くんにコスプレさせたく・・・・・じゃなくて、造くんと勉強したいのを我慢しているのよ？』

『姉上、本音がだだ漏れておるぞ・・・・・？そ、それにワシは別に・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・へぇ？なるほどね♪ま、いいわ。ちゃんと集中出来なかったり、真面目に解かないならコスプレさせるわね♪』

『っ！？わ、わかったのじゃ』

『よろしい。それじゃ次の問題にいくわよ？【『はべり』の已然形を用いた例文】を書いてみなさい』

『以前造の作ってくれたケーキはベリーデリシャスでした』

『その話は後で詳しく聞くとして、やっぱりコスプレ決定ね』

『なっ！？』

秀吉は木下さんに教えて貰っているようだ。うんうん、姉妹仲が良いのは良いことだね。

『ムッツリーニ君。流石にこの問題は分からないでしょ？』

『・・・・・・・・・・中一で７０％。中二で８７％。中三で９９％』

『どうしてこんな事まで知ってるの！？』
『・・・・・・・一般常識』
『うぅ・・・・・正攻法で勝てる気がしなくなってきたよ・・・・・』
『・・・・・・・・工藤はまだまだ甘い』
『こ、こうなったら・・・・・・あのね、ムッツリーニ君。実はボク・・・・・・・」
『・・・・・・・・・・？』
『・・・・・・いつも、ノーブラなんだよね』
『・・・・・・・っ！？（ボタボタボタ）』
『え？それなのにどうして形が崩れないのかって？それはね・・・・・・実は（ボソボソ）って感じのマッサージをいつも（ゴニョゴニョ）ってなるまで、毎晩毎晩・・・・・・』
『・・・・・・・・・殺す気か・・・・・・・っ！（ブシャァアッ）』
『殺すだなんて人聞きわるいなぁ。別にボクは、ムッツリーニ君が出血多量でテストで実力が出せなくなるといいのに、なんて事も考えてないし』
『・・・・・・・・・・この程度のハンデ、どうという事はない』
『ふ〜ん。そんな事言うんだ？』
『・・・・・・・・・・お前には、負けない』
『そこまで言うなら遠慮無く・・・・・・それで、さっきの続きだけど、（モニョモニョ）を身体が熱くなるまでやったら、最後には（ホニャホニャ）を使って（ヒソヒソ）を・・・・・・」
『・・・・・・・・・・死んで・・・・・・たまるか・・・・・・っ！（ダバダバダバ）』
工藤さんとムッツリーニは相変わらず変な会話をしている。失血量が多すぎて顔色が青くなってきたのが若干心配だ。

☆

「・・・・・・そろそろ夕飯だから、別の部屋に来て」

気がつけば霧島さんが声が聞こえてきた。あれ？さっきお茶をしたと思っていたのに、もう六時過ぎか。

「よし。造、一先ず英語はこのくらいでいいだろ。飯にしようぜ」
「め、目が回りそうです・・・・・・構文とか、そもそも英単語が覚えきれないです・・・・・・」
「ドイツ語に比べりゃこっちの方がまだ覚えやすいだろうにな？」
「（ボソッ）寧ろドイツ語とかフランス語とか中国語とかスペイン語とかロシア語とかの方がまだ理解できますよ」
「おい造。今さらりと、とんでもないこと言わなかったか？」

造は随分雄二にしごかれた様子。まあ、造最大の苦手としている科目なだけに、傍目にも疲弊しているのが分かるね。

「うぅ・・・・・活用形とは何なのじゃ・・・・・・知らんでも生活に役立つわけでもなかろうに。そもそも古典など、何の意味があるのじゃ。別に能や狂言をやるわけでもあるまいし・・・・・・」
「はいはい。言っとくけど、コスプ・・・・・・コホン、罰ゲーム

は受けて貰うからね？」
「・・・・・・・・・・・・つ、造！助けてくれぬかっ！？」
「ふみゃ！？・・・・・・・・・？どうしましたヒデさん？」

秀吉もどうやらお姉さんにみっちりとしごかれた様子。そう言えば秀吉って古典が一番苦手だったっけ？

「・・・・・・・・・・・・生き残った・・・・・・！」
「ムッツリーニ君。　また後でじっくりボクとお勉強しようね」
「・・・・・・・・・・・・・・断る」

工藤さんとムッツリーニは仲が良いやら悪いやら・・・・・・

「む～・・・・・・しょっ、と・・・・・・」

ペンを置いて立ち上がり、グッと背中の筋を伸ばす。バキバキと関節が鳴るのが心地好い。最近のバキバキなんて音と言えば、姉さんの折檻中のことを思い出すけど・・・・・・

「・・・・・案内するから、ついてきて」

「「「「「「「「「は～い」」」」」」」」」

先導する霧島さんに雑談しながらついていく。

「この間の造の家といい、最近はまともな食事が摂れて嬉しいよ」
「アキ、ダメよ?ちゃんと食べないと病気になっちゃうわよ?」
「そうですよ?明久君はもう少し生活を見直すべきです」
「う～ん、一応掃除洗濯はきちんとやっているけどね」
「あっ!何でしたらやっぱり私がお弁当を・・・・・」

「「いやそれはダメだよ（ダメよ）姫路さん（瑞希）!僕の（アキの）命が危ないから（危ないわ）」」

「???あ、そうでしたね。Fクラスの皆さんはそう言うのに厳しいですもんね」

うん、それもあるけどそれ以上の『もの』があるもんね。

「ん?どうしたのよ造くんに秀吉?」
「・・・・・雄二?どうして震えているの?」
「あれれ～?ムッツリーニ君顔青いよ～?鼻血出し過ぎた?」

「「「「いえ（いや）、何でもないですよ（ないのじゃ）（ないぞ）（ない）」」」」

うん、君たち全員はその身を持って知っているもんね。

「・・・・・この部屋」

と、そんな話をしていたら先頭の霧島さんが一つの部屋の前で立ち止まる。部屋を出てから徐々に御馳走の良い香りがしてきたけど、その部屋の扉を開けると良い匂いは一層強くなった。

「す、凄い・・・・・・っ！」
「わぁ・・・・・・」
「月野の家並みね・・・・・・」
「これはまた、贅沢じゃな」

造の家でもみたようなサイズのダイニングテーブルに所狭しと並べらた料理。香ばしい匂いを放つ北京ダックは姿焼で肉汁が滴っているし、とろりと濃厚なスープに浮かべられている鱶鰭は贅沢な姿煮だ。チンジャオロースやホイコーロー、八宝菜に麻婆豆腐といった料理も中央の大皿に盛られているし、それぞれの席に置いてある小さな蓋付きの茶碗のようなものは、もしや高級食材の定番、ツバメの巣だとか？

造の家の時も思ったけど、こんなに良いものを遊びに来た友人にご馳走してくれてもいいのかな！？ここ最近、食事に関しては本当に夢を見ている気分だよ！

「アキ、よかったわね♪しっかり食べれそうよ♪」
「あはは♪あまりに高級すぎてお腹壊すかもね」

どう考えてもここ数日で、僕の一年分の食費を超えている。造や霧島さんを崇めなきゃいけない気がしてきたよ。・・・・・・いかん、見ているだけでも涎が。

「ところで、ここで食事を摂るのはワシらだけかの？」
「そう言えばそうね。代表の家族はいないの？」

「・・・・・・うん。私たちだけ」

部屋の中には僕ら十人だけしかいない。料理を用意したのが霧島さんのお母さんなのかお手伝いさんなのかすらわからない。ひょっとして僕らに気を遣ってくれているのかな？

「翔子の家はそれぞれが自由に暮らしているからな」

「・・・・・・うん。だから気兼ねしないで好きに過ごして欲しい」

・・・・・なるほど。造の家も似たようなものだったけど、確かに雄二や未来の娘たちの部屋が作られているくらいだし、これほど自由という言葉が似合う家もないだろう。まぁ造の家の人たちは、性格が自由奔放（と言うかのんき？）だったけどね？

「・・・・・・それじゃ、適当に座って」

言われた通りみんな手近な席に座る。さて、食べるぞっ♪

「「「「「「「「「「いただきまーすっ」」」」」」」」」」

皆で手を合わせて、いよいよ楽しい夕食タイム。最近ホントこれに関しては幸せだよね♪

６６時間目　僕らの楽しい（？）勉強会～それぞれの学習風景～（後書き）

ありがとうございました。６６時間目、いかがだったでしょうか？

今回造の出番が短めなので、ちょいとおまけ♪

雄「おい、造。お前さっきとんでもないこと言ってたろ？アレはどう言う意味だ」

造「？？？何でしたっけ？」

雄「ドイツ語だけじゃなくてフランス、中国、スペイン、ロシア語がどうとか」

造「あ、ああそれですか？……えっと、ですね？」

日「それはな～、アタシが昔からこいつを世界中に連れまわしてたからなんよ～」

造「うわっ！？さ、サクヤさん！？何でここに！？」

日「どうでもいいだろ～えっとな、色々造を連れまわしてたせいかこいつある程度の国の日常会話程度なら聞ける・話せるようになっちまったんさ。ただ、ちょいと詰め込み過ぎたせいか読み書きできる語学は少ねえがな？」

雄「いや、それなら世界で最も多く使用されている英語が苦手な理由にはならんと思うが？英語圏には行かなかったのか？」

造「うぅ……それは……」

日「英語圏も回ったんだが、まだ造がミルク飲んでいる時に全て回りきったかんな。関係あるのかしらねえが、世界を回り終わった後英語を勉強させようとしたんだが……」

造「いろんな語学が頭の中を駆け巡ってしまって全然理解できないんですよ……それ以来英語がまるでダメになりました……」

雄「……凄いんだか凄くないんだかわかんねえな……」

☆

いつもの如く長々すみません。造の英語が苦手なわけ……単純ですね（汗）短編でやれ！って言わないで……（涙）

読んでいただきありがとうございました！また次回もよろしくです♪

６７時間目　楽しい夕食と霧島さんの罠～掌の上のゆーさん～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。暑いですよね……

今回は６７時間目ですが、番外編を含めるといつの間にやら９０話越えしてました（汗）自分もビックリですよ

んじゃさっさか行きましょねぇ♪今回もよろしくです！

67時間目　楽しい夕食と霧島さんの罠～掌の上のゆーさん～

造Ｓｉｄｅ

そんなわけで、レッツ☆夕食タイムですね♪

「うん、美味しいですね♪」
「これはまた、絶品じゃな・・・・・・・！」
「そうね、幸せだわ♪」
「お、美味しいです・・・・・・！うぅ・・・・・・また食べ過ぎちゃいます・・・・・・」
「こんなに美味しいものをまた食べてきたなんて葉月にバレたら拗ねられそうね・・・・・・」
「僕の好物のカロリーが！カロリーがこんなにたくさん・・・・・・っ！」
「・・・・・・・・・・・鉄分補給」
「翔子。何故俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ」
「・・・・・・おかしな薬なんて入ってない」
「ボク中華料理大好きなんだよねー」

こんな感じで、ホテルのパーティ風に皆さんで食事をします。美味しいですし、楽しいですね♪

「「アキ（明久君）、はい。あーん♪」」

「ん？あーん・・・・・・うん、美味しい！」

「「ふふっ♪」」

「翔子。何故俺のコップに注いだ飲み物だけ毒々しいピンク色をしているんだ」
「・・・・・怪しい薬なんて入ってない」

「ムッツリーニ君も食べる～？・・・・・・・・・・・・ボクの口移しで☆」
「・・・・・・・・・・・・・・っ！？（バダバダバダ）」

「むう？これは何じゃ？造、姉上、わかるかの？」
「ああ、ツバメの巣ですね。美味しいですよ。食べてみればわかります」
「どれどれ・・・・・・？あらホント。美味しいわ♪」

とても美味しい料理に皆さん舌鼓を打ち、勉強の疲れを癒します。最後に締めとなるデザートの（待ってましたっ！！）杏仁豆腐を味わっているところで、霧島さんがゆーさんに話しかけます。

「・・・・・雄二」
「何だ翔子？」
「・・・・・勉強の進み具合はどう？」
「まったくもって順調だ。造の教えもあってか、全く心配はいらねぇ」

んー？と言いますか、ゆーさんが異常に吸収が早いせいでもあると

思いますがね？

「・・・・・・本当に？」

「ああ。こりゃ次のテストではお前に勝っちまうかもしれないぞ」

「・・・・・・そう」

「そうしたら俺は晴れて自由の身だな」

・・・・・・おや？楽しげに笑うゆーさんを見て、霧島さんの目がスッと細くなりました。何でしょう、嫌な予感が・・・・・・？

「・・・・・・そこまで言うのなら」

「ん？」

「・・・・・・勝負、する？」

霧島さんにしては珍しい、挑発的な目です。・・・・・・これは。

「勝負だと？」

「・・・・・・うん。雄二がどの程度できるようになったのか、見てあげる」

「ほほぅ・・・・・・随分と上からの目線で言ってくれるじゃねぇか」

ゆ、ゆーさん？貴方乗せられてませんか？

「・・・・・・実際に、私の方が上だから」

「くっ。上等だ！勝負でも何でもしてやろうじゃねぇか！本当の実

力の違いってヤツを見てやらぁ！」

・・・・・あ〝！ゆーさん！？やっぱり霧島さんに上手く扱われてますよ！？

「・・・・・分かった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習試験で勝負」

「おうよ！　今までの俺と思うなよ！」

「・・・・・それで、私が勝ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「は？」

そして目が点になるゆーさん。やっぱり何処まで行ってもゆーさんの最大の弱点は霧島さん（と雪乃さん）でしょうね。いえ、寧ろ霧島さんがゆーさんの扱いを熟知しているってとこでしょうかね？

・・・・・ところでアキさんにこーさん？貴方たちは何故に戦闘態勢に移っているのですか・・・・・？

「二人とも？何しようとしてますか・・・・・？」

「あはは♪ただ杏仁豆腐を食べたいからナイフを貸して貰おうかなって思ってさ。ね？ムッツリーニ？」

「・・・・・・・・・・（コクリ）包丁や日本刀でも可」

「本当に杏仁豆腐を切るのですかね・・・・・？」

切るものがゆーさんにシフトしないか心配ですよ・・・・・？

「・・・・・今持ってくる」
「待て翔子!今のコイツらに刃物を渡すな!俺の命に関わる!」

流石は悪友の勘ってヤツでしょうかね・・・・・?そもそも悪友とはいえ、命のやりとりをする時点で悪友でもない気もしますが。

「・・・・・代わりに、雄二が勝ったら吉井と一緒に寝るのを許してあげる」
「驚くほど俺のメリットがねぇぞ!?」

そもそも男子は男子で寝るつもりでしたからね。霧島さんの許可って必要ないのでは・・・・・・?

「良いな~。そういうの、面白そうだよね。ボクも何かやりたいなぁ」

アキさん&こーさんが、恨みの表情でゆーさんに向かって椅子を振りかぶろうとしていると、工藤さんがが楽しげに言ってきました。

「・・・・・愛子も勝負する?」
「それも良いけど、折角だから・・・・・・」

わざと一呼吸置いて男子の皆さんに目線を送る工藤さん。???何でしょうか?

「その試験を皆で受けてさ？その点数で部屋割りを決めない？ねー？ムッツリーニ君？」

「・・・・・・・・・・・・・何故、俺なんだ・・・・・・・？」

・・・・・・何やらゆーさんだけではなく、自分らにも悪い予感が？

「そ、それって点数によっては三人部屋でも良いのでしょうかっ！？」

「ん～？それなら良いんじゃないの～♪」

「み、瑞希！ウチも出来る限り頑張るわ！」

「え、えっと二人とも？何で僕を見ながら言っているの？」

・・・・・・ちょっと皆さん？どんどんおかしな方向に行ってませんか？

「ふふふっ♪三人部屋ね。と言うことは造くんと秀吉と」

「・・・・・・私と雄二と造、親子三人仲良く川の字で」

「ああっ！代表、そこは譲れませんよ！！アタシは愛すべき弟たちと一緒に寝ます！！」

「・・・・・・・優子、真剣勝負」

・・・・・・あのぅ？自分らの意思は？と言いますかそもそも、

「お主ら、少々慌てすぎではないかの？それだと問題もあろう？」

「ですね。そもそもこの提案、皆さんが同意しているわけでは、」

「「皆さん（みんな）っ！私たち（ウチら）は負けませんよ（負けないわよ）！！」」

「ふふふ～♪二人とも面白いね～♪その勝負、乗ったよ！」

「いくら代表でも、アタシは容赦しませんよ！」

「・・・・・負けないっ」

「ないと・・・・・思うの、ですがね・・・・・・」

「・・・・・造よ。ワシらはこれからどうするかの・・・・・・」

「最早どうにもならないかと・・・・・最近ですが、勉強出来ることと頭が回るのって直結していない気がします」

「同感じゃな・・・・・ホレ、杏仁豆腐のおかわりはどうじゃ？」

「ありがとうです、ヒデさん・・・・・一緒に食べましょうね？」

うぅ・・・・・ヒデさんと自分の言い分は華麗にスルーですか・・・・・？二人で杏仁豆腐のやけ食い（？）をしながら愚痴を言い合います。

「・・・・・じゃあ、まだ開けていない新品の模擬試験を持ってくる」

「待て翔子！俺はまだ承諾してないぞ！」

あ、ゆーさん・・・・・。多分何を言っても彼女たちは止まらないでしょうが、頑張ってください・・・・・？

「・・・・・決定事項。さっき雄二は勝負するって言った。反対意見は認めない」

「ぐ・・・・・・っ！そ、それはそうだが・・・・・・！」

ゆーさん、目を泳がせながら必死に考えていますね・・・・・？と、テーブルの上に視線を送りると、霧島さんには見えないような角度でゆーさん、ジュースの入ったコップを傾けました。

「っと、すまん翔子！服にかからなかったか？」

「・・・・・・大丈夫」

まぁ、実際はかかってませんからね。ですがゆーさんは霧島さんの腰の後ろ辺りを指差します。

「いや、大丈夫じゃない。お前には見え辛いかもしれないが、服の裾のその変にかかったみたいだ」

「・・・・・・それは困るかも」

「悪い。俺の不注意で・・・・・・」

「・・・・・・あの薬は即効性。ちょっとでも嗅ぐと、眠ってしまう」

「オーケー、待とうか。お前は俺の飲み物に何を入れた？」

おおぅ・・・・・・これゆーさんが勝っても負けても、どの道霧島さんと一緒に寝ることは確定してませんかね・・・・・・？

「・・・・・着替えてくる」

「そうした方がいいだろうが・・・・・・それなら、ちょっと早いが先に風呂にしないか？腹ごなしも兼ねてな」

着替えに行こうとする霧島さんを呼びとめてゆーさんが提案します。
確かに満腹で今から始めるのは少々辛いですもんね。食事→入浴のコンボはちょっと後々辛いかもしれませんが。

「・・・・・分かった。それなら先にお風呂にする」
「んじゃ、模擬試験はその後だな」
「・・・・・・うん」

霧島さんの同意を得て、自分らは着替えの用意のために男女別々の部屋に分かれました。

「・・・・・・ところで男女別々の部屋ですよね？」
「・・・・・・うむ、霧島曰く、そのはずじゃな？」
「・・・・・・自分とヒデさんは何故二人隔離されているのでしょうか？」
「・・・・・・それを言うな造よ。ワシだって辛いのじゃぞ・・・・・」

ここでも相変わらずの自分とヒデさんの対応ですか・・・・・ｏｒｚ　仕方ありませんし二人で泣く泣く、用意された部屋に向かうことにしました。

☆

明久Ｓｉｄｅ

「さて、行くか」

部屋に入って待つこと数分。雄二が突然立ち上がった。なるほど・・・・・アレだね？

「フッ・・・・・・了解、覗きだね？」

「・・・・・・・・・・・任せておけ」

「ったくお前らは・・・・・・違うぞバカども、俺が行こうと言っているのは翔子の部屋だ」

「え？何でそんなことを？」

「決まっている。さっきの話にあった模擬試験の問題を盗み出すためだ」

相変わらず卑劣な男だ。本当に霧島さんはこいつのどこが良いのやら？

「別に僕らは問題を盗む必要なんてないんだけど」

「（こくり）・・・・・・・・・・・それより、覗きが大事」

雄二は霧島さんと一緒に寝るのが嫌みたいだけど（なんて贅沢なヤツだろう）寧ろ僕やムッツリーニにしてみれば望ましい事態だ。カンニングの必要性は皆無だ。

「本当にそう思うか？」

雄二が得意のもったいぶった口調で確認してくる。その口調はムカつくが、何かあったっけ？

「何が言いたいのさ」

「いいか明久、よく考えてみろ。お前の家に今帰ってきている姉貴は、何を禁止していた？」

「えっと、？『ゲームは一日三十分』、？『不純異性交遊の全面禁止』・・・・・ってヤバイっ！！忘れてたっ！？」

うげっ！そうだった！？折角造が姉さんを説得してくれたのに、もし一緒に寝ることになったら即死ものだ！僕の一人暮らしも、生命さえも。

「あ。でも、バレなきゃ、」

「安心しろ。協力しなければ俺がバラす」

「こんの外道っ！鬼っ！！悪魔っ！！！」

それくらい最初からわかってたけどねっ！？

「それにムッツリーニ。お前も危険だぞ」

「・・・・・・・・・・・どうして？」

「出血多量で死ぬ。確実に」

「・・・・・・・・・・・・（フッ）この俺が、死を恐れるとでも？」

なんだ！？無駄にカッコいいぞ、ムッツリーニ！

「だが、予想されるテストの順位を考えろ。上位の人間から相手を選んでいくとなると」
「うーん、予想される順位としては今のみんなの成績だと、？霧島さん、？姫路さんｏｒ造、？木下さん、？工藤さん・・・・・・って感じかな？」
「言っておくが復習テストは英語中心だぞ？」
「うん。造が最下位ということは確定だね」

どこか遠くで、造が泣いているような光景（ビジョン）が見えた気がするけど気のせいだろう。

「恐らく翔子は俺（と造もか？）、姫路が明久と島田、木下姉は造と秀吉。そう来れば、」
「どうして姫路さんが僕を選ぶことになっているのか知らないけど、工藤さんはムッツリーニを選ぶ・・・・・のかな？」
「・・・・・・・・・・・・まさか」
「さっきの言い争いもある。ムッツリーニを失血死させて、保体の王者を奪うつもりじゃないか？」
「・・・・・・・・・・・・っ！つくづく、卑怯な・・・・・・！」

うーん。よくわからないけど、ムッツリーニと工藤さんの間にはおかしなライバル関係があるみたいだ。

「・・・・・・・・・・・あんなスパッツごときに、殺されるわけには・・・・・・っ！」

死ぬことじゃなくてスパッツで死ぬことが嫌なだけらしい。コイツ

は何かスパッツにトラウマでもあるのだろうか？

「というわけだ。明久にムッツリーニ。協力してくれるな？」

「わかったよ。協力するよ」

「・・・・・・・・・・やむを得ない」

「まぁ本来なら造たちも連れて行きたいが、しゃあないな・・・・・・」

確かに造や秀吉なら絶対に雄二よりも上手くやってくれそうだけど、多分あの二人は真っ先に僕らを止めようとするだろうからね。これは命が懸っているんだ。霧島さんや女子たちには悪いけど、ここは雄二に協力せざるを得ないね。

「よし。そうと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するに、テスト問題はアイツの部屋にある。そこに忍び込むぞ」

「「了解」」

何の因果か、僕らは協力して霧島さんの部屋に侵入することになった。

～そのほんの数分後～

『ヤッホーです♪アキさんたち、遊びに・・・・・・あれ？』

『む？何じゃ、あやつらおらぬのか・・・・・・？』

『うーむ、ではお風呂でしょうかね？困りましたね、お風呂場の場所がわかりませんよね？』

『そうじゃの・・・・・仕方ないのじゃ、少し話でもしながらあやつらが帰るのを待つかの？』
『ハイです♪ヒデさんがいてくれて本当に助かります♪』
『ふふふ♪ワシもお主がおってくれて嬉しいぞい♪』

67時間目　楽しい夕食と霧島さんの罠～掌の上のゆーさん～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

本来なら最後の所は、造も霧島さんの部屋に潜入させる予定でしたが、性格的に真っ先に明久たちを止めそうだったので、今回は仕方なく外しました。ちなみに下書きの時点では……

☆

「よし。んじゃ造、お前も来てくれ」

「・・・・・・はい？」

あれ？なして自分もですか？

「正直に言うと、こいつらだけじゃ心もとないからな。協力してくれなければ、日高先生や玲さんにあることないこと吹き込む」

「それ『協力』じゃなくて『脅迫』では！？」

「どの道、お前も木下姉や翔子に捕まりたくはないだろう？」

ぐぅ・・・・・た、確かにそうですがね・・・・・・？

☆

こんな感じだったんですがね？ま、雄二は造に世話になりっぱなしなのにこの対応じゃ流石にダメかなと思いまして没にしました。で

もこっちの方が良かったかな……？まっ、いいや。

ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

６８時間目　潜入捜査開始！～霧島さんの秘密の部屋～（前書き）

どうも糖分摂取魔です！

今日友人に録画して貰ってたバカとテストと召喚獣にっ！を見させてもらいました♪映像になればまた、色々面白みがありますよね♪

それはともかく６８時間目ですよ～♪んじゃ行きましょか！

68時間目　潜入捜査開始！～霧島さんの秘密の部屋～

明久Ｓｉｄｅ

『霧島さん。お風呂はどんな感じなんですか？』
『・・・・・大浴場と露天風呂がある』
『す、すごいわね。旅館みたい』
『ホントに凄いわね♪』
『楽しみですね』
『ボクも楽しみだよ。温泉も姫ちゃんのコレを直に見るのも、ね』
『きゃっ！ど、どこを触ってるんですか工藤さんっ！』
『ホント大きいよね～♪何が入ってるんだろ？』
『・・・・・羨ましい』
『やっ・・・・・！き、霧島さんまで・・・・・・・！』
『大きすぎて不公平よね・・・・・・』
『やっぱり全て燃焼させるべきかしらね・・・・・・』
『注射器で吸い取る事とか出来ないかしら・・・・・・？』
『そうね、折角だし試してみるべきかしらね・・・・・・』
『お、お二人とも！？プールの時もでしたが、顔がとっても怖いですよ！？』

「「・・・・・・・・・・」」

魅惑の会話を繰り広げ、姫路さんたちは着替えを持ってお風呂場と思しき方へ歩いて行く。・・・・・さて、

「あのさ、雄二」
「・・・・・お前が何を言いたいのか予想はつくが、なんだ」
「僕、もう何もかもかなぐり捨てて姫路さんたちについて行きたいんだけど」
「・・・・・・・・・・・・・同意」
男ならここは黙って行くしかないだろう。

「お前ら本当にバカだな。・・・・・そうだな、『強化合宿・造の最終兵器・Ｆクラス男子の末路』・・・・・これから連想されるものと言えば？」

「「ぎゃあああああああああああああああああああ！？」」

いかん、マッチョなボディーガード達が笑顔で『ウェルカム』している姿を想像してしまった。実際に見ていないのになんて破壊力だっ！？

「覗きなんて、良いこと一つもないね・・・・・・冷静になって考えたら、姫路さんや美波に悪いし・・・・・」
「・・・・・・・・・・犯罪行為、良くない」
「分かってもらえて何よりだ。あまりグズグズしていても良くないからな。とっとと中に入るぞ」

確かに。女の子のお風呂は長いと言うけど個人差はあるだろうし。
そして中に入ろうとすると・・・・・

「あれ？開かないね？」

雄二が扉のノブを掴んで捻ったけど、扉は開かれることなくガチャガチャという無機質な音を返してくるだけだった。

「鍵かけてんのか？アイツが大事にしまっておくものなんて見当もつかんが・・・・・まぁ良い。ムッツリーニ、いけるか？」

「・・・・・・・・・・・・三十秒くれ」

何やら見慣れない道具を取り出して鍵穴に張り付くこと三十秒。見事にムッツリーニは解錠に成功し霧島さんの部屋のドアを開けた。

相変わらずの恐ろしい手腕だね。

そしてとりあえず素早く中に入ってみたけど・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・立派」

「ひ、広いね・・・・・・・」

愕然としたよ。この部屋の広さ、二、三十畳じゃきかないんじゃ・・・・・

「ちぃ、相変わらず無駄に広いな。手分けするぞ。それぞれバラバラに当たろう。模擬試験の問題のようなものがあったら全て封を開けるんだ。それだけで言いがかりをつけられるからな」

「わかった。それなら僕は向こうの棚を」

「・・・・・・・・・・・・入り口から調べてみる」

「よし、じゃあ俺は机のあたりか」

三方に散って家探しを始める僕ら。さて、棚には・・・・・・？

「えーっと、なになに・・・・・？『良い女になるための１００の条件』、『意中の彼をその気にさせる方法』、『解説・男の心理』、『解説・年頃の娘の心理』、『浮気のお仕置きベスト１００選！』に『黒魔術入門』・・・・・・」

最後の『黒魔術入門』だけが異様に気になった。雄二はどうでもいいとして、造の為にも霧島さんには是非今度から白魔術を覚えて貰うように頼んでみよう。

本棚には置いてないのかな？雄二やムッツリーニのところかな？気になって入り口辺りを見る。すると、

「・・・・・・・・・・・っ！（ブバァッ）」

「ムッツリーニ！？どうしたの！？」

突然、ムッツリーニの顔面に血の花が咲くという、なんとも度し難い光景が飛び込んできた。

「しっかりして！一体何があったの！？」

「・・・・・・・・・・ブービー・・・・・・トラップ・・・・・か・・・・・・」

血の海に沈むムッツリーニ。その視線の先にあるのは・・・・・・

綺麗にたたまれた女物の下着だった。

「・・・・・・・・・・・・・気を、つけろ・・・・・・明久・・・・・・工藤愛子は・・・・・・・俺達を、皆殺しに・・・・・・」

「ああ、いや。それで死ぬのはきっとムッツリーニだけなんだけどさ・・・・・・・」

てかアレ工藤さんのか。まあ、確かにムッツリーニまでとはいかなくても、もしこれが姫路さんのや美波のだったｒ・・・・・・・・・・・・って何を考えている僕！？

やれやれ・・・・・・ムッツリーニにちょっと当てられたかな？こんなことしている暇はないのに。

「あ、アレは・・・・・・・っ！」

「雄二、問題を見つけたの？」

「く・・・・・・・っ！強化ガラスか！？何か、何か壊すための道具は・・・・・・・！」

目を向けると、雄二が壁に埋め込まれたガラスの塊にへばりついていた・・・・・・コイツは、一体何をやっているのやら・・・・・・？

「何やってるのさ雄二。問題は見つかったの？」

「明久！ちょうどいいところに来てくれた！コレを取り出すのに協力してくれ！」

そう言って雄二が示したのは、分厚いガラスでコーティングされている婚姻届。

「見るからに無理っぽいよ。それより問題を捜さないと」

「バカを言うな！俺がどれだけコレを捜していたと・・・・・・！翔子のヤツ、弁護士に預けただなんて嘘をつきやがって・・・・・・！これが隠してあるから鍵なんてかけていやがったのか・・・・・・！」

もはや雄二（このバカ）は問題を捜すという目的を完璧に見失っている。注意するどころか、下手なことを言えば理不尽に切れられそうだ。いつものことだけどね？

「やれやれ。二人とも使い物ならなくなったね。本当に二人ともバカなんだから。僕が頑張るしかないかな」

問題を捜して辺りを見回すと・・・・・・ん？テーブルの上に何かある。アレって姫路さんのよく着けてるウサギの髪留め・・・・・・だね。

「そう言えば姫路さんって結構可愛い趣味をしてるよね・・・・・・」

まあ、美波も美波でぬいぐるみ好きってことが美波の家に行ってわかったけどね。ふと、何となくだけどその髪飾りを手にとって眺める。

「吉井君、何を見てるのかな?」
「うわぁっ!」
突如背後から声が!だだだ誰だっ!?
「いけない人だね、吉井君。女の子の部屋に忍び込むなんて」
片目を瞑って楽しげに笑うその人は、
「く、工藤さん!?あれ!?お風呂は!?」
「下着、出したまま持って行くの忘れちゃったから取りに来たんだよ」
ムッツリーニの死体の前にある下着を指差す工藤さん。し、しまった!?よくよく考えれば、お風呂に行ってここに下着があるって事は忘れもの以外の何物でもないじゃないか!?
「マズい!雄二、ここは撤退しよう!これみんなが戻ってきたら色々とマズイことになる!」
「く・・・・・っ!こいつを目の前にして退くしかないとは・・・・・!」
僕の掛け声で我に帰った雄二は倒れているムッツリーニを抱えて部屋を脱出した。

「また後でね～三人とも♪」

工藤さんは特に怒った様子もなく、走り去る僕らに手を振っていたけど・・・・・・

「うぅ・・・・・・作戦失敗だよ・・・・・・・どうすんのさ雄二！」

例え工藤さんが許してくれても、テスト問題は結局見つからずじまい。このままじゃ・・・・・・・

「どうするもこうするも、一度見つかった以上何もできないだろ」

「ぐぅ、困った・・・・・・。ムッツリーニはこのまま寝かせておけば何とかなるかもしれないけど、僕たちは」

「テストで勝つしかなくなったな」

「だよね・・・・・・・」

くっ、本当にどうしようか・・・・・・

「あっ！ここにいたんですか、皆さん？」

「お主ら探したぞい？・・・・・・なんじゃ？お主ら疲労困憊じゃが何かあったのか？」

（ビクッ！？）や、ヤバイ、他の女子！？・・・・・・・ってこの声は、

「造に秀吉か・・・・・・よ、よかった」

「翔子たちかと思ったぞ・・・・・・」

「「？？？だからどうしたんですか（どうしたのじゃ）？」」

「・・・・・・・・・・・・（ドクドク）」

そうだね、ここはやっぱり造たちにも相談しておこう。ついでにムッツリーニの止血もしないと。

造Ｓｉｄｅ

「・・・・・・テストの、細工ですか・・・・・・」

「・・・・・・お主らは全く・・・・・・」

流石アキさんたちですね。何をしてたのかと思えば・・・・・・相変わらず、行動力があると言いますか常識に捕らわれないと言いますか・・・・・・？

それにしても、こーさんが（いつものように）瀕死の状態なんですが何があったんでしょうね？・・・・・・まあ最近の行動から大体予想できそうなのですがね？

「それで？・・・・・・明久の言うように、ムッツリーニはこのまま寝かせておけばなんとかなるじゃろうがお主らはどうするつもりじゃ？」

「ホントどうしよう二人とも。やっぱりもう一度隙を見て部屋に侵入を・・・・・・」
「・・・・・・いや、そこでどうしてそういう発想になるのじゃ？」
「・・・・・・見つかったのが工藤さんだったから良かったものの、本来なら犯罪レベルですよ？」
まあ、皆さんなら笑って済ませそうなあたり凄いのですがね。・・・・・色々と。

「こうなりゃ、恥を忍んで翔子に科目変更して貰って・・・・・・現代国語中心のテストで勝負するっきゃねえな」
「そうなると造と雄二が霧島さんに勝たなきゃならないわけ・・・・・か」
「・・・・・絶望しか見えねえな？造っ！恐らくお前に勝敗のカギはかかっている！」
「・・・・・その前に、科目変更出来るんですかね？」
例え出来ても、霧島さんと勝負ですか・・・・・うーん、自信ありませんね？

「まあ、その辺は風呂にでも入ってゆっくり考えようかの。明久よ、お主らもまだ入っておらぬのじゃろ？」
「そうですよ皆さん。と言いますか、自分らも入りたくて待ってましたし」
「そうだね。そうしようか」
「はぁ・・・・・俺は風呂どころじゃないんだがな・・・・・・」
生返事のゆーさん。どうやら話を聞く分に、霧島さんの部屋でゆー

さんたちの偽造婚姻届（？）が発見された模様です。ゆーさんの関心は霧島さんの婚姻届に全て向いてしまったとのこと？

「まぁ今は打つ手がないんでしょ？だったらとりあえずお風呂に行こうよ雄二」
「そうだな。風呂で何か策でも考えるか」
「そうしなよ。それじゃ、造に秀吉はまた後でね」

ガシッ×2

「「待ちましょうっ（待ていっ）！！」」

うん、逃がしませんよ？どうして自分らを置いて行こうとするのですかね？

「へ？どうしたのさ造に秀吉？二人ともお風呂に行かないの？」
「はい。勿論お風呂を頂くつもりですよ？」
「そうじゃな。じゃが何故お主はワシらと別行動を取ろうとする？」
「え？だって、お風呂でしょ？」

「「はい（うむ）お風呂です（風呂じゃ）」」

命の洗濯とも呼ばれるお風呂ですね。それくらいはわかってますよ。

「だから、僕らは男湯で、二人は」

「「自分ら（ワシら）も男湯です（じゃ）！」」

「？時間をずらして入ろうってこと？それなら少し待ってるけど」

「違うのじゃ！ワシらもお主らと一緒に入るのじゃ！」

「そうですよ！別に何も問題ないでしょう！？」

「えぇぇっっ！そんなのダメだよ！？問題大アリだよっ！？」

そう来るんじゃないかと思ってましたよ！！もう我慢なりませんっ！！

「何がダメなのじゃ！今日という今日こそは、ワシらをきちんと男として見てもらうからの！」

「ヒデさんの言う通りですよ！プールや合宿の時の雪辱は晴らします！男同士の裸の付き合いです！」

「は、裸・・・・・・」

「「顔を赤らめないでください（赤らめるでないっ）！　とにかく、アキさん（お主）がなんと言おうとも自分ら（ワシら）は男湯に入りますからね（入るからの）！」」

最近の扱いには、流石に我慢なりませんっ！ここで絶対にアキさんたちに自分らが男であることをハッキリさせますっ！！

「う、うーん・・・・・そこまで二人が言うなら・・・・・・」

「「ダ、ダメえええええええええええええええええええ！！」」

「「「っ!?な、何（何じゃ）（何です）!?」」」

アキさんを説得しようとすると・・・・・何処からともなく現れた姫路さんと島田さんが、アキさんの両腕をがっちりと捕まえます。

「ふ、二人とも!?どうしたの?」

「どうしたもこうしたもありません!明久君、ダメですっ!」

「そうよアキ!月野と木下と入ろうとするなんて、ダメよ!」

何でですかっ!?自分ら男同士ですよ!?

「いや、落ち着こう二人とも。冷静になって、」

「十分落ち着いています!明久君は私たちとお風呂に入るんですよねっ!?」

「ウチも十分冷静よ!お風呂でアキの背中流せばいいのよねっ!?」

そうですね。貴女たちが落ち着いているなら、今の自分はすでに悟りを開けそうです。

「そ、それじゃ行きましょうアキ!ここのお風呂気にいるハズよ!」

「そ、そうですよ!とっても良いお風呂ですからっ!」

「うん、僕が言いたいのはそう言うことじゃなくて・・・・・って!どうして連れて行こうとするの!?冗談だよね!?いや、ホントに落ち着いて・・・・・」

あの?あっという間に、アキさんが捕獲されたのですが・・・・・?

「・・・・・・雄二、だったら私たちも一緒に」
「うぉあ！？しょ、翔子！？お前いつの間に戻ってきてたんだ！？」
「・・・・・・一緒に」
「ま、待て！もし入ったらシャレにならん！？お、落ち着けっ！！」
気がつけば、犠牲がまた一人。ゆーさんも行っちゃいましたね・・・・・・
「ムッツリーニ君。起きて起きて♪」
「・・・・・・・・・・・・・う・・・・・・・うぅ・・・・・・・」
「えいっ（チラッ）」
「ぐぼぁっ！！（ブババッ）」
更にもう一人。工藤さん、こーさんで遊んでませんか？・・・・・・
そして最後に、
「ふ、ふふふ♪二人とも～？アタシと背中流しをしましょうね～♪」
「ひ、ヒデさん！ここは自分らだけで入りましょうか！」
「う、うむ。そうじゃの！早く入りたいからの！」
「逃がさないわよ？」
とりあえず、絶叫と共にヒデさん＆自分ｖｓ優姉さんの鬼ごっこスタート♪あはは♪どうしてでしょうね。先生たちに追われる時並みに怖いですよっ！？
・・・・・・どうでもいいですが、霧島さんの家が広いうえ、郊外

に合って助かりましたね。これで隣家がすぐ近くにあったなら、きっと自分らの悲鳴を聞きつけた警察が踏み込んできたでしょうから。

その後、何とか優姉さんを撒きお風呂に入ることになりました。ですが・・・・・・

「うぅ・・・・・・結局自分らだけのお風呂ですね」
「ホントじゃの・・・・・・まあ、姉上に突入されるよりましかの？」
「ですかね・・・・・・いいですっ！ここは自分らだけでも楽しんでお風呂に入りましょうか♪」
「う、うむ・・・・・・そうじゃ、の／／／／／／（よ、よくよく考えればこれは造と二人だけの風呂かの！？）」
「んにゅ？ヒデさん？どうかしましたか？大丈夫ですか？」
「な、何でもないのじゃ！ホレ早く入るぞい！」
「ええ♪ゆっくり浸かりましょうね～♪」

いいですもん！ヒデさんと楽しくお風呂に入りますもん！温かくて眠くなりそうですが、お風呂や温泉は良いものですよね～♪ホントに気持ち・・・・・・いい、です・・・・・・ね・・・・・・

「Ｚｚｚ・・・・・・」
「こ、これ！本当に寝るヤツがおるか！起きよ造よ！」
「ふみゃ・・・・・・」
「起きんかっ！そ、それと、とりあえず離れるのじゃ造！／／／／

／」

・・・・・本当にちょっとだけ寝てたのはナイショ♪寝ぼけてヒデさんに寄り掛かってたのもナイショです？

６８時間目　潜入捜査開始！～霧島さんの秘密の部屋～（後書き）

ありがとうございました！６８時間目、いかがだったでしょうか？

どうしてウチの子たちはこうなるのやら（汗）最早、造は当然の如く他の男子メンバーにも男らしさが見られないね☆いや、ある意味ムッツリーニは男らしいのでしょうか？

それはそうと、今さらですが造の成績って点数で出した方がいいですかね？あんまり需要ないのかな？正直どっちでもいいのですが、必要ならこの章が終わって出してみようかなと思います。……ま、大した意味はないんですがね？

読んでいただきありがとうございました！

６９時間目　お泊まり会の夜～アキさんたちの優しい関係～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。いつも本当にありがとうです♪

今回霧島さん家のお泊り会終了です。長かったですよね（汗）てか期末編自体が長いですからね……これでも削っているのに。

とりあえず今回も原作（と言うよりキャラが）崩壊してますが、気にせず行きます６９時間目！よろしくです！

69時間目　お泊まり会の夜～アキさんたちの優しい関係～

結局、お風呂のいざこざ関係のお陰（？）でテストは中止となりました。とりあえずまた勉強会が再開されてから数時間、日付も変わりそろそろ就寝時間ですね。

何だかんだで自分らの部屋割をどうするのかで、またもめました・・・・とりあえず、強化合宿では自分らが同じ部屋だったからという理由で何とかなりましたが、

「うぅ・・・・・・木下君も月野君も羨ましいです」
「ね、ねえ二人とも？ウチらと代わらない？」

「「断固としてお断りです（じゃ）！！」」

・・・・・・強化合宿と同じやり取りが行われたことは、最早言うまでもないですね。ただ今回は、

「あら、アタシたちは大歓迎よ♪」
「・・・・・・娘と一緒に寝る、これも私の夢」
「あはは♪って言われてるけど、どうするの二人とも～？」

更に追加攻撃が来ましたがね・・・・・・それはともかく（やっと）就寝タイムです！

ＡＭ０：３０　女子Ｓｉｄｅ

『あれ？私の髪留め、どこにいったんでしょう？ここに置いておいたはずなのに』
『え？ひょっとしてなくしちゃったの？』
『そうかもしれません』
『・・・・・捜すの、手伝う？』
『アタシも手伝うわよ』
『ボクも～』
『あ、いえ。また明日の朝にお布団を片付ける時にでも捜すから大丈夫です』
『・・・・・・わかった』
『そう言えば、瑞希っていつもあの髪留めをしてるわよね』
『・・・・・思い出の品だとか？』
『んっふっふ～。ボクの予想だと、好きな人からの贈り物って感じなんだケド？』
『あら♪そうなの？』
『あっ、いいえ。あれ自体は自分で買ってきた普通の髪留めです』
『あらら・・・・・予想がハズレちゃったね？』
『確かに、思い入れはありますけどね』
『え？なになに？面白そう』
『残念ながら、それはヒミツ、です。それより、私は工藤さんのお話が気になります』
『え？ボク？』
『そうね。ウチも気になるわ』
『ふふっ。二人とも、そんなにボクのＨな話が聞きたいのかな？』
『違うわ。そっちじゃなくて』
『土屋君との関係、の方です』
『・・・・・・・・・・ふえっ！？』

『・・・・・それは私も気になる』
『そう言えば、いつもはぐらかされてばかりだったわね?今日こそは聞かせて貰うわよ?』
『な、何を言ってるのさ四人ともっ。ボクとムッツリーニ君がどうこうだなんて、そんなことあるわけないじゃないっ』
『そうやって否定するところが怪しいですね』
『・・・・・いつもの愛子らしくない』
『そうね、いつもなら笑って受け流すもの♪』
『あれー♪何か隠してるんじゃないのー?』
『ち、違うってば!ボクもムッツリーニ君もそんな気は全然ないよっ』
『それはどうかしらね?意外と男子部屋でも、土屋が似たようなことを言ってるかもしれないわよ?』
『・・・・・お泊まり会の定番の会話』
『そうですね。きっと向こうの部屋でもこんな話をしているんでしょうね』
『ほらほら、向こうできっと土屋も尋問されているだろうし♪』
『そうね♪さぁ愛子、覚悟を決めなさいな♪』
『話しちゃいましょうよ。ね?』
『だから、あんな頭でっかち、ボクは全く興味がないって言ってるのに!そ、そう言う優子はどうなのさ!?』
『・・・・・ん?アタシがどうかしたのかしら?』
『月野君だよ!優子は月野君のこと、どう思っているの!』
『愛しているわよ?造くんも秀吉も』
『・・・・・・・・・・・・聞いたボクが馬鹿だったね』
『・・・・・ちなみに私は、』
『『『いえ(いや)、霧島さん(代表)は言わなくてもいいです(いいわ)(いいよ)。知らない人はいないので(いないわ)(いないし)』』』

『・・・・・・残念』

同時刻　男子Ｓｉｄｅ

「坂本雄二から始まるっ」（ゆーさんのコール）

「「「「イェーッ！」」」」（アキさんとヒデさんとこーさんと自分の合いの手）

「古今東西っ」

「「「「イェーッ！」」」」

「一部生徒の間で噂になっている明久の恋人の名前っ」

・・・・・・はい？

パンパン（手拍子）→ゆーさんの番

「【久保利光】！」

「ダウト！それダウト！久保君は男だから！」

「・・・・・ところでこれどう言うゲーム何ですか？」（↑ノリで参加しただけ）

パンパン（手拍子）→こーさんの番

「・・・・・・・・・・・・・【坂本雄二】」

「嫌だぁっ！それはなんとなく知っていたけど改めて言われると凄く嫌だぁっ！」

「俺だって嫌だボケ！」

「あの・・・・・・・？」

パンパン（手拍子）→ヒデさんの番

「え、えっとえっと・・・・・・ワ、ワシじゃ！」

「・・・・・・・・・・・・」

「待てぃ明久よ！？そこで黙り込んで頬を染めるでない！？」

「？？？」

パンパン（手拍子）→自分の番

「（よくルールがわかりませんが、ヒデさんの真似でいいのかな？）自分です」

「・・・・・・・・・・・・」

「アキさん？どうしてヒデさんの時と全く同じ反応何ですか？」

「そうじゃぞ！明久、お主ワシらをどんな風に見ておるのじゃ！？と言うより造をそんな目で見るでないっ！」

パンパン（手拍子）→アキさんの番

「ひ、【姫路瑞希】と【島田美波】！」

「「「罰ゲーム決定っ！」」」

「どうして!?」

「・・・・・・本当にどう言うゲーム何ですか?」

ルールがいまいちわかりませんね?

「さぁ明久。くじを引くのじゃ」

「うぅ・・・・・・なんだか納得いかない・・・・・・」

「安心しろ。お前と造以外はきちんと納得している」

やっぱりわかりません。それはそうとアキさんは渋々といった感じで、ゆーさんが持っている袋の中に手を入れました。さて、どんな罰ゲームを引くんでしょうかね?

「『女子部屋に行って姫路さんの髪留めを戻してくる』って、コレは僕の書いた罰じゃないか」

髪留めですか?・・・・・・ああ、さっき霧島さんの部屋にアキさんたちが侵入した時に誤って持ってきてしまったそうですね。

「なんだ明久。お前は随分とヌルい罰ゲームを書いたもんだな」
「え？そう？でも、女子部屋に侵入だよ？なら皆はどんな罰ゲームを書いたのさ？」
確かに気になりますね。ちょっぴり面白そうですし？

「俺は『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だな。当然、盗ってこれるまで何度でもトライしてもらう」
「ワシは『本気女装写真集の撮影』じゃな。お主らワシらの苦しみを皆も味わうべきじゃ」
「・・・・・・・・・・・『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めている写真はなかなか撮れない」
皆さん思い思いの罰ゲームの内容ですね。これ、自分が罰ゲームに当たらなくて良かったのでしょうか・・・・・？

「ん？そう言えば造はどんな罰ゲーム考えたの？」
「ああ、自分は『自分とヒデさんと一緒にお風呂に入る』ですよ」
ひょっとしてこの罰ゲームの中で一番軽い罰ゲームでしょうかね？

「つ、造！？お前なんて恐ろしい罰ゲームを考えたんだ！？」
「そうだよ造！？君はさっきのお風呂騒動をまた繰り返すつもりだったの！？そしてムッツリーニを殺す気なの！？」
「・・・・・・・・・・・・（ドクドクドク）」

・・・・・一番軽いと思ったのですが、どうしてこうなるんでしょうかね？

「そもそも男同士で何故にここまで騒がれなきゃいけないのでしょうか？」

「ホントじゃの・・・・・そ、それにしても造よ？それはお主、また一緒に風呂に入ってくれると言う意味かの・・・・・？」

「ええ。ヒデさんとお風呂とても楽しいので♪ヒデさんが良ければ是非♪」

「う、うむっ！ありがとうなのじゃ！」

まあ、今のところヒデさんとしか一緒にお風呂に入れてないですからね。本当なら皆さんでワイワイ楽しく入りたい所だったのですが・・・・・

「さて。それじゃ、あいつらが寝静まるまで適当にダベるか」

「そうじゃな。疲れておる様じゃし、小一時間もしたら眠るじゃろう」

「・・・・・・・・・・お題は？」

「んじゃまずは『今までの人生で一番恥ずかしかったこと』からいくか。トランプもあるし、・・・・・ハートが出たら俺、ダイヤが出たら秀吉、スペードが出たら造、クラブが出たらムッツリーニ、1の倍数が出たら明久って感じでどうだ？」

「待て、このバカ雄二！僕だけ明らかに条件が違うじゃないか！？てか、どう頑張っても僕は強制的に話さなきゃいけないの！？」

「フッ・・・・・成長したな、明久よ。まさかそのことに気がつくとは」

ゆーさんはやっぱりアキさん弄りの天性の才を持っているとしか思えませんね・・・・・・？

「ですが人数がちょっと中途半端ですし、ここは純粋にババ抜きか大富豪あたりで決めましょうよ」

「ま、それが妥当か。んじゃまずは大富豪でも始めるか」

うーん。それにしても言いだして何ですが、大富豪はあんまりやったことが無いんですよね。まあ楽しめればいいですかね？

～男子諸君ゲーム中～

「・・・・・どの道罰ゲームは明久だったな。そんじゃ明久、諦めて話せ」

ちなみに自分が大富豪ですか・・・・・・今回は来た手札が良すぎましたね。

「ちぃ・・・・・わかったよ。えっとね、アレは僕が中学一年生のころなんだけど」

「「「「ふむふむ」」」」

～しばらく大富豪＆罰ゲームが続く～

『さて。そろそろいい時間だぞ、明久』
『そうはいかないよ！僕は『人生で１６番目に恥ずかしかった話』までさせられてるのに、みんな話してないって不公平じゃないかっ！！』
『お前のヒキが悪すぎるからだろ』
『・・・・・・・・・・・・・驚異的な弱さ』
『ホントにみんなイカサマしてないよね！？』
『んなわけあるか。それにイカサマには一生縁のない造が１６連勝だろ？』
『・・・・・・・・・・・・・驚異的な強さ』
『ぐっ・・・・・・・・・ってあれ？造どうしたの？』
『お主ら、ちょっと静かにしておれ。造はもう眠りかけておる』
『・・・・・・あらら、ホントだ』
『・・・・・・・・・・・・シャッターチャンス』
『そういや日高先生から言われてたが、造は気がつけば寝ていることも多いらしいしな』
『まあ、造は風呂の中でも眠りかけておったしの』
『そんじゃ造を寝かせたら行くぞ、明久』
『ちぇっ・・・・・・わかったよ、って雄二も行くの？』
『ああ。俺は俺のやるべきことをな。ムッツリーニに道具も借りた』
『ならばワシらは先に眠っておくぞ？』
『・・・・・・・・・・・俺も』
『おう。んじゃ、行ってくるな』
『はぁ・・・・・・激しく不安だよ』

☆

「・・・・・・ふみゅ？」

あれ？・・・・・・真っ暗？ここ何処ですか？あれれ？自分確か、皆さんと大富豪してて・・・・・・？

「あっ、そっか・・・・・・眠っちゃってたんですかね？やれやれですね」

時刻はＡＭ１：４０くらいですか。多分、フッと寝てしまってたんでしょうね。まだ全然眠り足りません。お手洗いに行ってすぐまた寝ましょうかね？

とりあえず、眠っているヒデさんとこーさんを起こさないように気をつけて部屋から出ます。・・・・・・ん？そう言えばアキさんとゆーさんは？

「ああ、そう言えばアキさんは罰ゲームの執行でゆーさんは婚約届の回収に行くって言ってましたよね？」

・・・・・うーん、何かちょっぴり心配になってきました。お手洗いを済ませたら様子を見に行きましょうかね？

～造移動中～

そんなことを思いながら、霧島さんの部屋にやって来たんですが、

「・・・・・島田さん？どうしたんですか？」

「あら？月野じゃない？アンタこそどうしたのよ？」

何故か、部屋にいるハズの島田さんが女子部屋の扉の前で佇んでいました。

「えーっと、自分はその・・・・・・」

「ああ、なるほどね？大方アキたちのことが心配になって来てみたってとこね？」

あぅ・・・・・バレてますね。話しぶりから察するに、アキさんたちの潜入もバレていますか。

「すみません、ちょっと気になってしまったもので。島田さんはどうしてここに？」

「ふふっ♪借りを返しとこうかなって思ってね？・・・・・・ホラ、見てみなさい♪」

そう言って、島田さんがちょっとだけ女子部屋の扉を開けると・・・・・

「・・・・・アキさんと姫路さんですか？」
「うん。何かよくわからないけど、アキが瑞希の髪飾りを返しに来たからね。良い雰囲気だし邪魔しちゃ悪いかなって思って、こっそり抜け出してきたのよ」
なるほどです。島田さん、気を回してくださったんですか。この間の姫路さんの対応といい、本当にアキさんと姫路さんと島田さんの関係は良好みたいですね♪
「そうですか・・・・・どうやら自分が心配する必要はなかったですね♪では自分は見つからないように部屋に戻りますね。お休みなさいです、島田さん」
「うん、それじゃあね♪アキのこと心配してくれてありがとね」
そう言って、島田さんと分かれて部屋に戻ります。最近の姫路さんと島田さんは、本当に良い恋のライバルでもあり、本当に良い親友でもあるんですよね・・・・・どんな関係になっても、これからも三人仲良く在って欲しいですね♪
・・・・・あれ？それにしても、何か他に気になることがあったような・・・・・？いかん、寝惚けてて頭が回りませんね。何でしたっけ？
『しょ、翔子！？待て、落ち着け。俺はだな・・・・・』
『・・・・・雄二、来てくれて嬉しい。一緒に寝よう♪』
『ちょっとま・・・・・っ！？』

・・・・・・・・・・・・あ゛っ！？ゆ、ゆーさんのことすっかり忘れてましたっ！？

６９時間目　お泊まり会の夜～アキさんたちの優しい関係～（後書き）

ありがとうございました♪６９時間目、いかがでしたか？

美波のキャラが……やっぱり崩壊です（汗）この作品でいちばんキャラ崩壊しているのって優子さんと美波（貧乳コンビなんて言わないで）のような気がします……

友人によく『ツンのないツンデレなんて邪道だ！』ってよく言われてますが……うん、ゴメンよ友人。友人にコレばれたら怒られそうですね……

まあ、バレなきゃいいんですよね？えっと、そんな話はさておき、次回はいよいよ期末試験開始……って言いたいんですが、その前の明久と玲さんの仲違いがありますね。造をどうもっていくか、楽しみにしててください。

読んでいただきありがとうございました！

７０時間目　気持ちのすれ違い～不器用姉弟に愛の手を～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

いつものことですが、下書き書いているにもかかわらず更新した後にミスに気がつくことが多々あるんですよね（汗）中には気がつかなくて放置していたのも（泣）もし、誤字脱字あったら指摘して貰えると助かります♪

それじゃ、そろそろ行きましょね。７０時間目、どうぞ。

７０時間目　気持ちのすれ違い～不器用姉弟に愛の手を～

造Ｓｉｄｅ

霧島さんの家での勉強会を終えた翌日のお昼過ぎ、アキさんと二人でアキさんの家に向かいます。

「ハァ・・・・・ゴメンね造。姉さんとの約束に付き合って貰って。あんなの律儀に守らなくてもいいのに・・・・・」
「あはは♪大丈夫ですよ？ついでにテスト勉強のまとめもやればいいだけですし」

昨日玲さんにアキさんの学習状況と何か問題を起こしていないかを自分が報告することで、アキさんのお泊り勉強会を許して貰いましたからね。ま、学習面ではアキさんは本当に良く頑張ってましたから、問題ないと胸を張って言えますね♪

「そう言えば、今日は姉さんと一緒の夕食になるのか」
「ああ、確か今日はお仕事が午前中だけでしたっけ？」
「うん。・・・・・昨日はああ言っていたけど、やっぱり日本食でも作ってあげようかな・・・・・？」

アキさんが何かを考え込むように、ボソッと言ってきます。

「滅多に姉さんにも会えないし、あんな姉さんでもご馳走でも作っ

て喜んで貰いたいからな・・・・・」
「あら、それは素敵ですね♪へぇ?アキさん、何だかんだでやっぱり玲さんのことも大切にしていらっしゃるじゃないですか♪」
「い、いや違うんだよ!ここでご機嫌を取って何としても加点しておこうとねっ!?」
「ふふっ♪わかってますよ~」
「ホント違うからねっ!?そ、そうだ!造も食べてきなよ!日高先生のご飯には負けるだろうけどさ!?」

そんなに否定しなくても、アキさんが優しくてお姉さんのことを大事にしていることくらいわかってますよ~♪

そんな話をしつつ、アキさんとマンションに入ります。ちょっと荷物が多いですから一旦部屋に入れてから買い物に行くことにしました。

「ただいまー」
「お邪魔します」
「お帰りなさいアキくん。それとわざわざすみませんね造くん。いらっしゃい」

アキさんが扉を開けると玲さんが出迎えてくれました。ふむ、お仕事も予定通り進んだみたいですね。これならアキさんと夕食が食べられるでしょうかね♪

「ごめん、姉さん。この鞄、中に入れといてくれる?造は待っててね」
「あ、自分が入れておきますよ」

「・・・・・・？アキくんはまたどこかに出掛けるつもりなのですか？」

・・・・・・あれ？何でしょうか、玲さんが何か言いたげのようですが？

「うん。夕飯の買い物をしてくるよ。造、悪いけど僕が行っている間に姉さんに昨日の報告を・・・・・・」

「待ちなさい、アキくん」

アキさんが買い物に出かけようとした矢先に、玲さんがアキさんを止めました。あれれ？どうしたんでしょう？

「アキくん。今のあなたにそんな余裕はあるのですか？」

「ああ、いや、そんなに余裕はないけどさ、折角姉さんが帰ってきているんだし」

「それは本末転倒というものです」

・・・・・・なんか雲行きが怪しくなってきましたね。

「いいですか。何を勘違いしているか知りませんが、姉さんはあくまでもアキくんの生活や学習状況を確認しに来たのですよ？だというのに、あなたがその程度の事に関わってどうするのです。学習の成果が出ないのではなんの意味も無いではありませんか。もう一度と言いますが、今のアキくんは、料理を作っていられるのですか？」

「そ、それはそうだけど・・・・・・」

・・・・・何となく、言い方は悪いみたいですが玲さんに言いたいこともわかりました。勿論アキさんの気持ちだってわかっています。ですがどうしましょう、流石にこのアキさんと玲さんとの問題に首を突っ込むわけにもいかないですよね・・・・・・

「明日はテストだというのに料理なんてさせて、結果が出せなかった時に『あの時、夕食を作っている余裕なんてなかったのに』なんて言われても困ります。ここは・・・・・・」

「・・・・・っ！うるさいっ！姉さんのバカ！」

「あ、アキさん・・・・・・？」

アキさん、どうやらかなり頭にきている模様です。まあ、アキさんからしてみれば、あれだけ玲さんに喜んで貰いたかったみたいですのに踏み躙られたと思ってしまうのも無理はないかもですが・・・・・

「どうせ姉さんにとっては僕とのコミュニケーションなんかよりテストの方がよっぽど重要なんでしょ！わかったよ！お望み通り勉強してくるさ！絶対凄い点数を取って姉さんを向こうに帰らせてやる」

「あ、アキさん落ち着いて・・・・・・」

「・・・・・そうですか。勉強に全力を費やしてもらえるようで何よりです」

「ああそうさ！全力を費やすさ！だから絶対邪魔しないでよ！じゃあねっ！」

そう言い終わると、アキさんは自身の部屋に飛び込み、思いっきりドアを閉め切りました。・・・・・・これは、ちょっと厄介なことになりましたかね？

「・・・・・すみません、造くん。お見苦しい所を見せてしまって」
「・・・・・いいえ。自分のことなら大丈夫です。アキさんの気持ちも、玲さんの言いたいことも何となくですが、伝わりましたから」
玲さん、少し悲しそうな顔です。どうしましょう・・・・・この空気何とか出来ないものでしょうかね。
「・・・・・とりあえずこんな所で立たせるなんて申し訳ありませんし、上がってください。お茶くらいは私、淹れられますので」
「・・・・・そう、ですね。一杯頂きます」
と、玲さんに連れられてリビングに入ろうとすると、玲さんが玄関に置いてあったスーパーの袋を持とうとしています。
「あ、自分が持ちますよ。玲さんはアキさんの荷物を持って行って貰ってもいいですか？何処に持っていけばいいかわかりませんので・・・・・」
「何から何まですみません。頼んでもよろしいですか？」
そう言って、玲さんから袋を渡して貰います。・・・・・これは夕食のお買物でしたか。アサリやベーコンなどの食材が・・・・・あれ？アサリやベーコン？何か既視感（デジャビュ）が・・・・・？
それが何なのかハッキリしないまま、とりあえずキッチンに運びま

す。そう言えばこの既視感で思い出しましたが、この前皆さんがここに来た時は何故か玲さんの反応に強烈な違和感を感じましたね・・・・・・？何でしょう、何かモヤモヤする・・・・・・

「・・・・・・とりあえず、この食材冷蔵庫でいいですよね？」

と、保冷の為に冷蔵庫の扉を開けると、

・・・・・・あの時から玲さんに感じていた、違和感の正体に気がつきました。

そう言うことですか。これなら・・・・・・

玲さんがあの時多く食材を買ってきたことも、
アキさんの大好物のパエリアの材料だったわけも、
玲さんが何故か不機嫌だったことも、
アキさん曰く『いつもと違うレシピだった』ことも、
最近お仕事の帰りの後に『何か』している理由も、
今日アキさんに夕食を作らせなかったことも、

・・・・・・すべて納得できました。なるほどです。やれやれ、アキさんもですがこの姉弟は本当に不器用で、優しくて、意地っ張りなんですね♪

「造くん？どうしました？」

そこに荷物を置いた玲さんが、やってきました。

「・・・・・いいえ？玲さんがとても優しくて、とても不器用で、とてもアキさんのことを大切にしていることがわかっただけですよ？」

「・・・・・そうですか。すみません、今のアキくんには黙ってて貰えますか？あの子があんなに一生懸命頑張っているところに水を差すのは・・・・・」

ホント、何処までも優しい方ですね。アキさんも玲さんも♪やれやれ、この不器用な姉弟にちょっとくらいは手を貸しましょうかね？

「・・・・・ねえ、玲さん。少々お願いがあるんですが」

「・・・・・聞きましょう」

☆

明久Ｓｉｄｅ

「アキさん、入ってください♪」

「お、お邪魔します・・・・・」

・・・・・何故か僕はまた、造の家に来ている。造が突然『アキさん、自分の家で勉強しましょ♪』と言い出したかと思えば、造に何だかんだで流されて気がつくとまた造の部屋に着いていた。

ちなみに日高先生や造のお母さんも、造が『アキさん今日泊まりです』と一言だけ言うと『おう、夕飯一人追加な』、『ゆっくりしていってね！』で済んでしまった。相変わらずある意味凄い家だよね・・・・・・

「さて、テスト前日最後の追い込みですよ。まとめの問題をやってしまいましょう」

「あ、あのさ造・・・・・・」

姉さんに腹を立ててたし勢いで造の誘いに乗ってしまったけど、これ造に迷惑かかるよね・・・・・・？それに造は一体何を考えているんだろう？

「アキさん。今はテストのことだけ考えましょう。それ以外はその後で考えればいいんですよ」

「う、うん・・・・・そう、だね」

造はいつも通りニコニコ笑っている。でもこの笑顔の時が一番自分を押し通すからね。うぅ・・・・・造ってある意味とても強引なところがあるよね？こうと決めたら絶対に曲げないし。

「さて、では行きますよ？紀元前３３４年、アレクサンドロス大王が東方遠征開始します。紀元前３３３年、イッソスの戦でダレイオ

ス3世を破ると・・・・・・」

明日の狙いどころは世界史と言うことで、造も一番出そうなところをピックアップして問題を出してくる。・・・・・・そうだよね、造は明日、造にとって一番の鬼門の英語をほったらかして僕に手伝ってくれているんだ。僕も余計なことを考えずに、頑張って良い点を取るんだっ！姉さんを見返してやる！

そして、しばらく造のプチ講義が続き・・・・・・

「・・・・・・こんな感じですね。さて、良い時間ですし一旦寝ましょうね」

「えっ？・・・・・・確かに日付は変わったけどまだまだ・・・・・・」

「アキさん？貴方のことですから一夜漬けする気でしょう？ダメですよ、一夜漬けは効率悪いです。集中力が無くなりますし、それなら朝早く起きて勉強した方が良いです」

そう言って、勉強道具をしまい始める造。うーん、そう言うものなのかな・・・・・・？

「アキさん、心配しないでください。アキさんは一通り出来るようになりましたし、不安なら明日早めに起こします。それでいいでしょう？」

「・・・・・・そうかな？うん、わかった。造の言う通りにするよ」

泊めて貰っている身だし、造は姉さんと違って僕の為に言ってくれ

ている。ここは素直に造に従おう。

「良かったです。では布団を用意しますのでしばらく待ってて下さい」

造はそう言うと一旦、部屋から出て行った。・・・・・・ってあれ？布団ならここにあるのにどうしたんだろう？気になってちょっと部屋から出てみると、

『もしもし・・・・・・はい、はいです。大丈夫ですよ？いいえ、アキさんには言ってません。・・・・・・ええ、勿論です。はい・・・・・・』

・・・・・？造、こんな時間に電話かな？一瞬僕の名前を呼んだ気がしたけど気のせいだろうか？まあ、あんまり人の電話の内容を聞くのはよくないかな？僕は先に寝る準備でもしておこう。

しばらくすると、またニコニコ顔で造が戻ってきた。知り合いからの電話だったのかな？

「お待たせです。では早く寝ましょうか♪アキさんお休みです」

「あ、うん。お休み造」

そう言って、電気を消して瞼を閉じると意外に疲れていたのかすぐに眠気が襲ってきた。確かに造の言う通り、睡眠は取って正解だっ

たね。よしっ！テスト頑張ろう！

『・・・・・アキさん、テスト頑張りましょうね。貴方のお姉さんも応援してますよ♪』

完全に眠りに入る前に造が何か言ってたけど、最後までよく聞き取れなかった。

☆

造Ｓｉｄｅ

朝アキさんを起こした後、簡単に今日やるテストの各教科のポイントを押さえておきました。ご飯もしっかり食べて、日高先生に頼みアキさんと一緒に車で学園まで送ってもらい、誰もいない教室でテスト勉強の続きをやります。自分もアキさんも教科書を広げて最後の仕上げです。

「おはようございます、明久君」
「おはよ、アキ」
「あっ、姫路さん、美波。二人ともおはよう」
「明久君、今日は活き活きしてますね」
「へぇ？随分調子良さそうじゃない♪」
「うんっ！絶好調だよ！これならいけそうだよ。二人とも色々勉強

教えてくれてありがとうね！」

・・・・・うんうん。アキさん、今日は本当に調子が良いみたいです。ゆーさんたちも驚いてました。『アイツがここまでやれるとはな。正直驚きだ』、『あんなに真面目な明久は本当に珍しいのう』、『・・・・・・・・・・集中している』って。アキさん問題なさそうでなによりです♪

今日の科目は全部で六つです。現代国語・英語Ｒ・世界史・数学？・化学・保健体育というラインナップで、残りの科目は明日の二日目となっています。

今回アキさんは『世界史』と『数学』を集中的に姫路さんと島田さんに習ってましたし、ご自身もとても力を入れてましたのでこの二科目を何処まで取れるかが鍵ですかね？

「よしお前ら、席に着け。今日は期末試験の一日目だが・・・・・」

いつもの時間にやってきた西村先生が簡単な連絡事項を告げ、五分もせずに朝のＨＲが終了しました。恐らく先生のことですし、皆さんに復習の時間を与える為に早めに切り上げたんでしょうね。助かります、西村先生♪

一時間目の試験が始まるまではまだ時間があるので復習を続けることにしました。そしてしばらくして・・・・・

「はい、勉強道具をしまって下さい。　一時間目のテストを始めますよ」

一時間目の現代国語の時間になり、監督の先生がいらしたので勉強道具をしまいます。

「毎度のことですが、注意事項です。机の上には筆記用具以外は置かないこと。また、机に何かが書かれている場合はカンニングとみなされることがありますので、自分で書いた覚えがなくても確認するようにしてください。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、よほどのことがない限りは・・・・・・」

注意事項を聞きながら、前から回ってきた試験用紙を受け取り、裏面にしたまま後ろの席に回します。

さて、いよいよ期末試験の始まりですね！アキさん！頑張ってくださいね♪

70時間目　気持ちのすれ違い～不器用姉弟に愛の手を～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

長かったような、意外に短かったような気もしますが次回で一応期末試験編は終了になると思います。以前からちらちら言っていましたが、多分ちょこっと結末を変えたいと思います。

この編が終わったら肝試し編ですが……あんまり書けていない（1、2話程度しか書けてません）上に、最初から超展開な状況です（汗）皆さんの反応がえらい心配です……

と、とりあえずは次回！読んでいただきありがとうございました！

71時間目　一学期末試験終りっ♪～『最高のご馳走』って？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

今回で一学期末試験編終了ですね。ちょっと今回詰め込み過ぎたかもしれません（汗）ちょっぴり（？）長めです。

話としてはベタかもしれませんがとりあえず行きましょう71時間目ですっ！

71時間目　一学期末試験終りっ♪～『最高のご馳走』って?～

造Ｓｉｄｅ

一学期末試験　現代国語）

『四面楚歌』という言葉の正しい意味を次の選択肢の中から選びなさい。

?孤立して助けがないこと

?歌ばかり歌ってなにもしないこと

?楚という国の歌のように、四方に伝播しやすい物事を示す喩えのこと

?四面のＢＧＭが楚歌であること

・・・・・?、?はまだしも、?って一体・・・・・・?ある意味引っかけ問題なのでしょうか?間違いはどれか的な引っかけ問題と間違うみたいな?まあ、とりあえずサービス問題のようですね。

一学期末試験　英語Ｒ）

（　　）の“Ｉｔ”の意味する内容を日本語で書きなさい。

（Ｉｔ）ｗｏｎ'ｔ　ｔａｋｅ　ｙｏｕ　ｍｏｒｅ　ｔｈａｎ　ｔｅｎ　ｍｉｎｕｔｅｓ　ｔｏ　ｇｅｔ　ｔｏ　ｙｏｕｒ　ｈｏｍｅ.

※１　警告『それ』と書いた生徒は、問答無用で職員室への出頭を命じます。

※２　造くんが書いた場合は問答無用でコスプ・・・・・・補習と

なります。

“Ｉｔ”だから日本語訳は『それ』・・・・・ってわけじゃないですよね。ハハハッ♪わかってましたよ？問題はわかりませんが。ついでに※２の意味もさっぱりわかりませんが。どうしましょうかね、この問題・・・・・？一先ず別の問題から解いていきましょう。別に無回答安定なんて考えてませんよ？

そんな具合に問題を解いていき・・・・・ついにアキさんの一つの山場でもある、世界史のテストの時間になりました。

「よしお前ら、全員席につけ。試験を始めるぞ。筆記用具以外は全部しまうように」

監督の先生は西村先生のようですね。力強い声が聞こえます。・・・・・ん？アキさん今になって少々緊張してますね？本当に山場となる教科ですし、無理もありませんか。ふふっ、ちょっと緊張を解しておきましょうか。

「（アキさん。リラックス、リラックスです。大丈夫、アキさんなら出来ますよ♪）」
「（そそそ、そうかな・・・・・？）」
「（ええ、あれだけ頑張って来たじゃないですか。後はなるようにしかなりません）」
「（う、うん！頑張るよ！）」
「（はいです。名前の書き忘れとかないように名前は先に書いてお

くことをオススメします。見直しは終了十分前には必ずやっておくこと。後はアキさん次第ですよ♪）」

「月野、吉井。早く席につけ。始まるぞ」

ふむ、タイムアップですね。・・・・・ですが、ここからはアキさんの戦いです。自分は自分のテストを頑張りましょうかね。

「一枚ずつ取って後ろに回すように。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておくこと。　いいな？」

前の席の方から問題用紙と解答用紙が回ってきました。先生の仰った通りそれぞれ一枚ずつ取って紙の束を更に後ろの方に渡します。後はチャイムが鳴るのを待つだけですね。

キーンコーン・・・・・

「始めなさい」

勝負の時来たり、ですね。アキさん、信じてますよ♪

☆

キーンコーン・・・・・・・

そして・・・・・・試験終了のチャイムが鳴り響きます。

「よし。ペンを置け。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」

クラスの皆さんが大きく息を吐く音が響き、西村先生に言われた通り一番後ろに座っている方が解答用紙を回収していく様子が見えます。

『おい朝倉。往生際が悪いぞ。早く渡せよ』

『待ってくれ！ここだけ直してから』

『朝倉！チャイムは鳴ったぞ！諦めてペンを置け！』

チャイムが鳴ってから間違いに気がついたのか、朝倉くんが粘るも西村先生に怒られてます。やっぱり、見直しや問題の確認は重要ですよね。文月学園は常に実社会で通用する生徒の育成をスローガンにしているので、本番の時に通用しない言い訳は一切聞いてもらえません。だからこそ、姫路さんの振り分け試験の途中退場にも温情が与えられなかったのですし。

そうやって西村先生に怒られている生徒さんがちらほら見られる中、壇上に集められた解答用紙は一つにまとめられ、専用の袋に詰められて教室から姿を消しました。後は採点次第ですね。

さて・・・・・そんな中、真っ先に自分のところのやって来たア

キさん。アキさんの結果はどうでしょうか・・・・・・？

「つ、造！やったよ！今までで一番出来たっ！」
「あらあら♪アキさん、良かったじゃないですか」
「おう明久。それはつまらんな。折角お前が真っ青になって今後の対策を考える姿を笑ってやろうと思ってたのに」
「フッ・・・・・それは残念だったね！造に言われた通り見直しもしてるし、問題ないはずだよ！これで姉さんを追い出せるぞっ！」
「こらこら、アキさん？まだ三教科が終わっただけですよ？残りもちゃんと解きませんとね？」
「そうだね。でも、これならいけるよ。次は数学だね！」

アキさん、上手くいってよかったですね♪一先ずは安心です・・・・・これなら、もう隠さなくてもいいでしょうか、ね？

☆

明久Ｓｉｄｅ

一日目のテストも無事に終えて、僕は晴れ晴れとした気分で家に向かう。今回のテストは今まで以上に出来た。よしよし、これなら姉さんを見返せるぞ♪

「それもこれも造のおかげだよ！『見直ししとけ』って言われてな

かったら危ない問題もあったしさ？」
「いいえ、それはアキさんが頑張った証拠ですよ。よく頑張りましたねアキさん♪」
造と途中まで一緒に帰りながら今日の成果を話しながら歩く。造には姉さん絡みでお世話になったし、今度ちゃんとお礼しないとな・・・・・
「そうだ！ねえ造、今から何か外でご飯食べない？姉さんが迷惑かけた分も兼ねて奢るよ？」
我ながら名案だ。造甘いもの好きだし、何かそういうものが充実しているとこでもいいかな？
「あっ・・・・・すみませんです、今日は日高先生と母さんに言われて帰らないといけないので」
「あらら、そうなの？」
「はいです、折角誘ってくれたのにすみませんです」
まあ、家に事情じゃ仕方ないよね？今度奢ってあげようかな。
「・・・・・ねえ、アキさん。今日は寄り道せずに、帰ったらまず冷蔵庫を開けてみて貰えますか？」
「ふぇ？・・・・・どしたの、急に？」
冷蔵庫・・・・・？いや何でいきなりそんなことを？

「多分・・・・・多分ですけど、アキさんが欲しかった『答え』と『最高のご馳走』が眠っていると思いますよ？」
「？？？ゴメン造。言っていることがわかんないんだけど？」
たまに造って、僕らに謎かけみたいなことを言って来るよね？

「ふふふっ♪すぐにわかりますよ？では自分はこの辺で失礼します。アキさん、明日も頑張りましょうね～」
そう言って造は自分の家に向かって帰って行った。・・・・・？
さっぱりわからん。

「まっ、いいか。とりあえず姉さんに今日の報告だっ！」

～明久移動中～

「ただいまー・・・・・ってあれ？いないのかな？」
とりあえず造の言う通りに真っすぐ家に帰ってみたけど・・・・・
姉さんいないのか。ちぇっ、すぐに姉さんの鼻を明かしてやろうと思ったんだけどな。まあ姉さんが帰って来ての楽しみってとこかな？

「今日の夕食はどうしようかな・・・・・あっ、そう言えば造が

さっき変なこと言ってたよね？」

確か『冷蔵庫を開ければ答えがわかる』だっけ？やっぱり良くわからないけど、まあ行けば分かるかな・・・・・？そんなことを考えながらキッチンに踏み入って、僕はそこで一つのことに気がついた

「あれ・・・・・？換気扇が回ってる・・・・・消し忘れかな・・・・・？いや、流石にそれはないよね。いくら何でも三日以上もつけっぱなしだったら僕でも気がつくし・・・・・」

そこでようやくここ最近ちょくちょく感じていた小さな違和感が蘇ってきた。何だろう・・・・・？何がおかしいんだろ・・・・・？首を傾げつつ、とりあえず造が言ってたことを確かめる意味でも冷蔵庫の扉を開ける。

・・・・・そして初めて、僕は違和感の正体に気がついた。

「これって・・・・・・・！！」

そう、冷蔵庫の中には・・・・・・・・・・・・・・黒こげのパエリアが入っていた。

「は、はは・・・・・っ。何だ、そういう事か・・・・・」

そして姉さんが帰ってきてからの小さな違和感一つ一つ、全てが氷解していく。

どうしてあんなに沢山の材料があったのか。

・・・・・それは、調理に失敗した時の事を考えて多めに用意したからだ。

どうして日本食じゃなくてパエリアだったのか。

・・・・・それは、僕の好物だって事を覚えていてくれたからだ。

どうして僕の知っているパエリアの材料だったのか。

・・・・・姉さんは言っていたじゃないか『レシピを用意した』って。それはきっと・・・・・向こうで本格的なパエリアの作り方を知っている人に教わっていたからじゃないだろうか。

どうして最近帰りが遅かったのか。

・・・・・それは、どこかで料理の特訓をやってたからだ。姉さんが納得するまで、何度もやったんだろう。

どうして、昨日は夕飯を作ろうとしたのをやめさせたのか

・・・・・そんなの、決まっている・・・・・姉さんが、僕のために僕の好物を作ってくれるつもりだったからだ。

「言ってくれたらいいのになぁ・・・・・」

まったく、人にも自分にも厳しい人だ。色々僕のことを考えて、仕事や移動で疲れていたはずなのに、慣れない料理にまでに挑戦して・

・・・・それが上手にできなかったからって、それらの努力をおくびに出さないで。

本当は月曜日に夕飯に作ってくれるつもりだったのかもしれない。けど、僕が皆を連れて帰ったからそれができなかったんだろう。道理であの時、ちょっと不機嫌だったワケだ。

「なるほどね。普段僕に言い聞かせてる『結果の出ない努力に意味はない』って、あれは自分に言い聞かせていた部分もあったのか」

苦手だからこそ、その分努力して克服しよう。姉さんはまさにその通りのことをやっていたわけか。

「・・・・・・参ったな。姉さんに色々と酷いことを言っちゃったよね。・・・・・・さては造このこと知ってて昨日僕を泊めたり、今日意味深なことを言ってたな・・・・・・」

恐らく、造も昨日キッチンでコレを見たんだろう。そしてこれ以上僕が姉さんに酷いことを言わないようにフォローしてくれてたんだろう。多分だけど、夜の電話も姉さんを安心させる為にかけてたんだろうね。

「・・・・・・『最高のご馳走』・・・・・・か。造の言う通りかも、ね？」

料理自体は失敗作でも、不器用な姉さんが一生懸命僕に作ってくれた『最高のご馳走』だ。十二分に嬉しいよ・・・・・・

ガチャ！

「あら、アキくん。もう帰っていたのですね」
「あっ、姉さん。おかえり」

そんなことを考えていると、姉さんが帰ってきた。・・・・・・どうしよう、今無性に姉さんが帰ってきてくれて嬉しいや。

「ただいまです。アキくん、テストはどうでしたか？」
「うん、それは夕食を食べながら話すよ。・・・・・・ねえ、姉さん」
「何ですか、アキくん」

姉さんはこちらを見ずに、相変わらずつれない態度で返事をする。こういう態度だから、つい誤解してしまうんだ。昨日の言葉だって、僕の気遣いを無視したんじゃなくて姉さんなりに僕がテスト勉強を頑張れるように気遣ってくれてたんだよね・・・・・・

だからこんなにも不器用で、こんなにも優しい僕の姉さんに言う言葉は一つだ。

「あのね、姉さん。色々とありがとう。僕・・・・・・姉さんのこと、大好きだよ」
「にゃにを」

噛んだね。一先ず姉さん一呼吸。

「いきなり何を言い出すのですか」
「あはは。勿論、家族としての好き、だけどね」
「・・・・・さては今日のテスト、何かミスを犯しましたね？そんな事を言ってご機嫌をとっても駄目ですよ」
「違うって♪ねえ、姉さん。夕食だけどさ・・・・・・」

今日のテストが上手く行ったご褒美は、造の家や霧島さんの家で食べたものにも決して負けない最高のご馳走・・・・・・

「僕、姉さんのパエリア食べたいな」

姉さんの愛情たっぷりのパエリアを食べよう。

☆

造Ｓｉｄｅ

「ふふっ♪そうですか。良かったですよ、アキさんと玲さんが仲直り出来て」

今日はテストも終わりましたし、玲さんが来てから一日目にアキさんに預かっていたゲームや漫画を返すため、自分の家にアキさんと

向かっています。

「まったく・・・・・造もそう言うことは早めに言って欲しかったよ」

「あはは♪すみません、玲さんに口止めされてましたから。『アキくんの勉強の邪魔になりたくありません』・・・・・ってね？」

本当に玲さんは不器用な方でしたね。とても弟想いのいいお姉さんですが♪

「そう言えば、玲さんはもうアメリカに？」

「うん。帰ったみたいだよ。まあ、これに関しては僕も譲れないし」

「あら～？とか言って、意外とアキさん寂しかったりしませんかね～？」

「ちょっ！？縁起でもないこと言わないでよ！？誰があんな姉をっ！？」

ふふっ♪玲さんもアキさんも本当に不器用なんですから♪いえ、意地っ張りって言った方が良いですかね？・・・・・それにしても、

「ねえアキさん？玲さんで思い出したんですが、そう言えば玲さんちょっと前に妙なことを言ってたんですよ？『造くんにはこれからちゃんとお礼します♪』って」

「・・・・・ん？そう言えば僕にも言ってたね『アキくんが寂しがらなくていいようにしますからね♪』って」

「アキさんもですか？・・・・・どう言う意味だったんでしょうかね？」

「う～ん、例えば、近くに姉さんが住むとか・・・・・・？」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「い、嫌ですねアキさん!?そんな変なこと言わないでくださいよ!?」

「そ、そうだよね!?あ、あはは!ブラックジョークってやつだよ!?」

あはは・・・・・・縁起でもないですよねー?さて、そろそろ着きますね。

「それじゃ、入りましょうかね?・・・・・・ただいまです」

「お邪魔しまーす♪」

・・・・・・ガチャッ！

「「お帰りなさい、アキくん（アキっち）造くん（造）♪」」

・・・・・・バタンッ！

「「・・・・・・・・・・・・」」

最近やけにこういうことが多いですよね・・・・・・『今、何かとんでもないものが見えたような』的なシチュエーションが。これは

自分らが扉を開けたら終わりなパターンでしたよね？

・・・・・・ガチャッ！

「アキくん、造くん。どうして閉めるんですか？」
「そうだぜ？それに何だ？化け物見たような顔してよ？」

向こうから開けてきたっ！？あれ今回は新しい！？いや、そんなことより・・・・・・

「「なんで・・・・・・・・・・・何で姉さん（玲さん）がいるのさ（いるんですか）！？」」

いやいやいやいや！？玲さん、アメリカに帰ったんじゃ！？いえ、そもそも何故ウチにいるんですか！？

・・・・・ご丁寧にメイド服を着て！？

「ああ、アキくんに造くん。それはですね。姉さん今日からここでお世話になるんですよ」
「何で！？いや、姉さんアメリカに帰ったんじゃ！？」
「ちゃんと帰りましたよ？荷物を取りに。一旦帰って必要な物を持って来たんです」

何その言いまわし！？油断させておいてコレですか？

「それ以前に何故ウチに!?サクヤさん!?説明をっ!?」
「ん～?玲っちはな、アタシのあっちでの後輩みたいなもんなんよ?色々と教えてやったのさ」
「やっぱアンタか!?玲さんに変な日本の習慣を教えたのはっ!?主にメイド服とか、コスプレとかっ!?」
「変じゃねえだろ～?それにちゃんとパエリアの作り方も教えてやったんだぜ?」

そ、そう言えばあのパエリアのレシピ、サクヤさんのにそっくりでした・・・・・!?ひょっとして玲さん、ウチで料理の特訓を・・・・・!?い、いつの間に・・・・・・

「だ、だったらサクヤさん、何で玲さんのこと教えてくれなかったんですかっ!?」
「あ～、いやな?アキっちと玲っちが姉弟だなんて思わなくてな?ずっと玲っちのこと『玲っち』って呼んでて、苗字が『吉井』だって忘れててよ?気づいたのつい最近でさ」

こ、この人よくこういうことがあるから怖いんですよっ!?

「さて、造くん?これからよろしくお願いしますね。お礼はたっぷりします。それからアキくん?姉さん、アキくんが寂しくならないように一週間に七回はアキくんの家に泊まりますから安心してくださいね?」
「すみませんごめんなさい勘弁してください許して下さいどうかお帰り下さい・・・・・・」
「一週間に七回って、それ最早毎日泊まるってことだよね!?僕の

一人暮らしはどこ行ったの！？」
「いや～玲っちが造の知り合いで、アキっちの姉とはね～♪こりゃ楽しくなりそうだわさ♪」

「「さ、最悪だあああああああああああああああああああああ！？」」

七月の灼けるような日差しが降り注ぐ昼時。アキさんと共に叫んだ声は、入道雲がそびえ立つ青い空へと消えて行きました。

71時間目　一学期末試験終り～♪～『最高のご馳走』って？～（後書き）

ありがとうございました♪いかがでしたか？

……イイハナシナノカナー？相変わらずのオチですよね。途中で切っておけば『バカとのんきと召喚獣　完！』とかに出来たんでしょうか？それでも玲さんは日本に残しておきたかったですし（汗）

てか今回話の展開が早すぎたですね。いや、寧ろベタ過ぎ？でも大切な家族が作ってくれたご飯って、本当に最高のご馳走だと思うんです。

それはともかく、次回どうしましょうかね……以前から言ってますが、また変な方向に行ってますし……？まあ、更新して皆さんの反応を見て考えますね。もしこうした方がいいとか、これをやって欲しいとかありましたら、是非アドバイスしていただけると嬉しいです♪全て答えるのは難しいですが、出来る限り頑張ります！

読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくお願いします！

72時間目　夏と言えば！～補習に講義に肝試し？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です……暑いですね……

ちょうど書いている世界の時期が近いせいか、余計に暑く感じてしまうのは気のせいでしょうかね？皆さん熱中症とかに気をつけてくださいね……

とりあえず行きますかっ！新章肝試し編、スタートです！

72時間目　夏と言えば！～補習に講義に肝試し？～

「・・・・・学園長、コレは・・・・・・」
「そう非難がましい目で見ないでおくれ、西村先生。どうやら昔のデータが何の拍子か飛び出てきたみたいさね。全く、最近システムの調整がおかしいと思ったらコレかい」
「・・・・・・いえ、それは見ればわかりますよ」
「ハァ・・・・・・夏までに直るって言っておいて、夏に入った途端にコレとはね。西村先生、悪いが、」
「わかっています。月野を呼んできます」
「・・・・・・流石に手慣れているね。んじゃとっとと・・・・・・ん？」

ダダダダダダダダダッ！　ガチャッ！

「「ババァっ！コレは一体どういうことだ！？システムの異常か！？」」
「「学園長先生！大変なんですっ！！」」
「が、学園長！？一大事じゃ！説明して貰えぬかっ！？」
「・・・・・・・・・・・・（ボタボタ）」
「・・・・・何でアンタらは、こっちが警告出す前に動いちまう

のかね」
「まあ、こいつらはこう言う奴らですからな・・・・・それでお前ら、何かあったのか？」
「大方、今のシステムの状況に驚いただけだろう？悪いがアンタらとは構ってられないよ。アタシらはこれから月野の・・・・・」
《あ、あのぅ・・・・・》
「おや？何だい、月野もいるじゃないか・・・・・・・・・・・？」
「お、おい・・・・・お前、月野・・・・・・・か？」
《あ、あははは・・・・・・・はぁ・・・・・・・》

☆

それは遡ること三〇分前の出来事です。期末試験も無事（？）に終り得も言わぬ解放感に包まれる七月下旬、昼休みに入りいつものメンバーでお弁当を食べながら雑談をしていました。

「やれやれ、折角一学期が終わったって言うのにまだ登校せにゃならんとはな」
「そうだよね。折角の夏休みなのに、あのババァは何を考えているんだか」
「・・・・・・・・・・面倒」
「まあ、試召戦争を起こして潰れた授業分ですからね。この設備を手に入れた代償と思えば安いものでしょう？」
「確かにの。それにワシらは夏期特別講習には強制でない分、まだマシじゃろ？」

一応夏休みに入っても、自分たちは一学期始まってすぐに引き起こした試召戦争で潰した平常授業分、補習を受けています。実際の試召戦争自体は大した日数をかけなかったのですが、回復試験なども合わせると、結構まだまだ補習は続きますね。

あ、ヒデさんの言っていた『夏期特別講習の強制』について補足しておくと、女子の大半は知らないことですが以前起きた強化合宿・男子覗き事件の罰としてFクラス以外の男子は全員、夏期特別講習を学園長に強制参加させられている・・・・・と言うわけです。学園長、『罰にもなり、かつバカどもの学力も上がり、更には学園のイメージアップにも繋がるからねぇ』って言ってましたね。もっとも『結構甘い罰だがねぇ』とのことですが。

「あら？アキはこの前まで、随分一生懸命だったのに今はいつも通りなの？」
「あはは♪美波、この前は姉さんを撃退するためだったから例外だよ？」

・・・・・まあ、アキさんも玲さんを追い出すために随分必死で頑張ったのですが、その作戦も結局あまり意味をなさなかったんですよね。玲さんは今日も自分とアキさんのところに縦横無尽に暴れ回っていますもん。日高先生とタッグを組まれた時には、正直終わったなって思ったくらいです・・・・・・

「それにこの前の試験にはもう一つ意味があったからな」
「あっ！それって試験召喚獣の装備のリセットのことですか？」

そうなんですよね。アキさんやゆーさんはこの為にも頑張ってましたもの。何せアキさんは木刀、ゆーさんはメリケンサックでしたっけ？・・・・・・ゆーさんは結構気に入っていたらしいですが。

「今回は俺ら結構点が取れてたしな。ひょっとすりゃ全員装備がランクアップしているんじゃねえか？」

「あの・・・・・すみません、私はあまり変わってなかったみたいです・・・・・・」

「あー、自分もほとんど変わってない上に、学園長に『アンタは装備はこれからも変わんないよ？』って先に言われてますからね・・・・・」

まあ、気にいっているので問題はないですが？箒とか便利ですし、主に掃除に。

「いや、二人がこれ以上成績上がったら凄すぎるからね？・・・・・・それはそうと、ねえみんな。一度呼び出してみない？どんなになったのか気になるしさ」

アキさんがそう言うと、皆さん興味深々のようです。あはは♪皆さん何だかんだで自分の装備がどんな風に変わったのか楽しみみたいですね？

「それでは先生に許可を貰ってきますね」

「あっ！ウチも行くわよ、瑞希♪」

「いや、待て姫路に島田。そんなことをしなくても、」

「ここにいるじゃない。先生たちの許可に関係なく召喚フィールド

を作れる、」
「・・・・・・・・・・・・造が」
「おお、そうであったの。造には白銀の腕輪があったのう」
「あ、自分の腕輪を使えばいいんですね？」

そう言えば、しばらく腕輪を使っていませんでしたね？夏に入るまでは召喚システムの調整の為に腕輪の使用は禁止されてましたが、もう夏になりましたし大丈夫でしょう。皆さんの召喚獣がどんな感じか気になりますし、フィールドを形成して・・・・・・

「では行きますよ？・・・・・・起動（アウェイクン）！」

キュウウウウウン　ボンッ！

久しぶりに起動（アウェイクン）のキーワードを口にして、召喚フィールドが形成されます。それと同時に自分の体が変化していき、いつものように召喚獣へと・・・・・・？

召喚獣へと・・・・・・？アレ・・・・・・？

「ね、ねえ造？・・・・・・なんだかいつもより・・・・・・？」
「随分背が高くないですか・・・・・・？」
「ほ、ホントね・・・・・・？と言うか、まんま背丈変わってないわよ？」

皆さんの言う通り、視点が召喚獣になっても変わりません。と言いますかいつもはデフォルメされた自分の姿に変化するハズが、今回はまるで違います。そのままみたいです？あれれ？

「なんだ造。召喚失敗か？」

《あー、あー・・・・・ですが声の方はいつものような感じですし、装備の箒も服も変わらず出てきてますよ？一応等身以外は変わってませんし？》

「ふむ、点数も出てきておるしの。召喚失敗というわけでもなさそうじゃ」

《Ｆクラス　月野造　現代国語　５８２点　》

ヒデさんの言う通り、いつも通り問題なく召喚されているようなのですが・・・・・？

「何と言うかだな。これ見た目はいつもの造なわけだし、ただ造がコスプレしたみたいだな？」

《コスっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！？》

ゆーさん、コスプレって・・・・・・・・ｏｒｚ　それに思っても言わないで・・・・・・

「お、落ち着くのじゃ造よ！大丈夫、大丈夫じゃぞ！？」

ヒデさんに慰められながらも、この状況を整理します。・・・・・・・
でも、コスプレって・・・・・・納得、いかないです・・・・・・・

「まあ、考えられる原因としてその白銀の腕輪がおかしくなった。
もしくはシステム自体がおかしくなったってとこだな。とりあえず
俺らも召喚してみりゃわかんだろう。明久、お前やってみろ」
「何で僕指定なのさ?雄二がやればいいだろ」
「造が特別観察処分者だからこうなった可能性があるからな。観察
処分者のお前と比較しておく必要があるだろ。いいからさっさとや
れ」
「ちぇっ、はいはい・・・・・・んじゃ行くよ。試獣召喚(サモン)っ!」

そう言ってアキさんが召喚すると・・・・・・

「おおっ!ぼ、僕の召喚獣が・・・・・・!」
「おいおい・・・・・明久は以前に比べて何だか妙に贅沢な装備
になったな。これは甲冑か?」
「剣まで持っているわね。今までと全然違うんじゃないの?」
「それに、月野君と一緒で明久君と同じくらいの背丈ですね」

現れたのは、白銀の甲冑に身を包み、一振りの大剣を携えた騎士で
した。ふむ?やっぱり自分と同じで、アキさんの召喚獣も本人サイ
ズのようですね?

「ふむ。どうやらシステム自体の仕様がこうなっておるようじゃの」
「そうですね。顔も明久君そっくりですね。カッコいいです♪」
「ホントよね。今までの可愛い感じと違って、今度のは凛々しいわ

ね♪」

あらら・・・・・・二人とも、自分に砂糖を吐かせるおつもりですか？色々とご馳走様です。

「え？そ、そうかな？ちょっと照れるよ」

「姫路も島田も物好きだな。こんなバカ面のどこがいいんだか？」

「あ痛っ」

そういってゆーさんがアキさんの召喚獣の頭をパコン、と小突くと・・・・・・

ポロッ♪

・・・・・叩かれた頭は首から離れて、ゆっくりと重力に従い床に落ちて行きました。何これ怖い。

「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」

胴体から離れた召喚獣の首は何度か床の上で回転し近くの机の脚にぶつかると、絶句する自分たちを見ている状態で動きを止めました。いや、これなんてホラー？

「「き、きゃぁぁぁあああああああああああっ！？」」

「えええええっ!?な、何これ!?僕の召喚獣がいきなりお茶の間に見せられない姿になっているんだけど!?」
《こ、これは何て言いますか・・・・・・》
「一種のホラーじゃの。全員がすでに食事を終えておって良かったの・・・・・・」

アキさんの召喚獣は身体は仁王立ちで、頭だけ床に転がっています。いつものようにデフォルメされていない分、余計に怖いですよ・・・・・・?

「ああ、すまん。そんなに強く叩いたつもりはなかったんだが、まさか外れちまうなんて・・・・・・待ってな、今ホチキスを持ってくる」
「雄二、何的外れな事言ってるのさ!?くっつけるなら接着剤でしょ!?ホチキスじゃ穴が開いて痛いんだから!」
《二人とも色々と違いますよ・・・・・・?》
「じゃな。問題が違うぞい」
「それにしても、いくら明久の点が低いからって、登場と同時に戦闘不能とは。どんな出落ちだよ」
《あれ?ですがコレ、どうやら戦闘不能ってわけではなさそうですよ?》

その証拠に未だにアキさんの召喚獣（?）はまだ消えずに残っています。それに、

≪Ｆクラス　吉井明久　現代国語　１０２点　≫

点数だってちゃんとありますよね。

「どうやら明久の召喚獣は頭が自由に外れる仕様のようじゃの」
「それどんな仕様だろうね・・・・・・あっ、一応ちゃんと動かせるや・・・・・・」
「ふむ・・・・・・造といい明久といい、何やらおかしなことになってんな。よし、俺も召喚してみるか。試獣召喚(サモン)っ！」

ゆーさんの呼び声と共に召喚獣が現れます。現れた召喚獣の装備は・・・・・・鍛え上げられた肉体と、引き締まった肉体と、筋肉に覆われた肉体でした。・・・・・・と言いますか、

「また手ぶらじゃないか!?っていうか、雄二の召喚獣は今までのよりも退化してない!?装備がズボンだけって!?」
「しかも何の特徴もなく雄二そのものが出てきおったな。これでは服装以外雄二と区別がつかん」
「んなこと俺に言われても知らんぞっ!?ちぃ、どうなっていやがるんだ!?」
《ホントますますこれってどうなっているのかわかりませんね?別にゆーさんの召喚獣は頭が取れるわけでもないみたいですし・・・・・・》

ちなみに姫路さんと島田さんは、まだアキさんの召喚獣に怖がって目を閉じっぱなしです。まあ、今ちょっと目のやり場に困る風景が広がっているのでちょうどいいのでしょうか?

とにかく、今の状況がどうなっているのかをアキさん、ゆーさん、ヒデさん、自分の４人で考察し合っていると・・・・・・

「んむ？　雄二。何やらお主の召喚獣の様子が変じゃぞ？」
「お？本当だな。何だ？」
何やらゆーさんの召喚獣がブルブルと身震いを始めました。そして・・・・・その口が大きく裂け、全身から凄い勢いで毛が生えてきました！？ちょっと！？またサプライズですか！？
《こ、これは・・・・・・！？》
「また妙なことになったの・・・・・・」
「うわっ！？これって・・・・・・」
「何だこりゃ、まるで狼男じゃねえか！？」
確かに、ゆーさんの召喚獣は見た目は狼男のような成り立ちに変化してしまいました。姫路さんと島田さんが目を瞑っていてくれて助かりましたね。今の二人がこの狼男を見たらビックリして失神しそうです。・・・・・・ん？狼男？
《・・・・・あっ！そっか。思い出しました！》
「あん？造、何か知ってんのか？」
《ええ、これってもしかするとこれ、『旧型』召喚獣タイプかもしれません》
「「「『旧型』召喚獣タイプ？」」」

72時間目　夏と言えば！～補習に講義に肝試し？～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

うん、今回はあんまり進みませんでしたね。今回わからないことは多分次回わかると思います。特に造のこととかね♪

それにしても……まだほとんど書けてないんですよねー（汗）いや、大体は下書きできたんですけど、決まってないとこが多すぎでして。てな訳で、またまた聞きたいんですが常夏コンビと清水さんのオカルト召喚獣をどうしましょう……性格変わってしまったせいで、召喚獣どうするか迷っています（汗）

てかそもそも、オカルト系には疎いので（持っている漫画でｘｘｘＨｏｌｉｃくらい？）友人たちに『ホラーな漫画とかってないかなー？』って聞いて借りまくっているんですが難しいですね……

ま、とりあえず必死に資料探しをします。もしこれどう？的なものがあれば教えて頂けると嬉しいです♪うーん、でもなければそのままにするかな？

読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです！

73時間目　『旧型』召喚システム?～造の特徴・本質は……～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。いつもありがとうです。

今回は……うん、ちょっとふざけ過ぎたかな（汗）最後の方、何かとりあえず妙なことになっています。色々気をつけてくださいです。

ま、まあ読んでもらえばわかるかな?とりあえず73時間目です、どぞどぞ。

73時間目　『旧型』召喚システム?～造の特徴・本質は……～

とりあえず、わかる範囲での自分の知っている知識を皆さんに伝えましょうね。

「造、その『旧型』召喚獣ってのは何だ?」

《えっとですね、ゆーさんたちも知っての通り、試験召喚システムは科学技術だけでは成り立ってません。幾ばくかの偶然とオカルト的な要素も含まれています。ここまでは皆さんよくわかってますよね?》

「まあ、召喚システムの基本だよね」

《そうですね。ですが召喚獣は何も最初から今のような姿ってわけじゃなかったそうです。『旧型』召喚獣ってのは、名前の通り学園長が初めて召喚に成功した召喚獣のことで、そしてその『旧型』がまさにコレにあたるんですよ》

「む、この物の怪的な物が初期の召喚獣じゃと?」

《そうみたいです。何でも最初の召喚獣はオカルト的な物が色濃く、学園長がそれを今のような召喚獣に変えるのにかなり苦労なさったとか》

実際、もし初期召喚獣のままで試召戦争なんて起こったら、妖怪大戦争になりかねませんからね・・・・・・

「確かにオカルトと言えばお化けだもんね。それじゃ僕の今の召喚獣は・・・・・・」

《おそらく・・・・・・見た目からデュラハンではないかと?》

「そんで俺の召喚獣が狼男か・・・・・・」

「いや、だけど何で雄二の召喚獣は満月でもないのに変身したのさ？」

《丸い物を見たとか・・・・・・でしょうかね？》

「ふむ、ならばあれではないかの？」

そう言ってヒデさんが指差した方向を見ると・・・・・未だに転がっているアキさんの召喚獣の頭がありました。おおぅ、やっぱりちょっと不気味ですよね。

「いや、コレ丸いの！？いくら雄二の召喚獣だからって随分適当な作りじゃない！？」

「んだとコラ！・・・・・まあいい。なあ造。それじゃ今の状況はその『旧型』召喚獣仕様になっているってわけか？」

《多分ですけどね？詳しくは学園長に聞かないとわかりませんが。ただ、別に本物のお化けが出てきているわけではないのでその辺は安心して貰って大丈夫です》

最近やけにシステムの調整が長引いてましたが、こんなことになるなんて学園長も大変ですよね・・・・・あまり根を詰めて徹夜なんかして欲しくないですし。

「なるほどね・・・・・姫路さんに美波、だってさ。目を開けても大丈夫だよ。別にコレ死体でもなければ本物のお化けとかでもないってさ」

「うぅ・・・・・い、一応月野君の話は聞きましたが・・・・・・」

「そ、それでもなんか、ちょっとね・・・・・」

おっと、二人はまだ目を瞑ってましたか。まあ、女の子ですし、こう言うのか苦手なのかもしれませんね？実際、自分らも流石にビックリしましたし。

「にしても、どうして僕のはデュラハンなんだろう？お化けなら日本の妖怪とかもいっぱいいるはずなのに」

《あー・・・・・えっと、ですね？どうも召喚者の特徴や本質から喚び出される妖怪が決定されるらしいです・・・・・》

「特徴や本質？なるほど、そうなると僕のがデュラハンが選ばれたっていうのは、僕の騎士道精神が召喚獣に影響を与えたからってことだね？」

《あ、あはは・・・・・・そうかもしれませんね》

言えない・・・・・・アキさんに申し訳なくて、とても言えないです・・・・・・

「んなわけあるか。明久、現実から目を背けるな。造、気を遣わなくていいぞ」

「え？違うの？じゃあ甲冑の似合う男らしさとか、大剣を振るう力強さとか・・・・・・」

「おそらく『頭が無い＝バカ』だからじゃな」

「言った！必死に目を背けていた事実を秀吉が包み隠さず言ったっ！」

ひ、ヒデさん直球ですね？もしかして日頃の恨みも含んでますか？

「すまんすまん、明久よ。じゃが前より強そうになっておるではな

いか。武器も金属のようじゃし、鎧もつけておる」
《そうですよ！騎士ですよ、凄く強そうです！》
「そ、そうだね。前よりは強そうだよね！」
「俺には強くなったようには見えないけどな」

ゆ、ゆーさん！止めてあげて！？アキさんをこれ以上弄らんであげてっ！？

「何さ、雄二。何が不満なのさ？」
「その取り外しのできる頭だ。戦闘中相手の頭が転がってたらどうする？」
「・・・・・狙われるね、確実に」
「そういう事だ。つまり明久の召喚獣は常に頭をどっちかの腕で抱えなければならないって事だ。片腕しか使えないなんてハンデもいいところだな。システムも明久のことよくわかってんじゃねえか」

ま、まあその辺はアキさんの召喚獣の操作技術で何とでもなると思いますが・・・・・・

「そ、それを言うなら雄二は手ぶらじゃないかっ！それに雄二の特徴は『たてがみ』と『野生』、いや『野生』と言うより『野蛮』だね！雄二の本質そのものだよっ！システム通りだよっ！」
「んだとコラ！少なくとも召喚システムに『バカ』扱いされるよりかマシだ！」

・・・・・いつの間にかアキさんとゆーさんが喧嘩を始めました。
いや、まあ仲の良い証拠何でしょうかね？

「こやつらは・・・・・ふむ、じゃが特徴や本質が現れるとは中々面白そうじゃの」
《ふふっ、ヒデさんも召喚してみますか？・・・・・ヒデさんだったらどんな召喚獣になるんでしょうかね？》
「む？ワシかの。ワシの本質と言えば演劇じゃからな。妖怪ではないが、舞台で有名なオペラ座の怪人辺りが妥当じゃろうな」
《おお、なるほどです。ヒデさんらしい発想ですね♪》
「うむ♪・・・・・どれ、ワシも試してみるかの。試獣召喚（サモン）っ」

・・・・・ポンッ　↑猫又登場

「《・・・・・・・・・・・・》」

こ、これは・・・・・何と言いましょうか・・・・・

「へえ～、猫のお化けか。可愛いね。秀吉によく似合ってるよ」
「どうやら秀吉の本質は『可愛い』って事らしいな」

喧嘩を中断してアキさんとゆーさんが、それぞれヒデさんの心をへし折る言葉を紡ぎます。

「ワ、ワシはついにシステムにまでこんな扱いを・・・・・つ、造っ！」
「よしよしです、ヒデさん落ち込まないでください・・・・・き、きっと猫又になったのは『演じる＝人間に化ける』って意味でもそ

うなったんですよ」
「うぅ・・・・・・造、ありがとうなのじゃ・・・・・・」
・・・・・・ホント、召喚システムはどうなっているんでしょうかね？ま、まあヒデさんの召喚獣を見たおかげで姫路さんと島田さんが復活しました。

「よ、よかったわ・・・・・・ちゃんと可愛い系の召喚獣もいるのね？」
「そ、そうですね・・・・・・美波ちゃん、私たちも召喚してみましょうか？」
「そうね、ところでウチらの本質って何かしら？」
「うーん、とりあえず召喚してみればわかると思いますよ？」
そう言って二人一緒に召喚します。
「「試獣召喚（サモン）っ！！」」

・・・・・ポンッ　↑サキュバス登場
・・・・・ポンッ　↑ぬりかべ登場

「「「「「《・・・・・・・・・・・・・》」」」」」
これもまた、リアクションに困る召喚獣ですね・・・・・・
「明久君、すみません・・・・・・」

「ゴメン、アキ・・・・・・後ろ向いててくれる？」
「う、うん・・・・・・」
何この空気!？重い、重すぎるっ!？
「あー、その何だ。二人とも一旦造から離れろ。フィールドの有効範囲から出たら自然と召喚獣は消えるハズだ」
「「はい（ええ）・・・・・・」」
二人はゆーさんの言葉に頷き一旦自分から離れ、召喚獣が消えたのを確認するとトボトボと戻ってきました。
「災難じゃったな、姫路に島田よ」
「うぅ・・・・・酷いです・・・・・・あんな格好なんて、恥ずかしすぎです・・・・・・」
「とは言ってもあれが姫路の本質なんだから仕方ないだろ？」
「わ、私の本質って・・・・・・・・？」
「え、えっとね・・・・・・その、なんと言うか・・・・・・」
「そ、そうじゃな・・・・・・言いにくいことじゃが・・・・・・」
《ほ、ホラ女性的な、その・・・・・・》
言い難いですよね・・・・・・何と言えばいいのやら。
「外見は胸がデカいってことだろ？ついでに特徴としては『大胆』ってところじゃないか？最近よく島田と一緒に明久に迫ってるしな」
「うわあああああああああああああああんっ！！」

さ、流石ゆーさん・・・・・自分らに言えなかったことを平然と言ってのけました。そこに痺れる（ｒｙ

「・・・・・・・・・・・・ウチは？ウチの本質は？」

「「「「・・・・・・・っ！？」」」」

島田さんが物凄く絶望した顔でアキさんたちを見つめます。ついでに姫路さん（の胸）を親の敵のように見つめます。

「さ、さあ・・・・・なんだろうね・・・・・・・？」

「け、見当もつかねえな・・・・・・？」

「そ、そうじゃの・・・・・・」

「美波ちゃん、目が怖いですよ・・・・・・・！？」

皆さん、必死に目を合わせようとしてませんね・・・・・・

「月野・・・・・・アンタはどう思う・・・・・・・？」

《え、えっと・・・・・・きっとぬりかべのように広がるような広い心と、誰かを護るっていう島田さんの本質が現れたのでは、ないかと・・・・・・・》

「・・・・・・ありがと、でも無理しなくていいのよ・・・・・・・」

島田さん、ドンマイです・・・・・・

「そ、それにしても造は全然変わってないよね!?見た目もいつも通り魔女っ子だしさ」

アキさんがフォローを入れてきましたね。ところでアキさん?

《魔女じゃないですよ!?魔法使いって言ってください!》

「あ、ああそうだな。造、お前の召喚獣姿は魔女ってことか?」

《だから誰が魔女ですかっ!・・・・・それはともかく、おそらく装備も変わっていないですし、学園長も『アンタは基本はそのままの姿さね』って言われてます。自分だけ皆さんと違って背丈以外はシステムに影響されていないのかと》

「む?ならばお主の本質は、召喚獣には現れておらぬということかの?」

《ええ、おそらくは》

見た目はともかく、後は特に変化はないハズですよね?別に魔法が使えるわけでもないですし?

「むう、残念じゃの。造の本質や特徴が知りたかったのじゃが」

《あはは♪自分はのんきですし、のほほんとした本質とか何ではないでしょうか?》

「まっ、そんなとこか・・・・・ん?そういやさっきから全然ムッツリーニが喋ってないな?」

「あれ?そう言えばそうだね?それにまだムッツリーニの召喚獣も見てないし・・・・・おーい、ムッツリーニ?どうしたの?」

ゆーさんに言われて、皆さんこーさんの方へ目を向けると・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・（ドクドクドク）」

お化けより怖いリアルスプラッタな光景が広がってました。・・・・・・って!?

「「き、きゃぁぁぁあああああああああああああっ!?」」

「えええええっ!?な、何これ!?ムッツリーニがいきなりお茶の間に見せられない姿になっているんだけど!?」

あ、何か既視感（デジャビュ）・・・・・いやっ!?そんなことはどうでもいいとして!

《こーさん!?どうしました!?どこか痛みますか!?》

急いでこーさんを起こして尋ねます。どうしてこんなことに!?別にこーさん、何か不調だったわけでもないハズですよね!?

「・・・・・・・・・・・・ね・・・・・・」

「何だ!?何が言いたいんだムッツリーニ!?」

「・・・・・・・・・・・・む、胸・・・・・・」

「胸!?胸が痛むのかの!?」

ひょっとして心臓に何か不調が!?急いで救急車を・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・造の・・・・・・・・胸っ（ガクッ）」

《・・・・・・・は？》

そう言い残して、満面の笑みを浮かべてこーさんは崩れ落ちました・・・・・・？自分の、胸ですか？

「・・・・・・の、のう造よ・・・・・・・ムッツリーニに言われて今さらながらに気がついたのじゃが、お主・・・・・・・」

「そ、そう言えば月野君・・・・・・」

「月野、アンタ・・・・・・」

？？？何で自分（と自分の胸）を皆さん凝視しているんですか？

「つ、造・・・・・・君、今自分がどうなっているかわかってないよね？」

「・・・・・・造。とりあえず自分の胸に手を当ててみろ・・・・・・」

胸？ま、まあ言われた通りやってみますが・・・・・・

ポニョン♪

・・・・・・ん？

ポニョンポニョン♪

・・・・・・・・・・・・・んん？

「「「「「《・・・・・・・・・・・・・・！？》」」」」」

☆

・・・・・・そして話はプロローグへと戻ります。

ダダダダダダダダダダダッ！　バタンッ！

「「ババァっ！コレは一体どういうことだ！？システムの異常かっ！？」」

「「学園長先生！大変なんですっ！！」」

「が、学園長！？一大事じゃ！説明して貰えぬかっ！？」

「・・・・・・・・・・・・・（ボタボタボタ）」

「・・・・・・何でアンタらは、こっちが警告出す前に動いちまうのかね」

「まあ、こいつらはこう言う奴らですからな・・・・・それでお前ら、何かあったのか？」
「大方、今のシステムの状況に驚いただけだろう？悪いがアンタらとは構ってられないよ。アタシらはこれから月野の・・・・・・」
《あ、あのぅ・・・・・》
「おや？何だい、月野もいるじゃないか・・・・・い・・・・・？」
「お、おい・・・・・月野・・・・・か？」
《あ、あははは・・・・・はぁ・・・・・》

・・・・・あの後、一応更衣室で確認しました。普段気にしていなかった胸に重量感が増し、普段はついているハズのものが消えておりましたよ・・・・・

不肖、この月野造。これまで幾度も幾度も『小学生』だの『男の娘』だの最近では『女の子』扱いまでされ続け、それでもめげずに頑張ってきましたが・・・・・

《身体まで女の子になるなんて、召喚システムはどうなっているんですかっ！？寧ろ召喚システムにまで自分のことを『女の子』扱いなんですかっ！！？》

どう言うわけか、身体が女性のものになってました・・・・・悪夢です、まさに、悪夢です・・・・・

73時間目　『旧型』召喚システム?～造の特徴・本質は……～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか?

……どうしてこうなった！?うん、作者もよくわかりません。『そもそもオカルト召喚獣関係ないじゃない！?』はい。仰るとおりですよね（汗）ま、まあいつものことってことでしょうか?……毎度毎度すんません。超展開がネタの糖分です。

あ、もしまともにオカルト召喚獣として造が出たら、座敷わらしが出るハズです。本質は『相手を幸せにする』って感じの。……ヤバい、こっちにすればよかったかな?

もうチョイ先の展開だと思いますが、あの色っぽい先輩こと、小暮さんが出ると思いますが、またまた少々性格が変わるかも?苦手な方はホントすみません。

色々暴走させ過ぎていますが、これからも頑張っていきたいです。読んでいただきありがとうございました！

７４時間目　造の性別～『性別：造ちゃん』ｂｙＦクラス一同～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。皆さんいつもありがとうです♪

すみません。帰ったらすぐに更新するつもりでしたが、遅くなって結局いつも通りの更新です。……べ、別にアニメのバカテスを見たから遅くなったわけじゃないですよ？いや、勿論さっきまで友人が録画してくれたものを見てましたが（汗）

とりあえず行きましょうね。７４時間目！どぞどぞ♪

７４時間目　造の性別～『性別：造ちゃん』ｂｙＦクラス一同～

あまりの超展開に、流石にあの学園長と西村先生でさえも唖然として自分を見つめます。

「・・・・・創ったアタシが言うのもなんだが、こんなことってあるもんだね」

「・・・・・・月野、俺はお前に何と言えばいいのかわからない」

《それ以前もどこかで同じ会話をしましたよね・・・・・・？》

確か、自分が召喚獣に初めて成った時でしたね・・・・・・？

「んで、どういうことだ学え・・・・・・ババァ」

「説明をしてください、学え・・・・・・ババァ」

「お前ら、どうやら補習を増やして欲しいようだな？」

「・・・・・どうしてアンタ達バカ二人はアタシを素直に学園長と呼べないのかねぇ・・・・・・？」

「「誰がバカだっ！？バカは雄二（明久）だけだっ！！」」

「お主ら、そんなことより造の身体のことを聞くのが先じゃろうがっ！」

「そ、そうですね・・・・・・」

「あの、学園長。アキたちは後で謝ってもらうので説明をお願いします」

とりあえず皆さんに話しを戻して貰い、この状況について学園長に

聞くと・・・・・・

「月野のさっきの考察通り、今のシステムは『旧型』召喚獣仕様さね。どうやら何かの拍子に過去のデータが飛び出て来たらしいね。最近の不調もコレのせいだろうさ。そんでもって月野の方は・・・・・・ハァ、ちょいとデータが足りないからわからんさね」

そう言って学園長が『今日もまた徹夜かね・・・・・・』ってぼやいてました。ですから徹夜はやめた方が良いとあれほど言ってますのにね・・・・・・？

《ってことは、またシステムに自分は捕まったんですか？》

「・・・・・・そう、なるね」

「・・・・・・・・・・・・」

あ、しまった・・・・・この話題はこの先生たちの前ではしない方がいいんでしたね。

《で、ですが、すぐに直りますよね？あの時も一日で直ったわけですし♪》

「・・・・・当り前さね、絶対に直すよ。月野、それで本当に解除も出来ないのかい？」

《え、ええ・・・・・・さっきから腕輪を使って解除（キャンセル）をやっていますが、どうも召喚フィールドも自分の召喚獣の一部として取りこまれてみたいでして・・・・・・》

あの後、慌てて腕輪を解除（キャンセル）しようとしましたが、フィールドそのも

のは消えるもののフィールドの特性自体がどうやら自分の召喚獣のシステムとして組み込まれたらしく、召喚獣の姿と装備と・・・・・じょ、女性の姿から戻りません・・・・・・

「ったく頭が痛いね・・・・・とりあえず、悪いが今日はアンタは学園に泊まりな。日高先生にも伝えておく。徹底的に検査とこれからの対策をするよ」

《あ、はいです・・・・・・》

「それからアンタら。他の生徒が脅えるといけないし、今日のところは他言無用で頼むよ」

そう皆さんに伝えると、とりあえず自分と先生以外は解散になりました・・・・・・

・・・・・が、皆さんと分かれてたすぐ後で、自分の身体のことを（まだ誰にも話していないハズですが）聞き付け大慌てで（誰も呼んでもないのですが）やってきた日高先生、高橋先生、遠藤先生、船越先生、そして優姉さんと霧島さんに・・・・・・

「つ、造っ！ま、待ってなっ！？今からお前に合う服を世界中から集めて持ってくるからなっ！？」

「「「造くん・・・・・・いえ、造ちゃん可愛いです・・・・・・♪」」」

「造ちゃん♪お姉さんたちが可愛くしてあげるからね～♪」
「・・・・・・造は本当に可愛い娘」
・・・・・・・・・・・・ふ、ふふふ・・・・・・・皆さんに自分のアイデンティティを完膚なきまでにコナゴナに破壊されてしまいました。もう自分、お婿に行けない・・・・・・・
「「「「「「嫁にも絶対やらん（やりません）（やらないわ）（やらない）っ！」」」」」」
「そう言う意味じゃないだろうに・・・・・・月野。茶でも飲むか？落ち着くぞ」
《うぅ・・・・・・せんせ、本当にありがとうです》
困りましたね、ホント。これから一体どうしたものでしょうか・・・・・・システムもですが、この人たちの暴走も。
☆
そんでもって翌日の朝～♪
「・・・・・・んで、結局戻らずじまいか？」
《あはは・・・・・・そうみたいですね》

・・・・・一夜明けてもやっぱり戻りませんでした。よくテレビとかでは寝て起きると元に戻っているとかありますが、そんなことなかったですね・・・・・・

てか、装備も元に戻らないので気になって箒に乗ってみたら・・・・・普通に（？）空を飛べました・・・・・一応学園内だけしか飛べませんが。『造の宅急便』？流石にビックリと言いますか、唖然としましたよ。

「あ、それじゃ造、今日もババァのとこに行くの？その、大丈夫？」
《あ、はいですアキさん。一応昨日の検査で、その・・・・・お、女の子になった以外は特に身体に異常はないそうです。今日はシステム解析の途中経過を聞こうかと》
「それはよかったの。じゃが造・・・・・お主無理はしておらぬか？何かあれば必ず言うのじゃぞ？」
《あいです、ありがとですよ♪ヒデさん》
「うむ！お主に何かあってからでは困るからの」

うんうん。この三人はいつも通りですね♪ちなみに・・・・・

「月野君、何だかいつもよりも綺麗になっている気がします・・・・・」
「月野だけはウチの気持ちわかってくれていると思ったのに・・・・・」
「あの、姫路さんに美波？そろそろ僕の目を塞ぐのやめてくれないかな？」
「・・・・・・・・・・・・そろそろ、鼻血も打ち止め（ドクドクドク）」

姫路さんと島田さんは、アキさんが鼻血を出さないように（？）二人でアキさんを目隠し中です。何故か二人に願望の目で見られている気がするのは、気のせいってことにしておきましょう。色々と考えたくないです。そんでもってこーさんは、もう何と言いますか鼻血を出しすぎてて悟りの域に達しそうですよね・・・・・？

ついでにFクラスの皆さんですが・・・・・何故か靴箱を開ければ『造ちゃん、結婚してくれ』の手紙が（いつもの3倍）入ってました・・・・・教室に入ったら入ったで『今までずっと好きでしたっ！』と（いつもの5倍）告白され、挙句の果てには新しいファンクラブも作ろうとしている方までいたとか？

《やれやれですね・・・・・それじゃ、一先ず自分は学園長のところへ行きますね？》

「「待った造。僕（俺）達も行くよ（行くぞ）」」

そう言ってアキさんとゆーさんが立ち上がりました。む？どうしたんでしょうか？

《あら？いいのですか？お二人ともあまり学園長のところに行くのはお嫌だったのでは？》

「何言ってんだ造。お前がこんな状態なのをほっとけないだろ？」

「そうだよ！さあ、僕らに遠慮しないで行こう造」

《お、お二人とも・・・・・！》

な、なんてお優しい方たち何でしょうか♪ありがとうです。アキさん、ゆーさん！

「のう、雄二に明久よ。本音は何じゃ？」

「「補習をサボれそうだったから」」

あ、あはは・・・・・ですが皆さんが来ていただけるのは助かりますね。心強いです♪

「まったくお主らは・・・・・じゃが造よ、ワシも様子を見に行くぞい」

「あ、私も行きます」

「ウチも行くわ」

「・・・・・・・・・俺も」

てなわけでいつものメンバーで再び学園長室に向かいます。

～移動中～

「んで、結局どうなったんだ学え・・・・・ババァ」

「ちゃんと直るんでしょうね学え・・・・・ババァ」

《お二人とも毎度のことながら、学園長って言いましょうよ？》

「・・・・・このバカどもに一度本気で学園の最高権力者が誰であるか教えてやった方がいいのかね？」

まったく、相変わらずのやり取りですよね。最早アキさんとゆーさんと学園長の日常挨拶のようなものです。

「まあ、このバカ共は無視するとしてだね・・・・・すまんね月野。圧倒的に資料やデータが足んないんだよ。こりゃ当分はそのままさね」

《あー、やっぱりそうですか・・・・・まあ、気長に待ちますよ♪》

「造よ・・・・・お主割と順応性が高いのう」

まあ、基本的に根がのんきですからねー♪

「まっ、造の身体に本当に問題がねえならそれでいいが・・・・・んで、どうする気だババァ。造の問題は勿論だが、今のシステムの問題のことも早めに何とかしねえと不味いだろうが？」

ゆーさんが学園長に問いかけます。・・・・・あー、自分はともかく確かにこのままにしておくのはちょっとマズイですよね・・・・？いや、自分もなるべくは早めに戻りたいですが。

「え？何でさ雄二？ていうか何が問題なのさ」

「お前、ちっとは考えろ。いいか？まず一つはこれは当たり前だが、造の身体にどんな影響があるかわからん以上さっさと戻してやった方がいいだろう？」

「うむ、それはその通りじゃ。造に何かあるのは困るからのう」

《いや・・・・・自分は後回しでも・・・・・》

「コイツ自身がこう言う奴だしな。何か問題があっても俺らに何も言わない可能性が非常に高い」

「「「「「あー・・・・・・・・・・・・」」」」」

《そこで納得するんですか!?》

自分は皆さんにどういう風に見られているんでしょうかね？（↑無茶している自覚無し）

「そんでもって、この問題をこのまま生徒全員に隠しておくのもよくねえな」

「・・・・・・・・・・・・と言うと？」

「今は夏休みだからいいものの、二学期に入りゃすぐに試召戦争が起こしたい奴らが出てくるはずだ。それなのにまた『試召戦争を起こすな』と言われりゃ暴動も起きかねん」

「いや、それって雄二が早く試召戦争を起こしたいだけじゃ？」

「確かに俺もすぐにでも戦争は引き起こすつもりだが、俺たちFクラスは試召戦争を起こす側の立場であると同時に試召戦争を起こされる立場なのも忘れるな」

「あっ！坂本君、ひょっとしてFクラスの・・・・・」

「ランクアップした設備が狙われるって事かしら、坂本？」

ああ確かに二学期に入って試召戦争解禁になればまた各クラスが色々な動きを見せるでしょうね。そんな大事な試召戦争が何故かストップされれば、少なくとも理由を聞くために暴動も起きる可能性もあるってことですか・・・・・

「そこでアンタが事前に説明を入れなきゃヤバいだろう？もし召喚システムに問題があるんじゃないかと疑われでもしてこっそり召喚してみた奴でもいれば・・・・・本気でパニックになるだろうさ」
「ん？でもさ雄二。説明を入れないだけで召喚システムに異常があるって普通思う？」
「確かにそうじゃの・・・・・流石に疑問には思うじゃろうが、そこまで考えるものがいるじゃろうか？」

うーん、確かに二人の言うことも一理ありますね・・・・・・

「いや、造の今の格好を見れば何か勘付くヤツもいるだろさ。『造の格好＝召喚システムの今の状況』くらい頭が回る奴ならすぐに思い至るだろう。今は造のいつものコスプレだと思われているだろうが、バレるのも時間の問題だろうさ」
《・・・・・・・・・・・・い、いつものコスプレって・・・・・・・》
「つ、造！言葉のあやじゃ、あまり気にするでないぞっ！？」

・・・・・・・・・・・・ヒデさんホントありがとですよ。

「・・・・・ちっ、アンタもいちいち頭が回るね。それに付け加えると、八月上旬にシステムのお披露目会があるのさ。このままだとそのお披露目会が終わる頃には『恐怖！現代に現れた、妖怪変化が跋扈する学園』って嬉しいテロップが付くだろうね」

うっ・・・・・それは嫌ですね。文月学園は風評被害に弱いですし、こんなことが世間に知られるのはちょっと・・・・・

「ちょ、ちょっと!?これ意外と聞けば聞くほどヤバイ話何じゃないの!?」
「だからそう言ってんだろうが・・・・・んで?天下の学園長様は対策くらい考えているんだろうな?」

そう言って、改めてゆーさんが学園長に問いかけます。今の話を聞いてか、皆さんも自然と学園長に視線が行きますね。うーん、難しそうですが大丈夫でしょうか?

「ハッ!アタシを嘗めんじゃないよ、クソジャリ共。すでに対策は考えてある」

おおっ!流石は学園長、抜かりはないようですね♪

「ほう?んじゃ聞かせてもらおうじゃねえか」
「ああ、今の状況を一発で解決できる最高の一手さね」

そう言って、学園長はニッと笑って・・・・・

「・・・・・肝試し、やろうじゃないか」

「「「「「「「「「・・・・・・・・・・は?」」」」」」」」」

・・・・・何かとんでもないことを言い出しました。き、肝試し?

７４時間目　造の性別～『性別：造ちゃん』ｂｙＦクラス一同～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

こういう話って大抵続きと繋がっているので、なるべく早めに更新できたらいいと思います。今日はもう一話くらいは更新できるかな……？ま、期待せずに待っててください。

それにしてもいつの間にかあと数話で１００話分更新したことになるんですよね（汗）ちょいと展開が早すぎていないか心配です。しかもよくよく考えればちょうど２ヵ月前から更新し始めたんですね……わーお、あっという間ですね。

それはともかくまた次回！読んでいただきありがとうございます！

７５時間目　３－Ａにようこそ～影の参謀さん登場？～（前書き）

どうも糖分です。皆さんいつもありがとうです♪

今日ちょっとこの後行くとこがあるので、先に更新です。よくあることですが感想が遅れてしまうことが多々あってすみませんです。
今日もちょっと遅くなるかも？

さてさて、そんなことはともかく行きましょうかね？７５時間目です。どうぞ。

75時間目　3-Aにようこそ～影の参謀さん登場？～

「「「「「「《き、肝試し・・・・・・？》」」」」」」

学園長の提案とは・・・・・予想の斜め上なものでした。いや、どうしてまたそんなことを？

「おいババァ。冗談なら俺らは帰るぞ。本気ならついにボケたか？」
「失礼さね。アタシは十分正気だよ。少なくともアンタらバカ共よりかね？」
「雄二、ダメみたいだよ？やっぱりこのババァとうとう・・・・・・」
「だからアタシは正気だって言ってんだろうが！それからそこのバカ、とうとうってどういう意味さねっ！？」

うん、どうでもいいですがアキさん&ゆーさんと学園長は水と油な関係ですよね？

《あの・・・・・学園長の話を聞いてみませんか？ちょっと気になりますし？》
「そうじゃの、とりあえず聞いてみるとしようかの」
「・・・・・まあいいさね。何もアタシもただ肝試しをやろうなんて考えてないさ。さっき挙げた問題を解決するのに都合がいいからね」

そう言って、学園長が肝試しをしようと言った経緯を話し始めます。

「まず、最初に挙げた『月野の身体を元に戻す』こと、それから二番目に挙げた『システムを元に戻す』こと。この二つの問題は色々あるが、一番は『圧倒的なデータ不足』によるものさね」

《データ不足ですか？それって過去のデータが無いって意味でしょうか？》

「その通りさね。ただでさえ妙な仕様な上に、何年も前のデータだからね」

「なるほど。つまり学園長は妖怪がいた時代から生きているってことだね？」

「明久、何言ってんだ？この学園長そのものが、もうすでに化けもんだろうが」

「アンタら話の腰を折るのが随分好きだね？とりあえずアンタら二人は夏休みが終わるまで補習を受けて貰うかね？」

・・・・・あ、あの？続きをお願いできますかね？

「ま、要するに月野とシステムの異常の問題は『旧型のデータ不足』ってことさね。ここまではいいね？」

そうですね。皆さん頷いてますし納得できているようです。

「そんでもって三番目と四番目の問題、『生徒に黙っておく危険性』と『お披露目会』をどうするかだが・・・・・この二つの一番の問題は、『ウチの学園の評判』が関わるわけさね」

「た、確かにこのまま召喚獣がお化けの姿だったら嫌ですよね・・・・・」

「そ、そうね・・・・・・それにお披露目会もパニックになっちゃうわよね」

ふむ、風評被害に弱いこの学園らしい問題ですかね？召喚大会もそうでしたし。

《ですが、それと肝試しを行うのには一体どんな関係が？》

「おいおい、月野。アンタらしくないじゃないかい？よく考えてみな。今は夏だろう？」

・・・・・？いえ、そんなこと言われましてもね？皆さんもわからないようで、首を傾げていますし。そして、学園長は満面の笑みを浮かべで続けます。

「・・・・・肝試しにはもってこいの季節に、絶好のシチュエーションじゃないかい？」

「「「「「「《・・・・・・・・・・・・・》」」」」」」

ま、まさか・・・・・・・！？

「この問題をいっそ、学園全体のイベントとして扱おうじゃないか」

「「「「「「「《え、ええっ！？》」」」」」」」

あ、相変わらず凄いことをポンポン思いつく方ですよね、学園長は・・・・・・

「おいおい、何をそんなに鳩が豆鉄砲をくらったような顔しているんだい？アンタらもよく考えてみなよ？学園全体のイベントとしてなら参加者を通じて『旧型』召喚獣のデータも十分に取れるだろうし、システムの異常ではなく『肝試し用に調整されたもの』だと生徒たちも思っているだろうさ。何よりお披露目会も大いに盛り上がるハズだよ？」

《い、一理ありますよね・・・・・・》

「た、確かにそうじゃの・・・・・・」

それにしても本当にこの人は、よくそう言うことを考えつきますよね・・・・・？こんな柔軟な考え方が召喚システム開発に繋がったんでしょうか？

「それにアンタら、特にそこのバカ二人にも都合がいい話さね」

「「は？どう言うことだ（ですか）？」」

「アンタら確か、後二日ほど補習が残ってんだろ？その残りの二日を肝試しの準備と肝試しに当てるように取り図ろうじゃないかい」

「えっ！？いいんですか？」

「・・・・・・・・・・・・好都合」

アキさん達めちゃくちゃ嬉しそうですね？まあ、折角の夏休みに入っているわけですし、勉強よりもこんな風なイベントの方が楽しいのかも知れませんけどね？・・・・・・まあ、例外として、

「わ、私は肝試しよりも補習の方がいいです・・・・・・」
「う、ウチもそれなら補習の方がまだいいわよ・・・・・・」

お二人ほど微妙な反応みたいですよね？まあ、怖いものは仕方ないですが。

「ただ気をつけて欲しいのはあくまで召喚獣は学習意欲の向上の為のツールだからね。見た目だけを楽しむのは駄目さね。まあ、例えばだがチェックポイントでも作って、そこで勝負をするって感じにしてもらうかね？もしそれでも足りないってんなら、何か景品でも出そうじゃないか」
「ほう？随分と気前がいいじゃねえか？・・・・・・んで、今度は何を企んでいる？」

ゆ、ゆーさん・・・・・・流石に言いすぎでは？確かにちょっぴり条件が良すぎる気もしますが。

「企んでいるとは失礼さね？ただアンタらには、やる以上は色々と前もって裏方に徹して貰うよ？まずは・・・・・・そうさね、肝試しのルールの設定と二，三年にこのことを告知して貰おうじゃないかい？」
「ちっ・・・・・・相変わらず抜け目ねぇババァだこって」
《あれ？あの学園長、三年生も参加させるんですか？今の時期はあまり好ましくないのでは？》

なんせ受験を控えている方々でしょうし？いいのかな・・・・・・？

「ああ、なるべく多くのデータが欲しいからね？そうは言っても別に強制はしないよ。夏期講習参加者にちょっとした息抜きをさせるって意味でも企画しているからね。参加希望者だけやればいいさ」

なるほどです。流石に勉強ばかりではアレですからね？

「と言うわけさね。月野は今から三年にこのことを告知してきな。坂本は今からアタシとルール設定を考えて貰うよ。残りのジャリガキ達は補習を受けている二年に伝えに行きな。詳しい説明は後でアタシがしておくから肝試しをやるってことの告知だけしとくんだよ？」

「「「「「「《了解です（了解）（了解じゃ）！》」」」」」」

・・・・・・こうして、学園と試験召喚システムを使った一風変わった肝試しが行われることになりました。

☆

「「・・・・・・それでそんな妙な恰好をしている上に肝試しとな？」」

《あいです。妙な格好はともかく、どう言うわけか肝試しです》

学園長の話を聞いた後、善は急げと言うことで早速夏期講習を受け

ている三年生のところにお邪魔しています。どのクラスから行こうか迷いましたが、ここは友人の多い３-Ａに話をつけに来ました。それにしても皆さん何だかんだでお久しぶりですよね～♪変わらない接し方をしてくれて嬉しいですよ。

その変わらない接し方が『あはは♪相変わらずちっちゃいねー』とか『お前、縮んだかー？』とか『あっ！元２－Ａのマスコットじゃない♪』とかが含まれていたことは、若干気になりますがね！？

《あり？ところでタカさんは？》

「ん？・・・・・ああ、？城か？アイツならそもそも夏期講習には来てねえよ」

「アイツらしいがな。夏期講習自体強制ってわけじゃないしな。『強制でないなら学園にわざわざ来る必要もない』だとよ」

あー・・・・・タカさんらしいですかね？どっちにしろタカさん、こういうことあんまり乗り気じゃないでしょうけどね？ま、タカさんいないのでとりあえずツネとナツに肝試しの説明と、三年生はどうするか相談しましょうね。

《それでどうします？一応皆さん忙しい時期ですし、説明した通り勿論強制じゃないそうですよ？》

「そうだな・・・・・・まあ参加自体なら、希望者がやりゃいいだろうが」

「流石に準備までするとなりゃ、ちょっと考えものだぜ？」

ふむ、ツネとナツの言葉に他の皆さんも頷きます。なるほど皆さん参加すること自体は問題なさそうですよね？

《えっとですね、今のところどんなルールになるかわかりませんが、準備自体は自分らがやるので大丈夫ですよ？》

これはちょっと皆さんには内緒なんですが、学園長の計らいで覗きの罰として（Fクラス以外の）2年男子は強制夏期講習参加↓ついでに肝試しの準備及び参加を強制的にさせられる・・・・・・ってことになりましたからね。

学園長って、本当にこう言うことを考えればゆーさんやアキさん以上かもですよね？ちゃっかりしていると言いますか、計算高いと言いますか・・・・・・

「あら。面白そうではないですか。私は参加しますよ」

っと、突然ツネとナツの間に割って入って来たのは・・・・・・

《あや、小暮さん？お久しぶりですよ。・・・・・・あの、いいのですか？》

「ええ、お久しぶりですね、月野君。私は大丈夫ですよ？おそらくここにいる皆さんもね」

そう言って、周りを見回しながら皆さんに話しかける小暮さん。・・・・・最近思うのですがタカさんはまぁ置いておくとして、ある意味三年生Ａクラスの裏の代表って小暮さんですよね？人を惹き付けたり、人を動かすところも感じが何となくゆーさんに似ていますし？

「皆さんここ最近夏期講習続きであまり学習に身が入っていませんし、これはちょうどいい気分転換にもなるでしょう。景品まで付くような学園のイベントとなれば尚のことね」

そう小暮さんが言うと、皆さん少々乗り気になったのか騒ぎ始めます。・・・・・・ホント『影の参謀』とはよく言ったものですよね？

「それにここ最近、二年生にいい所を全部持っていかれてますし。試召戦争然り召喚大会然りね」

よ、容赦ないですよね？そう言うと流石にツネとナツが落ち込みませんか？

「くっ・・・・・・まあ、確かに俺らは負けちまったからな」

「まあ、あん時は俺らどうかしてたしな・・・・・・」

「いいえ。貴方たちはＡクラスの中でも上位の成績保持者ですし、おそらく誰が行っても勝てませんでしたよ。今年の二年生は本当に面白いですよね、月野君？」

いや、自分に振られましても・・・・・・？確かに面白い方たちですが。

「私としては、ここは三年生としての立場を示すいい機会ではないかと。例えばそうですね・・・・・・いっそ二年生対三年生の肝試し大会なんてどうでしょうか？私たちが脅かす側として二年生を迎

え撃つなどいかがですか？」

『おお、確かに面白そうだな！』

『私、ちょっと他のクラスにも話してくるわ』

『肝試しか・・・・・・何か燃えてきたっ！』

『ああ。講習ばかりで、最近ちょっとイベントに欠けてたしな！』

・・・・・わーお、流石小暮さん。Ａクラス全員を誘導・・・・・・コホン、まとめ上げましたね。正直、小暮さんと戦い合うのは勘弁ですよ。

≪（と言いますか小暮さん、さり気なく脅かす側に付いたのは良いんですか？準備は二年生（こちら）がやりますが、脅かす側もやはり多少は準備が要りますよ？）≫

それに大事な時期であることには変わりないですからね・・・・・・

「（ええ、いいのですよそのくらいの準備なら。どの道皆さん本当に勉強に飽きていましたし、この空気のまま勉強してもはかどりません。ならばいっそパッと気分転換した方がいいでしょう）」

あらら・・・・・そこまで考えてましたか？

「それに、こういうことって結構好きなんですよ？人を脅かしたり人を動かしたりね♪」

「「≪・・・・・・・・・・・・それが本音ですか（本音か）≫」」

「ふふっ・・・・・ふふふ・・・・・・♪」

いや、本当に怖い人ですよね。ツネ&ナツも少々引いてますし。もしかしたらお化けよりも怖いかも?小暮さんの召喚獣がどんなものか気になりますよね・・・・・・

と、とにかく小暮さんの活躍（?）もあり、話が大分盛り上がってきました。2年生vs3年生ですか・・・・・ふむ、召喚大会以来の盛り上がりを見せてくれそうですね♪

☆

その後、小暮さんの一言で話が大きく広がり本格的に二年生と三年生による肝試しが行われることになりました。まあ、何だかんだでノリがいいのが三年生なんですよね♪

本格的にそう言うことになったからには、色々ルールの追加や変更をしなくてはいけないからと学園長室にアキさんとゆーさん、それからツネとナツに来て貰いました。ちなみに小暮さんは『私はあくまで参謀なので♪』ってツネ達に任せちゃいましたよ・・・・・・アレは確かに『影の参謀』ですよね・・・・・・

「それで・・・・・えっと常夏先輩?」

「「常村と夏川だっ！いい加減覚えろ!?」」

「すまんな先輩方。このバカは個人名を覚える脳のキャパシティが不足しているようだ」
「失礼なっ！雄二だって常夏コンビって清涼祭の時言ってたじゃないか！」
「・・・・・アンタらは何しに来たのかねぇ？」
《あはは・・・・・では皆さん、そろそろ始めましょうかね？》

なんか上手い具合にいつも話が脱線してしまうのが、何だかちょっと心地いいですね。

「まあいい。それで？月野から大体のことは聞いたがルールはどうなっている？」
「俺たち三年も夏期講習参加者はほぼ全員参加だ。多少は俺たちも準備することになった」
「ほう？そりゃ助かるな。まあ今回は俺らが主体になるからセンパイ方は準備に関して言えば俺らを使ってもらって構わない。んでもってルールだが・・・・・コレが今んとこ俺たちが予定していたルールだ。文句があれば一応聞くが」

そう言ってゆーさんが取り出したのはＡ４サイズのプリント。てか作るの随分早いですね？自分とアキさんもゆーさんに１枚ずつ貰い、ざっと目を通ります。何々？

？二人一組での行動が必須。　一人だけになった場合のチェックポイント通過は認めない。
※一人になっても失格ではない
？二人のうちのどちらかが悲鳴をあげてしまったら、両者とも失格

とする。
?チェックポイントはA～Dの各クラスに一つずつ。合計四ヶ所とする。
?チェックポイントでは各ポイントを守る代表者二名（クラス代表でなくても可）と召喚獣で勝負する。撃破でチェックポイント通過扱いとなる。
?一組でもチェックポイントを全て通過できれば驚かされる側、通過者を一組も出さなければ驚かす側の勝利とする。
?驚かす側の一般生徒は召喚獣でのバトルは認めない。あくまでも驚かすだけとする。
?召喚時に必要となる教師は各クラスに一名ずつ配置する。
?通過の確認用として驚かされる側はカメラを携帯する。

・・・・・こんな感じですかね?流石ゆーさん。この短時間で随分と詳しいルールを作ったものです♪

「へぇ～。結構凝ったルールだね。面白そうだよ」
「あとはコレに設備への手出しは禁止するってルールも付け加えて貰うよ。折角学園側が援助してやって大掛かりな設営も召喚の為の教師も応援するつもりなのに、お披露目会前に壊されたとあっちゃ堪んないね。それに上手くいけば盆休みにでも一般公開でもしたいからね」

イメージアップまで考えようとは、流石に計算されてますね・・・・・学園長らしいと言えばらしいですが♪

「おい・・・・・あー、坂本だっけか?この悲鳴の定義ってのは

一体どうなってる？」

ツネがゆーさんにプリントを見ながら尋ねます。ふむ、確かにどうするのでしょうかね？

「ん？そこか・・・・・そうだな、その辺は声の大きさで判断するのはどうだ？カメラを携帯させる訳だし、そこから拾った音声が一定値を超えたら失格って事でどうだ？」

「おいおい？そんな事が出来るのか？」

《ああ、なるほど・・・・・こーさんがいましたね？それに関しては大丈夫そうですよ、ツネ、ナツ♪》

つくづくこーさんのスキルの高さには感心しますよ。・・・・・・方向性がアレですがね？

「ま、それならいいがな。チェックポイントの勝負科目はどう決める？」

「それについてはお互いに一つずつ科目を指定ってことでどうだ？」

「一つずつ？二つずつじゃないのか？」

「ああ。もう既に英語と現国の教師には話をしちまったからな。受験で選択されやすいその二つならそこまで有利不利もないし問題ないだろ？」

なるほど、三年生が参加することも計算の内でしたか。A～Dクラスでの肝試しですし四つのチェックポイントが存在します。そのうちの英語と現代国語が決定済みとなっているので、残る二つの科目をそれぞれが選ぶことになるってわけですね？

「ま、これならなかなか楽しめそうだな。一応三年の他の連中にも話してくるが、おそらく不満はないだろうさ。・・・・・・ところで坂本よ、景品ってのは何になるんだ？」

ナツがそう尋ねます。ああ、そう言えばそう言うことになってたんですっけ？

「ん？そういや俺も知らねえな。・・・・・・おいババァ？景品って何なんだ？」

「フッ・・・・・そう言ってくるんじゃないかと思ったよ。聞いて驚くんじゃないよ？それはね・・・・・・」

「「「「《それは？》」」」」

「・・・・・この開発中の腕輪さね！」

そう言って学園長が取りだしたのは・・・・・黒い腕輪、ですか？

「どうだい驚いただろう！これを最初の通過者、もしくは最後まで守りきった奴らにプレゼントしようじゃないかい！」

《おおー♪凄いですっ！カッコいいですね！》

「「「「・・・・・いや！？また腕輪なの（かよ）っ！？」」」」

・・・・・こうして景品も無事に（？）決まった所で本格的な肝試しの準備に入ることになりました。

75時間目　3-Aにようこそ～影の参謀さん登場?～（後書き）

ありがとうございました♪いかがだったでしょうか?

……まーたキャラ崩壊（?）してますね。小暮さんファンの方、すんません（汗）彼女は今回のある意味キーパーソンになる方になる予定です（あくまで予定ですからまだどうなるかは自分もわかりません）。これまた原作崩壊になる予定ですが、色々とよろしくです。

ん?城はでないのかって?……あー、何と言いますかまだ原作でも名前くらいしか出ていないのでちょっと扱いにくいなー……って理由で今回はお休みです。彼って原作ではどんな人になるんですかねー?

ま、とりあえず今回はここまで!読んでいただきありがとうございました!

７６時間目　夏と準備と肝試し～妖怪大戦争勃発！～（前書き）

どうも糖分摂取魔です！今回の話でシュレ猫さんにアドバイスをいただきました♪詳しくは後書きで。シュレ猫さんありがとうです！他にも様々なアドバイスを書いてくれた方々も本当にありがとうです♪

さて。いやはや、実はこの話でちょうど１００話分更新したことになるんですよ！わーい！わーい！……だからって何もないですが（汗）うーむ。今度何か記念に書くべきかな？

そんなわけでいつも通り行きますかね♪７６時間目、ＧＯ！

76時間目　夏と準備と肝試し～妖怪大戦争勃発！～

翌日は肝試しの準備期間と言うことで、とりあえず一通りの準備を始めることになりました。驚かされる側の二年生が準備をするのはちょっとアレですが、午前中まで三年生は夏期講習を受けて午後から二年生とバトンタッチして三年生が準備するとのこと。折角参加してくれるのですし、下地を作るって意味でもここは頑張って準備しませんとね♪

『おーい！誰かそこの釘とってくれー！』
『暗幕足りねえぞ！体育館からひっぺがしてこい！』
『ねぇ、ここの装飾は涸れ井戸だけでいいの？』
『うん、後は三年生がやるってさー！』

「これはまた、凄い騒ぎじゃな」
《そうですね。皆さんも何だかんだで補習疲れしてたんでしょうかね？活き活きとしてますよ♪》
「ま、そりゃそうよ。いくらアタシたちだって勉強ばかりだと息が詰まるわ。それに期末試験が終わったところだし、渡りに船ね♪」

と、優姉さんが笑顔で応えます。準備は男子でやると言っておきましたが、参加者のほとんどの女子も準備を手伝ってくれています。
何でも・・・・・・

『そこの男共！喋っていないでさっさと手を動かしなさい！お姉さまの手を煩わせるつもりですの！』
『清水さーん！ここはどうするんだっけー？』
『ああ、ここですか？お待ちください・・・・・ふむ、ここは三年生が手を加える予定のようですので何もしなくて大丈夫ですわ』
『そっか、ありがとねー！』

・・・・・清水さんが女子全員に『美春たちも準備をやりましょう！』と声をかけてくれただけでなく、率先して皆さんを動かして下さっているんですよね。正直本当に助かります。

「ふぅ・・・・・こんなものですわ」
《お疲れ様です、清水さん♪正直助かりましたよ。予定より早く終わりそうですし》
「はっ！小学生に言われるまでもないですわ。・・・・・これはただ単に借りを返そうとしただけです。それに男共だけ罰なんて美春のプライドが許しませんわ！」
《ふふっ♪そうですね》

この人も大概意地っ張りですよねー♪清水さんと話しているといつものメンバーの皆さんが集まってきました。

「こんなもんかな？ねえ雄二、後はカメラだけだっけ？」
「おう。って言ってもそれはムッツリーニの仕事だからな。ムッツリーニ、首尾はどうだ？」
「・・・・・・・・・・問題ない」
《皆さんお疲れ様でしたね。もう大体終わったので休憩しましょう

♪≫

「じゃの。それにしても随分雰囲気が出ておるの」

と言う感じの男子組と、

「・・・・・中々凝っている」

「本当よね。ふふっ、面白くなりそうね」

「あはは♪姫ちゃんもナミーも顔真っ青だよー？」

「お、お姉さま？御気分が優れないようですが大丈夫ですか？」

「うぅ・・・・・皆さん頑張り過ぎですよ。私はどちらかと言うとお勉強の方がいいです」

「ホントよ。いくら作りものでもリアルすぎるわ・・・・・美春、ウチ大丈夫じゃないかも・・・・・」

と言う感じの女子組ですね。男子全員はともかく、女子の皆さんは怖がっている姫路さん・島田さんと平気そうな霧島さん・工藤さん・清水さん・優姉さんに大きく分かれましたね。・・・・・まあ、優姉さんとか霧島さんとかが怖がっている姿が全然想像できないので、予想通りと言えば予想通りでしょうか？

「ねえ、ところで造ちゃん？アタシたちの召喚獣もオカルト仕様・・・・・だっけ？そう言うものになっているんだっけ？」

≪・・・・・造ちゃんは止めてくださいね？それはそうと、はいです。皆さんのもそうなっているハズですよ？≫

「あっ！だったらボク召喚してみたいなー♪ちょっと興味があるんだよねー。自分の特徴や本質がそのまま召喚獣に出るなんて楽しそうじゃない♪」

そう工藤さんがワクワクした目をして言ってきます。

《それでしたら、先に先生方がフィールドを形成してあるそうなので今すぐにでも呼び出せるはずですよ？》

「そうじゃったの。そういえばムッツリーニもまだ召喚しておらんかったではないか。工藤と一緒に召喚してみてはどうじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・何故工藤と俺がセットで？」

ふふっ♪そりゃ・・・・・・ねえ？

「おお！ムッツリーニ君もまだなの？ボクも初めてだから・・・・・・優しくしてね？」

「・・・・・・・・・・・・ブハッ！？」

？？？いや、どうしたんですかね？こーさん、また鼻血を出して・・・・・？どうでもいいですが最近本当にこーさんの鼻血芸（？）もキレが良くなってきましたね・・・・・・

「愛子、あんまり土屋君で遊ばないの」

「あはは♪そうだねー、ムッツリーニ君ゴメンゴメン。お詫びに一緒に召喚しよう♪」

「・・・・・・・・・・・・だからどうして俺と工藤でセット何だ？（ドクドクドク）」

「「試獣召喚（サモン）っ！！」」

そう言いながらも、結局仲良く二人で召喚しましたね。

「そうね。アタシもやってみようかしら」
「・・・・・・私も」
「お姉さま！美春のはきっと怖くないハズですし、美春も召喚しますね！」

「「「試獣召喚（サモン）っ！！！」」」

と、こちらのまだ召喚していない三人も召喚ですか・・・・・・皆さんどんな召喚獣でしょうね？ちょっぴり楽しみです♪

ポンっ！×５

そして現れた召喚獣たちは・・・・・・

こーさん　↑ヴァンパイア
工藤さん　↑のっぺらぼう
優姉さん　↑九尾の狐
霧島さん　↑雪女
清水さん　↑天女？

・・・・・・ってな感じですかね？

「これはまた、みんなの特徴が良く出ているね」

「ムッツリーニはヴァンパイアだな。まあ確かにいつも血を欲してるイメージがあるからな」
《ああ、確かに最近鼻血を何処でも出してますからね？》
「若い女が好きという点でも酷似しておるしの」
「ムッツリーニ君らしい召喚獣じゃない♪」
「・・・・・・・・・・・・（ブンブン）」

まあ、こーさんのはある程度は予想してましたがね？

「へー、ボクのはのっぺらぼうかー♪」
「あれ？でもどうして工藤さんのはのっぺらぼうなの？」
「（工藤のは顔がない、つまり素顔を見せないところに何かあるとかじゃねえのか？）」
《（あっ・・・・・ひょっとして工藤さんの本質は自分を隠す事とかでしょうか？）》
「（もしかしたら、普段のセクハラ発言とかは工藤さんのポーズなの・・・・・？）」

そう工藤さんに聞こえないように話していると、

「そう言えば、ワシは前に演劇の題目の候補として怪談話を探しておったのじゃが、その中にのっぺらぼうの尻目と言う物があっての」

「「《尻目？》」」

「うむ。そののっぺらぼうは何でも、人に出会うと全裸になったそうじゃ」

「「《・・・・・・・》」」

何そのオチ！？自分たちの心配を返して下さい・・・・・・

「姉上のは・・・・・・九尾の狐かのう？ふむ、ワシのに少々似ておるかの？」

《確かにしっぽが分かれているところなんか、ヒデさんの召喚獣にそっくりですね♪》

「あらそうなの？秀吉のは確か猫又だっけ？・・・・・・ふふふっ、それはもう似合うんでしょうね♪」

「姉上・・・・・・それはワシを苛めておるのかの・・・・・・？」

「そう言われれば確かに木下さんの召喚獣と秀吉の召喚獣は似てるね。流石双子の姉妹だね♪」

「誰が妹なのじゃっ！？」

相変わらずのヒデさんの扱いですよね・・・・・・？ヒデさんドンマイです。

「・・・・・雄二。私のはどう思う？」

「ああ。よく召喚獣にお前の本質が表れているな。冷酷で周囲を凍てつかせるところなんかそっくりだ」

「と言うより、一度捕まえたら二度と逃げられないように凍らせるところが本質だったりして？」

「明久、冗談じゃなくマジで止めろ・・・・・・心当たりがあり過ぎる」

「・・・・・・？？？」

ま、まあ霧島さんの場合はクールビューティってところも含まれて

いるのではないでしょうかね？

さて、ところで一番気になっていた人が一人いますが・・・・・・

「み、美春のは怖くなくていいわね・・・・・・」

「そ、そうですね。でもこれって何でしょうか？」

「美春も知りませんわ？何でしょうかね？」

そう、清水さんの召喚獣ですが・・・・・・これはちょっとわかりませんね？見た目は天女みたいですがどう言う召喚獣で、どう言った本質や特徴かさっぱりですよ？

「・・・・・・・・・・・・鬼子母神（きしもしん）」

っと、皆さんで首を傾げていると、こーさんがボソッとつぶやきます。キシモシン？

「何じゃムッツリーニ？そのきしもしんとは？」

「・・・・・・・・・・・・元々人間の子供を食べる凶暴な鬼女。仏に数百人いる我が子の一人を隠されたことで母親の悲しみを知り、安産を願う仏に帰依した仏のこと」

「「「「「「「「《ああ！なるほど！》」」」」」」」」

「どうしてそこで納得するのですの？」

いや、全員納得ですかね？最近の清水さんの本質だと思いますし、

自身の子供が大切な所は清水さんのお父さんからもよくわかりますし？・・・・・本人は何が何でも認めないと思いますが。

皆さんでそんなことをしていると、休憩に入ったFクラスの数人がこっちにやってきました。

「お前らさっきからなんか面白そうなことやってるな」
「これがオカルト召喚獣か？特徴や本質が関係あるって言う？」
「なるほど、ムッツリーニは流石に紳士な召喚獣だな」
「そう言えば吉井の召喚獣は頭がないデュラハンだったな。わかっていたが」
「なんせバカだからな！」

いやいや、それは流石に酷いですよ？アキさんも怒りますよ？

「（ムッ！）そう言うのならそっちも喚び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣が出てくるからさ」
「フッ・・・・・おいおい吉井。そんなことを言っていいのか？」
「俺たちの召喚獣がバカ日本一のお前に負けるわけないだろ？」
「俺の本質はなんといってもジェントルマンだからな。酷い召喚獣なんかが出てくるわけがない。いいか、見てろよ・・・・・」

「「「試獣召喚（サモン）っ！！」」」

三人の呼び声に応え、それぞれの召喚獣が現れます。さて、どんな・・・・・

・・・・・ズズズズ　↑ゾンビ登場
・・・・・・ズズズズ　↑ゾンビ登場
・・・・・・ズズズズ　↑ゾンビ登場

おおぅ。これはまた、その・・・・・・

「「きゃぁぁあああああああああああああああ！？」」

「ちょっ！？姫路さん、美波！落ち着いて！？大丈夫、大丈夫だから！」

「お姉さまっ！・・・・・そこのゾンビ軍団っ！早く消しなさい！正直そんな汚いものは見るに堪えませんわ！」

あ、あらら・・・・・姫路さんと島田さんが本気で失神しそうですね。大丈夫でしょうか？

「・・・・・ば、バカなっ俺の召喚獣が何故っ！？」

「こいつらはともかく、俺の根性が腐っているとでも言いたいのか！？」

「おいっ！お前にだけは言われたくないぞっ！見ろ、お前の方が腐ってんだろがっ！」

そして突然始まったゾンビ同士の内輪もめ（？）。話しの論点が間違ってますよー？

「うるせえっ！大体お前らがいるせいで俺の本質が曇って見えるんだ！」
「んだと！やんのかっ！？」
「はっ！・・・・・・まとめて相手になるぜっ！」
ちょ、ちょっと！？どんどん不味いことになってきましたよっ！？

《皆さん！いいから落ち着いて・・・・・・》

「「「うおおおおおおおおおおおっ！！！」」」

止める暇もなく、突如始まったオカルト召喚獣同士の戦い・・・・・・
・いや、そのゾンビ状態での戦いは色々とマズイ気が・・・・・・

「「い、嫌あああああああああああああああああっ！？（バタリ）」」

「ふ、二人ともっ！？しっかりして！」

あ、やっぱり姫路さんと島田さんがログアウトしましたね・・・・・・
・そして、

「お、お姉さま！？・・・・・・・・コンの・・・・・・・クサレ外道ドモガ・・・・・・」

・・・・・・そして、今の召喚獣よりも怖いものを降臨させてしまったようですね。最凶の暴走戦士、再び現る。もうどうなっても知りませんよ？

「ゼンイン、マトメテ、シマツスル！」

「「「うおっ！？な、なんか来たっ！？」」」

清水さんがゾンビたち目掛け、召喚獣を繰り出します。その姿は本当に鬼子母神そのものですね・・・・・・鬼の名がここまで映える方も珍しいです。そしてまさに鬼神の如く、ゾンビたちを次々と屠ります。

飛び散る腐肉・・・・・・宙を飛ぶ生首・・・・・・弾ける四肢・・・・・

あまりの凄惨な状況に、この場にいる他の方々もパニックになりかけています。なまじ等身大になっている分余計に質が悪いですね・・・・・

『きゃあああっ！こっち来ないで！・・・・・・試獣召喚（サモン）っ！』

『ミホ！畜生、よくもオレの彼女をビビらせてくれたな！・・・・・・試獣召喚（サモン）っ！』

『おいっ！今こいつ彼女って言ったぞ！』

『裏切り者だ！』

『『『よっしゃ、殺せぇっ！！試獣召喚（サモン）っ！』』』

そしてあっという間に広がる混沌の海。阿鼻叫喚の妖怪大戦争へ・・

・・・・って!?

《み、皆さん落ち着いて下さいっ!?》
「お主ら、いい加減にせんか!?」
「あー・・・・・・これは凄いわね?」

「「（きゅー・・・・・・・・）」」

「姫路さん!美波!目を開けてっ!しっかりするんだ!」

「・・・・・雄二、私も怖い。失神しそう」
「嘘つけ。ま、お前が倒れても俺は介抱せんからな?」
「・・・・・・なら、雄二を介抱する」
「なっ!?」

「ムッツリーニ君、ボクも怖ーい♪（抱きっ）」
「・・・・・・・・・・・・!??（プシャアアアアア）」

誰か止めてっ!?いや、もうこれだけですでに納涼になってます!
冷や汗が止まりませんよっ!?

『おう、お前らご苦労さんだった、な・・・・・・?』
『そろそろ俺らと交代だ・・・・・・って!?な、何だこりゃ!?

すでにとんでもないくらいの肝試しになってんぞっ！？』

・・・・・その後、ツネとナツが交代に来るまでこの地獄絵図？いえ百鬼夜行は静まりませんでした。どうしてまだ肝試しが始まってもいないのに驚かされる方が先に驚かす方を脅かすんでしょうかね・・・・・・？

７６時間目　夏と準備と肝試し～妖怪大戦争勃発！～（後書き）

ありがとうございました♪７６時間目いかがでしたか？

今回出た美春の召喚獣が原作と違いましたね。これシュレ猫さんのアドバイス何ですよ♪美春の性格変わってどうしようかなって思っていた矢先に、本当にいい召喚獣を教えて頂きました。シュレ猫さんありがとうです！

他にも皆さんの様々なアドバイスや感想をいただけて嬉しいです。これからもどうかよろしくお願いします！

てな訳でまた次回！読んでいただきありがとうです！

77時間目　オカルト召喚獣版～肝試しスタート♪～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。いつも変な更新ですみません（汗）

どうでもいい話ですが、最近何か親に病院に行かされるんですがMRIって疲れますね……うるさいし動いちゃダメって言われるし長いし変な点滴？入れられるし？退屈なんですよねー。そもそも、なしてそんな面倒なことさせられるのやら？

っととと、まあ、そんな愚痴はさておきそろそろ行くよ77時間目！よろしくです！

77時間目　オカルト召喚獣版～肝試しスタート♪～

「うわぁ・・・・・何か、凄いことになったね・・・・・・」
《凄いです・・・・・ここまでやるなんて・・・・・・》
「そうじゃな・・・・・・学園側もかなりの投資をしておるようじゃの」

翌日、お化け屋敷と化した新校舎三階を覗いてみて、正直自分ら全員が驚きました。薄暗い雰囲気といい、外観からでも伝わってくるほどに複雑そうな構造といい、まさかここまで凝った作りになっているなんて・・・・・・

「こりゃ三年側も結構本気だな。あっちも講習最終日くらいはハメを外したかったってところか？」

流石のゆーさんも、応援してくれた学園側や設営を仕切った三年生がここまでやってくるとは思わなかったようで、感嘆の声を上げているますね。

「こ、ここまで頑張ってくれなくても良かったんですけど・・・・・」
「そ、そうよね。頑張りすぎよね」

そして雰囲気満点な作りになっている装飾を見て、姫路さんと島田さんは顔に縦線を入れて悲嘆の声を上げていますね。昨日あれだけ

のことがあったんですから無理もないでしょうか？まあ、苦手な人にはこの上なく嫌な演出に見えるのでしょうし。

「雄二。僕らは旧校舎に集合なんだよね？」

「ああ。三年生は新校舎の三階、俺たちは旧校舎の三階でそれぞれ準備。開始時刻になったら一組ずつメンバーが順次新校舎に入っていくって寸法だ」

旧校舎と新校舎を繋ぐ渡り廊下には防火シャッターが下ろされています。一応雰囲気は伝わってくるものの中の様子は窺えない状態ですね。・・・・・あの中で一体どんな準備をしているのやら・・・・

《自分らの準備はもういいんですか？》

「・・・・・・・・・・・バッチリ。カメラも用意した」

そう言ってこーさんがが大きな鞄を掲げてみせます。あの中には何台かのカメラが入っているようで、自分らはそのカメラを持って中を進んでいくことになっています。不正チェックと通過の証拠、あとは待っている人を退屈させないためだとか、色々と理由があってカメラを使うことになっているそうですが・・・・・おそらく小暮さんの指示でしょうね。二つの意味で。

「ならばワシらの準備はカメラとモニターの用意と組み合せ作りじゃな？」

「あ、そっか。組み合わせを決めてなかったよね」

ルール上肝試しは基本二人一組です。何でもまったく怖がらない人がいても肝試しが盛り上がるように・・・・・という配慮だそうです。ま、勝つためにはそう言う怖がらない人同士を組み合わせるのがベストではありますかね？

「ま、折角だ！組み合わせは極力男女のペアになるようにすっか！その方が盛り上がるからな」

「あれ？雄二、いいの？いつもなら勝ちに行くのに、そんな適当な感じで」

あー、確かにいつものゆーさんならもう少し皆さんに指示を与えるハズですよね？

「ん？別にいいだろ。俺としては今回補習が無くなっただけでも万歳だ。ババァの腕輪にも興味は一切ないし、皆が楽しめればそれが一番だ」

《なるほど・・・・・そうですね。それに自分らはこの肝試しの発案者ですし》

皆さんに楽しんでもらいたいのは自分も同じですからね♪

「ふ～ん。なるほどね～。だから男女ペアにしたのか～。そうか～・・・・・んで？本音は何、雄二？」

「翔子にペアになるように脅された腹いせに全員巻き込んでやろうと思った」

《ゆーさん・・・・・・》

まあ、ある意味ゆーさんらしいと言えばらしいのですかね？それにしても男女ペアですか。・・・・・考えてませんでしたね。人数的にちょっと男女に分けるのは難しいですがね？

さて自分はどなたを誘いましょうかね？・・・・・姫路さんと島田さんはアキさんが誘うのがベストですし、霧島さんはゆーさん確定。工藤さんはこーさんとなれば・・・・・妥当に優姉さんか、無理そうなら男同士にはなりますがヒデさんが一番でしょうかね？

「ねえ、造」
《はい？どうかしましたアキさん？》
「肝試し、一緒にペアにならない？」

「「ダメじゃ（ダメよ）！」」

何とも見事な双子のシンクロ率。それにしたってどうして本人よりも先に木下家の姉弟さん方は拒否するのでしょうかね？

『『『吉井、異端者とみなし直ちに処分する』』』

そして、どうして皆さんこんな時まで暴走するんですかね？

《こらこら皆さん？ダメですよ暴れちゃ・・・・・それはそうとアキさん？どうして自分を？どうせなら姫路さんと島田さんを誘ってみてはいかがですか？》
「ど、どうして二人を指定するのかわかんないけど・・・・・あの状態の二人は、誘うのは可愛そうじゃないかな？」

そう言ってアキさんが指差す方向には・・・・・・

『瑞希、どうしよう。もうすでに背筋が寒くなってきたわ・・・・・・』

『い、一応お守りとか持ってきました・・・・・・美波ちゃんもどうぞ』

『ありがと瑞希・・・・・・』

『い、いえ・・・・・・』

・・・・・あー、なるほど。

「それで他のみんなも大体決まっているみたいだし、造はまだペアが決まってなさそうだったから」

「だ、ダメじゃ！造はワシと一緒に・・・・・・」

「秀吉？アタシも造ちゃんと行きたいんだけど？」

「「ほぅ（へぇ）・・・・・・？」」

「《・・・・・・・・・・・・あ、あの？》」

「姉上、ワシだって譲れぬものがあるのじゃぞ？」

「へぇ？面白いじゃない。アタシだって同じよ？」

突如始まる姉弟喧嘩。何かちょっと新鮮ですね？喧嘩の内容がちょっぴり気になりますが。

《あー・・・・・アキさん？肝試しが始まってからでもまだペア

は決めれますよ。多分》
「そだね・・・・・今余計なことすると、嫌な予感がするし」
まったく、ただペアを決めるだけでも一苦労ですよね。ま、ウチの学園らしいですが。

「まあ組み合わせは大体でいいだろ。細かいとこは後回ししとけ。それにまずは他の参加者たちを楽しませてやらないとな」
「雄二、さっきもそれ言ったよね・・・・・・？」
《えっと、ちなみに本音は？》
「翔子とペアになったからには、他の連中にクリアさせて俺は参加しないで済むよう全力で仕向ける」
「《ゆーさん（雄二）・・・・・・》」
何と言うか、涙ぐましいと言いますか・・・・・・

「さて、そろそろ突入順とかも決めなきゃならんし、とっとと集合場所に行くぞ」
《そうですね。本部は自分たちFクラスでしたよね？》
「あ、そうだったね。それにしても設備がBクラス並みに変わったおかげでこの人数でも入りきるなんてホント凄いよね」
そうなんですよね。参加者はFクラス全員と覗きをしたFクラス以外の二学年男子、夏期講習に参加していた有志の女子が五十人弱、つまり二学年の半分以上が参加してますが問題なく全員がFクラスに入ることが出来ましたし♪

「ムッツリーニ。モニターの準備は？」
「・・・・・・・・・・・問題ない。Ａクラスの設備のディスプレイを運び込んである」
「えへへ～♪ボクとムッツリーニ君が許可貰って来たんだよね～♪」
「よし。それじゃ、夏の風物詩を気軽に楽しむか」
「そだね。今回は酷い罰もないし、楽しもうか」
「私はあまり、楽しみじゃないです・・・・・・」
「う、ウチも・・・・・・大体何でこんなことすんのよ。日本人の感覚はズレてるわ」
「姉上、後で決着をつけようぞ」
「望むところよ・・・・・・！」
《まだやってたんですか！？》
「・・・・・・・・・・・色々と良いショットを期待してる」
俄かに活気づき始めた校舎の中、皆さん降って湧いたお祭り騒ぎにそれぞれの思いを抱きながら歩いていました。

『嗚呼、お姉さま・・・・・・おいたわしや、お姉さま』
『清水さん。いい方法があるよ』
『・・・・・・あなたはＡクラスの久保利光君、でしたね。美春に何の用ですか？』
『手を組まないかい？君は君の、僕には僕の護るべき大切な存在がいるだろう？』
『・・・・・・ほう？美春にとっても、悪い話ではなさそうですね』
『これは同盟だ。利害の一致からきたものだよ。僕は陰ながらあの子たちを護る』

『いいでしょう。美春もお姉さまを陰ながら護ります』

ガシッ！×２　↑（紳士淑女同士が）手と手を取り合う音

ゾクッ！×３　↑（造・明久・美波の）背筋が寒くなる音

「「《・・・・・・・・・・・・っ！！？》」」

「い、今何か悪寒がしたわ！？やっぱり嫌よ！肝試しなんてやりたくないわ！？」

「ね、ねえ造？美波だけじゃなくて僕も何か悪寒がするんだけど・・・・・？」

《ふ、不思議ですね？自分も何か大変な事態が進行しつつある気がしましたよ？》

だ、大丈夫ですよね？これあくまでレクリエーションの肝試しですし・・・・・・？一抹の不安はありますが、夏の納涼☆オカルト召喚獣肝試しスタートです！

☆

《ね、ねえ・・・・・・あの角怪しくない？》

《そ、そうだな・・・・・何か出てきそうだな・・・・・・》

こーさんが設置したモニターから、まず尖兵として出撃したBクラスの男女のペアの様子が映し出されます。向かって貰った第一のチェックポイントのBクラスのセットの作りは古めかしい江戸時代の風景で、画面越しでも結構雰囲気が出てますね。

《そ、それじゃ俺が先に行くから・・・・・・》
《うん・・・・・・・》

そしてカメラからも見るに怪しい角の周囲を映しながら、警戒態勢を保ったままそこへ歩みます。

《行くぞ・・・・・・・！》
《うん・・・・・・・！》

脅えながらも角を曲がる2人・・・・・・見ているこちらにも緊張が走ります。ですが、そこにはただ長い廊下が続いてるだけでした。

「な、何よ。何もないじゃない」
「良かったです。あそこには何もないんですね・・・・・・」

姫路さんと島田さんもホッとしたように胸を撫で下ろしていると・・・・・

《《ぎゃぁぁあああああああああああっ！？！？》》

「「きゃぁぁあああああああああああああっ！！」」

カメラの向こうと、こっちで同じような悲鳴が聞こえます。あらら・・・・・お二人とも叫び声だけでビックリするなんて、本当に苦手なんですね？

「・・・・・・・・・・・・失格」

カメラの向こうからの二人の悲鳴は、こーさんがセットしたデジタルメーターの赤い失格ラインを超える音声レベルを示していました。

あ、そうそうちなみに・・・・・・

「・・・・・・・？？？」

姫路さんや島田さんと同じ女子でも霧島さんはまったくもって動じていませんね。先ほどから姫路さんたちが何が怖かったのかを首を傾げつつ、画面を見ています。以前霧島さんに怖いものはないか聞きましたが、『・・・・・・私を虜にする雄二が怖い』って言ってましたもん。何その饅頭怖い。

「う～ん・・・・・・先発隊が一つ目の曲がり角でいきなり失格なんて・・・・・・向こうも結構本気だね」

「だな。流石は三年生といったところか」

《それもありますが、向こうにこういうことが得意な方がいますからね・・・・・・》

まだ二組目が出発する前に失格なんて・・・・・小暮さん本気（マジ）ですね。

「これだと最初のところに何があるかわからないね」
「そうじゃの。あれだけではむしろ余計に身構えてしまい、恐怖が助長されるだけじゃな」
「・・・・・・・・・・・二組目がスタートした」

こーさんが指差したモニターを見ると、Ａクラスの男女のペアがスタートしたみたいですね。

「今度は向こうがどんなことをしてくるのかはっきり映ればいいんだけど」
「うむ。そうじゃな」
「いや、それは難しいだろうな」
《ですね・・・・・寧ろカメラを使っているからこそ難しいでしょうね》
「???雄二に造、それってどういう・・・・・」

《《ひゃぁぁあああああああああああああああっ!?!?》》

「「きゃぁあああああああああああああああっ!!」」

あ、開始早々また失格みたいですね。今度は驚かすところが先ほどと違うようです。ポイントを変えてきましたか。

《ち、血まみれの生首が壁から突然でてきやがった・・・・・・》
《後ろにいきなり口裂け女がいるなんて・・・・・・》

「のう造に雄二。さっきお主らが言った難しいとはどういうことじゃ？」
《ああ、それは・・・・・・》
「・・・・・・カメラを使っているのは私たちだけじゃないと思う」
自分が言うよりも先に霧島さんが答えてくれます。そうなんですよね。

「三年生もこの映像を見ているってこと？」
「そりゃそうだろ。そうじゃなかったらカメラの使用なんて俺たちに有利すぎる。俺らに文句を言わなかったって事は向こうは向こうでメリットがあるからだ」
「そうなの？　僕はてっきり自信があるからだと思ってた」
《確かにそれもあるかもしれませんが、こちらのカメラの映像を見ていたら、驚かされる人がどの位置でどこらへんに注意を払っているかがわかりますし・・・・・・》
「そう言うこった。それなら驚かす側としてもタイミングが取り易いし、死角から襲いかかるのも簡単だからな」
「あ、そっか」

まあ、皆さんには言いませんが、それを考えた小暮さんがカメラ越しで皆さんの驚く姿を楽しんでいることが、ある意味一番の理由でしょうがね・・・・・・？それはもう楽しいでいるでしょうね、全力で。

「それにお前ら以外の召喚獣は物に触れないからな。障害物をすり抜けて急襲できる。こりゃ本当に三年は凄えぞ?随分考えてある」

《あ、あはは・・・・・・》

「それじゃどうすんのさ?」

「勿論何とかするさ。やられっぱなしは気に食わねえ。最初は様子見と思っていたが、これはそうも言っていられないな。あまり点数の高い連中が失格になりすぎるとチェックポイントが辛い」

おや・・・・・?ゆーさんのエンジン始動ですか?ちょっぴりいつものゆーさんらしくなってますよ♪

《そうですね。向こうもチェックポイントには成績の良い人を配置しているでしょう》

「よっし。んじゃ、こっちも手を打つか。皆!順番変更だ!Fクラスの須川&福村ペアと、同じくFクラスの朝倉&有働ペアを先行させてくれ!」

こうして、いよいよ本格的に肝試し攻略作戦が始まりました。さてさて、三年生の皆さん?覚悟しててくださいね。自分らの力、見せてやりますよ♪

77時間目　オカルト召喚獣版～肝試しスタート♪～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

基本原作に沿って話を進めていますが、キャラの方向性がやっぱり方向音痴ですのでどこに行くのか作者すらわからないと言うひどい状況です（苦笑）ナニコレ酷い

そうそう、なんか冒頭でも話したんですが、最近病院によく行かされていて書く時間がなんか少なくなってきてます（汗）くっ、これはアレでしょうか？実は親がＰＣ使わせないようにわざと……？前は『学校休めるぜい！やったね糖分！』的なことだったんですがねー（笑）

それはともかく、ちょびっと更新遅れるかも？まあ、あまり遅れないようには頑張りますね♪

読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです！

78時間目　良くも悪くもFクラス～これが彼らのやり方～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。最近暑いせいか寝汗が止まらないです（苦笑）

話飛びますが、肝試しって実際どうなんでしょうね？あんまりそう言うイベントやったことないので一度くらいはやってみたいですが……楽しいのかな？

んじゃ今日も行きます78時間目、よろしくです。

78時間目　良くも悪くもFクラス～これが彼らのやり方～

ついに始まった二年生ＶＳ三年生による肝試し大会。まずは三年生優位の出だしですが、ゆーさんのやる気が上がり皆さんに指示を与え始めました。いよいよ攻略開始ですね。

ゆーさんの指示通り、須川くんと福村くんがＢクラスの中に入りました。ふむ、彼らはどうやら怖がっている様子は無いようです。カメラを手に二人とも迷いなく進みます。

「あ。こうやって何でもないように映してもらうと、さっきよりも怖くなくて助かりますね」
「ホントね。これならまだマシよね」

姫路さんと島田さんの言うとおり、無警戒にドンドン進んで貰っているお陰か見ている側にも余裕が生まれてきます。脅かす側もタイミングが取りにくいでしょうし。

《お、あそこだったか？　何かが出るって場所》
《だな》

そして三組ほど立て続けに失格となった曲がり角を曲がり、何気なく二人が横の壁を映すと、

「「きゃぁぁあああああああああああっ！！」」

そこには血みどろの生首が浮いていて、さらにその背後には耳まで口が裂けている女の人がいました。

「「きゃあぁあああああああああっ！きゃあぁあああああああああっ！！」」

力いっぱい声を上げる姫路さんと島田さんを筆頭に、教室でモニターを見ている方々が一斉に脅えます。おおぅ、確かにこれは耐性が無い人には厳しいかもですね。

・・・・・・ですが、

《おっ。この人、少し口は大きいけど美人じゃないか？》
《いやいや。こっちの方が美人だろ。首から下がないからスタイルはわからないけど、血を洗い流したら綺麗なはずだ》

・・・・・そこはやっぱりFクラス。論点が斜め上にずれているだけでなく、何か真剣に考察し始めました。うん、貴方方は本当に逞しいですね。

「な、なんでアイツらあんなに平気そうなのよ！？アキたちも！怖くないの！？あんなにリアルなお化けなのよ！？」

顔を青くして島田さんが叫びます。いえ、そんなことを言われましても？

「んー、別に命の危険があるわけじゃないからね」
「まっ、グロいものはＦクラスで散々見ているしな」
「・・・・・・・・・・・ＦＦＦ団の猛攻を浴びる明久に比べれば」
《まあ、昨日の妖怪大戦争で大分耐性が付きましたからね》
「うむ、ワシもじゃ。それに今更じゃしの・・・・・・」

こういうことに慣れるのも間違いだとは思いますがね？最近自分もＦクラスによく馴染んでますよね～♪

《それにしても暗いな・・・・・何かに躓いて転びそうだ》
《ああ。それなら丁度良い。あそこにある明かりを借りて行こうぜ》

そう言って、装飾品として飾られている提灯を借りようと須川くんと福村くんがそれに近づき・・・・・・

・・・・・ポンッ！

「「きゃぁあああああああああああああああっ！」」

突如、提灯に小さな手足と鬼のような顔が現れます。あれは・・・・・提灯お化けですか。なるほどセットの中に召喚獣を紛れ込ませるなんて、とても良い演出ですね。

《お？これ掴めないぞ？》
《召喚獣ならつかめるだろ。試獣召喚(サモン)っ》

中々粋な演出もまったく動じず、福村くんは喚びだしたゾンビに提灯お化けを持たせて更に先に進み始めます。あらら、向こうの提灯お化けさん何だか手足をバタバタさせて可愛いですね♪

《何か可愛いですね♪あの提灯お化けさん》
「か、可愛いのかの？・・・・・・まあ、他のに比べればそうかもしれんが」
「造ちゃんって、ちょっとずれた感性を持っているわよね？そこも可愛いけど」

だから誰が造ちゃんですか・・・・・？てか優姉さんは本当に動じてませんねっ！？優姉さんの怖いものって何でしょうかね・・・・？

そんなことを考えつつ須川くんと福村くんの快進撃を眺めます。しばらくすると二組目の朝倉くんと有働くんもスタートしました。と、そこでアキさんが、

「あれ？・・・・・ねえ、雄二は男女のペアにするって言ってなかったっけ？」
「む、確かにそうじゃのう。どうして先ほどから男同士のペアばかりなのじゃ？」

とアキさんに続きヒデさんも尋ねてきます。まあ、色々と事情があるのですがね？

「ああ、大体そうなるようにはしているんだが、唯でさえ俺たちFクラスは女子が少ないからな」
《加えて言うなら、この肝試しの参加者の割合から考えると明らかに男子が多すぎるんですよ》

何せ、二学年男子全員が（強制）参加で一方の女子は五十人弱が参加です。女子と男子の比率は大体1：3くらいですから。そりゃ男子同士のペアも多くなるでしょう。ちょうどそんな話をしていると・・・・・

《あー、畜生。なんでこの俺が須川なんかと・・・・・・！》
《お前がモテないから悪いんだろ》

モニターの向こう側でそういう会話が。あ、あはは・・・・・・どうやら二人ともパートナーに不満アリってことのようですね？彼らも折角ならもっと肝試しらしく楽しみたいって所でしょうかね？

《何だと須川・・・・・・？お前だって、朝から二十人位に声をかけたけて全滅だっただろうが！しかも造ちゃんにまで手に掛けようとしたそうじゃないか！？》
《ち、違う！あれは別に断られた訳じゃない！向こうには向こうの都合があったんだ！　俺がモテないわけじゃない！てか、福村っ！お前の方が造ちゃんに声掛けまくってただろっ！》
《う、うるさい！オレはただ造ちゃんが寂しそうだったから声を・・・・・》

そう言えば朝から皆さんに色々声掛けられまくりましたね？肝試しの舞台に夢中であまり聞いていませんでしたが。

・・・・・・ピーッ！

って・・・・・・あっ！？音声レベルが赤いラインを越えた気が・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・失格」

「あやつらは何をやっておるのじゃ・・・・・・・」

《あ、あはは・・・・・・Ｆクラスらしいと言いますか》

「ま、でもあの二人のおかげで相手の仕掛けがわかったね」

「だな。朝倉たちもいることだし、チェックポイントまで行くのは時間の問題だろう」

その後ゆーさんの読み通り、朝倉くんたちは順調に進み難なくチェックポイントまで辿り着きました。ただ、やはりチェックポイントはいつも通りの試験召喚獣による戦いですし、相手もＡクラスの実力者のペアでしたのでやられてしまいましたが。

「まぁ、こんなもんだよな」

「そうだね。チェックポイントは純粋な点数勝負だもんね」

「しかしあの二人のお陰で向こうの仕掛けとチェックポイントまでの道のりはわかったぞい」

そうですね。お二人ともお疲れ様でした♪

「そう言うわけだ！これで他のクラスの連中を送り込める確立も上がったはずだ！皆！　ここは一気に勝負を決めるぞ！今の連中に対抗できそうな連中はドンドン突入してくれ！」

ゆーさんが待機中の皆さんに声をかけます。さてどなたが行くのでしょう・・・・・・

『『『俺達に任せておけ！！』』』

「お前らが対抗できる点数じゃないだろ！？」

一番最初に自信満々に立ち上がったのは、我らがＦクラスの皆さんでした。勢いと気合いがウリですからね♪

☆

《よしっ！Ｂクラス制覇！》

《やったね真一君！》

おお！お疲れ様です♪朝倉くんたちが撃破されてから七組目の突入でやっとＢクラス担当の三年生を撃破することが出来ました。まあ、今回は補充試験が無いですしチェックポイントの三年生の入れ替えもありません。つまりいかに沢山の成績優秀な方たちを上手くチェ

ックポイントまで導くかがポイントですかね？

これでBクラスは攻略しましたので、次からはDクラスを攻めて行けばいいんですよね。心なしか怖がっていた姫路さんと島田さんがホッとしてますね。あれだけ色々なお化けさんが出てくればそうなりますかね。

《それじゃあ、引き続きDクラスに向かうぞ》

《頑張ろうね、真一くん》

カメラの向こうで先ほどBクラスのチェックポイントを通過してくれた二人がそのままDクラスに向かいます。いくらBクラスよりもDクラスの方が狭いとはいえ、ここから先はまた知らないセットですし気をつけて貰いましょうね。

《怖かったらいつでも言えよ。俺が守ってやるからな》

《うん。ありがとう。頼りにしてるからね

・・・・・あらあら♪男女仲良く肝試しですか？ふふっ、これも一応楽しむ為のものですし良い雰囲気ですかね♪

ところで教室待機の男子諸君？

『『『チッ・・・・・・！』』』

クラス全体に響くような舌打ちしないでくださいよ・・・・・どうやらB、Cクラスの男子が中心のようですね。さっきも言いまし

たが女子が少ない分、男女のペアは結構貴重何ですよね。嫉妬するのも無理ないのでしょうか？・・・・・あれ？そう言えばＦクラスの方はそんな人は一人もいないようですが？

《意外にＦクラスの皆さんって常識人さんでしょうかね？》

「・・・・・・造よ、お主甘いぞい？」

そう言ってヒデさんがゆーさん付近のＦクラス男子を指差すと・・・・・

「坂本、次は俺に行かせろ。野郎に本当の敵は二年にいるってことを教えてやる」

「待てよ近藤。ここは【安心確実の味方殺し】の異名を持つこの武藤啓太の出番だ」

「いやいや。【逆恨み清算します】がキャッチコピーの原田信孝に任せておくべきだ」

「そうだよ雄二。Ｆクラスの自慢の行動力で、やってしまおう」

「《・・・・・・・・・・・・・》」

Ｆクラスはアキさんの言うとおり本当に行動力がありますね。どう考えても間違った方向にね！？ちょっとでもＦクラスの皆さんに感心した自分の嬉しい気持ちを返して下さい！？

「おいおいお前ら・・・・・とにかく落ち着けよ」

《ゆーさんの言う通りですよ》

「じゃな。今はそんなことをしている暇は・・・・・」

「・・・・・そう言うことは、クラス全員でやるべきだ」

「《ゆーさん（雄二）が一番落ち着いて下さい（落ち着けぃ）！？》」

最早わかりきっていたことですが、ツッコミが足りませんね・・・・・そう言えばFクラスのモットーが『蔓延る悪事は見逃せど、他人の幸せ見逃せない』でしたっけ・・・・・全て間違いだと誰か気づくべきですよね？

「けど今仲間同士でやり合うのはまずいね。折角先に進んでいるし、彼らたちには勝つために頑張ってもらわないとね？」

「そ、そうじゃな。勝ちを狙うのは当然じゃろうな」

《できればアキさんのその不穏当な発言も撤回してくれると尚いいのですがね？》

そうアキさんにツッコミを入れようとすると、

《きゃあああああああっ！！》

《ど、どうした真美！？何かあったのか！？》

《何かヌメッとしたものが首筋に・・・・・！》

「・・・・・・・・・・失格」

あらら？いつの間にか失格のようですね？何がありましたか？カメラに何も映っていませんからよくわかりませんでした。そして・・・・・

《うきゃぁあああああああああっ！》
《おいっ！どうした！？》

《おわぁっ！？へ、蛇！？》
《か、カエル！カエルが降って来た！》

連鎖するように次々と皆さん失格になります。・・・・・・ふむ。
これはおそらく、

《今度は直接接触系のようですね》
「あー、そうみたいだね」
「くそっ。向こうもバカじゃないな。上手く切り替えてきてやがる」
「切り替えるって驚かし方を？」
「ああ。刺激する感覚を視角から触覚に変えてきやがった。Ｂクラスでは視覚オンリーだったからな。急に切り替えられたせいで視覚以外の感覚についていけないだろ」
《（ボソッ）あっちはそういう人間の心理をうまーく操ることが出来る人が指揮を取ってますからね》

最初のＢクラスではモニター越しにも散々視覚の恐怖を与えられてきました。ですが今度はそのモニターに映らない感覚を攻められますから、結構厄介ですよね。

「・・・・・・・・・・どうする？」
「勿論こっちにも手はある。Ｆクラス部隊第二陣、出撃準備だっ！」

『『『おうっ！』』』

気合いの入った返事と共に四組のペアが出撃します。ホント、Ｆクラスの皆さんはこういうノリが良くて楽しいですよね♪

78時間目　良くも悪くもFクラス～これが彼らのやり方～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

明日（と言うより今日？）、明後日はちょっとまた行くとこあるので更新ができないｏｒ遅れると思います。感想の返信も遅くなる可能性もあるので、そこのところは許して下さい。てかまた検査……面倒くさいですよね（苦笑）本当にすみません。

まっいいか♪とりあえずはまた次回！気長に待っていてもらえると助かります。

７９時間目　女装って～着る人にとっては不幸です～（前書き）

どうも、糖分です。遅くなってごめんなさい

ちょっと、困ったことになりました（汗）とりあえず、後書きと活動報告で書きますね。

とりあえず今日は７９時間目。どぞどぞ

79時間目　女装って～着る人にとっては不幸です～

《おい。坂本の話や戻ってきた奴の話だと、このあたりでよく分からない物を当てて来るらしいぞ》
《そうなのか。それだとさっきまでのBクラスよりやりにくいな》
《ああ》

最初に入ったペアの話が聞こえます。やっぱり少々やりにくいようですね。

《そこで俺はちょっとした対策を考えてきた》
《対策？何かいい方法でもあるのか？》
《おう。とっておきの方法だ。・・・・・いいか？突然触って来る物が怖くて悲鳴を上げてしまうのは、それがなんだかよく分からない物だからだ》
《確かにそうだな》

ま、暗闇の中で突然そう言うことをされれば、大抵はそうなるでしょうからね。

《だから、その触れてくる物を『俺の事が好きで手を繋ぎたいけど、恥ずかしいからそこらの物を使ってしまう可愛い女の子』と脳内変化してやればいい。・・・・・例えばそう、造ちゃんがモジモジしていると想像してみな？》

・・・・・・・・・・・・ん？

《な、なんだと・・・・・・!?それはあまりに妙案すぎる・・・・・!ヤバイ、恐怖するどころか興奮してきたぞ!?武藤、俺はお前のその頭脳が恐ろしいぜ!》
《ふっ・・・・・・!よせやい!照れるぜ!》

「「「「「・・・・・・・・・・・・・」」」」」

なんでしょう。色々とFクラスを見る目が痛い気がします。

「あやつらは本当にバカじゃの」
「思春期かしら?それにしてはもう色々と間違っているわよね」
《え、えっと・・・・・・どう言えばいいのでしょうかね?》
「あはは～流石だね?ボクでもそんなこと考えつかなかったよ」
「・・・・・・よくわからない」
「ねえ雄二。あの2人、会話がモニター越しに会話が聞こえてる事知らないのかな?」
「わからん。なにせ恐ろしい頭脳の持ち主だからな」

「「「「「《確かに恐ろしい（ね）（ですね）（わね）（のう）》」」」」」

と、そこでその二人にコンニャクらしきものが触れられて・・・・・・

《《ふおぉぉおおおおっ!たまんねぇえええええええええっ!》》

・・・・・・ピーッ！

「・・・・・・・・・・・・失格」

《逆効果でしたね・・・・・・・・》

「明久。あの二人を後で始末しておいてくれ」

「了解。手早く殺ってくるよ」

この行動のせいか（？）、Ｆクラスの最近上がりつつあった評価がまた下がり始めたとのこと。ちょっぴり皆さんのＦクラスを見る目が辛いです・・・・・・

「こ、このクラスは見ているだけならそこまで怖くないので助かります」

「そ、そうね・・・・・・ウチも平気かも」

姫路さんと島田さんも先ほどよりか調子が戻ってきたようですね？それでも悲鳴が上がるたび、お二人もビクッっと身体を震わせていますが。

「雄二。今の二人（バカ）はともかく、他の皆は順調そうだね」

「そうだな。突然の接触に驚きはするものの、悲鳴を上げるほど繊細な神経をしている連中じゃないからな」

普段は肝試し以上に危ないことしてますからね・・・・・・

「という事はそろそろ向こうの方でも何か動きを見せる頃合いじゃろうな」
《そうでしょうね。向こうにもこちらの動きは大体筒抜けです。接触系に慣れてきた今だからこそ仕掛けられるでしょうね》
今はこちらが順調な感じですし、向こうもこちらが順調な分潰しておきたいでしょうから。

「そうなると、一体何をしてくるかな？」
「さあな。見当もつかないが・・・・・・ん？」
《あれ？先ほどと雰囲気が変わしましたね？》
「そうじゃな。暗くてわかりにくいが・・・・・・広い空間に出たように見えるの。あとは・・・・・・ふむ、中央に照明らしきものが見えるぞい」
照明？・・・・・目を凝らして見ると確かにそう言うものが見えますね？てかヒデさんよくわかりましたね？

《なんか不気味だな》
《そうだな。よく分からないがヤバい感じだ》

カメラを持った二人も只ならぬ雰囲気に緊張が走ります。モニター越しのこちらも何故が冷や汗が・・・・・・？

《突っ立っていても仕方ない。先に進むぞ》

《わかった》

二人の歩みに合わせてカメラも暗闇を映します。そしてその問題の空間の中央まで後三歩、といったところで画面に動きがありました。

バン、と荒々しく照明のスイッチが入る音が響き渡り、暗闇から一転して光がさす画面の中央には、夏川俊平ことナツがスポットライトを浴びて静かに佇んでいました。

・・・・・・全身フリルだらけの、ゴシックロリータファッションで。

『『『『『ぎゃあああああああああああああああああああああああああ』』』』』

《ナツ・・・・・・貴方》

画面の内外問わず、そこら中から響きわたる悲鳴。あのゆーさんやアキさん、更には優姉さんたちまで悲鳴を全力であげています。

「おいぃいいいいいい!?何だあれはっ!?」
「き、汚いっ!やり方も汚ければ映っている絵面も汚いよ!」
「きゃぁあああああああっ!?お化け!いや、お化けじゃないですけどお化けより怖いです!」
「うぅぅぅ・・・・・・っ!　夢に見る・・・・・・!絶対ウチ今夜は眠れないわ・・・・・・・!」
「・・・・・・気持ち悪い」
「ぐっ・・・・・・造ちゃん、目の保養させて・・・・・・・じゃないとアタシ、あの映像を脳にインプットしちゃいそう」
「流石のワシも耐えられんぞ!?造!あの先輩は確かお主の友人であったろう!?」
《え、ええ・・・・・・・》

どうやら流石のFクラスメンバーや霧島さんや優姉さんも悲鳴は避けられなかったようです。

《なんだ?今こっちの方から悲鳴が聞こえてこなかったか?》
《ああ。間違いない。そこで悲鳴が・・・・・・ぎゃあああああ!!》

そして、一組目の悲鳴が呼び水となり、かなりまずいことになっています。

「雄二!早く手を打たないと全滅だよ!」
「く・・・・・・っ!だがすでに突入している奴らは助けようが無い・・・・・・!」
「そんな!?彼らを見捨てるしかないの!?」

《ぎゃあああああああああっ!?誰か、誰か助けっ・・・・・・》

《嫌だ!嫌だ嫌だ嫌だ!ここから出してくれぇえええええええええ!》

《助けてくれ!それが出来ないならせめて殺してくれえええええええ!》

《☆●◆▽「?!×っ!?》

「・・・・・・・・・・・・突入部隊・・・・・・全滅・・・・・・っ!」

「くそぉ!皆ぁっ!」

注ぎ込んだ戦力は全て壊滅。画面内外問わず、色々な意味で大パニックになりかけています。

「おいっ、造!?アレは何だ!?三年はガチで俺らを殺りに来てんのか!?」

《・・・・・・そうみたいですね。向こうはこちらに全力で攻撃すると同時に、三年内に『夏川はあれだけ本気なんだ!夏川の犠牲を無駄にするな』的な全体の士気を上げることもやってのけているんでしょう・・・・・・》

さっき映ったナツの頬には・・・・・・一筋の涙の痕が残っていました。・・・・・・ナツ、敵ながらその自身を犠牲に三年に勝利をもたらそうとする態度、見事ですっ!

「な、なんて恐ろしい作戦だ・・・・・・くっ、正直三年を嘗めていたようだな？向こうにゃとんでもない策士がいるぞ！？」

『坂本っ！仇を・・・・・・！アイツらの仇をとってくれ・・・・・・！』

『このまま負けたら、散っていったアイツらに申し訳が立たねぇよ・・・・・・！』

「ああ！わかっている！向こうが全力で俺らを潰す気なら、こっちも全力で攻めるだけだっ！突入準備をしている連中を下げろっ！ムッツリーニ＆工藤ペアを投入するぞ！」

『『『おおおおおおおおおおおおおおお！！』』』

二人の名を聞き、教室中に雄たけびが上がります。確かにこーさん＆工藤さんの二人なら何とか出来るでしょうね。

『『『ムッツリーニ！　ムッツリーニ！　ムッツリーニ！』』』

『『『工藤！　工藤！　工藤！』』』

鳴りやまない『工藤＆ムッツリーニ』コールの中、その張本人たちは緊張した様子もなく、

「だってさ。よろしくね、ムッツリーニ君♪」

「・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

いつも通りの様子のようです。ですが明らかに戦意に満ちています

ね。

「頼むぞ、二人とも。なんとかあのセンパイを突破して、Dクラスをクリアしてくれ」
「う～ん。約束はできないけど、精一杯頑張るよ坂本君」
「・・・・・・問題ない。三年に俺たちの全力を見せつけてやる」
そしてある意味二学年最強の二人がペアとなり、出陣しました。

☆

「皆！もうすぐ衝撃映像が来るよ！女子は全員目を閉じるんだ！」
こーさん&工藤さんがもう少しで問題の場所に差し掛かります。すでに皆さん顔が真っ青ですね・・・・・・画面越しから度し難いプレッシャーが溢れてきます。

「つ、土屋君たちがダメだったら、あとはこちらも対抗して明久君がフリフリの可愛い服を着て行くしかありませんね・・・・・・」
「そ、そうね。それしか手はないものね。仕方ないわよね」
「二人ともそのおかしな提案は気が動転してる所為だよね？」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「ねえ、二人とも？その沈黙は来るべき衝撃映像に対して、耳と目

を塞いだからだよね？ね？」

「造ちゃん、秀吉。待機しておきなさい」

《うん、ワケがわかりませんね？》

「それは姉上、ワシらにどうしろと言っておるのじゃ？」

「ヤダ・・・・・二人ともアタシの口から言わせる気？」

「《・・・・・・・・・・・・・》」

不味いですね。どうやら女子の皆さんは先ほどの映像から大分混乱している模様。これは本当に早く攻略しなければならないようです・・・・・自分らが攻略されてしまう前に。

《ムッツリーニ君、あの先だったっけ？さっきの面白い先輩がいるのって》

《・・・・・・・・・・・・準備は出来ている》

そんな中あの二人はとても落ち着いています。どうやら何か対策があるとのことですが・・・・・？

「やっぱりまた真っ暗になってるね」

「突然現れる方が効果があるからな。タイミングを見計らってスポットライトを入れるつもりだろう」

《ですがあの二人はどうするつもりなんでしょうか？》

「うむ・・・・・まあ、見ておればわかるじゃろうて」

「だな・・・・・っ！そろそろ来るぞ！」

「うん・・・・・っ！」

ぼんやりと暗闇の中に人影が見えます。そして・・・・・・

バンッ！（スポットライトのスイッチが入る音）

ドンッ！（こーさんが大きな鏡を置く音）

ズーン・・・・・・（ナツが落ち込み凹んでいる音？）

《・・・・じ、自分でもわかっていたことだが・・・・・・改めて鏡で見ると死にたくなるな・・・・・・》

《・・・・・・・・・・仕方のないこと。寧ろ先輩が自己陶酔している人種でなくて安心した》

《想像以上の破壊力だ・・・・・いかん、目眩が・・・・・・》

《あはは♪ムッツリーニ君。この先輩ちょっとおもしろいね。来世でなら知り合いになってあげてもいいかなって思っちゃうよ》

《ちょっと待て！お前今俺の現世を全否定しねえか！？っていうか生まれ変わっても知り合い止まり！？》

《ごめんなさい・・・・・どうか百歩譲って知り合いで勘弁して貰えますか？》

《くっ・・・・・って！？そこのお前っ！何撮ろうとしてんだっ！？》

《・・・・・・・・・記念になるかと》

《じょ、冗談じゃねぇっ！？・・・・・くぅ、すまねえ皆！俺はいったん下がるぞっ！？》

ナツは涙目になりながらその場を去りました。え、えっと・・・・・一応Ｄクラスの脅威は去ったのでしょうかね？

「それにしても、工藤さんって意外と厳しいこと言うんだね。あの先輩も涙目だよ？」
「・・・・・普段愛子はああいうこと言わない」
「となると、誰かの入れ知恵か？」
「美春が教えましたが？」
《・・・・・清水さん？》
「お姉さまを怖がらせた罪は重いですもの。しっかり教えておきましたわ・・・・・あの三年をトラウマにさせるほどの罵倒を」

その瞬間、自分は清水さんにはあまり逆らわない方がいいことを改めて実感しました。お怖い怖い。

あ、ちなみにナツですが後から聞いた話ですと、皆さんに『夏川っ！見なおしたぞ！』とか『お前・・・・・泣いていいからな？』とか励まされたり、褒められたりと株が上がったとのこと。本人のトラウマ度（？）も上がったそうですがね？

《・・・・・・・・・先に進む》
《多分ポイントまでもう少しだね～♪》

と、二人はナツが走り去った方向に向かい進みます。この二人、本当に色々と頼りになりますね。通路を少し進むと、二人の言っていた通りすぐにチェックポイントに辿り着きました。

「あ、意外と早く着いたね」
「まっ、Bクラスと違ってDクラスは狭いからな。今さっきのが最

後の仕掛けだったんだろう」
《あらら、もう召喚するみたいですね？》

《《《《試獣召喚（サモン）っ！》》》》

現れた召喚獣はこーさんは吸血鬼、工藤さんがのっぺらぼう、三年生の二人はミイラ男とフランケンシュタインですね。こーさんたちは昨日見せて貰ったのでわかりますが、三年生の二人の特徴は『怪我をしやすい』と『根が優しい』でしょうかね？相変わらず上手い設定で面白いです。

≪Ａクラス　市原亮次郎　保健体育　３０３点≫
＆
≪Ａクラス　名波健一　保健体育　３０１点≫

ふむ、中々高い点数ですよね。まあ、あの二人も三年生のトップ層ですし。

《ムッツリーニ君。先輩達の召喚獣なんだか強そうだね。操作もボク達より１年長くやってるし、結構危ないかな？》
《・・・・・・・・・・確かに、強い》

そして対するこーさんと工藤さんのペアは・・・・・・

≪Ａクラス　工藤愛子　保健体育　４７９点≫
＆

≪Fクラス　土屋康太　保健体育　５５７点≫

《・・・・・・・・・・・・・が俺と工藤の敵ではない》

《確かに、ね》

・・・・・れ、レベルが違いすぎるっ！？瞬きすらさせて貰えない中、ミイラ男とフランケンシュタインは一度も組み合うことなく倒れていました。圧倒的な戦闘力。この二人には保健体育なら、最早教師ですら敵わないとさえ言われていますし・・・・・・

「ね、ねえ？今何が起こったの・・・・・・？」

《自分も何も見えませんでしたよ・・・・・・？》

「ああ。はっきりと見えたわけじゃないが・・・・・・ヴァンパイアの方は一瞬狼に変身してフランケンを引き裂いて、元に戻っていた」

《ゆーさんよく見えましたね・・・・・・？》

恐ろしい攻撃速度ですよ・・・・・・

「それで、のっぺらぼうの方は？」

「ああ。はっきりと見えたわけじゃないが・・・・・・一瞬全裸になってミイラ男をボコボコに殴って、また服を着ていた」

わかりません・・・・・攻撃するのにどうして脱ぐ必要があるのか、今一わかりません・・・・・・

「あと、その間一瞬でムッツリーニは出血・止血・輸血を済ませていた」

・・・・・・それだけの攻防を繰り広げながら、どうしてこーさんはそこまでのことが出来るのでしょうかね？

「・・・・・・雄二」

「っ！？な、なんだ翔子？」

「・・・・・・私も脱ぐ」

「待て、落ち着け。話せばわかる気がしないが話し合おう」

「・・・・・・じゃ、雄二も脱ぐ」

「すまんっ！？お前が言いたいことがさっぱりわからん！」

この二人は本当にぶれませんね・・・・・・？

《じゃあDクラスもクリアだね。次はどこに行けばいいんだったけ？》

《・・・・・・・・・・・・Cクラス》

《はーい、了解♪・・・・・・ところでムッツリー二君。どうして鼻にティッシュを詰めてるのかな？カナ？》

《・・・・・・・・・・・・花粉症》

《へぇ～。ふ～ん。花粉症、ねえ～？》

あっちもあっちで、変わりませんし・・・・・・

「明久君、今何かいやらしい事考えてませんか？」

「ううん。全然」

「で、アキ？本音は？」
「後でムッツリーニに今の対決をスロー再生してもらおうと思ってる」
「これが土屋君の記録用ハードディスクでしたよね？」
「そうみたいね？いっそ破壊しちゃう？」
「あぁぁっ！ダメだよ、返して姫路さんに美波！その、えっと、そうだ！不正の監視用に使うかもしれないよ！」
「これだけの人数が証人として見ているんだから大丈夫です」
「そうね。こんなもの必要ないわよね？」
「そ、そんなっ！？」

「「そ、それに・・・・・アキ（明久君）はウチら（私たち）のを見ていればいいんですっ／／／／／／！？」」

「うん、ゴメンなさい。謝るから二人ともその発言は止めてね？でないとFクラスの男子が雄二もろとも僕を亡きものにしようとしてるから」

アキさん、姫路さん、島田さんも・・・・・・

「造ちゃん、秀吉。暑いわよね？脱がないのかしら？」
《優姉さんの一言で、背筋が凍ったので大丈夫です♪》
「うむ。姉上のお陰でワシら、冷や汗が止まらぬぞ？」

優姉さんに自分とヒデさんも・・・・・本当に自分たちメンバーはいつでもどこでも変わりませんね。これが自分たちの日常です。

79時間目　女装って～着る人にとっては不幸です～（後書き）

ありがとうございました！いかがでしたか？

えっと、前書きでも書きましたが困ったことになりました（汗）実はちょっと、これから更新ができなくなると思います。実は、何かわかりませんが、入院&手術することになりまして（苦笑）どうしてこうなった！

首の付け根らへんにコブ？ぽいものができてたんですが、なんか悪いものだったらしくお医者様に『切りましょう』ってドヤ顔で言われました。怖っ！？んで、8月に入ったらすぐ手術ですって。くっ……夏休み&バカテスを見る時間を返せ！

てな訳で（？）、ちょっと皆さんに聞きたいのですが2，3話くらいまとめて更新してもいいでしょうか？話がついてこれないかもしれませんが……

とりあえずはこの肝試し編だけでも終わらせたいので頑張りたいです。急いで書くので雑な所は多々あると思いますが……

すみません、自分の都合で……とりあえず、読んでいただきありがとうございました！

８０時間目　色を使った作戦って～一番卑怯だと思う～

まあ、色々と苦戦しましたが、こーさん＆工藤さんのおかげでＤクラスクリアです。二人はそのままＣクラス攻略に向かって貰っています。

《あれ？　この口が二つある女の人って何のおばけだっけ？》
《・・・・・・・・・・・・二口女》
《じゃあ、あっちの体が伸びてる女の人は？》
《・・・・・・・・・・・・高女》
《じゃあ、あっちの毛深い男の人は？》
《・・・・・・・・・・・・どうでもいい》

あの二人は流石ですね。余裕がありますし冷静に対応出来てますから・・・・・・そう言えばあの二人の怖いものって何でしょうかね・・・・・・？

「順調だね雄二。このままだとあの２人で全部突破出来ちゃうんじゃない？」
「いや、そうでもない。さっきの保健体育の成績を見て向こうもムッツリーニの正体に気付いただろうからな。そろそろ対策を打ってくるはずだ」
《ああ・・・・・確かにそろそろ仕掛けてくるかもですね》
「え？どういう事？」
《いえ、自分は昔はこーさんのことを詳しくは知らなかったのですが、こーさん、結構三年内でも有名だったんですよ》

「だろうな。ムッツリーニの名前は知らなくても『保健体育が異様に得意なスケベがいる』って事くらいこの学園の大抵の奴ならは知ってるだろう。ってことは弱点が知られている可能性が高い」

こーさんの弱点ですか?それってつまり・・・・・・

「「《・・・・・・鼻血?》」」

「ビンゴだ。何も失格にするのには悲鳴じゃなくてもいいわけだ。大きな音さえ出せたらな・・・・・・例えば、鼻血の噴出音とかどうだ?」

「「《・・・・・・・・・・・・ま、まさか!?》」」

い、色々ツッコミたいのに、こーさんの普段の行動から考えてツッコめないっ!?何かありそうな気がしてきましたよ・・・・・・?

「今回の相手はどうも一筋縄じゃいかねえみたいだからな・・・・・・お、なんかまた仕掛けがあるたいだぞ」

ゆーさんがモニターを指差すと・・・・・・薄明かりの下で女性が一人佇んでいます。

って!?あ、あれは・・・・・・・・・・・・!?

《ゆ、ゆーさん!マズイっ!?こーさんを早く下げてっ!》

「あん？一体どうし・・・・・・・っ！？」

《・・・・・・・・・・・・っ！（クワッ）》

《む、ムッツリーニ君？何をそんなに真剣な顔を・・・・・・って、なるほどね・・・・・・》

徐々にその人の姿が見えてきます。そう、その女性は髪を結いあげた切れ長な眼をしており、着物を着崩している・・・・・・

《ようこそいらっしゃいましたお二方。私、三年Ａ組所属の小暮葵と申します》

・・・・・・この肝試しの最強の相手、小暮（参謀役）さんでした。

『『『『『眼福じゃぁぁあああああああああああっ！！』』』』』

小暮さんの出現に、教室から歓喜の声があがります。と言いますか、二学年男子ほぼ全員ですかね？例外は・・・・・・

どうやら、霧島さんに言い寄られているゆーさん（ちょっと小暮さんに対抗意識を燃やしている様子）

姫路さん＆島田さんに目隠しされているアキさん（目隠しをしたのが早すぎてアキさん何が何だかわからない様子）

そんな皆さんを呆れた様子で見る自分とヒデさん（なんかいつも通り過ぎでしょうかね？）

小暮さんに興味を示す気配が微塵もない久保くん（やっぱり久保くんは真面目さん何ですかね？）

・・・・・この五人以外の男子は全員叫びます。ついでに女子からすんごく痛い目で見られています。

《・・・・・・・・・・・・この程度で・・・・・・この俺・・・・・・が・・・・・・・っ！》

《・・・・・・・ムッツリー二君。足にきてるみたいだケド？》

《・・・・・・・・・・・・・（ブンブンブン）》

《・・・・・・・ふーん・・・・・・そうなんだ？》

ああ、こーさんが本当に色々とマズイ状態に・・・・・・てか工藤さん？貴女ちょっぴり対抗意識燃やしてますよね？あの顔は『ムッツリーニ君を後で誘惑しちゃおう♪』的な顔ですし・・・・・・

《あー、すみません。小暮先輩ですか。こんにちは。ボクは二－Ａの工藤愛子です。その着物似合ってますね》

《ありがとうございます。こう見えてわたくし、茶道部に所属しておりますので》

《あ、そっか。茶道って着物を着てやるんだよね。その服装はユニフォームみたいな物だよね。ちょっと着方はエッチだけど》

《はい。ユニフォームを着ているだけです》

工藤さんがなるべく小暮さんをこーさんの視界に入らないようにガ

ードしています。てかやっぱり、ちょっぴり工藤さんライバル心抱いてませんか？

《そうですか。それじゃあボク達先を急ぐので♪・・・・・・ホラ、行こっかムッツリーニ君》

《・・・・・・・・・・・・（コクコクコク）》

こーさんがもう何やら見れいられないほどの状態ですね・・・・・・少しでも油断すると意識が跳びそうな気が・・・・・・

「お、おお！あのムッツリーニがあれだけの色気の前に鼻血を我慢するとは！これはもう勝ったも同然じゃないか！」

「ま、まあそうじゃの。これでこの勝負は頂きじゃな？」

《・・・・・お二人とも、甘いですよ・・・・・・？》

「「えっ・・・・・・？」」

何せ、相手は小暮さん。こんなことだけで終わる相手ではありませんし？そう思っていた矢先に・・・・・・

《御二人ともお待ちになって。実はわたくし・・・・・・》

《？なんですか？まだ何か・・・・・・》

《・・・・・新体操部にも所属しておりますの》

はだけられた着物を完全に脱ぎ捨て・・・・・・その下から、レオタードを身に纏う小暮さんが現れました。あ、相変わらずあの人は・・・・・・

『土屋康太、音声レベルおよびモニター画像全て赤！失格です！』

「畜生っ！やり方が汚ねぇ！はだけた着物だけでも限界ギリギリだってのに、その下に露出満点のコスチュームだと！？あのムッツリーニがそんなもんを直接見て耐えられるわけがねぇだろうが！」

「・・・・・・雄二、浮気者」

「ちょっ！？いや、待て違うぞ！だから、その・・・・・・アレだ！？」

「・・・・・・雄二もレオタード着てみる？」

「すんませんでしたっ！」

「えっ！？何？何なのっ！？雄二っ！何が起きているか教えてよっ！てか、今見なきゃ一生後悔するような映像が画面に流れている気がするんだけどっ！？姫路さん、美波！お願いっ目隠し取って！？」

「「駄目です（駄目よ）？それを取ったらどうなるか、わかっていますよね（いるわよね）」」

「ぐっ・・・・・・それでも見たいようっ！？」

ゆーさんもアキさんも暴走しかかっていますね・・・・・・？この二人でこうですから、

『大変だ！土屋が危険だ！助けに行ってくる！』

『一人じゃ危険だ！俺も行く！』

『俺も行くぜ！仲間を見捨てるわけにはいかないからな！』

ま、こうなりますよね？いつの間にか男子諸君が独断専行を始めました。あうぅ、その様子だと・・・・・・

『『『うぉおおおおおおぉぉっ！新体操おおおおおおおおおおっっ！！』』』

「・・・・・・突入と同時に全員失格したようじゃの・・・・・・」
「Ｆクラスの男子だけじゃなくて他の男子も行ったみたいね・・・・・・」
「たまに思うけど、うちの学校の男どもってやっぱりバカなのかしらね・・・・・・」
「どうして覗き騒ぎが起きたのかがよくわかる気がします・・・・・・」
《やっぱり合宿でＦクラスの皆さんを覗かせなくて正解でしたね・・・・・・》

ここに来て、戦力が激減しました。こーさんを除くいつものメンバー以外はＦクラス全滅、その他大部分の男子も失格ですね。流石小暮さん・・・・・・巧いやり方です。いえ、小暮さんの策に引っかかる二年生もアレですが・・・・・・

「（ぜーぜー）ま・・・・・・マズイ、な・・・・・・このままだと、久保以外、男子全員が、やられちまうぞ・・・・・・」

・・・・・・ゆーさん、何があったんですか？

「えっと、何が何だかわからないけど雄二！この状況を打破するためにも僕が行った方がいいと思うんだ。僕の本能が『さあ行け！はよ行け！行けっ！！』って叫んでるし」
「明久君？もしこのまま暴れるようでしたら・・・・・・」
「玲さんを呼んでおこうかしらね？」
「ＨＡＨＡＨＡ、二人とも冗談だよ。ここは他の作戦を考えようね？」

・・・・・そうして下さい。玲さんを呼ばれたら、自分も困りますし。

《それでゆーさん？本当にどうするつもりですか？》
「あ、ああ・・・・・・しゃあない！皆よく聞け！ここは木下姉妹に突破して貰うぞっ！」
「えっ・・・・・・アタシは造ちゃんとじゃないの？」
「雄二っ！今お主、木下姉『妹』言ったじゃろ！？」
「頼んだぞ秀吉」
「よくわからないけど頑張ってね秀吉！大丈夫、姉妹の力が合わさればどんな相手でも勝てるさ☆」
「・・・・・・つ、造っ！こやつら、もう嫌じゃ！？」
《あ、あはは・・・・・・ヒデさん、ドンマイです。まあですが、確かにヒデさんと優姉さんのペアなら上手く行きそうですね♪ガンバですよ、二人とも！》
「む・・・・・・そ、そうかの？うむ、そうじゃな！頑張ってくるぞい！」
「ふふふっ♪そうね。造ちゃんの愛の応援さえあれば何とかなりそうね♪」

い、いや・・・・・愛？それはどうかと思いますがね？とにかく木下姉弟出陣です！

☆

《と言ったものの困ったわね。アタシあんまりこういうの得意じゃないのに》

《姉上。踏んどる。セットの唐傘お化けを踏んどるぞ》

《あ。ごめんなさい。壊れてないわよね？》

《うむ。大丈夫みたいじゃ》

ふむ・・・・・やはりこの二人は安心できますね♪優姉さんは悲鳴を上げる前に、冷静に分析するタイプですし、ヒデさんは色仕掛けには引っかかりません。問題ないですかね♪

「これで問題なく先に進めるね」

「だな。あの2人なら色仕掛けになんて掛からないだろうからな」

《いや、そもそもここまで苦戦する方がある意味稀なのでは？》

そう言っても始まりませんかね？何か小声でヒデさんと優姉さんが話しているようでしたが聞き取れませんね？まあ、話しながら進んでいるので問題ないですか？そして特に何かに引っかかることなく小暮さんのところに辿り着きました。

《あら？あなた方は・・・・・そうですか・・・・・女の子同

士のペアで来ましたか。ですが意外ですね？てっきりそろそろ月野君がくる頃かと思っていましたが？≫

≪・・・・・女の子同士じゃと・・・・・・≫

≪先輩、わかってて言ってますよね？ここのチェックポイントが造ちゃんの唯一の苦手科目の英語だって≫

・・・・・すみません、ダメな子で。こ、これでも頑張ったんですよ！？（W：5点　R：4点）

≪あらあら、そうでしたね。どうやらここではわたくしに出来ることはありませんね。どうぞお進みください≫

≪だって、秀吉。お言葉に甘えていきましょ≫

≪むう・・・・・すんなりと通れたのにこのわだかまりはなんなのじゃ・・・・・・≫

そして、小暮さんは言葉通り脇によけて道を開けてくれたのですが・・・・・？

≪あ、あれ？・・・・・全然抵抗が無いですね？≫

「だな。いくらなんでも抵抗が無いのは変だ。・・・・・おい造、お前が言っていた『現三年生の指揮官』ってあの先輩なんだよな？どんな先輩なんだ？」

≪ええっと・・・・・そうですね、印象はゆーさんと霧島さんを足して割ったくらいの方でしょうか？≫

「と言うと？」

≪ゆーさん並みに頭の回転が速くて、霧島さん並みに冷静な人です。・・・・・それにちょっと付け加えるなら、人の心理を巧く操るのが特技かつ趣味な方ですかね？≫

「・・・・・・いい性格だこと」

うーん、ですがそれだけの人が何もしてこないなんて、どうしてでしょうかね？小暮さん、いつもなら突破してくることも読んで次の手を・・・・・・

ちょっと気になって画面に目を戻すと、ヒデさん&優姉さんの前にツネが立っていました。ですがどうやらただ立っているだけのようですね？仕掛けも何もないですし？

・・・・・・・・・・・・ん？ツネが、ヒデさんの前に、立っている？

《・・・・・ゆーさん》
「あ？どうかしたのか造？」
《・・・・・・ヒデさん、アウトです》
「・・・・・・は？」

《来たか木下。待っていたぞ》
《なんじゃ？ワシを待っていた？どういうことじゃ？》
《ん？よく分からないけど早くすまして貰いなさい。アタシらは先に進まないとね》
《そうじゃな。何の用か知らんが手短に頼むぞい？》
《ああ。大丈夫だ。時間は取らせねえ・・・・・・いいか、木下秀吉》

《なんじゃ？》

画面の中でツネが真剣な顔でヒデさんに近づき、ハッキリと聞き間違えないような口調で告げます。

《俺は・・・・・・・・・・・・お前の事が好きなんだっ！》

・・・・・その日、自分たちは初めてヒデさんの本気の悲鳴を聞くことになりました。

81時間目　アキさん&恋する乙女と肝試し～ついでに造～

「すまぬ、皆の衆・・・・・・このワシが、あそこまでみっともない悲鳴を・・・・・・」
「気に病むな秀吉。同性に・・・・・・しかもあそこまで真剣に告白されたら、悲鳴を上げるのは無理はない」
「そうだよ秀吉。寧ろ悲鳴だけで済んだからよかったじゃないか」
《ヒデさん、はい飲み物です。叫んで喉が渇いたでしょう?》
「ホラ、涙出ているわよ秀吉。ちゃんと拭きなさい」
「ありがとうなのじゃ・・・・・・それにしても『お前を想って書いたんだ』と言って自作のポエムを朗読されたのが一番苦しかったぞい・・・・・・」

あー・・・・・・あれ確か、ツネが去年から授業の合間合間で考えてましたよね。『お前は俺を照らす太陽だ』・・・・・・ですっけ?うん、何も言わないでおきましょうね。

「出来れば姉上の力でチェックポイントを突破を・・・・・・それがならなくとも消耗させるくらいはしておきたかったのじゃが」
「ゴメンね。アタシも秀吉を止められなかったわ」

うーん・・・・・・確かに状況的にこれは痛いでしょうかね?他の皆さんが行くのはちょっと点数的に辛いですし、霧島さん&ゆーさんなら行けそうですが、そうなると後のAクラス戦の手札が無くなりますし。

「それは心配するな、秀吉に木下姉。相手も俺達の事を随分調べてあるようだが、こっちには秘密兵器がいる。アイツらなら色香に惑わされることもないだろうし、恐らくチェックポイントも突破出来るはずだ」

「≪えっ？そんな人いましたっけ（いたっけ）？≫」

Fクラスは自分ら以外全滅。他のクラスの皆さんも男子は小暮さんに、女子は肝試しそのものにやられそうですが？

「うーん・・・・・女子にしたってさっきの先輩達二人のゴスロリ&告白に脅えてるよ？」

「いや、あのセンパイコンビはもう大丈夫だろ。ゴスロリの方はあれだけやればもう出てこないだろうし、告白した方は秀吉専用の対策だったみたいだしな」

「・・・・・そうか。あれは秀吉をピンポイントで狙った本気の一撃だったんだ・・・・・・」

「ほ、本気・・・・・・」

≪ひ、ヒデさん落ち着いて！？ホラ、クッキー食べませんか？皆さんの為に焼いて来たんですよ！ね、ねぇ優姉さん！≫

「ん、そうね。秀吉、アンタも食べなさいな」

「・・・・・・・・・・・・ありがとうなのじゃ」

チビチビとクッキーをヒデさんが食べ始めました。・・・・・・ですが、こりゃヒデさんは当分は立ち直れないでしょうかね？

「ま、そう言うわけだ。てなわけで行ってこい、島田、姫路、明久、造」

「「「《・・・・・・・・・・・・・ゑ？》」」」

指名されたのは・・・・・・自分らですか？てか、自分らが秘密兵器？

「って雄二？秘密兵器って僕らなの？」

「う、嘘ですよね！？嘘って言ってください！」

「じょ、冗談じゃないわ！あんなものを見た後で行けって言うの！？」

そうですよね。何せゆーさんが秘密兵器と言って指名したのは・・・・・

自分（チェックポイントが突破できない）

アキさん（小暮さんに堕とされそう）

姫路さん（悲鳴を上げる可能性大）

島田さん（姫路さんに同じく）

・・・・・・この四人ですよ？うーむ、どう考えても無理そうな気が？

《ねえゆーさん？そもそも、姫路さんと島田さんは肝試し自体が苦手なのに大丈夫なんですか？それに例えチェックポイントに辿り着いても、姫路さんくらいしかまともに戦えないのでは？》

何せ、科目は英語ですからね・・・・・まず自分は戦力になりません。うぅ、落ち込んでなんかいませんよ?どーせ・・・・・・

「まあ、いいからお前たちは肝試しを楽しんできな。まず造と明久が先に入って入り口付近で待機。姫路と島田はそれに続き入って、四人で一緒に行くんだ。いいな?」

「「嫌です（嫌よ）!!」」

「お前ら即答かよ・・・・・」
「ってことだけど、どうすんのさ雄二?」
《流石に無理強いはよくないですよね?》
「ハァ・・・・・姫路、島田ちょっと来い」

そう言ってゆーさんが姫路さんと島田さんを連れて行きました。はて?どうしたのやら?

『お前ら、どうしても行かないのか?』
『あ、当たり前じゃないのっ!』
『むむむ、無理です、無理っ!』
『そうか、それは惜しいな・・・・・肝試しならば明久に抱きつき放題で、しかも抱きついても何も問題もないのにな?』
『・・・・・・・・・・・え?』
『・・・・・・・・・・・あ!』
『最初は造もお前らに付いてくるだろうが・・・・・あの気遣い魔のことだ、お前ら二人と明久が肝試しを出来るように空気を読むだろうに。全く惜しいな、なあ姫路に島田よ?』
『・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・ねえ造？なんか変なことになってない？」

《・・・・・・・・ですね。まあ、今更感はありますがね？》

そんなことを話していると、三人が戻ってきました。

「あ、明久君！よろしくお願いしますっ！」

「アキっ！よろしくねっ！」

「あ、うん・・・・・・・よろしく？」

《・・・・・・皆さーん？自分も行くんですがねー？》

ホラ見てごらん？この人たち早くも自分を置いて三人だけの世界に旅立ちましたよ。ま、まあ三人を一緒にしたいのは山々ですが・・・・・ゆーさんどうする気でしょうかね？

《もういいや・・・・・・とりあえず行きますよ？》

「おっと、待て造、明久」

「な、なに雄二？」

っととと？ゆーさんがまたもや自分らを止めに入ります。そして何故か小声で何かを言ってきます。

「（お前らに一つだけ指示がある。ある程度進んで例の着物の先輩の手前まで行ったら、周囲に誰もいないことを確認して物陰に隠れて、しばらくしたらここに戻ってこい。いいな？）」

≪（はい？どうしてですかゆーさん？戦わないんですか？）≫
「（そうだよ雄二。てか戻ってきたら失格にならないの？）」
ゆーさんにつられて自分とアキさんも小声になります。
「（大丈夫だ。悲鳴を上げる、もしくは召喚獣同士の戦闘で負けない限り失格にはならない）」
≪まあ、確かにそう言うルールはないですが・・・・・≫
「（それなら別に良いけど、そんなことして何の意味が？）」
ですよね・・・・・行って戻るだけ？それに何の意味があるのでしょうかね？下手をしたら貴重な戦力が失われる可能性もあるわけですし・・・・・？
「よしっ！そんじゃ行って来い！」
はぐらかされましたね。う、うーん・・・・・まあ、ゆーさんの作戦は信用はしていますし、ゆーさんのことです、おそらく何か考えあってのことでしょうかね？
≪とりあえず行きましょうか、皆さん≫
「そうだね。・・・・・あ、あの二人とも？まだ入ってないから腕を掴むのは待ってね？」
「「・・・・・・・・・・・っ～～～～！！」」
・・・・・ホントに大丈夫でしょうか？

『・・・・・・行こうか、清水さん。僕らの愛しき者たちの為に』
『・・・・・・そうですね』

そして廊下を歩いていると、どこかから悪寒と共にそんな声が聞こえてきました。

☆

トコトコ歩いていると、バンッという音を立てて何かが飛び出してきます。

「っとと」
《おー、よく出来てますねー♪》

「「・・・・・・っ!!」」

あれは一反木綿ですかね?古いカーテンを上手く使ってそれっぽさを出してあります。薄暗い雰囲気とマッチしていて結構迫力がありますよね♪

『うぼぁあ〝あ〝あ〝・・・・・・・』

「「・・・・・・っ！！」」

今度は血塗れで腕がおかしな方を向いている人影です。ふむ、あれは誰かの召喚獣みたいですね？本人が声を正面から出して、実は召喚獣が後ろから迫ってきているなんて、上手い演出です。本当に凝ってますよね・・・・・・・

《流石、迫力ありますね♪》

「ホントだね。でもちょっとグロいけどこれくらいなら平気だよね、二人とも？」

「「・・・・・・っ！！（ブンブンブン）」」

そうやって一生懸命首を横に振って、更にアキさんの腕にしがみつく姫路さん＆島田さん。あちゃー、これは本当にこういうのが二人とも苦手なようですね。

そうそう、今の状況を説明いたします。パーティションや暗幕で作られた迷路を出口目指して進んで行っているのですが、姫路さん＆島田さんがＣクラスに突入した瞬間から、アキさんの支えが無ければ歩けなくなり・・・・・・アキさんの両腕に二人が捕まる形で進んでいます。

当然アキさんはどちらの手も使えませんし、二人も全力でアキさんにしがみついていますから二台分のカメラを自分が持つ羽目になってます・・・・・・と言うか、自分の前を行く三人の甘甘空間に当

てられそうですよ・・・・・・わかってましたが、自分めちゃくちゃ当て馬ですよね?

「あ、あのさ?二人ともそんなにくっつかれると歩き難いんだけど・・・・・それにカメラを造に待たせたままだしさ?」

と、アキさんが自分に気を遣って二人に声をかけますが・・・・・・

「「・・・・・・っ!!(ブンブンブン)」」

まあ、こんな感じですからね。最初の二人は『アキさんにくっつくことが出来る』からと参加したようですが、今となれば『アキさんにくっついていなければ』今にも失神しそうですよね?

《アキさん、自分は良いので二人の気を紛らわしてやってくださいな》

「・・・・・・そだね。ほ、ホラ二人とも?窓があるよ。外を見れば少しは、」

セロファンを貼り付けて採光量は落としてあるものの、窓からは外の景色が見えます。なるほど?見慣れた風景を目にしたら、少しは元気も出るってわけ・・・・・・

『きひひひひ・・・・・・っ。うらめしやぁ・・・・・・』

「「・・・・・・っ!!・・・・・・っ!?」」

・・・・・でもなかったみたいですね。窓の外をろくろっ首の頭が通過しました。やたらとリアルでしたし、おそらく誰かの召喚獣でしょうね。明かりがあって細部まではっきり分かる上に外が見えると思って油断したところにそのインパクトはかなり辛いでしょうか。

「・・・・・・ごめん。余計な気遣いだったね」

≪・・・・・・いや、これはアキさんに非はないですよ?≫

アキさんの対応は間違ってはないと思いますし、こればかりはどうフォローするべきかわかりませんね。

「うぅ・・・・・もうやだぁ・・・・・・・くるんじゃなかったぁ・・・・・ねぇ、アキ。帰ろ・・・・・・?」

「い、いやぁ・・・・・どうしてこんなに怖いんですか・・・・・明久君、もう進みたくないです・・・・・戻りましょうよぅ・・・・・」

涙目＋上目遣いで二人がアキさんに訴えてきます。ワオ・・・・・お二人とも可愛らしいですね♪これはアキさんにとっても危ないかもですね。アキさんの理性的な意味でも

と、そんなことを考えていると・・・・・

シュカッ!

「《・・・・・・へ？》」

先ほど自分らを驚かせたろくろっ首がちょうど通った所に、何故かシャープペンシルが後ろから飛んできて壁に突き刺さる事態発生。・・・・・・ん？

《な、何ですかコレは・・・・・・？仕掛け・・・・・・？》

「そ、それにしては随分直接的だね・・・・・・？」

壁に突き刺さったシャープペンシルをマジマジと見つつ、アキさんと共に首を傾げます。ルール的に直接こちらを狙うのはアウトなハズですから大丈夫でしょうが・・・・・・

『清水さん、落ち着くんだ。気持ちは分かるが彼らに見つかる。それにアレはどうやら召喚獣、攻撃しても当たらないよ』

『くっ・・・・・・そのようですわね。ですが、お姉さまを怖がらせるなんて許せませんわ』

『・・・・・・まあ、その割に清水さんは島田さんの怖がる姿を喜んで見ていたがね？清水さん、鼻血は拭こうか』

『おっと、美春としたことが・・・・・・ふぅ、さてそろそろ行きますか』

『そうだね。今ので少々警戒されてしまったから、もう少し距離を開けよう』

・・・・・何でしょう。肝試しだからでしょうか？何か後ろから妙な気配がする気がしますよ？

「ふ、二人とも、もうちょっと頑張ろう。そうしたら一緒に教室に戻るから」

「うぅ・・・・・明久君がそう言うなら」

「も、もうちょっとだけ頑張る・・・・・・」

・・・・・うーむ、コレ本当に大丈夫でしょうか？姫路さん＆島田さんもですが、二人の可愛らしい反応を見ているアキさんの理性が限界突破しそうですよ？

とりあえず、ゆーさんの指示通り小暮さんのいた場所の手前まで進むことになりました。どの道戻れと言われてますし、この二人も安心するでしょうし。そうして目的地目指し歩いていきます。途中の仕掛けで二人はアキさんにビクッとしがみつきますが、それでも悲鳴を上げないよう頑張ってますね。

そう言えば、先ほどの後ろから感じた妙な気配も消えています。どうやら距離を取ってから自分らの様子がわからなくなった、つまり見失ったんでしょうね。何の気配かまではわかりませんでしたが、まあ問題ないでしょうか？

「おっと・・・・・この辺かな？」

《みたいですね。よくわかりませんが、とりあえず隠れましょうね》

何とか小暮さんの近くまで行けたようですので、指示通り隠れることにしました。さてさて？どうなることやら・・・・・？

82時間目　乙女心と肝試し～空気読むのも大変です　by造～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。とりあえずストックの3話分、更新です。

すみません、慌てて更新しているので、誤字脱字が目立つかもしれません。

82時間目　乙女心と肝試し～空気読むのも大変です　by造～

明久Side

雄二の指示の下、迷路のようになっている通路のちょっとした袋小路近くに隠れている。それにしても何でまた雄二はこんな面倒なことをするんだろうか？行って帰ってこい何て、正直わけがわかんないよね？

それにしても・・・・・・

「二人ともやっぱりこういうの苦手かな？」

何も会話がないというのも怖いだろうから、適当な話を二人に振ってみる。

「わ、私は昔からこういうの苦手ですから・・・・・・」

まあ、姫路さんは見るからに苦手そうだからね・・・・・・てか、こういうのが得意な姫路さんを想像できないや。姫路さんらしいと言えばらしいかな？

「ウチは・・・・・だ、だって、仕方がないじゃない。ドイツのお化けならまだしも、日本のお化けなんて全然知らないんだもの・・・・・提灯にいきなり口や手足がでてきたり、普通の女の人が急

に首だけ伸びるとか、そんなの知らないんだから・・・・・」

ああ、そっか。僕らならある程度予測のつくお化けでも、美波は何も知らないから意表を突かれちゃうのか。人は『その正体が分からないもの』に恐怖を抱くという話だから、日本のお化けに詳しくない美波が怯えるのも無理のないことかもしれない。

「でも折角だし楽しもうよ二人とも。レクリエーションだし、二人が参加しないのも寂しいしさ?頼りないだろうけど僕も二人の側にいるし・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・え?」」

僕がそう言うと、姫路さんと美波は驚いたようにこちらを振り返った。あれ?そんなに僕が寂しく思うのは変だろうか?いや、ガラにもなくキザっぽいことを言ったからかな?

「・・・・・アキが寂しいって、どうして?」
「・・・・・それに、二人の側にいるって?」
「?どうしてって言われても・・・・・寂しいのは寂しいからで」

「「だから、どうして寂しいって思うの(ですか)?」」

何故か二人がが食い下がる。何だ?さっきまでの怯えた表情とはうって変わって、二人とも凄く真剣な表情をしてるけど・・・・・

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

ジッと僕の目を見る二人。ここまで真剣なら、僕も真剣に答えないとダメだろう。うーん・・・・・・人がいなくなって寂しいと思う理由・・・・・・か。それってきっと、

「・・・・・・いつも一緒にいる仲間がいなくなるから、かな・・・・・？」

「・・・・・・いつも、」

「一緒に・・・・・・？」

「うん」

別に接点のない人がいなくなっても、僕は多分寂しく思ったりはしない。人がいなくなって寂しいのは、その人が親しくて、いつも一緒にいる仲間だからだろう。

「それなら、それなら明久君は私たちに」

「傍にいて欲しいって、そういうこと？」

「あ、うん？そうなる・・・・・・ね？」

・・・・・・ん？あれ？何だか意味合いが変わったような気がする。まあ、言いたいことはそうなるけどさ？

「「じゃあ、じゃあ・・・・・・」」

「ん？　何？」

「じゃあ・・・・・・もし私たちがずっと明久君の隣にいたいって言ったら・・・・・・」

「アキは・・・・・・アキはそれを受け入れてくれるの・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・ん？」

あ、あれ！？なんかやっぱりさっきから僕と二人の話しの意味合いが変わってない！？

「ふ、二人ともどうしたのさ？ちょっと変だよ？つ、造からも何か言ってやってよ・・・・・・ってあれ、造っ！？何処行ったの！？」

気が付けば造の姿が無いっ！？慌てて辺りを見回すと、いつの間にか逆方向の袋小路に隠れている！？

「（つ、造どうしてそんなとこにいるのさ！？）」

と、とりあえず目で造と合図する。どうしてまたこんなことに！？

≪（い、いやー、ちょっといい雰囲気でしたから邪魔しないように隠れちゃいました♪あ、そうそうアキさん・・・・・・ガンバですよ♪）≫

そう合図して親指をグッ！っと立てる造。いやいやいやいや！？グッ！じゃないよ！どうしてまたあの子は時々だけどとんでもないことするかな！？

「あ、あの・・・・・・明久君」

「続き・・・・・・聞かせてくれない？」

う〝・・・・・・な、なんだ！？コレは僕にどうしろと言うんだっ！？と、とにかくこの二人に何か言わなくちゃいけないのかな・・・・・・？くっ、とりあえず今の僕の気持ちだけでも言うべきか・・・・・？

「え、えっとね二人とも。僕は・・・・・・」

そう自分でも何を言うのかわからないところで・・・・・・

『・・・・・・さま、お姉さま、何処ですか美春のお姉さまっ！？』

『くっ・・・・・・まさか見失うとは、距離を開けすぎたのが仇になったっ！愛しのエンジェルズよ・・・・・・待っててておくれ！』

何か凄まじく恐ろしい気配が近くに来ていることを感じた。な、何だ！？さっき感じたよりも強く、そして怖すぎるっ！？

・・・・・・ってヤバイっ！姫路さんと美波が悲鳴を上げそうっ！？

《（アキさんっ！）》

「（わかってる！）」

咄嗟に造とアイコンタクトする。このまま二人に悲鳴を上げられる前に・・・・・・

「「きゃ・・・・・・ムグぅっ！」」

二人の口を封じる。このままじゃ失格になっちゃうし、ゴメンね二人とも！

「二人とも。手荒なまねだけど、今はゴメン」

「プハッ・・・・・明久君!?や、やっぱり何かここ出るんじゃ・・・・・・」

「あ、アキ!何か来る・・・・・・逃げなくて良いのっ!?」

うぅ・・・・・どうしようか。何が起こっているのかわからないけど正直逃げられる自信はない。造とアイコンタクトすると《隠れておきましょう》って言ってたしここは、

「二人とも隠れていれば大丈夫だよ。・・・・・いいね、声を出さないように気をつけて、もう少し二人とも僕に寄って?うん、そうそうそんな感じ」

三人で息を潜ませる。これで上手くやり過ごせるか・・・・・・っ!?

『お姉さま・・・・・護って見せます、お姉さま・・・・・・オネエサマっ!』

『清水さん。君に護られるのは、正直怖すぎるよ?』

狂気に満ちた『何か』は、どうやら周囲に気を配ることなく通路を真っすぐ進んでいったようだ。何故かその『何か』の声が知ってい

る声だった気もしたけど、きっと気のせいだろう。一応僕は物の怪と友人になった覚えはないし。

「二人とも、もう大丈夫だよ。現代の怪異は去ったみたいだ」

念のため数秒待ち、安全確認をしてから二人に声をかける。

「うぅ・・・・・まだ幻聴が聞こえそうです」

「ほ、本当・・・・・・？」

怯えて目を閉じていた二人が、うっすらと目を開ける。うんうん、二人ともよく頑張ったよね。

「ね？何もいないでしょ？」

「そ、そうみたいですね・・・・・・」

「そ、そうね。良かった・・・・・・」

二人はホッと胸をなで下ろす。安心してくれたようで何よりだ。それにしても、さっきのアレにはある意味助かったのやら、それとも・・・・・・

《・・・・・残念でしたね、三人とも？》

「「「っ！？・・・・・つ、造（月野君）（月野）！？」」」

と、そこで造が現れた。ざ、残念？な、何のことだろうかね？

《やれやれ・・・・・折角アキさんが応えてくれるかと思いましたのに。どうやら今はそういう時期じゃないみたいですね》

「な、何のことだい、造くん？」

いやいや、僕は言わなくて安心して・・・・・って！？何を安心していうんだ僕はっ！？別にどうこうあったわけじゃないのに！

「そ、そうですよ！べ、別に私たちは・・・・・」

「そ、そうね！ウチら特に何も思って・・・・・」

二人も慌てて僕の話に合わせてくれる。これで造も納得を・・・・・

《あ、そうそう三人とも？》

と、造が満面の笑みで、

《・・・・・先ほどの会話は、カメラに聞こえないようにしてあります♪安心してくださいね？ただ次こういうことがあるなら、皆さんや自分がいない時をオススメしますよ♪》

「「「っ～～～～～～～～／／／／／／／／」」」

《ふふふっ、皆さん顔真っ赤ですよ～？どうもご馳走様です♪》

「「「・・・・・・お粗末さま」」」

・・・・・その時僕らは思った。このままじゃ、造には一生頭が上がらないかもしれないと。この子はいろんな意味で空気読みすぎっ!?造、恐ろしい子!

☆

造Ｓｉｄｅ

《ただいまです～♪》

「「「た、ただいま（です）・・・・・・」」」

とりあえずゆーさんの指示通り戻ってこれましたが・・・・・良いもの見れましたね♪

「おう、戻ったかお前ら・・・・・って、何だ?造は活き活きとしてるのに、お前ら三人やけに疲れているじゃねえか?」

「「「ほっといて（下さい）、雄二（坂本）（坂本君）」」」

ふふふっ♪そりゃ、ね?

「??よくわからんが、まあいい。お前らよくやったぞ。作戦は

大成功だ」
「へ？僕ら何もしてないんだけど？」
《そうですよ？結局チェックポイントはクリアできませんでしたし》
「「？？？」」
モニターを見ていたゆーさんが顔を上げてニヤリと笑います。作戦って？
「いや、お主らはそれでよかったのじゃ」
「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」
「「「《？？？》」」」
ヒデさんたちも同じく誉めてくれますが、どうしたんでしょうか？やっぱりわかりませんね？
「まあ、実際に見ればわかるさ。お前ら、モニターを見てみな」
「ん？なになに？」
《えっと・・・・・・あれ？》
ゆーさんに言われてモニターを覗くと、いつの間にかチェックポイントに着いている久保くんと清水さんの姿がありました。あれ？先ほどは会いませんでしたよね？ひょっとして迷路ですれ違ったのでしょうかね？
《ヒぃー・・・・・フぅー・・・・・・！オネエサマ・・・・・・

ミハル　ハ　オネエサマ　ヲ　オマモリ　イタシマス！》

《ね、ねえ・・・・・これ、ひょっとして君の召喚獣なの・・・・・？なんだか禍々しいオーラが出てるんだけど・・・・・・？》

《いいえ、これでも一応人間なのですが・・・・・・》

寿さんの言う通り、今の清水さんは本当に暗黒面に堕ちた何かに見え、正直『これが久保くんの召喚獣です！』って言われても違和感がありませんね・・・・・・何があったんですか？

《それにしても意外ね。葵は月野君が来るだろうって予想してたのに。と言うか葵の所を男子が突破してくるなんて思わなかったわよ？・・・・・君ってブス専？》

《いえ。そんな事はありません。あの先輩が魅力的な人だってこと位は分かります。》

《本当に？》

《ええ。僕だって以前好きだった人は女性ですから。今はもうどうでもいいですがね》

・・・・・・・・・・・・ん？何かさらりと久保くんが言ったような？

《オネエサマ、オマモリイタシマス・・・・・・！》

《それでは先輩方、清水さんが人の言語を失う前に始めましょうか。試獣召喚（サモン）》

《もうその子人として大事なものを色々と失ってる気がするけどね・・・・・・試獣召喚（サモン）》

《は、早く終わらせないと呪われそうね・・・・・・・試獣召喚（サモン）》

《・・・・・・試獣召喚（サモン）・・・・・・》

≪Aクラス　寿湊　英語R　３０１点≫
&
≪Aクラス　中曽根みさお　英語R　２８７点≫

・・・・・ん？そう言えばここでこの二人となれば、ツネとかナツ、それに小暮さんに金田一くんは最後のAクラス戦かそもそも脅かし役だけでしょうかね？それとも出し惜しみしているのでしょうか？この二人はハーピーに濡れ女？みたいです。そして対する二年組は、

≪Aクラス　久保利光　英語R　３９８点≫
&
≪Dクラス　清水美春（？）　英語R　１４８点≫

清水さんは相変わらず鬼子母神です。まあ、召喚獣よりも清水さんの方が怖いですね。そして久保くんの召喚獣は・・・・・・

≪・・・・・あの？久保くんの召喚獣って何ですか？≫
「さあ？藁とかボロ布とか着てて、全然久保君の召喚獣っぽくないよね」
「そうじゃの。ムッツリーニ、あれは何の物の怪かわかるかの？」
「・・・・・・・・・・・・・迷ひ神」

「「≪迷ひ神？≫」」

「・・・・・・・・・・人を迷わせる妖怪。一説では迷って果てた人の魂が道連れを探してるとか」
「なるほど。人の道に迷って、仲間に引きずり込もうとすると言う訳じゃな・・・・・・」
「へえ?・・・・・・でも何でそんな召喚獣が久保君のなのさ?」
《そう言えばそうですね?久保くん、どちらかと言うと孤高の人っぽい気もしますが?》

それに仲間を求めるなら『七人みさき』とかもあるでしょうし?どんな特徴何でしょうかね?まあ、それはさておき召喚獣同士の戦いが始まりました。

《湊!私がそっちの男子を引き受けるから、あなたはそっちの女の子(?)をお願い!》
《ダメよみさお!そっちの男の子の方が点数高いのよ!それならあなたよりも少しでも点数の高い私が!》
《い、嫌よ!だってそっちの子、目がイってるんだもの!》
《わ、私だって嫌よ!》

・・・・・・始まりましたが、清水さんの覇気で最早、寿さん&中曽根さんのペアは戦意喪失のようですね・・・・・・

「合計点で負けてても、こっちが負けることはなさそうだね」
「そうだな」
「・・・・・・雄二、流石に私も怖い」
「ワシには久保が三体の妖怪変化を操る死霊使いに見えるぞい・・・

・・・」
「流石に凄い光景ね・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・生の怪奇現象」
「い、いやー・・・・・・・ボクもちょっと引いちゃうねアレは」
「あ、明久君・・・・・・・やっぱりこの学校、何か出るんですよ」
「そ、そうよ・・・・・・・美春もそれに取り憑かれて・・・・・・」
《凄いですね・・・・・・・このメンバーを驚かすことのできる人（？）がいるなんて》

最もその最大の恐怖する相手は何と味方でしたがね？その後、清水さんの威嚇（？）と久保くんの点数の高さで、難なくチェックポイントを通過できました。正直に言うと、戦わなければならなかった寿さんと中曽根さんが不憫でしたよ。

・・・・・・・敵ながらお疲れ様でした、お二人とも。

82時間目　乙女心と肝試し～空気読むのも大変です　by造～（後書き）

ありがとうございました。まとめての更新すみません（汗）

これから残りの話を考えます。ちょっと時間かかるかもですが、とりあえず入院までには書きますので、待っててください。

次回もよろしくです！

83時間目　鈍感コンビは観察処分者ズ～最終決戦前～

結構被害は大きかったですが、久保くんと清水さん（？）が怯える寿さんと中曽根さんを撃破してCクラスも何とかクリアしました。残るはAクラスのみですね。

「後は雄二と霧島さんがチェックポイントをクリアしたら僕らの勝ちだね」

「そうじゃな。手が回らなかったのか、Aクラスは特別な仕掛けはなさそうじゃし、雄二と霧島二人であれば余裕じゃろ」

Aクラスはその広すぎる面積のために、あまり手の込んだ装飾されていないようです。広さを活かした迷路と、後はお化けになっている召喚獣が突然現れるだけというシンプルな作りですね。

まあ、とは言ってもBクラスの時みたく驚かすポイントを随時ずらしてきているため今までみたいにカメラで予習してあるから怖くない、何て方法は通用しないみたいです。現に久保くんと清水さんに続いて突入していった人たちはどんどん失格になっていますからね。

・・・・・それにしても、何と言いますか。なんかモヤモヤするんですよね。何でしょうか、この違和感は？

《・・・・・うーむ》

「・・・・・・妙だな」
《・・・・・・ゆーさんもそう思いますか？ちなみにゆーさんはどの辺が？》
同じく何か納得いかない顔をしているゆーさん。やっぱり何か勘付いていますね？

「そうだな・・・・・・あれだけ凝った仕掛けや俺らを嵌める罠を考えつく三年だ。それにしてはここＡクラス、最後の砦がこんなにも普通のお化け屋敷じゃ拍子抜けすっぞ？造はどの辺が？」
《自分は・・・・・・先ほどのチェックポイントの三年生に違和感が》
「ん？それはどう言う意味だ？」
《えっとですね？現三年生の成績上位者を順に考えても、あの二人よりももっと適任の生徒さんが出てもおかしくないんですよ。小暮さ・・・・・・さっきの着物を着た先輩とか、ツネ、ナツとかの他にももっと点を取れている方が確か二、三人いたはずなんです》
「ふむ・・・・・・てことは、余程自信があったのか戦力を温存しているのか、それとも向こうの何かの策略か・・・・・・？」
ゆーさんも頭をフルに回転させて考えているみたいですが・・・・・・うーん、やっぱりわかりませんね。

「ま、ごちゃごちゃ考えてもしゃあないか？今はとりあえず後回しにするか」
《ですかね？さて、皆さんはどんな感じで・・・・・・》

《ぅおわっ！？》
《きゃぁああーっ！！》

「・・・・・・・・・・・・？と？、失格」

おお、またモニターから悲鳴が聞こえてきました。薄暗い迷路の中で、突然現れたリアルなお化けに驚きます。それは一般的な肝試しの光景で、さっきまでの仕掛けで怖がっていた人たちも皆さん、気を取り直してそのアトラクションを楽しんでいるようですね。まあ、皆さんが楽しそうならいいですか♪ゆーさんの言うように、ごちゃごちゃ考えても仕方ないですかね？

《いないな・・・・・あの子たちはどこにいるのだろう・・・・・・急がないと、こうしている間にもあの子たちの身に危険が・・・・・く・・・・・・・っ！》
《ドコ・・・・・・？　ミナミ　オネェサマ　ドコ・・・・・・？》

迷路の分岐点で立ち止まっては誰かを捜すように辺りを見回す久保くんと清水さん。逆に身の危険が感じるのはどうしてでしょうかね？

《と言いますか、二人とも何をしているのでしょうかね？》
「やれやれだな。清水はともかく、久保まで正常な判断ができなくなっているとは・・・・・チェックポイントを突破したのだから、自分たちの前には誰もいないと気づいても良いはずなのによ？」
「よほど姿を見失ったことに焦っておるのじゃな・・・・・一部何やら腹立たしいがの」

「・・・・・・・・・・・・恋は盲目」
「え？　清水さんが美波を探しているのは分かるけど」
《久保くんは何故焦ってるのでしょうか？》

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

アキさん&自分がそう言うと、何故か三人とも押し黙ってしまいました。ふむ・・・・・ひょっとして清水さんが焦っているのから、久保くんも一緒になって頑張って探しているのでしょうかね。だとしたら、やはり彼は良い人なんですね♪

「あ。それとも、実は久保君は清水さんのことが好きだとか」
《あ。なるほど、その可能性もあり得ますよね」

だとしたら、さっきこーさんが言っていた『恋は盲目』って言葉も頷けます。それにひょっとしたら強化合宿の覗きも、清水さんのことを庇おうとしてわざと覗きをやってしまったと仮定すれば色々と納得ですし。（↑考えすぎ）

「あ～・・・・・ま、好きな人がらみで冷静じゃないってところは合っているんだがな」
「相変わらず明久は鈍いのう。造も普段は頭が回るのに、どうしてまた恋愛ごとに関しては明久並みなのじゃ？」

あらら？ひょっとすると皆さんはずっと前から気付いていた？確かに今まで気付かなかったのが自分たちだけなら、鈍いと言われても仕方がないでしょうかね。

「そっか。それじゃ、機会があったら今度本人に聞いてみるよ」
《そうですね♪もし良かったら協力したいです》
「・・・・・お主らは、何と残酷な・・・・・・」
「やめとけ、そこの鈍感コンビ。久保が泣くぞ」
「・・・・・・・・・・・・非道が過ぎる」

「《???》」

ダメですね。三人の言いたいことがよく分かりません。アキさんと二人首を傾げていると・・・・・・

《どこに・・・・・・彼らはどこに・・・・・・ん?明かりが・・・・・》
《ミ、ミナミ　オネエサマ・・・・・・ドコ・・・・・・?》
「んむ?どうやら久保と清水がチェックポイントに到着したようじゃな」
「あ、本当だ」
《おお、流石の二人ですね～》

視線を戻すと迷路を抜けて二人が広い場所にでる姿が映しだされています。どうやら勝負のために明かりが用意されているところを見ると、そこがチェックポイントで間違いなさそうです。

《おう。来たみてぇだな。ご苦労さん》
《お前らが俺らのお相手一組目だな。んじゃ、早速始めるか?》

・・・・・ふむ、ここは妥当にツネとナツできましたね。木村先生もいらっしゃるようですし、どうやら科目はこの二人の得意教科の物理での勝負ってとこでしょうか？

《失礼。先輩方、ここに吉井君と月野君、島田さんは来ませんでしたか？》

《は？いや、ここに来たのはお前らが最初だぜ》

《え？そんなはずは・・・・・彼らは僕たちよりも先に行っていたはずでは》

《ああ、そういや月野たちなら確か、途中で引き返して行くのが映っていた気がするな》

《そ、そんな・・・・・！じゃあ、僕たちは今までずっと無駄な時間を・・・・・！》

《？よ、よく分からんが、そろそろいいか？試獣召喚（サモン）》

《そうだな。さっさと始めようぜ。試獣召喚（サモン）》

《そう、ですか・・・・・試獣召喚（サモン）》

《・・・・・試獣召喚（サモン）・・・・・》

微妙にやる気を失っている久保くんと既に人の面影を失いつつある清水さんがツネ、ナツと対峙して召喚獣を喚び出します。一応ここを突破したら二年生の勝ちなのですが、

「勝てるのかな？久保君たちは」

「どうだろうな。清水も久保も、確かガチガチの文系だったはずだ。物理での勝負となると、正直分が悪い」

流石ゆーさん。どうやら試召戦争がらみで他のクラスの主要メンバ

ーの成績も調べていたようですね。理科系科目を選択する場合、理系の人は物理と化学、文系の人は生物と地学を好むことが多いです。ん？自分ですか？・・・・・そう言えばどっち寄りなんでしょうかね？

まあそれはともかく、これは計算科目と暗記科目でそれぞれ学習方法に通じるものがあるためです。一応二年生は現段階では全科目を履修しているため、久保くんも清水さんも全くできないというわけじゃないでしょうが・・・・・・

「三年は今特に、受験に照準を合わせて勉強しているからな。選択科目の物理で勝負をしにきたってことは、向こうはよっぽど自信があるんだろうな」

「そうなると・・・・・・久保君たちは苦しいね」

そうそう、コレは補足何ですが三年生は一部の科目（物理・化学・生物・地学や地理・日本史・世界史など）が選択制になっているので試召戦争のルールも若干変わります。例えば【物理⇔生物】【化学⇔地学】といったように、それぞれ対応する科目に置きかえられています。基本はセンターに合わせた科目とルールです。自分たちの総合点数も概ねそのルールに準じて算出されているとのこと。

「つまりは、物理を指定してきたということはあの二人は理系じゃと、そういうことかの造？」

《ええ、ツネとナツ・・・・・あの二人は察しの通り理系ですよ》

「そうなるわな。向こうは向こうで自分たちに有利な科目を選ぶのは当然だよな。俺たちが保健体育を指定したように」

学園長の方針で全学年通じて保健体育は一応必須とはなっているものの、流石に受験に使う科目でない以上、あまり力を入れていないという人は多いです。受験を間近に控えた三年なら尚更でしょうね。そうなると、必然的にエキスパートのいる自分たち二年が有利だったわけです。・・・・・まあ、正直いくら三年で真面目に保健体育をやっていても、こーさんと工藤さんに勝てる人がいるとは思えませんがね？

その一方、物理や地理などの選択科目は、全科目を満遍なく履修している二年生に対し、三年生は選択した科目のみに集中して学習できるため三年生が有利になります。同じ理系の生徒でも、他の科目もやらないといけない二年と選択科目のみに集中できる状況が違いますからね。そこはもちろん、先生方もその分問題のレベルを調整をなさっていますが、それでもやはり差はでてくるようです。

そんなことを思っていると、先に久保くんと清水さんの召喚獣と点数が出てきました。

≪Ａクラス　久保利光　物理　２１３点≫

&

≪Ｄクラス　清水美春（？）　物理　７１点≫

・・・・・こんな感じですね。確かに久保くんも文系にしては中々の点数ですが、

「ふむ。まあ、こんなものじゃろ」

「これであっちが３００点とかの点数を出してきたら危ないよね」
「ま、そこは大丈夫なんじゃねえか？今は（造のおかげで）改心したみてえだが、あのセンパイ二人は以前教頭についてたくらいだからな。点数もそこまで高くは・・・・・・」
《いいえ・・・・・これはツネとナツ達には勝てないかもですよ？》
「ん？どゆこと造？」
《あの二人は逆にガチガチの理系です。おまけに物理とくれば・・・・・・》

≪Ａクラス　常村勇作　物理　４１２点≫
&
≪Ａクラス　夏川俊平　物理　４０８点≫

《・・・・・まあ、こうなりますね》

「「「「な、何ぃ！？」」」」

一斉にハモる皆さん。あれ？そこまで驚くことですか？

「ちょちょちょちょっと、あの点数はどういうこと！？あの先輩たちってあんなに成績が良かったの！？」
「あれではまるでＡクラスの優等生じゃな」
「・・・・・・・・・・信じられない」
《？？？そんなに驚くことですか？そもそもあの二人はＡクラス内ではトップ層の二人ですよ？》
「ま、マジかよ・・・・・・しくったな、まさかさっきあんだけ暴

れたセンパイたちがここまでやる人たちだったとは・・・・・・」

そこはスルーしてあげてくださいね？あの二人、特にナツの黒歴史でしょうから。

《んじゃ、行くぞ・・・・・って、お前ら聞いてるのか？》

《なんかやけに疲れてんな？そんなに肝試しが怖かったのか？》

ツネとナツの召喚獣は猪八戒に沙悟浄ですか。・・・・・・どうしてでしょうか？何気に結構あっている気もしますね。改心して真面目に頑張っている今のツネたちならね？

さて、久保くんたちにはちょっと辛い戦いになるでしょうが、出来るだけ点数の消費を《僕らの負けですね》やってもらえる、ように・・・・・・

「《って、早っ！？決着つくの早いですよ（早いよ）！？》」

「これは仕方がないかの。あの二人の目的は肝試しでは無かったからの」

ヒデさんが何か言ってますが、ハテ？肝試しが目的じゃない？何のことですかね？

「ま、まあ二人は頑張ってくれたからいいけどね？どう雄二？勝ち目はある？」

「ん～・・・・・・良くて半々か４：６ってところだな」

「それは割と厳しいのう？」
「翔子はともかく、俺の物理はせいぜい１５０点程度だからな。召喚獣の操作も向こうの方が一年長くやっている分慣れているだろうし、そんなもんだろ」
「それなら、他の人が少しでも消耗させておいてくれたら」
「・・・・・・・・・・それは厳しい。残っている戦力は、突入済みで失格になっていない一組を入れても四組だけ」
《あや？もうそんな感じなんですか？》
こーさんが名簿を見ながら呟きます。これは・・・・・ちょっと戦力が足りないかもですね？
《あ、ちなみにその四組っていうのは？》
「・・・・・・・・・雄二・霧島ペア、明久・造ペア、姫路・島田ペア。突入済みの一組はちょっとまだ確認できていない」
「あっ、そっか。僕たち戻って来ているから、まだ失格になってないんだっけ？」
へえ？何だかんだで自分らが残っているわけですか。ですがどうしましょうかね？
「ふむ・・・・・おい、造。お前の今回の物理の点数は何点だ？」
《えっ？・・・・・えっと、確か・・・・・・３００点前半くらいだった気がします》
「よしよし。んじゃ、造と翔子が中心となって攻めるとするか！翔子、それでいいな！」
「・・・・・私は雄二と・・・・・」
「おいおい翔子？お前、娘を一人にさせる気か？」

《あはは♪ゆーさん、本気で覚えておいてくださいね？てか、随分禁じ手を使ってきましたねっ！？》

くっ・・・・・最近玲さんで振り回されっぱなしでしたから、すっかり霧島さんのことを忘れていましたよ！？本当に女の子になっているだけに、いつ霧島さんに娘養子にされるかわかったもんじゃないですしっ！？ゆーさんには本当に説教が必要ですっ！てか、ゆーさんの場合霧島さんと一緒に行くのが嫌なだけじゃ・・・・・・

「・・・・・・大丈夫。私たち家族も一緒に行けばいい」

「《何・・・・・・だと・・・・・・・！？》」

「・・・・・・見て」

そして霧島さんが指差す方向を見ると・・・・・・

「あ、明久君！今度こそさっきの続きを・・・・・・じゃなくて、今度こそ頑張りましょうね！？」

「そ、そうねアキ！アンタの口からさっきのことを聞くまで・・・・・でもなくて、クリアしましょうね！？」

「・・・・・・二人とも？僕に何を言わせる気かな？」

・・・・・なるほど、先ほどと同じ展開ですか？変則的ではありますが、アキさん・姫路さん・島田さんのペア（？）と自分・ゆーさん・霧島さんのペア（？）の出来上がり♪わお。てか、ペアと言うよりトリオ？

《ゆーさん、どうやら諦めるしかなさそうですよ？》
「くっ、仕方ねえか。ところで翔子？お前に言いたいことがあるんだが」
《あ、自分もですよ。ちょっとだけ言いたいことが》
「・・・・・・何？」

「《関節を極めるのは止めろ（止めてください）っ！？これ、何度目だ（ですか）！？》」

「・・・・・家族で手を繋ぐの、難しい」

相変わらずの自分たちでした。アキさんもさっきみたく、すでに姫路さん＆島田さんに抱きつかれてますね。と、とりあえず、霧島さんに手を離して貰っていざ、決戦の場へと・・・・・・

Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！！

・・・・・？決戦の場へと行こうとした矢先に、トランシーバーから連絡が？いったい何でしょうか？

８４時間目　貴方と私と心の距離～お姫様の憂鬱～

造Ｓｉｄｅ

突然トランシーバーから発信音が聞こえてきました。あれ？何かトラブルでしょうか？

「ん？何これ、雄二に造？」
「ああこれか？一応三年とトラブルがあった時の為に連絡が取れるようにトランシーバーを用意してたんだが」
「ほう、そうじゃったのか。ならば何かトラブルかの？」

まあ、安全面には十分気を配ったつもりですし、念のため緊急事態用に用意していたんですがね？一応皆さんが持っていっているカメラにも無線機が付いていますし。それにしても・・・・・はて、本当に何でしょうか？

《あ、自分が出ます・・・・・はい、月野ですが？》
『よかった、月野君ですね。小暮です』

通信相手は・・・・・小暮さんですか？

《どうかしましたか？一応トラブルが無ければこのトランシーバーは使わない予定だったハズでは？》
『ええ、それは勿論そうなのですが・・・・・今進行している二年生のペアのカメラの調子がおかしいのです。音は一応聞こえるの

ですが、画面に何も映らなくて・・・・・・』
《えっ・・・・・・?ちょっと待ってて下さいね》
気になり慌ててこーさんに確認を取って貰いますと・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・?番カメラを持ったペアのモニター画面が正常じゃない」
「あ、ホントだね。真っ暗だよ」
「ん?カメラの故障か何かか?」
「完全に反応が無いようじゃの」
《あり?そもそも、その?番のカメラを持ったペアってどなたですか?》
皆さんに尋ねるも、誰も知らないとのこと。二学年の大半が参加してますから、誰かが気がついてもいいと思うのですが?・・・・・・それは後で確認して貰うとして、確かに真っ暗で何も見えませんね。
《もしもし小暮さん。本当に映っていないみたいですね。どうします?全体のモニターでも確認できませんか?》
『ええ、そう思って一応先に見てみたのですが、少々入り組みすぎていて何処にいるのかわからない状況です』
《あやや・・・・・・それは、困りましたね》
・・・・・・ですがいきなりカメラの不調?こーさんの設置・設定したカメラに異常など起こるものでしょうかね?ちょっと不気味ですよね。

「・・・・・・・・・・向こうのペアに連絡を取ったが、聞きにくい上に原因がよくわからない。一応こっちの話は聞こえているようだが」
「おいおい、まさか通信も出来ないのか？」
「な、なんか大事になりかけてないかな？」

確かにちょっと雲行きが怪しいですよね？大丈夫でしょうかね、そのペアの方々。そう考えていると、

『でしたらその方々に、召喚獣を呼び出して貰えるよう頼んで貰えませんか？召喚獣の反応で多分おおよその位置は特定できると思いますので』

小暮さんがそんなことを言ってきます。召喚獣？

《召喚獣を・・・・・ですか？》
『ええ、ダメでしょうか？一応クラス内では何処でも召喚できるようになってますし』

まあ、確かにそうですが・・・・・・

《一応、連絡してみます・・・・・こーさん、お願いしますね》

こーさんに頼んで、そのペアの方に召喚獣を召喚して貰いましょう。
・・・・・ですがそもそもこの指令って聞こえるのかな？

ポンッ×2

画面の奥で召喚獣が現れた音がしました。どうやら向こうはこちらの声を一応は聞こえているようですね。

《どうですか、小暮さん。召喚獣は確認できましたか？》

『ええ、大丈夫ですよ。確認できました』

こちらは全体のモニターは設置されていませんから確認の仕様がありません。そりゃ、驚かされる人たちに全体像が見られるのはマズイですから仕方ないですが。

《それでは自分も行きます。何か問題ありましたら本部の方にトランシーバーを預けておきますので、よろしくです小暮さん》

『ああ、お待ちになってください』

《？？？またトラブルがありましたか？》

『そう言うわけではないのですが、確か残りの二年生は八人くらいと聞きましたが』

《・・・・・・よくご存じですね。で、それが？》

『また、トラブルがあるのもいけませんし、Ａクラスに入る際全員、召喚獣を召喚して貰えませんか？』

・・・・・・・・・・・・ん～？確認するにしても、何で召喚獣を？よくわかりませんね？

《・・・・・・ちょっと待ってて貰えますか？・・・・・・って言

われているんですが、いいですか、ゆーさん？》
「・・・・・ふむ。まあ俺らに危害を加えなきゃそれでも構わんが」
《どもです・・・・・ってなわけで、一応代表は問題ないと言っていますよ？》
『そうですか。では、Ａクラスに入ったら召喚してください。それと月野君、頑張ってくださいね？』

・・・・・ガチャッ！

そうして、通信は切れましたが、

「《・・・・・・・・・・・う～む》」

何今の意味有りげな台詞は？おまけになんか物凄く違和感と、モヤモヤした気分がＭＡＸ何ですが・・・・・？ゆーさんも同じみたいで、首を傾げています。これはどうなっているのやら？

とりあえず、ちょっぴり不安になりつつもオカルト召喚獣同伴の肝試しスタートですね。

・・・・・ガチャッ！

『・・・・・ふふっ♪お膳立てはやっておきましたよ。後は貴方しだいです』
『・・・・・・・・・・・・・』
『さてさて、本当にどうなるのでしょうね？楽しみですね♪』

☆

『あ、明久君・・・・・手を離さないでくださいね・・・・・・』
『アキ・・・・・は、離したらウチ、許さないわよ・・・・・・』
『う、うん。分かってるよ』

先ほどのBクラスの時と同じく、前へ前へと（らぶらぶイチャイチャしながら）進んでいるアキさんたちの後ろで、アキさんたちのカメラを自分が持ったまま続きます

・・・・・まあ、変わった所と言えば、

《結局こうなるわけですね。まあ、わかってましたが・・・・・》
「そういやさっきもあいつらこんな感じだったな」
「・・・・・造、雄二。怖くなったらあんな風にいつでも抱きついていいから」
《いや、そこは逆じゃないですかね？》
「逆も何も、全てが間違いだからな？」

今回は自分の側に、ゆーさんと霧島さんがいることと・・・・・・

ガチャガチャ　↑デュラハンが歩く音
ドスンドスン　↑ぬりかべの移動音
パタパタ　↑サキュバスの羽音
ウォーン　↑狼男の遠吠え
ヒューゥ　↑雪女の周囲を凍て付かせる音？

・・・・・小暮さんの指示で自分たちについてくる（憑いてくる？）オカルトな召喚獣くらいですかね？いやはや・・・・・もう少し全員の召喚獣が怖いものでしたら、姫路さんと島田さんが危なかったですよね・・・・・・？

《それにしても、先ほどから妙ですよね》
「ん？やっぱお前もそう思うか、造？」
《ええ、先ほどから妙に・・・・・・》
「・・・・・・静かすぎる」

と、霧島さんが続けてくれます。そう、何だかやけに静かなんですよね。Cクラスではこれくらい歩いていれば、四、五回はオカルトな召喚獣がでてきていたハズですもんね。召喚獣の数が足りないってことではないでしょうし？そうなると何かの作戦でしょうかね？油断したところを一気に攻める的な？そんな会話をしていると、

『あ、危ない・・・・・・静かな暗い迷路でこの状況は、本当に危ない・・・・・・！』

『そ、そうですね・・・・・・・静かで暗いと、怖いですね・・・・・・』
『ほ、ホントよね・・・・・・こんな空気、怖いわよ・・・・・・・』
『いや、違うんだ姫路さんに美波。怖くはないんだ。危ないだけなんだ』
『『???』』
何だかアキさんの様子が変ですね?様子と言うか行動が色々と変ですね?
《???アキさんは何を言っているんですかね?》
「ま、あのバカのことだ。大方自分の理性的な意味で危なんだろう」
「・・・・・・雄二も理性を解き放つ?」
「解き放つ前にお前を縛っておいた方がよさそうだな」
「・・・・・・雄二のエッチ／／／／／／（ポッ）」
「マズイな。このバカもどうやら理性が危ねえようだ」
《・・・・・・やれやれですね?》
結局そんな妙な話になりつつも、迷路となっているAクラス内を歩きます。・・・・・・それにしても、ゆーさんには霧島さんで、アキさんには姫路さん&島田さんでしょう?自分、なんかここにいるだけでアウェーな気分ですよ。ああ、ダメかも。皆さん見てると砂糖吐きそう。
『あ、あの・・・・・・私、前から明久君に聞きたいことが・・・・・あったんです』

ん？そんなことを考えていると、何だかアキさんたちから突然シリアスな空気が。何でしょうかね？

明久Ｓｉｄｅ

「二人とも、ゴメンね？無理に誘っちゃって」

とりあえず何でもいいから話さないとね。僕の理性を暴走させないためにも、姫路さんも美波に気を紛れてもらうためにも。

「あ、いえ。そんな。私の方こそ迷惑をかけちゃうのに一緒に来てもらってありがとうございます。すみません、やっぱり明久君には頼ってばかりですね」

「ウチも何だかんだで、結局頼ってばかりでゴメン。見栄張っておきながら、こういう場所では甘えっぱなしよね・・・・・・」

「あ、いやいや。二人とも謝らないで。参加してくれたことに感謝こそしても、迷惑に思うこととか謝ることなんて、絶対にないからね？」

うーん、しまったな。二人ともそんなことを気にしてたのか・・・・・・僕的には、苦手でも頑張って一緒に来てくれて、しかも自分を頼ってくれるなんて嬉しいに決まってるし、喜びこそすれ、嫌な気分になるわけないのにな。

「いやー、僕的には嬉しいんだけどね？自分を頼ってくれるなんて、僕たち男子にとっては全然嫌なことじゃないしさ。なんかお姫様を護るって感じかな？」

二人を安心させる為にも、おちゃらけた感じで言ってみる。これで調子を戻してくれると良いけど・・・・・・

「あら♪それじゃ、アキが王子様ってこと？」

「あぁっ！美波今、絶対似合わないって思ってたでしょう？」

「そんなことないわよ♪王子様？」

「うぅ・・・・・い、いや、自分でも似合わないってことくらいわかっているけどね？でも、ならやっぱり二人はお姫様ってことかな？」

「えーっ？それこそウチは似合わないでしょう？まあ、瑞希は姫っぽいけどね」

「ああ、確かに姫路さんはお姫様っぽいかも。優しいし欠点なんて無いし、名前も『姫』だからね」

「・・・・・・お姫様・・・・・・・ですか・・・・・・・」

「・・・・・・ん？瑞希・・・・・・？」

そんな感じの会話をしていると、急に姫路さんが繋いでいた手を離して悲しそうな顔をして歩みを止めた。

「どうしたの姫路さん？」

「あ、あの・・・・・私、前から明久君に聞きたいことが・・・・・あったんです」

姫路さんが何か言いたげにモジモジしている。表情を見るに、あま

り楽しい話じゃなさそうだけど・・・・・・

「・・・・・瑞希。言いたいことはこの際ハッキリ言っていいんじゃない？もしウチに聞かれたくないなら離れておくし」
「あっ・・・・・大丈夫です。美波ちゃんありがとう。美波ちゃんも聞いてくれますか？」
「うん、ウチが聞いていいならね♪」

美波が姫路さんが話しやすいように、上手くフォローを入れてくれた。こう言う時の美波って本当に凄いよね。それにしても僕に聞きたいこと、か・・・・・・

「えっと、それで何かな姫路さん？」
「・・・・・その、明久君は私の事どう思っているんですか？」
「ほぇ？」
「私、ずっと気になってたんです・・・・・明久君は私の事、お姫様のように大事に扱ってくれますけど、もしかしてそれは明久君が私と距離をとってるからじゃないかな、って」
「姫路さんと距離？」
「・・・・・瑞希・・・・・・」

う、うーん・・・・・特にそんなの気にしてなかったと思うんだけどな？

「明久君さっき『欠点の無いお姫様みたい』って言いましたよね？」
「あ、うん。言ったけど？」
「違うんです・・・・・！私、そんなんじゃないんです・・・・・

・！何をやるにしても鈍くさいし、すぐにヤキモチやくし、勉強だって褒めて貰っても大事な時には倒れちゃってるし、独占欲が強いし・・・・・！面倒だらけで・・・・・・」

「いや、そんな事は・・・・・・」

「アキ、黙って聞いてなさい」

美波も真剣な顔で僕に言ってくる。姫路さんは一呼吸をして、小声ながらも勢いよく一気に語ってくる。

「明久君は・・・・・私を過大評価して、自分を過小評価して、一歩引いて遠慮しているように思えちゃうんです・・・・・！気を遣って、遠慮して・・・・・・本当の私を見てくれていない気がするんです・・・・・・」

想像もしていなかった会話の内容に、どう返事をすればいいかわからない。・・・・・でも、確かに遠慮されて嫌って気持ちは何となくわかる。いつも仲良くしているのに、自分だけ気を遣われるのは僕だってなんか嫌だ。そうか・・・・・姫路さんはそう言うことを考えてたんだね・・・・・

「・・・・・アキ」

「う、うん。わかってる・・・・・姫路さん、あのね」

「す、すみません・・・・・ちょっと取り乱し・・・・・ちゃっ・・・・・て？」

と、姫路さんが何か慌てた様子で僕らの背後を見る。・・・・・？どうしたんだろう？僕も美波もつられて後ろを見ると・・・・・

『『《・・・・・・・・・・・・・》』』

気まずそうに歩いている造と雄二と霧島さんが。・・・・・わ、忘れてたっ!?一応、目は逸らしているけど、さっきの話聞かれてたよね!?

「え、えっと!?この話は忘れてください!と、とりあえず進みましょう!」

「あっ!ちょっと待ちなさい!瑞希一人で行くのは危ないわ!」

そう言って、慌てて姫路さんが僕の手を離して前に進む。それに続き、美波も慌てて追いかける。それにしても・・・・・・

「さっきから全然お化けが襲ってこないな・・・・・・?」

ずっと薄暗い迷路の壁しか見えない。召喚獣も仕掛けも何一つない?後ろをついて来てくれている造たちもこれと言って仕掛けをされていた様子もないし。これが向こうの作戦なんだろうか・・・・・・?

間違いなく、何かある。心配だし姫路さんと美波に離れないように言っておこう。そう思った瞬間・・・・・・

「・・・・・・っ!?」

薄暗く道を照らしていた明かりがフッと一斉に全て消えた

『え・・・・・っ？あ、明久君・・・・・・？』
『ちょ、ちょっと・・・・・・？何よコレ？』

姫路さんと美波の戸惑う声が聞こえてくる。すぐに近くに行ってあげたいけど、完全に光のない状態なので直ぐには動きだせない。しまった、二人を離したのは失敗だったかもしれない。

「二人とも落ち着いて。下手に動き回るよりも目が慣れるまで何もしないでいた方が良い。あと、できれば目も瞑っておいた方が良いと思う」

『あ、はい。分かりました』
『瑞希とウチは合流出来ているから大丈夫よ』

二人の声が聞こえる。うん、大丈夫かな？僕も目が慣れてくるまでじっとその場で留まる。これで明かりがついた瞬間に召喚獣が一斉に現れて驚かされるなんてことも考えられたので二人には目を瞑っていた方が賢明だろう

暗闇で待つこと少し。何故か近くでは何かを動かすような音がしていた。さては・・・・・いよいよ仕掛けてくる気か！

物音が収まってくると、僕の目も大分暗がりに慣れて周囲の様子が分かるようになってきた。まずは二人の傍に行って安心させてあげないと・・・・・・

「って、あれ？道が・・・・・・」

まだはっきりとは見えないけど、ほんの二，三歩しか離れていなかった僕と二人の間に突然壁が現れたような・・・・・・！？な、何これ！？

「まずい、まずい・・・・・・！早く二人と合流しないと・・・・・・！」

慌てて迂回路を探す。怖がりな二人をこの状態にしておくなんて可哀想だ。ほんの数十センチ先ですら見通せない暗闇の中を手探り状態で進んでいくと、しばらく行ったあたりで二人分の人の気配がしたから、急いで近づいてその手をとった。良かった。上手く合流できた！

「ごめん、二人とも。怖かったよね？もう大じょう・・・・・・」

パッ　↑照明点灯

「ブサイク＆美幼女」

「殺すぞ」

《良い根性です、アキさん♪》

そこにいたのは見るに堪えないムサい男の雄二と、赤いランドセル

が似合いそうな造だった。あ・・・・・・あれ？

８４時間目　貴方と私と心の距離～お姫様の憂鬱～（後書き）

すみません、糖分です。

ちょっと間に合わなくてここまでの更新です。実は予定が早まり、明日入院することになりました。残りは病院で全力で書く予定です。感想の返信が出来ないと思います。すみませんです。

もし、自分のいない間に自分の作品のキャラとか使いたい方がいたら、是非使ってください。許可は特にいりません。使ってくださったらウチの子たち（？）も喜ぶと思います。

中途半端な更新になってしまい、申し訳ございません。読んでくださっている皆さんや感想をくれた皆さん、本当にありがとうです！復活したら全力で更新できるように頑張りますね！

ありがとうございました！

８５時間目　アキさんの気持ち～姫路さんの心情～（前書き）

皆さん久しぶりです。糖分摂取魔です。

手術自体は成功して一旦家に帰れたので、一話分更新しますね♪久しぶりなのであまり調子が戻っていないので、その辺は体調が戻り次第また修正します！

ではでは８５時間目です。どぞどぞ

85時間目　アキさんの気持ち～姫路さんの心情～

「うぇ・・・・・唯でさえ姫路さんと美波の可愛い顔があると思ったのに、いきなり雄二の顔だなんて最悪だよ。これで造がいなきゃ、間違いなく雄二を殴り飛ばしてたよ？」
「黙れ。何をわけのわからんことを言っている。そして手を離せ。気色悪い」
《アキさんもゆーさんも言い過ぎでは？》

アキさんたちに続いて歩いていたのですが突然照明が落ちて、気が付けばアキさんと霧島さんが交代していました。明らかに向こう側（三年生）の行動（アクション）でしょうが・・・・・何でしょうかね、コレは？

「うぅ・・・・・やけにゴツゴツした手だと思ったら雄二か。造はなんかプニプニしてるよね」
《いや、そんなことはどうでもいいでしょうに》
「だな。・・・・・あー、気持ち悪かった」
「おっと、そんなことしている暇はないんだった。ねえ、二人とも？姫路さんと美波を見てない？」
「いや。見てないな」
《ですです。アキさんこそ霧島さんを見てませんか？》
「ううん。・・・・・困ったな、早く捜しに行かないと。そういうわけだから二人ともまたね」

と、アキさんが慌てて迷路の中へ駆け出そうとします。

「待て明久・・・・・・おそらく無駄だ」
「・・・・・・へ？何でさ？」
《ゆーさん？》
「こりゃ三年に一本取られたな。・・・・・・ここまで仕掛けなかったのは、多分俺らをバラバラにするためだ」
と、ゆーさんが説明します。・・・・・・これを、三年生が？うーむ・・・・・・まあ、とりあえず話をまとめる為にも聞きましょうかね。

「どう言うことさ、雄二？」
《・・・・・・これが三年生の作戦ってことですか？》
「多分な。今頃姫路たちと翔子が合流してんだろうさ。下手すりゃそろそろ悲鳴くらい聞こえるかもだぜ？」
「・・・・・・姫路さんと美波と霧島さんが合流して悲鳴？」
ふむ、ゆーさんの言いたいことは大体把握はしましたね。ですが・・・・・・

「要するに向こうの翔子対策だな。向こうは俺らのデータを完全に掌握しているようだったからな。今残っている戦力で最大の障害は間違いなく翔子だ。翔子は滅多なことじゃビビらない上に、二学年主席だぞ？それがわかってんならそのパートナーを潰せばいい。だが肝心のそのパートナーが俺と造とくりゃ・・・・・・」
「二人じゃ驚かないだろうし・・・・・・そこでパートナーを入れ替えた？いや、何となくわかったけどそれってつまり、霧島さんと姫路さんと美波の組み合わせになるように狙ったってことだよね。それって物凄く不確定要素ないかな？そもそもピンポイント過ぎだ

しさ」
「お前の言う通り、確かに不確定要素はあるように見えはするが意外と穴はある。迷路と言うこの場の特性を最大限に活かしているんだろう。ある程度俺らを迷わせ、俺らが翔子や姫路たちと離れた瞬間タイミングを見て突然照明を落とし壁を作る・・・・・そう難しくはないはずだぜ？」
《・・・・・・・・・・・・・・むう》

流石ゆーさん。それなら全てが理にかなっていますよね。正直理にかない過ぎなほどね。

「うげ・・・・・なるほど。確かにそれなら大よその説明がつくね」
「まあ、これが俺の推測だが・・・・・造、お前はどうやら納得してねえようだな」
「え？違うの造？」
《・・・・・いえ、ゆーさんの考えはとても理にかなっていると思います。自分だってゆーさんの考え、あっていると思いますし》

と言うより、作戦自体はまさにゆーさんが言った通りのことが起こっているハズです。でなきゃ自分らと姫路さん島田さん霧島さんたちとはぐれるなんてないでしょうからね。

「それにしては随分歯切れ悪いな？気になることでも？」
「そだね。いつもの造らしくないよ？」
《うーん。ちょっとした違和感なのですが・・・・・》

「「違和感？」」

《この作戦は少々強引すぎだと思うんですよ。ある意味反則ギリギリですし、三年生がそこまでするとは思えないんです》
「え？でもさっきまではあんなに・・・・・・」
《ええ。確かに先ほどまで接戦してたのは事実ですが、それでもルールに基づきお互いがフェアな状態で楽しんでしたでしょう？三年生も楽しむためにこの企画に参加しているハズ。それなのに・・・・・・》
「急にこんな卑怯なことをするとは思えない・・・・・・そう言いたいのか？」
《ですです。てか、正直やり過ぎな気がするんですよ》
何よりこの作戦を指示しているハズの小暮さんは、ルールをギリギリを守りつつ面白おかしく策を練る方ですし・・・・・・何だか彼女らしくない策なんですよね。

「って言っても実際妙なことが起きてっからな」
《まあ、あくまで自分の考えですがね？そんなことをするハズが無いって自分の考え自体も、三年生の計算の内かもしれません。ただ・・・・・・目的が肝試しから何か別のものにシフトしている気がするんです》
先ほどから、何か肝試しとは別の思惑と言いますか・・・・・・まあ、何かが起こっていると思います。Ａクラス戦になってから特にですね。まあ、その『何か』がよくわからないんですがね？

「・・・・・・ま、グダグダ考えてもらちが明かねえ。とりあえず俺らだけでもチェックポイント近くまで言ってみっか」

《・・・・・ですかね。どの道後手後手で、こっちからできることは少ないようですから》
「あ、そだね。姫路さんと美波も心配だし、どんな様子か知りたいし」
ゆーさんたちの言う通り、ごちゃごちゃ言っても仕方ありません。とりあえず自分らは女性陣を信じて進むことにしました。

～造・明久・雄二移動中～

「それにしても久保くんたちがあっさりと迷路抜けれたのに、僕ら時間かかってるよね？」
「ああ、それはおそらく迷路が作りかえられているからだな。久保たちが辿り着いた迷路の道順をたどっても無駄なんだろうさ」
《なるほど・・・・・それなら先ほど壁が突然現れたことも説明付きますね》

別に迷路を動かしてはいけないなんてルールもないですし、設備を壊してはいけないなんてルールも相まって中々考えてありますよね。
まあ、それは一旦置いておくとして、ようやくBクラス戦の時くらいにお化けが出てき始めましたね。いろんなオカルト召喚獣やセットが縦横無尽に脅かしにかかります。ただし相手がアキさんやゆーさんじゃ驚かすことは至難の業でしょうがね？

「にしても妙だな？」
《はい？何がですか？》

と、顎に手を当てて思案顔だったゆーさんがポツリと言います。

「妙って雄二の頭が？」

「黙れ、頭無しの脳無し。俺が言ってるのは未だに姫路たちの悲鳴が聞こえないことがおかしいって事だ」

《あ、そう言えば随分経ちますが悲鳴なんて聞こえてきませんね》

ゆーさんの言った通りの作戦なら、そろそろ姫路さんや島田さんの二人が悲鳴を上げてもおかしくないですよね？

なんて考えていると、ちょうど壁の向こうから微かに話し声が聞こえてきました。

『・・・・・姫路、島田。大丈夫？』

『は、はい・・・・・っ！大丈夫です・・・・・・！怖くないです・・・・・・！』

『そ、そうね・・・・・・っ！こんなの見せかけよね・・・・・・』

『・・・・・島田の言う通り。こんなの、ただの見かけが変わっただけの召喚獣。怖くない』

『はい。そうです。召喚獣だから怖くないんです・・・・・・！』

『が、頑張りましょうね・・・・・・２人とも・・・・・・！』

これは・・・・・姫路さんと島田さん、そして霧島さんの話し声ですね。

「呼びかけたら聞こえるかな？」

《どうでしょうね。あまり刺激してはマズイ気もします》
「どうやら必死に悲鳴を堪えているから聞こえないんじゃないか？」
「まぁ、とりあえずやるだけやってみるよ。おーい、姫路さーん。美波ー！」

アキさんが失格にならない程度で話しかけます。さて・・・・・？

『・・・・・っ！？き、聞こえません・・・・・・！囁き声なんて全然っ！』
『そうよ・・・・・・誰もいないんだから、幻聴よ・・・・・・！』
あー・・・・・・コレはまた。お二人とも頑張っていますね。

「やめとけ明久」
《逆効果でしたね》
「あはは・・・・・そうする。折角二人が頑張っているのに僕がこれで悲鳴をあげさせちゃったらあまりに申し訳ないね」
「だな・・・・・・おい明久。アイツら、何かあったのか？」

と、急にゆーさんが踏みこみましたね。流石アキさんの悪友さんでしょうか？

「うぇ！？い、いや。う～～～ん・・・・・・あったと言えば、あったような・・・・・・」

アキさんが歯切れ悪く、自分の持っているカメラをチラリと見ます。
ああ、そう言うことですか？

≪（アキさん、カメラに聞きとれないようにしておくので安心してください。話したくないなら話さなくてもいいですよ？）≫
「（さっき微かにお前らの会話が聞こえていたんだが、心配とか、距離とか言ってなかったか？）」

ゆーさんと小声でアキさんに話しかけます。先ほどもちょっと気になりましたからね。

「（うん・・・・・・まぁ、色々と姫路さんも悩んでいるみたいで）」
「（みたいだな。その話なら俺らも姫路にそれとなく相談されたことがある）」
「え！？」
≪（アキさん落ち着いて？ゆーさんも自分も友人として、です）≫
「（ああ。おまけに遠まわしに相談されただけだ）」

そう。姫路さん、初めての試召戦争の時に『自分は吉井君に腫れもののように扱われている気がします』って言ってました。あの時からやはりまだ悩んでいたんでしょうね。

「（ってことは。あれは姫路なりの努力ってことだな。おそらく島田もそんな姫路の努力に付き合ってやってんだろう）」
≪（でしょうね。でなきゃ先程からあれほど怖がってた二人が急にお化けに慣れるとはないでしょうし）≫
「（・・・・・・努力？）」
≪（えっと。距離の近い、助け合える仲間になるために頑張ってい

るってことですね）≫

「（だな。アイツ、自分が助けられてばかりだと思っているみたいで、随分と気にしていたからな）」

「（そう言えば、前にもそんなこと言ってたかも。でもそんなこと、気にすることないと思うけどなぁ？）」

・・・・・なるほど？アキさんの考えはわかります。アキさん優しいですし、そう思うことは『当たり前』な感覚があるんでしょうね。

≪（アキさん。例えアキさんがはそう思っても姫路さんがそう思うとは限りませんよね？）≫

「（そう言うこった。こういうのは本人の気持ちの問題だからな）」

「（あ、そっか・・・・・・確かにそうだね）」

例え自分がそう思っていなくても、相手にとっては負い目を感じることだってあります。自分も昔はよく間違ってましたから、アキさんの気持ちがわからないわけでもないですし。

姫路さん『役に立ちたい』『護られるのは嫌』って感情が大きいみたいですし。今は霧島さんや島田さんが、特に島田さんがですが必死にフォローを入れているみたいですね。彼女もお化けが苦手でしょうに・・・・・・

「（・・・・・そう、だよね。言わなきゃわからないこともあるよね）」

≪（アキさん？）≫

「（あ、ゴメン。何でもないよ。・・・・・頑張ってもらいたい

ね）」

ガタッ！

『（ビクッ）うぅぅ・・・・・・っ！うー・・・・・・・っ！』

『ぐぅ・・・・・・瑞希っ・・・・・・・ガンバろ？ね？』

『・・・・・・二人とも、大丈夫。怖くない。こんなのは作り物』

『は、はい・・・・・・っ！大丈夫です・・・・・・！頑張ります・・・・・・！』

『そ、その意気よ・・・・・・ウチも頑張る・・・・・・』

『・・・・・・姫路も島田も頑張り屋さん。とても良い子』

ちょっと涙声になりながらも懸命に耐えている姫路さんと島田さんの様子に胸をうたれますね。頑張って下さい二人とも・・・・・・！霧島さん、大変でしょうがお二人のバックアップをお願いしますっ・・・・・・・

「んじゃ、まあ俺らも行くか？翔子たちと同じ方向に向かおうぜ。アイツらを追いこさないように注意してな」

「あ、うん」

《はいです》

ゆーさんの言うとおりに、３人の進んでいる方向と同じ方へ歩いて行くことにします。教室の間取りから想像するに3人の方が自分らよりもチェックポイントに近そうですね。

『・・・・・・大丈夫。位置取りから考えると、もう少し』

『は、はいですっ・・・・・・！』
『み、瑞希、目を瞑っててていいわよ・・・・・・』
『あ、ありがとう美波ちゃん・・・・・・大丈夫ですっ！』
『・・・・・・二人とも本当に頑張り屋さん』

あちらさんは悪戦苦闘しながらも、少しずつ進んでいる模様ですね。
ここまで来たからにはチェックポイントを通過して貰いたいです。

・・・・・・・・・・・・それにしても、ここでも妙ですね。

《ねえ、二人とも？おかしいと思いませんか？》
「へ？何がさ？」
「・・・・・・造もやはり気づいたか？俺も少し気になって来た」
《先程から自分たちの方は結構お化けのセットやオカルト召喚獣がわんさか出てますが、》
「姫路たちの様子じゃ、あまり積極的に脅かされてはいないようだな？」

・・・・・・これは、やはり妙ですよね？何だか矛盾してます。

「何でそれが妙なのさ？お化けがでないなら、姫路さんたちに有利でいいじゃないか」
「お前はバカか？だったら三年は何のために翔子を姫路や島田と組ませた？驚かして失格にしなきゃ意味ねえだろうが」
「・・・・・・・・あれ？そう言えばそだね」
《うーん・・・・・・油断を誘っているとかくらいしか思いつかな

いですね》

何だか肝試し後半から三年生と言いますか、小暮さんにいいように踊らされている気がします。巧く思考の歯車が噛み合わないですね。・・・・・・遊ばれている？

「まあ、今は様子見くらいしか出来ねえな・・・・・・ん？何だ？翔子たちの足音が止まったみてぇだな」

と、ゆーさんが壁に耳を当てて自分らに促します。・・・・・・何でしょうかね？

『・・・・・意外なペア』

『な、何だ・・・・・アンタたちだったのね？』

『ビックリしました・・・・・お二人が先に入っていた方だったんですね？』

・・・・・三人とも何方と話してんるんでしょうか？話しぶりから察するに、二年側のペアのようですが・・・・・・

「どうやら二年組の生き残りのペアと遭遇したみてえだな？」

《そのようですね。良かった・・・・・どなたかわかりませんが、無事みたいで》

「だね。・・・・・あれ？てかホントにそのペアって誰たちだろね？」

と、そんなことを話していると・・・・・

ドンッ！

『・・・・・え？』

『きゃ！？な、何するんですかっ！？霧島さん、大丈夫ですか！？』

『ちょ、ちょっと！？いきなり何すんのよ！ウチら敵じゃないでしょ！？っきゃあああああああ！？』

『み、美波ちゃん！？』

「「《・・・・・・・・・・・え？》」」

何やら只ならぬ雰囲気です。これは一体・・・・・・！？

「っ！姫路さん！美波！どうしたの！？」

「おい、落ち着け明久！壁壊す気かっ！？」

「だ、だって！二人がっ」

「いいから落ち着け！・・・・・造、お前今なら飛行能力があるんだったな？」

《ええ！ちょっと禁じ手ですが緊急事態ですっ！見てきますねっ・・・・・飛翔（フライ）っ！》

腕輪が無くても、今の状態なら空を飛ぶ能力が付加されています。

急いで壁を越えて見つからないように姿を隠しながら様子を見てみると・・・・・・

《・・・・・・っ！？これ、は》

霧島さんと島田さんの召喚獣が戦闘不能になり、姫路さんの召喚獣も鎌を突き立てられています。そして三人が睨みつける先には・・・・・・

申し訳なさそうに目を逸らす小山さんと・・・・・・オカルト召喚獣：死神を従え、三人を睨み返す根本くんの姿がありました。

85時間目　アキさんの気持ち～姫路さんの心情～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

しばらくしたら、また入院して投薬されるので、感想の返信などが遅れるかもしれません。できるだけ頑張ります！

読んでいただきありがとうございました！ではまた次回です！

８６時間目　好きになった人は～優しいバカｂｙ瑞希＆ａｍｐ；美波～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。夏ですね～当り前ですが（汗）

また明日から入院で、しばらく書けないかと思いますが書いた分を更新です。とりあえずはちょこちょこ書いていきますので、気長に待っていただけると嬉しいです。

では行きますね。８６時間目、どうぞ

只ならぬ雰囲気を感じ、壁を越えた自分の目に映った光景は・・・・・ワケがわからずに睨みつける姫路さんに召喚獣を失った島田さん、霧島さん。そして３人の視線から目を逸らす小山さんに死神の召喚獣を操っている根本くんの姿でした。

突然起こった事態を整理する為にも、とりあえずは息を潜めておきます。一体何がどうなって・・・・・と、黙っていた根本くんが話し始めました。

「お前らには悪いが、ここでリタイアになってもらう」

「・・・・・・」

「「「っ！」」」

これはまた・・・・・何の脈絡もなくですか？根本くんが淡々と喋ります。

「ど、どうしてこんなことをっ！」

「そうよ！そもそもウチらは今は味方なハズでしょう！？」

姫路さんも島田さんもかなり困惑していますね。理不尽に攻撃され、しかも味方なハズの相手からの攻撃じゃそうなりますよね。実際、自分もまだ理解できていません。何でこんなことに・・・・・

「・・・・・貴方たちの目的は何？何の目的もなくこんなことをするとは思えない」

そんな中、一番冷静な霧島さんが２人に尋ねます。流石に霧島さんは落ち着いていますね。

「わからないか？・・・・・・お前らだからだよ」
「・・・・・・？」
「だからどうしてっ！？」
「そうよ！ワケわかんないわよ！」
「どうやら本気でわからんらしいな？・・・・・・お前らが吉井や坂本、そして月野の味方だからだよ」

「「なっ！？」」

・・・・・・自分らが、姫路さんたちの味方だから？むう、よくわかりませんね？

「・・・・・・雄二たちの味方だから？」
「ああ。アイツらには幾度となく邪魔されてきたからな。いい加減に復讐の機会が無いか探してたのさ。お前らの次はあの三人だ」
「・・・・・・復讐、ただその為にこんなことを？」
「そうだ。俺は今日ここでアイツらを完全に潰す。ついでに三年に勝てば、俺の崩れかかっていたＢクラス代表の地位も戻るだろうしな。だがそれにはお前らがある意味一番邪魔だからな、チェックポイントに辿り着く前に始末しておきたかったのさ」

「ちょっと！何よその身勝手な理由は！？」
「そうですよ！それにこれはルール違反じゃ・・・・・・」
「ハッ！ところがルールには『脅かす側の一般生徒の召喚獣でのバトルを無効とする』とはあるが『驚かされる側の召喚獣でのバトルを無効にする』とはない。俺はルールは破っちゃいねえ」

「「そんな・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・なるほど？これはやられましたね。確かにルール上は問題ないでしょう。まさか味方が敵になるとは。ですがこの作戦はまるで・・・・・・いえ、それは終わってから確認するとしますか。

「そもそもアイツらはFクラスのクズの癖に何かと俺の邪魔をして・・・・・観察処分者二人に馬鹿のFクラスの代表の癖に。まあ、お前らも残念だったな。あんなクズ共と一緒にいるせいで失格だ」

・・・・・根本くんが、まるで壁に向かって挑発するように話しています。まるでその壁の向こうにアキさんやゆーさんがいるのがわかっているかのように。

「・・・・・・雄二達は、クズじゃない」
「あ？」
「・・・・・・雄二達はクズじゃない」
「これはこれは。まさか学年主席がそんなことを言うなんてな？だが事実は事実だ。問題を起こす、教師には目ぇつけられてる、部活で功績を残している訳でもない、おまけに成績はクラスの最底辺のFクラスだ。アイツらをクズって呼ばずになんて呼べってんだ？」
「・・・・・貴方に何がわかる」

「何もわからんな。そもそも観察処分者に認定されている二人がいる時点で終わっているだろ。あんな馬鹿共は大人しくゴミ溜めで埋まってろっての」

そう言って姫路さんたちに罵倒する根本くん。・・・・・目的は未だ見えませんが、やはり挑発を誘っている？それも姫路さんたちではなく、別の『誰かたち』に。そんな感じが・・・・・・

「アンタっ・・・・・・」

「どうして・・・・・・」

「「どうしてそんな酷い事ばかり言うんですか（言うのよ）っ！？」」

と、頭の中でごちゃごちゃ考えていると、突然姫路さんと島田さんが教室全体に響き渡るような大音量で叫びました。・・・・・こ、これは凄い。普段の彼女たちからは想像できないほどの迫力と見たことがないほどの怒りが手に取るようにわかります。

「なんだ？お前らなんか文句でもあるか？」

「確かに貴方に比べたら明久君たちの成績は良いわけじゃないかもしれません！」

「それにアイツらも色々問題も起こしてしまうことだってある！それはわかるわ！」

「ほう。お前らもわかってるじゃねえか？だったら・・・・・・」

「でも！だからってどうしてそんな酷いことばかり言えるんですか！？」

「何も知らないのに！アキたちがどれだけ優しいか知らないのに！ウチらがどれだけ助けられてきたか・・・・・！」

姫路さん・・・・・・島田さん・・・・・・・貴女方は本当にお優しいんですね。

「ハッ！だがお前らだって、あのバカ共がどんだけ頭が悪いのかくらい知ってんだろ。ちょっと成績や素行を調べれば一発でわかるこった。内一人は留年してるくらいだしな」

「貴方はどうして成績や素行だけの表面でしか人を見られないんですか！？そんな物より大事なものはたくさんあるのに・・・・・・！」

「バカって言われても、人に罵られても、アイツらは一生懸命頑張ってんのよ！それがわかんないのに勝手なこと言わないでっ！」

「やれやれ。ぎゃんぎゃん喚くなよ。あんなカス共の事情なんて知ったことじゃねえ」

「明久君達はカスなんかじゃありません！」

「そうよ！取り消しなさいっ！」

「誰がそんなことを。・・・・・おっと、姫路。お前もさっきの叫び声で失格のようだぞ。俺がとどめを刺すまでもなかったようだな」

「っ～～～～～～～～～！」

姫路さんは下唇を噛みしめ、今にも泣きそうな顔をしています。・・・・・悔しいんでしょうね。島田さんも同じように涙目になりながらも根本くんを睨んでいます。それはきっと・・・・・・『失格になった』事ではなく、『大事な人を罵倒された』事が・・・・・・

「ともかくお前らは退場だ。ご苦労さん、とっとと失せな」

「・・・・・言われるまでもない。その顔、いつまでも見ている

物じゃない。行こう姫路、島田」
「・・・・・・・・・・・・・・はい」
「・・・・・・・・・・・・・・わかった」

そう言って霧島さんは姫路さんと島田さんの手を握って迷路を引き返します。姫路さんも島田さんも悔しくて涙を流しながら霧島さんに連れられます。

「・・・・・・・一つだけ」

と、引き返しかかったところで、霧島さんが根本くんの方へ向き返して、

「・・・・・・貴方では、雄二や造や吉井には絶対勝てない。私は三人を信じている。あの三人なら貴方を倒してこのチェックポイントもクリアする」

そう、ハッキリとした口調で言って、そのまま霧島さんは姫路さんたちを連れ戻って行きました。

「・・・・・・・・・・・・ゴメンなさいね、三人とも」
「行くぞ。次はあの三人だ。いいか友香、俺がアイツらに勝てたら、」
「・・・・・・・はいはい」

そう言って、根本くんと小山さんは進み始めます。それにしても小山さん、『ゴメンなさい』ですか・・・・・?何やら彼ら彼らで、

もしかすると色々と複雑でしょうかね。

でも今は置いておきましょう。まず、アキさんとゆーさんに起こったことを話さねば・・・・・・

飛翔（フライ）を解除してアキさんたちのもとへ戻ります。二人ともどうやら先ほどの姫路さんと島田さんの声が聞こえていた様子。大よそのことは把握しているみたいですね。

「・・・・・・詳しい説明をいいか？造」

「・・・・・・お願い、何があったの？」

《・・・・・・えっと、ですね・・・・・・》

☆

「ふーん、そっか。そんなことが」

「なるほど。まあ、大体のことは聞こえてたからな。概ね理解した」

簡単な説明でしたがアキさんもゆーさんも、大まかな状況は把握したようです。彼女らが放った何か強い感情を含んだ声も届いていたようですからね。

「それにしてもさ雄二、造。僕達、どうやら優しいらしいよ？」

「そりゃ初耳だな。造はともかく俺はお前ほどじゃないにしろ、自分も立派なクズだと思ってたんだが」
「そうだよね。僕も雄二ほどじゃないにしろ、自分がダメ人間だって自覚はあったんだけど」
《全く二人とも・・・・・それを言うなら自分は留年して、おまけに観察処分者ですよ?》
「あれ?そうだっけ?あ、でも僕も観察処分者か!」
「よくよく考えりゃ俺ら、相当なダメ人間だよな?」

と、三人ではっはっは、と笑いながら言い合います。・・・・・・ただし目は全員笑っていませんがね。

「まったく姫路さんも美波も勿体ない事するよね。あんなに頑張ったのに、僕達の為に台無しにしちゃうなんて」
「だな。こんな遊びでムキになる事なんてないのにな。勿体ねえ」
《ま、彼女らしいですがね。本当に勿体ないですが》

あんなに歯を食い縛って一生懸命頑張って。最後まで自分らを認めてくれて。本当に勿体なくて、本当にお優しい彼女たちですよね。

「んじゃ、行くか明久、造」
《ですね。行きましょうか》
「あ、二人とも。お願いがあるんだけど」

そう言ってアキさんが自分とゆーさんに一つの『お願い』をしてきました。その内容は・・・・・やっぱりそう来ましたか。先程の姫路さんと島田さんの声を聞いて、一番黙っていられないのはアキさんでしょうからね。これはアキさん、相当キテますし。

《ふふっ、了解です。思う存分やっちゃって下さい♪》
「またお前に貸しが増えたな。いい加減そろそろ返せよな？」
「ちぇっ。わかったよ。やれやれ、肝試しなんて遊びみたいなもので楽しめればいいと思っていたけど・・・・・・」

普段の優しい顔から一変。アキさんに怒りと決意に満ちた感情が溢れています。・・・・・・久しぶりに見ましたね。アキさんが本気で怒っている所を。

「ここから先は本気だ。クソ野郎」

そう言って、アキさんは根本くんたちが進んだと思われるところに向かい、駆け出します。さてさてどうしましょうかね？この状態のアキさんは・・・・・・本当に手がつけられないほどお強いですよ？

８６時間目　好きになった人は～優しいバカｂｙ瑞希＆ａｍｐ；美波～（後書き）

ありがとうございました。８６時間目、いかがだったでしょうか？

ここでは常夏コンビの代わりに根本が悪役になってますが……うん、根本ファンの皆さん（いるか知りませんが）ゴメンね？あ、言い忘れていましたが、常夏コンビも罵倒をしないだけで、一応肝試しのラスボスとして活躍させる予定ですよ。

また明日から病院に捕獲されます（苦笑）とりあえずのんびり書く予定です。……それにしてもこの『バカとのんきと召喚獣』は造が留年している設定ですが……いかん、このままでは自分も留年してしまうのでは……？き、気のせいだよね？多少遅れても流石に留年はないですよね？ＨＡＨＡＨＡ（汗）

と、とにかくまた次回！いつになるかはわかりませんが、これからもよろしくお願いしますね！

バカテスト集その？＋肝試しの裏側その？（前書き）

皆さんどうもお久しぶりです♪糖分摂取魔です！

久しぶりに書ける～♪・・・・・・んですが、今回はバカテストとちょっとした短編ですみません（汗）ある意味伏線回収な短編となっております。

ま、とりあえずとっとと行きましょうかね。ではではどうぞです！

バカテスト集その？＋肝試しの裏側その？

バカテスト　英語）
次の単語を英訳しなさい。

『スペイン語』

姫路瑞希の答え
『Ｓｐａｎｉｓｈ』

教師のコメント
基礎英単語の一つですね。たまに頭文字のＳが大文字になるのを忘れてしまう人がいます。
そのようなケアレスミスには充分注意しましょう。

土屋康太の答え
『Ｓｐｅｎｉｓｅ――』

教師のコメント
“Ｊａｐａｎｅｓｅ”と同じような形で“Ｓｐｅｎｉｓｅ”と書きたかったんでしょうか。残念ながら間違いです。

吉井明久の答え
『Ｓｐａｇｈｅｔ――』

教師のコメント

どう解釈してもスパゲッティと書こうとしたようにしか見えません。

月野造の答え
『ｅｓｐａｎｏｌ』

教師のコメント
・・・・・えっと。ｅｓｐａｎｏｌ＝スペイン語には間違いないのですが、英訳をしましょうね？

バカテスト　世界史）
次の（　）に正しい単語を入れなさい。

ロシアの作家ドストエフスキーは著書『（　？　）の兄弟』や『（　？　）と罰』の中で、信仰心を失った近代人の虚無主義的な姿を描いた。

姫路瑞希・月野造の答え
『？（カラマーゾフ）の兄弟
　？（罪）と罰』

教師のコメント
正解です。この二作品と『白痴』、『悪霊』、『未成年』はドストエフスキー五大長編と呼ばれる名作ですので、興味があればそれらを読んでみるのも良いでしょう。

土屋康太の答え
『？（マーゾ）の兄弟』

教師のコメント
何てところをピンポイントで覚えているんですか

吉井明久の答え
『？（ムチ）と罰』

教師のコメント
マーゾの兄弟大喜び

とあるＦクラス男子の答え
『我々の業界ではご褒美です』

教師のコメント
・・・・・この回答をした生徒がＦクラスの中で多数いましたが、とりあえず貴方たちは西村先生の補習をプレゼントすることにします。

とあるＦクラス男子の返答
『我々の業界でも苦痛です』

バカテスト　現代社会）

以下の問いに答えなさい。

『国連環境開発会議について説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『１９９２年にリオデジャネイロで開催された国際連合主催の会議のこと。環境や開発について各国の首脳が集まって話し合うもので、地球環境サミットとも呼ばれる。この会議においてリオ宣言やアジェンダ２１、森林原則声明が合意された』

月野造の答え

『１９７０年代始め頃から、人間環境について様々な決定がなされるようになっており、その後、オゾン層の破壊や地球温暖化、熱帯林の破壊や生物多様性の喪失など地球環境問題が極めて深刻化し、世界的規模での早急な対策の必要性が指摘された。その結果、１９９２年に『国連環境開発会議』（ＵＮＣＥＤ、「地球サミット」）が開催され、環境分野での国際的な取組みに関する行動計画である『アジェンダ２１』が採択された』

教師のコメント

その通りです。地球環境に対する取り組みが各国で盛んに協議されている中で執り行われた重要な会議の一つです。この会議は姫路さんや月野君の挙げた他に、リオ・サミットという名前でも呼ばれています。覚えておくと良いでしょう

土屋康太の答え

『一言で説明するのは難しい』

教師のコメント
分かりました。あとで職員室で時間をかけてじっくりと聞かせてもらいます

吉井明久の答え
『　　※環境の事を考えて、この解答は着色料を使用してません』

教師のコメント
貴方は環境以上に自分の卒業の可否についてよく考えましょう。

バカテスト　国語）
次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

☆

「定吉はどこに行ったんだ?」

次平が尋ねると、太助は肩を竦めて答えた

「お菊のところだよ。十年来の恋心を得意の和歌にして伝えてくるんだとさ」

それを聞いて次平が眉を顰める

「恋の和歌ときたか。それなら［結果］は知れたようなものだな」
「違いない。あいつの歌は『下手の（　　）』だからな」

☆

問？　（　　）に正しい語句を入れて『　　』部分の慣用句を完成させ、その意味を答えなさい。

問？　［　　］の“結果”とはどのような結果なのか。次平と太助が予想しているであろう結果を答えなさい。

姫路瑞希の答え
『問？　下手の（横好き）
　意味：下手であるにも関わらず、その物事にやたらと熱中していること

　問？　下手な和歌で失敗してしまって、定吉の想いは成就しないという結果』

教師のコメント
正解です。この文脈で他に当てはまる“下手の――”で始まる慣用句としては、“下手の真似好き”というものもあります。どちらの慣用句であろうとも拙い技量を示すため、次平と太助の二人が予測する結果は失敗することが分かります。

月野造の答え
『問？　下手の（横好き）』

意味：下手なくせに、その物事をむやみに好み熱心なこと

問？　下手な和歌だろうと、定吉は頑張ってほしいです』

吉井明久の答え

『問？　下手の（一念）

意味：へたくそでも一生懸命頑張ること

問？　へたくそでも自分のために一生懸命に歌う定吉の姿に、お菊はきっと心を動かされるに違いないという予想』

教師のコメント

月野君は問？は正解です。お二人の解答は決して正解とは言えませんが、先生はこの二人の解答を好ましく思います。

バカテスト　化学）

次の元素記号を原子量の小さい順に並べ、その名称を書きなさい。

『Ｎｅ　Ｇａ　Ｈ　Ｏ　Ｐｏ　Ｉ　Ｎａ』

姫路瑞希・月野造の答え

Ｈ　：水素

Ｏ　：酸素

Ｎｅ：ネオン

Ｎａ：ナトリウム

Ｇａ‥ガリウム
Ｉ　‥ヨウ素
Ｐｏ‥ポロニウム

教師のコメント
正解です。ＧａやＰｏは中々でてこない元素なので難しいかと思ったのですが、流石は姫路さんと月野君ですね。

土屋康太の答え
Ｈ　‥Ｈ
Ｎａ‥な
Ｏ　‥お
Ｎｅ‥ね
Ｇａ‥が
Ｉ　‥い
Ｐｏ‥ポッ（＊／▽＼＊）

教師のコメント
こんな解答なのにＮａ以外の並び順が合っている辺り、土屋君には不覚にも感心してしまいます。

土屋康太の返答
・・・・・・・・・・・照れる。

☆

学園長の思いつきで、突然始まったように見えるこの肝試し。ですが・・・・・この肝試しの裏側では、意外な話があったのです。それはそんな肝試しの裏側のお話をちょっぴり見て行きましょうかね。

それでは、肝試しが決まった直後の学園長室の出来事からどうぞ。

肝試しの裏側その？　雄二Ｓｉｄｅ

ババァの発言により、突然決まった肝試し。俺はババァに言われた通り肝試しのルールを取り決める為に学園長室に残ったわけだが・・・・・

「・・・・・さて？おいババァ、俺に何の用がある？」
「ハァ？何の話さね？」
「惚けんな。・・・・・わざわざ造を三年のとこまで行かせてまで、俺に話があんだろ？」

三年に肝試しを行うってことを伝えさせるためにわざわざ造を追い出し、ついでに自然な形で俺以外の連中まで追い出しやがった、このババァ、相変わらず抜け目がないな。造絡みの件じゃ慎重にならざるを得ないってことか？

「ちっ。アンタも相変わらず妙に頭が回るね。・・・・・まあ、

アンタには言うまでもないことだが・・・・・・」
「造に関して・・・・・・だな？また何かあんのか？」
急に女性化までしやがったんだ。造に何か影響でもあるのか、それとも別のことか。

「・・・・・先に言っとくが、別にアイツの、月野の身体は問題ないハズさね。と言うか・・・・・・召喚システムは、絶対に月野を傷つけはしないよ」
「あ？どう言う意味だ？」

『召喚システム』は『造』を傷つけない？・・・・・・どう言うことだ？まるで召喚システムに・・・・・・

「おい、それはまるで召喚システムが意思を持っているみたいな言い草だが？」
「・・・・・・・・・・・・」
「？お、おい！？ババァ！？」

またもや急に黙りやがった・・・・・・・・・・・・・・・まさか、ビンゴなのか？

「・・・・・アンタ、月野が元教頭、竹原のことを嫌っているのは勿論知ってんだろ？」
「元教頭って・・・・・・ああ、アイツか？」

清涼祭で造が決着をつけた、あの教頭か？だが何故そんな話が？

「ああ。アイツだがね・・・・・・アイツに、去年の今頃かねぇ？召喚システムのデータをとある研究所に売り飛ばされそうになったことがあんのさ」

「・・・・・・それはまた。その頃から随分なことをやっていたんだな？」

「それを一番に見つけたのが・・・・・・これまた月野でね？どうやったのか未だにわからないが、あのジャリガキ、竹原の動きをいち早くアタシに伝えて一足先に竹原がいるであろう、システムサーバーに乗り込んだのさ」

・・・・・・なるほど？造には断片的にしか聞いていなかったが、あの教頭を潰そうと去年から色々と無茶をやっていたそうだしな。造ならそれくらいやりそうなことだ。

「そこまではいいんだが・・・・・・どうやら竹原も一筋縄ではいかなくてね。そのことを月野に密告されたとわかると、今度はシステムを暴走させておいて自分はのうのうと家に帰っていたのさ。勿論、その証拠が残らないようにしたようだねぇ」

「・・・・・・システムの暴走だと？おいおい、去年の今頃だろ？そんな話は聞いたことないが？」

少なくとも、システム関係でトラブルがあったことは今までは今回の召喚獣騒ぎくらいしか知らんぞ？

「アンタが知らないのも無理ないさね。これは当事者のアタシと月野と、たまたま居合わせた西村先生くらいしか知らないことさ」

「ま、それはいいが。んで？具体的には何があったんだ？」
「・・・・・いや、ね。その・・・・・暴走したシステムはね・・・・・・」
あ？ババァが何か言い難そうにしているが、このババァが言い難いことだと・・・・・？一体どんなことが？

「その、召喚システムにはね、擬似的な人の意識がインプットされているんだが・・・・・妙なことに、そのシステムが月野を気にいっちまってね？」
「・・・・・・・・・・・・・・は？」
おいマテ。今何気にとてつもないことを言わなかったか？

「あー、その、ね？文字通り、『システムが暴走』したのさね。何を思ったのか召喚システムが月野自身を取り込もうとしたんだよ」
「・・・・・いや、ワケがわからんのだが？」
いや待てよ・・・・・？確かいつだったか造は、『召喚システムに、造自身が捕まった』と言っていた。今の話や、造が言っていた話を考えると・・・・・まさか？

「造が、召喚獣になれる理由は・・・・・召喚システムが造自身を取り込もうとした結果とでも言いたいのか？」
「・・・・・そうなるねえ。笑い事じゃなく、コレがホントに起こっているから笑えないのさ」

そんなバカなことが？いや、だが確かにそれならある意味説明はつくが・・・・・・

「治った今でもたまにシステムは暴れるのさ。《ツクル　ト　アソブ！　ツクル　ヲ　ヨンデ？》ってね。今回の件も、おそらくシステムのお遊びだろうさ。大方、月野を楽しませようと考えたんだろうさね」

「・・・・・ある意味、おっそろしいな？システムが自分で考えて動くのか？制御できなきゃ危険だろう。それを造は？」

「・・・・・まあ、一応はわかっているようだが・・・・・・』ま、面白そうですし、別に怖いものでもないですから～♪システムも良い子ですし、問題ありませんよ？』ってのんきに言っているよ」

・・・・・確かこの召喚システムはオカルト的なもので出来ていると言われているが・・・・・まあ、こりゃある意味ホラーだな？それを理解しながらそんなのんきなことを言っている造も造だが・・・・・

「・・・・・それで？俺にどうしろと？本題があるんだろ？」

「・・・・・まあ、アンタを呼んだのは他でもない。月野がのんきで、まるで危機管理能力が無いからね。アンタがクラス代表として、しっかり面倒を見て貰う為にもこのことを先に伝えたかったのが一つ」

確かに造は他人のことは呆れるほど気がきく癖に、自分のことになるとまるでダメだからな・・・・・・

「それくらいは言われるまでもない。んで？もう一つは？」
「・・・・・今回の肝試し用の景品のこの腕輪だが、出来ることならアンタが手に入れるのがいいってことを耳に入れておきな」
腕輪？・・・・・ああ、黒金の腕輪だったか？そう言えばこのババァが景品として出すって言ってたな？

「この腕輪は場の状態をリセットする働きがある。もしもの時は使える腕輪だからね」
「リセット？つまりどういう状態のことだ？」
「簡単に言えば『場の安定』がメインさね。その腕輪を使えばその召喚フィールドのあらゆる状態がリセットされる。・・・・・そのフィールドで召喚された召喚獣の消費した点も元の状態、つまり元の点に戻るって具合にさ」
「そりゃまた便利なのか、そうでないのか微妙な代物だな？」
「まあ、その能力は付属品と思って貰って構わないよ。黒金の腕輪の本質は、リセットすることにある。システムが暴走した時に使うものさ」

・・・・・なるほど？このババァ、俺らに勝たせて腕輪を渡すように仕向ける気だな？

「・・・・・先に言っとくが、俺は今回は裏方に回るぞ？肝試しは、あくまで肝試しとして純粋に楽しむ。造にもこの事は話す気はねえしな」

そうじゃなきゃ、造に勘付かれるだろう。折角楽しんでいる造がそれに気づけば、その時はアイツは心配して俺に気を遣うのは目に見

えている。それは避けておくとすっかな。

「・・・・・ま、そう言うと思ったよ。まあ、腕輪の方は別に構わないよ。一つ目のことだけ覚えておきな」

そう言ってババァは肝試しのルール設定に取りかかった。ま、肝心な肝試しのことをまだ何も決めていないからな。さっさと造たちが戻ってくるまでに、決めておくか。

それにしても・・・・・造と召喚システムに、そんな事情があったとはな。本人はどう思っているのかはわからんが・・・・・俺は造にはいつも世話になっている身だ。ある程度は気にかけておく、か。あくまでも友人としてな。

バカテスト集その？＋肝試しの裏側その？（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

短編と言っても、ちょっとした今までの伏線回収編でもやろうかなと思いついて書き書きしてました（苦笑）ちょち強引でしたが、造の謎？っぽいものが回収できたのかな？

・・・・・超展開すぎなのはいつものことですがね。まあ、大雑把に書いたので後々詳しい説明はすると思います！・・・・・多分ね？

今回突然にバカテスト＆amp;短編を入れてゴメンね？次回は本編を入れたいと思います。とりあえずはまた次回！早ければ明日更新したいと思います。読んでいただきありがとうございました！

８７時間目　明久・雄二の戦い～やっぱり主人公はこの二人～（前書き）

皆さんこんにちは。糖分摂取魔です。自分が言えたことではないですが、皆さん体調管理はしっかりとしてくださいね♪

さてさて・・・・・久しぶりに本編が！本編が書けました♪最近駆け足気味でしたから、相変わらずの早い展開ですが８７時間目です！

タイトル通りな内容です。あれ？造は・・・・・？と、とりあえず行きましょう。どうぞです。

87時間目　明久・雄二の戦い～やっぱり主人公はこの二人～

造Ｓｉｄｅ

「ハッ！お前ら随分遅かったな」

アキさんを追ってゆーさんと進むと少し開けた場所に根本くんと小山さんが佇んでいました。へぇ？何やらお約束の、決着をつけるには相応しそうな場所ですね～

「その様子だと・・・・・お前らもどうやらさっきの姫路たちがどうなったか聞こえたようだな」

「・・・・・まあね。毎度のことだけど、随分面白いことしてくれるじゃない根本君」

アキさんと根本くんの間には不可視の火花が散っているようですね。おお、怖い怖い。さてさて、盛り上がっているようですし自分らは・・・・・

《それじゃ、アキさんガンバですよ～♪》

「ヘマすんじゃねえぞ、明久」

「ほいほい。造も頑張ってね～。雄二こそ造の足引っ張らないように注意しなよ？」

「・・・・・は？」

それじゃさっさと行くことに「おい、待て！？」・・・・・しま

しょうかね？

と、その前に何故か根本くんが呆れたような、唖然としたような目で自分らを見ています。

《ん？何ですか？何かありますか？》

「手短にな。俺らは三年攻略に忙しいんだ」

「・・・・・はぁ！？おま、お前らさっきの姫路たちの会話を聞いてたんだろ！？」

・・・・・？勿論そうですが何でしょうね？根本くんは何が言いたいんでしょうかね～？

《あや？もしかして『ここを通りたかったら俺を倒して行け』的なシチュエーションですか？》

「やれやれ・・・・・今時そんなことする奴がいるとはな？面倒なこった」

「なっ！？」

「・・・・・月野先輩？」

小山さんも何やら不思議そうな目で自分らを見ています。あー、やっぱりそういう反応ですよね？まあ、いつもの自分らでしたらこうはいかないことくらいは皆さんご存知ですかね？

《ああ、誤解の無いように言っておきますが・・・・・》

「・・・・・俺らも相当頭に来ているからな？まあ、だがここは俺らよりもキテいるバカ一人がいるからな・・・・・」

そう言ってチラリとアキさんを見てゆーさんが苦笑します。そうですよね、ここは自分らが出る幕はないでしょう。何せ彼はアキさんの逆鱗をピンポイントに触れちゃいましたし。

「・・・・・ま、まさかだとは思うが・・・・・俺相手に吉井一人でやらせるわけじゃねえよな?言っておくが今回の教科は物理。吉井じゃ話にならんぞ?」

《いやいやいや。そのまさかに決まっているじゃないですか?》

「おい、小学生。やはりお前は俺を嘗めているだろ?・・・・・お前は特に俺が気に入らない相手だ。・・・・・お前が来い」

そう言って召喚獣を構える根本くん。やれやれ?彼はやっぱりわかってないですね。

《だから根本くん。貴方の相手はアキさんでしょう?それじゃあアキさん、後はお任せしていいですね?》

「まあね。それより三年生たちは任せたよー」

アキさんが笑顔で、ですがしっかりと根本くんから目を離さずに言ってきます。・・・・・うんうん。これなら本当に加勢何て必要ないですね。

《んじゃゆーさん。対三年生と言いますか、ツネとナツの攻略法ですが・・・・・》

「ああ、これぱかりは物理での攻略は困難だ。少々搦め手を使おう・・・・・」

とりあえず自分とゆーさんは三年生攻略の策を考えながら進みましょうね。後はアキさんがやってくれるでしょうし？

『おいっ！お前らいい加減に・・・・・・』
『おっと？根本君。いい加減にするのは君でしょ？・・・・・・造と雄二が言いたいのはね？・・・・・・君如き、僕で十分って事なんだよ？』
『っ！・・・・・上等だ。お前を速攻で倒して、嘗めてるアイツらもすぐに後を追わせてやる！』
『嘗めてんのはどっちか・・・・・・僕もこっからは、本気だからね？』

≪Ｂクラス　根本恭二　物理　３６１点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　物理　８７点≫

アキさんのその一言で、アキさんＶＳ根本くんのある意味因縁の勝負が始まったようです。死神は鎌を突き出し、デュラハンも自身の剣を突き立てます。さてさて、アキさん？思いっきりやっちゃえ！

☆

「・・・・・って感じだ。俺の策は以上だがこの役を造、お前に頼んでもいいか？」

根本くんはアキさんに任せて、とりあえずチェックポイントへ進みながらツネとナツの二人と渡り合う為のゆーさんの策を聞きましたが・・・・・・・

《・・・・・・・ふふふっ♪ホントゆーさんらしい作戦ですね。ですが大丈夫ですか？その作戦だとゆーさん一人で・・・・・・》

「・・・・・・ま、面倒と言えば面倒かもな？だが、まあ何とかなんだろ？」

へぇ？何やらアキさんだけでなく、ゆーさんもゆーさんで燃えているご様子。なるほどなるほど。

《おっけーですよ～♪それにしてもゆーさん？》

「あ？何だ造？」

《・・・・・・流石に霧島さんの激励は効きますね♪》

「・・・・・・妙なこと言うなら帰るぞ？」

《あやや、怒んないでくださいな♪言ってみただけですよ～？》

「お前は・・・・・まあ、いい。とにかく行くぞ？明久一人、かっこつけさせるのも癪だからな」

ふふっ、ゆーさんの意地っ張り～霧島さんに『信じてる』って言われてから、ものすごい勢いで策を練ってましたもんね～？

おっと。そうこうしているうちに、チェックポイントに辿り着きま

した。今残っている戦力は、ある意味自分とゆーさんだけしかいないこの状況。どう攻略しましょうかね～♪

「・・・・・おい造？お前やけに楽しそうだな？」
《んみゅ？何言ってんですかゆーさん？・・・・・こう言うのは楽しまなきゃ負けですよ～♪》
「・・・・・ま、いつものお前らしいか？それじゃ行くか？」
《ええ。行きましょうか？対三年生、最終決戦に♪》

☆

明久Ｓｉｄｅ

≪Ｂクラス　根本恭二　物理　２７１点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　物理　８２点≫

「このっ！当たれっ！」
「そんな単純な攻撃、当たらないよ～？」

根本が操る死神の鎌の大振りを、軽くいなして剣を突き出す。いつもの召喚獣と違ってリーチが違うし、下手すると首が取れるから（ホラそこ！頭が無いって言うなっ！）気をつけて戦ってたけど、大体慣れてきたね。

「くそっ！？お前、どうしてそこまで召喚獣の扱いが・・・・・・
点数は低いくせに攻撃は当たらねえし、メ●ルスライムか！？」

失礼なっ！そこまで弱いつもりはないよ？それを言うなら・・・・・
・なんだろ？そうだ！ヌ●ニンくらいと言って欲しいね！襷持ちの。

「さて・・・・・・あれ？そう言えばえっと、小山さんだっけ？キミは戦わないの？召喚獣も出してないみたいだし？」

ふと気になり、根本の死神をあしらいつつ小山さんに尋ねる。根本の相方である（ハズの）小山さんは、僕らの戦いをじっと見たまま動いていない。てっきり2対1くらいの気持ちで身構えていたけど・・・・・・

そう言えば造が『もしかしたら彼女は今回の件はある意味第三者な立場かもしれない』って言ってたね。どう言う意味だろ？

「あら？勝負の最中に余裕かしら、吉井君？」
「まあ、ある意味ね。ちょっと気になってさ。えっと、造がね？『小山さんは今回はある意味第三者的な立場です。多分ですが妨害とかはしないと思いますし、彼女には怒んないでくださいね♪』って意味が良く分かんないこと言ってたしさ・・・・・・？」
「・・・・・・あうぅ。やっぱり先輩はある程度はお見通しかしら・・・・・・？」

？？？何やら小山さんも小山さんで何か悩み事があるんだろうか？

ちょっと顔を赤くして腕を組んでいる。やっぱりよくわかんないけど造が後でフォロー入れてくれるって言ってたし、その辺は任せようかな。

「えっと・・・・・・吉井君、私は今回は先輩の言う通り手は出さないわ」
「ふーん?・・・・・・ま、いいか」
「こんの!喰らえっ!」
「おっとと・・・・・・僕もあまり余裕ぶっているのもいられないかな?」

話の途中だったけど、あまり余裕を見せるのはマズイかな?根本の方も、最初に比べて動きが多少は良くなってきたみたいだし。さて、と。そろそろ僕も全開で行こうかな・・・・・・

「そろそろ動きに慣れてきたみたいだし・・・・・・全力で行くよ?」
「ぬかせ!こっちも本気だっ!」
「そうそう、そうこなくっちゃ。姫路さんと美波の分の敵はしっかり取らせて貰うからね?だから根本。キミにも全力で来て貰う。行くよ、二重(ダブル)召喚っ」

今回は容赦無しの全力だ。二人の頑張りを無駄にしてくれた分、覚悟して貰うよ?

☆

雄二Ｓｉｄｅ

《やっほー、ツネ、ナツ。お待たせです》
「よっ、センパイ方。待たせたな」
「ん？遅かったな、月野に坂本」
「何かあったのか？カメラを見てたが、トラブルっぽかったが・・・・？」

俺と造がチェックポイントに辿り着くと、例の三年のコンビが待ちぼうけを喰らっていた。まあ、今まで散々待ってて久保と清水（だった何か）ペアしか辿り着かなかったんだ。相当暇だっただろうな。

さて、只今俺たち二年組は戦力的に不利。物理の点数ではこの二人のセンパイ二人の４００点オーバーの実力には俺も造も歯が立たない。造は３００点前半。俺は２００点未満。召喚獣の扱いも造が抜き出て入るものの、このセンパイ二人には、年期も経験もあるだろうし俺らの不利には変わらん、と。

《まあ、色々あったんですよ。・・・・・最も、このトラブルの原因が何かと、手を貸した方がいるのは何となくわかってますけどね？ねえ？ツネ、ナツ？それにカメラを見ている三年生の皆さんに、首謀者の小暮さん？》

「「・・・・・・・・・・・・・」」

おっと。造が何か核心に触れたようだな。センパイ二人、少し申し

訳なさそうに目を逸らしてやがる。ま、薄々は俺も違和感には気づいていたが。今回の根本の行動は、単独では行えねえだろうしな。三年の協力があって初めて、成り立つわけだしな。

「・・・・あー、まあすぐにバレるとは思っていたがな」
「その辺は肝試しが終わってから説明するな？」
《是非是非♪自分は特に小暮さんから話を聞きたいですが、ね？》
「造、それはまずは後回しと行こうか？・・・・・・センパイ方、んじゃそろそろ行くか？」
「そうだな・・・・・・いくぞ？」

その合図でセンパイ二人も物理の木村先生がいることを確認しつつ、召喚獣を出そうとする。そんじゃ作戦開始と行くかな？

「「試獣召喚（サモン）っ」」

すると、いつものように幾何学模様が――

「・・・・・あ？出ねえな？」
「どうなってんだ、こりゃ？」

紋様が浮かび上がることはなく、当然召喚獣も現れなかった。よしよし、巧く起動しているようだな？

「おや？おかしいですね。システムの不調でしょうか？」

離れたところにいた物理担当の木村先生も首を傾げる。

「いや、先生。気にしなくていいっすよ。理由は分からないっすけど、物理だけが不調になっているみたいですから。仕方が無いから、俺が“念のため”呼んでおいた世界史の先生に頼んで勝負って事にしましょう」

「む？・・・・・なるほど、考えたな？」

「あぁ・・・・・巧いやり方だな、坂本。月野の腕輪か？」

そう、向こうさんの想像通り、これは俺の勝つための作戦だ。造の持つ白銀の腕輪の《干渉》で、物理のフィールドを打ち消した。少々強引だが、点数差があり過ぎる物理よりある程度拮抗できる世界史での勝負に賭ける。ただそれだけの反則ギリギリの策だが・・・・・はたしてセンパイ二人は認めてくれるか・・・・・？

《さてさて？どうしますかツネ、ナツ？一応、ルールでは腕輪の使用不可なんて無いですよ～♪》

「・・・・・すまんな、センパイ方。アンタらの考え通り、これは俺の作戦だ。かわりと言っちゃ何だが、造はフィールドを張るだけで勝負には出ない。それで手を打ってくれるか？」

「ま、俺らもそれを言うなら迷路の件があるしな」

「月野無しの世界史での勝負か・・・・・いいぜ、受けてやろうじゃねえか」

造にはフィールド形成のみを担当して貰う。本当に勝ちに行くなら造も参加して貰った方がいいんだが・・・・・

『・・・・・貴方では、雄二や造や吉井には絶対勝てない。私は三人を信じている。あの三人なら貴方を倒してこのチェックポイントもクリアする』

・・・・・何、ちょっとした男のケチなプライドってもんかな？ま、あれだけのことを、翔子に言われちゃ、俺も負けるわけにはいかんからな。造にはまたも借りは作っちまったが。

「世界史の田中先生も来てくださったことだし・・・・・そんじゃ改めてセンパイ方、勝負といこうか？」
「おう、最終戦だな。試獣召喚（サモン）っ」
「来い坂本。試獣召喚（サモン）っ」
《ゆーさんファイトですよ♪》

≪Ａクラス　常村勇作　世界史　１７４点　＆ａｍｐ；　Ａクラス　夏川俊平　世界史　１６３点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　坂本雄二　世界史　３０７点≫

フィールドには俺の狼男に、先輩二人の猪八戒と沙悟浄。そして間にはこっそりと《干渉》用のフィールドを張っている魔女姿（い、一応これでも魔法使いですよ！？ｂｙ造）の造が。・・・・・さて、と。明久もおそらく決着つけてるだろうしな・・・・・俺もちっとはやってやるかっ！

８７時間目　明久・雄二の戦い～やっぱり主人公はこの二人～（後書き）

ありがとうございました。８７時間目、いかがだったでしょうか？

う～ん、一応この物語の主人公はあくまでも造の設定ですが、やっぱりバカテスの主人公は明久と雄二だと思うんですよね。できるだけ彼らが活躍できるように書きたいです。二人とも何だかんだで良い主人公さんですし♪んでもってヒロインは明久⇒姫路さん＆ａｍｐ；美波　雄二⇒翔子さん　異論は認めない。明久はもう二人とも幸せにすればいいんだよ。

明久には葉月ちゃんにも玲さん（？）にもフラグがたっておりますがね（苦笑）よく考えれば明久ってモテるよね。モテる理由もわかるから、寧ろ良いのですが。

まあ、その分造が活躍する場が減ったりしますが・・・・・そういう面も造らしいかな？と思いまして（汗）最後にのんきにちゃっかり美味しいとこを持って行くところとかね？

なんか変なことを書いてますが、あんまり気にしないでください。暑さと一時的に解放された嬉しさでテンションが上がりまくっているだけですので～♪

それじゃ、また次回！次回はまた短編で、肝試しの裏側その？ともう一本くらい書く予定です。明日更新できれば更新しますね♪読んでいただきありがとうございました！

番外編：週刊☆文月学園放送室＋肝試しの裏側その？（前書き）

皆さんこんにちわ。糖分摂取魔です。明日からまた行ってきます（泣）ま、いいか。その分続きを書きますからね～♪

さて・・・・・今回は（いえ、毎度のことですし今回もですかね？）物凄く最後の方暴走してます。どうしてこうなったんだろ（汗）

それじゃ、相変わらずのお話ですが・・・・・今回もよろしくお願いします♪

番外編：週刊☆文月学園放送室＋肝試しの裏側その？

ここは、とある文月学園のどこかにあると噂されるスタジオの中。
今日は特別編と言うことで、様々な視聴者から送られてきた（だから視聴者って誰！？なんてツッコミは野暮ですよ？）怖～いお話を、いつもの三人に紹介して貰いましょう。では行きましょうか・・・・・・

週刊☆文月学園放送室～夏の特別企画！実際にあった怖い話～

「というわけで、ここでは僕、吉井明久と」
「この俺、坂本雄二」
「ついでに月野造が」
「皆から寄せられた『実際にあった怖い話』を紹介していきます」

おおー！やっちゃいなー♪

「・・・・・・何ともまあ、うさんくさい企画だな」
「・・・・・・そもそもこの放送、まだあったんですか？以前は確か『文月学園相談室』でしたよね？」
「そういうことは思ってても口に出さないのが礼儀だよ雄二に造」
そうだよ、明久の言う通りだよ二人とも！ギャラ出さないよ？

「明久、お前もその台詞で本音がバレてるけどな」

「それにギャラ貰った覚えもないですよ？」

ああ、もう。全然進まないじゃない！さっさと進めなさい！

「はいはい。わかりましたよ・・・・・・」

「ったく。やれやれ面倒だな。そんじゃ、明久。最初のメールを紹介してくれ」

「了解。最初はＨ．Ｎ．『オレはシブヤ最強のＡ－Ｂｏｙ』さんからのメールです」

「えーぼーい？何ですかそれ？」

「言いたいことは色々あるが、とりあえずＢ－Ｂｏｙを名乗るか場所を秋葉原に変えるかどちらかにしたらどうだ？」

凄いね。一文字違うだけでこんなにも印象変わるんだよ？Ｂ－Ｂｏｙはカッコいいけど・・・・・Ａ－Ｂｏｙって・・・・・

「えっと・・・・・メールの文章がなんだかヒップホップ調なんだけど、やっぱりそれっぽく読んだ方がいいかな？」

「ヒップホップ？よくわからんが、できるならそうした方がいいんじゃないか？」

「そですね。アキさん大変そうですが、よろしくです」

「わかった。それじゃあいくよ・・・・・『Ｙｅａｈ！オレはシブヤ最強のＡ－Ｂｏｙ！常に進むぜ栄光に！あまり行かないぜ予備校に！』」

「栄光に向かって進みたいのなら予備校をサボるな」

「進むと言うより、そこで止まってますよね・・・・・」

「『オレのｔｈｉｓ聞け！そして振り向け！』」

「オレのコレ？ですか？コレをどう聞くんでしょうかね？」

「ほら見ろ。予備校をサボるからｔｈｉｓとｄｉｓを間違えるんだ」
間違えるっけ・・・・・普通？てかあれ？

「『誰の言うことも聞きゃしねぇ！泣かせた女は数知れねぇ！』」
「泣いた女は恐らくお前の母親だろう」
「お母様が可哀想ですよ・・・・・」

これのどの辺が怖い話なんだろ・・・・・？

「『オレのラップ、音高く響かせ！近所のジャップ、恐怖で叫ばせ！』」
「ん・・・・・？ラップ・・・・・？ああ、そういうことか・・・・・。おい明久。そのメールはもう読まなくていいぞ」
「ラップって・・・・・まさか」
「『恐れるヤツぁマジ・・・・・』え？いいの？怖い話がまだ出てきてないけど」
「気にするな」
「あー・・・・・そう言うことでした、か」

ラップ・・・・・ああ、そういうことか。

「でも」
「代わりに、そのメールにラップ音とラップの違いを書いて返信してやれ」
「まあ、ある意味怖い話ですよね・・・・・」
「へ？」

「・・・・・・これ以上説明させるな」
「・・・・・・あ・・・・・・そういうこと・・・・・・」
「・・・・・・そういうことですね」
「・・・・・・読まなきゃ良かったね、このメール」
「・・・・・・俺も・・・・・・なんというか、自分が悪くもないのに妙に申し訳ない気分だ・・・・・・」
「・・・・・・えっと、視聴者の皆様。次のメールをお楽しみにです？」

・・・・・・今回ばかりは、明久も雄二も造も悪くないね。とりあえず、次行こっか・・・・・・

☆

「えっと、それじゃあ気を取り直して次のメール。H・N・『悩める弟』さんからのメールだよ」
「やれやれ。今度はきちんと怖い話だといいんだが・・・・・・」
「さっきのは別の意味で怖いメールでしたよね。視聴者さんからの反応的な意味で」
「まあ、今回は大丈夫だとは思うけどね？んじゃ行くよ？『初めまして皆さん。突然ですが僕の怖い実体験をお話しします』」
「はい、初めましてです♪」

律儀に返さんでもいいよ、造？

「まあ、癖でして・・・・・・」

「造らしいね。えっと・・・・・・『実は僕には兄がいます』」
「お兄さんですか～」
「ふむふむ」
「『真面目で勉強のできる自慢の兄です』」
「良いお兄さんですね♪」
「だな。そいつは立派な兄貴だ」

だねー。にしてもお兄さんがいるのって羨ましいなー

「『ところがその兄が、急に人が変わってしまいました。特に学校の合宿から帰って以来、何か妙なのです』」
「あやや？それはどうしたんでしょうかね？」
「変わった？憑き物とか、そういう類か？」
「『なぜか妙に晴れ晴れとした顔で、“学校一のバカと称される男友達”と“学園アイドル（？）の小学生”について熱く語ってくるのです』」
「・・・・・・・・・・・・・・ふぇ？」
「・・・・・・・・・・・・・・は？」

・・・・・こ、これは!?ストップだ明久!ストップ!!

「・・・・・・・・・・・・・・え？何？」

んとねー・・・・・・・造、悪いけど次のメール持ってきてくれないかな？

「はい？どうして急に？」

あー・・・・・・いいから、お願いね？

「・・・・・・まあ、いいですけど？いきなりどうしたんですか？」

～造移動中～

・・・・・・よっし、ＯＫ明久！続きを頼む。

「あ、うん？えっとね・・・・・・『あまりに熱心に語るので、怖くなってこっそりと部屋をチェックしてみたのですが』」

「あ、ああ・・・・・・」

「『同い年くらいの男の写真と、どう見ても小学生の女の子の写真が机の引き出しに入っていました』」

「・・・・・・・・・・・・」

「『それ以来、僕は怖くて兄の顔をまっすぐ見られません。男の写真を持っていることは勿論怖いのですが、小学生に手を出していないかも心配です』」

「・・・・・・・・・・・・」

やっべー・・・・・・こりゃ怖いですねー・・・・・・

「『きっと兄は、何か恐ろしい世界へ足を踏み入れてしまったのだ

と思います。皆さん、どうか気をつけて下さい』」
「・・・・・・・・・・・・」
「以上、H.N.『久保良光』さん・・・・・・じゃなくて、『悩める弟』さんからのメールでした」
「すまん・・・・・・。久保の弟よ・・・・・・」
「ただいまです。すみません、メールはもう無いみたいです・・・・・って？ゆーさん、顔青いですがどうしました？」
「あれ？ホントだ雄二、どしたのさ？」
「・・・・・・知らん方が幸せで、知ってしまってから不幸になることもあるってこと、か？」

「「・・・・・・・は？」」

あー・・・・・・確かに怖い話ですねー・・・・・・『悩める弟』さん、どうもありがとうございました。色々と頑張ってね？

☆

今回はこの二通だけかな？視聴者のみんな、どうもありがとうね～♪んじゃ、最後に三人の怖いもの、教えてくれないかな？明久、雄二、造？

「「「怖いもの・・・・・・それは・・・・・・」」」

「・・・・・・姫路さんの必殺殺人料理と美波絡みの清水さん」
「・・・・・・翔子の浮気実態調査とお仕置きシリーズ１００選」
「・・・・・・コスプレ衣装片手に目を輝かせる先生方と優姉さん」
・・・・・・・・・・・・・・・惚気(のろけ)か、おまいら？

「「「どこが！？どっちかと言うと怖気(おぞけ)だ！」」」

以上！週刊☆文月学園放送室～夏の特別企画！実際にあった怖い話～でした♪また見てね？

☆

さてさてさて？話は戻って、肝試しの裏側編ですが・・・・・・

この前は肝試しとは無縁の雄二と学園長の裏側なお話だったけど、肝試しの最中でも色々とお話はあるわけで。さてさて・・・・・・一体どなたのお話かな？それでは早速見てみましょうか。

今回は・・・・・そうですね、優子さんと秀吉の木下姉弟ペアが突入した時の裏側です♪ではどうぞ。

肝試しの裏側その？　秀吉Ｓｉｄｅ

二学年と三学年による、肝試し対決の佳境。二学年男子は（と言っても造にワシ、明久に雄二に久保以外じゃな）造曰く『参謀役』の先輩の色香にやられてしもうた。と言うわけで対抗手段としてワシと姉上が呼ばれ、とりあえず雄二の策に従い二人でＣクラス内を進んでおるのじゃが・・・・・・

「あら？あなた方は・・・・・・そうですか・・・・・・女の子同士のペアで来ましたか。ですが意外ですね？てっきりそろそろ月野君がくる頃かと思っていましたが？」

「・・・・・・女の子同士じゃと・・・・・・」

やはり、納得いかんのじゃ・・・・・・最早、ワシを男と認識してくれるのは造と姉上くらいしかまともにおらなんだ・・・・・・

いや、姉上は・・・・・・微妙に違う気がするのう・・・・・・最近、特にワシを弄るようになったお陰で、前とは別の意味で恐ろしいからの。

「先輩、わかってて言ってますよね？ここのチェックポイントが造ちゃんの唯一の苦手科目の英語だって」

「あらあら、そうでしたね。どうやらここではわたくしに出来ることはありませんね。どうぞお進みください」

「だって、秀吉。お言葉に甘えていきましょ」

「むう・・・・・・すんなりと通れたのにこのわだかまりはなんなのじゃ・・・・・・」

と、とりあえずは最大の脅威とやらは潜り抜けたから良しとするかの？・・・・・女の子同士なぞ、何かやはり引っかかるがの。ワシは・・・・・・ワシは男じゃ！

「・・・・・複雑じゃ」

「別にいいじゃない♪これでここを攻略出来れば、造ちゃんも喜ぶでしょうし♪」

「・・・・・ま、まあそれなら良いかの♪」

目的のうちのCクラス突破は目の前じゃし、ここはぐっと我慢するとしようかの。

「それしても・・・・・ハァ。アタシは造ちゃんと一緒に行きたかったわ」

「それを言うでない、姉上。ワシだって造と一緒に・・・・・」

まあ、今回は造の身体の影響もあるしの。あやつを無理させとうない。できるだけ早う学園長にシステムの修繕をしてもらう意味でも造のためにも肝試しのデータをより多く渡さねば・・・・・

と、そんなことを考えておると姉上が不思議そうにワシの顔を眺めておった。・・・・・何じゃ？

「???姉上？何じゃ？ワシの顔に何か付いておるのかの？」

「・・・・・んー、ふと気になってね？」

そう言って、また再びワシの顔を眺めてから、

「・・・・・ねえ秀吉？アンタ、造ちゃんのこと好きよね？」

と、何の脈絡もなく、突然とんでもないことを口にしよった。・・・・・な、何をいきなり言うのじゃ姉上はっ！？

「あ、姉上！？いきなり何を・・・・・・！？」

「まあ、それは結構前からわかっていることだから、それこそ今さらだけど」

だから何のことじゃ！？と、改めて聞きただそうとするが、姉上が真剣な顔でワシに問いかける。

「・・・・・聞きたいのはそっちじゃなくてね？造ちゃん、今完全に女の子なわけじゃない？・・・・・それで、曲がりなりにもアンタは戸籍の上では男でしょう？」

・・・・・とうとう姉上にもそこまで言われるとはのう・・・・・ワシの信じれるものは造の言葉だけかの・・・・・ｏｒｚ

「『戸籍の上では』との発言がやけに気になるが、確かにそうじゃな？それで、姉上は先程から何を言いたいのじゃ？」

「・・・・・ちょっと不思議に思ってね？アンタ、造ちゃんが女の子になってから、造ちゃんを元に戻そうと手伝っているけど・・・

・・・それこそ造ちゃんが元に戻らない方がアンタにとっては良いことなんじゃないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

・・・・・・造が、元に戻らん方がいいじゃと？

「造ちゃんが好きなら尚のこと、何でそこまで造ちゃんを戻そうとしているのかしら？」

「・・・・・・姉上？お主、本気でそんなことを言っておるのか？」

「？どう言うことかしら？」

ワシは、造を大事に思っておるはずの姉上がそのようなことを言う方が不思議じゃのう・・・・・・

「まあ、姉上の言うとおり造は大切じゃが・・・・・・それ故に、造に何か悪い影響がある方がワシは心配じゃ」

「・・・・・・ふむ？」

「造も造で、早う元に戻りたがっておったしの。ならばワシはあやつが望むことをやってやりたいのじゃ」

「・・・・・・なるほどなるほど？」

姉上も頷いておるの。まあ、造が嬉しい時は大抵はワシも嬉しいし、造が嫌がっておることはワシも嫌じゃからの。

「それに・・・・・造が男じゃろうが女じゃろうが関係なかろう？確かに造の容姿は可憐じゃが、ワシは造の容姿を好いておるわけではないからの。あやつの優しき心に惚れておるわけじゃし・・・・

・・」

「・・・・・ふむふむ。もういいわ、良かった♪」

そう言うと、姉上も笑顔でワシに応じてきた。

「これで『造に戻って欲しくない』なんて言ったら、すぐさまアンタの体中のありとあらゆる関節を極めるとこだったけど・・・・・・アンタも造ちゃんの良さをよくわかっているようで安心したわ♪」

「・・・・・姉上？なんじゃ、お主ワシを試したのかの？」

「んー？試すと言うより再確認かな？」

寧ろ姉上はワシをおちょくっているようにしか見えんがの・・・・・・？

「再確認じゃと？一体何の話じゃ？」

「ふふっ、決まってるじゃない♪秀吉が造ちゃんを大好きだってことよ～♪」

「なっ！？い、いきなり何じゃ！？／／／／／／」

「だってアンタ、さっき自分で言ったじゃない？『ワシは造が大事じゃ。あやつの優しき心に惚れておる』って～♪ああもう！アンタも随分ストレートよね♪」

「っ～～～～～～～～～～！？／／／／／／」

ま、まさか！先程の会話は・・・・・・あ、姉上の誘導尋問かの！？

「あ、姉上っ！お、お主はっ！」

「おっと、秀吉？気をつけないと叫び声で失格になっちゃうわよ～

？ああ、安心して？さっきのアンタの会話はカメラには聞こえないようにしてあるからね☆」

「っ～～～～～～～～～～～～～～！！？？／／／／／／／」

あ、姉上えええええええええええええええええええええ！？

たとえ肝試しの最中だろうと、今日も今日とて姉上に（造をネタに）振り回される。毎度思うのじゃが・・・・・・やはり姉上には一生敵わぬ気がするのう・・・・・・

番外編：週刊☆文月学園放送室＋肝試しの裏側その？（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

・・・・・うん。秀吉はどうしてこうなったんだろ（汗）一応補足しておくと、秀吉的には大事な妹を見ている感じでしょうかね？優子さんと似た気持ちかな？

・・・・・・あれ？妹？いや、弟か？でも今は妹でも合っているのかな？うーん、まあ妹でいいや。造は優子さんと秀吉の妹。

造《・・・・・・色々とツッコミたいのですが、まずそれを言うなら一応ヒデさんよりも自分は年上なのですが？てか、妹って・・・・・・》

ああ、そう言えば今日、設定では造の誕生日でした。１８歳か・・・・・あれ？年上・・・・・・だと？

と、とりあえずまた次回！次がいつ更新できるかわかりませんが、これからもよろしくお願いします！読んでいただき本当にありがとうございます。

８８時間目　僕の戦い・俺の戦い～男の子たちの戦い～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

明日（と言ってもすでに今日ですが）からまた病院へリターンです（泣）何とかかけた分更新ですよ～♪明久と雄二の戦いの決着です！だから造は？って方、一応活躍はしますよ？アレでも主人公（笑）ですし！

んじゃ、行きましょうか。８８時間目、どうぞです！

８８時間目　僕の戦い・俺の戦い～男の子たちの戦い～

雄二Ｓｉｄｅ

「よっと・・・・・やるな、坂本。月野とつるんでいるだけあって、中々の点数だな？」
「そういやお前、『神童』って呼ばれていたそうだな？・・・・・・流石と言えば流石だ」
センパイ二人が召喚獣を使役しつつ、んなことを言ってくる。やれやれ、そんな軽口を言えるだけあって余裕のようだな。

「っとと・・・・・・へぇ？センパイ方はんなことも知ってんのか？ま、昔の事・・・・・・よっと、だがな？」

≪Ａクラス　常村勇作　世界史　１７１点　＆ａｍｐ；　Ａクラス　夏川俊平　世界史　１３９点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　坂本雄二　世界史　２６３点≫

坊主頭のセンパイの（ナツのことですねｂｙ造）沙悟浄の繰り出す杖状を素手で捌き、モヒカン頭のセンパイの（こっちはツネのこと

ですねｂｙ造）猪八戒の振り回す鍬のような武器をバックステップでかわし、出来るだけ囲まれないように気をつける。ったく、俺は造や明久のように召喚獣の扱いが慣れているってわけじゃねえのに面倒だな・・・・・・

「それにしても・・・・・・お前、すげえな？」

「あん？・・・・・・いきなり何っすか、センパイ？」

「召喚慣れしていない割には・・・・・・２対１の戦いをよくわかってんな？」

「だな。流石は『神童』か？」

そうからかいながら攻撃はしっかりしてくる辺り、向こうさんも中々えげつねぇな？隙を中々見せねえし。

「からかわないで欲しいがな？・・・・・・単純に俺は喧嘩慣れしてるだけだ」

ま、『神童』何て言われたことは今は昔のこと。んなどうでもいいことのお陰で、翔子があんなになっちまったわけだしな・・・・・・色々な意味で葬り去りてえ、過去だが。

「・・・・・・喧嘩慣れだと？」

「ああ。確かに召喚獣には慣れてねえが・・・・・・要はこれも喧嘩と一緒だろ。２対１戦い方？単純に１対１にすりゃあいいだけの話だ。どっちか片方を集中してボコって、その後ホントの１対１で挑む。それだけだしな」

中学時代が懐かしいぜ。あんときは俺も随分鍛えられたからな。喧嘩は一対多数もそう少なくはなかった。全く、あんときの経験が役に立っているとは、人生何が役に立つかわかんねえもんだな。

「「・・・・・・・・・・・・・」」

《あ、あはは・・・・・・》

あ？何だ、センパイ方が若干引いてるのか？間で俺らの戦いを見ている造も苦笑いしてやがる。まあ、穏やかな会話じゃねえか。

「・・・・・お前、ホントに『神童』って呼ばれていたんだよな？」

「・・・・・今の台詞、どっちかと言えば不良寄りに聞こえるが？」

「ま、否定はしねぇが。さて、と。・・・・・こりゃ長い戦いになりそうだな」

《ゆーさん、頑張って・・・・・》

造が心配そうに俺を激励する。ま、造は造で戦いたいんだろうな。とりあえず苦笑いをしつつ、戦況を考えると・・・・・状況的に単純に倍の相手且つ、実力も十分。相手の動きと俺の召喚獣の扱いを考えれば・・・・・持久戦は確実だな。体力には自信がある。こっからが腕の見せ所か？

そういやあの明久バカは今頃決めている頃だろうか？・・・・・あのバカは大事な場面でヘマしそうで、そこは怖いな。

明久Ｓｉｄｅ

・・・・・あれ？なんだろ？今、悪友から失礼なことを言われた気がする。まあ、それは後でしっかりとっちめるとして、だ。

「ぜぇ・・・・・・ぜぇ・・・・・・こ、のヤロ」
「何と言うか・・・・・ここまで来ると、僕が悪役っぽいね？」
「・・・・・・その辺は気にしなくても大丈夫じゃないの？吉井君」

≪Ａクラス　根本恭二　物理　３２点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　物理　７３点≫

さっきまで点数差が４倍以上あったけど、今度は約２倍のアドバンテージで僕が有利な状況になっている。・・・・・最近思うけど、僕点数差が激しい相手としか戦わせて貰ってないよね？Ａクラスの人とか、この前の久保くんとかさ。地味にキツいんだぞ！たまには普通に戦わせてよ！だったら真面目に勉強しろって？・・・・・・うん、ゴメン。僕が悪かった。

「あ、そう、小山さん？だったら・・・・・・ハッハッハ！何だそのザマは？あれだけの事言っておいて、随分苦しそうだね、根本！どうか言ってみな、ん？」

「・・・・・・ごめん、吉井君。似合わないわ」

・・・・・うん。小山さんの言う通り、なんか言ってて恥ずかしくなってきた。あれ～？おっかしいな？雄二っぽく言ってみたのに。ふ～む。やっぱりこういう台詞は、雄二みたいな根が悪役っぽい人こそ似合うんだろうね（明久、後で覚えておけよ？ｂｙ雄二）

「あー・・・・・ゴホン。根本！あれだけの事やったんだ。負けたらどうなるかくらい・・・・・わかってんだよね？」

「っちぃ！・・・・・わかって、いる！だが勝てばいいんだろ！喰らえっ！」

ボロボロでフラフラな状態で、それでも鎌を振る根本と死神。・・・・・ふーん、わかってんのか。なら話は早いね♪

「んじゃ、遠慮なく♪・・・・・クタバレっ！」

ザンッ！×２

≪Ａクラス　根本恭二　物理　　０点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　吉井明久　物理　　６８点≫

主獣と副獣の二体の連続攻撃に、根本の操っていた死神は消え去った。随分呆気なく決められたね。まあ、あれだけ満身創痍な状態だったんだ。仕方ないかな。ふぅ、ここ最近は期末テストもあって召喚獣を出してなかったけど、問題なく操れてよかったよ。これで、姫路さんと美波の分の・・・・・・

「グッ・・・・・よ、吉井にすら、勝てなかっただと・・・・・・」

「さてと、根本。んじゃ話していた通り、どうなるかわかっているよね？」

「・・・・・・・・・・・・クソッ、約束は、約束だ」

うんうん。わかっているようで何よりだね。さて。

「んじゃ、とりあえずは・・・・・そうだね。バニーガールの衣装を着て、校庭を十周してから、『生まれ変わった私を見て！　ｖｏｌ．２』をムッツリーニに作ってもらう・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・っ」

おお、顔が青いね。ま、そんなことされちゃ、一溜まりもないだろうけど・・・・・・

「・・・・・・のも、個人的には魅力的なんだけどね」

「・・・・・・あ？」

「・・・・・・吉井君？」

根本と小山さんが不思議そうに僕を見ている。ま、それもそれでやってみたい気持ちはあるけど。・・・・・そんなことより、僕の希望は根本に勝負を仕掛けた時から決まっている。

そう。僕が根本にやらせたいことはただ一つ。

「――――――姫路さんと美波に、謝れ」

まずは、これが僕にとって一番大事なことなんだ。

雄二Ｓｉｄｅ

「いけえええええええええええええええええ！」
「っくうぅ！？」
「夏川っ！？」

≪Ａクラス　常村勇作　世界史　１６２点　＆ａｍｐ；　Ａクラス　夏川俊平　世界史　０点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　坂本雄二　世界史　９６点≫

ちぃ・・・・・やっとかよ。とりあえず宣告通り、坊主頭のセンパイにのみ攻撃を集中させようやく1対1の状況に持っていくことは出来たが・・・・・・・

「ぜぇ・・・・・・ぜぇ・・・・・・こりゃ、一苦労だ、な」

《ゆーさん、しっかり!ツネが来ます!!》

「っ!・・・・・・・くっ!?・・・・・・センパイ、休み無しかよ?」

「ま、悪いが俺も余裕が無いんでな?」

「ふぅ、ワリィ常村。後は任せた」

≪Aクラス　常村勇作　世界史　１５９点≫

VS

≪Fクラス　坂本雄二　世界史　８１点≫

センパイ方はハイタッチしてから再び視線を俺と俺の召喚獣に戻す。やっと一体倒せたはいいが、点数差約2倍か・・・・・・明久たちなら何とかなっただろうが、今の俺じゃ・・・・・・

「万事休すか?坂本。だが、ホントによくやってくれるぜ・・・・・・」

「全く・・・・・・2対1でここまで追いつめられるとは思わなかったぞ?やはり今年の2年は気合いが違うな?召喚大会でお前さん方の実力はわかってんだ。隙は見せんぞ?」

このコンビ・・・・・・やはりAクラスのトップ層だけあってやっ

ぱ強いな。以前のこの二人だったらまだ何とかなったかもしれんが、良くも悪くも造が改心させたお陰である意味厄介なコンビになっちまったぜ・・・・・・さっきから全く慢心しないからな。

「へいへい・・・・・こりゃ本気でマズイか？」
「んじゃ、続きをやろうか？・・・・・・行けっ！」

残ったモヒカン頭のセンパイが、猪八戒を従えて俺の召喚獣に仕掛けてくる。とりあえず俺も応戦するが・・・・・状況は俺にとって最悪だな。とりあえず瞬時に戦力分析をしてみよう。俺の欠けているものは3つ。

まず、武器の有無。何の嫌がらせか知らんが俺の召喚獣は武器を持っていない。その分狼男の爪や牙で何とか対抗するが、武器を持った相手と渡り合うのは至難の業だ。と言うか、素手で渡り合うのは正直辛い。

次に召喚獣の扱い。確かに2学年は何故だか召喚獣の扱いに長けた奴らが多い。が、それは明久や造のような理由があって扱いが巧い奴らか、単純に召喚する回数が多かった奴らだ。俺は基本Fクラス代表だからな。おいそれと召喚獣を出さないように心がけている。それが仇となり、今こうして『召喚者の経験不足』が足を引っ張っているわけだ。おまけに向こうさんは3年だけあって、それなりに巧いしな。

最後に当たり前だが点数の差。さっきまで点数差2倍だったが・・・

・・・

≪Aクラス　常村勇作　世界史　１５２点≫
VS
≪Fクラス　坂本雄二　世界史　４５点≫

ちっ、3倍以上か。向こうはトリプルスコアな上に、俺の召喚獣の点は風前の灯。こうしている間にもどんどん削られていっている。さっき言った2つの俺の不利な状況もあって、正直な話一人を潰せただけでも十分やったと言えるかな？

・・・・・ま、これが普通の2年と3年の肝試し対決なら、ここで終わるのも一興かもしれんが。

「やれやれ・・・・・本当にお前はよくやったよ、坂本。今とどめを刺してやるからな？」
「ハッ！・・・・・センパイ、介錯はいらんぞ。それにまだ決着はついてないぜ？」

『・・・・・雄二たちなら、きっとやれる』

クソッ・・・・・全く、翔子（アイツ）にそこまで言わせておいて、引くの

も目覚めが悪い。やるならとことんやってやろうじゃねえか！俺の全策略をもってな！

「さて、俺には後がない、か。センパイ、今の俺の・・・・・・全力の攻撃、喰らってみるか？」

「ん？何だ急に？ヤケにでもなったか？」

ま、そう思うのも無理はない。俺の残りの点数はわずか１３点。どうあがいてもセンパイのトリプルスコアにゃ届かない。にしてもなんか中途半端に不吉な点が残ってんな・・・・・・

「そうでもないさ・・・・・・行くぜ？これが最後の攻撃だ」

そう言って拳をセンパイの召喚獣に突き出す。果たして巧く行くか・・・・・？

「最後まで足掻くか？・・・・・・いいぜ、やってやろうか？」

そして先輩もまた、俺の召喚獣に武器を構える。正真正銘最後の攻撃で、これが俺の最後の策だ。上手くいってくれよ・・・・・・！

≪Ａクラス　常村勇作　世界史　１４８点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　坂本雄二　世界史　１３点≫

「さあ・・・・・・・来いっ！」

「いっけえええええええええええええええええええええええええ！！」

センパイの合図と共に、一気に駆け出す。っと、ここでセンパイは召喚獣の武器を下ろした。センパイもわかっているようだ。『例えこの全力の攻撃が当たろうが届くはずもない』と。わかってか、ここに来て初めて隙を見せた。

・・・・・これを、このセンパイの唯一の隙を待っていたことにも気付かずに。

わずか一瞬の隙。だが俺は、いや俺たちはこれを狙っていた。さあ、行くぜ？待たせたな、造っ！

「今だ造っ！やっちまえっ！！」

《待ってましたっ！解除(キャンセル)っ！そして再び、起動(アウェイクン)っ！科目、日本史いいいいいいいいいいいいいい》

「・・・・・・・・・・・は？」

ボンッ！

≪Aクラス　常村勇作　日本史　１６６点≫

VS

≪Fクラス　坂本雄二　日本史　３１４点≫

最高のタイミングでフィールドが日本史に変わる。仕組みはこうだ。まず造が元から張ってある物理のフィールドを別のフィールドで《干渉》させる。結果物理では召喚出来なくなったため、急遽先生方は科目を世界史に移した。だが物理のフィールドは肝試し用にAクラス全域に張ってあるため、《干渉》さえなければ再び元に戻る。

さて、ここで物理のフィールドに対して《干渉》用に張られているフィールドを造が解除するとどうなるだろう。答えは簡単。当然物理のフィールドは復活するが、すると今度は世界史のフィールドが《干渉》を起こしてしまう。そしてそのタイミングで召喚獣を途切れさせることなく、間髪いれずに造が日本史のフィールドを張れば

――――――

ドンッ！

≪Aクラス　常村勇作　日本史　　0点≫

VS

≪Fクラス　坂本雄二　日本史　254点≫

「・・・・・・こうなるわけだ。ワリィなセンパイ方。俺らの勝ちだ」

《あはは♪結構ギリギリ且つ、すんごくズルイ策ですがね～》

「・・・・・・はは っ！やられたな。こりゃ一本取られた」

「・・・・・・ったく、負けたよ。最後までホントに油断ならねえ連中だな」

こうして、2年対3年の肝試し対決は2年生の逆転勝利と言う形で

終了した。ったく・・・・・・何だかんだで、疲れるわな。正直２度目はご免だぜ？

８８時間目　僕の戦い・俺の戦い～男の子たちの戦い～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

ちょっとわかりにくかったかもしれないので、補足＆ａｍｐ；説明。

どう言う状況かと言うと……

物理フィールド（以下物理Ｆ）⇒物理Ｆ＋造の張った《干渉》Ｆ⇒打ち消し合い、唯の空間に

←

唯の空間（物理Ｆ＋《干渉》Ｆ）⇒世界史Ｆ⇒ここで造が《干渉》Ｆを解除⇒物理Ｆが元に戻り今度は物理Ｆ＋世界史Ｆ⇒打ち消し合い唯の空間

←

唯の空間（物理Ｆ＋世界史Ｆ）⇒日本史Ｆ

……こんな感じですかね？いかん、余計にわかりにくくなりましたかね（汗）要は原作で雄二がやっていた《干渉》を戦闘中にも二段構えで起こしたって思ってもらって構いません。正直ややこしくてすみません。

戦闘描写が苦手なのに何でこんなに面倒にしたんだろ（苦笑）一応言っておくと、この作戦は雄二が考えたことになっています。いやね、いつも明久か造ばかりクローズアップしてるから、今度は雄二に頑張って欲しくてこうなりました。

今回の雄二は、原作と違い腕輪もなければ４００点オーバーでもなく、かつ２対１の戦闘でどうやって戦うかを考えた結果、やっぱり頭を使う戦法が彼らしいかな？と思いこうなりました。正直、やや

こしくて作者も頭が痛いです。やっぱり戦闘描写は苦手です。

雄二編を頑張り過ぎて明久のシーンが減ってゴメンね？明久は次回の姫路さん＆ａｍｐ；美波の会話で出番あるので許して下さい。ん？造？ああ、一応小暮さんとかの会話があるので安心してね？

長々とすみません。うぅ……また病院へ送還されます。感想の返信が遅くなるかもですので、その辺はすみません。次の更新がいつになるかわかりませんが、これからもよろしくです！

読んでいただきありがとうございました！

８９時間目　その決着の後で・明久編～み、瑞希ちゃん？～（前書き）

こんにちは。糖分摂取魔です。

えっと……上手く行っているかわかりませんが、初めて予約掲載ってやつをやってみました。失敗してたらすみません。

病院にいる時は更新できないし、どうするかな～って考えたら……使ってみようかなって思い立ちやってみました。

とりあえず、８９時間目です。どうぞどうぞ♪

８９時間目　その決着の後で・明久編～み、瑞希ちゃん？～

造Ｓｉｄｅ

「にしてもやってくれたな？」

「月野にしてはやけに大人しいと思った矢先にこれだからな」

《ふふっ♪ですが一応弁解させて貰うと自分はルールを破ってはいませんし、ツネとナツに約束した『自分は戦いには参加しない』も破ってないですよ～》

決着がついた後、とりあえずゆーさんと一緒に座り込んでいるとツネとナツが話しかけてきました。

「ま、大体は俺の作戦だったんだがな・・・・・先に造を『戦いには出さない』と言っておけば、その分アンタらは造を完全に戦力から排除するだろう？」

「・・・・・なるほど。ってことは『造はフィールドを張ることしかしない』って台詞も、俺らの意識を月野から排除するってことと・・・・・」

「月野がフィールドを張りかえることに対するルール確認でもあったわけか。確かに俺らは『月野がフィールドを張る』ことを黙認しちまったわけだしな」

ツネとナツは理解が早くて助かりますね～♪流石Ａクラス上位の二人です。まあ、それ以上に頭が回るのがゆーさんなわけでして。そう、ここでやった最初の会話の一つ一つでさえもゆーさんの作戦でした。ホント、ゆーさんを敵にはしたくありませんね♪まさかこん

な作戦を考えつくなんて。

「改めて・・・・・・ワリィなセンパイ方。こんな騙し討ちみたいなやり方で」

《まあ、結構ギリギリの作戦ではあったんですよ？フィールドが上手く張れるかわかりませんでしたし》

なんせ、もし失敗したら再度召喚しなければならない上、あんなチャンスは二度と来ないでしょうからね。戦闘中の《世界史》↓《日本史》の科目替えは一種の賭けでした。上手くいって何よりですが。

自分は今回何もしていないように見られてはいたんですが、これでもフィールド形成のタイミングを計るのに、全神経を研ぎ澄ましていたんですよ～？ちょっと疲れました。

「・・・・・いや、これもこれで作戦だからな。とやかく言う気はねえよ」

「寧ろ感心したぜ？あの状況で逆転するなんてな・・・・・小暮が『月野君がでなければおそらく勝てますが、何の形であれ出てきたらわからなくなりますよ』って言ってたがその通りになっちまったな」

・・・・・ほぅ？そう言えばまだ終わっていませんでした、ね？

《その辺のところは・・・・・・説明してくれますよねぇ？ね、ツネ、ナツ？》

「「あ〝・・・・・・」」

あらら。二人で苦笑いですか？むぅ。二人もですが、小暮さんに直接聞かないと色々納得いきませんね・・・・・・

「ま、その辺はここを出てからにするか・・・・・・おっ？もう一つの問題も決着がついたみてぇだな」

そうやって、ゆーさんが通路を指差すと・・・・・・

『おっ！造に雄二～！終わった～？』

晴れ晴れとした表情のアキさんが。良かったです♪どうやらアキさんの方も上手くいったみたいですね。

《ふふっ♪アキさん、ゆーさん。お二人とも、お疲れ様です♪》

さて、自分も自分でこの事件の始まりである彼女と、そもそもの始まりである彼女の二人に話を聞かねば・・・・・・ですかね？何にせよ、皆さん本当にお疲れ様です♪

☆

『いやー、結構面白かったなぁ。装飾も結構大がかりだったし先輩たちとも交流出来たしよ』

『流石は学園をあげての騒ぎってところだよな。盆休みの間の一般開放も来てみるかな。実は俺、先輩とさっき約束したんだ。「一緒に行こうぜっ！」て言われててな？』

『へぇ？そりゃいいな。んじゃ俺も行くかな。にしても・・・・・・先生たちの召喚獣ってどんなんだろ。高橋先生の召喚獣なんか気になるよな』

『ははっ！鉄人が出てきたらどうする？』

『・・・・・そ、それは・・・・・・大丈夫だろ・・・・・・一般開放なんだから人様に見せられる召喚獣を出すはずだろ？高橋先生と言えば造ちゃんだし、案外造ちゃんが出てくるかもな』

『だな。鉄人よりよっぽどありえるぜ』

肝試し終了後、補習や夏期講習からの開放感や後片付けは必要ないという先生方のお達しもあり、下校している皆さんの顔は晴れ晴れとしていました。勝敗はともかく、どうやら3年生と2年生の交流も出来たようで、中々良いイベントでしたね～

あと、残っている問題は・・・・・・

「・・・・・・吉井」

「あ、なに霧島さん？」

「・・・・・・屋上に行って」

「？屋上？屋上って――――」

「・・・・・・早く。瑞希と美波がいるから」

「二人が？了解！ありがと霧島さん！」

そう言ってアキさんは怒涛の勢いで階段を駆け上がって行きました。
おお早い早い。

・・・・・そうですね。アキさんには二人の件があります。ま、アキさんなら何とかしてくれるでしょうし、頑張ってもらいましょうね～♪それにしても・・・・・・

「なんだ翔子。下の名前で呼ぶようになるなんて、随分姫路や島田と親しくなったんだな？」
《そう言えばそうですね。何か心境の変化でも？》
「・・・・・うん。私は、ああやって、怖くても一生懸命になって頑張る人たちが好きだから」
「・・・・・・・・・・・・・」
《あらあら♪》
「・・・・・凄く、好き」
「造の方を見るのはともかく、なぜそれで俺の方を見る？俺に怖い物はなければ、頑張るなんて殊勝な態度は無いぞ」
《ふふふっ♪ゆーさんの意地っ張り～》
「・・・・・じゃあそういう事にしてあげる」
「ぐっ・・・・・お前ら、なんだか引っかかる物言いだな・・・・・！」

ま、今回は特にゆーさんが物凄く頑張りましたからね～そんな言い方しても説得力無いですもん。ゆーさん、お疲れです。

《さて、それでは自分は色々と片付けに行きますね。・・・・・・霧島さん、ゆーさんを労ってあげてくださいね～》
「なっ！？・・・・・どう言う意味だ造！？」

「・・・・・わかっている。頑張り屋な夫と気の利く娘がいて、私は幸せ者」
《・・・・・えっと、ツッコミませんよ？》
「そこはツッコめ造！」
とりあえず、らぶらぶなゆーさん、霧島さんと分かれ（だからどう言う意味だ！？ｂｙ雄二）自分は行きましょうかね。
・・・・・納得のいく話をして貰いにね？

☆

明久Ｓｉｄｅ

「やっほ、姫路さん、美波」
屋上に着くと、隅の方で憂鬱そうに空を眺めている姫路さんと美波の姿が見えた。
「あ・・・・・明久君」
「アキ・・・・・ほら瑞希。シャンとしなさい？」
僕の顔を見て、気まずそうに目を伏せる姫路さんと、その姫路さんの手を握って僕のとこに連れてくる美波。二人の目はちょっぴり赤かった。

「二人ともそろそろ帰ろっか。明日から本当の夏休みだし、楽しいことがいっぱいだよ？」
「そうね、きっと楽しいわよね」
「・・・・・・・・・・・・」
「あっ！そうだ。実はさ、姉さんがね？海に行こうって言ってるんだ。車も借りるみたいだし、二人もよかったら一緒にどうかな？」
「いいわね！ね、瑞希！」
「・・・・・・・・・・・・・」

姫路さんの浮かばない表情に変化はない。美波が一生懸命間を持たせようとフォローしてくれているけど、困ったなぁ・・・・・・

「・・・・・ああ、もう！瑞希！ウチらはアキに言わないといけないことあるでしょ？」
「あっ・・・・・・はいです、美波ちゃん・・・・・・」

と、しばらくして美波が姫路さんを促して何か言おうとしている。
何だろ？

「あのね、アキ。さっきウチらのとこにね」
「・・・・・根本君と小山さんが謝りに来てくれたんです」
「あ、そうなんだ」

何だかんだでちゃんと謝ったんだね。良かった良かった。それにしても小山さんまで謝ってくれるなんて、結構彼女も律儀なんだな～

「あれって・・・・・明久君のお陰、ですよね・・・・・・・？」
「うぇい！？な、何で？・・・・・・いや、別に・・・・・・・」
「アキ。誤魔化さなくてもいいわ。アンタと根本の会話は、しっかりカメラが収めていたわよ？」
「ゑ・・・・・・？」

なっ！何だって！？あの根本との戦いってカメラに映されてたの！？そ、そう言えば小山さんがしっかり撮っていたような・・・・・・

「ありがとね、アキ。ウチらの為にさ」
「・・・・・ありがとうございます」
「あっ・・・・・うん、えっと」

な、なんか・・・・・お礼は言われているのに暗い雰囲気だ。姫路さんが何だか辛そうだね。美波も心なしか笑顔が曇っている気がする。どうしたらいいんだろ。

「・・・・・瑞希。さっき言えなかったこと、それに今言いたいことを全部まとめて言っちゃいなさい」
「み、美波ちゃん・・・・・・？」

と、美波が姫路さんの手をしっかりと握りそんな風に言ってくる。美波って、こういう時ホントに強いね。・・・・・なんだろう、こういう美波もいいね。なんか凄く、凄く憧れる。

「さっき言ったでしょ？・・・・・大丈夫、アキなら受けとめて

くれるわ。ね？ウチもついてる。溜めこんでいること、吐き出しましょ？」

「・・・・・・・は、い。ありがとうです、美波ちゃん」

・・・・・・美波に推されて、姫路さんがゆっくり、ゆっくりと話し始めた。

「あの、私・・・・・・結局、役に立てませんでした。また私は前みたいに役に立てなくて、それどころか足を引っ張ちゃって、明久くん達に助けて貰って・・・・・・・！」

「・・・・・・姫路・・・・・・・さん・・・・・・・」

「うん、そっか・・・・・・・」

「私・・・・・・自分が嫌いです・・・・・・・！役に立てないところも、迷惑ばかりかけちゃうところも、こうやって美波ちゃんに甘えてばかりなところも、明久君に当たってしまうところも・・・・・！全部、全部・・・・・・！」

ぽろぽろと姫路さんの目から大粒の涙が零れ落ちる。

どうしてそんなに自分を嫌うのだろう？姫路さんだって、あんなにも僕らの為に頑張ってくれたのに。

「あのさ、姫路さん。これは美波もだけどさ」

「・・・・・・・・・・・・・はい」

「うん・・・・・・・」

「さっき根本君相手に啖呵切ったのすごくカッコ良かったよ」

「え・・・・・・・？」

「アキ・・・・・・・」

カッコ良かったと言われたのが意外だったのか、姫路さんがちょっと顔を上げてこちらを見る。美波もさっきより自然な笑顔で僕を見ていた。

「ちゃ、茶化さないでください！私が言いたいのはそういう事じゃなくて――！」

「瑞希。アキはわかっているわ。だから、ちゃんと聞きましょう？」

「み、美波ちゃん？」

「あはは、ありがと美波。それとね・・・・・凄く嬉しかった。僕らの為に怒ってくれたお陰で僕も雄二たちも頑張れたんだ。改めて・・・・・ありがとう二人とも」

姫路さんと美波に心からの感謝を込めて頭を下げる。

あの時――二人とも必死で我慢して我慢して、もう少しってとこまで行ったのに、無駄になってしまった。けど、そのことよりも僕らを罵倒されたことを本気で怒ってくれたこと。本当に嬉しかった。その気持ちだけで僕は頑張れたんだ。

「あっ・・・・・で、でも・・・・・私は3年生の点数も減らせませんでしたし・・・・・」

「そんな事は問題じゃないよ。美波も姫路さん自身も言ってたよね？『成績や素行より大事なものはたくさんある』って。二人がさ、僕らを成績じゃない部分で評価してくれたように、僕らもやっぱり成績じゃない部分で助けてもらったんだよ？」

あの時二人がが頑張ってくれたから、僕らも頑張れた。あの時の言

葉が僕らを動かしたんだ。

「・・・・・そうよね、やっぱりアキはアキだわ♪」

「明久・・・・・君・・・・・」

「それに新学期になったら試召戦争で姫路さんにたくさん助けてもらうだろうし、美波も頑張ってもらうよ？なんたって、姫路さんはFクラスの主戦力で美波は特攻隊長でもあるわけだからね？頼りにしてるよ！」

僕がそう言うと、姫路さんは涙を拭って笑顔を見せてくれた。美波もさっきのぎこちない笑顔が一転したみたいだ。よかった。いつもの二人だ。

「ふふっ♪任せておきなさい？ウチがアキも瑞希も護ってやるわ！」

「もう、美波ちゃんったら・・・・・ありがとうございます。明久君、美波ちゃん。私・・・・・少しだけ自信が持てそうです」

「あ。それは良かった」

姫路さんが抱いていた負い目のようなものがなくなったなら、それはとても嬉しいことだ。ふぅ、これでやっと楽しい夏休みの始まりかな？

「・・・・・うーん。助け合うで思ったんだけどさ、アキ？」

と、美波がふと思い出したように聞いてきた。ん？何だろ？

「何かな?美波」
「そう!それよ!」
「・・・・・・どれ?」

何だろ急に?いや、ホントにどれ?

「いや、瑞希と前から話してたことなんだけど、アキって瑞希のことを『瑞希』って呼ばないのかしら?」
「あっ!そうです!助け合うならもっと遠慮をなくしても良いんですよねっ!」
「・・・・・・ふぇ?」

いきなり二人は何を言っているんだろう?

「いや、ね?ウチのことは『美波』でしょ?坂本のことは『雄二』って呼ぶし月野は『造』、木下は『秀吉』で土屋のことは渾名でしょ。なのに瑞希だけ『姫路さん』って」
「そうですっ!私のことは名字でしかも『さん』付けなんて!出来れば私も下の名前で呼んで欲しいですっ!」
「あー・・・・・・それは・・・・・・」
「・・・・・・ダメ、ですか・・・・・・?」
「いいじゃない、アキ。『瑞希』って呼んでも」
「いや、ダメというか何というか・・・・・・?」

何だか断りづらい雰囲気・・・・・・

「あのさ、姫路さん、美波」

「何です？」
「何よ？」
「実は、その呼び方には説明し難い複雑な理由があって・・・・・・」
「はぁ？理由？呼び方に？」
「何ですか？教えてください」
「いや、それは説明し難いからできれば勘弁してもらいたいなぁ、なんて」
「ダメです。話してくれないと納得できません」
「そう言うこと。ホラ、さっきは瑞希が頑張ったのよ？アキも言いなさいな♪」
うぅ・・・・・・参ったなぁ・・・・・・
「・・・・・・笑うでしょ？」
「笑いません」
「笑わないわよ？」
「・・・・・・誰かに話すでしょ？」
「誰にも話しません」
「ウチらだけの秘密ってことで」
姫路さんの目は真剣だ。美波もこれははぐらかせそうにないね。弱った・・・・・・どうあっても逃がしてくれそうにないようだ・・・・・・
「あ、あのさ、実は・・・・・・」
「はい」
「うん？」

「僕と姫路さんって小学校一緒だったんだけど」
「そうですね」
「瑞希から聞いたわ」
「その・・・・・だからさ、下の名前で呼ぶと、昔の呼び方の『瑞希ちゃん』っていうのがでてきちゃって」
「へ？」
「は？」

姫路さんと美波がポカンとした顔で僕を見つめる。や、やめて！そんな風に僕を見ないで！

「ほ、ほら、僕らももう高校生なのに、『ちゃん』付けだなんて恥ずかしいじゃない！？これでも家でこっそり呼ぼうと練習もしてみたんだけど・・・・・って！言わせないで！？」
「あ・・・・・明久君♪」
「プッ・・・・・あ、アキ？自分で言ってどうすんの♪何よ！もう、可愛い理由ね♪」

ぎゃあああああああああああああああ！姫路さんも美波もなんか慈しむような目で僕を見ているけど、地味に辛いっ！？やめて！？

「いーじゃない！今度からアキは『瑞希』もしくは『瑞希ちゃん』って呼びなさいな♪」
「え、えぇ！？」
「そうですね♪よろしくお願いします、明久君♪そうだ！ちゃんと呼んでくれないなら・・・・・Cクラスで明久君が私たちに言ってくれなかった『答え』を話して貰いましょうね♪」

「あぁ！そう言えばそのことをすっかり忘れてたわ！そうね、そうしましょう」
「そ、そんな！？」
「さ、行きましょう美波ちゃん、明久君。折角の夏休みです。色々と遊びの計画を練らないといけませんからね♪」
「そうね、行きましょうか。アキ？さっき言った事は、忘れちゃだめよ？」
「いや、それどころじゃないよ！僕の話を聞いてよ美波、ひめ――――」
「「ひめ？」」
「・・・・・・・・・・・・み、瑞希ちゃ、・・・・・・・瑞希」
「はいっ♪」
「ふふっ♪なんかいいわね、コレ」
か、完全に遊ばれている・・・・・ま、まあこれはこれでいいのかな？
「さあ、夏休みね♪」
「楽しみですっ！」
明日から始まる夏休み。美波とひめ・・・・・瑞希、そして皆で過ごす今年の夏は一体どんなことが待っているのだろう。
「明久君！」
「アキっ！」
「あっ、うん！今行くよっ！」

・・・・・少なくとも、去年よりもワクワクして楽しい夏になることだけは確実かな?そんなことを考えながら、3人で屋上を出て行った。さぁ、明日から楽しい夏休みだ!

89時間目　その決着の後で・明久編～み、瑞希ちゃん？～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

原作とは違い、ここでは美波にも会話に参加して貰いました。美波が優しすぎかな？えっと、姫路さんと美波は恋のライバルですが、それ以上にお互い大切な存在って設定です。明久と姫路さん＆ａｍｐ；美波には、幸せになって欲しいって思います。

べ、別に美波のことが好きってわけじゃないからねっ！……すんません。嘘です。自分は基本、美波のこと大好きです。姫路さんもやっぱり好きで、明久は大変かもしれませんがこの二人を幸せにしてもらえるように頑張ってもらいます♪

てなわけで、また次回！次回は造と小暮さんの会話編かな？ちゃんと更新できているかわかりませんが、また次回！読んでいただきありがとうございました！感想を書けないと思いますが、書いて下されればまとめて戻ってきた時に書かせていただきます！

９０時間目　その決着の後で・造編～小暮さんには降参です～（前書き）

どうも糖分です。皆さんお元気でしょうか？

正直ある意味未来に向かって更新しているって、不安ですね（汗）
予約投稿その２ですが、本当にできているのかな？確認しようにも、できないこのジレンマどうすればいいでしょうか！？

そんなどうでもいい話はさておき、９０時間目です。今回はあの小暮さん登場っ！待ってた人はお待たせっ！では行きましょう。どぞどぞ

90時間目　その決着の後で・造編～小暮さんには降参です～

《さてさて。説明をお願いします》
「うふふ♪」
《『うふふ♪』じゃなくて説明をお願いしますね、小暮さん？》
「あら。そんなに怖い顔しては折角の綺麗な顔が台無しですよ、月野君」
《こ～ぐ～れ～さ～ん～？》
「うふふ♪」

ここは３－Ａの教室。ここには自分と、先ほどからのらりくらりと質問をかわす小暮さん。それに、当たり前ですがツネとナツなどの３－Ａのクラスの皆さんがいらっしゃいます。皆さん小暮さんの態度に苦笑い。あぁ、毎度のことながら小暮さんは・・・・・・

それにもう一人・・・・・何だが居心地が悪そうに恐縮している小山さんの姿も。やれやれ。彼女も今回大変でしたね？

《ほら、もう役者は揃っていますでしょう！いい加減に説明して貰いますよ！》
「あらあら。まあ、大体は月野君も見破られているでしょうし、答え合わせにいきましょうかね？では、月野君。質問形式でいきませんか？月野君は３つまで質問出来ます。その回答で推理してみてくださいな♪」
《ま、また貴女は・・・・・・最後の最後まで楽しんでいるでしょう？・・・・・・まあ、いいです》

小暮さんのこういう行動は去年から変わっていませんね・・・・・・
ここまで来たら自分も付き合ってみましょうかね？

《では質問その1です。皆さん、どこまで本気でした？》
「・・・・・・ふふっ、2番目のDクラスまでです」

・・・・・・やっぱりそうですか。ってことはそれ以降は・・・・・・
・

《ふむ・・・・・・質問その2です。Aクラスでの最初のカメラのトラブルは？》
「ああ、アレですか。はい。それも私が。そもそもトラブルなんてありませんでした♪」

くっ・・・・・・ホント、いい性格してますよね？まあ、いいです。
最後の質問はやはり、

《最後の質問ですね。・・・・・・根本君をそそのかしたのは？》
「あらあら♪先に言っておきますと、そそのかしたのではなく案を出しただけですよ？」
《・・・・・・その発言で、よ～く、わかりました》

やっぱり小暮さんの策略ですか・・・・・・

「はい、では解答をどうぞ♪」
《・・・・・・あくまで自分の感じたことですが肝試しの前半、つ

まりBクラスとDクラスまでは皆さん本気で自分たちを脅かしてましたよね。ですが、後半、つまりCクラスとAクラス戦は、何だか中途半端だった感じでした》

「・・・・・・ええ、そうですね」

B、Dクラス戦は中々に考えてあって面白かったのですが・・・・・C、Aクラス戦ではなんだか違和感だらけでした。Cクラスではチェックポイントの生徒さんが手加減していたり、Aクラスでは最初のBクラスでの肝試しのセットのような二番煎じな脅かしで挑んできたりですね。

《・・・・・なんだか、後半は『仕掛けを作るのが間に合わなかった』か『途中でわざと手を抜いた』様な感じでした。いや、そのどっちもかな?そのくせ、何か狙っているみたいでしたし。Aクラスでの迷路を動かした時なんか、特にですね》

「「・・・・・・・・・・・・」」

ツネとナツも無言で頷いていますね。・・・・・ふむ、ここまでは合っていますかね?

《そこでここにいる小山さんの出番何ですが・・・・・多分、昨日の肝試しの準備の最中に根本くんか小山さんのどちらかが、小暮さんあたりに『月野たちと戦いたい。3年生に手を貸して欲しい』とでも言ってきたんじゃないですか?あ、いや。小暮さんと接触出来るのは小山さんだけですし、そこは小山さんかな?》

「っ〜〜〜〜〜〜!?／／／／／／」

おお・・・・・・小山さんの顔真っ赤。うん、貴女の反応でわかりました♪

《そこで急遽小暮さんが・・・・・・3年生の皆さんに協力を煽り、んで結果、Aクラスの根本くんの事件が起こったってとこですかね？・・・・・・詳しいやり取りまではわかりませんが、自分の推測は以上です》

「「「・・・・・・・・・はははは・・・・・・・・」」」

3年生の皆さん、気まずそうに笑っていますね。ま、ちょこちょこ違っているとこはあるでしょうが、大体は合っているのかな？

《んで、小暮さん？どうでしょうか？》

「・・・・・・・・・・・・・・85点ってとこですかね♪凄いですね、高得点ですよ？」

そう言って小暮さんが、何故だか最高の笑顔で解説を始めました。

「ええ。ほとんど合ってますね♪私たちは昨日までは確かに本気で勝つ気でいましたが・・・・・・可愛い後輩の頼みもあって、途中で路線変更したんですよ」

《・・・・・・と言うと？》

「彼、根本君でしたっけ？彼の熱意に負けて、私たちは彼が動きやすいように肝試しの準備を急遽変えました。ですが、突然そんなことを始めたため、後半はやはり月野君の指摘通り少し妙なところがありましたね」

小暮さんがそこは苦笑いをして、続けます。

「折角作ったセットを戻すのは勿体なかったので、前半は最初の打ち合わせ通り本気で2年生と戦って、後半は彼が動きやすいようにしていました。彼は『月野君・吉井君・坂本君』との直接対決が御所望でしたから、まずCクラスで3人とその関係者以外の皆さんが失格になるように私が出ました♪」

《・・・・・その作戦があの『着物とレオタード』ですか？いや、確かに効果は抜群でしたが・・・・・》

よくもまあ、こんな破天荒な作戦を考えてしかも実行に移しましたね？・・・・・確かに小暮さんの作戦で、悲しいことに2学年男子の9割は堕ちましたが。

「それでも失格にならない生徒は、Aクラスで篩(ふるい)にかけます。まあ、大抵の生徒は常村君と夏川君が倒してくれるでしょうし」

なるほど・・・・・確かにツネとナツの物理なら、余程の生徒でない限り倒せませんよね？

《そこでようやく、ゆーさ・・・・・坂本くんたちが初めて動き出すってことですね。あれ？ちょっと気になったんですがそのタイミングでカメラのトラブルと『召喚獣を出して下さい』って連絡したのは何だったんですか？》

まあ、それも彼女の作戦でしょうが・・・・・ちょっと気になり

ますね。

「ふふっ・・・・・そこからが私の策の本領発揮です♪この策で最も重要なのは・・・・・『根本君が月野君たちと戦う場面を作る』ことですね？」

《・・・・・はい、そうなりますね？》

でなきゃ、こんな面倒な作戦はしないでしょうし？

「ですがそれには『月野君たちを怒らせる』必要があります。しかも『月野君たち以外の生徒がチェックポイントを突破』してもいけません」

《・・・・・あ。もしかして、『チェックポイントを突破する可能性』がある霧島さんたちが鍵になるってことですか？》

「ふふっ♪話が早くて助かりますね。そうです。学年主席の彼女や、ある意味次席にあたる・・・・・姫路さんでしたか？彼女たちをどこかで失格にする必要がありました。彼女たちを根本君が失格にすれば、『チェックポイントを突破される恐れ』もなく、且つ『月野君たちを怒らせる最高の材料』になりますからね」

《・・・・・え、えげつないですね？》

これには流石の皆さんも若干引き気味ですよ・・・・・？

「ですが、彼女を・・・・・いえ、霧島さんですか？霧島さんを根本君が失格にすることは至難の業。そこで『召喚獣を出すこと』と『迷路を作りかえ、メンバーを入れ替える』ことが活きてきます」

《あー・・・・・なるほど》

そこでメンバー入れ替えですか。まあ、その辺はゆーさんが考察した通りでしょうね。ですが、やはりわかりません。どうして召喚獣を呼ばせたのでしょうか？

「彼女たちを彼が倒すには、少々面白くありませんが不意打ちしかありません。ですから召喚獣を先に出して貰っておいたんです」

《・・・・・あっ！不意打ちをしようにも召喚獣が場に出ていなければ意味がない。だから、召喚獣は召喚フィールドから離れなければ消えることが無いってことを利用したってことですか？》

そうか・・・・・だからあの時回りくどくはありますが、自分たちに召喚獣を出させたんですね。Ａクラスはすでに物理のフィールドが肝試し用に張ってあります。霧島さんたちが不審がって召喚獣を戻そうにも戻せない状況を作った・・・・・そう言うことですね。

「はい♪良く出来ました。これが大体の今回の概要ですね」

そう言って小暮さんが、とてもとても爽やかなお顔で自分を見ています。・・・・・くぅ、毎度のことながら遊ばれていますか自分！？どうやら小暮さんは、自分の反応を見て至極ご満足しているようです。

《・・・・・お、大まかなところはわかりました。ですが納得いかないところが多々あります！》

なんだかここで終わらせるのは癪です！彼女にはとことん付き合って貰いますよ！

「はい♪どんどんどうぞ？」

《ぐぅ。余裕綽々ですね・・・・・まあ、いいです。そもそも何故こんなことを？小山さんに頼まれたからって、貴女がそんな作戦を立ててまで動く理由がわかりません》

彼女はどこか、ゆーさんに似ています。徹底的な利己主義です。感情論だけで動くような方ではないと思いますし・・・・・？それに根本くんはお世辞にも、小暮さんが興味を引くような生徒さんではない気もします。

《それに・・・・・皆さんもです。どうしてこんなことを？小暮さんが一人で動いたとも思えませんし、皆さん協力していたこともわかります。ですが3年生全体が一人の男子学生の為に動く理由もさっぱりですよ？》

いくら小暮さんが皆さんを誘導する・・・・・コホン。

えっと、皆さんを巧みに操る・・・・・ゴホン。

あー・・・・・その、小暮さんが皆さんを動かすのが上手いとは言え、こんな作戦に疑問を抱かないとは思えません。何があったんでしょうかね？

「・・・・・それはだな、月野？」

「おっと、常村君？それも私が説明します！いいですね？」

「？あ、ああ。お前がそれでいいなら任せるぞ？」

？ツネが説明しようとすると、小暮さんが急に大きな声で止めました。何でしょうか？

《えっと、小暮さん？》

「ああ・・・・・すみません、今説明しますね♪まず小山さんの頼みと、彼の行動・・・・・その熱意に負けたのが一つです」

《えっと・・・・・根本くんの熱意にですか？》

うーん。何だか根本くんの熱意とか、その辺は若干違和感がありますね？まあ、彼女が言うならそうかもしれません。小山さんの頼みがあったからってことなら、一応納得は出来ますし。

「それと・・・・・これは皆さんを動かした理由なんですが、『2年生と3年生の交流』をどこかでやっておきたかったからでもあります」

《・・・・・ふぇ？》

交流？どう言うことでしょうか？

「これは私が常々思っていたことなんですが・・・・・文月の2年、3年はあまり交流が無くそれが私には残念で堪りませんでした」

《あー・・・・・確かにそれはちょっと自分も思いますね》

まあ、進学校ですしその辺は仕方のないことですが・・・・・もう少し仲良く出来ればいいと思っていましたからね。

「そこで考えたんですよ。・・・・・・なら、少々強引にでも接点を作ろうと」

《・・・・・・と、言うと？》

うーん？やっぱり小暮さんの真意が見えませんね？どう言う意味でしょうか？

「根本君や小山さんに協力することで、まず彼女たちに接点が生まれます。それから・・・・・当初の予定では、『私たち3年生が2年生に勝利する』シナリオだったんですが、勝利しようがしまいが賞品の腕輪を2年生に渡す予定だったんですよ」

《・・・・・・はい！？》

しょ、賞品を？いや、何でしょうか？

《そ、それじゃ皆さんが納得しないでしょう？折角の賞品を無条件で渡すなんて・・・・・・》

「いえ。それがそうでもないんです。どの道私たちが手に入れても、これから先その賞品の腕輪を使う機会はほとんどないでしょう？」

《あっ・・・・・・そうです、ね。これから受験が始まるのに、試召戦争はほとんど起らないでしょうし・・・・・・》

そっか・・・・・・確かにそうです。この時期に試召戦争で使う腕輪を3年生が持ってても、それはどうしようもないでしょうね。

「それならいっそ、『肝試しで一番頑張った2年生に渡した』方が、

きっと有益に使ってくれるでしょうし、そのことで『2年生と3年生に接点が生まれる』でしょう？」

《・・・・・な、なるほど》

「それに・・・・・私は肝試しが始まる時に言いましたよね？『3年生としての立場を2年生に示す、いい機会です』と。それが私が動いた理由です。そしてこのことを皆さんに話したことで、皆さんが協力してくれた・・・・・ってことです♪お分かりいただけました？」

《・・・・・そこまで考えていらっしゃったんですね。把握しました。そして・・・・・参りました。降参ですよ》

全く・・・・・この人は本当に、色々と怖い方ですね。《影の参謀役》の名は彼女にこそ相応しいと自分ですら思いますもの。

「いいえ？私たちの負けですよ。・・・・・まさか、ここまでやって勝てないなんて思いませんでした。ふふっ、本当に今の2年生は面白いんですね、月野君？」

《あははっ♪そうですね、最高の方々ですよ♪》

・・・・・まっ、今回はゆーさん、アキさんたちのお陰で小暮さんに一泡吹かせられましたし、これで大目に見ますかね？

《やれやれ・・・・・皆さん、お疲れ様でした。2年生もしっかり楽しめたみたいで、良かったみたいです。ありがとうございました》

とりあえず、時期も時期なのに自分たちを思ってこういう企画に参加してくれて、しかも一芝居打ってくれたことに心から感謝を込め

て一礼します。

『あ、あはは・・・・・・止めてよ月野君』
『俺たちは感謝されるようなことはしてねえぞ?』
『そうだな・・・・・・寧ろ俺らも楽しんでたし』

皆さん照れ隠しか、そう口々に言ってくれます。ふふっ、本当に良い方たちです。

「あ、あの!月野先輩、それに皆さん!・・・・・・本当にすみませんでした!あのバカには私から今度直接謝らせに行かせますので・・・・・・」

と、今まで喋っていなかった小山さんもしきりに頭を下げます。3年生の皆さんは『気にしなくていいよ?』とか『大丈夫、大丈夫♪』とか言ってくれます。

・・・・・本当に小山さんもお疲れ様です。貴女は今回はよく耐えてくれましたね?

《小山さん、大丈夫ですよ?貴女も大変でしたね》
「え、えっと・・・・・・」
《いいんです。話したくないことは話さなくて。・・・・・・ですから、これだけは言いますね?小山さん、お疲れ様です♪」
「あうぅ・・・・・・先輩、すみませんです」

また顔を赤くして、小山さんが小さくなりました。ありゃりゃ。こ

れ以上は言わないでおきましょうね。

・・・・・多分、今回の小山さんは小暮さんに『何があっても手を出さない』ことを条件にされたんだと思います。その条件を呑むなら協力しましょう、とでも言われたんでしょうね。

「月野君・・・・・今回の件は全て私が考えたんです。皆さんを責めないであげてください」

《小暮さん・・・・・ふふっ、大丈夫です。さっきも言った通り、感謝しているんですよ?勿論この作戦を考えた小暮さんにも、ね?ありがとうです、小暮さん♪》

「・・・・・・っ」

?なんだか小暮さん、ちょっと動揺しましたか?ま、感謝されると思っていなかったからでしょうかね~?

《あっ・・・・・ですが少なくとも後日、霧島さんや姫路さん、島田さんには一言言っておいて下さい。彼女たちが今回一番大変でしたでしょうから》

これだけは、やっぱりけじめですからね。小暮さんにお願いしましょう。

「あっ・・・・・だ、大丈夫です。私から説明しておきますね。で、では月野君。ありがとうございます。私たちも楽しかったですよ!」

《はい♪では皆さん、自分はこの辺で失礼しますね?自分も楽しか

ったです♪》

「おう、お疲れさん、月野。またな？」

「そうそう。アイツら・・・・・坂本と吉井だったか？アイツらによろしく言っておいてくれ。『次は負けんぞ？』ってな！」

《あはは♪りょーかいです♪必ず伝えますね》

そうして、３－Ａを後にしました。本当に楽しかったですし、問題なくいって良かったです♪3年生の皆さん、それに小暮さん。ありがとうです♪

『・・・・・私がこの策を考えた本当の理由。月野君は最後まで気付かなかったようですね』

『あ、あの・・・・・先輩。いいんですか？月野先輩は・・・・・・』

『ふふっ♪いいのです。今回はこんな感じで。貴女もお疲れ様ね？』

『あっ・・・・・はい。先輩、その・・・・・』

『大丈夫ですよ♪彼に《感謝してる。ありがとう》って言われただけでも、嬉しかったですし。それに私、諦めた覚えはなくってよ？』

『先輩・・・・・流石です！それでこそ先輩です！』

『ふふふ♪まあ、別の機会もありますし。月野君を次こそは・・・・・♪』

・・・・・そんな会話が、造が後にした教室であったとか無かったとか？

９０時間目　その決着の後で・造編～小暮さんには降参です～（後書き）

ありがとうございました。９０時間目、いかがだったでしょうか？

うーん。小暮さんのキャラが上手く掴めているのかはわかりませんが、こんな感じのキャラになりました。原作で高城が未だに出ていないので、彼女が頭脳担当となり今回の話のある意味、中心となりましたが……どうでしょうね？

彼女の自分のイメージは、雄二並みに頭が回り、霧島さんのように冷静で、そんでもってちょっぴり人を動かすのが得意で趣味なちょっとＳっ気のあるお方です。あれ？てか、造にまたフラグが……いや、ある意味彼女が一番まともに造のことを……？

これからどうなるのかわかりませんが、ここまで広げた以上は小暮さんにこれからも活躍させるかも？まぁ、気長に彼女の活躍を待っててくださいね。

ではまた次回。次回は肝試し編のラストの予定です。……これ、本当に更新できていますよね？ね？心配するなら、まとめて病院行く前に更新すればよかったかな？それはそれで、すみませんですっ！

次回はこの騒動の原因となった存在と造の会話からになります。ではまた！読んでいただきありがとうございました！

91時間目　その決着の後で・総集編～肝試し編終了！～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。予約投稿その3です。どうか上手く行ってますようにっ！

そう言えばふと思ったんですが、確かに作者の名前が『糖分摂取魔』ですが、別に作者が甘いもの食べすぎで、糖尿病になって入院コースになったわけではありませんからね？一応作者の名誉にかけて言っておきます。ホントだよっ！？

そんなことはさておき、今回で肝試し編終了です。ではでは皆さん。相変わらずの超展開ですが、どうかよろしくお願いします。

91時間目　その決着の後で・総集編～肝試し編終了！～

さてさて。話をしに行かなければならない方が、もう一人いましたね。ここは文月学園の召喚獣と召喚システムを管理するシステムサーバー室。とりあえず、学園長に頼んで入れて貰いました。

ん？何でそんなところにいるのかって？それはですね。そもそもこのオカルト召喚獣騒動を引き起こした、彼女にも色々と聞かないといけませんからね・・・・・・

《さてさて、説明をお願いします》

《ウフフ♪》

《いやいや、『ウフフ』って・・・・・・最近の女性は、皆さん説明をはぐらかすのが嗜みなんですか？》

「一体何言ってんだい、ジャリガキ？・・・・・・それと、アンタも真面目に答えな、《召喚システム》」

そう・・・・・自分と学園長の前にはホログラムの身体と、学園の頭脳ともいえる人工知能、そして、召喚システム全てをつかさどる存在の・・・・・・

《ばーちゃん　ソノ　呼び方　キライ！　ちゃんと　名前　デ　呼んで？》

《そうですよ。学園長？ちゃんと呼んであげましょうよ？》

「・・・・・誰が『ばーちゃん』だい？ったく、アタシは折角のシステムの名くらいもう少しマシな名前が良かったんだが・・・・・」

《イヤ！　ツクル　が　付けて　くれた　ダイジな　名前！》
《そうですよ？文月学園の召喚システムで、女の子だから・・・・・
・文さん♪いいでしょ♪》

・・・・・文月学園の召喚システムこと、文さんが空中にフワフワ浮いていました。容姿は相変わらず、何故だか自分と瓜二つです。いえ、文さんには胸がある分、自分と瓜二つってわけでもないのでしょうか？・・・・・ん？でも、今自分も女性で胸があるってことは瓜二つなのかな？

そんなことを考えていると、学園長が盛大に溜息をつきました。あれ？何でしょうかね？

「・・・・・何で月野のそんな微妙な名前を気にいるのかね。この子は」
《ナンデ？　とっても　可愛い　ヨー？》
《ですよね？》

《《ねー♪》》

「はぁ・・・・・ったく。もういいさね。そんで文？どうしてこんなことをしたんだい？」
《ばーちゃん　ニハ　教えないー♪》
「っ！こんの・・・・・」
《あっ、そうそう。本題を忘れてましたね。文さん、どうしてですか？》
《ツクルが　ドウシテモ　知りたい　なら　教えて　アゲル♪》
「おい、そこのシステム？どうしてある意味アンタの生みの親であるアタシには逆らって、月野には言うことを聞くんだい？」

あらあら・・・・・学園長がご立腹ですね。やれやれ、相変わらずな関係ですか♪人工知能を搭載されている文さんですが・・・・・本当に中身は思春期の女の子なんですよね。まあ、可愛い子ではあるのですが。

《もう、文さんったら・・・・・すみません、どうしてもです♪》
《ウフフ♪　じゃあ　教えて　アゲルー》
「・・・・・・一度バラすかねぇ？」

が、学園長!?そんな物騒なことは言わないで!?その発言はギリギリですっ!ギリギリアウトです!

《そ、それで文さん?どうしてですか?》
《えっと　ねー♪　夏と　言えば　肝試し　だから!》

「《・・・・・・・・・・・・・・》」

な、なるほど・・・・・?確かにそうかもしれませんね。あれ?ですが文さんはどこからその情報を仕入れたんでしょうかね?

《ねえ文さん?それを何処から知ったんですか?》
《んー?　ネットで　ゴロゴロ　してたら　ミンナ　そんな　コト　言ってた　ヨー?》
「アンタ・・・・・また勝手にハッキングでもしたね?ったく・・・・・この悪ガキが」
《ダッテ!　ツクルが　いないと　ヒマ　だもん!　コレ　くらい

いいデショ？　ばーちゃんの　ケチ！》

「だから、誰がばーちゃんだい！？学園長かカヲルとお呼び！」

あやや・・・・・・文さんって色々と有能でハイスペックな方なんですが、ある意味危険な存在って以前、学園長が言ってました。確か『その気になれば、核のスイッチすら押せるだろうね』って言ってたことがありましたっけ？まあ、文さんの場合は悪いことに使っていないですし、大目に見てあげましょうね？文さんも悪いもの悪くないものの区別は何となくわかっているみたいですし。

《えっと・・・・・それで、今の自分を元に戻してくれませんか？てか、どうして自分を女の子にしたんです？》

《んみゅ？　ツクル　似合ってる　のに？　それに　ツクルは　最初から　女の子　でしょー？》

・・・・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ　どうやらこの子にも、教えてやらねばならない世界の真理がそこにあるようですね？文さんいいですか？自分と、それからヒデさんは男ですっ！

「ま、んなことはどうでもいいとしてだねぇ」

《どうでもいい！？学園長、それはあんまりです！？》

が、学園長に見捨てられた！？・・・・・・うぅ、あんまりです。

「とりあえず、月野とオカルト仕様をさっさと元に戻して貰うよ？後アンタ、いや《システム》のお披露目会と盆に、これと同じことは出来るかい？」

《うん！　ワカッタ♪　ツクルは　すぐに　戻す　ねー♪　ばーちゃん　お披露目会と　お盆に　なったら　また　変えとく　ヨー》

まあ、基本文さんは聞きわけは良い子なので大丈夫ですかね。ふぅ・・・・・これでようやく元に戻れるってことですか♪

《では、しばらくしたら元に戻してくださいね、文さん？》

《はーい♪》

「やれやれ・・・・・ホントアンタには、いや、アンタと月野には頭が痛くなるね。んじゃ、そろそろ出るよ月野？」

どう言う意味です、それ？まぁそれはともかく、そう言って学園長がシステムサーバー室の扉を開けて、自分がここを出るように促します。

《あっ、はいです。では文さん。またしばらくしたら遊びに来ますね♪》

《うん！　早く　キテネ♪　待ってる！》

そうして自分がこの部屋を出ようとすると・・・・・・

《ソウダ！　ねえ　ツクル？》

？文さんが自分を引きとめました。何でしょうかね？

《はい？どうしました文さん？》

《あのね？　文は　ねー？　ツクル　にね　楽しんで　欲しかったのー♪　ツクルは　楽しかった？》

《・・・・・・文さん♪》

・・・・・・コレだから♪文さんはとてもとても優しくて、良い子何ですよね♪

《・・・・・・ええ♪最高の贈り物、ありがとうです。凄く楽しかったですよ♪》

《良かったー♪》

「・・・・・・ったく、アンタらは」

文さん、本当にありがとうです♪文さんも楽しかったですか？楽しんでくれたら自分も嬉しいですよ♪

――――そうして長かったようで短かった、オカルト召喚獣騒動は幕を閉じました。

☆

それから、次の日には身体も元に戻っていました。ふむふむ。どうやら今回の件は、やっぱり文さんが自発的に起こしたシステムの暴走（？）のようだったみたいですね。まあ、問題なく終わって良かったですよ。

そんなわけで皆さんに、戻ったことを報告したんですが・・・・・・

「おう。よかったじゃねえか」
「造よ。もしも他に何か問題があれば、必ずワシに相談するのじゃぞ？」
「あはは～♪まあ、身体に影響がなくてとりあえずは一安心カナ？」
「・・・・・・良かった」

と、純粋に心配してくれた方々と・・・・・・

「月野君良かったですね！（明久君の為にも♪）」
「月野良かったじゃない！（アキの為にもね♪）」

なんだか、『良かった』の意味が若干違っているような気のする方々と・・・・・・

「うん♪やっぱり造くんはこれくらいが一番よね♪」
「そうだね！造は胸はこれくらいがベストだと思うよ！」
「・・・・・・・・・・・・俺も安心して造を撮れる」

・・・・・色々とツッコミたい方々がいましたね。何でしょう。とりあえず、戻れて良かったです。いろんな意味で。

2年生対3年生の肝試し対決は問題なく済みました。小暮さんの策のお陰か、早速2年生と3年生の間に交流が生まれたようですね。

2年生と3年生を、いがみ合うような関係でなく本当の先輩と後輩の関係を作りだした小暮さんは流石ですね。

賞品の『黒金の腕輪』は最後のチェックポイントをある意味2対1で戦い抜いたゆーさんに、問答無用に送られました。これには皆さんも納得してましたね。最も本人は、『別にあってもなくてもいいモノだがな?ま、上手く利用させて貰うだろうさ』って言ってましたが。

そうそう。問題なく済んだと言えば・・・・・どうやら姫路さんの悩みも吹っ切れたようです。アキさんと島田さんのお陰でしょうかね♪本当にあの3人は良い関係みたいで何よりです。肝試しが終わってから島田さんとアキさんは目と目で会話するようになりましたし、アキさんの姫路さんの呼び方も『瑞希』に変わってますし♪何だか3人が3人、心の距離がぐっと縮まったようで何よりですよ~♪

「ねえ、瑞希?もしも仮に、万が一の話だけど――例えば僕や美波が瑞希の料理について何か厳しいことを言ったら、どうする?」
「そんなの、決まっています♪」
「えっと・・・・・どう決まっているのかしら?」
「勿論、上手くなるために毎日作ってきて二人に食べてもらいます!継続は力なり、です!」

「「・・・・・・・・・・」」

「?どうかしました、二人とも?」
「あ、あはは!だよね!(み、美波!瑞希の料理についての感想は

これからもひた隠しにしようね！？）」
「み、瑞希ならやっぱりそう考えるわよね！？（わ、わかっているわ、アキ！毎日の地獄を避けるためにもね！？）」

・・・・・まあ、なまじ心の距離が近くなった分、アキさんと島田さんの地獄への距離も近くなった気がするのは気のせいってことにしておきましょう。姫路さん？継続は力なりですが、その力は相手を即死させる特別な力のように思えてならないのは、多分ここにいる姫路さんの料理を食べた人は全員思っていますよ？

そ、そんなことより！今日は夏休み初日とあって、アキさんの家にいつもの仲良しメンバーで集って遊びの計画を立てています。さて、まずは・・・・・・

「海ですか～♪実は自分初めてなので凄く楽しみです！」
「あっ、そうなんだ？良いところだよ～楽しみにしとくと良いよ」
「おい明久。海に行くと言っても、どこの海に行くんだ？」
「えっとね・・・・・確か、僕が小さな頃に行ったことのある場所だったと思うけど・・・・・・」
「海、ねぇ・・・・・・ウチはできれば山の方が嬉しかったんだけどね・・・・・・」
「美波、それアタシも同感よ」
「わ、私もです・・・・・・」
「えー？ボクは海とかプール大好きだけどなー」
「・・・・・私も嫌いじゃない」

そう、海に行く時の計画を立てています。一応、この人数ですし自

分が西岡さんに頼んでバスを出してもいいと言ったのですが・・・・・皆さんが何故か『それだけは勘弁してくれ』と言われたので、今回は玲さんと日高先生に頼むことにしました♪それにしても何でしょうかね？

「近くで祭なんかがあると良いのじゃが」
「あ。それいいね。どこかにないかなぁ・・・・・・・？」
「でしたら、調べて貰いましょうかね」
「・・・・・・・・・・・・・・水着に浴衣・・・・・・・・生きて帰って来られるか・・・・・・・」
「ふっふっふ。ムッツリーニ君？君には頑張ってもらうよ～♪」

あー・・・・・確かに大丈夫でしょうかね、こーさん。生きて帰って来れますでしょうか？何せ工藤さんがいますし？いや、工藤さんがいるからこそ大丈夫でしょうかね？何だかんだで工藤さんってこーさんを・・・・・・♪

Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！

「あ、ごめん。電話だ。・・・・・・あれ、姉さんだ？ちょっと外すね」
「おう。行ってこい」
「行ってらっしゃいです～♪」

と、アキさんが携帯電話を持ってリビングを出て行きます。そう言えば、最近玲さんと日高先生は随分と大人しいですが・・・・・

嵐の前の何とやらじゃないことを祈りましょうかね？

「海ですか～準備は大変ですけど、楽しみではありますね」
「ウチも今度こそきちんと水着を用意していかないとね」
「ボクも新しいの買ってきちゃおうかな～・・・・・ねっ☆ムッツリーニ君？」
「・・・・・・・・・・・・・微塵も興味はない（ダバダバ）」
「・・・・・・楽しみ。ね、雄二（おとーさん）」
「へいへい・・・・・・・・・！？待て翔子！そのルビは何だ！？」
「さて・・・・・・・今度こそ、アタシが造くんと秀吉の水着をっ！」
「ひ、ヒデさん！今度こそはまともな水着を買いに行きましょうね！？」
「そ、そうじゃの！これが終わり次第、急いで買い行こうぞ！男二人での！？」
「逃がさないわよ～？」

・・・・・・と、そんな感じで皆さんとワイワイ話していると。

「・・・・・造、ちょっと相談が」
「ふぇ？どうしまし・・・・・・！？あ、アキさん、どうしたんです！？顔真っ青ですよ！？」

アキさんが物凄く浮かない顔で自分を手招きしてきます。な、何事ですか！？とりあえず、自分もリビングから出てアキさんのもとへ向かうことに。

「アキさん？一体何が・・・・・・？」

「姉さんからの電話で、ね？今回の旅行がさ・・・・・・泊まりだって」
「・・・・・・・・・・・え？」
「あの姉さんと、日高先生が泊まりって・・・・・・もうすでに嫌な予感がするんだけど？」
「・・・・・・・・・・・・は？」

お泊まり、ですと・・・・・？ははは♪何でしょう。すっごく危険な香りがします。待って！？日高先生は仕事は・・・・・・ハッ！？そ、そう言えば最近『絶対海へ行ってやる・・・・・・仕事が何だっ！』って言ってたような気が！？

「・・・・・・で。どうする、造？」
「・・・・・・とりあえず、今から皆さんにこのことを伝えることと、」
「・・・・・・緊急作戦会議、だね？さあ、やろうか」

『セミたちが　忙(せわ)しく鳴く鳴く　夏休み』（ｂｙ造＆ａｍｐ；明久）

そして、自分たちも忙(せわ)しく泣く泣く『玲さん＆ａｍｐ；日高先生対策会議』を急いで始めることにしました。さてと。海、ですか・・・・・こーさんじゃないですが、自分たちって無事に生きて帰れるでしょうかね？

91時間目　その決着の後で・総集編～肝試し編終了！～（後書き）

ありがとうございました♪91時間目及び肝試し編、いかがだったでしょうか？

やっぱり出ました超☆展☆開♪作者は何をしているのでしょうね？以前書いた肝試しの裏側その？で雄二と学園長が言っていた存在が彼女、文月学園の召喚システムの《文》です。

人工知能を持ち、自分で考えることのできる彼女（？）造のことが大好きだそうです。書いた通り、見た目は造のそっくりさん。身体が半透明で、胸もありますが……（苦笑）てか、《文》ってネーミングは造が考えたそうですが、相変わらずのネーミングセンス（笑）

造を取り込もうとした時、この容姿になったそうです。この編の話はいつか書きたいと思います。それこそ番外編あたりでですね。いや、ホントすみません。相変わらず妙な展開を書くのが糖分です、はい。

予約投稿はここまでしか書いていません。……正直前の2話も含めて、まとめての更新の方が安心できたと思いますが……皆さんにゆっくり読んで貰いたくてこうすることにしました。って言っても連日更新予定ですので、あんまりゆっくりでもないかもですが。

書いていた通り初めての予約投稿なので不安ですが、また次回です！感想の返信は帰り次第急いで書きます。それこそいつ更新できるかわからない身ではありますが、これからもよろしくお願いします。読んでいただきありがとうございました！

番外編：アタシと見栄と弟たち～クラス交換パニック～前編（前書き）

皆さんお久しぶりです！予約更新が上手く行っていてとりあえずホッとしている糖分摂取魔です！

一応予約更新していたので、あんまり日にちは空いてないようですが、自分からしたら物凄く久しぶりな感覚が（汗）

そうそう、ある意味復活です♪詳しくは活動報告で書いています。心配して下さった皆さん、本当にありがとうございました！

ま、あんまり長々と前書きを書くのもアレですし、行きますか！

番外編：アタシと見栄と弟たち～クラス交換パニック～前編

「――――と言うわけで、Ａクラスを使って文月学園のプロモーションムービーを製作しようと思うんだよ。いいかい、高橋先生？」
「はい学園長。私や日高先生、遠藤先生に船越先生の意見としては造くんを推したい気持ちがあるのですが・・・・・『造を世間の目にタダで魅せるのは惜しい』と日高先生の意見もありましたので、学園長の仰せの通りにすることにしました」
「・・・・・アンタはどうして月野のことになるとそうなるんだい？それ以外なら本当に有能なんだがねぇ？」
まあ、そこは文月学園七不思議の一つでもあるわけで。

「まっ、いいさね。それでＡクラスの生徒たちのうちの何人かにも出演してもらおうと思うんだけど、どうだい？誰を出演させたらいいかねぇ？」
「そうですね・・・・・学年首席の霧島翔子さん、次席の久保利光君を中心に製作するのが妥当ではあるでしょうが」
「ん？何か問題でも？」
「私が言えたことではないですが、彼女らは少々愛想に欠けるところが」
「ふむ。それで？」
「そう考えると・・・・・成績優秀で勤勉、且つ明るい性格で私たち『造くんを愛でる会』のメンバーである――木下優子さんを中心に製作するのが宜しいかと思います」
「後半、とてつもなく不安にさせることを言ってくれたね。・・・・・他にはいないのかい？」
「いないこともありませんが、若干のリスクが伴いますね。例えば

工藤愛子さん。彼女も成績優秀で明るい性格の生徒なのですが・・・・・彼女を中心にする場合、流れによっては放送禁止用語の検閲やモザイク等の処理が必要になるかと」

「・・・・・・・・・・・・・・Aクラスも、バカばかりかい・・・・・・」

「ああ学園長。今のは私の冗談です」

「全く笑えないよっ！？」

まあ、強ち冗談ってわけではないのですがね？

「ただ、彼女は少々性に関して奔放なところがあります。勤勉な学び舎をイメージさせるには不適かと」

「・・・・・・・・・・・・・仕方ないね。だったら多少の不安は残るが、その木下優子って子を中心に作るよ。本人にこの話を伝えておいておくれ」

「わかりました。では早速」

「おっと、ちょいと待ちな。・・・・・・その子は歌も達者かい？」

「と、仰いますと？」

「うちの合唱部は人数が少ないだろう？出来れば校歌斉唱もその子を中心にAクラスの生徒と合唱部でやってもらいたいのさ」

「それはわかりませんが、恐らく彼女であれば問題ないでしょう。双子の木下秀吉君は演劇部でオペラをこなせるほどですので、姉である彼女も素質はあるかと」

「ほう。なら安心かね？」

「ええ。彼女は品行方正で見目麗しく、成績優秀で且つ社交性に富み・・・・・・そして造くんを輝かせることに関しては、私たち『造くんを愛でる会』の中でもトップクラスの実力者です♪彼女に任せれば問題なく進むでしょう」

「・・・・・・・・・・・・・」

「では、学園長。私はこのことを彼女に伝えてきますね。失礼します」

ガチャッ　パタン！

「・・・・・・アタシは余計に不安だよ。念のためだ。月野にも話をつけておくとしようかね」

高橋先生が後にした学園長室で、学園長の溜息一つ。今日も文月学園は平和です。

☆

「――――と言うわけですが、大丈夫ですか木下さん？」
「うーん・・・・・・・校歌をですか」
「あら？・・・・・・・ひょっとして何か不都合でもありますか？」
「いえ・・・・・・うーん、どうしましょうか」
「？？？よくわかりませんが、木下さんの都合が悪いようでしたら無理には・・・・・・」
「・・・・・・あっ、そうだ♪大丈夫です、高橋先生。任せてください」
「あら。そうですか？それではよろしくお願いしますね」
「はい！・・・・・・ふふっ。何せ、適役ですから♪」

「？？？」

☆

「――――と言うことなの。よろしくね、秀吉♪」
「どう言うことじゃ・・・・・・・？」
「だからね、お姉ちゃん今すっごく困っているの。秀吉ぃ、お願い力を貸して・・・・・・」
「いや、姉上。まず、どう言うわけか話してくれんことにはわからんぞい・・・・・・・？」

あらら。説明を省きすぎたかしらね？とりあえず、今日高橋先生に頼まれた概要を説明することに。

「なるほど・・・・・・学園の紹介で歌をのう。となると校歌でも歌うのかの？」
「ご名答♪」
「まあ、姉上は確かに歌だけは昔から苦手であったのう。造を除けば、姉上の唯一の弱点と言ってもいいものじゃな」

そうなのよね・・・・・・勉強もスポーツもある程度は優秀って言われてはいるけど、どうにも歌だけはアタシは駄目。一応声質はそんなに悪くないとは思うんだけど、どうにも音感が致命的に存在しないのよね。

「む？じゃったら高橋女史に頼まれたその場で断れば良かったのではないかの？」
「んー・・・・・・アタシも最初はそう思ったんだけど、先に『木下さんにしか頼めないんです』って言われちゃってね？先生困っていたみたいだし、どうにも断れなかったのよ」
「ふむふむ」
「それに・・・・・・正直この程度でギブアップなんて冗談じゃないわ」
「・・・・・・姉上も見栄っ張りじゃのう？」
否定はしないわ？まあ、その辺は木下の血みたいなものかしら？
「そこでワシと入れ替わると？」
「その通りよ♪理解が早くて助かるわ。そう言うわけで、秀吉、」
「却下じゃ」
あれ？
「どうしてよ？別にいいじゃない。確かアンタ明日は補習って言ってたでしょう？良かったじゃない、サボれるわよ？」
「・・・・・・別に、ワシはサボる気はないのう」
あら？随分真面目じゃない？・・・・・・ん？さては・・・・・・！
「それって・・・・・・造くんと一緒だから、って理由かしら？」
「・・・・・・・・・・・・何のことじゃ？」
「ふーん・・・・・・アンタ、大概ポーカーフェイスが上手いけど、

アタシには誤魔化せないわよ？・・・・・・よくよく考えたら、これって造くんと一緒にいられるチャンスか・・・・・・♪」
「あ、姉上・・・・・・？何を、」
「よしっ！明日の入れ替え、楽しみね♪んじゃ、秀吉。頑張ってね♪」
「なっ！？ま、待つのじゃ姉上！ワシはまだやるとは言っておらぬぞ！」
「ああ、安心して？一応どんなことがあるのかは、ちゃんと説明してあげるから」
「そう言うことではなく・・・・・・」
「そうそう・・・・・お姉ちゃんの言うことを聞いてくれないなら」
「（ゾクッ）っ！？」
「・・・・・お姉ちゃん、悲しみのあまり『うっかり』秀吉と造くんに秘蔵のコスチュームを着せて、これまた『うっかり』その写真をバラまいちゃうかも♪」
「・・・・・・・・・・・・」
「ああ、困ったわね。どうしましょう。どんなコスチュームがいいのかしら？」
「・・・・・・・・・・・・やらせて、いただくぞい・・・・・・」
「あら♪嬉しいわ！流石、アタシの弟ね。それじゃ、明日の段取りだけど・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・理不尽じゃ。造、明日はどうか無事でおってくれ」

『？？？あ、あれ？今ヒデさんの声が聞こえたような？』

そして翌日の放課後、周囲の目がないことを確認してから体育用具室に入ったアタシと秀吉は、素早くお互いの服を取り換えていた。

☆

「それにしても・・・・・・ホントアタシ達ってそっくりね。双子とはいえ二卵性なんだし、ここまで似ているなんてね」
「そうじゃの・・・・・・ここまで似ておらんかったら、クラス入れ替えなぞせんでよかったのにのう・・・・・・」
あらあら。秀吉は何だか落ち込んでいるわね。ま、流石に今回はアタシもやり過ぎだとは思うし、今度お礼はしましょうかね。

「まあ、今回は大目に見るがの。・・・・・・姉上よ、昨日打ち合わせた通り、くれぐれもクラスメイトとの下手な接触は内容に頼むぞい。万が一入れ替わっておるときに中身が女じゃとバレたら――」
「翌日からアンタは本物の女の子として見られるんだったわね。・・・・・・ホント、秀吉たちのクラスって面白いわよね～」
流石Fクラスね。正直侮れないと常々思うもの。

「それで・・・・・・姉上よ。再度確認じゃが、ワシと入れ替わって本当に良いのか？ひょっとしたらワシが余計なことをするかもし

れぬぞ？」

もう、またそれ？別にいいのに。秀吉も結構心配性ね？

「いいわよ。アンタなら上手く対処出来るでしょ？それにちょっとくらいポカやっても気にしないし」

「・・・・・信用されておるのは有難いがの。姉上、これを持っておいて欲しいのじゃ」

と、秀吉があるものを取り出してきた。？？？何これ？随分小さな機械ね。

「ねえ秀吉？これ何なの？」

「小型トランシーバーじゃ。ムッツリーニに頼んでの」

えっと、ムッツリーニって言うと・・・・・・

「ああ、土屋君ね。そうそう、彼に『いつも造くんと秀吉のグッズをありがとう』って言っておいてくれる？彼、ホントにいい仕事するわ」

「姉上よ。その発言について、今晩ゆっくり話し合おうぞ。・・・・・それは一旦置いておいてじゃな。一応問題はないと思うが、ワシらの間でトラブルや対処に困った時に使うことにしようぞ」

そう言ってアタシの手にそれを握らせる秀吉。やれやれ。ホントに心配性ね？

「はいはい。まあ、アタシは使うことはないとは思うけど何か困ったら遠慮なくそれを使いなさいな。それじゃ、そろそろ行きましょうかね。アタシは造くんとの補習を・・・・・じゃなくて、補習を楽しんでくるわ。秀吉も頑張ってね♪」

「・・・・・姉上よ。目的がすり替わっておるぞい？」

うふふ、気のせい気のせい♪さあ、早速行きましょうかね！

☆

『しまった！須川が窓を伝って隣の教室に逃げたぞ！』

『あのブタ野郎・・・・・！異端審問会の血の盟約に違反してDクラスの玉野さんにケータイの番号交換を迫っていたという噂は本当だったのか・・・・・！いいか！？　今より奴は会長ではなく反逆者だ！見つけ出して始末するんだ！』

『『『了解！指示を！』』』

『A～E部隊は奴を捕え次第異端審問にかけろ！携帯電話のメモリーの削除も忘れるな！番号交換に成功していた可能性も考えられる！F～G部隊はあらゆる手段を用いて奴の悪評を流せ！特にDクラスには念入りにだ！H部隊は日高先生、高橋先生、遠藤先生、船越先生の４人に『須川が造ちゃんに手を出した』と伝えろ！先生方の協力も得るんだ！』

『『『了解っ！』』』

教室の前に立つと、中から怒号の応酬が聞こえてきた。ちょっと教室を見てみると鞭や蝋燭を持った覆面武闘派宗教団体（？）が忙しなく駆け回っている。ふむ・・・・・・

「造くんのいる天国の教室に来たと思ったんだけど・・・・・・教室を間違えたかしら？」

天国と言うか、もう世紀末の教室に来た感じね。う～ん、補習前のハズだけどいいのかしら？確か秀吉は補習担当は西村先生って言ってたハズだけど・・・・・・大丈夫なのかしら、いろんな意味で。

と、そんなことを考えていると・・・・・・

「あ、おかえり秀吉」

「あら？木下君。どうしたんですか？そんなところでボーっとして？」

「アンタ優子に会いに行って来るって言ってたけど、ずいぶん遅かったわね？」

駆け回る覆面集団を苦笑いしながら、隅の方で見ている3人が話しかけてきた。

一人目は本当の学年次席の姫路瑞希。体調不良でFクラス入りして

しまったそうだけど、今はこのFクラスにも慣れているらしい。まあ、設備は造くんたちが勝ち取ってBクラス並みになっているし、瑞希自身がこのクラスを好いているそうなので、問題ないそうね。

二人目は帰国子女の島田美波。去年ドイツから日本に来たそうだけど、日常会話はペラペラな上数学の成績はBクラス並み。サバサバした性格でアタシも美波とは気が合うのよね。それに・・・・・・美波はアタシにとって色々とわかりあえる戦友(とも)なのよね。・・・・・・・胸とか。

最後に学年どころか学園を代表するバカとまで言われている吉井明久君。まあ、バカと言われているとはいえ、造くんや美波たちの話を聞く分にとても優しい人だそうだ。ちなみに美波と瑞希の想い人でもあるそうね。ふふっ♪罪作りな吉井君。

「って・・・・・・あ、あれ？なんだろ？」

と、その吉井君がアタシの顔を見て首を傾げる。

「？なに――――――ごとじゃ、明久？」

おっとっと。危ない危ない。『なによ？』と言いそうになるのを辛うじて取り繕う。今アタシは秀吉なのよね。気をつけましょう。

「？どうしたんです、明久君？」

「木下の顔に何かついているの？」

「あ、いや・・・・・・なんか秀吉、いつもと違う気がしてね・・・

・・・？いつもはポワポワな感じだけど、今はシャキっとしているような・・・・・・？」

・・・・・・あらあら。結構鋭いのかしら吉井君。これは話を変えないと怪しまれるかしら？

「そんなことより、補習はどうなったのじゃ？皆それどころではなさそうじゃが」

「あ、うん補習ならさっき鉄人がね？」

「アキ、西村先生でしょう？そうそう、このプリントをやっておけってさ」

そうやって美波がアタシ分の（と言うより秀吉のね）プリントを渡す。

「後で解説授業を行うそうです。えっと、それを聞いて皆さんが・・・・・・」

「なるほどのう。それでこやつらは自由に動き回っておるわけじゃな？」

わかりやすいわね。今はともかく、西村先生が戻ってきたらどうするつもりなのかしらね？

ハッ！？そうだ！ここに来た最大の目的の・・・・・・

「そう言えば造く――――――造はどうしたのじゃ？それに雄二やムッツリーニも」

造くんはどうしたのかしら?彼は今動いている集団に混ざることはまずあり得ないだろうし。

「あれ?雄二は霧島さんに連れられてどっかに行ったし、ムッツリーニはいつも通りどこかに撮りに行っているのはわかるけど・・・・・造ってどうしたんだっけ?」

「ん?そう言えばそうね?さっき西村先生と何か話していたのは覚えているけど?」

吉井君と美波も首を傾げる。造くん、どうしたのかしら。何か問題がなければいいのだけど。

「あ、月野君でしたら『ちょっと西村せんせのお手伝いに行ってきます♪』って言ってましたよ。すぐに戻るとは言ってましたが」

と、瑞希が教えてくれる。ああ、そっか。西村先生も紹介ムービーの準備をしているのでしょうね。それで造くんも。そうじゃなければ西村先生も少しの間とはいえ、この危険なクラスから眼を離す事はないと思うし、造くんも黙ってないでしょうし。

「それはそうと、やっぱり雰囲気だけじゃなくて声もちょっと高い気がするんだけど、もしかして風邪でも――」

『報告!新情報です!須川の悪評を流す為にF部隊がDクラスの玉野と接触したところ、彼女は須川には興味が無く、「それよりもア

キちゃんについて教えてほしい」と繰り返していたとのこと！繰り返す！Ｄクラスの玉野美紀は吉井明久に興味有り！Ｄクラスの玉野美紀は吉井明久に興味有り！』

「「アキ（明久君）っ！！逃げてっ！！」」

「ゴメン、二人ともっ！さらばだっ！」

報告を聞いた瞬間、美波と瑞希は素晴らしい連携で扉を開けて吉井君の退路を作り、吉井君は脱兎の如く駆け出した。

『あのヤロ、また姫路と島田を味方につけやがって・・・・・』
『逃がすな！予備戦力で追撃隊を組織しろ！これ以上ヤツの横行を許すな！』
『だが待て！玉野はアキちゃんと言っていたらしいじゃないか！正直、吉井には虫酸が走るが、アキちゃんなら俺も興味がある！』
『実は俺もだ！』

「まっ、待って下さい！明久君をいじめちゃ駄目です！」
「そうよアンタら！待ちなさいっ！そして、アキちゃんについて今妙なことを言ったバカ共、とりあえず土下座しなさいっ！」

そして、退路を作った二人も続いて教室から出る。何と言うか・・・・・慣れているわね。と言うか、あの成績優秀な模範生なハズの瑞希まで出て行くなんて、恋する乙女は凄いわ。

ｐｉｐｉ！　ｐｉｐｉ！

と、そんなことを考えていると秀吉から受け取ったトランシーバーから通信が。ん？何かトラブルかしら？とりあえず誰もいないところにでも行きましょうか・・・・・と、思ったけど、すでに教室にはアタシだけしかいないようね。あらあら♪逆に都合がいいわね。

さて、何かしらね？早く出ましょうか。

番外編：アタシと見栄と弟たち～クラス交換パニック～前編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

今回のお話は、原作とちょっと違い秀吉が優子さんに対してトランシーバーを持たせるという形にしました。まあ、ウチの作品の優子さんは秀吉に対して怒ることが減りましたし、暴力もしないのでどうしようかと悩んで考えた結果がコレです。

まあ、これからどうなるかは読んでみておいてくださいね。それから……ちょっと皆さんに戻ったばかりで急な話なんですが、アンケートを取りたいのですが良いですか？

実はムッツリーニと工藤さんのイベントをそろそろ入れたいのですが（ゴメンよ突然。でも自分はムッツリーニと工藤さんはお似合いだと思うんだ）、そのイベント次第で工藤さんのムッツリーニへの呼び方を変えたいなと思っています。ですが……作者は造並みにネーミングセンスがないのでどうしようかなと（汗）

とりあえず候補として

？こーたくん　？こうっち　？こーちゃん　？そのままムッツリーニ　？本名　？その他

……くらいは考えています。他に何かあればよろしくです。一応来週まで様子を見て、皆さんの一番多かった意見を入れようかなと。……なければネーミングセンスが欠片もない作者の名前になりますが（汗）

戻ってきたばかりなのに変なこと聞いてすみません。読んでい

ただきありがとうございました！また次回！次回は多分明日か明後日更新です！

番外編：アタシと見栄と弟たち～クラス交換パニック～後編（前書き）

皆さんこんにちわ。糖分摂取魔です。毎度のことながら更新時間が不確定で、ホントすみません（汗）

いや、パソコン使える時に使いたいんですよね。じゃないと、いつ更新できるかわかりませんし？まあ、今日は今朝から使いまくっていますが♪

あれ？勉強は？なんて聞かないでね☆さてさて、行きましょう！後編スタート♪

番外編：アタシと見栄と弟たち～クラス交換パニック～後編

秀吉に渡されたトランシーバーから通信が。さてさて。一体どうしたのかしらね。

ｐｉ！

「もしもし、秀吉？どうしたのかしら？もしかしてトラブル？」
『う、うむ。すまぬ姉上。トラブルと言うわけではないのじゃが、少々姉上のことで聞きたい事があっての』

とりあえず出てみると、少しだけ慌てているような秀吉の声が。あら？それにしても・・・・・アタシが秀吉のことを大抵わかるのと同じように、秀吉もアタシのことは大抵わかっていると思ったけど一体何を聞きたいのかしら？

「それで？聞きたいことって？」
『それがの、先ほどから姉上の級友たちと他愛のない雑談をしておるのじゃが・・・・・その、姉上の好みを聞かれてのう』

ああ、なるほどね？まあ、『好きな人の話』なんて女の子の会話の中じゃ最早日常会話よね？それにしても・・・・・アタシの好きな人？決まっているじゃないの。

『一先ず、トイレに行く振りをして今通信しておるのじゃが・・・・

・・何と答えれば良いかの？』
「アンタ・・・・・全くそんなの適当に答えればいいのに。まあ、強いて言うならこう言っておきなさいな」
『？？？何じゃ？』
「アタシが好きなのは――――造くんと秀吉って」
『・・・・・・・・・・・・姉上よ。お主、いつもこんなことを言っておるのか？』

失礼ね。いつもは言わなくても、弟たちを愛しているってオーラを出しているから言わなくてもいいのよ？とりあえず『まあ、わかったのじゃ・・・・・・姉上もしっかりの』と、言って秀吉は通信を終えた。

さて・・・・・どうしましょうかね？誰もいないのは、入れ替わっている事がバレなくていいんだけど・・・・・こうも誰もいないと暇ね。ああ、造くんと補習がしたいわ。とりあえず、渡されたプリントを適当に解いていくことに。まあ、それくらいしかすることないから仕方ないわね。

☆

ｐｉｐｉ！　ｐｉｐｉ！

あら？また問題発生かしら？プリントを一通り解き終わると同時に、またもやトランシーバーから通信が。今度は何かしらね？

「はいはい。今度はどうしたの?秀吉?」
『あ、姉上!け、結構マズイのじゃが・・・・・・』
あらら。どうやらかなり焦っている秀吉の声が聞こえてくる。秀吉がマズイって言うことは、本当にマズイ状況ってことでしょうかね。
「それで?状況は?」
『そ、それがの・・・・・・姉上の、その・・・・・・し、下着の事なのじゃが』
「!?ひ、秀吉・・・・・・アンタまさか」
まさか・・・・・・そんな!?
「アンタ・・・・・・とうとうお姉ちゃんをそんな目で?・・・・・・わかったわ。今夜そのことで話し合いましょうね?」
『・・・・・・・・・・・・待つのじゃ姉上。お主、何かとんでもない誤解をしておらぬか?』
「そんなことはないわ・・・・・・いいのよ秀吉。絶対にアンタとの関係は間違いなんて言わせないわ」
『全て間違っておるわ!いいからワシの話を聞くのじゃ!』
「もう・・・・・・半分冗談よ。それで?」
『残りの半分は何じゃ!?ま、まあよい。それがの、また姉上の級友との雑談中の話なのじゃが・・・・・・『夜寝る時って下着は何を着ているの?』と聞かれてのう。どうすればよいかの?』
なるほどなるほど。まあ、確かに秀吉がそれを答えるのは、少しお

もしろ・・・・・・コホン、可愛そうね。うーん、そうね・・・・・・

「・・・・・・ふむ。よし、秀吉。また聞かれたらこう答えなさいな」

『？？？今度は何じゃ？』

「アタシが着ているのは――――――造くんと秀吉って」

『何処のマリリンじゃ！？と言うか、ワシらを着てどうするのじゃ！？』

「ウフフ♪」

『姉上っ！？お主、本気でそんなことを普段から言っておるのではないのか！？』

「それじゃ、頑張ってね♪」

『あねう――――――』　ｐｉ♪

☆

ｐｉｐｉ！　ｐｉｐｉ！

さっきの通信からしばらくして、またもや秀吉から通信が。うーん、時間的にもそろそろ紹介ムービーを撮る時間だし、これが最後の通信になるかしらね？

ｐｉ！

「はいはい。秀吉の大好きなお姉ちゃんよ♪」　ｐｉ！

・・・・・・あら？切れたわね。

ｐｉｐｉｐｉ！　ｐｉｐｉｐｉ！

ｐｉ！

「どうしたの、秀吉？もしかしてお姉ちゃんの声が聞きたくて掛けたのかしら？」　ｐｉ！

・・・・・・・・・・・・ふむ。そう来るか。だったら♪

ｐｉｐｉｐｉ！　ｐｉｐｉｐｉ！

ｐｉ！

「それとも・・・・・・造くんの声でも聞きたくなった？」

『姉上っ！お主、ワシをからかいすぎじゃぞ！？』

うふふ♪釣れた釣れた♪

「いいじゃない。今アタシ結構暇なのよ。それで？今度は何よ？」
『・・・・・ハァ。それがの、今度は姉上に告白してきた生徒がおるのじゃが』
「今すぐ丁重に、そして全力で断りなさいな♪」
『・・・・・何の悩みも憂いも考えも無くかの？相手が誰かも聞いておらんではないか』

まあ、こういうのはその気がなければ早めに断るのが一番良い。相手にとってもね。

『まあ、そう言うと思って先に断っておいたがの。姉上、Ｆクラスの横溝を知っておるか？』
「横溝？いいえ、知らな――――――くはないわね。確か先週かしら？アンタにデートのお誘いをして断られた子でしょ？」
『ＨＡＨＡＨＡ何のことじゃ？ワシにはさっぱりじゃ。と言うか・・・・姉上よ、お主何処まで知っておる！？』

弟の事なら何処までも♪

「それで？ひょっとしてその子が今度はアタシに告白してきたってこと？」
『ご名答じゃ。全く、何を考えておるのやら・・・・・それでの、横溝が姉上の好みをしつこく聞いてきてのう。『頑張って好みの男になる。タイプを教えてほしい』と言うておるのじゃが』

やれやれ・・・・・その横溝君は本当にわかっていないようね。仕方ないわ。ここはハッキリとさせておきましょうね。

「秀吉、わかっていると思うけど横溝君にこう言いなさいな」
『・・・・・・・・・・大体先が読める気がするが、何じゃ？』
「アタシのタイプは――――――造くんと秀吉って」
『またか！？姉上の頭の中は造とワシしかおらぬのか！？』

わかっているじゃない。そこに師匠を入れれば完璧よ♪

「それじゃ、そのように言っておきなさい。そろそろ紹介ビデオを取る時間だと思うし、手短に話しておきなさいね」
『あ、あねう――――――』　ｐｉ♪

と、通信と切ると同時に・・・・・・

「あ、秀吉。ただいま～」
「ただいまです、木下君」
「あらら。アンタ一人ね」

吉井君と瑞希と美波が帰って来た。あらら、ようやくね？

「うむ。おかえりなのじゃ。明久、それに姫路に島田よ。もう追いかけられなくて良いのかの？」
「うん。姫路さんと美波がみんなを説得してくれたし・・・・・・」
「それに皆さん、何だか別の要件が出来たって言ってました」
「まっ、大方別の獲物が出来たとかじゃないの？」

ああ、それ多分横溝君ね。それにしても3人ともお疲れ様ね。普段からこういうことしているのかしら？

「それで、僕たち４人で戻って来たってことだよ」
「そうかそうか・・・・・む？４人じゃと？」
「ん？うん。僕と姫路さんと美波と・・・・・・」

そう言って吉井君の指差す先には・・・・・・

「やれやれ。皆さん『自習していろ』って西村せんせの言うことを全く聞いていないんですから」

・・・・・アタシの可愛いもう一人の造（おとうと）くんの姿が。もう、待ちくたびれたわよ♪

「おお、造か。おかえりじゃ」
「どもです♪ただいまですよ、ヒデさ・・・・・・・・・・・・ん？」

アタシの呼びかけに反応して、造くんが笑顔を向け――――――笑顔を向けたまま、固まった。あら？これはもしかして・・・・・・？

「ん？どしたの造？」
「月野君？どうして木下君を見たまま動かないんですか？」
「あら？本当ね。月野、何？木下の顔に何か付いているの？」

「え、えっと。一体何をしているんですか？優ね・・・・・・ムグゥ！？」

うふふ。とりあえず間髪入れずに造くんの口を塞ぎ捕獲することに。

「おお、そうじゃった！ワシと造は西村先生に頼まれごとをされておったのじゃ。明久よ。ワシらはそう言うわけでちょっと行ってくるからの」

「え？あ、うん？行ってらっしゃい？」

「ムグウウウウウウウウ！？（アキさんっ！？へるぷですよぅ！？）」

とりあえず教室を出て、造くんを拉致することに。どうでもいいけど造くんってやっぱり小さくて軽いわね。本当に可愛いんだから♪

☆

とりあえずは造くんと一緒に、誰もいない空き教室に入ることに。それにしても、造くんのこの反応はやっぱり・・・・・・

「・・・・・プハッ！？な、何するんですか、“優姉さん”！？てか、寧ろ“ヒデさんの格好”なんかして何してんですか！？」

「あらあらあら。やっぱり造くんは、アタシと秀吉の違いってわかっちゃうんだ。凄いわね」

なんせ親でさえたまに間違えるアタシと秀吉の入れ替わりを、一瞬で見破るなんて♪

「??何言っているんですか?そんなの当たり前でしょ?優姉さんは優姉さんで、ヒデさんはヒデさん。確かによく似ていらっしゃいますが、やっぱりその辺はわかりますよ」

と、さも当たり前のように造くんが言ってくる。ふふっ♪ホントに不思議な子よね。

「さて・・・・・それで?どう言うわけか説明して貰いますよ?」
「うーん・・・・・そうね、とりあえず、説明する為にも移動しましょう。移動しながら話すわね」
「えっと?移動するのは構いませんが、何処にですか?」
「決まっているわ・・・・・もう一人の弟、秀吉のところによ?」

☆

「な、なるほど・・・・・大体は把握しました。それにしても、それはまた随分思い切りましたね?」

撮影があるAクラスの教室に向かいながら造くんに大まかに今回のことを話したけど、相変わらず理解が早くて助かるわね。

「ま、そう言うわけね。・・・・・・あら、ちょうど校歌斉唱みたい」

しばらく歩くこと少々。不意に何かの旋律が聞こえてきた。耳を澄ませて聞くと、Aクラスに置かれたグランドピアノが伴奏を奏で、二十人程度の歌声がそのメロディの上に重なっていた。校歌だからアルトやテナーといった区分はなく、あくまでも主旋律だけの簡単な曲。だけど・・・・・・その揃えられた歌声は、今日のような澄み切った夏の空を彷彿させるような爽やかさと、浮かぶ入道雲の壮大さを仰せ持つような、そんな素晴らしいもののようだった。

「んみゅ・・・・・・優姉さん、ヒデさん中央で歌ってますよ」

近づいてみると、秀吉は一番目立つセンターで堂々とその歌声を披露している。

「うん・・・・・・いい顔してるじゃない」

我が弟ながらいい顔をしていると思う。いい顔って言うのは、顔が綺麗って言うことじゃない。人は自分の本当にやりたいことを一生懸命やっている時の不思議な魅力に溢れている。その時に見せるいい顔だ。今の秀吉はその魅力溢れたいい顔をしているってことね。ちょっぴり悔しくて・・・・・・羨ましいかな。

「・・・・・・優姉さん？どうしました？」

と、アタシの顔を見て不思議そうに見つめる造くん。あらら、顔に出てたかしらね。

「ん・・・・・ちょっぴり羨ましいかなって思ってね。今の秀吉、凄く綺麗じゃない？」

「そうですね。輝いているって感じですかね？」

「そうよね。アタシもそう見えるわ。・・・・・ねえ、造くん？今回のアタシを見てどう思った？」

・・・・・少しだけ気になって造くんに聞いてみる。正直に言うと、造くんにこのことを聞くのは・・・・・怖いけど。

「？？？どうって・・・・・何がですか？」

「その、ね・・・・・失望したかしら？」

・・・・・音痴ってこと。それを隠すために見栄を張ってこんなことをしたこと。それに、秀吉と比べて劣等感を抱いたこと。それを全部ひっくるめて・・・・・失望させちゃったかしら。

正直誰にどう思われても構わないけど・・・・・造くんにだけはその、見栄を張りたかったのも事実。失望されるのは・・・・・怖いわね。

「・・・・・ふぇ？」

「・・・・・えっ？」

だから、造くんがぽけっとした顔をしてアタシを見たときは、アタ

シも思わず同じ顔をしてしまった。

「・・・・・えっと、すみません?今回の件で、どの辺が自分が失望するんでしょうか?」

「・・・・・その、見栄を張ったこと・・・・・かしら?」

普通そうよね?あらら?造くんって本当に時々、どう言う風に考えているのかが見えなくなる時があるわね。

「・・・・・・・・・・あ、ああ!なるほど、そういうことですか。んー、失望ですか。・・・・・失望、ねえ?」

首を傾げながら、ゆっくりと考えている様子の造くん。あら?どうやらアタシが考えていたような反応でないようだけど・・・・・?

「・・・・・ねえ、優姉さん?優姉さんは『見栄を張ること』を悪いことだと考えていませんか?」

「・・・・・・え?」

突然の造くんの問いかけ。『見栄を張ること』ね・・・・・どうだろ。

「・・・・・少なくとも、良いことじゃないでしょう?見栄を張ったアタシが言えることじゃないけど、ね」

「・・・・・なるほどなるほど。あのね、優姉さん。これはあく

まで自分の考えなんですが」

と、造くんはゆっくりと笑顔でアタシに話しかける。

「自分は『見栄を張ること』は悪いことではないと思うんです。確かに見栄を張り過ぎるのは良くないことかもしれませんし、今回の件に関しては優姉さんがご自身で仰られた通り誉められたことではないと思います」

そう。それはアタシもよくわかっている。でも、造くんは頭を振って続ける。

「でも・・・・・・でもですね、『見栄を張る』ってことは『自分を高めようとする』ことに繋がるのではないかなって思うんです」

「・・・・・・えっ？」

「そうですね・・・・・・今回の件で例えれば優姉さんがご自身のことを『こうありたい』見栄を張ったわけですよね？でしたら・・・・・『こうありたい』自分を作ったわけですし、今度は見栄ではなく本当のご自身になる為に努力すればいいのではないでしょうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

そんなこと・・・・・・考えたこともなかったわね。そうか・・・・・アタシは秀吉が輝いて見えたように・・・・・・あんな風になりたかったのかな？

「『見栄を張る』こと自体はそう珍しいことじゃありませんし、自

分だって見栄くらい張りますよ?大事なのはその後。自分がどうするのか、どうなればよいのかを考えることかなって、そう思うんです」

「・・・・・なるほど、ね」

「まあ、これはあくまで自分の考えですし、優姉さんがどう思われるかはわかりません。ですが優姉さん。今回の件で自分が優姉さんに失望するなんてありえませんし、寧ろ優姉さんも頑張っているんだって思えるんですよ♪」

「・・・・・造くん」

この子は・・・・・本当に、

「ま、そう深く考えなくていいんではないでしょうか?あやや、そろそろ紹介ビデオの撮影終わるみたいですよ?教室に戻りましょうね♪」

本当に、とても不思議な子。本当にどうしようもなく優しくて、アタシたちのすべてを包み込み赦(ゆる)してくれる。そういう子。

「・・・・・あっ、そうだ!優姉さん、今日のヒデさんへのお詫びってことと優姉さんの苦手科目の克服も兼ねて・・・・・」

そして、造くんは最高の笑顔でこう続ける。

「ヒデさんを連れて・・・・・カラオケにでも行きましょうか♪」

「・・・・・ふふっ、そうね。しっかり歌の勉強もしないとね♪」

・・・・・・・・・・・・・・今日アタシは造くんのことが今までよりももっと愛おしく、もっと大切になった。それがそんなクラス交換(アタシ)の一日パニックだった。

番外編：アタシと見栄と弟たち～クラス交換パニック～後編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

今回は前半は原作の優子さんと秀吉のやりとりを、ある意味入れ替えました。ホント優子さんは強くなりましたね。別の意味で。後半は相変わらずの造の洗脳術（ちょっ！？どう言う意味ですか！？ｂｙ造）こうして造は無意識に人々を堕とそうとするんですよ。皆さん気をつけましょうね。

……イイハナシカナー？と思われた方。あれ？オチはどこ？って思われた方。安心してください。次回の番外編で全力の今回のオチをつけています♪ん？造を弄らないと思った？残念、弄らないと面白くないですからね！（作者が！）

さて、工藤さんのムッツリーニへの愛称のアンケートの途中経過ですが……

実は二人の方が『こうくん』はどうだろうか？とのアドバイスをしてくださりました♪ありがたいです♪と言うわけで、？『こうくん』もアンケートに入れますね。

てなわけで……今の集計（？）は、

？こーたくん　４票　？ムッツリーニ　１票　？本名の『康太』２票　？こうくん　２票

……こんな感じですね。そうそう。言い忘れていて申し訳ないのですが、複数回答ＯＫです。ただ同じ名前は一回だけでお願いします。とりあえず、うーん……金曜日くらいまで様子を見ます。そこで決めますね。

ではまた次回！次回は書いた通り、このお話のオチ兼文月新聞を書きますね♪読んでいただきありがとうございました！では明日、時間があれば更新です！

番外編：文月新聞～夏の特別号～【芸能】【料理】【健康】（前書き）

皆さんどうもです♪糖分摂取魔ですよ～♪皆さん宿題や課題は……すんません、言いたくないですよね。自分も忘れたいです。

そ、そんなことより（↑現実逃避）今回のお話は前回のある意味続きのお話でもあります。簡単に言えば前回のオチ話です。流れとしては、前話⇒【芸能】と【料理】⇒【健康】……的な流れかな？

とりあえず行くよ！ではでは、今回もよろしくです♪

番外編：文月新聞～夏の特別号～【芸能】【料理】【健康】

優子さんと秀吉のクラス替えパニックから翌日

～文月新聞～　【芸能】欄より抜粋

『K下Y子さんの輝かしき日常　～アタシの全ては弟たちの為に♪～』

昨日紹介ムービーにて、素晴らしい歌声を披露してくれた2－A所属のK下Y子さん。【稀代の美少女：H吉さん】や【学園の永遠の癒しキャラ：Tちゃん】のお姉さんとして有名な彼女だが、ご自身も成績優秀、スポーツ万能。明るい性格で前記した通り歌声も素晴らしく校内の彼女の人気が高いことは最早言うまでもないことだろう。今回はそんな彼女に独占インタビューを試みてみた。

■

記者A

『校内の人気も高いY子さんですが・・・・・・ズバリ、好きな人は？』

Y子さん

『そんなの決まっているでしょう？アタシが好きなのは――――――造くん（おとうとたち）と秀吉よ』

記者A
『なるほど・・・・・・ちなみに、その弟たちの魅力を一言で言えば？』

Y子さん
『そうね・・・・・・話すと長くなるけど、一言で言えば『全て』かしら？』

記者B
『・・・・・・・・・・・・ちなみに夜寝るときの下着は？』

記者A
『おいそこ。何妙な質問している？・・・・・と言うか、あれ？』

記者B
『・・・・・・・・・・・・そんなことより、寝るときの下着は？』

Y子さん
『しつこいわね？ま、いいわ。トクベツに答えてあげる♪アタシが着ているのは――――造（おとうとたち）くんと秀吉よ♪』

記者A
『さ、流石はY子さん・・・・・！こんなセクハラ発言も物ともせずに、しかもなんて大胆な！』

記者B
『・・・・・・・・・・・・（ボトボトボトボト）』

K藤さん
『あれ～？ムッツリーニ君？Aクラスで何してんのかな～？』

記者B
『・・・・・・・・・・・・退散っ！』

K藤さん
『ん～何かよくわかんないけど・・・・・・待て～♪』

記者A
『あっ！ちょっと！？・・・・・ねえ、今のってうちの記者じゃないわよね？』

■

と、このようなセクハラ発言にも怖気づかずに、Y子さんは余裕の対応を魅せてくれた。Y子さんが話してくれた通り彼女の原動力となっているのはやはり、前記した【H吉さん】と【Tちゃん】となっているようだ。

【彼女をよく知る人々へのインタビュー】

『・・・・・Y子流石。私たちも今夜は一緒に寝よう、Y二♪』
『どうしてそうなるっ！？嫌なこった！』
『・・・・・嫌ならTも一緒に。親子3人川の字で』
『だからどうしてそうなるんだっ！？』

ちなみに余談ではあるが、彼女は『Tくんを愛でる会』のメンバーでもあり、そこでも日々素晴らしい成績を収めているとのこと。

【彼女をよく知る『Tくんを愛でる会』の皆さんへのインタビュー】

『ええ。彼女は本当にTくんを輝かせることに関しては、天性の才能を持っています。私たち教師も彼女を見習い、Tくんを輝かせるべく今日もTくんのコスプ――――補習をしますね♪』

文月学園の教師である先生方にも、この発言からY子さんは強く信頼されていることがわかる。このように、彼女は部活動でも日々努力なさっているようだ。

■

と、彼女への取材中にハプニングが。突然『き、K下さんっ！』と彼女を呼ぶ謎の声。彼女は優雅に席を外しその声の主の元へと歩いて行った。我々はその声を不審に思い、Y子さんの後をつけてみると、

『じ、実は僕、K下さんのことが好きなんですっ！付き合ってくださいっ！』

何と取材中にまさかの告白が。しかし、そこはY子さん。彼の告白

をやんわりと断り我々の元へ戻ろうとする。それでも諦めきれないのか、彼が『好きなタイプは!?』としつこく聞くと、

『アタシのタイプは――――――造くんと秀吉よ。これがアタシの全てなの♪』

とのこと。これを聞いていたAクラスの生徒たちは男女問わずに歓声をあげ、『K下さん、カッコいい・・・・・・』『何て美しい考えなんだ・・・・・』と口々に話していたと言う。これによりY子さんのカリスマ性がさらに上がったことは、我々が詳しく書くまでもないだろう。ちなみにこの後、謎の覆面集団が告白した彼を捕獲した。折角なので最後に彼らにも話を聞いてみることに。

【謎の覆面集団のお一人へのインタビュー】

『TちゃんとH吉とK下さんの姉妹丼だと!?許せるっ!』

■

「・・・・・・・・・・・・・なんです、コレ?」

「・・・・・・・・・・・・・恐れていたことが、現実となったのう」

「???どうしたの二人とも?良く書かれているじゃない♪」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「まあ、唯一不満があるとすれば・・・・・・この造くんと秀吉の写真かしら。折角良い写りなのにモザイクなんか入っちゃって・・・・・・勿体ないわ」

「「そう言うことじゃないでしょう（じゃろう）！？」」

「うーん・・・・・・撮ったの多分土屋君だろうし、また頼むとしましょうね♪」

「「優姉さん（姉上）っ！！」」

今日も文月学園は平和です。

☆

～文月新聞～　【料理】欄より抜粋

姫路瑞希の簡単三分クッキング

『今日は“大好きなあの人たちの舌もとろけちゃう特製☆肉じゃが”を作っちゃいます♪』

【材料～死人（訂正）４人前～】

・じゃがいも　４個
・牛肉　２００グラム
・たまねぎ　１個
・しょうゆ　大さじ４
・砂糖　大さじ３
・食塩　小さじ１
・硫酸　４５ｃｃ
・硝酸カリウム　適量　※１
・クロロ酢酸　お好み　※２

※１　防腐剤によく使われているので、入れたら美味しさ長持ち☆

※２　隠し味に酸味のある酢酸を少し。クロロ酢酸のγ型は融点が５３℃だから、冷ましたら固形化します。酸っぱいのが嫌いな人には冷ましてから結晶を取り除いてあげたらオッケー♪相手の好みに合わせた気遣いでポイントアップかも？

【作り方】

？たまねぎ・じゃがいもの皮を剥き、それぞれ適当に切り分けます。

？お鍋に油をひいて、先にたまねぎを少し炒めます。

？たまねぎが少し透明になったら、今度は切り分けた牛肉とじゃがいもを加えてさらに炒めます。

？程よく炒めたら、更にお水・お砂糖・しょうゆ・お塩を入れて煮

込みます。

?全体的に煮汁の色が均一になったら硫酸４５ｃｃを加えます。

ワンポイント　その?！　じゃがいもに含まれるデンプン　（Ｃ６Ｈ１００５）ｎ　は硫酸を加えて煮込むと加水分解を起こして単糖類になって甘みを増すのでオススメ☆

?一煮立ちさせたら一旦火を止めて、クロロ酢酸と硝酸カリウムを入れてお鍋をかき混ぜてから、もう一度強火で煮込みましょう。

ワンポイント　その?！　この時、材料の関係でお鍋の金属部分が溶け始めてしまいます。お鍋の底に穴が開くと煮汁がなくなっちゃうので、その前に手早く調理を済ませてね♪

?火を止めて、お鍋に残った溶液を専門業者に連絡して処分してもらったら完成です。そうそう、絶対に台所に流してはダメですよ。お料理を作る人の最低限のマナーです。この肉じゃがで、大好きなあの人たちの舌もハートもトロトロ間違いなし☆

■

「さあ、召し上がれ♪」

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

「あら?皆さんどうしたんですか?」

「な、何でもないよ!?（さて、皆どうしようか?今日はいつもの生贄(ゆうじ)がいないよ?）」
「お、おいしそうねー（棒）（おまけに土屋もいないわね・・・・・・ウチ、正直怖いわ）」
「つ、造よ、見た目は凄くうまそうじゃな!（見た目だけじゃが・・・・・中身は聞きとうなかったぞい）」
「ホ、ホントですねー（棒）（今のレシピ・・・・・・塩酸と硝酸が途中で出来ている上に、その生成された塩酸と硝酸が反応して・・・・・王水が出来ることになりますよ?上手いこと分量もあってますし）」
「さて、それそろ食べる準備でもするかな!（造、王水って?）」
「そうですね、皆さん!（人体に対してとてつもなく強力且つ有害な酸です。多くの金属を溶かすんですよ・・・・・・舌どころか、骨髄すらやられるでしょうね・・・・・・）」

「「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」」

「さあ、召し上がれ♪」

■

～文月新聞～　【健康】欄より抜粋

『夏の過ごし方　～楽しい夏を過ごすために～』

うだれるような暑さと灼けるような日差し。その為か最近保健室に運ばれる人が後を絶ちません。本日は養護教師の日高先生に“夏の過ごし方”について取材しました。

日高先生。まず、何について気をつければいいでしょうか？

『そうさね・・・・・まずは、何と言っても熱中症や熱射病に気をつけな。暑さで体力が無くなっている時が一番ヤバイ。アンタらも無理しちゃいけないよ～？失った水分はこまめに取ること。スポーツドリンクが一番良い。ありゃ、汗で流して失ったモンが大抵入っているからね』

なるほどなるほど。他にはありますか？

『ああ。例えば・・・・・夏バテなんかかね。あれもバカにしちゃいけないよ？結構夏バテによる頭痛やめまいでアタシの城（ほけんしつ）を利用している奴らも多いかんね。夏バテは冷房を入れたことによる、外気との急激な温度差によるものが原因って言われてる。クーラーなんか付けた時は外気との差を5℃程度にするのがベストさね』

勉強になります。それで、他に日高先生ご自身が気を付けていることはありますか？

『うーん・・・・・そうさね。アタシは造のメシを作っている身だが、やっぱりこの時期は食中毒に気を付けているよ。8月が食中毒のピークって言われているからね。ん?ああ、そりゃ造が大事さね。もし万が一にでもあの子に何かあればアタシは生きていける自信がないからねえ・・・・・造の健康が、そして造の幸せが一番さ』

そうですか。本日はありがとうございました!お仕事頑張ってください!

『おー、お前らも何かあればすぐにここに来るといい。・・・・・・あ、そう言えば』

???あれ、先生?もしかしてまだ何かありますか?

『あー・・・・・そうさね。最近ね、造たちがよく倒れてここに運ばれるのさ。昼飯時を過ぎたあたりが多いから、てっきり食あたりか食中毒辺りかと思ったんだが、どうにも原因不明なんだよ・・・・・一応各機関に問い合わせたり、アタシも全力で調べてはいるんだがねぇ』

原因不明ですか・・・・・それは怖いですね。

『そうだね。毎度毎度運ばれてきているからか、特にアキっちと造

は一応耐性はついてはいるようだが・・・・・アタシは本当に心配でね。今度本人たちに詳しく聞こうとは思っているが、アイツら何かひた隠しにしてんだよなぁ・・・・・・』

Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！

『おっと、ゴメンよ？・・・・・おう、ヒデっちどうした？・・・・・何っ！？また造とアキっちが倒れた！？うん、うん。・・・・・屋上な？美波っちが介抱してくれてんのか。うん、助かる！頼んだぜ！アタシもすぐ行くかんな！――――ワリィ、ちょいと急用さね！また今度な！』

・・・・・そう言って日高先生は保健室を後にしました。どうやらその後、保健室に２名ほど倒れた生徒が運ばれた模様。やはり夏は健康に気をつけましょうね。

『『に・・・・・・肉じゃが、怖い（ガクッ）』』

『あ、アキいいいいいいいいいいいい！』
『つ、造うううううううううううう！』

☆

「逝ったか・・・・・・造、明久。お前ら無茶しやがって」

「・・・・・・・・・・・・合掌」
「あれ?坂本君に土屋君。どうしたんですか?」
「ひ、姫路!?あっ、いや何でもないぞ?」
「・・・・・・・・・・・・・・・（コクコクッ）」
「???そうですか?・・・・・・・あっ!そうそう、お二人に渡しておこうと思ってたものが」

「「っ!?」」

「えっとですね・・・・・・コレです!『夏は水分補給が大切』って言われてますし、明久君が『雄二とムッツリーニに是非飲ませてあげてね☆』って言ってました!と言うわけで、お二人とも私の特製ジュースをどうぞ!」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

「さあ、召し上がれ♪」

番外編：文月新聞～夏の特別号～【芸能】【料理】【健康】（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

前話のオチ話の【芸能】欄。優子さんの台詞と、前回入れ替わっていた秀吉の華麗な演技によりこんな結果になりました♪優子さんのカリスマ性の向上はもはや留まる事を知りません。

そして【料理】に【健康】欄。それは皆をあの世へといざなう魔法の言葉……姫路さんの『召し上がれ♪』。何度か書きましたが、姫路さんの料理は絶対に真似しないでください。あと、口に含んでもいけません。あの子たちは特殊な訓練を受けています。

今回はこんな感じですね。さて、次回ですが……あの、その……今度は美波のお話を更新予定です。……いや、『またか！？』とか『出たよ……美波びいき』とか言われるのはわかっておりますよ？……でも姫路さんはこの前の肝試し編で明久と美波に励まされたし、美波のお話をどこかで入れたいと思っててですね！？

……すんません、相変わらずの作者で（汗）えっと、お話としては以前あった《強化合宿の明久と美春の会話》の真相をベースにしています。原作の４巻のお話に近いのかな？

そ、そんなわけでまた次回です！アンケートはまだやっていますので、ご協力いただけると嬉しいです♪読んでいただきありがとうございました！

番外編：ウチと美春とアキの気持ち～レコーダーの会話より～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。どうしよう……何だか全然夏を堪能せずに夏が過ぎ去っている気が（泣）

まあ、それはともかく、今回は話していた通り美波回かな？実はこれ強化合宿編の番外編みたいなものです。多分大抵の方がお忘れだと思いますので、『強化合宿編：４９時間目』を読み返してみたら思い出してもらえるかと思います。

そんなわけで、今日も張り切っていきますかね。よろしくお願いします！

番外編：ウチと美春とアキの気持ち～レコーダーの会話より～

美波Ｓｉｄｅ

ここはウチらの通う文月学園の屋上。いつもは瑞希と一緒に来ているんだけど、今日は家の用事で来れないあの子の為にもウチがちゃんと瑞希の分まで買っておかなきゃ♪ん？一体何を買うのかって？それは・・・・・・

「新作のアキの抱き枕をお願いね。はい、ウチと瑞希の二人分のお代よ。セットで買うとお得なんでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・毎度」

「あはは♪ナミーも姫ちゃんも相変わらずだね～♪」

ま、まあその辺は大目に見てね？そう、ここは・・・・・・土屋の経営する『ムッツリ商会』。いつも土屋にはアキの様々な商品を提供してくれるから、感謝しているわ。ま、時々その分ウチらを隠し撮りしてそうで怖いけどね？

ちなみに２－Ａクラスの愛子もここにいるわけだけど・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・工藤、暇なのか？」

「あはは～♪失礼な、別に暇ってわけじゃないよ？」

「・・・・・・・・・・・・じゃあ、さっきから何故ここに？」

「ムッツリーニ君の観察～♪」

「・・・・・・・・・・・・暇なのか？」

・・・・・ま、こういう感じで土屋の傍で土屋をからかうことに全力投球している。と言っても、愛子は多分土屋の事が気になるからこういうことしているんでしょうね。結構愛子も素直じゃないわよね～♪何だか昔のウチを見ているみたい。

「・・・・・・・・・・・島田。商品を」

「あっ、うん。ありがとね」

「・・・・・・・・・・・・今回でポイントも溜まる。島田と姫路の二人にはサービスも付けておいた」

「あ、そうなの？助かるわ♪」

「良かったね～ナミー♪・・・・・・・・・・・うーん。サービス、ねえ？」

と、今まで土屋を散々からかって遊んでいた愛子が、急に何か考え始めた。？何かしら？

「愛子？どうしたのよ？」

「ん～・・・・・ねえ、ムッツリーニ君？あの時の会話ってまだ取ってる？」

「・・・・・・・・・・・・あの時？」

「ほら、合宿の時の。吉井君と清水さんの・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・あれか。まだある」

？？？何の話よ・・・・・・？と、急に土屋が何かゴソゴソと取りだして、一つのレコーダーを持ってきた。

「・・・・・・・・・・・これだな」

「おお、流石はムッツリーニ君♪・・・・・ねえ、ムッツリーニ君？これさ、月野君が『当人以外は聞いちゃダメですからね？』って言ってたのに、ついボクとムッツリーニ君は聞いちゃったわけじゃない？」

「・・・・・・・・・・まあ、仕方なかった分もあるが」

「そだね。あの時は清水さんを監視しなきゃいけなかったからね。・・・・・これさ、吉井君に渡すのもアレだしさ。だったらナミーに譲らない？」

「・・・・・・・・・・そうだな」

と、ウチに構わず会話を続けるこの二人。えっと・・・・・ゴメン、わかるように説明して？

「そんなわけで、はいナミー♪これどうぞ！サービスだよ♪」

「・・・・・・・・・・非売品。大事にすると良い」

「二人とも、ウチを無視して二人だけで話されても困るんだけど・・・・・？」

とりあえずは受け取ったけど・・・・・どう言うこと？あの土屋が『非売品』をタダでウチに渡すの？

混乱しているウチを見て、愛子は笑いながらこう続ける。

「折角だしさ。ナミーこれをここで聞いてみなよ♪これの中身を知りたいだろうし」

「え？・・・・・う、うん・・・・・そうね。聞いてみようかしら？」

ま、考えても無駄だろし・・・・・とにかくそのレコーダーを再生してみた。ちょっとざわつきがあった後・・・・・突然に、

『アキさんに清水さん、二人で話をつけてください。教室の外にいますので終わったら呼んでくださいね。・・・・・別に聞いたりはしませんから安心してください』

『・・・・・うん、ありがと造』

『・・・・・いえいえ、頑張ってください♪』

アキと月野の声が聞こえてきた。・・・・・？何なのかしら？アキの日常会話でも入れているとか？

『さて、とりあえず造が折角話しあいの場を作ってくれたし・・・・話し合おうか、清水さん』

『・・・・・・・・・話し合い、ですか？』

コレって一体何？と、ウチが土屋と愛子の二人に問いかけようと顔をあげると・・・・・

「ねえ、土屋に愛子・・・・・って、あ、あら？いないわね？」

何なのかしら、一体？いつの間にか二人の姿は屋上の何処にもいなかった。うーん・・・・・どうやら今度は声的にアキと美春の会話の様ね？まあ、とりあえず聞いてみることにしましょうか。

『そう睨まないで欲しいな。・・・・・あのね、清水さん』

『・・・・・・・・・・・何ですの』

『さっきのさ、造が言っていたことは僕もちょっとは正しいと思うよ？キミは盗撮や脅迫の件はちょっとは反省しなきゃいけないと思う。でもね、造が言ってたじゃない？キミが美波を好きでもそれは決して間違いってわけじゃないってさ』

『くっ！・・・・・・・・・・・同情は、いりませんわ！美春は！・・・・・・美春は、お姉さまを愛する女として貴方にだけはそんなことを言われたくありませんっ！』

美春ったら・・・・・・ま、あの子も相変わらずね。ん？でも、『盗撮』に『脅迫』？

あっ！これってもしかして・・・・・・美春が以前『お姉さまに謝らなければいけないことが』って言ってた時の会話かしら？アレは確か――――そうそう、美春が強化合宿で暴走した時のだったわね。

『・・・・・えっと、清水さん？どうしてそんなに僕を毛嫌いしているのかな？いや、一応僕でも清水さんが美波を好きで、僕が美波に近づきすぎだからってことくらいはわかるけど・・・・・・？』

『ハッ！自覚がないのですね！貴方は美波お姉さまに想いを寄せておきながら、その一方でもう一人のFクラス女子、姫路さんにも想いを寄せているっ！そんな中途半端な奴に、美春の美波お姉さまを弄ばれるのが許せないのです！』

「っ・・・・・・！？み、はる！・・・・・・違うわ！アキは！それにウチはっ！」

と、思わず過去の会話なハズなのに、ウチは声を荒げてしまった。
ちょっぴり恥ずかしいわね・・・・・・ここが誰もいない屋上で良かったわ・・・・・・

『・・・・・なるほど。うん、一応わかった。そう言うことか・・・・・』
『何が、何がわかったですか！お姉さまの心を弄んでいると言うことに、自覚でもしたのですか！』
『・・・・・・あのね、清水さん』

と、レコーダーの中のアキは静かに、でもとても透き通るような声で美春に話しかける。

『何ですの？言い訳でも・・・・・・』
『僕はキミの言う通り・・・・・・美波も姫路さんも凄く大切だよ』
『っ！・・・・・・あ、貴方は恥を知るべきです！お姉さまは・・・・・お姉さまは確かにあの小学生の言う通り、悔しいですが貴方のことを意識していますっ！ですのに、貴方の答えは・・・・・・あろうことか『両方大切』ですって！？バカにしていますかっ！？』

・・・・・ウチは、ウチはアキに『大切』って言って貰えるだけでも嬉しいのにな・・・・・でも、でもそれじゃダメなの、美春？
ちょっとウチの気持ちが美春に伝わっていないことが・・・・・・悔しいかな？まあ、この気持ちをわかって欲しいなんて言わないけどね？

――――――そんなウチの思いに関係なく、レコーダーは再生を続ける。

『・・・・・清水さん。やっぱりどっちも大切じゃ、ダメなのかな？』

『ふざけるのも大概にしなさいっ！お姉さまが大切ならば、『全てを犠牲にしてでもお姉さまを愛する』ことくらいしなさいっ！その覚悟もない貴方にっ！』

『・・・・・そっか、そう思うんだね？』

『何ですの・・・・・？美春が間違いを言っているとでも・・・・・』

『美波は・・・・・美波は『自分が幸せになる為に、全てを犠牲にする』ことを望んでいるのかな？』

『・・・・・・・・・・・え？』

アキ・・・・・ああ、そうか。アキは、ウチだけじゃなくて・・・・・ウチや瑞希の、そしてウチらの大切な人たちも・・・・・全てが大切で。

『僕は・・・・・美波はそんな子じゃないと思う。例え今の僕が・・・・・美波の幸せの為に美波だけに幸せになってもらおうとしても、美波はそれを許してくれないんじゃないかな？』

『ど、どういうこと・・・・・ですの？』

『美波はね？姫路さんのこともやっぱり大切で・・・・・姫路さんも美波の事が大切で。僕も2人がそれぞれ大切なんだ。僕らは確かに微妙な関係だよね？人から言われてどう言えばいいかわからないようなとても曖昧な関係に見えるよね？・・・・・それでもやっぱり3人が3人、それぞれ大切なんだよ』

『だか、ら・・・・・・何が言いたいのですかっ！？』

美春が声を荒げる。美春・・・・・・アキはね？ただ純粋に、ウチらを大切に思っていて・・・・・・ウチらもアキの事が純粋に大切なの。３人一緒にいられることが、本当に大切なのよ？

『僕は、美波も姫路さんも幸せになれるように・・・・・・何て都合の良いことは出来ないかもしれないけどさ、僕も中途半端じゃなくて・・・・・・２人のことは１２０％、２人分全力で大好きなんだ』

『っ！？』

そう、ね♪アキはいつでも全力でウチらのことを想ってくれている。ウチもそして瑞希もそんなアキに惚れていて、ウチはアキのことを想っている瑞希のことを大事に思えるようになったし、瑞希もそれは同じ気持ちみたい。

『・・・・・・そんな・・・・・・そんな戯言、美春が聞くとでも？』

『あはは、どうだろ？・・・・・・清水さんが怒るだろうなとは思っているよ？』

『・・・・・・・・・・お姉さまは、それで満足しているとでも？』

『うーん・・・・・・これればかりはわかんないよね？美波のことは大切だけど、美波がどう思っているかは本人しかわかんないし・・・・・・それは不安かな』

そうね♪ウチもこれを聞くまではちょっぴり不安だったわよ、アキ♪

『・・・・・・・・・・・・姫路さんが、お姉さまや貴方のことを何とも思っていなかったら?』

『そ、それは・・・・・・・あ、でもさ?少なくとも姫路さんが美波のことを大切にしていることはわかるよ?それくらいなら清水さんもわかるでしょう?』

フフッ、心配しなくても少なくともウチはアキも瑞希も大好きで・・・・・瑞希もアキの事が大好きなのよ?アキは知らないかもしれないけど♪

『・・・・・・・・・・・・貴方は・・・・・・姫路さんに接するように、お姉さまを『女の子として』接していますか?』

あっ・・・・・・。まあ、そうよね。ウチはあんまりそういう接し方は似合わないし、それについてはウチもわかっているつもり。『女の子らしさ』何て言葉は、ウチには似合わないかな?

『はぇ?えっと・・・・・・『女の子として』って?美波は女の子でしょ?』

『そんなことはわかっていますわ!そういうことではなく、お姉さまへの接し方について聞いているんですっ!』

『??・・・・・・うーん、それってつまり美波への接し方がぞんざいになっていないかってこと?』

『貴方はバカですか!?先ほどからそう言っているじゃありませんか!?』

『ご、ゴメン・・・・・あー、うん。確かに美波には1年生の時

からの友達として接してきたし・・・・・・ぞんざいに扱っている って思われても仕方ないのかな？』

あー・・・・・ま、まあ確かにウチもウチで1年の時は（よくわからずに）アキに接していたわよね？その・・・・・暴力的に、ね？ああ、もう！あの時に戻らせて！そして、ちょっとはマシな対応をさせて！？

そんな風に頭を抱えていると、そのレコーダーは再生を続けた。・・・・・そう、そしてそのアキの台詞を、バッチリとウチに伝えるために。

『まあ、確かにお姫様みたいに扱っているわけじゃないし、ひょっとしたら今も男友達に接するみたいに雑な態度になっているかもしれないけど――――――』

「え・・・・・？」

『――――――けど、僕にとって美波は、ありのままの自分で話ができて、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちょっとした仕草が可愛い、とても魅力的な――――――女の子だよ？』

「っ～～～～～～～～～～～／／／／／／／／／！？」

『・・・・・・・・・・・・あ、呆れましたわ。貴方随分大きなことを言うんですのね？』

『ふぇ？・・・・・・・・そ、そうかな？』

『・・・・・・・・・・・・・・そこまで言うのでしたら、これからは美春と好敵手ですっ！美春はこれまで通り、お姉さまを愛し続けますっ！貴方がどれだけ美波お姉さまを愛そうが、美春の愛の方が大きいと証明してあげますわ！』

『ちょっ！？あ、愛！？・・・・・・・べべべっ、別に愛なんて、その・・・・・・・／／／／／／／／』

『何でそこで恥ずかしがるのですか！？先ほどの台詞の方がよっぽど恥ずかしいでしょうが！？』

プツッ！

・・・・・・・・・・・・そこで会話は途切れていた。な、なるほどね？確かに土屋や愛子の言っていた通り、『非売品』にしてもらってて本当に良かったわ・・・・・・じゃなきゃ、ウチもアキも多分悶絶しているでしょうからね。

まあ、あの二人にはこの会話を聞かれていたでしょうけど――――何だかんだでこういうことは絶対に秘密にしてくれる二人だし、このレコーダーの件もあるし多めに見ておきましょうね。・・・・・・・その分、絶対これをネタにからかわれるだろうけど・・・・・・・

「・・・・・・それにしても。アキが、アキがたまにウチらにカッコいいこと言ってくれるのはわかってはいたけど・・・・・・」

とりあえず、誰もいない屋上で火照った顔を仰ぎながら――フゥッ、と息を吐いてみる。

「凄いわ・・・・・もうどうしようもないくらい、アキのこと好きになっちゃった・・・・・・・」

思わず屋上で寝ころんで、青い空を見上げてみた。見上げた空はとても青くて、夏の訪れを予感している・・・・・・何てウチには似合わないような、そんなどうでもいいことを考えながら手の中にあるレコーダーを握りしめる。これは瑞希には本当に悪いけど、ウチの宝物になるかも・・・・・・？

・・・・・困ったわね。今夜はその、眠れるかしら？

番外編：ウチと美春とアキの気持ち～レコーダーの会話より～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

原作の４巻に近いのかな？４９時間目を書いた後にいつか書こうと思っていたお話です。明久と美波、そして姫路さん３人の関係は何と言えばいいかわかりませんが、彼ら彼女らにとっての関係性を示したかった上でも書かせていただきました。

まあ、そんなことを言ってますが……単純に４巻の内容を削ってしまい、明久の最後の決め台詞と美波の最後の台詞が書けなかったことに作者が嘆いて、絶対番外編で書いてやる……と思って書いただけなんですがねー（汗）こんな適当な作者でゴメンなさい。

さて次回はですね、鉄さんと言う方からネタ提供いただいたオリジナルなお話になります。前編・後編となってますので２日かけて更新予定です。内容は……うーん、一応ネタバレになるのはアレですので、感想欄に乗っていると思います。気になる方は探してみてください。

ではまた次回！読んでいただきありがとうございました♪

番外編：文と造と理想の体～大きいツクルを見てみたい！～前編（前書き）

どうも糖分摂取魔です！暑い夏が終わり……ませんね。まだまだ暑いうえに、夏の大事なものが終わってません……泣きたくなりますね。

今回は（今回も？）オリジナルなお話です。前話で言っていた通り、鉄さんのネタを使わせていただきました。鉄さんありがとうです！

てなわけでお題は『召喚システムの暴走（？）で造が１７０？くらいの身長に』という内容です。タイトルのまんまですね（汗）では、今回もよろしくお願いします！

番外編：文と造と理想の体～大きいツクルを見てみたい！～前編

「はい、文さん♪以前約束していた通り、家の父と母の写真を持ってきましたよ」
《ありがとー♪》

ここは文月学園のシステムサーバー室。召喚システムこと、《文》のお部屋。何だかんだで文と仲良しな造は、こうして暇になればここへやってきます。

《おおっ！　ツクルに　そっくり！　・・・？　アレ？　ツクルのお母さん　３人　なの？》
「は？い、いやいやいや！？どう言うことですか！？」
《だって　ツクルの　お母さんって　サクヤと　こっちの写真のお姉さんと　そっちの写真の　お姉さん　でしょ？》
「・・・・・・・・・・・・い、一応言っておきますが、サクヤさんは『育ての母親』ですからね？それに母はそちらの背の高い方です。それで・・・・・・母より少々背の低い、優しそうな目をしている方が父ですよ？」

造の女顔はお父さんに影響されたとか。造のお母さん曰く、『おとーさん、ホントに出会った時から可愛いわ～』とのこと。

《？？？　父？　ツクルの　お父さん？　・・・？　お母さんじゃないの？》
「あー・・・・・・確かに父も女顔ですが、彼は立派な男で立派な父ですからね？と言うか、そんなこと言ったら父さん、確実に落ち

込むでしょうね・・・・・・」
《ふーん？　アレ？　ツクルって　こっちの　お母さんと　そっちの　お母さんの　子供の　ワリに　ちっちゃい　ねー？》
「（グサァ！）・・・・・・あ、あはは。自分は遺伝子に見捨てられたのでしょうかね？・・・・・・てか、あれ？お母さんとお母さんの子供？ん・・・・・・？」

造のお父さんもお母さんも背は雄二くらいなのにね？造のお爺さんとお婆さんは小さいとのことだけど。

《・・・　ツクル　大きく　なりたい　のー？》
「えっ・・・・・・？うーん、どうでしょうか？まあ、大きくなりたかった気持ちはありますね？」
《・・・　ふーん　そっか》
「？？？文さん？一体どうし――――」

『おーい！月野、スマンがちょいと来てくれー！』

「あや？学園長が呼んでますね？・・・・・・ではでは文さん。そろそろ行きますね♪また今度です♪」
《あっ　うん！　行って　らっしゃーい♪》
「はい、行ってきます♪」

ガチャ　パタン！

《・・・　フフフ♪　ツクルの　大きく　なった　姿かー♪》

☆

「んじゃ、コレを運んでおいておくれ」
「はーい・・・・・と、言いたいのですが・・・・・・・」
学園長に呼び出されて、何事かと来てみれば・・・・・・・目の前に広がるのは、段ボールの山。段ボールの海。・・・・・・・す、凄いですね。圧倒されます。

「ちょっ!?学え・・・・・・ババァ!こんなにたくさんの荷物をどう運べと!?」
「学園長とお呼び!・・・・・・仕方ないだろうが。今日は西村先生が出張でいないんだから。観察処分者の能力を借りでもしなきゃ、今日一日じゃ運びきれないんだよ」
「てか、もしかしていつもはコレをお一人で運んでいらっしゃるんですか、西村せんせは・・・・・・・？」
まあ、そうなんでしょうね。・・・・・・西村先生、本当に流石です・・・・・・・

「そういうわけでアンタらにはコレを補習室に運んで貰うよ?月野・吉井・坂本」
「・・・・・・ちょっと待て、ババァ。さっきからツッコミたかっ

たんだが、観察処分者に運ばせると言っておいて・・・・・何故俺も呼ぶ!?」

「決まっているだろう?アンタは生身で運んで貰うよ。吉井、アンタは召喚獣と吉井自身も運びな。逃げるんじゃないよ?逃げた場合は補習をさせると西村先生に頼んである。先生が戻り次第、楽しい補習の幕開けさね」

「「こんのババァ!アンタは鬼かっ!」」

「ハッ!いつもアタシをババァ扱いするからさね!いい加減学園長とお呼びっ!」

「え、えっと。まあ、とりあえず運んでみましょうか?学園長もお困りみたいです。ね、アキさん、ゆーさん」

「ぐぅ・・・・・造に言われると反論できない・・・・・」

「ちぃ・・・・・俺らは造に借りがあるからな・・・・・」

い、いや・・・・・そんなものは忘れていいでしょうに。

「ったく、アンタらはまず月野の爪の垢を煎じて飲むことから始めな。んじゃ、とりあえず学園全体に召喚フィールドを張るよ。・・・・・起動(アウェイクン)っ」

キュウウウウウウウウウン!　ボンッ!

学園長の起動のキーワードと共に、お決まりの起動音と自分の身体が召喚獣として召喚された時の音が聞こえてきました。さて・・・・・早速この荷物を運びますか!

《さて、それではじゃんじゃん運びましょうね～・・・・・あれ？皆さんどうしたんでしょうか？》

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

《？？？皆さーん？聞いてますかー？》

「「「・・・・・・・・・・・・誰？」」」

何ですその反応！？自分です！月野造ですよ！？

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

・・・・・・？って言うか、あれ？何だか視点が物凄く高いような・・・・・・？

《？？？あれ？アキさんにゆーさんに学園長、縮みましたか？》

「つく・・・・・・る。とりあえず、その反応はないからな」

「え、えっと造？・・・・・・か、鏡見て来てね？」

「・・・・・・・・・・・・また、システムの暴走だねぇ」

？？？とりあえず言われた通りに鏡を見に行くと・・・・・・・

《なっ！？・・・・・・・り、理想の！？理想の体型が・・・・・・・！》

鏡の向こうには自分が長年夢見続け、恋焦がれていた身体がそこにありました。

☆

「――――てなわけで、またしてもシステムの暴走(いたずら)だねぇ」
「またですか!?・・・・・・雄二、このバカァやっぱり・・・・・・」
「言うな明久・・・・・・言わんでいい。俺もやはりそろそろだと思っていたからな」
「・・・・・・おい、そこのバカ共。何の話さね。悪い話だろうが・・・・・・」

「「バカァ・・・・・・とうとうボケが来たのか・・・・・・」」

「アンタら・・・・・・西村先生が帰って来た時を楽しみにしてな？」
《あはは・・・・・・うーん、どうしましょうかね？》

アキさんとゆーさんと学園長の会話は、いつでもどこでも本当に際どい会話ですよね？聞いてていっつもヒヤヒヤしますもん。

それはともかく、今の自分の体型ですが・・・・・・父にそっくりですね。身長は１７５ｃｍでサクヤさんと同じ。外見は装備も出てきていない初期設定ですので、服装も文月学園のもので背丈以外はほとんど変化はないのですが・・・・・・これならば！うん、これ

なら皆さんに♪

「ま、このバカ共は放っておいて、月野・・・・・・スマンが恐らくは、」

《あー・・・・・文さんでしょうね。さっきそれとなく何かしそうな気配はしてましたし》

「あの悪ガキが・・・・・こっちの考えを読んでか、先に召喚フィールドを抑えられたよ。今日一日はこのフィールドは消えそうにないさね」

さ、流石文さん・・・・・ある意味学園長よりも、能力があると言われるだけはありますよね？今日はそれがちょっぴり嬉しいのですがね？何と言うサプライズ♪そして何と言う、理想の身体♪

「しゃあないね・・・・・月野、それにそこのバカ2人。アンタらは教室に戻っていいさね」

《えっ・・・・・？ですがこの荷物を運ばねば・・・・・》

「仕方ないから、明日西村先生が戻ってきてからもう一度来てもらうよ。なに、アンタの身体に問題がないような配慮さね。そこのバカ共は、月野に悪いことが起きないようにちゃんと見ときな」

「へーい。・・・・・造、えっと大丈夫？とりあえず戻ろうか？」

《はいです♪アキさん》

ま、こうなった以上は仕方ないので、教室に戻りましょうね～♪べ、別に今のこの姿を皆さんに見せて・・・・・『小学生』扱いや『男の娘』扱い。そして最近の『女の子』扱いを払拭できるから早く戻りたいなんて思ってませんよ～♪ふふふ♪文さん、本当に感謝ですっ！

「つ、造？何でそんなに早足なのさ？」
《ふふふっ背が高くなったからですよ～♪》
「ちょっと！？ま、待ってよ造！？」

さあ、今に見ていなさい皆さん！今日で自分の扱いを『立派な男』として認識して貰いますっ！

『・・・・・おい、坂本。もしも危ないと思ったらアレ使いな』
『・・・・・あん？ああ、黒金の腕輪か？・・・・・ハッ！言われるまでもねえ』

☆

召喚システムこと、文さんのちょっとしたサプライズで今度は自分の身長が＋３０ｃｍの夢の１７５ｃｍになりました♪この姿を皆さんに見せた時の反応が、本当に物凄く楽しみです♪これだけの背丈ならば・・・・・絶対『立派な男性』として、皆さんの認識を改めることが出来るハズ！

《ふ・・・・・ふふふっ♪楽しみですよ・・・・・・》
「つ、造？教室に着いたけど・・・・・その、いつもみたいな可愛さがないよ？（寧ろ・・・・・その、色っぽい？）」

『可愛さ』？ふふふっ♪そんなもの最初から無いのですよ♪うむ、アキさんの反応も上々です。アキさんも自分が大きくなって自分のことを『立派な大人の男性』として見ているようですね♪これなら教室にいる皆さんも大丈夫なハズ！さあ行きましょう！

「とりあえず・・・・・ただいま～」

と、先にアキさんが教室内に入ります。

「あ、明久君♪お疲れ様ですね」
「お疲れアキ♪早かったわね？」

出迎えたのはやっぱりいつものお二方。相変わらず仲良し3人で何よりです♪

『ちっ・・・・・吉井のヤツ・・・・・また姫路と島田を誑かして』
『まあ待て。アイツを今見るな。無視しておくんだ。虫唾が走るだろう？』
『だな・・・・・下手すると今にもあのバカを葬りたくなってしまって、女子二人を危険な目に遭わせかねんからな』
『殺るならアイツらが吉井と離れてからだな。吉井なんか見てもしょうがないし、秀吉を見て怒りを抑えるか』

『だな・・・・・・ああ、落ち着くぜ。ここに造ちゃんがいれば最高だよな』

『???なんじゃ?何か妙な視線を感じるが・・・・・・?』

えっと・・・・・皆さんの教室の感じも、自分とヒデさんへの接し方も相変わらずですね・・・・・・・

まあ、いいでしょう。今日は皆さんに自分の真の姿を見て貰いましょう!アキさんに続き自分も教室内へ。

《ただいまです、皆さ~ん♪》

「おおっ!造、お帰り・・・・・・じゃ・・・・・・・のう?」

『『『お帰りなさい、造ちゃ・・・・・・ん・・・・・・・?』』』

反応してくれたヒデさんと、クラスメイト達は一斉に自分の方を向き・・・・・そのまま口を大きく開けたまま凍りつきました。これは・・・・・・!成功でしょうかね♪

「つく・・・・・る?お主は、その・・・・・・・造かの?」

《はいです、ヒデさん!》

「これはまた・・・・・・驚いたぞい・・・・・・?お主随分背が高くなったのう?ワシも追い抜かれておるぞい?」

《あはは♪そう言ってくれるなら大成功ですね♪実はですね、召喚システムが・・・・・・》

ザッ！×４４

《ふぇ・・・・・・？皆さんどうしました？》

『『『・・・・・・・・・・・・どうか』』』

ん？何でしょう？皆さんが急に自分の前に跪(ひざまず)きましたよ？それにしてもクラスメイトほぼ全員が跪くこの光景は、ほんのちょっぴり怖いですね。

《？？？ですから、どうしましたか皆さん？》

そして、Ｆクラス全男子（と言ってもアキさん、ヒデさん、ゆーさん、こーさんは除く）４４名は跪いたまま自分に手を差し伸べて・・・・

『『『どうか・・・・・・どうか結婚して下さい、お姉様！！！』』』

――――――その瞬間、自分はヒデさんに泣きついてしまいました・・・・・・

☆

《どうして・・・・・どうしてこんなことに・・・・・？》
「ま、まあこやつらの暴走は、今に始まったことではないからの」
ヒデさんに泣きついている間に、何故だかクラスは大パニックに。
血で血を洗う争奪戦（？）の幕が開けておりました。

『造お姉様は俺の嫁だっ！お前らお姉様に近づくんじゃねえよ！』
『ざけんな、テメェ！お前じゃ不釣り合いなんだよボケがっ！』
『んだと！？お前が言うなっ！引っこんでろカスがっ！』
『造お姉様ァーッ！　俺だーッ！　結婚してくれー！』
『テメッ！誰が抜け駆けしていいって言った！俺も求婚してくるっ！』

・・・・・・・・・・・・・西村先生。このクラスにはどうやら貴方がいないと、本当にいろんな意味で危険なようです。

「やれやれじゃのう・・・・・・・それにしても、本当に大きくなったのう」
《あー・・・・・・まあ、自分の理想の体型ですね》
「うーむ・・・・・・・な、何だか今のお主は、その・・・・・・・・・かっ、」
《？どしたんですか？》

「かっ・・・・・・カッコいい・・・・・・のう！／／／／／／」

ひ、ヒデさんっ！・・・・・やっぱりこのクラスでヒデさんだけが自分のことを分かってくれるんですね♪それですよ、その言葉ですっ！その言葉を待っていましたっ！ヒデさんに深く感謝しつつ、自分の心境を話していると・・・・・・

「月野っ！アンタはやっぱりウチのことわかってくれてたのね！」

・・・・・・！？な、何故だか知りませんが、島田さんが物凄く感動した様子で自分に話しかけてきました。

《えっと・・・・・ど、どう言うことですか？》

「そのアンタの体型のことよ♪・・・・・そうよね、アンタもそういう体型が理想なのよね！」

《島田さんっ！そ、そうですね！その通りです！島田さんの言う通りこれくらい大きな背丈が欲しいんですよっ！これが理想なんですよっ！》

島田さん・・・・・！貴女も自分のことを分かってくれるんですね！そうなんですよ！これなら皆さんに男の娘やら、小学生と言われなくて済みますもんね！

「そうよね♪今のアンタみたいな――――――スレンダー美人をウチも目指しているのよ！」

《・・・・・・・・・・・ん？》

おかしい・・・・・何か・・・・・・何か変です・・・・・・

「月野！アンタもいろいろ大変でしょうけど・・・・・今のアンタ、輝いているわよ！ウチもそういう体型を目指して頑張るわ！お互い頑張りましょう！あ、でもアキに色目使っちゃダメよ？」

《・・・・・・・・・・・え？》

・・・・・何でしょうか・・・・・・あ、頭が痛い。

「そ、そうですよ月野君！いくら大人っぽくなって色気が凄く上がっている上に、モデルさんみたいだからって明久君を誘惑しちゃ嫌ですからね！？」

《・・・・・・・・・・・は？》

・・・・・色気？誘惑？何でそんなもの必要なのでしょうか・・・・？

「それは無いとは思うけど・・・・・確かに造、さっきから思ってたけどホントに色っぽいよね・・・・・・」

《・・・・・・・・・・・》

アキさん・・・・・貴方もしかして、さっきからチラチラ自分を見ていた理由って・・・・・それですか・・・・・？

『『『お姉様ーッ！俺と結婚を前提に付き合ってくれーッ』』』

《っ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜》
「つ、造？大丈夫かの・・・・・・？」
《こんな反応を・・・・・こんな反応を待ってたわけじゃありませんっ！あんまりですっ！？皆さんの・・・・・皆さんのバカあああああああああああ！！》

『あー・・・・・まあ、こうなるな。ん？おい、ムッツリーニ？どうした？』
『・・・・・・・・話しかけるなっ！今忙しいっ！（パシャッ！パシャッ！！）』
『・・・・まあ、こうなるな』

番外編：文と造と理想の体～大きいツクルを見てみたい！～前編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

何と言うカオス。どこまで行っても造の扱いはこんなものですね～♪……でもいいな～自分も後２０？、いや、あと１０？でいいので欲しいです。せめて、せめてクラスでチビ～ズと呼ばれるのだけは……ゴメンよ同士諸君。自分はこれでも大きくなりたいんだよ。

そんなことより、次回は後編。ちなみに時間軸がハッキリしていませんが、一応肝試しが終わったころのお話ではあります。ってことは……例のあの先輩が？

アンケートはまだ続いています。まあ、結構？の『こーたくん』が多いので確定なのかな？まだまだわかりませんが。一応金曜日まで様子見です。それから今回のお話のネタ提供して下さった鉄さん、本当にありがとうです！鉄さんだけでなく、『こんな話はどう？』とか『こういうものが見たい』というアドバイスが貰えると嬉しいです！

読んでいただきありがとうございます！次回もよろしくです。

番外編：文と造と理想の体～大きいツクルを見てみたい！～後編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。前話の続きで後編ですよ～

……ちょっとした小言ですが、原作にはないお話は自分で書いてて楽しい分中々大変ですよね。井上先生みたいにキレのあるギャグや台詞の言い回しを表現できなかったり、いつもは結構文字数をそろえるのが楽なのに、オリジナルになると長すぎたりしますし……

何が言いたいのかと言うと……また自分で設定している文字数をオーバーしました（泣）普段は５０００～６０００くらいの文字数なのに、オリジナルになると余裕の７０００字オーバー（汗）やっぱりちょっと多すぎでしょうかね？ホントすみません……

とりあえず小言はその辺にして、今回もよろしくです！

番外編：文と造と理想の体～大きいツクルを見てみたい！～後編

1時間目～英語・遠藤先生の場合～

「はい、皆さんおはようございます。今日も・・・・・・・」
《おはようです、遠藤先生♪》
「今日、も・・・・・・今日は、その・・・・・・自習でお願いします／／／／／／」
《え、遠藤先生!?》
「すみませんっ！失礼しますっ／／／／／／」
《遠藤先生いいいいいいいいいいいい!?》

■

2時間目～数学・船越先生の場合～

「おはようございます。今日は、課題で出したところの答え合わせから・・・・・・」
《えっと・・・・・・船越先生?どうしたんですか、固まって?》
「・・・・・・・・・・・・熱が出てきたので、自習しておいてください／／／／／／」
《ちょっと!?またですか!?》
「では・・・・・・逝ってきますね／／／／／／」
《ふ、船越先生いいいいいいいい!?》

3時間目～現社・高橋先生の場合～

「皆さん、授業を始めますよ。・・・・・・あら?どうして皆さんそんなタキシード姿なのです・・・・・・か・・・・・・」

≪高橋先生・・・・・・皆さんの求婚を止めさせてください・・・・・・≫

「・・・・・・・・・・・娘をお嫁にやる時の・・・・・・お母さんの気持ちがわかりました・・・・・・」

≪貴女もですか!?いい加減皆さん目を覚まして下さいよっ!?≫

「ああ・・・・・・造くん・・・・・・なんて綺麗になったんでしょう・・・・・・私は、私はもう幸せですよ・・・・・・」

≪は、話を聞いて!?≫

「ここは・・・・・・天国かしら・・・・・・?私の目の前に・・・・・女神さまがいるわ」

≪女神!?てかこっち見て女神なんて言わないでくださいよ!?≫

『すみません・・・・・・そろそろ迎えが来たようですね／／／／／／』

≪高橋先生、何か出てますっ!?魂的な何かが出ちゃってますよ!?てか魂で話さないでくださいっ!現世に戻ってきてくださいっ!?≫

☆

■

４時間目～現在～

「一体何だい？アンタらの授業担当の先生方３人がフラフラの状態でアタシの城にやって来たんだが？」

不審に思った日高先生が自分らが自習しているところにやってきました。

《・・・・・日高先生・・・・・》

「・・・・・あん？何で瑞和がここにいるんだ・・・・・って、その声は造かい？アンタいつの間にそんなに成長したんだい？」

・・・・・その解釈はどうかと思いますが、何とかまともに話せてよかったですよ・・・・・

《実は・・・・・召喚システムの・・・・・》

とりあえず、日高先生に今朝からの出来事を話すことに。それにしても・・・・・《瑞和》って父さんの名前でしょう？やっぱりそこは似ているんでしょうかね？

「ああ、そういうことかい。ん～？アタシと同じくらいかい？」

《１７５？です。ジャストでサクヤさんと同じ身長ですよ》

「そりゃ面白え。・・・・・くっくっくっ。なるほど、先生方が倒れていたワケがわかったよ。アンタのその姿を見りゃあ・・・・・

・失神くらいするかもねえ♪くくくっ♪」
《今は自分が失神しそうですよ・・・・・・クラスメイトに求婚されているんですから、笑い事でもないですし？》
「（ピクッ）・・・・・・ほ～う？」

『『『（ビクッ）・・・・・・な、なんだ！？急に悪寒がっ！？』』』

ん？何だか日高先生、ちょっぴり青筋が・・・・・・

「・・・・・いや？別にな、アタシは誰が造に求婚しようがどうでもいいんが・・・・・・」

そう言いながらも手をバキボキと鳴らしつつ皆さんの目の前に立つ日高先生。あらら？ひょっとして何か怒ってますか？

「もしも・・・・・・もしも造を嫁に欲しいなら――――――」

ドゴンッ！！　バギィ！！

「――――――アタシを、超えてみな？」

そう言って、日高先生がニッコリと微笑みます。さようなら自分たちの教卓。自分は忘れません、あなたが日高先生の鬱憤を晴らすために文字通り散って行ったことを。

《サークーヤーさーんー？何しているんですかっ！》
「っととと・・・・・い、いやー・・・・・ついうっかりやっちまったね～♪スマンスマン。んじゃ、また後でな～」
《ちょっと！後片付けをしてからにしてくださいっ！》
「任せたよ～」

そう言って日高先生退場。全くあの人は・・・・・・

『『『・・・・・・・・・・・・』』』

『お、おい・・・・・お前行ってみろよ？』
『な、何だよ急に・・・・・・お前は行かねえのか？』
『い、いや・・・・・・どうしようもない、だろ？』
『俺、逝ってくるよ・・・・・・』
『っ！？おまっ！？バカっ、死ぬ気かっ！？』
『いや・・・・・寧ろご褒美です・・・・・・』

『『『コイツ・・・・・・漢だっ・・・・・・！！！』』』

もういい加減ツッコミませんよ？一先ず、日高先生の壊した教卓の後片付けですね。

☆

「造お姉ちゃん♪カッコいいわ。秀吉もそう思うわよね？」
「・・・・・・造、立派になって。ね、雄二（おとーさん）」
「《・・・・・・・・・・・・・・》」
「姉上に霧島よ。そろそろ造と雄二の目が虚ろになってきておるぞ？」

お昼に入り、優姉さんと霧島さんが訪ねに来ました。にしても・・・・・お姉ちゃんって。いえ、優姉さんがこういうことを言ってくることくらい、そして霧島さんのこの反応くらいは予想済みです。ただ予想は出来ても、避けられない衝撃もあると言うことです・・・・・っ

「それにしても・・・・・・お姉ちゃんの人気は凄いわね♪」
《・・・・・・と、言うと？》
「んー、いつもの土屋君のお店がね？普段来ていないようなお客さんが、今日に入って造お姉ちゃん目当てのグッズを購入しに突然利用してきたんですって。特に・・・・・3年生や先生方がね？」
《聞きたくなかったですよっ！》

優姉さんの『いつもの』と言う発言も気になりますが、それ以上に何処の誰です、そんなものを買うなんて！てか自分のグッズなんか買って何が楽しいんですかっ！？

《くぅ・・・・・もう我慢なりませんっ！今すぐこーさんを止めてきますっ！》

「あっ！造！？」

とりあえずこーさんがいるであろう屋上に駆け出します。こうなった以上は、何が何でも止めねばっ！

『やれやれ、造も大変だな・・・・・・いろんな奴や物に好かれてよ』

『・・・・・・私も雄二（おとーさん）の事を好きな気持ちには負けるけど、造（むすめ）のことも好き』

『いい加減・・・・・・そのルビ振りは・・・・・・止めてくれ・・・・・・ｏｒｚ』

『姉上よ・・・・・・お主は少々自重すべきじゃと思うのじゃが・・・・・』

『自重すれば負けって師匠が言ってたわ♪・・・・・・あ、そうだ♪』

『む？なんじゃ突然？』

『んー・・・・・・あ、あったあった♪はいコレ』

『・・・・・・造の写真じゃの？コレがなんじゃ？』

『ふふっ♪アンタは確かに造お姉ちゃんの身体には興味はないかもしれないけど・・・・・・一枚くらいは欲しいって思ってたでしょう？結構良い一枚なの♪』

『・・・・・・・・・・・・』

『ま、アンタの好きにしなさいな♪』

『・・・・・・・・・・・・今日のデザートは、姉上にあげるのじゃ・・・・・・』

『ふふっ♪いろんな意味でご馳走様♪』

☆

《こーさんっ！今日と言う今日はっ・・・・・・・・いないっ！？》

ダッシュで階段を駆け上がり、屋上に向かいましたがすでにもぬけの殻・・・・・・ちぃ！こーさん、自分の行動を把握しているんですかっ！？・・・・・・・ｏｒｚ

「ふふっ♪お疲れ様ですね、月野君。いえ、今は何と言えばいいのでしょうかね♪月野さんですか？」

《えっ・・・・・・？あっ、小暮さん？あ、あはは・・・・・・お久しぶりです。出来れば呼び方はいつも通りで》

と、手を床について落ち込んでいると屋上の端の方では小暮さんの姿が。あやや、彼女の前で妙な行動をしてしまいましたね・・・・・・

「はい、月野君ですね♪そう言えば肝試し以来ですかね？・・・・・・ふふっ、何だか今日も月野君は大変そうですね。どうしたのですか？」

《えっと・・・・・・そですね、とある友人を止めようかと。・・・・・あれ？小暮さんはここで何を？》

どうしてまたこんな所で・・・・・？小暮さんに尋ねるも涼しい

顔で、

「そうですね・・・・・・私、面白そうなことがないかと模索していましたの」

・・・・・うん、やっぱり去年から全然変わっていませんね。・・・・・あ、あれ?何でしょう、嫌な予感が。

《そ、それで・・・・・屋上に来た訳は?》

「そうなんですよ・・・・・気分転換に屋上を訪ねて、気分転換に先ほどまでここにいらっしゃった2年生の男子生徒さんに『そろそろ来るころだと思いますよ♪』と言って、気分転換に待ち人を待っていました♪」

・・・・・・・・・・それってつまり。

《・・・・・こーさんを逃がしたの、小暮さんですねっ!?てかそうでしょう!?》

「あら♪違いますよ?確かに私はその男子生徒さんに『それそろ来る』と言いましたが、誰が来るなんて言ってませんし、誰が来るかも知りませんでした♪とりあえずのんびりと待っていたら月野君がやって来たんです♪」

わかって言ってますね!?くぅ・・・・・小暮さん、ホントに相変わらずですよ!

《・・・・・・うぅぅ・・・・・・虐めっ子ですか！？》

「ふふっ♪誉めないでくださいな。・・・・・・ただこれでも、月野君が本当に困りそうなことは阻止していたので安心してくださいね♪」

《・・・・・・・・・・・・・・は？》

そう言って、小暮さんが手にしていた紙袋を取り出します。・・・・・・あ、あれ？

「ふふっ♪彼がここを立ち去る前に、ちょっぴり細工を♪彼が売りさばいていた月野君のグッズだけ、ちょっぴり回収しましたの♪」

《・・・・・・・・・・・・・・あ》

全くこの人は。以前もこういうこと、多々ありましたよね・・・・・・困っている自分を見て楽しんでいるようで、本当に困っている時は手を貸してくださるんですもん。

「ま、大体は午前中に売りさばかれたようなので、本当に雀の涙かもしれませんが・・・・・・まあ、多少とはいえ回収は出来ましたよ♪」

《あ、あはは・・・・・・そう、ですか？》

いや、回収してくださったことは本当に嬉しいのですが・・・・・・その回収したものをどうする気でしょうか？

「それで、ですね？取引きしませんか？・・・・・・こちらにとても綺麗な向日葵の写真があるのですが」

《ふぇ・・・・・・？取引きで、向日葵ですか？》

どう言うことでしょう？どれどれ・・・・・・って？

《えっと・・・・・・いや、確かにとても綺麗な向日葵ですが、自分も写っていますよ？》

「はい、先ほどの彼から回収した物の中に入っていました♪」

こーさん・・・・・・全く気配を感じさせずに撮るなんて、流石と言えば流石です。ホントいつ撮ったんでしょうね？全然覚えがないですよ・・・・・・？

それにしても、確かに小暮さんの言う通り綺麗な向日葵です。ちょっと小さいですが、淡く黄色い可愛らしい向日葵ですね。

「それでですね。出来れば私、この向日葵の写真が欲しいのです。ですが・・・・・・困ったことに月野君は私がコレを持っていると嫌でしょう？取引と言うのは・・・・・・私がこちらの全てのグッズを月野君にお渡しする代わりに、こちらの写真を私が持っていることを許していただけないかと思いまして」

《はい・・・・・・？》

？？？どうしてそんな回りくどいことを？

「ダメでしょうか・・・・・・まあ、確かに私が持っていては不気味に――」

《あの？・・・・・・まあ、手に入れたルートがどうであれ、小暮

さんが欲しいなら持っていていいのでは？と言いますか、自分の許可が必要なんでしょうか？》

「・・・・・・・・・・・・不気味に思いませんか？私が月野君の写真を持っているなんて」

《思いませんよ。てか、どうして“友人”が自分の写真を持っていたくらいでそんなこと思うんですか？》

「・・・・・・・・・・・・友人、ですか」

えっ・・・・・・？あ、あれ？

《もしかして・・・・・そう思っていたのって、自分だけですか？その、自分は小暮さんとは去年もお世話になっていた記憶がありますし？》

「っ・・・・・・そう、ですか。ふふふっ♪そうね、ありがとう月野君♪・・・・・・ではこのグッズとこちらの写真は交換と言うことで♪」

《あっ、助かりますです・・・・・・ですが良いのですか？》

「ええ。私にとってはそっちのよりも・・・・・・♪なんせこの一枚は最高の一枚ですし♪」

そう言って、こーさんから回収してくださったグッズの数々を置き、小暮さんはニコニコと一枚の写真だけを持ってさっさと屋上から出て行ってしまいました。・・・・・ふむ？ひょっとして小暮さん、向日葵が好きなんでしょうかね？・・・・・うん♪このお礼に、いつか向日葵に関する何かをプレゼントでもしましょうかね！

それにしても・・・・・

《この自分の大量のグッズは・・・・・・本当にどうしましょうね？》

校内で自分のグッズを持った生徒って・・・・・・よく考えたら、相当ナルシストさんでしょうかね？いかん、落ち込みますね。

『驚き・・・・・ましたね。まさか彼から友人だって言って貰えるなんて。私、これでも彼には嫌われていると思ってましたのに。・・・・・それにしても、こんなに素晴らしい写真があるとは・・・・・ふふっ♪』

屋上を出た小暮さんは、いつもと違った表情が。

『ねえ、月野君？・・・・・・貴方はこの向日葵の“花言葉”知ってますか？』

夏に咲く向日葵の横で、満面の笑みを浮かべる造の写真。それを見つめる小暮さんも・・・・・・

☆

そして戻ってシステムサーバー室。

《文さん》
《んー？　どうした　のー？》
《・・・・・・正直自分はここで『男らしさ』をアピールしたかったんですよ・・・・・・ですがっ！皆さん酷いんですよ！そう思いませんかっ！？》
《？？？　何でー？　ツクル　女の子　でしょー？》

ちょっと！？まだその誤解は解けていないんですか！？

《文は　ツクルの　こっちの　お母さんの　格好を　見たかったのー♪》
《すみませんっ！何度も言いますが、そっちは父ですっ！？》

父さんゴメンよ？・・・・・・父さんがｏｒｚしている姿が目に浮かびます。

《むぅ　でもさー　ツクルは　大きく　なりたかった　でしょー？》
《否定はしませんがね？あ、そうか。それで文さんはこんなことをしたんでしたね？》

色々とあり過ぎて、うっかり忘れていましたよ。まあ、文さんは基

本的には自分を楽しませようとする子ですし？

《ねえ！　ツクルさ♪　このままが　良いなら　このままの　姿で
文が　固定　しとくよー♪》
《ふぇ？何がですか？》

と、いきなり文さんがそんなことを言ってきます。はて？何の話で
しょうか？

《だからー　ツクルが　大きい　ままで　いたいなら　そのままで
固定　しとくのー♪》
《・・・・・・ああ、そういうことですか》

なるほど・・・・・固定も出来るんですか。そりゃ凄いですね？
流石は文さんですか？

・・・・・まあ、ただ今回はそうもいきませんかね？

《それはそれで、とっても魅力的なお誘いですが・・・・・・遠慮
しておきましょうか♪》
《ふみゅ？　どうし　てー？》

あらあら？ちょっぴり文さん、意外そうな。そしてちょっぴり不満
そうですね。ま、これは譲れないところがありましてですね・・・・
・・

≪あのね、文さん・・・・・・自分はね？この身体に誇りを持っています♪無い物ねだりしても仕方がないでしょうし、父と母が産んでくれ、サクヤさんが大事に育ててくれたこの身体には誇りを持っています。書き換えられるのは・・・・・・何だか3人に申し訳ないと思うんですよ≫

≪むー？　よく　わかんない≫

あー・・・・・・ちょっと文さんには難しいかな？

≪うーん・・・・・とりあえず簡単に言うと、父と母とサクヤさんに感謝しているってことですかね？≫

≪むー？　わかんないけど　それって　ばーちゃんが　文を　生みだしてくれて　ツクルが　文に　色んなことを　教えてくれた　ことが　嬉しくて　“ありがとう”って　思うことと　同じ？≫

≪・・・・・・えっ？≫

文さん？貴女・・・・・・？

≪だってね　ばーちゃんは　文を　作ってくれたし　もう少しで消される　とこ　だった　文を　ツクル　護って　くれたよね？それを　文が　“ありがとう”って　思うことと　同じ？≫

≪・・・・・なるほど、そうですね。確かにその感情と物凄く似ているんじゃないかって思いますよ♪≫

中々文さんって面白い発想をしますよね。それに嬉しいことも言ってくれて♪

《そう言うわけで、自分は自分のありのままの姿が一番良いと言うわけです》
《そっかー♪　じゃあ　わかったー♪　造は　元の身体が　大事なのー♪》
《はい♪その通りです。文さん、では戻しておいて下さいね?》
《はーい♪》

そう言って文さんは明日には戻すと約束して下さりました。とりあえず、いい経験をさせて貰いましたね。もうあんな目に合うのは懲り懲りですね。・・・・・ま、まあ本音はこのまま背が高くてもいいかなって思うのですがね?

そこはやっぱり、これから大きくなればいいわけですよね!?・・・・・今日も帰りに牛乳を買っておきますよ。目標は１７０?オーバーですし♪

《あ!　そうそう♪　ねえツクル?　こんなの　拾ったん　だー♪》

と、そんなことを考えていると、文さんが一枚の写真を自分に見せてきました。・・・・・?何でしょうかね?赤ん坊の写真ですか?

《って・・・・・あっ!これ、自分の赤ちゃんの時の!?》
《うん!　朝の　アルバムに　挟まって　いたのー♪》

い、嫌な予感がっ!?

《ねえ　ツクル♪》

《・・・・・・・・・・・・は、い》

どうしてでしょう。冷房が利き暑くもないのに、背中に冷や汗を掻きながら天真爛漫な文さんの言葉を待ちます。

《今度は　ねー♪　文は　ツクルの　赤ちゃんの　時の姿　見てみたい　なー♪》

・・・・・・・・・・・・文さんどうか、どうか勘弁して下さいなっ!?

番外編：文と造と理想の体～大きいツクルを見てみたい！～後編（後書き）

読んでいただきありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……うーむ。何だか確実に小暮さんフラグが（汗）小暮さんのキャラ、こんな感じで大丈夫なのでしょうかね？……うん、もうこのまま突っ走りましょうかね。

あ、向日葵の花言葉は基本は「あこがれ」「私の目はあなただけを見つめる」「崇拝」「いつわりの富」とかですが、今回の向日葵は……うん。まあ、どんな向日葵か色々と種類を想像してみてください。可愛らしい小さな向日葵とだけ言っておきます。

鉄さんからアイデアをいただいたオリジナルなお話でしたが、いかがだったでしょうか？他の方にも感想欄で色々とネタをいただいていますが、物凄く面白いネタをたくさんいただけて、嬉しいです♪本当にありがとうです！

次回から、お待たせしました夏の海編です♪そしてムッツリーニ＆amp;工藤さんのイベントも～♪あ、それから明日までムッツリーニの呼び方アンケートはやってますね。それから明日は実は、また一日かけての検査なので多分更新は出来ません。明後日からまた更新します！読んでいただきありがとうございました！

番外編：設定紹介＆amp;アンケート結果発表＆amp;皆様に感謝をこめて

突然すみません。糖分摂取魔です。

今日は更新しないとか言っていたのに、結局更新してすみません（汗）ちょっと嬉しいことがあって、そのまま勢いで書きました。

お話として成り立っているかは怪しいですが、とりあえずどうぞです。

番外編：設定紹介＆amp;アンケート結果発表＆amp;皆様に感謝をこめて

人物紹介

名前　：日高　サクヤ
年齢　：???歳（自称ハタチ）誕生日：12月18日
性別　：女
身長　：175cm
体重　：女性にそんなこと聞くもんじゃないよ
3サイズ：93－62－88
職業　：文月学園養護教師・《月野家》専属医師兼教育係
性格　：世話焼き・姐御肌な性格
趣味　：造・撮影・旅行・コスプレ（？）
特技　：料理
好きなもの：造・酒
苦手なもの：孤独・大切な人においていかれること
外見　：日本人離れしたプロポーションにまるで銀色のような白く綺麗な髪

備考

最早説明は必要なさそうだが、造ＬＯＶＥなお方。一応本職は専属医師ではあるが造の教育係の方が彼女らしい仕事（？）かも。文月の養護教師になったのも、造が入学したからともっぱらの噂。

それ以外は結構謎の多い人。老人から若者まで、とてつもなく広い交友関係を持っているとのこと。サバサバした性格で頼りになる半面、実は結構寂しがり屋。

外見は黙って歩けば４，５人は振り返るほどに美人且つ、抜群のプロポーション。たまにナンパもされるが、それでもやっぱりサクヤさん。『造やアタシの家族、友人以外はそんなのどうでもいい』らしい。年齢は不詳。サクヤさん曰く『んー・・・・・んじゃハタチで』とのこと。実際ハタチと言われても違和感はない。

料理教室を開けるほどに料理上手。他にも多才で、造曰く『サクヤさんはやろうと思えば何でも出来てしまう』とのこと。他にも色々な特技を持っているらしい。本人談では『長年生きてりゃ、そりゃ色んな事を覚えちまうのさ』とのこと。

元ネタはゲーム『アカイイト』に出てくる《浅間サクヤ》さん。と言うか、プロフィールはほぼまんま。ちなみに日高を姓にしたのはあからさま過ぎかな？と思って（汗）ＰＳ２のゲームですがＰＳ２を持っていないので出来ません（泣）。一応ゲームも設定資料も持っているのにね？『アカイイト』も姉妹作の『アオイシロ』みたいにＰＣ版で出ればいいのに・・・・・・

■

人物紹介

名前　：《文》　文月学園召喚システム
年齢　：？？？歳　誕生日：？？？
性別　：女（？）

身長　：１４５ｃｍ
体重　：ほとんど無いに等しい
３サイズ　：何それ　オイシイ　のー？
職業　：文月学園召喚システムの管理
性格　：天真爛漫
趣味　：造・造を楽しませること・ネットめぐり
特技　：ハッキング♪
好きなもの：造・造の好きなもの
苦手なもの：造を苛める人やモノ
外見　：造に瓜二つ。ただしホログラムなため半透明且つ、胸もある。

備考

もともとは《自身で学習する人工知能》を持った召喚システム。設計者は言わずもがな学園長。あの教頭が引き起こしたシステムの暴走によって造を取り込もうとしたが、駆けつけた学園長とその場に居合わせた西村先生の活躍で未遂に終わる。その際、造のデータを読み込み誕生したのが今の《文》。

初めは学園長ですら消去しようとしたが、造の説得によりこれを回避。そんでもって現在に至る。性格は天真爛漫で、造に影響されてかやや天然。ただし、ちょっぴりやんちゃでもあり度々学園長の頭を悩ませる。

外見は造そっくり。ただし胸があるため完全に瓜二つとは言えない。これは造を文が取り込もうとした際に、文が造を《女の子》と勘違いしたため。造はこの事を認めていない。認めない。

趣味は文字通りネットに潜ること。これで余計な知識を得ているそ

うな。ハッキングは朝飯前（食べられないけどね？）。学園長曰く『本気を出せば世界経済がとんでもないことになる』とのこと。

元ネタは・・・・・ないのかな？パッと思い浮かびました（汗）強いて言えば・・・・・自分の友人かな？ちっこいし、ネット好きで明るい天然さんだし。

☆

～月野造の成績照会・解説日高先生～

「さて・・・・・今回は造の成績を見て行こうじゃないかい」
「・・・・・と、突然ですね？しかも今更ですか？何でまた・・・・・？」
「あー・・・・・作者がね、『いや～♪ついつい造の成績を載せるの忘れてたよ。折角書いたんだしサクヤさんと文の人物紹介のついでに入れとくね～』って言ってきてね？解説としてアタシと造が呼び出されたのさ」
い、いや！？忘れたわけではなくてですね、中々書く機会がなくて！

「相変わらずの作者ですね・・・・・と言いますか、自分の成績を出されるのは恥ずかしいですけど・・・・・」

「まあ、とりあえず行ってみようか。これが造の成績さ」

造の成績：試召戦争終了時→一学期末試験終了時

現代国語：４７２点→５８２点　古文　：３４１点→３８４点

化学　　：４０４点→４２２点　物理　：３０７点→３３５点

生物　　：２４４点→２６９点　地学　：３５１点→３８７点

英語Ｗ　：　２点→　４点　英語Ｒ：　３点→　５点

日本史　：３０４点→４３３点　世界史：３２１点→４５１点

現代社会：３２３点→４１６点　数学　：３２７点→３７８点

保健体育：２０２点→２０７点　総合点：３６０１点→４２７３点

「・・・・・・っと、こんなもんかねえ？」

「あー・・・・・・実際に数字で見ると、ちょっと複雑な気分ですよ」

ちょっとした補足何ですが、造の試召戦争時の成績は振り分け試験を受けていない状態で補充試験に臨んだためにこのような結果になっていました。

「うんうん♪頑張っているじゃないかい。総合点を見るとわかるが、Aクラス上位の実力だね。（一部の教科は壊滅的だがね・・・・・・）」

「まあ、ですが一度2年生の学習内容を終えてこの成績ですからね？自分的には低いと思うのですが」

「関係ないさね。2年時の学習をきっちりやっている証拠がコレだろう？それに造。アンタは授業終わって、西村先生に3年の勉強も教えて貰っているだろ？ちょこちょこ頑張ってるじゃないか」

「・・・・・・・・・・・・・何で、知っているんですか？」

あ、ちなみに造が3年のテストを受けた最新の結果がこちら。

現代国語：４１２点　古文　：３１１点

化学　：３４５点　物理　：２９６点

生物　：２０２点　地学　：３２４点

英語Ｗ　：　２点　英語Ｒ　：　１点

日本史　：３０７点　世界史　：３２２点

現代社会：３０４点　数学　：２９８点

保健体育：１１２点　総合点　：３２３８点

「・・・・・ふーん。やっぱ頑張っているじゃねえか♪やっぱＡクラス入りしてもいい実力さね」

「い、いえ・・・・・自分は結構時間が有り余っていますからね、西村先生が教えてくださっているんですよ！だから自分が頑張っているわけではなくて・・・・・・」

あらら、照れてる照れてる♪

「ところで造は文系かい？それとも理系かい？アタシはこの結果を見て、更にわからなくなったよ？」

「うーん・・・・・どうなんでしょうか？自分がどっちかなんて考えたことないですもん」

英語以外は大抵できるからね～♪英語以外は。何だか見てて悲しくなってきたよ？壊滅的じゃない。せめて英語でＦクラスの平均並みになれば、もう少し良くなると思うんだけどね～

「うぅ・・・・・英語に関しては、学年どころか学園最低とまで言われてますからね・・・・・英語難しいですよ」

明久やムッツリーニ以下だっけ？ある意味両極端な成績だよね？

「ぐぅ・・・・・遠藤先生たちに申し訳ないです。先生ゴメンなさいです・・・・・」

「それにしても・・・・・造、アタシはアンタの英語には何も言わないと決めているが・・・・・保体もなんだか少し低いね？まあ、全体を見ればの話だが」

「・・・・・・・・・・な、何でしょうかねー（棒）」

「ん？何でアタシの顔を見て引いているんだい？」

「そんなことありませんよ？（言えない・・・・・保健とくればサクヤさん。サクヤさんと言えばコスプレ。そんな考えが頭の中で巡って、集中出来ないなんて言えない・・・・・）」
「ふむ・・・・・よっし♪造！今日から保体の勉強をやるぞ！なに、アタシたちが教えるんだ。安心して勉強できるよ♪」
「（ビクッ！？）・・・・・・・・・・あ、アタシ・・・・・・たち？」
「勿論、アタシと優子っちに先生方で――――」
「起動（アウェイクン）っ！科目、現代国語っ！」

キュウウウウウウウウウン　ボンッ！　ヒューン！

「・・・・・あり？あの子、腕輪使って飛んで逃げちまったね。・・・・・まあいいさ。んじゃ、鬼ごっこスタートさね！」

すぐさま『造くんを愛でる会』の皆さん総出で文字通り（地獄の）鬼ごっこスタート。この後どうなったのかは皆さんのご想像にお任せします。ではでは、またね！

☆

「・・・・・・・・・・待て。俺たちを呼んでおいて、終わらせるな作者」
「そーだよー？ボクたち何のために呼ばれたのかわからなくなるよ～？」

あ、そうだった。工藤さんのムッツリーニに対する呼び方のアンケート結果の発表です！んじゃ、ムッツリーニに工藤さん♪よろしくね。

「・・・・・・・・・・・・そもそも何故に俺が・・・・・・」
「あはは♪そりゃ当事者だからね～♪と言ってもムッツリーニ君が、と言うよりボクがムッツリーニ君に対しての愛称のアンケート何だケド♪」
「・・・・・・・・・・・・もういい。アンケートに答えてくださった方々。ありがとう」
「ホントにありがとねー♪それじゃ、結果発表だよ。結果はこうなりました♪」

こーたくん　7票　こうくん　2票　康太君　2票　ムッツリーニ　1票

「ってなわけで、ムッツリーニ君改め『こーたくん』ね♪よろしく～♪」
「・・・・・・・・・・・・久しぶりに、まともに呼んでもらえたのか・・・・・・？」
「あはは♪まあ、ボク個人的にはムッツリーニ君でもいいんだけどね？」
「・・・・・・・・・・・・（ブンブン）」
「でも良かったね？こーたくん」
「・・・・・・・・・・・・？」
「もし読者さんからアンケートに協力して貰えていなかったら――

――」

「・・・・・・・・・・・・・・貰えていなかったら？」

「――――作者さんのネーミングセンスで考えられた愛称で呼ばれてただって～」

「・・・・・・・・・・・・・・なっ！？あ、アンケートに協力してくれた方々。本当に助かった」

ちょっと！酷くない！？確かに『ムッツリーニはエロいし、もうエロ太さんでもいいんじゃないかな～？』とは考えたけど！そこまで酷くないでしょう！？

「・・・・・・・・・・・・・・！？（ブンブンブン）あ、危なかった・・・・・・」

「あはは♪こーたくんじゃなくてエロ太君？変なの～♪」

ｏｒｚ　そ、そこまで酷くないもん。造ほどネーミングセンスは酷くはないもん。

「・・・・・・・・・・・・・・アンケートにご協力いただきありがとうございました」

「それからこの前の話に戻るけど、『こんな話が見たい』とか『こうした方がいい』とかあったら是非是非教えてくださいね♪」

なお、工藤さんが正式に『こーたくん』と呼び始めるのは、次回からの海への旅行編の途中からかな？そんなわけで、本当にありがとうございました！

☆

「な、何とか逃げ切りました・・・・・・」

あれ?造。日高先生たちを撒いてきたんだ。お疲れ様~

「全く、疲れましたよ。またすぐに追ってくるかもですがね?・・・・・ところで作者?ちょっと聞きたいのですが?」

ん?何かな造?

「どうしてこんなお話を書いたんですか?今日は更新しないと昨日の後書きで書きませんでしたっけ?」

め、メタいこと言うのね?造さんは・・・・・・ほ、ホラ。工藤さんのムッツリーニに対する呼び方のアンケート結果も書きたかったんだよ。

「???それだけですか?それだったら活動報告に書けばよかったのでは?それに、何でわざわざサクヤさんと文さんの人物紹介まで入れたんですか?」

・・・・・・き、記念になるかなって・・・・・・思って。

「記念・・・・・・ですか？一体何の記念でしょうか？」

・・・・・・・・・・・・その。えっとですね？今日は本当は更新する予定は本当になかったんですよ。

「ふむふむ」

でも、でもですね？・・・・・・今日病院から帰ってきて、何気なくパソコン開いてアクセス解析したら――――

「解析したら？」

――――１００万ＰＶ・５万ユニーク越えてました・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・ふぇ？」

１００万ＰＶに５万ユニークですって・・・・・・本気で驚いて、パニックになって、喜びすぎて小躍りしてたら、両親に変な目で見られました（汗）

「ちょ、ちょっと！？ど、どうしましょう！？・・・・・・あっ！だからこのお話を？」

はいです・・・・・そんなわけで、記念なるとは思えませんが急いでこのお話を書きました。ちょっと慌てて書いたので誤字脱字が目立つかもしれません。その時は後で直しますね。まあ、どの道工

藤さんのムッツリーニに対する呼び方のアンケート結果も書きたかったですし。

「・・・・・・・・・・・」　↑放心して固まっている

こんなお話じゃ、あんまり記念にはなりませんし・・・・・次回からの海への旅行編が終わったら、何か書こうかなと思います。と言ってもちょっと忙しくなってきそうですし、時間がかかるかもしれませんが。何せ旅行の海編は書き終わりましたが、まだお祭り編は書き終わっていませんし。

もし何かリクエストがあれば言って貰えると嬉しいです。ただすぐには書けないかもしれないことはご了承ください。この『バカとのんきと召喚獣』は作者にとっては小説を書く初めての作品なんですが、本当に皆さんが読んでくださっていることに感謝しています。・・・・・ほら、造。キミもお礼を言ってくれないかな？

「・・・・・ハッ！？え、えっと！読者の皆さま、いつも読んでいただき本当にありがとうございます！設定崩壊やキャラ崩壊。更には作者も崩壊しかかっているこの作品を読んでくださっていることに本当に感謝しています！」

・・・・・・・・・・・作者、崩壊？ほーう？言うねえ、造ちゃん？

「まだまだこの作者も未熟ではありますが、頑張っていくと思います。どうかこれからも宜しくお願いしますです！」

・・・・・・・・・・・・そうですね。これからも“可愛い小学生の”造をよろしくお願いします♪では手始めに、造の似合うコスプレのアンケートでもとりましょうかね♪

「なっ!?と、糖分!?何て事を!?」

まあ、その辺は冗談ですがそのような話が見たければ、いつでも書きますね♪本当にいつも読んでくださっている皆さんや、感想、お気に入り、評価を付けてくださったりしてくれた皆さん。ありがとうです!これからも造たちのドタバタ学園ライフをお楽しみください♪では、失礼します!

「糖分っ!なんてことを!?・・・・・・あ、その・・・・・・／／／／／／ほ、本当にありがとうございます♪これからも『バカとのんきと召喚獣』をよろしくお願いしますね♪では、また次回!・・・・・糖分!今日は逃がしませんよっ!」

番外編：設定紹介＆amp;アンケート結果発表＆amp;皆様に感謝をこめて

本当にありがとうございました！物凄くメタいお話ですみませんです（汗）

１００万ＰＶ・５万ユニーク突破です（冷汗）正直まさかこんなに読んでくださるとは思いませんでした。文の構造や文章自体がまだまだ素人ですが、これからも頑張っていきたいと思います。

アンケートもご協力いただきありがとうございました！工藤さんのムッツリーニへの愛称は『こーたくん』に決定です♪では、また次回です！次回こそ旅行編・海です！ムッツリーニと工藤さんのイベントありですよ～♪（上手く書けるか自分も不安ですが）それにしても、夏が終わりそうなのに海って（泣）

最後に……皆さん、本当にありがとうございます♪これからもよろしくです！

番外編：夏と海とお祭りと《海》～夏の想い出作りましょ～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です！夏が終わりそうなのに夏休みのお話を書くって、何か虚しい感じが（汗）

さてさて、それはもう一旦置いておいて……お待たせしました、海へ旅行編です！海編は書き終わったのですが、お祭り編はまだまだ書いている途中です。まあ、のんびり書きます（あんまりのんびりも出来ないのですがね）

とりあえず、行きましょうか！今回もよろしくですっ！

番外編：夏と海とお祭りと《海》～夏の想い出作りましょ～

～海への旅行に行く1日前・明久宅にて～

「それでアキさん・・・・・・どうしましょうかね。もうあの大人二人はノリノリですよ・・・・・・？」

「そうだね・・・・・一応、姉さんたちを引き剥がして日帰りのプランも考えてはみたんだけど・・・・・・」

「それだと後で、何されるかがわかりませんよね・・・・・・」

「「ハァ・・・・・・」」

ここは吉井明久の家。とうとう明日に備えた1泊2日の海への旅行に彼らは期待と不安で（大体1：9）頭を悩ませていた。まあ、引率の大人がある意味一番怖いお二方ともあれば、仕方ないことかもしれないが。

「とりあえず一番怖いのは、移動中と寝るときでしょうし・・・・・・その辺はゆーさんたちに協力して貰うことにしましょうね」

「だね・・・・・雄二も霧島さん関係でなら、僕らに協力してくれるだろうし」

「全く・・・・・悔しいですよ。後もう少し誕生日が早ければ、自分が車で皆さんを連れて行けたでしょうに・・・・・・」

「・・・・・・・・・・はぇ？どう言うこと？」

「ん？ああ、一応免許取れる歳になりましたので・・・・・・誕生日前から自動車学校に暇があれば行ってたんですよ。これでも仮免許は持ってますし、みきわめも合格しましたよ？それこそ後2，3日で卒業検定を受けようかと思いますし」

「・・・・・・・・・・・そ、そうなんだ（足、届くのかな？と言うより、よく自動車学校に行けたよね？日高先生はさぞかし不安だっただろうね）」

明久の心配通り、造は見た目が小学生なだけに自動車学校も受け入れてくれるところが少なかったとか。ちなみに日高先生は造が自動車に乗ることに関しては、『寿命が３００年くらい縮んだよ・・・・・』と嘆いていたそうな。

「ま、一応学生の身ではあるので、どの道在学中は運転は出来ないでしょうからあんまり意味はないのですがね」

「・・・・・・・・・・・今更だけど、造って僕らより年上なんだよね。てかさ？ならどうして造は自動車免許なんか取ろうと思ったの？」

「・・・・・・・・・・・だって自分の年を証明できるものがないと、いつ補導されるかわかったもんじゃないですもん」

「あっ、あー・・・・・・その、造？涙拭きなよ？」

「泣いてません。明日が楽しみで欠伸しただけです・・・・・・それよりも明日からなんですよね」

「うん・・・・・どうか無事に済めばいいんだけど」

「「ハァ・・・・・・」」

彼らの（気）苦労はどうあがいても尽きないようだ。

☆

明久Ｓｉｄｅ

僕と造の心配をよそに、翌日の天気は素晴らしいものだった。抜けるような青空に浮かぶ大きな入道雲。僅かに感じられるそよ風がその形を少しずつ形を変えて行く。夏本番で、海水浴に行く身としては、これ以上ない絶好のコンディションと言えるだろう。

「今日は海に行くには最高の天気だな」

日差しに顔をしかめることなく、Ｔシャツにハーフパンツといういかにも夏な感じの格好をした雄二が呟いた。コイツ・・・・・くそぅ。なまじ体格が良い分、こういうラフな格好がよく似合う。本人には死んでも言わないけど、密かにそういった格好に憧れている僕としては羨ましい限りだ。

「まったくじゃ。むね――ではなく心が躍るのう」
「ですね♪自分もむね――でなくて心が躍ります」

こっちは薄手の白のパーカーと七分丈のパンツを組み合わせている秀吉とその秀吉と色違いの緑のパーカーに半ズボンの造が。今日も仲良く可愛らしい外見で性別の境界を曖昧にするこの二人は、車の到着を今か今かと待ち望んでいる。

「？？？あ、あれ？何故かアキさんにツッコみたくなってきましたよ？」
「？？？む、むう？ワシも明久に言い聞かせねばならぬ気がするぞ

い？」

気のせい気のせい。それにしても造はちょっぴり不安そうだ。まあ、造の場合は僕と同じで今から始まる姉さんや日高先生の暴走を止めなくてはならない使命があるからね・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・血液パックが傷まないか心配」

ロールアップのジーンズ姿のムッツリーニが、抱えているクーラーボックスを心配そうに見ている。このクーラーボックスの中には、この男の命を支える血液パックが大量に入っているのだろう。コイツほどではないが、僕も色々と気をつけないとね。何せ・・・・・・

「楽しみですね♪あ、そう言えば私たちは、玲さんと日高先生の車にどう乗るんですか？」

「ん～・・・・・・ウチはその、アキと瑞希と一緒が良いわ」

「美波ちゃん・・・・・・はいです♪明久君、良いですよね？」」

「あ、うん。二人が良いなら寧ろ大歓迎だよ」

「「はい（ええ）！！勿論です（よ）♪」」

タイトなデニムのスカートとTシャツの上にキャミソールを重ねた格好の瑞希と、ロングの巻きスカートにTシャツの美波が話しかけてくる。瑞希はいつもとはイメージの違う服装で新鮮だし、美波は手足がすらりと長くてとても映える。

・・・・・・ホント、油断しているとムッツリーニ同様に簡単に三

途の川を渡ってしまうだろう。瑞希と美波の格好を見て出血死するなんて、ある意味天国に逝けるかもしれないけど。

「・・・・・私は雄二と一緒が良い」
「まあ、代表はそうなるわよね？それでアタシは出来れば師匠の車で造くんに秀吉と」
「んじゃ、ボクはムッツリーニ君と～♪」

Aクラスの3人が瑞希と美波の会話に参加してきた。霧島さんはミニスカートにペールトーンのサマーセーターを合わせ、木下さんはデニムミニにTシャツを着ている。二人ともそれぞれの外見に合った服装で決まっているね。

そして工藤さんは・・・・・・

「ん？吉井君、どしたのさ？」
「い、いやっ。別に」
「・・・・・あ、さては・・・・・・」
「な、何かな？」
「ボクのキャミの中が気になっちゃうのカナ～？」

工藤さんはショートパンツに上はキャミソールだけという露出の激しい格好だ。しかもさっきから水着の日焼けのあとがチラチラ見えていて色々と困る・・・・・・。

「べ、別にそういうわけじゃ・・・・・・！」
「あははっ。まあ見たいのなら見てもいいけど吉井君は姫ちゃんと

ナミーがいるからあんまり見ちゃダメだよ～？ま、そこでカメラを構えているムッツリーニ君ならいつでもＯＫだけど♪」

「え？」

と、工藤さんが話しかけている方向を見ると、ササッとカメラを隠して明後日の方向を見ている友人の姿が。やれやれ。ムッツリーニにも困ったものだね？それにしても工藤さんはやっぱり大物だな～。このムッツリスケベの撮影を物ともしないなんて。

「まったく～もっと堂々と見たり撮ったりすればいいのに。ボクはムッツリーニ君さえよければ全然構わないよ？」

「・・・・・・・・・・・・気のせい」

「ふっふっふ・・・・・・・ま、いいか。今日はホントに楽しみだよ～」

「・・・・・・・・・・・・車が来た」

と、話を逸らすようにムッツリーニが指差す。流石はムッツリーニ、目ざといね。ああ、どうやら姉さんたちが来たみたいだ。２台の車が僕らの目の前に止まる。一台は姉さんの運転するレンタル車だけど・・・・・・もう一台は、何だかすっごくゴツイ車だね。

「あら・・・・・？すみません。お待たせしてしまったようですね」

「おっと、すまんねぇ？待たせちまったかい？アンタらも全員揃ってんね」

そして、その車から姉さんと日高先生の姿が。日高先生は以前僕らを送ってくれたりして、運転は安心できるけど、姉さんが運転する

ところは実は初めて見る。ちょっぴり不安だね・・・・・・

「わ～、何だかカッコいい車だね。ねえねえムッツリーニ君。これ何て車？」

「・・・・・・・・・・・・・クロスカントリー４ＷＤ。略すとクロカン」

「す、凄いですね・・・・・・相変わらず」

「だよね・・・・・・前に造が呼んだみたいにてっきりまた高級車かなって思ったけど。これはこれで・・・・・・」

「あ、圧倒されるわよね・・・・・・」

「師匠。これが師匠の車ですか？」

「おう。昔から日本国内を行ったり来たりする時のアタシの足さね。『一日に千里を走り、山河をかけること平地のごとし』まばゆいくらいの朱色から、その名も《赤兎》。アタシの相棒さね。世界を回り終わってから、コイツで造を日本中の野や山を触れさせに連れて行ったもんさ」

そう言って、日高先生は車のドアをコンコンッと叩いてニカッと笑う。

「さて・・・・・・アタシのこの子は４人乗りさね。んじゃ玲っち。とりあえずはまずは造・優子っち・ヒデっちたちをアタシが連れてくよ？」

「はい、先輩。では私はアキくんたちを連れていくことにしますね」

そうして姉さんが僕らに挨拶と、初対面のＡクラスの３人に軽い自己紹介を済ませて、ようやく出発することになった。

うんうん良かった。結構いい滑り出しだ。このまま楽しい旅行になりますように。

☆

造Ｓｉｄｅ

「それにしても・・・・・・海ですか。楽しみですね♪」
「あー・・・・・・すまんな造。昔からアタシは山や川ばっかり連れて行かせてたかんな」
「あっ・・・・・・大丈夫ですよ?その分いい経験をさせて貰えてますし」
「ふふっ♪ホント師匠たちって昔から二人で色々なところに行ってるんですね」
「そのようじゃの。造よ、海は良いところじゃぞ。楽しみにしておいて損は無かろうて」

サクヤさんの操る《赤兎》に乗り玲さんが運転するレンタカーの後を追います。えっと、座席は優姉さんがサクヤさんの隣の助手席に座り、自分とヒデさんが後部座席に乗っている感じですね。

「海か・・・・・・それにしても全く、アタシはホントに恵まれているぜ」

と、突然サクヤさんがしみじみ呟きます。???な、何でしょうか

いきなり？

「師匠・・・・・もしかしてあの事ですか？そうですね、アタシも感謝しなきゃいけませんよね」

「ああ・・・・・・ホント、あの３人にゃ、感謝しねえとな」

「あ、あの・・・・・・？どう言うことなんですか？」

「姉上もじゃ？いきなりハンカチを取り出して涙を拭うなぞ」

とりあえず物凄く嫌な予感はするのですが・・・・・一応聞いておいてみますかね。

「実はな・・・・・・アタシ、本来なら今日から出張だったんだが」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

ちょっと！あ、案の定仕事サボりましたね！？薄々そうじゃないかなと心配してましたが何て事を！？

「あ、造くんに秀吉？師匠は別にサボってはいないわよ？」

「・・・・・・と、言うと？」

「・・・・・・何なのじゃ？」

自分とヒデさんの頭の上には？マークが。どう言うことなんでしょうね？

「「それじゃあ、回想スタート♪」」

「「・・・・・・・・・・・・・・・？」」

～以下回想～

『日高先生っ！どうか、どうかここは私たちに任せて行ってください！』

『た、高橋先生・・・・・・だがっ！』

『造くんの海や祭りの写真を先生が撮らなきゃ、意味がないんですっ！』

『・・・・・そうです、日高先生。どうかここは！』

『遠藤先生・・・・・・船越先生・・・・・・』

『それから・・・・・・木下さん』

『は、はいっ！』

『どうか・・・・・・どうか私たちの代わりに造くんが輝けるように、最高の造くんを魅せてあげてくださいね？』

『先生・・・・・・わかりました！師匠！アタシたちはやりますよ！』

『ああ・・・・・！任せてください、先生方。あの子の最高の写真と思い出は必ず先生たちにも届けます！そして、旅行が終わり次第・・・・・今度は《夏のキャンペーン：造を貴女のお家にお届け！》をすぐさま実行させます！』

『アタシも・・・・・造くんが輝ける舞台を作ってみせますっ！』

『『『日高先生・・・・・木下さん・・・・・！！！』』』

『『先生方・・・・・！！』』

ガシッ！×５　↑『造くんを愛でる会』の皆さんの熱い抱擁の音

～回想終了～

「・・・・・ってことがあったのさ。アタシは幸せもんさね。先生方には後々色々と贈りもんをやんないとね♪」
「そう言うことよ♪・・・・・・って、あら？一体どうしたの造くん？突然秀吉に泣きついちゃって。もしかしてそんなに嬉しかった？」
「うぅ・・・・・ヒデさんっ！もう嫌です、こんなの！？」
「よしよし、じゃ・・・・・・造は本当に大変じゃのう・・・・・・」

海へ行く前に、すでに何故だか自分の頬にはちょっとしょっぱい塩水が。ヒデさんが優しく拭きとってくれたことは、自分絶対忘れませんよ。

こんなので大丈夫なのでしょうかね・・・・・？アキさん、そちらはどうですか？

『ね、姉さんの常識知らずうううううううううう！』

・・・・・・・・・・・・・・アキさん、貴方もお疲れ様ですね。

番外編：夏と海とお祭りと《海》～夏の想い出作りましょ～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

先に海編は書き終わりましたが……これ含めて大体４話分使いました。うーん、お祭り編はその分削れるといいのですが（汗）

とりあえず……移動（今回のお話）→水着（次回）→スイカ（！？）（次の次）→オリジナル（海編ラスト）

……的な順で更新予定です。うん、今ので大体合ってるはずです。異論は認めない。ラストのオリジナル回は意外と重要かも？（ムッツリーニと工藤さん的な意味で）。まあ、とりあえずは読んでみてくださいね。

読んでいただきありがとうございました！ではまた次回です♪

番外編：夏と海とお祭りと《海》～僕と水着と鼻血の浜辺～（前書き）

どもどもです。糖分摂取魔です。

海編を書いていたんですが、やっぱり泳ぎたいですね～♪あんまり自分は海では泳いだ経験が少ないので、明久たちが羨ましいです。今年の夏はプールにすら入れませんでしたが（泣）

っとまあ、そんなことより今日も元気に旅行編・海！行きましょう♪今回もよろしくです！

番外編：夏と海とお祭りと《海》～僕と水着と鼻血の浜辺～

明久Ｓｉｄｅ

車に乗ること三時間。途中姉さんの相変わらず常識ハズレな行動で少しばかり疲れたけど、何とか無事に目的地に辿り着くことが出来た。ちなみに造も造で何かあったらしく、秀吉に慰められていた。造、お疲れだったね。

長い道のりを経て辿り着いたペンションは、緑に囲まれながらも潮の香りが届くような好立地だった。

「わぁ・・・・・眺めもいいですね・・・・・・」
「凄いわね～風も気持ちいいし」
「・・・・・絶好のロケーション」
「晴れて良かったよね～」
「随分絵になるトコね♪」

車を降りた女子勢が、外を見て感嘆の声を上げた。皆が言っている通り眺めも良く夏の海を楽しむには最高の条件が揃っていると言えるだろう。

「さて。これからどうするんだ？荷物を置いてすぐにでも海に向かうか？」
「そうだね。海が見えたら泳ぎたくて仕方なくなっちゃったし」
「・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「ほら造？ワシらも行くとしようの？」
「あ、そうですね！楽しまなければっ！」

夏の海は凄い。落ち込んでいた造も元に戻りワクワクしているようだ。

「それでは荷物を部屋に運んだら海に行きましょうか」
「だねぇ。終わったら着換えて海に行くよ。いいね？」

「「「はーい」」」

～お着替え中・二〇分後～

「やっぱり俺たちは待たされるわけだ」
「仕方ないよ。向こうは水着の準備に時間がかかるんだから」
「・・・・・・・・・・・・こっちも機材の準備に時間がかかるから助かる」

男三人浜辺で絶賛待機中。ま、こういう時に男が待つのはマナーだと姉さんも言ってたし気長に待つかな。そう焦って何かするわけでもないし、海は逃げないだろうからね。

と、待っていると何か遠くからかすかな声が聞こえてくる。

『・・・・・む。おお、造よ。明久たちはあそこじゃぞ』

『あ、いましたね♪やっほー！皆さーん♪』
『あ、あなたたちっ！な、何をしているんですか！？』
『あやや？監視員の方ですか？どうしたんですか？』
『そうじゃの。そんなに血相を変えてどうしたのじゃ？』
『どうしたかじゃありませんっ！それはこっちの台詞ですっ！どうしてあなたたちは上を着ていないんですか！』
『？？？えっと・・・・・どうしてと言われましても？』
『じゃのう？普通男物の水着に上は着ないものじゃと』
『お、女の子が男物の水着を着る時点で間違っているんです！あなたたち姉妹ですね？お姉さんっ！あなた、妹さんの格好を注意する立場でしょう！？お姉さんがそんな恰好じゃ妹さんが真似するのは当たり前ですっ！』
『ちょっ！？い、いや待って下さい！？誰が妹ですか！？』
『とにかくこっちに来なさい！』
『ま、待つのじゃ！　ワシらは男じゃからこれで良いと』
『私の目が黒いうちは、この海水浴場でそんな過激な格好は許しませんからね！ここは妹さんと同じ年頃の子供たちも大勢いるし、怖いお兄さんとかも一杯いるんだから！』
『だから違うんですって！ねえヒデさん？』
『そうじゃ、誤解じゃ！とにかくワシらの話を――』
『上を着ない限り、絶対に海水浴場には入らせませんからね！妹さんは浮き輪も付けなさい！危ないでしょう！？途中で取ったり脱いだりしてはダメですよ！きちんと遠くから双眼鏡で監視しますからね！』

『『だから待ってください（待つのじゃ）と言ってます（言うとる）のに――――！！』』

あれ？なんだか、今かすかに聞こえた声が造と秀吉っぽかったけど・

・・・・・気のせいかな？

☆

「お待たせっ。準備に手間取っちゃってゴメンね」

そんな元気な声でやってきたのは、工藤愛子さん。下の方がジーンズを短くカットしたようなパンツで上は普通の水着だけど、水泳部の水着とサイズがだいぶ違うのか、肩やお腹部分の日焼けの境界線がはっきりと見えてしまい少々困る。それにいかにも“夏”って感じの麦わら帽子を被っていて、それがまたよく似合っていて可愛い。

「流石水泳部だな。水着も麦わら帽子も似合っているもんだ」

「だね～、いかにも夏って感じが工藤さんらしいね」

「そうかな？ありがと、坂本君に吉井君。ま、その辺のほめ言葉はキミたちの大事な人に言ってあげてね♪・・・・・ん？」

「・・・・・・・・・・・・（ササッ）」

「あははっ。ムッツリーニ君ってば。ボクの水着、撮りたいのならさっき言ったみたいに堂々とすればいいのに。いつも言ってるけど、別にボクは怒ったりしないから。ね？」

「・・・・・・・・・・・・・自惚れるな、工藤愛子」

「え？　どういうことムッツリーニ君？」

「・・・・・・・・・・・・・貴様の水着に興味など微塵も（ダバダバダバ）――これは熱射病のせい」

「おお。頑張ったなムッツリーニ。２８秒だぞ」

「凄いじゃないかムッツリーニ。鼻血の我慢記録更新だよ」

「吉井君に坂本君。そんな悠長なことを言ってないで助けてあげようよ・・・・・・」

やるなムッツリーニ。コイツも日々成長しているようだ。と、まるで蛇口を捻った水道のように止まらない鼻血を心配して、工藤さんがムッツリーニに駆け寄る。

「あ、工藤さん。君が今近づくと――――」

「・・・・・・・・・・・・日差しがキツくなってきた・・・・・・っ！（ブシャァアアッ）」

「え？ちょ、ちょっとムッツリーニ君！？ムッツリーニ君ってば！大丈夫なの！？鼻血が噴水みたいになってるけど！？」

「・・・・・・・・・・・・最近の熱射病はタチが悪い（ブシャァアアッ）」

「もうコレ熱射病とかじゃなくて新型ウィルスか何かじゃないかな！？」

前言撤回、このムッツリは何も成長していないようだね。とりあえず工藤さんを驚かせるのも何だし、雄二と一緒にムッツリーニの止血と輸血を試みることに。持ってて良かった血液パック♪旅行には携帯用をどうぞ。

「すみません、お待たせしちゃいました」

「・・・・・・お待たせ」

工藤さんに遅れること少し。今度は霧島さんと瑞希がやってきた。二人の水着は前にプールで見たのと同じだけど・・・・・・不思議だ、ロケーションが違うだけで全然違う印象を受ける。

「・・・・・？愛子。土屋、どうかしたの？」
「えっと・・・・・ね、熱射病って本人は言ってるけど」
「えっ？大丈夫なんですか？一応日高先生もいらっしゃるので、呼びましょうか？」

霧島さんと瑞希は倒れたムッツリーニと、介抱する工藤さんを見て心配そうに見つめる。ホント女子の皆は優しいね。・・・・・鼻血の原因は言わないでおこうかな。いろんな意味で申し訳ないし。

「あれ、どうしたの？土屋が倒れているんけど・・・・・」
「ホントだわ。ねえ、愛子？師匠呼んだ方がいいのかしら？」

と、ワンピースタイプ――――というか、競泳用の水着を着た美波と以前着ていたビキニを着た木下さんがムッツリーニを心配そうに見つつやって来た。あり？美波、この前のと違うね？

「ああ、心配しなくていいんだよみんな。工藤さんが看てくれているし、ムッツリーニは軽い熱射病と（？）はしゃぎ過ぎ（？）なだけだしさ」
「まっ、そんなもんだ。コイツの場合はある意味いつも変らんしな」

雄二も適当に合わせてくれる。女性陣を心配させるのは忍びないからね。・・・・・そ、それにしても、

「皆良く似合ってるよね・・・・・全員スタイルもいいし綺麗だ

もん」

「「っ!?」」

「・・・・・吉井、ありがとう」

「あはは♪吉井君、さっきも言ったけどほめ言葉はボクたちにじゃなくて♪」

「ん、そうね。こういうのは吉井君、美波と瑞希に言ってあげてね♪」

「あっ・・・・・・・・!」

し、しまった!?何気に独り言がっ!?思わず口に出してしまった!?

「え、えっと・・・・・・その瑞希、美波」

「は、はい・・・・・・・」

「な、何・・・・・・・・?」

うぅ・・・・・・とりあえずここまで来たからには、思ったことを言ってみるとしよう。

「えっと・・・・・・瑞希はこの前と同じ水着だけど、見たときとはまた違った印象で、すっごく可愛いと思うよ。美波もスレンダーでファッションモデルさんに見えるくらい綺麗だしさ」

「あ、あの・・・・・・明久君?」

「アキ?誉めてくれるのは嬉しいんだけど・・・・・・」

「その・・・・・・どうして後ろを向いて話しているんですか?」

・・・・・いや、ムッツリーニじゃないけど僕もその、ほんのちょっぴり二人の水着姿に興奮してて何て言えないよね。とりあえず、二人に心配させないように笑顔で堂々と二人を誉めようかな。よし！行くか！せーの・・・・・・

「（クルッ）二人とも凄く（バダバダバダ）――――――に、似合っているよ」

「「あ、アキ（明久君）！？鼻血が凄い勢いで出てるわよ（出ていますよ）！？」」

「あはは、僕のは熱中症かな・・・・・・心配しないでね♪」

「「アキ（明久君）しっかり！？と言うか（言いますか）ね、熱中症！？」」

・・・・・すまん、ムッツリーニ。僕も君と同じ穴の狢（むじな）だったね。良いんだよ、僕を変態と罵っても・・・・・・

後ゴメンね、美波、瑞希。こんな変態をわざわざ介抱してくれて。

『・・・・・雄二。雄二は暑くない？大丈夫？』

『ん？ああ、俺をそこでくたばっている変態共と一緒にすんな』

黙れこの妻帯者。奥さんがいなければお前を確実に沈めていたぞ、雄二。

『・・・・・・そう、良かった』
『・・・・・・・・・・・・お前は、』
『・・・・・・・？』
『お前はその・・・・・・・平気か？ホレ水分補給はちゃんとしとけよ』
『・・・・・・これ、雄二の？』
『いらんなら返せ』
『・・・・・・嬉しい♪』

・・・・・・ふむ。雄二はやっぱり捻くれているようだ。と言うか、男のツンデレは正直見苦しいぞ、雄二。

なんてことをやっていると、どうやら僕と造の最大の不安要素がやってきたようだ。

「・・・・・あら？アキくん、どうしましたか？それに土屋君も」
「あん？お前ら暑さでバテたか？・・・・・・どれ、アタシが診てやろうかね？」

浮き輪を片手に歩いてくるのは僕の姉、吉井玲。そしてクーラーボックスを担いで僕に気遣うのは養護の教師且つ、造のある意味育てのお母さんでもある日高先生だった。

「いえ、何だか皆はしゃぎ過ぎているだけとのこと――――です、しょ・・・・・・う」
「あ、でもアキが熱中症で土屋は熱射病だ――――そう・・・・・・です、玲さん」

と、木下さんと美波が声の主の方へと顔を向け・・・・・・そのまま沈んだ。

「お、おい。どうしたんだい、優子っち?どこか痛むのかい?」
「美波さん。どうして私と先輩を見て泣き出すのでしょうか?」
「いいんです・・・・・・師匠はいつまでもアタシの師匠ってことなんですから」
「わかっていました・・・・・・ウチはもう、瑞希や玲さんや日高先生には一生勝てないんです」
「あん?」
「はい?」

二人は何を言われているのかわからないようで小さく首を傾げている。???僕も正直よくわからないけど、二人が、いや僕にとっては姉さんが、マトモな服装で本当に良かった。やっぱり普通が一番なんだね・・・・・・

「・・・・・玲さんに先生」
「ん?どした?」
「はい、なんですか翔子さん?」
「・・・・・・少しだけ、失礼」

むんずっ!

そんな擬音が聞こえてきそうな霧島さんの行動。どうしたんだろ、ホント。

「？おぉ・・・・・何だい、急に？」
「？どうしましたか、翔子さん」
「・・・・・・凄い・・・・・・」
何故か霧島さんは、姉さんと先生の胸を鷲掴みにして戦いていた。

「お二人とも！私も失礼しますっ！」
そして今度はその後ろから、瑞希が二人の腰に腕を回した。

「？？？瑞希さん。あなたも何か？」
「・・・・・ああ、そゆことかい？ハッハッハ！ま、悩み多き年頃かねえ？」
「うぅ・・・・・なんでも・・・・・ないです・・・・・」
瑞希はそう答えると、静かにその場を離れて――美波の隣に同じ体勢で座り込んだ。

「・・・・・しくしくしく・・・・・」
「あ、瑞希・・・・・いらっしゃい・・・・・」
「美波ちゃん・・・・・海って残酷ですね・・・・・」
「違うのよ瑞希。残酷なのはきっと、神様なのよ・・・・・」
なんだろう、この葬式みたいな雰囲気は。

「・・・・・師匠、スリーサイズは・・・・・・？」
「ん～確か９３・６２・８８――――だったかねえ？」
「・・・・・・弟子は、師匠には勝てないようですね」
「優子っち、そのうち成長するって。気にすんな！」

木下さんが、遠い目をしている。何だろうこの何ともフォローしにくい空気は。空気緩和に定評のある造はどうしたのだろう。正直僕じゃ、この空気を祓うことは出来ないと思うし。

「ほらほら皆、元気出しなよ。最後の二人も来たみたいだし、ね？」

と、この空気を払拭するかの如く工藤さんが明るい声を出しながら視線を送る。ありがとう工藤さん、キミは結構空気読んでくれるもんね。と、そこにはゆっくりとこちらに歩いてくる造と秀吉の姿があった。良かった、この二人ならこの空気も・・・・・あれ？

「遅く・・・・・なりましたね、ヒデさん？」
「すまぬ皆の衆・・・・・・ワシらが一番最後のようじゃな・・・・・」

ちょっと!?肝心の二人の口調が何故だか淀んでいるんだけど!?

「どうしました、秀吉君に造くん。なんだか元気がないようですが」
「ん～？そうだねぇ？着替えの前はあんなに『皆さん、今に見てい

てくださいね！』『今度こそワシらを男として認識させるのじゃ！』って張り切っていたのによ？」

「放っておいて欲しいのじゃ・・・・・・」

「疲れましたよ・・・・・・」

俯いて呟く二人は、何故か水着の上に見覚えのないＴシャツを着ていた。そう、『ＬＩＦＥ　ＧＵＡＲＤ』と書かれたＴシャツを。あと、ついでに造には浮き輪のオプション付き☆可愛いから許す。

うーん、何だかよくわかんないけど・・・・・・

「皆これで揃ったわけだし、さあ遊ぼうか！」

「そ、そうですね・・・・・・」

「い、今さら気にしても仕方ないわよね・・・・・・」

そんなわけで（？）、とりあえず夏の海へと皆で駆け出すことにした。さあ、遊びつくすぞ～♪

『よーし、それじゃボクも遊びに・・・・・・』

クラッ

『っ・・・・・・あ、あれ・・・・・・・?』
『おっと!・・・・・・おいおい、大丈夫かい?』
『あ、はい。ありがとうございます。・・・・・・あはは、ずっと座ってたからちょっと立ちくらみカナ?大丈夫ですよ先生♪』
『・・・・・・アンタ、ちょいと寝不足かい?』
『ん~、ちょっとですけどね?あ、でも大丈夫です!』
『・・・・・・・・・・・・工藤?』
『それじゃ、失礼しました!・・・・・・優子、代表~!待ってよ~』
『あ、コラ!・・・・・・むぅ、ちょいと心配さね・・・・・・』
『・・・・・・・・・・・・』
『・・・・・・んー、そこのカメラ小僧』
『・・・・・・・・・はい』
『アンタも気が付いているようさね。アタシも気にはかけておくが、あの子から目を離さないようにしときな?』
『・・・・・・・・・何で、俺が?』
『ハハッ!そう言いつつ、しっかりあの子を見ているじゃないかい♪アタシが言うことじゃないだろうがね・・・・・・・・頼んだよ?』
『・・・・・・・・・・・・工藤・・・・・・』

番外編：夏と海とお祭りと《海》～僕と水着と鼻血の浜辺～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

今さらですが大抵同じ時間に更新するなら、折角覚えた予約更新を使えば良いのではないかな？と、さっき閃きました。が、やっぱり更新した後でどうしても誤字脱字が目立ってすぐに修正出来ないので、予約は更新できそうにない時に使いますね。

さてさて、次回は……何だろう？スイカかな？ナンパかな？まあ、そんな感じです（？）次回が終われば海編ラストのムッツリーニと工藤さんのオリジナル回かな。今回ちょっとした伏線を入れましたが……うん。大体皆さんが想像した通りのことが起きるハズです。

……王道過ぎかな？まあ、いいや。王道好きですし。ってなわけでまた次回！読んでいただきありがとうございました！

番外編：夏と海とお祭りと《海》～ナンパにスイカに召喚獣～（前書き）

こんにちは♪糖分摂取魔です。８月も残りわずかですね～

スイカか……そう言えば昔ですが、友人の家でスイカをご馳走になっていた時そこのお姉さんに『スイカの種は食べるとお腹にスイカ出来るんだよ～』って言われてトラウマになりました。それ以来、ちょっと苦手です。

そんなことより（？）今回もちゃっちゃか参りましょう！では、よろしくです♪

番外編：夏と海とお祭りと《海》～ナンパにスイカに召喚獣～

造Ｓｉｄｅ

「スイカとバットを用意しているとは、明久にしては気が利くな」
「海と言えばスイカ割りだからね。きちんと冷やしておいたし、きっと美味しいはずだよ」
「おお、そうなんですか？自分スイカ割りなんて初めてですよ♪楽しみです」
「造は本当に、何もかも楽しみなんじゃの♪ワシらまで楽しみなるのう」

ひとしきり泳いだ後に、自分たち男子４名はスイカさんとバットを持ってペンションから海に続く道を歩いています。あ、そうそう。ここにはいない、こーさん何ですが・・・・・何だかちょっぴり落ち着かない様子で、しきりに工藤さんを見てはサクヤさんと何か話していました。

・・・・むぅ。何かあるのでしょうか？一応サクヤさんが問題があると判断すればすぐさま行動に移すでしょうし、今のところは心配はしなくていいのでしょうか・・・・・？サクヤさんにも聞いてはみたものの、

『ん～・・・・・ま、あのカメラ小僧に任せときゃいいだろさ。もしもん時は、造も動いて貰うがね』

・・・・・って言ってましたし。

「そういや、そろそろ昼時か。スイカとは別に昼飯も調達しておかないといけないな」
「・・・・・えっ？あ、ああ。そうですね？ご飯いりますよね？」
「ん？どうかしたのかの、造？」
「いえ、何でもないですよ？」

まあ、サクヤさんの言うことは信用してますし・・・・・それこそこーさんに任せた方が、自分が動くより確実で安全でしょうかね？

「それはそうと・・・・・そうだよね。塩水がいっぱいあるとはいえ、食べ物を確保しないといけないのか・・・・・」
「明久よ・・・・・塩水が主食のような台詞を言える時点で、お主はやはり生活態度を改めねばならぬと思うがの？」

それは自分も同感ですね。てか、もしかして玲さんがいなければアキさんまさか海水を飲む（食べる？）気だったのでは・・・・・？

「火を起こせるなら、海で貝を採っても面白そうだな」
「・・・・・えっと、漁業法に引っかかりませんか？」
「気にすんな。バレなきゃいいんだ」

ゆーさん・・・・・その発言はちょっぴりアウトです。ま、まあその辺はそれこそすぐにでもサクヤさんあたりが許可を貰ってくるかもしれませんがね？

「ま、それは冗談だが・・・・・そうだな、やはり海の定番の焼きそばやカレーライスやイカ焼きあたりも――ん？どうした秀吉？」

「むぅ・・・・・アレなのじゃが」

あらら？ヒデさんの指差す先には・・・・・・

『カワイイ子ばっかりだね～。何？どっから来たの？』

『あ、いえ。私たちは、その・・・・・』

『瑞希、いいから行くわよ』

『いーじゃん、遊ぼうよ。向こうにもダチがいるからさ、良かったら一緒にどう？そっちの綺麗なお姉さんも一緒にさ』

あらら・・・・・困ったような姫路さんの声と、呆れてうんざりしているような島田さんの声ですね。これは・・・・・

「ナンパだな。あの面子なら仕方ないことだが、面倒なことだな」

「初めて見ましたけど・・・・・本当にいるんですね、ナンパさん」

「どうするのじゃ？雄二に造よ。明久が今にも姫路と島田に話しかけておる男を抹殺しそうな目で見ておるが？」

おおぅ・・・・・アキさんの目が怖いですね。とりあえずゆーさんが斜め上チョップでアキさんを正気に戻しましたが・・・・・

「うーん、ちょっと自分が話してきましょうかね？」

「あ、造。大丈夫だよ。ちょっぴり僕も取り乱しちゃったけど、向

こうには姉さんがいるからね。うまくあしらうはずだよ」

あ、そうか。玲さんなら上手に断れ・・・・・・・・・・玲さんが上手に断れますかね?あ、あれ?若干心配ですよ?

『申し訳ありませんが、お断りします』

と、遠くから玲さんの声が。相手の押しの強さなどには左右されない毅然とした口調ですね。なるほど杞憂でしたか。確かにこれならアキさんの仰る通り大丈夫みたいです♪

『え?なんで?カレシでもいんの?』

『いいえ。彼氏はいませんが』

『え?いないの?ラッキー♪だったらさ、オレたちと』

『彼氏はいませんが、代わりに弟がいます』

・・・・・ん?弟って、アキさんのことでしょうけど・・・・・ああ!なるほど、家族連れで来ているとアピールしているんでしょうね♪流石玲さんです。

『はぁ?弟?そんなの別にどうでもいいじゃん。オレだって弟くらいいるぜ?』

『侮ってはいけません。私と弟の関係は凄いですよ』

『へ?関係が凄いって、ナニ?』

『あまり大きな声で言えませんが、実は・・・・・・(ゴニョゴニョ)』

『へ、・・・・・・変態だっ!』

「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」

何だかナンパされている玲さんたちよりも“アキさん”が、物凄くマズくないでしょうか?社会的に抹殺されそうですよ?実のお姉さんに。

『それだけではありません。他にも毎日・・・・・・(ボソボソボソ)』

『そ、それは日本の法律で許されるのか!?』

「ねえ、アキさ――――」

「ストップだっ、造!言わなくていいんだよっ!ゴメン、ちょっとあのバカ姉にお話ししてくるねっ!」

そう言ってアキさんダッシュ。慌てて玲さんとナンパさんのところに行き、二人に優しく諭そうとしていますね。

『で、出たぁーっ!鬼畜変態の弟だぁーっっ!!身内も性別も気にしないケダモノの王だぁーっ!!』

『こら待てぇっ!誤解したまま逃げるなっ!お願いだから待ってぇーっ!!』

「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」

「今更だが・・・・・・案外明久も苦労しているんだな」

「明久が来年の夏にここへ来ることは叶わぬかもしれんの」
「ホントお疲れ様です・・・・・アキさん」
戻って来たアキさんは『ナンパ以上に・・・・・姉さんが困りものだよ・・・・・・』と、嘆いていました。

☆

その後、何とか戻ってきた皆さんと一緒にスイカ割りを楽しみました♪まあ、皆さん中々上手いようにはいきませんでしたが、思い思いに楽しんでいたようでなによりですね。

「それじゃあ、折角のスイカを飛び散らせちゃうのも何ですし包丁を持ってきましょうかね？」
「ん、そうね。ウチが持ってくるから待ってなさい、みんな」
「あ、お二人とも、大丈夫ですよ～♪すぐに切りますので」
「「え？」」
ふふん♪まあ、見ててくださいな～♪
「では・・・・・起動（アウエイクン）っ！」
キュウウウウウウン　ボンッ！

最早、自分にとっては日常的に聞きなれた音と共に、自分の身体が召喚獣として召喚されました。この白銀の腕輪は一応学園長が文月学園を離れても使えるように改良して貰っているおかげで、本当に文字通りいつでもどこでも使用可能となっています。本当に便利な腕輪ですね～♪

さて。とりあえず同時に召喚された箒を、目の前に置いてあるスイカに向けて構えます。何をするのかって？それは――――

「つ、造？一体何を・・・・・・？」

《ふふん♪まあ、見ててくださいね？さてさて・・・・・・では、参りますッ！》

気合いを入れ、箒に力を籠めて・・・・・・一気に風を起こします。物理干渉で実体化したその風は鋭い刃と化し、そのままスイカの方へと飛んでいき・・・・・・

パカッ×１２

《・・・・・ふぅ。こんなものですかね～♪綺麗に１２個に切れましたよ～》

「・・・・・つ、造？お主とんでもないことに召喚システムを使っておるが、こんなことに使って良いのかのう？」

「・・・・・まあ、あのババァなら造のしたことくらい見逃すだろうがな?それにしても、こりゃ凄ぇ」
「だ、だよねー。ちょっぴりカッコいいかも?」
!?か、カッコいい・・・・・・!?い、いやですね~♪そんなに褒めても何も出ませんよ♪

《さ、さて、食べましょうね!おっと、その前に・・・・・・解除(キャンセル)っ》

とりあえず召喚フィールドを戻して、スイカを食べることに♪・・・・ふむ、カッコいいですか♪

「♪~ふふふっ♪カッコいいですか♪」
「あらあら。造くん嬉しそうね」
「ま、カッコいいなんてほとんど言われねえからな~造は」
「あ!そうだ♪さっきのスイカを割った技に名前をつけましょう!」

「「「わ、技?名前?」」」

必殺技には名前が必要だって、偉い人が言ってました!そうですね・・・・・

「(くくくっ♪さてさて今回はどんな名前だろうねぇ?)そ・・・・・それで、造?どんな技の名前にするんだい?」
「うーん・・・・・そですね♪スイカを割った時のあの切れ味を

考慮して――」

「「「考慮して？」」」

「――“包丁いらず”なんてどうでしょう！」

「「「「「・・・・・・・・・・造」」」」」

「「「・・・・・・・・・・・・月野君」」」

「「・・・・・・・・・・・・造くん」」

「って、あれ！？何で皆さんそんな微妙そうな、そして可愛そうな目で自分を見るんですか！？そしてサクヤさんはどうしてそんなに涙目になるほど笑うんですか！？」

「くははは！ほ、包丁いらずって・・・・・はは！流石アタシの造だ！ホント良い名前だねえ♪はっはっは！」

「さ、サクヤさんっ！笑うか誉めるか貶すかの、どれか一つにしてくださいよ！？」

「・・・・・そう言えば、造のネーミングセンスは壊滅的じゃったのう」

・・・・ちなみにスイカを食べ終わるまで、砂浜にはサクヤさんの笑い声が響き渡っていたとか？・・・・良い名前だと思いましたのに。“包丁いらず”って。

☆

明久Ｓｉｄｅ

男性陣がスイカを持ってきたからということで、今度は女性陣がお昼の焼きそばやカレーを買いに行っていた。やれやれ、そんなこと考えなくてもいいのに、みんな優しいね～

「それにしても・・・・・ねえ雄二？」
「なんだ？」
「女性陣がいなくなってから肩の辺りが軽くなったような気がしない？」
「奇遇だな。俺もだ」

さっきから感じていた嫌な気配が完全に無くなっている。これはやっぱり・・・・・・

「「妬み・・・・・だね（だな）」」

美人だらけで目立つ分、僕と雄二とムッツリーニはキツいね。何だかレベルが釣りあっていないと思われてそうだよね。

「あれ？ところでムッツリーニは？」
「・・・・・ムッツリーニか。アイツ、何だか落ち着かねえ様子でふらりとどっかに行っちまいやがったんだ」

「へ？そうなの？まあ、大方写真を撮りに――」
「いや。あろうことかムッツリーニの奴、海に来てしばらくたつが全然写真を撮ってないんだ」
「・・・・・ムッツリーニが？」
「ああ。アイツ今日は何だか変だぞ？」

それは天変地異が起きる前触れではないだろうか？ムッツリーニが写真を撮ろうとしないなんて、他に大切なことでもあるのだろうか？

「まあ本人は何もないと言っているし、とりあえずしばらくほっとくか」
「うーん・・・・・まあ、そうだね。あ、瑞希たち帰ってきたみたいだよ」

そんなことを雄二と言っていると、色々な食べ物や飲み物を携えた女性陣が帰ってきてくれた。

「お待たせしました、皆さん」
「お帰り～。遅かったね。混んでたの？」
「いえ、そういうわけではないんですが・・・・・」
「？何かあったのかな？」
「あー・・・・・ウチら、またナンパされちゃってね？」
「え？また？」

・・・・・・・・・ふむ。どうやら、まだ割っていないスイカがあるようだね？

「って明久君？どうしてバットを持って飛び出そうとしているんですか？」
「ん？ああ、大丈夫。ちょっとまたスイカ割りしてくる♪」
「あ、アキ？ホントにスイカを割るのよね？」
どうだろう？それは割ってからわかるかも♪

『・・・・・雄二、ちゃんと断ってきた』
『何故に俺に報告すんだ・・・・・？ま、お前なら大丈夫だろうが・・・・・しつこかったら俺に言って来い』
『・・・・・うん♪やっぱり夫がいるって言って良かった♪』
『・・・・・・・・・・今、何て言った・・・・・・？』
『・・・・・私には夫と娘がいるって♪』

どうやら雄二の方の御家族は無事にナンパを回避出来ているようだ。
流石坂本翔子さん。雄二よ、いい奥さんを貰ったな。

それにしても・・・・・参ったな。瑞希たちも上手くナンパを回避させなければ・・・・・

「えっと・・・・・瑞希と美波には僕が今度から付いて行こうか？ちょっと心配だし。あ、でも僕なんかじゃ頼りには――――」

「「お願い（します）！アキ（明久君）！！」」

おおぅ・・・・・凄い勢いだ・・・・・。ふむ、やっぱり二人とも不安だったんだろう。頼まれた以上は僕も頼りないなら頼りないなりに頑張るかな。

「（ふふふっ♪これで明久君が私たちの彼氏さんってことで・・・・・・）」
「（見せつけられるわ♪それでアキの腕に二人で抱きついて・・・・・・）」

「「（“すみません！この人が私（ウチ）たちの彼氏です！”って言えます（言えるわ）っ！）」」

・・・・・あ、あれ？何だか社会的な意味でも、男たちの妬み的な意味でも、姉さんからのオシオキ的な意味でも僕の人生が非常にマズイ気がする・・・・・・？何だろうか？

「ん？そう言えば造と秀吉は？」
「・・・・・・・・・・・・呼びましたか、アキさん？」
「・・・・・・・・・・・・呼んだかの、明久よ？」
「うわっ！？・・・・・・どうしたのさ？二人とも」

何だか物凄く疲れた顔をしている造と秀吉の二人。何だろうか？また何かトラブルだろうか？

「・・・・・・・・・・・・説明するとですね」
「・・・・・・・・・・・・ナンパが全て悪いのじゃ」

～以下回想～

『そこの彼女たち！重そうな荷物持っているケド・・・・・俺たちが持とうか？』
『そうだな！俺らケッコー力持ち何だぜ？どうよ？』

『それでな～造はあの時なんて言ったと思う？“赤いですし・・・・・消防さんですっ！”だってよ～♪アタシがあの車を《赤兎》って名前にしなきゃ、アレは《消防さん》って車になってたんだよ・・・・・くくくっ♪』
『ちょっと！そんな話までしなくていいじゃないですか！？忘れてくださいよ！？』

『あれ？聞こえていないかな？もしもーし？』
『もう一度行くぞ・・・・・そこの彼女たちぃ？』

『造らしいのう・・・・・まあその頃なら、いた仕方ないかもしれんから気にせんでも良いのではないかの？』
『なるほどね・・・・・♪造くんはその頃から可愛らしかった、と』

『俺らのこと完全に見えていないようだな・・・・・』
『あ、あのー・・・・・？そこの彼女たち？』

『だからどうしてそういうことになるんですか？サクヤさんと優姉さんはホントに・・・・・』
『まあ、造が可愛いから思わず《消防さん》でもいいかなって思ったのは、いい想い出さね・・・・・あの時からアタシはこの子に骨抜きなのさ・・・・・♪』

『『・・・・・あのっ！！そこの彼女たちっ！！』』

『『『『・・・・・・・・・・・・・・？』』』』

『（・・・・・や、やっと気がついたのか！？）えっと、その・・・・・・』
『（うおっ！？近くで見るとこの４人めちゃくちゃレベル高けぇ！？）に、荷物を・・・・・・』

『？？？荷物？あ、荷物を持てばいいんですか？わかりました♪お手伝いますね』（ニコっ♪）↑ナンパに向けた最高の笑顔
『む？そうなのかの？・・・・・・ふむ、造が手伝うならワシも・・・・・♪』（ニコっ♪）↑造だけに向けた最高の笑顔

『『（ズキュウウウウウウウウン！）／／／／／／！？』』

『あれ？どうかしましたか？鼻血が出てますよ？』
『むぅ？・・・・・・何か怪我でもしたのかの？』

ガシッ×２

『『・・・・・へ？』』

『『結婚しよう！！』』

『『・・・・・・は？』』

『『幸せにする！！』』

『・・・・・・ちょ・・・・・・あの、困ります。二重の意味で』

『心配しないでくれ。必ず幸せにするから』
『不安だらけじゃのう・・・・・造、何故かワシは学園を思い出すぞい？』
『キミ、学生なんだね？・・・・・お姉さんの方は何歳？１６なら俺と結婚しよう。小学生の妹さんは・・・・・そうだな、お前その歳まで待ってろ』
『ああ・・・・・こんなに可愛い子をお嫁に貰えるなら、俺は何年でも待つよ・・・・・』

『『待っても結婚なんかしませんよ（せぬぞ）！？』』

～回想終了～

「「・・・・・・・・・・・・ハァ」」

「？？？何だかわからないけど・・・・・お疲れ様？」

とりあえず、二人とも嫌なことがあったのかな・・・・・？ナンパがどうとか言ってたし、きっと二人は怖い思いをしたんだろう。大変だったね。

・・・・・あれ？そう言えば、肝心の二人の守護者（ガーディアン）はどうしたんだろう？

ドサッ！！

『・・・・・・・・・・・ハッ！これで全員かい？アタシらの造に手ぇ出すバカ共はっ！』
『・・・・・・・・・・・やれやれですね。全くこんなもので終わりなのかしら？』

『つ、強いっ！？あのお姉さんたち、小学生と高校生の姉妹に話しかけた男共全員伸したぞ！？』
『ば、バカな！？・・・・・・海の家特別企画“渚の格闘王選手権”に参加した奴らや、優勝した男も混ざってたのにか！？』
『な、何者だ！？あのお姉さんたちは・・・・・・！？』

・・・・・・・・・・・うん、何も聞いていないよ？そうそう、何者かって言うならば・・・・・・ただの大事な娘と妹を護るお母さんとお姉さん・・・・・・と言えばいいのかな？

夏の浜辺にボコボコにされた上、関節を極められた男共の呻き声。・・・・・・僕はこれからの人生において、絶対にナンパは止めておこうと思った。

番外編：夏と海とお祭りと《海》～ナンパにスイカに召喚獣～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……うん。ナンパをやるなら相手を見てやりましょう（？）まあ、ナンパを見たことすらないですがね？本当にいるのでしょうか（汗）夏の海に姉妹仲良く遊んでいたら、とりあえず周囲に気をつけましょう。とあるお姉さん方に目を付けられてくないなら……ね？

今回の教訓を活かして、明久たちはナンパはしません。楽しみにしていた人すみませんです。さてさて、次回はいよいよムッツリーニと工藤さんのイベントかな？丸々一話そう言う話かも♪

明日はまた検査に行ってきます。まあ、予約使っておくか帰って更新すると思います。多分感想の返信がちょっとだけ遅れるかもです。ではまた次回！読んでいただきありがとうです。

番外編：夏と海とお祭りと《海》～俺と工藤と夏の海～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。予約更新です……相変わらず自信がないですが、これ更新できていることを願っておきます（汗）

さてさて、お待たせしました！ムッツリーニのターンです！ちょこちょこ伏線があって展開がわかっていらっしゃる方も多いでしょうが、行きましょう！今回もよろしくです！

番外編：夏と海とお祭りと《海》～俺と工藤と夏の海～

造Ｓｉｄｅ

「よーし♪それじゃ折角海にいるわけだしさ、みんなで競争しようよ♪」

スイカやご飯を食べ終わり、工藤さんが皆さんに楽しそうに言ってきます。競争ですか・・・・・・

「おっ、そりゃ面白そうだな。やってやろうじゃねえか」
「そうだね・・・・・雄二、キサマには負けんぞっ」
「ハッ・・・・・返り討ちだ」

おお・・・・・流石にこの二人は燃えていますね。さてさて・・・・・皆さんどうするのでしょうかね？

「わ、私は遠慮しておきます・・・・・」
「あ、そっか。瑞希はもう少し泳げるようにならないとね？」
「そうね。プールの時もまだ・・・・・ああ、プール・・・・・ね」
「（ビクッ！？）な、何ですか？優子ちゃん？」
「・・・・・美波、わかっているわね？」
「・・・・・ええ、優子。わかっているわ？」

「「瑞希っ！泳ぎの特訓の続きよっ！」」

「も、もう嫌あああああああああああああ！？」

と、姫路さんを連れて優姉さんと島田さん退場。そうでしたね。お二人は姫路さんの泳ぎの鬼コーチでしたよね？姫路さん、ガンバです。

「んじゃ、アタシもパスさね」

「私も遠慮しておきますね。アキくん、頑張ってくださいね」

と、大人組も抜けちゃいましたね。ま、サクヤさんが本気で勝負すれば、負けないでしょうし？

「ふむ・・・・・ワシもなら抜けるとしようかの？少々休みたい。造はどうするのじゃ？」

「ん～そですね。ヒデさんが抜けるなら、自分も抜けましょうかね。自分もちょっと休憩しときます」

「え～？二人も抜けるのカナ～？んじゃ、代表は？」

「・・・・・夫がやるなら妻もやる。夫婦の共同作業」

「・・・・・ツッコミは入れんぞ？」

あはは♪ま、そうなりますよね～♪霧島さんらしいですね。

「よーしっ！それじゃ、残りのみんなで泳ごう――――」

「・・・・・・・・・・・・工藤は、止めておけ」

「ふぇ？・・・・・どしたのさ、ムッツリーニ君？」

と、今日はいつも以上に無口なこーさんが、突然工藤さんにそんなことを言ってきました。んみゅ？どうしたんでしょうかね？

「むー・・・・・あっ！ひょっとしてボクじゃ相手にならないと言いたいのかな～？でも残念♪ボクはこれでも水泳部で、結構デキル方なんだよ～♪」

「・・・・・・・・・・・・工藤」

「ふふふっ♪ムッツリーニ君！今日も勝負といこうじゃない？みんなもやるよ～♪」

『んじゃ、僕が勝ったら雄二が焼きそば奢ってよね！』

『ハン！お前も財布の中身をちゃんと把握しとけよ！後で金がないって言っても知らんぞ？』

『・・・・・・夫婦で仲良く泳ぐのも、イイ・・・・・・・♪』

・・・・・・皆さんもある意味やる気満々ですが・・・・・・こーさん？

「（こーさん、あの・・・・・・・・）」

「（・・・・・・・・・・・一応俺が工藤の後を追う。造、悪いがもしもの時は日高先生に頼んでくれ）」

「（・・・・・・・は、いです）」

・・・・・・やっぱり何かあるのでしょうか？こーさん、いつになく真面目でピリピリしています。ちょっとだけ、自分も気をつけて

おきましょうかね？

「んじゃ、ボク・ムッツリーニ君・吉井君・坂本君・代表で勝負だよ♪あの向こうに見える岩場まで泳いで、タッチしてから戻ってくること。それじゃ、よーい・・・・・ドンっ！」

そう言って皆さんが、蒼い海を泳ぎ渡り始めました。・・・・・・・こーさんに工藤さん、大丈夫でしょうか？ここからじゃ何かあってもすぐには自分も対応できませんし・・・・・・

・・・・・・・・・・・・あ、そうだ。折角腕輪をここでも使えるなら・・・・・・！

☆

愛子Ｓｉｄｅ

夏の海でのボクたちの水泳対決。その戦況はと言うと・・・・・・流石にボクも水泳部なだけあって、一応一番で泳いでいる。だけど流石はムッツリーニ君♪普段泳ぎ慣れていない割にはボクの後ろにピッタリと着いて来ているね。中々引き離せないよ。これは面白いことになりそうだね～♪

あ、ちなみに吉井君と坂本君は海の中で格闘しながら、そして代表はそんな坂本君のそばで泳いで（？）いるね。あはは♪みんな器用だな～

さて、折り返しの岩場まであともう少し。ここまでいい勝負をしてきたけど・・・・・うーん、そろそろちょっとペースを上げてみようかなっ！ムッツリーニ君、キミは何処までやれる？さあ、行くよっ！

『・・・・・・・・・・・・っ！？』

ペースを上げたことにムッツリーニ君も気が付いたみたい。後ろで少しだけ後れを取っているみたいだね。よしよし、このまま引き離してあげるっ！更にペースを・・・・・

ドクンッ！

・・・・・っ！？あ、あれ・・・・・また、だ。今日は・・・・・どうしたんだ・・・・・ろう？目眩が・・・・・

『・・・・・・・・・・・・っ！？工藤っ！』

目の前が急に暗くなって、ボクの周りがどうなっているのかわからなくなる一瞬、ムッツリーニ君の声だけが何故かとても耳に残った・・・・・・

康太Ｓｉｄｅ

っ・・・・・・早い・・・・・・！くそ、やはりそこは水泳部か・・・・・。工藤の後を何とか追ってはいるが、ここまで早いものなのか。あの体力に自信のある雄二や明久もまだ後ろの方だと言うのに！？いや・・・・・・あのバカ２人はまたいらんことをやっているからか。

正直今日の工藤は危ない気がする。不調を隠している・・・・・・と言うより、自分でもその不調に気が付いていない様な感じだ。気が付いていない為にいつものような無茶をやり、そのせいか身体が先に悲鳴を上げている。

・・・・・やはり、強く言って止めるべきだったか？・・・・・・だが、もう遅い。とにかく何とか工藤に付いていくことに集中しなくては・・・・・・！？

「・・・・・・・・・・・っ！？まだ、早くなるのか！？」

俺の心配をよそに、工藤が更にペースを上げる。あのバカ、無茶して・・・・・・！マズイ、引き離されている。・・・・・・追いつ

けないか?これ以上追いつけないと、工藤に何かあった時に対処出来ない。

と、少し考えている間に・・・・・・

「・・・・・・・・・・・っ!?工藤っ!」

突然工藤の姿が俺の目の前から消えた・・・・・・!?クソッ!一瞬でも目を離してはいけないのにっ!何処だ!?何処に!?もし溺れているなら何か反応があってもいいハズ、落ち着いて工藤を探さないと・・・・・・!

《こーさん!潜って!工藤さん意識がないみたいですっ!》

・・・・・!造の声!?声のした方向を見ると、召喚獣に成り箒で空を飛んでいる造の姿が。・・・・・ありがたい。ずっと俺たちを見ていてくれたのか。

《こーさんは工藤さんをっ!自分はサクヤさんに連絡してきますっ!》

「・・・・・・・・・・助かるっ!」

造に礼を言いつつ、俺は息を吸い込み海へと潜る。・・・・・何処だっ!?何処に・・・・・

「（・・・・・・・・・・いたっ！）」

全く意識がなさそうな工藤がそこにいた！・・・・・マズイ、本当にこれはマズイかもしれない・・・・・！急いで工藤を捕まえて、海上へ上がり折り返し地点の岩場に工藤を横たえる。これが工藤が溺れている状態でなくて助かった。もし、暴れられて変に掴まれたりしていたら俺も危なかった。

・・・・・・・・・・・・・だが。

「・・・・・・・・・・・・息、していない」

工藤の呼吸は止まっていた。くっ・・・・・マズイ。造が先生を連れて来て、連れて来たとしてどれだけ時間がかかる？このままじゃ・・・・・工藤が・・・・・！一瞬、考えられる限りの最悪の結果が頭を過る。・・・・・そんなこと、させるかっ！

「・・・・・・・・・・・・何とかするしか、ないか」

青い工藤の顔を見る。いつものような血色の良い顔では無い。・・・・・躊躇している暇などないようだ。間に合わなくなるのはゴメンだ。もしこのまま何もしないなら、さっきから何のために俺は工藤を見てきた？

「・・・・・・・・・・・・スマン、工藤」

一応工藤に一言謝り工藤の側に来て膝を折り顔を近づけ、顎に手を添えて持ち上げる。

『おいっ！工藤はどうした！？ムッツリーニ！？』
『ムッツリーニ！工藤さんは大丈夫なの！？』
『・・・・・・愛子！』

ようやくコイツらも来たようだ。だが、そんなことに構っている暇はない。気道を確保して、工藤の開かせた口に、自分の口を重ねて・・・・・・そして。

『『『・・・・・・・・・・・・・・え！？』』』

☆

造Ｓｉｄｅ

・・・・・その後、サクヤさんの治療で無事に工藤さんの意識は無事に戻りました。サクヤさんの話によると、

『夏の暑さによる疲労とそれから多少の睡眠不足。そんで今までの

疲れがどっと来たみたいだね。アタシの秘蔵の薬も飲ませたし、一眠りすれば元気になるさ。心配しないでいいよ・・・・・・な、そこのカメラ小僧♪』

と、言ってました。それにしても良かったです。サクヤさんを連れて来て良かったと心の底から思いますよ・・・・・普段がまあアレですし。工藤さんを寝かせるためにも、今は全員ペンションに戻りゆっくりしています。これは玲さんの提案なのですが・・・・・・

『どの道皆さんと休憩を入れたかったので、ちょうど良かったです♪』

と、工藤さんが気にやまないように玲さんが先にフォローしてくださりました。ふむ、流石はその辺は玲さんもサクヤさんも大人の対応ですね♪ちょっぴり尊敬しなおしましたよ♪

「それにしても・・・・・こーさん、本当にお手柄でしたね」
「だよねー。まあ、いきなりムッツリーニが工藤さんに・・・・・・その、口づけした時は焦ったけどね？」
「まっ、それと造がムッツリーニと工藤の様子を上空から見ていたことも大きいな」
「そうじゃの。あれのお陰で先生を呼ぶことができたわけじゃし」

いやいや。自分は何もしてませんからね？すべてはこーさんのお陰ですもん♪・・・・・そう、自分がサクヤさんを呼んでいる間にこーさんが工藤さんに人工呼吸をしてくれたことで、サクヤさんが来るころには工藤さんに呼吸が戻っていました。あの迅速な対応が大事に至らなかった理由でもあると、サクヤさんはこーさんの事を

誉めていましたよ。

「・・・・・・・・・・・・・明久。あれは口づけなんかじゃない」

と、こーさんがブスっとした態度でアキさんたちを睨みつけます。

あらら・・・・・・何やらちょっと不機嫌？

「・・・・・・・・・・・・・あんなの口づけなんかじゃない。治療行為。言っておくが、人工呼吸は命にかかわるもの。口づけのような色気のある話じゃない」

「あー・・・・・そうなんですよね。一分一秒の差で成功率が代わってくるものです。あの時こーさんが冷静に対応していなかったらどうなっていたか・・・・・・」

こーさんの言う通り、人工呼吸は開始までの時間によりその人の生命に関わる、物凄く重要な救急行為です。こーさんが躊躇してサクヤさんが来るまで何もしなかったらと考えると恐ろしいですね。

「そう考えるとやっぱり・・・・・・こーさん凄いです！カッコいいです♪」

「まあ、ムッツリーニは保健体育の帝王じゃしの。人命救助もある意味保健体育の授業の基礎知識じゃろうし。じゃがそれを差し引いても、お主のやったことは賞賛に値するするぞい」

「だよね。しかもあんなことまでやったのに鼻血一つ出さないなんて。ムッツリーニ、凄いじゃない！」

「やるじゃねえか、ムッツリーニ。お前は大した奴だよ」

皆さん、口々にこーさんを称えます。ですが、本人はプイッと横を向き・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・別に。俺はただ、工藤が俺の前でもしもの事があったら目覚めが悪いと思っただけ」

と、カメラを弄って知らん顔。・・・・・ふふっ♪こーさん？レンズを拭いているつもりでしょうが、キャップが付いたままですよ～♪皆さんもそれに気づいてかニヤニヤしてますね♪

「・・・・・・・・・・・・それに、俺の保健体育の好敵手を失うのは惜しかっただけ。他意は無い」

「「「「ふーん」」」」

「・・・・・・・・・・・・何だお前ら。ニヤニヤして」

「「「「別に～」」」」

ふふふっ♪とにかくこーさん、本当にお手柄でした。今日は改めてこーさんを尊敬しましたよ♪

と、そんなことを考えていると・・・・・・

ガチャッ　バンッ！

「いやっほーっ！ムッツリーニ君！いるかな～♪」
「・・・・・・・・・・・・・工藤！？」

工藤さんが物凄く元気にドアを開けて自分たちのいる男子部屋に入ってきました。・・・・・・ほ、本当に凄く元気ですね？もう平気なのでしょうか？

「えっと・・・・・・工藤さん、大丈夫ですか？」
「うん♪なんか日高先生に飲ませて貰った薬のお陰で、物凄く元気になったよ～♪」
「そっか。でも無理しちゃダメだよ？工藤さん」
「じゃのう。さっきまで本当にワシらもヒヤヒヤしておったしの」
「まあ、その辺は先生が面倒みてくれてるだろうがな？」

皆さんも工藤さんを心配して口々に言ってきます。でもよかった・・・・・本当によかったです。

「あはは～♪みんなありがとね～・・・・・・さてさて？」

と、一言工藤さんは自分たちにお礼を言うと、こーさんの方へ向きなおしました。

「ムッツリーニ君♪」
「・・・・・・・・・・・・何だ」

と、こーさんは憮然とした態度で工藤さんに応じます。と言っても、

さっきよりも明らかにホッとしているみたいでちょっと嬉しそうですね。

「あのね・・・・・本当にありがとう。助かったよ♪」
「・・・・・・・・・・別に、大したことしてない」
「あはは～♪いやいや、それこそ命に関わるような大したことをしてくれたじゃない♪」

ですよね～。こーさんは立派ですよ。

「それにしても・・・・・まさかムッツリーニ君からキスして貰えるなんてな～♪ボク感激だよ～♪」
「・・・・・・・・・ハン！何度も言うが、あんなのキスじゃない。人命救助なだけ。・・・・・だから安心しろ、あれはノーカンだ」

・・・・・・・・・・ノーカン？何がですか？

「ふふん♪やっぱりね～♪ムッツリーニ君ボクの唇を奪ってくれたこと、気にしてたんだね～♪」
「・・・・・・・・・・別に」

・・・・・・・・・あ、ああ！そういうことですか！何だか、工藤さんが助かった後でこーさんがアキさんのキスしたという発言に不機嫌になってたり何かに気にしていたのって、工藤さんの唇を（不可抗力で）奪ったから・・・・・ですか！？

・・・・・・し、紳士さんなのでしょうね。こーさんマジ紳士。

「確かにそうだよね～♪アレはノーカンだよね？あの情熱的なものは、ね☆」

「・・・・・・・・・・・・・・さっきから何が言いたい？」

こーさん、何だか照れ臭そうですね♪またカメラを（キャップ付きのまま）拭き始めました。

・・・・・・と、工藤さんがこーさんに更に近づいて、

「そうそう。ちゃ～んと、ムッツリーニ君にはお礼をしないといけないよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・だから、別に大したこと――――」

と、こーさんがまた工藤さんに言い返そうと、振り向いた瞬間・・・・・・

チュッ♪

「「「「・・・・・・・・・・・・・・え？」」」」

こーさんと工藤さんの唇の距離はゼロとなりました。

「・・・・・プハッ♪・・・・・・ふふっ、これでノーカンじゃないよね？」

「・・・・・・・・・・・・」

「こんなのじゃお礼にならないカナ？まあ、今日はこれで勘弁してね♪そうそう、キミはどうかは知らないけど、さっきのがノーカンならそれがボクの本当のファーストキスだからね～♪本当にありがと、こーたくん♪それじゃあね～♪」

ガチャ　パタン！

・・・・・そう言って自分たちが唖然としている中、工藤さんは女子部屋へと楽しそうに戻って行きました。さ、流石でしょうかね・・・・・？

「す、凄いね・・・・・・流石は実践派の工藤さん」

「そ、そうじゃの・・・・・・驚いたぞい？」

「く、工藤さんホントにお強いですね・・・・・・いろんな意味で」

「だな・・・・・ムッツリーニ、ありゃお前が一本取られたぞ？・・・・・・ん？おい、ムッツリーニ？」

あれ？こーさんの反応がありませんね？一体どうしたんで・・・・・！？

「・・・・・・・・・・・・」

「「「「!?た、立ったまま鼻血を出して気絶しているっ!?」」」」

器用ですね・・・・・・って、そんなこと言っている場合じゃない!?

「ちょ、ちょっと!?この出血量はマズイよ!?」

「こ、これまでにないくらいの鼻血の量じゃぞ!?」

「さ、サクヤさんを呼んできます!?」

「ムッツリーニ!しっかりしろっ!?くっ・・・・・・やっぱ人工呼吸とさっきのじゃ、意味が違うってわけか・・・・・・」

男子部屋が真っ赤に染まるほどに、こーさんが鼻血を出してしまいました。これは本気でヤバいです!?サクヤさん!何だか本当にサクヤさんがいてくれて嬉しいと今日は心の底から思いますよ!?

とりあえずは・・・・・

「「「「ムッツリーニ（こーさん）！しっかりしろ（してください）（するのじゃ）！」」」」

こーさんを現世に戻すため、全力で何とかしなければ。

ガチャ　パタン！

『あっ、愛子ちゃん大丈夫ですか？』
『もう！あんまり動いちゃダメよ愛子？』
『・・・・・・無理しちゃダメ』
『そうね、愛子。心配させないで――――愛子？』

・・・・・・へなへな　とさっ

『『『あ、愛子（ちゃん）！？』』』

『ちょ、ちょっと！急に座り込んでどうしたのよ！？』
『待ってなさい！今から師匠を呼んでくるから！』
『・・・・・・だい、じょうぶだよ？』
『・・・・・・でも！』
『無理しちゃダメですよ！？早く横に・・・・・・』
『あ、あのね、みんな。ボクさ、みんなのこと今まで結構からかって来たけどね？』

『『『？？？』』』

『・・・・・すっごいね、恋をするって命がけだよね？・・・・・・緊張したあああああああああ！キスってあんなにドキドキするんだ・・・・・・』

『『『『・・・・・・・・・・・・・・はい？』』』』

『あ、あはは・・・・・・どうしようかな・・・・・・ボクってさ、自分でもびっくりするくらいこーたくんのことを好きなんだね・・・・・・ハァ・・・・・・』

『『『『（・・・・・・・・・・・・・・今更？）』』』』

番外編：夏と海とお祭りと《海》～俺と工藤と夏の海～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……王道過ぎかな？まあ、ムッツリーニの紳士さと工藤さんの意外な純粋さを表現したくてこれを書きました。展開が読めすぎでしたかね？あっ！そうそう。作中ムッツリーニも言ってましたが、人工呼吸はロマンチックな響きがあるように思えますが、実際はとても重要な色気なんてない救命処置です。ムッツリーニは保体の帝王ですので、これくらいは朝飯前です♪

こういうことは普段はなかなかないように思えますが、覚えておいて損はないハズです。訓練などする機会があればしっかりと学んでおきましょう！

……って、先生が言ってました。その通りだとは思いますけどね。さて、次回から旅行編・祭りです！……まだ書いている途中なので、多分後2，3日はかかるかも？まあ、気長に待っていただけると嬉しいです♪ではまた次回♪

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～女子と祭りと陰謀と～（前書き）

どうも糖分です。結局更新したくなってつい、更新（汗）堪え性がない作者ですね（苦笑）

さて、８月最後の日ですが……今回からお祭り編です！今年は一度も行ってませんがねっ！かき氷食べたかった……

まあ、まずはその祭りのプロローグからどうぞ～♪今回もよろしくお願いします！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～女子と祭りと陰謀と～

～海への旅行に行く1日前・月野邸にて～

『さて・・・・・・アンタたちに集って貰ったのは他でもない』
『皆さん・・・・・・旅行前、最後の打ち合わせですよ』

『『『『はいっ！』』』』

『おお、いい返事さね♪それでアタシたちの狙い目何だが・・・・・・玲っち』
『はい、先輩♪・・・・・・私とアキくんが昔行った海ですが――その近くで“浴衣コンテスト”が開かれるとの情報が入っています』

『『『『浴衣・・・・・・ですか・・・・・・？』』』』

『そうだ。お前ら・・・・・・想像してみな？アイツらの可憐な浴衣姿を・・・・・・（造の浴衣・・・・・・♪）』
『それはもう・・・・・・夏の最高の思い出となるでしょうね・・・・・・（アキくんの浴衣・・・・・・♪）』

『『『『・・・・・・・・・・・・・・・（ゴクリ）』』』』

『まあ、想像して貰った通りだ・・・・・・これを、何としてもアタシは成功させたいっ！』
『その為には・・・・・・皆さんの協力が必要なんですっ！どうか皆さん、力を貸してくれませんか！』

『『『『はいっ！』』』』

『本当にいい返事だっ！んじゃ、詳しい作戦何だがな――――』

これは旅行へ行く1日前の女性陣の会話の一部。明久と造が明久の家で『玲さん&日高先生対策』を練っていたのと同じように、女性陣も男子の居ぬ間に何やら黒い黒～い陰謀を・・・・・さてさて。これからどうなることやら？

☆

「・・・・・・・・・・・死ぬかと思った」

「それが何のことでもない、鼻血の出し過ぎでね」

「これが笑い話じゃなくて、本当に危ないところだったから笑えませんよね」

「ムッツリーニの持ってきおった血液パック全てに、日高先生の治療フルじゃからの」

「あのまま逝ってたらと思うと・・・・・よくぞ現世に戻ってこれたな？ムッツリーニ」

工藤さんとこーさんのハプニング（？）により、こーさんはもう少しで天へと召されるところでしたが何とか踏み止まれました。確かに工藤さんの行動はビックリしましたが、それ以上にこーさんがここまで反応するとは・・・・・いやはや、凄いですね。

「・・・・・・・・・・・・女子は？」
「お着替えだそうですよ～」
「・・・・・・・・・・・・・・（タラリ）」
「造ダメだよ。今のムッツリーニは危険な状態なのに、そんなこと言っちゃまた生死に関わるよ？」
「どうして今の会話で鼻血が出るのかがわかりませんがね・・・・・・」
「まあ、普通は明久にツッコミを入れたい所じゃが・・・・・・ムッツリーニじゃからの」
「だな。まあ今日はムッツリーニは工藤に付きっ切りで様子を見てたせいで何も撮ってねえからな。その分の反動が今来ているんだろう」

あー・・・・・まあ、そうでしょうね。付け加えるなら工藤さんの先ほどの行動で、少々こーさんも興奮気味何でしょうね～♪

「ん？でも遅くないかな？もう着替えに行くって言ってから３０分は経っているよね？」
「だな。ったく着換えにいつまで時間かけてんだ？」
「あ、ちょっと声掛けてきましょうか？」

また何かトラブルがあっては心配ですし。と、立ち上がろうとすると・・・・・・

「「「「「「「「「お待たせ（です）～♪」」」」」」」」」

女性陣の華やかな声と共に、リビングのドアが開かれます。

「皆、ずいぶん時間がかかったんだね――って、おお！」
「お、凄いな。そんなもん用意していたのか」
「・・・・・・・・・・・時間がかかるのも納得」
「なるほど、浴衣じゃったか。全員似合っておるではないか」
「ホントですね♪皆さんお綺麗です♪」

・・・・・そう、ドアから顔をのぞかせる女性陣全員は、青に紫、ピンクに白と色とりどりの浴衣姿でした。柄もそれぞれ異なり、朝顔に牡丹、葡萄などのセンスのある浴衣姿で中々風情がありますね♪

「へえ～、綺麗だね。髪型も変えてるからグッと色っぽくなってるよ」
「そ、そうですか？ちょっと恥ずかしいですけど・・・・・・♪」

アキさんにそういうことを言われて恥ずかしそうに、でもとても嬉しそうに袖を広げてくるっと回るのは姫路さん。あはは♪楽しそうですね～♪

「まさか私も着る事になるとは思いませんでした。翔子さん、助かりましたよ」
「・・・・・・・・・・着ていないのがあったから」
「ワリィな、玲っち。玲っちの浴衣を取り寄せる事をうっかりしてたよ」
「いえ、先輩。大丈夫ですよ♪先輩も忙しかったようですし・・・・・」

と、玲さんと霧島さん、そしてサクヤさんが話しています。あ、そっか。玲さんはアメリカから帰って来たばかりですし、浴衣を持ってきていなかったんでしょうね。やっぱり霧島さんのを借りたのでしょうか？ちょうどお二人の背丈は近いですし。

ちなみにサクヤさんも浴衣を着ていますね。おお♪あの浴衣って確か昔からサクヤさんが大事にしているやつかな♪懐かしいですね～

「ウチ、浴衣って初めて着るかも」
「あ、そっか。美波は海外育ちだもんね」
「ちょっと歩きにくくて変な感じね」

と、帯や裾に手をやりながら着心地を確かめつつ、アキさんに話しかける島田さん。うんうん♪皆さんよく似合っていますね～♪

・・・・・・・・・・・・って、あれ？

「？？？どうしたんでしょうかね？」
「む？何がどうしたのじゃ？造よ？」
「あ、いえ。何だかアキさんの様子が変なんですが・・・・・・？」

何故かアキさん、島田さんから目を逸らすのに必死ですね・・・・・・？何かあったのでしょうか？

「（・・・・・・それはね♪造くん♪）」
「（・・・・・・吉井君がナミーに見惚れているからなんだよ♪）」
「わっ・・・・・・！？（ゆ、優姉さんに工藤さん・・・・・・？）

」

び、ビックリしました・・・・・・。突然音もなく近寄って来て、自分に耳打ちする優姉さんと工藤さん。アキさんが島田さんに見惚れている？

「（む？何じゃ姉上たちか・・・・・・それで明久が見惚れておったじゃと？）」

「（ふふふ。浴衣だとナミーって特に可愛いよね～？ほら、着物ってあんまりおっぱいが大きくなくても格好がつくでしょ？）」

「（そういうこと。美波は他はかなりレベル高いから特に可愛いく見えるものなの。着物は素晴らしいわ♪アタシや愛子。そして美波みたいに胸が小さい女の子には助かるもの♪）」

「（てなわけで吉井君はナミーにメロメロ何だよ～♪吉井君的には・・・・・水着では姫ちゃん、浴衣ではナミーってトコかな？）」

と、お二人が力説してきます。うーむ、あんまりピンとは来ませんが・・・・・・

「あ、でも確かに優姉さんも工藤さんも本当にお綺麗ですね～♪」

「ふむ。確かに物凄く似合っておるぞい。風情があって良いのう」

「あら♪ありがと二人とも♪（ふふっ♪待っておいてね二人とも。二人にも後で・・・・・・♪）」

「「・・・・・・っ！？」」

あ、あれ？今何か寒気が？・・・・・・流石に夏とは言え、夜だからでしょうか？

「さてさて・・・・・・おーい、こーたくん♪」
「・・・・・・・・・・・・む」

と、工藤さんは颯爽にこーさんのところへ。何だかさっきの件で、余計にお二人の親密度が上がっているかも。ふふふっ♪ホントいいコンビなのかもしれませんね？こーさんと工藤さんは。

「ってあれ？どうしたのさ、こーたくん？」
「・・・・・・・・・・・・別に」

と、こーさんはちょっぴり微妙な反応ですかね？・・・・・・いえ。と言うか工藤さんを直視できていないみたいですね。あれだけの事があったんですから、仕方ないのでしょうかね～♪

「ふふん♪さてはムッツリーニ君もボクにメロメロなのカナ～？」
「・・・・・・・・・・・・（ブンブンブンッ）」
「照れない照れない♪・・・・・んじゃ、お礼の続きでサービス行くよ？」
「・・・・・・・・・・・・？」

と、工藤さんは裾のあたりに手をやり、こーさんに向けて――――

「ちらっ♪」
「・・・・・・・・・・・・っ！？（ブシャァァアアアッ！）」

そして工藤さんのはだけられた浴衣に、こーさん先ほど同様赤い華を魅せ倒れ伏せました。ま、またですか・・・・・・？

「って!?や、やり過ぎた!?ご、ゴメンこーたくん!」
「・・・・・・・・・・・・（これは・・・・・・これで）」
「し、しっかりしてよ!?先生!すみません、こーたくんをお願いします!」

・・・・・・・・・・・・工藤さんの胸の中で、静かに天へと召されそうなこーさん。あー・・・・・いや、工藤さんには申し訳ないですがこーさんの事はもう全て工藤さんに任せましょうね。そっちの方が何だかこーさんにとっても、工藤さんにとっても良さそうですし。

「・・・・・・雄二、どうかな?」
「・・・・・・・・・・・・ま、似合っていないことはなさそうだぞ」
「・・・・・・そっか♪」

と、こちらはどこか照れ臭そうにゆーさんに浴衣姿を披露している霧島さん。あらあら。ゆーさんもちょっぴりお顔が赤いですよ～♪ご馳走様です。

「・・・・・雄二に誉めてもらえた。嬉しい♪」
「おい待て。俺は『似合っていないことはなさそうだ』と言っただろ?別に誉めては――」
「・・・・・前にお義母さんと造が言っていた。『雄二（ゆーさ

ん）はこういう風に誉めているのよ（んですよ）～』って。私もだんだんわかってきた」

「・・・・・・・・・・・造。お前とついでにあの母親と一緒になって、今度ゆっくり話し合わなければならんようだな？」

ＨＡＨＡＨＡ♪嫌ですね？実際そうでしょう？まあ、霧島さんもゆーさんが霧島さんの事をどう思っているのか不安になる時もあると思って、サービスしたことがあるだけですよ～？

ゆーさんの物凄く複雑そうな視線から目を逸らしつつ、皆さんとお話していると・・・・・・

「さて、それでは皆さんお祭りに行きましょうか。間に合わなくなってしまいますからね」

「だな！うっし、んじゃそろそろ出るよ～。アンタら準備はいいね？」

・・・・・？あれ？間に合わなくなるって、別に今の時間なら出店もお祭り自体もまだまだ先でしょうに・・・・・・？どしたんでしょうね？まあ、サクヤさんはお祭り好きでもありますし、少し早めに行きたいんでしょうね♪

「そうですね、玲さんに先生。間に合わなくなったら困りますもんね」

「急ぎましょ。ウチ日本のお祭りってこれで2度目だからすごく楽しみなのよね～」

「・・・・・・遅れたら、まずい」

「ボクもすっごく楽しみ。早く行こっ」

「ほらほら、男子も支度しなきゃ♪」

皆さんもすっごく楽しみなようで、目をキラキラさせて自分たちを急かします。ふむ・・・・・これが祭りの魔力でしょうかね？

・・・・・ちょっと違和感はありますが。女子の皆さん、ちょっと急かし過ぎでは？

「雄二、あんなに急いで何かあるのかな？」

「あ、自分もちょっと気になりますよ？」

「さてな。やっぱり色気より食い気ってことなんじゃないか？俺もかなり腹が減ってきたぞ。気持ちはわからんでもない」

「なるほどの。確かにワシも少々小腹が空いたのう」

「・・・・・・・・・・・・たこやき、やきそば、お好み焼き」

あ、なるほど。確かに屋台のそういう食べ物は、ついつい惹かれますよね。ふむふむ。それでですかね？

「ほら、アキくん。それに皆さんも用意をしてください」

「造、それにヒデっち。もう優子っちは乗ってるぜ？乗んな～」

「はーい――あれ？姉さん、車で行くの？」

「？？？サクヤさん。そのお祭りは、ひょっとして遠いのですか？」

と、車のキーを手にした玲さんとサクヤさんの姿が。あらら？てっきり歩くとばかり思いましたのにね？

「はい。海より離れていますし、着替えも持っていきますので車の

方がいいでしょう」
「それに・・・・・・ホレ。あの子が浴衣に慣れてねえだろ?美波っちが・・・・・・な?」
「「あっ・・・・・・!」」
そっか・・・・・・島田さん、浴衣は初めてだって言ってましたもんね。そうか、それに気遣って早めに出たり、車を出したりと・・・・・・!
・・・・・うんうん♪サクヤさんに玲さん、本当に今日は見直しましたよ!気配りの出来るいい大人の女性って感じで素敵ですもん♪
「んじゃ、先にエンジン掛けてくるね」
「ではアキくんたちも早めに用意をお願いしますね?」
「「「「皆(皆さん)、早くっ♪」」」」
と言って、女性陣は先に出て行きました。さて、それなら待たせるのも悪いですし行きましょうね。
「それじゃ海に続いて夏の風物詩を楽しもうか」
「そうだな」
「・・・・・・・・・・良いショットが撮れるはず」
「まさに夏、といった感じじゃな」
「ですね。いい想い出作りをしましょうね♪」
女子陣が心躍るのと同じように、ワクワクしているのは男子も一緒

♪祭り囃子が今にも聞こえそうなこの夏の夜空に、どうか素晴らしい想い出作りが出来ますようにとお願いをします。

『『『『『『計画通り・・・・・・♪』』』』』』

『・・・・・ふふっ♪・・・・・・上手く行きましたね、先輩』
『おう♪造は結構鋭くて頭の回転も早い分、疑わねえもんな。人の言うことを素直に聞いちまう子だからね～♪』
『そこが造くんの可愛い所ですけど♪秀吉ものんびりしてたし・・・・・逃げられないわよ♪』
『明久君も勘が良いところがありますけど・・・・・・』
『アキもアキでお祭りに夢中みたいね。ホント可愛いわね♪』
『・・・・・雄二も油断してる。これなら♪』
『こーたくんもだね♪・・・・・・まあ、まずはみんなにはお祭りを存分に楽しんで貰って・・・・・・』

『『『『『その後で・・・・・・♪』』』』』

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～女子と祭りと陰謀と～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

今回は男子はナンパはしていませんが、玲さん&日高先生が女子をそそのかしてコンテストに参加させるように仕向けるとのこと！彼女らの陰謀に期待？

それから……その、実は次回からちょこちょこコラボ（？）っていると思います。実は『バカとAクラスと試験召喚』を書いていらっしゃるＬＥＮさんにそこの主人公の“長谷川芳樹”と『バカと元彼（女）とビーチにて』に出てくる“桜井美咲”をお借りしているんですよ（汗）2，3話はちょっとしたモブとして出ているのですが、その後明久や造たちとコラボになるかと？

……いや、コラボは自分で書くのは初めてですし、正直ＬＥＮさんやＬＥＮさんファンの皆さんに怒られないか心配で書いてます。先に言っておきます。ホントすんません（泣）頑張って書きますのでっ！まだ書き終わっていませんが、早めの更新を心がけてみます。

とりあえずはまた次回！読んでいただきありがとうございました！なお、コラボの件は芳樹や美咲が明久たちに接触した時点で活動報告に“コラボしました～”的な内容のものを書くと思いますのでよろしくです！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～僕らと祭りと甘い罠～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です！……また懲りずに更新。更新しないしない詐欺ではないのですが（汗）

えっと、今回最初らへんに前話で話した通りＬＥＮさんの『バカとＡクラスと試験召喚』の芳樹と『バカと元彼（女）とビーチにて』の美咲が出ています。まだ物語に関わってはきていませんがね（汗）

『バカとＡクラスと試験召喚』など、知らない方は是非読んでみてくださいね。先に読んでおくとキャラクターがつかめると思いますし、面白いですし♪

ＬＥＮさんやＬＥＮさんのファンの方に怒られないか不安ですが（汗）とりあえず行きましょか！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～僕らと祭りと甘い罠～

「ここは地獄かな？僕お祭りに来たはずなんだけど？」
「俺も祭りを楽しみに来たハズ何だがな？俺らは呪われているのか？」
「きっと、呪われているのはこの世界何ですよ・・・・・・」
「全く、どうしてこうなったのじゃろうな・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・理不尽」

「「「「「ハァ・・・・・・・・・・・・」」」」」

ここはいつもの男子（？）メンバーの嘆きが満ち溢れる、とあるコンテスト会場裏。祭り囃子が聞こえてくるお祭り会場で、このメンバーはお通夜モードな理由は明久や造がお祭り会場に着いた頃に遡る。

～夏祭り会場にて～

明久Ｓｉｄｅ

姉さんと日高先生の車に乗ってやってきた独特の賑やかさ溢れる夏祭り会場は、早めに出てきたと言うのにそれはもう賑わっていた。

「わあ～♪すっごく活気付いてますね～♪」
「そうじゃのう。造、リンゴ飴があるぞい♪」

「ほう？中々いいとこじゃねえか。結構本格的だしな」
「・・・・・・・・・・・・少し、鉄分を補給しておきたい」
皆も祭りの活気に当てられてか、いつもよりはしゃいでいる。まあ、そう言う僕も勿論ワクワクしているけどね？やっぱり祭りには人を楽しませる何かがあるんだと思う。こういう時は全力で楽しむのが一番良い。さあ、遊びつくそう！

☆

『あれ・・・・・・？アキ、か・・・・・・？』
『ん？どうかしたの芳樹君？』
『・・・・・・いや。今な、アキの姿が一瞬だが見えた気がしたんだが・・・・・・』
『また？芳樹君、確か海でも“アキの姿が”って言ってたよね。流石にここまでは来ないんじゃないの？ここからアキ君たちの住んでいるところまで車で3時間はかかるし』
『・・・・・・変だな？俺がアキと他の奴を見間違うはずないのに・・・・・・？』
『・・・・・・あれれ♪やっぱり芳樹君もアキ君がいなくて寂しいんだ～♪』
『む・・・・・・まあ、確かにアキがいないと退屈ってのはあるがな？てかそれは美咲だって一緒だろうが』
『あー・・・・・・それはまあ同感だね。全く・・・・・・いくら高校が別になったからって、アキ君私たちに電話一つしてくれないなんて酷いよね？』
『いや・・・・・・多分だがアキの場合は電話をしないと言うより、

電話が止められているってオチだろ。その方がしっくりくるし、アキらしいからな』

『そっちか・・・・・・。ととと、感傷に浸ってないで早く行こう！ふふっ・・・・・・祭りはまだまだこれからよ♪』

『あ、ああ・・・・・・（何だか少し、美咲から嫌な感じが・・・・・・逃げるか？いや、下手に逃げるとまた殺されかねん・・・・・・まずは様子を見るか）』

☆

「あら・・・・・・？珍しいですね。ドネルケバブですか」

皆でとりあえずお祭り会場を回っていると、出店の暖簾を見て姉さんが呟く。ん？珍しい？そうだろうか？

「そんなに珍しいの？結構前からなかったかな？定番ってわけじゃないけどよく見かけるし、美味しいよ」

そう言えばドネルケバブは造の家で食べたっけ。あの時は日高先生が作ってくれて、それはとても美味しかったけど・・・・・・やっぱりそれはそれ。出店の美味しさはまた別物だろう。

・・・・・・うん、ちょっとお腹が空いてきたね。

「そうなんですね。５年前くらいにはこういうのはありませんでし

たよ。食べてみましょうかね」
「あっ！だったら僕が買ってくるよ。ちょうど僕も食べたくなってきたし♪」

まあ、多少の出費は目を瞑ろう。姉さんは今日は何だか（海ではちょっと暴れたけど）大人しいし、工藤さんに気を遣ってくれると言う『常識人な姉』を僕らに見せてくれた。ちょっとした姉さんへの感謝も込めて買ってあげよう。

そう思っていると・・・・・・

「アキくん。大丈夫ですよ♪ちゃんと姉さんがアキくんの分も買ってきますので♪」
「・・・・・・・・・・・・へ？」

・・・・・今、何て言ったの？ちょっと聞きとれなかったような・・・・・？

姉さんの言葉に呆気にとられている間に、姉さんはさっさと買いに行ってしまった。どうやらちょっと空いていたお陰で、すぐに買い終わったようだ。

「はい、アキくん♪ちょっと多いので姉さんと半分こです。・・・・・もしかして足りなかったでしょうか？」
「・・・・・・・・・・・ゑ！？い、いや！？大丈夫だよ・・・・・？」

ほ、本当に姉さんが僕に奢ってくれるの！？あー・・・・・う、

嬉しいけどちょっと不気味だね・・・・・・？

「では、アキくん。どうぞです♪」
「あ、僕は後でいいよ。姉さんが買ってきてくれたし、先に食べちゃって」
「そうですか♪ではお言葉に甘えて――――はむっ」

姉さんが湯気の出ているケバブを美味しそうに頬張る。・・・・・・
あ、ホントにお腹空いてきたね。

「美味しいですね。ではアキくん。どうぞ」
「うん。ありがとう姉さん――――美味しいっ♪」

こういう風にお祭りで食べる出店のものってどうして美味しいんだろう？ついつい夢中で食べてしまうね。

「あらあら♪アキくん、足りなかったですか？」
「・・・・・・へ？・・・・・・って！？た、食べ過ぎた！？ご、ゴメン姉さんの分まで食べて・・・・・・もう一個買ってくるよ」

あちゃー・・・・・・気が付けば半分以上食べてしまっていた。まあ、美味しかったからね。やっぱり今度は姉さんの分も買いに行こう。

「ふふっ、大丈夫です。アキくんが全部食べてくださいね」
「いいの？なんかゴメンね？」

「いいのですよ♪さあ、遠慮せずにどうぞ」

とりあえずお腹も空いてたし、姉さんの好意に甘えることに。うん！本当に美味しい！勢いで全部食べてしまった。

「アキくん、口元にソースが付いていますよ♪慌て過ぎです。そんなに急いで食べなくても大丈夫です」

「あ、ゴメン。どの辺に付いてるかな？」

「ふふっ、じっとしててください。・・・・・・はい、取れました」

と、姉さんはハンカチでソースを拭ってくれた。・・・・・・な、なんか物凄く優しいね？いつもがいつもなだけに、ちょっぴり違和感が・・・・・？ま、姉さんも楽しんでいるってことかな？始終ニコニコしてるし。

姉さんに礼を言っていると、横手から別の声が。

「明久君、たこ焼き食べませんか♪」

「アキ、わたあめもあるわよ♪」

と、たこ焼きとわたあめを持った瑞希と美波がそれぞれ僕の口に寄せてくる。おお♪二人ともいかにもお祭りを楽しんでいるって感じで中々絵になるね。本当に『お祭りを楽しんでいます』ってオーラが滲み出ているよ。

・・・・・ところで瑞希？そのたこ焼きは出店のだよね？

「（アキ、大丈夫よ♪瑞希はちゃんと出店で買ったわ♪）」
「（あ、ホント？助かるよ、ありがと美波）」

美波が目で会話してくる。最近美波と目で会話することが可能になったことがちょっと楽しい。・・・・・まあこの会話を使う機会は、このように、主に瑞希の料理を回避する時が多いんだけどね？

「（ううん。・・・・・あ、でも気をつけてね？瑞希さっきは『明久君、手作りの方がいいでしょうか？』って問題発言してたし）」
「（なん・・・・・だと・・・・・？）」
「（一応『アキもこういう時は出店のを食べたいと思うわよ』って言っておいたから大丈夫だと思うわ）」

と、美波が目で会話してきた。ありがと、美波。本気で助かったよ・・・・・

「？どうしたんですか？明久君？」
「あっ、何でもないよ？それじゃ、いただこうかな？」
「そうだったわね♪じゃあ・・・・・」

「「――――はい♪あーん♪」」

と、僕に差し出してくる瑞希と美波。あはは♪二人とも大胆だな～・・・・・あれ？ちょっと待って？『あーん』？こ、これっていわゆる・・・・・

「っ！？ねねね、姉さん！違うんだよ！？これは別に不純異性交遊

ではっ!?」

マズった!?姉さんが隣にいることを本気で忘れていたっ!マズイ、これじゃあ・・・・・・僕の、僕の命が・・・・・・!?

「?アキくん?どうかしたのですか?」

「・・・・・・え?ね、姉さん?」

な、何だ!?姉さんが怒っていない・・・・・・?と言うか、わかっていないのかな?ならばラッキーだ。まあ、これくらいなら不純異性行為になんてならないってことなんだろうね。

「あれ?明久君、お腹空いていないんでしょうか?」

「そうなの?うーん、無理に食べさせちゃ悪いわよね」

と、ちょっぴり悲しそうな顔をする瑞希と美波。おっとっと・・・・・二人が折角買ってきてくれて、食べないわけにはいかないよね?

「えっと、たこ焼きもわたあめも僕食べたいけどいいかな?」

「「はい(ええ)っ♪」」

と、瑞希と美波が『あーん』してくれた、たこ焼きとわたあめを順に頬張る。うん!やっぱり美味しいね♪

「美味しいですか?明久君?まだまだいっぱいありますよ♪どんど

ん食べてくださいね♪」
「アキ、食べ終わったら他を回りましょう♪ウチ初めてのものばかりでホントに楽しみなの♪」

・・・・・ああ、今日はなんていい日なんだろう。瑞希と美波の浴衣姿が見れて（目の保養が出来て）、美味しいものが食べられて（瑞希や姉さんの殺人料理じゃなくて）、姉さんには怒られるどころか優しくされて（なんて良い姉なんだろう）・・・・・ここは天国かな♪

『・・・・・雄二、焼きそば。あと雄二はたくさん食べるから、お好み焼きも買ってある』
『あ、ああ・・・・・さ、サンキュー・・・・・な？』
『・・・・・ラムネもある。飲んで』
『そう・・・・・だな。あー・・・・・お前も食えよ。買うだけじゃ面白くねえだろ？』
『・・・・・雄二と一緒ならいつでもどこでも楽しい♪』
『ば、バカなこと言ってねえでお前も食え！？・・・・・ホレ、火傷すんなよ？ちゃんと冷まして食いな』
『・・・・・うん♪』

『こーたくん、はい。カキ氷だよ～♪』
『・・・・・俺にか？』
『うん、そだよ～♪あ、ちなみにこーたくんって何の味がいいの？』
『・・・・・イチゴ』
『ビンゴ♪ってなわけで、コレどーぞ』

『・・・・・・・・・・一応礼は言っておく。後、お前は病み上がり何だから無茶するな』
『ふふふ、はーい♪まあでも、ボクの方が何十倍もお礼を言いたいからね～？（それこそ一生かけても、ね♪）』

『ヒデさん！それに優姉さんにサクヤさん！あっちにカラーなひよこさんがいましたっ！』
『む！ホントかの？もう絶滅したと思っておったが・・・・・・』
『ですよね！自分も居なくなったと聞いてましたし、ビックリしました！カワイイひよこさんでしたよ！』
『それは楽しみじゃ。ワシも見に行こうかの♪』
『（ねえ師匠？・・・・・もしかして師匠も？）』
『（くくっ♪ああ。造に昔『カラーひよこは特別な奴らでな？アイツらはこの祭りの時期にしか姿を見せてない絶滅危惧種何だよ』って言ったんだよね♪）』
『（ふふっ♪アタシも秀吉に『祭りが終わったら突然姿を消すのよ。本当に希少な存在なの』って言い聞かせて・・・・・こういう風に成長しましたもん♪）』

『『ふふふっ♪可愛いもんだねえ（ものですね）～♪』』

『？まだひよこさん見てないのにどうして可愛いとわかるんですか？』
『姉上、それに先生。二人とも見に行かぬのか？』
『おう、んじゃアタシらも行こうかねえ？』
『そうですね、師匠♪』

ふむふむ。どうやら皆、それぞれ楽しんでいるみたいだね♪これはいい夏の思い出になるよね～♪やっぱりお祭りは最高だよね！

・・・・・・・・・・・・・そう考えてた時期が、僕にもありました・・・・・・

☆

まさに天国のような時間が３０分くらいたった頃・・・・・・

「ん？なんか催し物があるみたいだな？」

「え？なになに？えっと・・・・・『納涼、ミス浴衣コンテスト！町一番の夏美人を見つけ出せ！』？ふーん？どうやら今日の目玉イベントみたいだね」

公園の野外ステージの近くで、雄二がそう言う看板を見つけた。えっと、要するにミスコンかな？こういうのって、意外に見ないけどあるところはあるもんなんだね～

「・・・・・・・・・・今日初めての、シャッターチャンス」

「ミス・・・・・・浴衣？えっと、浴衣の間違いでも探すんですか？」
「造・・・・・・？その発想はなかったぞい？」
「簡単に言うと浴衣を着て、誰が一番可愛いかを競い合うコンテストよ♪」
「このお祭りは町興しも兼ねているようですよ。随分手をかけて宣伝していたようですし」
「みてえだな。なにせ、結構離れたアタシたちの町にまでこの話が来ているんだ。力入れてるねえ♪」

と、造たちも僕らの話に乗ってきた。あ、そうそう。ちなみに造の今の格好は、頭の横に狐のお面、右手にリンゴ飴。左手にはヨーヨーを持って無邪気に楽しんでいる。これで造が浴衣を着ていたら、間違いなく最強の萌え兵器と化していただろう。それから持てない金魚やわたあめなどは秀吉がさり気なく持ってくれていて、わたあめをちょこちょこ造に食べさせている。こんな感じに・・・・・

「それより・・・・・ホレ造。あーんじゃ♪」
「はいですヒデさん♪あーん（パクッ！）」
「どうじゃ？美味いかの？」
「はいっ！あ、ヒデさんもちゃんと食べなきゃダメですよ？」
「ふふっ、わかっておるぞ♪」

・・・・・うんうん。この二人って本当に姉妹みたいだよね♪僕もだけど、そんな二人を見ている日高先生と木下さんが最高にほっこりとしているようだ。そしてこっそり日高先生がそんな二人をムッツリーニレベルの速さで写真を撮っていることは、もうツッコまないでおこう。

それにしても・・・・・へえ?姉さんって、こういうのあんまり好きそうじゃないのに珍しく反応しているね?

「これって浴衣の貸し出しもやっているようですね。なるほど、スポンサーが浴衣店の方ですか」
「中々面白そうね~♪普段こういうの見ない分、なんだか新鮮だわ」
「へえ~ボク、ミスコンがあるなんて、全然知らなかったよ~」
「・・・・・・面白そう」

女子の皆も集まって、まるで僕らを囲むように看板を見る。美波や工藤さんはともかく瑞希や霧島さんがこういうものに興味を示すのも珍しいね。

「あはは。なら参加してみる?皆絶対、いい線いくだろうし」
「ま、お前らはそう言うのには興味ねえだろうがな?」
「・・・・・・・・・・・残念」
「あー・・・・・・確かに舞台に上がるのは大変そうですし」
「見る分だけで良いじゃろう。わざわざ無理をしてまで出らんでも良いしの」

なんて、いつものメンバーで苦笑いをしていると・・・・・・

「ふふっ♪いいですね!皆さん、頑張って出ましょうね!」
「ええ、瑞希!きっといい想い出になるわよね~♪」

・・・・・・なんて、瑞希と美波が爆弾発言を繰り出した。・・・・

・・って、待ったっ!?この二人、ミスコンだってことわかってんの!?もしや何か別のイベントと勘違いしているんじゃ・・・・・・・？

「そうだよね～♪イイ想い出になるよね～？」

「・・・・・・頑張る」

「師匠、頑張りましょうね」

と、Aクラスのみんなも参戦しそうになっている!?ほ、ホントに何を言っているんだろう・・・・・・・!?

「ちょ、ちょっと待った!?皆、ミスコンだよ!?瑞希も美波もわかっているの!?」

「はいっ!わかっています!ちょっと恥ずかしいですけど・・・・・・」

「良い想い出作りの為にウチらも頑張るわ!」

と、笑顔で返す二人。他のみんなも『うんうん』と頷いている。うーん・・・・・・そっか。確かにこれも夏の良き思い出ってことになるのかな?これは皆を止めるのは、逆に申し訳ないかもしれないね。

「そっか。だったら皆エントリーしてきなよ?可愛いし、皆きっと勝てるよ♪」

と、僕がそう言うと、瑞希が最高の笑顔で――――何故だかこっちの背中が底冷えするとびっきりのスマイルで、僕らにこう告げた。

「はいっ！出てみましょうね♪・・・・・・・・・・・・ここにいる全員で！」

――――その瞬間、男子全員が動くっ！これは・・・・・・これは多分、非常にマズイっ！？

「「散開っ！！」」

「・・・・・・・・・・・・退避っ！」

「ヒデさん、自分の箒に捕まって！起動（アウエイクン）っ！科目、現代国語っ！」

「すまぬ、造っ！」

全員、色々と追いかけられることには慣れている。僕と雄二は二手に分かれ、ムッツリーニは自慢の身体能力で駆ける。造は召喚獣と成り、秀吉と共に空へ。それぞれが四方八方へ、ありとあらゆる逃走手段で逃げ出そうと――――

ガッ！×７

――――したが、時すでに遅し。囲まれて敵の手の中にあったウサギたちには、どう料理されるのかを想像するしかないのかもしれない。だって女子の皆は、僕らがミスコンの話をしていた時点で・・・・・

僕は瑞希と美波と姉さん、雄二は霧島さんに。ムッツリーニは工藤さん、そして造と秀吉はそれぞれの保護者に・・・・・・

――――――すでに退路を断たれしっかりと腕や服の袖を掴まれていたのでは、どう足掻いても逃げられないようだ。

「どこに行くの？ア～キ♪」
「明久君♪一緒に出ましょうね☆」
「・・・・・・雄二、コンテストに参加する」
「そうよ、造くんに秀吉。さっきも言った通り、」
「ここにいる全員でコンテストに・・・・・・ね♪こーたくん」
「ふふふっ♪さあ、始めましょうか」
「おう♪・・・・・・宴の始まりだね」

「「「「《っ！？（ぶんぶんぶんぶん）》」」」」

・・・・・・・・・・・・これが、これがそう。天国が地獄へと変わった瞬間だった。甘い甘～い罠にまんまと嵌まった僕らって一体・・・・・・ねえ皆？僕らは今回何も悪いことしてないよね？

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～僕らと祭りと甘い罠～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……はい。コラボなハズが芳樹も美咲も出番がちょっとですみません（汗）次回もこんな感じですが、その次はちゃんと造たちと合流してコラボると思いますのでよろしくです！ＬＥＮさん、キャラ的にこんな感じで大丈夫でしょうか？（冷汗）

さてさて、原作ではナンパのお仕置きと言うことで女装させることになりましたが、自分の小説では初めから女装させるために女性陣をサクヤさん&玲さんが動かしたことになっています。ドンマイ男性陣。

まあ、どいつもこいつも可愛いから問題ないですね！次回は男子による女性陣への説得から始まります。まあ、説得なんて意味ないでしょうがねー（笑）ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～浴衣＆女装と悲しき僕ら～（前書き）

どうも糖分です。……どうしましょう（汗）

えっとですね。海編で４話も使ったので祭り編は減らして書くぞ～♪と思っていたら、祭り編が更新したものを合わせて６話使ってました……ちなみに総集編が２話使っているので旅行編を全部数えると……

海＝４話　祭＝６話　総集編（？）＝２話　合計＝１２話使ってます（冷汗）

おかしい……ペース配分間違えましたかね？ま、まあとりあえず今日も更新です。よろしくお願いします！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～浴衣＆女装と悲しき僕ら～

明久Ｓｉｄｅ

「い、一応聞きたいんだけど・・・・・・何を言っているのかな？僕バカだから全然わかんないや☆」

「そ、そうだよな明久。何故俺らの退路を断ち、女子勢が満面の笑みを浮かべているのか全くわかんねえよな？」

「・・・・・・・・・・・・落ち着けお前ら（ガクガクブルブル）」

《あ、あはは♪サクヤさん？とりあえず、離しましょうか？まずはそれからでしょう？》

「姉上もじゃぞ♪まずはワシらを離してから、ゆっくり話し合いをしようではないか？」

何だかとんでもない発言をして、僕らを捕獲した女性陣の皆さま方。せめてもの足掻きと、話術を持って対談を計ろうと試みる。これが上手くいかなきゃ・・・・・・終わるッ！僕らの人生がここで終わるッ！？

「だって・・・・・・明久君って似合いそうですもん♪」

「瑞希の言う通りよ。浴衣のアキを見たくて、ね？てへ♪」

「・・・・・・雄二の浴衣、見たい」

「造くんに秀吉もさぞ良い絵を魅せてくれるハズよね？」

「こーたくん・・・・・・ボク、こーたくんの全てが見たいの！」

ダメだ・・・・・・まるでダメだ・・・・・・会話として何も成り立っちゃいない！？

「で、でも！浴衣って言っても女装なんて無理があるよ！？」
《で、ですよねー！自分ら何せ男の子ですし！？》
「そうだな！準備も無しにそんなことは・・・・・・」

「「やれやれ・・・・・・だねえ（ですね）」」
「「「「ふふふ・・・・・・甘いっ！」」」」

「「「「《・・・・・・なっ！？》」」」」

「ねえアキ？アキにはまだわからないのかしら？」
「坂本君と月野君の二人は、普段は頭が回るのにまだ気が付かないんですか？」
「・・・・・雄二、造。二人ともう少し頭を使って」
「ふふふっ♪ヒントはここまでどうやって来たか、だよ～」
「こらこら愛子？もう答え言っているじゃない」
「そう言うこった♪・・・・・お前ら考えても見ろ？アタシたちはどうして車に乗ったのかを」

く、車・・・・・・？一体どう言う・・・・・・？

「アキくん。姉さんは言いましたよね？『着替えがあるから車で行く』と」

「「「「《・・・・・・何ぃ！？》」」」」

だ、騙されたっ！？美波の為なんて嘘だったのかっ！？あの着替えって、僕らの着換えって意味！？

「だ、だが待ってくれ！どれだけ用意しようが、この小柄且つ女顔のこの４人ならともかく俺には絶対似合わんはずだっ！ヤルならコイツらを！コイツらでこの場は納めてくれ！」

「「「《雄二（ゆーさん）！？この裏切り者っ！？》」」」

早くも仲間内で裏切り者が。《浴衣コンテスト》って、なんて恐ろしいものなんだろう。あんなに仲良く祭りに参加していたのに、こんなにも早く裏切り者が出るとは。雄二。やはりお前は生かしてはおけんようだな？お前には霧島さん家に婿養子として迎えさせてやるから覚悟しておきなよ？

《そ、それはともかく、自分らが受付をしたらその時点で弾かれると思いますよ！何せ自分ら男です！》

「その通りじゃ！造の言う通り、ワシらはれっきとした男なのじゃからの！」

「「「造、秀吉。ダウト」」」

「「「どう言う意味ですか（意味じゃ）！？」」」

造たちも混乱してよくわからないことを言っている。多分それほどまでに僕らの女装姿を見たくないのだろう。だけど確かに造の言う通り、僕らはきっと受付で弾かれる。そうなればきっと女子の皆も

――――

「安心しな♪お前らの登録は済んであるからな♪」
「ええ♪それも1週間前には♪」

「「「「《・・・・・・・・・・・・は?》」」」」

な、何か・・・・・何かワケがわからないことを言われた気がする。ははっ!わかんないや!姉さんも日高先生も、頭がどうかしているってことくらいしかわからないや・・・・・・

「いや、簡単なことさ。今のご時世、ミスコンなんて嫌悪されることだって多いらしくてな?アタシたちの町にまで宣伝しなきゃ参加者が中々集まらないらしくてね」
「そう言う時期に先に登録しておけば・・・・・受付は、顔出しだけで済むそうなんですよ♪先に皆さんの女装写真も送っていますし、後は皆さんでコンテストに参加するだけですね♪」

「「「「《なん・・・・・・だと・・・・・・・?》」」」」

僕ら全員の背筋が凍りつき、希望が全て打ち砕かれる・・・・・・・そんな音が聞こえた気がした。そうだったんだ。わかった・・・・・・・そう、僕らはわかってしまった。

女子のあらかじめ計算された台詞や動き。僕らの行動をしっかり読み、更にその上をいく行動力。陰謀に勘付かれないように、先に僕らに天国を見せ油断させる狡猾さ。さらに指揮官であろう姉さんと日高先生の『計画通り』って顔・・・・・・それらを全て踏まえると、

「「「「《最初から・・・・・と言うか旅行前から計画を立てていたっ!?》」」」」

「「「「「「何のこと（かねぇ）（ですか）（かしら）♪」」」」」」

なんてこったい・・・・ねえ造?僕らが必死になって姉さんたちの暴走を止めようとしていたのと同じように、姉さんたちもすでに動いていたってことみたいだね・・・・・?しかもこんなに徹底した策を考え行動してたようだ。どうやら僕たちの行動は所詮、このお方達の前では児戯に等しい行為だったんだね・・・・・

「あ、そうそう・・・・・逃げ出したきゃ別に逃げてもいいが・・・・・」

「その場合、多分困るのはアキくんたちですよ?」

「・・・・・・・・・・・・って、言うとどう言うことかな?」

《・・・・・・・・・・・・すっごく嫌な予感がするのですが?》

「・・・・・・・・・・・・俺もだ」

そしてニッコリと、姉さんたちが僕らに宣言する。

「この登録だがな・・・・・お前さん方の“本名”で登録してある。コンテストが始まる前にさっさと名前の変更をしないと・・・・・さて?どうなるかねぇ?」

ちょっ!?ま、待って!?ってことは・・・・・このまま変更しなきゃ“吉井明久”としてコンテストに参加!?い、嫌だっ!それ

は嫌過ぎるっ！？

「それに・・・・・先ほども言いました通り、参加者が意外に少ないイベントです。一度登録すれば・・・・・解除は出来ませんよ♪アキくんたちに残された選択肢は二つです」

「とりあえず、さっさと着替えて名前の変更をしてコンテストに参加するか・・・・・もしくはそのまま参加せずに帰るかだね♪・・・・まあ、その場合は学園に翌日には問い合わせがあるだろうね。“浴衣コンテスト”に参加してくれなかった月野・吉井・坂本・木下・土屋に話をさせてくれと」

「「「「《鬼だ・・・・・鬼がいる・・・・・・！？》」」」」

「ははは っ♪よくわかったね？実はアタシもそっちの生まれなのさ」

なんて無駄に計算された無駄のない無駄な計画なんだろう・・・・・ゴメン、僕らの女装って何がいいのかさっぱりなんだけど？・・・・・世界は一体僕らに何をさせようとしているのかな？

「そんじゃ、アンタら？どうするかい？」

「「「「《くっ・・・・・・・・・・》」」」」

・・・・・とりあえず、瞬時に皆とアイコンタクトを送る。皆の意見は――――

《（・・・・・出るしかないですね）》

「（だな。こうなりゃ、早く名前を変更して予選で落ちるしか道はねえ）」
「（・・・・・・・・・・・不本意だが仕方ない）」
「（そうなるのう・・・・・・・何故にこうなったのじゃろうな？）」
「（もうこうなる運命なのかな？・・・・・・それじゃ決断しよう。僕らは・・・・・・・）」

「「「「《・・・・・・・・・・・出ます》」」」」

――――それはとても・・・・・・とても苦渋の選択だった。

☆

『――――ってなわけで芳樹君、いやヨシコちゃん♪この“浴衣コンテスト”に出ようね☆』
『っ！？散ッ！』

ダッ！

『あらら・・・・・まあ、逃げてもいいけど・・・・・・・っ！』

ダダダッ！　ガシィ！

『・・・・・11秒切った私から逃げられるとでも?』
『速すぎだろっ!?てか、その陸上で鍛えられた自慢の脚を妙なことに使うな!やらんっ!俺は女装なんてやらんぞっ!』
『大丈夫!似合うって。空ちゃんの情報によると、芳樹君は小学校の頃――――』
『やめてくれぇえええええええええ!?俺の黒歴史をダシにするなあああああああ!?』
『あ、そうそう。空ちゃんに芳樹君の写真撮ってきてって言われているんだ。今日空ちゃんが来れない分、よろしくだってさ♪今度は何に使われるんだろうね?』
『待て!?お前ら俺の知らないところで、一体どういう取り引きをしてるんだっ!?』

☆

「ここは地獄かな?僕お祭りに来たはずなんだけど?」
「俺も祭りを楽しみに来たハズ何だがな?俺らは呪われているのか?」
「きっと、呪われているのはこの世界何ですよ・・・・・・」
「全く、どうしてこうなったのじゃろうな・・・・・・?」
「・・・・・・・・・・・・・理不尽」

「「「「「ハァ・・・・・・・・・・・・・」」」」」

そして話は戻ってここは“ミス浴衣コンテスト”会場控室。僕たち5人の女性（笑）軍団は、全員膝を抱えてこの世の不条理を嘆いて

いた。

「女子の皆さま方は・・・・・僕らをどこに連れて行く気なんだろうね？ってか、なんでこんな全力投球を・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・“土屋香美（つちやこうみ）”って一体・・・・・・・？」

「ムッツリーニはまだいいだろ・・・・・・。俺なんて“洪雄麗（ホァン・シュンリィ）”だぞ・・・・・・。女装の上に中国人にされるとは思わなかった・・・・・」

「造よ・・・・・・ワシらに希望はあるのじゃろうか・・・・・・？」

「どうなんでしょうね・・・・・自分の姿を鏡で見て、また鬱になりかけていますよ」

こんな具合に、ここにいる女装野郎ども全員は盛大に嘆いている。

あ、そうそう――

・・・・・僕が吉井秋子（よしいあきこ）、雄二は洪雄麗（ホァン・シュンリィ）。ムッツリーニは土屋香美（つちやこうみ）で、造と秀吉は木下月乃（きのしたつきの）と木下吉乃（きのしたよしの）姉妹・・・・・・

――として登録することになった。いくら本名を隠す為とはいえ、僕らは今何か大切な物を失っているのかもしれない。

「・・・・・ねえ、雄二？雄二は逃げないの？」

「・・・・・俺も出来れば名前変更も出来たことだし、このままとんずらしたい・・・・・が、だ」

「・・・・・うん雄二。ゴメン、わかっているよ・・・・・」

そう、僕らだって嫌なものは嫌だ。鉄人の補習をどうやって上手く免れようかと日々模索する僕と雄二が、このまま黙って姉さんたちの言うことを聞こうなんて考えてはいない。だが・・・・・・

「「どう足掻いても・・・・・この人たち（コイツら）からは・・・・・逃げ切れないっ！？」」

・・・・・逃走防止のために僕には瑞希＆美波か姉さん。雄二には常に霧島さんが必ずスタンバっている。全く隙を見せることのない彼女たちからは、もうどうやっても逃げ切れないようだね？どうやら逃走は極めて困難なようだ。

「・・・・・・・・・・待て。雄二、明久」
「ん？どうしたのさ、ムッツリーニ？」
「あ？何かあるのか？ムッツリーニ？」
「・・・・・・・・・・俺ならアイツらの目を盗んで逃走できる。なのに、それだと言うのに・・・・・・」

「「それだと言うのに？」」

「・・・・・・・・・・何故、何故キサマら絶対逃がすまいと俺を掴んでいるっ！？いい加減離せっ！俺を解放しろっ！？」

ああ、そのこと？嫌だなー♪このムッツリーニともあろうものが、そんなこともわからないのかな？

「だって工藤さんがムッツリーニの浴衣姿見たいって言ってたしさ

？」

「それにだな。今日の工藤はちょっと災難だったじゃねえか。アイツにも楽しんで貰わねえとな？」

「・・・・・・・・・・・・・本音は？」

「「道連れは一人でも多い方がいいだろう？」」

「・・・・・・・・・・・・・お前ら・・・・・・後で覚えておけよ？」

死なば諸共、逃がさない。ムッツリーニよ、間違ってもキミだけ助かろうなんて考えないようにね☆

あ、それから造に秀吉の素直組は・・・・・・

「まあ、絶対にないとは思うが・・・・・・まさか造たちは逃げないよな～？」

「そうですよね、師匠♪逃げるなんて“男らしくない”ことを、アタシの弟たちがするハズないですもんね」

「「ぐっ・・・・・・・・・・・・・」」

「「ん？どうした（のかしら）、ふ・た・り・と・も♪」」

「「ううぅ・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・・ってな具合に、見事に逃げられなくなってしまった。

なんて恐ろしいんだろう。物理的な拘束は何もされていないのに、

造たちにはとてつもなくきつく縛られているように見える。

「皆さん、とても似合ってますよ」

「ふふっ♪凄く、可愛いわ～♪」

「・・・・・困った。雄二の丈がちょっと足りない」

「アキくん。キレイに成長してくれて、姉さんとても嬉しく思います」

「後で皆で写真を撮ろうねっ」

「おっ！それいいねぇ♪先生方に土産として渡す分もちょうど撮りたかったしな！」

「ふふっ♪ホントに最高の舞台に立てるじゃない♪良かったわね」

・・・・・地獄を彷徨う僕らとは対照的に、女子の皆はここにきて最大級の笑顔で楽しんでいる。わからない・・・・・彼女たちは一体、僕らのどの辺が楽しめているのかが、一切わからないっ！？

『それでは予選が始まりまーす！　出場者の皆さんは出場者の皆さんは特設ステージの裏でお待ちくださーい！』

・・・・・係員さんに死刑宣告された。『ここからが本当の地獄だ』と言わんばかりの台詞に聞こえるのは、多分僕だけじゃないハズだ。

もうこれじゃ、僕らは後には引くに引けない。せめてもの足掻きのため、皆と最期の打ち合わせのアイコンタクトをする。

「（それじゃあ・・・・・皆、作戦はわかっているよね？）」
「（ああ。さっきも言ったが作戦は２つ！『予選で絶対に敗退すること』と『俺らの素性がバレないように、女装を隠し通すこと』だ！いいかお前らっ！この二つが万が一にでも成功しなければ・・・・・）」
「（・・・・・・・・・・・・俺らには社会的な“死”が待っている）」
「（いくら学園から離れていても、今は夏休みですし・・・・・・学園の関係者が絶対にいないなんて保障はありませんからね）」
「（ワシらの命題は・・・・・・『女装しておるという事実を隠し、華麗に予選敗退』じゃな？）」
・・・・・皆との最期のアイコンタクトは終わった。それじゃあ、行くよ？
「「「「「夏の祭りの僕ら（俺ら）（ワシら）（自分ら）の戦（いくさ）ッ！負けてたまるかッ！」」」」」
そこには、いろんな意味で負けられない熱き漢たちの後ろ姿（女装姿）があった。そうだっ！僕らの男の尊厳の為にも、絶対に負けてたまるもんかっ！
・・・・・・・・・・・・あ、ちょっと待とう。ちょっぴり違うね。コンテストは負けなきゃいけないのか。
『くそっ・・・・・・何で俺がこんなコンテストに出なきゃならな

いんだ・・・・・・美咲、覚えてろよ・・・・・・・・』

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～浴衣＆女装と悲しき僕ら～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

何と言う先生＆玲さんと女子勢の暴走（笑）でも、先に登録したり精神的に追い詰める辺り、この二人は最凶だと思うんです♪あ、いや。女子の皆様方が最凶なだけでしょうかね？

ちなみに造と秀吉の設定は、木下家の姉妹で姉の木下吉乃（秀吉）と妹の木下月乃（造）ってことになっています。造、秀吉おめでとー♪

さて……次回からいよいよ芳樹とコラボします！ＬＥＮさん、どうかよろしくです！読んでくれている皆さんも本当によろしくです！正直緊張してます（汗）上手くいくかな？ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～俺とコラボとコンテスト～（前書き）

どうも糖分です！皆さん、９月に入りましたがいかがでしょうか？

今回予告していた通り、ＬＥＮさん作『バカとＡクラスと試験召喚』の芳樹が出ています。コラボってます！上手くコラボが出来ているかわかりませんが、よろしくです！

てなわけで、今回もよろしくです！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～俺とコラボとコンテスト～

造Ｓｉｄｅ

サクヤさん&玲さんの悪だくみ＋女性陣のちょっぴり困った好奇心で、どう言うことか浴衣コンテスト（女装）に出なければならなくなった自分たち男子メンバー。只今、係員さんの指示により会場裏まで移動しているところです。

・・・・・まあ当たり前ですが浴衣コンテストに挑もうとしていらっしゃる参加者の本物の女性に比べて、自分たち男子メンバーは絶賛鬱鬱状態♪自分たち６人は、まるで処刑台へと歩みを進める囚人の如く、どんよりとした雰囲気で移動中です。

「・・・・・・・・・・・・って？あ、あれ？６人？」

え、えっと、アキさん・ゆーさん・ヒデさん・こーさん・自分・・・・・５人ですよね？あ、あれ？ではこのコンテストに参加しようとしているであろう、どんよりとして顔を伏せている方は一体・・・・・？

ドンッ！

と、顔を伏せていたためか、アキさんとその方がそれぞれ衝突を。

あらら・・・・・・結構良い音しましたが、大丈夫でしょうか？

「あ、すまね――――すみません」
「ううん。平気だ――――平気ですよ？」
と、アキさんとそのぶつかった方が顔を見合わせて・・・・・・
「「・・・・・・・・・・・・アキ（芳樹）？」」
・・・・・ポカンとして、お互いをじっと見ています。・・・・・・
・あら？ひょっとして、この方アキさんの・・・・・・？

「お、おおっ！アキだ！やっぱアキだな！さっきお前を見た気がしたが・・・・・本人だったか！」
「あっ！良かった！やっぱり芳樹だったんだね！色んな意味で違うからてっきり違う人種かと思ったよ！」
「アキもな！別の方向に成長しているから本気で別人かと思ったぞ。・・・・・と言うかある意味別人でいて欲しかった！」
「嫌だな～！そう言う芳樹に・・・・・まさかこんな最悪な場所で会うなんて本当に夢にも思わなかったよ！」
お互いがお互い肩を叩きあい、ハッハッハ！と笑いあっています。
あ、やっぱりアキさんのお知り合いでしたか・・・・・何だか物凄くギリギリの会話をしている気がするのは気のせいじゃない気がします。それにしても何故この方も・・・・・？

「あ？何だ？明久の知り合いか？随分仲良さげな女じゃねえか？」
「・・・・・・・・・・・と言うか、また女か」
「ふむ、雄二の言う通り、本当にお互い仲がよさそうじゃの？姫路

と島田が嫉妬せんと良いが」

と、ちょっぴり暗い顔でゆーさんたちが自分に話しかけてきます。
まあ、これからコンテストですからね？――って・・・・・ん？女？ゆーさんやこーさんたちは一体何を言っているんでしょうか？

「あの・・・・・？皆さん勘違いしてますよ」

「「「ん？勘違い？一体何がだ（じゃ）造？」」」

「多分ですけど、この人――――」

「ところでアキ。俺はお前に言いたいことがあるんだが？」
「奇遇だね。僕も芳樹にちょっと言いたいことがあるよ？」

そう言ってアキさんとお知り合いの方がお互いの肩をポンッ！と叩くと・・・・・・

「「何で・・・・・・何でそんな恰好しているんだ（しているの）っ！？とうとうソッチに目覚めたのか（目覚めたの）っ！？」」

「――――男性のようですよ？」

「「「・・・・・・は？」」」

移動中の皆さんが『一体何事か?』と振り向くくらいの大音量で、お二人は叫びました。ふむ・・・・・コンテストも何だか更に一波乱ありそうですね・・・・・・?

☆

「・・・・・なるほど、玲さんか・・・・・・まさか戻ってきていたとはな。だが同時に物凄く納得した」
「・・・・・そういうことなんだよ。相変わらず理解が早くて助かるよ、芳樹」

参加者たちが集まるコンテスト会場の裏で、アキさんの中学時代のご友人さんにこの“浴衣コンテスト”に参加した経緯をアキさんが説明しました。この方ゆーさん並みに頭の回転が早いみたいですね。アキさんの簡単な説明でもすぐさま理解してくれました。

「そんでこの4人も、玲さんにやられたってわけ・・・・・か。お前らも苦労してんな。そうそう、自己紹介がまだだったな。あー・・・・・さっきアキに紹介して貰った通りだ。長谷川芳樹。アキとは小・中で一緒だったダチだな」
「なるほどです。自分は月野造と言います。長谷川くん、よろしくですよ♪」
「木下秀吉じゃ。まあ説明は要らぬと思うが、ワシと造は男じゃからな?」
「・・・・・・・・・・・・・土屋康太」
「・・・・・坂本雄二だ。んで長谷川。お前はどっちだ?ホンモ

ノか?それとも何か理由があるのか?」
「あ?一体何の話だ?」
「・・・・・お前、好きでそんな恰好をやっているんじゃねえだろうな?」
「・・・・・お前が言うなと全力で言いたいがな。坂本、お前こそ趣味でやっているんじゃねえだろうな?ん?」

「「お前と一緒にすんな」」

ちょっ!?な、何だか一触即発なゆーさん&長谷川くんです!?いきなりどうしたんですか!?

「え、えっと・・・・・長谷川くんも何か理由があってこれに出ているんですよね?」
「あ、そうだった!僕も芳樹に聞きたいんだった。何で“こんなの”に出ているの?」
「アキ・・・・・言っとくが”こんなの”ってお前にも返ってくる言葉だぞ?・・・・・その、美咲にな」

長谷川くん曰く、美咲さん(どうやらこちらもアキさんの中学時代のご友人のようですね)と言う方に『似合うから♪』と言う理由で、強制参加させられたとのこと。逃げようにもその美咲さんの自慢の脚には敵わず、捕獲され今に至る・・・・・って言うことですね。

ははっ!・・・・・どうしてでしょう。どうして皆さん自分らの女装なんか見たがるのでしょう・・・・・そこに何の価値があるんでしょうか?

「まさか美咲までここにいるとはね・・・・・そっか、それで芳樹は・・・・悪いけど物凄く理解できたよ」
「そう言うこった。そうか、俺もお前らも“ソッチ関係の被害者”ってわけだな・・・・・」
「泣けてきますね・・・・・あ、そろそろ始まるみたいですよ・・・・・？」

係員さんが最初の１０人を呼び出しています。てか、最初から自分たち呼ばれていますね・・・・・・

「では、逝きますか・・・・・」
「造。それは地獄にか・・・・・？」
「出来れば天国に逝きたかったよ」
「アキ、もう贅沢言うな・・・・・」
「救いはないじゃろう・・・・・鬱だ」
「・・・・・・・・・・

いろんな意味で後に引けなくなった男子メンバー（笑）。彼女らの行く末は何処に♪

「「「「「「だから誰が“彼女ら”だ！？」」」」」」

☆

《それでは毎年恒例！“第ＸＸ回・納涼ミス浴衣コンテスト”を開催します！》

物凄く爽快なアナウンスが会場に響き渡り、いよいよコンテストが始まりました。海の近くでもあった為か、チラリと舞台裏から覗いた会場には海水浴に来ていたと思われるお客さんでいっぱいでした。そして自分たちの鬱レベルも、メーターを超えました・・・・・・

《このコンテストは“浴衣の小畑”の協賛による浴衣を題材としたミスコンテストでありまして、名前の通り浴衣の似合う美人を見つけようというものです！》

もしこれに水着審査があった時点で、全てを失うところでした。首の皮一枚でセーフのようですね。・・・・・・まぁ、女装してここにいること自体アウトですがねっ！？

《審査方法は得点式！予選は3名の審査員たちの独断と偏見で！そしてお待ちかねの決勝は、審査員＋観客の皆さまで投票しますっ！なお、予選参加者はなんと６０名！この中から決勝に進むことができるのはわずかに１０名となります！》

ははははっ！十分の一は男が入っていますよ♪やっぱり“ミスコン”って・・・・・間違い探しのコンテスト何じゃないでしょうかね？コンテストに出ている男子を当てるコンテスト♪正解者には、自分たちを罵る権利が与えられますね☆・・・・・・ダメだ・・・・・・泣きたくなってきましたよ。

《では、最初の１０名に登場してもらいましょう！どうぞ！》

係員さんに促され、ステージに渋々歩みを進めます。何の因果か陰謀か。自分たち男子メンバー全員が集結しています。アキさん・ゆーさん・こーさん・ヒデさん・自分にアキさんのご友人の長谷川くん・・・・・・。この場を限定すれば、何と過半数が男子と言う最高に笑えない状況です。

確か町興しの為のコンテストですのに、もしもこのことがバレたら・・・・・・この町は町興し失敗で・・・・・・いえ、深く考えないでおきましょう。頭が痛くなってきましたし。

《それでは少々人数が多いので、２人ずつ出て貰いましょう！１番と２番の方は前の方にお願いします！――はい、では１番の方お名前を教えていただけますか？》

『はい。旅行で東京から来ました東野聡美です』

《特技などはありますか？》

『あっ、はい。特技は――』

最初の方にマイクが渡され、ついに始まりました。マズイ・・・・・・何も策が浮かびません・・・・・・ええぇ！“なるようになれ”です！

皆さんが無事に生き残ってくれることを祈って、全員に目で合図を送ります。てか、出会ったばかりなのに長谷川くんまで瞬時に使えるようになったのは・・・・・・多分彼も苦労なさっているからでしょうね・・・・・・

「（では皆さん・・・・・健闘を祈りますっ！無事に生き残って・・・・・男のプライドを示しましょうっ！）」

「「「「「（応ッ！）」」」」」

《――ありがとうございました。では、５番と６番の方、前にお願いします！》

そんなわけで、ここからが自分たちの戦いです！男たちの生き様、とくとご覧あれっ！

☆

５番：吉井秋子（明久）・６番：土屋香美（康太）の挑戦！

～明久の場合～

《――ちょっと突っ込んで、吉井さんは彼氏はいらっしゃいますか？》

《ついでに下着をつけているかもお聞かせ願いたい》

《はっはっは！アンタはちょっと黙っててくださいねー？吉井さん、今のは無視してください――》

「なっ！？か、彼氏なんかいませんし、下着もつけてませんっ！」

《よ、吉井さん!?こんなセクハラな質問に答えなくて大丈夫ですよ!?だ、男性客の皆さん!ウェーブは止めてください!ここはそういう会場では・・・・・》

《流石だ。“和の心”と言うものを彼女は実によくわかっている。後でオジサンに携帯番号を教えなさい。お小遣いあげるから》

《とりあえずアンタは吉井さんに土下座でもしてろっ!それもある意味“和の心”だろっ!》

・・・・・・・・・・・・・ん?あの、アキさん?

～康太の場合～

《――――では、浴衣の他にはどのような服がお好きですか?》

「・・・・・・・・・・チャイナドレスや着物は言うに及ばずレースクイーンにチアガール看護婦にキャビンアテンダント更にはファミレス店員に女性警察官制服やレオタードとＯＬスーツにセーラー服やブレザーや巫女服に加えてメイド服やテニスウェアなども素晴らしいとなんでもありません。忘れてください」

《こ、これは驚きです・・・・・!土屋さんはクールな態度に可憐な容姿。更に熱いコスプレイヤーとしての一面も持っているご様子。そのギャップは、男性陣からしてみればグッと来るのではないでしょうか!》

「・・・・・・・・・・・わ、忘れて・・・・・・・っ!困る・・・・・っ!」

・・・・・・・・・・・・・・こーさん・・・・・・・・・自重しましょうね？

☆

「何と言うか・・・・・・アイツらやっちまったな・・・・・・もう戻れねえとこまで逝っちまったぞ」
「そうじゃの・・・・・・あやつら凄いぞい。決勝が始まってもおらぬのに、早くも明久とムッツリーニのどちらに票を入れるかで、客が騒ぎ始めておるからの・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・アキよ・・・・・・・・お前は俺の知らない世界へ旅立つのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・こーさん、今日は色々と大変な日ですね・・・・・・・」

思わず男子メンバーの顔がポカーンとなってしまうほど、アキさんたちの発言は強力なものでした・・・・・・おーい？アキさん＆こーさん？何言っているんですかー？お二人ともその発言は非常にマズくないでしょうかー？貴方たちはどこに向かっているんですかー？

『『『『うおおおおおおおおおおおっ！！！！』』』』
『『秋子ちゃあああああああああああああん！！』』
『『こ・う・み！こ・う・み！！こ・う・みっ！！！』』

そして会場が最高に盛り上がります。何かよくわかりませんが・・・・・・審査員の変な質問に真面目に答えてしまったアキさんと自分

の趣味を暴露してしまったこーさん。それぞれが会場の男性を虜にしてしまっていますね・・・・・・。これはその、高得点のようです。はい。

『アキくん・・・・・・♪浴衣姿もとてもとても素晴らしいですね♪』

『明久君・・・・・・いえ、秋子ちゃんは天然っぷりが魅力ですね♪』

『そうね・・・・・・それにアキ――じゃなくて秋子は可愛いし♪』

『こーたくん♪キミはどこまでボクをキュンキュンさせるのカナ♪』

・・・・・失礼、言い忘れていました。会場の男性だけではなく、どうやらそれぞれの想い人も更に虜にして悶えさせていますね・・・・

「アキさんたち・・・・・・多分ですが、決勝逝き確定ですかね・・・・・」

「アキが・・・・・こういう時に決まってバカやるのは、全然変わってないんだな」

「ムッツリーニもじゃの・・・・・何故か知らぬがいつもより判断能力が欠けてはおらぬかの？」

「今日は特にムッツリーニにとっては目まぐるしい一日だったからな。きっと油断したんだろう」

皆さんでアキさんたちが地獄行き決定したことを嘆き憂いていると、アキさんたちが戻ってきました。

「――――ただいまー！いや～♪なんかお客さんに名前を呼ばれたけど、審査員の人が？彼女らは決勝には進ませない！衆愚に晒すにはあまりにも惜しい人材だ！”って言ってたしきっと大丈夫だよね！」

「・・・・・・・・・・・・・・俺は・・・・・・・・明久の・・・・・・こういう時の・・・・・・・バカらしさが・・・・・・・羨ましいっ！」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」

アキさん？多分アキさんは高得点且つ、優勝候補となりましたよ？あとこーさんもかと。・・・・・・ともあれアキさん＆こーさん、ご愁傷様です。ドンマイです。

《早くも決勝進出の切符を手に入れたであろう、吉井秋子さん・土屋香美さん！ありがとうございました！『えっ！？ちょっと！？ぼ、僕も決勝行き！？な、なんでさ！？』お次は７番と８番の方、前へどうぞ！》

哀しき宴は、まだまだ続く。アキさんとこーさんが地獄行き確定した今、現在生き残りは４人。次は自分とヒデさんのターン・・・・・・ですね。

「では・・・・・・ヒデさん、頑張りましょう！」

「うむっ・・・・・・！ワシらの底力。魅せてやろうぞ！」

「「「「（あれ？この二人は何もしなくても、確実に決勝逝きする

んじゃ・・・・・・・？）」」」」

待って！？やる前から勝手に決めないでくださいね！？・・・・・・コホン。それでは自分らの男らしさをむね――ではなく心に抱き、ヒデさん＆自分が前に出ます。さあ、勝負っ！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～俺とコラボとコンテスト～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……うーん。折角のコラボなのに、芳樹もそれから美咲もあんまり出番がありませんね（泣）いや、芳樹たちは次回やそのまた次回に活躍していると思うのでそれまで待ってくださいです。

それからちょっと聞きたいのですが、前話で話した通りとりあえず旅行編は書き終わっているんですが、まとめて更新した方が良いですか？それとも毎日一話づつの方が良いでしょうか？まあ、特にご要望がなければ一話づつ更新しますが……

まあ、その辺は適当に更新しますね（苦笑）とりあえず、予告しておくと、次回が造&秀吉でその次が芳樹&雄二のコンテストって感じです。まさか浴衣コンテスト編がここまで続くとは自分も思いませんでした（汗）

てなわけで、また次回！読んでいただきありがとうございました！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～造&秀吉の姉妹大作戦！～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。夏の思い出は……とりあえず病院と自宅でごろごろと、バカテスを見ることしか記憶にございません（汗）へ？宿題？何それ食えんの？

今回はお待たせしました、造&秀吉のコンテスト～♪サクヤさんや玲さんや優子さんなどの策士がいる中、彼女らがどう動くのかをご期待ください！

さてさて、では今日も張り切ってきましょうか！よろしくです♪

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～造&秀吉の姉妹大作戦！～

7番：木下月乃（造）・8番：木下吉乃（秀吉）の挑戦！

《――7番と8番の方、前へどうぞ！》

「はいです♪」

「ええ。わかりました」

とうとう始まった、ヒデさんと自分の予選落ちをかけた戦い。幸か不幸か自分たちは一緒に出ることが出来ました。・・・・・ふふん♪ヒデさんと事前に打ち合わせているので、作戦はバッチリです！さあ行きましょう！

《何とお二人は姉妹での参加とのこと！これは面白いことになりそうですね！――では先に妹ちゃんから、自己紹介いいかな？》

この際今日は妹や姉と言われても、全部まとめて大目にみます。これは生き残る為の自分たちの最後の足掻きなんですからね！自分の今回の策は、“肉を切らせて骨を断つ”ことが大前提ですし・・・・・

マイクを持たされ、いざ出陣！さあ、作戦スタートです・・・・・・

「はいです！えっとですね、みょーじが木下で名まえが月乃って言います！小学6年生です！・・・・・・はい、お姉ちゃんもじこし

ょーかいだよ♪マイクどうぞです！」
「あらあら♪ありがとう月乃。・・・・・・初めまして、木下吉乃と申します」

『あっ・・・・・・あの子たち海で見たねー』
『いたいた♪妹ちゃん可愛いわよねー♪』
『おお・・・・・・俺の天使ちゃんだ。月乃ちゃんって言うのか』
『吉乃さま・・・・・・やはりあの方は女神さまだ・・・・・・』

ちぃ・・・・・・やっぱり海に来ていた人もいますね。これは相当演技しないと、男だとバレてしまう恐れが・・・・・・気合いを入れて演じなければっ！

『・・・・・・あれ？何だか二人とも、すっごくキャラ作ってない？』
『キャラどころか設定まで瞬時に作り上げてたぞ・・・・・・造の策だそうだ』
『・・・・・・・・・・・・仲の良い姉妹を演じて、客を上手く誘導させるらしい』
『ほう？あの二人そんなことを考えているのか・・・・・・だが、逆効果になりそうな気もするがな？』

逆効果？いやいや、長谷川くん。自分の作戦は完璧なハズですっ！最初から計算してありますからね。まあ、見ててくださいな？

《はい、ありがとうございます！妹さんは天真爛漫な可愛らしい子のようですね。頭の横の狐さんのお面や手にしたリンゴ飴がとても

よく似合っています。そしてお姉さんの方はしっかり者のようですね。それでいてとても浴衣姿が色っぽいですね。――今日はひょっとしてご家族でいらしたのですか？≫

「ええ。もう一人の姉と母とでここまで。ねえ、月乃♪（造！今じゃっ！）」

「（了解ヒデさんっ！）はいです！えっとですねー、“優お姉ちゃん”と“母さま”と一緒に来ましたー♪」

『『母さま（優お姉ちゃん）っ！？・・・・・・ゴフゥ！？・・・・・・萌え、死ぬ・・・・・・！？』』

ドサッ！×２　↑幸せすぎて悶絶し鼻血を出しながら昇天するサクヤさん&優子さん

・・・・・・・・・・・・よっし！まずは遠距離から余計なことをしそうな二人を強制ログアウトさせておきました。ヒデさんと思わずニヤリとしてしまいましたよ♪やりましたね！今回はサクヤさんと優姉さんがある意味一番厄介ですから、まずはその辺で寝ておいてもらいます♪最悪自分らが逃げる羽目になる時の為の退路を作っておかねば♪

『『『（・・・・・・・・・・・・カワイイ。妹にしたいわ）』』』
『『『（・・・・・・・・・・・・お姉さん、すっごく美人）』』』

《なるほど。夏休みにご家族で海とは中々良いですもんね》
《そうか・・・・・お義母さまとお義姉さまはこの会場にいるってことだな?》
《おかしいですねー?何だか発音が違う気がしましたねー?私はとりあえずこの人が犯罪行為に走らないか冷や冷やしていますよー》
・・・・・・・・・・・・?何でしょう?ちょっぴり背筋がぞわぞわしますね?
《えっと・・・・・・それでこのコンテストに出場するきっかけは何でしょうか?》
と、司会者の方が?自分とヒデさんが待ちに待っていた質問”をしていました。きたっ!この瞬間を待っていたっ!ここからが自分とヒデさんの作戦の真骨頂ですっ!
「(ヒデさん、ここからが本番ですね!)あのですねー♪浴衣さんが、とってもきれーだからです!」
「(わかっておる!抜かりないぞい!)こーら?そんな説明じゃお兄さん困っちゃうでしょう?あはは・・・・・ちょっとお恥ずかしいものですが、月乃――妹が?浴衣を着たい”と言いましてですね?
《ふむ?浴衣をですか?》
「ええ。この子、自分の浴衣を持っていないもので・・・・・そ

れでどこで聞いてきたのかわかりませんが、コンテストに出れば浴衣を着られると言ってきてですね」

そう言って苦笑いをする（ように演技を見せる）木下吉乃さんこと、ヒデさんです。・・・・・ふふふっ♪良い感じですね！

《そうですね。このコンテストの参加者には浴衣が貸しだされるわけですもんね》

「そうなんですよ。この子には出来れば浴衣を着せてあげたかったので・・・・・月乃、着たかったもんねー？」

「ねー♪お姉ちゃんとおそろいー♪」

・・・・・ふふん♪お客さんの反応もだんだんミスコンの為に自分たちを見ているのではなく、微笑ましい姉妹を見ているような視線に変わってきました。後一押しかな・・・・・♪

「その・・・・・妹にはちょっと言ってませんが、私としてはこの子をこのような大舞台に上げるのは反対でしたし、私自身舞台に上がる経験が皆無なので・・・・・出来ればその、予選だけで・・・・・ね？」

《ああ、なるほどそう言うことですか♪・・・・・お姉さん、大丈夫ですよ。その辺は上手く対応します。出てくれただけで盛り上がりましたし、こちらこそありがとうございます！》

「すみません・・・・・参加しておきながら、このように場を盛り下げることをしてしまって」

「ん～？お姉ちゃんどうしたの～？」
「・・・・・ううん、何でもないのよ♪月乃、浴衣着れて楽しかったかしら？」
「はいっ！お姉ちゃんありがとうですっ！」
「そう♪それはよかったわ」
『『『微笑ましい・・・・・♪』』』

《うんうん。本当に仲の良い素晴らしい姉妹愛ですね！家族同士の素敵な愛を見ることが出来て、私は感激ですよ！木下姉妹のお二人、ありがとうございました！》

やった・・・・・！決まりました♪これぞ自分とヒデさんの勝利の方程式です♪

『流石造だな・・・・・ここまで計算しているとは』
『・・・・・えっ？何、雄二？どう言うこと？』
『そう言うことか・・・・・アイツらこれで客の同情を煽り、予選落ちする気だな？』
『・・・・・造の作戦と、秀吉の演技による完璧な策』
『あー・・・・・ゴメン雄二に芳樹にムッツリーニ。わかるようにお願い』
『ったく・・・・・いいか？造は“コンテストの事がわかっていない子供の演技”を。そして秀吉は“その妹の為に一緒にコンテストに出ている姉の演技”をそれぞれやっているんだ』
『あの小さいほうの・・・・・月野だったか？アイツはまずコンテストの意味が分からない、純粋に浴衣を着たかった子供を演じる。

木下はそんな妹の事が心配で渋々コンテストに参加している姉の役を演じる。これを見た審査員や客はどう感じると思う、アキ？』

『えっ？そりゃ秀吉というか、そのお姉さんに同情して・・・・・・あっ！審査員も同情して予選だけで帰って貰えるようにわざと票を入れないってこと！？』

『・・・・・・・・・・・・造と秀吉が仲の良い姉妹を演じているお陰で審査員や客たちに、すでにコンテストを見ているのではなく微笑ましい家族を見ているように錯覚させた』

『そう言うことだ。いくら審査員があの二人に票を入れたくても、場を支配している以上あの二人を決勝に進ませるのは空気を読めていないってことで弾かれるだろうしな』

『『『『・・・・・・・・・・・・あの二人、出来るっ！』』』』

作戦の勝利ですね♪ではでは皆さん、お先に予選落ちしてきますね～♪・・・・・・そう、まさに皆さんの言った通りの事を実行しました。“この姉妹を決勝に進ませるのは可哀想”とこの場にいる全員に思わせることこそが、自分らの思惑通りなんですよ！これでこの場での決勝進出はまず消えました。プライドの全てを犠牲にはしましたが、決勝逝きだけは勘弁ですからね！

――――そう思っていました。と言いますか、会場のほぼ全ての方が自分らを帰してあげようと思っているはずでした。

《よし分かった！この二人は絶対に決勝まで進んで貰おうっ！》

「「・・・・・・・・・・・・・へ？」」

・・・・・この審査員以外は。

《ちょっ！？アンタまた妙なことを・・・・・》

《いいかっ！これだけの逸材が予選で落ちて良いハズがないだろう！もしかしたら未来のトップアイドルになれる可能性だってあり得るんだ！・・・・・確かに彼女らを衆愚の目にさらすのは頂けんが、ここにいる全員が彼女らが決勝でどんなハプニングや破廉恥な姿を見せてくれるのかを期待しているだろうっ！》

《何力説してんだゴラァ！謝れっ！今すぐ純真無垢な目でこっちを見ている木下姉妹に謝れっ！》

・・・・・・・・・・・・どうしましょう。目の前が急に真っ暗になり、何か――そう、希望と言う名のヒデさんと自分を支えていた何かが、音を立てて崩れゆく・・・・・そんな気がしました・・・・・

『あの審査員はとりあえずぶん殴りたいが・・・・・確かに一理あるな』

『あの天使と女神が決勝で輝く姿を、俺も見たい・・・・・』

『どうしよう・・・・・私、そう言う属性は無かったはずなのに・・・・・あのお姉様と妹様を・・・・・その、愛でたくなってきたわ』

『アンタも・・・・・？実はその、アタシもなのよ・・・・・このままさよならじゃアタシ後悔するかも・・・・・』

・・・・・・・・・・・・そして、あの審査員の一言でこの場は完全に、自分らが決勝に逝くことが確定した・・・・・・そんな感じがします。

「「あ、あの・・・・・・！」」

『『『『頑張って！木下姉妹っ！』』』』

『『吉乃お姉様！俺たち応援してますよっ！』』

『『月乃ちゃん！可愛いわ！頑張ってねっ！』』

《ちょっ！？観客も皆さんも冷静になってください！？こんなヤツの言うことを聞いてはダメでしょう！？》

《スポンサーに向かってこんな奴とは何だね！失礼だな！》

《今のアンタ以上に失礼且つ、危険な人間はいねえよ！アンタはとりあえず木下姉妹から半径１０ｍの位置に立つなっ！》

「「・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・・・・・・・・った・・・・・・終わった・・・・・・終わってしまった・・・・・・ｏｒｚ

「・・・・・・・・・・・・ヒデさん。ゴメンね？失敗してしまって」

「・・・・・・・・・・・・造のせいではない。造、ワシらはどこまでも一緒じゃぞ」

「ヒデさんっ！」
「造っ！」

ガシッ！　↑やけになって、舞台で涙を流しながら抱擁する造＆秀吉

『『『『キマシタワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！』』』』
『『姉妹百合きたあああああああああああああああああ！』』
『『リアルで見れるなんて・・・・・嗚呼、とても幸せ♪』』

《あああ・・・・・もう駄目だ・・・・・本当にすみませんでした、吉乃さん。ゴメンね、月乃ちゃん》

ホントもうヤダ、この会場。司会者さん以外は紳士淑女しかいないのでしょうかね？と言いますか、司会者さんも物凄く不憫で・・・・・こちらこそすみませんですよ・・・・・

『『『『・・・・・・・・・・造（月野）、秀吉（木下）』』』』

そしてアキさんたちがポンポンっと、自分たちの肩を叩いてくれました。心なしか皆さんの視線が生温かいのは気のせいではないでしょうね。うぅ・・・・・まさか学園外でもこんな目に遭うなんて・・・・・

☆

現在生き残りは2人。次はゆーさん&長谷川くんのターンですね。
自分らはすでに（色々なものが）散りました。ですがまだお二人がいます！お二人とも、自分らの分まで頑張って・・・・・・

『・・・・・くそっ、今更だがお前と出なきゃならんのか長谷川』
『今更だがな。・・・・・オイ、黙っているつもりだったがさっきから何だその態度は？俺に何か恨みでもあんのか？』
『ハッ！ねえよ、んなもん。何でそんなこと――』
『敵意丸出しだろうが・・・・・おまけにほんの少しだが、殺気もあるようだな。流石に俺に向けてはいないようだが、別の何かに向けている感じだぞ』
『・・・・・・・・・・ちっ』
『これでも俺個人がお前に因縁をつけたなんて記憶してないが・・・・あるとしたら――俺が『神童』だってことくらいか？元神童の坂本』
『・・・・・・・・・・やっぱ最初から気が付いてたか。いいか、神童ってもんは所詮肩書きにすぎねえんだよ。身勝手な大人の抱いた唯の夢で、そんなもんは正直下らない』
『・・・・・・・・・そうかもな。だが下らないと言う割には、お前随分『神童』を意識しているようだが？』
『下らないものが俺の目の前にあるからな。やっぱダメだな、お前を見ているとイライラしてしょうがねえ』
『おお奇遇だな？俺もイライラするぞ。俺は自分の過去に他人を巻

き込む、お前みたいなヤツが嫌いだからな、元神童』

『『・・・・・・・・・・・・・』』

・・・・・・・・・・・・って、あれ？何だかお二人とも相性最悪なんですけど！？めちゃくちゃ険悪すぎる空気が・・・・・・ゆーさん、いつものゆーさんらしくないですね・・・・・・？長谷川くんも、さっきアキさんとお話していた時の温厚なオーラから一変してますよ・・・・・・？

と、とにかく波乱の浴衣コンテスト、９番：長谷川ヨシコ（芳樹）・１０番：洪雄麗（雄二）の挑戦スタートです。

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～造&秀吉の姉妹大作戦！～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……途中までは造の策で上手くいってましたが、まあ、そこで上手くいかないのが造&秀吉の姉妹ペア。最初にサクヤさんと優子さんを潰したことも仇となりましたね～♪こやつらはだから弄りがいがあります。

さて、次回は芳樹と雄二のコンテストですが……何やら彼らはコンテストどころではない様子。まあ、次回をお楽しみに～

それと、旅行編が終わったらどうしましょうか？そのまま体育祭兼野球編に突入？それとも何かこの前言ってた記念の話を入れた方がいいですか？

まだ何にも決めてなくて、とりあえず野球編をちょこちょこ書いてますが……何かご要望やアドバイスがあれば言っていただけると嬉しいです。

まあ、その辺は適当にしますね。ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～乱闘・暴走・ミスコン終了～（前書き）

どもです。糖分摂取魔です。

今回は祭り編の最後です。さてさて、いろんな意味で盛り上がっている祭りの結果はどうなる事やら？……実際こんなお祭りがあったら、見てみたいですが……当事者になるのは勘弁ですねー

んじゃ、今日も行きますね～どぞどぞです！

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～乱闘・暴走・ミスコン終了～

造Ｓｉｄｅ

《えー・・・・・私、正直このまま司会をやっていけるのかが不安になってきましたが、とにかく最後までやり通して見せますね・・・・・コホン。それでは気を取り直して、９番と１０番の方、前へどうぞ！》

ゆーさんと長谷川くんが何やらコンテストとは別の件で不機嫌になりつつお互いにメンチを切り合う中、一組目最後のコンテストが始まりました。司会者さんの指示を受け、渋々お二人も前に出ます。まあ、その間もしっかりと目を放さずに睨みあっていますね。

「あれ～？雄二も芳樹もどうしたんだろ？」
「何やらコンテストそっちのけで、お互い睨みあっておるの」
「・・・・・・・・・・・・雄二らしくない」
「ですよね・・・・・・・ゆーさんだったら、こういう場合コンテストをいかに潰そうかを第一に考えますよね？」

それに・・・・・珍しいですね？ゆーさんが露骨にこんな態度を示すなんて。それに長谷川くんもアキさんと接していた時は優しそうな感じがしてて、とても温厚な方と思うのですが・・・・・？

《それではまず、９番の長谷川さん。自己紹介をお願いします》

「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・おい、呼ばれているぞ。ヨシコちゃん？」
「・・・・・・ちっ、その名前で呼ぶな。キモイ奴にキモイことを言われるのは虫唾が走る」
「おいおい、今のお前が言える立場か？」
「・・・・・・お互い様だろ。元神童」
「次にそれ言ったら、とりあえずお前をぶちのめすな」

・・・・・・・・・・・・・ま、まだやっているんですか・・・・・・？お二人とも、コンテスト始まっていますよ～？

「うわー・・・・・芳樹も荒れているけど、雄二はもっと酷いね。何だか今の雄二って一年生の時の雄二みたいじゃない？」
「ああ、あったのう・・・・・あの時の雄二は本当に不良そのものじゃったしの」
「・・・・・・・・・・・・なつかしい」
「あらら？ゆーさんにそんな時代が？」
「うん。今以上に不良っぽかったよ」

それはちょっぴり意外ですね。あ、でも確かに霧島さんから聞いた話だと、ゆーさんも相当波乱万丈な人生を歩んでいらっしゃるとか？人に歴史ありですかね。

《あ、あの～？長谷川さん？自己紹介を・・・・・・》

「（くっ・・・・・・）長谷川ヨシコだ。以上」

《えっと・・・・・・その、自己紹介は・・・・・・？》

「以上だ」

・・・・・あ、あの？長谷川くん？演技しなくていいんですか？物凄く素のままで話してますよ・・・・・？

『あー・・・・・綺麗だけど、物凄く厳しい感じだよね・・・・・？』

『・・・・・それがイイ。俺、ああいうタイプがドストライクなんだよな』

『女王様って感じだよな・・・・・可愛い顔してきっとあれはドSなんだよ！』

それでも何だか、お客さんの反応はかなり高評価のようです・・・・と言いますか、貴方たち誰でもいいなんてことは言いませんよね？とてもお広い守備範囲ですね・・・・・？

『あれ？芳樹君、可愛いのに何だか物凄く不機嫌だね・・・・・？うーん、ちょっとからかい過ぎたかな？・・・・・いや、それにしてはなんか様子が変だけど』

《か、可愛らしい外見とは裏腹に、中々クールな方ですね。そのギャップがいいのでしょうか？》

《すみません、ヨシコ様。いいえ、女王様。是非私を罵って――》

《今日はっ！・・・・・今日はこちらにはお一人で！？》

とんでもないことを言おうとした審査員を、司会者さんが声を張り

上げて止めています。司会さん・・・・・・・貴方の雄姿は、自分が必ず覚えておきますよ・・・・・・この司会者さん、頑張り過ぎでは・・・・・・？それとそこの審査員。いい加減にしないとそろそろ捕まりますよ？

「（イラッ）・・・・・・クタバレ変態」

「ははっ！良かったな、変態審査員にモテてよ？可愛らしいとも言われているし、“男”冥利に尽きるじゃねえか」

「黙ってろ。お前みたいに見るものを不幸にしそうな顔はしてねえから仕方ねえだろ」

「言ってろ。お前みたいな女顔より数段マシだ」

そしてこの二人は司会者さんの話を聞いてませんね・・・・・・正直ゆーさんと長谷川くんって似ていると思うんですが、仲良くなれないのでしょうか？・・・・・・あ、似ているからこそ仲良くなれないってことですかね？

《え、えっと・・・・・・その。そ、それでは１０番の洪さん。自己紹介をお願いします》

これ以上は話が進まないと判断した司会者さんが、今度はゆーさんに話しかけます。本当にこの司会者さんは大変ですよね・・・・・・ガンバです！

「お前も呼ばれてるぞ。せいぜい恥でも掻いて来い」

「うるせえな・・・・・・洪雄麗だ。それ以上でもそれ以下でもない」

全然演技をする気のないのはゆーさんも一緒のようです。・・・・・・今日のゆーさんも、それから長谷川くんも、ちょっぴり怒りっぽいですね・・・・・・？

《あー・・・・・洪さんは中国からのご参加だそうですが・・・・・とても背が高い方ですね。ビックリしましたよ》

《これは素晴らしい。私は背の高い女性が大好きでね?結婚相手には是非こういう方が――――》

《・・・・・・・・・・・・・またかよ》

《ハネムーンはカンボジアなんか・・・・・・がふぅ!?》

《・・・・・・おっと失礼。手が滑りました》

司会者さん・・・・・・今日のＭＶＰは貴方ですよ。これが終わったら、先ほどのお礼を兼ねて一度挨拶に伺いましょうか・・・・・・

『しょ、翔子ちゃん!?落ち着いて!?』

『ば、バカ!?何をトチ狂ってんのよ翔子!?』

『・・・・・・あの審査員始末してくる』

ついでに舞台裏で、霧島さんの本気のオーラが感じられました・・・・・・何だか事態はとんでもない方向へと進んでいる気がするのは、恐らく自分だけではないと思いますよ。

「（ムカッ）・・・・・・何がハネムーンだ。殺すぞ」

「ハハハッ!良かったじゃねえか坂本!お前を好きになってくれる変態がいてよ!」

「うるせえ・・・・・俺はお前のような女装趣味なんてねえからな。ついでにお前と違って、変態にも興味はねえ」
「自己分析でもしてんのか?鏡持ってくりゃあ、おぞましい変態が映ってんぞ?」
「(ブチィ!)・・・・・ったく、ホントにお前はイライラさせてくれるな?とりあえず一発殴らせな、長谷川ヨシコ」
「(ピキィ!)・・・・・感謝しとく。久しぶりに俺も本気でぶん殴りたい相手が出来たぜ?相手になってやろうじゃねえか、元神童」

と、本気でコンテストの事などそっちのけで・・・・・二人はステージの上で、ゆっくりとお互いに拳を構えます。ゆーさんも長谷川くんも、場馴れしているようで構えがとても自然体で――――

「って違う!?あの二人は何で浴衣着て女装もしたままステージジャックして、おまけにどうして喧嘩をしようとしているんですか!?」
「・・・・・あやつら本当に何をしておるのじゃ・・・・・?」
「・・・・・・・・・・・・完全に、目的を見失っている」
「お客さんは・・・・・うん、楽しそうだけどね?」
「そう言うわけにはいかないでしょう?時と場所と服装を考えて・・・・・ちょっ!?二人とも、喧嘩するならステージから降りて!?」

と、自分らの声も届かぬようで――二人が拳を振りかぶり、

《止めるんだキミたち!私をめぐって争うのは!》

ピタッ！×２　↑額に青筋を浮かべ、拳を振りかぶったままの姿勢で固まる雄二＆芳樹

「「・・・・・・・・・・・・（またコイツか！？いい加減ウゼェ！！）」」

――――確かにあの審査員の一言で止まりました。・・・・・ただし邪魔され、刺激されたことにより二人の怒りのメーターが限界突破しそうです。

《とりあえず、ヨシコ女王様！早く私を罵る作業に戻るんだ！》

「・・・・・・・・・・・・・黙ってろ」

《それから雄麗。私はいつキミの両親に会いに行けばいいかな？》

「・・・・・・・・・・・・地獄へ逝ってろ」

《２人だけでなく、ちゃんと秋子も香美も木下姉妹も愛してあげるから安心したまえ☆》

「「「「・・・・・・・・・・・・（ぞくっ！）なっ！？」」」」

・・・・・じゅ、純粋に・・・・・・純粋に怖い！？ここまでの恐怖は、久しぶりですよ！？

《・・・・・テメェいい加減にしろ！とりあえずアンタは今言った方々に全力で謝って、二度と彼女らの前をうろつくなっ！》
《む！貴様、私のハーレムを壊す気か！彼女らは渡さんぞ！それに・・・・・さっきからその口のきき方は一体何だね！スポンサーだぞ、私は！》
《彼女らはアンタのもんじゃねえだろっ！・・・・・上等だ！スポンサーがどうしたっ！司会なんてこの場でやめてやらぁ！》
《な、殴るのは止めたまえ！彼女たちのご両親に会う前なんだから！》
《殴った方がその不細工な面もちったぁマシになるし、彼女たちの平和にも繋がるってもんだっ！大体アンタ、何考えてんだ！？何も考えてねえだろ！》

『・・・・・雄二は渡さない・・・・・！』
『秋子ちゃんをお嫁になんて行かせませんよ！』
『そうよっ！あの子はウチと瑞希の嫁なのよ！』
『こーたくんはボクがお嫁にもらうもんね～♪』
『全く、ヨシコは私の楽しい遊び相手なのにね』

・・・・・・・・・・・・何と言うことでしょう。司会者さんも女性陣も、暴走し始めましたよ！？てか最後の方って誰ですか！？

「・・・・・・おい、長谷川」
「・・・・・・わかっている」
「・・・・・・あの変態野郎から先に殺るぞ」
「・・・・・・お前との決着はその後だな？」

と、拳を下ろして二人は目配らせを。お互い静かに審査員の方へと

向き・・・・・・・

《む?おお!二人ともようやく私のところへ来てくれるのだガフゥ!?・・・・・・・おい司会、いい加減殴るのは――――》

「「・・・・・・・・・・・・・・死にさらせえええええええええええええ!!」」

《グボハァ!?・・・・・・・・・・・・・イイ!も、もっと殴ってくれ!》

《だそうですっ!長谷川さん、洪さん!殺りましょう!》

「「応ッ!望み通り、全力で、殺す気で殴り続けてやるよ!!」」

「長谷川っ!やるなら徹底的に、だ!わかってんな!」

「応っ!坂本!お前も手加減なんかするんじゃないぞ!」

《今まで耐えてきたが・・・・・もう知らんっ!せめて貴様が世に放たれ、女性陣に手を出す前にボコボコにしてやんよ!》

「「《さあ!こっからが本当の祭りの始まりだっ!!!》」」

・・・・・更に暴力事件勃発。司会者さん、貴方は良く耐えてきましたよ。あと、ゆーさんと長谷川くんって、何だか仲良くなってませんか?それも一瞬の内にね。これがいわゆる、男の友情って奴でしょうかね?

それにしてもステージの上は、もう本当に収拾がつきませんね・・・・・

『な、何かとんでもない事になってない？』
『まあ、見ててちょっと面白いけどねー』
『この隙に、ちょっと月乃ちゃんに告白を・・・・・・』
『あっ！抜け駆けすんな！俺は吉乃お姉様に・・・・・・』
『俺は二人とも愛でる・・・・・・』
『オイッ！テメェら何抜け駆けしてんだコラァ！それと最後のヤツ、欲張りすぎだろが！』
『じゃあお前はどっちにすんだよっ！？』
『・・・・・・・・・・・・スマンッ！どっちもいいな！』

『『・・・・・・・・・・もし、造（造くん）とヒデっち（秀吉）に手を出すなら・・・・・・』』

『『『『・・・・・・・・・・っ！？』』』』

『『アタシたちを・・・・・・倒してからにしな（しなさいな）っ！！』』

『『『『あ、貴女方は・・・・・・月乃ちゃんと吉乃さまの、お義母さまとお義姉さま！？』』』』

『きなっ！造に手ぇ出すバカモノ共！アタシがアンタらを全力で滅してやんよ！』
『秀吉と造くんに善からぬことを考えてるなら、存在を跡形もなく消してあげるわ♪』

・・・・・・・・・・・・頭が痛いです。とっても怖～いお二人も完全復活ですか。もう駄目ですね、何をどうやっても収まりが付きそうにありません。ステージの上も会場内も大パニック。祭りの音と共に、サイレンの音まで遠くから聞こえてくる始末。もういいや。とりあえずやることは・・・・・・

「・・・・・造よ。どうするのじゃ？」
「・・・・・・もう、コンテストどころの話じゃないよね？」
「・・・・・・・・・・・乱闘騒ぎ」
「・・・・・・仕方ありませんね。一先ず女性陣と暴れているゆーさんと長谷川くんを回収しましょう。起動(アウェイクン)っ！」

・・・・・お巡りさんにお世話になる前に、皆さんを回収することですかね。ちなみに大暴れの結果、関係者のほとんどが病院か拘置所に入るという結果で終わったそうです。このミスコンは未来永劫開かれることは無いでしょうね・・・・・

？？？Ｓｉｄｅ

～祭りが終わった後・拘置所にて～

「ハァ・・・・・・暴力事件まで起こしたんだからマズイですよね・・・・・・」

ここはお祭りが終わった後のとある拘置所の中。再三に渡って審査員の小畑の暴走を止めようと頑張っていた司会者さんが入れられていた。

ちなみに問題発言をしまくっていたスポンサー兼審査員の小畑は、雄二と芳樹に殴られ続けられた為、一度病院に搬送されているとのこと。運ばれた際、『も、もっと・・・・・』と、笑いながら運ばれていった姿は、何ともおぞましかったと救急隊員が証言する。

「ハァ・・・・・ま、いいか。やってしまった事は仕方ないし」

と、彼が自傷気味に独り言を呟いていると・・・・・

「――――さん、出ていいそうですよ」

「・・・・・・・・・・・え？」

突然警官にそんなことを言われたかと思えば、ほんの数十分で拘置所から出ることが出来た。あれだけの暴力事件を起こして、何の御咎めも無い事に彼が不思議に思っていると・・・・・

「・・・・・司会者さん♪」

「よう！大変だったねぇ？平気かい？」

「え？・・・・・あ、コンテストに出てた木下・・・・・・・えっと、月乃ちゃんだったかな？そちらの方は・・・・・は、初めまして？」

彼の前にはニコニコ笑いながら現れた造と、その横にはサクヤさん

の姿が。

「本当に大変でしたね？・・・・・・あの、お怪我はありませんか？」

「あ、ああ。大丈夫だよ。と言うか・・・・・私、暴力事件を起こしてしまっただけで・・・・・・怪我らしい怪我なんてしていないからね」

と、彼がそう話ながら、改めてちょっと自分の起こしたことを悔やんでいると・・・・・・

「そうそう。そのこと何だけどよ？・・・・・・アンタこれからどうするんだい？」

「え、えっと・・・・・・そうですね。ちょっとヤバいでしょうか？暴力事件なんて起こしてしまって町興しはパァ。・・・・・・首、かなぁ・・・・・・」

まあ、反省はしなきゃいけないけど、やったことには後悔はしてないですが――と、彼は苦笑い。そんな彼に造は一礼をして・・・・・・

「あの・・・・・・ゴメンなさい司会者さん。自分たちのせいで・・・・・・」

「えっ！？い、いや違うからね！？・・・・・・暴力事件は私が勝手にやっただけだし、悪いのはあの小畑（へんたい）だから・・・・・・」

「でも、きっかけを作ったのは自分らです。それに・・・・・・こっちも暴力事件を起こしかけてましたからね。ねえ、サクヤさん？」

「ＨＡＨＡＨＡ！何のことかさっぱりさね～♪まあそれよりも、だ。・・・・・アタシも造もアンタを気にいったわけさね♪アンタ良い奴じゃないかい」
「はあ・・・・・・？」

と、何のことかさっぱりな彼の手を、造はギュッ！と握って・・・・・

「？？？どうかしたのかな？月乃ちゃん？」
「あのですね・・・・・物凄く勝手なお誘い何ですが――ウチで働く気はありませんか？」
「・・・・・・・・・・・え？」
「まあ、それこそ突然過ぎるしアンタにゃアンタの道があるだろうが・・・・・とりあえずアタシの名刺を渡しとくよ～♪困ったらここに尋ねに来な～」
「・・・・・・・・・・・あ、あの？」
「本当にありがとうございました♪あ、何も無くても遊びに来てもらえれば、今日の分も兼ねて必ずお礼をします。サクヤさんの言う通り、もし何か困ったことがあればいつでもいらしてください♪」

そう言うと困惑している彼を置いて、再び造が頭を下げて日高先生と共に去ってしまった。彼の手元に残ったのは一枚の名刺。

「・・・・・・・・・・・えっと？ま、まあ貰えるものは貰っておこうかな」

――――数日後、恐る恐る造の家を尋ねた彼が月野家にお世話になることとなったのは、また別のお話。後に彼はこう語る。

「あの時・・・・・造さまに笑顔で手を握ってもらった時、私はこの人に一生仕えようと心の奥底で決めたのかもしれませんね♪」

とのこと。彼は造の執事として、今も立派に毎日楽しく造に仕えているそうな。

番外編：夏と海とお祭りと《祭》～乱闘・暴走・ミスコン終了～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……うん。何このカオス。最後イイハナシダナーと思った方。多分気のせいです。ある意味造って一番怖いんじゃないかなって、書いてて思いました。簡単に人を堕としてしまうんですもん。天然のくせにね☆

造「どういう意味ですか……？」

おまけに自覚もないですし。次回はバーベキューですね～。あんまり芳樹たちとコラボっていない分、次回とその次に出番を書けるように頑張ります。

ではまた次回！読んでいただきありがとうです！

番外編：夏と海とお祭りと《夏》～和解と昔とバーベキュー～（前書き）

ちょっと遅くなってすみません。糖分摂取魔です。

どうでもいいですが、しばらくバーベキューなんてしてませんね。
あれって外でやる分結構ワイワイやれて楽しいのですが、準備が面倒だった記憶が……おまけに蚊や蜂に襲われて……と、嫌な記憶がいっぱいですね（汗）

ま、それはホントどうでもいいかな。んじゃ今日も張り切って行きましょう。

番外編：夏と海とお祭りと《夏》～和解と昔とバーベキュー～

造Ｓｉｄｅ

「ただいまです～♪皆さん」
「あ、お帰り造、日高先生。どこ行ってたの？」
「ん～？ちょいとスカウトにね～」
「は？」

お祭りのちょっとした後始末をやった後、ペンションの庭に設置されているコンロでバーベキュー準備中の皆さんの元に戻りました。男子メンバーが調理を、女子メンバーが食器類の準備をやってくれています。何故このような分担になったかは・・・・・皆さん、言わなくてもわかりますよね？

「それはそうと・・・・・皆さんすみません、任せちゃって」
「そうさね。本来ならアタシがやんなきゃいけないことなのにさ」
「んにゃ、いいさ。造にも先生にも、正直俺らは迷惑かけたしな」
「俺と美咲もバーベキューに参加させてくれたしな、せめて料理くらいはさせてくれ」

と、ゆーさんと長谷川くんが笑って応えてくれます。とりあえず皆さんを回収する際に暴れていた長谷川くんと美咲さんも一緒に捕獲しておいたので、折角だからとサクヤさんがバーベキューに招待しました。人が多い方が盛り上がるでしょうからね♪

「おい、芳樹。焼きおにぎりなんてどうだ？ただの握り飯より上手いと思うが？」
「それいいな。んじゃ、雄二は醤油を持ってきてくれ。ついでに焼きトウモロコシも作るか」
「何それ！二人ともなんていい仕事をしようとしてくれるのさ！想像しただけで涎が出てきそうだよ」

おお♪何だかゆーさんと長谷川くん、随分仲良くなってますね。お互い『芳樹』『雄二』と名前で呼び合っていますもん。雨降って地固まるですか？・・・・・どちらかと言えば、局地的なスコールだった気もしますがね？まあ、その辺は男らしい友情の築き上げ方でしょうか♪

・・・・・・・・・・・・・・・・それにしても・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・さっきのコンテストは心の傷を負った・・・・・・」
「ちょ！？・・・・・・ムッツリーニ、それはもう忘れようって言ったじゃない！？」
「あー・・・・・・何でしょう。思い出したらまた寒気がしてきます・・・・・・」
「造よ・・・・・・ワシも祭りが終わっても少々ゾッとしておるぞい・・・・・・」
「ハァ・・・・・・今更だが、俺と雄二は何してたんだろうな？冷静になって考えりゃ、相当バカやっちまったぞ」
「なんせ・・・・・女装してたことすら忘れて、演技なしでステージの上でヤバイことしてしまったからな」

「「「「「「ハァ・・・・・・」」」」」」

思わず男子全員が調理することも忘れてしまうほど、深い溜息を吐きつつ黄昏ます。もう・・・・・・ここの海にはしばらく行けそうにないですね。

「でもあのミスコンの結果は気になるなぁ。あのままやってたら誰が優勝してたんだろうね？」

「そうだな・・・・・・まあ、妥当に造か秀吉じゃないのか？」

「・・・・・・・・・・・・秀吉も造も、全員甲乙付けがたい」

「雄二にムッツリーニよ。男のワシらが挙がる時点で妥当や甲乙という言葉とは縁遠いとは思わんか？」

「そもそも１０人やって６人が男性っていう、異例のコンテストですからね」

「まず評価にならんだろ。やれやれ・・・・・・とんだ災難だったな。おまけに女どもには被害が一切ないんだ。何だか理不尽だよな・・・・・・」

とりあえず調理を再開しながら、先ほどのコンテスト結果について男性陣が話します。あまり触れたくない話題ではありますが、女性陣も自分らの女装を批評していますからつい愚痴を溢してしまいますね。

『私はやっぱり明久君だと思います。あの可愛い姿と天然っぷりがたまりませんっ』

『月野や長谷川たちもかなり可愛かったけど・・・・・・やっぱりウチもアキかな～』

『あはは。確かにアキ君って女装似合うよね。芳樹君も可愛かったし面白かったね～』

『・・・・・雄二もカッコ良かった。でもやっぱり雄二は男らしい方が似合ってる』
『ボクはムッツリーニ君の女装姿にキュンキュンきたけどね。あんなに似合うとは思わなかったな～』
『アタシは造くんと秀吉の姉妹コンビね。・・・・・危うく魂を持っていかれるところだったわ。ねえ、師匠？』
『そうさね・・・・・あれが天にも昇るって気分ってやつかい？ありゃアタシたちを確実に堕としに来てたかんな。玲っちはどうよ？』
『そうですね・・・・・私と美咲ちゃんはアキくんと芳樹君の女装には見慣れているので、他の皆さんの格好が新鮮で良かったです』
・・・・・・・・・・・・ん？今凄いこと、玲さん言いませんでしたか？

「「ちょっ！？玲さん（姉さん）！？アンタ一体いつの話してんの！？大昔のことでしょうが！？」」

慌ててアキさんと長谷川くんが玲さんを止めに入ります。・・・・・なるほど、昔から玲さんは変わっていないと。それでついでに長谷川くんがアキさん共々生贄になっていた、と。話さなくてもわかる、玲さんの行動にちょっぴり涙を零します。だって、玲さんの行動はサクヤさんと大体同じだから・・・・・ｏｒｚ

「アキくん、芳樹君。嘘はいけませんよ？アキくんは一昨日の晩にもスカートをはかされていたではないですか。寝ている間に」
「それに芳樹君は毎年新年になると女装しているよね？妹の空ちゃんの手で。私も玲さんも、毎年その芳樹君の女装写真付きの年賀状

を送って貰ってるよ？」

「「初耳だっ！？アンタら何してくれてんの！？一体何を考えてくれてんの！？」」

・・・・・・・・・・・・その後も、玲さん＆美咲さんの口からありとあらゆる黒歴史を暴露されたアキさん＆長谷川くん。食事が始まる頃には二人ともげっそりとなってました。本当にお疲れですね・・・・・・

☆

ちょっとした玲さんたちの暴走はありましたが、ゆーさんの『おーい、そろそろ焼けたぞ！』の言葉と肉汁の焦げるにおいと共に、ようやくバーベキューが始まりました。皆さんもお腹が空いてか、物凄く嬉しそうですね♪

「おう、明久、芳樹。ちょうど焼けてるぞ。たっぷり食え」
「ありがとう雄二。じゃあはい、これ雄二の分の飲み物」
「おいおいアキ。お前雄二の分に火を点けるの忘れてるぞ」

「「「・・・・・・・・・・・・・！！！」」」

ゆーさんがアキさんと長谷川くんの皿に焦げたラードを乗せたので、アキさんはお返しにゆーさんのコップにサラダ油を注ぎ込みます。

そして追い打ちをかけるが如く、長谷川くんがライターを片手に―
――

・・・・・って!?な、仲良くなったのでは無かったんですか!?え、えっと・・・・・喧嘩するほど何とやらですかね・・・・・?まあ、楽しそうなら良いでしょうか?

「ほらほら!アキさんたちも食べましょうよ♪」
「じゃの。お主ら、睨み合っておらんと食わぬか。焦げてしまうぞい」
「・・・・・・・・・・・・うまい」

その言葉を聞いてか、アキさんたちも怒涛の勢いで食べ始めました。やっぱり皆さんお腹空いてたんですね♪幸せそうに食べていますもん。

あ、ちなみにサクヤさんと玲さんはどこから持ってきたのか知りませんが、いつの間にか二人でお酒を飲んでいます。・・・・・今日は運転することは無いとは思いますが、車で来ている以上飲んで欲しくなかったですよ・・・・・玲さんは知りませんが、サクヤさん飲めば止まりませんからね。アレはザルを超えて最早ワクですし。

「ホレホレ♪玲っち、ドンドン飲みな!」
「ええ♪先輩も遠慮せずに飲んじゃってください」

・・・・・・・・・・・・大丈夫かな?ま、大人ですし心配はいら

ないでしょう。その分自分たち未成年は、しっかりご飯を頂きましょうね♪

「わ～あ♪とっても美味しいです！」
「ホント、こう言う時の坂本って料理上手よね」
「・・・・・・私の自慢の夫」
「バカなこと言ってねえで黙って食え。焦げるし、すぐ無くなるぞ」
「・・・・・・うん」
「焦げているとこあったら食うなよ？生はもっとダメだ。あとお前、祭りで全然食ってなかっただろ？ちゃんと腹いっぱい食え。いいな？」
「・・・・・・うん♪」

と、ゆーさんがぶっきらぼうに霧島さんにお肉や野菜などを渡します。どうやら霧島さんの好きなもの且つ、美味しいのを選んでいるみたいですね。これには皆さんも、そして事情を知らないハズの長谷川くんや美咲さんもニヤニヤしてますね♪

「こーたくんもお料理上手だったね♪ホント多彩だよね～」
「・・・・・・・・・・・・・・一般技能」
「むー・・・・・・ボクはあんまり作らないけどな～？」
「・・・・・・・・・・・・・？料理、作れるようになりたいのか？」
「そりゃそうだよ♪こーたくんに食べさせてあげないとね～」
「・・・・・・・・・・・・・あんまりからかうな」
「（からかってはいないけどね？）うーん、でもホント作れるようにはなりたいね」
「・・・・・・・・・・・・・暇なら、」
「ふぇ？何かなこーたくん？」

「・・・・・・・・・・・・暇なら料理、教えてもいい」
「っ！？・・・・・・・ほ、ホント！？い、いいかな・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・・暇なら、な」

あらら♪こっちも何やら良い雰囲気ですか？うんうん、ここは邪魔しないようにしておきましょう。馬に蹴られたくないですし、見て見て胸やけをしちゃいますし♪

「ふふっ♪愛子も代表も、ご馳走様ってとこかしらね？そうそう・・・・・えっと、長谷川君だっけ？彼も料理上手じゃない？」
「ええ。まあ、芳樹君は大抵の事は出来ますからね。アキ君並みに料理は得意ですし」
「あ、そう言えば瑞希は長谷川の事知っているのよね？ってことは美咲とも知り合いだったの？」
「あ、いえ。私は小学校の時の明久君と長谷川君を知っているだけですよ」
「なるほど。私は中学の時にアキ君に会っているんですよ。瑞希さんと面識はないのはその為ですね」

こちらは女性陣のアキさんたちに関する会話ですね。それにしても、へー・・・・・なるほどそう言う知り合い関係だったんですね。
あ、そうだ・・・・・・

「ねえ、アキさんに長谷川くん？一応大まかな説明は聞きましたが、アキさんと長谷川くんたちの関係ってどう言うもの何ですか？」
「おお、ワシも少々気になっておったぞ。お主ら随分仲が良さげじゃが・・・・・・」

女性陣がちょうどアキさんの事を話しているわけですし、ヒデさんと一緒にアキさんたちの昔話でも聞きましょうかね♪

「ん？俺らのか？・・・・・そうだな、俺とアキは付き合い長いし――親友って感じか。コイツと一緒になって昔から色んなことしてたな～」

「うん。中学まで色々と・・・・・その暴れてたね～」

「ふぇ？アキさんが暴れてたのですか？なんか意外ですね？」

ゆーさんもアキさんも色々あったんですね。何だか面白いです♪

「ま、まあ昔の事だけどね？芳樹とは良い意味でも悪い意味でもいつも一緒だったからさ」

「ちなみに姫路のことも知ってるぞ。アイツ昔は・・・・・いや今もかもしれんが、引っ込み思案でな？特にアキの前だとすぐに緊張して俺がいないと話が成り立たなかったくらいだよ」

「ほう？なるほどの・・・・・もしやその頃から姫路は明久の事を？」

「みたいですね～♪変わらずに恋し続けるって素敵ですよね♪」

「お？何だ、お前らもわかってんのか！ハハッ！まあ、随分姫路も積極的になったみたいだな」

「？？？瑞希が積極的になったって、何でわかるの？」

「「「・・・・・・・・・・・・え？」」」

あー・・・・・アキさん？自分が言えた事ではないのですが、ちょっぴり鈍いですね？

「（おい、木下に月野。アキはやっぱり今もこんな感じか？）」
「（“今も”ってことは昔からですか・・・・・・？ええ。姫路さんと、後あちらにいらっしゃる島田さんもアキさんに想いを馳せているのですが）」
「（正直明久の鈍さは目に余るからの・・・・・・まあ、これでも大分進展はしておるのじゃが）」
「（そう・・・・・か。不憫だな、あの二人。上手くいくと良いんだが）」
「？？？ちょっと？三人とも何ヒソヒソ話してんの？」

ま、アキさんならあの二人を幸せにしてくれるでしょうし、温かく見守る事にしましょうね～♪

「いや、何でもない。アキ、お前は『全然変わらない』ってことだ」
「そ、それって全く成長してないってこと・・・・・・？あ！それより芳樹も美咲もどうしてここに？・・・・・・もしかして二人とも付き合い始めたの？」
「あ、そうなんですか？確かに長谷川くんも美咲さんも良いコンビみたいな感じでしたが」
「そうじゃの。祭りで二人で来ておると言うことは・・・・・・やはりお主ら恋人同士かの？」

ちょっぴり気になったので、長谷川くんに聞いてみることに。実際どうなんでしょうね？

「違う、アイツがいきなり『海に行こう！』とか言い出しやがったんだ。面倒だったが逆らったら前みたいに死ぬ一歩手前まで連れて

いかれそうで・・・・・・・で、仕方なく来てみたらと思ったらこれだ」

「そうなんだ・・・・・・苦労してるね。それにしてもあの性格は変わらずかぁ・・・・・・・」

??? あれ? 美咲さんってどう言う性格なんでしょうね? 自分的にはニコニコしていて、とても優しそうな方に見えるのですが。ホラ、こんな風にアキさんと芳樹さんの後ろでニコニコしてますもん。

「・・・・・聞こえてるわよ。二人とも? (ニコニコ)」

「「ひぃ!?」」

・・・・・ね? こんな風にニコニコと。

「あ、美咲さん。すみません、何だかんだで挨拶が遅れて。月野造です♪」

「あら、こちらこそ私や芳樹君までバーベキューに誘ってくれてありがとね♪桜井美咲です。よろしくね」

と、丁寧に挨拶を返してくださりました。うんうん♪やっぱり優しい方みたいですね!

「(月野、騙されてるな・・・・・・)」

「(造、騙されているね・・・・・・)」

「さて・・・・・そこの二人? 今もだけど、何か言った?」

「「何でもありませんっ！？」」

「？？？どうかしたんですか？二人とも？」

「ああ、気にしなくていいですよ月野君。ね、二人とも？・・・・・・ね？」

「（ビクッ！？）そ、そうだね！僕ら何も言ってないし！？」

「あ、ああ！・・・・・・そうだっ！ワリィ月野！お前に話があるんだった！向こうでちょっと話さないか！？」

と、長谷川くんに掴まれたかと思うと、あっという間に皆さんから離されていきました。む？一体何でしょうか・・・・・・？

『あっ！？ちょっと！？ズルイよ芳樹！逃げるなら僕も一緒に・・・・・』

『待ったアキ君。アキ君には色々と根掘り葉掘り聞きたい事があるんだよね』

『（ひぃ！？どうして僕だけ！？）な、何でございましょうか・・・・・？』

『そりゃあ・・・・・・アキ君と瑞希さんと美波さんの関係について、詳しくね☆』

『『あっ・・・・・・』』

『うげっ！？か、勘弁してよ！そんなこと、瑞希も美波も嫌だろうし・・・・・・っ！』

『あ、でも二人ともアキ君の昔話に興味はないかな？良かったらアキ君に根掘り葉掘り全てを赤裸々に聞くついでに、アキ君の昔話を私の知っている範囲で良ければゆっくり話そうか？』

『『っ!?・・・・・・ぜ、是非っ!!』』

『勘弁してえええええええええええええ!?カムバック!造、芳樹っ!!』

『やれやれじゃの・・・・・じゃが、本当に造と長谷川どのはどこへ行くのじゃろうな?』

番外編：夏と海とお祭りと《夏》～和解と昔とバーベキュー～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

ようやく次回旅行編終了です。中々芳樹や美咲に出番を与えられなくて、ちょっと残念ですが何とか綺麗にまとまるように頑張ります！

さて……次回終わったら本気でどうしましょう？まだホントに何も思いついていません（汗）野球編の1、2話程度しか書いてませんしオリジナルな回も……あんまり思い浮かびませんｏｒｚ

そのままで良ければ……多分旅行編の次は野球編（と言いますか、本編？）に戻ります。オリジナル回ってすぐに思い浮かぶ時もあれば、そうでない時もやっぱりありますよね。

んじゃ、愚痴になってしまいましたが今回はこの辺で！読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです♪

番外編：夏と海とお祭りと《夏》～旅行の終りと蓮の花～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。今日ものんきに更新しますね～

今回でようやく旅行編終了です！……な、長かった……以外と疲れました（汗）番外編なハズなのに気持ち、ちょっとした章を書いていた気分です（笑）

コラボを許可して下さったＬＥＮさんやアドバイスをくれた皆さん、いつも本当にありがとうございます！

んじゃ、ボチボチ行きますかね？旅行編最後のお話、スタート♪

番外編：夏と海とお祭りと《夏》～旅行の終りと蓮の花～

造Ｓｉｄｅ

アキさんのご友人の長谷川くんに連れられて（拉致されて？）皆さんと離れたところまでやっていました。ハテ？一体何でしょうかね？

「えっと・・・・・・？それで長谷川くん？一体どんなご用件でしょうか？」
「ん？・・・・・・ああ、いや。一つはちょっと美咲と離れたかったってこともあるんだが」

と、苦笑いをしつつ自分に話しかける長谷川くん。それにしても・・・・・どうしてアキさんも長谷川くんも美咲さんに脅えているのでしょうかね？優しそうな方ですのに？

『ホントだよ。どうしてそう怖がるのかな？・・・・・・ねえ、アキ君♪』
『だ、誰と話しているの美咲は？寧ろ僕はそっちの方が怖いんだけど！？』

「まあ、それは良いんだ。俺がお前に用があるのは、実はもう一つの方でな・・・・・ちょっとな、アキの事が気になってよ？」
「？？？アキさんのことが・・・・・・ですか？」
「そうだ・・・・・・こんなこと、本人に聞いても仕方ないだろうしな」

？？？うーん・・・・・・？まあ、確かにアキさんに関することをアキさん本人に聞いてもしょうがないのですかね？ですが、何故に自分に聞くのでしょうか？

「あのぅ・・・・・・どうして自分にお聞きになるんですか？言ってませんでしたが、自分アキさんとはまだ出会って半年も経っていないですけど・・・・・・？」

「ほう？・・・・・・なら余計にだな。それだけ短い期間で、あんなにもアキがアンタを信頼しきっているんだ。月野、アンタになら色々聞けそうだ」

「ん～・・・・・・買いかぶり過ぎでは？アキさんが信頼しているなら――例えばゆーさんだってそうでしょうし」

「月野を買かぶっているかは俺が判断すればいい。それはなさそうだがな・・・・・・ついでに言うと、雄二に聞くと絶対はぐらかすだろうしな。雄二がアキの事を真面目に答えてくれると思うか？」

凄い・・・・・流石にアキさんのご友人とあって、とても芯がしっかりしている方のようです。しかも自分の考えをしっかり持っていらっしゃっている上に、頭の回転も早いですね。どことなく、ゆーさんとお話しているような感じがします。

「それに・・・・・・正直月野は、他のどの連中よりまともに見えるからな・・・・・・」

「それは流石に言い過ぎでは！？」

あ、あんまり否定できそうにないのが悲しいですがっ！？

「あー・・・・・コホン。それで?アキさんの事で聞きたいことって言うのは?」
「・・・・・それなんだがな・・・・・・なあ、月野。お前から見てアキは大丈夫に見えるか?」
「・・・・・・・・・・・・はい?」

何でしょうね・・・・・?何と答えればいいかわからない質問ですが・・・・・・?

「ワリィ。ちょっと抽象的すぎだな。・・・・・俺が聞きたいのは、その簡単に言えば――アキはあの学園で楽しくやっているか?ってことだ」
「・・・・・・・・・・長谷川くん?」
「まあ、知っての通りアイツはバカだ。付き合ってるとホントに呆れるようなポカもやっちまうことだってある。思い返すと哀しくなるようなバカなことも平気でやらかすことだってある。それも誰も予想しない所でな」
「さ、さり気なくアキさんの悪口全開ですね・・・・・・?」

アキさんが聞いたら泣き出しますよ・・・・・・?流石にね。

『なんだろう・・・・・今親友に全力でバカにされたような気が・・・・・泣きたくなってきたんだけど』
『アキ君こそ、一体誰に向かって何を話しているの?』

「・・・・・だがな?アイツはとびっきり優しいバカだ。アイツ

の優しさは俺も・・・・・あそこにいる美咲も、それから多分アキと出会って交流した事がある奴なら皆知っているハズだ」

「！長谷川くん・・・・・・！」

この人・・・・・そうか、アキさんの事を本気で心配して・・・・・！

「だからな・・・・・本人にゃ言いたくないが、ちょっと不安になってな。あのバカ全然連絡を寄こさないし。とある噂では・・・・・その、学園のバカ代表にされていると聞いた。今日だって、無理やり女装させられてたみたいだしな・・・・・」

「そこで・・・・・心配で、自分にアキさんが学園でどんな感じかを聞きたいってことですね？」

「・・・・・そうだ。アイツが今どんな感じか、教えて貰ってもいいか？」

ふふふっ♪・・・・・なるほど？アキさんの親友さんなだけあって、長谷川くんってやっぱりとても友達思いの優しい方なんですね♪これもアキさんの人を惹きつける力ってものでしょうかね？

「そうですね・・・・・まあ見ての通り・・・・・女装させられる。クラスメイトから女性関係で嫉妬される。教師からもバカにされて、家に帰れば玲さんに弄られる。学園では観察処分者に認定されて日々大変な毎日を送っていますが・・・・・」

「・・・・・・・・・おいおい」

あ、長谷川くんの目が物凄く据わってますね。まあ、こんなこと言われちゃ、普通はアキさんを案じて怒るのも無理はありませんが・・

・・・・

「でも・・・・・・アキさんはそんな毎日がとっても楽しそうですよ♪皆さんと過ごす学園生活を、アキさんは全力で楽しんでいます♪」

「・・・・・・それ、信じてもいいのか？」

「うーん・・・・・・確かに自分の言葉を信じて貰うのは難しいですが――」

ちょいちょいと、長谷川くんに手招きして皆さんがバーベキューをしている元の場所を指差します・・・・・・そこには――

「ふふふっ♪アキさんも、それから皆さんも・・・・・・良い笑顔でしょ♪あれが自分たちの日常なんですよ♪」

「・・・・・・・・・・・・そうか。わかりやすいな、アキは」

指差した先には、アキさんを中心に笑いあいながらバーベキューを続ける皆さんの姿が。多分ですが・・・・・・長谷川くんなら、これで納得してくれると思います。アキさんの事をよく知っていらっしゃる親友だからこそ、アキさんのあの笑顔の意味が特にわかるでしょうし♪

「全く・・・・・・相変わらず緊張感のない笑い顔だよな。そこがアイツらしいんだが」

ホッとした顔を見せながら、長谷川くんも笑みを浮かべます。今までで一番優しい笑顔です。・・・・・・この人もアキさんのことを

大事にしている、とても優しいアキさんの親友さんなんですよね♪
うむ！決めました！

「そう・・・・・ですね。それにしても、“ヨーさん”が優しい方って確信できて良かったです！これからもよろしくです、ヨーさん！」
「・・・・・・・・・・“ヨーさん”？なんだそれ？」
「ヨーさんはヨーさんですよ！呼びやすいのでヨーさんで！」
「・・・・・・・・・・俺の事かよ！？待て待て、俺の事は普通に呼んでくれ」
「むー・・・・・じゃあ、ヨッシーさん？」
「それは緑の恐竜だな。却下」
「じゃあ・・・・・えっと・・・・・よ、ヨン様？」
「アウトだっ！それは色々とマズイことになるだろ！？芳樹でいい！てかお前に任せるととんでもない渾名が付けられそうで怖いっ！？」

ひ、酷いです・・・・・まさか出会って数時間の方にそんなことを言われるなんて・・・・・ｏｒｚ

「うぅ・・・・・じゃあ芳樹さんで。・・・・・不満は残りますが、よろしくです芳樹さん」
「やれやれ・・・・・こっちこそよろしく、造」

そして、若干心残りはありますが・・・・・自分と芳樹さんはワイワイ騒いでいる皆さんの元に戻りました。でも良かったです、芳樹さんと友達になれて♪

それから小一時間が経ち・・・・・・・

☆

「うむ。いい食べっぷりじゃったな」
「ん～・・・・・・なんか、ちょっと食い足りねえな」
「あ、でも食材はもうありませんよ？」
「あちゃー失敗したなぁ・・・・・・食材の計算間違ったみたいだ」

皆さん大いに食べてしまって、食材らしい食材が全て無くなりました。クーラーボックスの中には、もう氷とお水しかありませんね。

「スマンな・・・・・・俺と美咲までご馳走になったから」
「あらら・・・・・・ゴメンね？何か買ってこようか？」

と、申し訳なさそうに自分らに謝るお二人が。本当にお二人とも優しいですね♪

「いいえ。2人分追加して持ってきましたし・・・・・・予想以上に皆さんが食べたってことです。お二人が気にする事ではないですよ♪」
「そうじゃの。お主らは食事の手伝いもしてくれたし、感謝しておるぞ」
「そう言うこった。・・・・・・それに買いに行こうにも、足が潰

れてんぞ？」

と、ゆーさんがクイッと指差した先には・・・・・・

「「すー・・・・・・すー・・・・・・」」

サクヤさんと玲さんが眠っている姿が。あらら・・・・・飲みすぎでしょうかね？風邪を引かないように後で部屋に連れて行きましょうかね。

「しかし・・・・・もう少し何かあってもいい気もするな」

「だよね～僕もちょっと足りないかも？」

「ふふっ♪皆育ち盛りね♪まあ、そう言うウチも何かデザートでもあると良いんだけどね？」

「あっ♪それいいですね！甘いものは別腹ですし」

「そうじゃの・・・・・じゃが流石に無い物ねだりはできぬしの」

「・・・・・・・・・・・我慢」

と、いつものメンバーで笑い合っていると・・・・・・

「あっ！でしたら私、デザートを作って・・・・・・」

「「「「「っと思ったら、急にお腹が一杯にっ！？もう食べれませんっ！？」」」」」

「？？？そうですか？残念です」

・・・・・危ない危ない。油断すると命に関わることを完全に忘れてました。折角ここまで命を繋いできましたのに、ここに来てまた生命の危機が身近にあるなんてっ！姫路さんの持っているランチボックスから死の匂いがしますね・・・・・・

これは・・・・・姫路さんの最強の武器がいつ使用されるかわかりませんね・・・・・対策しておきましょうか。また一瞬で全員アイコンタクトを行います。何も知らない被害者を出さないためにも、ね？

「？どうかしたのか、アキ？」
「アキ君、顔青いよ？平気なの？」
「あっ、うん。・・・・・ねえ、二人とも。明日の朝まで、もしもご飯を食べる事になったら僕に最初に食べさせてくれないかな？」
「へ？・・・・・別にいいけど、やっぱりアキ君お腹空いてるの？」
「ははは・・・・・どうだろね・・・・・」
「・・・・・・・・・・・アキ？（コイツ、何か隠してんな？だが何だ？アキをここまで脅えさせるものは？）」

「翔子。お前も飯の時は俺に先に食べさせろ。勝手に食べたら・・・・・その、危険だからな」
「・・・・・よくわからないけど、雄二がそう言うなら」
「そうしろ・・・・・頼んだぞ・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・工藤。もしもの時は、俺に飯を食わせてくれ」

「っ！？ど、どうしたのさこーたくん！？（何このシチュエーション！？こ、こーたくんにご飯を食べさせるってこと！？こんなの知らないよっ！？）」
「・・・・・・・・・・・・頼む」
「あ、うん！？わ、わかったよ！」

「ねえ、優姉さん？優姉さんが食べる時、自分に食べさせてくれませんか？」
「ワシもじゃ・・・・・・姉上、スマンが食べさせてくれぬかの？」
「！？え、ええ！わかったわ！いつでもどこでもね！」

「？？？皆さん一体どうしたんですか？やっぱりお腹空いているんでしょうか？」
「・・・・・・・・・・・・アイツらは、その・・・・・・・護る為に闘っているのよ」
「？？？は、はあ・・・・・・？」

姫路さんの持つランチボックスに被害者の会のメンバー全員が脅えながらも、楽しい今日は日付を代えていきました。まあ、こう言う緊張感もいい想い出になりますよね？ね！？

☆

芳樹Ｓｉｄｅ

祭りの翌日。アキや造と分かれた俺と美咲は、電車に揺られて家路へと向かう。・・・・・・ついでに俺の視界も揺れてるがな。

「それにしても・・・・・・アキ君変わってないけど変わったよね」
「・・・・・・どう言う・・・・・・意味だ？」

フラフラな俺をよそに、突然美咲がいつものコイツらしからぬ事を言いだした。なんだ急に？

「ん～とね？・・・・・・相変わらず優しいけど、しっかりし始めた感じがするんだ」
「・・・・・・と、言うと？」
「きっとさ、いい友達がいることと・・・・・・大事な人たちが出来たからだと思うんだ。アキ君が瑞希さん、美波さんと話している時ってさ・・・・・・私や芳樹君が見たことない顔をしてたし」
「・・・・・・そうだな」

・・・・・・まさかコイツがこんなことを言うとはな。いや、コイツだからか。・・・・・・伊達にアキを三年間見てきたわけじゃないだろうしな。

「まあアキ君も、それから瑞希さんと美波さんもこれからもあの関係を続けられるかわからないし、不安もあるかもしれないけど・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・けど、何だ？」

「私は・・・・・アキ君にも、あの二人にも幸せになって欲しいな。あの三人と話してたらさ、応援したくなったんだ。アキ君もだけど、あの二人良い子だから」
「・・・・・俺もそう思う。まあ、俺らが心配しなくても・・・・・アキなら平気だろうさ」

何せ、アイツには頼りになりそうな友人がたくさん身近にいるからな。造に雄二。それに康太や秀吉・・・・・アイツら中々面白い奴らだしな。アキを頼むぜ、お前ら?

「まあ、そう言うことだね!――ねえ。今度暇になったら、アキ君たちの学園に行ってみない?楽しそうだよ?」
「・・・・・暇になればな」
「まあ、その時は引きずってでも、縄使ってでも連れてくるけどね?」

・・・・・コイツは・・・・・まあ、これもコイツらしいが。そんなことより――うぅ・・・・・マズイ、身体が言うことをきかない・・・・・

「それにしても・・・・・どうかしたの芳樹君?何だかさっきからちょっと具合が悪そうじゃない?乗り物酔いするタイプだっけ?」
「・・・・・うぅ・・・・・」
「?おーい?ホント平気?」
「・・・・・美咲。アキの幸せを願うなら・・・・・」
「・・・・・へ?」
「・・・・・ついでに、アキの胃袋の心配もしてや

るんだ」
「・・・・・・は？」

朝食時、アキや造たちの行動があまりに妙だったから・・・・・・
ほんの少し、本当に摘む程度に姫路の料理に手を出したんだが・・・
・・・

アイツ・・・・・・まさかあそこまで（殺人）料理のレベルを上げ
ているとは・・・・・・な。アキ、造・・・・・・どうか、逞しく
生きてくれ（ガクッ！）

「芳樹君？・・・・・・あれ？寝たのかな？」
「・・・・・・・・・・・・（シーン）」
「まあ、疲れたんだろうね？お休みー」

☆

～サクヤさんの車の中～

「それにしても、造くんたち随分疲れていたんでしょうね？寝顔が
とても可愛いかったですよ」
「そうそう！こーたくんも子供みたいに無邪気に寝てたよー！」
「・・・・・雄二も。男の子は、いつまでも子供だって」
「ま、はしゃぎすぎて疲れたんだろさ。楽しんで貰えて何よりさね

！」
「はいっ。凄く楽しかったですよ！師匠、本当にありがとうございました！」
「・・・・・ありがとうございます」
「先生ありがとう！」
「よしなよしな！アタシ自身が楽しんでいただけさね！そう言われると照れちまうよ！」
「師匠ったら♪それにしても本当に、造くんたちあっという間に寝ちゃったわよね」
「・・・・・車に乗る前からフラフラしてた」
「そうだよね。朝ご飯を凄い勢いで食べたと思ったら、すぐに眠そうにしてたもんね」
「そういやそうだったね。瑞希っちが残念だっただろうが・・・・・まあ、起きれば感想が聞けるだろうさ」

～玲さんの車の中～

「明久君、可愛らしい寝顔です！」
「ふふっ♪余程楽しくて、疲れ果てたんでしょうね」
「・・・・・・・・・・・・・」
「それに・・・・・・・やっぱり昨日の夜はお腹が空いてたみたいですね」
「何せ私たちの分まで食べてしまいましたからね。それも凄い勢いで♪」
「・・・・・・・・・・・・・」
「そんなに食べてもらえたら、やっぱり嬉しいですよね！ね、玲さん！」

「ええ!何せ今日の朝食は・・・・・・」

「「私たちが愛情を一杯込めた、特製朝食ですから♪」」

「・・・・・・・・・・皆、ゴメン。ゴメンね?アキ、ウチを護ってくれてありがとう・・・・・・」

「???どうしたんですか?美波ちゃん?」

「美波さん?もしかして何かありました?」

「何でも・・・・・・無いんです。しばらくは、しばらくはアキたちを起こさないように、そっとしておいて下さい。せめて・・・・・・それだけでも・・・・・・」

「「???」」

美波が静かに涙を流していたその頃、造たちいつもの五人は何故か朝別れたハズの芳樹と蓮の花が咲き誇る川辺で再会していたそうな。

南無南無♪

番外編：夏と海とお祭りと《夏》～旅行の終りと蓮の花～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……中々コラボ難しいですね。と言いますか、コラボと言うより完全に一キャラクターとして芳樹や美咲を使わせてもらいました。ＥＮさん、本当にありがとうございます！彼らをもっと活躍させたかったんですが、自分の力が至らなかったとこもあり思ったほど活躍できていないかもです……すみませんでした。

えっと……反省はそこまでとして、次回は前から言った通り……何にも考えてません（汗）皆さんに色々とアドバイスを頂いてはいるものの中々形になっていなくてですね（冷汗）頑張って夏休み編を〆る話を書いてはいるものの、もしかしたらすぐにギブして野球編に逃げるかもです（涙）

とりあえず、更新がかなり遅くなるかもしれません。旅行編で正直力出しすぎました。なるべくは頑張って書きますので、しばらくお待ちください。もし、何かネタ提供いただけるなら飛んで跳ねて喜びます！すぐには書けないでしょうが（汗）

それではまた次回！読んでいただきありがとうございました♪

番外編：それぞれの夏の過ごし方：前編（前書き）

どうも糖分摂取魔です♪ようやく夏を〆るお話が書けました！

……書けましたが、またまた長くなりすぎました。正直かなり短めのお話を書くつもりでしたが、前編・後編を書かないと納まらないくらいの文章量に（汗）オリジナルは書いてて楽しいので、ついつい長く書いてしまいますね（苦笑）

んじゃ、そろそろ行きますかね？まずは前編へＧＯ！

番外編：それぞれの夏の過ごし方：前編

旅行から帰ってきてしばらく経った、とある夏休みの一日。普段学園生活に勤しんでいる造たちも、夏休みとくればまた違った日々を過ごしているでしょう。さてさて、今回はそんな彼らの一日を見てみましょうか。

～造と木下姉弟と先生方のとある一日～

造Ｓｉｄｅ

こんにちは皆さん。自分は月野造と申します。文月学園２学年Ｆクラス所属です。え？もうそんなこと知っているって？それは大変失礼しました。

「・・・・・・造よ。ワシらは何をしておるのじゃろうか・・・・・・？」

「・・・・・・ヒデさん。それは決まっているじゃないですか・・・・・」

自分の隣にいらっしゃる方は、木下秀吉くん。自分は彼をヒデさんと呼んでおります。まあ、皆さん言わなくてもわかっていらっしゃるとは思いますが、自分とヒデさんは正真正銘、誰が見ても性別は男です。誰が何と言おうと男です。

ちなみにここは自分の住む家の自分の部屋です。本来はヒデさんと

優姉さんとで、課題を終わらせるつもりだったのですが・・・・・・

「ハァ・・・・・・なんて可愛らしいのかしら♪」

「全く・・・・・・優子っちは良い仕事すんな♪」

「ふふっ♪先輩に優子さん、鼻血が出てますよ♪」

「「「造くんも木下君も似合ってますね～♪」」」

「「・・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ」」

・・・・・・・・・・・・夏休みにもかかわらず、何故に高橋先生や遠藤先生や船越先生。それに玲さんまでいらっしゃるのかは、もうこの際どうでもいいです。まあ、休みですしサクヤさんに会いに来たってことで大目に見てもいいでしょう。ですが・・・・・・

「なんで・・・・・・なんでこんなものを着せられるのでしょうか・・・・・・」

「姉上は・・・・・・最近は本当にいつでもどこでも油断ならぬな・・・・・・」

「「「「「「可愛いキツネさんにネコさんね（ですね）（だねぇ）♪」」」」」」

「「・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ」」

・・・・・・・・・・・・もう説明はいらないと思いますが、いつもの如く色んな服（？）に着替えさせられ、おもちゃと化した自分

とヒデさん。完全に油断してました・・・・・・

「課題を終わらせて・・・・・・油断しきってた頃に襲うとは・・・・・」

「しかもワシらが課題を終わらせた瞬間に先生方が、ここを訪れるなんての」

そう、自分らがちょうど課題を一通り仕上げ、一息入れようとした時『休憩入れな～お茶菓子持ってきたよ～』と、サクヤさんの声が聞こえてきました。油断してヒデさん共々部屋を出た瞬間、急に眠気がきて・・・・・そして目が覚めたら――後は言わなくてもわかりますね？

うぅ・・・・・また謀られました・・・・・自分とヒデさんがどれだけ逃走が上手くなろうとも、それを嘲笑うかの如くありとあらゆる手段を以ってコスプレさせるこのお方たち。『今日はアタシの友人が来るから』って朝サクヤさんが言ってましたが・・・・・そのご友人が先生方とはね！？てか、今日は玲さんまで来るなんて・・・・・

「って言いますか！皆さんこんなものどこで買ってくるんですかっ！？」

「姉上！これは姉上が持ってきておったじゃろうっ！？ワシは弟として恥ずかしいぞいっ！」

とりあえず隙を窺いつつ、話をしながらじりじりと後退します。だって・・・・・皆さんの目が本気で危ないですもの・・・・・

「ん?この服の事?別に買ってないわよ?作ったもの」
・・・・・・・・・・・・・・今、何気に凄い事優姉さんが言いませんでしたか?
「・・・・・すみません、もう一度お願いします」
「??だからこれアタシが二人の為に作ったのよ」
「「・・・・・・・・・・・・・ええっ!?これを!?」」
聞き間違いじゃなかった!?しょ、正直お店のとしか思えないほど綺麗に作ってあるのですが・・・・・!?優姉さんってこういう服飾の才能でもあるのでしょうか・・・・・?
「あ、姉上・・・・・・まさか毎晩やっておったのはこれか!?・・・・・昔は、針に糸を通すことさえアレだった姉上じゃというのに・・・・・・!?」
「ふふっ♪趣味は過去を塗り替えるのよ!解説するわね!造くんの着ているソレはね、この間造くんが月乃ちゃんとして生まれ変わった時の浴衣をベースに作りなおしてみたの♪キツネさんのしっぽとお耳がとってもキュート。ポイントとして、袖は手が隠れるくらいにしてみたわ!」
「誰が生まれ変わったですか!?もう死にたくなってきたのですがっ!?」
「そんでもって秀吉も同様に、この間の浴衣をベースにしてみたわ!折角だしオカルト召喚獣騒動の時の秀吉の召喚獣:猫又をイメージしたのよ♪造くんとは対照的に、アンタはお淑やか且つ上品に見

えるよう作ってみたわ♪綺麗よね～」
「男子が可愛いだの、綺麗だの言われても何だか哀しくなってくるぞい！？」

物凄くノリノリに解説してきた優姉さん。昔の貴女はどこに行ったんですか？もう優姉さんは服飾デザイナーを目指した方がいいと思いますよ・・・・・自分らに着せて楽しむだけじゃ、才能の不法投棄のような気もしますし。

「さて・・・・・師匠、玲さん、先生方どうですか？あの夏の造ちゃんたちを堪能できなかった先生方が喜んでくださるよう、アタシ頑張って仕上げてみましたっ！」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・完璧です！流石優子さんっ！」」」」

目をこれ以上は無理だと思うほど、キラキラ輝かせて先生方は優姉さんを誉めたたえます。まあ、自分とヒデさんはそれとは反比例に落ち込んでしまいますがねっ！？

「あ、ありがとうございますっ！・・・・・・って、師匠？どうかしましたか？」
「・・・・・・・・・・・・」
「あ、あの・・・・・・アタシのはやっぱり駄目だったでしょうか？」
「いや・・・・・・・優子っちのは最高だっ！流石アタシの一番弟子さね。・・・・・・だがね、もう一声言うとだね――――」

「「・・・・・・・・・・・・（嫌な予感が）」」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・（ゴクリ）」」」」」」

「――――――着せて脱がしてからが、本当の完成品と言えないかい？」

「「言えるかあああああああああああああああああああ！？」」

「「「「「さ、流石です・・・・・・流石は師匠（日高先生）（先輩）っ！」」」」」

身近に変態淑女がいるとは夢にも思いませんで――――いえ、すみません。それくらい最初からわかっていましたね。サクヤさんが日々オヤジっぽくなっている気がするのも気のせいではないでしょうね。

「って、そんなこと言っている暇なんてなかったですっ！ヒデさん、町に逃げ込みましょう！」

「うむ！捕まったら、ワシらは（色んな意味で）抹殺されるぞい！」

と、ヒデさんと共に窓から緊急脱出。もう自分もヒデさんも、近頃はアキさんたち並みに逃走に関しては身体能力が上がっています。・・・・・悲しい特訓のお陰でね！？

「「「「「「に☆が☆さ☆な☆い♪」」」」」」

黒過ぎる邪気を背に浴びながら、夏のジリジリと焼ける日差しの下でヒデさんと一緒に楽しい鬼ごっこのスタートです。

・・・・・・・・・・・って待った!?自分とヒデさん、コスプレしたままなんじゃ!?

☆

～明久と瑞希と美波のとある一日～

明久Ｓｉｄｅ

旅行から戻ってきてしばらく経ち、夏真っ盛りのとある一日。今日は何の用かは知らないけど、ちょうど姉さんが家を出ている。そう言うわけでこの僕吉井明久と瑞希と美波の３人は僕の家で、ちょっぴりヒミツのお泊り会をしていた。

「明久君・・・・・・さあ、まだまだこれからですよ・・・・・・」
「み、瑞希・・・・・・まって、僕はもう・・・・・・」
「アキ・・・・・・ちゃんとしてくれなきゃ・・・・・・寝かさないわよ？」
「美波も・・・・・・ゴメン、ちょっと休ませて・・・・・・」

オカルト召喚獣騒動や夏の旅行でまた一段と心の距離が近づいた僕ら。心なしか瑞希と美波もどんどん積極的になっている。今日も僕

はそんな二人に迫られていた。

「ダメですよ・・・・・・ちゃんとやってくれますよね？」
「アキ・・・・・・一緒にやろ？・・・・・・ね？」
「ご、ゴメン・・・・・・僕、もうこれ以上は耐えられそうにないよ・・・・・・」
「そんなこと・・・・・・」
「言わないで・・・・・・」

そう。こんな風に積極的になっている二人と一緒に、僕は――――――

「明久君・・・・・・」
「アキ・・・・・・」
「もう・・・・・・限界だよ・・・・・・」

「「ダメです（ダメよ）！！我慢してください（しなさい）っ！！」」

そう、この二人と一緒に僕の部屋で――――――

「明久君！手が止まっていますよ！早く終わらせましょう！」
「そうよ！これさえ終われば、また遊びに行けるのよ！」
「ちょ、ちょっとだけ休憩しない？」

「「良いからさっさと終わらせるっ！！」」

――――学校の課題をやっていた（否、やらされていた）。

「うぅ・・・・・まだ夏休みは始まったばかりじゃないか。瑞希も美波も気が早くないかな・・・・・？」

「そんなことありませんっ！いいですか？早く終わらせたら、またすぐに楽しい夏休みが待っているんです！もう少し頑張ればいいんですよ！」

「ま、そう言うことよ。アキ？ここは大人しく瑞希の言う事を聞いておきなさいな」

ははは・・・・・二人がすっごく厳しいや・・・・・折角姉さんがいない時を見計らって遊びに行こうと考えていたのにね・・・・・てか、そもそも宿題なんて提出する気すらなかったんだけどな～

「（アキ。ちゃんとやっておかなきゃ、瑞希は怖いわよ？）」

「（へ？どう言うことかな、美波？）」

と、ここで美波がアイコンタクトをしてきた。日々命の危険（主に殺人料理の）に晒されている僕らの必須スキルだ。まあこう言う風に美波とこっそり会話する分には、物凄く嬉しいスキルだけどね？

「（ウチも課題をちょうど昨日、瑞希の監修の元終わらせたんだけど・・・・・）」

「（終わらせたんだけど？）」

「（アキと同じでウチも瑞希に『まだ早いんじゃないの？』って言ったんだけどね。瑞希今と同じように聞く耳持たずで、結局最後まで終わらせなきゃ自由に動けなかったわ・・・・・）」

おおぅ・・・・・美波の目がちょっぴり虚ろだ。美波をここまでトラウマにさせるなんて、そんなにも瑞希の指導はスパルタだったのだろうか？

「（と言うか、そんなにスパルタだったの？）」

「（それもあるけど・・・・・ウチが『ご飯作るから休憩しましょう』って言ったら、瑞希が『いえっ！私が作るので美波ちゃんは課題を終わらせて下さい♪』って・・・・・・）」

「さあ！さっさと宿題なんか終わらせてから、三人で外に出てどこかに食べに行こうね！外食もたまにはいいだろうし！」

「はいっ！・・・・・？あの？どうして課題を終わらせることと外食する事が関係あるんですか？」

「ほ、ほら！瑞希、三人でデートしたいって言ってたでしょう！？これが終わったらすぐに行きましょうね！」

「あ、はいっ！さあ、明久君。頑張って終わらせましょうね♪」

なんてことだ・・・・・まさかそこまでスパルタだとは思わなかった。普通宿題を終わらせるか命を捨てるかで、天秤に掛けられるなんて思いもしないよね？いくら僕でも、命を捨ててまで宿題をしないなんて愚かなことはしないよ？さっさと適当にでもいいから終わらせよう。

「あ、明久君。ここ、ちょっと違いますよ？」

「アキ。その問題は・・・・・・あ、そうそう。ここの公式を使うのよ」

まあ、厳しいとは言っても、瑞希も美波も的確にわからないところ

はどうすればいいのかを教えてくれるから助かる。それも決して答えを教えるんじゃなくて、僕が答えをどうやって導けば良いかを教えてくれるので中々勉強になるからまた凄い。

「あ、ここはこうなんだね。ありがと、わかったよ♪・・・・・・それにしても、三人で勉強（いや、課題か？）するなんて、期末の時を思い出すね」

「明久君もそう思いますか？私もちょっと思い出していました」

「ふふふ♪あの時も楽しかったわよね～♪今年は特に楽しいことばかりだし」

この前の事なのに、結構時間が経った気もするね。まあ、僕らは毎日が物凄く濃い日々を送っているからかな？

「そうそう、“楽しかった”で思い出したけどそう言えば如月ハイランドでまた新しいアトラクションが出来たそうよ」

「ホントですか！以前は翔子ちゃんと坂本君をくっつける為に行きましたが、今度は・・・・・・その、三人で行きたいです♪」

「あの・・・・・・ウチもアキと瑞希と三人で、今度は目一杯楽しみたいかなーって・・・・・・」

と、瑞希と美波がちょっぴり上目遣いで、もじもじしながら僕に話しかけてきた。うん――――そうだね。二人も『遊びに行きたい』って言っているように折角二人が遊びに来ているのに、このまま遊びに行かないで僕の宿題の手伝いだけをさせるなんて申し訳ないね。だったら・・・・・・

「僕も・・・・・頑張って課題終わらすから・・・・・・」
「え？どうかしたんですか明久君？」
「終わらすから？」
「その・・・・・・さ。夏休みだし、三人で一緒に行ってみようか？如月ハイランドも、他にもいろんなとこにさ」
「「！はい（うん）っ！」」

そう言うと、二人は満面の笑みを浮かべてくれた。・・・・・・ま、この笑顔を見れることに比べれば、宿題を終わらせることくらい物凄く安いものかな。・・・・・・僕、やっぱり幸せ者だよね。

「でも・・・・・やっぱりめんどくさいよぅ・・・・・」
「「ふふっ♪頑張って！」」

とほほ・・・・・ま、まあこの際頑張ってみますかね。僕にはとっても優秀で、可愛い先生が二人も付いているんだし。

☆

～康太と愛子のとある一日～

康太Ｓｉｄｅ

とある夏の日、いつもの俺ならカメラの手入れや調整を行っている

時間帯。俺は保健体育の好敵手とも言える工藤愛子と、親も兄さんたちも出て行っている俺の家で二人っきりでいた。

「ねえ、こーたくん・・・・・・ここ、かな？」

「・・・・・・・・・・・・おう」

全然やったことがないと言っていたのは本当らしく、どうやら工藤は加減がわからない様子。

「入れちゃうの・・・・・・？もう入れちゃうの、こーたくん？」

「・・・・・・・・・・・・お、う」

何度も何度も確認して、恐る恐る入れようとする工藤。心なしか不安そうだ。

「こーたくん・・・・・・ダメだよ。ボク初めてなのに・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・（ポタポタ）」

顔を赤らめて、俺に指示を煽る工藤。それにしても・・・・・・

「あっ・・・・・凄い。なんか熱い、ね・・・・・・♪」

「・・・・・・・・・・・・！？（プシャアアアアアア）」

血が、血が足りない・・・・・・コイツはやはり俺を殺す気なのか・・・・？

「・・・・・・・・・・・・工藤・・・・・・真面目に・・・・・・やれっ！」

「ん～？ボクは至って真面目だよ～？こーたくんこそ、何か如何わしい事考えているんじゃないの～？このスケベさん♪」

「・・・・・・・・・・・・俺は・・・・・・至って・・・・・・真面目だ（ダバダバダバ）」

「そうかな～？真面目ならどうして鼻血なんか出しているのカナ？――――ただ、料理を作っているだけなのに♪」

これはただ単に持病の貧血なだけ。俺はいつだって真面目だ。それに比べてさっきから工藤のヤツは俺を全力で弄っている。

――――そう、今日の俺と工藤は俺の家で料理の特訓をしているだけだというのに。

「あはは♪でもまさか本当にこーたくんに料理教えて貰えるなんて思わなかったよ♪ありがとね、こーたくん」

「・・・・・・・・・・・・約束したから。それに、さっきまで課題を手伝って貰った礼」

とりあえず瞬時に止血と輸血を行い、再び料理に戻りつつ工藤と話す。ちなみに約束と言うのは、まだ記憶に新しいいつもの仲間と旅行へ行った時のもの。バーベキューをしていた時工藤が『料理を出来るようになりたい』と呟いていたのが何となく気になり、何故かそのまま教えると約束した。

・・・・・自分でも、何でいきなりそんなことを約束したのかはわからんが。

「でもこーたくんって、保健体育とか料理とかホント凄いよね。料理にしたって本格的だしさ」

「・・・・・・・・・・・・紳士の嗜み」

「ふーん?そうなんだ。・・・・・おっと、ねえこーたくん。この後どうするの?」

「・・・・・・・・・・・・オリーブとケイパーを入れる。種は取ってあるか?」

「うん、大丈夫だよ♪・・・・・それにしても、料理って奥が深いんだね。材料にしたって見たことないものばかりで面白いしさ~」

「・・・・・・・・・・・・そうか?」

まあ、工藤は本当に初心者のようだしそう思うのも無理はないか。今回のはそもそも日本の料理でもないし、馴染みがないのかもしれない。

「そうだよ?アンチョビなんて普通は使わないしケイパーなんてそもそも知らないし、さっき入れた鷹の爪って最初に名前を聞いた時は、本当に鷹から取った爪の事かと思ったもん」

「・・・・・・・・・・・・鷹の爪はトウガラシの一種」

ちなみに今作っているのはプッタネスカ。知っている人は知っているだろうが、ナポリの定番パスタ料理の名だ。・・・・・この料理を作っている事に特に深い意味はない。別にこの料理の別名が『娼婦風スパゲッティ』と言う非常に素敵な名前だから作っているという不純な理由ではない。・・・・・不純な理由ではない。

「へー？ホントこーたくんって変なところで博識だよね。それを勉強に活かせばもっと凄いんじゃないの？課題をやるのにも一苦労してたじゃない」
「・・・・・・・・・・・・どうでもいい事は興味ない」
「あはは♪でもちゃんと課題はやらないとダメだよ～？」

そもそもやる気はないから仕方ないだろう。しかし、まさか本当に課題をやらされるとは思わなかった。『料理を教えてくれるなら、ボクは勉強を教えてあげるね～♪』と、工藤が言って来た時は、てっきりいつもの冗談かと思ったが・・・・・俺の課題が終わるまで、コイツが付きっきりで教えてくれたのには・・・・・・まあ、助かったが。

それにしても・・・・・初心者の割に工藤は呑み込みが早い。初心者特有の火や包丁を怖がる事がないからか？教える側としては、かなり助かっている。

「・・・・・・・・・・・・工藤は、多分すぐにでも上手くなる」
「えっ！？そ、そうかな？」
「・・・・・・・・・・・・（コクリ）教えがいがある」
「あ、ありがと♪・・・・・・・ねえ、こーたくん・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・？何だ？」

何だかさっきとは違い、少し緊張しているように見える。？？？何が言いたいんだ？

「えっと、さ・・・・・・もし良かったら・・・・・・頑張って作るから・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・？」
「その・・・・・・上手になったら・・・・・・ボクの手料理、食べてくれる？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・気のせいだとは思うが、工藤の顔が赤い。コイツ・・・・・・本気で言っているのだろうか？
「あっ！で、でもさ！？こーたくんがその、嫌ならいいんだよ！？そもそもこーたくん、料理上手だし・・・・・えっと、でももし良かったらでいいんだけど・・・・・・！」
・・・・・今回は本気だったようだ。しかも俺の沈黙をどうやら工藤は拒否したと取ったらしい。工藤がテンパっている姿は中々かわい・・・・・ゴホン、面白い。
「・・・・・・・・・・・・食べる」
「そうだよね？やっぱりボクのじゃ食べて・・・・・・え？」
「・・・・・・・・・・・・作ってくれるなら、食べる」
「っ！？ほ、ホントに・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・（コクコク）その為にも、まずはこっちを先に作ろう」
「う、うん！ありがと♪こーたくん！」
とりあえず火をかけていた鍋を一旦止めて、今度はパスタを茹でる為の鍋を用意する。・・・・・ずっと火を使っていたせいか、何

だかキッチンが暑い気がする。俺も工藤も顔が揃って同じ色なのも、きっとそれが理由だろう。

番外編：それぞれの夏の過ごし方：前編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……エッチいの書くと思った？残念、糖分の作品だよ！……すんません。明久Ｓｉｄｅの時やムッツリーニＳｉｄｅの時に変な期待させてたら、本気ですんません（汗）作者は基本ヘタレで、そう言うエッチいお話を書きたくても途中で悶えるので書けませんよ（泣）

今回の書くのだって、途中で枕にしがみついてバタバタしてましたし……早く大人になりたい……精神的な意味でも。

と、とりあえず次回は後編の雄二Ｓｉｄｅからです。一応前編と繋がっていますよ？あと、次回は明日の朝更新予定です。てか、ちょっとまた行くとこあるので、朝しか時間ないと思います。明日、感想遅れたらすみません。

んじゃ、また次回です！読んでいただきありがとうございました♪

番外編：それぞれの夏の過ごし方：後編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。ちょっと早めに更新です。

今回のお話の『それぞれの夏の過ごし方』は、桜井さんのネタと赤髪のモモさんのアドバイスを全力で使わせてもらいました♪お二方、本当にありがとうございます♪他にも様々なネタやアドバイスをくれる皆さんには、ホント感謝の気持ちでいっぱいです！

全部が全部使うことは難しいでしょうが、少しずつネタ消化していくと思います♪これからも皆さん、どうかよろしくです♪

んじゃ相変わらず前置き長いですが、そろそろ行きましょね。今回もよろしくです！

番外編：それぞれの夏の過ごし方：後編

～雄二と翔子と？？？のとある一日～

雄二Ｓｉｄｅ

「・・・・・雄二。次はどこ行くの？」

「夕食の買い出しだ。ったく、あの母親はホント家事も料理もダメだからな・・・・・・」

夏休みのとある昼過ぎ、俺と翔子は買い出しの為に大型スーパーに寄っていた。あ？何で翔子と一緒かだと？・・・・・まあ、いつもの如くコイツが勝手に（って言ってもあの母親が入れたらしいが）俺の部屋に侵入して、いつもの如く勝手に付いて来ているだけだ。

「・・・・・私も手伝う。雄二は何を食べたい？」

「・・・・・・・・・・・ハァ。まあいいか。お前こそ何食いたいんだ？」

「・・・・・雄二が食べたいものを、食べたい」

・・・・・・・・・・・ったく、相変わらずコイツは。俺の事より自分の事を優先すりゃいいのにな。てか・・・・・・まさか泊る気じゃねえだろうな？

「おい翔子。お前、今日はどうする気だ？先に言っておくが、泊める気はないぞ？」

「・・・・・・お義母さんが、部屋を用意してくれてるのに？」
「・・・・・・・・・・・・やはり、あの母親には説教が必要のようだな？」

・・・・・俺の知らんとこで、完全に外堀が埋められている気がするのは、目を逸らしておこう。考えれば考えるほど、頭が痛くなりそうだ。

「考えてもしょうがねえな。・・・・・・夏バテなんてシャレにならんからな。何か精の付くもんでも作るか」
「・・・・・・！雄二！」

と、何気なく俺が独り言を言っていると、翔子がハッとした表情で俺の方を向いた。・・・・・・？一体何だ？

「何だ翔子？俺が何か変な事でも言ったか？」
「・・・・・・雄二、とうとう二人目を作るってこと？」
「・・・・・・・・・・・・お前の頭が変だってことが良くわかったぞ」

いかんな・・・・・コイツのペースになるのだけは避けなければ、次にどんな事を言い出すかわかったもんじゃない。翔子を無視して適当に今日の晩飯の材料を見繕っていると、

「・・・・・・！雄二！」

また翔子が何かに気が付いたように、俺の袖を引っ張る。・・・・・・

・やれやれ。もういい加減に――――――

「・・・・・・造（むすめ）と木下が！」

「・・・・・・・・・・・・は？」

最初のは聞こえなかった事にするが・・・・・翔子の切羽詰まったような声に反応して、翔子が指差す方向を見ると――――――

『君たちめちゃくちゃ可愛いね～コスプレかな？』

『写真撮ってもいい？ほらほら笑って～』

『俺らと遊びに行かない？そう言うお店に連れてってあげるよ』

『てか、妹ちゃんのほう濡れちゃったでしょ？ほら、着替えなきゃいけないじゃん？』

「・・・・・・・・・・・・・・この恰好での逃走は失敗でしたね、ヒデさん」

「・・・・・・・・・・・・・・せめて服を着替えて逃走すれば良かったのう」

――――キツネとネコがいた。いや、すまん。正確には、キツネのコスプレ（？）をした造と、ネコのコスプレ（？）をした秀吉がいたって言った方が良いだろうか。真昼間からそんな恰好で外を出歩くなんて、お前らに何があった・・・・・？

「・・・・・雄二、助けてあげよう」

「へいへい、それくらいわかっている。・・・・・ちょいと行っ

てくるな」

造も秀吉も基本はお人好し且つ、あまり強く言えないタイプだ。こう言う時に絡んでくる奴らが一番面倒だからな・・・・・・

「よう、造に秀吉。相変わらず変な格好してんな？」
「って、あれ？ゆーさんじゃないですか？ちょうど良かったです！」
「おお、雄二。すまぬがこやつらにワシらが男であることをわからせてくれぬか？」

・・・・・コイツら何か的外れな対応してねえか？

『おいおい？何？この子たちの知り合い？』
『ニイちゃん、一人占めは良くねえぞ』
『俺らが先に声掛けたんだぜ』
『邪魔すると、アンタ痛い目見るぜ？』

こっちもこっちで絡んできやがるし。仕方ないな・・・・・・

「まあ、何だ。――――お前ら話があるなら場所変えるぞ」

～しばらくお待ちください～

『『『すんませんでした・・・・・』』』

「ははははっ！まあ今度から相手を見て話しかけな！」

意外と呆気なかったな。３分も経たずに“説得”が終わった。

「それ説得って言いませんよね・・・・・・？」

「気にするな造。・・・・・にしてもお前、何か濡れてねえか？」

「そうじゃったの。あのさっき絡んできた奴らにぶつかった時ジュースがかかっておったのう。造よ、大丈夫かの？」

「あはは♪気にしないでください。夏ですし風邪をひく事はないと思います。・・・・・ちょっとべとべとしてて、気持ち悪いですが」

ああ、それでさっき絡まれてたってわけか。しっかし、相変わらず妙な格好をさせられているってことは・・・・・

「なあ、造？お前家に帰れんのか？それに秀吉も秀吉で、その格好は目立つだろ？」

「「う〝・・・・・・・・・・・・」」

「やっぱり、家に帰れば先生方がお待ちかねってとこか」

推測だが、秀吉と課題でもやっている最中か終わった頃に先生方にやられたんだろな。んで、着換える暇もなく逃走してたんだろう。その身一つで逃げ出したためにどこかに逃げ込む事が出来ず、且つ家に帰ればまたやられるという無限ループになっちまう。そんでアテもなくフラフラしてたらアイツらに絡まれたってことだろう。

「・・・・・・雄二。造たちに家に来て貰おう」

造の髪をハンカチで拭きつつ、翔子がそんなことを言ってきた。・・・・造に言うと凹むだろうが、こういう風にしていると確かに母親とむすｍ――――息子に見えなくもないな。

「・・・・・・・・・・・・・・今、二重に変なこと考えませんでしたか、ゆーさん？」

「気のせいだな・・・・・・・ま、とりあえずお前ら俺の家に来い。風呂と着替えを貸してやる」

「・・・・・・暑いし、涼んでいくといい」

「「おおっ！ゆーさん（雄二）っ！霧島（さん）っ！助かります（助かるぞい）♪」」

・・・・・・・・・・・・・・ホントこいつら息がぴったりだな。姉妹――――兄弟と言われても違和感がないな。

「・・・・・・・・・・・・・・やっぱり何か変なこと考えてませんか、ゆーさん？」

「・・・・・・・・・・・・・・最後の砦が崩された気がするぞい、雄二？」

～雄二＆翔子＆木下姉妹移動中～

「うっし。造、秀吉。風呂湧いたから入んな」
「すみません・・・・・何から何まで」
「ちょっ、ちょっと待つのじゃ！？ワシも入るのか！？」

俺の家に着いてすぐに（おふくろの珍発言？んなもんなかったぞ。もう一度言う、おふくろの迷発言などなかったぞ）風呂を沸かして、造たちを入れさせる事に。何やら秀吉が珍しく本気でテンパってるが、中々面白――――じゃなく秀吉も汗かいてるだろうから入らせることに。

「良いじゃねえか。お前らどの道、あんな恰好で街中を全力疾走してたんだろ？この暑さであの着ぐるみは流石に拷問だ。汗かいているだろうし、とっとと入んな」
「し、しかしのう・・・・・」
「？？？あれ？ヒデさん入らないんですか？また一緒に入りましょうよ♪」
「っ！・・・・・・・・・・わ、わかったのじゃ／／／／／／」

と言って、楽しそうに秀吉の手を引っ張って風呂へと向かう造と、何やらぶつぶつ“心頭滅却じゃ、素数を数えるのじゃ”と、言っている秀吉が部屋を出て行った。・・・・・造はホントにいろんな奴に好かれるな・・・・・

「さて、んじゃ料理でも作るかね。造たちが今日どうするかわからんが、とりあえず多めに作るか」
「・・・・・・う、ん」
「・・・・・・・・・？翔子？」

と、さっきまで造の世話をしていた翔子が、少し暗い顔をしている。見た目だけじゃわからんだろうが、コイツとの付き合いも長いからな。何となくだがコイツの表情の変化は分かっちまう。

「どうした急に？さっきまであんなに楽しそうだったのによ」
「・・・・・うん」
「言いたくない事なら言わんでもいいが、お前が言いたきゃ言ってみろ」

・・・・・結構翔子のヤツ、良くも悪くも自己解決をしようとする癖があるからな。その辺は造と似て俺らをあんまり頼らないし。

「・・・・・あのね」
「おう」
「・・・・・私、勝手に造たちに“家に呼ぼう”って言った」
「・・・・・は？」

？？？何が言いたいのか全然見えねえな・・・・・？

「・・・・・何も考えずに、雄二の家の用事とか考えずに勝手に呼んだ。・・・・・私、雄二の家の子でもないのに」
「あー・・・・・そこか」

翔子のヤツ、何やら随分妙な事を考えるんだな。いつもは呼ばれなくても家にいるのに。まあ、コイツもコイツなりに一応の線引きはしているってことか？

「やれやれ・・・・・別にいいだろ。それを言うならお前、昔からお前の家より俺の家にいる方が長かったくらいじゃねえか」
「・・・・・・」
「どうせおふくろは“別にいいわよ～”くらいしか言わんだろうしな。俺の家の事は深く考えなくても構わんさ」
「・・・・・・でもっ！」

ったく、意外とコイツも思うとこがあるってことか？

「お前もある意味、ここで育った子っておふくろ言ってたぞ。そう言う事だから・・・・・今更お前が俺の家に来ようが、誰呼ぼうが関係ないだろ」
「・・・・・・っ！」

・・・・・・・・・・ま、認めたくはないが、コイツはすでに俺の家に溶け込みつつあるからな・・・・・さっきも言ったが、変に遠慮されるとこっちが困る。

とりあえず翔子の頭にポンッと手を置き、

「んなどうでもいい事考える暇あったら、さっさと何か美味いもんでも作るぞ。お前も泊るんならさっさと作りな」
「・・・・・・！うんっ！」

そうして、ようやく料理が再開した。やれやれ。さっさと作らんと、夕飯に間に合わないな。

「・・・・・でもよかった。これからは何の気兼ねもなく、雄二の家に同棲出来る♪」
「何が同棲だ。てか、今までもお前に“気兼ね”なんてなかっただろうが。先に言っておくが、俺は別に翔子が泊る事を認めたわけじゃないからな?料理を作るって言ってきたから、その報酬として――――」

『・・・・・ゆーさん、素直になるかと思えば最後まで素直じゃないですね』
『・・・・・いわゆるツンデレじゃな。雄二らしいと言えば雄二らしいがの』

・・・・・・・・・・・・・・何か、二人ほどドアの外で妙な事を言っているヤツらがいるな。

「・・・・・・・・・・・・・・おい、造、秀吉。何を聞き耳立ててるんだ?」

「「（ビクッ!?）」」

「とりあえずさっさと出て来い。さもなくば先生方にお前らがここにいるとバラす」
「い、いやー♪いいお風呂でしたよね、ヒデさん♪」
「うむ、そうじゃの。ワシら今上がった所じゃぞ♪」

白々しいな、おい。ったくいつから聞いていたのやら。・・・・・・って、何だこいつら？

「どうでもいいが・・・・・お前らその格好は何だ？」
「へ？何って決まっているでしょう？」
「お主らが貸してくれた着換えじゃぞい？」
「・・・・・・・・・・・マズった、背丈の事を全然考えていなかったな」

着換えってことで俺のＹシャツを貸したんだが・・・・・俺の背丈と造、秀吉の背丈はあまりにも違う。造と俺じゃ３０ｃｍ以上違うし、秀吉も造並みではないとはいえ小柄だからな。

「ゆーさんのＹシャツ、おっきいですね～♪」
「ふふっ♪造よ、お主ブカブカじゃぞ？」
「・・・・・・造、木下・・・・・・ちょっと刺激的過ぎ」

「「・・・・・・・・は？」」

・・・・・・・・・・・正直に言おう。翔子の言う通り、コイツらを見るのは少々目に毒だな。袖が長すぎて、二人とも手が完全に隠れている。おまけに造に至っては俺のＹシャツをワンピースのように着ている始末。恐らくだがこのまま外に出れば、先ほど以上に男共が釣れるだろう。・・・・・やっぱ造と秀吉は、そう言う男を釣る特殊能力でも備わっているのだろうか？

「・・・・・・・・・・・こりゃ、普通に先生方を呼んだ方が良

いな。途中で何があるかわかったもんじゃない」
「・・・・・うん。先生と優子に電話してくる」

「「って!?な、何でですか（何でじゃ）！?電話だけは勘弁ですよ（勘弁じゃぞ）！?」」

「お前らは一先ず鏡で自分らの姿を確認して来い。んで、それでもわからんなら先生方にその姿を見せてきな」

「「??? いや、全然意味がわからないのですが（わからんのじゃが）・・・・・・・?」」

「・・・・・造も木下も、まだそういう格好は早い。大人になってから」

翔子。ツッコミがなっていないぞ?そして造、秀吉。お前らは天然なのか・・・・・・?一先ず翔子と二人でコイツらの保護者を呼び、何とか帰ってもらったが・・・・・・

『ま、まさか・・・・・こんな、天然の・・・・・・・Yシャツ攻撃に・・・・・・やられるなんてな・・・・・・（ドクドクドク）』
『お姉ちゃんは・・・・・・新しい、可能性を・・・・・・・見出したわ・・・・・・ありがとう、代表に坂本君・・・・・・・（ドクドクドク）』
『・・・・・・優姉さんとサクヤさんが・・・・・・怖いですね』
『・・・・・・怖いのはこの後帰って何をされるかじゃろうがの』

・・・・・・・・・・まあ、こんな感じで見事に保護者二人を完全に堕してから造たちは帰っていった。ま、色んな意味で気をつ

けて帰れな。

「さて・・・・・・翔子、料理の続きでも・・・・・・する・・・・・か」

と、造たちを見送り、振り返った俺の目に映ったのは・・・・・・・

「・・・・・・・雄二、どう？／／／／／／」

「・・・・・・・・・・・・・・もう、ツッコミは入れんぞ・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・どうやら造たちに影響されたらしいバカが一人、俺のＹシャツを着て立っていた。とりあえずこれだけは聞かせてくれ。翔子、お前どっから俺のＹシャツ取ってきた・・・・・？

☆

造Ｓｉｄｅ

その後も楽しく忙しい日々の連続でした。皆さんで花火をしたり（これも夏の風物詩ですね）、自動車の免許を取得したり（これで胸を張って１８以上だと言えますっ！）、ある方へのちょっとした夏のお土産を集めに行ったり（新学期渡すのが楽しみです♪）、旅行中お世話になったあの司会者さんが家に来てくれたり（彼は本当に良い方です♪）と――――

――――そしてそんな楽しい夏休みはあっという間に過ぎ去って、新学期初日の朝を迎えます。

「あー・・・・・・吉井、坂本、土屋」

始業式が終わりしばらくして、アキさんとゆーさんとこーさんが西村先生に呼び出されました。流石に身に覚えがないということで、皆さん心配してアキさんたちに付いて職員室まで来たのですが・・・・・

「何ですか、鉄じ――――西村先生」

「先に言っておくが、流石に新学期早々に呼び出される事はしてねえぞ？」

「・・・・・・・・・・・・俺ら何もしていない」

「いや。そうじゃないんだが・・・・・・その、お前ら熱でもあるのか？」

「「「・・・・・・・・・・・・は？」」」

どうやら説教ではなく、心配で呼び出させたとのこと。よくよく職員室を見れば、アキさんたちを不安そうに見つめる先生方の姿が見られます。

「いや、お前らがちゃんと真面目に課題を提出するなど、どう考えても熱が出たとしか思えんのだが・・・・・・」

「「「ちょっと待て（待って下さい）！？流石にそれは言い過ぎだろ（でしょう）っ！？」」」

『聞きました・・・・・？あの吉井君がちゃんと課題をやってきたそうですよ？』

『吉井君だけでなく、坂本君も土屋君もだそうです・・・・・』

『い、今まで課題なんて出さなかった、いや出そうとする気すらなかったあの三人がですか！？』

さ、流石にそこまで言わなくてもいいのではないでしょうか・・・・？アキさんたちも頑張って課題を仕上げたんですし。

「いいからお前ら、とりあえず保健室に行って来い。今日の掃除は他の奴に頼むから、な？今日はお前らあまり無理をするな」

「「「だから、何でそこまで言わなきゃならないんだ（ですか）！？」」」

『やっぱり・・・・・熱があるのではないでしょうか？』

『心配ですね。夏の風邪は長引くと酷くなると聞きますし』

『もしかして、私彼らに無理させ過ぎたでしょうか・・・・・』

今日の先生方は、何だかアキさんたちに不気味なほど優しいですね・・・・・その優しさが、地味にアキさんたちが傷ついていますよ？

「あ、あはは・・・・・アキさんたち大変ですね」

「まあ、いつものあやつらなら課題など絶対に提出せんからの」

「普段の行動の結果・・・・・・かしら?アキ、今回は頑張ってやってたのに可愛そうね」
「え、えっと・・・・・・とりあえず私たちも先生方に説明しに行きましょうか」

アキさんたちが課題をちゃんと提出したことで、ちょっとした職員会議が勃発する始末。本当にアキさんは姫路さん&島田さんと一緒に。こーさんは工藤さんと。それからゆーさんは勿論霧島さんと一緒に課題を頑張って終わらせたそうなのですが・・・・・・

自分や姫路さん・島田さん。それに霧島さん、工藤さんも加わって先生方に説明をしたんですが、その説明に一時間以上かかったことだけ報告しておきます。

「うぅ・・・・・・真面目にやったのにこの仕打ちは酷いよ」
「くっ・・・・・・確かに俺らが課題提出なんて珍しいかもしれんが」
「・・・・・・・・・・・・ちょっと、泣きたくなってくる」

あはは・・・・・狼少年ってとこですかね?新学期早々涙を流す三人は、何とも言えない後ろ姿を見せてくれました。

これが自分やアキさんたちの夏休みの記録の一部です。さてさて、これから新学期。どんなドタバタな日常が待っている事やら♪楽しみですね!

番外編：それぞれの夏の過ごし方：後編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

今回のお話はちょっと前回の明久とムッツリーニのお話とは違い、雄二と霧島さんの仲が進展すると言うより二人の長年の絆を表現しました。って言うのもこの二人の仲をこれ以上進展させようにもどう進展させればいいかわからなかったもので（汗）

まあ、どの道次回から更新予定の野球編で雄二と霧島さんの仲は深まるハズですし、別にいいかな？この二人マジ夫婦。

前書きでも話した通り、桜井さんと赤髪のモモさんありがとうございました！中々思うように書けていないかもしれませんが、何とか夏休み編を〆れました。

さてさて次回から召喚野球編の予定ですが、前話で話した通り今からちょっとまた行かなきゃいけないとこがあって更新と感想の返信がしばらく出来ないと思います。４～５日はネット使えないかも？すみません。

とりあえずそんな感じです。読んでいただきありがとうございました！ではまた次回♪

９２時間目　新学期開始♪～さらば我らの聖典よ～（前書き）

どもども糖分摂取魔です。何だかんだで早く帰れたので更新します。

久しぶりの本編～♪ようやく戻れる……（汗）最近オリ話ばかりだったで感覚がつかめているか不安です（苦笑）

それじゃ、今回も行きましょうね。９２時間目、スタート！

92時間目　新学期開始♪～さらば我らの聖典よ～

教卓の前で腕を組み、静かに自分たちFクラス生徒一同を見ているのは担任の先生の西村先生。その西村先生が睨むように見ているのは、クラスでただ一人立ち上がっているクラス代表の坂本雄二くんこと、ゆーさん。

クラス一同が静まりかえる中、ゆーさんはただ一人西村先生に諭すように話し始めました。

「西村先生。知的好奇心を育むには、具体的な目標が必要だと思わないだろうか？」

まるで西村先生の心に語りかける様に語りかけるゆーさんは、黙って聞いている西村先生の態度に満足そうにニヤリとしながら続きを語ります。

「古今東西、科学技術の発展の裏側には、必ず戦争の影が存在した。鉄が生まれたのは工業の為ではなく剣や鎧を作るためであり、馬が飼育されたのは農業の為ではなく騎兵の生産の為だ。近代で挙げるとしたら、核技術の発端だって戦争だと言えるだろう」

「・・・・・・・・・・・・・」

西村先生は無反応のようです。それにしてもホントゆーさんって、指導者や指揮官に向いてますよね。クラスのほとんどの皆さんがゆーさんに従ってますし。

「科学技術の発展という明るい結果が生まれる背景には、人間同士の戦争という暗い過程が存在し続けてきた――とまで言うと、流石に言いすぎかもしれない。が、戦争という危険だが明確な目的を持つと、その度に科学技術は飛躍的な発展を遂げてきた。これは残念ながら紛れもない事実だ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

それでもやっぱり西村先生は無反応です。

「本来、科学技術の発展というのは知的好奇心を原動力として発生する。それは古代だろうが現代だろうが、どのような時代であっても変わらない」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「だがその原動力によって効率的に結果に結びつくのは――過去の事例を見る限り、『戦争の勝利』という闘争本能に根ざした『具体的な目的』が存在する場合が多いと言える」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「別にだからと言って戦争が必要だと言っている訳じゃない。戦争というのは多くの死者を出し、それは『同種族を殺す』という生物にとっての最大限のタブーを犯している続ける愚行そのものだ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「だが、それが愚行であっても、そこから学びとれるものは少なからず存在する。それは『知的好奇心は具体的な目標を持つことで、より良い結果へとつながりやすい』という事実だ。――ここまで言えばあとは先生には分かってもらえると思うが」

と、ゆーさんがそこまで言うと、西村先生が初めて動きます。

「・・・・・坂本、お前の言わんとしている事は伝わってきた。確かにお前の言う通り知的好奇心は目的の有無でそのあり方は変わってくる。それはその通りだ・・・・・だが――」

そして腕組みを解き、自分たち全員にハッキリと宣言します。

「――だが、没収したエロ本の返却は認めん」

「あはは。ですよねー」

『『『『ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおお！！！』』』』

あの楽しい夏が終わり（海水浴に夏祭り。その他様々なハプニングなど、大変でもありましたが）、いよいよ待ちに待った新学期。始業式の翌日に早々持ち物検査があり、大事な私物を失ったであろう級友たちは涙を流していました。それは演説していたゆーさんも、援護していたアキさん&こーさんも例外では無いようです。

「どうしてですか西村先生！さっきの雄二の演説を聞いたでしょう！？僕達が『保健体育』という科目を学習に対する知的好奇心を高めるためには、『エロ本の内容の理解』という本能に根ざした具体

的な目標が必要なんです！」
「学習しなければ理解できんほどの高度なエロ本を読むな。お前は何歳だ？」
「知識を求める心に年齢は関係ないと思います！」
「よく見ろ。ここにＲ－１８と書いてあるだろうが。そもそもその年齢に達している月野はそんなもの持ってきておらんぞ」
「あんまり興味無いですからねー・・・・・と言いますか、そもそも学園に持ってきちゃ色々と不味いのでは？」
「まあ、こやつらじゃしの・・・・・宿題は持って来ずとも、エロ本だけは持ってくるその精神は別の方向に向けるべきじゃと思うのじゃが」

溜息を吐く西村先生と、苦笑いのヒデさん&自分。と言いますか、よくもまあこんなに多くの・・・・・その、成人指定の本を学園に持ってきましたね？・・・・・若さゆえの何とやらでしょうか？

『お願いします、西村先生！僕等にその本を返してください！』
『僕らには――僕らには、その本がどうしても必要なんです！』
『お願いです！僕たちに、保健体育の勉強をさせてください！』
『西村先生、お願いします！』

『『『『お願いします！』』』』

「黙れ。一瞬スポ根ドラマと見紛うほどの爽やかにエロ本の返却を懇願するな」
「懐かしいですねー♪母や日高先生がよく見せてくれましたよ」
「ワシも演技の勉強の為にたまに見るぞい」
「あれくらい爽やかなクラスだと、俺も良かったんだがな」

『『『鬼っ！悪魔っ！！鉄人っ！！！』』』

あはは・・・・・まあ、そもそもその成人指定の本の返却は認められるとは思いませんでしたし、思えませんがね？

「それならこう考えてくみてれませんか？」

「だからなんだ吉井。これ以上は下らない演説に割く時間はないぞ」

「あれはエロ本じゃなくて、保健体育の不足分を補っている参考書だと」

「惚れ惚れするほど凄い理論ですね、アキさん」

「ある意味ここまで言いきった明久は賞賛してしまいそうじゃの」

「月野、木下。あのバカの言うことは参考にしないように。全員きちんと準備して授業に臨むことだ。これにて朝のＨＲを終わる」

取りつく島もなく、西村先生がさっさと職員室へ戻ろうとすると・・・・

「ええい！こうなりゃ実力行使だ！僕らの大事な参考書（エロ本）を守るため、命をかけて戦うんだ！」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおお！！！』』』

「ちょっ！？皆さん落ち着いて――――」

「やれやれだ・・・・・月野、それに木下、姫路、島田。お前らちょっと教室から出てるんだ」

そう言って、自分ら四人を教室から出します。

『全員かかれ――――っ！』

『『『おおおおおおおおっ！』』』

『お前ら・・・・・・新学期が始まって、早速補習を受けたいようだな？』

アキさん率いるＦクラス男子（自分とヒデさんを除く）ＶＳ西村先生の闘いが。それにしても本当にいつも通りの日常なわけですね。生徒ＶＳ先生の乱闘が日常なんて、どう考えても非日常な気もしますが。

～しばらくそのままでお待ちください～

「あの野郎絶対人間じゃねえ・・・・・・！」

「だよね・・・・・・。どうして４７人の男子高校生を相手にしてたった一人で戦えるんだろう・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・もはや人間兵器レベル」

１０分後、アキさんやゆーさん、こーさんが物の見事に倒されていました。その他西村先生に立ち向かった男子生徒の呻き声も聞こえ

てきます。相変わらず先生はお強いですね～♪しかも怪我を絶対させないように上手く対処しているからまた凄いんですよ。

「アンタらってこういう時は凄い結束力を発揮するわよね・・・・・・」

「すごい結束力って、そんなに統制が取れてた？」

「統制って言うより・・・・・どうしてクラスの男子全員が、一人残らずその・・・・・・ああいう本を持ってきてるのよ？」

そう言って呆れたような顔をしているのは島田さん。顔がちょっぴり赤いのは、多分アキさんたちが持ってきた成人本の表紙を見たからでしょうね。

・・・・・それはともかく、島田さん？

「ちょっとストップです、島田さん。自分とヒデさんは持ってきてませんが？」

「そうじゃの。ワシらが男子としてカウントされておらぬように聞こえるのじゃがの？」

「へ？・・・・・いや、木下も月野も何言ってんのよ？アンタら女の子に興味があるの？それにそもそも月野はまだまだ早すぎるでしょう？」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・・・・・・・・・あの？ヒデさんも自分も男子ですし、一応自分は年齢的には皆さんより年上で普通自動車の免許も夏休みの間に取得していて、尚且つアキさんたちが持ってきたであろう成人指

定の本も一応は読めるのですがね？興味はあんまりないですが・・・・・

「まあ、それはともかく色々と男子には男子の事情があるんだよ」
「あんな本を全員で持ってくる事情って一体・・・・・・・？」
「没収されたのは仕方ないと思います。その・・・・・・明久君にはああいった本は・・・・・・その・・・・・・早いと思いますから」

と、こちらも赤い顔をしている姫路さん。確かに姫路さんの言う通りまだ早いですよね。ところで姫路さん？それに島田さん？こっそりと・・・・・・・

『それに明久君には私と美波ちゃんで・・・・・・・』
『ゆっくり教えてあげるからいいのに・・・・・・・』

・・・・・・って聞こえた気がしたのは気のせいですよね～？まあ、あんまり深くは考えないようにしておきましょうかね？

「うぅ・・・・・・、そうは言っても納得いかない・・・・・・」
「まあ、確かに持ち物検査なぞ、久しくやってなかったからの。油断するのも無理からぬ事じゃ」
「確かにそうよね・・・・・・ウチも実は細々したものを没収させられたもの。ＤＶＤとか、雑誌とか、抱き枕とか・・・・・・」
「美波ちゃんもでしたか。私も色々と・・・・・・・ＣＤとか、小説とか、抱き枕とか・・・・・・」

・・・・・抱き枕？何故にそのようなものを学園に・・・・・？最近この二人の思考が、どことなく日高先生に似てきたような気がするのは気のせいではなさそうですね。

「なんだ。島田も姫路も没収させられてたのか。んじゃ、秀吉や造もか？」

「いや、ワシはともかく造は無かろうて。校則違反なぞこやつはせんじゃろうしな。・・・・・ワシは演劇に使おうと思っておった小物の類をの。運の悪い事に携帯ゲーム機じゃったわい・・・・・・」

あ、そう言えばヒデさんの今度の劇の演目は、確か現代ものでしたね。ゲーム機はその小道具みたいです。ヒデさんも災難でしたね。

「あ、ヒデさん。信頼してくれているのは嬉しいのですが、自分も例に洩れず没収されましたよ？」

「「「「「ええっ！？造（月野）（月野君）が！？」」」」」

何この反応・・・・・・

「な、何でそこまで驚くのですか・・・・・・？自分も人間ですし、やっちゃいけない事もやりますよ・・・・・・？」

「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」

皆さんどれだけ驚くのですか・・・・・・てか、自分はどんな風に

思われているのでしょうね？一応自分、これでも観察処分者な問題児なんですが・・・・・・？

「そ、それで！？何を没収されたのさ！？」
「慌てないでくださいよ。大したものでは無いんです。この前の旅行の時の写真と・・・・・その、向日葵の種と写真立てを、ね？」
「この前の写真はわかるが・・・・・・向日葵の種に写真立て？何に使うんだ？んなもんを」

あはは・・・・・まあ、気にしないでくださいね？

「まあ、造のはそこまで問題にならないんじゃない？鉄人に交渉すればわかってくれるかもよ？」
「いやー・・・・・自分もあれは休みの日に持ってくれれば良かったですから。しょうがないですよ」

それに流石に一人だけ返して貰うのも気が引けますし・・・・・・

「全く、造は真面目だね。ハァ・・・・・・それにしても被害は甚大だよ・・・・・・」
「その様子じゃ明久は写真集以外も没収されたようだな？」

へ？何か他に持ってきてたんでしょうかね？

「えーと・・・・・・（保健体育の）本でしょ、ＣＤでしょ、あと・・・・・・（今日買った瑞希と美波の写っている）旅行の時の写真・

・・・・・かな？」

「ふむ・・・・・・造の件といい明久の件といい、写真まで没収なぞ・・・・・・教師陣も容赦ないのう？」

「うぅ・・・・・・今日ムッツリ商会で買ったばかりのまだ見ていないものなのに・・・・・・」

あらら・・・・・アキさんもかなり落ち込んでいますね。まあ、朝聞いた話しだと姫路さんと島田さんの写真が入っていたそうですし・・・・・・そりゃ落ち込むかもしれませんね。

「残念です・・・・・折角（特別仕様：秋子ちゃんの）抱き枕で眠るのすっごく楽しみでしたのに・・・・・・。水着の写真も・・・・」

「ウチも・・・・・・今夜は良い夢を見れると思っていたのに・・・・・」

・・・・・・・・・・・・えっと。聞かなかった事にしておきましょうね。

「てか、そう言う雄二は本以外に何没収されたのさ？」

「俺はまたＭＰ３プレーヤーだ。一昨日に出た新譜を入れておいたのに、全部パアだ。クソッ！」

あはは・・・・・あんまり詳しくないんですが、それってお高いんですよね？ゆーさんも災難でしたね？

「・・・・・・・・・・・・持ち物検査の警戒を完全に忘れていた・

・・・・・」

「って、待った!?む、ムッツリーニ・・・・・・まさか、ムッツリーニも・・・・・・・？」

と、青い顔のアキさんが同じく青く沈んでいるこーさんに恐る恐る聞きます。？何でしょうね？

「・・・・・・・・・・・・（コクリ）カメラは全て。データの入ったメモリも全部没収されたから当分再販も出来ない」

「「ええっ!?」」

絶望しきった声のアキさんと姫路さん&島田さん。そこまでショック何ですかね・・・・・・？

「どういう事さ、ムッツリーニ！いつもきちんとバックアップを取っているんじゃないの!?」

「そうですよ土屋君!どこかに予備データは残っていないんですか!?」

「本当は家のパソコンを探せば出てくるわよね!?」

「・・・・・・・・・・・・バックアップはある。しかしサルベージに時間がかかる」

「「そ、そんな・・・・・・っ!」」

思わず床に手を付いてしまうほど、ショックを受ける三人。・・・・・・ホントこの三人ってお似合いですよね・・・・・・

『おい、聞いたか?』
『ああ、再販が未定とは・・・・・!姫路や島田や木下や造ちゃんの水着姿がそれまでお預けなんて死にも等しい苦行だぜ・・・・・』
『それだけじゃない。霧島に工藤に木下姉にあの養護の日高先生。おまけに知らないお姉さんまで水着で写っていたらしいぞ・・・・・!それを見られないなんて・・・・・!俺はっ!俺は・・・・・っ!』

アキさんたち並みに、こーさんの発言に衝撃を受けるのはFクラス男子クラスメイト。持ち物検査でお通夜ムードだった教室が、更に酷い状況へとシフトしました。

「さて・・・・・こうなったら雄二。やる?」
「???アキさん?何をするんですか?」

突然復帰したアキさんが、目をギラギラさせてゆーさんに向かって立ち上がり話しかけます。ハテ?何をするのやら・・・・・?

「愚問だな・・・・・勿論やるに決まってんだろ」
「・・・・・・・・・俺もやる。お前らだけに戦わせはしない」

アキさんに応じてゆーさんこーさんも立ち上がります。それどころか・・・・・

『待ちな、お前ら！』
『俺たちを忘れて貰っちゃ困るぜ！』
『へへっ・・・・・・俺たちゃ仲間だろ？』
西村先生に倒されたクラスメイトの男子（自分とヒデさんは除く）が一斉に立ち上がります。彼らの目には、等しく決意に満ちた炎が見えるようです。
「えっと・・・・・・皆さん燃え上がるのは良いのですが、どうする気でしょうか？」
「・・・・・・造、恐らくじゃが――――」
と、ヒデさんが白けた目でアキさんたちを眺めて、言う前に・・・・・・
「行くぞ、お前らっ！こんな横暴を許したら今後の学園生活に支障が出るっ！教師共――特に鉄人が出払った昼休みに職員室へと忍び込み、俺達の夢と希望を取り戻すんだ・・・・・・っ！」
『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！』』』
「――――こんな事じゃろうな」
「ちょ！？ゆーさん！？それに皆さんも！？」
・・・・・・・・・・・・夏休みボケでしょうか・・・・・・・・・久しぶりに、Ｆクラスの底力を目の当たりにして、呆れるやら、ある意

味納得するやら・・・・・・

『落ち着いて』と、自分が言おうとすると、

「あ、あのっ。皆さん落ち着いて下さいっ！」

おっと、先に姫路さんに皆さんを止めて貰いました。うんうん。最近ちょっと壊れ気味でしたが、姫路さんもやっぱり常識人ですよね♪

「・・・・・ふぇ？瑞希、どったの？」

「明久君、坂本君、それに皆さんも・・・・・・やっぱりそういうのは良くないと思うんです！」

「そう言うのって・・・・・・職員室に忍び込もうとしている事？」

「・・・・・・はい」

姫路さんの言葉に、飛びだそうとしていた皆さんがストップしました。おお、流石姫路さん。

「でも、そうでもしないと没収品は戻ってこないよ？瑞希も没収された大事な物を取り返したいでしょ？」

「そ、それはその、返して貰えるなら返して欲しいですけど・・・・・でも学校のルールを破っちゃったのは私自身ですから・・・・・・」

「まあ、瑞希の言う通りよね。元々ウチらが校則違反をやっちゃってるのが原因なわけだし。その罰に納得いかないからって、問題を起こすのは・・・・・・」

「ですね。ここは諦めるしかないかもですよ?ここは先生方に掛け合うことを、もう一度考えるくらいにしておくしかないかもです」
「そもそもお主らのは・・・・・学園に持ってきて良いものでも無ければ、まだ手にしてはならぬものじゃろうしの・・・・・」
ここまで言うと、皆さん頬を掻いてとても気まずそうにしています。
ふむ、これなら上手く説得できそうですね♪

「そうやって職員室に忍び込むのってダメだと思うんです・・・・・やっぱり、狡いと思います・・・・・」
姫路さんの最後の一言で、皆さんハッ!と気が付いたようです。ふふっ♪良かった良かった。姫路さん、お手柄ですね!

「・・・・・雄二どうしようか?そう言われてみると、忍び込むのはなんだかちょっと・・・・・」
「あ~・・・・・どうするも何も・・・・・。姫路と島田。それに造と秀吉にまで言われたら、流石に考え直すしかないだろう」
まさにその通りです。忍び込むなんていけない事です(↑以前教頭の部屋に忍び込み、奴の悪事の証拠を漁っていた問題児の発言)

「明久君、坂本君、皆さん・・・・・分かってくれたんですね?」
「ああ、姫路たちの言いたいことは良くわかった。つまりはこういうことだろう?」

と、先ほどの台詞を挽回するかのように、ゆーさんは高らかと・・・

・・・

「――――こそこそ忍び込んだりせず、鉄人を殺って堂々と奪い取れ、と」

「「「全然違いますからね（違うわよ）（違うぞい）！？」」」

「ってことだ！皆！女子に無様な姿を見せていられないよっ！僕らの男のプライドに掛けて、正面から正々堂々奪い返そうっ！」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！――!!!』』』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・その後、自分たち四人の説得を聞かずに職員室急襲を決行したアキさんたち。もうツッコミませんが・・・・・・とりあえず皆さん、正々堂々の意味を辞書で調べましょうね？

92時間目　新学期開始♪～さらば我らの聖典よ～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

小説も新学期ですが、リアルでも学校始まってますね（汗）そう言えば持ち物検査って皆さんのとこありますか？ウチももちろんあります（泣）この前小説を持ってかれた同士がいました。しかもバカテスを。ホントにドンマイ。

まあ何が言いたいのかと言いますと、ちょっと学校が始まって忙しくなってきてて、更新がだんだん遅れるかもってことです。すみません。なるべくは更新できる時に更新したいと思いますね。

それではまた次回♪読んでいただきありがとうございました！

93時間目　僕らとババァと召喚野球？～大人って狡いね～（前書き）

どもども糖分です。まだまだ残暑が厳しいですね～

全然関係ない話ですが、この間ちょっと電車に乗っててふと隣の席を見たんですが……バカテスを読んでいる方（大学生さんかな？）がいたんですよ。

何だかバカテス読んでいる人がいるってわかって嬉しくなって、その方の顔をちらりと覗いたら……もう、笑いをこらえるのに必死で死にそうになってました（汗）そこで確信しました。電車でバカテスを読むなら覚悟がいるんだと（笑）

全然関係なくてすみません。んじゃ、そろそろ行きましょね♪

93時間目　僕らとババァと召喚野球？～大人って狡いね～

明久Ｓｉｄｅ

「だから、どうしてお前らはそこまで単純なんだ・・・・・・」

昼休みに正々堂々と没収品を取り返しに職員室を急襲したハズの僕らは、補習室の堅い床に椅子すら使わせて貰うことなく正座され、鉄人の監修の元補習用の問題集をやらされていた。

「クソ、汚ねえ・・・・・！俺達のお宝を奪ってボコった挙句、今度は職員室で召喚獣を用意しての待ち伏せとは・・・・・・！教師の風上にもおけない連中だ・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・・なんて横暴な！」

「全くだよ。男らしく正面から堂々と襲撃に来た僕達を卑劣にも待ち伏せで迎え撃つなんて・・・・・・！そんなの大人のやる事じゃない！」

そう。生徒が一丸となって正面から向かって行ったのに、卑怯にも教師たちはそんな僕らに対して召喚獣を使ってまで待ち伏せをしていた。教師の癖になんて狡いんだろうか。

「ったくお前らは・・・・・吉井、坂本、土屋。無駄口をたたく余裕のあるお前等にプレゼントだ」

「「「げっ！？」」」

ドス、と目の前には問題集が追加される。いじめ！？これって教師によるいじめなの！？

「酷い！このチンパンジー、人間じゃないやい！」

「さてはこのチンパンジー、俺たちを家に帰さないつもりだな！？」

「・・・・・・・・・・・・チンパンジーは大人しく動物園に戻れ！」

「とりあえず次それ言ったら、更に問題集を追加するから覚悟しとくんだな」

遂には脅迫まで！？この脳筋チンパンジーめ、いい気になって！

『坂本も吉井もムッツリーニも、皆揃ってバカだな。あんなチンパンジーに逆らうとは』

『全くだ。俺達みたいに大人しくチンパンジーに従っておけばいいものを』

『無駄な抵抗をしているからチンパンジーに目をつけられるんだ』

「そうそうお前ら。お前らは課題の提出がまだだったな。その分追加だ。ちなみにお前らは遅れている分利子をつけよう。一週間遅れるごとに更にもう一冊やってもらうから覚悟しておくんだな」

『『『何ぃ！？ちょっと待て、チンパンジー！何でそこの三バカトリオには無しで、俺らに利子がついているんだっ！？』』』

うん、とりあえず君たちは後で覚えておくように。僕はちょっとしか怒ってないけど、赤髪の不良とムッツリ忍者が君らを滅するかも

よ☆

「お前ら・・・・・言っておくが、この三人でさえ課題はすでに提出しておるぞ？この分ではお前ら三バカ以下と言う事になるが？」

『『『！？なん・・・・・・だと・・・・・・！？』』』

悪かったね、僕らが宿題をやってて。雄二たちがどうやったかは知らないけど、僕は瑞希や美波に誘われて、ちゃんとやっておいたし。・・・・・と言うか、瑞希があんなにスパルタだとは思わなかったよ・・・・・美波も苦笑してたし。そのお陰で宿題は片付いたけどね？

「ったく・・・・・コイツらは全然変わらんな。課題をやってきた三人も、ちっとは変わると思っていたが、全く変わっておらんし」

「失礼ですね！僕もちゃんと成長してますよ！変わっていないのはこの二人です！」

「ハッ！夏の暑さでとうとう頭の中身も溶けたのか？バカ久よ？」

「・・・・・・・・・・俺とコイツらを一緒にしないで欲しい」

「「お前が言うな！ムッツリスケベ！」」

「・・・・・もういい。お前らももう一冊追加だ」

「「「っ！？」」」

やっぱりこのチンパンジー鬼だっ！

「おのれ鉄人！絶対に復讐しちゃる・・・・・・！」
「あの野郎今に見てやがれ・・・・・！」
「・・・・・・・・・・・この恨み、忘れない・・・・・・！」
『月のない夜道には気を付けろってんだ・・・・・！』
『見てろ、そのうち靴の中に画鋲を仕込んでやる・・・・・・！』
『それなら俺は鉄人同性愛者説を学校中に流してやる・・・・・・！』

「更にもう一冊だな」

『『『『うぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！』』』』

あ、そうそう。急襲に加わらなかった瑞希と美波、造と秀吉の女子四人はEクラスで一緒に授業を受けているそうだ。そして僕たちFクラス男子四七名全員は補習室で軟禁状態と言う拷問を受けている。唯でさえむさ苦しい集団なのに、女子全員が抜けて監修が鉄人(チンパンジー)ともなれば、僕らのイライラも頂点まで来ていることはもう言わなくても伝わるだろう。

「まったくつくづくお前たちは・・・・・・体力が有り余っているようだが、そういうものは運動で発散しろ。幸い近々体育祭がある事だしな」

と、鉄人(チンパンジー)は嘆息しながら言ってきた。そう、二学期始まってすぐに

あるのが鉄人の言っていた『文月学園体育祭』。何でも“長い休みでたるんだ精神を鍛えなおすため”とか言っていたね。面倒だなぁ・・・・・・まあ、体育祭はどうでもいいけど、それと同時にあるアレは・・・・・・ふふふ！見てろよ、鉄人！

「さて。俺はお前たちが暴れた職員室の後始末をしてくる。全員サボらずに課題をやっておくこと。脱走したら・・・・・・地獄を見せてやる」

そんな不穏当な発言を残して鉄人は出て行った。ご丁寧に鍵までかけてね。・・・・・・何が？脱走したら”だろうか。どう考えても監禁態勢が整っているじゃないか。

「まあ・・・・・・確かに鉄人の言う通りなとこもあるよね、雄二？」

「ああ・・・・・・もうすぐ体育祭、んでもってアレがある。鉄人の言う通り、“運動”で鬱憤を晴らせる・・・・・・っ！」

「・・・・・・・・・・・・俺らの真の実力を発揮できる」

そう言って僕も雄二もムッツリーニも口元を歪ませる。周りも皆もどうやら僕らの言わんとしている事がわかっているようだ。

「思えばこの5カ月。いや、入学してから一年五カ月。俺たちはこの学校の教師陣に随分酷い目に遭わされてきた」

「・・・・・・・・・・・・思えば辛い出来事ばかりだった」

「二学期始まったばかりなのにここで正座させられたり、軟禁されたり、聖典（エロ本）を没収されたり・・・・・・何だか物凄く最低の扱いだ

もんね」

この場にいる全員が「うんうん」と大きく頷く。ここにいる同士たちは皆それぞれ辛い経験を乗り越えてきた戦士達だ。舐めさせられてきた辛酸も大差ないだろう。

「だがもうすぐやってくる体育祭。俺達は――この学校の教師たちに復讐する事が出来るんだ！」

雄二がいつもの如く、皆を盛り上げるべく拳を振り上げ立ち上がった。皆も気分が乗ったのかそれに続き立ち上がる。

『応っ！やってやろうじゃねえか！』
『去年は勝手がわからなかったが、今回はそうはいかねえ！』
『あんの鬼教師どもめ！目に物を見せてやる！』

全員の心が一つになる。そう、先生たちを恨む気持ちは皆同じだ。今日の一件もある。もう絶対容赦しない！あんな横暴な行動には、僕ら皆で報復攻撃を試みるしかないだろう。

「いいかお前ら！こんなチャンスはまたとない！今までの学校生活で、罵倒され、虐げられてきたこの鬱憤。この機に晴らさずしていつ晴らす！」
「・・・・・・・・・・・暗殺は任せろ」

『そうだっ！恨みを晴らせ！』
『この機に乗じて仇を討て！』

『ドサクサに紛れてヤツらをを痛めつけろ！』

そうなのだ。こんなチャンスは滅多に来ない。仇敵：鉄人率いる先生たちを、交流試合と言う隠れ蓑を使いあらゆる手段を以って攻撃できる、復讐のチャンスは。

「全員今は牙を遂げ。地に伏し恥辱に耐え、チャンスの為に力を溜めろ。今この時は、真に仇を討つ時期じゃない。鬼教師どもに復讐するべき時は体育祭。親睦競技という名の下に、接触事故を装って復讐を果たす。いいか、俺達の狙いは――」

『『『生徒・教師交流野球だ！！！』』』

全員が声を揃えて拳を掲げる。見てろよ鉄人、ババア、その他恨み連なる教師共・・・・・！交流野球にかこつけて、必ず聖典の仇を取ってやるからな・・・・・！

『・・・・・何でしょう？何だか無性にツッコミたいんですが？』

『・・・・・あまり気にせんほうが良い。ワシも先ほどからモヤモヤするが、ツッコもうがツッコまないが、あまり結果は変わらぬ気がするぞい』

☆

翌日：文月学園掲示板

～連絡事項～

文月学園体育祭　親睦競技
生徒・教師交流野球

上記の種目に対し本年は実施要項を変更し、競技に“召喚獣を用いる”ものとする。

文月学園学園長　藤堂カヲル

■

「「ババァあああああああああああああああああああああ!!」」

「!?わわっ!?・・・・・・あ、アキさん?ゆーさん?」
「なんだいクソジャリ共。朝から騒がしいねぇ」
「あ、造おはよー。そして・・・・・・“騒がしいねぇ”じゃないですよババァ長!」

何で造がこの妖怪の部屋にいるかはさておき、耳を塞いで顔をしかめる学園長に僕らは掴みかからんばかりの勢いで詰め寄った。折角昨日、聖典を奪われた恨みを交流野球で一気に教師にぶつけようと意気込んでいたというのに・・・・・・今日学校に来てみればこの仕打ちっ!僕らが怒るのは当然だろう。

「どうして今年から交流野球を召喚獣を使ったものに変えるんですか！？」

「ああ、アキさんたちも通知を見たんですね。凄いですよね～♪召喚獣で野球なんて中々面白――――」

「これだと先生達を痛めつけて復讐できないじゃないですか！」

「アキさあああああああああああああああああああん！？何言ってんですか！？」

「・・・・・アンタが今言った事がそのまま変更の理由になると思うんだけどねぇ？とりあえずアンタらは邪魔さね。とっとと出て行きな。アタシは忙しいんだよ。そうそう月野、アンタの場合野球仕様に変わるとだね――――」

完全に無視して造に話しかける学園長。邪魔とは失礼なっ！大体造に何を吹き込んでいるんだろうか？まさかまた造を妙な事に巻き込んでいるんじゃ・・・・・・？

「この野球大会の為に、僕たちがどれだけ故意に見えないラフプレーを練習してきたのか、僕らがどれだけ努力してきたかを学園長は何も知らないから・・・・・・だからそんな冷酷なことを言えるんですよ！」

「・・・・・き、昨日からやけに皆さんが野球の練習を真剣にやっていると思ったら・・・・・・理由はそれですか・・・・・・？」

「その努力を別の事に向けな、クソガキ」

僕らの努力を全否定。教育者としてあるまじき行為だ。

「けっ。この変更どうせまた例の如く、試験召喚システムのＰＲの為だろうが・・・・・・その肝心のシステムの制御は出来てんのか

？また暴走じゃねぇだろうな？」
「ハッ！肝試しや夏休み中ならともかく、今はもう完全に制御してあるさね」
「あはは・・・・・・《文さん》もその辺はちゃんとわかっているようですよ？」

フミ？はて？何のことだろうか？・・・・・・それはともかく何でまたそんな面倒な事を・・・・・・

「それに・・・・・・今回のは完全に学園長が組み上げたシステムなんですよ。そうじゃなきゃ召喚獣で野球なんてしないでしょうし♪」
「月野は良いこと言うねぇ。その通りさ。アンタらバカ二人がどう思っているか知らないけど、野球用に組み替えるってのは並みの労力じゃないんだよ。召喚フィールドの広さの拡張、バットやグローブの設定に、ボールっていう仮想体の構築もしなくちゃいけない。それこそ、完全に制御できなければ実行なんて出来ないさね」
「日本語でお願いします」
「・・・・・・まあ、バカにはわからん話だろうね」

やっぱりこのババァ、海に沈めようか。

「えっと・・・・・・簡単に言えば、いつもの武器を使うようなシステムよりも繊細に出来ているって言えばいいのでしょうかね？」
「なるほどね！」

その点、造の話しはわかりやすくて助かる。なるほど・・・・・・ふむ。要するに・・・・・・

「上手く制御できるようになったから、皆に自慢したかったって事だね」
「・・・・・あれ？なんか違うような・・・・・・？」
「――――――」
あ、ババァが固まった。

「おいおい、明久。ちっとは気を遣いな。図星突かれてババァが凍りついたじゃねえか」
ほう？図星だったのか。この人ってかなりの歳なのに、子供っぽいとこあるよね。かなりの歳なのに！

「ち、違うさねっ！これはあくまでも一つの教育機関の長として、生徒たちと教師の間に心温まる交流をだね」
「あー、そうだなー。流石だなー」
「凄いですねー。尊敬しちゃいますねー」
「ホント腹立たしいガキどもさねっ！」
そう言うババァも子供っぽいじゃないか。

「なるほど・・・・・流石です、学園長！そう言う意味合いもあったんですねっ♪生徒と教師の交流の為に、わざわざ召喚システムを改良するなんて・・・・・・♪」

そんな中、造唯一人が物凄く感動しているようだ。なんて綺麗な目をしているのだろう。こんな綺麗な目をしている造にこのババァの本音を聞かせるのは忍びないし、ここは造に免じてババァにこれ以上言うのは止めておこう。

「月野、アンタはやっぱりこの二人には関わらん方がいいさね。こんなクソ生意気なガキ共にはねっ！」

「やかましい。アンタこそ造を洗脳してねえだろうな？・・・・・・それはともかく、そういう事なら野球のルールを白紙に戻す事は可能だよな。なんせ変更の理由がババァの自慢ってだけなんだからな」

「そうだよね。ルールを普通の野球に戻してください学園長」

「却下だね」

「「どうして！？」」

「そこまで人をバカにしておきながらどうして断られないと思えるんだい！？」

なんて酷いんだっ！可愛い生徒の心からの頼みを断るなんて・・・・・！

「あー・・・・・その、アキさんにゆーさん。お二人とも知っての通りすでに学内にこの事を発表してますし、プログラムも作ってあるんですよ」

「そう言う事さね。今更変更なんて出来ないよ？先に言っておくが体育祭実行委員を潰そうとしても無駄だからね」

ちぃ・・・・・思わず雄二と共に顔をしかめる。もうすでに実行

委員には手を回してあるってことか・・・・・・

「確かに今から変更って訳にはいかないだろうが、このままじゃ生徒と教師の間にあまりにも差が出ないか？」

「差っていうのは召喚獣の強さの事かい？　ハッ、何を言ってんだか」

「でも、雄二の言う通りですよ！　教師チームの点数は物凄く高いじゃないですか！　そんなに差をつけられたら勝てる訳が――」

「バカ言ってるんじゃないよ。今回は戦闘じゃなくて野球じゃないか。召喚獣の力だけで勝てるって言うのなら、野球選手はみんなボディービルダーになってるよ」

「でも！」

「ふふふっ♪アキさん、ゆーさん。面白そうだと思いませんか？」

と、黙っていた造が僕らに話しかける。

「えっと・・・・・・どう言うことかな、造？」

「ふふっ♪学園長の言う通り、今回は力だけでは勝てない競技です。これなら今まで手が出せなかった先生方にも勝てる可能性が十分にありますよ？」

・・・・・・う、うーん・・・・・・まあ、確かに造の言う通り正々堂々と教師どもを負かしたら最高に気分が良いだろうけど・・・・・・それだけじゃちょっぴりやる気が出ないね。

「・・・・・・・・・・・・なら俺達のやる気が出るように、商品を用意してくれないだろうか？」

「へ？雄二？」

と、顎に手をやりずっと何かを考えていたであろう雄二が、突然妙な提案をしてきた。

93時間目　僕らとババァと召喚野球？～大人って狡いね～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

ちょっと一話あたりの文章量が多すぎてしまったので、中途半端に切ってしまってすみません。次回と繋がっていますのでなるべくは明日には更新したいと思います。

それにしても明久たちFクラスの行動力は凄まじいですね（苦笑）以前も言いましたが自分らも持ち物検査があり、辛酸を舐めた同志諸君が大勢いるので……ちょっと彼ら彼女らと共に職員室を特攻してみましょうかね？

……ダメですかね？やっても全員正座で職員室の前に仲良く並ぶのがオチかな？ちなみにこの前の持ち検で最高被害者は、ｐｓｐと何かのグッズをまとめて持ってきていた戦友。泣いてましたよ、リアルに。てか、おまいさんはどこの明久だ（汗）

んじゃ、今回はここまで！早くて明日更新予定です。読んでいただきありがとうございました♪

９４時間目　交渉とルールと召喚野球～リア充共に裁きを～（前書き）

皆さんお元気でしょうか？糖分摂取魔ですよ～♪

いつもの如く関係ない話なんですが……うちの母に、その……これ書いていることがバレました（冷汗）おまけにバカテスを読んでいることもバレましたｏｒｚ　母は理解がある方なので大丈夫だとは思うのですが（汗）

詳しくは活動報告で書きます（苦笑）ほ、ホントに大丈夫だよね！？とりあえず今日も張り切って行きましょう！９４時間目スタート♪

９４時間目　交渉とルールと召喚野球～リア充共に裁きを～

明久Ｓｉｄｅ

学園ちょ――――ババァ長の陰謀で、『生徒・教師校流野球』が召喚獣仕様になってしまった。そのことでババァ長を説得に来た僕と雄二（と、何故か学園長室にいた造）。もう、プログラムの変更が出来ないと言い切られて、どうするか迷っていると・・・・・・

「・・・・・・・・・・・なら俺達のやる気が出るように、商品を用意してくれないだろうか？」

雄二が何かよくわからない事を提案してきた。商品？一体雄二は何を考えているんだろう？

「これはまた、随分とくだらない提案をしてきたもんだね。そんなもの、急に言われても用意できるわけないだろう？」

「いや。用意も必要ないし、費用もかからない」

「？？？ゆーさん？」

これには造も首を傾げている。商品なのに用意が要らなくて、且つ費用もかからないものって一体・・・・・・？

「俺達が勝ったら持ち物検査で没収された品を返却してもらいたい。それが商品ということでどうだ？」

「・・・・・・なるほどね。名より実をとろうって訳かい」

「ババアも流石にあの問答無用な持ち物検査については、生徒に限らず教師陣にも色々言われたんだろう？」
「・・・・・フン。没収されるのが嫌なら、不要品なんか持ってくるんじゃないよ。学校を何だと思っているのやら」
「あ、でも確かその辺は学園長も“厳しすぎかもねぇ”って言って――ムグゥ！？」

ん？何か造が言おうとしてたけど、一体何だろうか？そうそう、ちなみに教師陣で不満を言ってきたのは意外にも高橋先生が中心だとか。・・・・・推測だけど、多分木下さんが持ってきた造の写真も没収せざるを得なくて、先生方も辛酸を呑んだんだろう。まあ、そうでなくても、流石に写真すら没収品に含まれるのはあんまりだと思うし。

「まあ、その批判が出ているからこそのこの提案だ。これを呑んでくれたらルール変更に大人しく従うし、チャンスを与える事で生徒たちの不満も抑える事が出来る。悪い話じゃないはずだが？」
「進むべき方向が分からないから不満が爆発するって事かい？『没収品を取り戻せる機会がある』と提示させ、その後結果として取り戻せないとしても、不満の矛先をアタシら“教師陣”から“チャンスを物に出来なかった自分たち”に向けようと」

・・・・・・・・・・・・何だかまた学園長と雄二で小難しい話しをしているね。わかるように喋ってくれないと困るなぁ・・・・・・

「ねえ造。雄二とババァの言いたいことって、要するにどう言うことかな？どうにも没収品を戻して貰える事と、教師への不満がどうのこうのの説明がわかんないんだけど」

「え？・・・・・・うーん、そうですね・・・・・・・」

僕の質問を、造はゆっくりと考えて・・・・・・

「えっと、アキさんたちはこの召喚獣仕様に不満もあり、且つ昨日の持ち物検査にも不満がありますよね？」

「うん、勿論」

「召喚獣仕様の事を生徒の皆さんがどう思っているかわかりませんが、少なくとも持ち物検査にはアキさんたちだけでなく他の皆さんも結構不満に思っていると思うんです」

まあ、そうだろうね。理不尽にも持っていかれた人は結構多いみたいだし？

「そこに・・・・・・取り戻せるチャンスが来れば、皆さん必ずやる気を出して頑張るでしょう？“皆さんが不満だった召喚獣仕様の野球にも”ね」

「あ・・・・・・なるほど。でもこの交渉はそれだけじゃ先生たちにはメリットがなくない？折角没収したのにまた返すなんて事絶対にしたくないだろうし。そもそもババァが了承してくれるとは思えないけど・・・・・・？」

「いいえ。このゆーさんの提案は先生方にも勿論メリットがありますよ。そうじゃなきゃ交渉とは言えないですし」

？？？教師にメリット？

「ほら、昨日アキさんたちが職員室を襲撃したでしょう？流石にあ

そこまで不満を持っている生徒は多くはなくても、抗議に来る生徒もいるハズです。先生方も何度もそう言う生徒を対応するのは面倒でしょうから・・・・・・ここであえて商品として取り戻せるチャンスを生徒に与える――――するとどうなると思いますか？」

「うーんと・・・・・あっ！先生たちに向けていた不満よりも、目先の商品を取り返す事の方が大きくなるってこと、かな」

「その通りです。自分たち生徒には“没収品を取り戻せるチャンスが与えられる”と言うメリットが。そして先生方には“生徒が抱えている召喚獣を用いる野球に関しての不満が消える”ことと“生徒たちへの面倒な説明や対応を、一度チャンスを与えるだけで省ける”と言うメリットが生まれます」

「つまり雄二の意見としては、“いきなりこんな召喚獣を使った野球にするなら、せめて自分たちの不満の一つくらいは解消して欲しい”ってことで・・・・・・」

「そして学園長側の考えとしては、これでもしも取り戻せなくても、“一方的に持って行かれたと思う”のではなく、“自分たちの力が及ばなかった”と生徒たちが思ってくれる――――ってことでしょうかね？」

おお・・・・・なるほど、大体わかったよ。造がいると理解しやすいな～

「で？どうだババァ。俺の提案は？」

お、どうやら雄二がババァに早速交渉してきたみたいだ。よし、なら僕も・・・・・・

「お願いします、ババァ」

雄二の横に並び、とりあえず頭を下げる。すると学園長は腕を組み、勿体ぶってから――

「そうさねぇ・・・・・正直これは取引というより、あんた達のお願いだからねぇ・・・・・・そんな態度で来られても、快く首を縦に振れないさね」

何だか難癖をつけてきた。このクソババァ・・・・・どうしてくれようか?と、そんな中、造が思案顔でババァに話しかけてきた。

「うーん・・・・・ねぇ学園長?体育祭は確か海外からの来賓もいらっしゃるんでしょう?このまま持ち物検査の件や召喚獣の仕様の変更を上手く皆さんに説得しないと、その場で暴動起きるかもですよ?」

「っ!?・・・・・・・・・・・ぐっ・・・・・・た、確かにねぇ・・・・・・・」

おっ!何やら考え込んでいた造が学園長にそう告げる。しかもその造の一言で何だか学園長が揺らいだようだ。これはもしや・・・・・!

「今回来賓の方々には体育祭だけでなく、野球仕様の召喚獣も見せるつもりでしょう?そこで乱闘騒ぎでもあれば・・・・・色々不味くないでしょうか?」

「・・・・・・・・・・・そうかもしれないねぇ」

「くくくっ!流石造だ。んで?どうだババァ。アンタはこの事を聞

いて何もしないのか？」

雄二も造の話に乗ってきたみたいだ。これなら行けそうだね。

「・・・・・・・・・・・くっ、仕方ないね。その提案を呑もうじゃないか。いちいち気にくわないがねぇ」

「そうか、それは助かる」

「ふふふっ♪ありがとうございます、学園長！」

・・・・・造って、こう言う時って凄いよね？いつの間にか造のペースを作るしさ？

「あとはルールの明文化だな。商品がかかってるんだ。こんなルール聞いていない、とか文句を後で言われても困る」

「それはこっちの台詞だよクソガキ」

と、早速雄二と学園長がお互いを罵り合いながら、ルール設定を作り始めた。この辺は狡賢い雄二とあざとい学園長に任せておこう。正直ルール設定なんて面倒だからね。

『この召喚野球大会に使う科目は一つだけにするのか？』

『アタシはそれでもいいんだけどねぇ。アンタらはそれだと困るだろ？』

『ああ。各イニングでそれぞれ使用科目を変えて貰いたい』

『ま、それくらいなら認めてやろうじゃないか。きちんと授業に関わりがあるからね』

『それは助かる。だとしたら“召喚獣を用いて、授業内容を云々”

と書くよりは“必ず授業科目の中の一つを用いる事”と書いた方が分かりやすいんじゃないか？』

『ルールを曲げないなら、その辺りは好きにしたらいいさ』

二人の話し合いはドンドン勝手に進んでいく。何だか雄二の思惑通りみたいで、何よりではあるけどちょっと疑問も残るね・・・・・・？ま、その辺は本人に直接聞くかな？

それにしても・・・・・・

「造、助かったよ！ありがとね」

「んみゅ？何の事ですか？」

「ほら、学園長の説得の事だって！」

「あ、ああ！それですか？ふふっ♪お礼なんて言わなくて大丈夫ですよ」

そう言って造は相変わらずニコニコしている。やっぱり造は優しいんだね♪・・・・・あれ？それにしてもどうして造は学園長を説得してくれたんだろ？

「・・・・ねえ、造？どうしてわざわざ学園長を説得してくれたの？正直造にはあんまりメリットがなさそうな話なのに」

「ふぇ？・・・・・ふふふっ♪そんなの決まってますよアキさん♪召喚獣で野球なんて面白そうでしょ？どうせやるなら、商品でも何でもいいので皆さんのやる気を出して貰って戦ってみたかったってことと――――」

そこで一呼吸入れて、造は舌をペロッ！っと出すと・・・・・・

「――――没収品を返して欲しかったのは、アキさんたちだけじゃ無かったってことです♪自分を仲間外れにしないでくださいね～♪」

・・・・・そうやって、満面の笑みで答えてくれた。あ、あはは！造らしいね♪

■

～召喚野球大会規則～

・各イニングでは、必ず授業科目の中から一つ用いて勝負すること

・各試合に於いて、同種の科目を別イニングで再び用いる事を認めない

・立ち会いは試合に参加していない教師が務めること。また、試合中に立ち会いの教師が移動してはならない

・召喚フィールド（召喚野球仕様）の有効圏外に打球が飛んだ場合、フェアの場合はホームラン、その他の場合はファールとする

・試合は5回の攻防までとし、同点である場合は7回まで延長。それでも決着がつかない場合は引き分けとする

・事前にメンバー表を提出すること。ここに記載されていない者の試合への介入は一切認めない。なお、これにはベンチ入り人員および立ち会いの教師も含む

・基本構成はポジション各1名ずつとベンチ入り2名の系11名とする

・進行においては体育祭本種目を優先させる。競技の時間に重なりそうな場合は事前にメンバー登録の変更を行うこと

・腕輪の使用は認める。ただし他人の召喚獣の点を故意に削る目的に使用した場合は、反則としてその者を退場させる

・その他の基本ルールは公認野球規則に準ずる

■

造Ｓｉｄｅ

ゆーさんと学園長の交渉と、簡単な野球仕様の召喚獣に関しての説明を受けて学園長室を三人で後にしました。と、Ｆクラスに戻る途中で・・・・・・

「雄二。さっきの話なんだけど」

と、アキさんがゆーさんに切り出しました。

「召喚野球の話か？」
「うん。アレってさ、一見合理的に見えたけど・・・・・・それって、僕らが勝てる可能性があればの話だよね？」
「あ、確かにアキさんの言う通りですよね。取り戻せる方法が『勝てたら』って言うのが大前提ですし、何か策が無ければ先生方に勝つ可能性は極めて低いでしょうし」

それに先生方だけではなく、二、三年のＡ～Ｂクラスも強敵でしょうし。何せあの霧島さん率いる二年Ａクラスに、自分らよりも経験値が高く点数もあり、且つ小暮さんやタカさん率いる三年生Ａクラスなど・・・・・・うーん。これは悩ませられますね。

「まあ、お前らの言う通りだな。野球で勝てなきゃ意味がない。多分ババァもそれがわかってて乗ってきたんだろうな」
「でしょうね。一応野球仕様で先生方も最初は慣れないかもしれませんが、点数が半端じゃありません。西村せんせや高橋先生は・・・・・確か単教科で７００～８００点レベルだったハズです。そもそも教師陣と戦う前に他のクラスとの勝負も控えてますし」
「もうとりあえず絶望的だよね・・・・・・相手が相手だし、僕らが勝つには・・・・・・」
「わかっているだろうが・・・・・・普通のやり方じゃ、まず勝てねえな」

確かに・・・・・生半可な作戦や、小手先の操作技術じゃ勝つなんて無理でしょうね。さてさて、この状況をゆーさんはどうやって対処するのでしょうね？

「それで雄二。今度はどんな作戦を考えたのさ？」
「あ、自分も気になります。今回はどんな感じなんですか？」
「ん？何の話だ？」
「とぼけないでよ。プログラムを見ながら何か考えてたでしょ？」
「それにあのルール設定は、自分もちょっと違和感がありましたよ？」

妙な言い回しにしてあったり、野球大会の話をしているハズなのに体育祭を優先してたり・・・・・正直自分、ゆーさんが何をどう考えているかよくわかりません。

「まあ、お前らの言う通り俺は勝つ見込みのない勝負はしない」
「じゃ、どう言う作戦なのさ？」
「まあその辺は当日になってお前らに教えるさ。今教えても明久じゃ理解出来んだろうし、造は絶対に反対するだろうからな」

一体どんな作戦を立てているんですか・・・・・？ちょっと、不安ですね・・・・・・

「失礼だなぁ・・・・・あれ？でもさ雄二。雄二がこれだけ頑張るってことは、もしかして没収品ってＭＰ３プレイヤーだけじゃないんじゃない？他にも何か持っていかれたでしょ」
「へ？そうなんですか？」
「ああ・・・・・特級品の写真集を、三冊ほど持っていかれた・・・・・」
「ゆーさんもですか・・・・・・」
「てか、三冊も？よく雄二の環境下で隠し持っていられたね」

確かに・・・・・霧島さんやあのゆーさんのお母さんの雪乃さんの監視の目が光る中、そこまで持っていられるのは奇跡に近いですよね？

「ああ。本棚の下や天井裏、完全防水にして熱帯魚の水槽の底に沈めたりと、色々工夫したからな」

「もうそれ見たい時に取り出せるレベルじゃないよね？」

「目的と手段が見事に入れ替わってますね・・・・・・」

「そこまでしなくちゃ守れないし、そこまでして守る価値のある逸品だったんだ」

あらら・・・・・それは残念なのでしょうかね？

「とりあえず残念でしたね、ゆーさん」

「まあそこまでのものなら僕も是非見てみたいなぁ」

「・・・・・・私も」

・・・・・・・・・・・・ん？あれ？

「てなわけで、後は雄二と霧島さんの二人で仲良く♪」

「・・・・・吉井。悪いけど造をお願い。娘には聞かせられない話を父親と母親でしなきゃいけない」

「うん。わかってるよ。んじゃ造。とりあえず教室に戻ろうね」

「待て明久。この状況で俺を置いていくな。せめて造だけでも置いていけ」

「誰が父親と母親ですか？・・・・・・と言いますか、地味に痛いので離して下さいね？ゆーさん、アキさん」

いつの間にか話に加わっていた霧島さん。気配が全くしなかったんですが・・・・・・？あ、そうそう。今自分はアキさんとゆーさんに掴まれて、どこぞの大岡裁きになっている状態です。腕を引っ張りあって、手を離した方が親ってやつですね。まあ、どっちも父親ではありませんがね？そして、どっちも手を離す気はなさそうです。

「・・・・・雄二を甘く見ていた。今度は水槽や植物鉢、雄二が入浴中の浴槽の中まで詳しく探す」
「おい待て。最期の一つは確実に目的が捜査じゃないだろ？」
「・・・・・私には、雄二の成長を観察する義務があるから」

あらあら♪霧島さんったら大胆ですね～♪

「ねえ、聞いた造？君のお父さんとお母さんは、いつまでも仲が良いんだね～」
「誰が誰の父と母かは知りませんが、ゆーさんも霧島さんも昔からすっごく仲が良いんですね♪」
「ちょっと待て！お前ら勘違いしているだろうが俺は別に・・・・・・」
「・・・・・昔から雄二と一緒にお風呂も入ってた。中学までかな？」

「「へー♪」」

それだけ仲がよろしいってことなんですね～♪

「っ！？おい、翔子っ！？お前なんて事を・・・・・・ち、違うぞお前らっ！別に俺とコイツは・・・・・・」
「・・・・・この前は二人で裸Ｙシャツで寝た仲」
「違うわっ！アレはお前が着てただけだろがっ！」
ん？Ｙシャツって・・・・・・あ、もしかして、

「ねえ霧島さん？Ｙシャツってもしかして夏休み、自分とヒデさんがゆーさんの家にお邪魔した時のことですか？」
「・・・・・・うん。あの後雄二と一緒にその格好で寝た」
そう霧島さんが言うと、アキさんがゆーさんの肩をポンッ！と叩いて・・・・・・・

「雄二・・・・・・君は一足先に、大人の階段を上ったんだね。おめでとう」

と、満面の笑みで祝福します。あははっ♪流石にそこまでは行ってないでしょうが、ゆーさんと霧島さんがいつでも仲良くて何よりですね～♪

「やかましいっ！んなわけあるかっ！それより明久こそ、姫路と島田と三人で寝てただろうがっ！」
「っ！？ななな、何で雄二が夏休みの事知ってんの！？ち、違うっ！アレは瑞希が作った料理をうっかり食べて、瑞希と美波が僕を介抱してくれただけだって！何故かその後瑞希も美波も介抱疲れしたみたいで、結局三人で寝ているように見えただけというか・・・・・

・！？」

「「「・・・・・・・・・・・・・」」」

あの、アキさん？それは初耳ですけど？そんなことがあったんですか・・・・・・？あらら、これはアキさんと姫路さん＆島田さんの関係もやっぱり進展しているんですね～♪

「明久・・・・・・お前」

「だ、だから違うって！？あの後姉さんが帰ってきて、ボッキリ絞られたから不純な行為は別に――――」

「言い忘れてたが、俺がお前に“姫路と島田と三人で寝てただろうが”って言った意味は、“合宿中に同じ布団で寝そうになっただろう”って意味だったんだがな？」

「・・・・・・・・・・・・・ゑ？」

あちゃー・・・・・・これはアキさんの見事な墓穴掘りですね。本当にご馳走様ですね♪

「墓穴を掘ったなっ！お前こそ、随分アイツらとは進展しているじゃねえか！このモテモテハーレム男が！」

「だ、黙れっ！大体雄二と霧島さんなんかは、もう付き合う付き合わないのレベルじゃなくて完全に夫婦の関係じゃないかっ！中学まで一緒にお風呂に入って――――」

「・・・・・ちなみに、私の胸が大きくなってからも数回ある」

「――――今も一緒に入る仲なんて、最早夫婦生活を満喫しているじゃないかっ！こんのリア充がっ！」

「んだとコラ！ハーレム形成してるお前が言うなっ！」

「・・・・・夫婦、生活♪」

「えっと、多分どっちもどっちだとは思うんですがね？それと霧島さん？何だかトリップしてませんか？大丈夫ですか？」

と、霧島さんの精神が別世界に行き、アキさんたちが言い争いながら今にも喧嘩を始めようとすると・・・・・・

『吉井・・・・・・坂本・・・・・・お前ら随分とモテるんだな？』

「「誰がっ！この異端者（バカ）と一緒に・・・・・・する・・・・・・なっ！？」」

『『『さて・・・・・・お前ら、それが遺言だと受け取って構わんのだな？真の異端者共よ・・・・・・？』』』

・・・・・・！？いつの間にか須川くんを中心とするFクラスの皆さんが、色々と危なそうなものを持ってアキさんとゆーさんを囲みます。ちなみにアキさんとゆーさんに掴まれていた自分も例外なく囲まれていますね。

『昨日までは共に聖典（エロ本）を取り戻す同士たちと思っていたが・・・・・・どうやらお前らは俺たちの敵だったようだな？誰もが踏み入れる事を許されぬ聖域を汚す異端者共め・・・・・・！その罪死を以て贖うべし。それが――――』

『『『――――我ら、異端審問会の掟！クタバレ吉井、坂本っ！！！』』』

グイッ　ダッ！×２　↑造を連れて、一目散に逃げる明久＆雄二

「って！？何で自分、また拉致されるんですか！？」

「「ちぃ！相変わらずしつこいっ！」」

「・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・雄二・・・・・・・・造」

『追えっ！あの異端者どもには、たっぷりとその罪を分からせるのだっ！』

『『『ハッ！承知しましたっ！』』』

承知しないでくださいっ！それと、とりあえずアキさんたちは自分を下ろして下さいっ！？新学期早々に、追いかけっこの始まり始まり。どうでもいいですがＦクラスに入ってから、走らない日が珍しいですよね・・・・・・？

「・・・・・・さっき話してた『野球に勝てば没収品返還』って話・・・・・・詳しく教えて欲しかったのに・・・・・・」

９４時間目　交渉とルールと召喚野球～リア充共に裁きを～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

何だかんだで、造はやっぱり明久たちの仲間ですしこうなりました。あ、それとちょっとだけ原作と違いルールを追加しています。これからの召喚野球で必須のルールだと思いまして。

それにしても、雄二も明久も（ムッツリーニも）もマジリア充。ちょっとＦＦＦ団に同情してしまいます。ちなみに作者は今も昔も絶賛恋愛氷河期。泣いていいですか？

さて、次回はいつもより早いですがバカテスト集を書きますね。それからちょっとした設定も。あんまりストーリーが書けない上に短いものになるでしょうが、その辺はすみません。

……にしても今回の話は書きにくいです（泣）感想の返信でも何度か書きましたが、自分ちょっと野球のルールに疎くてどこのポジションがどうなのかさっぱりなんですよね……９月に入って忙しくなってきましたし、野球のルール確認も頑張ってやらないといけないのでかなり書くペースが遅れる予定です。

またまた愚痴ってすみません。とりあえず次回はバカテスト集です！ではでは。読んでいただきありがとうございました！

文月学園レポート：腕輪編＋バカテスト集その？（前書き）

どもども、最近寝るのが一段と早まってきている気がする糖分摂取魔です。

何だか早寝するようになったんですよね。でも、朝はちゃんと遅くまで寝ているから、早寝遅起きで遅刻確定の日々が続きます（汗）

友人に『小学生かよ！』って言われた時はまあ良かったんですが、後輩に『お爺ちゃんお婆ちゃんみたいですね！』って言われた時はガチで凹みました。後輩さん、もしかして自分のこと年寄りだと思っているのかい？

ま、そんなことよりサッカーやろうぜ！……じゃなくて、そんなことよりバカテスト集ですね。今回短めですがよろしくですです！んじゃ、行きましょう！

文月学園レポート：腕輪編＋バカテスト集その？

文月学園レポート：特別仕様の腕輪について～白銀・黒金の腕輪とは～

白銀の腕輪（代理召喚型）所有者：月乃　造
起動キー：『起動（アウェイクン）』　終了キー：『解除（キャンセル）』

原作では雄二が持っていた召喚フィールドを形成出来る腕輪。この作品では原作と違い欠陥は無く、実は召喚フィールドに入れば問答無用で召喚獣に成る造を不憫だと思い『ならば月野自身が召喚獣に成る成らないを選べるように』と造のために学園長が作ったとされる。

科目指定可能で原作のような起動のたびに点数を消費するのではなく、所有者（造）の取った点数に応じてフィールドの広さが広くなる設定。

例を挙げれば造が使用すると・・・・・現代国語（５００点相当）では、教師フィールドにも匹敵するほどのフィールドが張れる。逆に英語（２～３点相当）では、最早自分以外は召喚獣を呼び出せないほどにフィールドの範囲は狭いとのこと。

また、フィールドを張るのではなく造自身にフィールドの特性を纏わせて、そのまま召喚獣の状態を保持する事も可能。これはあのオカルト騒動の時、白銀の腕輪のシステムをあの召喚システムの≪文≫が乗っ取った結果出来るようになったとのこと。

白銀の腕輪（同時召喚型）所有者：吉井　明久
起動キー：『二重召喚（ダブル）』　終了キー：『解除（キャンセル）』

■

原作同様明久が所有者且つ、大幅な変更点は無い。使用者（明久）の点数を二分してもう一体召喚獣を呼び出す機能を持つ。

対久保戦で初使用された。原作と違うことと言えば、造の持っている腕輪と同じく終了キーが付いている事くらい。解除（キャンセル）の一声で元の一体に戻す事が出来る。

実はまだ隠された機能があるらしい。・・・・・・が、まだまだ明久自身の点がそれを発動できるまで至っていないことに加え、学園長が『誰があんなバカに教えるかい』と拗ねているそうで明久自身知らないらしい。

■

黒金の腕輪（召喚制御型）所有者：坂本　雄二
設定キー：『設定（セット）』　起動キー：『再設定（リセット）』

オリジナルの腕輪。２年３年によるオカルト召喚獣版肝試し対決の

時に雄二に贈られた賞品。『場の安定』の目的で作られた腕輪。

腕輪を使えばその召喚フィールドのあらゆる状態がリセットされる。・・・・・・要するにそのフィールドで召喚された召喚獣の消費した点も元の状態に戻すことが可能な腕輪。

一見中々使えるようにも思えるが勿論欠点があり、その場で召喚した召喚獣は例え敵だろうと点が元に戻る上、あらかじめ設定キーの『設定(セット)』を発動しなければリセットは使えない。おまけに一度リセットした場は張りなおさない限り、改めて設定出来ないとのこと。ちなみに戦死した召喚獣を回復させることは不可。

実は前記の能力はあくまで付属品。本来の用途はシステムが暴走した時の為のもの。体育祭&野球編で使用予定。

☆

バカテスト　世界史）

次の文章を読み、問に答えなさい。

１９世紀の終わり、“ドイツの宰相”は世界最初の社会保険制度を創設し、貧困者たちの救済を図った。また、この救済と同時に、社会主義者鎮圧法を制定した為に、この政策は『（　）とムチの政策』と呼ばれた。

問１“　”内の当時のドイツ宰相の名前を答えなさい

問２（　）に当てはまる単語を答えなさい

姫路瑞希・月野造の答え
『問１　ビスマルク
問２（アメ）とムチの政策』

教師のコメント
正解です。ビスマルクは政策として、社会保険制度をご褒美――つまり“アメ”として民衆に与え、一方で社会主義者鎮圧法という“ムチ”で人を叩いたというわけです。甘やかすだけでもなく、叩くだけでもない。政治のみならず、様々な場面で用いられる手法ですね。

木下秀吉の答え
『問２（愛）とムチの政策』

教師のコメント
“愛の鞭”とごちゃごちゃにしてますね。ちなみに“愛の鞭”とは、愛するがゆえに厳しく叱りつけること・その人のためを思ってする叱責という意味です。

土屋康太の答え
『問１　エリザベス』

教師のコメント
ムチ　↓　女王様　↓　エリザベス女王
最近君の考えが理解できるようになって、先生はとても複雑な気分です。

吉井明久の答え
『問２（ムチ）とムチの政策』

教師のコメント
叩きすぎです。

バカテスト　古典）
次の文章を読んで問に答えなさい。

項王軍壁垓下。兵少食尽。
漢軍及諸侯兵囲之数重。
夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、
「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」
項王則夜起飲帳中

この時の項羽の境遇から生まれた四字熟語を答えなさい。

姫路瑞希・月野造の答え
『四面楚歌』

教師のコメント
正解です。本来ならば見方が歌うはずの“楚の歌”が四方を囲う敵兵の陣から聞こえててくる。それはつまり、味方の兵が敵陣に降ってしまったことを示します。このことなら“敵に囲まれて孤立する

こと”を【四面楚歌】と言うようになったのです。

島田美波の答え
『問題が暗号になってます』

教師のコメント
気持ちはわかります。

土屋康太の答え
『先手必勝』

教師のコメント
後手です。

吉井明久の答え
『先手必勝』

教師のコメント
しかも負けています。

バカテスト　数学）
次の等式を数学的帰納法を用いて証明しなさい。
１＋３＋５＋・・・・・＋（２ｎ－１）＝ｎ？・・・・・・・？

（但し、ｎは自然数とする）

姫路瑞希・月野造の答え

［１］　ｎ＝１の場合、?式は

（左辺）＝１

（右辺）＝１

より成立します

［２］　ｎ＝ｋ　の場合成立すると仮定します

１＋３＋５＋・・・・・・＋（２ｋ－１）＝ｋ?・・・・・・?

ここでｎ＝ｋ＋１　の場合?式の左辺は

１＋３＋５＋・・・・・・＋（２ｋ－１）＋（２ｋ＋１）

＝ｋ?＋（２ｋ＋１）　（?式より）

＝（ｋ＋１）?

つまり、

１＋３＋５＋・・・・・・＋（２ｋ－１）＋（２ｋ＋１）＝（ｋ＋１）?

となり、ｎ＝ｋ＋１　のときも?式は成立します

［１］［２］より、?式は全ての自然数ｎにおいて成立すると言えます

船越先生のコメント

正解です。数学的帰納法とは、ｎ＝１の時に成り立ち、ｎ＝ｋの時に成り立つと仮定して、ｎ＝ｋ＋１のときにも成り立つと証明することで、命題が全ての自然数ｎにおいて成り立つと証明する手法です。意外とｎ＝１で場合の証明を忘れてしまうことがあるので、解

答の際は充分注意しましょう。造くんは正解のご褒美として、補習(コスプレ)をしましょうね♪

月野造の返答

・・・・・もうツッコミませんよ？

土屋康太の答え

『？式は正しいことをここに証明します

土屋康太』

船越先生のコメント

証明書の体裁を気取っても駄目です。数学的帰納法を用いて、と問題文にもあるので、ｎ＝ｋの場合成立するという仮定のもと、ｎ＝ｋ＋１の場合でも成立すると証明しましょう。

吉井明久の答え

『成立すると断定します』

船越先生のコメント

仮定して下さい。

バカテスト　化学）

？～？の説明に当てはまる元素記号を次から選び、それぞれ正しい名称を書きなさい。

『Ｍｎ　Ｏ　Ｓ　Ｎａ　Ｉ　Ｐｂ　Ｎｅ』
？体心立方構造で、水と激しく反応する。炎色反応では黄色を呈する。
？沸点１８４．２５℃、融点１１３．７５℃。これの溶液にデンプンを加えると反応を起こし藍色を呈する。
？原子量５４。過酸化水素の水と酸素への分解反応において、これの酸化物が触媒として用いられる。
？希ガス族・第二周期。空気を液化、分留して作られる。

姫路瑞希の答え
『？Ｎａ：ナトリウム　？Ｉ：ヨウ素　？Ｍｎ：マンガン　？Ｎｅ：ネオン』

教師のコメント
正解です。それぞれの特徴を覚えておくと、化学反応の説明などにもつながります。基礎的な特徴はしっかりと覚えておきましょう。

月野造の答え
『？Ｎａ：ナトリウム　？Ｉ：ヨウ素　？Ｍｎ：マンガン　？Ｎｅ：ネオン
※えっと・・・・・・問題の順番を変えませんか、先生？』

教師のコメント
？？？一応正解なのですが、どう言う意味ですか？

島田美波の答え
『書きたくありません』

木下優子の答え
『書く気になれませんでした』

教師のコメント
どうしましたか。テストのボイコットとは感心しませんね。島田さんも木下さんも真面目で良い子だと思っていたのに、先生はがっかりです。わからないのであればまだしも“書きたくない”“書く気になれない”というのは理由にもなっていません。そういった姿勢は、学力以前に人としての考え方において問題があります。今後はそのような態度を改めていかないと、いずれ社会に出たときに苦労を――

土屋康太の答え
『？Ｎａ：ナ　？Ｉ：イ　？Ｍｎ：ム　？Ｎｅ：ネ
※貧乳もステータスの一つ。誇っていいハズ』

工藤愛子の答え
『？Ｎａ：ナトリウム　？Ｉ：ヨウ素　？Ｍｎ：マンガン　？Ｎｅ：ネオン
⇒ナ　イ　ム　ネ　※需要はあると思いますよ～♪』

教師のコメント
――島田さんと木下さんに全力で謝ってきます。それにしても、土屋君と工藤さんの仲の良さに感心しました。

バカテスト　国語）

次の文章を読み、“複雑な表情”の理由として誤っているものを選びなさい。

若くして夫婦になったジムとデラは、貧しくも互いを愛して暮らしていました。
ジムの宝物は代々伝わる金の時計、デラの宝物はその美しい髪の毛でした。
クリスマスの前日、デラは愛する夫にプレゼントを買う為、自慢の美しい髪を切ってかつら屋に売ってしまいます。そしてそのお金で、ジムの金の時計につけるプラチナの鎖を買ったのでした。
ジムは家に帰ると、デラの姿を見て・・・・・怒りでも、驚きでも、不満でも、恐怖でもない“複雑な表情”をしました。
ジムがデラに用意したプレゼントは、デラがあこがれていた、美しいくしだったのです。

（ア）買ってきたプレゼントがデラにとって必要のないものになってしまったから
（イ）デラが自分を想っていてくれたことが嬉しいから
（ウ）美しいデラが髪を失ってみすぼらしい姿になり、がっかりしたから
（エ）デラからのプレゼントをつけるはずの時計を売ってしまっていたから

霧島翔子の答え
（ウ）

教師のコメント

正解です。これはクリスマスにまつわる有名な話の一つですね。お互いに買ってきた物は役に立たなくなってしまったけれども、相手を思う気持ちが伝わってくるという心温まるお話です。是非とも皆さんには将来そういった家庭を築いて欲しいと思います。

霧島翔子の返答
・・・・・・もう、幸せ家庭を築いています♪

教師の返答
・・・・・・・・・・・・・・・ゑ？

坂本雄二・月野造の返答
翔子（霧島さん）？なぜ俺ら（自分ら）を見て言っているんだ（言っているんですか）・・・・・・？

工藤愛子の答え
（ウ）　※ショートヘアだって可愛いですよ！

土屋康太の答え
（ウ）　※ショートが可愛くないと誰が決めた！

教師のコメント
えっと・・・・・お二人とも正解ですが、どこか求めている答えと違う気がします。ともあれ《誤っているものの選択》という問題に対しては（ウ）という回答なので、一応正解です。それにしても、本当にお二人は仲がよろしいですね？

須川亮の答え

（ク）リスマスはキリストの誕生を祝う日であり、男女が乳繰り合っとること自体が間違っとるんじゃぁあああああああああっ！！

教師のコメント
選択肢に（ク）はありません。

異端審問会の皆さんの返答
須川会長に続けえええええええええええええっ！クリスマスは廃止じゃぁあああああああっ！！

造　「・・・・・・霧島さんは相変わらずですね」
雄　「・・・・・・もうツッコむな造」
明　「坂本家の皆さんは、ホント仲が良いね～♪」

造・雄「「・・・・・・・・・・・・・・・（もう絶対ツッコまないっ！）」」

秀　「仲が良いと言えば、ムッツリーニと工藤もじゃの」
造　「あー・・・・・・確かに息ぴったりな回答でしたね」
康　「・・・・・・・・・・・・別に」

造・雄・明・秀「「「「ふーん♪そーなんだー（棒）」」」」

康　「・・・・・・・・・・・・・・何だお前ら」

美　「・・・・・・・・・・・・・ハァ」
優　「・・・・・・・・・・・・・ハァ」
瑞　「え、えっと？どうして美波ちゃんも優子ちゃんも、私の胸を見て溜息を吐くんですか？」
美　「ナイムネ、ね（せめて瑞希の三分の一でもあればアキも喜んでくれるかしら・・・・・・）」
優　「ナイムネ、ね（造くんの周りって、何故か妙に胸が大きい人達が多いのよね・・・・・・）」
瑞　「ふ、二人ともやっぱり目が怖いですよ！？」

美・優「「・・・・・・・・・・・・・ハァ」」

翔　「・・・・・愛子、土屋と仲良い。私と雄二みたい」
愛　「ちょっ！？ちょっと待って！？ボ、ボクは別に／／／／／／」
翔　「・・・・・照れなくていいのに」
愛　「い、いや・・・・・た、確かにこーたくんと一緒の答えなのは嬉しいけど・・・・・／／／／／／」

異端審問会『『『・・・・・とりあえず、吉井と坂本とムッツリーニは――――死刑』』』

宗「“とりあえず”でそんなことを言っている暇があるなら、お前らはさっさと課題を提出するんだな」

文月学園レポート：腕輪編＋バカテスト集その？（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

最初の設定集は、今後のためのちょっとした伏線とかも含めて書きました。って言ってもそこまで大した伏線ではないですがね？

そんでもってバカテスト集は……工藤さん＆ムッツリーニになるべく焦点があてられるように書いたつもりです。何だかんだでムッツリーニも工藤さんも良いカップル♪……ムッツリーニもげろ。明久＆雄二ももげろ

さて、次回の更新ですが……いや本気で全然書けてません（汗）一応次回分は書けましたが、対Ｅクラスの野球編が難しくて……ま、気長に書くと思います。そんなわけでずっと更新しないしない詐欺っぽいことしてましたが、今回こそ４，５日は書くのに時間がかかるかと。

なるべくは！なるべくは急いで書きますねっ！とりあえず読んでいただきありがとうございました！次回がどれくらいかかるかわかりませんが、また次回です！

９５時間目　初戦と野球とEクラス～開幕！召喚野球大会～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。相変わらず前書きが長い糖分です、はい。

野球編に入っていますが、中々難しいですね～。作者自体が野球に詳しくないだけでなく、ストーリーに造や他の皆さんを入れるのが結構頭を悩ませますもん。

てか、野球のこと調べて思ったんですが自分って姫路さん並みに野球のこと知らなかったんだ！と、再確認。地味に凹みました。

まあ、愚痴っても仕方ないですかね？そろそろ行きましょか。９５時間目、ＧＯ！

９５時間目　初戦と野球とＥクラス～開幕！召喚野球大会～

明久Ｓｉｄｅ

そんなこんなで、気がつけば体育祭の当日。

『――時より、第二グラウンドにて召喚野球を行います。参加する生徒は――』

退屈な開会式も無事終えて、校庭に取り付けられたスピーカーからアナウンスが響き渡りいよいよ待ちに待った僕たちの聖典奪還の闘いの始まり始まり。そんなわけで僕らは野球大会の行われる会場へと向かっているところだ。

「雄二。最初の相手って何処だったっけ？」

「確か一回戦は同学年の隣のクラスが相手だって話だから、Ｅクラスのはずだ。ほら、コイツが対戦表だ」

と、雄二が対戦表を渡してくる。それにしてもＥクラス、Ｅクラスか・・・・・。隣のクラスなのに、実はあんまり交流がなかったりする。試召戦争を起こしたって話も聞かないし。一体どんな人たちだろうか・・・・・？

「ねえ、Ｅクラスってどんなクラスなの？」

一応クラス代表として最低限の交流があるであろう雄二に聞いてみる事に。まあ無いとは思うけど、危ないクラスじゃない事を祈ろう。

「ん～・・・・・そうだな。さっき代表同士で挨拶をしたが、対応も可愛いものだったしな」

コイツ・・・・・まさか今まで交流をしていなかっただろうか？

まあそれはともかく、

「ちなみに可愛いってどんな感じだったの？」

「確か・・・・・『押忍！自分はEクラス代表の中林であります！本日は絶対に勝たせて頂くであります！』ってな感じで」

「ソイツ絶対に全身筋肉だよね！？絶対可愛くないよね！？」

い、いや・・・・・もしかしたらそう言う感じの喋り方なだけの可愛い子かもしれない。言い過ぎたかな・・・・・？

「冗談だ。本当は『今日はヨロシクねっ。絶対負けないんだから☆』って感じでしゃべる代表だった」

「何だ・・・・・良かったよ・・・・・」

全く、雄二の冗談は質が悪いね。

「言い忘れてたが、ソイツはラグビー部所属だな」

「・・・・・・・・・・・・・」

今時のラグビー部はそう言う喋り方するのだろうか・・・・・・？

「こらこらゆーさん。嘘言っちゃダメですよ？Ｅクラス代表の中林さんに失礼ですし」

「そうじゃの。雄二よ、明久をからかうのも大概にするのじゃ。話をややこしくするでない」

と、何だか苦笑している二人の美少女が僕を見かねて話に加わってきた。おのれ雄二、またしても僕に嘘を教えてたんだな？このペテン師め。

「あれ？てか二人はＥクラス代表のこと知っているの？」

「ええ、知ってますよ。ほら、アキさんたちがこの前職員室を襲撃したじゃないですか」

「その後お主ら補習室に監禁されておったじゃろ？その間、ワシらはＥクラスで授業を受けておったからの。その時に良くして貰ったのじゃ」

この二人の言う事なら信頼出来るもんね。それにしても・・・・・・ああ、僕らが鉄人に問題集をやらされまくった時の事か。そう言えばこの二人と瑞希と美波はその間Ｅクラスと合同授業をしてたらしいもんね。

「それで？そのＥクラスとＥクラス代表ってどんな感じの人かな？」

「んー・・・・・クラス代表の中林さんは女子テニス部のエースをやっていらっしゃると聞きました」

へぇ～？確かうちのテニス部って結構強いらしいし、そのエースってことは余程の実力者なのだろう。

「彼女自身の性格はサバサバしてて、とても活発そうな方ですね。自分とヒデさん、それに姫路さんに島田さんがEクラスで勉強する事になっても、問題なく受け入れてくれる懐の大きいとこもありましたし」

「ちなみにEクラスは・・・・・そうじゃの、言うなれば『体育会系クラス』と言った方が良いな」

？？？体育会系のクラス？

「ワシが言えたものではないが、部活を中心に学園生活を送っておる者たちが多かったの。その分少々成績が振るわぬようじゃが、体力や運動神経は中々のものじゃぞ」

ああ、なるほど。だから試召戦争をやったとか話を聞かなかったわけだね。確かにここ文月学園は進学校だけど、部活動中心に頑張っている人たちも勿論いるわけだし。秀吉とか良い例だよね。

「なるほどなるほど・・・・・って、あれ？それなら今回結構強敵になるんじゃないの？」

と、何気なく呟くと・・・・・

「良くわかっているじゃない！悪いけど勝たせて貰うわよ！」

「・・・・・・・・・・・・へ？」

突然ヘアバンドが特徴的な女の子が、まるで僕に突っかかる勢いで話してきた。ど、どちらさまで・・・・・・？

「確かにアンタたちFクラスは強いでしょうが、アタシたちの得意分野で負けるわけにはいかないのよ！絶対勝つわっ！」

「え、えっと・・・・・・？」

どうしよう・・・・・このヘアバンドをした人、僕の記憶が正しければ初対面なハズなんだけど？困ったな・・・・・・

「明久、コイツがEクラス代表の中林ってやつだ」

頭にクエスチョンマークを浮かべていると、雄二が助け船を出してきた。あ、そっか。この人が――――

「この人が、代表のエースでサバサバで受け入れるって定評がある――」

「待ちなさい。アンタの中の私のイメージってどんなのよ？」

ゴメン。流石に略しすぎた。

「ま、まあいいわ・・・・・私たちEクラスはここでアンタたちを倒すわっ！特に吉井！」

「は、はいっ！？」

「アンタは・・・・・・私のライバル・・・・・・絶対負かして見せるわ・・・・・・っ！そしてあの人を振り向かせて見せるっ！」
「えぇ！？な、何の話！？」

わからない・・・・・僕中林さんに何かしたっけ・・・・・？
今日この場で会ったばかりの人にライバル宣言されても困るんだけど・・・・・・

「（おい、秀吉。何であんなにＥクラス代表は明久にライバル心を燃やしているんだ？お前何か知ってるか？）」
「（う、うむ・・・・・実はの。その、中林は久保に憧れを抱いておるようなのじゃ）」
「（オーケーわかった、そう言うことか。大方久保の本性を知ったんだろうな）」
「（そのようじゃの。明久を一方的に恋のライバルじゃと決めておるらしいの）」
「（当の明久本人は何の事かさっぱりなわけか。随分一方的な三角関係だな、おい）」
「（正確には、姫路&島田⇔明久↑久保↑中林じゃの。三角と言うよりも一方線、交わってすらおらぬしの。中林が不憫じゃぞ）」

「「（やれやれだな（じゃの）・・・・・・）」」

それと何だろう？雄二と秀吉の僕と中林さんを見る目が妙に優しい気がする。と同時に、一瞬怖気が・・・・・・？

「あ、中林さん。今日はよろしくお願いします♪」

ここで造が困惑している僕と燃え上がる中林さんの間に入りフォローしてきた。ありがと造、相変わらず空気読んでくれて助かるよ・・・・・

「はいっ！今日はよろしくお願いします月野先輩っ！」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・造が挨拶するときちんと礼（ご丁寧に９０度の礼）をして対応する中林さん。こ、今度は一体何だろうか？

「あ、あの・・・・・・中林さん？自分は確かに一応歳は上ですが、あくまで今は中林さんたちと同学年ですし“先輩”はちょっと恥ずかしいのですが・・・・・・」

「そんな！先輩は先輩でしょう！？去年引退した先輩達から“月野君には頭が上がらないね～”って言っているのを聞いていましたしっ！」

なるほど。部活動をしっかりしているだけあって、上下関係はしっかりとしているんだね。その点は流石だ。それも造にとっては、すっごく恥ずかしいことみたいだけど。

「で、ですから、自分はそんな大した人間では・・・・・・」

「今日はよろしくお願いします、月野先輩っ！」

と、再び一礼してからEクラス側のベンチに去っていった。

「うぅ・・・・・聞いていませんね・・・・・」
「そだね。てか、中林さんは随分造のこと尊敬しているみたいだけど、何かしたの？」
「いいえ？この前会ったばかりだと思うのですが・・・・・？」

「「うーん・・・・・？」」

これには造も僕も頭にクエスチョンマークを浮かべて、首を傾げることしか出来ない。良くわかんないよね？

「（ん？おい、秀吉。中林のヤツは造には対抗意識は持たんのか？確か久保は造にも興味があったと記憶してたんだが？）」
「（・・・・・久保が『月野君は弟を見ているような気分なんだよ』と言うておったらしくての。それで中林は“造は問題ない”と判断したらしい。それどころか、Eクラスを持ち上げる発言をしておったから好感が持てるそうじゃ・・・・・）」
「（そうか・・・・・にしても秀吉？お前なんか少し不機嫌じゃねえか？）」
「（・・・・・気のせいじゃ）」
「（いや、気のせいってお前・・・・・）」
「（・・・・・別に、造の義兄弟はワシと姉上だけじゃとは、思うておらんからの？）」
「（・・・・・ひ、秀吉？）」
「（思うておらぬからの？別に、久保に負ける気はないなど思うて

――――）」

「（い、いやもういい・・・・・・わかった、俺が悪かった）」

???何やらこそこそ話している雄二たちの方向から、何故か黒いオーラが見えたような?てか、秀吉がちょっぴり黒く見えるけど・・・・・気のせいかな?

☆

造Ｓｉｄｅ

一応中林さんやＥクラスの方たちへの挨拶も終わり、一回戦の為に準備を始める事に。ゆーさんと中林さんの先攻後攻決めにより、自分たちは後攻攻めになりました。ちなみに最初の科目ですが、グラウンドに向井先生がいらっしゃると言う事は――――

「――――まず一回は古典勝負ってことだね」

「そですね。あ、先生がフィールドを張るみたいですよ」

『そろそろ始まりますね。それでは・・・・・・起動（アウェイクン）っ！』

キュウウウウウウウウウウン　ボンッ！

先生が古典フィールドを張り、お馴染の起動音と共に自分も召喚獣へと成り替わりました。

「あ、造も召喚獣になったね。んじゃ僕も召喚しようかな。試獣召喚(サモン)っ！」

「なら俺も召喚すっかな。試獣召喚(サモン)っ！」

ボンッ！×2

自分が召喚獣と成ったことを確認すると、アキさんたちも試獣召喚(サモン)のキーワードを口にします。同時にアキさんたちの足元に幾何学模様が浮かび上がり、その中からアキさんたちをデフォルメした姿の召喚獣が現れます。

《ふむふむ。これが野球仕様の召喚獣の姿何ですね～》

「今回は野球のユニフォームか。やれやれ、学園長も変なとこに労力を割いてるよね～」

あはは♪それだけこだわりがあるってことですよ。

「操作の一部は自動的になっているらしいな。ま、そうじゃなきゃ野球なんて出来っこねえだろうしな」

《まあ、自分とアキさんはそこは別系統のシステムで動くそうですがね》

「あ、そうなんだ。・・・・・それにしても造。今回はちゃんと

バットとグローブが出たね」
「む、そのようじゃの。ワシはてっきり、また箒で野球をするとばかり・・・・・・」
《さ、流石にそれは厳しいですよ・・・・・・まあ一応、いつもの箒と一緒で召喚されたバットに『点数を使って風を起こす能力』は付属されていますがね》
・・・・・ん？ってことは、自分は腕輪で空を飛ぶなら――――バットに跨らければならないのでしょうか？しゅ、シュールですね・・・・・・？

「まあシステムについてはワシらが気にしても詮のない話じゃろうし、ワシらはワシらの目の前の試合に集中しようぞ」
「それもそうだね。経緯はどうあれ、没収品がかかっているワケだし・・・・・・まだ雄二から、その方法は聞いてないけど」
確かに・・・・・・さて、Fクラスの策士：ゆーさんはどう攻略するのやら？

「ん？そういやそうだったな。んじゃそろそろ守備位置、打順、作戦を発表するぞ！お前らよく聞いておくんだ」

と、皆さんに話しかけるゆーさん。やっぱりゆーさんは凄いです。こう言う時の皆さんをまとめ上げる手腕やカリスマ性は、見事としか言いようがありません。皆さん文句も言わずに付いていっていますし。

「基本の守備位置と打順はこんな感じだ」

■

1番　ファースト　木下秀吉
2番　ショート　土屋康太（ムッツリーニ）
3番　ピッチャー　吉井明久
4番　キャッチャー　坂本雄二
5番　ライト　姫路瑞希
6番　セカンド　島田美波
7番　センター　月野造
8番　サード　福村幸平
9番　レフト　須川亮

ベンチ　横溝浩二　近藤吉宗

■

なるほど・・・・・流石ゆーさんです。ポジションを見ると、中々個人個人のバランスが取れているのではないでしょうか。

「って、あれ？ねえ雄二、僕がピッチャーでいいの？雄二とか瑞希とか造の方が確実でしょ？」

と、メンバー表を眺めていたアキさんがゆーさんに質問をします。

「できるならそうしたいが・・・・・・俺らが投げて、取れる奴らがいるか？」

「あ・・・・・そっか。召喚獣はパワーが桁違いだし、雄二たちが投げて下手をすれば・・・・・・」

「一瞬で昇天するだろな。細かな設定は知らんがババァの話によると、使用するボールの重さは――――まあ実際の重さは無いんだが、持っていると仮定すると結構重めに設定してあるらしい。ただ捕球するだけでも点がごっそり削られるだろうな」

《あはは・・・・・点が高すぎるのも考えものってことですかね》

下手をして捕球し損なえば、味方側が戦死してしまうわけですね。

それはあまりにリスクが高いでしょうし・・・・・・

「ならば、造と雄二と姫路たちがローテーションを組むのはダメなんじゃろうか？」

と、ヒデさんが的確な意見を出してきました。あ、確かにそれなら結構いけますかね？と、自分もヒデさんに同意しようとすると・・・・・

「す、すいません。私、野球とか全然詳しくなくて・・・・・・。実際にやったこともないですし・・・・・・」

「だ、そうだ。今後はともかく、一回戦は姫路はルールを把握して貰う為にもライトに配置している。状況次第で動かすだろうからな。ちなみに俺はキャッチーとして動くつもりだ。全体に指示をしやす

いからな」

おお・・・・・そこまで計算に入れているんですか。すでにゆーさんの中には勝利の方程式が出来上がっているのでしょうね。

「ん?でも待って。瑞希がライトで雄二がキャッチャーなのはわかったけど、造がどうしてセンターなの?召喚獣として動ける造がピッチャーの方が何かと便利じゃないの?」

《いやいや。召喚技術はアキさんの方がどう考えても上でしょ?だからアキさんがピッチャーなのでは?》

「まあ、一応明久の召喚獣の扱いを見越しているのはある。だが造をセンターに置いたのは・・・・・くくくっ、まあ試合が始まればわかるさ」

と、ゆーさんが物凄く悪い顔をしていますね。・・・・・ちょ、ちょっと不安ですよ?

《ね、ねえゆーさん?自分に何をさせる気ですか?》

「くくくっ、試合前に教えるさ。・・・・・期待してるぞ、造」

・・・・・・・・・・・・は、激しく不安ですね?大丈夫かな・・・・・?

「以上だ。お前ら、他に何か質問は?」

《ですから自分は何をすればいいんですか?》

「造以外の質問はなさそうだな!」

《無視ですか!?》

自分を完全に無視して、ゆーさんが皆さんに問いかけます。・・・・・どうやら皆さん質問はなさそうですね。

それと同時にゆーさんを中心にした円陣が自然に出来上がります。
そしてゆーさんは全員を鼓舞するように大きな声を上げ・・・・・・

「よし。それじゃ――――いくぞテメェら、覚悟はいいか！」

「「「おうっ！」」」

「Eクラスなんざ、俺たちにとっちゃただの通過点だ！こっちの負けはありえねぇ！」

「「「おうっ！」」」

「目指すは決勝、仇敵教師チーム！　ヤツらを蹴散らし、その首を散っていった戦友（エロ本）の墓前に捧げてやるのが目的だ！」

「「「おうっ！」」」

「やるぞテメェら！　俺の――――俺たちの、かけがえのない仲間（エロ本）の弔い合戦だ！」

「「「おっしゃぁあああああああああああっ！！！」」」

皆さんの目に炎が灯ります。何だか正直怖いくらい燃えがってますよね・・・・・ですが、

「あ、あの美波ちゃん・・・・・・こうしてみると、なんだか・・・・・」
「そうね・・・・・・ウチらまでそういう本を没収されたみたいよね・・・・・・・」
「ワシも造も、別にエロ本など持ち込んでいないのじゃが・・・・・・・」
《あ、あはは・・・・・・皆さん、すっごい気合いの入り様ですね・・・・・・そう言う本の為と言うのは恥ずかしいですが・・・・・・》
ま、若いってことなんでしょうかね？ともかく、召喚野球、第一回戦：Ｅクラス戦スタートです！

《・・・・・それで？ゆーさん、自分はホントどうすればいいんですか？》
「ふっ・・・・・・待たせたな。造、お前の今回の役回りは――――」
～雄二作戦説明中～
「――――って感じだ。これはお前にしかできない役回りだからな。頼んだぜ！」

《・・・・・・・・・・・・・・あ、呆れました・・・・・・・・だ、大丈夫なんですか?》

「当たり前だ。この為にルールを事前に取り決めたからな。安心して思いっきり頼むな!それじゃ試合が始まるし、ポジションに戻るぞ」

《って!?ま、待って下さいゆーさん!・・・・・・・・・・・・・・行っちゃいましたね。本当に大丈夫なんでしょうか?・・・・・・・・ルールがどうこうより、Eクラスの方々に怒られないか不安なんですが》

９５時間目　初戦と野球とＥクラス～開幕！召喚野球大会～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

Ｅクラス代表の中林さんは、久保ＬＯＶＥな人で明久を恋のライバルと認識している（と自分で思いこんでいる）ってことにしました。まあ、原作通りと言えば原作どおりでしょうかね～？一応クラス間での仲は悪くは無いようにしました。これからどうなるかわかりませんがね？

さて……雄二が造に頼んだ作戦ですが、まあ待て次回ですかね？次回は造大活躍♪とりあえず造がボロボロになることは確定です♪

造「嫌な予感が……」

前にも書きましたが、一話一話書くのに時間が大分かかると思います。皆さんには申し訳ないですが、待たせることになるかと……まあ、次回は明日にでも更新しますがね？

それじゃ、また次回お会いしましょう！読んでいただきありがとうございました！

９６時間目　雄二と造と腕輪の力～Ｅクラスの方すみません～（前書き）

どもども糖分摂取魔です。皆さんお元気ですか～？

またどうでもいい話ですが、自分病院行くと生傷が必ず出来るんですよね（汗）いやね？採血ってあるでしょ？自分ってなんか血管が浮き出てこない体質らしくて、必ず一回は採血失敗するんですよ（泣）

失敗したら逆の腕でやるんですが、一番ひどかったのは手術当日の朝。３回は失敗して手術前にすでにボロボロでした。あれも良い思い出なのかな（苦笑）

まあ、どうでもいい話ですよね～んじゃ今日も張り切って行きましょうね！９６時間目、よろしくお願いします！

９６時間目　雄二と造と腕輪の力～Ｅクラスの方すみません～

明久Ｓｉｄｅ

『プレイボール！』

主審を務める寺本先生の声がグラウンドに響き渡り試合が始まる。
実際に野球をするのは召喚獣だけど（まあ、造は本当に召喚獣になっているけどね？）召喚獣を扱うのにはどうしても自身の召喚獣の側にいた方がいい為、必然的に召喚獣と同じポジションに僕らも立っている。不思議とホントに野球をしているような気分になるね。

「しゃーっす！試獣召喚（サモン）っ！」

Ｅクラスのトップバッターがまさに体育会系の挨拶をしてくる。さて、戦力的にはどんなものやら？

≪Ｅクラス　園村俊哉　古典　１１７点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　古典　９１点≫

ふむふむ・・・・・こんな感じか。以前の僕ならちょっと苦しかったかもしれないけど、今なら何とか対処出来そうだね。あ、そうそう。ちなみに今回の試合で使う教科は一回が古典・二回が化学・

三回が英語で・四回数学・五回に保健体育と言う感じだ。

早速召喚獣にボールを持たせ、キャッチャーである雄二の指示を待つ。まあ、変化球が使えないので、実質コースと球の速さの指示くらいだろうけど。

と、何をしているのかそのキャッチャーの雄二は『設定（セット）』と呟いている。周りに聞こえないような小さな声だったけど、僕らはアイコンタクトや口の動きだけで会話する技術があるからすぐにわかった・・・・・それにしても何を言っているんだろう？

《雄二何してんのさ？てか、早くコースとかの指示をしてよ》

中々サインを出さないし、一先ずアイコンタクトをする事に。

《ああ、ワリィ。ちょいと、な・・・・・・コースはここだ》

と、雄二の召喚獣のミットが示す場所を見る。何々・・・・・・

《って、ど真ん中？いきなり大丈夫なの？》

《ああ、大丈夫だ。向こうも慣れない召喚獣を使っての一球目だぞ？様子見するハズだ》

《あ、なるほどね！》

そう言う事なら真ん中に投げるって指示も納得かな。よしよし、ならちょっと力を抜いた緩い球を投げてみようかな。ストライクを貰えるなら、なるべく後々に力を温存しておきたいし。

《じゃあ行くよ雄二》
《おう。来い明久》
雄二の指示通りのコースにボールを投げる。せぇ・・・・・・のっ！
キンッ
・・・・・・・・・・・ゑ!?ちょっ!?
『ホームラ――――《させませんっ！》・・・・・・え?』
ゴォッ！　パスッ
≪Ｆクラス　月野造　古典　３８４点　↓Ｆクラス　月野造　古典　３３２点≫
『あ、アウトです！アウトッ！』
甲高い音をたて青空へと消えて行きそうだったボールは、造が自身の点を使い風を起こす能力のグローブ（いつもなら箒だけど）で見事に捕ってくれた。た、助かった・・・・・・

にしても・・・・・・・・・・・・・・

「ちゃんと指示しろ、ボケ雄二っ！」
「ちゃんと投げろや、バカ明久っ！」

この野郎、全然言った通りになってないじゃないかっ！何が“大丈夫”だ！造がいなかったら危なかっただろうにっ！

《ハァ・・・・・ハァ・・・・・・い、いきなりですか。ちょっとビックリしましたね》
「つ、造！？大丈夫かの！？」
《あはは・・・・・・平気ですよ。心配してくれてありがとですヒデさん》
「う、うむ・・・・・・あやつらいくらなんでも運動部の面子相手にど真ん中のスローボールを投げるなぞ、何を考えておるのじゃ・・・・・・？」

初回からいきなりピンチになるところだった・・・・・・ワンアウトで2番バッターが現れる。さて、と・・・・・・

《雄二・・・・・キサマ次ミスったら脛バットを叩きこんでやるよ》
《てめぇこそだ明久・・・・・・次ミスったら尻バットを喰らわしてやる》

サインを確認して、２番バッターに第一球を――――

キンッ

――――見事に打たれ、打球は大きく伸びて・・・・・・

『ホームラ――――――《ま、まだまだあああああああああああっ！》・・・・・・・』

ゴォッ！　パスッ

≪Ｆクラス　月野造　古典　３３２点　↓Ｆクラス　月野造　古典　２７５点≫

『え、えっと・・・・・・アウトです』

・・・・・・またしても造に助けられた。と言うか、だ。

「「ベンチ！バット寄こせ――――ッ！！」」

それぞれがベンチに向かってバットを要求する。またもやピンチなんて・・・・・・このバカはどこまで使えないバカなのだろうか！

《ぜぇ・・・・・・ぜぇ・・・・・・》
「つ、造!?お主無茶しすぎじゃぞ!?休むのじゃ!」
《あ、あはは・・・・・・平気、ですよ・・・・・・・・?》
「造・・・・・・全く、あやつらは・・・・・・・・!」

造がいなきゃ初回から2点も捕られていた。本当にあのバカは造に迷惑をかけていると言う自覚は無いのだろうかっ!?

『ええい、バカ共が!もうお前らには任せておけねえ!』
『造ちゃんを無茶させ過ぎなんだよ!バカが!』
『いや、そもそも吉井と坂本に任せた俺達がバカだった!』
『だな!こうなりゃここから先は俺が投げる!ピッチャー交代だ吉井!』
『なら俺が捕ろう!キャッチャー交代だ坂本!』

キンッ

《ら、らすとおおおおおおおおおおおおおおおおおお!?》

ゴォッ!　パスッ

≪Ｆクラス　月野造　古典　２７５点　↓Ｆクラス　月野造　古典　２０１点≫

『スリーアウト！チェンジ！』

ふっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・け、結果オーライかな・・・・・・・？

「・・・・・・初回から、めちゃくちゃ危なかったよね？」

「・・・・・・まあ、な」

正直造がいなきゃ、すでに3点は取られていたよね・・・・・・？

危なかった。いやマジで。ある意味大活躍の造はと言うと・・・・・・

・

《・・・・・・・・・・・・・・ちょ、ちょっと疲れました・・・・・・・・》

「造、ホレ！水じゃ。ゆっくり飲むのじゃぞ・・・・・・」

結構疲労困憊って感じで、秀吉に介抱されていた。ゴメンよ造・・・・・・あと、秀吉？

「・・・・・・次に造をこんな目に遭わせたら・・・・・・お主ら、本気でどうなるかわかっておるの？」

・・・・・・・・・・・・・・・その本気の威圧感（プレッシャー）は止めてください。怖いです。

一先ずベンチに皆で集まって作戦会議をする事に。と、そこにEクラス代表の中林さんが慌ててやってきた。

「ちょ、ちょっと!?さっきのは反則何じゃないの!?」

ん?反則?・・・・・あ、もしかして造が風を起こしてボールを捕ったあの荒技のことかな?とりあえず弁解しようとすると・・・・・

「おいおい。それは言いがかりだぞ?これは召喚獣を使った野球大会だ。腕輪の使用や、召喚獣の特性を利用した攻防は原則認められている」

「ぐ・・・・・で、でも!」

「これでも学園長や審判共には事前に確認済みだ。不満があるなら学園長に通しな。それとも何か?」

「な、何よ・・・・・?」

と、雄二が物凄く悪人面でこう言った。

「あそこでへばっている造のやったことが、反則になるとでも?もしアンタがそう言うなら・・・・・造はとんだくたびれ儲けだな?」

「っ!ひ、卑怯な・・・・・!」

うん、そうだね中林さん。味方の僕でさえそう思うよ。

「言っとくが、造のアレは点数消費型だ。てなわけでこっちだけメリットがあるわけじゃねえんだ。それはわかっておいて欲しい」
「うぅ・・・・・・・・・・・・・」
それでも納得がいかないのか、中林さんが雄二に突っかかろうとすると・・・・・・・
《あ、あのぅ・・・・・・中林さん。やっぱりちょっと反則気味ですし、いけませんよね？》
「えっ！？せ、先輩！？」
ふらふらの状態で造が会話に参加してきた。大丈夫なのかな？
《自分もやっぱり普通にやった方がいいですよね？今度からちゃんと――――》
「い、いいえ！大丈夫です！先輩はお気になさらないでください！」
それだけ言うと、またきちんと礼をして中林さんはＥクラスのベンチに戻っていった。どうやら造のお陰でさっきのプレイは反則にならずに済みそうだね。これで一回の表は何とかなった。ホント助かったよ造。
《え、えっと・・・・・・良いのでしょうか？》
「くくくっ、良いんだよ。向こうさんが大丈夫って言ってんだ。それに俺らは別にルール違反をしているわけでもないしな」

・・・・・そして心底思った。雄二は本当に根が外道なんだと。

☆

造Ｓｉｄｅ

皆さんの没収品を賭けた召喚野球大会。一回戦はＥクラスとの戦いです。現在二回表ですが流石に運動部さんたちが集るクラスとの戦いだけあって、中々一筋縄ではいかない様子。

【Ｅクラス　ＶＳ　Ｆクラス
２　―　２】

一回の攻撃はアキさんとゆーさんが2点を入れてくれましたが、二回に入りＥクラスの皆さんはホームランは自分の風で捕られてしまうとわかっているが故にＥクラス持ち前の運動センスを魅せ、ヒットやバントで攻められてあっという間に同点の2点を入れられました。

キンッ　パスッ！

『スリーアウト！チェンジ！』

とりあえず少しでも高く上がったボールは、風を起こして何とか捕

球します。うぅ・・・・・・結構苦戦しますね。

「ふぅ・・・・・・中々手強いね、Eクラスは」
「ああ・・・・・・正直最初は舐めてたぜ。こりゃ、ちょっと流れを変えて貰うかな」

ベンチに戻り攻撃の準備に取り掛かっていると、ゆーさんがこちらを見てニヤリとしています。こ、これって・・・・・・

《・・・・・ゆーさん?まさかとは思いますが・・・・・・》
「おう!造・・・・・こっからがホントのサプライズだってことをEクラスにわからせてやりな!」

や、やっぱりですか・・・・・・正直、コレはさっきの風を起こすことより反則ギリギリのプレイだと思うのですがね・・・・・・

「ホレ!造がトップバッターだろ?アイツらに目に物見せてやんな!」

と、ゆーさんは自分の背中を押して送り出します。し、知りませんよ?どうなっても・・・・・・とりあえずはバッターボックスに向かうことに。

『???ねえ雄二?造に言っていたサプライズって?』
『フッ・・・・・・まあ見てな。Eクラスの連中を動揺させてやる

から』
『動揺ねぇ？まあどうでもいいけど、造はさっきから風を起こしてボールを捕っていたせいで、今あんまり点がないよ。大丈夫なの？』
『あぅ・・・・・すみません明久君。私のフォローを月野君にしてもらったから・・・・・』
『あ、いや。瑞希のせいじゃないって。僕もガンガン打たれたし』
『お前ら安心しな。寧ろ造の点が削られているってとこが今回の作戦のミソだしな』
『『？？？』』
審判の先生に頭を下げて、バットを構えます。ピッチャーは・・・・・うぅ、中林さんですね。正直彼女には本当に申し訳ないのですが・・・・・・
≪Ｅクラス　中林宏美　化学　１１５点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　月野造　化学　８９点≫
・・・・・確か自分の化学の点は４００点台だったのですが、大分さっきの守備で点が無くなっていますね。姫路さんの方へいったボールを無茶して捕ろうとしたりしたせいでしょうかね？

「点数が減っている今なら、確実に先輩に勝負できますっ！先輩には悪いですが、ここは抑えさせて貰いますよ！」

中林さんがそう言いながらボールを投げてきます。

『ストライクッ！』

・・・・・ふむ、宣言通り勝負してきましたね。どうやら今の自分なら簡単にアウトが取れると判断なさったんでしょう。今の自分なら、ね？

続く二球目も真っすぐに投げてきました。・・・・・敬遠はなさそうですね。

『ストライク、ツー！』

チラリとゆーさんの方を見ると――――すでに準備は良いようです。アイコンタクトで『次に仕掛ける。やっちまいな！』って合図を送ってきました。ほ、ホントに知りませんからね？

「それじゃ・・・・・これで先輩を終わらせてあげますっ！」

そして中林さんが、三振の為にボールを投げてきます。・・・・・先に言っておきましょう。中林さん、ゴメンなさいです。

『よっしゃっ！造、思いっきり行きな！再設定（リセット）っ！』

『『『・・・・・・・・・・・・え？』』』

キィイイイイイイイイイン！　ポンッ！

≪Ｅクラス　中林宏美　化学　１１５点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　月野造　　化学　　８９点　→Ｆクラス　月野造　化学　４２２点≫

と、ゆーさんの一言で突如“消費していた点数が元の点数に戻りました”そしてそのままの点数で・・・・・・

キンッ

『ほ、ホームラ――――ン！』

【Ｅクラス　ＶＳ　Ｆクラス
２　―　３】

・・・・・甲高い音と共に、打球は青空に消えて行きました。や、やり過ぎでしたかね？ホームへと還り、皆さんが唖然としているベンチへと戻ります。

「よしよし、良くやってくれたな造！ホントにお手柄だぞ！」
《いえ・・・・・正真正銘の騙し討ちですし、気が気でないんですが》
ゆーさんが頭をガシガシと撫でます。全く・・・・・本当にゆーさんは奇想天外な作戦を考える人ですよね。
「て、点数が回復した！？雄二、造！何をやったのさ！？」
「そ、そうよ！何がどうなっているワケ！？」
と、そこで皆さんが我に返り、自分とゆーさんに詰め寄ります。うーん、自分が何かしたわけではないのですがね？
《あー・・・・・ゆーさん、説明お願いしますね》
「ん？ああ、そうだな・・・・・簡単なことだ。俺の腕輪を使ったのさ」
「え？坂本君の腕輪ですか？でも坂本君は化学は４００点を超えていないので腕輪は・・・・・」
「いや姫路、そっちの腕輪じゃない。明久と造に“白銀の腕輪”があるように・・・・・俺には“黒金の腕輪”があるだろ？」
「「「あっ・・・・・」」」
「思い出したか？肝試しの時の賞品の腕輪の事を。ま、能力はまだお前らに見せていなかったがな」

中々使わなかった為、皆さん結構お忘れでしょうがね。ゆーさん自身も使う機会がなかったそうなので仕方がないでしょうが。

「そ、それで？その腕輪って何が出来るの？」
「そうだな・・・・・この黒金の腕輪の能力は、簡単に言えば場にいる召喚獣の点数の再設定、つまり点数を回復出来る代物だ。どんなに点が減っていても、戦闘不能にさえならなきゃ元通りの能力ってことだな」

そう、この腕輪のお陰でさっき消費して１００点未満に落ちていた点数も、最初の点数の４００点台に元通りになり、お陰で楽にホームランが出来ました。

「それはまた・・・・・・便利なものじゃの」
「・・・・・・・・・・凄い代物」
「ホントだね。でもそれって流石に反則じゃないの？」
《あ、いいえ。それがどうやらデメリットも多いようなんです》
「その通りだ。何せ普通だったら場の全ての、つまり相手側の召喚獣の点も回復させちまう。あらかじめ『設定（セット）』のキーワードを使わなきゃ再設定は出来ないし、おまけに一度使えばフィールドを張りなおさない限りもう一度は使えないんだ」

そう、正直に言うとこの腕輪は中々使いどころが難しい腕輪だとゆーさんも言ってました。使うタイミングを誤ると、フィールドを別のところで張りなおさなきゃ使えない腕輪です。間違って相手の召喚獣も回復させたらとんでもない事になるでしょうし。

「ん？じゃあ何でここで使ったの？Ｅクラスの人たちも回復させたら危なくない？」

と、アキさんがそう言う質問をします。

「おいおい、明久。良く考えてみろよ？これは試召戦争のような“相手の点数を減らして倒す”ものじゃなく“召喚獣を使った唯の野球”だろ？」

「・・・・・・・・・・・・あ！」

「気づいたな。そうだ、造の召喚獣のもともとの特性のような“自身の点を使用して風を起こす”能力でもない限り、そうそう相手も自分も点数の消費は無いだろ？ここでは造の消費した点数のみが回復出来る」

ついでに言うと、ゆーさんの持つ黒金の腕輪の欠点である”一度使えばフィールドを張りなおさない限りもう一度は使えない”と言う設定も、“各試合に於いて、同種の科目を別イニングで再び用いる事を認めない”というルールでカバーしてあります。

つまり、一回が終わると別の教科になるわけですし、フィールドも張りなおされ再び腕輪が使えると言う仕組みです。本当にゆーさんは先を見通しているんですね。まさかルール設定の中に、こんなことまで考えているなんて・・・・・

《だからゆーさんは先にこう言ってたんですよ。『守備では思いっきり風を使って守ってくれ。そうすりゃ相手も造が攻撃する時、造の点数が減っている事に油断して造と勝負するだろうからな』って》

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・（ズルイ）」」」」」

「ははははっ！上手く行って何よりだな！・・・・・・おっと、また中林が抗議に来たな」

と、そこにやはりさっきの事で抗議に来た中林さんが。いや、本当にすみません・・・・・・

「ちょ、ちょっと！？流石に今回のは無しでしょ！？折角減っていた点数が元に戻るなんて！？」

「ふっ・・・・・・中林、お前はルールを読んだか？」

「る、ルールを・・・・・・？一応一通りは読んだけどそれが？」

「ちゃんと書いてあるぜ？“腕輪の使用は認める。ただし他人の召喚獣の点を故意に削る目的に使用した場合は、反則としてそのものを退場させる”ってな！ルールでそう決められている以上、問題ないさ」

「あ、アンタ・・・・・・そこまで考えて！？」

「今更変更は出来ねえはずだ。教師どももそれがわかっているからな」

・・・・・・・・・・・・どうしてでしょうか？ゆーさんが物凄く悪い人に見えますよ・・・・・・？

「これも作戦の内だ。悔しいならお前も何か策を考えな！」

「・・・・・・・・・・い、いいわよ！私たちは私たちで、全力でアンタたちを打ち破るから！」

そう言って中林さんは戻っていきました。うぅ・・・・・・すみま

せんです。

「よしよし・・・・・・造のお陰で流れはこっちにある！このままのペースで行くぞっ！野郎どもっ！目指すは俺らの戦友(エロ本)の奪還だっ！わかってんな！」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」」」

一点のアドバンテージを得た事により、再びFクラスが燃え上がります。それにしても本当に・・・・・・

《何だかEクラスの方々に申し訳ない気がします・・・・・・なんせそう言う本の為に、ゆーさんの全力で潰されようとしているんですし》

「確かにの・・・・・・今度再び謝罪にでも行くしかあるまいの」

密かにヒデさんと共に溜息をつきます。本当にこのFクラスの皆さんは欲望に忠実なんですからね。ちょっぴりやる気が無くなりますよ。

・・・・・・その後科目数学の3回は島田さんがきっちり抑えました。それでも向こうには体育で負けられない意地があるのか4回表で執念の1点を取り返すも、最終回表はアキさんとゆーさんのコンビネーションに抑えられて、最後の科目の保健体育でこーさんがきっちりと1点を入れてFクラスの勝利となりました。

「うぅ・・・・・なんか、納得いかないわ。今度は絶対に負けないわよ、吉井・坂本っ！」
「いや・・・・・・何でだから僕、中林さんに目を付けられているの！？」

中林さんの悔しそうな顔が忘れられません。本当にごめんなさい、中林さんにＥクラスの皆さん。今度きちんと謝罪に行きますね・・・・・

「ふっ・・・・・・やっぱ野球は騙し騙されが付きもんだな！」

・・・・・あの、それとゆーさん？ゆーさんの野球のイメージって何かちょっと変わってませんか？

と、とりあえずは召喚野球大会一回戦：ＥクラスＶＳＦクラスはＦクラスの作戦（？）勝ちで幕を下ろしました。・・・・・・あれって作戦って言うんでしょうかね？

96時間目　雄二と造と腕輪の力～Eクラスの方すみません～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……またまたわかりにくくてゴメンなさい。恒例のちょっと補足タイム。

雄二が使っていた黒金の腕輪は肝試しの時の賞品です。腕輪の説明は前々回の『文月学園レポート：腕輪編＋バカテスト集その？』で説明してますので気になった方は読みなおしてもらえると吉ですかね？

雄二の作戦ってのは、簡単に言えば騙し打ちみたいなもんですかね？守備で使った点数を攻撃の瞬間に元に戻すっていう。相手は消費している点数なら造に勝てると思いこみ、造と真っ向勝負するって感じです……あれ？この作戦って肝試しの時の二番煎じっぽいような（汗）

かなり面倒な仕様なので、説明不足な点が多々あるかもしれません。何かご質問があれば感想などで書いていただけると、なるべくは答えてみます。

さて、次回はいつになる事やら（苦笑）ホント野球編って書くのが難しいですし、最近ちょっと忙しいので次回の更新がいつか未定です。一応書いたらすぐに更新する予定なのでちょっと待っていただけると嬉しいです！

相変わらず長々すみませんね。それじゃ、また次回っ♪

97時間目　二人三脚・三人四脚～くじ引きってドキドキです～（前書き）

どもども糖分です。最近更新が遅めですみません（汗）

今回の野球編ってやっぱり苦労しますね。野球のルール確認や、小暮さんの存在、3年生が良いクラスになったこともあって、中々まとめるのに苦労しますもん。

愚痴はいいって？ですよねー（苦笑）んじゃさっさか行きましょう。

97時間目、お願いますです！

97時間目　二人三脚・三人四脚～くじ引きってドキドキです～

造Ｓｉｄｅ

「お。戻ってきたか。造、明久」
「ご苦労じゃったな、造に明久よ」
「・・・・・・・・・・・お帰り」
「ただいまです～♪」
「あ、うん。ただいま」

中央グラウンドに戻ると、皆さんが温かく出迎えてくれました。ん？アキさんとどこに行ってたかですか？それは・・・・・・

「それで３－Ｅと３－Ｆの試合はどうなってる？俺らの対戦相手は決まったのか？」

早速ゆーさんが自分らに偵察結果を聞いてきました。そうなんですよ。アキさんと自分で次に戦う予定の３年生の試合を見てきました。ちなみにその三年生同士の戦いは、グラウンドで体育祭をやっているので場所の都合上体育館で行われています。

「それが・・・・・まだ試合中なんですよ」
「そうなんだよね。延長に入ってるし・・・・・・もしかしたらドローかもよ？それならラッキーだけどさ」

と、アキさんと二人で報告します。あ、アキさんの言っているドロ

ーとは、時間の都合上今回の野球大会は7回までに決着がつかない場合に引き分け、つまりドローになるという意味です。まあ両者引き分けと言えば聞こえは良いのですが、その場合はトーナメント表で両者敗退扱いとなるわけです。

「ふむ。それならば次の試合は不戦勝になりうると言うわけじゃな？」

「いや、それでも一応試合がある事を前提に考えておくぞ・・・・・・確か、次の勝負は数学・物理・現国・政経・地理だったよな」

と、ゆーさんがプログラムを見ながら確認します。おお♪英語がない上に現国が！これは結構暴れられるかもですね！あ、でも逆にこーさんは・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・保健体育が無い」

「って事はムッツリーニは体育祭の競技の方に参加？」

「そうだな。2回戦はそうしてもらうか。まあ、多少の情報収集もついでに頼むな」

「・・・・・・・・・・・・了解」

と、こーさんが抜けることとなりました。これってやっぱり得意教科・不得意教科で、誰をどこに入れるのか頭を悩ませますよね・・・・・・ゆーさんの腕の見せ所ってところでしょうか。

「ふむ。とりあえず打順や守備位置をかなり弄る必要があるな・・・・・・最初の科目が数学だし島田を1番のピッチャーに配置。2番に須川あたりか。アイツはバントが得意そうだからな」

「僕はどうなるの？数学は苦手なんだけど？」
「どうせ数学もだろ？ま、お前には操作技術があるから、この際３番のままでバントでもして貰うぞ。上手くいけばここで１点だ」
「りょーかい。任せてよ」

気がつけばどんどん皆さんのチームの配置を考えつくゆーさん。こう言う時のゆーさんって活き活きしてますよね。根が指揮官や監督向きなんでしょうね。

「あ、自分はどの辺が良いでしょうか？」
「ん？・・・・・そうか造か。お前は今回もショートだ。お前の鬼門の英語もないし、フルで頑張ってもらうからな」
「了解ですよ♪」
「ワシはどこへ行けばいいのじゃ雄二よ？」
「秀吉は結構小回りが利くからな。セカンドにでも行って貰う」

と、いつものメンバーで打順や守備位置を話合っていると・・・・・

「「あ、あのっ！アキ（明久君）っ！」」

・・・・・何やら真剣な顔をした姫路さんと島田さんが。ハテ？一体どうしたんでしょうか？

「ん？どうしたの、瑞希に美波？」
「えっと・・・・・大した用じゃじゃないんだけど、ね」
「その・・・・・明久君は、何番ですか？」

・・・・・何番?えっと、打席の事でしょうか?と言いますか、
そんなに真剣になるもの何でしょうか?ひょっとして姫路さんたち
も没収品を取り戻す事に必死だとか?

「何番?・・・・・・ああ!3番だよ。ナンバースリー」

「「はうぅっ!!」」

??よくわかりませんが、アキさんの打順に不満があるってこと
なんでしょうかね?

「うぅ・・・・・確かに瑞希とアキとウチの3人の三人四脚は流
石に低い確率だと思ってたけど・・・・・・・」
「酷いです、あんまりです・・・・・・・せめてどっちかだけでもペ
アになれれば良かったのに・・・・・・全員バラバラなんて」
「ウチらならいくら確率が低くても、絶対いけると思ったのに・・・
・・・」
「堂々と引っ付く事の出来るチャンスなんて滅多にないですのに・・
・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・はい?」」

な、何の話でしょうか?よくわからずにアキさんと首を傾げている
と・・・・・・

「あ~、そういう事か。安心しろお前ら。明久が言ってるのは打順

の事だ。二人三脚のクジはまだ引いてないぞ」

「「え？」」

「「は？」」

二人三脚？一体何の話何でしょうか？

「む、そう言えばこの二人に言うておらんかったの・・・・・・二人とも、アレを見てみい」

と、ヒデさんが指差す先には・・・・・・

『頼む・・・・・！なんとか最高のパートナーを・・・・・・！』
『いいから早く引けよ。後がつかえてるんだから』
『わかってるから急かすなよ・・・・・・！よし、これだ――――
チクショオォォォッ！』

『『『っしゃあああああ！ざまぁみやがれえええええええええええ！』』』

・・・・・・・・・皆さん一体何をやっているんでしょうか？

「えっと、あれって何やってるのかな？」
「まあ、ただのクジ引きだな」
「いえ・・・・・・それは何となくわかるのですが、何のクジ引きをやっているんですか？」

「次の二人三脚のペア決めじゃな」
「あ、そう言えば次は二人三脚でしたね」
「ふ～ん。そうなんだ」

おや？何だか大して興味がなさそうなアキさんですね。まあ、基本アキさんやゆーさんは没収品を取り戻す事の方が本命だからでしょうか。

「なんじゃ二人とも？随分落ち着いておるの」
「そですか？自分は基本誰となってもいいですし・・・・・」
「そだね。造と同じで、僕も誰がパートナーになっても気にしないから。どうせ男女別になってるだろうし――」
「言い忘れてたが、二人三脚は男女混合だぞ？」
「・・・・・・・・・・・試獣召喚（サモン）っ！さあ殺れ！僕の召喚獣！このバカ雄二を血祭りにあげるんだっ！」

と、アキさん物凄くご乱心です。

「落ち着け。そもそも教師フィールドがなきゃ召喚出来んだろうに」
「じゃあ造！悪いけどフィールド出して！男女混合なんて考え出したこのバカを粛正するからっ！」
「いやいや・・・・・出しませんよ。あ、でもそう言うことですか。それで皆さん祈るようにくじを引いていらっしゃるんですね？」

皆さん先ほどから、箱の前で祈りを捧げていた理由はそれなんですね。

「ぐぅううううううう！瑞希、美波っ！誰とパートナーになったの！？とりあえずそのパートナーを始末してくるから安心してねっ！？」

「アキさん・・・・・・その発言は寧ろ不安になりそうなのですがね・・・・・・？」

「そうでもなさそうじゃぞ？ホレ、姫路たちは・・・・・・」

「「アキ（明久君）ウチら（私たち）のことをそんなにも・・・・・・♪」」

あらら・・・・・アキさんＬＯＶＥなこの二人は、アキさんのこの態度も何だか嬉しいようですね。ホントにこの３人は・・・・・・相変わらずご馳走様です♪

「ったく・・・・・・明久、先に言っとくが俺も男女混合の二人三脚はお断りだぞ？」

「えっ？・・・・・・あ、ああ！そっか。そんなことしたら坂本翔子さんが悲しむもんね！ゴメンゴメン雄二。ついカッとなっちゃったよ」

「ほぅ？・・・・・・良い根性してんなバカ久。とりあえずお前はさっさと異端者として裁かれろや」

「へぇ？・・・・・・雄二はどうやら、そんなにも異端審問会の審判を受けたいようだね？」

そして相変わらずなこの二人。本当に仲が良いのやら悪いのやら？

「って、雄二なんかと話している暇はないんだった！瑞希、美波！待っててね、二人の引いたくじは僕が引き当てるからっ！」

そう言ってアキさんはくじ箱の方へ駆け出して行きました。

「アキさんたら・・・・・・♪結構独占欲がお有りなんですね～」
「そうじゃの。それにしても・・・・・・あやつは姫路たちの引いたくじが何番かわかっておるのじゃろうか？」
「と言うかだな、それ以前に姫路と島田が違う番号であった以上両方の引いたくじを引き当てるのはまず不可能な事に、アイツは気が付いてないようだがな」
「・・・・・・・・・・・・・・その辺はやっぱり明久らしい」

と、しばらくして物凄く落ち込んだ顔のアキさんが戻ってきました。

あらら・・・・・・その様子だと――

「どっちも・・・・・・ダメだった・・・・・・ゴメンね二人とも」
「そ、そんなことないわ！ウチらだって・・・・・・」
「そうですよっ！明久君が悪いわけではないんですし！」

――まあ、こうなる確率の方が大きいですし仕方がないかもですがね？残念でしょうが、仕方ないですかね。

「全く・・・・・・これだから貴方は詰めが甘いのです！それでしたら、お姉様とペアになった豚を買収するか・・・・・・」
「そうだね、それか二人のパートナーになる相手を再起不能にしておくしか出来ないよね」
「ふむ、貴方も最近は多少はわかってきているみたいですわね。そうです、お姉様のペアにあの小学生か木下さん以外の豚がなろうも

のなら・・・・・・」
「・・・・・・とりあえずそいつらを滅すれば良いワケ、か。ゴメン清水さん。その時はよろしくね」
あとアキさん&清水さんは物騒な事を言わないでくださいね?・・・・・・あれ?

「「「「（なんで清水（さん）がここにいるんだろう・・・・・・?）」」」」

・・・・・・・・・・・・いや、まあ今更でしょうかね?清水さんが島田さんＬＯＶＥなのはわかりきっている事ですし。

「えっと・・・・・・ちなみに皆さんは何番だったのですか?」
「あ、その・・・・・・私は7番です」
「ウチは・・・・・・6番よ」
「あやや・・・・・・姫路さんと島田さんは番号順的に惜しかったんですね。それでアキさんは?」
「あ、僕?えーっと・・・・・・?“ラスト：3人”って書いてあるんだけど?」

???ラスト：3人?ってことは・・・・・・最後に3人で走るってことでしょうか?

「ほう?明久はそれを引いたのか。人数の関係上、二人三脚の最終走者は確か二人三脚じゃなくて三人四脚だそうだ。その方が盛り上がるっぽいしな」

「うぅ・・・・・・本当ならウチと瑞希とアキで三人四脚をやりたかったのに」
「残念です・・・・・・どうして私はこう言う時のくじ運がないんでしょうか」

あらら・・・・・・確かにその三人四脚なら、三人とも最高に良かったでしょうね。姫路さんも島田さんも、きっと三人仲良く体育祭を楽しみたかったでしょうし。

「・・・・・・折角、アキともっと仲良くなるつもりだったのに」
「・・・・・・明久君の胸とかお尻とか触るチャンスでしたのに」
・・・・・・・・・・・・！？し、島田さんはともかく姫路さん今何か言いま――――いえ、気のせいってことにしておきましょう。自分は何も聞いていません。ええ、聞いていませんとも！

「おっと、そう言えば自分もまだくじを引いていませんね」
「そういや俺たちもまだ引いてなかったな。アイツらが落ち着くのを待っていたらすっかり忘れてた」
「ワシもじゃな」
「・・・・・・・・・・・・同じく」

と、一先ず自分らもくじを引きに行く事に。

「こうなれば・・・・・・造と秀吉が瑞希と美波のくじを引いてくれる事を祈るしか出来ないっ！頼んだよ二人とも・・・・・・！」
「そうですわね・・・・・・まずはこのお二人に託しましょう。そ

れでもダメなら、美春が出ますわ・・・・・・！」

・・・・・・・・・・・・アキさんに清水さん？それではまるで自分とヒデさんが、男として見られていないように聞こえるのですがね？それどう言う意味か後でじっくり聞かせて貰いますよ？まあ、それは後でにして、今はクジ引きですね。

（物凄く皆さんが固唾を呑む中）まずはヒデさんが・・・・・・

「む・・・・・・6番のようじゃな。島田とペアか」

「「よしっ！！流石は秀吉だね（木下さんですわ）！」」

ふむふむ・・・・・・ヒデさんと島田さんがですね。アキさんと清水さんがガッツポーズをしています・・・・・・何だかこの二人って、最近息があってますよね？島田さんのペアの相手がヒデさんとわかって安心したのか、清水さんはさっさと戻っていきました。

ま、まあそれはともかく、次はこーさんがくじを引きます。少しガサゴソとこーさんは箱に手を伸ばした後・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・三人四脚」

おや？こーさんが三人四脚ってことはアキさんと一緒ですね。後はゆーさんと自分が残っていますし、姫路さんとのペアかアキさんとこーさんと一緒ってことですか。

「それでは自分が・・・・・・（ガサゴソ）」

こう言うクジ引きの時って何だかドキドキしますね～♪まあ、くじを引くと言ってももう自分とゆーさんの分しか残っていないので、実質は2枚しか残っていないのですがね?それでは先に手に触れたこのくじにしましょうね。

「・・・・・・ふむ、三人四脚ですか♪」

ってことはアキさんとこーさんと一緒ですね。くじを引き終わり、そう思わず呟いた瞬間に・・・・・・

『坂本、吉井、ムッツリーニ・・・・・・またしてもお前らか』

「「「っ!?くっ・・・・・・もう囲まれたのか・・・・・・!?」」」

・・・・・・まあ、予想はしてましたがこうなりますよね。やれやれですね・・・・・・

「あの!皆さんっ!」

『『『なんだい造ちゃん!お兄さんに何でも言ってみな!』』』

お兄さんって・・・・・・一応言っておきますが、皆さんより自分は年上ですからね?

「・・・・・・・・・・・・えっと、自分小さいですし小柄なこーさんとバランスのとれたアキさんとじゃなきゃ三人四脚なんて出来ないんですよ。ここは自分に免じてアキさんたちを許していただけませんか？」

『『『ぐっ・・・・・・・そ、それは・・・・・・・』』』

「お願い・・・・・・・しますです・・・・・・・」

『『『・・・・・・・・・・・吉井、ムッツリーニ。終わったら覚悟しておくんだな』』』

よかった・・・・・・皆さん何とかこの場は抑えてくれまし――――

『『『ただし・・・・・・坂本ォッ！お前は別だ、逃がさんぞ！捕らえて血祭りじゃあああああああああああ！』』』

「あっ！？ちょっと待っ――――」

「くっ！さらばだっ！」

――――全然、抑えていませんね・・・・・・・ゴメンなさいゆーさん。フォローするのが遅れて・・・・・・

「ふぅ・・・・・・・造助かったよ」

「・・・・・・・・・・・感謝する」

と、こちらは助かったアキさんとこーさん。いえいえ・・・・・・
あれ？

「そう言えばアキさんは何だかさっきより落ち着いてませんか？」
「む？そういえばそうじゃの。明久よ、お主さっきまで“姫路と島田のパートナーは抹殺する”と言うておったじゃろう？」
「あはは♪雄二なら大丈夫だよ。だって僕がそんな事しなくても霧島さんが」

『・・・・・雄二、浮気は許さない』
『って！？しょ、翔子！？どこから湧いて出た！？』
『・・・・・ナース服とチャイナ服、どっちを着て二人三脚に出たいの？』
『どっちも嫌に決まってんだろ！？』

「霧島さんが雄二を（社会的に）殺ってくれるから」

「「・・・・・・・・・・・・ゆーさん（雄二）、南無三です（じゃ）」」

ずいずいとゆーさんにコスプレ衣装を押し付ける霧島さん。あれは・・・・・いろんな意味でキツイです・・・・・・

『・・・・・ところで雄二』
『おい待て翔子。俺の服を脱がしながら何もないかのように話を進めるな』

『・・・・・お義母さんから何か預かってない？』
『ん？お袋から？ああ、あれなら』
脱がしながら話をする霧島さんと、抵抗しながら普通に答えているゆーさん。どっちも凄いですね。凄いの意味が別次元に行っている気がしますが。
『・・・・・あれなら？』
『持ち物検査の日にお前の持っていた袋に入れておいた』
『・・・・・袋って』
『あの催眠術とか白魔術とかの本が入っていた袋だ』
『・・・・・・・・・・・・本当に？』
『本当だ』
『・・・・・嘘じゃ、ない・・・・・？』
『嘘じゃない』
『・・・・・・・・・・・・』
『？どうした翔子。それがどうかしたのか？』
『・・・・・んて・・・・・とを・・・・・』
『だから、どうしたと――――』
『・・・・・なんて事を、してくれたの・・・・・っ！』
ビリィ！
あ、ゆーさんの体操服が綺麗に破けましたね。
『ちょっ！？おまっ！？何してくれるんだ！？』
『・・・・・こっちの、台詞！あの袋中身ごと全部没収されたのに・・・・・っ！』

『いや待て！ホントに何の事だ・・・・・・あっ、待てって！？』
『・・・・・雄二の・・・・・・バカ・・・・・・！』

と、いつものメンバーが呆然とする中、霧島さんは物凄い早さで去っていきました。？？？一体何がどうしたんでしょうか・・・・・・？

「雄二。何やったのさ？」
「ああ・・・・・どうも俺のせいでお袋に預けていたものを没収された雑誌類と一緒に没収されたらしいが・・・・・・」
アキさんがゆーさんの元に駆け寄り、一先ずアキさんのジャージを渡してゆーさんに尋ねます。それにしても没収品ですか・・・・・・
「預けていたもの、ねえ」
「・・・・・随分大事な物だったのではないでしょうか？あそこまで動揺している霧島さんは・・・・・・あんまり見た事がないですよ？」
それこそ如月ハイランドの時並みに動揺してましたし・・・・・・
「大事なもので、お袋に預けたものって事は――まさか、婚姻届の同意書か！？」
「・・・・・・へ？」
「ああ、そっか。雄二も霧島さんも未成年だから、両親の同意が必要。それでせっかく手に入れた同意書を没収されたんだから、そりゃ怒るわけだ」

・・・・・・・・・・・・同意書だけで、あんなに怒るでしょうか？

「危なかった・・・・・・・！そういう事ならあの持ち物検査に感謝してもふぐぅっ！」

と、ゆーさんがクラスメイトからスタンガンの一撃を食らって倒れます。

『連れて行け』

『『『ハッ！』』』

「ちょっ、ちょっと！？皆さん！ゆーさん！？」

あっという間に連れ去られたゆーさん。この後すぐに二人三脚ですのに大丈夫なんでしょうか？

・・・・・・・・・・・・それにしても。

「・・・・・うーん・・・・・・？」

「？？？どうかしたのかの、造よ？」

「あ、いえ・・・・・ねえ、ヒデさん？」

「む？何じゃ？・・・・・ひょっとして霧島の事か？」

「ええ・・・・・ヒデさんは、今の霧島さんが――――同意書だけであんなに怒ると思いますか？」

「・・・・・・うーむ、何とも言えんの。まあ、一先ずは霧島には悪いがこの事は置いておいて、体育祭に戻らねばならんぞ」

と、時計を見るとそろそろ二人三脚の競技が始まる時間が迫っていました。・・・・・・仕方ないですね、ここは一旦体育祭に戻りますかね。

『あ、ところでこーさん。ちょっと話が変わって悪いのですが・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・？なんだ？』

『ちょっとお願いがあるんですよ。良いでしょうか？』

『・・・・・・・・・・・・？？？』

～造説明中～

『・・・・・・ってな感じです。やっぱりダメでしょうか？』

『・・・・・・・・・・フッ、面白そうだ。わかった』

『ありがとうです♪こーさん！』

『・・・・・・・・・それに借りを作っておけば、俺の商売の手助けをして貰えるはず』

『・・・・・・こーさん？あの二人に何させる気ですか？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・何も』

97時間目　二人三脚・三人四脚〜くじ引きってドキドキです〜（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

最近割と忙しくなってきたので、更新が遅めですみません（汗）ま、ボチボチ頑張りますがね〜♪あ、またどうでもいい話ですが、この前ミニストップに立ち寄ったら、バカテスのお菓子とカップラーメンがあったんですよ。つい買ったのですが、お菓子はともかくカップラーメンはどうしましょう（汗）ご飯の時に自分だけカップラーメンは嫌だなぁ……

まあ、ホントにどうでもいいですね（笑）さてさて、次回は二人三脚の本番♪どうなる事やら〜♪明日は更新できると思います。時間がいつになるかはわかりませんが。

ではまた次回です！読んでいただきありがとうございました！

９８時間目　天国と地獄の三人四脚～途中から＋１～（前書き）

どうも、糖分摂取魔です。リアルに台風に怯えています（汗）

どうでもいいですが、台風が通る時とかは喉が痛くなったり何だか身体が重く感じますね。気圧の関係かな？

子供のころは（今も子供って？うるさいですよっ！？）台風が来たら、何故かはしゃいでいました。てか、テンションが上がってましたね。あれはホントに謎だ……

てなわけで（？）台風の時は外になるべくは出ないようにしてくださいね！関係あるようでない話終りっ！んじゃ今回も行きましょう！９８時間目スタート♪

98時間目　天国と地獄の三人四脚～途中から＋1～

明久Ｓｉｄｅ

「・・・・・・・・・・・何これ？どう言うこと？いや、どう言う状態？もしかするとここは天国なの？」

見上げると、瑞希と美波が心配そうに僕を見ている。僕の体操服は真っ赤な血に染まり、流れ出る血は今もまだ止まる事がない。一秒で自分でもこれはもうダメなんだと理解できた。

「明久君！しっかり、しっかりしてくださいっ！」
「アキっ！すぐ日高先生を呼ぶからそれまで耐えるのよ！」

二人が必死に僕に呼びかける。ああ・・・・・・なんて心地良いのだろうか。大切なこの二人に看取られて、こんな気持ちのまま逝けるなんて僕はやっぱり幸せなんだね・・・・・・？

『『『吉井・・・・・・吉井っ！逝くなっ！逝くんじゃないっ！』』』

クラスメイトも心配そうに僕を見ているようだ。そう、とても心配そうに――――

『『『吉井、お前は・・・・・・お前はちゃんと拷問してから殺ら

ないと、気が収まらねえんだよっ！死ぬなら俺らが地獄に送って殺るっ！だから勝手に逝くんじゃねえええええええええええええ！』』』

――――包丁に鎌にロープにスタンガンなどを構えて、クラスメイトたちは僕が勝手に天国へ逝くのを心配そうに（悪意に満ちた目で）見ていた。瑞希と美波がいるこの空間が天国なら、あっちはリアルな地獄にしか見えないね。

・・・・・ホントに、どうしてこうなったんだろう？

～こういう状況になる数刻前～

「えーっと、とりあえず僕は造とムッツリーニの三人組なんだね。宜しく二人とも」

「ふふっ♪はいです、アキさん。よろしくですよ～」

「・・・・・・・・・・・・宜しく」

二人三脚（いや、僕と造とムッツリーニは三人四脚だけど）のペアも無事に（？）決め終わり、あとちょっとで始まるであろう競技の前に三人で打ち合わせをしておく事に。唯でさえ二人三脚は難しいのに、三人四脚ともなればより高度な技術がいるだろうからね。

「木下がウチのペアね。宜しく頼むわ」

「そうじゃな。宜しく頼むぞい」

と、美波と秀吉も練習の為か僕らの側に来ている。その隣には表情を曇らせる瑞希の姿も。

「私は坂本君とペアですか・・・・・・足を引っ張ちゃわないか心配です」

「ああいや瑞希、その心配はないんじゃないかな？」

だって多分、まともに走れないだろうし？瑞希と美波と一緒になれなかったのは残念だけど、組合せとしてはこれがベストではないだろうか？【僕&造&ムッツリーニ】【美波&秀吉】【瑞希&死体】ってことになるからね。まともな男女ペアになっているかは疑問だけど。

「まあ、瑞希も美波も一緒にはなれなかったけど、頑張ろうね！いい想い出作りの為にもさ」

「うー・・・・・・そうね、仕方ないし」

「ですね・・・・・・今回は我慢しましょう」

多少は残念そうな顔をしている二人だけど、今回は流石にくじ運があるし仕方ないね。そこは割りきってもらって、体育祭を楽しんでもらう事にしよう。

『これより、第二学年の二人三脚を行います。二年生の生徒はスタート位置に集合して下さい』

と、そんなことを考えていると、ちょうど集合のアナウンスが響き渡る。そんなわけでしょんぼりしている瑞希と美波をなだめつつ、僕たちは二人三脚のスタート地点へと歩いて行った。

☆

たくさんの参加者が並びざわめくスタート地点。僕は三人四脚だから最終走者として出番を待っている。

『位置について！　用意――』

――パァン

乾いたピストルの音が響き、前方に並んでいる走者が一斉に走り出す。僕らが走るのは最後だから、まだまだ出番は先だけど、ここで一つ問題が。

「造とムッツリーニは・・・・・・まだ戻ってこないのかな・・・・・？」

そう。二人三脚が始まってから、僕と共に走る予定の造とムッツリーニが一向に姿を見せない。二人とも『すぐに戻りますので～』とか『・・・・・・・・・・・・俺も』とか言ってたけど、どこに行

ったんだろうか？あんまりのんびりしていると、すぐに出番が回ってくるだろうに。

ちょっと心配になって、二人を探すために一旦参加者たちの集団から抜け出そうとすると・・・・・・

ポンポン　×２

僕の背中を叩く二人分の感覚が。あ、ようやく造たちが戻ってきたんだね。全く、ちょっと遅いよ二人とも？

「造、ムッツリーニ。二人ともどこに行って――――」

とりあえず、二人が遅くなった事に文句を言う為に後ろを振り向くと・・・・・・

「え、えっと・・・・・・・ゴメン、遅れて・・・・・・アキ／／／／／／」

「そ、その・・・・・・・私も遅れてしまってすみません、明久君／／／／／／」

「・・・・・・・・・・・・・美波・・・・・・・・瑞希・・・・・・・・？」

・・・・・・何故かもうすぐ出番のハズの美波と瑞希の二人が、顔を赤くして立っていた。え？あれ？な、何で二人がここに？

「えーっと、二人とも？二人三脚始まっちゃうよ？早く戻らないと――――」

「あ、あのねアキ・・・・・・ウチらその・・・・・・」

「あ、あはは・・・・・・明久君、あっち見ればわかると思いますよ？」

二人がここにいる事に混乱していると、瑞希が向こうを指差す。よくわからないけど僕も瑞希の指差す方向を向くと・・・・・・って！？

僕と一緒に走る予定だった造とムッツリーニが手を振っている。造は本来は美波が組む予定だった秀吉と、そしてムッツリーニは瑞希が組む予定だった雄二（の死体）とペアを結んでいるのが見える。・・・・・・っておい！？

『（やっほーですよ～アキさん♪）』

『（・・・・・・・・・・・・明久、貸し一な）』

二人とも笑顔でそんなアイコンタクトを送っているけど・・・・・・いやいや、何で君たちがそっちにいるの！？

「美波、瑞希！どう言うこと！？な、何でこんな事に！？」

「えーっと、その・・・・・・瑞希行きましょうか？」

「そ、そうですね・・・・・・では――――」

「「回想スタートっ！」」

～以下回想～

『『ハァ・・・・・・・』』

『島田さん、姫路さん♪』
『・・・・・ん？月野、どうしたのよ？二人三脚始まるわよ？』
『・・・・・あれ？土屋くんまで？お二人ともどうしたんですか？』
『ふふっ♪ちょっと、ですね～♪』
『・・・・・・・・・色々な。お前ら随分落ち込んでるな』

『『うぅ・・・・・・だって・・・・・・・』』

『あらら・・・・・・・ふふっ♪ねえお二人とも？』
『・・・・・・・・・・・・明久と走りたいか？』

『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・！？』』

『あ、アキと一緒に走れるの！？』
『ど、どう言うことですか！？』

『おぉ、やっぱり走りたいんですね～♪・・・・・・・・ねえ、島田さん。自分はヒデさんとペアでしたよね？』
『・・・・・・え？』
『・・・・・・・・・・・・・・・・・姫路。俺は雄二とペアだったハズ』
『・・・・・・・・はい？』
『よくわかりませんが、どうやら間違えて自分三人四脚のくじを引いてしまったようなんですよ』

『『ま、間違えて・・・・・・・？』』

『ええ。間違えて♪自分は“本来お二人が引くはずの”くじを引いてしまったんですよ♪』

『『っ！？』』

『・・・・・・・・・・・・・・俺も間違えた。だから二人とも』

『『・・・・・・・・・・・・・・（ゴクリ）』』

『『自分（俺）のくじと交換しませんか（しないか）？』』

～回想終了～

「――――って感じなの」

「そ、その・・・・・・折角でしたので月野君たちのご厚意に甘えることにしたんです」

「あ、あはは・・・・・・そっか、造たちが・・・・・・」

あ、あの二人・・・・・・やってくれたな！ふっ、いいだろう・・・・・一週間君たちの奴隷になる事を許可しようじゃないか！今なら二人の靴も舐められそうだよ！（あ、それはいりません　ｂｙ造＆ムッツリーニ）

「えっと・・・・・・そ、そんなわけでアキ。よ、よりょしきゅねっ！」

「そ、その・・・・・・明久君、よ、よりょしきゅお願いしましゅっ！」

二人とも?すっごく噛んでるよ?全く、可愛らしいなぁ。まあとにかく今の僕がやることは、あの二人に全力で感謝すること。美波、瑞希と一緒に体育祭を楽しむこと。そして――――

「――――うん！よろしくね。美波、瑞希！」

「「ええ（はい）！よろしくね（です）♪」」

『『『よろしくね、吉井♪・・・・・・闇魔様になァ・・・・・・！』』』

――――二人三脚が始まるまで、地獄の鬼と化したクラスメイトから何がなんでも生き残ることだっ！いいだろう、かかってこいやっ！この二人との幸せなロードを駆ける為なら、僕は修羅と化そうじゃないかっ！

☆

造Ｓｉｄｅ

「ふふっ♪アキさん嬉しそうですね」

「やれやれ・・・・・何やらムッツリーニと相談しておると思ったら、こんなことを企んでおったのか」

ヒデさんと足に紐を結びながら、ペア替えの真相を暴露します。ふふっ♪折角の体育祭ですもの。アキさんも、それから姫路さんも島田さんも楽しんでもらいたかったいですからね～♪

「それにしても・・・・・造はともかく、よくムッツリーニは雄二とペアになる事を承諾したのう。あやつの事じゃからまた写真を撮る為に、造かワシとペアになることを望むのじゃとばかり思うておったぞ？」

「んにゅ？そですか？・・・・・うーん、意外とこーさんも結果的によかったんじゃないかなって思いますよ？」

「？？？それはどういうことかの？」

だって・・・・・ねえ？

「こーさんがもしもこれで女子とペアを組んだりしたら・・・・・・工藤さんがちょっと心配するでしょ♪」

「む？あー・・・・・それはあるかも知れぬの。フッ、何じゃ。それではムッツリーニも意外と工藤を意識しておるのか」

「ふふふっ♪本人は全力で否定しているようですが」

海の一件以来、こーさんと工藤さんがお互い意識しまくっているのは皆さんから見ても、鈍感な自分から見ても丸わかりですもんね～

「まあ、じゃが造は大変じゃったの。結局何だかんだで、あやつら

に振り回されて行ったり来たりと」
「へ？・・・・・・あ、ヒデさん。そうでもないですよ～♪」
「？？？何じゃ？また何かあるのかの？」
「だって・・・・・・お陰でヒデさんと一緒に二人三脚出来るでしょ♪」
「・・・・・・・・・・・・っ！？／／／／／／」

ヒデさんとなら相性良いでしょうし、一緒だと楽しいですからね～

「・・・・・造は・・・・・・ワシと走れて、嬉しいのかの？」
「？？？ええ。当たり前でしょう？仲よくして貰っているヒデさんと走れるんですよ？嬉しいに決まっているじゃないですか」
「・・・・・・そうか。嬉しい・・・・・・のじゃな」
？？？ヒデさん？大丈夫でしょうか？物凄く顔赤いですよ？

『位置について！用意――』

――パァン

スタートの音と共に前方に並んでいたペアが走りだしました。いよいよ自分とヒデさんの番ですね～♪

「ではヒデさん、頑張りましょうね～♪」
「・・・・・うむ。必ずや造に勝利を渡すからの・・・・・・」

お、おおぅ・・・・・ヒデさんが物凄く燃えてますね・・・・・！ちょ、ちょっとカッコいいです♪ヒデさん、きっと本気で勝ちたいんでしょう。よっし！ここは自分もこれは自分も全力で応えねば！

『次の組み。位置について！用意――』

パァン！

大空に鳴り響くピストルの音に合わせ、自分とヒデさんが動きだします。1・2・1・2とお互いリズムよく交互に足を出して、とてもいい滑り出しです。二人三脚で重要なのは相手と呼吸を合わせること。その点自分とヒデさんは普段から（色んな意味で）息が合うので、この競技には敵はいませんと豪語出来ます。そう、自分とヒデさんはそれほどまでに息の合った動きで――――

《頑張りなさいな！我が弟たちよ！勝てたらご褒美にお姉ちゃんがハグしてあげるからねっ！》

《負けてもハグするがな！さぁ、行け造にヒデっちぃ！お前らの勝利の女神たちが応援してるからな！》

《《《頑張って！私たちが一生付いてますからねっ！！！》》》

《ちょっと！？先生方に木下さん！？実況をジャックしないでくださいよ！？》

ズザァアアアアアアアア　×2

――――息の合った転び方をしてしまいました・・・・・あまりに驚き過ぎて、思わず顔から行きましたよ!?あ、あの人たちは何してんですか・・・・・・!?

《造くん!秀吉!大丈夫!?すぐにお姉ちゃんたちが手当てしてあげるからねっ!》

《ゴールしたらすぐアタシが治療してやるからなっ!ついでにその汚れた服も綺麗なものに変えてやるから安心してな!》

《《《綺麗な・・・・・・服・・・・・・♪頑張ってください二人とも!》》》

「「・・・・・・・・・・・・」」

「あ、姉上も先生方も・・・・・・何を・・・・・・」

「き、気にしたら負けですよヒデさん・・・・・・」

「いや、確かにいつもの事かもしれんが・・・・・・」

「さっさとゴールして、止めさせましょう・・・・・・」

「それが一番の、この状況を打破する手じゃな・・・・・・」

と、一先ず速攻で立ち上がり、それから最速でグラウンドを駆けて見事にヒデさんと自分は一位を確保しました。ついでに会場の皆さんの笑いも一番に確保してしまいましたがね!?・・・・・・後で聞いた話ですと、自分ら二人は顔をすりむいた事も重ねて、顔が茹

でダコのように赤かったとのこと。

「・・・・・・・・・・・・これがホントの赤っ恥ですか」
「・・・・・・・・・・・・寧ろ、姉上たちが恥じゃぞい」

ヒデさん共々、何だかとっても疲れる二人三脚でした・・・・・・精神的にね。

☆

明久Ｓｉｄｅ

造たちが（ある意味）散々な目に遭った後、いよいよ僕と瑞希の美波の三人四脚が始まろうとしていた。・・・・・ふっ、ふふふ！はっはっはっ！生き残った・・・・・生き残ったぞっ！！クラスメイトと言う名の（嫉妬の）鬼共と渡り合い、死線を潜り抜け（本当に死ぬかと思ったけど）何とかこれで競技に出れるっ！

スタートギリギリまでフルボッコにされかかってたけど、この二人と走れるなら僕も命を賭けられるからね！ああ、本当にありがとう造にムッツリーニよ・・・・・・

「あの・・・・・アキ？アンタもう、何だかボロボロだけど大丈

夫なの？」
「明久君、もう見るからに満身創痍ですが・・・・・本当に平気ですか？」
おっと・・・・・なんて優しいんだろう。二人が心配そうに声をかけてくれる。ここは男として余計な心配をかけないようにしなきゃね。
「大丈夫、大丈夫。ほとんど掠り傷だよ♪」
「「そう（ですか）♪安心したわ（しました）」」
『『『安心した。なら・・・・・もっと甚振ってもいいのだな・・・・・？終わったら地獄の拷問フルコースを忘れるな、吉井ィ・・・・・』』』
それと君たちはもう少し僕を心配してくれると嬉しいな。・・・・・あ、いやゴメン。ムサい男共に心配させれるのはちょっと勘弁かも？
『最終走者。準備して』
と、ここでようやく僕らの出番のようだ。よしよし。折角三人で仲良く競技に出れるんだ。どうせなら勝ちに行こう。
「やろう、二人とも。僕らがトップでゴールするんだ！」
「ええ♪任せなさいアキ。全力を尽くすわ」

「私も出来る限り頑張りますね！」
「そうですわね。美春も頑張ります」
そして僕ら四人で固唾を呑んでスタートを待つ。さあ、いよいよ勝負だ。
『位置について！用意――』
パァン！
スタートを告げる乾いた音と同時に僕たちは動き出した。打ち合わせ通り、いやそれ以上に息を合わせて足を出して行く。だんだんとペースを上げて行き、もうこれが四人五脚でないような一体感や疾走感が生まれた。
ああ、そうか。だから、だからなんだね――――
『『『あれ・・・・・？何で２－Ｆクラス（？）は四人で走ってんだ・・・・・？』』』
――――僕の横で足を縛っているハズの美波が、清水さんにも縛られている事に三人とも走り出すまで気が付かなかったのは。

「「って、清水さん!?」」

「え?あ、あれ?美春!?アンタ何でここにいるのよ!?」
「決まっているじゃないですか!そこの恋敵がお姉様と走るのに、美春が走らないなんておかしいですもの!美春はいつでもお姉様と一心同体です!」

凄い理論だ。きっと清水さんの頭の中には、美波に関する独自の理論が在るのだろう。

「ちょっ!?アンタはDクラスでしょう!?ここにいちゃダメって・・・・・きゃっ!?って!?な、何してんのアンタあああああああああ!?」
「ああ、お姉さま・・・・・・密着しても決して存在を感じさせない、その奥ゆかしいお胸がたまりません・・・・・・」
「ドサクサに紛れて何処触ってんのよ!?やっ・・・・・・・ちょっ、シャレになってな・・・・・あぅ／／／／／／」
「おおおおおおお姉様!なんて色っぽいっ!・・・・・・・美春は感激ですわ!」

そして、物凄く過激だ。ヤバいな・・・・・・鼻の辺りが熱くなってきた。清水さんにヤラレないように美波が必死で抵抗し、そしてその振動は僕にもそして僕の反対側で縛られている瑞希にも伝わってきた。

「きゃっ!?し、清水さん暴れないで、下さいっ!?あんまり暴れられると・・・・・・その、ぶ、ブラが・・・・・・」

ブラが・・・・・どうしたって・・・・・・！？いかん、本気でいろいろとマズイ。このままじゃ僕のこれからの事で学校ではクラスメイトと、家では姉さんと一緒にお話されてしまう。

「そうよ！美春、あんまりふざけるとウチも怒るわ――ってちょっとぉぉぉっ！今アンタ背中に手を回してホック外さなかった！？」
「ハァ・・・・・ハァ・・・・・大丈夫です！お姉さまなら固定しなくても何の邪魔にもなりませんから！」
「い、いい加減にしなさいっ！？美春っ！後で覚えておきなさいよ！」
「はい！美春はこの感触忘れません！」
「そういうこと言ってるんじゃないわよっ！さわ・・・・・るなっ！」
「や、止めてください！？ホントにこれ以上はブラが・・・・・・」
今ならムッツリーニの普段の気持ちが物凄くわかる。なんなら鼻血の量で勝負してもいいよ？

《ご、ゴール！一着は２－Ｆクラス（？）の皆さんです・・・・・・よね？一人多いですが・・・・・・》

アレだけ暴れておきながら、気がつけば僕らが一着でゴールしていた。皆一心不乱に走ってたからかな・・・・・・

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・。美春、アンタねえ・・・・・・！」

「お姉さま、素敵でした・・・・・・」
「“素敵でした”じゃないわよ!?アンタはウチを辱める気!?」
「それでは美春はこの辺で失礼します!またお会いしましょうお姉様♪」
「あ!コラ!待ちなさい!美春――――っ!!」

美波に頭を下げて、脱兎の如く駆け出す清水さん。あれだけ走ってまだあのスピードを出せるのか・・・・・・

「全く、あの子は・・・・・・瑞希、大丈夫?」
「うぅ・・・・・・私のブラ、また壊れちゃいました・・・・・・折角良いの買ってたのに」
「・・・・・・大丈夫じゃなさそうね、アンタの“胸”は・・・・・・って、アキ?どうしたのよさっきから黙っちゃって?」
「あれ?そう言えばそうですよね?明久君どうかしたんですか?」

二人が僕に話しかける中、僕は淡々と足の縛りを解く。だってそうしないとそろそろヤバイから・・・・・・

「???明久く・・・・・・!?明久君!?」
「ちょ、ちょっとアキ!?何よその血の量は!?明らかにマズイでしょう!?」
「(ドクドクドク)ははっ・・・・・・平気・・・・・・だよ?」

何とか気合いで足を解き、二人に笑顔を見せる事に。堪えろ吉井明久。苦しくても少なくとも逝く時は笑顔で逝かないとね。

「あ・・・・・・二人とも、最後に一つだけいい？」

「「最後！？縁起でもないわよ（ですよ）！？」」

まあまあ。これだけは、ふたりに言っておかないとね。

「えっと、ね・・・・・・刺激的過ぎるから、早くブラ付け直してきて・・・・・・ね（ガクッ）」

「「アキ（明久君）！？しっかり！？」」

・・・・・そして今回のお話の冒頭に戻る。その後のことはホントうっすらしか覚えてないけど、鼻血による大量出血とクラスメイトによる親身な拷問のお陰でリアルに三途の川でお爺ちゃんとお話ししてきたような気がする。確か『お爺ちゃん。僕二人も大切な人が出来たんだよ？』って話をした気が・・・・・まあ、造が日高先生を呼んで来てくれたから何とか現世に戻ってこれたけどね？

グラウンドを真っ赤に染め上げたことと、翌日の『学園一のバカ、吉井明久：今度は三股か！？姫路瑞希・島田美波・清水美春との関係に迫るっ！』って言う文月新聞の記事により一躍僕が（更に悪い意味で）有名になったことは言うまでもないだろう。

『三股ってことは・・・・・私たち明久君と付き合っているって思われているってことですよね♪』

『あ、なるほど・・・・・・・!だったらこれって悪い気がしないわね♪』

『『『『姫路（さん）・・・・・・島田（さん）・・・・・・・（汗）』』』』

2014

９８時間目　天国と地獄の三人四脚～途中から＋１～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……どうしてこうなったのでしょうね（汗）今回は特に暴れまくりました（主に美春たちが）と言いますか、二人三脚でこんなに無駄に力入れているから肝心の野球編が思うように書けないのでしょうかねｏｒｚ

あ、ちょっとまた気になったんですが、やっぱりこの作品って長すぎでしょうか？昔は３０００～５０００文字を目安に考えていましたのに、今じゃ８０００文字オーバー（汗）なるべく頑張って省略したりしているんですが……

中々皆さんが読みやすいようにまとめるのって難しいですよね……なるべくは頑張りますが、『長い』とか『こうすれば読みやすいよ？』ってのがありましたら教えてもらえると嬉しいです。

相変わらず読者さん任せな作者ですみません。次回の更新も未定です。いや、今回の野球編って本当に難しいですもの……ダメな作者でゴメンね？ｏｒｚ

で、ではまた次回です！読んでいただきありがとうございました！

９９時間目　ゆーさんと作戦と三年生～何故に貴女がここに？～（前書き）

遅くなってホントにゴメンなさい。糖分摂取魔です。

ネタとか話の展開とかは大体何とか思いついているんですが、中々思うように書けなかったり書く暇がなかったりと最近遅めですｏｒｚ　定期的に更新しているわけではないのですが、なるべくは早めに書きたいと思います。

今回は真面目に行きますよ？え？どうせ後書きで真面目じゃなくなるだろうって？……きゅ、９９時間目よろしくです！

2016

９９時間目　ゆーさんと作戦と三年生～何故に貴女がここに？～

造Ｓｉｄｅ

クラスメイトからの（恨みと嫉妬がコラボレーションした）私刑と、自身の（興奮して鼻血の出し過ぎによる）大量出血で瀕死のアキさんを何とか目覚めさせて、再び召喚野球に戻っています。

２回戦は結局３－Ｅ対３－Ｆの試合は決着がつかなかったので、自分たちの不戦勝。そして次は・・・・・・

「いよいよ次は準決勝なわけだが」
「確か、相手は３－Ａだっけ？」
「あはは♪この前の肝試しと言い、最近何かと3年生と競い合う事が多いですよね～」

召喚野球会場に向かいながら皆さんと準決勝について話します。相手はツネとナツたち。本当に何かと縁がありますね～

「んむ？ということは、２－Ａは負けたということじゃな？」
「そうなるな」
「負けたって、あの霧島さんがいるのに？」

・・・・・ふむ。姫路さん以上の実力を持つ霧島さんや、高い実力の優姉さんたちがいて２－Ａが負けたってことは、

「ん～・・・・・・まぁ、姫路ほどじゃないが、アイツも野球には詳しくねえからな」
「ふむ・・・・・・それに、三年にも霧島クラスがおったのかもしれんしの」

あー・・・・・確かに三年生にはツネやナツのような実力者もいて、おまけに学年、いや学園の首席であるタカさんや参謀役の小暮さんがいますからね。

「うーん・・・・・もし3年生が本気で来るなら、自分らも覚悟しておかないといけないでしょうね。この前の肝試しでは三年生はどうやら手加減していたみたいですし」
「その辺は頭に入れておくとすっか。・・・・・さて、こんなとこでごちゃごちゃ考えても仕方ないし、さっさとグラウンドへ行くぞ」
「それもそっか。まあ、試合になればわかるだろうし。・・・・・ん？ところで雄二？」
「なんだ明久？」
「もし２－Ａが勝ち上がってきた場合はどうするつもりだったの？」

あ、それはちょっと気になりますね。負けたとはいえ２－Ａはウチにとって最大の目標でもあるんですし。ゆーさんの策って何だったんでしょうか？

「決まってんだろ？久保や木下姉を懐柔して１１対７で勝負するつもりだった」

「「「・・・・・・・・・・」」」

それは・・・・・まさかとは思いますが、自分とヒデさんを優姉さんに売り渡すって意味じゃないですよね・・・・・・・・・・・・・って、何故に久保くん？

「あの？優姉さんはともかく久保くんを懐柔ですか？・・・・・・・それは無理なのでは？」

「そうだよね。確かに１１対７とかが出来るなら成績差なんて跳ね返せるだろうけど、あの真面目な久保君がそんな汚い行為に手を染めるはずがないじゃないか」

と、アキさんと二人で頭にクエスチョンマークを浮かべていると・・・・・

「・・・・・そうか。そう思っていられるのなら、お前らはその方が幸せかもしれないな・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・知らぬが仏」

「・・・・・・造は渡さぬ・・・・・・・」

全員が何やら物凄く妙な反応を。一体どう言う意味なんでしょうか・・・・・・？

「？？？な、何ですか皆さん？急に変な目で自分らを見て・・・・・・？」

「そ、そうだよ？てか前々から思ってたけど、どうして久保君の話をすると皆そんな慈愛に満ちた目で僕らを見るの？」

ヒデさんはちょっぴり黒いですし、ゆーさんとこーさんに至ってはどこか遠くに行ってしまう友人を見送る目で見ています。なんですかこれは・・・・・・？

「して雄二。この試合はどんな作戦で行くのじゃ？」
「ああ。正直に言うといくら3－Aが相手とは言っても、翔子や久保や木下姉がいる2－Aが負けるとは思っていなかったからな。殆ど作戦なんてないんだが・・・・・・」

「「「「ないんだが？」」」」

「・・・・・三年にとっても造は知名度が高く人気もあるし、それならば造を生贄に――――」
「ちょっ!?売られる!?自分売られるんですか!?ドナドナ!?」

ゆーさんが怖いっ!?リアルに売り飛ばされる!?しかも目的が成人指定の本を取り返す為だけで・・・・・・!?

「・・・・・雄二。お主覚悟は――――」
「おっと秀吉に造、一応冗談だぞ?流石にそれだけじゃ釣れんさ」

せ、セーフでしょうかね・・・・・・?全く、質の悪い冗談ですよ。一瞬本気かと思いましたもん。

「（まあ、最終手段として考えておくがな）一通りの策は一応考えてはいるんだが、基本は初戦のEクラスと同じだな」
「ん?って言うと雄二、どう言う意味さ?」

「決まってんだろ？またこれを使う。三年の連中に俺にこれを渡した事を、後悔させてやるさ」

と、ゆーさんが黒金の腕輪を見せながら言ってきます。おお・・・・・流石ゆーさんですね。もうすでにこの腕輪を手足のように使いこなしていますもん。

「・・・・・・・・・・・黒金の腕輪か」

「ってことは造がショートで守ってから、攻撃で回復するって作戦なんだね？」

「まあ、初戦と同じだな・・・・・そして今回は姫路が鍵となるだろう」

「「「瑞希（姫路さん）が？」」」

？？？一体どう言う作戦で行くのでしょうかね？

「正直に言うと、俺らがどう頑張っても3年との成績の差は歴然としている。だからこそこっちの最高成績保持者の姫路に頑張ってもらうのさ――――アイツのポジションは投手（ピッチャー）だ」

おおぅ・・・・・ゆーさん、随分思い切りましたね。と、言いますかピッチャーって中々難しいポジションですが・・・・・・

「ちょ、ちょっと！？それはいくらなんでも無謀じゃないかな！？瑞希まだ初心者だよ？」

「うむ。明久の言う通りじゃな。おまけにお主もEクラス戦の時に

言っておったじゃろう？“姫路が投げても捕れる奴はいない”と。下手をすれば点が削れて戦死してしまうぞい？」

と、お二人が的確な事を言ってきます。ですよね・・・・・・本当に大丈夫なんでしょうか？

「安心しろ、明久に秀吉。一回は姫路に慣れさせるために最初と同じく明久がピッチャーだ。そんで様子を見て姫路に変える」

「う、うーん・・・・・・まあ、それなら良いのかな？」

「ではキャッチャーは？姫路さんの球を捕れる人ってあんまりいませんよ？」

「フッ・・・・・・いるじゃねえか。俺の目の前に」

と、ゆーさんが指差すのは・・・・・・！？じ、自分ですか！？

「造、お前なら操作技術もある上に姫路とも渡り合えるだろ？期待してるぜ？」

「え、えっと・・・・・・流石に姫路さんレベルのボールを捕り続けるのは難しいかと？」

何せただ捕るだけで点数がごっそり減らされそうですもんね。・・・・・ん？いや、待って下さい？ま、まさか！？

「おっ！その顔は気がついた顔だな？そうだ、だからこそのこの腕輪だ。点数を消費したらこれでまた回復すればいい。そうすりゃ姫路も全力で投げれるだろ？先に言っておくが、攻守の際の腕輪の使用は審判にも了承済みだ。安心して使わせて貰うさ」

「「「「・・・・・・・・・・・・・」」」」

う、うわー・・・・・・・3年生に怒られないかすっごく心配ですね・・・・・・

「まあ、この作戦は姫路と造には・・・・・・いや、今回は恐らく造がだろうが、かなり負担をかける。あらかじめ言っておくが、すまんな」

と、ゆーさんが自分に向かって頭を下げます。あらら・・・・・・ゆーさんって、意外なところで律儀ですね～

「あっ、ゆーさん。それに関しては大丈夫ですよ？負担と言っても今回に関しては試召戦争のように戦うってわけじゃないですし。基本普通に野球をしている感覚と同じですからね」

「そうか・・・・・・まあ、すまんな。助かる」

「ふふっ♪そんな顔しないでください。さあ、早く行って皆さんに作戦の説明とかしませんと、ね？」

「・・・・・・そうだな。うっし、いっちょやったるかっ！」

「やれやれ。造よ、お主は無理だけはするでないぞ？」

「そうだね。造に無理させない為にも、僕らも頑張らないと！」

「・・・・・・・・・・・・ああ、俺らには使命がある」

「「「「戦友（エロ本）奪還という使命がっ！！！」」」」

「「台無しですよ（じゃぞ）！？」」

うぅ・・・・・・折角やる気が出てきてましたのに・・・・・・・ｏｒｚ

〜全員移動中〜

「・・・・・・あ、そうそう。ついでに聞きたかったんだけどさ雄二」

「あん？明久、まだなんかあるのか？」

と、アキさんが歩きながら不思議そうにゆーさんに尋ねます。んみゅ？一体何でしょうね？

「なんか今回の作戦ってさ？確かに腕輪とかを使うけど、雄二にしては随分直線的じゃない？てっきり何か搦め手を仕込んでいるとばかり思っていたんだけど？」

「おお、それはワシも気になっておったぞ？雄二らしくないと思うのじゃが？」

アキさんに続き、ヒデさんも尋ねます。ああ、確かにゆーさんらしくないかもですね。ですが多分・・・・・・

「・・・・・・いやな？さっきも言ったが、俺も一応は策を一通りは考えついている――――んだが、三年にはあの着物着てた妙に頭が回る先輩がいるだろ？正直あの先輩相手に小手先だけの作戦じゃ逆効果だと思ってな」

「あはは・・・・・小暮さんのことですね?確かに下手な手を打てば、手痛いしっぺ返しが待っているでしょうし」

そうなんですよね。小暮さんや・・・・・それからゆーさんはまだ知らないでしょうが、タカさんに挑むんでしたら小手先の策で挑むのは無謀ですもんね。逆に利用されかねませんし。流石ゆーさんです。相手の事をよくわかってらっしゃいますね。

「あー、そう言えば肝試しの時はあの着物を着た先輩にはかなり苦戦させられたよね。今度も皆が誘惑させられないか心配だよ。皆色々と飢えてるし」

「うむ。そうじゃのう・・・・・のう造よ、あの先輩の対抗策などはないのかの?」

「た、対抗策ですか?う、うーん・・・・・これと言った弱点ってない方ですからね。寧ろこっちが聞きたいですよ」

「やれやれ・・・・・そりゃ厄介なことで。そう言うタイプは出来れば敵に回さずに味方に取り入れたいが、今回は流石にそれは無理そうだしな」

「・・・・・・・・・・あの先輩は色々危険」

そうやっていつものメンバーと苦笑しながら歩き、ようやく野球会場に入ります。・・・・・ん?何だかFクラスの皆さんが騒いでますね?

『『『うぉおおおぉぉっ!眼福っ!まさに眼福じゃあああああああ!!!』』』

騒いでいると言うよりは、何だか皆さん歓喜に打ちひしがれていま

すね。と言いますか、ちょっぴり怖いです。先にベンチで待機している3年生の皆さんが少しばかり脅えて（引いて？）いますし・・・・・

「？？？何なのじゃあやつらは？」

「何でしょうね？まるで何かを囲むように集ってますね」

皆さん一斉に集っているので、人垣が出来ていて何が起こっているのかわかりません。・・・・・べ、別に背が低くて何が起こっているのか見えないわけではないですらねっ！？ま、まあそれはともかく、どうやら皆さん誰かに向かってＬＯＶＥ☆コールしているみたいですが、一体誰に・・・・・・

『『『小暮先輩！今日はまた一段とお綺麗ですよ！！最高ですっ！！』』』

・・・・・ああ、小暮さんですか。あらら・・・・・・噂をすれば何とやら。どうやら皆さん小暮さんの方に集っているようですね。

「なるほど、さっき言ってた先輩がいるんだね。皆だからあんなに集まっているのか」

「そのようだな。ったく、アイツらは・・・・・・あの着物先輩に早速惑わされてるが、この先ホントに大丈夫なのか？」

「・・・・・・・・・・あの先輩は校内の美人ランキングの上位者。アイツらがこうなるのは、ある意味仕方がないこと」

「まあ、確かに随分色香のある先輩じゃからの。おまけにこの前の肝試しの時に少々刺激的なことをやったせいで、Ｆクラスの男連中

を完全に堕としていきおったし」
「ま、まぁ、ある意味クラスの士気が上がっているので良いのではないでしょうか？」
「そうか？俺は寧ろ、あの先輩にいい格好を見せようと空回りするアイツらの姿を容易に想像できるのだが？」
「「「「あー・・・・・・・・・・・・」」」」
そんな感じで、苦笑いをしながら一先ず皆さんより先に自分らはベンチに向かう事に。それにしても厄介ですね。小暮さんもいるってことはやっぱり３－Ａ攻略は難し――――
『『『造ちゃんも今日はいつも以上に可愛らしいよ！お兄さんたちが可愛がってあげるねっ！！！』』』
「「「「「・・・・・・・・・・・・え？」」」」」
――――あ、あれ？今自分を呼びましたか？それにしては皆さん、こちらを向いていませんが・・・・・・？
「・・・・・おい造？今お前アイツらに呼ばれなかったか？」
「じ、自分も呼ばれた気がするんですが、でしたら何で皆さん向こうを向いているんでしょうか？」
皆さんも自分も首を傾げて、再び皆さんが集まっている人垣の方を見ます。

『造ちゃんいいね～♪その服！また先生と木下さんに着替えさせて貰ったの？』

『造ちゃん、チア服可愛いよチア服！物凄く似合ってるね！』

『小暮先輩もです！いやはや、僕はこんなに素晴らしい光景を見れるなんて思っていなかった！造ちゃんの可愛らしさと先輩のエロ――じゃなかった、セクシーさが二段コンボでゴチになりますっ！』

！？ち、チア服ですと！？そんなの着た覚えはありませんよ！？一体何がどうなっているんですか！？

「つ、造？どういうことなのさ？」

「自分にもわかりませんよ！？ちょ、ちょっと確認してきますっ！？」

とりあえず状況確認の為にも、慌てて自分も皆さんが集まる人垣の中に入る事に。どうしてでしょうか・・・・・ちょっと嫌な予感がしますもん！

必死に人波を掻き分け（だから別に小さいからってわけではないですよ！？）自分の目に飛び込んできたのは――――

「あら♪月野君、ようやく来ましたね。妹さんが探していましたよ」

――――皆さんに囲まれているにもかかわらず、相変わらずニコニコとマイペースな小暮さん（チアガール姿）と、

「ホラ、“文さん”♪お兄さんがおいでになられましたよ」
「・・・・・・・・・・・・・何で、貴女がここにいるんですか・・・・・・？」
・・・・・・・・・・・・・どう考えてもここにはいないハズの彼女、
《ワーイ♪　ツクル　来たー！　文も　ツクルを　応援に　キタヨー♪》
そう、文月学園が誇る召喚システムの頭脳《文さん》が、（何故か小暮さんに寄り添いながら）ニコニコと手を挙げてみせます・・・・・こっちもチアガール姿でねっ！？何この状況！？何してんですか文さんは！？

99時間目　ゆーさんと作戦と三年生～何故に貴女がここに？～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

さてさて、ようやくＶＳ三年生ですが……ここにきて小暮さん&文のまさかの乱入（苦笑）この二人ってキャラ濃いので造が（もういろんな意味で）食べられてしまわないか心配です♪

にしても二年と三年を仲良くし過ぎたのはある意味失敗なのか（汗）ここからどう潰れた石榴を表現するか、先にわかった方はお葉書で答えを書いて糖分まで出してください。正解者の方には抽選で月野造をプレゼント♪……まあ嘘ですが。

そう言えばこのバカのん（↑この小説の略ね）ってジャンルって何でしょうね？少なくともバトル物じゃないことはわかっていますが……基本学園ギャグコメ？意外とラブコメ？作者ですらよくわかりません（汗）

そんなどうでもいいことより、まだ次回の話を書いていないので明日更新できるかわかりません。ホント最近書くの遅くてゴメンね？どうか次回もよろしくお願いします。読んでいただきありがとうございました！

１００時間目　僕らとチアと召喚野球～須川君自重しろ～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。皆さん急に寒くなってきましたが、風邪とかには気をつけましょうね。……って自分が言えないですがね（汗）

そう言えば、バカテスのアニメってやっぱり１３話まで何ですかね？何だか勿体ないですしこのまま終わるのはさみしいですね～折角ならそのまま野球編とかにすればいいのに。でも３期もあるならやっぱり嬉しいかな？

ゴメンなさい。前書きのネタが無いｏｒｚ毎回前書き考えるのって大変なんですよね。ん？だったら書くなって？……それもそうですね！まあいっか。何だかんだで祝１００時間目♪どぞどぞです♪

１００時間目　僕らとチアと召喚野球～須川君自重しろ～

造Ｓｉｄｅ

一先ず文さんを一旦グラウンドの隅に連れて来て、どういう経緯でこんな事をしているか尋ねます。話を聞くに文さん曰く――――

今日は休みではないのに全員校内にいなくて不思議に思った。

←

何か良くわからないけど、外で皆が集まってワイワイしている。

←

調べたらこれは『体育祭』と言う行事で、ツクルも勿論参加している。

←

だったらツクルに何かしてあげたい！でも文は何をすればいいのだろうと思う。

←

再び調べると、こういう場合は応援してあげると喜んで貰える。

←

そう言えばサクヤが言っていた！応援にはこの服が一番だと！ついでにツクルにも着せたいと！

――――――って感じですね。それにしても、サクヤさんは文さんに何を吹き込んでいるんでしょうね？地味に気になりますよ。あ、そうそう。ちなみに文さんは今日はホログラムの身体ではなく、ど

うやらアキさんの召喚獣や自分と同じような原理で実体化しています。何でもその方が応援している感じがするってことだそうで・・・・・・

「と言いますか応援、ですか。その為にそんな恰好を・・・・・・」
《うん♪　どう？　文は　似合う　かなー？》
「えっと・・・・・似合う・・・・・と思いますよ？」
《むー！　何だか　歯切れが　悪いー》

・・・・・・・・・・・・いや、だって文さんの容姿を誉める＝自分の容姿を誉めることと同じですもん。なまじ自分と文さんが同じ顔で同じ体型（ただし胸は違いますが）ですからね。

「それよりちゃんと学園長に許可は取ったんですよね？じゃなきゃ今頃学園長お怒りでしょうし」
《・・・　・・・　・・・　そうそう！　文ね　アオイと　仲良くなったの～♪》
「文さーん？その間はなんですかー？取っていませんね？許可絶対取ってませんね？」

ああ・・・・・・これじゃ学園長がまた、頭を痛めることでしょうね。って、そう言えば何で文さんと小暮さんが？

「文さん？小暮さんとは一体どう言う・・・・・・」
「ああ、それはちょうど月野君を妹さん――いえ、文さんが探していたので折角なので私がここに案内をしたんですよ」
《そなのー　アオイが　文を　連れて　来てくれた　のー♪　文の

新しい　お友達ー！≫
「あらあら♪ありがとうね、文さん。嬉しいわ♪」
≪文も　嬉しい　よー♪≫
「小暮さん？随分ナチュラルに会話に入りますね・・・・・・いつの間に来てたんですか？」

いえ、もう驚きませんよ・・・・・・小暮さんの行動には色んな意味で慣れましたし・・・・・・

「今来たばかりですよ♪そうそう、文さん。私、月野君とちょっとお話ししなければならないんです。申し訳ございませんが、先に応援席で応援の準備なさっててください。私もすぐに参りますので」
≪あっ　そうだった！　それじゃ　ツクル　頑張ってー♪　文もアオイも　応援してる　よー！≫

と、文さんは元気に手を振って応援席へと向かいます。やれやれ・・・・・文さんも相変わらずやりたい放題ですね。悪い子ではないのでその辺は安心してますが。

「ふふっ♪妹さん可愛らしい方ですね。わざわざ月野君の為に応援に来るなんて」
「あ、あはは・・・・・・ん？あれ？妹？文さんが？」
「あら？違うのですか？文さん確か≪文と　ツクルは　家族なのー♪　文の方が　年下　だけどー≫って言ってましたが？」

あっ、なるほど。文さんそう言う風な説明をしたんですね。以前ちょっと色々あった時『文さんは自分の家族ですから♪』って文さんに言ったんですよね。良く覚えていましたね？

・・・・・あ、でもそれいいかも？下手に文さんの事を説明するよりも、皆さんには妹だって言っておけば説明不要でしょうし？

「えっと・・・・・まあ、そんな感じですね。ありがとうございます小暮さん、文さんを連れて来てくださって」

「いえいえ♪月野君にそっくりの方が、ちょっと不安そうにうろうろしてましたから。黙っていられずについ声をかけたのですよ。それにしても最初は驚きましたよ。月野君がチアガールの姿でうろうろしているかと♪」

「・・・・・絶対驚いてませんでしょう？うぅ・・・・・何か皆さんにとんでもない勘違いをされた気がします」

「ふふふっ♪『月野造特集：今度はチアガール！勝利の女神は自分です♪』的な号外が翌日張り出されたりですか？」

「あ、ありそうで怖いですよ！？うぅ、何とか皆さんに説明しないといけませんよね・・・・・・」

「あらあら♪本当に月野君は皆さんに好かれていますね」

そんな感じで、ちょっぴり談笑。おお、何だか一年前を思い出しますね～♪

「あ、ところで小暮さん？小暮さんは召喚野球には参加しないんですか？チア姿ですが・・・・・」

「ええ。今回は皆さんにお任せしています。どうせですし、文さんと一緒に月野君を応援しますよ♪」

「それって３－Ａの皆さんに申し訳ないのですが・・・・・？」

「ふふっ♪応援は誰を応援しようと自由でしてよ？まあ、３－Ａに

はちょっと助言はするでしょうが♪」

ＨＡＨＡＨＡ！その小暮さんのちょっとの助言が一番怖いですがね？

「ふふふっ♪まあ、良い試合になる事を楽しみにしてますよ。・・・・・その、頑張ってくださいね月野君」

「その言葉、ちゃんと３－Ａの皆さんにも送ってあげてくださいね？ですが・・・・・・ありがとうございます。出来る限り頑張りますね」

「ええ・・・・・・本当に、頑張ってください♪」

とりあえずそろそろ始まるので一旦別れて自分はベンチに、小暮さんは応援席に向かいます。さてさて、この試合はどうなる事やら♪

・・・・・・・・・・あれ？小暮さんって確か文さんに“私、月野君とちょっとお話ししなければならないんです”ってさっき言ってましたが、その用件は良いのでしょうか？

☆

明久Ｓｉｄｅ

『――――トライッ。バッターアウッ！』

審判のコールが響き、一番バッターの美波が戻ってくる。うーむ、流石三年生のＡクラスだけあって球の速度・コントロールと共に申し分ないね。

「ごめん。あれは打てないわ・・・・・・」

「気にするな島田。点数差が点数差だ」

「美波、とりあえずまだ始まったばかりだし落ち着いて一回は様子見しよう」

《ですね・・・・・・まだ全然目が慣れていませんもん》

なんせ僕らは勿論初戦のＥクラスに比べても、点数でも操作技術でも相手の方が一枚も二枚も上手だ。まずは少しでもボールに慣れることから始めないとね。寧ろこの回の科目は化学なんだけど、それが得意教科でもないにもかかわらず必死に喰らいつきフルカウントまで持ちこんだ美波は十分賞賛に値するだろうし。

あ、そうそうちなみに今回の勝負での打順と守備位置は――――――

■

１番　サード　島田美波

２番　ファースト　須川亮

3番　ピッチャー　吉井明久
4番　キャッチャー　坂本雄二
5番　ライト　姫路瑞希
6番　セカンド　土屋康太（ムッツリーニ）
7番　レフト　君島博
8番　ショート　福村幸平
9番　センター　月野造

ベンチ　横溝浩二　木下秀吉

■

――――――ってな感じだ。雄二曰く今回僕らが勝つためには、雄二がいつどのタイミングで腕輪を使うかと瑞希の抑え。そして何よりその瑞希の球をきっちり捕る事が出来る造にかかっているそうだ。守備は二人に、特にフィードバックによる疲れが懸念される造に任せっきりになる分、僕らでなるべく一点でも取らなきゃね。造を疲れさせない為に打順が回りにくい9番に置いたのはその為だってさ。

あ、ちなみに何で最初から瑞希と造をピッチャーとキャッチャーにしないかだけど、一、二回は瑞希に少しでも野球に慣れて貰いたい為。そして二回は科目が英語だから造がまだ出せない為だそうだ。まあ、確かに造の英語はちょっとアレだから仕方ないね。一回と二回はそれまで何とか僕と雄二で抑えられるよう頑張ろう。

『っしゃあ！やってやるぜっ！試獣召喚（サモン）っ！』

美波に続き、２番打者の須川君がやけに気合いを入れて召喚を開始しバッターボックスへと入る。さてさて、戦力差は・・・・・・

≪Ａクラス　夏川俊平　化学　２４４点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　須川亮　化学　５９点≫

うん、流石は三年のＡクラスだね。中々に高い点だ。あっちの方は夏川って先輩がピッチャーで常村って先輩がキャッチャーのバッテリーを組んでいる。にしても本当にあの先輩たちとは何かと因縁があるね。色んな意味でさ。

『ほう？随分気合い入ってんな。・・・・・・俺も全力で相手するぞ！』

マウンドに立つ坊主頭の夏川先輩が、愉しそうに須川君に言ってくる。何だかこの先輩（と常村先輩）って最初に会った時と比べると、良い意味で本当に印象が変わったな～

そんなことを考えていると早速先輩の召喚獣が投球の構えを取り、大きく振りかぶり力を込めてボールを放る。

『ットライ！』

瞬きする間に、ボールはミットへと吸い込まれていった。くっ・・・

・・・やっぱり早いね。須川君もまるで目を皿のようにして真剣に見ていたけど、どうやら見逃したようだ。

先輩は満足そうにニッと笑い、続く二球目をまたまた際どいコースに投げてきた。

『ットライ!ツー』

これも見逃し2ストライク。・・・・・どうしたんだろう?何だか須川君、ボールと言うより別の何かを狙っているみたいだけど・・・・・?

『さあ!そろそろ手を出さないとまずいぞ?打てるなら打ってこいっ!』

先輩が須川君にそう言ってくるけど・・・・・須川君は黙って、それでも何かを見て分析しているようだ。これは・・・・・もしや一回の攻撃を犠牲に相手の弱点でも見定めようとしているのだろうか?

そして立て続けに3球目を先輩はさっきと同じモーションで――――さっきよりも遅いボールを投げてきた。こ、これってチェンジアップ!?ここに来てこんなことまでするなんてっ!?これじゃ間が外されて・・・・・・

『っ！見えたっ！予想通りっ！！』
『何っ！？』

ええっ！？“見えた！？”ま、まさかこのチェンジアップを狙っていたのか須川君！？やるな須川君っ！見なおしたぞ！

そしてその宣言通り、遅めのボールを狙い澄ましバットを振り降ろ――――――さず、見逃した。うん。見逃し三振だね☆・・・・・・・
っておい！？須川っ！？キサマ見えたんじゃなかったのかっ！？

『え、えっと。ストライッ！バッターアウッ！』
『・・・・・・・・・・・・び、ビビったぞ・・・・・・？』
『・・・・・・・・・・・・み、見えたんじゃなかったのか？』

これには審判も、それからボールを放った夏川先輩とコースを指示していたであろう常村先輩も呆然としている。てか、拍子抜けしてるね・・・・・・・

「（ちょ、ちょっと須川君！何が？見えた”だよ！？何で打たないのさ！？）」

何やらアウトになったのにやけに興奮しながら２－Ｆクラスのベンチに戻ってくる須川君に、小声で話しかけてみる。と言うか、バットも振らずに棒立ちって何してんのさ！？

「（フッ、吉井。お前にも良い情報を教えてやろう。アレを見ろ）」

と、須川君は観客席の方を指差す。その三振したのに清々しい顔をしているのはちょっと腹たつけど、良い情報ねえ？まあそれは有難いけど、それにしては何で観客席なんかを？野球と何の関係があるんだろうか？とりあえず僕も釣られて見てみると、

《フレー　フレー　ツ・ク・ル♪　ガンバレ　ガンバレ　ツ・ク・ル♪》

『ふふっ♪皆さんが頑張ってくださいねー』

と、チアガール二人が楽しそうに飛んだり跳ねたりして応援している姿が。ん？いや、あれって確か・・・・・・

「（えっと・・・・・・造の妹さんの文ちゃんと、着物の先輩だね。でもあの二人がどうかしたの？何か彼女たちが重要な情報を握っているとか？）」

「（ああ・・・・・・とてつもない情報だ。いいか吉井？さっきの俺の攻撃でちゃんと確認したんだが、あの二人――）」

と、須川君が一呼吸間を開けてから・・・・・・

「（あの二人――――俺の予想通り、妹ちゃんはピンクで先輩の方は黒だった・・・・・・っ！全く最高だぜっ！）」

「（・・・・・・・・・・・・）」

必死に何かを見定めようとしていたのは“それ”か・・・・・・君は一体何を観察しているんだい？いや、まあ多少気持ちはわかるけ

ど。一先ず須川君は無視することにして、僕はバッターボックス入る事に。全く・・・・・ちょっとは自重しないとダメじゃないか！（↑エロ本の奪還の為に野球をやっているバカの心の台詞）

『かっ、会長っ！どうでしたか！？』
『お、俺らの理想郷はどんな感じで・・・・・？』
『・・・・・お前ら、アレは凄かったぞ・・・・・方や文ちゃんは可愛らしい文字通りの“桃色”の桃源郷、方や先輩は大人のセクシーさ際立つ“黒”だったっ！』

『『『うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！』』』

『・・・・・こやつらはどこまでバカなのじゃ・・・・・？』
『本当にバカだな・・・・・野球に参加していないあの先輩の色香に引っかかってどうするんだ』
《こ、困りましたね。しかも味方を応援してくれるハズの文さんが、逆に皆さんの集中力を下げてますね・・・・・》
『そうね・・・・・こんなので本当に勝てるのかしら？』
『あ、あはは・・・・・』
『・・・・・・・・・・・エロは自重すべき』
『その台詞をムッツリーニに言わしめたら終わりじゃのう・・・・・』

・・・・・・・・・・いつものメンバー以外のFクラスの連中は、どうやらあの着物の先輩と文ちゃんに完全に堕とされてて使い物になりそうにないね・・・・・というか、この会話って3年生の先輩たちとか先生たちに聞かれているんだけど？ああ、またFク

ラスの評判が一段と下がる予感がするよ。

「あー・・・・・・吉井だったか？お前のところのクラスって、その何と言うか・・・・・・個性的だな？」

「あー・・・・・・吉井君。私も文月に来る前も結構長いとこ教師として勤めてきましたが、その・・・・・・こんなに面白いクラスは見た事がありませんよ？」

「えっと・・・・・・色々とすみませんでした。先輩に先生」

キャッチャーをしていた常村先輩と、審判の先生がちょっとフォローしてくれたのが地味に嬉しかった。

１００時間目　僕らとチアと召喚野球～須川君自重しろ～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

うん、須川＆Ｆクラス自重。ところで読んで下さった皆さんは恐らくこう思われたでしょう。『明久・雄二・ムッツリーニ！エロ本取り戻すのに必死になっているお前らが言うな！』と。いや、一応あの子たちの為に言い訳をさせてもらうとですね？

明久……エロ本を取り返すためでもあるが、それよりも姫路さん＆美波の写真を取り戻す為に野球に挑んでいる。

雄二……エロ本を取り返すためでもあるが、それよりも教師共の鼻っ柱をへし折りたい為に野球に挑んでいる。

康太……エロ本を取り返すためでもあるが、それよりも相棒のカメラを取り戻したい為に野球に挑んでいる。

……ね？この子たちはだから必死に野球やっているので、小暮さんに釣られた須川を白い目で見ていたんですよ。ん？余計な言葉が付いているって？気のせいです。青春なので勘弁してあげてください。

ちなみに文は無自覚で、小暮さんは勿論わかっててＦクラス男子を堕としてきています。野球不参加なのにここまで影響力のある小暮さんマジ参謀役。ここでは野球には参加しませんが、文も小暮さんもこの後でもちょこちょこ出しますよ？ある意味レギュラーに出来ればいいんですがね～

んじゃ今日はここまで！また遅くなるでしょうが、次回もよろしくです！

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～前編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。最近やっぱり更新が遅れがちですみません。

今回は１００時間目突破記念回？的なものです。と言うか、この前結局記念回は何だかんだで書いていないのでついでにそれも兼ねてます。野球の続きを期待していた方はすみません。（べ、別に野球回から逃げてきたわけじゃないよ！？ホントだよ！？）

今回のお題（？）はＤｒ．クロさんの……

『性転換薬』『成長薬』『性格反転薬』『巨乳化薬』『貧乳化薬』『召喚獣化薬』『黒性格薬』を使って造や明久たちを暴れさせてくれ。

ってネタを使わせて貰いました。Ｄｒ．クロさん、７．５巻編で使うって言っておきながらここで使ってすみません（汗）それとネタをありがとうございます！

んじゃ、そろそろ行きましょか。番外編：前編♪スタート！

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～前編

化学とオカルトと偶然により生まれた召喚獣が日々楽しく暴れている（？）文月学園。ですが何も化学とオカルトと偶然により生まれたのは、何も召喚獣だけではありません。今回紹介するのは――――

「日高先生？造です、入りますよー？」
「失礼しまーす！・・・・・・あれ？造、先生居ないね？」
「おかしいですね・・・・・・呼び出したの日高先生でしたのに」

ここは文月学園保健室。造の教育係兼、育ての親の日高サクヤが根城とする部屋でもある。（半ば趣味の部屋と化してはいるけどね？）今日の造と明久は、サクヤに『放課後に取りに来てほしいもんがあるんさ』との言付を受けてやって来たそうですが・・・・・・

「・・・・・お花摘みでしょうか？」
「花？でもちゃんと花瓶に花はもう入れてあるけど？」
「・・・・・ゑ？あ、いやその！？・・・・・こ、コホン。そ、それより先生がいないんじゃどうしようもありませんね。アキさん、戻りますか？」
「んー、それなら校内を探してみようか？・・・・・あれ？造、メモが置いてあるけど？」

と、そこで明久が置いてあったメモを見つけた。どうやらサクヤが

書き置いたらしいそのメモの内容は・・・・・・

『ワリィ、ちょいと野暮用さね。アンタらに渡す予定だったジュースは箱に詰めていつもの右隣の棚の中にあるさね。皆で仲良く飲みな』

「あらら、そう言うことですか。そう言えば日高先生最近忙しそうでしたからね。・・・・・・ってアキさん？」

「あったよ造！さあ、早く戻って飲もうじゃないか！」

造が手紙を読んでいる間に、明久は意気揚々とすでに棚から箱を出していた。ところで明久よ？そんなに君は飢えているのか？

「もう、アキさんったら♪・・・・・・そうですね、行きましょうか。あ、半分持ちますよ？」

「おっと、ならこっちをお願い。・・・・・・んじゃ、失礼しましたー」

「失礼しました～♪」

そうして二人は何も知らずに保健室を後に。そう・・・・・・明久がジュースをタダで貰える事に喜びすぎて、別の棚に収められていた箱を間違えて取ってきたとも知らずに。

――――――そう今回は不思議な不思議な薬の話です。さてさて？薬

を手にした造たち仲良しメンバー。これから一体どんな展開になることやら？

☆

造Ｓｉｄｅ

保健室からアキさんと共に、ヒデさん・ゆーさん・こーさんに、姫路さん・島田さん・優姉さん・霧島さん・工藤さんのいつもの仲良しメンバーが待つ教室に戻り、日高先生が置いて行った箱を開けてみたんですが・・・・・・

「――――と言うわけで、先生にジュースを頂いたハズだったんですが」

「これはどう考えても、そしてどう見ても危険な気がするのう」

「・・・・・・・・・・・禍々しいラベル」

「おい造に明久。お前ら本当に先生に貰ったんだよな？」

中から出てきたものは何だかジュースと言うよりお薬みたいなものでした。本当にこれって大丈夫なんでしょうね？てかラベルが怪しすぎますよ・・・・・・？

「えっと・・・・・・貰ったと言うよりも、先生が置いて行ったもの何ですが」

「・・・・・・これ初めて見る。そもそもジュースかもわからない」

「でも師匠が置いて行ったなら信頼して良いんじゃないの？」
「あはは♪そだね。まあ、折角先生がくれたんだし試しに飲んでみない？」
「うーん。どうしましょうね・・・・・ねえアキさん、これ本当に棚の中にあったんですよね？」

皆さん反応が様々ですが、正直どんなジュースかもわからない状態で飲むのは怖いですよね？霧島さんの言うとおり、そもそもこれってジュースなのかも怪しいですし。ちょっと不安になって箱を取ってきたアキさんに尋ねようと振り返ると・・・・・・

「（ゴクゴク）ぷは～・・・・・うん！美味しいね！」

「「あ、アキ（明久君）！？もう飲んじゃったんですか！？」」

・・・・・お、遅かった・・・・・！？アキさんがすでに飲み乾していた後でした。だ、大丈夫なんでしょうか？

「あの・・・・・アキさん？本当に大丈夫なんですか？」
「へ？いや、普通に大丈夫だけど？」

と、アキさんは長い髪をなびかせて、その自慢の大きな胸を張って笑顔で応えました。そうは言っても、何か身体に影響が出たら怖いですよ？

・・・・・・・・・・・・ん？長い髪に、大きな胸？

「「「「「「「「・・・・・・・・・・・・っ!?」」」」」」」」

この場にいる全員が、あまりの急展開に驚き固まってしまいました。

・・・・・・な、何ですかこれは・・・・・・・・!?

「!?あ、あの!?明久君?いえ・・・・・・秋子ちゃん!?」

「あ、アキ!?あ、アンタ・・・・・・何よその髪と胸は!?」

「へ?髪と胸って何の事?・・・・・・ん?そう言えば、髪がうっとおしいし、何だか胸が重くなっているような・・・・・・?」

と、頭にクエスチョンマークを浮かべているアキさん（?）は髪の毛さわさわ、お胸ぷにぷにを二、三度行った後・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・えっと、誰か鏡持ってない?」

若干冷や汗を掻きながら、それでも最後の望みを託して鏡を借りて自身の生まれ変わった姿を見ると・・・・・・

「な、なんじゃこりゃぁあああああああああ!?」

某昔のドラマの刑事さんの殉職シーンみたいな台詞と共に、学園中に響き渡りそうなくらいの叫び声を上げてしまいました。そう、何たって今のアキさんは・・・・・・

「何で・・・・・・何で僕が女の子になってんのさ!?」

そう、ものの見事に女性となっておりました。何だか肝試しの時の自分を彷彿させますね・・・・・・

☆

「やれやれ・・・・・どうやら明久のヤツ、慌てて先生の指定してた棚とは別のとこからこの妙な薬を持ってきたらしいな」
「そのようじゃのう・・・・・それで自分が最初に飲んでしまうところが、本当に明久らしいが」
「・・・・・・・・・・絵に描いたようなドジ」
「すみません・・・・・・自分がちゃんと確認しなかったばっかりに」

とりあえずアキさんが女性となったのは、やっぱりさっきのジュース（薬？）のせいみたいです。ゆーさんの言う通り、アキさんは別の棚から取り出してきたようですね。うーむ、それにしても何でこんなものを日高先生は持っているのでしょうね？

あ、そうそう。ちなみに当の本人ですが・・・・・・

「（すりすり）ああ・・・・・・秋子ちゃん可愛いです♪」
「（ぎゅっ）そ、その・・・・・・秋子本当に可愛いわ♪」
「・・・・・・・・・・僕の男の尊厳が・・・・・・」

姫路さん&島田さんに見事に捕獲&愛でられている感じですね。・・・・・・アキさんも普段の自分とヒデさんの気持ちがわかって頂け

たでしょうかね？まあ、それはともかくこれからどうしましょうか？

「おーい。説明書あったよー」

と、ここで箱とアキさんが飲んだ薬（？）を調べてくださっていた工藤さんたちがその説明書を見つけてくれたようです。一先ず全員集合します。

「箱の奥に挟まっていたわ。何でも師匠の手作りの薬らしいわね。吉井君が飲んだものだけじゃなくて、他にも色々な種類があったわよ」

「あ、あの人は一体何を作っているのやら・・・・・・てか、薬事法に引っかかっていませんか？これって」

「まあまあ♪それでね、さっき吉井君が飲んだのって・・・・・・」

「・・・・・・多分、性転換薬ってもの」

「「「「「「「「「「性転換薬！？」」」」」」」」」」

「（コクン）・・・・・・文字通り性を変えるもの。男性は女性に、女性は男性に」

それはまた・・・・・・とんでもないものを作るんですね？あの人って相変わらず突拍子もないことをするんですから。

「そ、それで！？これってちゃんと元に戻るの！？」

「え？明久くーーーーー秋子ちゃんは元に戻りたいんですか？」

「あら？アキーーーーー秋子はそのままでも可愛いのに？」

「戻そう?そこは戻そうよ!?大体僕の女の子の姿なんて、面白くも何ともないでしょ!?てか、誰が秋子ちゃんさ!?」

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

「ちょっ!?その無言は何!?てか何で目を逸らそうとするの!?」

うーん・・・・・アキさんはそう言ってますが、姫路さん&島田さんは意外とお気に入りのようですね。まあ、この二人ならどんなアキさんの姿でもメロメロになるでしょうが?

「あはは♪大丈夫だってさ。２４時間で元に戻るらしいよ?それまではそのままだけどね?」

「に、２４時間か・・・・・・まあ戻らないよりはいいのかな・・・・・?」

「「そうですか（そっか）・・・・・・２４時間は秋子（ちゃん）と楽しめるんですね（のね）?」」

「聞こえないっ!秋子なんて言われるなんて聞こえないよ!?」

・・・・・ね?アキさんにこの二人ですもん。ご馳走様でした♪さてさて、だったらこんな（二重の意味で）危険なものはさっさと元に戻して帰りましょ――――

「ねえ!ボクらも飲んでみない?面白そうだよ♪ね☆こーたくん!」

「そうね♪秀吉、造くん?飲んでみましょうよ」

「・・・・・・雄二、一緒に飲もう?」

「「「「散っ！！！！」」」」

――――男子４人、こうなる事はすでに予想済みです。アキさんがこんな事になった時点で、優姉さんたちがそう言うのはわかっていましたからねっ！あらかじめ逃げ道は確保してありますっ！さらばですっ！

ガチャッ！

・・・・・・ん？

ガチャガチャッ！！

・・・・・・・・・・・・・・・！？あ、開かないっ！？何故に！？

「・・・・・・・・・・・・ふっふっふ。皆？こんなに美味しいジュースを僕だけ飲むのはダメだよね？」

「「「「！？その声は・・・・・・明久（アキさん）！？」」」」

振り向けば、アキさんがこの部屋の内側のドアの鍵を持って、にんまりしています。や、やられたっ！？アキさんまさか・・・・・・っ！

「雄二、造、秀吉、ムッツリーニ。大丈夫だよ?僕にはわかってる。喜びも分かち合い、苦難も分かち合うことこそが真の友情何だって。そうだよね戦友(いけにえ)よ!」

HAHAHA!友情ってスバラシイネ!?てか、戦友と書いて生贄と読みましたねアキさん!?

「「「「明久(アキさん)の裏切り者おおおおおおおおおおおお」」」」

自分たち男子陣に、とてつもない怒りや憎しみ。裏切られた事による悲しみの感情がアキさんに向かいます。しまった・・・・・普段から一緒に逃げている分、自分たちの行動がアキさんには手に取るように分かるんでしょうね。

「あれ?前に言わなかったっけ?・・・・・死なば諸共、逃がさない。こうなりゃ全員仲良く道連れだよ☆」

アキさんが・・・・・アキさんが黒い・・・・・。なまじ今のアキさんが女性であるが故に、余計にその笑顔が黒い上に怖いです。

☆

アキさんには後でちゃんと反省して貰うとして・・・・・自分らも結局薬を飲む事に。何もこれ以上のトラブルが無ければいいのですが。

「うぅ・・・・・そ、それで？一体どんな種類の薬があるんですか？」

「んー？ちょっと待ってね？吉井君が飲んだ『性転換薬』でしょ。それから『成長薬』に『逆成長化薬』。『巨乳化薬』に『貧乳化薬』でしょ？」

「それと造くんと同じように、フィールドが出ているときだけ召喚獣になれる『召喚獣化薬』に『性格反転薬』って薬。・・・・・あら？最後の一つだけなんて書いてあるかわからないわね？」

・・・・・そ、それって本当に実在するんですか？まあ、アキさんが女性になっていますしありえなくはないでしょうが。

「それじゃ、誰が何を飲む？流石におっぱいが大きくなったり小さくなったりする薬は男の子たちには向いてないカナ？・・・・・あ、でも飲みたいなら飲んでみる？皆♪」

「「「「全力で遠慮しておきます（遠慮しておく）（遠慮したいのう）」」」」

工藤さん？冗談にしては恐ろしすぎることを言わないでくださいね？

「あはは♪残念だな～・・・・・それじゃあ、まず成長薬なんてどうかな？」

「・・・・・雄二、飲んで。雄二の大人の姿を見たい」
「俺の意見は無しかよ・・・・・・まっ、それなら他のよりマシか？」

そう言って、まずはゆーさんがその『成長薬』を飲む事に。そう言えば自分って、主に文さんのお陰で『女性』にも『大人』にもなったんですよね・・・・・・

～雄二成長中～

「・・・・・雄二、素敵。カッコいい・・・・・・♪」
「恥ずいから、あんまり言うな。・・・・・・てか、これ以上背が高くなるとは思わんかったぞ」

おお・・・・・今のゆーさんは西村先生並みの背丈、がっちりとした肉体に物凄く頼りになりそうな感じがする大人のイメージですね。霧島さんの言う通り、カッコいいです♪皆さんも成長したゆーさんの姿に感心しています。

「へえ？雄二も大人になったらそんな感じになるんだ。相変わらず不良っぽいけど」
「はっ！お前はそのままネットアイドルにでもなって、姫路と島田を養うんだろ？」

ガスッガスッ！　×2

・・・・・あ、あはは・・・・・・何だか姿は変わっても、やっぱり本質は変わらないんですね。アキさんもゆーさんも、見た目は変わっても中身はそのまま高校生ですからね。

「それにしても大したものじゃの・・・・・・日高先生は本当に何者じゃ？」

「・・・・・・・・・・・・これを世間に発表すればとんでもない事になる」

「あはは♪一攫千金大儲けとか？あ、でも日高先生の事だからさ？」

「そうね・・・・・・師匠はそう言うお金とかに興味はないでしょうね」

あの人らしいですよね。お金とか名誉とか全然興味ないみたいですし。

「そろそろ次の薬に行きますか？」

「そうね。・・・・・・何が良いかしら？」

と、姫路さんと島田さんが薬を取り出します。さて、次はどんな薬でしょうかね？

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～前編（後書き）

ありがとうございました！そしてＤｒ．クロさん、ネタを使わせて貰ってホントにありがとうございます！

これって誰に何を使うのか地味に考えるのが大変ですね……まあ、ある程度のキャラはどの薬を使わせるか決めていますが、なるべくはありきたり過ぎないように心がけます。

ちなみに前編・中編・後編の３話構成となっています。最初は前後編に分けるはずだったのに、また文字数がオーバーしまくったので（汗）と言うか、そのままだったら後編が９０００字越えてましたもん（苦笑）

野球編はちょっとお休みです。これ更新し終わればすぐに戻るかと。それまでは待っててください。ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～中編（前書き）

どもども糖分摂取魔です！今回も番外編ですよ～

今回一応本編とか番外編とか合わせると、１５０話更新したってことになるんですよね……5月から始めて今9月も終わると考えると……早いのやら遅いのやら？

まあ、とにかく行くよ番外編・中編！スタートです♪

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～中編

明久Ｓｉｄｅ

僕のちょっとした（ちょっとか？）ミスで、とても不思議な薬を飲む事になった僕たちいつもの仲良しメンバー。例を挙げると、僕が女の子になったり雄二が成長したりともうハチャメチャだ。ホントによくもまあ、こんな薬を創れるよね？日高先生って何者なんだろう？

「それじゃ、次はボクらの夢のお薬♪『巨乳化薬』と・・・・・・これ以上ボクらを苛めないで！『貧乳化薬』を試してみよう♪」

工藤さんがノリノリで次の薬を進めてきた。・・・・・ふむ、その薬は男子には無理そうだし（って言っても今の僕は女の子だけどね・・・・・・？）瑞希と美波。それに霧島さんに木下さんに工藤さん、んでもって造と秀吉しか無理そうだね？

「・・・・・今、と言いますかいつもですが、物凄くアキさんに失礼なこと考えられた気がするんですがね？」

「・・・・・ワシもじゃのう。明久には、根本的に教えなくてはならぬ真理がありそうじゃのう？」

うーん・・・・・とりあえず誰が何を飲むのかな？まあ、『貧乳化薬』は、ごく一部の人しか使えなさそうだよね？

「まあ、わかっていると思うけど姫ちゃんは『貧乳化薬』確定だよね～♪」

「え？私に選択肢は――――」

「「――――み・ず・き♪ウチ（アタシ）たちの苦しみ、身を持って体感しなさいっ！！」」

「――――選択肢なんて、無いんですよね・・・・・・」

・・・・・ゴメン瑞希。その手の話題は僕にはフォローできそうにないや。あ、それじゃ美波と木下さんが・・・・・・その、『巨乳化薬』を飲むのかな？

「っと言うわけで、姫ちゃんは『貧乳化薬』だけど・・・・・・どうするの？ナミーに優子？『巨乳化薬』は」

「「・・・・・・・・・・・・遠慮しとく」」

「へ？あれれ？いいの二人とも？折角のチャンスなのに勿体なくないカナ？」

って、あれ？飲まないのかな？いつもの二人なら喉から手が出るほどに飲みたいもののような気がするんだけど？工藤さんも不思議そうに首を傾げる。

「だって・・・・・・２４時間で効果の切れる夢なら・・・・・・」

「目が覚めたら・・・・・・余計に空しいでしょうし・・・・・・」

「「「「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」」」」

ねえ神様？こんな時一体どう言うフォローをすればいいの？いや、寧ろこの世界を残酷に定義した神様は、こんな時一体どんなフォローを入れるのかな？

「あ、あはは・・・・・じゃ、じゃあ『巨乳化薬』はボクが試してみるねっ！姫ちゃん、それじゃ飲んじゃおう！」

「そ。そうですね！では・・・・・・」

～愛子＆瑞希　成長（逆成長）中～

「身体が軽いです♪何だか肩が楽で良いですね♪」

「・・・・・何だか納得いかないわね。身体が軽いってことは普段どれだけ胸に栄養が行ってるのかしら」

「・・・・・そうね。アタシもいつかは“胸が重くて肩凝りがします”って言ってみたいわ」

『貧乳化薬』を飲み終わり瑞希の特徴だった大きな胸が、本当にかなりその、慎ましくなってしまったけど・・・・・それがちょっぴり嬉しそうな瑞希と、逆に瑞希の反応に更に落ち込んでいく美波＆木下さん。こればかりは美波と木下さんのこれからの成長に期待するしかないだろう。そして反対に『巨乳化薬』を飲んだ工藤さんはと言うと・・・・・

「こ、こーたくん！？しっかり、しっかりしてよ！？」

「・・・・・・・・・・・・・（ドクドクドク）」

それはそれはとても高級そうなメロンを胸に引き下げて、案の定ムッツリーニを完全に堕としていた。アレはムッツリーニには耐えられないだろうね。ああムッツリーニよ、どうか安らかに眠ってくれ。

「目を開けて！あ、いや開けたらマズイのかな！？と、とにかく意識をしっかり保って！」

「・・・・・・・・・・・・・わ、が・・・・・・生涯に・・・・・・・一片の・・・・・・悔いなし（チーン）」

「こーたくん！こーたくん！？ご、ゴメン皆！ボクちょっと保健室までこーたくんを連れて行くからっ！」

そう言って工藤さんがムッツリーニを連れて保健室へと向かって行った。やれやれ、工藤さんも大変だね。あのムッツリスケベには物凄く手を焼かされているしさ。

「と、言うか・・・・・・ムッツリーニはそろそろ耐性を付けないと本気で命に関わるんじゃ？」

「あー・・・・・・確かにそうかもですね」

「まあ、そう言う明久は人のことは全く言える立場ではないがの？」

「だな。最近事あるごとに姫路と島田を見て鼻血出しているじゃねえか」

そ、それはともかく！次行ってみようか！？・・・・・・うーん。

それはそうと、そんなに僕って鼻血出してるのかな？　（↑自覚なし）

☆

「気を取り直して次へ行ってみましょうか。えっと、土屋君は愛子に連れて行かれたし、あと薬を飲んでいないのは・・・・・・」
「ふむ。姉上とワシと造、それから島田に霧島じゃな。ちなみに後どんな薬が残っておるのじゃ？」
「・・・・・・『逆成長化薬』と『召喚獣化薬』と『性格反転薬』。それとよくわからない薬が一つ」
「うーん・・・・・・どれを選ぶか迷うわね？」
「確かに微妙なもんばっかだな。それで？お前ら次は誰が何を飲むんだ？」

と、『成長薬』を飲んで大人になった雄二が皆に聞いてくる。どうでもいいけど、がたいが更に良くなり過ぎてて、大島先生とか鉄人っぽく見えるから正直怖いんだけど・・・・・・まあ、それはともかく。

「「それならワシ（アタシ）が『召喚獣化薬』を・・・・・・ん？」」

と、ここで木下家の姉妹（誰が妹じゃ！？　ｂｙ秀吉）が見事にハモる。やっぱり流石に双子だけあって、考え方とか似たりするものなんだろうか。

「姉上よ・・・・・またもや対立せねばならぬとはの？悪いがワシはこの薬一択と決めておったのじゃ。引いてはくれぬかの？」
「良い根性ね・・・・・アタシだってアンタには悪いけど、あの夢の『巨乳化薬』を蹴ってまでこれを飲みたかったんだけどね？」
「（造の見ておる景色が見られるチャンスなのじゃ・・・・・絶対に姉上には譲らぬぞ）」
「（造くんの召喚獣になった気持ちがわかるかもしれない良い機会なのよ・・・・・これればかりは絶対譲らないわ）」

「「・・・・・・・・・・・・」」

薬（いや、どっちかと言うと造？）をめぐって姉妹喧嘩勃発。何だか肝試しの時を思い出すね・・・・・・

「あ、あのぅ・・・・・どうやらちょうど二人分あるようですし、お二人とも飲んではいかかでしょうか？」

「「そうね（そうじゃの）♪仲良く飲まないとね（飲まんとな）！」」

そしてハモったのも早ければ、切り替えも早いね。それはともかく秀吉と木下さんが『召喚獣化薬』を飲む事に。さてさてどうなる事やら？

～秀吉&優子変化中？～

「「・・・・・何も、変化ないわね（のう）？」」

あれ？二人ともちゃんと飲んだはずなのに、何も変わらないようだ。
もしかしてハズレ（いや、ある意味当たり？）を引いたのかな？

「あらら、もしかしてこれって失敗なのかしら？」
「いや・・・・・・こりゃ多分だが、造」
「へ？・・・・・・あ、そう言うことですね？起動（アウェイクン）！」

キュウウウウウウウウウウン　ボンッ！×３

ここで造が召喚フィールドを張りだす。あ、そっか。そう言えば『召喚獣化薬』って・・・・・・

《おお・・・・・本当に召喚獣になるとはの》
《そう言うことね。フィールドが存在する時のみ召喚獣に変化するんだったわね》
《あはは♪ヒデさんも優姉さんも、見事に召喚獣になってますね～》

と、ここで３人が召喚獣となった。なるほど、造と同じってことは、同じ条件。つまりフィールドが張って無ければ召喚獣になれないってことだね。

《それにしても・・・・・・そうか、これが造の見ている世界なのじゃな・・・・・・》
《何と言うか・・・・・・ちょっぴり感動しちゃうわね・・・・・・

》

《そ、そうですか？そう言われるとちょっと照れちゃいますね♪》

何だか3人（この場合って3獣なのかな？）が微笑ましい光景を作りだしていた。3人が楽しそうで何よりだね。皆もどうやらほっこりしてるみたいだ。

☆

「にしても本当に召喚獣になるとは驚きですね」

「ちょっと楽しかったわ♪召喚獣になれるなんて」

「そうじゃの♪ふむ、残るは造に霧島に島田かの」

造&秀吉&木下さんたち召喚獣組が元に戻り、次の薬試す事に。どうやら造と同じく、フィールドを解除すれば問題なくいつもの身体に戻るようだ。

「それじゃ、次はウチが試してみようかしら」

おっと、次は美波か。うーん、美波は一体どんな薬を飲むのかな？

「・・・・・美波、何飲むの？」

「そうね、なら『逆成長化薬』ってやつを飲んでみようかしら♪」

「？？？逆成長薬？てかそもそもそれって何なの？」

逆に成長ってことは・・・・・・つまり退化？

「えっと・・・・・・どうやら坂本君が飲んだ成長薬とは逆に、子供になっちゃうみたいですね」

「・・・・・・・・・・・・・（そっか。リアル名探偵コ●ンか）」

コホン・・・・・・それはともかく早速美波が薬を飲み乾した。どうなるんだろうね？

～美波逆成長中～

「ど、どうかしら・・・・・・・？」

「おぉぅ、これは・・・・・・・！」

「み、美波ちゃん・・・・・・・！」

これ・・・・・・イイ・・・・・・凄くイイ！造と葉月ちゃんくらいの歳まで年齢が下がっているみたい（それについて、アキさんにはじっくりとどういう意味か聞きたいのですが？　ｂｙ造）だけど・・・・・・すっごく可愛らしい！そっか、美波って子供の頃はこんな感じだったんだね♪

「・・・・・美波、可愛らしい♪」

「小学５年生くらいってとこかしら？」

「そういやあのチビッ子と同じくらいか」

「当たり前じゃが、島田にもこんな頃があったのじゃの」

「あはは♪葉月さんにもお姉さんの姿を見せてあげたいですね♪」

皆もどうやら美波のこの姿を気にいったようだ。うんうん、なんせかなり可愛いもんね♪

「美波ちゃん可愛いです♪お持ち帰りしたいくらいに！」
「お、お持ち帰りって・・・・・あ、でも確かにウチの子供の頃のままね」
「やっぱり姉妹だけあって、美波と葉月ちゃんって似てるよね」
なんて皆で笑いながら言い合っていると――――

ガラッ！

「お姉様♪まだ残っているのでしたら、美春と・・・・・・一緒に・・・・・え？」

――――戸を開けて清水さんが教室に入ってきた。と、同時に美波と瑞希（と何故か僕も）見てから・・・・・・

ガシィ！×３　シュパッ！

「・・・・・・・・・・・・」

「「「・・・・・・・・・・・・え？」」」

美波と僕と瑞希は清水さんに光の速さで掴まれて、んでもって光の速さで連れ去られて・・・・・気がつけば学園の外にいた。そして現在進行形で超特急で拉致られているんだけど・・・・・ちょっと?どう言う事なの?

「み、美春・・・・・アンタ何を・・・・・・?」
「清水さん?どうやって君が瞬間移動したかとか、3人を抱えてどうしてそんなトップスピードを出せるのかなんてもうツッコまないけど何する気?」
「ど、どうして私たちを攫うんですか、清水さん?と言いますか、さっきから目がちょっぴり怖いのですが・・・・・・?」
「・・・・・・・・・・・・」
ぼ、僕らの声が聞こえていないのかな?もしもーし?清水さーん?

「・・・・・・・・・・・お姉さ――いえ、美春の可愛い可愛い天使ちゃんは美春がちゃんと育ててあげますわ」
「(ゾクッ)ちょ、ちょっと!?みみみ美春!?あ、アンタ何を言って!?」
「・・・・・・・・・・・そして胸のない姫路さんに、豚では無く女として生まれ変わった貴女でしたら・・・・・ふふふ・・・・・ふふふふふふふ(じゅるり)」

「「ちょっと!?怖い!?怖いよ(ですよ)清水さん!?」」

あ、これはヤバイ・・・・・色んなものが奪われそうで本気で怖い。と言うか、じゅるりって・・・・・・

「美春！いい加減にしないと、ウチ怒るわよ！」
「は、放して下さい清水さん！？」
「ＯＫ、清水さん。落ち着いて話し合おう。ね？」
「さあ・・・・・・往きましょう３人とも・・・・・・楽園（エデン）へと」

「「「聞いていない！？誰か助け――――」」」

――――その後、色々と危なかったけど・・・・・隙を見て清水さんから死ぬ思いで脱出して、それからまさにリアル鬼ごっこを体験せざるを得なかったことだけは伝えておくね。・・・・・・ゴメン美波、知らなくて。君はこの命がけの追いかけっこに日々鍛えられてたんだね？

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～中編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……自分が書いてて何ですが、相変わらずカオスですね。どうしてこうなるのでしょうね（苦笑）あ、言い忘れていましたが前編：造Ｓｉｄｅ　中編：明久Ｓｉｄｅ　後編：雄二Ｓｉｄｅでお送りしております。そんなわけで次回は雄二Ｓｉｄｅからですね。

と言うか残っている薬と残っている飲んでいない人で展開が読まれているかもですが……その辺は華麗にスルーしていただけると嬉しいです（苦笑）正直に言いましょう。次回は今回以上にカオスかも？

てなわけでまた次回～読んでいただきありがとうございました！

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～後編（前書き）

どうも糖分摂取魔です♪随分冷えてきましたよね～。毛布が活躍し始めていますし。

さて、今回で番外編ラストとなっています。……と言っても感想とか見てると、何だか展開を皆さんに読まれまくっている気がするのですが（汗）やっぱりわかりやす過ぎでしょうかね（苦笑）

と、とにかく行くよ！番外編・後編ＧＯ！

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～後編

雄二Ｓｉｄｅ

・・・・・明久に姫路に島田が清水に連れ去られた気がするが、まあ清水の奇行は今に始まったことじゃねえか。深く考えるのはよそう。明久たちなら何とかなるだろうしな。・・・・・多分だが。アイツらの健闘を祈ろう。

「・・・・・・最後は私と造」
「うぅ・・・・・・やっぱり最後までやるんですね」

と、翔子と造がそれぞれ薬を持つ。つか、何の薬だそれは？

「のう、造に霧島よ？その薬は一体何なのじゃ？」
「残りは確か・・・・・・『性格反転薬』と謎の薬だったわね」
「・・・・・・どの道あと二つだし、適当に取った」
「何だか不安なんですが・・・・・・本当に飲むんですよね？」
「・・・・・・（コクン）」

・・・・・ふむ。造じゃないが、俺も若干不安だな。一体どうなる事やら？そんな一抹の不安をよそに翔子は淡々と、造は恐る恐る薬を飲み乾す。さて・・・・・？

～造&翔子変化（？）中～

「「・・・・・・・・・・・・」」

一応二人とも飲み終わったようだが・・・・・見た目に大きな変化はなさげだな。

「どうだ翔子？平気か？外見は変わっちゃいねえようだが？」
「造もそのようじゃな。どうやら外見が変わるものではなかったようじゃ」
「あら？それじゃ、一体何の効果が――――」
「ええ♪勿論平気よ雄二に皆！何だかすっごく楽しくなってきたくらいだし♪」

「「「！？」」」

・・・・・・おい待て。いや、ホントに待て・・・・・・しょ、翔子！？

「あら？どうしたのよ？皆して私を見て？あら～♪もしかして私に見惚れちゃったのかな♪」
「・・・・・・お前、翔子・・・・・・なのか？」
「あらあら♪そんな当たり前のこと今さら聞いてどうするのよ？そうよ、私の名前は霧島翔子。あ、ゴメン雄二。もう少しで坂本翔子になるんだったわ～♪」

と、俺の目の前の翔子と名乗る女はそう言いながらけらけらと笑っ

ていやがるが・・・・・だ、誰だこいつは?翔子の顔をした別人か!?長い付き合いだが、こんなに明るくペラペラと喋る翔子なんざ見た事ねえぞ!?

「ふふ♪どうしたんのよ雄二?そんなに鳩が豆鉄砲食らったような顔をして♪」

「・・・・・おい、こりゃ何の冗談だ?もう一度聞く。お前ホントに翔子か?」

「あらあら♪私冗談言いそうに見えるかしら?勿論翔子よ?雄二、貴方の愛する奥さんよ~♪」

冗談だと助かるんだが!?ハイテンション過ぎておっそろしいわ!?普段の翔子に戻ってくれ!?

「あ・・・・・ど、どうやら代表『性格反転薬』を飲んだみたいね」

「せ、性格反転薬じゃと・・・・・?まさかそれで霧島は・・・・・」

「・・・・・あ、頭痛くなってきたぞ?正直いつもとギャップが激しすぎて、不気味すぎる」

確か文字通り、飲んだヤツの性格を反転させちまう薬だったが・・・・・なんて恐ろしいんだ!?怖気が走る。ま、まあ一応無害のようだから別に問題はなさげだが・・・・・

「あっ!そうだ雄二!私雄二の為にお菓子作ってきたの!待っててね!今すぐ持ってきてあげるから♪」

「へ？あっ、ちょっと待て翔子！？」

急にそんなことを言い出したかと思うと、翔子（改）は制止を聞かずにとっととどこかへ行っちまった。やれやれ、忙しないな・・・・・

「えーっと・・・・・・あら？ところで造くんは大丈夫かしら？」

「む・・・・・・そう言えばさっきから何も喋っておらぬようじゃの。大丈夫かの造？」

おっと・・・・・・そういやそうだな。翔子のあまりの変化っぷりに驚いて造のことを忘れてたぜ。そういや結局造は何飲んだんだ？外見に変化が無いってことは、まさか翔子のように性格が反転してねえだろな？

「おい造？お前は平気か？」

「・・・・・・ふふ♪何がですかゆーさん？」

おっ！どうやら何ともないようだな。やれやれ、ホッとしたぞ。何せなまじ造が常識人な分、暴走したら手に負えなさそうだからな。と言うか暴走する造なんざ見たくねえし。

「いや、お前の身体に異常が無いかちょいと聞いてみただけだ。気にしないでくーーーーー」

「何も無いですってば♪ですから・・・・・・気安く話しかけないでくださいね？耳障りです♪」

「「「・・・・・・・・・・・・・・え？」」」

・・・・・・・・・・・・・聞き間違いか？今、造が絶対に言いそうにない台詞トップ１０の言葉を最高の笑顔で言わんかったか？

「え、えっと・・・・・・造、くん？」

「あらあら♪優子さんは随分お偉くなっているのですね？これでも自分は先輩ですのに、“造くん”呼ばわりですか？これはこれは恐れ入りますね」

き、聞き間違いじゃねえ！？ちょっと待て！？一体造に何があった！？てか、一体何を飲んだんだ！？

「・・・・・・つ、造が・・・・・・壊れた？」

「あら？ヒデさん酷いですね。誰が壊れたですか？・・・・・・何ならヒデさんも一緒に壊してさしあげましょうかね。どちらが良いですか？身体？それとも心？間を取って両方壊して差し上げましょうかね♪」

そうしてニッコリと笑いかける造。その笑顔は・・・・・・本気で心が壊れそうなくらい黒かった。それでいて目が全然笑ってねえしな。いや、マジでどうなってんだ！？

「造？お前本当に何を飲んだんだ？普段のお前なら絶対言わん事を――――」

「ゆーさん？どうやらゆーさんお耳が悪いようですね♪『話しかけるな』と言ったはずですが？ああ、そうですか。ゆーさんは背が無

駄に高くて小さな自分の声なんて聞こえないってことですか」
「い、いや・・・・・・そんなことは」
「ふむ・・・・・『話しかけるな』と言ったのに、本当に聞こえていなかったようですね？困りました。これってひょっとしてゆーさんの理解が足らないってことでしょうか？うーん？どうやら自分はゆーさんの事を過大評価し過ぎていたようですね？ゆーさんには心底がっかりしました」
「・・・・・・・・・・・・・」

や、ヤバぇ・・・・・・普段温厚な造だからこそ、心がマジで折れそうだ・・・・・・

「つ、造くん・・・・・・あの・・・・・・」
「おやおや？全く・・・・・・優子さんも聞こえていなかったようですね。そして礼儀もなっていない、と。先輩には敬語を。まして“くん”付けとは感心出来ません。それとも何でしょうか？ひょっとして敬語を使わない理由がおありなのですか？」
「え、えっと・・・・・・」
「ああ、そう言うことですか！つまり・・・・・・自分は敬われていないがために、皆さん敬語を使わない、と。これは自分に責任がありますね。申し訳ございませんね、本当に不甲斐ない先輩で♪」
「・・・・・・・・・・・・・」

木下姉が・・・・・・いつもは造を振り回しているあの木下姉ですら、ガクガク震えてやがる。どうする・・・・・・ある意味最凶の造を誰が止めるんだ！？ちなみに俺じゃ力不足のようだ。誰か他のヤツ、頼んだぞ！

「つ、造よ・・・・・・後生じゃ、元の造に戻ってくれぬか？」

おお、秀吉が行った！？よ、よし。頼む秀吉！造を何とかしてくれ！

「あらら？おかしなヒデさんですね♪“元の造”とはどんな自分でしょうか？」

「そ、それは・・・・・・や、優しくて明るくて素直な・・・・・・」

「ヒデさん？それってつまり、今の自分は月野造ではない、と？冷たく暗く捻くれている、こんな自分は必要が無いものと言うことですかね？」

「い、いや！そうではなくての・・・・・・！」

「あらら～？ですが自分にはそう聞こえましたよ？嗚呼、そうですか・・・・・・あーあ、ちょっと傷つきましたよヒデさん？ヒデさんは自分のことをわかってくれていると思ってましたのに。もう哀しくて泣いちゃいそうです♪」

哀しいだの、泣いちゃいそうだの言っているがニコニコと（ドス黒い笑顔で）嗤ってやがる・・・・・・絶対嘘だろうが・・・・・・秀吉のライフポイントをガリガリ削っていやがるな。

「つ、造・・・・・・すまぬ。わ、ワシは・・・・・・」

「ふふふっ♪そうですか。悪いと思っているのですか？」

「そ、そうじゃ・・・・・・その、ホントに悪気はなかったのじゃが・・・・・・」

「ふむ。それでしたら・・・・・・ふふふ♪ねえ、ヒデさんに優子さんにゆーさん♪」

「「「は、はい・・・・・・」」」

って、待て！？俺は何故に返事してんだ！？これじゃ完全に造のペースじゃねえか！？

「「「い、いや・・・・・・それは・・・・・・」」」

「自分の命令（おねがい）を一つだけ聞いていただけませんか？・・・・・・・たった一つだけです。それなら大丈夫ですよね♪」

今、命令と書いてお願いって言ったよな！？マズイ。間違えてもここで”一つだけならいい”とでも言ったら・・・・・・とんでもない後悔をする羽目になる。そう俺の直感が警告を鳴らしている。それは秀吉&木下姉も同じようだ。どうする・・・・・・？とりあえずさっきから頭フルに回転させて打開策を練ってはいるが、どうにもなりそうにないんだが・・・・・・

「ああ、そうですか・・・・・・聞いて下さらないのですね・・・・・・それは残念です。ヒデさんたちには失望しました・・・・・・」

と、造（黒）は俺らに背を向けてどこかへと向かおうとする。まあ、これも巧みな演技だろうがな。ここで造を呼び止めてたり、下手に出れば――――

「「っ！？ま、待って下さい！！」」

あ、バカっ！？言ってるそばから！？お前らそこでそんなに下手に

出れば・・・・・・！

「ふふふ♪では聞いてくれるんですね？ヒデさんに優子さん？」

「「は、はい・・・・・・です・・・・・・」」

・・・・・・・・・・・・堕ちたな。さらばだ秀吉に木下姉。くそっ、こうなりゃ俺だけでもどうにか逃げ出すしか・・・・・・

「では・・・・・・そうですね♪まずはヒデさんと優姉さんには（ドスッ！）――――――きゅう」

ドサッ！

「「「・・・・・・・・・・・・・・え？」」」

と、物凄く活き活きとした目で、今まさに造が二人に何かを命令しようとした矢先に倒れ込んだ。何だ？一体何が・・・・・・？

「・・・・・ふいー。平気かいアンタら？あちゃー、にしてもよりにもよって一番ヤバイもんを造が飲むとはねぇ？」

「「「師匠（日高先生）！？どうしてここに！？」」」

救世主と言う名の、ある意味の元凶である日高先生が手刀で造を伸

して俺らの危機を救ってくれた・・・・・・それよりかなり良い音したんだが、造は平気なのか？

～事情説明中～

・・・・・ふむ。先生曰く、保健室に帰ってきたら渡したはずのジュースがまだ置いてあり実験中の薬は無くなっていた。どうしたもんかと思ってたら、鼻血を出して倒れたムッツリーニを連れてきた工藤が保健室までやってきて事情を話してくれたらしい。そんでもって超特急で駆け付けて来てくれたそうだ。

「なるほど。工藤が説明してくれたお陰で・・・・・・工藤よ、本気で助かったぞ・・・・・・」

「ははは・・・・・いやー・・・・・悪かったね。まさかアキっちが間違えて持って行くなんて夢にも思ってなかったさね」

「そ、それは飲んでしまったアタシたちも責任があるので構いませんが・・・・・・」

「それで・・・・・・先生。造が飲んだ薬は一体何なのじゃ・・・・・・？」

おっと、それは俺も気になる。何せあの造があんなにもなっちまうなんて、本当に何の薬だよ？まあ、あの様子じゃ恐らく翔子が飲んだ『性格反転薬』に近いもんだろうが。

「あー・・・・・正直アタシも作ってから後悔したんだが・・・・

・・その、あれはね？『黒性格薬』って名前さね」

「「「『黒性格薬』・・・・・・？」」」

「その・・・・・ある程度の人に対する悪意がデータとして詰め込まれててね。しかも人の情とかの感情を完全に切り落として性格を根本から捻じ曲げちまうもんさね・・・・・造は普段が温厚且つ素直な分、余計に反応しちまったんだろうさ。まあこれも他の薬と同じで２４時間の効果だからいいんだが」

・・・・・それでか。造なら絶対に言わないような、いや思わないような事を言い出したのは。てか、先生は何のためにんな薬を作ったんだ・・・・・・？

「よっと・・・・・ホント悪かったね。とりあえずアタシは造を家に連れて帰るよ。アンタらも気をつけて帰んなー」

「あ、はいです師匠。造様――――ではなく、造にまた学園でと伝えてはくれぬかの」

「ワシもじゃ、造殿――――じゃなくて造くんによろしく言っておいて貰えますか？」

「木下姉に秀吉・・・・・お前らは・・・・・」

完全に造の手先（ペット）になってたな？いや、あれだけの事があったんだ。二、三日経てば治るだろうさ。疲れたし一先ず俺も（無駄に明るい翔子を連れて）帰るかな。

「・・・・・おっと、そういや言い忘れてた事があったんだったねえ」

と、日高先生は伸びている造を担いで部屋を出ようとすると、何か思い出したように振り返り――――

「悪いついでに話すけどね・・・・・あの薬、全てに同じ副作用があるよ？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・る？」」」

「薬の効果が切れてからわかると思うかんね。まあ、2週間で元に戻るから安心しときなー」

「ちょ、ちょっと待て！？先生、一体どんな副作用がっ！？」

「んー・・・・・別に身体に悪いもんが出るわけじゃないから安心してくれ。んじゃなー」

・・・・・ふ、副作用だと！？一体何の！？俺らに更なる不安を残して、日高先生はそのまま出て行ったが――――

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」

やっぱ・・・・・安易に薬なんざ飲むもんじゃねえな！？後悔先に立たず、覆水盆に返らない。飲んじまった薬は吐き出せねえし・・・・・今日の教訓はこれか・・・・・

☆

造Ｓｉｄｅ

その後気が付いたらベットの上で、しかも丸三日経っていました。
と言いますか薬を飲んだ後の事は・・・・・全然覚えていません。
何があったんでしょうね?何故かわかりませんが、起きたら酷い罪悪感と後悔で胸が物凄く痛かった事だけは伝えておきます。ついでに・・・・・・

「造様――――じゃなくて、造くん。その・・・・・・アタシになら思う存分命令してもいいのよ?」
「造殿――――ではなく造よ?ワシにやって欲しい事など何かないかの?遠慮せんでよいのじゃぞ?」
「・・・・・・あ、あのぅ?どうして優姉さんにヒデさんはこんな事になっているんですか?」
「・・・・・・まあ、しばらくコイツらの好きなようにさせときな造。色々と衝撃が大きかったんだろうし」

薬を飲んでから、ちょっぴり優姉さんとヒデさんの考えがわからなくなりました。ゆーさん曰くまたすぐに元に戻るだろうから放っておけって言われてはいますがね・・・・・・

あ、ところで皆さん知っていますか?薬と言うものには必ず副作用があるんです。“副作用のない薬剤など存在しない”と言われているくらいですからね。そんでもってサクヤさんの薬もまた例外ではなく・・・・・・

～文月新聞～　【総合】欄より抜粋

■

『新たなファッション？それともコスプレ！？～ネコ軍団の謎に迫る！～』

進学校故に服装のチェックに持ち物検査など、何かと校則が厳しい我らが文月学園。だがそんな中、最近校則を堂々と破り何と猫耳＆しっぽを付けて学園へ通学している集団がいると言う。今回我々はそのネコ軍団の謎に迫ることに。

尚、その奇抜なファッション（？）をしているのは、以下の９名である事が判明している。

・２－Ａ：霧島翔子　工藤愛子　木下優子
・２－Ｆ：坂本雄二　姫路瑞希　島田美波　吉井明久　木下秀吉
月野造

■

・・・・・今の記事の見出しに載っている事が全てです・・・・・
・薬を飲んだ自分たち９名は、副作用で、その・・・・・・猫耳と猫の尻尾が生えてきました。何ですかこの副作用！？てか、主作用より副作用の方が薬効時間が長いってどういうことですか！？

「「「「「流石に恥ずかしい（ですね）（わよね）（よね）／／／／／／」」」」」

「「「「女子はまだ可愛げがあっていいけど・・・・・男が猫耳＋しっぽって・・・・・・ｏｒｚ」」」」

「・・・・・・・・・・助かった」

その後、副作用が切れる2週間は皆さんの好機の目で見られたり、先生方のペットにされかけたりと散々でした・・・・・皆さんにこれだけは言っておきます。毒は薬に、薬は毒に。安易に薬を飲むのは止めましょう。お医者様の話をよく聞き、用法・用量を守って飲みましょうね。そうでないと――――――

番外編：～みんなと薬と不思議な効果～後編（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

まず最初にＤｒ．クロさん。ネタをありがとうございました♪バタバタで書いたので矛盾点やおかしなとことかが多々あったかもしれませんが（汗）本当にありがとうです♪他にも皆さんからまだまだ沢山の面白いネタ提供いただいているのですが、中々すぐには書けなくてすみません。時期とタイミングを見て出来るだけ書きたいと思いますので、少々お待ち下さい。

さて……正直に言って、造の黒化は……作者自身書いてて鬱になりそうでした（苦笑）やっぱり自分って基本ヘタレなので、中々書けなくてですね……造が高圧的に話すたびに、自分もｏｒｚしてましたよ。

まあそれはともかく、次回からまた野球編に戻る予定です。ただ、ちょっとまだまだ書けていないので、更新がまたまた遅くなるかと思います。気長に待ってて頂けると嬉しいです。

ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

１０１時間目　真剣勝負にも～やっぱり事故は付き物ですね～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。皆さんいつもありがとうです。

今回は久しぶりの本編ですね。どうでもいいですが、何だか最近皆さんに展開を読まれることが定評になってきた気もします（汗）王道過ぎだからでしょうかね？

まあ、いっか。王道好きですし。とにかく行きます１０１時間目。

よろしくです。

１０１時間目　真剣勝負にも～やっぱり事故は付き物ですね～

明久Ｓｉｄｅ

『ストライッ！バッターアウッ！チェンジッ！』

「ふぅ・・・・・・当然だろうけど、予想してたよりしんどいね・・・・・・」

僕たち２－Ｆ対先輩たち３－Ａの召喚野球対決は、今何とか２回の裏を終えた。得点は【１　－　１】１回の表で２アウトながら、何とか雄二と僕の連携で一点はもぎ取ったんだけど・・・・・・

「ゴメン皆・・・・・・一点入れられた」

《いえ、アキさんのせいじゃないですよ。自分も止められませんでしたし》

「そうじゃの・・・・・・まさかあの難しい球を狙ってホームランを打たれるとは思っておらんかったからの。明久が気に病む必要はないじゃろ」

「・・・・・・・・・・あの４番、点数も凄かった」

１回は何とか三者凡退に抑えられたんだけど・・・・・・２回の裏のしょっぱなに４番の先輩（確か金田一って先輩）にホームランを打たれた。確かに点数差も凄かったけど、まさか外しのボール球を打たれるとはね。

「安心しろ明久。これが満塁のピンチだったら不味かったが、寧ろ1点で済んだんだ。その後持ち直して上手く対処出来たんだから序盤としてはいい流れだ」
「そう？・・・・・にしても、やっぱり3年生は手強いよね。まだ2回が終わったばかりなのに、完全に僕の投げるコースが読まれているみたいに打たれてたし」

1回の三者凡退が嘘みたいにガンガン打たれてたからね・・・・・まあ、そこは雄二の的確な指示と造のカバーで何とか満塁になるピンチはあったものの抑えられたけどさ？

《あー・・・・・それに関しては多分アキさんの言う通りもう読まれてますよ？》
「へ？や、やっぱり読まれてるの？」
《あはは・・・・・ほら、あそこで応援している小暮さ――――着物の先輩がアキさんたちのサインと球種を1回である程度読んだみたいで・・・・・さっきから対処法とどう動けばいいかを、3―Aの皆さんに応援席から紙飛行機飛ばして指示してましたもん》
「う、嘘ぉ！？それってたった1回の攻撃でわかるものなの！？」
「マジかよ・・・・・ちぃ、やっぱりあの先輩は油断ならねえな」

いや、油断してなくても流石に凄すぎじゃ・・・・・？てか、何で野球に参加していない先輩にここまで苦しませられるのだろうか・・・・・？戦友たちは色気にやられて使い物にならないし、造の言う通りあの先輩ってある意味最強なんじゃ？

「まあ、次からは姫路と造のバッテリーだ。急には読めんだろうし、こっからが腕の見せ所だな」

《おっと、そでしたね～・・・・・・なら、その前に一点稼いでおきましょうか♪》

そんなことを言いながら、造はとことこネクストバッターボックスに入る。幸いにも3回の科目は現代国語。造ならここで一発決めてくれるだろう。・・・・・何でも造曰く現国なら点は十分且つ風の能力がある以上、例え敬遠されてもそのまま吹き飛ばさせるらしいし。何それズルイ。

『ストライッ！バッターアウッ！』

8番の福村君が三振（って言っても、あの着物先輩と文ちゃんに見惚れていただけっぽいけど）でツーアウト。ここは流れをこっちに持って来て貰う為にも、造に一点入れてもらおう。

『あら♪文さん、月野君の出番のようですよ』
《ホント　だー♪　ツクル　ガンバ！　ガンバ♪》
『ふふふ♪頑張ってくださいね～♪』

応援席で応援している文ちゃんと着物先輩が造の出番により一層力を込めて応援している。・・・・・にしても、あの先輩は自分のクラスは応援しなくていいのかな？いや、一応作戦は指示しているらしいし、応援は自由だろうけどさ？

造もそれに気が付いているみたいに苦笑いをしながらバッターボックスに入る。さてさて、得点差は一体・・・・・・

≪Ａクラス　夏川俊平　現代国語　２３６点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　月野造　現代国語　５８２点≫

・・・・・・・・・・・あれ～？おかしいな？あの先輩の点数って低いわけじゃないし、かなりの実力があるはずなんだけど・・・・・点数差２倍以上って笑ってしまうよね？

「・・・・・改めて思うけど、造が味方で良かったよね」
「・・・・・だな。もし造が何も問題なく３年生として俺らと拳を交える事があったと思うと・・・・・」
「・・・・・もう手が付けられんかったじゃろうな。英語以外は」
「・・・・・・・・・・圧倒的戦力」

正直言って僕がもし造と戦う事があったら、間違いなく撤退をせざるを得ないだろうね。この様子じゃ向こうの先輩たちも戦意を・・・・・あれ？

≪よろしくです、ツネ・ナツ♪≫
『月野か・・・・・ふむ。お前の事だ、敬遠してもそのまま打ってくるだろうな？』
『ここは勝負だな。速球且つ重い球なら、その点でもそう易々とは打てないだろ？』
≪たはは・・・・・読まれてますか？ちゃんと目で追えないと打てませんからね～≫

・・・・・凄い。どうやら先輩たちは冷静に造を抑えようとして

いるみたいだ。敬遠を打ってくるってところも読んでいるみたいだし。

造も先輩たちも真剣そうな顔で・・・・・・まずは第一球――――

バシィ！

『――――ス、ストライッ！』

・・・・・・・・・・は、速い！？なんて速球を・・・・・・流石の造も追いつけなかったようだ。今まで投げていた球に比べても、最高速度みたいだね。

続く二球目。先輩の召喚獣は大きく振りかぶり渾身の力で投げ込む。これは・・・・・・

バシィ！

『ボールッ！』

さっきと同じく目に負えないほどの速球で投げてきた。まあ、これはボールだからいいんだけど。

「・・・・・・どうやら向こうさんの狙いは、造に目でボールを追

えないようにすることだな」
「???どう言うこと雄二？」
「まあ、簡単なことだ。さっき先輩二人が言っていたように造のあの点数且つ、能力が付加されたバットならどこ投げても、それが敬遠球でさえ打たれちまうだろ？だったら造本人が目で追えないボールを投げるしかねえ。この際コントロールや力配分は無視してやがるな。・・・・・・見てみろ」
と、雄二がキャッチャー（確か常村先輩）を指差す。どれどれ？

『ボールッ！』

≪Ａクラス　常村勇作　現国　２２５点　→Ａクラス　常村勇作　現国　２０３点≫

「あれ？捕り損なってもいないのに・・・・・・点が減った？」
「あれだけの剛速球且つ、点数もそれなりにあるんだ。そりゃ持ち点も減るだろうさ」
「む？じゃがそれならワシらにとっては有利になるのではないか？」
「そうでもないさ。戦死にだけはならんようにしているみたいだからな。多分だが向こうさんの考えとしては『三振になれば儲け物。ここは月野を歩かせてでも、打たせないように』って感じだろう」
「・・・・・・・・・・・・あの点数差なら、それが一番正しい」

あっ！そうか。下手に投げて一点を取られるより、全力で投げて打たせないようにした方がいいってことだね。それがフォアボールになっても、少なくとも次でアウトにすれば良いわけだし。それでい

て敬遠球を投げれば打たれるってことも想定済みか。むむむ・・・・・中々力技なようで考えてあるね。

『ボールッ！』

気がつけば1ストライク3ボール。出来れば単発でも打って一点を貰いたいけど、ここは造は歩くしかないのかな?そんなことを考えていると、先輩の召喚獣が力強く5球目を・・・・・・

『あっ・・・・・・・!?』

ゴスッ！

『あ・・・・・・デ、デッドボール！一塁へ』

《痛っ～～～～～～～！にゅおぉおおおおお・・・・・・・！》

『わ、ワリィ月野!?力みすぎた!?』

『お、おい・・・・・・大丈夫か?メチャクチャ良い音したんだが?』

《ぷ、プロ野球選手って・・・・・・大変な職業なんですね・・・・・・おおぅ、地味に効きました・・・・・・》

『月野君!・・・・・・かなり痛そうですね。平気でしょうか?』

《！　ツクル!?　大丈夫!?》

・・・・・造の左手にジャストミートさせた。あー・・・・・・・
アレは痛い・・・・・・僕と造にはフィードバックがあるからね。
おまけにさっき雄二が言った通り、先輩は全力投球しているからそ
の威力は半端ないだろうし。

≪Ｆクラス　月野造　現国　５８２点　↓Ｆクラス　月野造　現国
４２５点≫

流石に２００点越えしている召喚獣が放つボールをノーガードで受
けただけあって、１５０点以上点が削られていた。僕や造の場合召
喚獣の点数が体力に直結するから、あれはキツイね。

「って言うか・・・・・・半分は僕らのせいでもあるけど、造って
結構散々な目に遭ってるよね？」
「ああ・・・・・生まれながらのトラブル吸引機っぽいしな。後
でなんか奢ってやるかな？」
「それより治療の方が先じゃろな・・・・・・この場合は疲労の方
か？」
「アキもそうだけど・・・・・・フィードバックって大変なのね」
「そうですね・・・・・・月野君大丈夫でしょうか？」
「・・・・・・・・・・何か甘いものでも用意しておこう」

皆の心配をよそに、蹲っていた造がようやく起き出す。まだ多少痛
そうだけどもう良いのかな・・・・・・？

≪痛ぅ・・・・・・も、もう大丈夫です。気にしないでください。

一墨行きますね？》
『すまんな・・・・・そういや月野にはフィードバックがあるんだったな』
《いえいえ。こればかりは事故ですし♪別にどうってことないので平気ですよ》

まあそれでも戦死したわけじゃないし、問題は無さそうなので造は笑顔で（痛みで顔がちょっと引きつってたけど）一墨へ。造はホントに頑張ってるよね・・・・・造が墨に出てくれたんだ。僕らもここは一点でも入れないとね・・・・・！

『ああ・・・・・良かったです。月野君平気みたいですね、文さん』
《・・・　・・・　・・・　うん》
『あら？文さんどうしたのですか？一体どちらに・・・・・？』
《・・・　・・・　チョット　公平に　設定　し直してくる　ねー》
『？？？何の設定ですか？』
《アオイは　文の　分も　応援　してて　ねー！　文　すぐに　戻る　からー♪》

☆

造Ｓｉｄｅ

『スリーアウッ！チェンジッ！』

うーん・・・・・塁に出たは良いものの、結局点を入れられませんでしたね。打順が戻って一番の島田さんが粘ってくれてフォアボールで出てくれたのですが・・・・・須川くんがその、ちょっと気を取られてスリーアウト。中々チャンスをものに出来ませんね。

「造、お前デッドボールで痛めた手は大丈夫なのか？」

《あ、はいです。まあ、普通に野球やっているのと同じようなものですし、平気ですよ。・・・・・それと点数もこの回が現代国語なだけに、まだまだ余裕があります。ですからそろそろオッケーです♪》

そう・・・・・そろそろ作戦が開始出来そうです♪ゆーさんもそれをわかってか、ニッと笑い・・・・・

「そりゃ何よりだ。うっし！んじゃそろそろ作戦通り姫路がピッチャーで造がキャッチャーで行くぞ！こっから先は3年に一点もやらん！姫路と造だけに任せるんじゃなく、お前らもちゃんと死ぬ気で守れっ！いいなっ！」

『『『応っ！』』』

「返事だけじゃなくて本気でやれよ？・・・・・特に須川、君島、福村！お前らさっきみたいなチャンスをむざむざ潰すようなバカやったら・・・・・全力でぶちのめすからそのつもりでやれっ！いいなっ！」

「「「俺らが何をしたっ!?」」」

い、いやー・・・・・まあ、小暮さんの策に引っかかったりとかでしょうかね?まあ、小暮さんが凄いのと、須川くんたちも(別の意味で)凄いのが原因ですから仕方のないこと・・・・・ですかね?

「お前ら自覚ねえのかよ!?と、とにかく真面目にやれ!以上だっ!・・・・・姫路、造。このバカ共が迷惑かけるかもしれんがとにかく頼んだ」

《了解ですっ!頑張りましょうね姫路さん♪》

「は、はいっ!ががが、頑張りますっ!?」

あらら・・・・・姫路さん随分緊張しているようですね。大丈夫かな?

《姫路さん大丈夫ですよ♪リラックスしてください》

「そうだぞ姫路。俺らは出来る限りフォローする。何なら最初のバッターは歩かせていい」

「は、はいっ!」

「(こりゃ重症か?ふむ・・・・・だったら)おい姫路。明久たちのとこに行ってちょいと話して来い」

「はいっ!・・・・・はい?どうして明久君と美波ちゃんのところにですか?」

《(ああ、なるほど・・・・・)ふふっ♪アキさんたちなら良いアドバイスをくれると思いますよ?行ってみてはどうでしょうか?》

「あ!そ、そうですよね!ちょっと行ってきましゅ!」

そう言って姫路さんはアキさんたちのところに向かいます。まあ、アキさんたちなら姫路さんを落ち着かせられるでしょうし、何より姫路さんのやる気ＵＰに繋がるでしょうし♪あんな具合に・・・・・・

『・・・・・大丈夫だって♪僕らがちゃんとフォローするよ』

『そうね。だから瑞希は思いっきりやってきなさい。ここで決めたらカッコいいわよ♪』

『カッコいい・・・・・・♪はいっ！頑張りますね！』

『うんうん♪その意気その意気！よし・・・・・・美波、瑞希。手挙げて』

『???手を・・・・・・ですか？』

『あ、そう言うことね？ほら、瑞希手を挙げなさい♪』

『はい。・・・・・・こうですか？』

パシン！×３

『え？・・・・・・あ、ああ！ハイタッチですね！』

『そゆこと。瑞希頑張ってね！』

『背中は任せなさいな♪』

『はいっ！姫路瑞希、頑張りますっ！』

・・・・・・うんうん♪良かったです。姫路さんもこれなら行けそうですね～

「やれやれ・・・・・アイツらはホントに似た者同士なんだな。んじゃ造、後は任せた」
《はいです。その代わり攻撃はゆーさんたちに任せてますからね？》
「フッ・・・・・愚問だな」

そう言ってゆーさんが守備位置へ向かって行きました。――――
さて、ここからがホントの勝負ですよ♪覚悟しててくださいね！３－Ａの皆さん♪

《・・・　・・・　・・・　ふふ♪　ホント　覚悟　してて　ねー♪》
『あら文さんお帰りなさい。一体どちらへ向かわれていたのですか？』
《ふふふ♪　内緒　だよー♪　でも　すぐに　わかる　かもー♪》
『あらあら♪それは楽しみですね』
《うん！　文もー♪　ねえ　アオイ？》
『はい？どうかなさいました？』
《やっぱり　こう言う　試合って　公平に　しなきゃ　いけないよねー！》
『・・・・・？』

１０１時間目　真剣勝負にも～やっぱり事故は付き物ですね～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

何だか前書きでも話しましたが、絶対皆さんに次回どうなるか読まれていますよね（苦笑）もう展開バレバレでしょうが、こうでもしないと３年生たち攻略（？）は難しいんですよ。何せ彼ら良い人になってますし……

何度も書いてますが、最近更新のペースが落ちて来ててすみません。リアルで色々やらないといけない事とか（勉強とか勉強とか病院とか勉強とか）あるのと、今回の野球編が作者にとってわからないところとかたくさんあって中々書けなくて。

とりあえず、ゆっくり待ってて貰えると嬉しいです。これからもどうかよろしくお願いします。読んでいただき本当にありがとうございました。

１０２時間目　殺戮とナツと姫路さん～リアルＤＥＡＤボール～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

さて……皆さんにはすでに今回の結末的なものは大体予想済みでしょうが（と言いますか読まれまくり？）２－Ｆ対３－Ａの試合の決着です。さてさて……どうなる事やら？

とりあえず今日も元気に１０２時間目、行きましょか！

１０２時間目　殺戮とナツと姫路さん～リアルＤＥＡＤボール～

造Ｓｉｄｅ

《しっかり！どうかしっかり気を保って下さいっ！》
「・・・・・いいんだ、月野・・・・・もう、いいんだ」
《よくありません！大丈夫ですっ！だから、そんなこと言わないでっ！》
「・・・・・はは・・・・・もう眠いぜ・・・・・ちょっと、寝るな？」
《だ、だめえええええええええええええええええ！？》

倒れこむ自分の旧友――夏川俊平ことナツ。皆さんも心配そうにナツの側に駆け込み見つめています。意識は朦朧としており、もう正直見てられないほどです。ですが、それでもまるで消えゆく蝋燭の火が最後の光を輝かせるかの如く満足そうに輝いています。

「ワリィ・・・・・後は、俺の言った通りに・・・・・（ガクッ）」
《ナツっ！？・・・・・くっ！？どうして・・・・・どうしてこんなことにっ》

～この惨劇の数十分前～

只今三回裏、３－Ａの攻撃からスタートです。ゆーさんの作戦通り、ここからは姫路さんピッチャーの自分キャッチャーでの守備となっています。あ、ちなみに自分らが抜けたことでちょっと守備位置が変更していますね。自分がいたセンターは召喚獣の扱いが上手いアキさん。姫路さんがいたライトは点数が姫路さん・自分に次いで高いゆーさんが守っている感じです。

《それでは姫路さん。まずは慣れる為にも軽く放る程度に投げてみてくださいね。この際一人目は歩かせ――じゃなくて、塁に出しても構いませんから》

「え？でもそれじゃ点が取られちゃうんじゃないですか？」

《大丈夫ですよ。姫路さんの点数ならそう易々とは打てないでしょうし、姫路さんはとりあえずミットに向かって投げられるように召喚獣の扱いに馴れることだけ考えてください。二人目からが本当の勝負です》

・・・・・とりあえず一人目はフルカウント使って、姫路さんの制球力を上げてから勝負に移行するつもりです。それに上手くいけばダブルプレーが狙えそうですし。

「わかりました！頑張りますね」

《ええ、頑張りましょう♪姫路さんはアキさんたちに良いとこ見せないとですね～♪》

「つ、月野君！？からかわないでくださいよ！？」

《ふふっ♪ガンバですよ～》

そう言って、姫路さんにボールを渡してキャッチャーボックスへ向かいます。さてさて・・・・・ゆーさん程上手いリードは出来な

いかもですが、自分も頑張ってみますか♪

「お？今度は月野がキャッチャーか。相変わらず色々と策を考えるのが好きな奴らだな」

キャッチャーボックスに入ると、二番バッターのツネが（と言ってもツネの召喚獣がですが）バットを構えてそう言ってきます。あ、そうそうちなみにツネと姫路さんの得点差は・・・・・・

≪Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　４１３点≫

ＶＳ

≪Ａクラス　常村勇作　現代国語　１９８点≫

・・・・・大体こんな感じです。流石に姫路さんは凄いですね。自分は成績に斑がありますが、姫路さんの場合はどの教科も平均４００点と驚きの成績です。ツネも勿論成績はトップクラスですが、先ほど消費した事もあって今は点数差２倍です。戦力は十分ですし、後はどれだけ上手くそれを扱えるかにかかっていますね。

≪いえいえ♪・・・・・それ言うならそっちの小暮さんもでしょ？１回で大体の自分らの動きを読んで指示してたみたいですし？≫

「・・・・・否定は出来んな。あの坂本だっけか？アイツと小暮の両方を敵に回すことは絶対したくねえよな」

≪あはは♪それは同感ですよ・・・・・では、そろそろやりましょうか≫

こちらもミットを構えて、姫路さんにコースを指示します。正直姫路さんをツネから始まる上位打線から出すのは流石に冒険すぎだとは思いますが、状況的に姫路さんくらいしか抑えられそうにないですからね。頑張ってもらいましょう。まずは・・・・・・

《真ん中　軽く放る程度で》

サインを受けて姫路さんが第一球を投げます。まあ、軽くなのでそう大して――――

ズドンッ！

『ストライッ！』

「っ！早っ・・・・・・・！」

《痛っ・・・・・・・！？》

――――大した事ないと油断すると痛い目見るでしょうね・・・・・・・400点越えのパワーは伊達じゃないです。ちゃんと真剣に捕らなきゃマズイですね。とりあえず、気を引き締めつつ次のサインです。

《外側　もう少し力を抜いて》

すると、ちょっと首を傾げつつ姫路さんは投球の姿勢を取り二球目を投げてきます。

ズドンッ！

『ボールッ！』

・・・・・い、一応コースは良いみたいですね。左手が物凄くジンジンしますが・・・・・と言いますか・・・・・姫路さん？これってちょっと力込めているんですよね？力んでいるんですよね？

《同じコース　もうちょっと軽く！》

その後も3球、そして4球5球とストライクとボールでコントロールの調整を行います。狙いが良くなってきているのは良い事なのですが・・・・・

『フォアボールッ！一塁へ！』

三振を狙えたところではありましたが、ここは狙いが逸れてフォアボール。まあ、コントロール調整ってことでしたし、それは構わないんです。構わないんですが・・・・・

≪Ｆクラス　月野造　現国　４２５点　↓Ｆクラス　月野造　現国　３０２点≫

・・・・・まさか１００点分ごっそり減らされるなんて思いませんでしたよ！？き、きっと姫路さん緊張して力が入っているんですよね？これって！じゃなきゃ本気で投げられたら、軽く戦死しちゃうそうなんですが！？

と、そんなことを考えていると・・・・・・

『姫路さん、牽制球投げてみなよ！俺がちゃんと受けとめてあげるから！』

ふみゅ？一塁の須川くんが姫路さんに牽制球を要求してきました。
いきなりどうしたんでしょう？

「？牽制球・・・・・・ですか？」
『そう、ランナーいるでしょ？ランナーに盗塁をされないようにするのが牽制球！』
「えっと・・・・・・つまりボールを一塁に投げたら良いんですか？」

ふむ・・・・・？盗塁を警戒しているってことでしょうか？まあ、確かにノーアウトですし、用心するに越したことはないでしょうが。

『（何で須川急にそんなことを言っているのかしら？急に真剣になったとか？）』
『（いや多分だけど、着物の先輩と文ちゃんにアピールしたいんじゃないの？）』
『（・・・・・アイツ勝つ気、あるのかしらね？）』

『（さあ？まあ、須川は後で雄二にボコって貰おう）』

何かアキさんと島田さんが目と目で会話していた気がしますが、牽制球ですか。まあ、姫路さんが慣れる為にも――――って待った！？姫路さんが投げるってことはっ！？

『さあ、姫路さん！思いっきり投げてくれっ！（そして小暮先輩と文ちゃんに良い所をっ！）』

「はいっ！思いっきりですね！それじゃあ・・・・・・」

《ちょっ！？待って下さ――――》

「やぁ――――っ！」

――――キュボッ！

『『・・・・・・・・・・・・は？』』

≪Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　４１３点≫

ＶＳ

≪Ａクラス　常村勇作　現代国語　２１点≫

≪Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　４１３点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　須川亮　現代国語　ＤＥＡＤ≫

・・・・・・止めるのが遅かったっ・・・・・・姫路さんの投げた

超剛速球は、構えていた須川くんの召喚獣の上半身を吹き飛ばし、更にはベースで待機していたツネの左腕を吹き飛ばして行きました。やっぱり、姫路さんのボールを受け止めるのって至難の業ですね。一塁にいるのが自分やアキさんじゃなくて良かったです。フィードバックでとんでもない事になってしまうでしょうし――――

『『ぎぃやぁあああっ!!身体が!身体が痛ぇえええっ!?』』

・・・・・・・・・・・え?

《タ、タイム!・・・・・・・どうしました二人とも!?》

一先ずタイムを取り、二人の元に駆け寄ります。急に召喚者である二人が倒れるなんて・・・・・・一体?この痛がり方は普通じゃないですよ!?

「な、何だかわからんが・・・・・・急に左腕が・・・・・・」

「上半身が・・・・・・無くなった・・・・・・感じが・・・・・・」

二人は負傷した召喚獣と同じ個所の痛みを訴えていますが・・・・・こ、これってまさか・・・・・・フィードバック!?い、いや、ですがアキさんや自分以外にフィードバックなんて付属されてなんかいないハズでしょう!?

戦死した須川くんをベンチに送り代わりにヒデさんが入り、ツネは代走を頼んだようですが・・・・・・ホントにどうなって・・・・・

・？

《ピンポンパンポーン》

・・・・・・あれ？何か放送が流れ始まりましたね・・・・・・？

『あー・・・・・・突然悪いねぇ。召喚野球に参加している生徒に連絡さね』

この声は学園長！？あ、ひょっとしてこの異常現象についての説明ですかね？

『とある生意気なシステムが・・・・・・そのいらん事をやらかしてね。召喚獣の設定を弄りやがったのさ。現在全員の召喚獣に観察処分者たちの召喚獣と同じく痛みがフィードバックするようになってるさね。とりあえず今全力で戻してはいるが、色々と気をつけな。以上さね』

《ピンポンパンポーン》

・・・・・・・・・・・・なるほど？つまりは――――

《文さんっ！また何かやりましたねっ！？・・・・・・って、あ、あれ？》

文さんを叱ろうと応援席に目をやると、そこのは小暮さんしかいませんでした。逃げましたね!?・・・・・とりあえず、文さんは後で説教ですっ！

『『『・・・・・・・・・・・・』』』

ちなみに皆さんはあまりの唐突さに唖然としています。そしてツネと須川くんの末路（？）を自分の未来に重ねたのか・・・・・全員震えだしています。

『あー・・・・・と、とりあえず試合を再開しましょうか？』

審判の先生に促されて、恐る恐る皆さん戻りましたが・・・・・これじゃまともに試合なんて出来そうにないですよ？全員あの惨劇に脅えているみたいですし。

「・・・・・月野、これ試合になると思うか？」

と、3番のナツが（ちょっぴり恐怖で顔が引きつっていますが）自分に聞いてきました。

《えっと・・・・・試合と言うより死合になりそうですよね》

「だよな・・・・・流石に恐怖を感じざるを得ないしな」

・・・・・何せ敵味方両方を滅することの出来る砲台が、自分ら

の目の前でボールを射出しようとしているんですからね。まあ、自分は先ほどからその恐怖を味わっていたので、気持ちの持ちようは皆さんよりもあるのですが・・・・・・

「うぅ・・・・・失敗しちゃいました。うーん・・・・・・やっぱり思いっきり投げていないからでしょうか？」

！？ば、バカな！？今さっきのですら本気で投げていなかったのですか！？前言撤回します、やっぱり怖いものは怖いです！？こ、ここは様子を見る為にも外側の緩い球で様子見してみましょう。

《そ、外側　力は込めすぎないで》

「では行きますよ！え、えいーっ！」

まずは第一球。可愛らしい掛け声とは裏腹に、自分らの命すら刈りそうなほどの超剛速球は狙い通りミットの中へ――――入らずに、ミットを突き破って遥か後方へ飛んで行きました。あ、あはは♪こりゃ自分の人生ここまでかも♪

『・・・・・えーっと、ボール？』

審判の先生も思わず疑問形を付けてしまっていますね。もうこれって、ストライクとかボールとか関係ない気がしてきましたよ？

「うぅ・・・・・明久君と美波ちゃんに良いとこ見せないと・・・・・あ！だったらここは全力で投げるしか・・・・・・」

ＨＡＨＡＨＡ！全力ですって？それって、自分に対する死刑宣言と見て宜しいのですよね？そんな不穏当な発言をした姫路さんは戻されたボールを握りしめ、・・・・・どう言うことか、目を瞑っています。

「・・・・・・・・・・・・おい、月野？あのピッチャー目を瞑ってねえか？」

《・・・・・・・・・・・・奇遇ですね、自分もそう見えますよ？姫路さん！お願いですからリードとサインは見てくださいっ！？》

「すう、はあ・・・・・すう、はあ・・・・・大丈夫です。私には背中を守ってくれている明久君と美波ちゃんがいますから・・・・・」

《全然聞いてないっ！？あ、アキさん！島田さんっ！ヘルプ！ヘルプです！？》

頼みの綱は姫路さんの想い人たち、この二人です！お願いします！このままじゃ自分もナツも殺られてしまいます！？

『『・・・・・・・・・・・ゴメン造（月野）』』

謝られたっ！？何だか二人の顔に『こうなった瑞希は止められない』って書いてある気がしますよ！？嗚呼・・・・・ど、どうやら姫路さんを止めるのはアキさんたちですら無理みたいです。もう、これは覚悟するしかないのでしょうか・・・・・？

「行きますっ！やあーっ！」

「《せめて目を開けて（開けろ）！？》」

ナツと自分の心からのお願いは届かずに、姫路さんは目を閉じたまま全力でボールを叩きこんできました。・・・・・ってこっち来たっ！？ま、マズイです、避けられそうにないかも・・・・・・

「っ！月野っ！・・・・・ちぃ、間に合えっ！」

《（ドンッ！）えっ！？な、ナツ、一体何を！？》

と、ここでナツがバットを使ってボールと直線上にいた自分を押し出してくれました・・・・・ですが、その結果――――

ズドスッ！　ドサッ！

≪Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　４１３点≫

ＶＳ

≪Ａクラス　夏川俊平　現代国語　ＤＥＡＤ≫

――――ナツがその殺人球をまともに受け、フィードバックで倒れました。ナツの召喚獣は・・・・・敢えてどうなっているとは言いませんが、その、胸から真っ赤な綺麗な花――――例えるなら彼岸花を散らせて消えていきます。

「・・・・・・へへっ・・・・・・無事、か・・・・・・？月野？」
《な、ナツっ！？なんて事を！何で敵である自分を庇ったりなんか・・・・・・！》
「ははっ・・・・・・さっきの・・・・・・デッドボールは、これで・・・・・・チャラにして、くれねえか？」
ま、まさか・・・・・・最初からそのつもりで！？なんてバカなことを・・・・・・っ！皆さんもタイムを取りナツの元へと駆け寄ります。
『夏川っ！おい、しっかりしろっ！』
『お前・・・・・・無茶し過ぎだろっ！？』
『今養護の日高先生を呼ぶっ！それまで意識をしっかり保てっ！』
「・・・・・・いや、大丈夫・・・・・・だ。それよりお前らに、頼みが・・・・・・ある」
息も絶え絶えに、ナツは薄れゆく意識を必死で保ちながら皆さんに何かを伝えようとします。
「俺の・・・・・・我儘だが・・・・・・ここはお前ら・・・・・・棄権するんだ。受験を、控えている・・・・・・し、ここで無茶して、危険な真似・・・・・・する必要は、ねえ、だろ？」
《ナツ、そんな・・・・・・》
「・・・・・・こんな目に遭うのは、俺や常村だけで・・・・・・十分、だ」

そして、物語の冒頭に戻ります。まさか野球の試合が死合に変わるなんて、一体誰が予想出来たでしょう?犠牲になったツネやナツ（と須川くん）が、一体何をしたでしょう!?

《しっかり!どうかしっかり気を保って下さいっ!》
「・・・・・いいんだ、月野・・・・・もう、いいんだ」
《よくありません!大丈夫ですっ!だから、そんなこと言わないでっ!》
「・・・・・はは っ・・・・・もう眠いぜ・・・・・ちょっと、寝るな?」
《だ、だめえええええええええええええええええええ!?》

『『『な、夏川あああああああああああああ!?』』』

「ワリィ・・・・・後は、俺の言った通りに・・・・・（ガクッ）」

倒れながらも必死に仲間を護るナツ。そして犠牲になったツネ。その二人の姿は体育祭の伝説になりました。この二人の、特にナツの学内での地位が更に上がった事は言うまでも無いでしょう。そんでもって・・・・・

「あ、あれ?どうなったんですか?私頑張ってみましたよ!?」
「・・・・・いや、うん・・・・・その、ね?」
「・・・・・瑞希、ちょっと頑張りすぎたわね」

・・・・・こっちの方も伝説が。“体育祭にピンクの髪の悪魔が舞い降りる時、そこは殺戮のフィールドと化す”と言うね。・・・・・

・・まあ、姫路さんが悪いわけではないのですがね？頑張って慣れない野球を取り組もうとしていたわけですし。

『『『・・・・・・夏川の遺志を組みます・・・・・・３－Ａは、棄権します』』』

こうして、２－Ｆ対３－Ａの勝負は２－Ｆの勝ちとなりました。・・・・・ですが、何だか双方が勝敗よりも大事なもの、“命の尊さ”と“フィードバックの恐ろしさ”を学ぶと言う野球と関係ないものを学んだ死合――コホン、試合となりましたがね？

とりあえず今からやるべきことは、ナツたちの治療と３－Ａの皆さんに全力で謝ること、そして何より・・・・・・

《文さんっ！出てきなさいっ！大事なお話がありますっ！》

文さんへの説教タイムですかね・・・・・・ホント野球してたはずなのに、何でこうなったのやら・・・・・・

１０２時間目　殺戮とナツと姫路さん～リアルＤＥＡＤボール～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……もうね、常夏コンビが（特に夏川）良い人過ぎて書いてて泣けてきました。この二人はもっと扱いを良くしていいと思うんだ。常夏コンビからしたら造はある意味恩人で、迷惑かけたって感覚もあっての行動でしたが……

あ、あと須川が犠牲になったのは、ちょっとやんちゃし過ぎたからですかね～？全国の須川ファンの皆さん、扱いがアレになってゴメンなさい。でも作者はこれでも須川は結構好きですよ？面白いですし。

次回は楽しいご飯タイム～……まだ一切書いていませんがね？土日は時間があるから書けますが、平日更新は結構難しいですね。下手したら土日まとめての更新に切り替えるかもしれません。

てなわけで次回の更新はいつになるかわかりませんが、これからもよろしくです！読んでいただきありがとうございました♪

１０３時間目　お昼と説教とお弁当～叱るのも大事なこと～（前書き）

どうも、甘いものは生きる糧な糖分摂取魔です！

うーむ。関係ないですが、今日は一日くしゃみが止まりませんでした。風邪じゃないんですが、この時期はどうもティッシュが手放せません。寒くなってきましたし。

さて、今回はお弁当編（？）ですね。各キャラのお弁当事情や、造の文への説教など書いてたら、２、３話消費することが判明しました（汗）何で野球編より長くなるんでしょうね？

まあいいか。んじゃ今回もよろしくです！１０３時間目スタートっ！

１０３時間目　お昼と説教とお弁当～叱るのも大事なこと～

造Ｓｉｄｅ

あの惨劇の試合が終わり、ようやく昼休みに突入。本来なら楽しいお昼の時間ですが――――

「・・・・・文さん。まずはそこに座りなさい」

《・・・　・・・　ツクル　やっぱり　怒って　るー？》

「・・・・・・とにかく座りなさい。そして、どうしてこんなことをしたか説明しなさい」

まずはきちんと文さんを叱らねばなりません。今回の件は流石の自分も見逃せませんからね。そう言うわけで人気のないところで文さんを呼び出すことにします。まあ、人に聞かれたくない内容ですし、叱っているところを見られたくもないですからね。

《・・・　・・・　だって　ツクルだけ　痛いの　不公平だもん！》

「・・・・・そう来ましたか」

・・・・・大体そんな感じだろうなと、思っていましたよ。どうにも文さんは自分の事を第一に考えてしまうところがありますからね・・・・・・

《だったら　みんな　ツクルの　痛い思い　公平に　わけないと！》
「・・・・・それは公平とは言いませんよ。と言うよりも一方的な押し付けです。それに“公平に”と言っている文さん自体、偏った見方しか出来ていないじゃありませんか。・・・・・ねえ、文さん？文さんはデッドボールを自分が受けたからナツに仕返ししようと思ったんですよね？」
《・・・　・・・　うん》
「・・・・・やっぱりですか。では逆に聞きますが、もし自分がデッドボールをやってしまったらどうですか？同じように文さんは自分に仕返ししますか？」
《しない！　ツクルは　絶対に　わざと　ヒトを　傷つけ　ないもん！》
「・・・・・ではそれと今回の件、一体何が違いますか？ナツも勿論、人を傷つけようとしてデッドボールを出したわけではないですよ？」
・・・・・どうやらまだ文さんには、自分と文さん自身の世界しか見えていない節がありますね。これはあまり良い傾向ではないです。
《・・・　・・・　でも！》
「ナツだって自分に悪意をもっていたわけではないでしょう？最初のデッドボールは明らかに事故でした。ですが・・・・・文さんがやったことは、明確に相手を傷つけようとする悪意がありましたよね？」
《・・・　・・・　文は　ただ　ツクルを　傷つけた　罰を　与えようと！》
「文さんっ！あなたは一体何なのですか！少しシステムが動かせるだけで、神様にでもなったつもりですか！システムはあなたのおも

ちゃ何かじゃないんですよ！罰を与える？その罰とは何ですか？無意味に引っ掻き回すことが罰を与えることになるとでも思っているのですか！？」

正直叱るのは好きではありませんし、あんまり厳しい事言いたくないんですが・・・・・まあ、ここはちゃんと言うべきところですからね。心を鬼にしても文さんに教えることは教えませんとね。文さんにはもっと大きく育って欲しいですから・・・・・それが、自分がここからいなくなっても。

「ちょっと考えればわかるでしょう！どうして自分の痛みを気遣う優しさがあるのでしたら、その優しさを他の方にも向けないのですか！あなたはナツ達が倒れている姿を見て、何とも思わなかったのですか！？そんなわけないはずでしょう！？」

《でも　文は　ツクルが　大事で！》

「ハァ・・・・・あのね、文さん。文さんが自分の事を大切に想ってくれることはとても嬉しいです。ですが文さん、あなたが自分の事を大切に想うことと同じように、ナツやツネたちのことを大切に想ってくれている人だっているんですよ？どうしてその人たちが悲しむかもしれないと考えなかったのですか？」

《・・・　・・・　・・・》

・・・・・まあ、これは自分や学園長にも責任があります。文さんが誕生して今に至るに約一年。彼女はある意味まだまだ赤ん坊のような子です。なまじ知識やシステムを掌握するほどの知能がある分、自分ら以外の他者とのコミュニケーションを取らせていなかったわけですし・・・・・

「今回は流石にやり過ぎです。悪ふざけにしては程があります。文さんは遊び半分でやったわけではないとはわかっていますが、それでもやっちゃいけない事をやってしまった事は文さん自身勿論わかっていますね？」

《・・・　・・・　うん　ゴメン　なさい　ツクル》

「・・・・・違いますよ文さん。ごめんなさいを言う相手は自分ではないでしょう？・・・・・とりあえずナツ達に――――は、文さんが謝ってもどう言うことかわからないでしょうから、後で保健室に行ってお見舞いついでにそれとなく謝りに行きましょう。その後、ちゃんと学園長に謝りに行きますよ？いいですね？」

《・・・　・・・　うん》

・・・・・よしよし、大体こんな感じですかね。自分が言うのはここまでにしておきましょう。甘いと言われるかもしれませんが、これ以上は言わないでおきましょうね。あんまりしつこく叱っても逆効果でしょうし。それに・・・・・ここから先は何が悪かったのかを文さん自身が考え、そして反省しなくてはならないことです。１から１０まで教えるだけでは意味無いでしょうし。

「・・・・・自分が言いたいことは一通り言い終りました。文さん、あなたがやったことはじっくりと反省すべきです。いいですね？」

《反省　する　ちょっと　やり過ぎた》

「そうですね。そこはきちんと反省してください。・・・・・ですが文さん」

・・・・・さてさて、叱った後にはちゃんとフォローもしませんとね。何も文さんはただ暴走していたわけではありませんもの。・・・・・本当はとっても優しい子だってわかっているから――――

《???　ですが　何ー?》
「ですがね?・・・・・それがどんな形であれ、自分を心配してくれた事はとても嬉しいですよ。心配してくれてありがとうね、文さん♪」
《!　ツクル♪　うん　どういたし　ましてー!》
「ふふっ♪ではまずは保健室に言ってナツ達のお見舞いに行きましょう。その後学園長のところに謝りに行きますよ」
《・・・　・・・　ばーちゃん　とこも　行かなきゃ　ダメ?》
「こーら。そこは文さんの自業自得ですよ?そもそも今回学園長に出かける断りを入れてきてなかったでしょうに」
《・・・　・・・　何で　わかった　のー?》
「そりゃわかりますよ。全く・・・・・まあ、ちゃんと謝ったら皆さんのところに戻ってお昼ご飯ですよ」
《あ!　そーだった♪　わかったー!　ゴハン　楽しみー!》
「って、こらこら文さん?まずきちんと謝る事が先ですからね?」

そう言うわけで、とりあえずは二人でナツたちのいる保健室にお見舞いに行く事にしました。それまではお昼はお預けですかね。

・・・・・・・・・・あれ?ちなみに文さんってご飯食べられるんですっけ?

☆

康太Ｓｉｄｅ

午前の壮絶な死闘が終わり、只今休息の為の昼休み。いつもなら明久や雄二たちと一緒になって弁当でも食べるハズなんだが・・・・・・

「え、えっと。はい！こーたくん！お、お弁当どうぞ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・俺にか？」

昼休みが始まる前に、工藤に急に呼び出されたんだが・・・・・・どうやらコイツは弁当を作ってきてくれたらしい。そう言えば夏休み中に、俺は一応コイツの料理の特訓に付き合ってやったんだが『上手になったら、手料理を食べて欲しい』って約束してたな。

「い、一応頑張ってみたんだけど・・・・・・その、さ？食べてくれるかな？」

「・・・・・・・・・・・・食べる。今日は弁当持ってきていなかったから助かる」

「あ、ありがとう、こーたくん♪」

とりあえず気まずくなる前に工藤から弁当を貰う事にする。と言うか、礼を言うのはこっちなのだがな。・・・・・・それにしてもここが他の連中と離れているところで良かった。こんなことバレたらとりあえずＦＦ団が抹殺行動に出るだろう。

それは一旦置いておき、工藤から受け取った弁当のふたを開ける。

「・・・・・・・・・・・・ほう？」
「あ、あはは・・・・・・・・・口に合うかわかんないけど、召し上がれかな？」
中から出てきたものはおにぎりに卵焼き。それから照り焼きハンバーグにきんぴらごぼうなどなど。オーソドックスながら一生懸命作った様子が良くわかる。夏から始めたにしては、中々な出来栄えだな。
「・・・・・・・・・・・・頂く」
「ど、どうぞ・・・・・・・・ちょっと焦げてるかもだけど」
そう言う工藤の顔は明らかに緊張している。気持ちは分かるが夏の間しっかり鍛えてやったし、コイツ自身の努力もあってかなり上達しているハズだ。そう心配する必要はないだろうに。そんなことを思いつつ卵焼きに手を伸ばす。
「・・・・・・・・・・・・甘みもちょうどいい。もう大体作れるようになったようだな。美味いぞ」
「そ、そう？えへへ♪まあ、先生の腕が良かったからね～♪どんどん食べちゃってよ！」
と、言いつつもこっそりガッツポーズする工藤。先ほどの緊張していた顔から、いつものような明るく、本当に嬉しそうな顔に戻っているな。

「・・・・・・・・・・・・遠慮なく頂く。工藤も立って見てるだけじゃなくて食べろ」
「あ、うん。そだね～♪んじゃ、いただきまーす！」

そう言って、工藤も俺の隣で弁当箱を開ける。・・・・・・？これは？見た感じ俺と同じ弁当の中身だろうが・・・・・・何か違和感があるな？少し焦げている？

「え、えっと・・・・・こーたくん？ちょっとこっちはあんまり見ないで欲しいなかな？」

と、工藤の弁当箱をじっと見ていると、工藤が恥ずかしそうに言ってくる。・・・・・なるほど、つまり・・・・・

「・・・・・・・・・・そっちは失敗したものか」
「たはは・・・・・まあそう言うこと。大丈夫、こーたくんの方は綺麗なもの詰めてあるから安心してよ♪」

どうやら見た目から焦げていたり形が崩れているものが工藤の方に、そして工藤の言った通り綺麗に仕上がっているものは俺の方に詰めてあるようだ。全く、コイツはそんなこと気にしていたのか・・・・・よし、ならば。

「・・・・・・・・・・（ヒョイ　パクッ！）」
「って！？ちょ、ちょっと！？何でボクの方も食べるの！？」

隙を見て工藤曰く”失敗した”ものも食べてみることに。ふむふむ、これは・・・・・・

「・・・・・・・・・・・ちょっと焼き時間が長かったな」
「うぅ・・・・・・ダメだってば。だから失敗したって言ったじゃない」

まあ確かに成功した方に比べると、やはり焼き加減がもう一歩だったり調味料の分量がまだまだなようだが・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・だが、美味い。ちゃんと頑張って作ってある」
「・・・・・・もう！／／／／／」

たった1、2週間でここまで出来るようになれれば上出来だろう。実際工藤は教えがいがあったからな。ここまで上達してくれた事はその、少し・・・・・・少し誇らしい。

「こ、こっちだけじゃなくて綺麗な方も食べてよ！上手に出来たとこ食べて貰わないと意味ないしさ！」
「・・・・・・・・・・・・なら工藤もこっちも食べろ。折角上手く出来ているなら、お前も食べないと」
「むむむ・・・・・・こーたくんってやっぱり頑固だー」

そうして工藤と共に交互に二つの弁当を分けて食べる事になった。折角上手く出来たものと失敗したものを分けて詰んだのに、結局両方を食べられた工藤には悪いが、見た目はどうあれ正直どちらもか

なり美味かった事だけは言っておく。

「・・・・・・・・・・・・もう少し修業は必要そうだがな？」

「ぐぅ・・・・・・そこはちょっと悔しいな～？こうなったら・・・・・・絶対にこーたくんがあっと驚くくらい料理上手になってやるからね！」

・・・・・悔しいと言っているわりには、物凄く楽しそうだがな？まあ、そう言う俺も満更ではないか。いつものメンバーで食べるのも良いが、工藤と一緒に食べるのも・・・・・まあ、悪くはないな。

「あっ・・・・・ところで良かったの？こーたくん本当なら吉井君たちとご飯食べる予定だったんじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・まあ、本当ならな」

「あらら・・・・・・・ゴメンね？無理言って付き合って貰ってさ」

「・・・・・・・・・・・・いや、寧ろ助かったかもな」

「？？？助かった？」

「・・・・・・・・・・・ああ。命拾いした。感謝する」

「何それ？こーたくんって時々よくわかんないよね～♪」

わからなくていいぞ・・・・・体育祭のようなイベントがあれば、必ずとあるクラスメイトの殺人料理が姿を現すという事実はな。悪いな・・・・・明久に島田よ。一応祈っておくが、生き残れよ？

１０３時間目　お昼と説教とお弁当～叱るのも大事なこと～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

最初の造の文への説教は、少し甘いと思われる方もいらっしゃるでしょうが、作者的にはこれくらいでちょうどいいかなって思っています。造は言いたいことはきちんと伝えましたし、後は文が造の言葉を受けて反省しなければいけないことでしょうし。

それにしても……造がなんだか文の親っぽいですが、まあある意味造がいたから文は誕生したので間違っていないのかな？造がお母さんっぽいって思っても仕方ないことです。

造「ん？……お母さん？」

そして……ムッツリーニですが……どうしてでしょう？めっちゃ付き合い始めたカップルよろしく、何だか甘い雰囲気何ですが（汗）ひょっとして、誰よりもラブコメしてるかも。ムッツリーニ＆愛子は。とりあえず爆発しろ。

さて次回は明久のお弁当編ですね。……さてさてどうなることやら？読んでいただきありがとうございました！ではまた次回です♪

１０４時間目　普通のおにぎりが～こんなにも美味しいなんて～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。カレーは甘口。それ以外は認めない。と言うより辛くて食べられない（泣）

今回は明久視点のお弁当編ですかね。姫路さんがいる限り、楽しいお弁当タイムも戦場と化すのは最早逃れられない宿命なのでしょうかね～

では早速行きましょか！１０４時間目よろしくです！

１０４時間目　普通のおにぎりが～こんなにも美味しいなんて～

明久Ｓｉｄｅ

「それにしても、ババァ長もしっかりして欲しいよね。まーたシステムの異常とかさ」

「そうね・・・・・須川はともかく先輩たち、大丈夫かしら？」

「あの、明久君、美波ちゃん・・・・・・」

２－Ｆ対３－Ａの試合が僕らの勝利と言う形で終わり、折角の楽しいお昼の時間が来ているんだけども、僕らは爽快感を得られずにいた。何せあんな事があったんだ。素直に決勝進出を喜ぶ前にあの先輩達に哀悼の意を捧げよう。にしてもあのババァ、やっぱりシステムに踊らされている気がする。

「一応学園長の話だと、今は正常に作動しているそうよ。これで安心よね、瑞希♪」

「え、ええ。安心ですね。・・・・・・あ、それでですね二人とも・・・・・・」

「あ、そう言えば決勝って先生たちと戦うんだよね？雄二のヤツどんな策を練るんだろうね？ねえ、瑞希？」

「そ、そうですね。私は策を練るなんてこと、向いていないので何とも言えませんね。そ、それより二人とも・・・・・・」

そう、次はいよいよ教師との戦いだ。いつもの恨みを晴らし（瑞希＆美波の写っている）大事な写真と戦友（エロ本）たちを取り戻すチャンス。

必ずや勝って見せるっ！

「それじゃあ次が一番重要な戦いになるし、早めに雄二に作戦でも聞いて――――」
「あのっ！二人ともっ！」
「「・・・・・・・・・・・・・・はい」」
必死に現実から目を背けていたけど、やっぱり逃げ切れないらしい。
僕と美波は今にも泣き出さんばかりの表情で、瑞希に返事をした。

「実は私、お弁当を作ってきたんですけど・・・・・・」
瑞希は大きな包みを差し出す。うん、最初からわかっていたよ？瑞希はこう言う大事なイベントには、必ずお手製の料理を持ってくることくらい・・・・・・ね？ただ認めてくなかっただけで。

「あ、あはは・・・・・瑞希は本当に尽くすタイプよね（アキ、どうしましょう？もう逃げられなさそうよ？）」
「そ、そうだね！瑞希はいいお嫁さんになるよ！（マズイね。いつもの生贄共（ゆうじたち）がいないし）」
「も、もう♪美波ちゃんも明久君も誉めすぎですよ♪・・・・・・はい、どうぞです♪」

瑞希と話をしつつ、美波とアイコンタクトで会話する。ホントに参った・・・・・造や秀吉はいなくて良かったんだけど・・・・・・雄二とムッツリーニはどこ行った！？さては先に察知して逃げやがったな！？

僕と美波が二人で死の恐怖を恐れている中、瑞希は持っていた包みをほどき中身を取り出す。・・・・・・って、あれ？

「あら？ねえ瑞希、なんだか今日は量が少ないんじゃない？」
「あ、それ僕も思った。いつもはこの倍はあったよね？」

そう、そこにあるのは普通の重箱一つと、二回りくらい小さな箱が一つ。ちなみに中身は俵の形に握られた、たくさんの小さなおにぎりみたいだ。

「あ、はい。実は、また失敗しちゃったんです。本当はこれの他にちゃんとおかずを作っていたんですけどね・・・・・・」

そう苦笑いをしつつ、瑞希は僕らにそのおにぎりを差し出し――――

「さあ、二人とも。召し上がれ♪」

最高の笑顔で、最悪の兵器を渡そうとしてきた。・・・・・・本気でどうしよう・・・・・・正直まだ死にたくないけど、仕方ないね。こうなったら美波だけでも逃がすか・・・・・・

「あ、あのさ！僕飲み物買うの忘れちゃっててね！？美波悪いけど買ってきてくれない？」
「！？（ちょっ！？ちょっとアキ！？まさかウチを逃がす気じゃ・・・・・・！？）」

「ダメかな美波？（美波・・・・・・日高先生ついでに呼んでて貰うと嬉しいな？）」

まあ、とりあえず美波だけでもこの場を逃げて貰うとしよう。安心してよ？何とかなるって・・・・・・多分。そう、美波にアイコンタクトを送ろうとすると・・・・・・

バシッ！

「痛っ！？だ、誰だっ！？・・・・・・って、え？」

「ちょっと！何、お姉様を使い走りのように扱おうとしているのですか！」

急に後頭部を叩かれる感触が。・・・・・・って、この声は！

「「「美春（清水さん）！？」」」

何故か再び清水さんが仁王立ちで僕の背後にいた。にしてもＦＦＦ団に見つからないように、２－Ｆの待機場所から離れていたと言うのに清水さんは何でここがわかったんだろ？・・・・・・まあ、美波いるところに清水さん在りだし、その辺は考えるだけ無駄かな？

「全く・・・・・これだから男は気が利かないのです！ましてはお姉様をそのように扱うなど言語道断っ！・・・・・・その点美春はちゃんと気が利けますわ♪さあ、お姉様！こちらの紅茶をどうぞです♪」

と、持っていた水筒に紅茶を注ぎ美波に渡す清水さん。その迅速な行動は賞賛に値するね。ただ気が利くって言っているケド、今回は完全に裏目に出ている事を彼女は知らないだろうね・・・・・・困った、これじゃ美波を逃がせないや・・・・・・

「あ、清水さん。清水さんもどうですか？」
「あら？宜しいのですか？では、お言葉に甘えて」

「「あ　ぢ！？」」

と、僕らが止める間もなく、清水さんがおにぎりを一つ口に放り込んだ。し、しまった！？こんなことなら大人しく僕が食べておけばよかった！？

・・・・・・・・・・・・って、あり？

「ふむ。普通のおにぎりですが、美味しいですわね。感謝しますわ、姫路さん」
「そうですか。良かったですっ」

「「・・・・・・・・・・・・？？？」」

どう言うこと？清水さん、食べても無事って・・・・・・ホントに何ともないの？

「え、えっと・・・・・・瑞希？このおにぎり、どうやって作った

の？」

流石に清水さんが人外レベルに強い子だって言っても、お腹の中まで異常なレベルってことは無いだろうから、おにぎりに秘密があるんだよね？一体どんな秘密が・・・・・・？

「？？？特に何もしてないですよ？炊いてあったご飯に、お塩を振ってから俵型に握って、海苔を巻いただけです。まあ本当ならおにぎりが普通な分、おかずを特別製にしていたんですけど、ね」

・・・・・・・・・・・と、言う事は。

「「いただきます、瑞希♪」」

このおにぎりは、瑞希が一生懸命作ってくれた（初めてまともに食べられる）ご馳走だってことだ！そうとわかれば、何も遠慮することはないっ！

「「お、美味しい・・・・・・！」」

どうしてだろう。本当に塩と海苔だけの普通のおにぎりなのに、こんなにも美味しく感じられるなんて！僕は今本気で感動しているよ・・・・・・！

「ドンドン食べちゃって下さいね♪・・・・・・おにぎりだけじゃ物足りないかもしれませんが」

「あ、そうだったわ。瑞希、おかずが足らないって言ってたわよね？だったら良かったら皆でウチの作ったお弁当食べない？」

と、おにぎりを幸せそうに食べていた美波が自分のバスケットを開ける。中身は色とりどりのサンドイッチのようだ。余っているスペースにはから揚げ、ウインナー、卵焼きなどどれも美味しそうなものがたくさんあって凄い！

「美波も凄いね♪これ凄く美味しそうだよ！」

「ホントですね♪私ももっと頑張らないと！」

「素晴らしいですわ！お姉様っ♪料理も完璧とは！・・・・・全く、そこの男に食べさせるのは勿体ないですわね。吉井！とりあえず貴方はお姉様に全力で感謝しなさいな！」

と、清水さんが言ってくるけど、正直本当に感謝しなきゃいけないくらいご馳走だ。ホント僕は幸せ者だなぁ～

「お姉様、こちらの紅茶はご自由にお飲み下さいませ。それだは美春はここで失礼し――――」

「は？何言ってんのよ美春？アンタ食べないの？」

「・・・・・・・・・・・・はい？」

と、水筒を置いて立ち去ろうとする清水さんを美波が止める。止められた清水さんは、心底不思議そうな顔で美波を見ているね。

「え、えっと・・・・・・お姉様？美春も一緒に食べても宜しいのですか？」

「はぁ？当たり前でしょ？別に誰も食べちゃいけないって言ってないわよ？ねえ、アキ、瑞希？」
「そだね。清水さんさえ良ければ、一緒に食べようよ」
「そうですよ！三人じゃ食べきれそうにないですし、清水さんもいかがでしょう？」

まあ、形はどうあれ清水さんは美波の事大切に想っているし、本音を言えばきっと美波と一緒にお昼を食べたいに決まっているだろうからね。

「そ、それではっ！？い、頂いてもよよよ宜しいのですか！？」
「良いって言ってるでしょ？ホラ、アンタも食べなさいな」

――――そう言うわけで、四人でお弁当を食べる事に。うんうん♪やっぱり皆で食べるとまた、美味しく感じるよね。今日は本当に珍しいメンバーでだけど。

「唐揚げをおかずにおにぎり食べられるなんて・・・・・！本当に今日は贅沢だね！塩だけのお昼に比べたらもう天と地の差だよ！」
「・・・・・あ、貴方は一体どんな生活を送っているのですの！？」
「ダメよアキ。そんな食生活をまだ続けるようだったら、玲さんに報告しちゃうわよ？」
「そうですね♪明久君はお姉さんの玲さんには頭が上がらないですもんね」
「ほう？それは良い事を聞きましたわ。この男は姉に弱い、っと♪」
「ちょっと！？一体何をメモってんの！？止めて！？」

雑談をしつつ楽しくお昼を過ごすことに。ある意味凄いなー・・・・・・清水さんとまともに会話する日が来るとは思わなかったよ。そんなことを考えつつ、飲み物を取ろうとすると――――

「・・・・・あれ？もう無くなっちゃった？」
「あらら。まあ、四人で飲んでたからね」

――――すでに水筒の紅茶は空になっていた。ちょっと飲みすぎたかな？・・・・・・んじゃ、僕が行くかな？

「ねえ三人とも？好みの飲みものって何かな？」
「へ？・・・・・・えっと、ウチはレモネードかしら？」
「私は・・・・・・紅茶でしょうか？」

ふむふむ、なるほどね。レモネードに紅茶か。そう言えば良く二人とも飲んでたね。

「そっかそっか。・・・・・清水さんは？」
「・・・・・・何ですの？いきなり」
「いーからいーから。とりあえず言ってみてよ」
「・・・・・・強いて言えばコーヒーです」
「オッケー。んじゃ待ってて。すぐに買ってくるから～」

「「「・・・・・・え？買ってくるって？」」」

「美味しいご馳走と紅茶のお礼！まあ、すぐに戻ってくるよ～」

多分瑞希たちのことだから『そんなの悪い』って言いそうだし、有無を言わさずに飲み物を買いに行くことに。

『明久君ったら・・・・・そんなこと気にしなくてもいいですのに』

『まあ、その辺はアキらしいわね♪』

『・・・・・ふん。まあ、多少はマシってところですか』

まあ、あんなに美味しいお昼のお礼が安いジュースの奢りなんてケチくさいけど、何もしないより良いだろうからね。待たせちゃ悪いし急いで自販機に向かう事にしよう！

・・・・・・・・・まさかこの離れている数分の間に、大変な事になっていようとは夢にも思わなかったけど。

～明久移動中～

「あや？アキさんじゃないですか」

「あ、造と・・・・・文ちゃんだっけ？」

《おー！　アキヒサ　だー♪》

自販機のある購買傍の近くまで行くと、造とその妹の文ちゃんが二

人仲良く歩いていた。そう言えばこの二人ってどうしてたんだろ?

「やっほ、二人とも。ねえ造たちってもうご飯食べたの?てか今までどこ行ってたのさ?」

「んー、ちょっと文さんと一緒に行くところがありまして。あ、ちなみにご飯はまだですよ?ヒデさんや優姉さんたちと食べる予定です」

《あと　アオイとも　一緒に　ご飯　食べるー!》

ああ、秀吉がいなかったのはそう言うことか。ってことはムッツリーニも雄二もそれぞれが工藤さんと霧島さんと一緒にご飯食べているんだろうな。まあ、今回は瑞希の殺人レシピは出演しないだろうし、寧ろムッツリーニや雄二はいない方が助かるね。瑞希や美波のご馳走を勝手に食べられることを心配しなくていいし。

「そう言うアキさんはどうしたんですか?そんなに急いで」

「あ、うん。ちょっと瑞希たちに飲み物奢ろうかと思ってさ。お弁当のお礼にね」

「!?姫路さんのお弁当・・・・・ですと!?あ、アキさん!?まさか一人で命を賭けて食する気ですか!?バカな考えは止めてくださいっ!それでしたら自分も行きましょうか!?」

と、造は青い顔でそんなことを言ってくる。あはは・・・・造は優しいな~。逃げた雄二やムッツリーニはとりあえずこの子の爪の垢を煎じて飲めばいいのに。と言うか、とりあえずあのバカ二人は後で〆ることにしよう。

「あはは。いやいや大丈夫だよ。今回は何も特別なものは入れていない普通のおにぎりだってさ」
「・・・・・ほ、本当ですか？良かったです。てか、姫路さんも普通の料理作れたんですね・・・・・・」
「・・・・・まあ、驚きだよね」
その分今日のお昼は本当にご馳走だけどね。・・・・・やっぱり普通の料理が一番美味しいってことかな？

《ツクル　早く　ゴハン　食べよー？》
「おっと、そうでした。ではここで失礼しますね。アキさんは姫路さん&島田さんとごゆっくり♪」
「うん。それじゃーね。・・・・・おっと、僕も早く行かないとね」
とりあえず二人と分かれて、再び小走りで購買へと向かうことに。
三人を待たせるのは悪いし、っと♪

～明久帰還中～

そして飲み物を買ってから、三人のところに戻ると・・・・・

「美春っ！？しっかりなさい！意識を保つのよ！」
「・・・・・嗚呼・・・・・美春は今、天国に・・・・・・いるのです、ね。天使様が見えます・・・・・わ」
「天国！？ダメよっ！そ、そっち逝っちゃダメだって！？」

「お姉様の・・・・・・腕の中で・・・・・・逝けるなんて、本望・・・・・我が人生、悔い無し（ガクッ）」
「美春ううううううううううううううううう！？」
清水さんが美波の腕の中で、今まさに天に召されようとしていた。
何だかわからないけどこれはマズイ。僕の生存本能がさっきからエマージェンシーコールを起こしている。

「あ、明久君お帰りなさい♪」
「た、ただいま・・・・・・はい紅茶どうぞ」
「ありがとうございます！すみません、わざわざ」
一先ず瑞希に買ってきた紅茶を渡し、美波と清水さんの元にそれとなく駆け寄る。

「はい、美波。レモネードだよ（・・・・・・何があったの美波？清水さんはどうしてこうなったの？）」
「ありがとね、アキ（わかんない。見た感じ、美春はただおにぎりを食べただけだと思うけど）」
・・・・・おにぎり？で、でも確かこのおにぎりは普通の味なハズじゃ・・・・・？いや、だが清水さんがこうなっている以上、何か仕込んである可能性が高くなった。何だ？一体何がどうなっている？

「み、瑞希？ところでこのおにぎりって――何か特別な仕込みでもしたのかな？」

「え？・・・・・えっと、あまり時間がなくて、ほとんど何もできなかったんですけど・・・・・・」
「ですけど・・・・・・？」
「二つくらい、特別な具を入れておいたんです。残っていた材料で。本当は全部に入れるつもりだったんですけど、中和に失敗してお弁当箱が溶けたせいで二つだけしか――」
・・・・・原因発覚。嗚呼、清水さんには悪い事をしてしまったね・・・・・・と言うか、今中和って言ったよね？・・・・・・僕の耳がおかしくなったからだと思いたいっ！
その後、美波と瑞希に食べさせるわけにはいかないし、死ぬ気で（いや、本気で死ぬかと思ったけど）全てのおにぎりを食べきった。多少走馬灯は見えかけたけど・・・・・姉さんの料理も食べる機会が増えてきてたり、何だか最近耐性が出来始めてたお陰か、何とか僕は現世に踏みとどまれた・・・・・
「・・・・・今日の教訓。“油断した時が、一番危ない”かな？」
「・・・・・そうね。とりあえず美春を保健室に連れて行きましょう」
美波と二人でこっそり溜息。いつか瑞希にちゃんと料理を教えられたらいいんだけど・・・・・そんな儚い願いを馳せつつ、僕らは倒れた清水さんを保健室に運んで行った。

１０４時間目　普通のおにぎりが～こんなにも美味しいなんて～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……まさかの美春乱入。あ、いや。原作でも乱入はしてたんですがね？まあ、ここの美春は（多少は）暴走を抑えている上に、明久を恋の好敵手として見ているので折角だし出してしまいました（汗）

しかし、傍から見たらどう見ても明久のハーレム状態……実際二人は明久に惚れているわけですし……う、羨ましくなんかないんだからねっ！

しかし……自分が書いてて言うのもなんですが、ホントここではいろんな人の性格が変わっていますね～……常夏コンビに美春に小暮さん。どうしてこうなったのやら？造のせいか！

あ、ちなみに次回は一応今回の話の中にもちらりと出て来てましたが、造たちのお弁当編を予定しています。ちょっと中々難しいので、2，3日は書くのに時間がかかるかも？相変わらずの不定期更新でごめんなさいです。

ではまた次回です！読んでいただきありがとうございました♪

１０５時間目　小暮先輩には～姉上ですら敵わぬのかの？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。アニメのバカテス３期はいつかな～

……３期ありますよね！？それが無理ならＯＶＡでいいので何かしら出て欲しいですね。もし何かしらやるとしたら、やっぱり野球編でしょうか？

野球編と言えば、今ちょうど書いているんですが、何故か野球の話よりもお弁当の話の方が長いという罠。べ、別に野球が苦手でお弁当に逃げたわけじゃないよ！？

そんな感じ（？）で今日もよろしくです。１０５時間目、行きましょう♪

１０５時間目　小暮先輩には～姉上ですら敵わぬのかの？～

秀吉Ｓｉｄｅ

「「「・・・・・・・・・・・・・」」」

午前の競技・召喚野球の組み合わせが終わりを告げ、ようやくワシらは昼休みに入った。本来なら、すぐにでも造たちと弁当を食べる予定じゃったが・・・・・何やら造とその妹君の文が少々やらねばならぬ事があるらしく、ワシらで昼食の準備をやる事に。その事に関しては特に問題はないのじゃが・・・・・

「・・・・・その、造たち遅いのう。のう、姉上に先輩よ？」
「・・・・・・・・・・・・そうね。でももうすぐ来るわよ」
「ふふっ♪そうですね。ああ、弟さん？何でしたら先に食べててくださいな♪お姉さんもどうぞ」
「・・・・・・・・・・・・いいえ。アタシは造くんたちが戻ってくるまで待ちますよ。先輩こそ先に食べてていいですよ？」
「あらあら♪お姉さんが待つのでしたら、私も待ちますね」

・・・・・・・・・・・・物凄く気まずいのう。そう、どう言うわけかここには姉上とワシの他にあの３－Ａの智将であり、造曰くある意味最凶の先輩：小暮先輩がワシらと腰を下ろしておる。何でも造の妹君に誘われたそうじゃが・・・・・

「遠慮しないでさっさと食べててください先輩。何だか申し訳ない

ですし。と言いますか、わざわざ待つ必要は先輩には無いでしょう？」

「うふふ♪そうでもないんですよ。私、残念なことに月野君たちが来ないと全く食欲が湧きませんの。ですからお姉さんと同じく月野君たちを待っているわけですし♪」

ふむ・・・・・どうも姉上はこの先輩に対して敵意を剥き出しにしておるの。そう言えば以前『あの先輩は・・・・・アタシ苦手かも』と言うておったからの。弱みをあまり見せぬ姉上がこうも明確に“苦手”と言うなぞ珍しいものじゃ・・・・・

「先輩？出来ればお姉さんって言うのは止めていただけませんか？と言いますか、どうしてそんな風にアタシを呼ぶんですか？」

「あらあら？ふふふっ♪すみませんね。月野君が貴女の事を『優姉さん』といつも呼んでいるので、どうやらうつってしまったようです♪」

・・・・・まあそれとは対照的に、先輩の方は始終にこにこ笑っておる。いくら姉上が鋭い視線で睨もうが、いくら姉上が踏み込こもうが、のらりくらりとかわしておるようじゃ。本当に珍しいのう。姉上が手玉に取られるなぞ・・・・・・

「ぐっ・・・・・先輩？それは遠回しに『貴女は先輩である月野君に“優姉さん”と呼んで貰っているじゃないですか♪』って言っていますよね？」

「あらあら♪そう言うつもりではなかったんですよ。許して下さい、お義姉さん♪」

「今完全にお義姉さんって言いましたよね！？と言いますか誰が義

姉ですか！？」

・・・・・・・・・・この先輩は本当に侮れんようじゃの。まさか姉上にツッコミを入れさせるとは。と言うか、久しぶりに姉上のツッコミを見た気がするぞい・・・・・？

「まあまあ♪ちょっとした渾名みたいなものですよ。・・・・・・・あら、月野君たちがいらしたようですよ」

姉上の渾身のツッコミもやはり軽くいなし、先輩は造たちに楽しそうに手を振る。た、助かった・・・・・正直これ以上気まずい雰囲気はワシには耐えられそうにないからのう。

《お待た　せー♪　ゴハン　食べよー！》
「すみません皆さん、遅くなりましたね」

「「ううん（いいえ）♪全然待っていないわよ（いませんよ）」」

・・・・・見事にハモったの。姉上は認めぬやもしれぬが、案外この二人は似ているのやもしれぬの。まあ、これはワシの勘じゃが・・・・・この先輩も造のことを――――

「ヒデさんもお待たせしました。さあ、食べましょうね♪」
「うむ！流石に腹が減り過ぎて困っておった所じゃからな♪頂くとするかの！」

まあ、そう言うワシも人の事は言えんか・・・・・と言うか、こ

の場にいる全員が造を大事に思うておるからのう。

「（ボソッ）造は罪な男じゃ・・・・・・」
「???はい?何か言いましたか?ヒデさん?」
「いや、何でもないぞい。それより早く食べるとするかの！」
「あ、はいです♪流石にそろそろ燃料切れですからね～♪」
《文も　すっごく　おなか　空いたー！》

造（と文）は、そう言ってにこにこと笑顔で弁当を取りだす。先輩や姉上の、――――ワシの気持ちを全くわかっておらぬ純真な笑顔じゃな・・・・・本当に、造は罪な男じゃの。そんなどうでも良い事を想いつつワシも弁当を取り出しようやく昼食を頂く事に。

「造くん、これ良かったら食べて♪」
「はい、月野君♪私のもどうぞ。文さんもね♪」

全員で“いただきます”と言い終わると同時に、姉上と先輩が造にそれぞれの弁当のおかずを造に渡そうとする。・・・・・まあ、先ほどのやり取りでこうなる事は大体読めておったがの。ある意味これは修羅場じゃな・・・・・・

「ありがとうです。・・・・・うん♪どちらも美味しいですね～♪」

「「ふふっ♪それは良かった（です）」」

まあ、修羅場にならぬのは造の持つ場を和ませる空気のお陰かの？

こやつと一緒におると、毒気が抜かれるようじゃし。さっきまでの重たい空気は完全に払拭されたようじゃな。食事の際はやはり楽しく食べるに尽きるのう。

「ほら、秀吉。アンタも食べなさいな。文ちゃんも良かったらどうかしら？」

「はい文さん、弟さん。私のもどうぞ♪」

「おお、助かるぞい。ではワシも頂くとするかの」

《おー！　ありが　とー♪　うん！　オイシイ　ねー♪》

おっと、ワシも折角じゃし頂くとするかの。・・・・・それにしても先輩の方も姉上の方も手作りの弁当のようじゃな。姉上、朝早く何かしておると思ったがこれを作っていたのか。・・・・・ワシも、少しは料理を覚えてみるかの？

「（あ、文さんってやっぱり普通にご飯食べられるんですね）文さん、良かったですね」

《うん！　オイシイ　ねー！　文　生まれて　初めて　ゴハン　食べたー！》

「「「・・・・・・・・・・・・？生まれて初めて？」」」

・・・・・？妙な言い方をするのう？それではまるで、文はこれまでご飯を食べた事が無いように聞こえるぞい？姉上や先輩もワシと同じように首を傾げる。

「っ！？い、いや！？文さんは“こんなに美味しいご飯は生まれて

初めて”って言いたいんですよ！ね、ねえ文さん！？」
《あっ　・・・　・・・　そう　なのー♪　とっても　美味しい　よー！》
「・・・・・・・・・・・・ふむ、なるほど。それは光栄です♪ところで文さん？文さんのお好きな食べ物は何でしょう？」
《・・・　・・・　うーん？　あっ！　ツクルが　好きなもの　全部！》
「なるほど。文ちゃんは甘いものが好きってことね」
「・・・・・優姉さん？どうしてそうなるんですか？いや、確かに好きですが」
「まあ、造は甘いものに関しては譲らぬところがあるしのう。その辺は否定できんじゃろ？」
「・・・・・い、いや・・・・・そこまでアレじゃない・・・・・ハズですよ？」
「「《ふふっ♪》」」
このような感じで昼食を食べる。それにしてもいつもは明久や雄二たちと食べる昼食じゃが、このメンバーで食べるのは本当に新鮮じゃのう。まあ明久は姫路と島田。ムッツリーニは工藤。雄二は霧島と楽しく食べておるじゃろうがな。若干明久と島田が（生命的な意味で）無事か心配じゃがの・・・・・・
～昼食＆談笑中～
「それにしても月野君と弟さんは次は野球の決勝ですね。頑張って

くださいな♪」
「ああ、そう言えばそうだったわね？・・・・・それにしても、造くんに秀吉？アンタたち良く勝てたわね」
全員一通り食べ終わり、造の作ったアップルパイ（相変わらず見事な出来栄えじゃ）を食べていると、姉上たちがそんなことを言ってきた。うーむ、召喚野球・・・・・・のう・・・・・・
「アタシも代表も愛子も、それから久保君もかしら？没収品が懸かってたし、全力でやったのに勝てなかったのよ？それがまさかアンタたちが勝つなんて・・・・・・ホント凄いわね」
「あ、あはは・・・・・・えっと、あれは勝てたと言いますか・・・・」
「う、うーむ・・・・・・結果的に不戦勝・・・・・・なのかの・・・・・？」
「・・・・・・は？不戦勝？どう言うことよ？」
・・・・・まあ、ちょっとしたトラブルがあったからの。あの先輩二人に、それと３－Ａの先輩方には申し訳ない。落ち着いたら頭を下げにでも行こうかの。ああ、ちなみにその肝心の３－Ａ所属の小暮先輩はと言うと――――
《うー　文　反省　しないと　いけない　ねー》
「文さん♪大丈夫ですよ。夏川君たちはもう大丈夫だと言ってましたし。文さんが反省なさっているなら、夏川君たちも月野君も許してくれるでしょうし♪」
《うん　・・・　・・・　・・・　ナツカワと　ツネムラも　大丈夫って　言ってた》

「ふふふっ♪夏川君たちがそう言っているならきっと大丈夫ですよ。今度から気をつけましょうね、文さん」
《わかったー！》
――――特に負けた事を気にした様子もなく、文の頭を撫でながらそんなことを言っておる。この先輩はいつも落ち着いておるのう。それにしても文と先輩は何の話をしておるのじゃろうか？まあ話を聞く分に、もう解決しておるようじゃし特に気にする事ではないかの？

「ふーん、不戦勝ねえ？まあ不戦勝でも勝ちは勝ちだし、折角ここまできたなら頑張りなさいな」
「そうですね。先生方とどう戦うのか、楽しみにしていますよ♪」
《二人とも　ガンバ！　ガンバ！》
「うむ。まあ、折角じゃ！ワシも持っていかれた私物を取り戻せるよう頑張ってみるかの！」
「そですね～♪頑張りましょう！自分も取り戻したいものありますし」

「「《・・・・・取り戻したいもの？それって？》」」

3人が口を揃えて聞いてくる。ああ、忘れておったが造も何か持って行かれたと言っておったの。何じゃったかの・・・・・あまり覚えてはおらぬが、確か何かの花の種と写真立てじゃったか？

「ふふっ♪気にしないでください。ちょっとしたものですよ。でも優姉さんは残念でしたね。何か大切なものでも没収されたんですか？」

「ええ！折角造くんと秀吉の為に作ったコスプ――――コホン、洋服と先生方に渡すつもりだった夏の想い出（主に造＆秀吉のコスプレ集）が大量に詰まった写真がね」

「「ああ、それは本当に持ってかれて良かったですね（のう）♪」」

この瞬間、ワシは造と心の底から持ち物検査に感謝をしてしまうた。と言うか、姉上は何を学校に持ってきておるのじゃ・・・・・・

「ちなみに高橋先生たちも泣いていたわ・・・・・・ホント残念ね」

「・・・・・・ホント、優姉さんも先生方も残念ですよ・・・・・・おっと、もうすぐ昼休みも終わりますし戻らないと間に合わなくなりますよ？」

と、造が時計を指差すと確かに時計は昼休みの終わりを告げようとしていた。もうそろそろ戻らねばならんようじゃな。造の一言で全員が立ち上がる。

「ん、それもそうね。それじゃこの辺で解散しますか」

《美味し　かったー！　ミンナ　ありがとー！　ご馳走さま　でしたー♪》

「ふふふっ♪お粗末さまです。そうそう、月野君と弟さんは待機場所が反対方向ですので、もう戻らないと午後の競技に間に合いませんよ。私と文さんとお義姉さんで後片付けをしておきますので、先に戻っててくださいな♪」

「あ、いいんですか？・・・・・・では、申し訳ありませんがお願いしますね。それと文さん。文さんは小暮さんか優姉さんの側にいてくださいね。何かあったら自分か学園長のところに行く事。いい

ですか？」
《はーい！　ツクル　文は　ちゃんと　良い子に　してる　ねー♪》
「宜しい♪では文さん、それに優姉さんに小暮さん。また後で会いましょう」
「それではワシらはこの辺で失礼するぞい。また後での」
そんなわけで先輩たちのご厚意に甘えて、ワシらは待機場所へ戻る事に。それにしても・・・・・・・
『ところで先輩？・・・・・やっぱりさっきから“お義姉さん”って言ってますよね？だからそれは止めてくださいよ！』
『あらあら♪それは気のせいですよ、義姉さん♪』
『どんどんフランクになってる！？ど、どう言われようと造くんはお嫁にやりませんからねっ！』
『義姉さん、そう堅い事言わずに仲良くしましょうよ♪』
『だから義姉さんって言うのは止めてくださいっ！？』
《おー！　ユーコ　アオイの　お姉ちゃん　なのー？　文も　お姉ちゃん　欲しいー！》
『あら？でしたら私が文さんのお姉さんに――――』
『だ、ダメですっ！？文ちゃんも何言ってるかわかっているの！？』
・・・・・何故か姉上と先輩の関係が、姑と嫁のように見えたのはワシの気のせいじゃろうか？どう考えても普通は立場は逆な気もするがの・・・・・？それ以前に、何か根本的なものが違う気もするがの？
「・・・・・姉上に苦手な人がいるとはのう・・・・・・」
「ん？何か言いましたか、ヒデさん？」

「・・・・・何でもないぞい。ホレ、急ぐとしよう」
「そうですね。次は確か応援合戦でしたっけ?楽しみですね～」

そんな姉上たちの様子も一切わかっていなさげな造は、のんきに鼻歌交じりにワシの隣を歩く。こやつは普段は頭が回るのに恋愛感情が明久以上にわかっておらぬからの・・・・・まあ、それでこそ造らしい、か。

１０５時間目　小暮先輩には～姉上ですら敵わぬのかの？～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

……カオスだ……どうしてまたこうなったんでしょうね（汗）この作品の中でかなり強キャラなハズの優子さんが小暮さんにかかればこんな扱いですよ。と言いますか、初めてこの作品内で優子さんがツッコミ入れたことになるわけで（苦笑）

小暮さんのキャラの方向性が凄いことになっている気がします。てか、作中最強のお方（ラスボス？）になりつつあるんですが……おかしい、こんなキャラにする気は最初は無かったはずなのに……まあ、いいか。

弁当編はここで終わりです。次回は……雄二と霧島さんの仲違いの話ですかね？読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです！

１０６時間目　応援・平手・翔子の涙～すれ違いの決勝前～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。皆さんお元気ですか？

野球編に埋もれてはいるものの、今まさに体育祭のお話を書いているんですが……ウチの学校文化祭が無いのに体育祭はきっちりあるんですよね～

まあ、結構楽しいので嫌いってわけではないんですが、どうせなら文化祭もやればいいのにな……楽しそうですし、思い出作りになりそうなのに。

ってなわけで、今日もどうでもいい話終りっ！１０６時間目行きますよ！

１０６時間目　応援・平手・翔子の涙～すれ違いの決勝前～

造Ｓｉｄｅ

『これより、一年生各クラスによる、応援合戦を行います。一年生の生徒は――』

グラウンドにアナウンスが響き渡ります。昼休み明けの最初の競技は、皆さん楽しみにしている応援合戦です。色とりどりの衣装を身に包んで、一年生の皆さんは音楽に合わせて、思い思いの演技を魅せてくれます。それにしても懐かしいですね～♪もう2年前になりますが、自分もあんな風に一生懸命踊ってましたっけ。

そんな一年生たちを尻目に、自分らも次に来る出番を待ちつつ準備に取り掛かっています。

「学ランなんて久しぶりだなぁ・・・・・中学校以来だよ」
「なんだ。明久も中学は学ランだったのか」
「・・・・・・・・・・・同じく」
「ワシもじゃな」
「あ、自分もです♪もう3年も前になりますがね～」
「へぇ～。秀吉と造はセーラー服だったんだね」

「「アキさん（明久）？会話がまるで繋がっていませんよ（おらんぞ）」」

衣装を手に取り、皆さんと和気藹藹と着換えながら話をします。と、

そこにチアガールの衣装を手にした島田さんがこっちにやってきました。随分と困った様子で、自分とヒデさんの方へ来ましたが・・・・・これはまさか・・・・・・

「ねぇ木下、月野」

「「嫌です（じゃ）」」

「う・・・・・まだ何も言ってないのに・・・・・・」

いえいえ。その持っている服で大体の事はわかっていますよ。悪いですが、ここは譲れません。

「そんなこと言わないで。ほら、この衣装もかなり可愛いわよ？」

「可愛いから嫌なんですってば」

「その通りじゃな。何度頼まれようと、ワシらはチアガールなぞやらん。こちらの応援団をやるのじゃ」

「ええ。何せ自分とヒデさんは、正真正銘立派な男子ですからね」

「でも応援団は人数余ってるじゃない。こっちは人数が足りなくて困ってるの。だから、ね？人助けってことでお願いっ！」

・・・・・・・・・・・ぐぅ、そう言われると辛いのですが・・・・・それでもダメです。

「？？？美波、どうしてそこまで秀吉と造にチアやらせたいの？この二人って戸籍上は男なのにさ？」

「「戸籍も何も、正真正銘男ですよ（じゃぞ）！？」」

ま、まあそれは一旦置いておくとして、確かにどうしてそこまで自分らに拘るのやら？気になって聞いてみると、島田さんは黙って遠くを指差します。えっと・・・・・？

『あ。美波ちゃん。早く着替えないと時間が無くなっちゃいますよー』

と、そこにはチアガールの衣装に着替えた姫路さんが。・・・・・・ああ、そう言うことですか。つまり・・・・・・

「あの子と二人で踊るのは、色々と辛いのよ！？わかる！？あの子のアレ、物凄く揺れるのよ！？跳ねるのよ！？暴れるのよ！？」

「「「「「（・・・・・・・・・・・胸、か）」」」」」

いや、確かにお辛いでしょうが、その辺はやっぱり拒否します。断固としてお断りですね。

「あー・・・・・確かに瑞希と並んで二人で踊ってたら、色々と比べられちゃうのかな・・・・・・？」

「うぅ・・・・・あの子すっごく張り切ってて一生懸命飛び回るのよ！？そんなことはないって分かってはいるケド、もう隣にいるウチへの嫌がらせとしか思えないのよ！」

「んー・・・・・でもさ？別にそんなこと気にしなくても、美波は十分魅力的だと思うけど？」

「っ！もう！あ、アキったら／／／／／／」

わー、どうしましょう。何だか今ならお砂糖吐けそうですよ？相変わらずなアキさんたちですね。皆さんも同じような反応してますし・・・・・・

「で、でもそれとこれとは別問題よ！お願い木下、月野！一緒にチアガールをやって！」

「お断りします♪」

「絶対に嫌じゃっ」

「けど学ランの下に無理してサラシを巻くくらいなら素直にチアをやった方が」

「あ、あれはお主らが巻かなければ教育委員会に訴えられると言うから・・・・・・」

「自分たち仕方なく付けているんですよ・・・・・・てか、島田さん？どの道自分じゃ、そのチア服は着れませんよ？」

特注か優姉さんたちが作りでもしない限り、自分に合った服なんて用意できないでしょうからね。ふん！べ、別に悔しくないですからね！

「あら？でもアンタの妹ってチア服着てなかったかしら？あれ借りれないの？」

「・・・・・・あー、無理だと思いますよ？色んな意味で」

何せ文さんのアレは、文さんが自分で創造して創ったデータの服ですからね。調整すれば行けるかもしれませんが、多分急に創る事は無理でしょうし。

「くっ・・・・・・仕方ないわね。ここは木下だけで我慢するしか・・・・・・」

「待つのじゃ島田よ。ワシも着らぬと言っておるじゃろうに」

とりあえず何とか島田さんは自分は諦めてくださった様ですが、ヒデさんにターゲットを絞ったようですね。ヒデさん、頑張ってください！

「あらら・・・・・・美波も大変だな～」

「そうですね・・・・・・って、アキさん？何だか少しだけ顔色が悪くないですか？大丈夫です？」

何だかお昼に会った時よりも、若干顔色が悪い気がしますね？どうしたんでしょうか？

「ん？・・・・・・あー、多分瑞希のお弁当の当たりを引いたからかな・・・・・・まあ、耐性が出来てたせいか何とか帰還出来たし、問題ないよ？」

「「「・・・・・・・・・・・・あー」」」

なるほど。良くわかりました・・・・・・って言うか、やっぱり姫路さんのお料理って油断ならないんですね・・・・・・

「あ、お弁当で思い出したけど・・・・・・雄二にムッツリーニ。

貴様らよくも逃げたな？」

「逃げたとは心外な。俺はただ次の教師戦に備えて策を練っていただけだ。別に“こう言う時、姫路は必ずお手製の弁当を持ってくる”だろうとは思っていなかったぞ」

「・・・・・・・・・・・・俺は工藤に呼び出されて」

あ、やっぱりこーさんは工藤さんとご飯を食べてたんですね。ふふっ♪最近本当に仲が良いようで何よりですね♪

「ってことは、ゆーさんは霧島さんとご飯食べたんですね♪」

「ん？いや、俺は一人で喰ったぞ？」

「「「・・・・・・・・・・・・え？一人で？」」」

あら？意外ですね。霧島さんの性格からして、こう言う時は絶対ゆーさんと一緒にご飯を食べると思ったんですが・・・・・？

「まあ、アイツも別に始終俺と一緒ってわけじゃねえし、そう言う時もあるんだろ？」

「「「・・・・・・・・・・・・うーん？」」」

それはそうですが、何だか霧島さんらしくないですね。何か用事でもあったのでしょうかね？

「？？？あの？明久君。美波ちゃんは木下君に何をお願いしているんですか？」

と、こちらにやってきた姫路さんが、島田さんとヒデさんのやり取りに首を傾げつつアキさんに尋ねてきました。えっと・・・・・・

『なんでそんなに嫌がるの？こんなに可愛いのに』

『可愛いから嫌なのじゃ！ワシは男なのじゃから、可愛いのは着ないのじゃ！』

『ああ・・・・・えっとね、木下。ここだけの話だけど――』

『む？なんじゃ？』

『――実は、チアリーダーの衣装って・・・・・すごく男らしいのよ？』

『ほう？さてはお主、ワシを明久レベルのバカじゃと思っておるじゃろ？』

・・・・・何て言ったらいいのでしょうね？

「あー・・・・・美波が秀吉にチアガールをやってみないかって誘ってる最中なんだ」

「？？？チアガールを、ですか・・・・・どうしてでしょうね？」

「あはは・・・・・きっと女子の数が少ないからだよ」

「あ、そういうことでしたら」

「って、待った瑞希！？どうしてもう一着チア衣装を取り出してジッと僕のほうを見るの！？」

・・・・・ひ、姫路さんが物凄く良い笑顔でチア衣装をアキさんに渡そうとしていますね。どうして姫路さんや優姉さんたちは、男子にそう言う格好をさせたがるのでしょうかね・・・・・

「ははっ！良かったじゃないか明久。俺も女子が少ないのを心配してたんだ。これで少しは見栄えも良くなるだろうな！」
「・・・・・・・・・・・・売り上げも伸びる」
「あ！でしたら坂本君と土屋君も良かったら・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・（ブンブン）！？」
「待て姫路。何故チア服を取り出して俺らを見る？」
「それに月野君はどうして学ラン何かを――――」
「だから自分は男ですって！？これで合っているんですよ！？」

どうしましょう・・・・・・ひょっとしてこの学園には、男の子を女の子にさせたがる呪いでもあるのでしょうか？これではツッコミきれませんよ・・・・・・

「そ、それはそうと瑞希。応援の練習すごく頑張ってるらしいね」
「あ、いえ。それほどでもないですよ？」
「・・・・・・・・・・・・あまり無理はするな」
「あー、そうですね。無茶して身体を傷つけないようにしてくださいね？アキさんも島田さんも心配していますし」
「ちょっ！？つ、造っ！？」

ＨＡＨＡＨＡ！今更ですし、別に恥ずかしがる事ないでしょうに。

「そうだな。応援合戦はあくまで余興で体育祭の点数とは関係ないんだからな」
「あ、はい。なるべく無理はしないようにはします。けど――」
「けど？」
「私は私の出来る事で役に立ちたいって、そう思って」

「「「「・・・・・・・・・・・・・」」」」

へぇ・・・・・・？何だか姫路さんって、前と良い意味で印象が変わりましたね。以前よりもとても前向きになっている気がします。心なしかアキさんもそれが嬉しそうです。

「明久君。私、応援頑張りますからっ！応援の応援、してもらえますか？」

「うん！勿論だよ♪」

「良かったです！では早速――――これを着てから」

「ＨＡＨＡＨＡ！瑞希は冗談が上手いなぁ！」

・・・・・ま、まあ別の意味でも前向きになっている気がしますがね？とりあえず姫路さんのチア服攻撃（？）からどう逃げ出すべきか考えていると・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・」

「あれ・・・・・・？霧島さん？」

・・・・・何だか一瞬誰かわからなくなるくらい、物凄く落ち込んでいる霧島さんがとぼとぼと歩いているのが目に映りました。何だか随分元気がないですね・・・・・？

「ん？ホントだな。おい翔子。どうかしたのか？」

「・・・・・・あ・・・・・・雄二・・・・・・」

何だかゆーさんが話しかけても霧島さんは上の空。とてもじゃないですが、いつもの凛々しい霧島さんの姿はそこにはありません。

「・・・・・野球、負けちゃった」

「ああ。そうらしいな。だが安心しな。一応仇は討ったぞ」

と、ゆーさんはニッと笑いかけますが・・・・・それでも霧島さんの表情は戻りませんね。

「・・・・・でも、私の没収品返してもらえない・・・・・」

「没収品？ああ、あれか。ったくお前な・・・・・」

「・・・・・結婚式まで、大事に保管しておくつもりだったのに・・・・・」

「バカ言うな。あんなもん、没収されてなくても見つけたら俺がかわりに捨ててやる」

「・・・・・・・・・・・・え・・・・・？」

・・・・・？あれ？何だか嫌な空気ですね。何でしょうか・・・・・何かおかしいような？ゆーさんと霧島さんの会話、噛み合っていない感じじゃ？霧島さんの表情も何か困惑したものに変わっていますし・・・・・

「いや。『・・・・・・・・・・・・え・・・・・？』じゃないだろ。あんなもの没収された程度でそこまでショックを受けるなって」

「・・・・・・・・・・・・・・・あんな物、って・・・・・」

「そうやってつまらない物を没収されたくらいで凹むなってこと―

―――」

そのゆーさんの一言に、霧島さんは目をカッと開き・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・っ！！」

―――パシンッ！

・・・・・・乾いた平手の音が響き渡りました。

「・・・・・・つまらない物なんかじゃ、ない・・・・・・・！」

叩いた霧島さんは目に涙を溜め、唇を噛んでいます。何か良くわかりませんが、霧島さんの表情から見て、何やらただ事ではない事は確かです。

「雄二にだけは、そんな事言って欲しくなかった！」

頭に響くような大きな声を上げ、霧島さんはこちらに背を向け走り出してしまいました。・・・・・あまりの唐突さに、皆さんも自分も固まってしまいました。

「「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」」

思わずアキさんゆーさん、姫路さんこーさんと顔を見合わせます。
一体どう言うことでしょう・・・・・・？

「わ、私、ちょっと翔子ちゃんのところへ行ってきます！」

姫路さんが真っ先に我に返り、霧島さんを追って行きます。・・・・・
・・そうですね。まずは状況を確認に行きませんと。

「自分もちょっと様子を見てき「待て・・・・・・造・・・・・・・」
――ゆーさん？」

と、ゆーさんも我を取り戻したのか、自分の肩を掴んで制止させます。

「・・・・・・・・・・お前まで、行く必要ねえよ・・・・・・・・
翔子の・・・・・・ヤツ・・・・・・！」

まるで地の底から響いてくるような――そんな低い声。

「翔子のヤツ・・・・・・！な・に・が『つまらない物なんかじゃない！』だ！俺本人が同意していない婚姻届なんか、つまらない物以外の何物でもないじゃねえか！俺にだけは言われたくないだと！俺だから言うんじゃねえか！こっちは何も承諾してないんだぞ！悪く言うのは当然だろうが！」

霧島さんも何だかゆーさんに怒っていたみたいですが・・・・・・

ゆーさんもゆーさんで烈火の如く怒りを露わにします。ちょっとやそっとじゃ収まりそうにありません。これはちょっと、手が付けられませんね・・・・・・

「造っ！翔子の事なんざ気にかけるんじゃねえぞ！俺も言えた事じゃねえが、アイツはお前に頼り過ぎているからなっ！明久、ムッツリーニ。お前らもだっ！いいなっ！」

そう言ってゆーさんは獣のような雰囲気のまま、もうすぐ応援合戦が始まると言うのに２－Ｆの待機場所に戻ってしまいました。これは重症ですね・・・・・・とりあえず、アキさん&こーさんと相談ですかね。

「・・・・・・どう思います？二人とも」

「どうって・・・・・・まあ確かに、霧島さんにとっては大事でも、同意した覚えのない婚姻届とかであそこまで怒られても困るよね？」

「・・・・・・・・・・・普通はな」

「でも、霧島さんが婚姻届くらいであそこまで取り乱すと思いますか？本当に必要なら、そんなものまた作れば良いだけでしょ？」

「「あっ・・・・・・！」」

何と言いますか、ただ婚姻届を没収されたにしては、霧島さんの行動は違和感がありまくりなんですよね・・・・・・

「それに正直なところ、流石にそう言う書類は没収されないと思うんです。まあ、これはあくまで自分の推測ですし、何がどうなって

いるかわからないんですがね」
「・・・・・・・・・・・・だが、確かに何かおかしい」
「そうだね・・・・・・・・でも、だったら一体霧島さんって何を没収されたんだろ？」

「「「・・・・・・・・・・・・うーん」」」

どれだけ三人で頭を捻っても推測くらいしか出来ません。弱りました・・・・・これから大事な教師戦だと言うのに、２－Ｆの要であるゆーさんがあんな感じでは――――

雲行きが怪しくなりつつある召喚野球大会決勝。不安だけが募るこの状況で、このままで何とかなるんでしょうか・・・・・？

？？？Ｓｉｄｅ

『（グスッ）・・・・・・・・・・・・雄二の・・・・・・・バカ・・・・・』
『・・・・・あら？どうかしました？大丈夫ですか？』
《んにゅ？　大丈夫ー？　泣いて　いるのー？》
『・・・・・・・・・・・・え？』
《痛い　のー？　だったら　サクヤに　治して　もらおー！》
『ふふっ♪ダメですよ？まずはどうしたかを聞かないと♪・・・・・

・はい、ハンカチをどうぞ♪』

『・・・・・・・・・・・いつかの、先輩と・・・・・・・・・造・・・・

・・・・？』

１０６時間目　応援・平手・翔子の涙～すれ違いの決勝前～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

あれ？造と秀吉ってどうなったのって思われた方。安心してください。以下、しょーもない余談です。どうぞ♪

～シリアスブレイカーな余談～

「じゃあ木下！こうしましょう！ウチが学ランを着るから、アンタがチアを」

「それはワシにとって何の解決にもなっておらんのじゃが！？」

「って、島田さんにヒデさんはまだやってたんですか・・・・・・？」

もうそろそろ応援合戦が始まると言うのに、島田さんはヒデさんにまだ交渉（？）をしているようです。まあ、気持ちはわからないわけではありませんが、やっぱり自分らがチアなんておかしいですし我慢して姫路さんと二人で踊っていただくしか・・・・・・

「あ、わかった！木下？アンタやっぱり月野にも出て欲しいんでしょ？わかったわ、ちゃんと月野も付き合わせるから！」

「ちょっ！？あ、諦めてくれたんじゃなかったんですか！？」

「島田よ・・・・・・いい加減にするのじゃ。ワシらは絶対踊らぬからな？」

「申し訳ないですが自分も無理です。ではもうそろそろ始まるので失礼しますね？」

そう言って二人で立ち去ろうとすると・・・・・

ガシッ！

「まあまあ♪お二人さん？ここは美波っちの言うこと聞いてやんなよ♪それとも何だい？お前ら二人は可愛い女の子のお願いも聞けないような男なのかい？造、ヒデっち？」

「「・・・・・・・・・・・・」」

この・・・・・・声・・・・・・・は・・・・・・

「女の子のちょっとしたお願いも聞けねえような男は、もう男じゃねえと思うがねえ？ま・さ・か造たちはそんな奴らじゃねえよなぁ？」

「「・・・・・・日高、先生」」

さ、最悪です・・・・・・よりにもよってこんな時に・・・・・・

「美波っち！後は任せな～♪アタシがちゃんとコイツらの着付けしておくからね♪」

「あ、はい！ありがとうございます、先生！」

「おっし！んじゃまずは保健室で着替えるか！・・・・・・行くぞ二人とも～♪」

「「ヒィ!?離して下さい（離すのじゃ）!?い、嫌あああああああ!?」」

日高先生の肩に担がれて、拉致られる自分とヒデさん。どれだけ暴れようとも日高先生の拘束から逃れられるわけもなく――――

・・・・・その日の応援合戦は、バニーガールの格好をした造と秀吉がボンボンを持って踊っている（踊らされている?）光景が見られたとか。

「・・・・・・・・・・・バニーガール?HAHAHA!違いますよ?断じて認めません。もう一度言います。バニーガールなんかじゃないです。あれはウサギの格好です。そうです・・・・・うさぎ、なんです・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・はは っ・・・・・・造よ、ワシはもう疲れたぞい・・・・・・今ならワシ、跳べそうじゃぞい」

「「ハァ・・・・・・・・・・・・・・orz」」

まあ、言うまでもなく観客席を大いに沸かせたそうだが、それと同時にあまりに刺激的過ぎて観客の三分の二は鼻血を出して倒れたとのこと。彼女ら（?）の写真は飛ぶように売れムッツリ商会は過去の売り上げ記録を塗り替えられかけたそうな。

……こんなことがあったとか。ちょっと本編で書くと霧島さんと雄二の仲違いのシーンのシリアスなところがブレイクされると思い、ここで書かせていただきました。長々とすみません（汗）

今日この後行くとこあるので、感想の返信が遅くなるかもしれません。今日中には戻るとは思いますが。読んでいただきありがとうございました。次回もよろしくです♪

１０７時間目　波乱の決勝：教師戦～高橋先生大活躍？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。野球編もいよいよ決勝スタートですね。

一応先に言っておきますが、作者は正直野球の明確なルールを理解しているわけではありません（汗）今回はそこまでルールが間違っていることは無いと思いますが、次回以降で『これってルール違反じゃ？』と思われても、『きちんとした野球ではないから細かいことは気にしない』って事で大目に見て貰えると嬉しいです。

また前書きが長くなっちゃいましたね。そろそろ行くよ１０７時間目！よろしくです！

１０７時間目　波乱の決勝：教師戦～高橋先生大活躍？～

造Ｓｉｄｅ

体育祭のプログラムの一つであり、自分たちＦクラスにとっては最も重要な野球大会の決勝戦。その決勝戦を前に、自分たちは一塁側に用意されたＦクラスベンチで、それぞれのポジションや打順の確認を念入りに行っているんですが・・・・・・

「あー・・・・・・雄二は８番で良かったの？」

「・・・・・・・・・・・・俺は英語も世界史も点数を取れているからな」

・・・・・どうにもゆーさんはご機嫌斜めのようですね。試合が始まれば切り替えるかなと思いましたが、これはもうどうにもなりそうにないですかね？

「（造よ、雄二の奴はどうしたのじゃ？何やら随分不機嫌ではないか）」

「（ホントよね？何？坂本のヤツ何かあったの？）」

クラス代表であり、Ｆクラス最大の智将でもあるゆーさんが不調（いえ、不機嫌？）な事を気にしてか、事情を知らないヒデさんと島田さんが自分に小声で聞いてきました。

「（えっと・・・・・・実はですね――――）」

～造説明中～

「（――そう言う感じで、何やらゆーさんと霧島さん、仲違いをしているみたいなんですよ）」

「（なるほどのう・・・・・・それで雄二はあんな感じなのか・・・・・・）」

「（それにしても・・・・・・翔子が坂本を引っ叩いた？正直信じられないわね）」

掻い摘んで二人に説明しましたが、お二人とも大体の事情は察してくれたようです。にしてもホントに参りましたね・・・・・・

「（・・・・・・・・・・・作戦に支障が出なければいいが）」

「（と言うか雄二のヤツ、今回はほとんど作戦なんて指示してないからね。僕らで何とかするしかない、か）」

いつの間にか自分らの側に来ていたアキさんとこーさんも話に加わります。

「（・・・・・・ねえ、瑞希？霧島さんの様子はどうだった？）」

アキさんが島田さんの隣にいる姫路さんに尋ねますが・・・・・・

そうでしたね。姫路さん確か、霧島さんの様子を見に行ったんでしたっけ。姫路さんなら何か知っているのかも？

「（あっ、ゴメンなさい・・・・・・翔子ちゃんあっという間に走っていったので、見失っちゃって・・・・・・）」
「（そっか・・・・・・いや、瑞希が気にする必要はないよ。にしても霧島さん大丈夫かな・・・・・・）」
「（そうね・・・・・・翔子自身、坂本を叩いた事も悩んでいるでしょうし・・・・・・）」
「（でも、翔子ちゃんは理不尽に坂本君を叩いたりする子なんかじゃないです！多分、多分ですが・・・・・・何か理由が――――）」

これからの試合も心配ですが、霧島さんとゆーさんが仲違いしている事もかなり心配です。全員でこれからどうするか頭を捻っていますが・・・・・・どうも良い考えが浮かんできませんね。

『これより生徒・教師交流野球決勝戦を始めます。皆さん、整列してください』

・・・・・・どうやらタイムアップのようです。審判を務める先生の声が聞こえてきます。

「・・・・・・おら、お前らつまんねぇ話なんてしてないで、さっさと行くぞ」
「あっ・・・・・・はい、です・・・・・・」

とりあえずこの辺で話を打ち切って、ベンチのメンバー共々グラウンドに駆け寄り整列します。先生方も三塁側から歩いてやってきて、自分らと向かい合うように並び――

『プレイボール！』

『『『おねっしゃ――――すっ！！』』』

一斉に頭を下げて、各自持ち場につきます。自分たちは後攻で、まずは守備からですね。ああ、ちなみに全員の今回の打順と守備位置ですが――――

■

１番　サード　近藤吉宗
２番　レフト　横溝浩二
３番　ファースト　木下秀吉
４番　セカンド　島田美波
５番　ショート　須川亮
６番　センター　月野造
７番　ピッチャー　吉井明久
８番　キャッチャー　坂本雄二
９番　ライト　姫路瑞希

ベンチ　君島博　土屋康太（ムッツリーニ）

■

――――こんな感じですね。ゆーさんの指示がほとんど無い状態でしたので、一先ず自分とアキさんたちで打順と守備位置を考えてみました。各イニングの教科を考慮した打順になっています。守備位置はあんまり変わっていませんが、その辺は順次入れ替えればいいですし。

「はは・・・・・野球なんて、二十年ぶりでしょうかね。――――試獣召喚（サモン）！」

≪化学教師　布施文博　化学　５０１点≫
ＶＳ
≪Ｆクラス　吉井明久　化学　９６点≫

教師チームのトップバッター、布施先生がバッターボックスに入り召喚獣を呼び出します。ちなみに初回の科目は布施先生の担当の化学。初めから結構大物が来ましたね。点数差４００点ですか・・・・・

《アウトコース　低め　遅い球》

そんな中、ゆーさんは淡々とアキさんにサインを送ります。一応試合が始まっていますし、ゆーさんも多少の切り替えは出来ているハズ・・・・・です。アキさんは頷いて指示通り、第一球を投げました。

『ストライッ！』

布施先生は動きません。まあ、先生方は体育祭の審判等の関係上全員メンバー入れ替えてあり、召喚獣を使役した野球なんて今回が初めてのハズです。先生も慎重にならざるを得ないってことでしょうかね。

《インコース　高めに外す　遅い球》

次はボール球で、先生の反応を見るみたいですね。アキさんの召喚獣は大きく振りかぶり、二球目を放ります。

「・・・・・・っ」

『ボール！』

一瞬布施先生はピクリと反応しますが、何とか堪えてそのまま球を見逃します。カウントは１ストライク１ボール。そろそろ先生も振ってくるでしょうかね？

《インコースギリギリ　低め　速球》

ゆーさんもそれがわかってか、遅い球から速い球に指示を変えてきましたね。緩急つけたボールなら、点数差があっても中々打てないでしょうし。アキさんも頷き、思いっきり振りかぶり全力を籠めた

ボールを――――

ひょろ～

――――ぜん、りょく・・・・・？あれ？何だか今までで一番遅い球のような・・・・・・？

『バカ野郎っ！すっぽ抜けてんじゃねえか！』

ゆーさんの表情を見ると、どうやらアキさん力みすぎたようですね。ボールは打ち頃のど真ん中に、ゆっくりと飛んでいきます。

「っ！？っとと、と・・・・・・」

と、何やらタイミングが狂わされたのか、先生の召喚獣はフォームが崩れたまま打ち、バットに掠るように当たったボールはそのまま・・・・・・

『アウト！』

・・・・・レフトフライとして抑えられました。よ、良かった・・・・・・初回ホームランかと冷や冷やしましたが、担当教科の先生を抑えられたのは大きいですね。

「やれやれ・・・・・あまりに良い球が来たので焦ってしまいま

したよ」

「次は僕ですか。中々難しそうですね。試獣召喚(サモン)っ！」

布施先生と入れ替わるように、現代国語の教師の寺井先生がバッターボックスに入ります。

≪現国教師　寺井伸介　化学　２１１点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　吉井明久　化学　９６点≫

むう・・・・・現国の教師であるにもかかわらず、化学でもＡクラス上位の成績ですか・・・・・分かってはいましたが、先生方も一筋縄ではいかないようですね。

《低め一杯　速球》

ゆーさんの指示に頷き、アキさんが狙い通りのコースに投げます。

これなら――

「・・・・・ほっ、と」

――っ！初球から打ってきた・・・・・！カンッ！と鈍い音が響き、ボールは低い軌道ながら地面を抉るように、一，二塁間を抜けて転がっていきます。

「あはは・・・・・ちゃんと捉えたと思ったんですけど、やっぱ

り生身でやるのとは違いますね」

そう苦笑いをしながら一塁ベースに立つ寺井先生。あっ！しまった・・・・・そう言えば寺井先生って学生時代、野球をやっていたと聞いた事がありますね。油断大敵ってことですね。１アウト、ランナー一塁。そして迎えるネクストバッターは・・・・・・

「宜しくお願いします。吉井君お手柔らかに。そして――造くん♪今そちらに行きますからね！試獣召喚（サモン）っ！」

・・・・・おぉ・・・・・学年主任にして２－Ａ担任、そして自分のある意味の天敵である高橋先生ですか。アキさんに挨拶をしつつ召喚獣を召喚させます。てか『そちらに行きます』って言われても・・・・・出来れば来て欲しくないんですがね？まあ、嫌でも先生が塁に出る事は間違いなさそうです。何せ高橋先生と言えば――

≪学年主任　高橋洋子　化学　８０１点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　吉井明久　化学　９６点≫

『『『ぶほぉっ！！！』』』

この圧倒的な実力の保持者ですからね・・・・・・頼りになる守備陣及び、ベンチ・応援席の皆さんが一斉に噴き出したのがわかります。まあ、高橋先生と西村先生がこちらにいる時点でこうなる事は予想済みですが・・・・・ホントにこれって勝てるのでしょうか？

《勝負にならねえ。敬遠するぞ》

流石のゆーさんもここは敬遠を選んだようですね。妥当と言えば妥当でしょうか。と、アキさんが頷こうとすると・・・・・・

「あれ・・・・・・？高橋先生、何かおかしいような？」

バッターである高橋先生を見てアキさんは首を傾げます。自分も気になって高橋先生の召喚獣をジッと見てみると・・・・・・あらら？バットを持つ右手と左手の位置が逆のようですね？・・・・・・そう言えば、以前先生に『私あんまりスポーツには詳しくないんですよ』ってことを聞いた事があるような？

『高橋先生。手が逆だな。それだと打ち難いはずだ』

ネクストバッターボックスに待機中の西村先生もそれに気がついたのか、高橋先生にご自身もバットを持って教えていますね。ああ、やっぱり先生って野球に慣れていらっしゃらないみたいです。

「ああ、どうりで・・・・・・アドバイスありがとうございます、西村先生」

西村先生に言われて、バットを構えなおす高橋先生。この様子を見ていたアキさん&ゆーさんも、お互いに『ここは勝負』とアイコンタクトをし勝負の体制に構えなおします。

《アウトコース　高めに外す　速球》

様子見も兼ねて、ゆーさんは外しの空振りを狙っているようです。
アキさんはそれに従いボールを放ると――――

「ええっと、こうでしたか」

『ストライッ！』

――――高橋先生の召喚獣は急に姿勢を変えて、バントの体制に変わります。まあ外してあるのでバットには当たらずに白球はミットに収まりましたが・・・・・・むぅ、送りバントですかね？

《ここは黙って送らせて、アウトを一つもらうぞ》

ゆーさんがアキさんに、そうやってアイコンタクトを取ります。・・・・・ん？ちょ、ちょっと待って下さい！？ゆーさんはどうやら素直に送らせるつもりのようですが・・・・・・いくら高橋先生が初心者とは言え、わざわざアウトカウントを取るようなことはしないんじゃ！？

そ、それにいくらバントとはいえ、８００点越えの点数で打たれたら一溜まりもないハズです！？さっきの姫路さんの４００点オーバーの力を見ていれば一目瞭然のハズ！そんなこと、いつものゆーさんならすぐにでも気付くはずなのに！？

《ゆーさん、アキさん！待って――――》

止める暇もなく、アキさんの召喚獣はボールを放ちます。放たれたボールはバットに吸い込まれるように向かい・・・・・・

「ここで、こう・・・・・・」

ゴンという堅い音が響き、バント成功。ただし高橋先生の狙いはただのバントではなく、

「ちぃ！？プッシュバントかっ！」

送る方ではなく、ヒット狙いのバント。そうプッシュバントです。やられました・・・・・・狙われていたようですね。

ボールは目の前に転がると予測し、前に突っ込んでいたピッチャーであるアキさんとサードの近藤くんの間を低い軌道で抜けて行きます。マズイですっ・・・・・・

「任せろ！」

と、ここでショートである復活していた須川くんがカバーに回ります。おお、助かりました！須川君はきっちりと捕球の姿勢を取り、すぐさま一塁側に返球出来るような体制を取って・・・・・・

「ごぶるぁあ！？」

「「「！？んだとぉお！？」」」

・・・・・！？ぼ、ボールと一緒に須川くんの召喚獣も吹き飛ばされました！？な、なんて恐ろしんですか・・・・・これが８０点越えの本気のパワー！？バントで召喚獣を吹き飛ばすなんて、正直ありえませんよね！？

『高橋先生あれなら二塁まで行けます！』

先生のどなたかが高橋先生に叫びます。ちぃ・・・・・・呆気にとられている暇はありません！とにかく須川くんの召喚獣ごと飛んでいったボールを追うことに。これは・・・・・やられましたねっ！

「二塁・・・・・ああ！造くんがいる方向ですね！分かりました♪」

そして、高橋先生は嬉しそうに頷き、凄い勢いで召喚獣と共に自分のいる方向の二塁へと向かいます。まるで障害が無いかの如く、真っすぐに。

『『『・・・・・・・・・・・・は？』』』

――――そう、真っすぐ一直線に。マウンドの上を突っ切って。これにはランナーである寺井先生も含め、自分たちＦクラスの皆・敵である先生方・応援席の皆さんの全員の目が点になります。

『・・・・・バッター、アウト』

審判の先生が高橋先生の凡退を宣告します。えっと・・・・・野球のルールの一つに、ランナーは所定の場所以外を走ってはいけないってルールがありますよね？それと、一塁ベースを踏んでいない状態で、二塁ベースを踏んではいけないと言うルールも。どうやら高橋先生はその事を知らなかったようですね・・・・・・

『えっと・・・・・高橋先生。アウトなのでベンチに戻ってください』

『むぅ・・・・・何故ですか？折角造くんのところに行けると思いましたのに』

『いえ・・・・・そういう物なので』

不服そうに高橋先生は、召喚獣と共にベンチに戻っていきます。ま、まあ野球をやる経験が少なかったって事でしょうし、初心者なのでそう言うこともあるんでしょうね・・・・・多分ですが。

《えっと・・・・・島田さん、お願いします（ヒュッ！）》

「（パシッ！）あ、うん・・・・・寺井先生、タッチアウトです」

「え？」

まあ、一応試合中ですし、一、二塁間で呆気にとられている寺井先生もタッチアウトにさせて貰いました。すみません寺井先生・・・・・これも勝負ですので。

『あー・・・・・・す、スリーアウト。チェンジ・・・・・・です』

『『『・・・・・・・・・・・・・』』』

折角一点も入れられずに一回の表を抑えられましたのに、先生方は勿論、自分らも観客も物凄く盛り上がっていません。何なのでしょうね・・・・・・この言いようのない気持ちは・・・・・・

≪学年主任　高橋洋子　化学　８０１点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　須川亮　化学　ＤＥＡＤ≫

そうそう・・・・・・ボールを受けようとしただけなのに、須川くんの召喚獣は静かに天に召されていました・・・・・・今日の須川くんはちょっぴり厄日ですね・・・・・・

１０７時間目　波乱の決勝：教師戦～高橋先生大活躍？～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……うーん。どうしましょう？一応野球編が終われば７．５巻のお話とオリジナルのお話を混ぜて書くつもりではありますが……８巻９巻の内容をどうしますかね～？姫路さんと明久の同棲編とかは…下手すると美波も入れての同棲になりそうですし、今さら小山さんがＦクラスを攻撃するとは思えませんし……

ひょっとしたら結構内容が変わるかもしれません。と言いますか、オリジナルのお話に描き変わるかも？まあ、っていってもまだまだ野球編も７．５巻編も書いていないので先のお話ですがね？

読んでいただきありがとうございました！

１０８時間目　不調の雄二と波乱の決勝～隠し球にご用心～（前書き）

どもです。糖分摂取魔です。

何となくですが、久しぶりに予約機能を使ってみました。正直これ使うのは苦手なんですがね（汗）更新した実感が無いですし……

まあ、ともあれ行きます１０８時間目。今回もよろしくです！

１０８時間目　不調の雄二と波乱の決勝～隠し球にご用心～

明久Ｓｉｄｅ

僕たちＦクラス対鉄人たち教師の因縁の召喚野球大会決勝。一回の表は大波乱だったけど、今度は僕たちの攻撃の番だ。見てろよ・・・・・絶対に一泡吹かせてやる！

「んじゃ、行ってくる。一発でかいの打ってきてやる」
「頼んだよ、近藤君！」

こっちのトップバッターの近藤君が、張り切って打席に立つ。向こうは科目が化学なだけに、ピッチャーは化学の担当教師の布施先生。キャッチャーは鉄人と言う組み合わせだ。あ、ちなみに一回表で様々な意味で活躍（？）した高橋先生の守備位置はライト。あの点数じゃ流石にピッチャーは任せられなかったんだろうね。高橋先生と瑞希が重なるのは気のせいではないだろう。

「高橋先生のいるライトに飛ばせれば、勝機があるかもしれないね」
《そですね、まあただ、ライトに飛ばすだけの余裕も今はなさそうですがね。ねえ、ゆーさん？》

霧島さんとの一件以来物凄く機嫌の悪い雄二を、フォローするように造が話しかける。相変わらず気が回るなぁ～・・・・・まあ、その本人はと言うと――――

「ああ、そうかもな」

――ぶっきらぼうに返事をするだけ。コイツ・・・・・全然機嫌直ってないな？全く、らしくないと言うか何と言うか・・・・・

「（ホント、この試合どうなるんだろうね？）」

雄二があんな感じだし、とりあえず皆に小声で相談する。下手に雄二を刺激したくないからね。

≪（うーん・・・・・一応ゆーさんの『ストライクっ！』作戦では、終盤が『ストライク、ツー！』先生方に勝つ、唯一の鍵だって『ストライク！バッターアウト！』言ってましたよね？）≫

「（・・・・・・・・・・・序盤は点を取られないように『ストライク！』だけ、気を付けて『ストライク、ツー！』いればいいらしい）」

「（それにしても『ストライク！バッターアウト！』坂本があんな感じで『ストライク！』本当に何とかなるの？）」

「（私たちだけじゃ、先生方に勝つ方法なんて『ストライク、ツー！』わかりませんよね・・・・・）」

「（まあ、ここは一先ず皆で応援を『ストライク！バッターアウト！チェンジ！』――する前に、さあ守備だ。皆頑張ろう）」

「「「≪（おー・・・・・・・・・・）≫」」」

近藤君・横溝君・秀吉の全員が三球三振に倒れる。向こうに比べると戦力的にこっちの方が圧倒的に不利だってことくらい最初からわ

かっていたけど、なんて僕らの攻撃は短いんだろうか。

気を取り直して再び守備につく僕ら。科目は世界史ってことで、ピッチャーはまた僕がやる事になった。まあ、召喚大会や瑞希たちとの勉強会以来世界史と日本史は僕の得意教科だからね。ここは活躍できそうかな。

「さぁ来いっ！今度はさっきまでのようにはいかないはずだっ！」

マウンドの上でバッターを待つ。さあ、次は誰だっ！どう料理して

――――

「ほう？随分威勢が良いな吉井」

――――ヤバイ、どう考えても僕が料理されそうだ。いきなり鉄人とか、もう意欲が削がれまくりだよ・・・・・・い、いや！鉄人は僕らＦクラスの担任なんかしているわけだし、怖いところと言えばあの無尽蔵の体力と無敵の身体能力だけのはずだ！頭はそこまで良くないと

≪補習教師　西村宗一　世界史　７４１点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　吉井明久　世界史　１７４点≫

《敬遠するぞ》

《ＯＫ雄二》

目を見るまでもなく雄二の考えが伝わってきたよ。あの化け物相手に真っ向から勝負なんて正気の沙汰じゃない。ここは大人しく塁に出そう。

「・・・・・あれ？」

と、雄二はキャッチャーミットをストライクゾーンの外に構える。立ち上がらないのかな？もしかして雄二の事だし、敬遠すると見せかけて三振狙いとか？いくらなんでも立ち上がるのが面倒だったってことは・・・・・ないと思うし？

多少疑問に思いつつも、一先ず雄二の指示通りにボールを投げる。

『ボール！』

一球目は鉄人は眉を顰めながらも見逃す。ん？鉄人もどうしたんだろ？敬遠されるってことが腹立たしいのかな？

『・・・・・これは、坂本の指示か？』

『そうだが、何か？』

『・・・・・そうか』

何だか不機嫌そうに低い声で雄二にそんな事を言う鉄人。まさか敬遠が汚いなんて言うつもりなんだろうか？敬遠だって立派な作戦の一つなのに？

『やれやれ・・・・お前たちは勉強が苦手でも、こういったことはわかっているものだと思っていたんだがな・・・・・まだまだ教育が必要だということか』

『？　何を言ってるんだ？敬遠くらい、勝負の世界では常識だろう。この程度のことで文句を言うとは――』

『いいや。そういうことを言っているんじゃない・・・・・いいか、坂本。教師として一つ言っておく』

何だかよくわからないけど、とりあえず雄二の指示通りボールを投げる。会話の途中だったみたいだけど、どうせ敬遠なら別に

『――何事も、やるならば徹底的にやれ！』

ガギン！

「「なっ！？」」

物凄く豪快な音が響き、ミットに向かっていたはずのボールがかき消えた！？ば、バカなっ！？敬遠球を打たれたの！？

慌てて後ろを振り返るも、ボールはどこにも見えない。フィールドにないってことは・・・・・くそっ！ホームランか！？

『・・・・・ふっ、月野に救われたな？』

と、鉄人はニッと笑うと、一塁には行かずに再びバッターボックス

に戻る。あ、あれ?どうして・・・・・・・?

『ファール!』

「「・・・・・・え?」」

ど、どう言うこと?ファールって・・・・・今の軌道なら、明らかにホームランじゃ?それに鉄人が言っている“月野に救われたな”って・・・・・・・

『た、タイムじゃ!造、大丈夫かの!?』

と、突然に秀吉がタイムを取る。秀吉の声のした方向を見ると・・・・・

《た、たはは・・・・・流石西村せんせ、ですね・・・・・・点数半分・・・・・使っても・・・・・・ボールの軌道を変えるだけで、精一杯・・・・・・・でしたよ》

≪Ｆクラス　月野造　世界史　４５１点　↓Ｆクラス　月野造　世界史　２０３点≫

造がかなり辛そうにしている。ま、まさかアレを止めようとしたの!?僕も、そして雄二も慌てて造の元に駆け寄る。

「造大丈夫!?ホントにゴメン・・・・・・まさか打たれるなんて・・・・・」

《あはは・・・・・・大丈夫ですよ。それにしても警戒してて正解でしたね♪》

造は打たれた事を気にしていないように僕に言ってくる。にしても相変わらず何て無茶するんだ!?僕と造にとって、召喚獣の点数は体力ゲージに相当する。一応フィードバックが全部返ってくるわけじゃないけど、それでも当然点数が半分になれば体力も半分になるって事なのに・・・・・・

「悪い・・・・・甘かった・・・・・・」

「そうじゃ!雄二、あの腕輪で造の点を戻せぬか?どの道半分も削れておるのじゃ。点を回復させておけば次の造の打席も――――」

あっ、そうか!雄二にはあの点数回復の黒金の腕輪があるんだったね。それなら造の点も回復するだろうし、体力も・・・・・・

「そ、そうだな・・・・・・なら今すぐ《ゆーさん、無理ですよ?》――――は?」

と、造は腕輪を取り出している雄二にやんわりと首を横に振る。造はどうしたんだろう?回復すれば辛くないだろうに?

《ゆーさん・・・・・・腕輪を使用する際の条件、覚えていらっしゃいますか?》

「は?いや、それは・・・・・・お前や明久の腕輪のようにキーワ

ードを言うことだろ?俺の場合は『再設定(リセット)』って言わないと――」
《・・・・・違いますよ?ゆーさんの腕輪を使用するには“あらかじめフィールドに『設定(セット)』のキーワードを発動すること”が条件でしょ?》
「っ!?」

・・・・・そ、そう言えば造と雄二がEクラス戦の時に雄二の腕輪の説明でそんなことを言ってたよね。ま、まさかだけど雄二・・・・・!

《ゆーさんこの回、『設定(セット)』使ってないでしょ?》
「・・・・・・・・・・・すまん」

やっぱり・・・・・そんな単純なミスするなんて、いつもの雄二では考えられない。そもそも腕輪を使って出し抜くって作戦は、雄二が何よりも得意としていたのに腕輪の存在すら忘れているなんてらしくないにも程がある。さっきの鉄人の時と言い、初回のプッシュバントの件と言い、悪知恵だけがウリの雄二がこんな調子じゃ・・・・・

《自分の事はどうでもいいですが・・・・・とりあえずちゃんと立って、西村せんせは歩かせる事にしましょう。ゆーさん。ご自身が一番わかっていらっしゃると思いますが、ここは切り替えてくださいね?》
「・・・・・・・・・・・ああ、すまなかった」

そう言うと、雄二は踵を返しキャッチャーボックスに戻って行った。

『『《・・・・・・・・・・・ハァ》』』

残った僕らは顔を見合わせて、同時に溜息を吐く。ダメだ・・・・・・あんな状態の雄二に試合なんて任せてたら、とてもじゃないけど先生たちに勝つなんて夢のまた夢だ。

《・・・・・とりあえず今は”あのゆーさん”に任せて、どうしようもなければ自分がキャッチャーになりますね。アキさん。それまでは大変かもしれませんが、ゆーさんをお願いします》

「・・・・・そうじゃの。本人も本調子ではないことくらいわかっておるようじゃが、このままではコールド負けも考えられるぞい」

「・・・・・あのバカ・・・・・まあ、霧島さんの事で悩むのはわかるけど、それとこれとは別なのに・・・・・」

・・・・・とりあえず鉄人は歩かせて次から勝負をする事に。諦める気はさらさら無いけど、雄二があのまま腑抜けているようなら・・・・・この勝負、絶対に勝てないと僕らは心の中でそう考えていた。

☆

・・・・・現在得点は【２　－　０】しかもツーアウト満塁のピンチ。あの後、一応鉄人を歩かせた後に大島先生がホームランを放ちこんな結果になっている。僕の球が打たれやすいってこともあるだろうけど、雄二の指示がかなり雑になってきたところを狙われた

感じだ。正直2点も入れられたのは痛すぎる・・・・・・これ以上点が離されたら、本気で追いつけないね。

迎える打者は一巡して、再び一番の布施先生。ちぃ・・・・・・そろそろこの野球に慣れてきている頃だろうし、一回のような先生のミスを待つなんて無駄だろうね。と、どうやって勝負するか悩んでいると、僕の視界の隅で秀吉が手を上げて何かを訴えてくる。ん？どしたんだろ？

《明久よ。牽制球を頼む》

そうアイコンタクトを送る秀吉。・・・・・ふむ？もしかしてちょっと落ち着けってことかな？一先ず秀吉の言う通り一塁に向かってボールを投げる。

パシン！

軽く投げられたボールは、秀吉の召喚獣のグローブに収まったけど・・・・・勿論ランナーはアウトになるわけもなく、悠々と塁上に立っている。まあ、多少これで落ち着けたかな？と、秀吉にボールを戻して貰おうと手を上げると

『・・・・・むぅ。タイムじゃ』

何やら心配そうに顔を歪ませてタイムを宣言する秀吉。あれ？何か悪かったのかな？そのまま秀吉と秀吉の召喚獣は僕のところにやっ

てくる。

「？どしたの秀吉？」

「・・・・・いやなに。ちょっと仕掛けをじゃな。造！すまぬが来てくれぬか？」

秀吉は僕のところに来ると、ついでに造も呼びだした。んー・・・・・ひょっとして雄二の件で何か相談したいのかな？造もトコトコやって来たけど・・・・・・

《ふふっ♪・・・・・・ヒデさん、アレやりますか？》

？？？何だか秀吉と造、先に二人で会話してたみたいだけど・・・・・“アレ”って？出来れば僕にも教えて欲しいんだけどな？

「えっと・・・・・・二人とも？」

「おお、すまん明久。実はの――」

《ふふっ♪自分たち実は――》

と、二人は僕に近づき、耳打ちするように小声で囁く。と言っても、造が召喚獣になっているから秀吉が造を持ち上げて耳打ちすると言う、中々シュールな絵になっているけどね？

「えっと、実は何かな？」

「《実は、自分たち（ワシら）この試合が終わったら・・・・・・

お風呂に入りたいんです（入りたいのじゃ）≫」

「――――――はぁ！？」

ちょ！？ななな、何を言っているんだこの二人は！？この状況で僕を惑わせてどうしようって言うんだ！？女の子二人がお風呂に入りたいって・・・・・こう言う時、どう反応すればいいんだろうか？

「それだけじゃ。邪魔したの。造、後はタイミングを見て、の♪」

≪はいです♪ではアキさん、失礼しますね～≫

二人とも、何か企んでいるように小悪魔的な笑みを残してお互いの守備位置に戻る。その一方で、僕はまだ混乱の極みになっていた。ど、どう反応すればいいのだろうか？お風呂？何？ひょっとして『だからお風呂を沸かして欲しい』って言う事なのかな？ど、どうしよう？ここは瑞希と美波に頼んで造たちをお風呂に入れてもらうしか・・・・・いや、そんなこと二人には頼めないだろうし、姉さんにでも頼むか？いやいや、それだと不純異性行為がどうのこうのと勘違いをされかねん。

『プレイッ！』

未だに混乱している僕に構わず、審判の先生が試合再開を高らかに宣言する。し、仕方ない・・・・・二人の言った意味はわからないけど、ここはちゃんと抑えて二人を説得するとしよう。女の子がそう言うこと言っちゃいけませんって！

気を取り直して投球を始めようとすると・・・・・

「ってあれ?ボールが・・・・・・ない?」

どう言うわけか、僕の召喚獣はボールを持っていなかった。あれ?さっき確か秀吉の召喚獣がボールを持ってきたと思ったんだけど?あ、もしかして貰ってなかったのかな?そう思って秀吉の方を見るけど・・・・・・んん?秀吉の召喚獣もボールを持ってない?どう言うこと?じゃあボールはどこに・・・・・・?ボールの行方を捜そうとあたりを見回すと、

《船越先生♪》

『はい!何でしょうか造くん♪』

ポスッ!

《ふふっ♪タッチアウトです》

『・・・・・・あら?』

・・・・・・何故か二塁の方向でそんな声が。造?え?タッチアウトって・・・・・・?僕の手元にも、そして秀吉の手元にもボールが無く代わりに造のグローブの中にボールが握られていた。そしてそのまま造は二塁にいた船越先生にグローブを当ててニッコリ笑っているけど――これってまさか、隠し球!?いつの間に・・・・・・!?

『ランナーアウト、チェンジ！』

審判が攻守交代を告げる。う、嘘！？本当にこのピンチを切り抜けたの？

「造ちゃん、木下！ナイス！」

「隠し玉なんて、味な真似しやがって！流石だぜ！」

「・・・・・・・・・・・グッジョブ」

僕らのベンチの中で、皆が秀吉と造を誉め称える。ホント助かったよ！もう一点は覚悟してたし。

「これでワシも少しは役に立てたかの♪造、ナイスプレーじゃ！」

《ヒデさんもね♪何か合図してましたから、何かあるだろうと思いましたが隠し球とは♪しかも一度ヒデさんがボールを持つことで、一塁側に注目させて油断を誘うなんて恐れ入りましたよ》

と、二人はお互いにハイタッチしながら喜んでいる。ああ、なるほど。さっきのはその為のタイムだったんだね。・・・・・ってことは、

「何だ、さっきの造と秀吉が言った『お風呂に入りたい』ってのはジョークか何かだったんだね？もう、ビックリさせないでよ～」

「《ん？・・・・・・風呂？》」

なるほど。敢えて僕に動揺させることで、先生たちに僕らが焦って

いるってことを印象付ける為に『お風呂に入りたい』なんてとんでもない事を言ったんだね？流石は演劇部の秀吉だ。そういう演技はお手の物か。

《・・・・・い、いや！お風呂には勿論入りたいですよ！皆さんと一緒にね！ねえ、ヒデさん！》

「そ、そうじゃな！風呂じゃ！のう明久たちよ、是非ワシらと共に男湯へ――」

ガシッ！×２

「あらあら、ダメじゃない木下、月野。知らないの？お風呂は性別ごとに別れて入るものなのよ？（アキと一緒にお風呂なんて、ウチらもまだやってないのに！）」

「そうですよ木下君、月野君。もしお友達と一緒にと言うのなら、お風呂は後で私たちとゆっくり入りましょうね？（明久君とお風呂に入るのは、私たちですらまだやってないんですよ！）」

「ちょ、ちょっと！？それは色々とマズイでしょ！？てか自分らは男ですってば！」

「そ、そうじゃぞ、島田に姫路！？落ち着くのじゃ！と言うかじゃな、お主らついにワシらと風呂に入るということにすら違和感を覚えなくなっておるのか！？」

瑞希と美波は造と秀吉の腕を抱えて、とてもにこやかに微笑んでいる。うんうん♪やっぱり女の子同士仲が良いのは絵になるなぁ～

さてさて、それじゃあ・・・・・・盗られたものは物は取り返す。
それは僕らの写真もエロ本も私物も――――そしてこの回奪われた点もね。

「さぁ皆、今度はこっちの攻撃だよ！そろそろ流れを引き込もう！」

「「「おうっ！」」」

１０８時間目　不調の雄二と波乱の決勝～隠し球にご用心～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

……先に皆さんに謝っておくと、今回造と秀吉がやった隠し球って厳密にはアウトにならないと指摘されるかもしれません。自分も詳しくは無いのでよくわかっていないのですが、タイムを取られた時点でボールデッドになってたり、明久が投手板に少しでも近づいていたら隠し球が成立しないとか？

その辺はあくまで”生徒・教師の交流召喚野球”だったので、審判の先生が大目にみたって感じで勘弁して貰えると嬉しいです。若しくは造が先生を懐柔したって考えて貰って構いませんよ？

造「してませんからね！？」

さて、次回は一旦本編から離れて、番外編『覚えよう野球のルール！』となっております。読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです♪

番外編：覚えよう野球のルール！～スクイズしてください！～（前書き）

今日も元気に更新中。どうも糖分摂取魔です。

すっごく今さらですが、何だかこの召喚野球編って地味に長いですね（汗）途中でこれ以外に番外編を入れたせいでもありますが……

まあ、原作も長めでしたし、仕方ないのでしょうかね～？

んじゃ、今日も行きますよー！番外編『覚えよう野球のルール！』スタート♪

番外編：覚えよう野球のルール！～スクイズしてください！～

問1．次の野球用語について説明しなさい。
『タッチアップ』

坂本雄二の答え
『フライがあがった時に走者がその打球の行方を見守ること。捕球後は進塁することができる』

教師のコメント
その通りです。

姫路瑞希の答え
『痴漢をする』

教師のコメント
野球のタッチアップを知らないのに英語の　ｔｏｕｃｈ　ｕｐ　のそんな訳まで知っているとは、流石に先生も驚きました。英語を訳す上では正解ですが、野球用語としては間違いです。

土屋康太の答え
『フライがあがった時に走者が打球とチアリーダーのスコートを確認すること。捕球後は痴漢しに行くことができる』

教師のコメント
落ち着いて下さい。正しい知識といやらしい願望が混ざっています。

霧島翔子の答え
『フライがあがった時に夫(ゆうじ)をチアリーダーとしてコスプレさせること。捕獲後は夫(ゆうじ)を痴漢しに行くことができる』

教師のコメント
霧島さんも落ち着いて下さい。と、言いますか色々とツッコミどころが多すぎてどれからツッコむべきかわかりません。

坂本雄二のコメント
と言うか、翔子は自重しろ!?てか、それはお前の願望なのか!?

問2．ヒットエンドランとは、どのような連携でしょうか？

吉井明久の答え
『ピッチャーがボールを投げると同時に走者が次の塁に走って、バッターもボールを打つ連携のこと』

教師のコメント
その通りです。ちなみに余談ですがヒットエンドランは、打者の打撃方法や走者の走行タイミングなどでいくつかの応用戦術があります。バントエンドランやバスターエンドランなどがいい例ですかね。

姫路瑞希の答え
『当て逃げ』

教師のコメント
えっと、確かに　ｈｉｔ‐ａｎｄ‐ｒｕｎ　ａｃｃｉｄｅｎｔ　で当て逃げ事故と言う意味ですが、野球用語としての問題ですので不正解ですね。

月野造のコメント
・・・・・・姫路さんや高橋先生レベルの打球の威力は当て逃げ・ひき逃げレベルですし、ある意味合っているかもですがね・・・・・・

～解答終了後～

「うぅ・・・・・・難しいですね。野球のルールって」
「ふふっ♪大丈夫ですよ姫路さん。誰でも最初は初心者ですし、わからなくて当然ですよ」
「でも・・・・・・もうすぐ召喚野球大会があるのに、私何もわからなくて・・・・・・」
「あ、でしたら、とりあえず姫路さんは放課後にでもアキさんやゆーさんたちに野球のルールを教わってはいかがでしょうか？」
「え？明久君たちに・・・・・・ですか？」

☆

体育祭兼召喚野球大会前のとある放課後の教室にて――――

「――と言うわけで、数日後に召喚野球大会を控えているわけなんだが・・・・・野球をほとんど知らない姫路に、簡単に野球のルールについて説明をしようと思う」
「あはは♪僕らが教えるなんて、いつもとは逆の立場だね」
「よ、宜しくお願いします」

先日のちょっとした野球に関する問題で、野球の事があまり理解出来ていないようであった瑞希の為に、明久と雄二が一通りの野球についての知識を教えることとなった。

「今回は・・・・・そうだな。“ボーク”などの反則行為についてだ」
「ボーク、ですか？」
「そうだ。これはピッチャーの投球や送球における反則行為の一つなんだがな」
「反則ですか。具体的にはどういうものなんですか？」
「その辺は明久、説明を頼む。俺は要点を黒板に書いておく」
「オッケー。ふむ、例えばそうだね・・・・・プレートに足を着けた状態で一塁に牽制球を投げるフリをして、実際には投げないとかだね。まあ、言ってしまえばピッチャーが走者――じゃなくて、塁に出ている人を騙して盗塁とかヒットエンドランを阻むことが無いようにってルールなんだよ」
「・・・・・？当て逃げを防止するんですか？」
「ＯＫ、とりあえず瑞希はヒットエンドランを当て逃げと結びつけないようにする事から始めようか？」

雄二は黒板に要点を書きつつ、明久は具体的な説明を瑞希にする。
こういうことがちゃんと出来るなら、普段の授業も真面目に受ければいいのに・・・・・・と、思うのは野暮なのだろうか？

「「それは全力で断る！」」

「？？？えっと・・・・・・二人とも、突然どうしたんですか？」
「ああ、すまん。気にしないでくれ。ボークに関しては明久の言った通りの事だな。他に例を上げるならつま先を打者方向に向けたままでの牽制球とか」
「そうそう、あとは二段モーションって言って――投球動作中に少しでも全身の動きが止まったりすると、これも反則になるんだよ」
「ええと、つま先を打者に向けての牽制球に、二段モーション・・・・」

瑞希が一生懸命ノートにメモを取る。流石に真面目な子なだけあって、真剣に理解しようと頑張っているようだ。

「姫路、そう深く考えなくていいさ。要するにピッチャーが球を投げる時には、走者やバッターに対して【紛らわしい・思わせぶり】と取られるような行動をしちゃいけないってことだ」
「そゆこと。バッターが『来る！』と思っていたら牽制球だったり、『来ない』と思っていたらいきなり投げてこられたり、なんてされたら大変でしょ？簡単に言っちゃえばその防止のためのルールなんだよ」

そんな瑞希の授業態度に苦笑いをしながら、明久と雄二は朗らかに

説明する。その二人の説明を受け、瑞希はポンッ！と手を叩き――
――

「なるほど・・・・・・紛らわしい事・思わせぶりな行動はボーク、ですね！」
「ああ。大まかにはそう考えてもらって構わない」
「じゃあ、あれもボーク何ですか？」

「「？？？あれ？」」

と、突然に瑞希が指差した先には――

『全く・・・・・・小暮さん？自分を弄ってそんなに楽しいんですか・・・・・・？』
『ふふふっ♪そんなことはありませんが・・・・・・確かに月野君と一緒にいると楽しいってことは否定できませんね♪月野君は私と一緒にいるのは嫌でしょうか？』
『小暮さんと一緒にいて楽しいのは自分も勿論否定しませんが、弄られるのは男のプライドが・・・・・・』
『ああ、なるほど♪月野君は色々と悩み事が多いですね～♪ですが悩める乙女は素敵でしてよ？』
『そうですね、悩み多き人生ですもの。ちなみに今現在の悩みは、今自分の隣にいらっしゃる方に全力で弄られることですかね！？』
『もう♪そんなに褒めないでくださいな♪照れちゃいますわ』
『褒めてませんってばっ！誰が乙女ですか、誰が！』

「「・・・・・・・・・・？」」

――何やら良くわからない会話をしている造と３－Ａの智将：小暮葵が並んで廊下を歩いている光景が。

「・・・・・えっと、瑞希？”あれ”って造と着物先輩のこと？」
「はい。さっきのお二人ってボークでしょう？」
「・・・・・すまん姫路。どう言う意味かさっぱりなんだが？」
「え？だってボークって”紛らわしい事・思わせぶりな行動”の事何ですよね？月野君は”性別が紛らわしく”て、あの先輩は月野君に”思わせぶりな行動”をしているじゃないですか？」

「「ボークはそう言う意味じゃ・・・・・いや、合っているのか・・・・・？」」

・・・・・何故か野球の話から哲学的な（？）話へと、大幅に話が逸れたにも拘らず明久と雄二は妙に納得してしまったとか。個人的な意見としては、造と小暮さんは存在自体がボーク且つ、反則な気がするがね？

☆

これまたとある放課後――――

「高橋先生。頼まれていた資料を持ってきました」
「ありがとうございます姫路さん」

「いいえ。えっと、ここに置いておきますね」

ここは他の先生方が所用で出ており、高橋先生しか教師がいない職員室。瑞希が机の上に持ってきた資料を置いていると、不意に彼女の耳にラジオの音が入ってくる。

《大日本高校、1点を追う状況でバッターは山根。ここまでの打率は――》

「あれ？高校野球のラジオですか？」

「はい。どうにも私は野球に疎いようなので、勉強も兼ねて聞いていました」

と、瑞希に貰った資料に目を通しながらも高橋先生は苦笑い混じりにそう言ってくる。

「勉強ですか。高橋先生は勤勉ですね」

「いえいえ。わからないことは勉強しておく必要がありますから」

「そうですよね。私も実は明久君たちに教わっているんですよ♪私も頑張らないと・・・・・・」

「そうなんですか♪では一緒に頑張りましょう。ね、姫路さん♪」

「はい！頑張ります！」

そう言って笑い合う二人。生徒と先生という立場ではあるが、何だかんだでこの二人は気が合うのかもしれない。立ち位置も性格もかなり似ているし。

「あ。わからないことと言えば。野球に関係あるかどうかはわからないんですけど・・・・・・」
「？なんでしょうか姫路さん？」
「先生はスクイズって何のことだかご存じないですか？ここに来る前に、明久君と坂本君がそんな話をしていたのが気になって。本当は自分で調べた方が一番良いことですけど・・・・・・」
「いいえ。気になったことを忘れないうちに確認するのも大事なことです。姫路さんは立派ですよ♪」
「あ、ありがとうございます♪」
「そうですね。スクイズ、ですか・・・・・・」

※スクイズとは――野球で三塁走者と打者が示し合わせて、打者がバントをすることで走者を本塁に迎える連携プレーのこと

「あまり私も詳しくはありませんが・・・・・・響きから察するに――『スクール水着』の略称か何かだと思います」
「あ、なるほど。そうなんですか。ありがとうございます」

・・・・・・・・・・・ツッコミが・・・・・・いないだと？この場に誰か一人でも常識人の先生がいれば絶対にツッコまれていたであろう間違った知識を、何の違和感もなく二人が頭の中に入れ込んでいると・・・・・・ラジオから解説の声が聞こえてくる。

《大日本高校、ここはきっちりスクイズを決めてきましたね》
《そうですね。７番・山根権三郎くん、見事なスクイズでした》

「「・・・・・・・・・・・・」」

「先生。高校野球って、スクール水着を着てやるものなんですか？」

「もしかしたら、暑さの厳しい地域の風習なのかもしれません」

「そ、そうですよね・・・・・・（明久君のスクイズ・・・・・・）」

「そ、そうでしょう・・・・・・（造くんのスクイズ・・・・・・）」

やはり完全に違う意味でスクイズの事を認識してしまった高橋先生と瑞希。そしてその最悪のタイミングで――――

「失礼しまーす！あ、瑞希いたいた。今日の野球の授業は外でやるよー」

「失礼しますです。高橋先生。何か良くわかりませんが、日高先生が呼んでましたよ」

――――能天気にニコニコと笑いながら、この状況も自分たちがピンチだと言うことすらも理解していない最高の獲物（かも）がやってくる。

「「・・・・・・・・・・・・」」

そして高橋先生と瑞希はお互い顔を見合わせると・・・・・・

「あ、明久君！スクイズしてくれませんか！？」

「つ、造くん！造くんもスクイズしてください！？」

「「・・・・・・・・・・・・へ？」」

「「スクイズです！スクイズをお願いします！！」」

「「？？？（スクイズって、お願いされるものなのかな？）」」

いきなりそんなことを言われて、造と明久は頭にクエスチョンマークを浮かべ首を傾げる。

「えっと・・・・・・よくわかりませんが、つまりスクイズプレーをすればいいんですよね？」

「スク水プレイ！？は、はいっ！恐らくそれです！」

「んー・・・・・・まあ、どの道今日は簡単に試合の流れを教えようと思ってたし、僕でいいならやるよ瑞希？」

「本当ですか！？あ、ありがとうございます明久君！では――――」

と、高橋先生と瑞希は嬉しそうに鞄の中を探ると――――

「「――――では、早速お願いします！これに着替えてくださいっ！さあ！」」

「「・・・・・・・・・・・・・・る？」」

――――その日、涙目になりながらも必死で逃げる造と明久の後ろを、スクール水着（女子用）を片手に全力疾走で追いかける高橋先生と瑞希の姿が見られたとか。どうしてピンポイントに高橋先生＆瑞希はスク水なんか持っていたか・・・・・それはこの二人にしかわからない永遠の謎だろう。

番外編：覚えよう野球のルール！～スクイズしてください！～（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

……うん、自分が書くとどうしてこうなるのやら。もうね、野球関係ないですよね？書いてる自分もビックリですよ。とりあえず高橋先生＆姫路さん自重（笑）

まあ、何だかんだで自分も野球には疎いですがね？正直に白状すると、スクイズなんてホントに知りませんでした。姫路さんたちに言えたことではないですね……でもスクイズ＝スク水って発想は流石にしませんでしたよ？

そうそう、ちなみに小暮さんが造に対して言った『ですが悩める乙女は～』って台詞は、小暮さんの冗談ですのであしからず。この作品では珍しく、小暮さんは造のことを男と認識してるとか？

まあ、それはさておき（？）ではまた次回！読んでいただきありがとうございました！

１０９時間目　勝利のカギは～文さん&小暮さんに在り！？～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。皆さん元気ですか？

またまたどうでもいい事なんですが、作者の名前の『糖分摂取魔』って今更ながらに変な名前ですよね（汗）何故にこんな名前にしたのやら……？５月のあの日の自分に戻って、どうしてそんな名前にしたの？って聞きたいです。

まあ、どうでもいいですね。んじゃ今日もよろしくです！１０９時間目スタート♪

１０９時間目　勝利のカギは～文さん＆小暮さんに在り！？～

造Ｓｉｄｅ

「さぁ皆、またこっちの守備だよ。頑張ろう」

「「「おー・・・・・・・」」」

《うぅ・・・・・結局塁に出られませんでした・・・・・・・》

笑っちゃいますよね？先生方の攻撃はあんなにも綺麗に続くのに、こちらはまだ誰一人塁に出ていませんもの・・・・・・自分も先ほど消費した点が響いたのか、先生の放つボールに力負けして結局三者凡退。これは本気でマズイですね・・・・・・

二回が終わって三回の表。科目は世界史から物理に変更されています。打順は先ほど隠し球で結局打っていなかった布施先生からスタートしたんですが・・・・・布施先生にはヒットを打たれ、２番打者の寺井先生にはセーフティバントを決められてしまい、気が付けばノーアウト、一・二塁とまたもやピンチです。そんでもって迎えるバッターは

「宜しくお願いします」

またもやこの人、学年主任の高橋先生。正直あの点数を見せつけられては、勝負はしたくないんですが・・・・・・

《敬遠はしないよね？》

《・・・・・当たり前だ》

ゆーさんたちの様子では、ここは勝負に出るようですね。まあ、何せ次は西村先生に大島先生が控えてあるわけですし・・・・・ノーアウト満塁の状況にだけはしたくないですからね。

「今度は上手くやりますね！」

と、高橋先生はバットを短く持ちます。あれは・・・・・恐らく当てる事を意識してある構え方ですね。先生のどなたかにアドバイスを貰ったんでしょうね・・・・・・

《アウトコース　高め　速い球》

ゆーさんは先生の召喚獣から最も離れたコースを指示しています。・・・・・何だかゆーさんにしたらちょっと消極的ですね？普段でしたら敢えて裏をかき、インコースを狙うくらいはすると思うんですが・・・・・・？

そんなことを思っている間にも、アキさんは全力でボールを放ります。ゆーさんの指示通り、アウトコースに投げられたボールは・・・・・

「まぁ、予想通りですね」

「「――――っ！何ぃ！？」」

・・・・・突如腕を伸ばした高橋先生の召喚獣に、見事に打たれます。くっ・・・・・・例え野球に関しては初心者でも、頭の良さは随一な高橋先生。やはりコースを読んできましたね！？

「ま、また来た！？こっちくんなぶるぁあああああ！？」

高橋先生に打たれたボールはまたもやショートを守っていた須川くんの召喚獣を吹き飛ばし、自分が守るセンター前へと転がってきます。ちぃ・・・・・・今度こそ完全にやられましたっ！？

『『『高橋先生！今度はきちんと一塁から順に回ってください！』』』

「わかっています。同じミスは、二度と犯しません」

教師チームの皆さんの指示を受け、高橋先生の召喚獣はその驚異の点数に比例した速度で１、２、３塁ベースを順番に踏んで行きます。マズイですね。あの速さじゃこーさんの召喚獣並みです。これじゃ間に合わなく・・・・・・って、あれ？ホントにあれは、速すぎでは？あのままじゃ――――

『高橋先生・・・・・・アウト、です・・・・・・』

『なぜですか』

――――何と、速すぎて前の走者である寺井先生、布施先生を追い越

してしまいました・・・・・・

『『『・・・・・・・・・・・・』』』

これにはこの場にいる、全ての人間が絶句します。そう・・・・・・野球のルールの中に、“後位の走者がアウトとなっていない前位の走者に先んじた場合、後位の走者がアウトになる”というものがあります。要するに前のランナーを追い抜いたらアウトになるってことですね。

『とにかく高橋先生。アウトなので戻ってください・・・・・・』
『納得できません。折角造くんに良いところ見せれそうでしたのに』
『そういうものなので・・・・・・』

高橋先生は不満そうな目をしつつ、自陣へと戻っていきます。ま、まあこれは高橋先生の点数があまりに高すぎた事による悲劇なんでしょう。このルールは知らないなら仕方のない・・・・・・事だと思いますし。

《えっと、すみません。タッチアウトです。島田さんお願いします（ヒュッ）》
『え？』
『（パシッ）あ、うん・・・・・・それじゃ、こっちもアウトです』
『あ』

『・・・・・・・・・・・・3アウト、チェンジ』

高橋先生の行動に呆然と立ち尽くす布施先生と寺井先生を、それぞれタッチアウトにさせて一応これで3アウト。審判の先生が物凄く力なく宣言しますね。まあ、このようなトリプルプレーなんて、見たことないですし・・・・・・

ともあれ、何とかこれで凌ぎ切りました!後はこっちが点を入れられればいいのですが・・・・・・

「・・・・・・・・・・・ちっ」

《・・・・・・ゆーさん・・・・・・》

ゆーさんの機嫌も調子も戻っていないこの状況で、点を入れることは難しそうですね・・・・・・前回の事もさっきの高橋先生の行動も、普段のゆーさんでしたらすぐに予測して対抗策を練るハズですのに。今回は怒りで全く頭が回っていないようです。

・・・・・このままではホントに負けちゃいますね。せめて霧島さんがどうしてあんな行動をしたのかだけでも分かれば(ポスッ!)・・・・・・ん?何でしょう?何か柔らかいものが観客席から飛んできましたね?何ですこれ?ぬいぐるみ?

《・・・・・・・・・・・・!?ってホント何これ!?自分のぬいぐるみ!?》

な、何故か以前こーさんが作ってきて、そのまま没収した自分にそっくりのぬいぐるみが飛んできたんですが!?ホントに何ですかコレ!?慌てて飛んできた方向を振り向くと、

《って、小暮さんに文さん・・・・・・あの人たちは・・・・・・》

そう、そこにはさっきまで姿が見えなかった小暮さんと文さんの姿が見えます。なるほど?また彼女たちの悪戯ですね?全く、今はそんな状況じゃ・・・・・・って、あれ?二人とも自分を手招きしてる・・・・・・?

『月野君、お話があります。少々宜しいですか?』

《ツクル　コッチに　来て!　ハヤク!》

・・・・・・・・・・何だかわかりませんが、いつもに比べると、二人はとても真剣な顔でそう言っています。もしかして、何かあったのでしょうか?

どの道この回は自分の出番はなさそうですし、少しだけベンチから離れる事に。これは唯の勘なんですが・・・・・ひょっとしたら、物凄く大事な何かをお二人は知っているのかも・・・・・・?

~造移動中~

《お待たせしました。どうしたんですか?小暮さんに文さん?》

とりあえずこっそりベンチを抜け出して観客席まで走り二人の元に辿り着きます。どうやら二人のいる席は穴場だったらしく、他の応

援している皆さんが周りにいないようですね。

「すみません、突然に・・・・・・ねえ月野君?単刀直入に聞きますが、貴方は霧島さんと坂本君が仲違いしている事は知っていますか?」

《!?え、ええ。その場にいたので勿論知っていますよ?ですが、どうして小暮さんがそれを――――》

知っているんですか?と質問しようとする自分に、小暮さんは手を翳して――――

「それでは・・・・・月野君。月野君は霧島さんが坂本君に怒った本当の理由を知っていますか?」

自分が質問する事も許さず、小暮さんは真剣に自分に問いかけます。今回はかなり真面目な話のようです。こんなに真剣な小暮さんは久しぶりですね・・・・・・

《・・・・・すみません、情けない話ですが正直さっぱりなんです。霧島さんの行動には何か違和感があるってことくらいしか・・・・・わからないんです》

どう言う経緯かわかりませんが、どうやら小暮さんは霧島さんとゆーさんのことを知っている様子ですね。もしかしたら霧島さんと・・・・・

「ふむ。やはりそうでしたか・・・・・月野君にしては彼――坂本君に対して何も行動を起こさないので、もしかしたらとは思いましたが。やはり月野君は知らなかったようですね。いえ、この場合は坂本君も知らなかったのでしょうか・・・・・・？」

納得がいったような顔で小暮さんがしきりに頷いています。やっぱり何か小暮さんは知っているようです。ですが一体何を・・・・・・？

《あの・・・・・一体どう言うことなんですか？小暮さん、何か知っているんじゃ・・・・・・》

「ええ。ですが、ここからは私に聞くより直接霧島さんの声を聞いた方が早いでしょうね・・・・・・文さん、お願いします」

《・・・・・え？》

《わかったー！　あのねー　ツクル！　文ね　アオイと　ショーコの　会話　録音　してるよー　今から　それ　立体映像で　流すねー！》

《・・・・・・・・・・・・なっ！？ちょ、ちょっと！？文さん何て事しようとしているんですか！？そんなことをしたら》

文さんが召喚システムだって小暮さんにバレるんじゃ！？そう、文さんに忠告しようとすると――

「ああ、大丈夫ですよ月野君。私、文さんの正体は大体予想ついてますし？」

《・・・・・・・・・・・・・えっ？》

・・・・・小暮さん？今さらりと何かとんでもないこと言いませ

んでしたか？文さんの正体の、予想がついている？

「それはともかく、文さんお願いしますね」

《うん！　行く　よー！》

ま、まあ後で小暮さんにはどう言うことか説明して貰うとして、文さんが何かの映像を映し出します。その映像には――――

☆

明久Ｓｉｄｅ

高橋先生の珍プレーのお陰で（？）この回無失点で何とか切り抜けた。何だか正直、塁に出ていた布施先生と寺井先生にはちょっと申し訳ないけど・・・・・・

「と、とにかく、これでピンチは凌いだ！そろそろ一本出そう！こっちの最初のバッターは」

「お主じゃな、明久」

って、そう言えば僕か。ここは責任重大だ。科目は物理でお世辞にも得意教科と言うわけじゃないけど、何としても皆の期待に応えて

「・・・・・・期待してるぞ、坂本」

「坂本、お前だけが頼りだ」
「頼む。ホームランをかっ飛ばしてくれ」
・・・・・ちょっと？何故に皆僕の次の打者にエールを送るのかな？かな？

「皆、それは僕に余計なプレッシャーをかけまいという気遣いなんだよね？」

「「「・・・・・あー・・・・・まぁ、そうだな・・・・・・一応吉井も・・・・・・・・・・・」」」

「もういいよ！形だけの声援なんていらないよ！」
畜生・・・・・何だこの期待の寄せ方の差は・・・・・地味に凹むんだけど？

「あの、明久君。頑張って下さいね！」
「アキ！頑張って！カッコいいとこ見せてよ♪」

そこに訪れる、二人の女神の癒し。ふん！いいもんね！僕にはこの二人の女神の加護があるからさ！男共のエールより、女の子のエールの方が力が湧くし！

「瑞希、美波・・・・・ありがとう！頑張ってくるよ！」

「「応援してますね（してるわよ）！」」

「よしっ！この打席を、二人に捧げるよ！」

ここが男の見せ所。絶対二人に勝利を捧げる！意気揚々と打席に向かい、相手ピッチャーをしっかりと視界の中央に置き――――

ズゴス！

『デッドボール！』

――――凄い一発を貰った。

「ぎにゃぁぁあっ！手が！左の手首から先の感覚がぁあああっ！」

「「あ、明久君（アキ）！？大丈夫ですか（なの）！？」」

気合いを入れて身を乗り出した結果がコレだよ！？痛いっ！何ですっぽ抜けのくせにこんなにも痛すぎるの！？

「す、すいません吉井君・・・・・力加減に失敗してしまって・・・・」

「だ、大丈夫・・・・・・です。うぅ・・・・・・カッコ悪いところ見せちゃったなぁ・・・・・・」

いつまでものたうち回っているわけにもいかないので（瑞希と美波に心配もかけられないし）、一塁へとフラフラな状態で向かう事に。

そっか・・・・・さっきから姿が見えないけど、造?君は前の試合でこの痛みに耐えてたんだね・・・・・・

とは言え、この試合初めてのランナー且つ、ノーアウトという最高の条件だ。ここは次の雄二に期待をしたい所だ。・・・・・これでも、期待はしてるんだぞ雄二。だからいい加減に切り替えてよ・・・・・

≪化学教師　布施文博　物理　２６９点≫

ＶＳ

≪Ｆクラス　坂本雄二　物理　１８８点≫

多少は点数の差はあるけど、それでも雄二の運動神経や反射神経を加味すれば十分良い勝負が出来るはずだ。寧ろここで得点を入れなきゃ、今の僕らに他に点を入れられる場面は限りなくゼロに近づいてしまうだろう。雄二が打った瞬間に、僕も走れるように準備しておこう。

「今度は失投しないように気をつけなくては・・・・・」

布施先生の召喚獣が投球姿勢を取り、ボールを投げ放つ。おおっ!さっきデッドボールを気にしてか、コースはど真ん中で球速も普通になっているじゃないか!これは・・・・・絶好球だ!

「・・・・・・・・・・・っ」

雄二はその球を見てピクッと動き――そのまま見送る。

『ストライク！』

結果、勿論ストライクカウントが一つ増えた。あの球を見過ごすなんて、何か策があるのかな？いや、単に間を外されただけ・・・・・か？首を傾げているうちに布施先生が二球目を投げる。今度はアウトコース低めの球だ。ギリギリストライクゾーンに入っているけど・・・・・・雄二はどうする？

「こ・・・・・の・・・・・・っ！」

「なっ！？バカヤロっ！」

さっきと同じように一瞬身体を震わせて、そこから雄二はバットを動かした。動かしたのはいいけど、カツッと半端な音が響いてボールがピッチャー前に転がる。あのバカ、判断に迷ってきちんとバット振らなかったなっ！？それに何だ！そのバッティングは？お前は初心者じゃないだろっ！

ピッチャーがボールを拾い、二塁へと送球する。くそっ！間に合わ――――

『アウト！』

僕の召喚獣が二塁に到達する前にボールが二塁手のグローブに収まる。そして、そのまま二塁手は受け取ったボールを一塁へ向かって投げ――――

『アウト！』

打者である雄二もアウトとなり、一気に2アウト。千歳一遇のチャンスは残念ながらものにすることは出来なかった。

「くそぉっ！」

雄二は悔しそうに吠えながらベンチに戻ろうとする。・・・・・・別に失敗なら誰にでもあるし、チャンスをものに出来なかった事をとやかく言うつもりはない。でも――――今度ばかりはいい加減にして貰わないと迷惑だっ！

「・・・・・・・・・・・・雄二、今の気分は？」

「あァ？」

「今の気分はって聞いてんだよ。やる気無いなら代わりなよ」

話しかけたら凄い目で睨まれる。全然機嫌が直っていないね。でもさ？睨みたいのは僕の方なんだけど？とりあえず、こんな雄二に任せてたら本当にどうにもならない。

「さっきのは何さっ！あんなへっぴり腰で打てるとでも思ったの！？さっきだけじゃない！この試合始まってから腑抜けて・・・・・正直迷惑なんだよ！」

「んなことは、わかってるっ！」

「わかってないねっ！いい加減切り替えろよ！まださっきの事気にしているのかよっ！」

ベンチにいる皆も先生たちや観客の皆も、『何だ何だ?』と僕らに視線を向ける。事情がわかっている美波と秀吉とムッツリーニ、それからバッターボックスにいる瑞希は心配そうに僕らを見ている。正直僕もあんまり言いたくないけど、今のコイツにはちゃんと言わなきゃダメだっ!

「霧島さんだって、たまには機嫌が悪いときだってあるだろ!霧島さん本人に何で引っ叩かれたかも聞きもしないで、ただ吠えてるだけじゃ何にもならないじゃないか!」

「・・・・・やかましい!何が機嫌が悪い時だ!そんなもんで納得できるかっ!」

と、火に油を注いだが如く、雄二は更に怒りを燃やす。爪が食い込むほどに拳を握りしめて――――

「だいたい、どうして俺が、本人の同意もない紙切れ一枚没収された程度で、あそこまで怒られなきゃならんのだ!」

本日何度目かの遠吠えを始めた。コイツ・・・・・・完全に頭に血が上ってやがる。いっそぶん殴ってでも冷静にさせるか?

そう、今まさに僕が雄二に殴りかかろうかと考えてたその時――――

バシャァア!

『『『・・・・・・・・・・・・・え？』』』

「「・・・・・・・・・・・・・は？」」

突然、何の前触れもなく・・・・・雄二が水浸しになった。これには僕も見ていた皆も、あれだけ怒り狂っていた雄二でさえ唖然としてしまう。そう何せ――――

《・・・・・少しはこれで、頭冷えましたか？ゆーさん？》

――――そんなことを言いつつ、空になったバケツを片手に造が冷やかな笑顔で立っていたのだから。

１０９時間目　勝利のカギは～文さん＆小暮さんに在り！？～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……さて、まあ今回も色々と余談があるんですが、まず造を呼ぶ時に小暮さんがぬいぐるみを投げて気付かせるってとこありますよね？偶然か必然かわかりませんが、昨日の感想でとある方に『ぬいぐるみをプレゼント』って書かれてたんですよね（苦笑）昨日はこの感想見て、正直笑ってしまいました。何故次回使うネタをわかったのかと。もしかしてエスパーですか？

エスパーで思い出しましたが、小暮さんがいつ文の正体について気がついたの？と思われる方が多いでしょうが、実は１０５時間目の皆でお弁当を食べていた時に、ちらっと小暮さんは文の正体に気が付いている節があるように書いてたんですよ？誰もツッコんでくれなかったので作者としては久々に展開が読まれなかったので嬉しかったり。

……え？わかってたけどツッコむまでもなかったって？……そですかｏｒｚま、まあいいや！次回はようやく雄二復活かな？

読んでいただきありがとうございました！ではでは～！

１１０時間目　真相と復活の雄二～最強コンビのバッテリー～（前書き）

どもども糖分摂取魔です。……名前変えようかな（苦笑）

そうそう。母にこれ書いているって事を知られたって、以前書きましたよね?その母に前『糖分摂取魔って名前、変えた方が良いかな?』って聞いたことがあるんですが、『ん～?ぴったりじゃない?』って返されました。

そ、そんなに甘いもの食べてないんだからねっ!?って言ったら『今月のケーキ代が凄いことになっているのに?』とも返されました。……うん、ゴメンよお母さん。甘いものの誘惑には勝てないんだよ?

まあ、どうでもいいか!んじゃ今日もよろしくです。１１０時間目行きますよ♪

１１０時間目　真相と復活の雄二～最強コンビのバッテリー～

明久Ｓｉｄｅ

《・・・・・少しはこれで、頭冷えましたか？ゆーさん？》

召喚野球大会：決勝戦。僕と口論になり、完全に怒り狂っていた雄二に、突然バケツの水をかけると言うとんでもない事をしでかす造。いや、確かに僕も”コイツをぶん殴って冷静にさせようかな？”くらいは思っていたけど、まさかわざわざバケツに水を汲んでそれを雄二にかけるなんて、流石の僕も驚いたんだけど・・・・・？

「つく・・・・・る・・・・・っ！何、しやがんだっ！？お前もこのバカみてぇに、翔子を庇ってんのかっ！？」

と、ここで我を取り戻した雄二が造に詰め寄る。まあ、あれだけ怒っていたところに、追撃するようにあんな事したらそうなるだろうね。そんな怒り狂う雄二を物ともせずに、造は呆れたように雄二を睨む。

《あらあら？随分お熱いんですね。折角頭冷やしてあげましたのに。ああ、ひょっとしてまだ冷静になっていませんか？何でしたらもう一回水浴びてきますか？》

「っ！こんの・・・・・人の話聞きやがれっ！」

《・・・・・それを、今の貴方に言われたくないですよ。このセリフを貴方に言うなんて思いませんでしたが・・・・・冷静にな

りなさい》

「んだと・・・・・・っ！」

・・・・・どうしてだろう。ただ暴れている雄二よりも、今の造を見ている方がよっぽど怖い気がする・・・・・何だか造、静かに怒っている？

《ねえゆーさん？・・・・・さっき貴方“本人の同意もない紙切れ一枚没収された程度で、どうしてあそこまで怒られなきゃならんのだ”って言いましたよね？》

「・・・・・なんだ造。まさかお前“人の大事なものを紙切れ呼ばわりするな”とでも言いたいのか？」

《・・・・・誰がそんなこと言いましたか？さっきの言葉をお返ししますよ。人の話を聞きなさいな。ゆーさん》

怒りに燃えている真っ赤な雄二の眼とは対照的に、造の眼は氷のように冷たく哀しそうな色を見せる。どうしたんだろう？造は一体雄二に何を言いたいんだろうか・・・・・？

「ちっ・・・・・お前も何が言いたい。またお得意の説教か？悪いが今回は俺は譲る気は無いぞ」

《説教とか、譲る譲らないとかじゃないんです。・・・・・そうじゃないんですよ。ゆーさん、どうして霧島さんの没収品が？婚約届”だと決めつけるんですか？・・・・・本当に彼女が没収されたものが、何かすら知らないのに》

「「「「「「・・・・・・・・・・え？」」」」」」

これには当事者の雄二も、事情をしている僕らも揃って頭に疑問符を浮かべる。どう言うこと・・・・・・もしかして！

「つ、造!?もしかしてわかったの!?霧島さんが本当に没収されたものって!?」

「翔子が・・・・・・本当に没収されたもの?お、おい待て!?一体何の話だ!?」

慌てて問いかける僕らに、造はゆっくり頷く。そして――――

《とある友人から教えて貰いました。ゆーさんは没収品は婚約届だと勘違いなさっていたようですが、霧島さんが本当に没収されたものは――――ゆーさん、如月ハイランドで貴方が渡したヴェールだそうです・・・・・・》

「「「「「「・・・・・・・・・・・・は?」」」」」」

思いも寄らぬ台詞に、雄二だけではなく僕ら全員も揃って聞き返す。ヴェール?ヴェールって、あの結婚式に使う奴だよね?それに如月ハイランドって、もしかしてあのウェディング体験の時の物・・・・・?頭に疑問符を浮かべている僕らに、造はゆっくりと話を続ける。

《話を聞くにゆーさん自身で霧島さんに渡したものだったそうですが、どうやらその様子じゃ知らなかったみたいですね。・・・・・・貴方自分で言ったそうじゃないですか。例え誰が笑おうとも『俺はお前の夢を笑わない』と。そう言ってプレゼントしたそうじゃない

ですか・・・・・その大切な霧島さんの想い出のプレゼントが没収されたそうですよ》

その造の言葉に、いつの間にか戻ってきていた瑞希と隣にいる美波がピクッと反応する。

「あっ！それ・・・・・私たちも翔子ちゃんからお話を聞きました。あの時大勢の前で笑われて、夢を否定されたのに坂本君はその夢を大事にしてくれたって・・・・・」

「ウチも聞いたわ・・・・・お泊り会の時にね、あの子幸せそうに言ってたのが凄く印象的だったもの。そっか・・・・・あれを没収されたんだ・・・・・それは確かにショックよね」

瑞希と美波は、哀しそうに二人で目を伏せる。そう言う事があったんだね・・・・・・

「「「「・・・・・・・・・・」」」」

これには雄二も僕らも言葉を失ってしまう。小さな頃からの霧島さんの大事なたった一つの夢。それを笑われ否定されて、傷ついた彼女に彼女の想い人である雄二が『俺はお前の夢を笑わない』なんて言ってあげたんだ。それはもう、大事な大事な想い出の一品のハズだ。

《その想い出のプレゼントを『つまらない物』と言われた、霧島さんの気持ちはゆーさんが一番わかりますよね・・・・・・？》

「・・・・・・・・・・っ！」

こんなこと、僕にでもわかる。雄二に『つまらない物』と言われる事は霧島さんにとっては最も辛いことなんだと。何せプレゼントしてくれた張本人に想い出の品を馬鹿にされて、『笑わない』と言われたはずの大事な夢を笑われたように思えるから・・・・・・

《霧島さんなら事情を説明して、先生に掛け合えさえすれば没収品を取り戻すことは簡単だったはずです。ですが――――》

「「「・・・・・・・・・・・・きっと、もう誰にも笑われたくなかった」」」

そしてふと、雄二が霧島さんに言った事を思い出す。

あんなもん。
つまらない物。
俺が代わりに捨ててやる。

・・・・・小さな頃からの夢を大事にし続ける彼女にとって、それはどれだけ残酷な言葉に聞こえただろう。自分の事ではないハズなのに、思わず顔を覆いたくなる。

「・・・・・・雄二・・・・・・なんてバカなことを・・・・・・」
「・・・・・・最悪の展開じゃの・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・あの時霧島に、ちゃんと確認すべきだった」

《・・・・・もう一度聞きます。ゆーさんは、本当にわかっていなかったんですね?霧島さんが没収された物の事を。何でも霧島さんの話だとゆーさんがそのヴェールを霧島さんの持っていた袋の中に入れたそうですが》

「・・・・・・・・・・・・・知らな、かった・・・・・・確かにお袋に・・・・・・・翔子に渡してくれと頼まれたものがあったが・・・・・・」

《・・・・・・それですね。霧島さん、その袋ごと没収されたそうですし》

要するに、雄二の勘違いが招いた事ってことだ。こうなると完全に霧島さんに同情せざるを得ない。何せ雄二は知らなかったとはいえ、それだけの事を霧島さんにやってしまったんだから。それがわかっているからこそ、雄二自身もこうやって真実を知って呆けているのだろう。

「さて雄二、どうしようかこのままだと没収品は返して貰えないよ?」

茫然自失している雄二を目覚めさせるようにハッキリと伝える。そう、このままだと負けてしまう。負ければ没収品は返ってこないだろう。それが例え僕らの大事なものだろうと、誰かの大切な想い出の品だろうと。

「どうするもこうするも・・・・・・きっちり守って、点数を取って勝つだけだ」

おいおい・・・・・肝心な作戦が出てないじゃないか。さては全

く頭回ってないな?

「そう言うが雄二よ。次は4番の鉄人からじゃぞ?いくらなんでも、無策で挑んでは無事では済むとは思えん」

「・・・・・・・・・・・おまけに二巡目。さっきと同じ方法では確実に点を取られる。これ以上向こうのミスは期待出来ない」

秀吉やムッツリーニも雄二をしゃっきりさせるように会話に加わる。この二人の言う通り、このままじゃ絶対に勝てない。横目で雄二のバカを見ると、回っていない頭を全力で回転させようとしながら、なんとか次の回を乗り切る方法を模索していた。

・・・・・今までに見た事のないような真剣な顔で。

「・・・・・・・・・・・・・」

全く・・・・・いつもの余裕綽々な態度はどこへ行ったのやら?見るからに必死に考えを模索する姿が見える。そんな雄二の様子を見ていると、造とふと視線が合う。と、造はさっきまでのような冷やかな顔から一転していつもの笑顔で・・・・・・

≪(ふふっ♪アキさん、ゆーさんに手を貸して上げてくださいな♪)≫

と、そんなことをアイコンタクトしてくる。そうだね。まあ、造に言われるまでもないけど・・・・・手を貸してやろうじゃない雄二?そんな顔見せられたらさ!

「雄二」
「・・・・・何だ明久」
「ポジション、交代」

「「「「・・・・・・・・・・・へ？」」」」

僕の台詞に対して、造以外の周囲の皆は『コイツ何言ってんだ？』的な顔をする。そんな中、雄二はいち早く僕の意図に気がついたのか、真っすぐ僕の目を見返す。

「・・・・・いけるのか？」

問いかけと言うよりは、確認するような雄二の言葉。コイツはわかってないなぁ。いけるかじゃなくて・・・・・

「やるしかないじゃないか。この勝負、負けられないんでしょ？」
「・・・・・そうだな」

僕がそう言うと、雄二は小さく笑みを浮かべて応えた。ふっ、いつもの憎たらしい顔がちょっとは戻ったのかな？

「？？？どういうことじゃ明久よ。ピッチャーが雄二と言うのは良いのじゃが、その球を取れるキャッチャーがおらんではないか。まさか、姫路か造に任せるのかの？」
《ヒデさん？この回の科目英語ですよ？自分にどうしろと？それは

無理ですよー♪》
「それに何を言ってるのさ秀吉。瑞希にそんなキツイことやらせたくないよ」
キャッチャーって意外と大変な仕事だからね。初心者である瑞希に任せるのは色々と酷だろう。造は・・・・・まあ、ここでは英語だからね・・・・・人には向き不向きがあるだろうし？
「じゃが、そうなると雄二の球を捕れるのは」
「・・・・・・・・・・・相当の召喚獣の操作技術がいる」
「いるよ、一人。この状況でキャッチャーができるのが」
《ふふっ♪確かにいますねー♪相当の召喚獣の操作技術を持っている方が♪》
まあ、簡単な話だね。捕り損なうと戦死しちゃうなら・・・・・・全部完全に捕れればいいんだ。ダメージも一切無いように受けきれば良い、唯それだけの事。そしてその操作技術は――――僕にはある。
「来い雄二。――――僕が、お前の球を全部捕ってやる！」
「言ったな明久。その台詞、後悔するなよ。受け損なったらお前の召喚獣が消し飛ぶからな！」
四回表。２点ビハインド。さあ、こっからが本当の勝負だっ！
☆

造Ｓｉｄｅ

『プレイ！』

先生方も空気を読んで一旦中断していた試合も再開されます。アキさんの作戦通りピッチャーはゆーさん。キャッチャーはアキさん。そして迎えるバッターは４番の西村先生です。

《ど真ん中　ストレートで行くぞ》

《了解》

ゆーさんの指示に、思わずふと笑ってしまいます。・・・・・やれやれ、ようやくゆーさんらしくなってきましたね。知略と思い切りの良さと決断力こそゆーさんの最大の武器ですからね。ゆーさんの召喚獣は投球モーションを取り、まずは力強く第一球を――――

ズバンッ！

――――と、乾いた音が鳴り響き、ゆーさんの放ったボールは見事にアキさんのミットに収まります。おそらくアキさんの表情から見るに、腕や肩には衝撃のフィードバックのが伝わっているのでしょう。自分も先程やったのでわかりますが、フィードバックがある状態で召喚獣が放つボールを受け止めるのは体力的にも、そして受け損なわないように細心の注意がいるので精神的もかなり辛い事です。

アキさん・・・・・・どうか頑張って！

≪Ｆクラス　坂本雄二　英語Ｗ　２８１点　≫
&
≪Ｆクラス　吉井明久　英語Ｗ　９３点　≫

『ストライクッ！』

少し遅れての審判の先生のコール。流石の西村先生もゆーさんの球に反応できないようですね。さっきまであれほどアキさんの球を見た後で、急に速さの違うゆーさんの球を相手にしているんですし、いくら西村先生が凄くても即座に対応が出来ないようです。

「ナイスボール」
「当然だ」

ボールを戻しつつ、お二人はそんな会話をしています。・・・・・・良かった♪ゆーさんの表情も元に戻っていますね。これなら――――

《ど真ん中　ストレート　すぐ行くぞ》

と、ボールを受け取りながら、間髪いれずにゆーさんはアイコンタクト。アキさんの召喚獣は慌ててミットを構えます。ゆーさんはボールを受け取ると、普通はサインのやり取りに費やす筈の間を持たず、いきなり腕を振り上げてボールを投げ込みます。ある意味アキさんを信頼しての行動でしょうね。その行動が吉と出たのか・・・・

・・

『ス・・・・・・ストライクッ！』

二球目もど真ん中のストライク。流石はアキさんとゆーさんです。とても見事な連携ですね。やっぱりこの二人息が合って――――

《危ないじゃないかっ！僕が捕りこぼしたらどうする気だよ！》

《はっ！ぬるいこと言うな。俺の球全部捕るんだろ？》

――――えっと・・・・・・まあ、ある意味の信頼関係が成り立っているんでしょうね？そして第３球目。ゆーさんとアキさん。二人が二人、次にお互いがどうするのかわかっているように、目すら見らずに・・・・・・

「さて、先生方。手前勝手で悪いが・・・・・・こっちも色々と事情が変わっちまったんだ」

ゆーさんの召喚獣が三球目を振りかぶった直後、ストライクゾーンど真ん中にアキさんの召喚獣が構えたミットの中に、最高速度のストレートが突き刺さります。

『ストライク、バッターアウトッ！』

これで見事に三球三振です。まずはアウトカウント一つ頂きです♪

あの西村先生を抑えられたと言うことは、これはいけるかもしれま

せん！これがアキさん&ゆーさんの真骨頂♪はっきりと申し上げましょう。今のこの二人が打たれる姿なんて全く想像できませんよ♪

「――――これ以上は、1点たりとも取らせねぇ」

そう言ってゆーさんはさっさとベンチに戻り、皆さんに指示を飛ばします。・・・・・・そう、勝つための指示をね。ふふっ♪ようやくいつものゆーさんが戻ってきました。『頭は冷静沈着に、されど心は熱く』がゆーさんですもの。さてさて、ゆーさんだけに頼るのもなんですし、自分も出来ることやりますか！反撃開始ですっ！

１１０時間目　真相と復活の雄二～最強コンビのバッテリー～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

何だか造が最初にとんでもないことをしてましたが、ちゃんと水をかけたことは謝らせますよ？その辺はしっかりしている子って設定ですし。造の心情では、『このままじゃアキさんを殴りかねない』って判断しての行動だそうです。明久が雄二を殴ろうとしていたのと同じように、雄二も殴ろうとしていたとか？

まあ、そんな雄二もようやく復活ですね♪今回行動が裏目に出がちでしたが、雄二らしくなってきましたし次回も反撃開始となっています。まあ、次回はその前の準備の回ですが。

まあ、雄二が目立つせいで、ちょっと造が最近空気になりそうで怖いですがね（苦笑）そろそろ造単体の活躍の場を設けてあげたい今日この頃。

んじゃ今日はここまでです。読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくです♪

１１１時間目　雄二復活作戦始動～我らが勝利の方程式～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。地味にサブタイ考えるのがキツイ今日この頃

……いや、だってそろそろネタが無いんですもん（泣）前書きもネタ切れ寸前ですし？……書かなきゃいいんじゃって？え、えっと、書かないと落ち着かないんです、ハイ。

本編とか番外編のネタは、寝ててもポンポン出てくるんですがね？てか、この前良いネタ思う浮かんだらしく、思わず深夜に目が覚めて書きとめて寝たんハズなんですが……起きたらミミズのような字のメモ用紙が枕元に落ちているのが発見されただけでした。あれの解読法を教えてください。切実に……ｏｒｚ

さて、今日のどうでもいい話終り！んじゃ、早速行くよ１１１時間目！

１１１時間目　雄二復活作戦始動～我らが勝利の方程式～

造Ｓｉｄｅ

四回表を見事に抑えたゆーさん＆アキさん。どうやら完全に調子を取り戻したようですね♪そんなゆーさんは皆さんを集めて円陣を組みます。

「おっしゃテメエらッ！こっちの攻撃はあと二回！きっちり点数もぎ取って、俺らのお宝を取り返すぞ！いいなっ！」

「「「おうっ！」」」

「向こうにゃ点では負けてるが、運動能力じゃ俺らは決して負けてねぇ！若さってもんを見せてやれっ！」

「「「おうっ！」」」

「色々不甲斐ねぇとこ見せちまったが、こっから先は俺も全力を出すっ！だから・・・・・お前らも協力してくれっ！没収された、大事な物を取り戻す為に！合言葉は――」

「「Ｇｅｔ　ｂａｃｋ　ＥＲＯ－ＢＯＯＫ！！！」」」

「反撃、行くぞお前ら！」

「「「っしゃあああああああああ！！！！」」」

ゆーさんの鼓舞にも、否が応にも力が入ります。良かった・・・・・・いつものゆーさんです♪それにしても『没収された、大事な物を取り戻す為』ですか？やれやれ困りましたね。そんなこと言われたら、自分も全力で応えたくなりますよ♪

「近藤、横溝、秀吉！作戦だ。いいか？どうせこのまま、まともに向こうとやりあったところで勝ち目はねぇ。例え偶然フォアボールやポテンヒットが出ても、そこから点に繋げるようなことはまず今の俺らじゃ無理だ」

この回の最初の打者である三人にゆーさんが作戦を指示します。確かにゆーさんの言ったように、守備では対抗出来ても攻撃に関してはまだまだ対応できそうにありません。ですから――――

「だから、その後の例の作戦に全てを賭ける。その為にもお前らは、なんとか時間を稼いでくれ」
「うむ。了解じゃ」
「エロほ――――参考書の為だ。時間稼ぎくらいいくらでもやってやるさ」
「その代わり、次の回はしくじんなよ」

三人は首を縦に振り、快く作戦を承諾して下さりました。本来ここは折角活躍できるチャンスですが、時間稼ぎを引き受けてくれるあたり皆さんの結束の堅さが窺えますね。

『エロ本、エロ本、エロ本・・・・・・』
『抱き枕、水着写真、シャワーカーテン・・・・・・』

・・・・・・・・・・・・結束・・・・・・・・ですよね？いや、これも自由奔放なＦクラスらしいという事なんでしょう。・・・・・・・多分ですが。

『プレイッ！』

バッターボックスに入るまでの時間を反則にならないギリギリまで引き延ばし、一番打者の近藤くんが召喚獣に構えを取れせます。バットを短く持ち、カットさせて時間を延ばすつもりみたいですね。そう・・・・・・アレが来るまで。

と、さっきまで慌ただしく皆さんに指示を飛ばしてきたゆーさんが、一息ついてベンチに座ります。前の回までのゆーさんとは別人の如く違い、活き活きしている良い顔ですね♪

《ゆーさんお疲れ様。タオルどうぞです。濡れたままじゃ風邪ひきますし・・・・・・ゴメンなさいね、突然あんなことして》

何せ、熱くなったゆーさんにバケツの水をかけると言うとんでもないことをしちゃいましたからね・・・・・・人の事言えないってこの事ですかね？ゆーさんだけじゃなくて自分もちょっと熱くなってましたもの。

「ああ、すまんな。・・・・・・いや、造は謝る必要なんかないさ。

お陰で“目が覚めた”からな。寧ろ俺の方が正直本当に何て礼を言えば良いかわからん。助かったぞ造」

《いえいえ♪その台詞はこの試合を勝ってから言ってくださいな。っと言っても、自分にではなく情報をくれた方にですがね？・・・・・ゆーさん、勝ちましょうね》

「そうだな・・・・・絶対に勝たんとな・・・・・・」

と、そう言いながら髪を拭きつつ、ゆーさんは目をギラギラ光らせます。その目だけで絶対に勝つって意思が伝わってきますね。

「まあ、こうなった以上は雄二は死んでも勝たなきゃいけないからね。それで雄二。肝心の仕込みはどう？上手くいってるの？」

「ふっ・・・・・・バッチリだ。クラスの連中にもきちんと指示は出してある」

「・・・・・・・・・・・・あとは、時機がくるのを待つだけ」

《その為にも・・・・・・・・あの三人には頑張って頂かないと、ですね》

「ああ」

アキさんとこーさんも加わって、祈るように試合を見守ります。相手は召喚獣の扱いにも慣れた先生方。時間稼ぎすら許してくれないでしょうし・・・・・・

『ストライッ！バッターアウト！』

『ぐ・・・・・・！』

気が付けば近藤くんが粘りに粘ってくれましたが敢え無く三振。次

のバッターである横溝くんもカウントをフルに使ってくれましたが討ち取られてしまい、残るはヒデさんただ一人となってしまいました。

《くっ・・・・・まだ、来ませんね・・・・・・・》
「そろそろ、来てもいいと思うんだけど・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・時間的には本当にもうすぐなハズ」
「そうだ・・・・・・あと少しで始まる。それまで頑張ってくれ秀吉・・・・・・・！」

『ファール！』

話している間にも試合は続いていきます。ヒデさんはバットをコンパクトに振り、必死で教師チームの豪速球に食らいついています。頑張ってヒデさん・・・・・・！頼みますっ！

『ファール！』

《・・・・・・ヒデさん辛そうですね・・・・・・》
「だな・・・・・・くそっ。向こうもフォアボールくらい出してくれたらいいものを」
「相当慎重に投げてるよね。先生の性格かな」

ピッチャーは几帳面な英語W担当の山田先生ですからね。かなりコントロールがいい所を見ると、フォアボールは期待できません。おまけに打ったところで、ショートとセカンドは野球経験者且つ、運

動神経の良い寺井先生と大島先生が守っているので抜けることはまずないでしょう。

『ファール！』

「まだか・・・・・・まだか・・・・・・」
「頼む秀吉・・・・・・もう少しなんだ・・・・・・！」

そろそろヒデさんの集中力も限界のハズ・・・・・・見ているこっちも背中に冷たい汗が流れます。どうかヒデさんそれまでは頑張ってっ！全員手に汗を握り、ベンチに乗り出してその瞬間を心から待っていると――――

「・・・・・・・・・・・・来た」
「「《っ！》」」

不意にこーさんが呟き、全員は弾かれたように振り返って校舎に取り付けてあるスピーカーを見ます。

『――ジジ・・・・・・ジ・・・・・・！』

「来たかっ！」

ゆーさんが嬉しげに声を上げます。そして次の瞬間、

『――これより、中央グラウンドにて、借り物競争が始まります。出場選手の皆さんは、所定の場所に――』

「「「来たあああああああああああああああああ！！！」」」

これです！これを待っていました！この放送にクラスの全員が声が重なりました。と、同時にヒデさんが打ち上げてアウトになりチェンジとなります。なりますが――――

「やれやれ・・・・・・どうやらうまくいったようじゃの・・・・・・」

「ああ！本当によくやってくれた秀吉！近藤！横溝！」

《ヒデさん！それに近藤くんに横溝くん、お疲れ様です！助かりましたよ！》

「ふふっ♪まあ、これでワシも少しは役に立てたじゃろうかの♪」

ええ、勿論ですとも！ヒデさんたちもこの試合のヒーローですよ♪本当にお疲れ様です！

「・・・・・お前ら、何をそんなに喜んでいるのかわからんが、とりあえずさっさと守備につけ。チェンジだろう？それともまた何か企んでいるのか？」

と、ここで訝しげに自分たちがはしゃいでいるのを横目で見つつ、西村先生が準備を促します。・・・・・先に謝ります。ごめんなさいね、西村先生。ちょっと卑怯な手かもしれませんが、今回は絶対に勝たなきゃいけないんです・・・・・・

「わかってます。けど、ちょっと待って下さい」
「？何を待てと？」
「今にわかりますよ。そろそろ――――来たっ！」

と、アキさんが嬉しそうに遠くを見つめます。その視線の先には・・・・・自分たちFクラスのクラスメイト3人が駆けてくる姿が見えます。

「なんだアイツらは。あんなに急いで・・・・・・」

そんな姿を見て西村先生は疑問符を浮かべています。そんな中、クラスメイト3人は野球場にいる立会いの先生方に大声で叫びます。

『遠藤先生！借り物競争です！すいませんが一緒に来てくださいっ！』
『えっ？でも私、今からここでリーディングの立ち会いを』
『いいから来て下さい！』
『でも、私――』
『なんと言おうとダメですよ！今日は、野球よりも体育祭が優先されるんですから！』

『『『――っ！？』』』

先生方が目を見張ったのがよくわかります。そう、ルールで事前に決めてあるんですよね。“野球はあくまで交流が目的。優先されるのは体育祭の本種目”と。

『あ、えっと・・・・・すいませんっ。そういうわけで、ちょっと行っていますっ！』
『先生、急いで！』
『わ、わかりました。・・・・・ちなみにどんな内容の借り物競走何ですか？』
『“月野造が大好きな先生”って内容ですよ。流石に試合に出ている高橋先生と船越先生は呼べないので、先生お願いします！』
『！な、なるほど！それは私が行かなきゃいけませんね！さぁ、早く行きましょうね♪』
『（ちょろい・・・・・）』

立ち会いの遠藤先生が手を引かれて、グラウンドから去っていきます。

「それなら仕方がない。ベンチで待機している先生の科目で代わりを――」

『向井先生！来てください！』
『竹中先生、お願いします！』

と、ベンチの二人の先生にも声がかかります。頼んでいるのは、やっぱりFクラスのクラスメイトです。これで立ち会いが行える先生がいらっしゃらなくなりましたね。

「・・・・・坂本。これは貴様の作戦か」
「さて。どうでしょうね？」

「とぼけるな。さっきからここに来ている生徒は全員Fクラスの人間だろうが」
「はは。偶然じゃないっすか？何にしてもこれで立ち会いの先生はいなくなったな、鉄人」
・・・・・まあ、勿論ですが偶然なんかではないです。先生方のオーダーが決まった時点で、ゆーさんはクラスメイトの皆さんに頼んで、立会いの先生方を借り出して貰うようにしています。
「ならば仕方ない。さっきの回の立ち会いの先生にまた頼んで」
「おっと。それはルール違反だ。事前に決めただろう？『同じ科目は二度使わない』と」
「ならばどうしろと言うんだ。立ち会いの教師は他にいない。試合に参加している教師は立ち会いができない。こっちのチームに八人でやれとでも言うのか？」
西村先生は自分たちを交互に睨みます。いや、ホントすみません・・・・・・・
「いやいや鉄じ――西村先生。まだ他に勝負できる科目があるでしょう？」
「何を言っている吉井。立ち会いの教師がいなければ・・・・・・」
《あー・・・・・せんせ、科目と言いますか野球の勝負が出来るものが一つありますよね？立ち会いの先生がいなくて、且つ召喚獣を使わない勝負が》
「・・・・・・おい、まさか・・・・・・」
そう、これこそゆーさんが考えていた最初の作戦です。体育祭のプ

ログラムとルールを見て、自分たちに勝利をもたらす方程式。それは――――

「五回の勝負は、体育の――実技で勝負といきましょう」

「なるほど・・・・・・な」

そう、実際に自分たちの身体を使っての体育が残っています。これも立派な授業科目ですかね♪西村先生はしてやられたと言う顔をしていますね。

「さあ全員、グローブをつけろ！五回の勝負はハードだぞ！」

「「「っしゃあああああああああ！締まっていくぞ！」」」

野球部から借りていたグローブを握りしめ、こうして迎える最終回。たった一回だけの教師と生徒による野球大会が幕を開けます。

☆

明久Ｓｉｄｅ

最終回は、本当の野球の勝負。まあ、本来これが普通なんだけどね？ピッチャーは再び僕、キャッチャーは雄二に戻る。相手は二巡目の、７番バッターの長谷川先生の登場ださっきまでは本当に化け物みたいに思えたけど、こうなった今は何も恐怖なんて感じない！

《外角　高め　カーブ》

雄二に指示されたコース通りに投げる。まあ、草野球レベルのピッチングだけど――

「う・・・・・・」

『ストライクっ！』

――悪いけど、運動不足な先生に打たれるほどへなちょこじゃないよ？その後も変化球や緩急つけたボールを駆使し、長谷川先生を追い詰める。

『ストライクっ！バッターアウトっ！』

これで一人目。次は氏家先生で、その次は山田先生か・・・・・・まあ、鉄人や大島先生みたいな化け物クラスでない限り、打たれる気はしないけどね？その後も雄二の指示通り意地の悪い投球を繰り出して、そして・・・・・・

『ストライクっ！バッターアウトっ！チェンジ！』

審判の攻守交替のコールが鳴り響く。よっし！難なく抑えられたっ！

「アキ！カッコ良かったわよ！ナイスピッチ！」
「明久君素敵です！三人もアウトにするなんて！」
「あはは♪ありがと二人とも。まあ、鉄じ――西村先生とか大島先生じゃ無かったからね。何とか抑えられたよ」

自陣に戻りつつ、美波と瑞希と話をする。いや、ホントにあの二人が相手じゃなくて良かった・・・・・恐らくだけど、召喚獣での戦い以上に脅威となりそうだもんね。

「・・・・・・・・・・・本来はあの二人にも借り物競走で排除したかったが」
「あはは・・・・・人の良い遠藤先生たちならともかく、用心深い西村せんせや大島先生はきっと『怪しい、書かれた紙を見せろ』って言ってくるでしょうからね」
「そうじゃの。そうでなくともワシらは基本、あの二人に目を付けられておるしの」

と、召喚獣から元に戻った造と秀吉たちが話に加わる。あー・・・・・確かに造たちの言う通りだろうね。鉄人たちを排除することは無理だってことくらいは僕もわかる。下手に疑われたらこの作戦はお釈迦になっちゃうし、最低限の危険性は受け入れざる負えない。

そんな話をしながら、全員がベンチに戻ってくるのを待つ。そしてメンバー全員が集まった所で、雄二は僕らの顔を見回しながら話を始めた。

「さて・・・・・これで残すところ俺たちの攻撃だけとなった」

現在の状況は変わらず0対2で、雄二の言う通り今は最終回。そう、僕らに残されたたった一回の攻撃チャンスだ。

「同点じゃダメだ。追いつくだけじゃ意味は無い。ここで逆転出来なきゃ、俺らは負ける。延長戦に入れば俺らに勝ち目はねぇ」

そう・・・・・もし延長戦にでもなれば、借り物競走に連れ出された先生たちが戻ってくるだろう。そうなればまたもやテストを使った勝負に戻り、僕らが勝つ可能性は万に一つもないだろう。

「この一回が、俺たちの正念場だ!何がなんでも3点もぎ取れ!いいかっ!絶対勝つぞ!」

「「「おうっ!」」」

気合いも十分、勝つ為の糸口も見えた。後は前に進むだけだっ!そう意気込んでいると・・・・・・

「それじゃ、ウチは土屋に交代してもらおうかな」

「え?」

こちらのトップバッターを務めるはずの美波が、突然そんなことを言い出した。あれ?何で・・・・・・?

「どしたの美波?自信がないの?」

「そりゃまぁ、ね。いくらなんでも、ウチだって男子と同じレベル

で野球なんてできないもの。体力もそうだけど、経験でも敵わないし」

「あ、そっか・・・・・・確かに女の子だと、あんまり野球ってやらないもんね」

それにたまに授業を抜け出してまで野球をやっている僕らとは、野球に触れている時間の差があるのは仕方ないだろうからね。

「そ。だから、土屋と交代。きっとウチよりうまくやってくれるだろうし、それに――」

「それに？」

「こういう時って、男の子が頑張るからカッコ良いんじゃない？」

・・・・・そう言って、美波は楽しそうに笑った。・・・・・・ヤバイ、ちょっと（いや、本当は物凄く）ドキッとしてしまうね。こういう時って美波はすっごく可愛い顔をする。いつもは『ウチに女の子らしいのは似合わない』ってよく言うけど、本当は誰よりも女の子らしいってことを僕は知っている。ふと、美波の笑顔を見て、そんなことを思った。

「・・・・・・・・・・・行ってくる」

と、そんなことを考えている間に、美波と交代したムッツリーニがバットを担いで打席に向かう。そして審判に交代の意思を告げて、バッターボックスへと向かう。

『プレイ！』

審判が五回裏の開始を宣言する。さあ行くぞっ！・・・・・泣いても笑っても、これが正真正銘最後のチャンス！絶対勝利を掴んで見せるっ！

『あ、そうだ造ちゃん。大丈夫なの？』

『つ、造ちゃんは止めてくださいね？ところで何がですか君島くん？』

『いや、確か造ちゃん６番バッターだよね？島田もムッツリーニと変わったし、何なら俺も変わろうか？造ちゃんは野球を俺らよりはやってないだろうし』

『ああ、それですか。・・・・・うーん、多分大丈夫ですよ？』

『？ホント？ならいいけど・・・・・』

『ええ♪何せ自分は昔から野球では――“秘密兵器”って言われてましたし♪』

『・・・・・・・・・・秘密兵器？』

１１１時間目　雄二復活作戦始動～我らが勝利の方程式～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……さて皆さん。造の言った”秘密兵器”って何かわかりましたか？聡明な皆さんはもしかしたら予想がついているかもしれませんね。何せネタを読まれることに定評のある糖分のネタですし……

もしも、何かわからないと思われる方。ヒントは下の３つです。

１．小さい　２．振るな　３．てか動くな

……わかりましたか？答えは次回わかると思います。ちなみに自分も学校の野球（ソフトボールですかね？）で、秘密兵器と呼ばれていますよ？……造と同じ意味で、ね……この気持ちがわかった方は、自分と友達になってください（泣）

まあ、とりあえずまた次回ですかね。読んでいただきありがとうございました！ではでは～

１１２時間目　秘密兵器と真の主役～なりふり構いません♪～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。

……昨日の感想見て、『あ、もう今回のネタ、皆さんにバレまくりじゃないか！』と笑ってしまいました♪てか、ヒントと言うより答えっぽかったですかね？

さてさて、秘密兵器と呼ばれる造の（別の意味の）本気と明久はどう動くか、１１２時間目行きますよ～！

１１２時間目　秘密兵器と真の主役～なりふり構いません♪～

明久Ｓｉｄｅ

最終回裏、得点は０対２のこの状況。何がなんでもこの回に３点を取らなきゃならないこの状況で、トップバッターは美波と交代したムッツリーニ。そして対するピッチャーは、我らが体育教師の大島先生だ。ある意味保健体育の師弟関係な二人だけあって、二人ともえらく燃えている気がするね。

「にしても鉄人はキャッチャーか・・・・・・向こうはクロスプレーを警戒してやがるな」

「まぁ、散々お主らは仕返しがどうのって騒いでおったしの」

「うーん・・・・・・西村せんせは鍛えてありますし。クロスプレーじゃ勝機は無いですかね？」

「だろうね。鉄人相手じゃ僕らがいくら体当たりしたところで弾き返されるのがオチだろし」

と、皆でそう言っていると、大島先生が一球目を振りかぶって景気よくその腕を振り下す。ボールはそのままうなりを上げキャッチャーである鉄人目がけて飛び出した。

「・・・・・・・・・・・・っ！（ブンッ！）」

『ストライクっ！』

ムッツリーニがボール一個分下で、バットを空振りする。むむむ・・・・・ボールの下で振ると言うことは、相手のボールが想像よりも速かったということだろうね。流石は大島先生だ。鉄人並みに厄介な相手だとは思っていたけど、やっぱり伊達に体育教師をやっていないってことか。

「・・・・・・・・・・・・（スッ）」

ムッツリーニがバットを構え直す。大島先生は鉄人とサインのやり取りをすると、二球目を振りかぶった。さっきのストレートと大差ない速度で迫るボールが、バッターの手前で突然に横方向に変化する。ってちょっと!?スライダーじゃないか!?大人げないぞ!

「・・・・・・・・・・・・っ!（ブンッ!）」

『ストライクっ!』

ムッツリーニが二球目も空振りに。ツーストライクか・・・・・・これで後がなくなった。

「ナイスピッチ、大島先生」

と、鉄人がボールを戻し、大島先生が受け取る。その間もムッツリーニは大島先生の手元をしっかりと見て、三度バットを構えた。大島先生が三球目を投げる。今度は・・・・・・

「ちょ！？ちょっと！？今度はカーブ！？」
「どんだけ気合い入ってんだ・・・・・・！？」
「あれは・・・・・・打てませんかっ！？こーさんっ！」

『ボールッ』

ここで審判がボールを宣告。び、ビックリした・・・・・・鉄人のミットの位置を見る限りでは、今のでストライクを取ろうとしていたみたいだけど。変化球を投げられる代わりにどうやら大島先生はそこまでコントロールは良くないようだ。

「むぅ・・・・・・冷や冷やするのう。こんなものを本当に打てるのかの・・・・・・？」
「でも・・・・・・こーさんなら。こーさんならきっと・・・・・・！」

僕たちの心配をよそに、大島先生は振りかぶって四球目。今度は直球を内角に。これは・・・・・・打てないか・・・・・・っ！

「・・・・・・・・・・・いけ・・・・・・っ！」

と、ここでムッツリーニが動きを見せる。高橋先生が一回で見せたものと同じ行動。そう――プッシュバンドだ。ピッチャーの横を抜けて、サード前に転がるボール。サードを務めているのは長谷川先生。ちなみにあの先生が運動神経が良いと言う話は聞いたことがない。従って・・・・・・

「っと、ととっ」

転がって来たボールを慌てて捕球し、ファーストに山なりに投げる長谷川先生。だけど、そのスピードじゃ、我らFクラスが誇るムッツリ忍者、ムッツリーニの速さには敵うはずもなく・・・・・・

『セーフ！』

「「「おおおおおおおおおおおおお！！！」」」

流石ムッツリーニ。きっちり塁に出てくれたね。ノーアウト一塁で迎えるバッターは、

「俺も土屋に続くぜ！」

と、意気揚々とバットを抱えて打席に入るは異端審問会を率いるカリスマ：須川君だ。そのいつもの勢いの良さをここでも発揮して貰いたいね。

「あ、須川くんの次は自分ですし、ネクストバッターボックスに行っておきますね」

と、須川くんに続き、造も立ち上がって準備をする。・・・・・・

あれ？ところで造って、

「ねえ造？こう言っちゃ悪いけど、造って野球得意なの？もし無理そうならピンチヒッターってことで君島君と変わってもいいんじゃない？」
「む？そう言えば造が野球が得意と言う話は聞かんのう。実際どうなのじゃ？」
「まあ、確かに造が野球やってる姿なんざ俺も見た事ねえな」

ちょっと気になって造に尋ねる事に。どうやら雄二と秀吉も気になったようでこの二人も造に尋ねる。と、造はニッと笑うと――――

「ふふふっ♪安心してください。絶対に塁に出て見せますよ」
「え？ってことは、造って野球上手なんだ？」
「さて？どうでしょうね～？・・・・・まあ、昔から秘密兵器って呼ばれていますがね♪」

「「「ひ、秘密兵器・・・・・・？」」」

な、何だこの自信は・・・・・？『まあ、見ててくださいな♪』と言い残して造はそのまま向かって行ったけど・・・・・・

「「「・・・・・・・・・・うーん？」」」

秘密兵器と呼ばれるほど、造って野球上手いなんて初耳だよね・・・・・？だ、大丈夫なのかな？３人で首を傾げていると、須川君が三振で倒れる。さっそく造の番だね・・・・・

『・・・・・ふむ、月野か。お前も坂本みたく何か策があるのか？』

『あはは♪秘密ですよ～？まあ、絶対に塁に出る自信はありますよ？』

『ほう？大した自信だ。ならやってみろ。・・・・・いくぞ！』

と、鉄人と造の会話が聞こえてくる。ついでに――――

《おー♪　ツクル　出てきたー！　ファイト！　ふぁいと！》

『月野君頑張ってくださいな～♪勝ってくれないと泣いちゃいますよ♪』

――――いつの間にか来ていた、文ちゃんとあの着物先輩の応援も聞こえる。凄いね、造が活躍しそうなところで必ずこの二人いるし。さて・・・・・そんな注目の第一球。鉄人と大島先生は、そして造はどう出る・・・・・？

『ボールッ！』

大島先生が投げた球は、さっきと同じ速さのストレート。対する造は、“秘密兵器”がどうのこうの言ってた割にまだ何も動きを見せないようだ。鉄人も首を少し傾げつつ、大島先生にサインを送る。続く第二球は・・・・・・

『ボールッ！』

これも良いコースのストレートだけど・・・・・さっきと同じく

造はバットを振るそぶりを見せない。うーん？打たないのかな？それとも何か狙い球でもあるのかな？にしてもちょっと不思議だ？一応綺麗に入っていると思うし、さっきストライクを入れたコースだと思うのに、何でボール何だろ――――――ってまさか！？

ふと、ある考えが僕の頭をよぎる。その間にも大島先生が第三球を投げてくる。今度はカーブのようだけど、

『ボールッ！』

やっぱり造はバットを振らず、されど身体を微妙に動かして“ボール”を誘う。そしてやっぱり大島先生の投げた球は見事にボールになる。そっ、そうか・・・・・造が言った秘密兵器ってコレの事か！？

『くっ・・・・・全く入らんとは。流石に狙い難いな・・・・・』

『月野、お前・・・・・ひょっとすると最初からフォアボール狙いか？』

『えへへ♪自分の身長だと、ストライクゾーンはかなり小さいでしょう？それに投げられるたびに微妙に動いてストライクゾーンを外しますから物凄く狙い難いでしょうし♪これなら振らなきゃ三振は無いでしょうから“必ず塁に出れます”ものね～♪』

・・・・・な、何て子だ・・・・・自分の身長の低さを逆に利用するなんて・・・・・！？てか、造？そんなこと自分で言って、哀しくないの・・・・・？

《ふみゅ？　ツクル　どしたの　かなー？　打たない　のー？》
『あらあら♪そう来ましたか。坂本君に花を持たせるってとこでしょうかね♪全く・・・・・いつでもどこでもやっぱりお優しいんですね、月野君は♪』
《んー？　何か　言った？　アオイ？》
『・・・・・ふふっ♪いいえ？ただ、ますます彼に惚れちゃいそうって思っただけですよ♪』
《？？？　よく　わかん　ないー？》

『・・・・いいのか月野？応援しているヤツらにも良いところを見せてやりたいとは思わんのか？』
『あはは♪いやまあ、自分にだって本当は男の子の意地がありますし、いつもなら頑張って期待に応えたい所ではあるんですが・・・・』

と、造と鉄人が話している間にも、大島先生が振りかぶって第四球を投げる。それでもその球は――――

『ボールッ！フォアボールっ！』

――――やっぱりボールカウントを取られて、造は見事にフォアボール。

『・・・・・大事な友人の為ですもの。卑怯な作戦と言われようが、自分のプライドを壊そうが、なりふり構っていられないんです♪すみません西村せんせ、大島先生。今回は勝たせて貰います♪』

『なるほど?あくまでクラスの勝利の為・・・・・・か』

そう言って鉄人たちに笑顔を残して、造は一塁に進んだ。あ、あは
は・・・・・造らしいね。まさか自分のコンプレックスすら武器
にするなんてさ。しかもそれは自分の勝利の為じゃなくて、友人の
為にってところがいかにも造らしい。

・・・・・・・・・・うん。僕も出来る事やんなきゃね。あの
ようやくエンジンがかかったバカの為にも・・・・・・造の次が僕
と言う事で、バットを持って準備をする。

「いいところで回って来たじゃない、アキ。ここで打てばヒーロー
よ!さっきのピッチングみたいに決めちゃってよ♪」
「あの、頑張ってくださいね明久君!私たち応援していますからっ
!」

と、女性陣二人が気合いの入る応援をしてくれる。まあ、本音を言
えば僕だって、さっきの汚名返上といきたい所なんだけど・・・・・
・

「ありがとう二人とも。期待に応えられるかどうかわからないけど、
僕なりに頑張るよ」

とりあえずそう応え、僕はバッターボックスに向かう。

「吉井か。面白い場面で出てきたな」

打席に入ると、キャッチャーである鉄人が僕にそう話しかけてくる。
確かに鉄人の言う通り、面白い場面だと僕も思う。

「そうですね。もしここで、難しいでしょうがホームランでも出たら逆転サヨナラ。最高に凄いヒーローですよね」
「女子の応援もあるんだ。お前はここで打ちたいだろうが――こっちも教師としてのプライドがある。そう簡単には譲ってやれんな」
「はは！譲ってもらえるなんて最初から思ってませんよ？」

鉄人に答えてバットを構える。大島先生がセットポジションを取り、投球モーションに入る。その一瞬後、先生の投げたボールは鉄人のミットに収まっていた。

『ボールッ！』

一球目はボール。しょっぱなからストライクじゃない所を見ると、少しは警戒して貰ってるんだろうか？それともいきなり造から僕に代わって、ストライクゾーンを見誤ったのかな？

「一球目から振ってくると思ったんだがな」
「女子の前で格好つけると思ったんですか？」
「まあ、そんなところだ」

鉄人が大島先生にボールを戻す。僕は足元を軽く均し再び構えることに。大島先生が二塁のムッツリーニの動きを確認し、再びボールを投げる。今度は速球、ストライクゾーン低めだ。

『ストライクっ！』

これも黙ってボールを見逃す。鉄人はそんな僕を見て、違和感があるって顔をしているね。多分僕が何か企んでいるように見えたんだろうね。そんな鉄人のサインを確認し、三球目を構える大島先生。

『ボールッ！』

その三球目も、僕はバットを振らない。先生たちも警戒してかまたもやストライクゾーンの外だ。

「どうした吉井？　打たんのか？」

「はい。えっと・・・・・色々と、作戦とかあるんですよ。色々ね？」

更に警戒してくれるようにと、軽口を叩いてみる。僕の言葉を鉄人がどう受け取ったかわからない。まあ、静かにミットを動かす気配が伝わって来たから何かしら気がついたのかもしれないね。

『ボール』

またしてもボール。カウントはこれで1ストライク、3ボール。向こうは勝負するしかなくなった。

「・・・・・・・・・・む」

鉄人が五球目の為にミットを構える。と、そこにストライクゾーン

ど真ん中且つ、さっきよりもコントロールを意識してか、球威もそれほど感じない絶好球が飛んでくる。これなら・・・・・・多分二回に一回はヒットに出来るとは思う。思うけど――

『ストライクっ！』

――けど、それは二回に一回は打ち損じてしまうってことだ。それじゃ、ダメなんだ。今回は何がなんでも僕の後の・・・・・・あのバカに繋げないといけないし。

「いいのか吉井。折角の活躍の場だぞ？」

「いやいや。僕だって、出来る事ならここでヒーローにでもなりたいですよ？」

鉄人は今の球を見逃した事を不思議に思ってか、また僕に話しかけてきた。僕がヒットを狙っているように見えなかったんだろう。まぁ今の球を見逃したんだから当然といえば当然なんだけどさ。

バットを短く持って構えると、間を摺いて六球目が飛んできた。これはさっきと同じコントロール重視且つ、ストライクゾーンの中だ。流石に見逃せないっ！

カキンッと僕がバットを振ると、ボールは一塁線の脇へと転がる。

『ファール！』

今のカウントは2ストライク、3ボールでいわゆるフルカウントってヤツだね。

「・・・・・お前も月野と同じくフォアボール狙いか。吉井にしては随分と消極的だな」

「あ、いえ。そういうわけじゃ――――」

「誤魔化すな。そんなスイングを見せられたらバカでもわかる」

そりゃ悪かったね?そう、鉄人の言う通り、僕の狙いは造と同じくフォアボール。後一球のボール球が来るまで、ファールで凌ぎ切るっ!

「やれやれ。お前も月野も、折角のチャンスだというのに勿体ない真似を」

「ははっ!まあ造はともかく、確かに僕だってそう思うんですけ――ど!」

カキンッ

『ファール!』

七球目もファール。そろそろ大島先生も焦れてくるかな?

「まあ、ちょっと今までの借りを返すついでなんですよ」

「借りだと・・・・・?」

カキンッ

『ファール！』

「ええ、借りです・・・・・・まあ、何と言うか僕だったらすごく悔しいと思うんです。大事な物のかかった試合なのに自分が何にも出来ずに終わるっていうのは。多分造も僕と同じ気持ちだと思いますよ？だからあれだけのこと、したんだと思います」

「？おい、何を言っているんだ？」

「そう、自分の譲れないものを他人任せにすることのやるせなさというか、憤りというか、納得のいかない感じとか・・・・・・ホントに悔しいんですよ」

「・・・・・・お前が何を言おうとしてるのか、いまいち理解できん」

打球は逸れて、草むらの中に。バットを構えてまた次に備える。

「あはは・・・・・そう言う話は僕じゃ上手く説明できないんで、終わったら造にでも聞いて下さい。けどまあ、要するに――」

「要するに何だというんだ？」

「――今日の本当の主役は僕たちじゃないってことです」

『ボール！フォアボール！』

ついに大島先生の集中力が切れ、コントロールが乱れたようだ。これで僕は一塁に向かう事が出来るね。

「それより先生こそいいんですか？」

「なにがだ？」

「勝負に徹するなら僕と雄二を敬遠して瑞希を狙うべきだと思うんですけど？」

まあ、押し出しにはなるけど野球に慣れていない瑞希を狙う方がよっぽど効率的だと思う。でも、さっきは僕と真っ向勝負を挑んできたところから見ると、それは無いみたいだし。

と、僕がそう尋ねると、鉄人は一瞬間を開けて――――そして豪快に笑った。

「バカを言うな吉井よ。いいか？」

鉄人は僕に指を突き付けて、ハッキリと告げる。

「俺たち教師は、お前たち生徒の模範を示すべき存在だ。それなのに、向かってくる生徒を正面から受け止めずに、何を教えられると言うんだ？」

・・・・・・・・・・そう言われてちょっと言葉を失う。いつもだったら暴力ばかりする憎い教師だって思えるけど、今ならよく造が『あの先生は・・・・・本当に素晴らしい方です♪自分の恩人で、最も尊敬すべき先生だと思っています』って言ってた事が、

ほんの少しだけわかるような、そんな気がした。

とりあえずそのまま話を打ちきって、次のバッターである雄二のところに向かう僕。雄二はそんな僕と、先に塁に出ている造とムッツリーニを見回す。

「さて雄二。これでこの前の肝試しの借りは返したよ」
「ほざけ。お前への貸しがあれだけだと思うなよ？そもそもお前のなんざちっぽけなもんさ。造に言われるならともかくな」
「うげ・・・・・それ言われると僕も痛いなぁ。――――それじゃ、後は任せた」
「わかっている。必ず打つ」

力強い雄二の言葉に頷いて僕は一塁に、雄二はバッターボックスへ向かう。さて、2点を追う今の状況はと言うと・・・・・・1アウト、満塁で長打を打てたら逆転サヨナラ勝利。そして、ここで決められなければ仮に同点であっても延長戦になれば、また振り出しに戻る。何てわかりやすくて、何てお誂え向きな状況何だろうか。

さて雄二？今日の“主役”は誰かわかっているよね？折角僕らが舞台を整えてやったんだし、それがわかっているなら・・・・・・さっさと霧島さんのヒーローになってこいやっ！

１１２時間目　秘密兵器と真の主役～なりふり構いません♪～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……うん、もう昨日の時点でバレバレでしたが秘密兵器＝こんなオチでしたね。自分も学校の授業でソフトとかやる時はよく言われてますよ？『糖分（仮）は絶対バット振らないでね！そうすれば大抵塁に出られるから！絶対だからね！』と。うん……泣いてませんよ？ちょっと目にゴミが……

一応余談ではあるんですが、造は何だかんだで運動神経は良いので本来なら打てないこともなかったそうです。ただ“１００％打てるとは限らないし、ここはゆーさんが決めるべき”と判断した結果がアレだそうです。

それにしても、原作の言葉のままなんですが、鉄人って個人的にホントに良い先生なんだと思います。真っ直ぐで熱くて、それでいて本当に生徒のことを大事にしてて。ウチの学校にもこういう熱血な先生がいますが、何だかんだで皆に慕われていますし。自分、ちょっと鉄人みたいな人を憧れてみたり♪

……って皆に言ったら『あー……まあ、趣味は色々だからね？頑張りなよ？』って返されました。おい待て友人？自分は”こう言う大人になりたい”って意味だったんだが？何が言いたいのかな？かな？ま、まあ鉄人になら……うん。

さてさて。んじゃまた次回です。っと言っても忙しくなりそうなので、明日は更新できるかもしれませんが次回以降また更新が遅れるかも？気長に待っててくださいね？

読んでいただきありがとうございました！ではでは～

１１３時間目　決勝・決着・結末は？～お帰り我らの聖典よ～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。更新しようとしてたらタイトルが決まらず２時間経過（汗）

何でどうでもいいとこに拘るんでしょうね、自分はｏｒｚ　まあ、いいか……ああ、それと次回くらいにそろそろちょっとしたアンケートを取る予定です。その時はよろしくお願いします。

んじゃ、今日も頑張っていくよ！１１３時間目、ＧＯ！

１１３時間目　決勝・決着・結末は？～お帰り我らの聖典よ～

造Ｓｉｄｅ

召喚野球大会決勝もいよいよ大詰め。２点を追う自分たちの最後の攻撃で、迎えるバッターは・・・・・まるで差し合わせたようにゆーさんになっています。ここで長打を打って、３点をもぎ取れば自分たちの勝ち。同点で延長にでもなれば、ほぼ間違いなく向こうの勝ちが確定します。

大島先生が一・二・三塁にいる自分たちを見渡して、ゆっくりと投球を始めるます。そして一球目が大島先生の手から離れました。

『――――ト――――ライッ！』

ストライクの宣告が高らかに響きます。速い・・・・・っ！自分のところから見ても、かなりの球速ですね。さっきのアキさんはフルカウントという助けがあったのでもう少しボールが見えたと思いますが、そのハンデのない今の大島先生の球はかなりのものです。なるほど、こーさんが咄嗟にバントに移行したのも頷けますね。

西村先生が返球し、大島先生がそれを受け取ります。それからそれぞれサインのやり取りをして、再び投球に入り・・・・・

『ボールッ』

今度は低めに外れたボールです。ゆーさんは手を出すことなく見送って、カウントは1―1となります。頑張れゆーさん・・・・・・貴方はこの試合でやらなきゃならない事がありますでしょう?応えなきゃいけないんでしょう?だったらそろそろ決めてくださいよ・・・・・・!そんなことを考えている自分も含め、この場にいる全員が固唾を呑んで見守る中、大島先生が右手をシャツに当て手の汗を拭い三球目に移行します。

と、ここでゆーさんは後ろ足に体重を乗せ一気に爆発させられうように溜めを作り――

それに応えるかの如く、大島先生は大きく身体を乗り出して腕を振り抜き――

その大島先生から放たれた唸りを上げて迫る速球は、軸足に体重を移し身体全体を使い、まるで誰かの想いに堪えるかの如く力強くゆーさんが振り切って――

――キィンッ!

快音がグラウンドに響き渡りました。

「「「――――ッ!!」」」

その瞬間、こーさん、自分、アキさんの三人が全力で次の塁を目指して疾駆します！打球の行方は――――よしっ！センター前です。深く守っていたセンターが、バウンドするボールを追って前に出ます。三塁線上にいたこーさんがホーム帰りまずは一点。自分も後を追うように三塁を蹴ってホームに急ぎます。アキさんも全力で二塁を蹴って三塁に。

と、後ろの方で『大島先生っ！』と若い先生の声が聞こえます。どうやらボールを拾った寺井先生が、中継に入った大島先生にボールを託したみたいです。ですが――――その間に自分はホームベースを踏み、２対２の同点となりました！

ホームベースを走り抜けたと同時に、急いで振り返りどんな状況か確認します。ボールは大島先生が受け取って、今まさにホームベースを守る西村先生の元に渡そうそしていたところで、アキさんが三塁に辿り着きます。

『吉井！止まれっ！』

三塁のコーチャーが、アキさんにそう指示してきます。確かに・・・・・もっともな指示で、このまま間に合うとは思いません。思いませんが――――

『『『っ！？吉井！？』』』

アキさんはその勢いのまま、三塁のベースを踏んでホームに向かいます。そのアキさんの目は・・・・・『絶対に、勝つ！』という

意志が伝わってきます。ですから・・・・・・・

「アキさん！いっけえええええええ！」
「・・・・・・・・・・・・走れっ！」
「絶対に還るのじゃ明久っ！」
「明久君っ！」
「アキっ！」
「やれっ！明久っ！決めちまえっ！」

・・・・・ホームに帰った自分とこーさん、ベンチから自分らのところまで来ているヒデさんたち。そして・・・・・この勝利を誰よりも、そして何よりも願っているゆーさんが、アキさんに全てを託します。やっちゃえ！アキさんっ！

そのアキさんは、必死にグラウンドを走りゴールを目指します。ホームベースまであと5メートルくらいです。と、そこで西村先生がボールを受け取りブロックの体勢を取ります。これは・・・・・・くぅ、恐れていたクロスプレーですね。ここでアキさんが西村先生のボールを溢させればアキさんの勝ち。完全にブロックしたら西村先生の勝ち。これで勝敗が決しますっ！

「っっっ！！」

アキさんは歯を食いしばって姿勢を低くし、前のめりになって衝突に備えます。西村先生も同じように、アキさんとの衝突に負けないように体重を前にかけようとした――――まさにその時

「――――っ！」

アキさんの身体は突然横にずれ、自分たちの、そして西村先生の目の前から姿を消すように綺麗に回り込みます！

「っ！？く――――っ！」

衝突に備えて体重を前にしていた西村先生は、咄嗟にはアキさんの機敏な動きについていけず、その動きが遅れた一瞬の隙を突いて、アキさんは身体を前に投げ出して必死に腕をホームベースに伸ばします！

土煙が上がり、居合わせた全員が息を呑み・・・・・そして審判がこの試合の結果を高らかに告げます。判定は――――

『――――セ――――フ！』

「「「いよっしゃぁああーっ！！」」」

自分もいつものメンバーも、それからFクラスベンチ全員も立ち上がって鬨の声を上げます！勝ったっ！勝ちましたっ！

「勝ったっ！勝ったよ皆っ！」
「アキさん！ナイスです！」
「明久君カッコイイですよ！素敵です！」
「ホントよ！もう♪惚れ直しちゃうわね♪」

「思い切った作戦じゃったが、よく決めてくれたのう」
「・・・・・・・・・・・・ＧＪ」

アキさんの元に皆さんが駆け寄って、それぞれ誉め称えます。あそこであんなに上手く回り込むとは・・・・・・さては狙ってましたね♪やりますねアキさんも！

「けっ！結局お前が決めやがって！だが・・・・・・よくやった明久っ！」
「はっ！お前もあの球をよく打ったっ！やるじゃない雄二！」
「ふふっ♪お二人ともお見事です！自分、本当に感動しましたよ♪」

姫路さんや島田さんは勿論のこと、これにはいつもはいがみ合っているゆーさんもアキさんもお互い褒め称えます。それにしても、あの土壇場で最高のコースに打ち込みサヨナラタイムリーを打ったゆーさんも、冷静に西村先生と勝負を挑み勝利したアキさんも、それぞれ素晴らしい活躍でしたよ！もう最高です！

と、そんな中、西村先生が苦笑いを浮かべつつアキさんの元にやってきました。

「・・・・・やってくれたな吉井」

服についた土を落としながら西村先生は言います。

「あはは。まあ、行けると思ったもんで」
「ほう？行ける？この俺を相手にか？」

「いえ。西村先生が相手だったからです。だって先生、さっき言ってたじゃないですか」

そう言ってアキさんは先生をからかう様に、口真似をします。

「“教師は生徒を正面から受け止める”って」

そう言われた西村先生も、聞いていた自分たちも最初は目を丸くしますが・・・・・・

「はっはっはっ！まさかお前に一本取られるとはな！なるほど？そういうことなら、今度はお前に対しては接し方を変えたいくとしよう」

・・・・・そして自分も皆さんも、負けたハズの西村先生も楽しげに笑いだします。ふふふっ♪流石アキさん。本当にアキさんって面白い方ですね♪

「さぁ、お前らもとりあえずは整列しろ。試合終了の挨拶がまだだろう？」

「「「「「「「「はーい！」」」」」」」」

先生に言われた通り、再び試合開始の時と同じくグラウンドに整列する事に。そして――――

『二年Ｆクラスチーム対、教師チーム。３対２で二－Ｆの勝利です！』

『『『ありがとうございましたっ！！！』』』

――――こうして、長きにわたる自分たちの野球大会は幕を閉じました。

☆

『――――体育祭総合優勝、３－Ｄ。代表は前へ』

『はいっ』

野球大会を終え、最終種目のクラス対抗リレーの後は閉会式となっています。自分たちはグラウンドに整列して、優勝クラスの表彰をじっと見守っています。ああ、そうそう。ちなみに自分たちＦクラスの体育祭の順位は学年で四位で、全体では一三位となっています。本当はかなり良いところまでいってましたが、借り物競争での無得点が響いたようでこの結果になっちゃいました。普段からよく体を動かしている自分たちにしては、ちょっと低い順位かもしれませんね？ですが・・・・・

『――――生徒・教師交流召喚獣野球。優勝、２－Ｆ』

そう、自分たちにはコレがあります♪クラスの皆さんも小声で嬉し

そうに話していますね。あの状況で優勝できたことによる達成感と、自分たちの私物が戻ってくるであろう期待感で皆さん胸が一杯みたいです。

『――それでは、これにて文月学園体育祭を終了します』

各競技の優勝クラス発表と学園長のありがたいお話も終わり、これで体育祭の全プログラムは終了となります。他のクラスの生徒たちが帰宅の途につく中、自分たちFクラスの皆さんは早速担任の西村先生のところへと集まります。

『さぁ、俺たちのお宝を返して貰おうか！』
『俺のDVD！俺の写真集！俺の抱き枕！』
『俺の聖典（エロ本）！俺の宝物（エロ本）！俺の参考書（エロ本）！』

・・・・・え、えーっと・・・・・？そうやって口々に、ちょっぴり大人な（？）没収品の返還を要求するクラスメイトの皆さん。ちょ、ちょっとだけ恥ずかしいですね。西村先生もそんなクラスメイトの姿をジト目で見ながらも溜め息を吐いて――

「・・・・・まぁ、約束は約束だ。没収品は返還しよう」

と、仕方なさげに呟きました。

『『『よっしゃあー！』』』

「では、この紙に没収された品と、名前を書いて提出しろ。一両日中には返還する」

『『『はーい！』』』

あらあら、こういう時は本当に素直なんですから♪自分も含めて、皆さんこぞって西村先生に渡された紙に没収された物の名称と、自身の名前を書いていきます。まあ、実際これが一番の目的でしたからね。

ふとゆーさんを横目で見ると――ちょっと顔をしかめながらも、真剣に何かを書いている姿が見えました。多分、いえ間違いなく・・・・ウェディング用品の一つの名前を書いているんでしょうね。霧島さんに渡す為に、ね♪ゆーさんは、本当にあの場面でよく打てました。これで・・・・・霧島さんも♪

あ、ところで・・・・・あの、皆さん？

『エロ本エロ本エロ本・・・・・・・』
『写真集写真集写真集・・・・・・・』
『抱き枕抱き枕抱き枕・・・・・・・』

・・・・・“若さゆえの何とやら”か、どうかわかりませんが、そこら中でその・・・・・自身の欲望に素直すぎる台詞を呟くのは、ちょっと怖いんですが・・・・・？ちらっと隣にいた須川くんの用紙を見ると、

タイトル：『Hなお姉さんが《ピ――》して《ズキュ――ン》してあげちゃう☆』ＤＶＤコレクション

・・・・・・・・・・見てません。ええ、見えませんでした。もし見えたとしても、幻覚でしょうね。とりあえず今は気にしない方向で、自分も一先ず持って行かれた没収品を書きます。まあ、自分だって“コレ”を”あの人”に渡す為に、頑張ったわけですし？

和気藹々と勝利の味を噛みしめながら、西村先生に用紙を手渡します。先生は呆れかえりながらも、その用紙を受け取り小箱に入れると・・・・・・・

「・・・・・・さて。それではここに書かれた没収品は、後日きちんと“郵送”する」

ここで、先生の口からそんな台詞が飛び出してきます。その瞬間、クラスメイトの皆さんが固まるような音が聞こえた気がします。んみゅ？郵送、ですか？

「宛名はお前たちの保護者になる。全員、到着を楽しみにしているんだな」

・・・・・・・・・・んーと？つまりはその――

『『『はぁあああっ！？』』』

――成人指定の本＋郵送＋保護者＝家に帰ればお説教、ですかね？ああ、そういうことですか・・・・・あはは、先生方もやりますね～♪万が一のための策ってことでしょうか？

「良かったなお前ら。海外からのゲストも大満足だったようで、学園長は機嫌良く返還を快諾してくれたぞ」

と、西村先生は頷きながらそう言ってきます。たはは・・・・・・学園長の事ですし恐らくですが、こうなる事も計算の内だったんでしょうね。相変わらず抜け目のない方です♪

「それと、学園長からの伝言だ。『学園としては返還してやるけど、子供として持っていて良いものかどうかの判断は、アンタらの保護者に一任する』とのことだ」

『『『あ、あのババァ――っ！！』』』

これには皆さん、先ほどまで歓喜に震えていた状況から一変します。まあ、今も震えてはいるんですが、この震えは恐らく怒りと・・・・それから家に帰ってからの自分たちの未来の姿を想像しているからでしょうね。

『はぅ・・・・・まずいです・・・・・・このままじゃ、お母さんたちに抱き枕が・・・・・・』

『ウチも、どうしよう・・・・・・な、なんて言い訳しようかしら・・・・・・』

『が、学園のアイドルの抱き枕ってことで・・・・・・は、言い訳になりませんよね・・・・・・』

『まあ・・・・・・実際・・・・・・・ウチらのアイドルの抱き枕だし・・・・・・・』

姫路さんと島田さんも、皆さん同様に沈んだ顔をしていますね。ま、まあ物が物だけに・・・・・・・ドンマイですとしか言えませんね・・・・・・？

「それでは、ＨＲを終了する。各自、寄り道などせずに真っ直ぐ帰るように」

『『『あっ』』』

言うだけ言うと、西村先生は校舎へとすたすたと向かいます。と、思ったら・・・・・・・

「ああ、そうだ・・・・・・・月野」

「あ、はいです」

「悪いが学園長がお呼びだ。恐らく今日の件で話があるんだろう。・・・・・・《文》の、な？」

「あ、あはは・・・・・・・わかってますよー？では皆さん、また明日です♪」

・・・・・あはは♪呼ばれちゃいました。今から文さんの反省会ですかね～？とりあえず皆さんに挨拶をしつつ、西村先生の横を歩きます。まあ、どうであれ素晴らしい生徒と先生方の交流野球大会だったのではないでしょうか？良い想い出がたくさん作れましたし♪

『皆、やっぱりまた職員室を襲おう。僕らの生きる道は、それしかない。あの教師共を痛めつけて、僕らの本当の力で戦友を取り戻すんだ』

『いいことを言ったな吉井。流石は今日のヒーローだぜ。俺もたった今、そう考えていたところだ』

『実は俺もだ。何だ。俺らやっぱり気が合うな。とりあえず早速作戦を練ろう』

『『『合言葉は――Ｇｅｔ　ｂａｃｋ　ＥＲＯ－ＢＯＯＫ！』』』

・・・・・・・・・・・・い、いい交流が出来たんですよね？別れ際の皆さんの会話がちょっとだけ、いいえちょっとどころか物凄く気になるんですがね・・・・・？

１１３時間目　決勝・決着・結末は？～お帰り我らの聖典よ～（後書き）

ありがとうございました！いかがだったでしょうか？

……いよいよ決着です！本来ならここは雄二視点で書くつもりだったんですが、敢えて造視点で書かせていただきました。雄二の気持ちとか、そういうものはもう少し後にでも雄二の回想を入れたりしながら書きたいな～って思ってですね。

さて……決着はついても何か大事な伏線（？）やら会話が残っていますね♪実は次回が召喚野球編の最終話となっています。翔子や瑞希の会話に、造の没収品の謎。そして小暮さんが文のことにどうして気がついたのか……とかね！

あ、それから多分次回はアンケートを取るかもです。その時はよろしくお願いします。あと、最近忙しいので更新がそろそろかなり遅くなるかも？

読んでいただきありがとうございました！次回もよろしくお願いします！

１１４時間目　召喚野球編終了！～女の子たちの裏側～（前書き）

どうも糖分摂取魔です。秋刀魚が食べたい……

（無駄に）長かった召喚野球編も終了です！驚いたことに途中で記念回を書いたせいでもあったのか、召喚野球編だけで２８話くらい使っていることに（汗）いや、ホント長かったな～……

んじゃそろそろ行きますか！１１４時間目兼召喚野球編最終話。よろしくです！

１１４時間目　召喚野球編終了！～女の子たちの裏側～

造Ｓｉｄｅ

「にしても・・・・・全く驚いたぞ。坂本の策にしてやられた事といい、まさか本当にお前らが勝つとはな」
「あはは・・・・・すみません西村せんせ。反則ギリギリの事してしまって」

体育祭も召喚野球大会も終わった放課後。本来ならちょっとした打ち上げでもやるところかもしれませんが、文さんの事で話があると学園長に呼ばれているため、只今西村先生と共に学園長室へ向かっている最中です。

「まあ、ルール上は問題ないからな。月野が謝る必要はどこにもないぞ。それにしても・・・・・」
「？それにしても？」
「ふむ・・・・・いやなに、少し気になってな。普段のお前なら絶対に反対するであろう坂本の策を、月野自ら率先してやっていただろう？正直まさかお前までアイツらに加担するなんて思いもしなくてな」

と、歩きながら西村先生がそう言ってきます。あー・・・・・確かにいつもならそうでしょうねー？

「おまけに吉井が途中妙な事を言っててな。“自分の譲れないもの

を他人任せにすることのやるせない”とか“ここは僕が主役じゃない”とかな」

「ふふっ♪・・・・・・アキさんがそんなことを？なるほどなるほど♪“アキさんも”でしたか」

「アイツは月野に聞けばわかると言っておったが・・・・・・どう言う事なんだ？良ければ教えて貰えぬだろうか？」

西村先生は心底不思議そうに自分に尋ねます。ふふっ♪まあ、自分やアキさんの行動を不思議に思うのも無理のないことでしょうね。先生には申し訳ないことをしてしまいましたし、ちょっとネタバレしておきますかね～？

「えっとですね・・・・・・ちょっと掻い摘んで話をすると――」

～造説明中～

「――って感じなんです。ですから自分もアキさんも・・・・・・そしてゆーさんも絶対に負けられなかったってことですかね」

「ふむ・・・・・なるほど霧島と坂本の仲違いに没収品、か。確かにそれなら月野やあのバカ二人も必死になるのもよくわかる」

少し端折ってゆーさんと霧島さんの件の話をしたんですが、先生は大体の事を理解したようです。流石ですね♪頭の回転も速いのが西村先生ですし。

「それにしても・・・・・・はっはっは！全くお前たちは面白い奴

らだ！よし！それならば、坂本の“それ”は一番先に送って貰えるよう頼んでおこう。霧島との仲を直してやる為にもな」

「ホントですか！ありがとうございます、西村せんせ♪きっと喜びますよ♪」

西村先生はそうニッと笑って手に持っていた箱の中からゆーさんの提出した没収品リストを取り出して、一番先に郵送できるように並び変えます。先生ってやっぱり・・・・・・どんな時も生徒の事を大事に想ってくれる良い先生なんですよね～♪

「まあ、アイツにはこの事を言うなよ月野。恐らくそんなことをアイツらに言えば・・・・・・確実に調子に乗って冷やかすだろうからな」

「あはは♪了解ですよ。自分の胸の中にしまっておきますね～」

「そうしてくれ。・・・・・・そうそう。没収品で思い出したが、お前の没収品は確か――――何かの種と写真立て、それから何枚かの写真だったな？」

と、突然西村先生が自分にそんなことを言ってきます。んみゅ？何でしょうかいきなり？

「よく覚えていらっしゃいますね？そうですよ～？」

「あの没収品だが・・・・・・特に問題があるわけではないし、何なら今すぐにでも返しても良いんだぞ？本来なら没収品されるようなものではなかったしな。単純に預かっていたものだからな」

「あはは♪まあ、授業に関係ないものって考えると没収品に当たるものですがね？ならお言葉に甘えて――――いや、待てよ・・・・・・？」

「む？どうした月野」

ちょっと待って下さい・・・・・折角郵送して貰えるなら・・・・・

・そうだ♪

「・・・・・ねえ、西村せんせ？ちょっとお願いがあるんですが」

「ほう？お前が俺にか？珍しいな。一体何だ？」

・・・・・ふふふっ♪折角です。今日のお礼と、いつもの仕返しを兼ねて・・・・・少しだけ彼女にサプライズをあげましょうかね♪彼女、驚いてくれるでしょうか♪

「えっとですね。自分のいくつかの没収品の送り先の宛名、変更して貰えませんかね♪」

「・・・・・・・・・・は？今何と？」

「ふふふっ♪宛名変更ですよ。送り先は――――」

☆

？？？Ｓｉｄｅ

ここは体育祭も終えて、夕日が射し始めた文月学園２－Ａクラスの中。放課後だけあって、本来ならば誰もいないハズの教室に四人分の人影があった。

「――という事です。翔子ちゃん」
「どうも坂本も誤解していただけみたいね」
「・・・・・うん。教えてくれてありがとう瑞希、美波。それに――」

そのうちの三つの影は・・・・・瑞希と美波、それから翔子。瑞希と美波は雄二がやったことについて、翔子にこっそりと教える為にやって来たらしい。そして最後の一つの影は――

「・・・・・ありがとうございます、小暮先輩。雄二にこの事を教えてくれて」
「あらあら♪お礼を言われるようなことは、私はしていませんでしてよ？」

――そう、造に雄二と翔子の仲違いの真実を教えてくれた小暮先輩の姿が。ずっと翔子を慰めてくれていたらしい。ちなみにこの小暮先輩。翔子の側で泣いている翔子を慰めつつ、何があったのかを聞き出したとのこと。

「ウチもよ。別に気にしないでよ、翔子」
「そうですよ。これくらいお安いご用です」
「・・・・・ううん。助かった。大体の事は先輩から聞いてたけど、本当の事は聞いてなかったし。それに雄二はきっと私に何も説明してくれないと思うから。先輩、瑞希、美波。本当にありがとう」

改めてきっちりお礼を言う翔子。そんな彼女の態度に瑞希たちは苦笑いをする。

「だからお礼は良いって。でも・・・・・・確かに坂本なら説明しないかもね」
「そうですね。まあ、言い訳をしないというのは坂本君らしいと思いますけど」
「ふふふっ♪そうなんですか？なるほど男の子のプライドってものですかね♪」
「・・・・・・（コクン）はい。雄二はそういう事には、凄く不器用ですから」
「他の事にはあんなに気が回るのに変わっていますね」
「男はそう言う生き物だってＭｕｔｔｅｒ――じゃなくて、お母さん言ってたわ」
「うふふ♪確かにそうですね。そこがまた愛おしいんですけど♪」

「「「愛おしい・・・・・・♪」」」

と、他に誰もいない教室に四人分の笑い声が響き渡る。それはそれは姦しく。

「それにしても・・・・・・ビックリしました。先輩だったんですね、月野君に本当の事を教えてくれた人って」
「そうよね。ちょっと意外かも？先輩と翔子の接点があるなんて思わなかったし？」
「ああ、それですか？いえ、接点と言っても霧島さんと会ったのは偶然だったんですよ。文さんと歩いていたら偶然会って」
「・・・・・・本当にお世話になりました」

翔子は恥ずかしそうに、顔を赤くする。どうやら慰めて貰った事を今になって意識し始めたらしい。

「いえいえ♪ですから私は何もしていませんって。私はただ、“ちょっとだけ”文さんと一緒に霧島さんとお話をして霧島さんの悩みをどう解決すべきかを“坂本君の友人であり、私の友人でもある月野君”に相談しただけですもの♪」

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

その言葉を聞いた瑞希・美波・翔子の三人は顔を見合わせて全員同じ事を考えたとのこと。そう・・・・・『この人には敵わない』と。

「そんなことより霧島さん。恐らく理由を説明しなくても坂本君は謝ってくれると思います。ですからその時は」

「・・・・・・はい。私も雄二に謝――」

「おっと、違いますよ？霧島さんが謝るのは最後です♪」

「「「・・・・・・え？どうしてですか？」」」

「うふふ♪いいですか霧島さん。最初は事情を何も知らないふりするんです。そして――」

と、小暮先輩は片目を瞑り、ニコっと笑いながら・・・・・・

「「「・・・・・・・・・・・・？？？」」」

「――お詫びの印に、彼にキスでもせがんじゃいましょう♪」

「「「ふえ!?」」」

・・・・・・とんでもない爆弾発言を告げる。これには翔子は勿論、聞いていた瑞希と美波も顔を赤くして驚く。

「あらあら、皆さんどうかしましたか♪」
「えっ!?い、いや・・・・・・そのぅ・・・・・・」
「せ、先輩・・・・・・凄いですね・・・・・・」
「・・・・・・何という、策士・・・・・・」
「そうでもないですよ。これは“ごく一般的な恋の駆け引き”ですもの♪まあですが――」

と、彼女は腕を組んで嘆息しながら、一度間を開けて・・・・・・

「私もまだまだ頑張らないといけないんですがね?駆け引きがどうのこうの言っているわりに、未だに“あの人”には気持ちが届かずですものね」

そう少し苦笑気味な笑顔で話す小暮先輩。瑞希たちは一瞬ポカンとした顔だったが・・・・・・

「え、えっと・・・・・・と言う事は先輩も好きな方がいらっしゃるんですか?」
「先輩ほどの美人の気持ちが伝わらない相手って一体・・・・・・?」
「・・・・・・ちょっと気になります」

すぐさま食いつく三人娘。女の子にとってこの手の話題は何よりも興味の湧くものである。この三人も、いや現在進行形で恋をしているこの三人だからこそ例外ではないのだろう。

「あら?そんなに気になりますか?・・・・・ふふっ♪中々大変な方なんですよ?何せとても優しくて誰もが好きになってしまう上に、彼自身は恋愛感情が良くわかっていない方ですし・・・・・まあ、だからこそ燃えると言うものですが♪」

「「「・・・・・・・・・・・それってまさか!?」」」

三人が三人、とある人物を思い浮かべる。そんな三人を前に小暮先輩は唇の近くに人差し指を立てて――

「うふふ♪彼にはナイショですよ?私、欲しいものは自分で手に入れる主義ですので♪」

――お茶目にもそんなことを言う。その瞬間再び三人は顔を見合わせて同じ事を考えたとのこと。そう・・・・・『この人を師匠にしよう』と。

「そんなことより・・・・・霧島さん?折角のチャンスなんですから、頑張ってくださいな♪」

「・・・・・はい。頑張っちぇみましゅ」

「あらあら?緊張なさってますね?」

「・・・・・少し」

「ま、まあ翔子も頑張りなさいな！いっそ坂本のハートも奪っちゃえ♪」
「そうですよ翔子ちゃん！ファイトです！」
「・・・・・うん」
「うふふ♪そう言う姫路さんや島田さんも・・・・・機会があれば頑張ってくださいな♪それこそ吉井君のハートを完全に奪っちゃうくらいにね♪」
「「っ～～～～～／／／／／／！？」」
夕日で赤く染まった教室以上に顔が真っ赤な瑞希や美波、そして翔子。そんな彼女らを楽しくからかう小暮先輩。体育祭と召喚野球大会は、思わぬところで思わぬ友情が芽生えたそうな。
☆
葵Ｓｉｄｅ
体育祭も終わりを告げ、しばらく経ったある日の夜、今日も充実した学園生活を過ごしたと思っていた矢先に――
Ｐｒｒｒ！　Ｐｒｒｒ！
ガチャッ！

「はい。どちらさまでしょうか？」
『夜分遅くにすみません。小暮さんのお宅でしょうか？自分、月野と申します』
「あらあら♪月野君ですか。私に何かご用があるんでしょうか？」
――突然月野君からのお電話が。ふふふっ♪まあ、大体の要件はわかっていますがね？

『たはは・・・・・その口ぶりだと、どう言う用件かわかっているでしょ？』
「いえいえ♪そんなわけないでしょう？私は予知能力者ではありませんので♪」
『予知は出来なくても、予想はしているでしょうに。いえ、確信しているって言った方が良いのでしょうか？――まあ、小暮さんの予想通りちょっと聞きたい事が二、三点あってですね』

ふむ、やっぱりそう来ましたね。多分ですが・・・・・あの体育祭の事、でしょうか♪

「ふふっ♪それは――文さんの事、ですかね？」
『・・・・・ビンゴです。小暮さん、彼女の正体を知っているって言ってましたよね？いつ、どうやって知ったんですか？』
「ああ、先に言っておくと、私が勝手に予想しているだけですよ？私のその勝手な予想を聞いて貰えますか？」
『是非ともお願いしますね』
「ありがとうございます。――まあ、きっかけは勿論３－Ａ対２－Ｆの試合の時の文さんのおかしな行動と言動ですかね？」

まあ、その時までは本当に文さんは月野君の妹さんと思っていましたがね？本当に彼女は“よく出来ていましたし”

「彼女、月野君がデッドボールを受けた時に言ってたんです。《試合を　公平に　してくる》って。その直後に文さんがいなくなったと思ったら、すぐにあのフィードバック騒ぎでしょう。これは文さんが何かしたな、と」

『・・・・・なるほど？ですがそれはもしかしたら唯の文さんの独り言かもしれませんよ？他にも決定的な何かがあったんでしょ？』

と、電話越しに少し笑いながら月野君が尋ねてきます。あらあら？もしかして月野君もある程度予測しているのかしらね？

「ふふふっ♪流石月野君。よくわかってますね。えっと・・・・・・確かその後のお弁当を食べる時に《生まれて　初めて　ゴハン　食べたー》って言ってましたよね？」

『・・・・・あらら。やっぱりあの時気づいていたんですね？文さんが、“人間じゃない”って』

「ええまあ。ですがそれでも流石にまだ半信半疑だったので、正直に白状すると・・・・・こっそり文さんを誘導尋問しちゃいました☆”文さんって、実はシステムの関係者でしょう？私は知っているので隠さなくて大丈夫ですよ”と。そう鎌をかけてみたら、色々と文さん話してくれましたよ♪」

『・・・・・・・・・・』

あらあら？月野君黙っちゃいましたね？電話越しでジトっと私を見ているのでしょうか♪ああ、直接彼の顔が見れないのは残念ですね

～♪

「まあ、そんな感じでわかったんです。文さんが“文月学園召喚システムの管理者兼システムの頭脳”だってことが」

『・・・・・ま、まあ手口は置いておくとして、お見事ですよ小暮さん♪全くもってその通りです』

と、彼はパチパチと拍手をします。もう！照れちゃいますよ～♪

『それで・・・・・小暮さんにお願いなんですが、』

「ああ、他言無用ってことでしょう？勿論ですよ。私、文さんとは友人ですもの。友人を売る気はさらさらなくてよ」

『・・・・・まあ、貴女ならそう言っていただけると思ってましたよ。ありがとうございます♪』

「お礼を言われるような事は何もしていませんよ？・・・・・あら、もしかして用件はそれだけでしょうか？」

・・・・・個人的には、もう少しお話したい気はありますがね。いけませんね、ちょっと欲張り過ぎでは。

『まあ、文さんの件は終わりですが・・・・・その他にもお礼を言いたくて』

「・・・・・ああ、霧島さんの？」

『はい。教えてくれて助かりましたよ。そっちもありがとうございます』

「それは霧島さんからも言われましたし、お礼なんて要りませんよ。気にしないでくださいな」

『ふふふっ♪まあ、そう言わずに貰っててください。もう一つのお礼も、今日届くでしょうし♪』

「・・・・・・・は？」

・・・・・・？何でしょう？ここに来てよくわからない事を言われましたね？届く？お礼？

『ふふふっ♪流石に何の事かわかりませんよね？ヒントは自分の没収品です』

「・・・・・・月野君の没収品？」

ああ・・・・・・そう言えば二年生は召喚野球大会に勝てば没収品が戻ってくるそうですね。霧島さんのヴェールも戻ってくるそうですし。・・・・・・そう言えば月野君の没収品って一体・・・・・・？

『では、また学園で。お休みなさい小暮さん♪』

「え、ええ・・・・・・お休みなさい月野君」

ガチャ！

「・・・・・・・・・・・・・？」

何か意味深な台詞を残して、月野君との電話が終わります。いけませんね・・・・・・私とした事が、彼の言動が読めないなんて・・・・・・

とりあえず、どう言う意味かを冷静に分析しようとすると――

「葵さん。学園から貴女宛てに届けものがありますよ」
「は？」

――母様が何かの小包を私に渡します。学園から、ですか？一体何なのでしょうかね？

とにかく悩んだところでどうにもならないので、母様からその小包を受け取り部屋へと戻り中身を取り出してみる事に。その中には――

「・・・・・・小瓶に入った向日葵の種に、向日葵の写真立て？それから・・・・・・手紙？」

何とも言い難いラインナップです。一先ず情報が欲しいので、入っていた手紙を読むと・・・・・・

『小暮葵様へ

突然驚かれたでしょう？貴女の驚いている顔を直接見られないのは残念ですよ♪

遅くなりましたが、夏の想い出をプレゼントです♪本当は夏休みが終わってすぐ渡そうと思ってたんですが没収されちゃいまして。一応自分だってこれを取り戻す為にも、野球を頑張ってみたんですよ？

小暮さんって確か向日葵好きでしたよね？いつぞやの小暮さんが持っていた写真に写ってた向日葵の種と、向日葵の写真立てです。押し付けるように送ってごめんなさい。いらなければ捨てちゃってくださいな。

いつかのお礼と、体育祭のお礼。それからいつも助けて下さっている貴女に感謝をこめて送ります。

月野造

追伸　いつもからかわれている仕返しのつもりでしたが、いかがだったでしょうか？貴女の反応がちょっと楽しみです♪』

「・・・・・・・・・・・・・あの、人は・・・・・・・／／／／／／／」

さっきの意味深げな台詞は、そういう事ですか。全く参りましたね、まさかここで一本取られるなんて・・・・・・と言うよりも卑怯ですよ？こんなの・・・・・・卑怯です。

「・・・・・・・・・・・・ええ。それはそれは驚きましたよ月野君。本当に・・・・・・全く、私も霧島さんたちの事、全然言えませんよね」

手紙といただいたプレゼントを抱き締めつつ、溜息が出てしまいます。本当に、私の追い求める人は・・・・・・手強い方なんですから・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・ですが、ですが必ず・・・・・・・♪」

１１４時間目　召喚野球編終了！～女の子たちの裏側～（後書き）

ありがとうございました！召喚野球編はいかがだったでしょうか？

……何でこうなったのやら（汗）まさかの小暮さん√か……作者が一番驚いてます。まあ、これからどうなるのか正直わかりませんがね～？と言うか、あれだけ引っ張っておいて造の没収品が微妙且つバレバレってオチですし（苦笑）

あ、そうそう。前話で言ってた通りアンケートをしますね。これからの書く内容についてです。７．５巻編が終わったらどうしようかな～って思ってちょっと久しぶりにやってみました。今考えている案としては・・・・・・

？召喚システム《文》の暴走編
？造の過去編
？原作通り８～９巻の内容、対Ｃクラス戦
？その他

……こんな感じです。詳しくは活動報告にも書く予定ですので、そちらの方がわかりやすいかも？手間を取らせて何ですが、そちらもご確認いただけると嬉しいです。

期限としては７．５巻編が書き終わるまでアンケートを取る予定です。お世話おかけしますがよろしくお願いします。

次回の更新はちょっと遅くなるかも。まだほとんど書けていませんし。では、読んでいただきありがとうございました！次回もよろし

くお願いします♪

番外編：酔いと造と幼児返り～酒は二十歳になってから～前編（前書き）

どうも糖分摂取魔です。学校行く前に更新です。

遅くなってごめんなさい。今回から7．5巻の内容です。ちなみに今回はスモークさんに頂いたネタを使わせて貰っています。スモークさんありがとうございます！どんなネタの内容かはネタバレになるので、後書きにて書かせて貰っています。

今日のお話は7．5巻の“僕とダウトと男の尊厳”の後日談のようなお話です。では、早速行きますね。今回もよろしくお願いします。

番外編：酔いと造と幼児返り～酒は二十歳になってから～前編

突然ですが“酒は飲んでも飲まれるな”とはよく言ったものですよね。飲んでいるうちに酒に飲まれるようでは話になりません。お酒で自分がわからなくなってはどうにもなりませんし・・・・・・

とある休日の月野の家。日高先生に呼ばれていた優子さんと玲さんが、楽しそうにお酒を飲みながら（勿論優子さんのはただのジュースですが）和気藹々と楽しくお喋りをしています。何でも連休お泊りをしているとのこと。

ちなみに造と優子さんに捕獲されて一緒に泊っている秀吉は、この三人と一緒にいると（色んな意味で）危険だと判断したらしく、二人で造の部屋に立てこもっているそうな。

「それにしても・・・・・・師匠も玲さんも本当に良い飲みっぷりですね」

「そうですか？私はそこまで飲めるってほどではないのですがね。そろそろキテますし」

「ははははっ！アタシはまだまだいけるぜぃ？ザル越えてワクだからねぇ」

と言いつつ、ぐいっと酒を飲み乾す日高先生。その姿、まさに酒豪と言えよう。

「ホント師匠ってイケる口なんですね♪あ、でも飲んでばかりじゃなくてちゃんと何か食べてくださいね？身体に悪いですし」
「ははははっ！わーってるって！まあ、アタシはちょっとやそっとじゃ崩れんから心配しなさんな！」
「ふふっ♪それにしても、今日は随分お飲みになるんですね先輩。いつもより多くありませんか？」

と、持ってきた酒が空になっているのを見ながら、玲さんが不思議そうに尋ねます。大量に転がった空の酒瓶から、どれだけ飲んだか考えなくてもわかりますね。

「まあ、この家で飲めんのはアタシだけだかんねぇ・・・・・・最近あんまり飲んでいないのさ。一人で飲んでもつまんないからねぇ」
「ああなるほど。確かにそうですね」
「・・・・・・へぇ？そんなもの何ですか？」

「「そんなものだよ（ですよ）♪」」

優子さんが不思議そうに尋ねると、二人はニコッと笑って応えます。その辺は飲める大人と飲めない子供の違いってところのようですね。

「あーあ・・・・・優子っちも飲めたら良かったんだがね。もう少ししたら優子っちも飲めるだろうし、その時は付き合いなよ～？造じゃダメそうだからねぇ・・・・・・」
「ふふっ♪勿論です。その時は宜しくお願いします師匠。・・・・・・って、師匠？造くんちはダメってどう言う事ですか？」
「？そうですね。もしかして造くんってお酒に弱いってことですか

？」

と、日高先生の台詞に不思議に思った二人が尋ねると・・・・・・
日高先生は、突然先ほどまでとは明らかに顔色を変えてきます。

「・・・・・・・・・・・・」
「師匠？どうしたんですか？」
「先輩？顔色が悪いですが？」
「・・・・・・一つだけ、忠告しておくよ。いいかい？」

「「・・・・・・・？」」

「・・・・・・絶対に、造に酒を飲ませませんじゃないよ。もし飲ませたら・・・・・・・」

「「・・・・・・・飲ませたら？」」

と、日高先生は冷や汗をかきながら一言、

「・・・・・・アタシもどう止めればいいかわからん上に、下手すりゃ・・・・・・命刈られるよ・・・・・・」

「「！？」」

日高先生の一言に、思わず固まる玲さんと優子さん。さてさて・・・・・・今回はそんな“お酒”に関するお話（？）です

☆

～文月新聞～　【事件】欄より抜粋

『今度は半裸！流石に犯罪か！？～Ｆクラスバカコンビの醜態に迫る～』

文月新聞に載らない話題が無いと言わんばかりに、紙面を飾る事に定評のある２－Ｆクラス。そのＦクラスきっての名物（迷物？）コンビの２－Ｆ所属：吉井明久容疑者と同じく２－Ｆ所属：坂本雄二容疑者の二人がまたもや事件を起こしたとのこと。何とこの二人、何をトチ狂ったのか昨日の放課後に男二人で半裸になったまま廊下を全力疾走していたことが我々の調べで分かった。我々はその裏付けとして、その第一発見者の目撃証言を得る事に成功している。

～２－Ｄ玉野美紀さんの目撃証言～

『はい。そうです。放課後に廊下を歩いていたら、ほとんど裸のアキちゃ――吉井君と坂本君が出てきて、西村先生に凄い勢いで・・・・・私、本当にビックリしちゃって、思わず写メを・・・・・・』

彼女の提供してくれた写真が右図の通りである。これについて専門家は『公然わいせつ罪等の罪に当たるのではないだろうか』『と言うか、見るものを不幸せにする写真を見せないで欲しい』『どうせ

半裸ならアキちゃんとして写って欲しかった』などの厳しい声が聞こえる一方で、『僕にとっては眼福かな』『やっぱり吉井君たちはデキていた』『祝福してあげるべき』と、彼らを応援する者たちもいたとか。

どちらにせよ彼らの奇妙な行動に一体どんな真実が隠されているのかがわからない以上、場合によっては精神鑑定もやらざるを得ないだろう。この事件の早期の事実の解明が求められている。

■

とある日の放課後の事でした。今日は（今日も？）掲示板に・・・・・何やら凄い新聞記事が掲載されているんですが・・・・・・コレって一体？

「「「「「・・・・・・・・・・・・・」」」」」

簡単に説明すると――上半身裸のアキさんとゆーさんが西村先生に迫っている写真が掲示されているのですが・・・・・こんな時、自分は何とアキさんたちに反応すればいいのでしょうか・・・・・・？一先ずアキさんたちに聞いてみるしかないですかね？

「・・・・・えっと、アキさんとゆーさん？コレは一体・・・・・？」

「「造！失望しないでくれ！と言うか、言い訳させてくださいお願

いします！」」

涙目で自分に訴えてくるアキさんたち。い、いや・・・・・・別に失望なんかしませんが・・・・・・？

「せ、説明してくださるのなら、どうぞ・・・・・・？」

「「じ、実はだな（だね）――――」」

～明久・雄二説明中～

「・・・・・なるほど？つまり昨日皆さんでダウトをしていたはずが、どう言うわけか酔った姫路さんと霧島さんに襲われて（？）こんな事になったんですか。・・・・・そ、それはまた大変でしたね？」

昨日は職員会議で授業が早めに切り上げられましたからね。そこで遊んでいたらってことですか。あー・・・・・そう言えば昨日は自分、学園長に呼ばれて定期検査されていましたからねー。そんな大変な事になっているなんて思いませんでしたよ。

「・・・・・造の理解が早くて助かるよ」

「・・・・・だな。正直お前に見捨てられるのは痛すぎる」

いや、だから見捨てませんってば・・・・・それにしてもなるほど、それならこの新聞の記事にも納得でき――――ますか？い、い

やちょっと待って!?それで納得できる時点で自分だんだん常識から離れていってる気が?こ、これって今更でしょうか?

「それにしても・・・・・確かに恐ろしかったのう。ワシも気がつけば眠らされておったし」

「・・・・・・・・・・・・俺もだ。ウイスキーボンボン、恐るべし」

「い、いや・・・・・それはウイスキーボンボンが恐ろしいんじゃなくて、姫路さんたちが恐ろしいのでは?」

「「「「・・・・・・確かに」」」」

まあそれも今更感がありますがね・・・・・?最近の姫路さんたちは、別の方向で危ない気がしますし?

「にしても、ウイスキーボンボンですか♪美味しそうですよね・・・・・食べたことないですけど。と言うか、最近はあまり見かけませんよね」

「え?造が食べたことないって・・・・・以外だね。どんなに珍しいものでも、お菓子系は大抵食べていると思ってたのにさ?」

・・・・・ん?あれ?自分ってアキさんからどんな風に見られているのでしょうか?まあ、お菓子好きってことは否定できませんが・・・・・

「あはは♪“お酒は二十歳になって”って教えられてから、子供のころから食べちゃいけないものって思いこんでたんですよ。別にウ

イスキーボンボンを食べちゃいけないって言われていたわけでもないのですがね？」

と、笑いながら言っていると・・・・・・・

「え？ウイスキーボンボン・・・・・・・ですか？それなら持ってますよ？」

「・・・・・・私も。皆で食べようと思って持ってきた」

「ちょうど良かったじゃない。アンタたちも食べなさいよ」

「「「「「・・・・・・っ！？」」」」」

・・・・・噂の姫路さん＆霧島さんと島田さんの姿が！？しかもアキさんたち曰く、昨日の事件の起爆剤となったブツ：『ウイスキーボンボン』を持っているじゃありませんか！？

「ななな、何でそんな危ないものを持っているのかな、瑞希？」

「え？危ないもの・・・・・・ですか？」

「そそそ、そうだぞ翔子！危険だからそれを今すぐ離すんだ！」

「・・・・・・危険って？」

昨日の事があってか、大慌てでそのブツから姫路さんと霧島さんを遠ざけようとするアキさんたち。自分は実際に見ていないのでわかりませんが、この脅えようからすると・・・・・・それほどまでに恐ろしいんでしょう。

「あはは♪さてはアキ、お腹空いてて自分のが無くならないか心配

なのね？大丈夫よ、いっぱいあるから」
「ちょっ！？み、美波！？美波もとりあえず、その危険物から手を離すんだ！じゃないと（美波も）暴走してしまう！」
「暴走？アキったら、暴走しちゃうほどお腹空いてるの？」

と、島田さんにもそう言うアキさん。あれ？ひょっとして島田さんも・・・・・・？

「（ねえ、アキさん？もしかして島田さんもお酒弱いんですか？）」
「（そ、そうなんだよ！清涼祭の時ベロンベロンに酔って絡んできたし！）」
「（ああ・・・・・そう言えばそうじゃったの。と言うか、全員酒に弱いのかの？）」
「（ま、まあ全員お酒が飲める歳じゃないので仕方ないでしょうがね・・・・・・）」

・・・・・ＯＫ、これでここにいる女子三人に酒を飲ませちゃいけないってことが把握出来ました。ま、まあ・・・・・本来飲んじゃいけないので、酔う事自体が無いハズなんですがね・・・・・・？

「と、と言うか、皆何でそんなもの持っているの・・・・・・？ウイスキーボンボンなんてさ？」
「ああ、昨日お手伝いした先生がまた『貰いものだけど、一人じゃ食べきれないし皆さんで食べてください』って下さったんですよ」

「「「「「（ボソッ）余計な事を・・・・・・」」」」」

「え？」

「「「「「いや、何も？」」」」」

くっ・・・・・こうなれば、ここは女性陣の皆さんに食べられる前に処理するしかないですね。男子陣全員にそう、瞬時にアイコンタクトすると皆さん頷き・・・・・・

「ああっ！そう言えば僕ら頭使ってすっごく今甘いもの食べたかったんだ！美波、瑞希！食べていいかなっ！？」

「俺もだ翔子！腹減って死にそうなんだ！てか、問答無用で食わせて貰うぞ！」

「ワシも悪いが、小腹が空いておっての！遠慮なくいただくぞい！」

「・・・・・・・・・・・俺も！」

「じ、自分ホント食べるの楽しみだったんですよ！いただきますねっ！」

「「「？？？ど、どうぞ・・・・・・？」」」

とりあえず勢いのまま、男子全員でその『ウイスキーボンボン』を処理――――もとい、食べる事に。そう・・・・・女性陣が一口も食べられないように！

そうして、姫路さん・島田さん・霧島さんが手に持っていたソレを、各々が一瞬で口の中に入れます。・・・・・おお？結構甘くて熱くて大人の、味でおいしい・・・・・・ですね！ホント・・・・・・・熱く・・・・・・て・・・・・・？んにゅ・・・・・・・？

「って!?アンタたち、もう全部食べちゃったの!?」
「(モグモグ・・・・・ゴクン!)うん!美味しかったよ!」
「あ、あはは・・・・・皆さんよっぽどお腹空いてたんですね」
「ああ、すまんなお前ら。つい美味そうで、全部食っちまった」
「・・・・・雄二ったら、食いしん坊さん♪」
「・・・・・・・・・・中々独特な味」
「ホントじゃのう。確かに美味いが、あまり食べた事のない味じゃな。大人の味と言うべきか・・・・・のう造よ?」
「・・・・・・・・・・おとなー?」
「・・・・・・ん?造?どうかしたのかの?」
「・・・・・・・・・・おー?つくるは、まだこどもだよー?秀吉お兄ちゃん?」

「「「「「「・・・・・・・・・・ん?」」」」」」

☆

優子Ｓｉｄｅ

「――ウイスキーボンボン?それはまた珍しいわね」
「だよね~♪それを姫ちゃん達が先生に貰ったらしくて、一緒に皆で食べようってさ。ボクも甘いもの好きだし、楽しみだなぁ~♪」

昨日に続き、今日も先生方が会議があると言う事で授業も早めに終わり、またいつものメンバーに放課後遊ぼうかと誘いを受けて、先に行った代表を追いアタシと愛子は２－Ｆに向かう。

「ああ・・・・・だからさっきから愛子、そわそわしてたのね。それじゃ急ぎましょうか」
「そだね～♪下手したらもう皆に食べられちゃうかもだし、急ごう！」

そう言って小走りに２－Ｆの教室に向かう愛子。ふふっ、ホント愛子って甘いもの好きよね。造くんといい勝負だわ。・・・・・・・それにしても、ウイスキーボンボンねぇ・・・・・・？なにか引っかかるけど、一体何かしら？

「優子？どうかしたの？ボーっとしてさ。早く行こうよー？」
「あ、ゴメンゴメン。今行くわ」

首を傾げても、頭を捻っても何が引っかかるのか・・・・・・さっぱりね。まあ、とりあえずアタシも愛子に続いて２－Ｆへと向かう事に。まあ、その内ピンとくるかもだし？

～優子＆愛子移動中～

愛子と（ちょっと小走りになりつつも）話ながら２－Ｆ教室に辿り着く。にしても最近改装されただけあって、以前に比べると本当に綺麗な教室になったわよね・・・・・・

「さて、着いた着いた♪おおっ？何だか甘い匂いがするね。さてはもう食べてるな～」

「・・・・・よ、良くわかるわね愛子?まだ教室にも入っていないのに」
「そりゃわかるよ?にしても・・・・・・もう!ボクに黙って先に食べちゃダメなのに!」
そう言ってガラッ!と、扉を勢いよく開ける愛子。ふふっ♪まあ、気持ちはわからなくもないわ。

「こらー!皆?ボクらに黙って先に食べてたでしょ?ちゃんとボクらの分も・・・・・取ってあるん・・・・・だよね?って、どうしたのさ皆?そんなに驚いた顔で?」
「あらホントね?どうしたのよ皆?造くんの方見て固まっちゃって?」
扉を開けると、何だかいつものメンバー全員がまるで希少生物にでも遭遇したかの如く口をパクパク開けて驚きまくっている姿が。んー?ホント何なのよ?

「ねえ造くん?一体これは何なの?」
「皆固まっちゃってるね~?何かあったの?」
「・・・・・・・・・・・・おー?」

「「・・・・・・・・・・・・・?」」

不思議に思って造くんに問いかけるも・・・・・反応が今一ね?何かしらコレ?今日はいつにも増して造くんがぽやぽやしているような・・・・・?

「えっと・・・・・・いや、だから一体どうしたのと――――」

何だか造くん、ちょっと顔も赤いし熱でも出ているのかなと近づこうとすると・・・・・・

「あー！優子お姉ちゃんと愛子お姉ちゃんだー♪」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・！？」」

・・・・・・・・・・・・・そこには、最強の頬笑みを浮かべた天使が・・・・・・・佇んでいた。

番外編：酔いと造と幼児返り～酒は二十歳になってから～前編（後書き）

ありがとうございました。いかがだったでしょうか？

前書きの通り、今回のネタはスモークさんから頂きました。『以前のような造が大人になるのとは逆に、造の体はそのままで精神が幼児化する』ってネタです。スモークさん、本当にありがとうございます！

それにしても……作者は当り前に飲めませんが、お酒ってどんな感じなんでしょうね？作者の父と母はあんまりお酒飲まないのでよくわかりません。よく辛いとか聞きますけど、辛い飲み物を飲んで余計に喉渇かないのかなー……とか思ったり。

その辺はやっぱり大人にならないとわからないんでしょうかね？まあ、それはともかく……この頃色々と忙しくなり始めてますし、少しずつ更新が遅くなるかもしれません。お待たせするかもですが、よろしくお願いします。

ではまた次回です。読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3211t/

バカとのんきと召喚獣

2011年10月21日08時12分発行